

Nihon meicho zenshū; Edo bungei no bu



日本名著全集
江戸文藝之部第廿八巻

歌謡音曲集

この巻の装幀――

背及表紙意匠　案本一洋氏畫
見返し前附・後附　案本一洋氏畫
背　文　字　渡邊新三郎氏筆
扉　文　字　近藤雪竹氏筆
箱に用ひた圖案　小杉未醒氏畫

歌謠音曲集目錄

第一篇　義太夫節之部

第二篇　河東節之部

第三篇　一中節之部

第四篇 常磐津節之部

第五篇　富本節之部

第六篇　清元節之部

第七篇　新内節之部

第八篇　薗八節之部

第九篇　江戸長唄之部

第十篇　歌澤節之部（詳細なる目錄は本文の卷頭にあり）

緒言

一　本書の三要件

日本名著全集江戸文藝之部の追加篇の一として歌謠音曲集が加へられる事になり、その編纂、校訂、解題等を私に擔當するやうにと、當時の編輯主任故加藤美侖君から交渉があつた。その際同君は希望として、この書を以て研究と趣味と實用との三者を兼ねたものにし度い、即ち(一)その收載される各流派の詞章及び解題は專門家の信頼すべき研究資料となると共に、又一般の讀者に取つては、その作品の來歷故事を知り、又それに因んだ話の種などを得られるやうな解題であり度いこと。(二)又閑暇あるごとに本書を繙いてその文その綸を玩味すれば、それによつて永き洗錬を經た平民藝術の中には、盡きせぬ趣がある事を知り得ると共に、引いては現在及び將來の演藝に對してもある暗示を與へる源泉となるやうな物にしたい事。(三)ラヂオの演藝放送を聽く時にも、又は劇

場や演奏會に行く時にもこの一卷があれば、その演ぜられる音曲の歌詞は元より節付も解說もはつきりと分るやうな重寶なものとしたい事といふやうな話であつた。

これが實現出來れば、それこそ理想的の歌謠音曲集となるわけで、私も多年さういふ條件を具備したものの出現を望んで居たので、無論その趣旨には大贊成であつた。併しそれには長い準備と、又校訂解題者に人を得る事とが必要であるのは言ふまでもなく、私の如き微力の者の片手間で出來る話ではない。が先づそれは措くとしても、當面の問題として、いくら本全集が盛澤山であるからといつて、江戸時代に目ざましき發展と隆盛とを見て、今尙藝壇に大勢力を有する三絃樂各流派の歌詞を、尠くとも現行のものだけでも漏れなく詰込むといふ事は全く不可能である。せめて義太夫節の部一册、河東・一中及び豐後系の諸流派即ち常磐津・富本・淸元・新内・薗八等いはゆる歌浄瑠璃物一册、江戸長唄・端唄その他の唄物一册といふ位にすればほゞ現行の歌詞は大體網羅出來ようと考へた。で私は件の旨を加藤君に話したが、册數の增加は困難であるから、成るべく粹を拔いて壓搾した物を作り、標準を前述の三點に置いてほしいといふ事であつた。

二 本書の内容

それで私は困難の事業であるとは覺悟しつゝも、然らばといふので先づ收載すべき流派とその外題との選擇に取りかゝつた。そして先づ流派としては現に行はれて居る三絃樂中の主要なるもの、即ち義太夫・河東・一中・常磐津・富本・淸元・新内・薗八（宮薗）・及び江戸長唄・歌澤を擇び、河東節の部に同流で現在も語り傳へて居る外記節と半太夫節との代表曲を附屬させ、江戸長唄の部には、めりやすは言ふまでもないが、大薩摩と荻江との現行曲をも出來るだけ併せ收める事とした。

そして更に各流派については、これ亦現に行はれて居る曲を出來るだけ採收しようとしたが、これは前述べたやうに紙數の制限があるため、曲數の多い流派に於ては自然相當取捨せねばならぬので、さういふ流派に於ては代表的の名曲を先づ採るといふ方針の下に、成るべく各流派を通じて公平に紙數を割當てるやうにと心掛け、これが爲には頗る苦心したが、結局次のやうな數字となつた。

一、義太夫の部　三十段
二、河東節の部　三十六段（外記二、半太夫六を含む）
三、一中節の部　三十段
四、常磐津の部　三十段
五、富本の部　二十五段
六、清元の部　四十五段
七、新内の部　十五段
八、薗八の部　十段
九、江戸長唄の部　百四十段（この中荻江十一段を含む）
一〇、歌澤の部　百四十八段

但し長唄では變化物は大外題によつて數へたのであつて、例へば「拙筆力七以呂波」を一段として扱つたが、若しこれを普通の慣例に從つて、その中に含まれる「戀傾城」「供奴」「浦島」「瓢箪鯰」をそれ〲一段として數へれば、かういふのが約三十段あつて、通

計約百七十段の多數となるわけである。又義太夫では、近松名作集及び淨瑠璃名作集に收めたものは言ふ迄もなくこれを省いたが、是等の諸篇中には現行の名曲が多いのであるから、それを加算するとなれば、義太夫の段數は更に倍加する事になり、他流派との振合上決して少いとは言へず、恐らくは義太夫の代表的作品は大方網羅し得た結果となるであらう。

次に各流派からその曲を選擇するに際して、薗八のやうに僅かに十段の現行曲のみの場合は問題ではないが、長い年月間に多くの人々によつて作曲された多數の曲が現存するものに於ては、ある時代ある作曲者の作品を特に選ぶといふ事をせずに、常にその流派の盛衰沿革に留意して、なるべくすべての時代すべての作曲者の作品中より廣くその代表曲を選ぶと同時に、又詞章の作者についても成るべく偏しないやうにと意を注いだ積りである。尤も數多い中から成るべく優れたものを採らうとする結果は、各流派の全盛時代の作品が自然多くなるのは當然の事で、殊にこの傾向の顯著なのは富本である。同流は實に二世富本豐前太夫時代が全盛期であつて、富本の名曲といふ名曲は殆んどす

べてこの時代に出來たのであると言ふ程だから自然、本書に採擇したものも殆んどその期間のものとなつたわけである。
また本書は江戸文藝之部に屬するといふ制限の下にあるので、擇ばれる作品は大抵明治維新前のものといふ方針をとつたが、只常磐津や清元などには明治初期の作品中に今日盛んに行はれて居る名曲もある。それ等は割愛するに忍びずして附載する事とした。

三 編纂校訂の方針

本書の編纂校訂については大體次の諸項に述べるやうな方針によつた。

一、各流派共に作品の年代順に配列し、外題としては本外題を用ひ、通稱は解題の初めに示すと共に、更に目次の下に括弧書きにした。而して又檢索の便を圖つて、索引にはこれを一項として獨立して掲げる事とした。

二、解題は各曲ごとに外題の次、本文の前にこれを加へた。成るべく簡明親切を旨としたが、物によつては相當に長いのもあり、又多少考證的になつたのもある。こ

れは大抵從來の所說と解題者と所見を異にするやうな場合であつて、若しその結論だけを示して置いたのでは、誤解を招く虞れがあるかも知れないと思つたからである。

三、本文卽ち詞章は、絕對に孫引を避けてすべて原本に據つた。尤もその用ひた原本は現行の稽古本を底本とすると同時に、常に初版の原作と對校するやうにした。一中・河東その他豐後系の稽古本などの多くは、現行のものと原版と詞章上の相違は殆んどないが、義太夫にはこれが多いので困らされた。で結局、加島板の現行正本を主として、時に必要と認めた場合には原作の文句をも示して置いた。

四、フシ付は出來るだけ親切に保存する事とした。殊に流派によつては、現行の稽古本にはすべて削られてゐるもので、その原版にはそれがあるものなどは、適宜加へて置いたのさへある。例へば一中節や河東節や常磐津などにそれが多いが、これは必ずしも單に好事的のことであり、或は蛇足であるとは、心あるお方は考へて下さらないであらうと思ふ。

五、句切りは普通の散文と同一に律すべからざる事は、既に近松名作集や淨瑠璃名作集でも繰返して言つたやうなわけであるから、原本にそれがあるものはすべてその儘とした。但し長唄や、豐後節の比較的新しい作品には、それが殆んど施されてゐないものが尠くない。これ等は止むを得ず、讀解を助ける程度に於て適宜これをつけた。

又註釋が無いのであるから、假名遣や文字の用法を原本に盲從したのでは、木版ならまだしも、活字に直しては判讀に苦しむ場合が甚だ多いので、その難を救ふために適當の漢字をあて、假名遣を正すことだけは必要と信じて敢てした。

六、挿畫は趣味と研究との兩方面から見て非常に必要であるから、校訂者の力で及ぶ範圍で出來るだけの努力をした積りである。殊に原版正本の繪表紙を成るべく多く入れたが、この種のものは研究上にも非常に大切な資料であるに拘らず、今では容易に手に入れ難いので、その點をも考慮したわけである。河東節・豐後節・長唄などの是等の挿畫には相當參考になるのもあらうかと思ふ。

四　結　　語

要するに、私は上に示したやうな條件の下に、上記の內容を盛るべく、上に列擧したやうな編纂校訂方針の下に先づ材料の蒐集整理に從事し、昨年十二月淨瑠璃名作集下卷の校訂を終るや專ら力を本書に注いだ。併しなか〳〵思ふやうに進行せず、時には原稿や參考書を携へて伊豆の伊東などへ行つた事もあつたが、やはり進度は遲々たるもので時には一曲の解題を書くために一日を費しても足りないやうな事もあつた。その中に最後迄延してもらつた期限もいよ〳〵迫つて來る。私は深夜目さめて前途を思うて苦惱を覺えた事もあつた。時間的に解放された夏休になつた、私は最後の蠻力を振つて、猛暑の幾日を夏行精進のやうな心持で働いた。そしてたうとう曲りなりにも全部脫稿し得た時には流石にほつとした。

顧れば當初の理想に及ばざる事遠しとはいへ、幾分なりとも硏究と趣味と實用との三方面に對して役立ち得るものを作り得たかと思ふと同時に、茲に私は本全集の自分の擔

當の全部を終つてその責任を果し得た事を悦び、且つ感謝せざるを得ない。それと共に本全集最初の計畫者でありながら、その完成を見ずして逝かれた加藤君を憶はずにはゐられない次第である。

終りに、本卷所收詞章の原稿作成については、文學士有井義治君を煩した事が尠くない、茲に記して感謝の意を表したい。

昭和四年九月

校訂者 黑木勘藏

第一編　義太夫節之部

勢州阿漕浦

平治住家段　一

〔解題〕 本外題は「田村麿鈴鹿合戰」。寛保元年九月十日から豐竹座上場。作者は淺田一鳥・豐田正藏。天智天皇の御代逆賊藤原千方(ちかた)高圓(たかまど)山に隱れて妖術を學び、百八十餘歳の長壽を保ち、桓武帝の御代に隱者周翁と稱し、水鬼火鬼を驅使して三種の神器を奪ひ（その中十握の寶劍は伊勢の海へ落す）、皇弟氷上皇子と藤原小黑丸とを與黨として天下を覆さうとする。柱石の臣坂上田村麿謀計を以て神器を奪還し、神鏡の威力によつて周翁の心膽を奪ふ。是より先田村麿の女春姫と戀に陷つた爲に主君の不興を蒙り且父桂平内兵衞照房の勘當を受けた田村麿の近侍桂平次清房は、父の横死後母と春姫とを伴つて阿漕浦に隱棲して阿漕の平次と稱へ漁師となつて世を渡つて時を待つ。母の難病平癒のために藪幗(やがら)魚を得んとて太神宮の贄魚の禁漁區に網を入れて圖らずも一振の名劍を得た。これは先年妖賊が落した十握の寶劍である。併し巡檢者の爲に證據の簑と笠とを押收されて制規の處刑を受ける事となる。そこへ平瓦治郎藏が出て問答の末身代りに立つ事となる。この次郎藏は實は三種の神器を守護して居て妖賊に奪はれた笠縫の神職卜部友久の養子中川宇内といふ者で、平次の家來筋に當り、父を救ふ爲に寶劍を探索中のものであつた。かくて平次夫婦は上京して寶劍を田村麿に上る。三種の神器が揃つたので田村麿はこゝに逆賊を鈴鹿山に攻滅し、平次は小黑丸を討つて父の仇を報じるといふ筋。五段より成り、初段は宮中記錄所、樽井田村館、笠縫の宮舞樂の場、第二段は春日野藤の鳥居側の茶屋、桂平次館口・切、

第三段高圓山狩場、周舍庵室口・切、第四段「道行しるべの駒」「阿漕浦濱の段、平次住家段、第五段鈴鹿山合戰大團圓と分れて居る。こゝに收めた平次住家の段が全篇の山で、最も名高い。所收の文は五行稽古本によつたが、原本と殆んど同文である。

外題の「田村麿鈴鹿合戰」は、「勢州阿漕浦」を割つて角書にし「鈴鹿合戰」とした正本もあるが、今日では「勢州阿漕浦」の外題が行はれて居る。これは文化五年正月御靈境内の芝居で、當代の名人三世綱太夫が平次内の段を語つた時に改題されたらしい。

本曲の原據となつた阿漕の平次の傳説は、古今六帖の「逢ふ事も阿漕が浦に引く網もかさ重らば人も知りなん」の和歌と、伊勢阿濃郡の皇大神宮の贄魚の爲の禁漁區への密漁犯とを結びつけたものと思はれるが、謠曲の「阿漕」に仕組まれて名高くなり、古淨瑠璃に「あこぎの平次」といふがある。これを原據として作つたものである。



阿漕が浦の場

へ立退きし。地フシ故郷は都。こゝはまた天照る里と言ひながら。鄙の住居に春姫は。名をばお春と改めて。スヱ為し馴れぬ業も網の目に。溜る戀路の種産んで育つる世話と姑の。病氣の世話と世の世話と數重なりし阿漕が浦 フシ住む身貧しき風情なり。フシ 仕習ひ易き下司仕事。網すく中に姑の加減の藥煎じ上げ。心に藥師の文唱へ。用ひさへすりやその儘に。驗もあろかと女氣の。いそ〳〵として一間の口。詞申し〳〵お袋様。今日はお醫者の加減のお藥。上りにくからうとも私らを不便と思うて上つて下さりませ。サアお起んなれ。地お手取りませうと フシ障子明くれば母親は。苦しきふりを押隱し。詞オヽ嫁御誰もないか。平治や孫の友右も見えぬが。どつちへぞ行きましたか。イヤ。主は夕お醫者様を送り。それから直ぐに夜通しの。小揚に雇はれたとて。今朝あけ方に戻られ。奥に休んで居られます。友右も今晝寢。どつこへも行きは致しませぬ。地フシマアお藥と差出せば。地押戴き〳〵。アヽ冥加なや誰あらう。田村將軍の御息女。詞春姫様ともあらうお方に。煎じさして用ゆる藥は。地耆婆扁鵲の配劑で。飲むより尊いこの良藥。いかなる重い病でも。本復せいで何とせう。詞有難う御座りますと。地老の叶はぬ。手を合せフシ泣音も。地弱る有様を。地見れば胸迫せきのぼす。涙を袖に押包み。詞オヽお袋様とした事が。あられもない事おつしやりますな。櫻も花の時は歌に詠まれ詩に作られ。衣打つ物となつては。庭に捨てられ下家の住居。ハテ昔は昔。今は阿漕の平治が女房お前の嫁。其様にけつこはつこにおつしやるは。心に隔てのあるといふもの。地聞えぬ仰せや怨めしやと。主筋はなれ水仕から。嫁に成つたる嫁氣質。冠は沓に履かれねど。沓は冠と フシ戴かん。詞ホヽさうあらうと思うて。わざと是迄嫁あしらひ。地時代につれると言ひながら。餘りと言へば勿體ない。詞アレまだ譯もない事ばかり。其様におつしやると。世間の聞え夫の思はく。私は爰に居られませぬ。但し家出せいとの事か。地と言はれて母は俄に笑顔。詞ホヽヽヽオヽさうぢや〳〵誤つた。やつぱり嫁ぢや娘ぢやと。地機嫌とる氣の姑に。いうて悔しき捨詞。フシ是非も涙の折からに。地表へ人音何にもせよ。お氣に構ふとお春は氣を付け。フシ障子ぴつしやり引立つれば。詞平治は宿に居らるゝかと。地によつと這入るは庄屋の彦作。詞コレハ〳〵名主様。何と思う

てようお出で。マアお茶フシ煙草と饗應せば。詞ハテ何時來て見てもほれぼれと。口は濡れねど。詞はうまい嗅衆ちやの。扨と。爰の平治に一寸逢うて尋ねたい事がある。内にならば呼んで下され。アイ〳〵幸ひ奥に休んでと。地何の氣もなく勝手口。詞コレ平治殿起きさしやんせ。彦作様が逢はうとおつしやる。早う〳〵。地と呼出す。聲は平治が胸板に。打たるゝ釘の先折つて。言ひくろめんとつか〳〵立出で。詞エコリヤ庄屋殿お出で。扨も寢れば寢らるゝもの。一昨日から寢つゞけ。まだ目が覺めぬとフシ大あくび。詞ハレ途方もない長寢ぢやの。そんなら貴様は知るまいが。今朝から村は大騒動。エエそりや何で。さればいの。知りやる通りこの阿漕が浦は。大神宮の御領。御贄調進の漁場にて。昔より殺生禁斷の所。雑魚一尾捕つても簀巻にして沈めにかける。それにマア大膽な。この間から夜な〳〵網を打つ者があつて。昨夕しやんと引捕へ。シタリそれはよい氣味。イヤ〳〵よい氣味でないてや。捕まへたと思うたら。取逃した。ハテナ。扨て其科人が此村へ逃込んだとて。それは〳〵嚴しい御詮議。出口々々へ番を付け。鎗よ。鉈よと村中は上を下。よもや爰らに其様な。大それた事召されはせまい〳〵。ちやがどうやら臭いもんぢやハヽヽ。ヤコレ。さうならさうと有様に言うたがよい。彦作も男ぢや。外へは言はぬ。直に御前へ訴へる。爰らが常の懇ぢやと。地フシ話の跡先詰らねど。詰るは主の胸の內。女房は何の氣も付かず。詞コレ名主様。出放題にそりや何事。主に限つて其様な。盗んで網打つ人ぢやない。疑はしくば何々の誓文。たとへ此子を奈落の底へ。ヤこりや〳〵女房どもそりや何をいふ。それでもお前。イヤハテ誓言立つるも事によるわい。コレ庄屋殿。さうおつしやると此平治が。網打つた様で聞捨てにならぬ。ソレ女房。脇差おこせ。地但し證據があつての事か。胡亂な事なら名主とは言はさぬと。覺えある身は空鞘のフシ返りくはして極付くれば。詞ア、コレ〳〵扨もこなたは短氣な人ぢやわいの。何にも證據はなけれども。懇ろだけに一寸揺つて見たんぢや。アアコレ腹立てゝ下さるな〳〵地とわな〳〵震へば平治も落付き。詞さうおつしやれば私が慮外。お赦し〳〵。シテ又。お上の御評議はどうぢやな。サレバイノ。あなたはお慈悲な事。殺生禁斷の場所へ網入れた者は。是まで從類を絶やせども。我と名乘つて出たらば。

妻子親類にお構ひないとの仰せぢや。若しあなたから御詮議に逢うて。顯はれると從類遁れぬ。そこを思うて萬一覺えがあらば。貴樣一人で埒明けるつもりぢや。こりやコレ。皆貴樣の爲ぢや。アヽコレコヽ腹立てまい〳〵。腹立てまいぞや〳〵〳〵アハヽヽ。さて厭な事は。その網打つた場所に。簑と笠とが落ちてあつたげな。コレ腹立てまい〳〵。腹立てまいぞや〳〵〳〵ハヽヽ。さて其笠の裏に。平の字と治の字と。コウ向ひ合せに書いてあるげな。アコレ腹立てまい〳〵。村中を詮議しても。治平といふ名は一人もない。そこで〳〵こいつは若し平治の平。へヽいやさ。何ぼ貴樣が味な顏しやつても。一村の束をする庄屋の役ぢやによつて。言ふ事は言うて見にやならぬぢやないかいの。そこで〳〵。こいつは若し。平治ではあるまいかと。ひよつと思うて問ひに來たのぢや。覺えなければ先づ目出度い。祝ひ事に晩に來う。お嚊さらば。オヽ坊よ。テモ大きう成つたなと フシカヽリ追從輕薄はく草履。雪駄片足と引つかけて。足ばやにこそ。逃歸る。地平治は跡を打眺め。スヱ思案途方にくれ居たる。地妻はよもやと思へども。心ならねば傍に差寄り。詞コレ平治殿。禁斷の場所へ網打つたを。夜な〳〵と言ふので案じもないが。昨夕こなさんの戻り樣。さんばら髮で色眞靑。喧嘩でもした體。その上着てござんした簑笠は。どこに置いて戻らしやんした。わしやそれが氣遣ひなと。地問はれて詮方聲ひそめ。詞全くこの平治夜な〳〵網打つ覺えはないが。ふとした事で昨夕初めて網を入れ。見附けられたが絕體絶命。エヽそりや又お前何の爲。慰みにか慾にかと。地そゞろに問ひし妻の顏。打眺め淚を浮め。詞鱗を漁つて慰むとは。榮耀の上の戲れ事。次第に重る母の難病。今一度御本復と祈れども。身貧なれば大醫を賴む力はなく。一僕連れぬ懷醫者。昨夕送つて往た道で。戴帽魚といふものを。捕つて與へば本復あらん。さもなくては今度が旅立ちとの物語。その戴帽魚は俗にやがらといふ魚にて。禁斷の場所へは必ず寄集るとの敎へ。隱し目附のありとも知らず。かの魚を得んと思ひ。一網入れたに思ひの外。その魚は上らずして。地玲々たる名劍の。網にかゝつて上りし不思議。詞是ぞ正しく十握の寶劍。海中に沈みしと聞きしが。自然と我が手に入りし事。ハアハヽヽ運に叶ふ瑞相と悅び勇み。また一網入れんとせしを。地番

の者に見附けられ追つ取巻くを。命限りに働いて。まんまと遁れ歸りしが。悪事千里と事顯はれ。我こそ罪に沈むとも。御身は是より都に歸り。詞御父田村將軍へ寶劍を奉り。勘當御免蒙つて。母の養育頼み入る。地不思議の縁で是までは夫よ妻よと主從の。道を忘れて妹脊の語らひ。思へば盧世が夢の樂しみ。覺めて悔しき身の上と。スヱ男泣きにぞ泣き居たる。地聞くに悲しさやる方も。涙にくれて女房は。暫し。フシ詞もなかりしが。地やゝあつてコレ平治殿。詞たとへ寶が手に入りしとて。御大病の母御といひ。目の前罪に行はるゝ夫を殘し故郷へ。地どうまあ見捨てゝ去なれうぞ。四人一緒に此家を立退き。影を隱す氣はないか。この友石が可愛ゆくば生延ばはつて下されと フシカヽリ口説き。歎けば友石も。詞父様こなたの行く所へ。わしも一緒に行きたいと。地縋ればはら／＼涙を流し。詞可愛やなア。なんの頑是もなう慰みにも行く様に。おれも一緒に連れてといふ。其顏がもう此世の見納め。親を思ひ子を思ひ。言遁れんと思へども。我が名をしるした菅笠をもぎ取られたが慥な證據。吟味に逢うて顯はるれば。從類を絶やすとある。こつちより名乘つて出て繩かゝれば。そち達にお構ひなう。母人も御安泰。必ず／＼我が罪に逢うた事。お耳に入りやるな。お尋ねあらば關東へ雇はれて往たとなりとも言うてたも。隙取つては爲にならぬ。詮議に來ぬ内。こつちから往て繩かゝらう。地言ふに及ばぬ事ながら。母人や悴が事を。頼むといふも泣聲にオクリカヽリしを／＼フシとして出で行くを。詞地ヤレ待て平治用があると。聲をかけて母親は。一間の内より杖に縋つて。よろぼひ出づれば夫婦は驚き。詞五日以來絶食の。ア、お足元も危なしと。地勞はり寄る平治が脊骨。突いたる杖にてはつし／＼と打叩けば。お春は中に分入つて。お前の病氣を治さうとて。様々心を碎く夫。何の仕落ちで打擲なさるゝ。何かの事を話したら。可愛やおれ故苦勞すると。身も世もあられぬお歎きを。見るが悲しい／＼と。泣きしをるれば母親は。病苦に苦しき息を張り。詞ヤイそこな不孝者。恩知らずの狼狽者と。地叱り付けられ平治はひれ伏し。詞ハア、全く心に覺えて粗略には致さねども。渡世にからまれ御介抱もそこ／＼。おのづから不孝となれば。その段は幾重にも。イヤ了簡ならぬその譯聞け。昔唐土にも。不義する母の道の苦勞を助けんと。橋を架け

て渡せしに。その母扱は顯はれたりと。子供の手前羞らひ。自害して死したとある。六十に餘る此母が。病苦を助けんと思ひ。殺生禁斷の場所へ網打つたは。孝行に似て大不孝。科人よ囚人よと捕へられ。簀卷にして沈めにかゝるを。此母が見て生きて居られうか。コリヤヤイとても命を捨つるなら。父平内兵衛殿の敵を尋ね。差違へ死んでこそ。孝行とも武士とも。跡に殘るも尾鰭あり。地僅か鱗一尾に。命を捨つるが手柄かや。詞いとしぼさうにあの嫁御の。そち故是まで幾瀨の艱難。未來も一緒に思はいで。其身も末がよからうか。是非叶はずば諸共に。死ねとてなぜに勸めぬぞいやい。地我ばかり罪にあひ。母や妻子に憂目を見する。不孝者胴慾者。地恨めしや腹立ちやと。老の齒莖を。嚙みしめ／＼。身を震はし

て歎くにぞお春も道理に クルせき上げて フシ共に。泣入るばかりなり。地かかる歎きの胴中へ。庄屋を案内に打連れて。平瓦の治郎藏が。フシ門口からのさばり聲。詞阿濃の平治殿といふは爰でえすか。宿にならちよと逢ひましよと。地聞馴れぬえす聲に。疵持つ足の。詞ソレお春。マア母人を一間へと。地言捨てゝ立上り。詞成程平治内に居ります。どなたかお這入りなされませ。イヤ大事ない者でえすと。地庄屋を表に忍ばせて。ずつと通り顏打眺め。詞ム、成程々々こなはんぢや／＼。昨夕遠目に見た平治殿。この面はお見知りあるまい。おりや平瓦の治郎藏と言うて。ちつと男も立つる者ぢや。扨今日來たは別の事でもごんせぬ。ゆうべ貰樣が禁斷の場所へ。ぱつと言はした網の中へ。かゝつた物を貰ひに來た。ア

ア、コレ雜魚ぢやごんせぬ／＼。是程な光る物ぢや。ハテ悔りせまいてい。直ぐに其時言はうと思うたれど。代官づらが居る前。見たらてつきり上り物。そこを思うて見ぬ振りした。金にしたらば仲間へ入れるは。二つ山ぢや／＼。四の五のなしに下んせ／＼／＼は地フシ伊勢路にはやる詞かや。地平治はこいつしれ者と。思へどわざと馴れ／＼しく。詞扨は其元は平瓦の治郎藏殿か。お名はかねて承つたが。お目にかゝるは初めて。何やら貰ひ度いとおつしやれども。此方すきと合點が參らぬ。母の病氣で一寸も内を出ず。網打つた事なければ。もとより拾うた覺えもなし。定めてそれは。イヤ人違ひぢやごんせぬ／＼。この治郎藏が黑い眼で見て置いたのぢや。隱さずと出しやいの／＼。イヤそりや御無禮。覺えのないに何出

さう。ハテまだとぼけ面せまいテ。手目の上つた此臺詞。諍ふな其手ぢや行かぬぞ。イヤモどうおつしやつても覺えのない儀。外をお尋ねなされませ。ム、すりやどうあつても知らぬでえすか。ドレそんなら一寸家探しと。地立つて行けば平治たまらず飛びかゝり襟がみとつて引戻し。詞ヤアあばら家なれども平治が住宅。詞甘きに附上り。家探しとは存外千萬。一寸でも踏込んだら。枝骨切つて斬下げると。柄に手をかけつゝ立つたり。ム、ハ、ハヽム、ハ、ハ、、、、コリヤ面白い〳〵。こいつはよつ程面白いわいハヽ、、、。こりやヤイ。治郎藏が枝骨には性根があるが。地なぐつて見るかと段平物。鯉口くつろげ詰寄つて抜かばフシ斬らんと睨み合ふ。地お春は危うさ堪へかね。二人が中へ割つて入り。

隔この垣と身をなせば。邪魔な女と引退ける。アレ母様怖いわいなうと。縋る子を。抱へてさまよふ其中に。兩方なんなく抜合せ。網にかゝつた劍を渡せ。それを汝がどうして知つたと。互の切先上段下段。打てば開き。なぐれば拂ひ鎬をフシ削り鬪みしが。地平治が手練の太刀風にさしもの治郎藏斬立てられ。敵はぬ囮に友石を。もぎ取つて下に引つ敷き。詞サア望みの劍渡せばよし。さなくばこの餓鬼突殺すぞ。ヤレ早まるまい〳〵治郎藏。たつた一言。地いふ事ありと押しとゞめ。詞成程夜前不思議に寶劍が網にとゞまつて。我が手に入りしは入りしかど。平人の持ちなやむべき劍にあらず。仔細あつて我々は。筋目正しき浪人者。此場を了簡するならば。後日の返禮黄金を積まん。ヤア置け〳〵。武士の果て

でもわりや科人。追付け縄目の恥に逢ひ。簀巻になる體して。後日の返禮どこからすりや。ごくにも立たぬ頤聞かずと。劍を渡すか。サアそれは。こいつを殺そか。サア。〳〵。サ、、、返答はどうぢやい。イヤなうそこが了簡。此場に及んで僞り飾る平治ならず。貴殿男と見て頼みたき事あり何と頼まれてくれまいか。ホ、ウコリヤ面白い。男と見て頼めば引かぬ。こつちの望み叶へるなら。ホ、滿足々々。先づその悴を赦されよと。地漸うに手を放させ。詞某もと田村將軍の家臣。仔細あつて親を討たれ。その敵の面體も有所も知らず。尋ね出さんと思へども。一人の母が九死一生。見捨てゝも行かれず。無念の月日を送る所に。禁斷の場所にやがらといふ魚あり。是を捕つて母に與へば。立ちどころに本復といふを力

に網を入れ。魚は得ずして劍を得たり。これ幸ひの様なれども。罪科極まる我が身の上。沈めにかゝるを見るならば。母は忽ち生害せん。貴殿何卒老母妻子を引連れ都へ上り。寶劍を主君田村將軍へ差上げて給はらば。其元も天子へ忠節。我これを持つて立退くも易けれども。足弱三人。殊に母は御病中。地子の罪親にかゝらん悲しさ。父の敵も得討たず。表具カヽリ自業自得と諦めて。罪に沈む無念さを。推量してたべ治郎藏殿。不便と思ふ氣があらば。頼まれてたべ情ぞと フシ聲も涙にかき濁す。地治郎藏は默然と。始終を聞いて居たりしが。詞ム、その物語僞りもあるまい。シテ田村將軍の御内にて。貴殿の名は。ホ、ウ桂平内兵衛照房が悴同苗平次淸房と。地聞くより駈込む庄屋の彦作。詞聞いた／＼よい事聞いた。詞コレ治郎藏。田村の家來桂平治なりや。小黑丸樣からのお尋ね者。殊に寶劍持つたれば。注進して褒美は分取り。地油斷すな平瓦と言捨てゝ駈出すを。治郎藏透かさず飛びかゝり。素首ころりと打放せば。是はと驚く其内に。死骸を蹴飛ばし遙にすさり。詞扨は桂平内兵衛樣の御子息平治樣かや。左樣とも存ぜず慮外の段は。ハ。ハ。ハヽヽヽ眞平々々。私儀は中川宇内と申して。親御平内兵衛樣のお側仕。幼少の時兩度まで仕損じ。命も召さるべき所御赦免ありて。和州笠縫の神職。神祇の太夫友久方へ養子に遣はされ。御厚恩を受けし某。神祇の太夫は三種の神寶を奪取られ。寶劍は海底に沈みし由。即ちこの阿漕が浦は上浪は靜かなれども。底の靑海矢を射る如く。海中に沈みし物打寄せぬといふ事なし。その上此間夜に入つて。海面に光射す事見付けし故。扨は劍の有所と思ひ。何とぞ取得て養父が難儀を救はんと。夜な／＼網を入れしは某。詮義嚴しければ科を外へ讓らん爲。古主の若殿とも存ぜず。合圖の拍子木を打つて知らせしは。罪に罪を重ぬる業人。ハヽ。地勿體なや冥加なやと。立つたり居たり身をもがき。胸に燒鐵八寸釘。フシ打つて變へたる。後悔涙。詞ム、扨は聞及ぶ中川宇内とは汝よな。この平治を見知らねば。慮外も不忠も恨みなし。この上は母や妻子を介抱し。寶を持つて。早く都へ立退く用意と。地せけばせく程お春は涙。詞コレなう宇内。地主從の縁朽ちせず廻り逢ひしは。せめての便りと言ひながら。とにもかくにも夫の身の上。遁るゝ筋はない事か。淺ましや悲しやと。スヱテすがり着いて伏沈

む。地歎きの内に一間より。嫁御苦しい夜明けてと。聞くよりお春は氣の毒や。また御病氣が發りしかと。障子明くればコハいかに。母は刄を貫いて半死半生今はの際。詞ヤアコリヤ何ぢや。コリヤどうぢやと。地宇内も驚き駈寄れば。平治は仰天狂氣の如く。詞コレコレ母人。其お命を大事に思ひ。樣々の憂き苦勞。死なす程なら綱も打たぬ。チエ、情ない御仕方と。地恨み歎けばお春もとも〴〵。お前は常々御孝行。私に何ぞお恨みが。あつての事でござんせう。常寵愛の友石が。跡で歎くを不便とも可愛いとも思さぬかと。歎き沈めば母親は。血汐の瀧起直り。その孫故に今日までは。つらい命を存へしが。詞夫婦の衆の孝行を。思へば餘り嬉しさ悲しさ。心餘りて死にまする。地ならぬ世帶のその中で。長々の病氣の世話。今日や死ぬる明日や冥途のお迎ひがと。待つにつれなき我が命。詞苦勞の上に難儀して。本復させうと孝行な。子は天道が守れども。地守らぬ老の罪科は。我が子に報ひ情なや。千尋の海へ沈めると。思へば一時半時の。息の通ふも恨めしく。命を刄に任せしぞや。詞さぞや最前打つ杖を。心なしとも思はんが。叶はぬまでも此家を立退き。命完うさせんが爲。赦してたべ夫婦の衆。地何の因果で今までは。死ぬるにも死に兼ねて。かゝる憂き目をかけるぞと。悲しさ辛さ繰返し。身をかこちたる悔み泣き。ソノことわり。とこそ見えにける。地平次夫婦は正體も。泣沈めば宇内は差俯き。詞兎かくて在る中は。平次樣を罪に沈めは致しませぬ。ニ、地早まつたる御最期と。言ひつゝ涙押拭へば。詞ヲ、神佛の惠で。平次が罪は遁るゝ事もあらうが。遁れがたき我が命。死ぬるは兼ての覺悟ぞや。ムンとは又なぜなホ、ウ其譯いふも恥かしいが。孫への禮に言聞かす。地友石來いと傍に寄せ。詞婆はこの世に居ぬ程に。必ず跡で尋ねなよ。昨夕そちがして見せた踊を一つ所望せう。サア〳〵早う踊つて見せてたも。地それが冥途へ土産ぞと。いふに友石頑是なく。詞踊なりと何なりと好きな事をせう程に。どつこへも往て下さんなと。地言ひつゝ立つて入れ物の。フシカヽリ袖無し羽織襷を出し。四手振上げて凛々しげに。詞ノル殿中ぢや張臂ぢや。嶋さん紺さん淺黄さんと。地踊る姿を見るにつけ。手負ひは今はの聲を上げ。わつとばかりに伏沈む。詞ナウアレアレアレあれを見て宇内。早まつて死ぬるとばし。必ず思うてたもるなや。夫

婦の衆が母に隱して。孫に踊らせ往來の人に。一錢二錢の合力受け。養ひくれるを此婆々が。嬉しからうか悲しかるまいか。地嘸や二人の親の氣は。鈴の針で脊筋を斷切らるゝよりつらからん。三年四年の我が病ひ。貧苦は無理と思はねど。桂平内兵衞とも言はれし人のその孫が。奴出立の鬢鬘。中乘樣〱一文やつて下さんせと。附歩くをどう見て生きて居られうぞ。孫を飼ふより狗兒とは誰がいひ初めた婆故に。いかい苦勞をしたなアと。縋り寄せ引寄せて。可愛の者やと。抱きしめ フシ今を限りの其風情。地平治夫婦は取縋りそれも浮世にある習ひと。諫めても賺しても其甲斐もなき今端の際。コレなう暫しとあせる内。宇内平治の事。頼むといふが フシ此世の暇乞ひ。フシ悔み泣死に是非もなき。地はつと途方に暮れ居たる。夫婦を諫める折柄に。所の代官奥村兵庫。手の者數多案内を引連れ。詞禁斷の場所へ網打つたる此家の主、遁れぬ上意ぢや繩かゝれ。捕つた〱と込み入つたり。地平治騷がず淚を隱し。詞その科は豫て覺悟。サア繩かけられよと地進み出づれば。宇内は手を突き頭を下げ。詞網打つたる科人は。此家の主平治にあらず。この平瓦の治郎藏が。渡世の爲の盜み網。顯はれしは運の盡き。サア寄つて括られよ。と地手を廻せば平治が押直り。詞志は嬉しいが。天命何と遁れんと地押直れば。代官兵庫眉をしはめ。詞己が科を人に塗つても。身を遁れんとするは人情の習ひなるに。互に科を名乘つて出で。死を爭ふは義理ある仲。汝等はこりや主從ぢやな。イヤサ驚く事はない。それをこつちに吟味はせぬ。科人の詮議は一筋。網打つたは平治に極まる仔細は。その場に殘りし菅笠に。平の字と。治の字と。明白に記しあるからは遁れぬ證據。ア、イヤ〱。此菅笠が有るからは。いよ〱科人は此治郎藏。ヤアこいつこりや血迷うたな。平治と記した菅笠を。おのれが科の證據とは。サレバサ。拙者が名は平瓦の治郎藏。平瓦の平といふ字と。治郎藏の治の字と。頭字をしるし置いたる菅笠。平治とお讀みなされしは無理ならねど。拙者が笠に極まつたと。地危うき難を身に受ける。不思議に文字の合うたるも。フシ是孝行の驗かや。地代官それと悟れども。忠臣を感じてや詞ソレ科極る治郎藏に。繩かけよと地下知の内。あへなや宇内を三寸繩。なういとしやと駈寄るお春。平治も共に繩付の宇内が姿を見る不便さ。我ゆゑ消

ゆる水の泡。鮫や鯨の餌食かと。思ひ。 に受けて。脱いで貸したる笠じるし。 を訓に讀み。冥途へ。急ぐ一文字。濱
やる瀨も涙の雨。身にふりかゝるを身 タヽキ平と平との讀み違へ。音に讀む字 邊を。さして別れ行く。

玉藻前曦袂

三絃功

二

道春館の段

〔解題〕　三國傳來の妖狐の化現たる玉藻前の說話は謠曲「殺生石」に仕組まれて名高くなつた。これを材題とした淨瑠璃では紀海音の「殺生石」(一に今樣殺生石)が古い。外題年鑑には元祿十六年二月豐竹座上場とあるか。この年月については疑はしく・或は享保初年かも知れない。材題を謠曲に取り玉藻前の傳說を忠實に取扱つた作である。處が同じ豐竹座に於て寬延四(寶曆元)年正月十四日から「玉藻前曦袂」が上場された。浪岡橘平・淺田一鳥・安田蛙桂三人の合作である。本曲は海音の「殺生石」を飜案して、次のやうな筋にした。鳥羽院の御宇に薄雲の皇子が右大辨時澄等と反逆を企てたが、阿倍泰成が右大臣藤原通忠と謀つて帝の寵妃玉藻前は妖狐の化現で那須原に飛去つたから、これを狩取るやうにとて三浦之介義明上總之介常廣を遣し、實は皇子をこゝに誘ひ出して討取らせる事とし、玉藻前は泰成の邸内に隱匿して置いたが、時節が到來するや、神鏡を奉じて曦の袂をかゞやかして表れるといふ趣向にしてある。

本曲は後に近松梅枝軒と佐川藤太との二人の手で增補改作されて「繪本增補玉藻前曦袂」と題して、文化三年三月二十六日から大阪の御靈境內の操芝居に上場された。此の作では、妖狐の日本渡來以前の天竺及び唐土に於ける

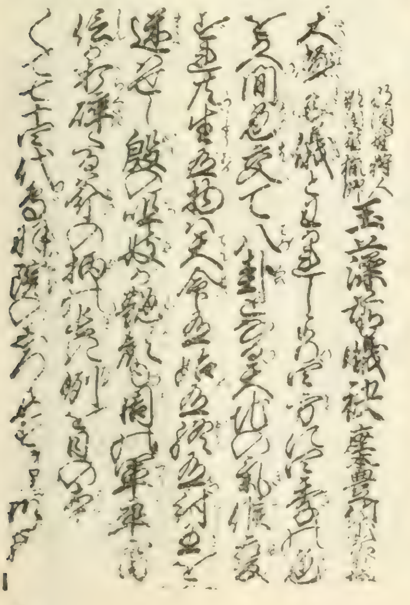
經過を第一段第二段に於て示し、第三段以下が日本の事となつて居り、しかも右大臣道春の二女初花姫は入内して玉藻前と稱へたが、妖狐の爲に殺され、妖狐がその姿となつて帝を惱すといふ事にして、大筋を再び元に還してある。その組織を見るに、第一段は天竺であつて、沙羊呂山の段、同禁の段、班足王御殿の段、第二段は唐土で、妲妃入内の段、太公望濱の段、殷紂王御殿の段、第三段から日本で、清水寺の段、道春館の段、第四段神泉苑の段、廊下の段、十作住家の段、第五段訴訟の段、祈の段、須那野原の段、大切景事とから分れて居る。

こゝに收めたのは言ふ迄もなく、この三段目の切であるが、これは寶暦元年の原作の二段目の切通忠館の段を取つたものである。文章にも相應に異同はあるが、大筋は相似て居る。但し原作ではこの事件を通忠（本曲では道春）存生中の事とし、且つ獅子王の劍を奪はれたといふ趣向はなく、只桂姫は皇子から召されても采女之助と契つて居るので應じないから、使に來た皇子の雜掌鷲塚金藤次が雙六の勝負のあとで首を討つ、それが金藤次が捨てた實子である事はその殘して行つた扇に認めた文によつて判明する、通忠夫婦及び妹の初花姫は悲歎にくれるといふ筋であつて、段切が違つて居る。尙又原作では初花姫が入内して玉藻前となるといふ事にはなつて居ない、これも相違の一つである。

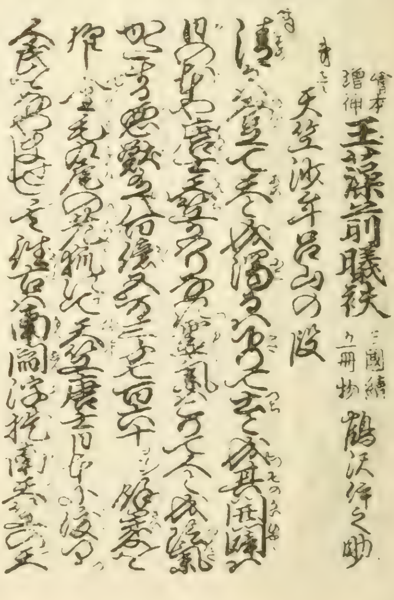
こゝに收めたのは五行稽古本によつて居るが、文章は文化三年刊行の丸本と同じである。

地フシはや夕陽も。傾きて。無常を告ぐる鐘の音も小オクリいとゞ。淋しき黄昏や。オクリ間ごとを。照らす銀燭の光り。まばゆきフシ白書院。地程もあらせず入り來る。鷲塚金藤治秀國。素袍の肩肘いかつげに。フシ上座にこそは押直る。斯くと知らせに館の後室。衣紋正しく出で迎ひ。詞御上使樣には御苦勞千萬。皇子樣より御諚の趣。地仰せ聞けられ下さりませと。辭讓の詞に一揖し。詞上意の次第餘の儀にあらず。皇子かね〴〵御懇望ありし獅子王の劍。今日中

に差上げるか。さなくば。娘桂姫が首討つて渡さるゝか。二つに一つの御返答。サ只今仰せ聞けられよ。ハアコハ存じがけなき御難題。その剣は紛失致し。所々方々と尋ぬれども。今に於て行方知れず。今暫くの御容赦を。アヽイヤそりやならぬ。皇子御心を懸けられし桂姫。たび／＼催促あると雖も。とやかくと言ひ延ばし。打捨て置かるゝ事。貴族の威勢鈍きに似たりと。以ての外御憤り。剣がなくば桂姫。首にしてお渡しなされと。地のつぴきさせぬ釘鎹。胸にひつしと萩の方。フシ途方涙にくれ給ふ。地後に始終桂姫。こなたの間には初花が忍んで様子立聞くとも。知らず御臺は涙を拂ひ。詞とても手詰めになる上は。いづれ遁れぬ娘が命。未練の申し事ながら。地一通り聞いてたべ。詞過去り給ふ夫道春。夫婦の中に子なきを愁ひ。清水のほとりなる。三神の社へ立願込め。三七日の参籠。その歸るさに産子の泣聲。肌に添へしは蛾龍の鍬形。由ある人の胤ならん。神の御告と連歸り。育て上げしは桂姫。間もなく儲けしアノ初花。右と左に川花と。眺め暮せし姉妹を。是非に一人はない命。殺さにやならぬ品となる。夫が此世にましまさばゝ。地問ひ談合もあらうもの。何を言うても身一つにかゝる憂目も前生の。報いか罪か悲しやと。身を悔みたる御涙フシとゞめ。衆ねてぞ見ゑけるが。地思案極めて顔を上げ。枕柱とも思ふ姉妹。勝り劣りはなけれども。殊詞剣で殺さば三神への恐れといひ。殊に義理ある姉娘。地実の道理を汲みわけて。詞妹の初花を。代りに立てゝ給



はらば。此上もなき御情と。地言はせも果てず聲あらゝげ。詞ムヽスリヤ三神の咎めは恐れ。神の御末の皇子の仰せ。御用ひはなされぬか。よしそれは兎もあれ。上意を受けた某に。身代りなどゝは思ひもよらず。無益の問答聞く耳持たぬ。サア只今と地詰寄つて。いつかな痺まぬ。フシその顔色。地叶はぬところと胸を据ゑイヤ。なう御上使。詞武士は。物の哀れを知るといふ。自らが一つの願ひはコレ此双六盤。二人が命を天道の指圖に任せ。負けたる方の首を討たば。せめてはそれを定業と。諦めらるゝ事もあらう。どうぞ此儀を御了簡。コレ。慈悲ぢや情ぢや。聞分けてと。地義理と恩愛二筋に。傳ふ涙は雨やさめ身に降りかゝる桂姫。母の情の有難さ。お慈悲といふも口籠る。振の袂に。白雨のフシ晴れ間はさらに見えざりき。詞エエ様々の世迷言。見物するもまどろしけれど。ハテ何とせう是非がない。サきり／＼とお始めなされ。が勝負のつくが直ぐに寂滅。オ、成程々々。それと明かさば女氣の。歎きに心かき曇り。取亂しては詮もなし。地只餘所ながら暇乞ひ。一思ひにと言ひさして。スヱカヽリ詞なく／＼取出す。タヽキ用意の褥四隅にはフシカヽリ立つる冷泉樒の。一本も。露を待つ間やかげろふの。フシカヽリ哀れはかなき有様を。几帳の陰に釆女之助。かゝる難儀も我故と思へど出るにも出られぬ時宜。千々に心を苦しめるフシ思ひは。同じ母親が。地是が冥途の使かと。長地思へどいとゞせき上す胸は子故の五月闇。あやめも分かぬ曇り聲。詞娘々と地呼出す。アイ



と返事も一やうに。斯くとは雖も白小袖。死出の晴着と姉妹が。姿も對の雪椿。しをれ出でたる屠所の道。羊の歩みたど／＼と最期の。フシ座にぞ押直る。地一目見るより萩の方。扨は様子を聞きしかと。先をとられて今更に。フシとから應へもなみだなる。地母の歎きにかき曇る心は月の桂姫。やう／＼に顔を上げ。詞委細の様子はさつきにから。殘らず聞いてをりました。地塒はなれし時鳥子で子にあらぬ自らを。この年月の御養育。まだ其上に妹まで自らを助けんと様々の心遣ひ。思ひ廻せば廻す程そら恐しい身の冥加。胸にせまつて一言もお禮は口へは出ぬわいな。こんな憂目を見せますも皆自らが徒らから。上とても叶はぬ縁。合。故と。覺悟は極めてをりました露塵御恩を送りもせず。先立ちまする不孝の罪お赦しなされて下さりませ。詞產みの父上母様はどこにどうして御座るやら。命の際に只一目。地逢うて死にたい顔見たい是ばつかりがと言ひさして聲曇らせば初花姫。たう曲もない其お詞。上ギンたとへ何れの胤なりともわらはが爲には大事の姉様。お前は殺さぬ自らを。イヤならそもじは存らへて。便り少ない母上にお宮仕へを頼むぞや。イヤ自らを。イヤわらはと。死を爭ひし姉妹の。心根不便と母親は。何れをそれと分けかぬる胸は涙の三つ瀬川。フシ身も浮くばかり歎きしが。地さあらぬ體になう娘。詞御上使への御馳走に。日頃手練の双六をお目にかけや。一世一度の晴れ藝なれば。二人共に大事にかけ。どちらも負けてたもんなやと。地割つては言はぬ親心。フシ片方の盤を。引寄せて。是がこの世の別れかと。思へば直す手もたゆくたゝる例もあや錦。袋の紐をとく／＼と合。さいの河原を。地ナホスカヽリ此世から合。積む石數も姉妹の。年も重目にナホス持つ涙互に筒を取りかはし。指す手引く手も端手ならず。切つつ切られつ修羅道の。苦しみ受けん悲しやと。思へば筒も手も震ひしどろもどろの石づかひ。姉を構へば妹を助けんものと雙方が。重一疊六五二四三フシ果てしなければ。地氣をいらち。詞エヽぐづ／＼と埒のあかぬ長評議。早く勝負をつけ召され。早く。地早くと獨撰が。せがみ立つれば姉妹も。爰ぞ一生懸命と心づくしの盤の面。母は胸まで突つかくる涙呑込み呑込んで背ける顔に露時雨。乞目を振りし姉よりも妹が心の嬌しさ苦しさ。詞サア／＼姉様がお勝ちなされたと。地首さし伸べて覺悟の體

見るに母親たもち兼ねステテわつとばかりに。伏沈む。地刀すらりと金藤治。詞勝負は見えた觀念と。地ひらめく稻妻姉姫の首は前にぞ落ちにける。なう悲しやと初花姫。あへなき骸に取付いてフシ悲歎の。涙はてしなき。地泣く目を拂ひ袂の方。上使の傍に詰寄つて。詞ヤア狼狽へたか金藤治。勝負に勝つた姉娘。なぜ斬つたサなぜ殺した。それと悟つて初花が志。水の泡となつたのも皆其方が無得心。誑られたが口惜しい。地と身を顫はして腹立ち涙。上見ぬ鷲塚せゝら笑ひ。詞ハ、、、しやら臭い咎め立て。勝負に勝たうが勝つまいが。仰せを受けた桂姫。首討つたが何誤り。皇子の御心背くかた〳〵。惡く身動き召さるゝと。どいつこいつの容赦は致さぬ。すん込んでお居やれと。地權威を甲に傍若無人。振袖ひき裂き首おしつゝみ フシ睨み散らして立出づる。地御臺はくわつとせき上げ給ひ。詞ヤア過言なり金藤治。女と思ひ侮つての雜言無禮。右大臣道春が妻。そこ動くなと 地裾引上げ。長押の長刀おつ取つて石突ちやうど庭の面。八雙三段水車。母樣是は何事ととゞめ隔つる初花姫。邪魔しやんなと突退け刎退け。抄ふ長刀ひらりとかはし。詞ヤア猪口才な腕立てと。地首を片方に鷲塚が秘術を盡す上段下段。運の極めか金藤治肩先四五寸斬下げられ。思はず跡へたぢ〳〵〳〵。付入る刄むね蹴落され是はと駈寄る御臺の弱腰。どうと打付け動かせず。釆女是にと飛んで出で。拔く手も見せず鷲塚が脇腹ぐつと突つ込む白刄。急所の痛手にどつかと坐す。起しも立てず聲あらゝげ。詞皇子に媚ひ惡事をすゝめ。人を損ふ獄卒め。地思ひ知れやと刀の柄。ゑぐる腕首しつかと押さへ。詞ヤレ待て釆女逸るな。言殘す仔細あり。ヤア此期に及んで何言譯。血迷うたか金藤治。イヤ血迷ひもせず後れもせぬ。先づ暫くと 地押しとゞめ。苦しき息をほつとつき。詞元某は東國武士。下野の國那須野の何某。故あつて所領に放れ當地へ立越え迷ふ内。女房が初産。産み落したは女の子。浪々の身の悲しさ。雌龍の鍬形相添へて。五條坂のほとりに捨て置きしが。程なく妻も世を去つて。憂き年月を送りし内。思はず皇子の見出しに預り。當家に傳はる獅子王の劍。盗み取つて得させなば。一廉の侍に取立てんとの頼み。ハヽア畏つたと忍び入り。奪ひ取つたはコレ此鷲塚。ホヽ御驚きは御尤も。慾に目がくれ惡人の。皇子に從ひ積惡無道。地かほど邪慳の心に

も。詞忘れがたきは恩愛の。捨てし娘はいかゞぞと。案じ煩ふ折も折。詞越前御臺の御物語。聞いた時のその嬉しさ。肉身のお子に代へ。庇ひ給はるお慈悲心。有難しとも嬉しとも。何と詞のあるべきぞ。地須彌より高き御厚恩。萬が一も報ぜずして。知らぬ事とはいひながら。お家に仇する人でなし。詞たとへ鬼畜の身にもせよ。初花姫の御首に。何と刄が當てられう。地お手にかゝつて相果つるは。せめて心の言譯ぞと。先非を悔ゆる身の懺悔。扨はとばかり母娘。釆女之助立寄つて。詞ムヽシテ御劒は。御邊が所持せらるゝか。アイヤ獅子王の劒。內侍所もろともに。皇子の館に隱しあれば。術を以て取返されよ。サアかく物語れば劒の盜賊。いづれも立寄つて御成敗なされよと。地よろぼひ〳〵首取上げ。詞こりや娘。コリヤ父ぢやわやい〳〵。なぜ物言うてはくれぬぞと。地眠れる如き死顏を打守り〳〵。今はになつて二親を。こがれ慕うた心根が。いぢらしいやら不便なやら。其時名乘るは易けれども。恩義の二字にからまれて。じつと堪ゆる辛抱は。熱鐵を呑む心地ぞや。燒野の雉子夜の鶴。子を憐れまぬはなきと聞く。あたら蕾を胴慾に首打落し手柄顏。むごい親ぢやと冥途から恨みん事の可愛やと。我を忘れし男泣。心を察し萩の方あやも涙に正體なく。一樹の蔭の雨宿り一河の流れを汲む人も。深い緣と聞くものを藥の上から育て上げ。手しほに掛けた親ぢやもの可愛う無うて何とせう。十七年の春秋が一期の夢であつたかと。返らぬ事を口說き立て。喞ち給へば初花も共に涙にむせかへり。詞ほんに昨夕も今朝までも。斯うした事があらうとは。地神ならぬ身の情ない。何ぼ捨てゝも子ぢやないか。なぜ自らを斬らなんだ。今から誰と對松や琴の浚へや十種香も。手向の種となつたかと。聲も惜しまず叫び泣き。釆女もさすが愛著と。義理の柵恩愛の血筋の別れ鴛塚が。鬼をあざむく兩眼にたばしる涙はら〳〵。四人が涙一時に落ちて流るゝ。袖の海フシ膝に。淵なす如くなり。地かゝる折しも。勅使と呼はる聲諸共。中納言重之卿。衣冠正しく入り給へば。思ひがけなく人々は敬ひ。フシ請じ奉る。地重之優美の御聲にて。詞先頃禁庭にて。歌合せの折から。息女初花姫より差上げられし詠歌。水錆江に。底の玉藻は亂るとも。知らるな人に深き心をとありしを。帝叡感斜ならず。御賞美のあまり。女官の列に相加へ。玉藻の前

と改めて。召連れ來るべしとの勅諚。ヤア〳〵仕丁ども。いひ付けたる品早く持て。地アツト答へて白臺に。更衣の裝束忝〳〵しく フシ御前に差出せば。地はつと親子は有難涙。辭するは恐れと母親がとり〳〵。着する五つ衣。綾羅錦繡緋の袴。芙蓉のかんばせ手弱女の。傍りまばゆき。フシ其粧ひ。地釆女之助はつつ立上り。詞我は是より姫が首皇子の館へ持參して虚實を以て御劍を奪返して參らん。地早やおさらばとフシ立出づる。地コレナウ暫しと母親が。首に名殘の唱名は直ぐに黄泉の道しるべ。道の案内と鷲塚が。刀を拔けばがつくりと。もろくも。枯るゝ芭蕉葉の。露の玉藻も濕ふ袖。しぼり兼ねたる朝日の袂。雲井の御所や九重の大内。山へと 三重 へ別れ行く。

戀女房染分手綱

十段目 三吉愁の段

三

〔解題〕 寶曆元年二月一日から竹本座上演。作者は吉田冠子・三好松洛。吉田冠子は人形遣の名手吉田文三郎の作者名である。近松の「丹波與作待夜の小室節」(近松名作集上卷參照)の改作。原作の世話物をお家物式に仕立て直して趣向をこらし筋を複雜にしてある。卽ち丹波の一城主由留木家の奧家老伊達與三兵衞の子物頭の與作は、若殿右馬之助が都の藝子いろはを身請の爲の三百兩を鷲塚官太夫に盜まれた越度と、腰元重の井との密通が顯れたのとの爲に追放となり、重の井の父能師竹村定之進も亦殿に道成寺の鐘入の傳授をして鐘の中で切腹して子の罪を負つた。與作は馬方となり、藝子いろはの成れの果なる關の小萬と馴染んで居る間に、盜ま

れた金の調達の爲に苦心して、我が子と知らずに自然生の三吉に盗をさせる。なほこの間に色々の波瀾があるが、とゞ親子夫婦はめぐり逢ひ、(こゝはほゞ原作の筋を守つてゐる)與作は與之助と共に官太夫を討つて本知に復し、重の井小萬と共に調の姫のお供をして江戸に下るといふ筋。第一東山の段、第二涼みの段、第三與作勘當の段、第四重の井訴訟の段、第五道成寺の段、第六孝行の段、第七恩愛の段(坂の下の座頭慶政殺し)、第八道行、第九親里の段、第十道中双六、重の井子別れの段、第十一旅籠屋の段、第十二歸參の段、第十三敵討の段に分れて居る。

こゝに收めたのはその十段目の切である。近松の原作とほゞ同文であるが、只重の井の詰りの條に少し相違を見るのは、全體の筋立の異るが爲の當然の結果である。

地お傍の衆にはやされて稚心の姫君。から面白い東とは今迄おれは知らなんだ。サア〳〵行かうはや往かう。詞ヤアござらうとおつしやるか。地そりや日出度いは〳〵又もや御意の變らぬ間に。行列揃へと立騒ぐお乳の人は勇みをなし。そんならま一度大殿様お袋様とお盃。これも馬子殿お蔭ぢや出かいた〳〵そちには禮いふ褒美やる。そこに待ちややとざゞめき渡り。フシ輿にお供し入りにけり。地馬方はつひに見ぬ金の間をうそ〳〵と。覗き廻れど筵の外踏みも習はぬ備後表。詞エ、この座敷は。ぎやうに滑つて歩かれぬ。大名の家よりも。地こつちの内が。結構でござると。フシ獨言して居たりけり。地お乳の人は大高に。お菓子様々文匣に盛入れ。詞どれ〳〵三吉そこにか。そちは健者ぢや。地道中双六お目にかけそれ故に姫君様。お江戸へござろと御意なさるゝ。お上にも御機嫌。是は御前のお菓子有難う戴きや。お錢三筋買ひたい物買やゝ。殊にそちが通しぢやげな道中すがらも用あらば。お乳の人の重の井に逢はうといや。見れば見る程よい子ぢやに馬方させる親の身はよく〳〵であらうと。フシいと懇の詞の末。地三吉つく〴〵聞きすまし。詞由留木殿の御内。お乳の人の重の井様とはお前か。地そんなりやおれが母様

と抱き付けば。詞アヽこは慮外な。おのれが母様とは。馬子の子は持たぬ。地ともぎ放せばむしやぶり付き。引退くれば縋り付き。詞何のない事申しませう。わしが親ば。お前の昔の連合ひ。この御家中にて番頭伊達の與作。その子は私。こな様の腹から出た。與之助はわしぢやわいの。地父様は殿様のお氣に違うて。國をお出なされたは小さい時で覺えねど。沓掛の乳母が咄には。詞母様も離別とやらで。殿様に御奉公。こなたを乳母が養育し。父様に逢はせたう思へども甲斐もない。母様の細工の守り袋を證據に。由留木殿のお乳の人。重の非様と尋ねよ。地と懇に教へて乳母はおれが五つの年。久しう痰を煩うて。鳥羽の祭の餅が咽に詰つたやら。つい死んでのけました。詞乳母が子の一平は。父様を尋ねに行き。地在所の衆が養うて。やう／＼馬を追ひ習ひ。今は近江の石部の馬借に奉公しまする。コレ守り袋を見やしやんせ何の嘘を申しませう。お前の子に紛れはない。外に望みは何にもない。父様を尋ね出し一日なりとも三人一所に居て下され。見事沓も打ちまする。この草鞋もわしが作つた。聾馬を追つて夜は沓打ち草鞋作り。父様母様養ひませう。父様と一つに居て下され。拜みまする母様と。スヱテ取付き抱き泣き居たり。地お乳ははつと氣も亂れ見れば見る程我が子の與之助。守り袋も覺えあり。飛付いて懐に抱き入れたく氣はせけども。アツア大事の御奉公養ひ君のお名の瑕。僞つて叱らうか。イヤ可愛げにさうもなるまい。マアちよつと抱きたい。アヽどうせうと。百千色の憂き涙。二つの目には保ち兼ね フシむせび。沈みて居たりしが。地いや／＼我が子ながらも賢しい者。僞つて誠とせす。母は心の汚い者と。蔑しまるゝも情なし。譯を語つて合點させ恥しめて歸さんものと。涙拭うて氣を鎭め。詞爰へ來い與之助。地と引寄せ兩手を取り。詞扨も大きうなりやつたの。とても成人せうならば。侍らしうなぜ尋常にも育たぬぞ。顔の道具手足まで。カヽリ母は斯うは産付けぬ。美しい黒髪をこの樣に剃りさげて。手足は山のこけ猿ぢや。ほんに氏より育ちぞと。フシ父さめざめと泣きけるが。詞コレ物をよう合點しや。腹から産んだは産んだれども。今では子でも母でもない。地淺ましう成りさがつたを嫉うて言ふではさら／＼ない。爰の譯をよう聞きや。詞母は元御前様の御奉公人。與作殿は與家老の御子息。互に若木の戀風に。地摺

れつ縺れつ一夜が二夜とたび重なり。そなたを懐胎この事お上へ聞えては。父も母も御成敗に逢ふ故に。詞病氣と僞り。乳母が所で産落し。育てゝ貰ふ其内に。情なや八平次といふ者の仕業にて。父様は御追放。この母が悋氣から。不義の事顯はれ。既に御成敗に極まりしを。わしが爲には父様。そなたの爲には。祖父様の定之進様。勿體ない。カ わしに代つての御切腹。地お姫様の乳離れといひ立て殿様のお慈悲にて。姫君のお乳の人首尾さへよければそなたも今。奥家老の御子息。二番と下座に下らぬ人。其時母も一所にのけば尤も夫婦の道は立てども。身に餘つたお家の御恩。誰がいつの世に報ぜん殘つて御恩を報じてくれと。父様のことわり故第一は男の爲。夫婦の義理を忠義に代へて。飽かぬ離別を。フシしたわいの。詞男の子は稚うても。御勘氣の末氣遣ひな。地與作が子とばし言やんなや。詞サア早う御門へ出や。地ア、いかなる因果な生れ性。現在我が子に馬追ひさせ男の行方も知らぬ身か。母は衣裳を着飾つて。お乳の人よお局よと。玉の輿に乘つたとて。是が何になる事と フシ聲を。忍びに泣くばかり。地子は生れ付き賢くて聞分けおる程猶泣入り。悲しい話を聞きましたさりながら。常に乳母が申したは。姫君様と私とは乳兄弟の事なれば。母様にさへ逢うたらば父様も出世なさるゝ由。御訴訟なされて下されかしと言へばちやつと口を押さへア、勿體ない。詞その乳兄弟はいはぬ事。姫君様は關東へ。養子嫁御にお下り。高いも低いも姫御前は大事のもの。先は他人の世間體。地三吉といふ馬追ひが乳兄弟にあるなどと。どう妨げにならうやら蟻の穴から堤も崩れる。輕いやうでも重い事ひそ／＼いうて人も聞く。サア先づ早う出てくれと。泣く／＼言へば三吉。詞ア、母様。あんまり遠慮過ぎました。先づ言うて見て下され。地アレまだ言ひ居るか聞分けない。夫の事我が子の事母に如才があるものか。合點の惡い聞分けないと。制する内に奥よりも。詞お乳の人はどこにぞ。御前から召しますと 地呼ばはれば。アレ聞きや人が來る出てたもと。手を取つて引出す。不便や三吉しく／＼涙。頬冠りして日を隠し。沓見まつべて腰に付け。見すぼらしげな後影。コリヤま一度こち向きや。山川で怪我しやんな。雨風雪降り夜道には。腹が痛いと作病おこし。二日も三日も休んで煩はぬやうにしてたも。毒な物喰はずに下痢や痲

疹の用心しや。可愛の形やいた〳〵しや。千三百石の代取が何の罰ぞ咎めぞと。式臺の壇箱に フシ身を投げ。伏して歎きしが。地懐中の有合ふ一歩十三袱紗に包み。これ嗜みに持つて居やと。涙ながらに渡さる丶。三吉見返り恨めしげに。詞母でも子でもないならば。病まうと死なうといらぬお構ひ。その一歩も入らぬ。馬方こそすれ。伊達の與作が惣領ぢや。母様でもない他人に。金貰ふ筈がない。地エ、胴慾な母様覺えて居さしやれと。わつと泣出すその有様。母は魂消え入つて。養ひ君お家の御恩思はずば扨て。一人子を手放して何のやらうぞ。奉公の身の淺ましやと フシ悶え。こがれて歎きける。地時に奥口さゞめいて早や御立ちと姫君の。御輿かき上げ行列立て。お乳の人の乗物をひら付けにこそ フシかき寄せけれ。地お乳はさあらぬ顔付して。姫君のお伽に最前の馬方をこの乗物に引付け。お慰みに唄はしや。畏つたと宰領ども。詞コリヤそこな自然生め。地唄ひ居らうとぎごつなく。詞ヤアこいつは吠えをるか。地何ぢやこりやいま〳〵しいと。握拳を二つ三つ。戯きながら泣聲に。唄坂は照る〳〵。鈴鹿はくもる。土山間の。間の土山。雨が降る。ナホス降る雨よりも親子の涙中に。しぐる丶雨やどり。

祇園祭禮信仰記

四

金閣寺の段

〔解説〕 寶暦七年十二月五日から豐竹座上場。作者は中邑阿契・豐竹應律・黒藏主・三津飲子・淺田一鳥の五人。「信長記」の世界であるために、始めは「祇園祭禮信長記」といつたが、其筋の命で信仰記に改めたのである。

松永大膳は主君足利義輝を弑して天下横領の大望を抱き、金閣寺の高樓に居を構へ、その樓上なる究竟頂に將軍の母慶壽院を押籠めて人質となし、豪奢を極めて居る。その慶壽院の望みとあつて大膳は、天井の楠の一枚板に墨繪の雲龍を描かせるために狩野將監の女雪姫と婿狩野直信とを召捕つたが、二人共容易に意に從はぬので、直信は入牢させ、雪姫に雲龍を畫くか、我に靡くか、さもなければ夫を殺すぞと言つて迫つた。雪姫は大膳の持つ太刀の奇瑞によつて父の敵は大膳と知り斬つてかゝつたが却つて縛せられる。姫は爪先で櫻の花を集めて描く鼠の爲に助けらる。智謀を以て大膳に取入つた小田春長の臣此下東吉が慶壽院を救ひ足利家の二つ引兩の旗を奪ひ還し、遂に大膳を志貴山の城に攻滅すといふ筋である。全篇の場割りをいへば、第一段は大序、中祇園の段、切室町將軍館の段、第二段は口割普請、中花子の段、切芥子畠の段、第三段は口上欄屋、中輝若丸の段、切是齋内の段、四段目は口浮世風呂の段、中金閣寺碁立の段、切雪姫爪先鼠の段、第五段は志貴山の段となつて居る。こゝに收めたのは四段目の中である。

本曲の雪姫は歌舞伎に於ては「廿四孝」の八重垣姫、「鎌倉三代記」の時姫と共に三姫と稱へられる難役である。淨瑠璃で雪姫を材題としたものは宇治加賀掾の「女繪師狩野雪姫」が最初らしい。その一段を宮古路豐後が轉用して「傳授の雲龍」と題して語つた。豐後節の最古曲として今も常磐津に傳へて居る。この雪姫に近松の「傾城反魂香」の上卷高島館の段の狩野四郎二郎の虎の段の趣向が取合せられて本曲の雪姫は描かれたものと思ふ。本曲初演の時は、金閣寺の三重のセリ上げセリ下げを用ひ、又若竹東二郎の遣つた此下東吉の人形の頭を、京都高臺寺の太閤の木像に摸して人形細工人龜屋利助が造つた事などが大いに人氣を呼んで、寶暦九年春迄三年越打續け、その後も操で屢々繰返されたのみでなく、歌舞伎に入つても名高くなつた。

現行の稽古本も原作と同文である。

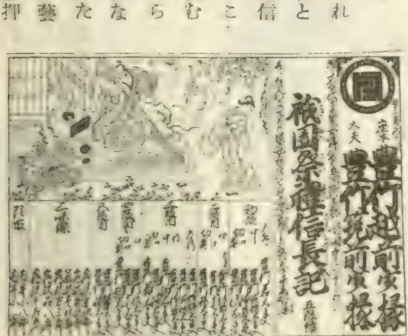
地そも〳〵金閣と申すは。鹿苑院の相國義滿公の山亭。三重の樓迫り庭には八つのフシ致景を移し。夜泊の石岩下の水。瀧の流れも春深く。柳櫻を植ゑまぜて今ぞ都の錦なる。地松永大膳久秀舊恩の主君を亡し。剰へ慶壽院を虜にしこの金閣に押しこめ置き。遊興に月も日も。立つや彌生の天罰にフシゆとり。ある間の榮華なり。地鬼當太相手に鬪む碁の二番續けて勝のはま。詞鬼當太また負けたよな。白は源氏源の義輝を四つ目殺しにした松永。なか〳〵我には續くまいと。地自慢黒白石片づけ。閣へ知らせの鳴子の綱。フシ引けばばら〳〵立出づる。地石原新五乾丹藏川嶋忠治。大膳が前に手をつけば。詞オ、呼出すは餘の儀でない。究竟頂に押籠めた慶壽院。この天井楠の一枚板。その裏に雲龍を畫せよと望む故。その龍は誰に畫せんと問へば。狩野之助直信か雪姫ならでないといふ。さるに依つて汝達に言付け兩人を召捕り。直信めに言付くれば四の五のぬかす。雪姫も同じ樣に何とやら斟酌。とかく慶壽院が機嫌を取るも。心に一物あつての事。雪姫も手に入

祇園祭禮信仰記
此下東吉の頭
若竹東三郎思
附ニ而是ヲ折く
細工人
亀屋
利助
是都
高臺寺太閤様の
木像ヲ還セシトナリ
目ハ玉眼ヲ入



此下東吉ノ頭

れて抱いて寢る我が分別。邪魔になる直信めは軍平に言付け詰牢へぶち込んだ。三人の者ども。慶壽院が警固隨分と怠るなと。地いへば鬼當田皆聞いたか。詞雪姫を抱いて寢るは聞えたが。あの義輝や慶覺を産んだ慶壽院。どこに見込みがあつてあの様にして置かるゝぞ。この鬼當太が兄貴なら引つくゝつて存分にと。地いへば大膳ハ、、、、。詞何を若輩者の知る事でない。短ういへばかの王陵が母を虜同然。慶覺始め諸國の武士蜂の如くに起つても。むざと我に敵對させぬ思案。信長にもせよ此閣に押寄せなば。一番に慶壽院を楯の板にくゝり上げ。此劍を咽に差付け一思ひ。去年五月室町落城のその後。猫の子が一匹え手ざしせぬは。きやつを人質に取つた故さ。三人ながらいよ〳〵油斷仕るな。早く參れ。ハツト皆々詞を揃へ。尤もなる御計畧中々油斷は仕らず。地只今打つたは時計の七つ。番代りに參らんと フシ打連れ閣へ上りける。地大膳襖を押しやつて。詞ヤア鬼當太。詞殘念なは淺倉義景。信長が計畧に乗つて亡された後。直ぐ様ぼつ賦け一合戰と思へども。地軍を預けん軍帥なし。無念ながらこの閣に引籠り。天晴よき侍もがなと望む折から。詞此下東吉といふもの。信長が手を離れ浪人し。我に奉公を望むよし心得ずとは思へども。軍平がいふに任せ。地信長。謀事を以て。東吉を差越さば。こつちも謀事に乗つて召抱へ候へと勸むる故。軍平を迎ひにやつたが未だ歸らぬか成程々々。詞イヤモ萬事拔け目なき軍平。隙の入るはかの東吉同道いたすに極つたり。地共間に一杯食べう藝者どもを相手にと。フシ間の障子を押しあくれば。地藝子法師が取卷いて。勇める中に雪姫が。夫は牢舍の苦しみを引替へ妻は綾錦。長地蒲團幾重か其上に泣きしをれたる有様は。王昭君が胡地の花 フシ色香。失ふ風情なり。地大膳近く立寄つて。詞詰牢とは品をかへ舞ひ歌はせて弄走するも。慶壽院が指



寶暦七年

圖した天井に墨繪の龍。直信に代つて書くか。但し抱かれて寢る所存か。どうぢや 地どうぢやと責められて。姫はやう〳〵顔を上げ。詞思ひも寄らぬ御難題。繪の事は祖父様より。家に傳はることなれば。何しに辭退は申さねども。地水草花鳥に事かはり墨繪の龍は。家の秘密。雪舟様より父將監まで傳はりしが。詞何者の仕業にや父を手にかけ其上に。家の秘書まで失へば。何を手本に畫くべき。その儀は赦して下さりませ。同じ事をいふ様なれど。直信殿と我が仲は。お前も知つてござんす通り。地お主様のお情で夫婦となつた義理あれば。たとへ此身を刻まれても不義は女の嗜み事。私ばかりか夫まで牢舎とは情なや。かゝる憂目を見せんより。いつそ殺して下さんせとかつぱと伏して。泣き居たる。詞鬼當太アレ聞いたか。慶壽院が望みの通り言付くれば。家の秘書がないといふ。そんなら枕の伽さゝうと言や。直信めに義理穿鑿が惡い。所詮邪魔になる直信め。軍平が戻り次第岩下の井戸へ釣おろし。殺して仕舞へば跡がさつぱり。それともに直信を殺しともなか。おうと言うて雲龍を書きなりと。抱かれて寢なりと其方が得心次第。活さうと殺さうととつくりと思案して。よい返答聞くまでは蒲團の上の極樂責め。藝者ども張上げて歌へ〳〵と勇めても。地姫は兎角の答さへスエテ涙より外。なかりける。地かゝる所へ十河軍平。伴ふ此下東吉が。衿元に抜き刀 フシ指付け〳〵入り來れば。地こなたも障子をさしもの大膽。詞ヤア軍平。その手籠は何事ぞ。さん候これこそ此下東吉。御奉公を望み推参は致せども。もし過もあらんかと油断いたさぬ此仕合せ。ハ、、ハ。家を望む東吉何の用心許せ 地許せの詞に従ひ フシ刀を鞘に納むれば。詞ム、聞き及ぶ東吉よな。苦しうないつつと参れ。身も信長には手を置きつるに。その信長を見限り大膽に仕へんとは珍重々々。ソレ腰が明いて見苦しい。



十二月興行

刀を赦して近う〱と詞の下。地家來に持たせし指添刀。返せば取つてさすがの東吉。両手をつかへ謹んで。詞御覽の如く四尺に足らぬ此下東吉。甲州山本勘助に比べては。拔群劣りし小男。お馬の口か秣の役か。恐れながら御譜代とも。思召し下されなば有難く候と身を謙り蹲まる。ム、古へ齊の晏子といふ者。身の丈は三尺なれども。諸侯の上に立つて國政を執行ふ。武士は魂。人相の差別善惡によるべきか。さは言へ人には一つの癖のあるものとは慈鎭が歌。この松永も碁を好むが一つの癖。相手は是なる鬼當太軍平ヤ幸ひ目見えの東吉。試みに何と一番打たうかい。地是へ〱と盤引寄せ招く頤お髭の塵。取敢ずお相手と盤に向ふも先手後手。軍平是で見物と フシ腰打ちかけて差覗ふ。フシ隔ての障子。そろ〱と一間を忍ぶ雪姫が。スエテ心一つの物案じ。詞囚れたを幸ひに。御恩を受けた慶壽院様。奪ひ返さうか。夫の命も助けたし。地ア、どうかなと差俯き。千々に心を。フシカ、り碎くは碁立て大膳は。先手の石打つや。現の山蔦の。細道此下が。詞一間飛びに入込んだも。松永を討つて取る。フシ岡目八目軍平が。助言と知らぬ大膳が。詞もあると打ちうなづきいつそ此身を打任せ。枕交そとつい一言。言うたらいとしい直信様。牢舎を助けてくれもせう。とは言へ憎いあの大膳。何と枕が交されう。厭というたら夫の命。詞危ない事の。大膳が石が旣の事。アいや〱死ぬるは此白石。どうやら遁[illegible]の魚。白き方には目が無うて。あるか無いかの。地辻占を聞くもフシだく〱胸撫でおろし。詞ほんに昔の常盤の前夫の敵清盛に。枕並べし例もある。それは予故。わしに子とては無けれども。大切なお主の爲差當る夫の命さうぢや。地さうぢやと立上り。震ふ膝節松永が。フシ後におづ〱立寄つて。詞先程の御返事を申し。地申しと手をつけば。碁に打傾く顏をも上げず。覗くは誰ぢや。アイ私でござります。先程の御返事を。詞ムム雪姫が顏の白石。返事とはマア嬉しい。抱かれて寢ばまの返事ぢやな。アイあいとは味い。昨今の東吉が見る前。戀は曲者赦せ〱。ハア是は〱痛み入つたる御挨拶。主となり家來となれど。碁の勝負には遠慮は致さぬ。軍平殿。いかにも左樣。女房にしてう(翅鳥)とはづんでござる大膳様。オ、サ〱。覗には一目。かう(劫)押さへて。この東吉が中手を入れて。面白い信長でも直信でも。切つて仕舞へばだめも殘ら

ぬかい。いか樣左樣と當太が助言。軍平切れ〳〵。切つてしまへと碁癖の詞。地はつと駈出す十河軍平。姫は驚きアアコレ待つた。詞切るとは誰を。ハテ知れた事。狩野の直信。ナウ待つて下さんせ。夫を殺すまい爲に大膳樣のお心に。從ふ心で爰へ來ても。碁に打入つてござる故差扣へて居たわいなう。地マア〳〵待つて下さんせ。詞何ぢや身が心に從はう。アイ〳〵そりや眞實か。餘り急で呑込まねど軍平待て。碁にかゝつては傍あたり。姫が來たやら何いふやら。危ないは狩野之助。ハ、、、。なう東吉。かの太平記に記した。天竺波羅那國の大王まつ此如く。碁に打入り。過つて沙門を殺した引き事。それは因果。是は眼前。コリヤ雪姫。心にさへ從へば直信は助けんと。つがひし詞反古にもなるまい。暮を待つて閨の盃。

抱いて寢た其上で直信は赦してくれうと。地いふに フシ少しは落付く思ひ。地大膳盤を打眺め。詞大方この碁もおれが勝。勝負を付けて見ようかい。地然らば左樣と東吉が。向ふ敵は小田信長。詞この大膳が後陣の備へ。つゞく碁勢は。あるとも〳〵有馬山。いなの笹原足つくな。突いたら大事か取つてくりよ。取るとは吉左右天下取る。國を取ろ〳〵とろゝ汁。山の芋から鰻とは早い出世のやつこらさ。詞三五十八南無三寶大膳樣がお負けぢやと。地はま拾ふ間も短氣の松永。盤を摑んで打付くるを。すかさぬ東吉扇のあしらひにつこと笑ひ。詞總て碁は勝たんと打たんより。負けまじと打つが碁經の掟。東吉が癖として圍碁に限らずい論。或は戰場に向うても後れを取ること大嫌ひ。盤上は時の興。勝つべき碁をわざ

と負けるは追從輕薄。負腹の投打ちなら今一勝負遊ばされんや。サ、、、何番でもお相手と。地井目すゑたる東吉が。手段もさぞと。フシ知られたり。地大膳も納得し面白い碁の譬。詞見かけに寄られぬ丈夫の魂頼もしゝ〳〵。詞武士の肝要は軍の駈引。その駈引には智謀が第一。汝が才智を試みんには。地ハテ何をがなと思案の內。傍なる碁笥をおつ取つて日當は岩下の井戸の中。ざんぶと投込みいかに東吉。詞今打込んだ碁笥の器。手を濡らさず取つて得さす工夫やあるか〳〵。地と猶豫もなくオクリ庭に。おり立ち金筒樋。漲ぎる瀧の流れを直ぐに井の内へ暫時に汲取る早業は。井桁を越して水の上浮めて取つたる件の碁笥。在合ふ盤を打ちかへし。詞四つの足の眞中に。据ゑたる碁笥は信長が。首を提げこの如く。

治賓檜の其時に用意に用ふる碁盤の裏。地四つの足を四星に象り軍神の備へとし。小田を亡す血祭と盤を片手に差上げしは。下邳の土橋に石公が沓を捧げし張良も。フシかくやとばかり勇ましゝ。地したり〳〵と松永兄弟軍平も舌を巻き。かほど才智を備へし東吉。御手に入るこそ吉左右めでたし。先づ先づ一間に御入りあつて御酒宴もやと勸むれば。いかにも〳〵天晴頓智。いよ〳〵軍師に頼みの盃。詞鬼當太軍平案内せよと。令する詞に兩人がオクリ伴ひへ奥に入りにけり。

太平記忠臣講釋

五

七ツ目　喜内住家の段

〔解題〕　明和三年十月十六日から竹本座上場。作者としては正本に近松半二を始めとして竹本三郎兵衛・三好松洛・竹田文吾・竹田小出雲・筑田平七の名を列ねて居るが半二が主である。赤穗義士の復讐を仕組んだ百篇以上もある戯曲中「假名手本忠臣藏」につぐ名作といはれる。十段續きで、第一鎌倉御所刄傷、第二赤穗城中の評定、第三九太夫切腹の段、第四九太夫の妻お禮白河に兵法指南、勘平石切り、第五縫之介浮橋鳥邊山道行（劇中劇の趣向）、揚屋の段、第六四條河原おりゑ惣嫁の段、第七喜内浪宅、第八山科閑居宅兵衛上使、第九問註所天河屋義平拷問、第十討入となつて居る。

「假名手本忠臣藏」のやうに首尾一貫した作ではなくて、義士銘々傳式になつて居り、又判官切腹は八段目で

宅兵衛の平右衛門に語らせたり、討入は義平の夢にしたりするといふやうに趣向を立てゝ居るのは、忠臣藏の後に出た爲の作者の苦心の結果であらう。本曲では二段目の「蜂の巢」四段目の「石切りの勘平」八段目の「宅兵衛上使」等の各場面も知られて居るが、壓卷はこゝに收めた七段目である。

この場は紀海音の「鬼鹿毛無佐志鐙」（淨瑠璃名作集上卷所收）の第三段目片桐源吾浪宅の場の飜案であるが、非人に姿をやつした重太郎と惣嫁となつて出て居る妻のおりゑとが四條河原で互に顔を見合せて歎く條が第六段の段切となつて居て、それがこの場のおりゑの自害には大切な伏線である。

五行の稽古本も原版の丸本も同文である。おりゑの書置が眼目であるので、「書置の段」とも呼ばれる。

義士劇の系統については淨瑠璃名作集下卷の「假名手本忠臣藏」の解題御參照を乞ふ。

フシへ納戸へ連れて入る。地弓矢は家に傳へても今は仕へん君知らず。羽なき矢間重太郎羽織野袴大小も。昔に還る立派の骨柄。詞頼みませうと家來が案内。詞おりゑ誰やら見えたぞや。アイ地と何氣もなつかしい。夫の顔にはつとばかり。出て逢ひたさも面目涙フシのと。フシ胸につかへの上り口。詞何をうぢ／＼して居やる。どなたぢや是へ。ヤア重太郎か。母人先づは御健勝で。その挨拶はゆるりつと。マア／＼内へは入りや。よう戻つてたもつたの。何やかや咄す事。坊が疱瘡しての。コレ嫁。抱いて來て顔見しやいの。何をうつとりとして居やる。ム、あんまり嬉しさに氣上りがしたの。茶も汲んでおぢやいのと。フシ母の悦び。詞イヤ／＼お構ひ下されな。ヤイ關内。身も隙は取らぬ。暫くの間旅宿へ往て待つてをれ。何か差置き親人の。御機嫌いかゞと手をつけば。地喜内もにこ／＼うちほゝゑみ。詞浪人の尾羽を枯らし。旅やつれも嘸ぞあらんと思ひの外。顔色もすこやか衣服の美々しさ。變らぬ體に先づは安堵。ハツア成程。その御案じも御尤も。拙者も方々とうろたへ。此儘に朽ち果てんかと存じたに。未だ武運盡きず宜しき主取りを仕り。御覽の如く身のまはりも主人より拜領。則ち旦那の御供いたし。鎌倉へ罷り下る。折か

ら親人御病氣の様子。承つて心ならず。立ちながらちよとお暇乞ひ。イヤナウ女房。二親を預り長の月日。嘸ぞ其方も心遣ひ。過分々々と。常に變らぬ夫の顔色。何時よいのも氣持つ是の。ご病ではないかと。案じ居る。地喜内ゐざりし膝立直し。詞ムヽ奉公の口あつて。知行にあり付いたとな。ヤイ重太郎。女は二人の夫を持たず。侍は二人の主に仕ゆるを。人非人と卑しむ事。胎内を出づるより。腸にしみ込んである事わりや忘れたな。その根性とは知らず。妻子を捨て親を捨てゝ再び家に歸らぬは天晴れ侍は武士なりと心の自慢。親の病氣の見舞に來たさへ。不覺者と思ひしに。二君に仕へてその腐つた魂の。大小をひけらかしに來たか此喜内はな。貧苦には迫つても。重代の具足は質にも入れず。口

惜しや行歩自由ならば。古主の御無念を晴さんものと。子を憎んで日を送る。躄になつた大腰抜け。對面も遠慮で。そなたならば譜代同然。身の穢れた夫畜生。長居せば手討ちにすると。老の怒りの一徹も。もし我が事を知つてかと。女房が胸も一つ。ツンとはたと立て切る一間の内。思案を極め重太郎。お暇申すと立上る。コレ待つてたも。何ぼ親でも今の惡口。腹の立つは道理々々。没義道なは日頃の氣質。そなたの行付きも孝行の爲ぢやもの。おゝ言はしつても底心に何の隔う思はしやる。何事も了簡召され。イヤサ拙者も急の御用。隙取らば主人へ不忠。罷り歸ることの後は。最早お目にもかゝるまい。ハテ氣の短い。急ぎの用なら留めはせまい。がわりない無心があるわいの。そなたが他國召さつた後は。何を

活計に世を渡らうおすてもなし。道具諸式も賣拂ひ。やう〳〵嫁女の賃仕事や。乳呑子抱へて人に雇はれ。それはそれは憂き艱難して言ふ様な事ぢやない。今内殿の病氣の上に孫が疱瘡。人参と熊膽で。仕立にぶたらぬ煩ひに。常の薬のお醫者さへ石で手詰めた貧の病。萬の違ひは有合ひとやら。詞親子の中でも金銀の無心はどうやらいひにくけれどなう嫁女。詞アイ〳〵。よそ外の事ではなし。主がやとて何の所がござりませうと。言ふを打消し。ハテサテコリヤ何をいふ。最前御老人の何と聞く。親子の縁はもう切れてゐるわい。尤も路銀は貯へたれども。主人より頂戴の金子。一錢も貢ぐことならぬ。嬉しや今日といふ今日厄介を拂うて心がさつぱり。地義理もへちまも一本立ち。女房そちにも暇くれた。詞

イヤサ繇くことはない。科の仔細をいひ聞かせば。却つて身が武士が立たぬ。他人に何にも聞く事ないと。地ちりはひ付かねば母親は。顔打眺め。詞是は又きつい思ひ切り。尤も父御へ不足はあらうが。嫁に何の科がある。さう言はずと機嫌直してどうぞ今日一日逗留してたも。嫁女留みやいの。氣の付かぬと。地様子白髪の氣を汲んで。涙かた手に夫の傍。水の出端へ茶の花香。そつと差出す追從も。身をねぢ向いて皺面顔。取付く島もないじやくり フシせん方。なさに稚兒を。抱いて出ても見たばかり。愛想なければ恨めしげに。詞コレ太市。父様が戻つてぢやわいの。オ、抱かれたかろ〱。なんぼ抱かれ度うても。父様は抱きやさしやんせぬ。侍の立たぬと言はしやんすも。成程無理とは思はねど。地聞甲斐ない女

の手一つで。お宿老のお二人に御不自由な目がさしともなさ。色々さま〲に身を碎くは。詞大概お前も推量してくれたがよい。身に曇りがない言譯がしたうてもどうもならぬ。腹が立つなら堪忍して。地太市は可愛うないかいな。お前ばかり出世して子は飢ゑても構はずか。つらい貧苦を少しでも思ひやりがあるならば三つ四つの重ね着を一重は脱いで朝夕の。煙の代にとおつしやつてもさのみ惜しうもあるまいに。あんまりむごい愛想づかし。左程つれないお前でも此子が親と思へばこそ。毎晩熱の譫言にも。父様呼んでと泣くわいの。詞コレ胴慾な父御の傍へ往て。母が詫言してたもと。地押しやれば這ひおりて。父様なうと縋り付き。恩愛血筋の一聲は。名作の鋒に斬付けらるゝ如くにて。鐵石の様なる重太

郎スヱテ涙をこたへ兼ねけるが。氣を取直し突退けて。詞親の事さへ思はねば。まして悴が事何とも思はぬ。縁切つて了うたれば。薦かぶらうが飢ゑうが。此方に構はぬこと。地くどう言ふなと睨めつくる。母は興醒め。詞コリヤ重太郎。さても〱今迄は又とない孝行者と思うたが。貧しい親を見限つて。一人榮華をする氣ぢやな。エヽ見違へた道知らず。浪人すれば其様に。さもしい心になるものか。望みの通り親子でない。勝手次第に出て行きをれ。地子と思はねば恨みはないが天道の御憎しみで身の行末が思はるゝ。エヽ淺ましい人でなしと。煙管うち付け聲震はし。詞アノ畜生に構はずと。地嫁こちおぢやとばかりにて。フシ恨み泣く泣く立つて行く。地返答もせず表の方。出て行く袂を女房引きとめ。詞去られ

た夫を留めはせぬが。出て行く氣なら此子を連れて行かしやんせ。ヤア白痴者。去つたからは子でもないわい。イヤ〳〵。男の子は夫につく世間の大法。水仕奉公してなりと。お二人を養ふに此子があつては枷になる。せめて疱瘡子の介抱は親の不祥ぢやさしやんせと。地門へ突出しぴつしやりと。さすが氣強う言ひながら。戸の透間より差覗き。詞コレそれが迷惑なら。まう一度思案仕直して。立戻る氣はないか。地心強やとかつぱと伏し。聲もえ上げず忍び音の。心奥より父の聲。おりゐ〳〵と呼ぶ聲に。アイ〳〵。そこへと言ひながら。我が子に名殘り後髪せはし泣く間も姑が嫁女々に是非なくもフシ思ひ切つてぞ奥へ行く。地さしも義強き重太郎も。我が子の枷に縛られて。行きも得やらず抱締めスヱテ氣は暗闇と。なりにけり。地折からすた〳〵せきに關内。詞餘り時刻が伸びますから大鷲様小寺様粟田口まで早や御立ち。拙者も御兩人の御供。不躾ながらお先へ參ると。地言捨てゝ引返す。南無三寶おくれしと朋輩の嘲り何とせんと。顚動散亂納戸口。病ひの床を這出づる父の喜内が探り足。隔てぬ仲の内と外。太市郎が肌押しくつろげ。口に稱名手に小柄。胸を極めて眼を閉ぢ。突つ込む鋒。稚兒の只一聲に息絶ゆる。死骸と共にどうど坐しスヱテ泣く聲。一度に父喜内。重太郎出かしたとわつとスヱテばかりに噎せ返る。はつと驚き立上る。ヤレ待て暫しと戸を開き。詞古主の爲に親を捨て。現在の子を手にかくる。その丈夫な魂では敵師直を討損ずる事あらじ。オヽそれでこそ我が子なれ天晴れ忠臣フシ出かしたり。地忠義の旅の餞別せんと。懐中より金子取出し。詞コリヤ此金はな。主君御生害と聞くより。直ぐにかの地へ馳付けんと。旅の用意に貯へしが。計らず老病さし發り。空しく引つ込みありながら。地この年月の貧苦にて。たとへ飢ゑ死ぬるとも。忠義の金には手をかけまじと。女房嫁にも隠した路銀。フシ御用に立ちやれと投出せば。地重太郎飛びしさり。詞ハアヽ割符を合はす忠義は一體。拙者も爰に五十兩。この金は大星殿より配分の用金。私事には遣はれずと。母にも無情くもてなせしが。地父の心を籠められし其金子を申受け。肌身につくれば親人も。敵討の御供ぞや。詞また此金子は御老體へ。拙者が寸志の置土産。悴が追善佛果の爲。お頼み申し奉る。地扨も〳〵武士の義理程つらきものはなし。詞連判の侍小寺大鷲拙者な

んど。かの師直によしみある薬師寺が城中へ或は日傭乞食に身をやつし。鎌倉の様子聞きつくろひ。大星殿へ日毎の内通親妻子にも語らじと。地誓紙の手前母人にも。包みし段は眞平御免。大事を抱へて故郷へ歸る不覺者と最前の御意見肝に銘ぜし故。手にかけし悴は主君の追腹。未來の先陣よくしたな。追付け敵を討了せ直ぐ様切腹仕り。冥途より吉左右を申し上げう。親父様。オヽ必ず待つて居申すと。親子手に手を取組んで。思はず知らずはら〳〵とフシ嬉し涙の暇乞ひ。地障子の内にもわつと泣く。聲に悔り立退けば。詞なう重太郎。女房子にも隠す大事。母も出まいと思うたれど。おりゑが自害しやつたわいの。死顔に一目暇乞ひ。それ程の事は不忠にも。地わしやなるまいと思ひます。おむつ爰へと二人して。舁いて出でたる亡骸に。本フシ書殘したる藻塩草。地浮橋取り上げ涙ながら。詞父様母様へ申し殘したく〳〵。先立ち候は不孝に候へ共。夫の心底立聞きいたし。恨みは晴れて此身の申譯立ちがたく。これもお二方おみつぎの爲。淺ましい立君の世渡り。ヤアそんなら親父殿の介病に賤しい辻君の勤めまでしやつたかいなう。往來の人に合力を受け。肌身は汚さず候へ共。夫の疑ひを受け。是のみ迷ひの種になりたく〳〵わけて悲しきは太市郎。疱瘡もかせ口になり。悦ぶ甲斐もなき別れ。オヽ道理々々。生長ある子を殺して。なんの生きて居る心があらう〳〵オヽ〳〵可愛や〳〵。一つ今朝買うて歸り候田麩の曲物。膳棚に御座候。とゝ様の菜の物にお上げなされ下され候。一つ裾の切れし私が袷坊が餘所行に縫ひかけ置候が。心がゝりに候まゝ死骸に着せて御葬り頼み上げたく〳〵。御介抱申す人もなく。御不自由の程いかばかり悲しけれども一時も早う冥途の殿様に夫の心底申し上ぐるを樂しみに相果て候。重太郎殿へは面目なさに。何事も書殘さず候。めでたくかしくの地終まで。夫に立つる眞實の又と類ひもない貞女を。一日安堵の思ひもなう。辻君とまで身をなして朽果てさせし可愛やと。空しき死骸に抱き付きフシ前後不覺に取亂す。地喜内涙を押拭ひ。主人の爲なればこそ傾城となり非人となり。立君となる心遣ひ。斯程の忠臣重太郎を子に持つた此親父。我もちつとも悲しうない。死んでの跡のフシ名こそ惜しけれ。詞祝うて日出たう別れの盃。お婆つぎやれと取上げて。奥齒もれくる謠聲。謡げに名を惜しむ弓取は誰もかくこそ

あるべけれ。ナホス地ヤあらやさしの我門出と。思へば心に勇みあり。地たとく旅路冥途の案内は嫁と孫三途の川をが子や健氣やと。泣かぬ顔する父親の。へ天地をかけるとも。念力通つて師直急ぐらん。可愛と見やる野邊送り。フシにこ〳〵顔も此世の名殘。ハア、仰せが。首提げんは瞬く内フシ早やおさら今朝は祝ひし。神送り。門に捨てたるにや及ぶべき。詞我子の絆しを切つたばと。立上る。詞もうお往きやるか。猩々も。涙の種の笑ひ顔しをれ。勇んれば。心の鐵石十倍増し。主君の敵のやがて日出たう吉左右々々々。地そので三重へ出でて行く其上に。妻の敵。子の敵。一時に討つ吉左右とはいとし子が。命を捨てに行

傾城阿波鳴門

六

八ツ目　順禮歌の段

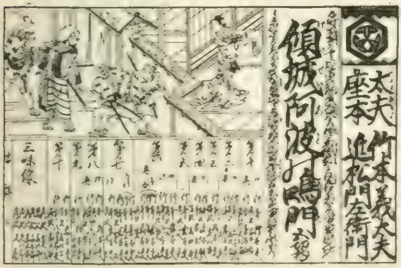
〔解題〕　明和五年六月一日から竹本座興行。作者は近松半二・八民平七・寺田兵藏・竹田文吉・竹本三郎兵衛。近松の「夕霧阿波鳴渡」を飜案して、姫路の城主榊原政岑が吉原の遊女高尾(世にいふ榊原高尾)を身請した事件(寛保元年落着)を取合せて、阿波の徳島の玉木家のお家騒動として脚色したものである。その大筋は次のやうである。玉木家の若殿衛門之助が吉原の傾城高尾に溺れてゐるに乘じて惡臣小野田郡兵衛は蛇河の團八を手先として家老櫻井主膳の預る主家の重寶國次の刀を竊取して、その科で主膳を斥けて主家横領を企てる。主膳の舊臣十郎兵衛は、その妻お弓と共に刀の詮議のために心ならずも盜賊の仲間に入つて、銀十郎と變名して大

阪玉造に住む。一方に於て京室町の藤屋伊左衛門も主膳に恩義ある身故、若殿の放蕩の身代りに立たうとする、併し伊左衛門は吉田屋の夕霧に馴染み、その身受金才覺に窮して居る。十郎兵衛がその調達をする。尤もその金は伊左衛門が許嫁の大阪今橋筋絳屋の娘お辻に送つた五百兩の結納金を十郎兵衛夫婦が共謀でかたり取つたのであつた。尚又伊左衛門は武太六といふ無頼漢から借りた五十兩の督促を受けて窮地に陥つて居るを救はうとして十郎兵衛は苦心して居る矢先、順禮の女の子が金を持つて居ると知つて我が家へ伴ひ歸つて金を奪はうとしたはづみで思はずも殺した。それは國に殘した娘のおつるで自分の留守に尋ねて來たが母が名のらずに別れたのだとお弓から話されて、二人は悲歎にくれた。(この條がこゝに收めた一段)その後十郎兵衛は高尾の助を借りて郡兵衛から國次の刀を奪ひ返して歸參を許され、伊左衛門はお辻を本妻、夕霧を妾に目出たく大團圓。

十郎兵衛のモデルは、阿波板野郡別宮浦の庄屋で他國からの積入米を横領した科で元祿十一年處刑された者であるといふが、どうであらうか。それは兎に角、本曲に仕組まれたおつる殺しは「茜染野中隱井」(元文三)の長吉殺しの趣向を思はせるのみでなく、近松の歌舞伎狂言の傑作「傾城壬生大念佛」(元祿十五年)の中卷で高遠民彌の家來彥六が主君の急を救ふ金がほしさに禿を殺して、あとでそれが自分の娘と知れて妻と共に歎き悲しむ場面によく似て居る。又お弓とおつるの邂逅の場面は重の井の子別れにも似通つて居る。いづれにしても親子の情愛がよく描かれて居ると思ふ。後にこの一段だけが屢々繰返されるのは當然である。

地よしあしを。フシ何と浪花の町はづれ。玉造に身を隱す阿波の十郎兵衛本名隱し。銀十郎と表は浪人内證は。人はそれとも白波の。本フシ夜のかせぎの道ならぬ。フシ身の行く末ぞ是非もなき。ハルフシ人の名を。神と呼ばるゝ其神は。京の吉田の神帳に入つた神かや入らぬのか。やぼとも見えぬ惡ずいほう。とつぱかふの フシ武太六が。地蚤とり眼に暖簾押上げ。詞銀十郎内にか用があつて逢ひに來たと。地いふ聲聞いて女房立出で。詞ヲ、武太六樣ようお出で。

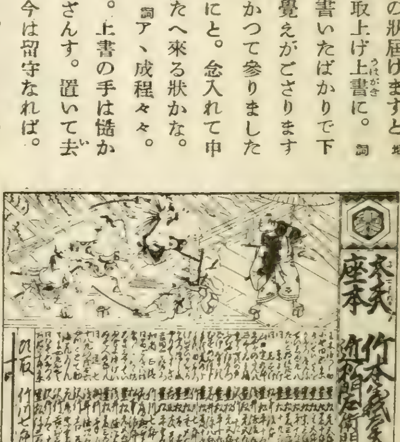
久しう逢はぬがまあ御無事で。イヤコレお内儀。逢はぬの無事なのと地を打つたせりふぢやない。ならず者の伊左衞門に貸した金。爰の銀十郎が請合うて今日中に濟ます筈。それで其金受取に來たのぢや。きり〱逢はして下されと。地聲も辰巳の上り口。尻まくりして フシ高あぐら。詞ヲヽそのやうに聲高に言はずと靜かに物を言はしやんせ。こちの人は夜が更けたので今晝寢して居られます。何ぢや晝寢ぢや。夜が更けたとは。エヽ聞えた。夜通しのてこつりかい。よい機嫌ぢやな。てこつる金があるなら貸した金戻していけと。地いふに女房が不審顏。詞アノ魚釣に行くに金か入るかえ。ヤそりや何いふのぢや。テモお前てこつる金が有るなら戻していけと言はしやんすぢやないかいな。わしや又沙魚釣るやうにしらさ海老で釣るかと思へば。金で釣るてことい ふ魚はどんな魚でござんすぞ。エヽするはうの噂に似合はぬきつい太郎四郎ぢや。金を餌にする魚があつてたまる物か。コレてこつるといふはの。れこさの事ぢやわいの此方も粋方の女房なら。ちつとてんしよでも覺えさうな物ぢやがなア。今の世界に青二引かぬ者と。お染久松語らぬ者は疫病を受取るといの。こんな事いふ間はない。銀十郎〱起きて來んかい怖い事は何もない。高が借錢乞に來たのぢや。起きさ起しに行くぞよと。地わめくを宥める女房も持て扱うて フシ見えにける。詞エヽあたやかましうぬかすので。あつたら夢を醒しをつたと。地欠伸まじくら立出づる。銀十郎が寢ほれ聲。詞コリヤ銀十郎。わりやマア夢どころぢやあるまいがな。今日中に戻さうと約束の通り受取りに來たのぢや。サア今渡せ受取らう。いやと言や此證文で直に代官所へお願ひ申すが。わりや出所へは出られぬ身分ぢや有らうがなと。地病づかすは疫病の神と名の付く フシ奇特なり。詞ハテやかましい日暮迄は今日の中大方工面も出來て



「傾城阿波の

ある。是から直に先へ行て才覺して來る程に。大儀ながら晩方來いと 地聞いてはさすが强うもえ言はず。詞ハテ晩方迄なりや待つてやろ。其代りに暮六つをごんと打つと直に受取りに來る程に。其時に成つてからならぬなどと。ねだ切りはつた所で三どつぱ打たれたやうに。がつくりさすのぢやないかよ。今度違へば直に代官。サア呑込んでゐる。も一度行たら慥に工面の出來る金。汝もいぬなら連れだとかいと。地言ひつゝ出づる袂をひかへ。詞その樣に慥に言うて何ぞ當の有る事か。又間違へば氣の毒な。地まあ二三日も言延て。詞イヤならぬ二三日の事は扨置き半時も待つ事ならぬ。サア／＼來いとせり立つる。地武太六伴ひ十郎兵衛フシ我が家を出でて行く跡へ。地引違うて息せきと飛脚と見えて草鞋がけ。

内を覗いて 詞申しこの狀居けますと 地投出す一通。地女房取上げ上書に。詞銀十郎殿へ急用と 地書いたばかりで下の名は。詞内儀樣。覺えがござりますか。私も人傳に事づかつて參りましたれど。必ず先へ直々にと。念入れて申されましたが。内かたへ來る狀かな。地と念を入るれば。詞アヽ成程々々。下の名はなけれども。上書の手は慥かにこちに見知りがござんす。置いて去んで下さんせ。夫も今は留守なれば。歸られ次第見せませう。マアはいつて煙草でも。アヽイエ／＼。まだ外へ居ける狀。急用なればもうお暇。お返事あれば跡からと。いひ捨て出づる町飛脚オクリもと來し。へ道へ立歸る。地フシ跡打眺め女房が。心がかりと封押切り。讀む度毎に驚く胸。詞ヤアコリヤコレ夫銀十郎殿をはじめ。仲間の衆へも吟味



鳴戸初番附「

がかゝり。詮議嚴しくなつたる故。捕へられし者もあり。最早遁れず立退けとの知らせの狀。スリヤ夫十郎兵衛殿の身の上も。今日一日に迫つた難儀。昨日長町裏で危い所をやう／＼遁れ。ヤレ嬉しやと思ふ間もなく。今また此狀の文體では。中々かうして居られぬ

所。我とても女房の身。殊に衒の同類なれば。罪科のがれぬ夫婦が命。今更懸く氣はなけれど。地一合取つても侍の家に生れた十郎兵衛殿。盗賊衒となり果てしも國次の刀詮議の爲。重い忠義に輕い命。捨てるは覺悟といひながら。詞肝心のその刀。有所も知れぬその内に。若しこの事が顯れては。是まで盡せし夫の忠義。皆無駄ごととなるのみか。死んだ跡まで盗賊に。名を穢すのがエヽ口惜しい。地盗み衒も身慾にせぬ。女夫が誠を天道も憐みあつて國次の。刀の詮議濟むまでの。夫の命助けてたべと。心の内に神佛フシ誓ひは。重き觀世音。順禮歌補陀落や。岸打つ波は。三熊野の。那智のお山に。響く瀧津瀬。地年はやう／＼とを／＼の。小ナクリ道を。かけたる笈摺に。同行二人と記せしは。一人は大悲のかげ頼む。唄故郷をはる／＼。こゝに紀三井寺。花の都も。近くなるらん。詞順禮に御報謝。地フシといふもやさしき國訛り。地テモしをらしい順禮衆。詞ドレドレ。報謝進ぜうと。地盆に精米の志。詞アイ／＼有難うござりますと。地いふ物腰から褄はづれ。可愛らしい娘の子。定めて連衆は親御達。國はいづくと尋ねられ。詞アイ。國は阿波の徳島でござります。ムヽ何ぢや徳島。さつてもそれはマア懷しい。わしが生れも阿波の徳島。そして父樣や母樣と。一所に順禮さんすのか。イエ／＼。その父樣や母樣に逢ひたさ故。それでわし一人。西國するのでござります。地と聞いてどうやら氣にかゝる。お弓は猶も傍に寄り。詞ムヽ父樣や母樣に逢ひたさに西國するとは。どうした譯ぢやそれが聞きたい。マアその親達の名は何といふぞいの。アイ。どうした譯ぢや知らぬが。三つの年に。父樣や母樣もわしを祖母樣に預けて。どこへやら往かしやんしたげな。それでわたしは。祖母樣の世話になつて居たけれど。どうぞ父樣や母樣に逢ひたい。顏が見たい。それで方々と。尋ねて歩くのでござります。父樣の名は阿波の十郎兵衛。母樣はお弓と申しますと。地聞いて恟りお弓は取付き。詞コレ／＼／＼。アノ父樣は十郎兵衛。母樣はお弓。三つの年別れて。祖母樣に育てられて居たとは。地疑ひもない我が娘と。見れば見る程稚顏。見覺えのある額の黒子。ヤレ我が子かなつかしやと言はんとせしが。イヤフシ待て暫し。地夫婦は今も捕らるゝ命。元より覺悟の身なれども。親子と言はゞこの子に迄。どんな憂目がかゝらうや。それを思へばな

ま中に。名乗立てして憂目を見んより。名乗らで此儘歸すのが。却つてこの子が爲ならんと。心を鎭め。フシよそ〳〵しく。詞オ、それはマア〳〵。年端も行かぬにはる〴〵の所を。よう尋ねに出さしやつたなう。その親達が聞いてなら。さぞ嬉しうて嬉しうて。飛立つ樣にあらうが。儘ならぬが世の憂きふし。身にも命にも代へて。可愛子を振捨て。國を立退く親御の心。マよく〳〵の事であらう程に。むごい親と必ず〳〵。恨まぬがよいぞや。イエ〳〵勿體ない。何の恨みませう。恨むる事はないけれど。小さい時別れたれば。父樣や母樣の顏も覺えず。餘所の子供衆が。母樣に髮結うて貰うたり。地夜は抱かれて寢やしやんすを見ると。詞わしも母樣があるなら。あの樣に髮結うて。地貰はうものと羨しうござんす。詞どうぞ早う尋ねて逢ひたい。ひよつと逢はれまいかと思へば。地それが悲しうござんすと。泣いじやくりするいぢらしさ。母は心も消え入る思ひ。扨も〳〵世の中に親となり子と生るゝ程。深い縁はなけれども。詞親が死んだり子が先立つたり。思ふ樣にならぬが浮世。こなたもどれ程尋ねても。顏も所も知らぬ親達。逢はれぬ時は詮ない事。もう尋ねずと。國へ行んだがよいわいの。イエ〳〵戀しい父樣や母樣。たとへ何時までかゝつてなと。尋ねうと思ふけれど。悲しい事は一人旅ぢやて。どこの宿でも泊めてはくれず。野に寢たり。山に寢たり。人の軒の下に寢ては叩かれたり。怖い事や悲しい事。父樣や母樣と一所に居たりや。こんな目には逢ふまいものを。どこにどうして居やしやんすぞ。逢ひたい事ぢや。逢ひ度いと。地わつと泣出す娘より。見る母親はたまり兼ね。オ、道理ぢや。可愛やいぢらしやと。我を忘れて。抱き付き フシ前後。正體歎きしが。地是程親を慕ふ子を。何とこの儘去なされう。いつそ打明け名乗らうか。イヤ〳〵それでは此子も同じ罪。其時の悲しさを。思ひ廻せば去なすが爲と。詞オ、段々の樣子を聞き。我が身の樣に思はれて。悲しいとも情ないとも。いふに言はれぬ事ながら。兎角命が物種。健でさへ居りや。又逢はれまいものでもない。コレ仕付けぬ旅に身を痛め。煩ひでも出りや惡い。どこを先途に尋ねうより。其祖母樣の方へ去んで居るとの。追付け父樣や母樣が逢ひに往てぢや程に。惡い事はいはぬ。思ひ直してこれから直ぐに國へ去んで。隨分健で親達の。尋ねて行かしやるを。待つて居

るのがよいぞやと。地宥め賺すを聞分けて。詞アイ／＼忝なうござります。お前が其様にいうて。泣いて下さりますに依つて。どうやら母様の様に思はれて。わしや爰が去にとむない。どんな事なと致しませう程に。申しお家様。お前のお傍にいつ迄も。私を置いて下さりませ。エヽ悲しい事をいひ出して。又泣かすのかいの。先にからわしも子の様に思うて。爰に置きたい。去なしとむないと様々思ひ廻せども。爰に置いてはどうも爲にならぬ事があるに依つて。それで無情なう去なすのぢや程に。聞分けて去んだがよいぞやと。地いひつゝ内へ針箱の底を探して豆板の。まめなを悦ぶ餞別と。フシ紙に包んで持つて出で。詞コレ何ぼ一人旅でも。たんと錢さへやりや泊める。僅なれども志。此銀を路銀にして。早う國へ去にや。必ず／＼煩うてばしたもんなと。地銀を渡せば押戻し。詞嬉しうございんすれど。銀は小判といふ物を。たんと持つて居ります。そんなりやもう參じます。忝うござりますと。地泣く／＼立つを引きとゞめ。詞それはとうでも是はわしが志と。地無理に持たして フシ塵打拂ひ。詞コレもう去にやるか。名殘が惜しい。別れとむない。コレま一度顔をと。地引寄せて。見れは見る程胸せまり。離れ。難なき憂き思ひそれと。知らねど誠の血筋。名殘をしげに振返り何所をどうして尋ねたら。父様や母様に。逢はれる事ぞ逢はしてたべ。詞南無大悲の觀音様。唄父母の惠みも深き粉川寺。佛の誓ひ頼もしきかな。地泣く／＼。別れ。行く跡を。見送り／＼伸上り。詞コレ娘ま一度こちら向いてたも／＼いなう。地折角長の海山越え艱難して。あこがれ尋ぬるいとし子に。不思議と逢ひは逢ひながら。名乘らで去なす母が氣はどの様にあらうと思ふ。狂氣半分半分は死んで居るわいの。まだ長生のある子をば親故路頭に立たすかと其儘そこに。どうと伏し フシ消入るばかり歎きしが。地起直つて涙を押さへ。詞イヤ／＼。どう思ひ諦めても。今別れては又逢ふ事はならぬ身の上。たとへ難儀がかゝらばかゝれ。又その時は夫の思案。程は行くまい追付いて。連れて戻らうさうぢや。地さうぢやと子に迷ふ。道は親子の別れ道跡を。慕うて。三重尋ね行く。フシ既に其日も。地入相の銀の工面も引違ひ。我が家へ戻る十郎兵衛が フシ順禮の子の手を引いて。詞女房ども。戻つたぞと。地内へ這入つて見廻し／＼。詞コリヤ日暮まぎれに火も

燈さす。どこへ往た。地とつぶやき〳〵行燈ともし煙草盆。提げてどつさりフシ高胡座。詞コレそこな子。爰へおちや。今戻る道筋を。ソレ乞食どもが寄集り。わが身を剥いで銀取らうとぬかして居るを聞いた故。それでおれが連れて戻つたが。わが身や銀でも持つて居るか。アイ餘所の小母様に貰うて持つて居ますする。ム、何がそんな事を。悪者どもが頑張つて。オ、危ない事〳〵。そして其銀はどれ程ある。ドレ小父に見しや。アイ是程ござんすと。地フシ貰うた銀を差出せば。詞ム、コリヤ小玉が五十匁ばかり。モウ外に銀はないか。イエまだ小判といふ物がたんとござんす。何ぢや小判がたんとある、アノ小判が。テモマアそれはよい物を持つて居やるの。コレ此あたりは用心が悪いに依つて。其様に銀持つて居ると。今の様に人に取られてしまふ。ドレ小父が預つてやらう。爰へ出しやと。地武太六に約束の足しにもなろかと心の工面。敬しかくれど合點せず。詞イエ〳〵この小判の財布には。大事の物が包んである程に。人に見せなと祖母様が言はしやんしたに依つて。誰にもやる事なりませんと。地大事にする程猶見たく。嚇して見んと目を瞋らし。詞其様に隠すと爲にならぬぞよ。痛い目せぬ内。ちやつと小父に預けて置きや。それでも大事の銀ぢやもの。サア大事の銀ぢやによつて。持つて居ると爲にならぬ。片意地いはずと預けて置



「おつるころし」

きやと、地いふ程怖がる子供心、こんな所に居ることいやと。逃出づる首筋引摑めば。詞アレ怖い／＼と泣出す。コリヤ喧ましい。喧ましい。近所へ聞える。聲が高いと地口へ手を當て。詞コレ怖い事はない。有様はわしも。ちつと銀の入ることがあつての。何ぼほどあるか知らねども。二三日預けてたもや。其内には又拵へて戻さう程に。まあそれ迄はこちの内に。ゆるりつと逗留しや。又觀音様へも小父が連れて參る。ヨよい子ぢや。聞分けてサアちやつと貸してたもと。地兩手放せばがつくりと。フシそこへ其儘倒るゝ娘。詞コリヤ／＼何とした何とした。どうしたと。地言へども更に物言はず。息も通はぬ即死の有様。詞ヤ南無三寶。コリヤ／＼目がまうたか。コリヤ順禮の娘やいと。地呼生け／＼口おし明け。詞こりや氣付けも水もモウ叶はぬ。ホイ。地はつとばかりに俄の敗亡。詞エ、聲立てさせじと口へ手を當てたが。思はず息を止め。それで死んだか。ハア、コリヤマア不便と。地ばかり呆れ。フシ果てたる折からに。地表へ聞ゆる足音は。女房ならんと蒲團で死骸つゝみ傳ひを息せきと フシ戻るお弓が。詞オ、こちの人戻つてか。サア／＼ちやつと往て尋ねて／＼と。せき切る女房。ヤイ白痴者。跡先もいはず尋ねてとは。何を尋ねて。サアお前の留守へ國に殘した娘のお鶴が。不思議と爰へ來たわいの。ヤ何ぢや娘が來たとは。そりや様者人と一所にか。どうして來たぞ。イエ／＼。お鶴一人でござんする。様子を言へば長い事。不思議に娘と知つた故。飛付く様に思うたれどな。悲しい事はお前もわしも。お尋ねの身分なれば。今も知れぬ身の罪科を。何にも知らぬ娘に迄。共に難儀をかけうかと。わざと親子の名乗りもせず。氣強う言うて此内を。去なしごとは去なしたが。跡で思へば思ふ程。どうも捨てゝ置かれぬ故。直ぐに跡から尋ねに往たれど。影も形も知れぬ故。お前と手分けして尋ねうと思うて戻つた。サアちやつと往て尋ねてと。地聞くや聞かずに。詞ヤイ白痴め。どんた事があるとて。おれにも知らさず追ひ去なすとは。鬼でもそんな胴慾な事はせぬわい。イヤ斯ういうては居られぬと。地駈出でしが。詞コリヤ／＼。そして幾つばかりで。どんな着物着てゐるぞ。知れた事年は九つ。中形の振袖に。笈摺かけて。何ぢやアノ笈摺かけて。アイ。笈摺も二親のある子ぢやに依つて。兩方は茜染。アノ茜染に中形。アイ。ホイ。地はつと肝に

焼鐵刺さるゝ心地。詞エ、コレ隙が入る程心が濟まぬ。お前は跡からわしや先へと。地言捨て駈出すお弓をとゞめ。詞コリヤモウ尋ねずとよしにせい。娘は疾うから戻つて居る。エ、戻つてゐるとは。そりやどこに。ソレそこの蒲團の内に。よう寢入つて居るわいと。地いふに不審も立つ縞の。蒲團を明けて顔見るより。詞オ、ほんに娘ぢや。オ、嬉しや〳〵。お前もこんな事なら疾うからさうと言うたがよい。人に息急い揉まして。地エ、嗜ましやんせと。恨みながらもフシ氣はいそ〳〵。詞何とまあ見やしやんしたか。大きう成らうがな。そしてマア滅相な。いかに草臥れて居ればとて。からげも下さず。笈摺もかけたなり。ドレ〳〵。帶解いてゆつくりと。久しぶりで母が添乳と。地笈摺はづし帶とく〳〵。見れば手足も冷えわたり。息も通はぬ娘の死骸。詞ヤアコレコリヤ娘は死んで居る。どうして死んだどうしてと。地餘りの事に涙も出ず立つたり居たり夫の傍。詞アノ娘はド、、どうして死んだ。お前樣子知つてぢやあらう。サア言うて聞かして〳〵と。地氣も取上す有樣を。見るに皮肉も離るゝせつなさ。詞ホ、道理ぢや尤もぢや。樣子と言うたら因果づく。さつきに内へ戻る道。其娘が銀を持つて居るを。非人どもがよう知つて。取るの剝ぐのと聞いた故。可愛さうにと連れて戻り。樣子を聞けば銀もある故。少々なりとも武太六に返す工面。二三日貸してくれと。譯を言へども子供の事。聲山立てゝ泣きわめく。近所の聞えが氣の毒さに。つい口を押さへたが。息が詰つてソレ其樣に死んで仕舞うた。エ、いぢらしい事をしたと。餘所の樣に思うたが。それが娘であつたとは。物の報いか因縁事。コリヤ。地こらへてくれよ女房と。聞く程身も世もあられぬ悲しさ。詞そんならお前が殺さしやんしたか。ハアテモ扨ても是非もなや。地情なやと。母は死骸を抱き上げ。詞コレ娘。是程むごい親々を。よう尋ねて來てたもつたの。一人旅で泊人はなし。野に寐たり山に寢たり。怖い事や悲しい事も。父樣や母樣に逢ひたさ故と言やつた時は。悲しうて〳〵。身ふしも胸も碎けるやうにあつたれど。そこをじつと辛抱して親とも言はず去なしたのは。わが身が可愛さばつかり。其時留めて置いたらば。斯ういふ事はあるまいに。去なした故のこの間違ひ。それから發つた事なれば。殺さりやつたもわしが業。コレ堪忍してたもや堪忍してたもや。地

年はも往かではる〳〵の道を厭はず苦勞して。親を尋ねる孝行娘。親は。それに引替へてむごう無情う追つ返し。まだ其上に親の手で殺すといふはマア何事ぞ。別れに言やつた順禮歌。父母の惠みも深き粉川寺。どこに是が惠みが深い。こんなむごい親々が廣い唐にも天竺にもも一人とあるものかと。死骸の顔に我が顔を。押當て〳〵。抱きしめ フシ泣涕。こがれ伏沈む。地銀十郎も後悔のスヱテ涙五臓を絞りしが。地言うて返らぬ事ながら。銀のある事得知らずば斯ういふ事はあるまいもの。銀が敵と死骸の懐。探して財布取出し。中改むれば金三兩。詞コリヤコレ僅かな金。いかい事もある樣に。思ひ違ひがやつぱり因果と。地言ひつゝ引出す財布の内。詞十郎兵衛殿夫婦の衆へ。ム、コレ。書いたは正しく母の筆と。地封押切つて讀む フシ文體。詞わざ〳〵認め送りまゐらせ候。國を立退かれし其日より。案じ暮すは互に親子の愛著にて。浮世の中の習ひなれば。くどう筆には記さず候。第一に申したきは。何時ぞや申越されし國次の刀。郡兵衛に心をつけて密かに手筋を求め。詮議致し候所。即ち郡兵衛盗取り。サテコソナ。所持いたし候段。慥かに聞出し候故。早速詮議と思ひ候へ共。女の身でなま中の事を仕出し。却て妨げになつてはと差扣へ。其元の有家を尋ね詮議させんと。孫のお鶴諸共に。旅の用意致し候内。遁れぬ無常の風に誘はれ。力及ばず身まかり候故書殘し申候。ヤスリヤ母人は。お果てなされたかいな。ム、此一通届き次第早々國へ立歸り。國次の刀を取戻し。立身出世を草葉の蔭より。くれ〴〵も待ちまゐらせ候。スリヤあの郡兵衛めか所爲で。エ、母人の御最期 地殘念至極と言ひながら。有難きは刀の有所。是と申すも母の御恩。ハア、忝なし嬉しやと。歎きの中の悦びを。聞いてお弓も顔を上げ。詞お袋樣の御最期一日の介抱も。せずに別るゝ不孝な嫁。せめて形見の其お文。わしにも讀ませて下さんせと。地一通取つて涙ながら。詞外に申す事はなく候へ共。孤児となりし孫が事。是のみ黄泉の障りに候。神佛の恵みにて恙なう。其元に若しも尋ね逢うたらば。隨分々々大事に育て給はるべく候。それは〳〵器用者にて。物もよう書き琴も弾く。第一に縫物が手利にて。縮緬緞子の衣裳まで。手際よう仕立て候やう。教へ置きまゐらせ候。是ばかりは婆が自慢に候まゝ。對面の後縫はせ御覧なされ。夫婦ながら賞めてやつて給はるべく候。オ、祖

母様の冥加ない。常々から虫持にて桑山がよう利きゆ故。たんと持たせ置きゆまゝ。もし虫でも發つたならば。此子の年の數程御呑ましなさるべくゆ。くどうも/\大切に。育て頼み上げまゐらすべく。地是程大事に祖母様の。育て上げて下さんしたもの。思へば/\胴慾な惜しや悲しや。フシいぢらしやと又も正體なかりけり。詞ヤアいつ迄言うても盡きせぬ歎き。刀の有所知れる上は。かの地へ下り詮議せんと。地勇む折から表の方。俄に騒ぐ人聲足音。十郎兵衛きつと心付き。コリヤ/\女房。詞あの物音は必定捕手に違ひない。何百人取巻くとも。刀を我が手に入れん内は。切つて/\切抜けると。地娘の死骸を引抱へ。泣入る女房を引立て/\オクリ一間の。へ内へ入りにける。地程なく來る捕手の大勢。詞ヤア/\盗賊の銀十郎本名は阿波の十郎兵衛。此所に隱れ住むよし。武太六が訴人に依つて召捕りに向うたり。尋常に繩かゝれと。地聲々いへど音せぬは。風を喰らうて逃げ伸びたか。家内殘らず打ちこぼて。人數は半分裏道へ廻れ/\といふ下家。天井障子佛檀戸棚。粉もなく碎く壁下地隙間も洩らさぬ大勢の。捕手相手に十郎兵衛が大童に働くを。われ組止めんと追つ取巻き。差付ける松明の火花を散らして。三重へ挑みしが。地十郎兵衛一人に切捲られ。フシ皆蛛蜘の子のちり/\に。地逃行く隙間に女房が。詞此間にちやつと十郎兵衛殿。オ、合點と地駈出でしが。立留まつてこりや女房。詞娘が死骸は何とした。ソリヤ氣遣ひござんせぬ。コレ。地此通りと死骸の上。落ちる戸障子積みかさね。松明の火を差付けて。人手に渡さぬ火葬の營み。南無阿彌陀佛と合はす手も別れ。三重へ別れて立出づる。

七

艶容女舞衣

下の巻

酒屋の段

〔解題〕 安永元年十二月廿六日から豐竹座興行。作者は竹本三郎兵衛・豐竹應律・八民平七・元祿八年十一月

六日の夜、大阪長町四丁目の美濃屋平左衛門の養女おさん事藝名三勝（湯女とも、女舞ともいふ）と大和五條新町の赤根屋半七とが大阪の下難波村の千日墓所南側の石垣の下で情死した。町中の評判となつたので、大阪の岩井半四郎座では早速これを仕組んで翌年の正月二日から「茜の色揚」の外題で、美濃屋平左衛門に岩井半四郎、みのや三勝に花井あづま、赤根屋半七に杉山勘左衛門、おつうに岡本松之助といふ役割で演じて大當りを取つて、百五十日間興行を續けたといふ。これによつて三勝半七の心中はいよ／＼名高くなり、京都の都音頭としても謠はれ（寶永元年刊行の落葉集所載蔦山四郎兵衛作三勝心中）、また「三勝心中」と題した歌祭文としても流行した。

かやうな傳統と人氣とを有つ二人の情死の廿五回忌を當込んで始めて淨瑠璃に作つたのが紀海音の「笠屋三勝廿五年忌」である。本曲の著作上演年代に關しては、情死後十五年目の寶永六年八月であるとするもの（外題年鑑）、享保元年とするもの（南水漫遊）などがあるけれども、廿五年正當とすれば享保四年となるわけで、疑問の餘地があるやうに思はれる。本曲では美濃屋三勝を寛永頃に名高かつた女舞の座元笠屋三勝に附會して、二人の情死の原因は、三勝の伯父平左衛門に四貫五百目の金を貸した今市の善右衛門が、その金のかたに三勝を奪はうとするが、勘當の身の上の半七はこれに對抗し得ないが爲であるとし、又半七は國許におすがといふ貞節な女房があり、おつうは伯父の許で三勝の母と共に養はれて居るといふ風に仕組まれて居る。

この改作として出たのが「浮名茜染五十年忌」と角書をつけた春草堂の作「女舞劔紅楓」（延享二年十月）である。本曲では笠屋三勝をまた元の美濃屋三勝とし、その兄に勝次郎といふ放蕩のために勘當された男があつて、それが後に半七の罪を引受ける役廻りに立ち、又半七の父を半兵衛とし、半七の許嫁の妻お園は既に三年越し半七の實家に引取られて居るが、半七はお通まで儲けた三勝とのみ深く契つて居る。そして半七は廓の意地で誤つて惡手代長九郎を殺して、遂に三勝と共に情死するといふ風に仕組まれて居る。この筋立を受けて更に新工夫をこらしたのが「艶容女舞衣」で、お園の父宗岸を點出した事、お通の守袋から遺書が出て、それ

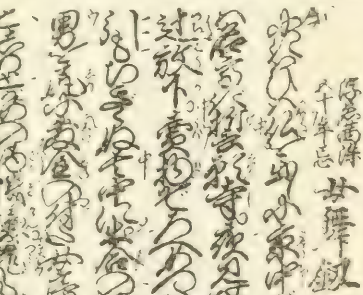
を讀む一同が悲歎にくれる事、餘所ながら最後の暇乞に來た二人が死なずに助かるやうになる事などが特に變つた趣向で、それがこゝに收めた下卷の酒屋の段として仕組まれて、全篇の山となつて居るのである。

へこそは入相の。フシ鐘に散行く花よりも。あたら盛りを獨寝の。お園を連れて父親が世間構はぬ十徳に。丸い頭の光さへ。オクリ子故に。フシくらむ黄昏時。地主の妻は灯をともし表をしめにいそ／＼と。出會ひがしらに。詞ホホ是は／＼宗岸樣。そちらに居やるはお園ぢやないか。アイ母樣。お變りもござりませぬか。地といふ挨拶もどこやらに瘕持つ足の踏みどさへ。低き敷居も越えかぬる。宗岸は遠慮なく。詞半兵衞殿お宿にか。地と娘を連れて打通れば。妻は門の戸引立てゝサア／＼先づお上り。なされませと フシ奥底もなき詞の内。地それと聞くより半兵衞が。一間を出づるしぶ／＼顔。詞娘を連れ去なれたからは。こちの内に用はない筈。何の爲にござつた事。地と針持つ詞に妻は氣の毒。詞アヽこれいの親父殿ホ、ホ、ホ、、、。イヤモ人樣に追從いはぬ偏屈なこちの人。必ずお氣に障られて下さりますな。此間は。嫁女の歸つて居られまして。いかいお世話でござりませう。何の／＼。半兵衞殿の立腹は皆尤も。三勝とやらに心奪はれ。夜泊り日泊りして。女房を嫌ふ半七。所詮末の詰らぬ事と。無理に引つ立て去んだのは。娘に引けを取らすまい爲おれが氣迷ひ。それから思案するに付け。唐も倭も。一旦嫁にやつた娘。嫌はれうがどうせうが。男の方から追出す迄。取戻すといふ理窟はない筈。コリヤ宗岸が一生の仕損ひ。と悔んでも跡の祭。園めも晝夜泣き悲しみ。朝夕も進まねば。もしや病が發らうかと。見て居る親の心は闇。おれも天滿に年古う住んで居れば。人に理窟もいふ者なれど。誤りは詫びねばならぬと。年寄の面おし拭うて來ました。何かの事は了簡して。今迄の通り。嫁ぢやと思うて下され。コレ頼みます御夫婦。地とあやまり入つたる挨拶に。お園もうぢ／＼。フシ手をつかへ。地父樣の一徹で。無理に連れられ歸りしが。一旦殿御と極つた半七樣。嫌はれるは皆わたしが不調法。鈍に生れた此身の科。詞今から隨分。お氣に入る樣に致しませう程に。やつぱり元の嫁娘と。地お

つしやつて下さりませお二人様とスエテ跡は詞も。涙なり。詞オ、何のマアそつちさへ其心なら。こつちは變らぬ嫁舅。ナウ親父殿。さうぢやないか。イヤさうぢやない。昔唐にも例がある。太公望とやらいふ人の妻。夫に暇取り月日を經て詫言に來りし時。鉢の水を大地に明けさせ。其水を鉢へ入れよ。元の如く夫婦にならんと。太公望がいはれたと。いつぞや講釋で聞いて來た。それと丁度同じ事。こなたの方から無理暇取つて。今更嫁と思へとは。モ何時まで言うても返らぬ事。詞たゝかすと。早う連れて去なつしやれ。ニ、其なつしやれと。地にべも。しやくりも納戸口。フシ顔を背けて。居たりける。詞オ、その腹立ちは尤も〳〵。が重々不調法は。この天窓に免じ了簡して。どうぞ嫁に。脈でござる。悴めは勘當

したれば。嫁といふべき者もない筈。サアそれも懲しめの爲當座の勘當。イヤ當座でない。七生までの勘當。ム、其また七生まで勘當した半七が代りに。こなたは何で縄をかゝつた。ヤア。ナア半七とは。親でも子でもないこなたが。今日代官所で。何の爲に縛られて戻らしやつた。ひも寄らぬ宗岸が。詞に悔り驚く女房。嫁も共々立寄つて。肌押し脱せば半兵衛が。小手を弛めし羽交締。ナウ情な

や何故と。嫁はうろ〳〵女房も取付き歎けば宗岸が。詞イヤまだ驚く事がおる。聟の半七は人殺し。お尋ね者になつたわいの。地と聞くより二人は丈伸



「女舞劔紅楓」の巻頭

地と思り。それは何故どうした譯。様子を聞かしてコレ〳〵半兵衛殿。と問へども更に返答は。フシ差俯向いて詞なし。地宗岸涙の目をしばたゝき。一昨日の

晩山の口で。善右衛門を殺したは。茜屋の半七と噂を聞いた時は。驚くまいか悔りせまいか。膝も腰も抜果てしが。思へば／＼不孝者。よい時に勘當さしやつて。親に難儀のかゝらぬは。まだ此上の幸福。と思うたは他人の了簡。逢うたこなたの縛り繩。科極まつた半七が命。一日なりと延ばしたいと。人殺しの科を身に引受け。繩かゝつたこなたの心は。眞實心に子を思ふ親の誠と。知れば知る程。宗岸が仕損ひ。地半七が身の難儀。こなたも勘當して了ひ。おれも娘を取戻したら。親にかゝる首綱もなく。よいことしたと世間から。賞める人もあらうが。親と成り。舅となるが。大抵深い縁かいなう。詞斯ういふ時宜になつた時は。賞められるより笑はれるが親の慈悲。片時も早うと連れて來た心はの。一旦嫁におこしたれば。半七が厭がるなら。ハテ尼にしてなと此内で。御夫婦の亡跡の。香花なりとも取らして下され。コレ手を合はして頼みます。詫言が叶はねば。引放されたと突詰めて。短慮な心も出しをろかと。案じ過して夜の目も合はず。母親はなしたつた一人。あいつを思ふおれが因果。こなたの繩目も半七が。科人になつたら猶可愛かろ。たとへ又勘當が定でも。久離切つたが誠でも。眞實親子の肉縁は。切るに切られぬ血筋の親。おれもこなた程はなけれども娘は可愛い。まして勘當はせぬ娘。愚痴なと人が笑はうがおりや可愛い。不便にござるが。コレ／＼聞入れてたべ半兵衛殿。地と是まで泣かぬ宗岸が。堪へに堪へし溜々を。たくしかけたる叫び泣き。我強う生れし半兵衛も。舅の心根思ひやり。オ、道理ぢや／＼宗岸殿と。跡は詞もないじやくり。妻もお園も一時に。四人が涙洪水に フシ樋の口あけし如くなり。地半兵衛涙の内よりも。持病の爲に咳入つて。お園が顔を打守り。詞何から何迄氣をつけて。孝行にしてたもる。こんな嫁が尋ねたとて。も一人とあるものぢやない。世間の人の嫁鑑。半七が事は思はぬが。そなたに別るゝ半兵衛は。よく／＼不仕合せ。去なせとむない。歸しとむないとは思へども、こつちに置けば此儘若後家。おりやそれが可愛い。いとしうおぢやる。それで詫言聞入れぬ。了簡して呼戻さぬ。コレ嫁女。必ず惨いと恨んでばしたもんなや。一人の悴はお尋ね者。明日より誰を力にせうぞ。孝行にしてたもつたが。今では結句。地恨めしいと咳上げ。咳入る舅の脊。擦るお園も。正體なく伏し フシ沈むこ

そ道理なり。地半兵衛やう／＼顔を上げ。詞言はねばならぬ事もあれど。孝行な嫁女の手前。胸につまつて言ひにくい。宗岸殿。奥の間で言明かさん。コレお園。そなたをさら／＼嫌ふぢやない。氣に懸けてたもるなや。舅殿へ話す內。暫く爰に。地と三人はしを／＼奥へ泣きに行く。フシ心の內ぞ哀れなり。地フシ跡には。園が憂き思ひ。か〻れとてしも烏羽玉の 長地世のあぢきなさ身一つに結ぼれ解けぬ片糸の。繰返したる獨り言。詞今頃は半七さん。どこに如何してござらうぞ。地今更返らぬ事ながら。わしといふ者ないならば。舅御樣もお通に免じ子までなしたる三勝殿を。疾くにも呼入れさしやんしたら。半七樣の身持も直り。御勘當もあるまいに。思へば／＼この園が。上去年の秋の煩ひに。いつそカン死ん

で了うたら。斯うした難儀は出來まいもの。お氣に入らぬと知りながら。未練な私が輪廻ゆゑ。添臥は叶はずともお傍に居たいと辛抱して。是まで居たのがお身の仇。今の思ひに比らぶれば。一年前にこの園が死ぬる心がエヽ付かなんだ。堪へてたべ半七様わしや。この様に思うて居ると恨み カンつらみは露程も。上夫を思ふ眞實心なほ。いや増る フシ憂き思ひ。詞明日は疾うから父様に。又連れられて天滿へ去に。半七様のひよつとした。はかない便りを聞くならば。思ひ死に死ぬであろ。とても浮世は立たぬ覺悟。嫌はれても夫の內。此家で死ねば後の世の。もしや契りの綱にもと。地最期を急ぐ心根は餘所の見る目も フシいぢらし〻。地フシか〻る哀れも知らぬ子の。泣聲に目や覺しけん。一間を出でて。詞乳もう乳がもみ

たい。小母々々。詞とお園が膝に寄添ふ子の。顔見て悄り抱き寄せ。詞ヤアそなたは美濃屋のお通ぢやないか。爰へはどうしておぢやつた。地ノシと不思議ながらも抱上ぐれば。地半兵衛宗岸母親も。一間の内を轉び出で。詞オヽコレ／＼嫁女。忝いその心。障子の内で聞く度に。拜んでばつかり居たわいの。禮いふ事もたんとあれど。心の急くは此子の事。美濃屋のお通と言はしやつたは。半七と三勝の。アイお二人の中に出來た。お通といふは此子ぢやわいな。ヤア／＼親父殿聞かしやつたか。オヽ聞いて居る。その又お通を。ナヽヽ何で捨子にしてこちへおこした。こりや譯があらう。懷かどこぞに書いた物でもないか。早う尋ねて見や地といふ内に。わくせき明ける守袋。內よりばらりと落ちたる一通。取

る間おそしと フシ封押し切り。詞ヤア何ぢや書置の事と書いてある。ヤア〱コレ〱嫁女。こなたのよい日でちやつと讀みや〱。アイ〱。ナニ〱。十度契りて親子となる父の御恩は山よりも高きとの世の教へ。我が身にも弁へ居り候へども。その御恩も得送らず。儘ならぬ義理にからまれて。心にもあらぬ不孝の罪。御赦し下されたく候。わけて母様の御養育。申し。お前の事でござります。ようお聞きなされませえ。オヽよう聞いて居ますわいの。唄聞いてゐるさの障子より洩れ。出づる月は冴ゆれど胸の闇。詞エヽ時も時と隣の稽古。そして其跡は何と書いてあるぞ。アイ。母様の御養育。海より深き御惠み。親父様の御機嫌惡しい時には。陰になり日向になり。幾千万のお心遣ひも。泡と消え行く我が身の難儀。人を殺せし身と成り候へば。思ひ設けぬ御別れ。エヽそんならやつぱり半七様は。オイナウ嫁女。善右衛門を殺しましたわいなう。ハア。あの善右衛門といふやつが。大抵や大かた惡い奴ぢやないわいの。あんな惡者でも喧嘩兩成敗。我が子の命を解死人にとらるゝと。思へば〱宗岸殿。口惜しいわいの〱。地無念にござると述懐涙。見聞くお園は以前の剃刀。南無阿彌陀佛と覺悟の躰。是はと驚く母宗岸。叶はぬ手にも半兵衛は。やう〱押へてコレ嫁女。詞年寄ばかりを跡に置き。死なうとは胴慾ぢやわい〱。エヽ是が死なずに居られませうか。放して殺して下さんせ。オヽ娘尤もぢや〱〱わい。ア老少不定の世の中と。聞流したも今身の上。水々とした若い者。義理に逼つて死ぬるとは。ナウ半兵衛殿。宗岸殿。思ひ廻せば廻す程。チエヽ口惜しいわいの口惜しいわいの。唄鴛鴦の片羽のとぼ〱と。子に。迷ひ行く小夜千鳥。ナホス地無慚やな半七は。今宵限りの命ぞと。三勝伴ひしを〱と。心にかゝる我が子の顏。名殘にせめて今一目と。フシ共に戸口に夜の鶴。地内にはそれと白髮の母。心ならねど書置を。又取上げて讀む文章。詞人を殺し一日も生き永らへる所存はなく候へども。お通と申す娘一人御座候て。殊にかよわき生れつき。不便さ餘る親心。それに心が惹かされて。今日まで永らへ候へども。所詮助からぬ身に候へば。思召しも顧みず。お通を遣はし候まゝ。私の小さく成りしと思召され。〱。ドレ〱婆見しやいの〱。エヽ私の小さく成りしと思召され。御養育の御世話の程。くれ〱

頼み上げ候。子を持つて親の御恩を知ると。お通が不便さいちらしさに。お二人様の御恩の程。猶更この身に泌みこたへ。有難く存じ奉り候。又々心がかりは親父様の御勘當。相果て候跡にても。お赦し下され候様。母様宜しう御取成し。これのみ黄泉の障りに御座候。〳〵。オ、道理ぢや〳〵〳〵。地可愛やと泣く聲洩るゝ表には半七が身にこたへ。かゝる歎きもわれゆゑと思へば今更そら恐しく。身を悔んだる男泣き。袖や袂を噛みしめ〳〵。フシ泣音とゞむる憂思ひ。地こなたはお園が猶涙。泣く〳〵取上げ書置の。讀むもはかなき世の中に。詞女は其家にあつて。定まる夫一人を頼みに思ふものに候處。其頼みに思ふ我等が身持。いつしか愛想らしい詞もかけず。終に一度の添臥もなく候へども。その色目も致さずして。夫大事。親達大事と。辛抱に辛抱なされ候段。山々嬉しく存じ〳〵。今迄すげなう致せし事も。さら〳〵嫌ふではなく候へども。三勝とは。そもじの見えぬ先からの馴染にて。子まで儲けし中に候へば。互に退き去りもなりがたく。それ故疎遠に打過ぎ〳〵。しかし夫婦は二世と申す事も候へば。未來は必ず夫婦にて〳〵候。オ、コリヤ誠か半七様。ほんまの事でござんすかいな。コリヤヤイ娘。未來は夫婦と書いてあるかいやい。アイナア。未來は夫婦と書いてござんすわいな。オ、それはマア。いつちよい事が書いてあるの。未來は未來ぢやが。一日なりと此世で女夫にしてやりたい〳〵。何としてマア此半七は。善右衞門を殺しましたぞ。ドレ〳〵娘。もちつとぢや。ドレおれが讀みませう。イエ〳〵私に讀まして下さんせ。ハテ扨て誰が讀んでも同じ事ぢや。イエ〳〵私が讀みますわいな。是は又片意地な、こつちへおこせ。イエ〳〵どうぞ讀まして下さんせ。ア、コリヤヤイコリヤ。其様に引張つたら。エ、モ破れるがな。兎角不孝の我等に候へども。死後には嘸やお二人や。宗岸様の御歎き。隨分々々力を付け。此身に代つて御孝行になされ給はるべく候。申し殘したき事どもは數々に候へども。涙に字性も見え難く。あら〳〵惜しき筆止め申し候。只々お通が事のみ頼み上げ候。此上は。亡からぬ跡のお念佛。南無阿彌陀佛〳〵。地と讀みも終らず宗岸親子。また伏沈めば半兵衛夫婦。お通を中に抱き上げ。詞初孫の顔が見たいと。心に思へど世間の義理で。是まで逢ひも見もせなんだ。斯ういふ事と知つたらば。顔見ぬ内が

増しであつた。愛らし盛りの此お通。半七と一所に暮すなら。よい樂しみであらうもの。コレ婆見やいの。アレ何にも知らず。手打やあばゞばつかり。オイノ。こりや孫よ。モウ父も母もない程に。此婆と一所に寢いよ。とは言ふものゝ乳もなく。嘸や歎かん親々が。知らずに居るが胴慾者。地むごい心いぢらしやと。いふ聲洩るゝ三勝が。思はず乳房を握りしめ。詞乳は爰にあるものを。飲ましてやりたい顔見たい〳〵。乳が地張るわいなうと身を震はせ。駈入らんも閾の戸に。空音もならず羽拔鳥。親は外面に血の涙。子はやすかたの安からぬ。悲しさ迫る内と外。一度にわつと湧出づる涙浪花江泉川小きんをフシ波出す如くなり。地半七は齒を喰ひしめ。かばかり深き御情是非もなや勿體なや。不孝を赦させ給はれと。悔み歎けば三勝も皆我故の御事と共にわび入る中に半七。詞いつまで泣いても返らぬ繰言。親父樣の御繩目。早うほどくは身の最期。イザ〳〵急がんサアおちや地と。立上りしが今生の。別れにせめて御顔をと差覗けば三勝も。お通を一目と伸上り。見れども親子隔ての閾。何と千萬無量の思ひ。兩手を合せ伏拜み。おさらば。おさらばといふ聲も。歎きに埋む我が家の内見返り。見返り死に行く。フシ身の成る果てぞ哀れなり。地半兵衛はつと心付き。詞この書置の文体では。今宵最期と極めし半七。宗岸殿も手分けして。行方を尋ねんサア早う。地〳〵〳〵と身繕ひ。フシ立出でんとする所に。地思ひがけなく表より。詞ヤア〳〵傍々。善右衛門を殺した科人。茜屋半七。召捕つたりと呼ばはつて。地庄九郎に繩をかけ。立出づる宮城十内。詞半七が殺せし今市の善右衛門は。國元にて用金を盗みし盗賊。召捕りに來りし所。一昨夜半七に殺されし由。即ち善右衛門が同類たる庄九郎を召捕り。彼が白狀にて。半七親子に科なしと。地立寄つて半兵衛が繩目ほどけば四人が悦び。フシ夢ではないかと伏拜み。詞コレ〳〵〳〵親父殿。十内樣のお情で。半七が命も助かるといなう。地どうぞ命のある内に。留めて下され半兵衛殿と。あせるを聞いて十内が。詞ナニ半七は死に出たとや。エ、遲かりし殘念々々。役目なれば心に任せず。夜明けぬ内に早やお行きやれと地十内が。花も實もある櫻井の。掟やはらぐ國の名も。大和五條のあかね染め。今色揚げし艶容。その三勝が言の葉を。爰に。寫してとゞめけれ。

傾城戀飛脚

新口村段

八

〔解題〕安永二年十二月廿三日から曾根崎新地の豐竹此吉座初演。作者は菅専助・若竹笛躬。本曲の系統及びその梗概については、近松名作集下卷の「冥途の飛脚」の解題御參照を乞ふ。

こゝに收めた新口村は本曲の下卷であつて、近松の原作とほゞ同じ筋立により、文に多少の改修が施されて居るに過ぎない。梅川忠兵衛の戲曲中最も知られてゐる一段である。筋をいへば、原本ではこのあとで、梅川と忠兵衛とは尋常に名のつて出て繩にかゝり、こゝへ尋ねて來た梅川の兄の忠兵衛は、雪中で大立廻りの擧句、龜屋妙閑の判を盜んで金子をかたつた丹波屋八右衛門と龜屋利平とを捕へて代官に引渡すといふので終つて居る。

詞 節季候(せきぞろ)だい〳〵。だい〳〵は節季候。つこどに言はれ。詞 コリヤひどい。いおうへの塵。地 掃出(はきだ)す表へ。詞 てい古(ふる)
お目出たいは節季候。通らしやれ〳〵かさま貰ふ節季候より。内の樣子はせ手買紙屑(てかひかみくづ)。お内儀樣(ないぎさま)。紙屑はないかな。
親方衆(おやかたしゆ)と違うてこちとらは水呑百姓(みづのみひやくしやう)。く候と。地 逝(い)ぬれば女房は糸ぐるま。オヽいやな人ぢやわいの。京や大阪と
こなた衆(しゆ)にやる米はないわいのと。地 正月までは休みまそと納戸(なんど)へ。取込み 違うて在所(ざいしよ)に紙屑はない物ぢや。勝手

知らぬ人ぢやさうな。町方へ出て買はつしやれ。地阿呆な人と笑はれて。つぶやきながら見廻し〳〵　フシ歸る程なく同行二人。順禮歌補陀落や岸打つ波は三熊野の那智の。ナホス地お山の詮議とは。人目にそれと白木綿。笈摺　フシかけた順禮姿。詞お鼻樣火を一つ借さつしやりませ。爰は何といふ所かな。爰は大和の新口村。煙草の火は出しませぬ。手の内も法度でござんす。ア、慳貪な在所だなと。地家内をきよろ〳〵ねめ廻し次の　フシ村へと出でて行く。詞ほんに今日程うさんらしい者のたんと來る日はない。納戸へ這入りもなるまい。ドリヤ夕飯の拵へと　地竈の前に差しかゝる。　フシ落人の。爲かや今は冬枯れて。薄尾花はなけれども。世を忍ぶ身の跡や先。長地人目をつゝむ頬冠り隱せど色香梅川が。馴れぬ旅路を忠兵衛が。勞はる身さへ雪風に。凍える手先懐に。暖められつ暖めつ。石原道を足びきの。大和はこゝぞ故郷の。フシ新口村に着きけるが。詞コレ。爰はわしが生れ在所。四五丁行けば實の親。孫右衛門殿の所なれど。不通といひ繼母なり。殊に今の身の上を。お目にかけるは大きな不孝。この藁葺は忠三郎というて。親達の家來も同然。地フシマア〳〵こゝへと門の口。詞忠三殿内にか。ア、久しう逢ひませぬと。地つつと這入れば女房は。詞アノこちのは今庄屋殿へ。どつからござんして何の用。わしや藪際の治郎兵衛後家の仲人で。近い頃こゝへ來た故。前方の近附きは知りませぬが。若し大阪の衆ぢやないか。こちの親方孫右衛門樣の息子殿。大阪へ養子に行て。傾城とやらいふ物をたんと貰うて。人の金を盗み。其けいせんを手に提げて走つたとやら滑つたとやらで。代官所からきつい詮議。孫右衛門樣は久離切つて。お上の構ひはなけれど。血を分けた親子なれば。ア、いとしや年寄つてきつい案じ。こちの人も馴染故。若しこの邊りうろたへて。見付けられはさつしやれぬかと。モいかい氣苦勞。庄屋殿から呼びには來る。ヤア寄合ひぢや。ソりや印判ぢやと。節季師走に爰らあたりはけいせん事で煮返る。ア、うたての傾城やと。地知らねば遠慮も　フシなかりけり。地二人ははつと胸に釘。打ち點頭いて成程々々。詞大阪でも共評判。わしらは女夫連で年籠の參宮。なつかしさに寄りましたが。立ちながら逢うて往にたい。大阪者といはずに。ちよつと呼んで來て下されぬか。オ、それは易い事。一返り往て來ませう。が

京のお寺が鉾田村の道場へお下り。先から直ぐに参られたも知れまい。それではよつ程わしが戻りも遅い。コレ女中様。飯が仕掛けてある程に。出來損なはぬやうに。差しくべて下んせや。地と襷はづして フシ出でて行く。地跡は門口はたと締め。掛金かけて フシうつとりと暫し。詞もなかりしが。詞コレ忠兵衛様。ほんに爰は劍の中。斯うして居ても大事ないかえ。ア丶いや〳〵。男氣な忠三郎。頼んで今夜は此處に泊り。死ぬるとも古郷の土。産みの母の墓所。一所に埋まれそなたにも。地嫁姑と引合せ。未來の對面さしたいと。スエカヽリおろ〳〵涙梅川も。それは嬉しうござんせう。さりながら。わしが父様。母様は。京の六條珠數屋町。定めてこの間詮議にあうて居さんせう。母様は眩暈持もしもの事はあるまいかと。我が身の上より案じられ。今一度京の兩親に。一日逢うて死に度うござんす。詞オ丶道理ぢや〳〵。わしもそなたの親達に。聟ぢやというて逢ひもしたし。恩のある養子親。妙閑様や許婚の。おすはへも不埒の詫び。そなたの兄忠兵衛殿の。志も無にした斷り。地今一度しみ〳〵逢ひたいと。スエテ人目なければ。ないじやくり。地わたしもたんと恩のある兄様が猶戀しいと。互に手を取り抱き合ひ。涙の霰はら〳〵と。フシ袖に餘りて窓を冑つ。詞ハア雪が降るさうなと。地フシ奥の一間は。西受けの。反古障子を細目に開け。見やる野風の畠道。後しぶきの吹雪には。傾げて急ぐ。阿彌陀傘。道場參りぞ。續きける。詞アレ〳〵。ありや皆在所の知つた衆。先なは樋の口の水右衛門。マひどい呑人ぢやぞい。其次は荷持瘤の傳が婆。コリヤ又村一番の茶飲みぢや。ア丶ソレそこへ來る置頭巾は。大貧乏であつたが。年貢に詰つて娘を京の嶋原へ賣り。マよい客に請出され。金持の奥様になつて。聟の蔭で田も五丁。藏も二ケ所の俄分限。ア丶同じ女郎を請出しても。わしはそなたの親達に憂目をかけるが口惜しい。エ丶愚痴な。モウ〳〵そんな事いうて下さんすな。アノ親仁は。弦かけの藤治兵衛。八十八で一升の飯を殘さぬ達者もの。今年はムン丁度錢百ぢや。其跡に仔細らしい坊主は。鍼立の道庵。あいつが鍼で母ぢや人を立て殺した。思へば〳〵親の敵。ア丶コレもうよいわいな。今腹立てゝ。何の役に立たぬ事。オ丶ア丶アレ〳〵。あそこへ見えるが親父様。此世の別れお暇乞ひ。せめて餘所ながらお顔なりとも拜まうと。遙々と

爰まで來た念願が叶うたか。エヽ有難い〳〵。エヽ。〳〵。あの綟子の肩衣が。孫右衞門樣かいな。アほんに親子は爭はれぬ。目元なら。鼻筋なら。地お前によう似た事わいな。詞サア。それ程よう似た親と子が。地詞さへも得交さぬは。何とした身の因果。アヽお年も寄り。足元も弱つた。是が今生のお暇乞ひでござりますと。地手を合はすれば梅川は。今が。お顏の見初めの見納め。詞私は嫁でござんする。地夫婦は今をも知れぬ命。百年の御壽命すぎて後。未來で孝行致しましよと。口の内にて獨言。夫婦諸共。手を合せ フシとかう。涙に咽び居る。地孫右衞門は老足の。休み〳〵 フシ門を過ぎ。地野口の溝の薄氷。滑ろをとまる高足駄。鼻緒は切れて横樣にどうと轉べば南無三と。忠兵衞もがけど出られぬ身。梅川周章て走り出で抱き起しつ裾絞り。詞申し〳〵〳〵。どこも痛みは致しませぬかえ。お年寄の危ないこと。オヽマ危ない事。お足も洗ひ。鼻緒もすげて上げませう。マア〳〵こちへ。地と手を引いて。フシ内へ伴ひ上り口。フシ腰膝撫でて勞はれば。地孫右衞門は氣の毒さ。詞アヽ戴きます〳〵。どなたか知らぬが忝ない。お蔭で怪我も致しませなんだ。アヽ若い女中のお優しい。年寄と思召して。嫁子もならぬ御介抱。モウ〳〵手を洗はしやつて下さりませ。ハテマア手を洗はしやつて下さりませ。ヤ幸ひ庭に藁は澤山。鼻緒はわしがすげますと。地懷さがして取出す塵紙。詞アヽ申し爰によい紙がござんす。紙捻ひねつて。地上げましよと延紙引きさく其手元。不思議さうに打守り。詞こゝらあたりに見馴れぬ女中。マアこな樣は。どなたなればこの樣に。懇にして下さりますど。ホフシ顏つれ〳〵と眺むれば。地梅川いとゞ胸つぼらしく。詞ハイ。わたしはイヤ旅の者。私が男の親仁樣。丁度お前の年配で。恰好も生寫し外の人にする奉公とは。モさら〳〵もつて存じませぬ。お年寄つた男御の。地臥し惱みの抱きかゝへ。孝行は嫁の役。御用に立つて嬉しいもの。詞嘸ぞ連合ひは飛立つサア。飛立つ樣にござりましよ。が其紙と。地この紙とかへて私が申し請け。連合ひの肌に付けさせて。父御に似た親仁樣の形見にさせたうござんすと。塵紙袖に押包む。フシ涙にそれとは知られけり。地詞の端に孫右衞門。扨はさうかと思愛の。詞盡きぬ涙を押隱し。詞ムンこなたの男に此親仁が。似たというての孝行か。エヽ嬉しうござる。が腹が立ち

ますわい。わしも年たけた悴めを。様子あつて久離切り。大阪へ養子にやつたが。傾城といふ魔がさして。人の金を盗んだとやら。揚句に所を走つた噂。此大和は生國なれば。十七軒の飛脚屋仲間。お上からも隠し目附。或は巡禮古手買ひ。節季候にまで身をやつし。この在所はモウ／＼詮議最中。それも誰故なれば。ソ、、其傾城の嫁御故。モ近頃愚痴な事なれど。地世の譬にもいふ通り。盗みする子は憎うなうて。縄かける人が恨めしいとはサこの事。詞久離切つた親子なれば。よからうが悪からうが。構はぬ事とは思へども。大阪へ養子に往て。利發で器用で身をもつて。身代もよう仕上げた。地あの様な子を勘當した。親は大きな白痴者と。指差しられ笑はれたら。エ、マ、マ、其嬉しさはどうあらう。詞今にもつい探し出され。縄かゝつて引かるゝ時。ア、孫右衛門は目水晶よう勘當した。出かしたと。譽められるのがおりや悲しい。譽められるのが俺や。悲しうござるわいの。ア、それを思へば一日も。地早う往生お救ひと。拝み願ふは今参る如來様御開山コレ。マ佛に嘘がつかれうかと。どうと平伏し悶え泣き。梅川も聲を上げ。忠兵衛は障子より手先を出し伏拝み。スヱテ身を揉み歎くぞ。道理なる。地猶も涙を押拭ひ。詞様子聞いたか聞かぬか知らぬが。子を釣出さうとお上の計ひ。養ひ親の妙閑殿。一昨日牢へ入れられたげなわい。エ、サ、、、それでつく／＼思ふには。實の親を便りにして。若しも忍んで來はせまいか。來たらば何ぼう不便でも。養子親への義理あれば。かくまふことは扠て置いて。親が縄かけ出さねばならぬ。ア、どうぞ來てくれねばよいが。要ら邊りを舞ひ／＼。舞ひ付きはせまいかと。四年この方逢ひもせず。懐かしい子の顔を。見ぬ顔に／＼と。雑行ながら神たゝきもノコレ。不便さからでござるわいの／＼。ア、とは言ふものゝ。若死するも人の一生。義理ある親を牢へ入れ。おめ／＼と逃隠れば。末世末代不孝の悪名。所詮逃れぬ命なら。一日なりと妙閑殿を。早う牢から出すのが孝行。ササ、、、。覺悟極めて名乗つて出い。ア、今ぢやない／＼。今の事ではないわいやい。シタガ。それも親の目にかゝらぬ所で。縄かゝつてくれ。ヨヱ、現在血を分けた子に。早う死ねと教へるも。浮世の義理か。地フシ是非もなや。地なぜ前かたに内證で。斯う／＼した傾城に斯うした譯で金が入ると。便宜でも仕をつ

たら。久離切つても親子ぢやもの。隠居の田地を賣立てゝも首縄はかけまいに。皆あいつが心から。共身もせまい苦をしをつて。いとしぼなげに嫁御に迄。思ひも寄らぬ憂目を見せ。知音近附親にまで隠れる様に身を持ちなし。ろくな死もせぬ様に此親は産付けぬ。エ、憎い奴ぢや／＼と思へども可愛ゆござると。泣沈み フシ分けたる。血筋ぞ。哀れなる。地涙の際に巾着より。金一包み取出し。詞是は京の御本寺様へ。上げうと思うた金なれど。嫁と思うてやるではない。只今のお禮の爲。是を路銀にちつとなと。遠い所へ往て下されと。地渡せば梅川押戴き。詞お心附いた此お金。逆様ながら戴きます。地大阪を立退いても。私が姿目に立てば。借駕籠に日を送り。奈良の旅籠や三輪の茶屋。五日三日夜を明し。廿日

餘りに四十兩。遣ひ果して二歩残る。金ゆゑ大事の忠兵衛様。科人にしたも私から無ぞ。憎からうお腹も立たうが。因果づくと諦めて。お赦しなされて下さりませ。親子は一世の縁とやら。此世の別れにたつた一目。逢うて進ぜて下さんせと。奥の障子を明けるを引止め。詞ア、コレやくたいもない／＼／＼。たつた今も言ふ通り。たとへ詞はかはさいでも。顔見合はしたりや縄かけるか。俺が口から訴人せにや。養親への義理が立たぬ。何ぼ義理が立てたいとて。親の手づからどう縄が掛けられうどう縄がかけられうぞいの。オヽ御尤もで御座ります／＼。そんなら顔を見ぬやうにと。地傍に有合ふ手拭取り。泣く／＼後に立廻り。慮外ながらと。フシめんない千鳥。詞御不自由にはあらうが。斯うさへすれば。傍

にござつても構ひはあるまい。オヽ。オ忝うござる／＼。物言はずと。顔見ずと。手先へなと觸つたら。それが本望逢うた心。親子一世の暇乞ひ。ガコレ。必ずこなたの連合ひに。物言はして下さるなと。地悦ぶ中に忠兵衛は嬉しさ餘り駈出でて。親子手に手を取交せど。互に親とも我が子とも言はずいはれぬ世の義理は。涙湧出る。水上とフシ身も浮く。ばかり泣き喞つ。地折から聞ゆる多くの人音。二人を奥へと突きやり／＼。詞コレ女中。アノ物音は確に捕手。この裏道の小川を渡り。藪を抜ければ御所街道。サ、、、早う／＼と地フシ氣を揉む所へ。地順禮姿の八右衛門利平も共に蚤取眼。役人大勢打ち連れだち。詞此内がきぶさいなと地どか／＼／＼と込入る所へ。組子一人かけ來り。詞所は長谷の山つゞきに

梅川忠兵衛と名乗る者。休み居つたを　二人も共に　フシ飛んで行く。地孫右衛　切株で足つくな　地と届かぬ鑿も子を思ふ。平沙の善知鳥血の涙。長き親子の
追取り卷き。搦め捕らんと致せども。門は飛立つ嬉しさ。天の助けか忝いと。
中々手に合ひ申さずと。地聞くより小　裏道見やつて伸上り。詞オヽさうぢや　別れには。カンやすかたならで安き氣
頭拔てこそ〳〵。來れ續けと引返せば　〳〵其道ぢや。ソレ。其藪を潜るなら。も涙。涙の　三重へ浮世なり

戀娘昔八丈

九　鈴が森の段

〔解題〕　安永四年九月廿五日から江戸の薩摩外記座初演。作者は松貫四・吉田角丸。江戸新材木町二丁目の材木商白子屋庄三郎の養子又四郎の妻お熊が手代忠八と姦通して又四郎を殺さうとしたが未遂に終つたのを、大岡越前守の裁斷の結果、享保十二年二月廿五日にお熊は鈴が森で死罪に處せられた事件を材題として脚色したもの。

家運の傾いた城木屋では、金のために一人娘のお駒に喜藏といふ聟を取らねばならぬ破目に陷つた。然るにお駒は堤結新三と戀仲であつたが、才三はもと侍で、家寶の茶入詮議のために身をやつして居るのである。而してその茶入が喜藏の手にあるを知つたので、結婚を利用してお駒にその取戻しを頼む。處が一方に於て兼てお駒に横戀慕の番頭丈八は、目的貫徹のために喜藏の毒殺を勸めたので、お駒は才三と添はうが爲に夫を毒殺す

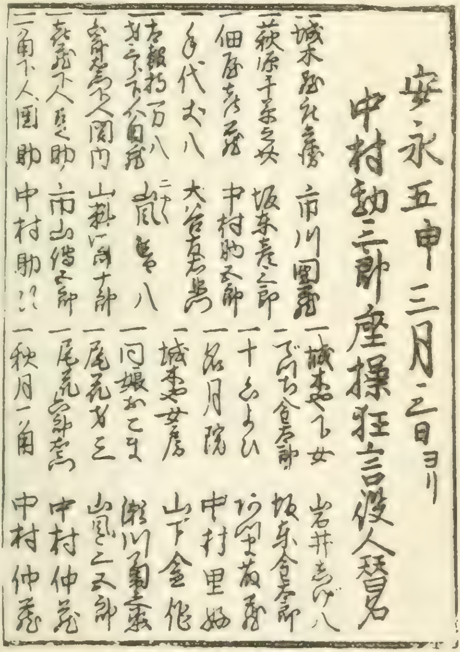
る。そして萬事は鈴が森の段に於て解決するといふ筋。美しいお駒が刑場へ引かわる時、黄八丈を着て居たのに因んで外題名をつけたのである。曲輪の段、道行夢路の二つの雁、尾敷の段、祭の段、城木屋の段、評議の段、鈴が森の段より成り、その中城木屋の段と鈴が森の段とが名高い。

この時才三の人形は吉田冠三、お駒は吉田清五郎で、城木屋の段の「ソリャ聞えませぬ」の條の豐竹筆太夫のクドキが大好評で、諸人が口眞似をして、お駒の淨るりは大流行であつた。「闇の夜にお駒とお駒行き當り」の川柳はこの情況をよんだのだといふ。

歌舞伎では翌安永五年三月三日から中村座で興行され、爾來江戸の歌舞伎に於ても大いに行はれ、書替も出來、また豐後節の淨るりにも多くの作曲を見るに至つた。

二重へ急ぎ行く。地人の身の。フシ捨て所とや名にふりし。鈴ケ森の所刑場所。青竹にて矢來を構へ。邊りにきらめく抜身の鑓。けばれの役人馳せ違ひ。科人今やと待ちかけしは。この世からなる地獄の責め忌はしくも亦。恐しゝ。地哀れ見に寄る諸見物。あそこや爰に立集り。詞何とこの科人もモウ來さうなものぢや。おれは牢屋を引出すと直ぐに通り町へ駈抜け。それから河岸へ廻つて以上オ、四度見た。が扨て美しい娘ぢやわい。あれをころつとやると言ふはあつたらものぢやないかいの。イヤ〳〵。何ぼ顔が美しうても心は鬼ぢや。丙午ぢやあるまいし。男を殺すといふ事が。どこの國にかあるものぢやない。オイ〳〵〳〵。さう一途にはしやんな。女が男を殺すとは。モよく〳〵堪忍のならぬ譯。ありや間男おつとどつこいしよ。ヤ間女房事であらうも知れぬと。地噂とり〳〵口々に。あんまり待つて寒なつた。鮫洲の茶屋で一杯せう。サア〳〵ござれと打連れて オクリ 皆々。かしこへ フシ走り行く。地子を思ふ闇より闇に目も分ず。タヽキ只さへ暗き父親の。手を引く妻も諸共に涙に見えぬ道筋を。現ともなく走るとも。夢路を歩む。心地して漸う。かしこへ辿り著き。地見れば嚴しき竹垣に。さも恐しき抜身の鑓。あれで我が子を

殺すかと。思へば氣も消え心消え。スヱテわつとばかりに泣出す。詞コレ嬶。爰があう鈴ヶ森か。今の其方の泣聲は。モウお駒は殺されたか。コレ／＼早う聞かして下されと。地フシ問へば女房が涙聲。詞イエ／＼まだ娘は來やせぬけれど。きびしい構へを見るにつけ。可愛い娘を殺すかと。地思へば胸も張裂く苦しみ。わたしは身も世もあられぬと歎けばいとゞ父親は。詞オヽ道理ぢや／＼はやい。今朝も門を引かれると聞いた時。駈出でて逢ひ度う思うたれど。近所の衆に留められて。内で泣いてばつかり居たわいの。今日が親子一世の別れ。せめて最後の暇乞ひ。又一つには娘めが。言ひたい事もあるならば。聞いて迷ひが晴してやりたさ。地詞其お主の爲とはいひながら。花の様な子を殺す。おれが心を推量しや。ヤおりやまだ以前のお主へは忠義とも思ふが。そなたは嘸ぞや悲しうて。この庄兵衛が惜からう。堪忍してたも。コレ。女房ども。地日頃念じ奉る。お宗旨の彌陀如來。只一心一向に頼みをかける身には。この世から助かるとの。誓ひは嘘か僞りか。詞こんな事知つたら。あらゆる神や佛様御信心申したら。ちつとは利生もあらうもの。地外の佛へ願かけたら。雜行ぢやと思召し。娘を救うて下さるまいと。如來様ばつかり念じて居たのが。今で



「戀娘昔八丈」役人替名

は悔しい。未來は奈落へ落ちるとも。娘が命助けてたべ。詞南無如來樣。南無如來殿。エ、如來め。サ、、、斯ういふがお腹が立たば。どうぞ娘が助かるやう。地お慈悲ぢや願ひ上げますと。愚に返つたる親心。母は猶更正體なく。才三殿が盜まれし茶入とやらが出るならば。助かる筋もあらうかとそればつかりを樂しみに。今日よ翌日よと待つ甲斐も情ない今日の今。死ぬる娘が心の内思ひやつていぢらしい。病煩ひで死んでさへ子を先立てし親の身は。悲しうてならぬもの。説經蝶よ花よと撫でし子を。科人にして殺すとはモよく〳〵前世の因果かと。狂氣の如く身を悶え。夫婦手に手を取りかはし。絶え入り消え入る憂き涙餘所の。見る目も フシ哀れなり。地折もさわ〳〵諸見物。そりや科人がもう爰へ。そりや〳〵來るわと フシ立騷ぐ。地跡を追ひ〳〵下女男。詞ヤア旦那樣。お内儀樣。歎きはお道理さりながら。お怪我があつては猶大事。地マア〳〵お出でと手を引いて暫くへ片方に フシ介抱す。地思ふ事。叶はねばこそ憂き事の。戀と義理との諸手綱。二上り不便やお駒は夫の爲。かゝる憂き身のしばり繩。首にかけたる水晶の。珠數の數さへ消えて行く。説經屠所の羊の歩みより。はかなき身ぞと觀念し力なく〳〵。ナホスフシ引かれ來る。地代官堤彌藤治お駒に向ひ。詞最前屋敷にて役人中より申し渡されし如く。仔細ありとはいひながら。假にも夫を殺したる科は遁れず。重き刑にも行はるべきを。お上のお慈悲を以て。死罪に仰付けらるゝ。有難く存じ奉れと言渡せば。フシ顏を上げ。詞何事も皆私が心でかゝる身の罪科。露いさゝかもお上へ對し。お恨みはござりませぬ。有難う存じますと。地覺悟極めし健氣さに。不便と見やる諸役人涙 フシ紛らすばかりなり。地お駒は顏をふり上げて。詞御見物樣いづれも樣。夫を殺す大罪人。さぞ憎いやつ大膽者。徒者と皆樣の。お憎しみもあらうけれど。地いふに言はれぬわけあつて。夫殺しの科人と。死恥さらす身の因果。不便と思し一遍の。御回向願ひ上げまする。詞世上の娘御樣方は。このお駒を見せしめと。親の許さぬいたづらなど。必ず〳〵遊ばすなえ。地可愛い夫へ。義理立てば二親に歎きをかけ。又親々へ從へば言ひかはした夫へ立たず。果ては斯うした淺ましい此の世からなる劍の山。身を切り裂かれ憂き恥を。詞曝すも定まる因緣づく。約束ごと。諦めても。二世の契りの其の人と。

一世と限る二親の。もしや群衆の其の中に。見えはせぬかと伸上り。伸び上りても竹垣の。隙間がくれの人群に日も泣き腫れて見え分かぬ。心を思ひ諸見物濡れぬ フシ袂はなかりけり。地群集押分け二親は。竹垣に取付き縋り。詞コレ〳〵お駒や。父樣もこの母も。親子一世の暇乞ひぢやもの。來て居いでよいものかいなう。來て居いでよいものかいなう。コレ〳〵娘。嘸や此の頃のうき苦勞。娘が顏も。マ瘦せたであらう。どの樣にして居る事ぢや。エエおりや顏が一目見たいわい。おりや顏が一目見たいわい〳〵。イヤ〳〵わしやこな樣の目の見えぬのが羨しい。みすぼらしい娘が形。見てゐる母が此の胸は地裂けるわいのとどうと伏し前後。不覺に取亂す。詞父樣。母樣。よう來て下さんした。わしや逢ひたかつた。逢ひたかつた逢ひたかつたわいな。サヽ逢ひ度い筈道理ぢや〳〵。[illegible]う。ア、コレ〳〵申し。其の樣におつしやる程。私が身に罪が重なる。申し母樣。今のお人が見えたなら。私が事は是非もなし。どうぞ寶を詮議して。御出世なさるを冥途から。樂しんで居りますと。よう言うて下さんせえ。え。まだ其の上氣にかゝるは。私が死んだ跡にても。かのお人が爰へ來て。淺ましい形を見やしやんしたら。ひよつと愛想が盡きやうかと。わしやそればつかりが悲しいと。地今死ぬる身の今迄も。おぼこ娘のあどなさを。思ひやりつゝ二親は前後正體うち倒れ。せき上げ〳〵叫び泣き。音は濱邊に打寄せる浪に。浪增す涙なり。果てしはあらじと下部とも。時刻移ると引立つる。二人の親は竹垣に隔てられたる親子の別れ。見物群集は口々に宗旨々々の フシ

父殿や此の母より。まだ〳〵そなたが逢ひたう思やる。ア、コレ〳〵母樣。もう言うて下さんすな。聞く程戀しい床しいお人の。お顏が目先にちら〳〵と。片時暫時も放れぬわいな。放れぬわいな。私が斯ういふ心から。お年寄られたお二人へ。こんな歎きをかけまする。必ず〳〵泣かずとも娘でも何でもない。アリヤ前生の敵ぢや。憎いやつ不孝者と。思切つてふつつりと。數きを止めて下さんすが。地少しは冥途の罪亡し。詞私が死んだ其の跡でも。必ずくよ〳〵思うて。煩うて下さんすなえ。ソレ〳〵。其の樣にしをらしい孝行な事いうてたもるもの。くよ〳〵思はいでかいなう。思はいでかいなう。何の跡に片時も生きて居られう。

手向草。地折もこそあれ才三郎。丈八に縄をかけ。群集押分け矢來の内。詞御預けの茶入の盗賊喜藏に紛れなき由。この丈八が白狀故再び茶入も我手に入る。又喜藏丈八兩人は此の才三郎が親の敵。お上へ委細申上げ。お駒が命赦免の狀。御披見あれと差出せば。詞地彌藤治取つて押開き。詞成程々々。紛れなき赦しの趣。親の敵とあるからは喜藏丈八兩人は。才三郎の心任せお駒は直ぐに二親へ。御赦免なるぞとありければ。地はつとばかりに庄兵衛夫婦。夢に夢見し心地して フシ悦び涙ぞ道理なり。地お駒が縄目とく〳〵と。解けて結びし戀娘。千代も變らぬ御恵み。重ね。重ねて黄八丈。昔語りを今爰に。傳へ〳〵し筆の跡世々に。その名をいちじるし。

一〇 おはん長右衛門 桂川連理柵

菅專助

〔解題〕安永五年十月十五日より北堀江座上場。作者菅專助。

お半長右衛門の實說は明かでない。卽ちお半と長右衛門とは密通してお半が懐姙したので、一時丹波の親類に預けようとして行く途上で賊のために殺されて桂川に投げられたのであるとも、又桂川附近なるお半の乳母に絞殺されたのだとも、或は又大阪の商人長右衛門が奉公のために大阪へ下る船の中で殺されたのだともいふ。

初めてこれを劇に仕組んだのは。寶暦十一年五月十八日から曾根崎の豐竹座上場の「曾根崎模様」であるらし

い。此の曲ではおはつ徳兵衛の曾根崎心中にお半長右衛門の桂川心中が取合せて脚色されてゐる。次に宮薗節の「朧の桂川」(同曲参照)があつて、これは明和初年迄の作曲と思はれる。而して歌舞伎では明和六年九月大阪山下八百藏座で「桂川仇白浪」を、又安永元年五月大阪の中座では「桂川連理柵」の外題で演じられてゐる。本曲は是等の諸曲に基づいて作られたものと思ふ。上の巻は、道行戀の乘かけ、石部宿屋の段、信濃屋の段、下の巻は六角堂の段、帯屋の段より成る。

江戸の豊後三流に於てもお半長右衛門の桂川心中道行はとりどりに名高いものとして残つて居るが、いづれも本曲より派生して改作せられたのである。

詞柳の馬場を。押小路。フシ軒を並べし。呉服店。現金商ひかけ硯。虎石町の西側に主は帯屋長右衛門。井筒に帯の暖簾をかけ値如才もないぎのお絹。氣の取り苦しい姑に口を貰はじと襷がけ。洗濯物を引きのしの地皺は寄つても若楽づゝり。母のおとせは勝手を出で。詞朝飯の箸下におくと驅出した長右衛門もう晝過ぎたに戻らぬは。又川東で呑居ゐて居るのである。お絹。ちつと言はしやれぬかいの。イエ／＼遠州の殿様から請取りの脇差。研屋から来るとその儘。蔵屋敷へ持つて参られました。サイノ。脇差の研が出来ましたと持つて行くばかりに。かう隙が入つて内の見まはしが出来るものかいの。ア、同じ事でも弟の義兵衛めは。モ痒い所へ手の行く様に精出しをるに。エ兄のぬるまに困つたと。詞継子を憎み實の子を。持てはやしフシたる贔屓目。詞聞きかねて隠居婆。数珠つまぐつて奥より出で。詞ア、お婆聞きづらい。死なれた隣の治兵衛殿が。五つになる迄育てられた長右衛門。無理に貰うて家の根継。死んだ先の女房は。隣への義理があると。荒い詞も遣はなんだに。長右衛門成人以後。後妻に直つた身を以て。連れ子の義兵衛ばかりを大事にかけ。兄が事といふとがみ／＼。エ、ちと嗜みやれ。ヤコレ嫁女。

氣にかけてたもんなと。地女房にかはろ佛性。詞オヽその結構を見込んでの。身代をさゝほうさにする長右衛門。隨分と可愛がらしやれ。ア、やかましやのやかましやの。コレお絹隱居へ連れて往て。晝寢なとさしてたもれと。地負けて居ぬ口逆らふは。後世の邪魔と繁齋は。裏の隱居へ嫁引連れ。行くと。戻ると。一時に。義兵衛はとつかは フシ内に入り。詞母者人聞かしやれ一昨日兄貴が取りに行かれた駿河の爲替。まだ金を見ぬ故。合點が行かぬと飛脚屋へ往て問うたれば。一昨日長右衛門殿に渡したと。爲替手形を出して見せた。すりや爲替の百兩は。兄貴が宙でくすねたに極まつた。オヽ、さうであろとも／＼。戻りをつたら吟味して親父殿への面當。ぐつといがめてよい樂しみ。イヤコレ義兵衛。今一つよい事はなう。昨日登つた猪松の五十兩も。金戸棚の合鎰して。コレ見や。ちよろり盜んで置いたは金の入るわが身にや



「お半長右衛門」道行

りたさ。爲替の金をくすねたからは。是も見めに塗付ける。ヤ出來た／＼。母者人コレこの五十兩はの。コレ斯う／＼と地呼く弟。兄長右衛門は棒鞘の一腰腰に差しつまろ。難儀を何と投首し。ホフシしを／＼歸る我が家の內。地見ろより母は。やんぐわん聲。詞五丁か十丁ある屋敷に。半日の上かゝつて內の事は何になる。朝から藝子やお山

狂ひも餘り長でござらうと。地わめくは隱居の耳へ筒抜け。又鬼婆がしやら聲は。長右衛門が戻つたかと。お絹を連れて親繁齋。詞さつきにも言うて聞かすに長右衛門さへ見りや噂付く様に。近所の手前もちつと思やれ。長右衛門もひだるかろ。ソレお絹早う飯をおましや。イヤ飯どころぢやないぞ。問はにやならぬ事がある。コリヤ長右衛門。一昨日取りに往た爲替の百兩。ドレ金見よう爰へ出せと。地言はれて吐胸の長右衛門。詞イヤ折角參つたれど。先の亭主が折ふし留守。金は明日受取る約束。ア、コレ/\コレ兄貴。エ、ぬけ/\ぬけ/\嘘を言はしやんないなう。おりやたつた今先へ往たれば、金はこなたに渡したと。爲替手形を出して見せた。ガそれでもこなた請取らぬか。エサアそれは。アノ金は明日の約束で先へ手形はやるまいがの。兄貴。イヤ先へ手形はやるまいがの。アアコレ/\義兵衛。義兵衛。詮議にや及ばぬ。もう川東へ飛んだぢやあろ。昨日のぼつた五十兩も心許ない。サア爰へ出して見せい。地あつと言ふより長右衛門。巾着の鎰こて/\と金戸棚の引出し明け。詞ヤア五十兩の金がない。地どうした事と驚く夫。お絹も惘り繁齋も共に フシ驚く呆れ顔。詞オ、盗人たけ/″\しい。錠の下りた此の戸棚。鎰持つた者が出さいで誰が取ろぞいやい。ハアこれもお盜み遊ばしたのぢやな。オ、天晴れな家の根繼。オオ根繼ぢや/\/\ヤ、コリヤお根繼様ぢやわいなうすふ、、、。親父貴安堵であろ。嫁御さぞ嬉しかろなう。イヤコレ母者人。そればかりぢやない。まだ/\/\/\ど滅相な事があるわい。コレ隣の娘お半との。兄貴が戀ろして居ると近所から言立つれど。アアいとしなげに兄貴に限つて。猥なと言はうか。マ大人げないそんなこと。よもやあるまいとおもうたが。へ、、へ違ひないて。コ、、コレ此の狀で。ア、それは。オットどつこいエヘンそれから御覽じアハ、、、。サア/\/\お父様お母様讀むぞ/\。エヘン/\/\エヘン。エ何ぢや書きをつたな。マ、、口の間は取つて退けてと。エ 爰らあたりから讀みかけうか。エエ何ぢや。伊勢參りの下向道と。石部の宿の假枕と。今しも忘れ兼ねたゝ、ませたり/\小へげたれめがアハ、、ハ、。エ、どうぞ/\今一度。嬉しき御見を願ひ上げたゝ。長様まゐるお半より。長様まゐるお半より。ヤア/\こりや大それた不義徒ら。兄妹同然と

いひ。恩ある家の小娘をそゝなかし。嫁入の邪魔をおのれマアようしたなア。コレ親父殿。何とがみ〳〵いふが無理か。水晶輪の様な義兵衛。最屓にでござるかやと。地悪は悪でも當座の理詰め。長右衛門は身に冷汗親繁齋も胸せまり。詞長右衛門。エヽ情ない事してくれたな。色は心の外とはいへど。モあんまり圖のない取合ひで。おりや世間へ顔が出されぬ。嫁女の里へも面目ない。指さゝれぬ帯屋の家。暖簾に泥をよう塗つたと。地始めて聞いた親の恨み。胸に釘打つ長右衛門。アヽ面目涙にくれ居たる。地お絹は舅の傍に寄り。詞一途にお聞きなされてはお腹の立つは尤なれど。長右衛門様に不義はない。ありや相手が違ひました。アアコレ〳〵是おきぬさん。お絹女郎。さりとてはさりとては〳〵。今讀んだ

をどう聞かしやつたのぢやぞいなう。其の上にコレ〳〵〳〵長様まゐる。へへ貧乏ゆるぎもならぬわいの。サイナ其の長様がきつい間違ひ。お半様の色の相手は。内の子飼の長吉ぢやわいな。ハヽヽヽ。ハヽヽヽヽこりや臍が石橋舞ふわいハヽヽヽヽ。まだ〳〵とせり合をより。長きよ〳〵内にかっちよつと來てたも。ちよつと〳〵と。地門口から。どやげば隣の内より長吉。としや遅しと走り來る。義兵衛は落つく フシ布袋形。詞コリヤ聞け長吉。われとそちのお半女郎と念頃してゐるといやい。覺えないとソレさつぱりと言うてしまへ。コレ〳〵コレ長吉殿。妾ぢや。〳〵。ノ合點か。覺えの有る事言うたがよいと。地お絹が目まぜ呑込む長吉。詞エヽ何ぢや。ア何ぢや。指様の手前もエヽちつくり面目ないが。

エヽアノ何ぢや。アノアノ伊勢參りの戻り。ナア。石部の宿屋でちつくりと面目ないが。お半様と女夫事。アイ。念頃して居ますからは。お半様はわしが女房。ヤイ〳〵〳〵そりや何ぬかすぞい。コリヤ〳〵〳〵此の狀に。長様まゐるお半より。エヽ義兵衛さんしちくどい。コレ長様まゐるは。おはもじながら此の長吉。エヽ何の事ぢやぞいやいテモ藝氣のないやつと。地義兵衛は天窓。掻きむしる。詞申し母様。現在戀の本人が出たからは。夫に不義はござりませぬぞえ。ハテそりやモウしよ事がないわ。ガ爲替の百兩と五十兩はどうしたぞ。サア長右衛門白狀せい。申し母ぢや人。いかにも百兩の金は私が悪遣ひ。なれども五十兩の金は存じませぬ。こりやどこぞに。合鑰した盗人めが。あるなら出せ。其の盗人は。

サア誰ぢや。鑰を持つてけつかつて居て。盗人は外にある。ムヽ盗人は外に行るとはヤヽ何か。コリヤアノ白川様から釣取る様な義兵衛や。如來様見る様な此の母に。塗付けうと思ふのか。乞食の子やら。盗人の子やら。知れぬ捨子の汝とは違ふ。素性正しいこちら親子に。科を着せうとする横道者めが。サア〳〵五十兩の行端をいへ。言はぬか。ヤ言はぬと斯うぢやと棕櫚箒。地振上げてりう〳〵〳〵。肩腰分けず打据ゑる。こりや餘りと駈寄るお絹。箒をしつかりと動かせず。詞エヽ〳〵〳〵お前はなア。何とした。何としたとは。エヽ胴慾ぢやわいな〳〵。いかに胤腹分かぬとて。さうむごたらしうはせぬ物ぢやわいな。言はぬが禮儀孝行なれどお前方の氏素性もあんまり綾は抜けぬぞえ。サア言ひませうか。言はうかと。地スヱ

カヽリ腹立つまゝの捨て詞。眞面目になつた母息子。長右衛門は女房を引退け。詞コリヤ母に向うて慮外な惡口。それでもお前。エヽ言ひやまぬか。サア〳〵。何言はしやんす。禮儀も人によるわいな。何ぼ結構にあしらうても。嗣分けのある母様ぢやない。エエわしや腹が立つ。腹が立つ〳〵と。地身を震はしたる フシ無念泣き。心根不便と引寄せて。詞道理ぢや〳〵。ガ。コリヤ親ぢやはやい〳〵親といふ字で何事も。蟲を死なす胸の内。思ひやつてくれ女房と。地スヱテ拳を握り。男泣き。詞オヽそれ〳〵。親ぢやぞ。親ぢやぞ。親に向つて何を不足コリヤ義兵衛。ちつと代つて箒の役。叩きのめして金の行方を。地オヽ合點と棕櫚箒振上ぐる手をぐつと捻上げ。詞ヤわれにはよう叩かれまい。見事見をわりや打

つか。イヽヤ弟が打つのぢやないぞ。おれが名代にどづかして〳〵金の白状さするのぢや。イヤ白狀も絲瓜も入らぬぞ。兄に指でも差したらば。此繁齋が汝をほいまくるぞ。コレ親父殿。金を盗んだ長右衛門。何でこなたは贔屓する。ソレそれが大白痴の親玉とやらちやわやい。長右衛門は此の家の主。百五十兩が千兩でも。我が物を我が遣はうが。又まき散らさうが心次第。それを盗んだと詮議立て阿呆くさいわい。づけ〳〵物をぬかしたら。昔の飯焚お竹にほい下げ。長右衛門女夫が草履直さし。親子共にぶちのめさせて責め遣はすぞと。地道を立てたる父親の。情に女夫は有難涙。親子はふくれるフシ燒餅顔。詞アヽ義兵衛草臥たなう。臺所で一杯せうかい。オヽそれがよごんしよ。コリヤ長吉め。失せあがれ。

おのれにや大分臺詞があると。地弱身を見せぬ親と子が。跡に引添ひ出來合ひの壺をかぶつた色事師 オクリ 打連れへ勝手へ入る跡は。早や暮れかゝれば下男。燈す八方行燈の灯。佛壇の御明しは年寄役と繁齋が。オクリ こて／＼燈せど フシ 濕り居る。地 女夫の者を膝近く。詞 一年々々尻が溫り。道も義理も知らぬ婆め。追ひまくるも合點なれど。七十に近い繁齋。女房の離別がみめでもないと。モ 堪忍の胸をさすつて居る。したが贓と言はうが應といはうが。近い內隱居へ呼び取り母屋の事は構はすまい。女夫ながらそれを樂しみに。煩はぬ樣にしてたも。又長右衛門も何やかや氣のもめる事もあらうが。浮世に長うも居ぬおれに逆樣な事やなど必ず見せてたもんなや。物の譬はアレアノ御明し。わづか燈心一筋でも。油との持合ひで燈つてある。油は繁齋燈心は長右衛門。暗いと言うては掻き立て。ずり込むと言うては掻立て。段々と掻立て／＼。もがきあせつて燈心がならなれば。油はあつても家は暗闇。ア其の氣の細い燈心一本。コレ高が町人の身の上で。是が恥の立たぬとは。畢竟心が狹いといふもの。じつとこたへて氣を掻立てさへせねば。いつ迄も身は有明行燈。遠州の御用も相變らず聞く樣に。親に安堵を頼むぞやと。地 くゝめる樣に箸折かゞみ。心は眞身かゞむ腰のして佛間へ入りにけり。親の慈悲心身にこたへ スヱカヽリ 差俯いたる夫の傍。言はんとすれど胸塞がり。フシ 暫し。詞も出でざりしが。詞 コレ長右衛門樣道理は道理なれど。お前はきつう濟まぬ顏ぢやが。必ずひよんな思案やなど。怪我にも出して下さんすなえ。姑御や小舅につらい氣兼も辛抱も。お前といふ人あればこそ。十年連添ふ女房の手前。立たぬ事も何にもいらぬ。をやま狂ひも藝子遊びもそりや殿達の器量といふもの。地 お半女郎と二人が中。ひよつと私が知つたかと。言譯にさしやんす媒妁。詞 愚鈍な者でも女房ぢやと思うての心遣ひと。わたしや心で拜んでばつかり居りました。地 その返報ではなけれども。緣組を變改は。年端も行かぬあの子でも若しやお前の樂しみに。なりもせうかと心の奉公。詞 わしや疾うから知つては居れど。悋氣どころか顏へも出さぬは。氣の毒がらすが笑止なと結構な男御や。意地くね惡い姑御の。耳へ入ろかとそれが悲しさ。私も女子の端ぢやもの。大事の男を人の花。腹も立つし。悋氣の仕様も。まんざら知らぬでなけれども可愛。

殿御に氣をもまし。煩ひでも出ようかと。案じ過して何にも言はず。六角堂へお百度も。どうぞ夫に飽かれぬ樣。お半女郎と二人の名さか。立たぬ樣にと願立てもはかない女の心根を。不便と思うていつ迄も見捨てず添うて下さんせと。夫の膝に打伏して フシ口說き立つるぞいぢらしき。地長右衛門も目を摺り赤め。詞女房ども忝い。言やる事が道理だらけ。道理のないはおれが身一つ。さりながら百兩の金(かね)を色遣ひというたは嘘(うそ)。そなたの弟才治郎が死ぬるを助けた雪野が身の代。エ、それはまあ。サ、、、サア堅う此の事いふまいと思うたれども。浮氣(うはき)らしい色狂ひと思はれまい爲の言譯。わが身の弟の事なれば。惜しうは思はぬ爲替の百兩。又五十兩の盜み人(ぬすびと)はしつかりと知つてあれど。サア詮議をすれば不孝になる。この二口の譯は立てど。面目ないはお半が事。遠州よりの戻りがけ。お半は長吉乳母(うば)もろとも。伊勢參りの下向道(げかうみち)。石部の宿屋で泊り合せ。わしは口の座敷に寢て居る。お半が來て起したも夢現(ゆめうつゝ)に聞いて居れば。長吉が參りがけより無體(むたい)の戀路。明日(あす)は去(い)ぬれば今夜は是非にと。コレ。髮まで此樣・にしをつたと腹立ち涙。乳母を起せども草臥(くたぶ)れて目が覺めず。どうぞお前の傍に寢さしてくれと。泣沈む。わしが知つては長吉が氣の毒に思ふであろし。殊に又子飼の奉公人。内へ去んでも必ず母御へ告げてやりやんな。サア夜明けも近し。乳母が傍へと色々いうても聞入れず。又わしも眠むたし。つい蒲團の中へ。エ。サア濁るが煩惱(ぼんなう)堪忍してたも女房ども。エ、モ埒(らち)もない事したと。我が身ながらも愛想が盡き。連添ふそなたに顔上げて言ふも言はれぬ身の誤り。美しう言うてたもる程おりやモ面(めん)がかぶりたい。堪忍してたも。こらへてたも。しかし是もさつぱり埒あけて了うたれば。どこへなりとも嫁入りするであろぞいの。親父樣の有難い意見といひハテ誤つて憚らぬおれが身の上。何にも案じる事はない。とかく是までの事はコレ誤つた／＼。エ、わつけもない／＼。女房に何の詫び。もう／＼此の事はさらりと流して。地又言出さぬ堅めの盃。わしや肴拵へう。一つ上つてちとお休み。詞そんならさうせう。ア、氣草臥れかふら／＼眠ぶたい。その間(ま)も一睡(ひとねむ)。ヤツころりと轉ける夫に當てがふ枕。蒲團打ち着せ女房は勝手へとつかは行く影を蒲團の中より手を合せ。詞不所存(ふしよぞん)な長右衛門を男と思うて辛抱する心意氣の

嬉しさ過分さ 地千萬年も連添うて禮が言ひたい堪能させたい。取分けて五つからお世話なされた親父様。末期の水も上げませず。逆様事の歎きをかけるは。不孝といはうか道知らず。詞さつきの御意見お絹が心底。聞けば骨身も裂かるゝ苦しみ親父様の御了簡お絹が心はさばけても。挪けぬものはお半が腹帶。死なしやつた治兵衛殿。お石殿へは恩を仇。その上屋敷へ持つて往た。政宗の差添は。マアいつ摺換へられたも知れぬ贋物最負づよいお留守居もお國へ取りなす詞がない今夜四ツ迄に詮議し出せと。モ御了簡は付いたれど。地どこを詮議も雲を闇。所詮生きては言譯立たず。モ死なうと覺悟極めたれども。詞親父様やお絹が顔。名殘に一目と見に戻り。いよ／＼女房に苦に苦をかけ。不孝に不孝の覆輪かける。此

身は何たる大悪人。モ、、、愛想もこそも盡果てた。地我身の上と忍び泣き。枕も。漂ふ涙なり。同じ思ひを信濃屋の。お半は胸の憂さつらさ。餘所目を包む振袖の。内を覗いてよい首尾とそつと這入つて枕元。詞長右衛門様／＼今朝下さんした文の返事。ちよつと逢ひに参じたと。搖り起せばとぼけ顔。フウオ、お半か。返事に來たとは合點がいたか。成程お前のおつしやる通り。得心してこれ切りにとんと思ひ切りませう。オヽ出かしやつた／＼。それで互の身の納り。世間の噂もひとり止む。サア／＼其心なら斯うして居ると又浮名。ちやつと内へ去んでたも。ヤ。アイ／＼。わしやモ是を限りに。さつぱり内へ歸りますが 地お前は隨分お達者で。詞見納めに今一度顔を。よう見せて下さんせと。地抱起して顔つ

く／＼。見る日も明かれぬ雨やさめ。長右衛門も此世の別れと。口へ出さねど心の内。暇乞ひぞと抱きしめ。詞コレ何にもきな／＼思はずとなう。コレ煩はぬ様に／＼母御へ孝行。アイ／＼。今迄はよう可愛がつて下さんした。禮は言はずに氣を揉まして。ア、やくたいもない子ぢや。死別れ。サア死別れではなし。緣は切つても朝夕見る顔。サア／＼／＼誰も見ぬ内。サア去にや／＼／＼。地コレ去にやいのと突きやられ。名殘もをしの離れ得ぬ。衾をわけて出でて行く果ては。桂の川水に浮名を フシ流すぞはかなけれ。地蟲が知らすか長右衛門。詞ア、どうやら可笑しい今の去にやう。地合點が行かぬと門の口。落ちた一通灯影にすかし。詞書置の事。扨てこそと。地駈出しても宵闇に。影さへ見えぬ フシカヽリ四つ辻を。

また駈戻つて見る書置。佛壇の間に繁癪が。看經の聲いつよりも。無常を誘ふ鉦の音。南無阿彌陀〳〵。詞エエお前と縁切り外々へ嫁入りする心もなく。殊に只ならぬ此身。世間へ知れては私が恥はいとはねども。お前の名を出すが悲しく。お絹様への詫言や母様に呵られぬ内。桂川へ身を投げ候。エヽお前は御無事で御夫婦中よう。折々には一遍の御回向願ひ〼〳〵。アヽ〳〵可愛や可愛や〳〵。突詰めた娘氣で。蕾の花を散らさすも。みなこの長右衛門がなした業ぢやわいの。南無阿彌陀。南無阿彌陀。さぞや母様の歎き力落しと存じ候間。江戸の兄様を呼び上し。朝夕の御介抱頼み上げ〼〳〵。コレ〳〵〳〵そなたが死んでは猶以て。生きて居られぬ長右衛門一緒に死ぬが親御へ言譯。アヽいかさま因果は車の輪。十五年以前。宮川町の藝子岸野に登り。詰らぬ事で桂川へ心中に出た所。先へ岸野が身を投げたを。見るよりふつと死に後れ。人の知らぬを幸ひに共場を遁れ今日迄は生き延びしが。思へば最後の一念にて。岸野はお半と生れかはり。場所も變らぬ桂川へ。我を伴ふ死出の道づれ。ホウ是こそ因果の罪亡し。さうぢや。さうぢやと觀念し。フシ桂川へと急ぎ行く哀れを今に昔殘し噂の種となりにける。

時雨の炬燵

一

紙屋段

〔解題〕 近松門左衛門の傑作「心中天網島」を近松半二と竹田文吉とが増補して「心中紙屋治兵衛」と題して安永七年四月廿一日から竹田萬治郎座で興行したのが本曲の原作である。近松翁の原作を増補改修して、舞臺を

賑はし、筋を複雜に技巧的にするために、上卷の發端へ淨な瀬の評偽場を、下卷の紙屋の前へ長町の段を增補して、大和屋以下を削つて、紙屋の跡へ直ぐに二人の心中をつけ、それも死なずに助かる事にたつてゐる。尤も紙屋の段は文章は原作とほゞ同じである。

操芝居では後に「增補天網島」の外題で度々繰返して興行されて居る。而して「天網島時雨の炬燵」の外題は歌舞伎の方で用ひられたのが、淨るりに逆移入されたのかと思ふ。

こゝに收めた「紙屋の段」は今日歌舞伎で演ぜられる筋と同じであろ。

へ直ぐに佛なり。オクリ門送り。さへそ　エノ＼＼。憎いさうな憎いさうな　尤もぢや誤つた。悲しい涙は目より出こ＼に。治兵衛は傍にあり合はす定＼。憎ましやんすが嘘かいな。地一　で。無念な涙は耳からなりとも出るな木を枕うたゝ寝の。ホフシあたる炬燵の　昨年の十月中の亥の子に炬燵明けた祝　らば。言はずと心見すべきに。同じ目小春時。地まだ曾根崎を忘れずかと。　儀とて。コレ爰で枕。並べてこのかた　より零るゝ涙。足かけ三年がその間。退ける蒲團の内さへも。涙に濕るその　は。女房の懐には鬼が住むか蛇が住む　地露程も悋氣せぬ。そなたに言ふも恥風情。おさんは呆れつく＼と。フシ　か。それ程。心殘りなら泣かしやんせ　かしながら。詞この間も曾根崎で。殘顔打守り打守り。詞エヽあんまりぢや　＼。その涙が蜆川へ流れたら小春が　らず聞いた小春めが不心中。今といふぞえ治兵衛様。それ程名殘が惜しいな　汲んで呑みやらうぞ。あんまりむごい　今夢も覺め。思ひ切つてはゐるけれど。ら。誓紙書かぬがよござんす。なぜに　治兵衛さん。何ぼお前にどの様な切な　ソレさつきにも話した通り。あの太兵お前はその様に。私が憎うござんすえ。　い義理があるとても。二人の子供は。　衛めが。金に身請をするとの噂。退いアヽコレイノコレ。そりやまあ何を言　お前何ともないかいなと心の限り口說　て十日も經たぬ内。請出さるゝ義理知やるぞいの。子仲までなした中に。イ　き立て　フシ恨み歎くぞ哀なる。詞オヽ　らずめ。小春めが事は心殘らねど　地間

屋中の交際にも。金の工面に盡きし故。小春を退いたの何のとて。得知れぬ奴らの口の端に。かゝるが無念な口惜しいと詞サ。思はず涙を零したわいなう。エヽそんならほんまに小春様は。お前に愛想づかしを言うて。アノ太兵衛が所へ行く筈かえ。ハテきよと〳〵しい其の筈わいの。オヽそんなら小春様は生きて居る氣ぢやないわいな。死なしやんすわいな。ハテ扨て何ぼ發明でも。さすがは町の女房ぢや。アノ不心中者が何の死なうぞ。イエ〳〵さうぢやござんせぬ。小春様に不心中は。モ芥程もないけれど。地何時ぞやよりお前の素振。何を言うてもうか〳〵と若し。悲しい日を見ようかと案じ過して小春様へ。詞いとしいと思はんす。治兵衛殿の爲ぢや程に。思ひ切つて下さんせ。と掻口說いてやつた文。地引かれぬ義理と合點して親にも替へぬ戀なれど。思ひ切るとの嬉しい返事。詞是程眞實な心で。何の太兵衛の所へ行かしやんしよ。請出されたら其儘に。死ぬる覺悟に違ひはない。地小春様を殺しては此のさんが義理立たず。どうぞ命が助けたい。思案して下さんせ。マひよんな事どうせうと。初めて明かす女房の誠詞ムヽンそんならアノ。不心中と見せたのは。そなたの頼みか。アイナア。ム、すりや矢張りおれを大切から。地ハアさうとは知らず今迄も。義理知らずの畜生のと。恨んだ心が恥かしい。詞アヽコレイナアコレそれいふ手間でこな様往て。どうぞ殺さぬ様にして進ぜて下さんせ。どうぞ殺さぬ様にして進ぜて下さんせいな。ハテ小春が命助けるは百五十兩。せめて半金なりとも手附けに渡し。取留めるより外はない。ガ何をいうても。金の工面に盡きた此の身。ノウ仰山な。それで濟むなら易い事。地と立つて簞笥の小引出し明けて取出す絢交の。紐付く袋押開き。フシ差出す一包。地治兵衛取上げ恟りし。詞ヤコリヤコレ小判五十兩。マどうしてそなたが。サア此の金の出所も。跡で語れば知れること。此晦日に岩國の仕切銀に才覺はしたれども。それは又兄御と談合して商ひの尾は見せぬわいな。小春さんの方は急な事。ソレ其の小判五十兩と。地殘りはわしがとかい立つて明けて取出す染小袖。豫て斯うとはしら茶裏。黑羽二重も色替へぬ。淺紫の糸目結ひ。疋田鹿の子も惜しげなう。子供の物も搔い集め。内輪に見ても二十兩。よもや貸さぬといふ事は。ない物までもあり顏に。夫の恥と我が義理を。一つに包む風呂敷の。フシ内

に情ぞ。篩りける。詞私や子供はなに着いでも。とかく男は世間が大事。身請してあの太兵衛めに。一分立てゝ下さんせ。地スエテと言へどいらへも涙聲。詞オ、過分なぞや忝い。ガ手附渡して取止め。請出して圍うて置くか。又内へ入れるにしてからが。マそなたは何とゝ地言ひさして打萎るれば。詞ア、何のいな〳〵。必ず案じて下さんすなえ。ハテモ子供の乳母か飯焚か。面倒ながら〳〵眞實の妹。眞實の妹〳〵持つたと地思うてといふも胸まで突つかける。涙呑込み呑込んで。夫に立つる貞節は傍て見る目も。いぢらしき。詞へエ、何にもいはぬコレ女房ども。親の罰天の罰。地佛神の罰は當らずとも。女房の罰が恐しい。赦してたもとばかりにて伏拝む手をア、コレイナア勿體ない〳〵〳〵〳〵わいな。詞ハテモ手足の爪を放しても。皆夫への爲ぢやもの。跡の間では詮ない事。地サア〳〵早うと三五郎呼出し渡す風呂敷懐へ。フシ金押入れて立出づる。詞治兵衛殿お宿にかと。地門口這入る五左衛門。オ、是はしたり舅殿。マようお出でも夫婦はうぢ〳〵。三五郎が脊負うたる。風呂敷見付けて。詞コリヤ阿呆め。その包みをどこへ持つて行くのぢや。エエ又質屋へうせるのか。こつちへおこせと地引つたくられ。惘り拍子抜參りの。脊に知れたる心地して。フシ一間の内へ逃げて行く。地舅は猶も圖に乘つて。詞大方斯うであらうと思うたわい。着類着そげを質にまげて。をやま狂ひに仕上げるのぢなをやま狂ひに。コリヤヤイ女郎の誠とな。鬼瓦の笑ひ顔とはないものぢやぞよ。サア〳〵〳〵手短かにおさんに隙やりや。女の子は母へ付くが世間の大法。お末はさつきに祖母が連れて戻り。コ、、此の誓紙をひけらかしておれに渡した。ア、えらいやうでもどこぞが女子。こんなで行くのぢやないぞよこんなで行くのぢやないぞよ。サア誓紙の代りに去狀かけ。エ、。地あんだら臭いと引裂き〳〵。治兵衛が顔へ打付けて。お上にどつさり フシ大臼なり。地おさんは聞兼ねコレ父様。詞ソリヤお前聞えませぬ〳〵〳〵わいな。こちの内の身代の衰へたのも。皆お前から發つた事。ないもせぬ銀山にかゝつたと言うて。三十兩借り五十兩借り。あげくには其の銀山が潰れたとやら。元も子もない様にして仕舞はしやんしたぞえ。男氣な治兵衛殿。舅の事なり言出せばこつちも恥と。證文も殘らず戻し。濟まさしやんした其の時には。コレ。其のマ

ア怖い顔に涙をこぼして、悔ばしやんなした事をお前よもや。忘れはさしやんすまい、そんなお前、また主の悪所通ひも此の度はこなた様から弱つた事、舅と仕分けて貰うた身代。マ何して金お讓つたも此家の不審が立つた時、ハイ誓紙に取られました」と鼻じらしう言はれもせずと、サア。口へ出して言ひこそさつしやらね。其の志を推量して。初手の間の茶屋通ひは。世間へ聞えにでもさつしやる事と。モほんにやれ〳〵。行かしやる度々にわしや。わしや後から拜んでばつかり居たわいな〳〵。地その大恩を打忘れ、阿呆ぢやのイヤ白痴のと、假初にも勿體ないこらへて下されこちの人。父様去んで下さんせと宥めつ叱りつ兩方へ。我が身一つのせつなさ辛さ思ひ。やられてフシ道理なる。地サハリ思ひは同じ憂思ひ。身の言譯に紀伊國屋。ナホス小春は表へ來かゝりて様子ありげな内の體。逢うてはいかゞと用水の フシ陰に隠れて聞き居たる。地とは知らずして治兵衛は手をつき。詞イヤモ御立腹の段は御尤も。がおさんが申すは有體な事。私心に存ぜぬ事。地此のまゝ添はせて下されと。詞詫ぶれど聞かずイヤならぬわい。詞何にもいふ事聞く事ないわい。おさん戻せば事は濟む。しかし拵へおこせし道具衣裝。改めて封付けんと、地立上ればおさんは驚き。詞ア、これ父様。衣裝道具も揃うてある。改めるにはおよばぬと。地駈寄れば突飛ばし。ぐつと引出し。ムンコリヤどうぢやと。一重二重引出しの數もありだけ押入れまで。底を叩いて五左衛門口あんごりと明き入れ物。差すにも差されず詞さへ暫し。フシ呆れて居たりける。地治兵衛とつくと心を定め、詞コレ舅殿、この五十兩は女房おさんが着衣裝道具の代り。不足にはあらうが持つてござれ。エ、オ、オ、ホ、、、、ヤさうはかい〳〵。イヤ又どう言うてもへ、大身代ぢやてい。がおのしたらを見るからは。いよ〳〵娘は連れて去ぬ。サア〳〵うせうと、引立つれば。詞マア〳〵待つて〳〵下さんせいな。モあゝ言出しては聞かぬ父様。私やマア歸ります。いふ迄はないけれど、勘太郎が事、勘太郎が事を頼みますぞえ。朝飯前に忘れずとナソレ。桑山の丸子〳〵呑まして下さんせえ。オヽ氣づかひしやんな。マ思ひも寄らぬ今この時宜。とんと心も落付かねど。そんなら暫く別れて居よ。舅殿も娘の事。まんざら惨うもさつしやるまい。ツイまた戻りやる様になろぞいの。アイ〳〵

く〳〵。コレ申し治兵衞樣。必ず短氣の出ぬ樣に。エヽ小面倒な暇乞ひ。きり〳〵歩めと 地引立つる。聲に目覺ます勘太郎。母樣なう。母樣なうを聞捨てに跡に。見捨つる子を捨つる。藪に夫婦の二股竹長き。別れと フシ出でて行く。地しをれ〳〵し後影。見送り〳〵小陰より。小春は内へ駈入れば。詞ヤアそなたは爰へマどうしてと。地尋ぬる内にも稚子が。母樣。なうと慕ふ子を。見るに二人はいとゞ猶。思ひくづをれ抱きしめ。賺せばすや〳〵。稚子を。ゐぶりながらも口說き言。詞何から言はうぞ治兵衞さん。いつぞやも曾根崎で。愛想づかしな悲しいお別れ。思ひ切つては居るけれど。アノ太兵衞に身請しられては。所詮生きては居ぬ覺悟。此の世の名殘にたつた一日と。來ごとは來ても折惡しく。立聞した內の樣子。マあれ程貞女なおさん樣に。あふぎの別れさせまするも。皆私から起つた事。コレ堪忍して下さんせ〳〵え。サイナウ眞實な入譯を。聞けば聞く程この身の誤り。あの樣な女房が。地三千世界にあろかいなう。詞この言譯にはそなたもおれも。スリヤこなさんも覺悟極めて。エヽ忝うござんす。地と抱きしめたる。ないじやくり。ラシ胸と。胸とに言はせけり。謠高砂や。この重箱に餠入れて。地片言交り阿呆の三五郞。机に載せし三つ具足 フシ兩手に。かゝへ二人が眞中。詞サア〳〵〳〵氣疎いものになつたぢやないかえ。アノさつきにお家さんの言はんすには。ナコリヤ三五郞よ。おれが留守になつたら。大方爰へ。小春さんがござんす程に。そうしたらアノ旦那樣とアノ。アノ。オヽさうぢや。祝言をさすのぢや。われを賴むと言うておかんしたわいな。そこでおれが思付きぢや。花瓶の松に鶴龜。酒の取つたが無かつたさかいで。水を銚子に入れて來た。媒介役のエヘヽ、おれ樣ぢや。コレ禮には好きの虎屋饅頭。そしてアノ。今から阿呆と言はんすなえ言はんすなえ。ようござんすか〳〵え。サア〳〵早う飮まんせ〳〵。アハヽ二人ながら泣かんすの。アヽコレ泣かんすないの〳〵。ハヽア扨てはコリヤ嬉し淚ぢやの。オイノ。こな樣の言はんす通り。嬉し淚が。こぼれたわいなう。さりながら。治兵衞樣と祝言しては。どうもおさん樣へ。エヽ何のマア濟まぬ事はござんせぬわいの。お家樣は出しがらになつて。是程うまい鰹節を。お前にやらんす事ぢやもの。志を無足にせずと。サヽきり〳〵飮んで注さんせいの〳〵。オ

オコリヤ三五郎がいふ通り。祝言ちやと思や義理もある。互に末期の水盃。ムさらばお酌をや申さうかい。說經涙。ながらに取上ぐる。酒と。水とはかはらけの。土になる迄葬禮の。一本花や鴟龜の。タヽキ蠟燭立も消ゆるナホス身とフシ思へば。いとゞ胸せまる。詞サア〳〵目出たうなつて來たわい。エエ誰ぞマア。謡うたひが來いでな。地フシカヽリと見やる外面へ四つ子の。墨の衣に草鞋がけ。詞安養寺尼寺。常念鉢。そりやこそ來たわと地阿呆は フシ駈出で。地抱いて這入るを顔見て悔り。詞ヤお末ぢやないか。わりや一人戻つたか。さうしてマア。變つた形をして。アイ祖父様にこんな美しいべゞして貰うた。餘りこのべゞは白いに依つて。何やらたんと書いて下さつた。此の書いたのを。父様や小母様にちやつと見

せて來いと言うて。祖父様が門口まで。連れて來て下さつたわいなう。地ヤアと二人は立寄つて。あたふた脱がす墨染の。下には何か白無垢に。おさんが筆の散し書。詞エヽ何ぢや。涙ながらに一筆しめし候〳〵。先程とゝ様連れだち歸られ候節。小春様御忍ばせの姿。樋に見受け候へども。御存じの譯合ひ故。御目もじもなり難く書殘し申上候〳〵。アヽコレ治兵衛様。私にも一寸讀まして下さんせ〳〵いな。エヽ兎角連合ひの命が助けたさ。小春さんへわりなきお願申上候ひしに。お聞届け給はる婿しさ。海山にも代へまほしく。何ぼう忝う存じ上げ候〳〵。エヽこの御恩送り候には。末々お二人を御夫婦となし〳〵より外なく存じ候。その上父様の眞實を聞き。我が事は。是までの緣と諦め候〳〵。父お末事は。こなたにて育

て申すべく候。勘太郎が事を小春さんへ。くれ〴〵頼み上げ候〳〵。エヽ何の事ぢやぞいな。コリヤ何の事ぢやぞいな。ソリヤ聞えませぬおさん様。私やお前からお禮受ける覺えはない。コリヤ私をば。術ながらすのかいな術ながらすのかいな。コレナ申し治兵衛様。おさん様を呼戻して下さんせ〳〵と地立つて見居て見。うろ〳〵と フシ譯も涙にくれ居たる。地治兵衛又も引寄せて。詞ナニ〳〵。舅五左衛門申入れ候。エヽ何アノ舅親父の恩知らずめ。汝が何のろくな事書きあがるものぢや。アア申し治兵衛様。その様に腹立てずに。マア讀んで見やしやんせいな。エヽ面倒い。エヽ何々舅五左衛門申入れ候。六年以前能はぬ銀山にかゝり御損失をかけ候所。聟舅の由緣を以て。證文殘らず返し下され。千萬忝く存じ奉候。

ぉ知れた事ぢやわい。金子の減少。本家への聞えを思し召し。それ故の遊所通ひ。初めの嘘が誠となるは。我人若年の時を思ひ出し申し候〳〵。ムン成程。エヽ先頃娘に右の入譯。委細に承知仕り候故。輕少ながら金子百五十兩。先刻衣裝相改め候節。箪笥の大引出しへ差入れ置き申し候。コレ小春々々。アノ箪笥の引出しを明けて見や。早う〳〵。イヽヤイノ其の下の方ぢやわいの。オヽござんしたわいな。エヽあるかえ。エヽ右金子を以て。小春殿を請出し。コレ小春ナソレ。右金子を以て。小春殿を請出し。長く御添ひ下さるべく候。エヽ娘さん事は。お末諸共。今日尼に致し。オヽコレ小春。おさんが尼になつた。エヽ〳〵。おさん様が尼にならしやんしたら私やどうせうぞいな。テモおさんが尼に成つたといなう。おさんが尼に成つたといなうおさんが尼に成つたといなう。エヽ娘さん事は。お末諸共今日尼に致し。貞玉智月と法名付け。天下茶屋尼寺安養寺へ連行き。先刻下されし五十兩は。二人の者の飯料。卽ち寺へ祠堂に上げ申し候。地皆まで讀まず兩人はわつとばかりに聲を上げ。そりや胴慾なおさん様。詞これ迄悋氣もなされずに逢はして下さる共の御恩。聞入れたのが枷になり。こんな事ならその時に。なぜさう言うては下さんせぬ。コレナア申し治兵衛様。おさん様を呼戻し。千年も萬年も。添ひとげて下さんせ。説經この子は可愛うエヽマないかいな。見れば見る程いたいけな。愛にこぼるゝ稚子の。乳房に離るゝいぢらしさ。孤子となつたのも皆わたしから起つた事。堪忍してとばかりにて取亂したる詫び涙。フシ理り。せめて哀れなり。地折からうそ〳〵善六太兵衛。門口細目にこりや見付けた。詞ヤイ治兵衛め。おれが請出して女房にする小春。うぬは又何で引込んだ〳〵。アヽコレ〳〵太兵衛様。細言いふにや及ばぬ。是まで重々意趣ある治兵衛め。ぶち殺して腹癒よと。地雙方よりぶちかゝる。利腕つかんで詞コリヤ〳〵三五郎。小春に怪我をさせぬ様。働け〳〵。オツトまかしよと箒の助太刀。地あなたこなたをちら〳〵と。見る目危く氣を冷す。いらつて打込む善六太兵衛。折よくはづせば二人は同志打。そりや治兵衛めが斬りをつたと。喚けば是非なく乘つかゝり。日頃の意趣と。フシとゞめの刀。詞コリヤ〳〵三五郎々々々。お末を連れて奥へ行け〳〵。コレ〳〵小春々々。怖い事はない。〳〵〳〵わいなう。モ斯うなる上は

是非に及ばぬ。豫て言合はせし如く。抜　おぢやと。地手を取り急ぐ惡緣の。末期所は網島の大長寺。人なき内にサア　は。涙の藻塩草噂の。種となりにけり。

姉は宮城野 妹は信夫　碁太平記白石噺　一二

新吉原の段

〔解題〕安永九年正月二日から江戸薩摩外記座上場。
有名な宮城野信夫の敵討を慶安太平記の世界に作り込んで、二女が宇治常悦（由井正雪）の後援の下に目出度く親の敵志賀臺七を討つを骨子とした作。
二女の敵討の實說としての所傳をかい摘んでいへばかうである。享保二年の事である、奥州白石足立村の百姓四郎左衛門が過つて領主片倉小十郎の劍道の師田邊志摩の供廻りを破つた爲に手討にされた。殘された姉娘すみは十一歳妹娘たかは八歳であつたが、復讐の決心を堅め、仙臺なる劍術の師範瀧本傳八郎方に下女奉公をして傍ら劍術の修業を勵み、遂に享保八年四月公儀の許を得て仙臺城下白鳥明神社頭に於て素懷をとげたといふ。
由井正雪の一件を仕組んだ戯曲としては、寶曆九年九月十六日から竹本座で興行された「太平記菊水巻」があるが、本曲は大體の結構趣向に於て、この作に負ふ處が尠くない。
作者としては正本の巻末に次のやうに詳しく掲げてある。

第一　堂上地下の主從は繩目に引かるゝ大内の鷄合　紀上太郎
第二　仇と誠の朋友は義心に別るゝ一國の首塚　容楊黛

第三　お主と家來の妹と替は相圖に隱るゝ名鏡の奇特　　焉烏旭
第四　孝と實義の伯父姪は愁に亂るゝ血筋の植付　　紀上太郎
第五　娑婆と冥途の智男は餘所に見らるゝ一樹の宿貸　　紀上太郎
第六　江戸と田舍の姉妹は我身に賣らるゝ軍用の品玉　　烏亭焉馬
第七　通と野暮との客と客は意見しらるゝ曾我物語　　烏亭焉馬
第八　白と黑との敵味方は位牌に紛るゝ幻術の仇討　　三津環
第九　道行いはぬいろぎぬ　　紀上太郎
第十　色と情の娘と下女は智略にもつるゝ井出の山吹　　紀上太郎
第十一　仁と禮との南北朝は武威に顯るゝ和睦の勝鬪　　紀上太郎

この中で焉烏旭は烏亭焉馬の替名、三津環は紀上太郎の替名である。

本曲ではこゝに收めた第七段の新吉原の段が名高いが、これは歌舞伎年代記の著者としても知られて居る焉馬の作で、吉原の眞中で田舍娘に思切つて奥州訛を使はせながら、同胞の眞情を發露させた點が勝れて居る。

題名は第八の「白と黑云々」の條で、常悦が非にかこつけて鞠が瀬秋夜（丸橋忠彌）が姉妹の敵討を急がせようとするのを抑へる場から出て「後太平記」にかけて慶安太平記を利かせたものと思はれる。

新吉原の段の現行の語り本は原作の丸本とは語句が相違して居る箇所も少くない。今は語本に從つて置いた。

地入相の。鐘さへ早く。暮れ果てゝ廓紗なりける　フシ有樣なり。地此の君の　度の曾我物語の次ぢやというて。置いの。内は萬燈會。歌舞の菩薩の色揃へ。　フシカヽリ一字なりとも次の間から。宮て去んだぞえ。イヤ申し宮柴樣。今日わけて全盛宮坂野が。部屋は上品奥二里宮柴うち連れて。詞太夫樣御機嫌は　のお客は仲の町の蔦屋から。締めから階。簞笥長持鏡臺の。埃取まで綾錦袱え。ホンニさつきに貸本屋が參じて。先　んだ二人一座。宮城野樣はもとより。

お前も早う身仕舞して。オヽ急しな。コレ〱しげり。そなはそこら片附け今身仕舞をするわいな。しかし差合ひやと。地言付ける間もあるやなし。新な顔はないかえ。イヽエどれも〱侍業。一人のお方は器量よし。今一人は髭むちや。目の大きい。熊か人かといふ様な。どちらへ札が落ちうやら。マ厭な事ではないかいなと。地いづくの浦も客嘩。誹るも里の フシ習はしかや。詞アヽコレ。そんな事いうて。遣手衆が叱るぞえ。オヽ叱つたてゝあた可笑しい。イヤ可笑しいついでに。昨日旦那さんが淺草で。抱へて戻らしやんした奉公人。おかしい物言ひではないかいな。サイナア遠い國から姉を尋ねて登つたとの話。宮城野様の慰みに。連れて來てお目にかけよ。お前もお出で地と連立つて。フシカヽり行く後影見送りて。詞テモ扨も。わさ〱ひとり物言うて。マアよい氣ではある程にの。

コレ〱しげり。そなはそこら片附け フシ興醒め顔に 詞オヤノ〱〱女郎さあ達。人が寝そべつて居る所を。用さアある來とらへと。二階さあぶち上げて。コリヤまあ何たる所だ。どこもかも光る。錦の小より三つ蒲團り巾して。お洒落の揃さあ見る様に。

やと。地言付ける間もあるやなし。新造二人が伴ひに。厭がるものを無理無體。突出されたる田舎の娘。傍りきよろ〱つひに見ぬ。



塗りこべえた簞笥さア。其の上夜の物も金切れたモじやア。蒲團も蘇枋染の色のよさ。ホヽわれらアねまつたら。踵の皸さア引つかゝつて。うつ切りべいちや。おやつかな魂消申す。地たまげ申すと フシ言ひければ。地打倒ける程可笑しさ隱し。詞コレそこなお子。お前の故鄕國所。爰へどうしてお出でた譯。話して聞かさんしよば。地お力ともならうにと。嫐ると知らずしく〱泣き。詞オヽやさしな詞お言やり申す。私ら國さア奧州。父や母に樣子あつて別れ申して。お江戸さアはあらく盛る所だアと聞き。其の上姉さア。この吉原で名高い女郎さアに成つて居さるとの話。女子童子の身として。敵ない思ひをして。尋ねて來るも海山。物語りのある事。地聞いて憐れを添へてたべ。詞オヽモ何を言ふぢややら。すつきりと譯が知れぬ。そしてマア吉原で。名高い女中を姉樣とは。雲掴む樣な尋ね物。サアそれだから賴み申すわよ。昨日觀音さアで。目まなこの怖ない人が。連れて往て逢はしてやらうと。駕籠さアにぶち乘せて來るところ。これの御亭の世話さアになり申して。夕から居申すわよ。脚かけ申すも他生の緣。ほんでござるわよ。赤はらはたれ申さぬちやア。ホヽヽ、オヽ聞けば聞く程



をかしい話。そして今の赤はらとは。あられもない地と若い同志儕もくづるフシ高笑ひ。地知る人ぞ知る宮城野だ。押しなだめて申しお二人。浪花の葭も伊勢の濱荻。所々で變る物言ひ。其の様に笑はぬもの。詞今あの子の言うてぢやあつた。だゝアやがアまといふはな。妾でいふ父様かゝ様。父赤はらというてぢやは。嘘はつかぬといふ事ぢやわいな。扨ても我折レよう御存じ。オヽ知つたも無理か憂きふしは詞夜毎日毎に變る枕。長刀カヽリ心盡しの果ては愚か。奥のところ〳〵のお客にも馴れ親しんだ身の一徳。詞オヽ其のお客で思ひ出した。奥のお客が喧しかろ。わたしも追付けそこへ行く。先へお出でてよい様に。コレ〳〵しげり仲の町の井筒屋へ往ての。昨日の返事聞いておぢや。早う。地〳〵といふ下から。遣手の政が例のしやぎり。詞サア〳〵〳〵奥のお客がお待兼ね。何話してゐさんすぞいなう。オヽ忙し。そんならわしらも奥へ往て。お客選みの榮耀もいはず。寝そべる度に。アヽ何やら。オオそれ〳〵。地赤はらたれて氣に入つて。日がら頼もと口々に言うて。フシ座敷へ行くふりを。地見やる宮城野おのぶが傍。もしやそれぞと摺寄つて。詞さつきにからの話を聞けば。姉を尋ぬる人さうな。地奥州はどこらの生れ。何といふ所ぢやえ。詞アイサア。奥州は白坂近在。逆井村といふ所。フウ其の逆井村といふ所に。與茂作といふお人があらうがの。アイサ。其の與茂作といふのはめらしが父ア。ヤアそんならわしが妹。詞と縋り寄るを突きのけて。詞イヽヤサノ〳〵。母の常に言はしやるには。姉さアの方にも印がある。それを證據に名乗り合ひ。委細心底打ち明けろと言ひめした。それがあるなら早くつん出し。見せてくんされ姉さアと。地なつかしながら油斷なき。詞オヽ利口な人〳〵。疑がやるも尤もと。地立つて簞笥の袋棚ふすま開けば恭しう。淺草寺の觀世音。スヱカヽリ扉表具におし並べ。ノリカヽリ飾り置いたる筒守り。見るに妹も疾し遅し首にかけまく逆井の守。詞コレ〳〵〳〵此の姉が國を出る時。母様が大事にせいと下さんした此の守。父様は楠家の御浪人故。河内の國逆井八幡様のお守。それを持つてゐやるからは妹ぢや。オヽ〳〵〳〵。コレイノヲコレ。よう顔見せてたもいなう。オヽ姉さアでござるかいのう。地逢ひたかつたと諸共に。嬉しなつかしすがり寄り。フシ外に詞も泣くばかり。地斯くぞといざ

や宮城野が座敷へ出ぬを不思議さに。來かゝる亭主宗六が。様子ありげな部屋の體。フシ忍んで事を立聞くとも。地知らず姉妹ひそ〳〵話。詞オヽ妹。よう尋ねて來てたもつたの。年端も行かぬ其方。父様なりと母様なりと。いづれぞ付いてお出でであらう。ガもし道中ではぐれてかと。地問はれてわつと聲を上げ。詞アヽコレ〳〵〳〵から廻り合ふからは。悲しい事も何にもない。泣いては濟まぬ。サアどうぞと。地尋ねる姉の フシ心もそゞろ。詞エヽ遠國隔つた姉さア。それで何にも聞かないな。父アは五月田植の時分。代官志賀臺七といふ悪侍に。ヤア〳〵〳〵何といやる。サアぶつ斬られてお死にやり申した。ヤア。と地悯り差込む癪。詞とつとモウ悪い時。さうしてどうぢや其の跡は。サア俺だけもすんでの事殺さるゝ所。庄屋の伯父さアが駈つて來て。力んで見ても肝腎の。證據なければ父は犬死。雉子と鷹なりや敵討の勝負もならず。すごら〳〵。そんだの許嫁の御亭にも對面はしたれども。是も此の江戸さアへ歸り申す。跡は俺だアけと母とばかり。便りない身に下地の大病。ヤア〳〵〳〵お煩らひでもあつたかいの。シテ御本復なさつたか。サアどうぢや〳〵。イエ〳〵。六月十六日に。悲しや終にお死にやり申した。ヤア〳〵すりや御養生も叶はなんだか。ハア。エヽコレ話さア聞いてさへそれがいに歎かつしやるもの。直に見とらへた俺だアけが心。エヽコレ泣かつしやるは道理だけれど。便りに思ふ姉さア又病氣おこしては猶か濟まない〳〵わいの。イヤ〳〵。イヤ〳〵。中々煩らふ様な事ぢやない。さうしてどうぢや〳〵。サア。なしよにもかしよにも俺だけ一人。庄屋の伯父様が引取つて。奉公しろと言ひめすけど。地何の奉公どころかい。口惜しいと。悔しいで。跡先思はず。檀那寺へ駈込うで。詞坂東順禮するというて笈摺もらひ。國元さあをつつ走つたも。そんだに尋ね逢うたら。姉妹心一致にし申して。父の敵が討ちたいばつかり。地道中すがらの艱難も。そんだに逢うが樂しみに。詞がいに。苦勞とは思はなんだ。しかし逢うたらかつぱりと。しよつ骨が抜けた様な〳〵。コレそれがいに歎かつしやる手間で。妹はる〴〵尋ねてよう來てくれた。めこがめらしと言うてくんさい姉さアと。地あやも泣入る稚氣に。長の旅路の憂き苦勞。思ひやるせも宮城野に。つゞくはする忍の。松山を。フシ袖に。波越す涙なり。地歎きのうち

も姉は猶。妹が脊を撫下し。詞オ、其の様に思やるも尤も。しかしそなたは父母に。長う添やつた身の果報。コレ此の姉を見やいなう。年貢に迫つて父様は水牢。その苦を助けうばつかりに。コレ此の廓へ身を賣つたを。思ひ返せば十二の年。そなたは五つ子顔さへ見知らず。父様の御最期や。母様の死目にも逢はぬといふ。悲しい不孝な。はかない事があろかいの。斯うした事とは露知らず。この妹は健なか知らぬ。父様母様。お煩ひでもあらうなら。よもや知らして給らうもの。便りのないを杖柱。首尾よう年を勤めたら。國へ歸つてお二人に。樂させまして。どうしてと。色やうは氣を嗜んで。勤め大事と許嫁の。殿御の事も。そなたの事も。戀しなつかし思ふのを。カン樂しみ暮した甲斐もなう。名乗り逢うたは嬉しいが。悲しい話聞く姉が心も推してたもいのと。手を取交す姉妹が涙。涙を。立聞くも貰ひ泣きして立分の。フシ暖簾もぬるゝばかりなり。地積る話は富士の山。かず／＼多き涙の際。詞こんな事聞かうはしか。借つて讀んだる曾我物語。兄弟の人々も。終には父御の敵討。コリヤ泣いてゐる所ぢやないわいの。ア、コレ肝腎のことを忘れて居た。此の姉が許嫁の夫。此の江戸に居やしやんすとの話。其のお方の名所。定めて覺えて居やらうなう。ソリヤ忙しさに何にも聞かない。オ、モそれを知らぬといふ事があるものかいの。さう言ふ事なら敵の顔も。それ知らないでよいものか。目眼のでつかな。鼻の平たい男振。ア、コレもうよい／＼。壁に耳。御浪人こそなされたれ。由緒正しい武士の娘。オ、めらし姉妹ぢやてゝ。己れやれ。敵討たいで置かうか。オ、ようう言やつた出かしやつた／＼。幸ひ奥の大騒ぎ。あれに紛れて此の家を立退き。オ、さうぢや。地／＼と妹が帶締め直し我が身も共に。小褄かいしよげ身拵へ。フシ立退かんとする所を。地簾暖引切り駈出る亭主。詞コリヤどこへ。オ、旦那様のいつの間に。おりや最前からアイヤ。たつた今爰へ來た。ガわが身たちは敵。サア。堅い約束の男がある故。こゝを駈落ち。コレ惡いぞや／＼。そしてマアその田舍娘を知つてゐやるか。アイ。イ、エ。知るまい／＼。昨日淺草で抱へて戻つたわいなう。旦那様。私らが今の話。サア聞いたでもなし。又聞かぬでも。それ聞かれたら赦さぬと。地突出す懐劒さすがの姉妹鏡臺の。鏡おつ取り丁々ぱつしり。詞ヤ何と逢うたものか。違は

ぬものは兄弟。ナサコレ。此の鏡臺の。鏡にうつる二人の顔。似たりや似たり。花あやめ杜若。その五月雨の暗き夜に。ナホス敵を討つたる曾我兄弟。假名本の曾我物語。ヤこゝに有合ふこそ幸ひ。ドド、ドレおれが讀んで聞かさうわい。ヨミクセヱ、光陰惜しむべき時人を待たざる理。隙行く駒つながぬ月日重なりて。一萬は十三才になりにけり。ナホスナこの道理。河津の三郎祐重といふ名ある勇者。大名の息子殿でさへ。地五つや六つの頃よりも。思ひ立たれた親の敵。詞なみ大抵の事でなければ討たれぬものぢや。コレマよう聞きや。大名の後室とも言はれる人が。曾我の太郎祐信殿へ。二度の嫁入りせられたも謀。又息子の箱王丸を。いとしなげに坊主にせうと言はれたも。敵工藤祐經に。油斷させう爲ばかり。その年月の

憂き艱苦。無念口惜しい事のある條。これ迄何ぼも芝居にして見せるぢやないかいの。繼父の祐信殿も大名。役に立たずの貧乏人と後指を差されたも。兄弟の子供業に。實父の敵が討たせたい武士の意氣地。こりやコレ陰德といふ大義心。其の上鬼王庄司左衛門というて。伊東家の老臣があつて。幼少な子供業に。晝は終日劒術稽古。又夜もすがら机の上。忠孝の道を敎へ。成人の後に及んで。兄貴を十郎祐成。弟御を五郎時致と名乘らしたも。北條殿といふ烏帽子親があつたさかいぢや。マア近い例へは。俺が樣な不粹。むくつけな親方でも。親方ぢやと思うてたもるし。こつちも又抱への奉公人ぢやと思へば。モ何事によらず引けを取らしとむない。ア、こんな事は言はいでも知れた事ぢや。ガ今の樣な話を聞けば。

おりや見遁したい〳〵。ガコレこゝをよう聞きや。首尾ようそなたが逃げ果せてからが。悲しい事は遠國生れ。しつかりとした心當も無うて。江戸中をうろ〳〵。うろつきやるを。内人の者が見付けて。イヤ申し。どこそこに居ます。といふ事を聞いて。ア、えいわい。打ちやつて置ケ。とは親方の身ではどうも言はれぬ。そりやモわが身達ばかりでない。此の廓へ來る奉公人に。親孝行か。夫の爲でない者はコレ一人もないわい。あれも孝行ぢや。これも貞女ぢやとそれなりけりに仕舞うては。こつちも遊女商賣取り置かねばならぬ。おれに成人の息子でもあつて。抱への新造呼出したり。色狂ひに身を打つと聞けば。ヤイ獄道め。ぼい捲つてのける。勘當ぢや。とサ強意見する親の身が。人樣の大事の息子殿が見えると。

きやつえらい放銭ぢやわいの。コレ頼もしさうなお客ぢや程に。随分大事にかけや。と智慧を付ける。マこんな得手勝手な商賣はないわいの。けれど。コリヤコレ浮世の身過ぎ世過ぎ。さういふ身分た此のおれでも。慈悲と情といふ事は。不断心に忘れはせぬ。マおよつというて見ようなら。此の宗六は最前言うた。鬼王庄司左衛門ぢやと思や。外に烏帽子親の。北條殿といふ様な。後楯でも出来てから。さつきの様に。思ひ込んで突つかゝつた懐劔。おれにさへつい叩き落される様な事では。まさか敵に出逢うた時。ヤセすつぽんの間にも合はぬ程に。おれがいふ詞に従ひ。ノ、コレ。〳〵。此の道をも稽古して。鍛錬を熟した上では。ぐつと〳〵尻持つ合點。サコレ。駈落の尻もつて行かうとは言ふまい。せく所ではない程に。大事の勤め。駈落せうとは無分別。お客大事に勤めてたも。ノ。ノ。サヽヽ合點がいたか〳〵。地とつど〳〵に。曾我物語の引つくゝり。讀切り講釈一方を。ワシ頼もしげある亭主なり。地二人は飛立つ忝け涙。身にも胸にもあり餘り。エヽ有難うござんすと。姉が拜めば妹も。スヱテ只伏拜むばかりなり。詞オヽ嬉しいは尤も。義を見てせざるは勇なし。わが身達の様な奉公人。を見立て抱へたと言や仰山なが。おれが目鏡も凡そ違はぬ。禮いふ事も何にも及ばぬ。ノコレ。人の目鏡に悟られぬ様。随分とも化粧けしやうも美しうして。奥の座敷へ。ソレ遣手の政は居ぬか。湯を持つて来てやれいやい。エヽマしげりは居ぬかと地呼出して。言付けるのも貴物に。花も實もある亡八の宗六生粋の。ノツタヽリ泣かぬ座敷は大騒ぎ。幸頭末社が弾く三味に。乗つて呑むやら唄ふやら。現たわいの喜見城。意見上手の親方が。こもろ情に宮城野が。妹を部屋におく座敷引別れてぞ。三重へ入りにける

夕霧伊左衛門 曲輪文章

一三

揚屋の段

〔解題〕近松の「夕霧阿波鳴渡」の吉田屋の段の改作。著作年代は明かでないが、聲曲類纂補遺には安永九年「廓文章」成ると見えて居る。操芝居で興行されたのは寛政六年五月廿八日から道頓堀大西芝居、座本竹本染次郎で、豊竹園太夫と竹本内匠太夫の揚屋の段の出語りが始めらしい。その時は外題を「夕霧伊左衛門曲輪文章」と書いて居る。後度々この外題で繰返されて居る。豊後節諸流の夕霧物も大抵大同小異である。尚夕霧物については近松名作集、下の「夕霧阿波鳴渡」の解題の條御參照を乞ふ。

地冬編笠の フシ赤ばりて。地紙子の火打膝の スヱ皿。笠ふき凌ぐ忍ぶ草。しのぶとすれどサハリ古への。花は嵐の頤に。今日の寒さを喰ひしばる。はみ出し鍔も神さびて鐺つまりし ナホスフシ師走の日。地胡散らしく吉田屋の内を覗いて。詞喜左衛門宿にか。ちよつと逢ひたい。喜左。喜左と鼻に。地扇の横柄なる。地男ども口々に。詞ヤア何ぢや。風の神か鳥おどしを見る様な態で喜左衛門に逢ひたい。ハ、、、。テモ横柄な。オ、さうぢや／＼。百貫目も遣ふ大盡のいふ様な。エ、阿呆らしい。地棒まかされなと言ひければ。詞ホ、百貫目がそれ程に尊いものでもない。喜左衛門といふべき者でいふ程に。さりとては逢はしてくれい。イヤこいつが／＼。様々の事をぬかしをる。それ程逢ひたくば逢はしてやらう。こんな目に逢はしてやらうと。地竹箒ふり上げる。喜左衛門飛んで出で。詞ヤア待て／＼今日は大事の餅つき。ひよつと怪我でもあつては悪い。又ねだり者かも知れぬ。麁相を 地すなと押しとゞめ。詞喜左衛門に逢ひたいと仰せあるは。どなたでござります。地どなたでござると笠を覗いて。詞ヤアお前は伊左衛門様。何と喜左。なつかしさに逢ひに來ました。ア、お懐しや／＼。京大佛も馬町に御逼塞と承り。夕霧様よりは數通の御状飛脚も二三度。奈良大津まで尋ねさせ。たつた今もお噂。先づお馴染の小座敷で。二年積るお物語。サア／＼奥 フシ奥と袖引けば。コレ喜左。さりとては紙子ざはりが荒い荒い引けば破れる摑めば跡にしはす浪

人。文弥昔は鑓が迎ひに出づる。今はやう〳〵長刀の地草履をぬいで編笠の林吉オクリ中の。へ座敷に通りける。地おや。寒むからうと喜左衛門。縮緬に紅絹裏の。羽織をふわと打ちかくれば。詞是はいはれぬ。寒晒の伊左衛門少しも苦しからねども。志を着いたすと。地戴いて着る有様。喜左衛門つく〴〵見て。詞エヽ浮世ぢやな。誰あらう藤屋伊左衛門様に。この吉田屋喜左衛門が着せます羽織。たとへ蜀江の錦。二重鶴の古金襴でも。戴いて召しませうか。地ホンニ涙がこぼれますと。目を摺るを見てコレ喜左。詞アヽ愚痴なぞや愚痴なぞや。此の紙子の仕合せ。さら〳〵無念に存ぜぬ。總じて重たい俵物。材木でも牛馬が負ふは珍らしからず。犬か猫かゞ負うたらば。是ばと人が手を打たう。おれも丁度その通り。七百貫の借金負うて。びくともせぬはおそらく藤屋伊左衛門。日本に一人の男。此の身が金ぢや。總身が冷えてたまらぬ〳〵。アヽいから冷えるわいの。ヤア總身が金とは忝ない。喜左衛門が餅搗に大きな金が御入りなされた。コレ喫。まだ蓬莱は飾らねど。先づ正月の心。三方飾つて持つておぢや。地アイと女房が文臺木に。穂長折りしき橙柑子蜜柑や何やナシ親搗栗。詞是は〳〵お珍らしや伊左衛門様。ようお出でなされました。先づ御祝儀の地お盃を致しませう。詞



イヤコレ内儀。喜左衛門といひこなたといひ。戀に。蓬莱とまで氣が付けども。夕とも霧とも得いひ出さぬ。仄に聞けば夕霧は。自が事を氣病にして。命危ふしと聞いたが。きつう重いか但し又。無常の夕霧と消失せて了うたか。歎きをかけまいとて言出さぬか。誓文で泣くまい語つて聞かしや。泣かぬ。地泣かぬといふ聲もフシ氣遣ひ涙濁りける。詞イヤ是はお道理。夕霧様の御氣色も。秋の頃はさん／＼で。勤めもお引きなされしが。寒に入つてちと御快氣。即ち阿波のお侍様。正月もなさる筈で。今日は私が方へお出でなされてゞござります。ヤアそれは誠か。眞實か。ハテ嘘か誠か隣座敷。ちよつと覗いて御覽じませ。地伊左衛門はつと急いたる顔色にて。スヱテ暫し詞もなかりしが詞ナウ内儀。天地開き始まりてより。誠のある傾城と。迦陵頻伽の雄鳥は。繪に書いたも見た者がない。總嫁の様な傾城めに。モ微塵も心は殘らねど。知つての通りあいつが腹から出た悴。しかも男子で明くれば七つ。遣手の玉が才覺で。里にやつたとやら。定めてやつたも僞り。捻殺してかな棄てつらう。阿波の客といふも合點。この前身どもと張合うた。阿波の大盡平といふもの。アヽつら／＼思へば傾城買ひより紙屑買ひがましぢや。なぜと言や。金出して此方へ取る物とては狀文ばつかり。七百貫目が紙屑では。富士の山を張抜きにせうと儘ぢや。仕合せの悪い時。何で損をせうも知れぬ。無用の涙で紙子の袖を濡らした。繼目の離れぬ其の先に罷り歸らう。詞アヽ申し／＼。それはあんまり慳貪と申すもの。先づ夕霧様に逢はせませう。イヤ／＼慳貪ならば夕霧より。蕎麥切りに致さう。それはあんまり御短氣な。奥のお客は平様ではござりませぬ平でも坪でも此方仕度はようござると。地拗廻る其の内に。奥座敷には手を叩く。アレ禿衆はどこにぞと。言ひつゝフシ内儀は奥座敷。地亭主も何と氣の毒顔。アヽ折角御機嫌よかつたに又例の御癇癪。詞たとへどの様にお腹が立たうとも。此の喜左衛門に御免じなされ。何にも言うて下さりますな。地ちとお氣のしづまる様お横におなりなされませ。詞アノ大病の其のうへに。もしもの事があつたらば。アヽ儘よ。ドリヤ首尾して參りませうと。地枕當てがひ喜左衛門。心殘して。フシ奥へ行く。過ぎし夜すがの連彈を。思ひ出して伊左衛門。腹立ち紛れに調子さへ。あはゞ如何して斬うしてと。胸は二上り三下り。今

の憂身も心から。スヱ思ひ廻せば奥の間の唄の唱歌に合の手や。合唄可愛男に逢ふ夜の閨より。つらい世の習ひ 合

詞それよアノ唄で思ひ出す。去年の月見は奥座敷。賓薫隠なを夜と共に。飲み明かしたる大騒ぎ。太夫とおれが連弾で。弾いた時の面白さ。弾く其の主は変らねど替つたおれが身の上。あいつが心底。マあの様にあらうとは。唄思はぬ人にせき留められて。今は野澤の一つ水。詞アいか様さうぢや。戀も誠も世にある時。人の心は飛鳥川。變るは勤めの習ひぢやもの。いつそ逢はずと去んでくりよ。アイヤ〱。喜左衛門夫婦が志。逢はずに去んでは此の胸が。唄濟まぬ心の中にも暫し。すむはゆかりの月の影。上ナヲ詞むざんやな夕霧は。流れの昔なつかしく。表立つ心頃の闇の。清きは朽ちせぬ縁と縁。

胸と心の相の山。間の襖の工合よく。明け暮れ戀しい夫の顔見るに嬉しく走り寄り。我が身を共に裲襠に。引締ひ寄せとんと寝て抱き スヱテしめしめ寄せ泣きけるが。詞申し伊左衛門様。目を覺まして下さんせ。わしや煩うてな。とうに死ぬる。フシ筈なれども。詞今日まで命ながらへしは。今一度逢はして下さんす。神佛の控へ綱。コレ懐しうはないかいな。顔は見度うはないかいなと。揺起し〱抱き起せば取つて突退け。詞ヤコレそこな夕霧殿とやら夕あし殿とやら。節季師走にこたたの様に際ではござらぬ。七百貫目の借錢負うて夜晝稼ぐ伊左衛門。こんな時寝ねば寝られぬ。邪魔なされた惣嫁殿と。詞ころりと傾けて。ノこちら向き。詞身に覺えはなけれども。恨みがあらば聞きませう。詞イヤ〱〱寝さしはせぬ。寝さしはせぬ。コリヤ何とする、此の體になつても藤屋伊左衛門。今の様に奥座敷の客に。踏まれたり蹴られたりする傾城に近附きは持たぬ。こゝな萬歳傾城。萬歳ならば作おおや。通りや〱〱〱と言ひければ。

詞ムウ此夕霧を萬歳傾城とはえ。萬歳傾城の因縁知らずか。知らずば言うて聞かさう。侍の足にかけて蹴られるを。萬歳傾城といふぞや。萬歳誠に目出度う候ひける。詞しかも足駄はいて蹴るやら。萬歳年立ち歸るあしだにて、誠に目出度う候ひける。詞しかし何も身すぎぢや。あんなよい衆には蹴られても損はいかぬ。慾も知らねば身が立たぬ。萬歳よく若に御萬歳。年立ち歸るあしだにて誠に目出たう候ひける。詞商人もける。伊左衛門もける。〱〱。コレ喜左。餅でも米でも早うやつて去

なしやいのと。地譯も涙の捨て詞たばこ引寄せ吹く煙管。そらさぬ體にて。ノン居たりける。ナハリ夕霧涙もろともに。恨みられたり啣つのは。色の習ひと。言ひながらそれは浮氣な水あさぎ。派手な浮名が嬉しうて。人の譏りも。世の義理も。白紙に書く文の傳返事とる手も心せき。口舌の床のよしあしも。嬉しいに付け。悲しいにつれて。忘れた事はない。それにお前の惡性を。わしが案じは移り氣な外にもしやと言ひがかり（存中合はして寢て見ても。ついそれなりに張弱く。仲直りすりや。明けの鐘憎うてたらぬ鳥の聲。何の鳥が意地惡で。鳴くぢやなけれどきぬ〴〵の。去なせともない心から。儘にならぬは色の意地。廣い世界に住みながら狹う樂しむ誠と誠。）それがからうじて內方の首尾は不首尾と結ぼふれ。ナホス上

地勸當の身とならの葉やこの手柏の二人が中。暇乞ひさへ泣くばかり。サハリそれから絶えて音信なく。この夕霧をまだ傾城と思うてかほんの女夫ぢやないかいな。明くれば私も二十二。十五の暮から逢ひかゝり儲けた子さへ早や七つ。誠をいはゞ此の頃は。一門中の状文にも。伊左衛門內よりと書いても人の咎めぬ事。合私に恨みがあるならばこな樣にも恨みがある。去年の暮から丸一年二年越しに音信なく。それには幾瀨の物案じそれ故にこの病ひ瘦せ衰うたが目に見えぬか。煎藥と煉藥と針と按摩でやう〳〵と。命繋いでたまさかに逢うてこなんに甘えうと。思ふ所を逆樣な。コリヤ。むごらしいどうぞいの。私が心が變つたら踏んでばつかり置かんすか。叩いて腹が癒るかいな。コレ死にかゝつてゐる夕霧ぢや。笑ひ

顔見せて下さんせ。エヽ。エヽ。エヽ心づよや胴慾な。氣強い心と啣ち泣き空に知られぬ袖の雨。隈なき夜半の月影も曇る。フシばかりに見えにけり。地かゝる所へ下女はした遣手禿に女房も。きほひかゝつて喜左衛門。詞申し〳〵伊左衛門樣。伊左衛門樣。お前の親御妙順樣よりお人が參り。御子息樣も母屋へ引取りあなたも御勘氣赦りました。合ほんにそれいな太夫樣。お前も身請の埒が明き。大抵嬉しい事ぢやない。オヽ〳〵〳〵。この喜左衛門が精力で。本復さして見せませうと。地家內が勇む勢ひにつれて本復伊左衛門悦びの。眉を開くや扇屋夕霧。名を萬代の春の花見る人。袖をつらねける。

源頼家
源實朝
鎌倉三代記　八ツ目　一四

三浦別れの段

〔解題〕安永十（天明元）年三月廿七日から江戸豐竹肥前座初演。作者未詳。紀海音の「鎌倉三代記」（享保三年）とは別物、内容上「近江源氏先陣館」（浄瑠璃名作集、下卷所收）の續篇とも見られる作柄で、大阪の夏の陣を材題として、世界を鎌倉に取つて趣向を立て、坂木城を大阪城に、石山の陣を茶臼山の本陣に、また鎌倉を江戸に當て、人物としても、北條時政は德川家康、源頼家は豐臣秀頼、佐々木高綱は眞田幸村、三浦之助義村は木村重成、時姫は千姫をモデルとしたものと取れる。
本曲は十段に分れて居るが、時政の女でしかも坂木城の勇士三浦之助と許嫁の間柄である時姫が戀と孝との間に挾まれて苦悶する悲劇の主人公として居る點に特色を發揮して居り、こゝに收めた七段目切の三浦別れの段が山である。而してこの段に身代りに殺した藤三郎となつて時政を欺いて居る佐々木高綱が現れて、時姫と共に堅い決心を以て北條時政の許に入込んで、時機を窺つて鐵砲で討取らうとしたが、運勢强き時政を父も討じた。そして頼家は蝦夷へ渡り、時姫は自害し、高綱は出家するに終つてゐる。

三重へ入相過ぎ。されば風雅の歌人　一文字に取つてかへす。心は更に後れ　時ぶ物音にも。胸にこたゆる二世の緣は。戀とや聞かん虫の音も。本フシ澤の　ねど若し落人と人や三浦が孝行の。念　心時姫走り出で。見紛ふ方なき武者ぶ蛙の聲々も、修羅の巷の戰ひと。身　力通ず母の軒。嬉しや爰ぞと氣の張弓。りの。ヤア三浦様かと駈寄つて。抱起に引締むる兜の緒。若宮口の戰場より　初めてがつくり門口に。フシかつぱと　さんも大男。詞コレ時姫でござんす。

地といへども正氣あら悲しや。詮方なく間も有合はす幸ひ氣附けの獨參湯。注ぎかけたる藥水の。一滴五臟に フシ泌渡り。地むつくと起きて。詞母人はいづくに。オヽお氣が付いたか懐かしやと 地鎧にひしと フシ縋りつく。詞ムム思ひ寄らぬ時姫殿。爰へはどうして 地問ふ間も惜しや母人に。對面せんと行くを引留め。詞時姫殿とは聞えませぬ。何ぼお嫌ひなされても。私はお前の女房ぢや。夫の代りに母樣の。介抱に來たが何の不思議。ムヽ。すりや此の程より附添ひ居るか。シテ。母人の御機嫌は。今すや〳〵と御寢なつて。お食はどうぢや。アイ。何差上げてもいやとおつしやる。今朝はやう〳〵粥の湯を少しばかり。ハア聞きしに違はす。それでは御本復覺束ない。サア。されどもお氣の御實正なは。獨參とやらの力。藥の驗は目のあたり。今お前のお氣の付いたも。扨は。母に與ふる藥で。精心涼しくなつたるも。思はず知らず親の御慈悲。ハア勿體なし勿體なし。お休みならば。お寢顔なりと拜まんと。長地母も我が身もこれぞ此の一世の別れと思ふにぞ。さすがの勇氣も恩愛の肉身。分けし フシはら〳〵と。地先立つ涙案内にて。物音響かば驚き給はん。靜かに。〳〵と フシ心鎭めて病所の口。地立寄れば母の聲。詞嫁女嫁女。オヽ嬉しやお目が覺めましたか。三浦樣がお歸りぞや。義村參上仕る。地フシと明ける隔てをはたと閉しヤレ此の障子明けまい〳〵。詞そも三浦が歸りしとは。坂本の城へ歸りしか。よも爰へ來る三浦ではあるまい。必ず麁相な事いふまいぞ。コレ嫁女よう聞きや。夫平六兵衛殿は先君の後家人。後家の身となり幼少の。三浦を育て暮す内。宇治樣よりたつての御所望。賴家公の近習となし。今より二代の忠臣との。お詞が有難さに。坂本の城中へ。御本公に參らす時。わらはも共にとありつれども。イヤ〳〵。悴三浦は人に勝れて。孝行深き者なれば。母が傍に附添はゞ。まさかの時に親に引かされ。未練の心付く時は。地却つて親子が弓矢の名折れと。此のまゝ故鄕に引殘り。別るゝ時もくれ〴〵と。詞必ず〳〵。親ありと思ふなよ。母が事は忘れても。お主に忠義を忘るゝな。煩ふとも死ぬるとも。知らせもせぬぞ便りもすなと。言聞かした敎訓を。よもや忘れう樣がない。それにうか〳〵戾つて來る三浦ではない。ソリヤ人違ひ。もし又來たが定なれば。京鎌倉。兩家分目の大事の軍。戰場に向ひながら。さす敵に後

を見せる。狼狽た性根ならば。子ではないぞ。親でない。母は病ひに臥しながら。日毎に人の取沙汰を。餘の名は聞かず我が子はいかに。三浦は手柄したるかと。佛神に祈誓をかけ。おのれやれ早う死んで。未來の夫に我が子の自慢せんものと。今際の樂しみ心の嬉しさ。その未練な倅が有様。何と夫に話されう。最早この世で。預合はす子は持たぬぞ。この蚊帳の内は母が城廓。その穢れた魂で。この境一重破らるゝならば破つて見よ。ヲクリと首筋手筋の程を締めて引つかついだる蚊帳の内泣く音。フシより外いらへなし。地母の教訓に寢し。三其のお詞忘れねばこそ。故郷を出でゝ今日まで。一度便りも致されども。お命も危しとの。噂を聞くに胸迫り。今生で御無事なお顔を。たつた一目拝みたさに。眼くらんで。侍の道を忘れし不調法。御病氣のお氣を揉ます。不孝を御免下されかし。地イデ戰場へ駈向ひ華々しき高名して。追付け凱陣仕らん。その時目出たく御對面お暇申すと立出づる。時姫あわて抱きとめ。なう待つて下さんせ。詞折角顔見た甲斐もなう。もう別るゝとは曲もない。親に背いてこがれた殿御。夫婦の固めない内は。モどうやらつんと心が済まぬ。ヲク、キ短い夏の一夜さに。忠義の缺くる事もあるまい。サハリ是程までに附纏ふ私が心。思ひ。やつてくれもせで。ナホス心强やと緋緘に。褒紫の色フシ深き。詞オゝ切なる心は察したれども。出陣は延ばされず。夫婦となるは凱陣の後。暫しの間と相待たれよ。イエ／＼それでも。ハテ聞分けなし放されよ。と地振切り／＼駈出すを。又抱止めて三浦樣。詞追付け凱陣とは僞り。お前は今宵討死に。行かしやんすのであらうがなと。地いふ聲高しと口に手を。覆へどとまらぬ涙聲イヤ／＼。是が泣かずに居られうか。討死の門出には忍びの緒を切ると聞く。殊更兜に名香の香るは豫ての御物語。思ひ切つた最後のお覺悟。私もお前に連添ふからは。何の未練に留めやせぬ。留めやせぬなぜ。あからさまに打明けて。此の世の緣は是限り未來で夫婦になつてやろと。一言いうては下さんせぬ。やつぱり敵の娘ぢやと疑うてかいの聞えませぬ。父上の事は打忘れ日本國に親といふは。奥にござる母様より外にはないと思うて居るに。餘り氣强い三浦樣。お前を先立て跡にのめ／＼生きて居る時姫ぢやと。思うてかいのと身を震はし。積り／＼て憂さつらさ。鎧の膝に夕立のフシ涙波み出す如

くなり。詞オヽよい推量。いか程親切を盡しても。三浦が疑ひは晴れぬわい。アノ又私に疑ひが。オヽ晴れぬ仔細いひ聞かせん。ガそれも詮なし。もうさらば。イヽエ待たしやんせ。イヤサ放せ。イヤなうコレ。長うとめはせぬわいなう。どの樣に思うても。アノお變れなされ樣。もう母樣は今日明日のお命。何ぼ潔ようおつしやつても。討死と聞き給はゞ。お歎きが思ひやらるゝ。地今宵一夜は夜伽遊ばし。同じ事なら御臨終の跡で。死んで下さんせと。スヱカヽリ言ふも泣く／＼義村も。父母に受けたる身體髮膚。死目に逢はで別るゝかと。行きつ戻りつとつ置いつ。又もや咳の聲すれば。是こそ聲の聞納めと。思へば弱る後髮。せめて暫しは餘所ながら。萬分一の恩報じ。御藥なりと溫めんと。心の内にくる珠數の涙。

忍びの白らオクリ短夜フシへ既に更け渡るフシ丑三つ告ぐる。夜嵐の闇を窺ひ立戻る二人の局。めい／＼一腰脇挾みハズミ見やる。傍の薄原。井筒の側に鍵縄引つかけ。下より傳ひ駈上るは。詞ヤア富田の六郎殿。シイ高い／＼。ノル姫を奪ひ返す事藤三めに仰付けられたれど。心元なく横目の使。時政公の御指圖かねて覺えし忍びの術。小松道より半丁ばかり此井筒まで切拔かせ。忍び入つたる術の手つがひ。三浦が爰に來りしは。鯨網で鯨の大功、御身たちは宿はづれの。出口々々に番を付け。姫の安否を相待たれよ。ナホス地合點々々と點頭き合ふ後に立聞く隣のおくる。人こそ來たれ何者と。咎むる内にもフシ透さぬ身構へ。詞アヽ聊爾なされなお味方の者。ムヽ味方とは傍輩の女中か。御末か。名は何と。イヤ。私は今日の役目

を崇むる。安達藤三が女房。夫に力を付けん爲。疾くより爰へ忍びの女。勝手覺えし裏口四方。御案内申しましよホヽヽハヽヽヽ出かした／＼最究竟。コレ／＼局。我に任して斯う／＼。ナホス地と言ふもひそ／＼別るゝ局。おくるが案内に富田の六郎ハズミフシ裏口さして忍び入る。フシ斯くと白齒を、染めかぬる。思ひに迷ふ。フシ時も時。地姫に見入れた藤三郎。尻付き小馬の綱目して。詞お姫樣。何とその守り刀、確かな證據でござりませうかな。それを印に北條樣から。お迎ひに來た藤三郎。サアサヽござりませ。地と手を取れば振放し。詞三浦之助義村が妻の時姬。たとへ父上でも敵味方。敵の家へ何の歸らう。迎ひの人もあるべきに。名も知らぬ新參者。返事に及ばぬ歸れ／＼。アヽイヤ／＼申し。そりやお前惡い思

ひ付きぢやぞえ。鎌倉方の御評定には。坂本の城は追付け落ちる。お前の大切に思はしやます三浦殿は。今日明日の内に首がころり。その手筈ちやんとしてあるげな。何ぼ可愛がらしやつても。首のない男に心中立てるは。跡の月の富の札を買ふ様なものぢやぞえ。そんな危いものより。男に持つて。マ何不足のない藤三郎。クセ時姫を取返して戻つたらば。其の褒美にばし汝が女房に遣はす間。心の儘に樂しむべし。ナホスとの御上意。父御にきつと約束して來たからは。地殿御といふはコレこの藤三。サハリお前への心中に。顔に入黒子して來たわいな。詞イヤ又美しい物でもある。地いやでも應でもかたげて退く。サア〳〵サ、、、。フシお出でと付き纏ふ。詞寄るな〳〵推參者。主人に對して慮外の科。時姫が手討にする

ぞ。エ、イ。奴はお前は。首のない男が好きぢやな。いかに下が肝心ぢやとて。胴ばかりを抱いて寝ようとは。ヤモ胴慾な御心底。地御免々々と言はせも立てず。隠せし刄にわつとばかりフシ頭抱へて逃げて行く。地時姫せき來る涙ながら。父のしるしの封劔を打守り〳〵。詞エ、聞えぬ父上。此の刀を賜はりしは。三浦様と縁切るしるしに。母様を殺して歸れとある難題は。刄の色に顯はれて。胸を切裂く御賜物。地尤も親の許さぬ夫。思ひ初めた不義の科。お憎しみあるならばお手討に遊ばすとも。恨みとは存じませぬ。夫を捨てて歸れとはお情に似て情ない。徒ら者の成敗にあの下衆下郎の妻となし。世上へ恥を見せしめとは。餘りむごい御仕置。とても繋がる縁ぢやもの。夫と一緒に自害せいとおつしやつて下さら

ば。それこそ誠の親の慈悲、恨めしい父上様。明日を限りの夫の命。疑はれても添はれいでも思ひ極めた夫は一人。あの世の縁を三浦様、必ずやいのとばかりにて。既に自害と三浦之助。しつかと押さへヤレ早まるまい。詞只今の一言にて。日頃の疑ひ晴れたるぞ。スリヤ眞實親達も。夫には見かへぬな。ホウ神妙々々。コレ時姫、今死ぬる命を永らへ。三浦が最後を見屆けた上。夫の敵討つ氣はないか。ム、敵を討てとは。そりや誰を。オ、外までもなし。鎌倉の大將北條時政。エ、イホ、驚きは理り。誠三浦が女房ならば。夫が頼む一大事サ違背はあらじ。去年來佐々木高綱。時節を考へ付狙へども。中々討つ事能はざる武運強き北條殿。佐々木が力に叶はねば。この討手は日本に。御身ならで外になし。迎ひの來

るは究竟の時姫。招きに應じて立歸り。父に近附き油斷を見て一刀。直ぐに其の太刀わが咽に刺し貫いて自害せば。これ親を討つにあらず。時あつて親子主從刺違ゆるも武門の道。頼みといふは是一つ。得心なれば未來はおろか。五百生まで誠の夫婦。いやなれば此の座ぎり。親に付くか。夫に付くか。落付く道はたつた二つ。サア返答いかに。思案いかにと 地 せりかけられ。どちらが重い輕いとも恩と戀との義理詰めに。詞は涙諸共に。 詞 思ひ切つて討ちませう。北條時政討つて見せう。 地 父様救して下さりませとわつと叫べば。 詞 オオ出かされたり天晴れ。 地 と天にも上る。 フシ 勇みの顏色。 地 思ひがけなき小陰より窺ふおくるつつと出で。 詞 聞く人なしと思ふは不覺。最前よりの一大事残らず聞いた時姫殿。覺悟召されと 地 言捨てゝ。行くを透さず三浦之助。小腕取つて引敷けば。コレ〳〵〳〵〳〵六郎様。 詞 こゝ構はずと工の次第を北條様へ御注進。 地 心得こなたに富田の六郎。井筒の許に寄るかと見えしが。下より突出す鑓先に。 フシ 虚空を摑んで息絶えたり。 地 三浦之助聲をかけ。 詞 豫て申合せし計略。今日只今整うたり。佐々木四郎左衛門高綱殿。イザこなたへ 地 と招ずれば。井戸よりぬつと藤三郎。始めに變る優美の眼中。おくるも退つて式臺に。千萬人に秀れたる威風。 フシ 備はり見えにける。 地 眞中にどつかと坐し。 詞 時姫の不審尤も。あれに居るおくるが夫藤三といひしは。面體我に見紛ふばかり。似たるを幸ひ。價をくれて命を買取り。去年。石山の陣にて北條家を欺きし。佐々木が贋首こそかの藤三郎。ア、僅かの恩に不便の最期。 地 女が心思ひやる。 詞 龍は時を得て天地に蟠り。時を失へば守宮蚯蚓と身を潜む。我が君の爲に軍慮をめぐらし。肺肝を碎くと雖。頼家公の武運つたなさ。なす事する事。一つもならず。此の度の合戰は。坂本城滅亡の時。天より亡ぼす主人の運命。へエヽ無念の鬱憤やむ事なく。最早計略の術盡果てたる詮のつまり。百計の中のたんだ一計。おくるに篤と申し合め。 地 死んだる藤三が名を借つて。うぶの土民に拵へ濟まし。指にも足らぬ端武者どもに。やす〳〵と生捕られ。時政が前に引出されしは。地獄の上の一足飛び。 詞 未だ天道捨て給はざるしるしにや。さしも明察の北條殿。匹夫下郎に相違あらじと。コレ。この面に入墨を。さゝれし時の其の嬉しさ。この印ある時は白晝に往來するとも。佐々

木と咎むる 地若者もなし。我が命だにあるならば時節を待つて。再び京都の旗下に翻さんと心の笑み。詞折ふし姫を迎ひの使者。言付けられしはハア是幸ひ。百萬の大軍より討取りがたき一人を。討つ謀は爰にあり。地と密かに三浦へ内通し。謀合せし計略はづれず。偏の心底極まる上は。大願成就時來れり。ハヽ。ハヽ。ハアヽヽヽ嬉しゝ／＼悦ばしと。勇める面色威あつて猛く。げに名にし負ふ坂本の フシ 總大將と類ひなき。詞おくろも末座に顔を上げ。詞私が夫は水呑み百姓。かつ／＼の生業さへ。長の病氣の貧苦の内。不相應な御恩のお賞。金銀に命は賣らねど。夫も元は侍の端くれ。生れ付いて臆病で。弓引く事も叶はぬ非力。我が身を悔むこの年來。地誰あらう佐々木樣に面ざし似たが仕合せで。討死の數に入るは

一生の本望と。にこ／＼笑うて逝かれた顔。今見る様に思はれてあなたの御顔を見るにつけ。思出されて懐しう。ござりますると言ひさしてひれ伏す蟲の目に涙。人の歎きも身にこたへ何れを見ても義理故に。死なねばならぬ定りか。開く御運が定ならば討死を思ひ留つてたべ三浦樣と。口說き歎けば愚か／＼。詞生は難く死は易し。生殘つて大事を計るは。佐々木殿程の。器量なくては思ひもよらず。三浦などが及ぶべきか。一旦思ひ極めし討死。再び返さぬ姿を見よ。と 地明くる鐘の引合せ亂着は染まる紐に。雫を隈取る數ケ所の矢疵。姫は悲しさやる方なく。討死の氣は付きながら弓矢の家に生れし身が。是程の手を負ひ給ふと知らぬ女の淺ましさと。縋るを拂ひコレ／＼おくる。詞奥へ參つて母人の。介抱賴む

早く／＼。イヤナウ佐々木殿。若宮口の合戰。事急に及び。必死の戰場。斬死と極めし所に。貴殿より大急の早打。シャ此の謀の成就を。見届けずして死ぬるは不忠。一つには母に今一度。地忠孝二つに命をのべ。血汐を隠す若[illegible]の鎧。故郷に飾る心の錦とは知らずして敵方に。後を見せしと謗られん事。末代までの武門の疵。へヽ、思へば無念口惜しゝ。此の上の願ひには是より又も若宮の森に向ひ。一身[illegible]すだ／＼になる迄斬つて斬り死[illegible]の先途を見ず。相果つるも武士の意地。眞平御免下さるべしと 地思ひ込んだる。はら／＼涙。詞オヽウ尤も至極高綱も。地心底推察仕る。詞エヽ惜しむらくは今少し。この[illegible]かりせば。あつたら勇士をやみ／＼と。討死はさせまいもの。地殘念さよとりながら[illegible]

はれな。詞京都武士に時政の眞實面體見覺えしは御邊一人。三浦が首を討取つて實檢に入れるならば。いよ〳〵我に心を許し。近寄る術の一つとならん。地時には御邊の首をもつて。討取らば最期の大功忠義の第一。我はもとより敵に入り。心は佐々木。面は此のまゝ藤三郎。詞三浦が首は。安達藤三が討取るぞ。ハ、ア〳〵忝し悦ばしや。最期の本望この上なし。冥途で再會々々と。地互ににつこと顔見合せ。笑ふぞ武士の。フシ涙なる。地涙の中に時姫は心を定めオツオそれよ。詞親を捨て命を捨て。主に從ふは弓取りの道。夫に從ふは女の操。不孝の罰の當らば當れ。夫故には幾奈落の。責苦を受くとも厭ふまじ。父の陣所に立歸り。仕畢せてお目にかけう。ガ一念通るか通らぬか。女の切先試みんと。

地緣の鉢石心の目當。突出す鑓を障子越し。しつかと取つてオ、念力見えた。詞まつ此の通り仕畢せよ。地フシと脇壺ぐつと貫いたり。地ナウ母様勿體なや。コハ何故と三浦が驚き。おくるも周章て立ちつ居つ。血止めよ氣附けとフシ立騒ぐ。詞ア、何驚くことがある。定業極まつた死病。人參の精力で。死兼ぬる此の母が。苦痛を助ける止めの鑓。女でこそあれ侍の母。疊の上の病死せうより。我が子と共に。討死と思へば。地此の切先は名醫の鍼。詞ナウ嫁女。是が勿體なうては。仕畢せる事心許ない。産みの親御を振捨てゝ。何の恩もない姑を。誠の母と此の程の。起伏し介抱心遣ひ。親切とも過分とも。どうも禮の言ひ樣がなさ。こなたに功が立てさしたさ。三浦が母を仕止めたれば。産みの父北條殿へ。孝行の一つは立つ。

ガ又。此の母への返禮には。此の通り功を立てゝ下され。地親を忘れて義を立つる手本の鑓先。オ、天晴れ手の内健氣の働き。出かした嫁女。出かしやつた三浦之助十人にも百人にも。又とあるまい忠臣を子に持つて。死ぬるおれは仕合せ者果報者。とても果報のある事なら女夫この世で末長う。孫産ぶを冥途から見るなら何ぼう嬉しかろ。御運開くる時あらば。三ヶ國四ヶ國の。主となしても惜しからぬ若武者を。此の儘むざ〳〵戰場の土となすかと手を取つて。見交す顔に義村も。三才五才の其の昔。御膝に抱かれし。乳房の惠みに人と成り。恩を報する隙もなく。お傍を離れて幾年月。御懷かしさはいかばかり。只今母の胎内に立歸つたる心地ぞと。膝にひつしと抱き付き大聲上げて男泣き。敵の娘と思し召し。御憎

しみも引替へて重ね〲の御慈悲心。詞御恩をいかで忘るべきせめて半年添ひもせで。地思へば短い親子の緣。詞コレなう。長い別れぢやないわいの。最期所は變るとも。我が子も嫁も地翌は一緒に死出の路。詞蓮の臺で觀音の。酌人は此の母。嫁入りの輿を。未來で待つて居るわいの。コレ必ず早う。追付き跡から參ります。地と三人顏を見合せて一度にわつと。叫び泣き フシ是ぞ。此の世の名殘なる。地佐々木も悲歎にくれ居しが。四方をきつと打眺め。詞既に四更も過ぎたれば。東の陽氣はこれ鷄鳴。南北西に人氣立つは。ハレ怪しや。東國の軍勢。坂本の城間近く寄すると覺えたり。地歎きをとゞめ出陣の用意あれと言渡し。庭の井筒をしつかと踏まへ。古木の松ケ枝鼯の。オクリ木傳ふ。ヘ如く駈上り。ハア、寄せたり〳〵。東は志賀越え辛崎口。伊達の一黨奥州勢。勢田ケ崎まで滿ち〳〵たり。南は横川比良の口。大將の旗眞先に坂木さしてひた寄せに。北は丹波路龜山街道。西は京道淀八幡。皆人ならぬ フシ所もなし。詞日本一度に寄するとも恐るゝ敵は只一人。勝負の一擧は翌にあり。ヤア〳〵三浦。たとへ心は剛なるとも。深手に弱り働き得じ。後詰の副將城中より加勢を乞はんは如何に〳〵。コハ。佐々木殿とも覺えぬ一言。必死と定まる三浦之助。かほどの手疵をなに屈托。オヽ萬夫不當の大ナホス丈夫。地早や打立たんと高綱が。フシ勵ます勇聲せき立つ若武者。地嘶くなうと時姫がとゞむる鎧。合振切る振袖。合是なう今が御臨終。名殘に一日といふ聲に思はず跡へ。振返る。緣の切目は蘭奢の香り。詞無常の聲や。ナホス鯨波跡に。見捨てゝ 三重ヘ出でて行く

一五

〔解題〕　現行の六行稽古本はかういふ外題のつけ方になつてゐるが、本來「又助住家の段」は「加々見山舊錦繪」の原本にはない。これは「加々見山廓寫本」の第七段目の切であつたのを、後に兩作を撮合して上演するやうになつた結果である。

「加々見山廓寫本」は、寛政八年正月廿九日から道頓堀東の竹本愛藏座で興行された操芝居で、作者は中村魚眼、正本もこの時の刊行である。

有名な加賀騷動を材題としたものである。今日流布する「金澤實記」などいふ實錄物によつて傳へられる加賀騷動の大筋は次のやうである。金澤の藩主前田吉德の臣大槻内藏之丞君寵をたのみて主君の愛妾お貞の方と通じてその腹に生れたる勢之助を世嗣にして果は主家を横領せんとして主君暗殺を企て、延享四年五月吉德江戸より歸國の途上姚川を渡る際、野路井又助をしてその馬を水中より刺さしめて吉德を溺れしめ　これが原因にて間もなく逝去する。ついで家督を相續した長男宗辰を毒殺し（寛延二年）、更に三男重照が家を繼いだのを老女淺岡と謀つて弑しようとしたが、遂に忠臣前田對馬守等の働によつて寶曆七年陰謀露顯して一味の者悉く處刑せられたといふ。

ところで此騷動を始めて劇化したのは歌舞伎の方である。即ち安永九年に京都四條の中村猶八座で「加々見山廓寫本」を興行して居るが。作者は奈川七五三助・奈川龜助である。これを同年十二月十一日から大阪中座でも興行した。中村魚眼はこの作を採つて、後に淨瑠璃に仕立直したものと見てよいと思ふ。

本曲は操りの方では文政七年八月同じ外題で繰返されて居るが、天保五年二月廿八日からの御靈の芝居では「加々見山舊錦繪」の外題で、兩作をつき合せた趣向で上演されて居る。即ちその時の番附を見れば、梅澤村の段、中屋敷の段、水門の段、お初身賣の段、上屋敷の段、筑摩川の段、清光院の段、梅御殿の段、百姓一揆の段、又助住家の段、鶴が岡の段、長局の段、十内住家の段、鏡山揚屋の段、牡丹山敵討の段とかう分れてゐる。これが例となつて後には、「故郷錦繪」の外題で、筑摩川、又助住家、草履打、廊下、尾上部屋奥庭等を中

心として演ぜられるやうになつた。「加々見山故郷錦繪」については次の「草履打の段」に述べる。

地跡にはつきほなま中に。夫も何と言ひ寄らん。詞なければ女房も。わざとすげなう見せかけて。詞去られた内に長居も未練な。もうお暇申します。アアコレそれは又どうした事。子迄ある中。退去りするが見目でもあるまい。この求馬が挨拶を。イエ／＼構うてドさりますな。退けば長者が二人のたとへ。御縁があらばと地言捨てゝひつしよ。内儀は表口。出かゝる向うへ又吉が。悪さ遊びの走りごく。爰ぢや／＼と先に立ち。跡から付いて亡八の親方。フシ鵆を釣らせて内に入り。詞イヤコレお内儀。いつ迄べら／＼待たすのぢやぞいの。身の代の金渡したれば。もうこつちの奉公人。暇乞ひが済んだらば。サ、早う駕へ乗らんせと。地聞くよりはつと女氣の。思ひ切つても今更に。スヱテ胸を寒がる憂き涙。扨はさうかと又助が。知る程せまる胸撫でおろし。詞ム、そんなら無理隙取つたのは。お主の爲おれが難儀を救はん爲。アノ勤め奉公する氣であつたか。コレ又助殿。あつたかとはエ、聞えぬわいな。地不甲斐ない私ぢやとて。なぜ談合して下さんせぬ。お主や夫の爲ならば。勤めはおろか命でも。何の惜しみはせぬわいな。詞村方から預つた金。定めてお前の身の難儀と。思ひ切つた君傾城。私や何にも悲しうない。嬉しうて／＼地嬉し涙が／＼と跡は得言はずむせ返る。心を察し谷澤が切なさつらさ又助も。せきくる涙呑込んで。詞オヽ過分な女房。何にも言はぬ忝いと。地泣かぬ顔する男氣は。フシ泣くよりは猶哀れなり。地親の心は知らぬ子が。詞イヤ／＼大事の／＼母様を。餘所へやる事おりやいやぢや。無理もいふまい悪さもすまい。コレどつこへも往て下さんなやと。地縋り歎けば母親は。詞オヽよう言うてたもつた。よう言うてたもつたなう。コレ又吉この母はの。行きとむなうても行かねばならぬ。晩から父様と寝やらうとも。地夜の物踏み脱いで風邪引かぬ樣にしてたも。コレこちの人。虫押への薬山を。折々飲まして下さんせえ。詞オ、坊主が事は苦にせずと。隨分そなたも息災でと。

地哀其目にはほろりと一雫。思ひやる程我故と求馬がつらさ身にかゝる。涙數添ふ夕暮は フシいとゞ哀れや添へぬらん。地親方は伸びあくび。詞ハテ扨て死別れもする樣に。いつ迄言うても同じ事ぢや。サア／＼きり／＼乘つて貰ひませうと。地せつき立てられ詮方も涙隱して。詞左樣ならば若旦那樣。隨分お健で。こちの人さらばと 地ばかり目に涙飽かぬ別れの暇乞ひ。哀れを餘所につわ屋が。無理に押込む籠の鳥。タヽキ塒離るゝ憂別れ。ナウ母樣と慕ふ子を。留めるも涙。行く涙いとゞ身に泌む。母親は フシ是非も泣く／＼揺られ行く。地影見送つて主從が。心は暗きスヱテ角行燈。燈す火影も長の夜も。本フシ六つと初夜とを隔てたる。地表の方に立派の武士。人目を包む深編笠。詞又助は在宿召さるか。地御意得たしとおとなふ聲。詞ハイ又助内にをります。どなたぢやおは入りなされませ。地然らば赦し召されよと。フシ笠脫捨てゝ打通る。地それと見るより求馬は驚き。詞ヤアあなたは安田の庄司樣と。地いふに惘り又助も。詞ム、スリヤあなたが御家老樣でごはりますか。ヤ是はしたり 地マ存ぜぬ事とて無禮の段。眞平御免下さるべしと。求馬も共に身をへり下り禮儀 フシ正しく敬へば。地又助猶も手をつかへ。詞ハア拙者めは求馬が家來鳥井又助と申す者。ガ誰あらう安田の御家門庄司樣。見苦しき荒家へ。御入來なしくださるゝ段。いかばかりか大慶至極に存じ奉ります。シテ御國にはお變りなく。大殿樣にも益益御機嫌よく。御座なされますかな。ム、面色に實義を顯はし。主君の御安否を尋ぬるは。本國の樣子存じてをるか。アイヤ何事も存ぜぬ我々。ハテナア。ガマア何は兎もあれ。谷澤求馬へ某が家苞の音物。ソレ披見しやれと差出す一腰。地求馬ははつとにじり寄り。押戴いてつく／＼眺め。詞ム、緣頭に至るまで八つの梅の紋所。コリヤコレ大殿より拜領せし某が差添。オ、これよ。イヤコレ又助。いつぞやそなたに渡した一腰。何と覺えがあらうがのと。地詞の内に又助は。一腰取つてとつくと改め。詞成程々々。ござりますとも／＼。イヤモずんど覺えがござりますわい。今迄は申さなんだが。此の刀に就いて拙者が働き。イヤ申し若旦那。お悅びなされませ。早や御歸參の時節到來。ハア、地忝や嬉しやと。フシ天地を拜する心の悅び。地求馬は一間合點行かず。詞ア、コレ／＼又助。そなたばかり悅んで。此の刀の譯はどうぢ

やぞいの。ハテモどうの斯うのはごさりませぬわい。高が命を捨てゝかゝつた忠義。即ち所は筑摩川で。ホヽいかにも。身どもが手に入るサその劒。アレ〳〵お聞きなされませ。ヘヽ此の刀が手に入るからは。拙者の手柄の顯れ時。是といふも天道樣のお蔭。エヽ忝うござります〳〵。ハヽヽヽヽ。マア何よりは若旦那。大切なは菅家の一軸。片時も早うあなたへと。地詞に求馬は懷中より。恭しく一軸取出し。庄司が前に差置き。詞不思議に手に入る紛失の一軸。イザ御改めの上歸參の儀を御執成し。地偏に願ひ奉ると。主從共に兩手を突き。スエテ疊に頭を摺付ける。威儀を正して庄司友治。一軸開きとつくと改め。詞ム、こりや紛れもなき菅家の一軸。倂に落手仕つた。しかし左程迄汝等が。歸參を願ふ大殿は。即ち是に御入りと。地取出す袱紗押開けば。主は誰とも白木の位牌。求馬は不審の顏色にて。詞加能院殿東山大居士。ムムその位牌を我が君とはな。ホヽ不審尤も。五ヶ年以前大殿には。人手にかかつて敢ない御最期。ナヽ何と。すりやあの殿樣には御逝去とな。又助。求馬樣。ホイ。地はつとばかりに主從は。物をも言はず只うろ〳〵フシ途方にくれて居たりける。地求馬は猶も摺寄つて。詞シテ〳〵敵は何者なるぞ。ホヽその敵は外でもなく。此家の主鳥井又助。胸を廻せと詰めかくれば。マヽ先づ〳〵お待ち下されい。コパ心得ぬ御仰せ。シテ大殿を害せしは。この又助と申す證據ばしござるかな。ホヽ證據といふは其の一腰。ソモ一角が逆意の砌。御主君には別殿より。御歸館ある夜の道。筑摩川の水中に曲者あつて。殿を失ひ奉る。斯くと世上へ沙汰あつては。御家の大事と望月が。御病氣なりと計らひて。密に詮義致す所。此の程筑摩の川下より。我が手に入つたるサ共の劒。改め見れば求馬が差添。シヤ樣子あらんと來りしは。事の實否を探らん爲。モお恐れ多くも我が君を。討ち奉るは又助なれども。言譯立たざる證據の一腰。罪は遁れぬ求馬も同罪へエエ地是非もなき次第やと。智仁兼備の兩眼に。悔みの淚はら〳〵〳〵スエテとどめ兼ねてぞ見えにける。聞く又助は五臟六腑。裂かるゝ如く炎の吐息。求馬はたまらず駈寄つて。髻摑んで引付け捻付け。詞アノ爰な人でなしめが。大切な殿樣を。おのれが殺して置きながら。忠義顏する極重惡人。エヽ何として腹癒んと。地かよわき拳も忠義の一途。目鼻も分かず續け打ち。打たれて

斯うと一言の。身の言譯もあら涙。傍におろ／＼又吉が。詞コレ父樣。何で其の樣に叩かれさつしやる。おりや悲しい。口惜しい。コレ小父樣。もう堪忍して下されと。地頑是泣く聲又助は。思はず溜息ほつとつき。詞ハア天なるかな命なるかな。此の上は何をか包まん。筑摩川にて大殿を。コレ此の刀にて討つたるは。こなたに罪を負はせんたくみ。斯く顯はれし上からは毒喰はゞ皿。この又助が死物狂ひ。まさかの時の足手まとひ。エヽ邪魔な悴と以前の刀。地拔く手も見せず又吉が。フシ細首はつしと打落せば。詞扨てこそ／＼。肉身の子を殺し。主に刃向ふ大惡人地逃しはやらじと行合ふ竹鑓。取るより早く突つかくる。ジャ猪小才なと打拂ふ。こなたは剛氣の鋭き白刃。猶も透さぬ求馬が手練。付け入り付込む忠義の一心。いかゞはしけん又助がひるむを得たりと右手の脇腹。骨も砕けと突込む竹鑓。うんとばかりにどつかと坐す。直ぐに止めと立寄る求馬。ヤレ待て暫しと押しとゞめ。詞惡事にあらで惡事と見せしは。まつ其の如く討たれん覺悟。ヤモ下郎に似合はぬ健氣の最期。又主君の怨敵又助を。突きとめたる谷澤求馬。ホヽ天晴れ忠臣見居けしと。地手負に聞かす情の詞。聞くより苦しき目を見開き。詞ハア、コハ有難き御賢察。大殿樣を手にかけし。申譯とは恐れながら。マヽ、先づ／＼一通りサ聞いてたべ。さいつ頃お館にて。主君を讒する蟹江一角。討つて捨てんと駈行く折しも。望月源藏我をとゞめ。今討取らば變の元。歸りを待受けまつ斯うと。教への詞に從ひし。我が身の運命筑摩川。先へ廻つて川岸に今や來ると地待つフシ折から。地車軸を流す雨雷。目指すも知らぬ眞の闇。フシ間近く聞ゆる轡の音。詞是こそ慥に蟹江一角。主人の欝憤お家の仇。地今ぞ散ずる此の時節天の與へと小躍りし川へさんぶと飛込んでオクリ忍ぶ。水底早瀬の大川浪を。蹴立てゝ渡りくる。馬の諸足二指三指。さしもの名馬も狂ひ立ち。躍り上つて眞逆樣落つる水底あいろは見えず。詞勿體なや大殿樣とは露知らず。何なく首を搔切りしが。地神ならぬ身の是非もなや。なぜ其の時にこの腕が折れ碎けはせさりしぞ。百萬石の大守たる。君を害せし此の又助。日本國の神々の御罰を一度に受くるとも。よも此の上のあるべきかと腕に喰付き嚙付いてスヱテ悔み涙にくれ居たる。詞ム、扨は佞人一角と。思ひ違ひであつたるか。地さ

は知らずして手にかけしと。返らぬ歎きに手負ひは這寄り。詞コレ〳〵若旦那。思ひ違ひであつたかとは。チエヽマお情ない御一言。間違ひでなくて殿様が。何と。何と討たれませう。コレ斬られうかいの。今の今迄手柄した。忠義は立つたと心の自慢。今日は吉左右申してくるか。明日はお國の便りがと。地夢にも知らぬ身の科の。仕置は眼前コレ此の竹鋸。竹鋸の罪人と死屍に恥をさらし。諸人に斯くとサ見せてたべ。さは言ひながら女房が後で此の事聞き居つたら。嘸ぞ吠えをらう不便やと。我が苦痛より堪兼ぬる。夫の歎きを門の口始終立聞く女房が。わつとばかりに聲を上げ涙と共に駈入つて。詞ナウ又助殿。始終の様子は聞きました。さぞ口惜しかろ悲しかろ。地わしも一諸に死にますと。落ちたる刀取るより早く咽にがはと突立つる。驚く求馬又助も。扨は様子を聞いたる故。共に死ぬるか可愛やな。詞オヽお前も覺悟の其の深手。可愛い我が子や夫を先立て。何と永らへ居られうぞ。地此の世の見納め又吉が。顔を一目と這寄つて。空しき首を抱き上げ。詞コレ〳〵又吉。ま一度母というてたも〳〵。ま一度母というてたもいなう。地ほんに思へば味氣ない。斯うたる事とは露知らず。朝な夕なにいつくしみ。手しほにかけしいとし子を。連添ふ夫が此の様に殺すといふはエヽマ何事ぞ。惨いわいなと取付いて口說き立つれば又助も。詞オヽ道理ぢや道理ぢや道理ぢやわややい。主殺しの大罪人。親子は一體悴にも。苦しい最期がさせともなさ。憎うて何の殺さうぞやい。憎うて何の殺さうぞやい。長の流浪の其の内にも貧苦に暮す悲しさは。一重の物も粗末がち。頑是なき子心にも。コレ父様餘所の子の着る物は。なぜあの様に美しい。わしにもあんな着る物を。どうぞ着せて下されと。せがまれた其の時は。コヽ此の胸が張裂く様にあつたはやい。地親は此の儘果てるともせめて悴は人らしう。鑓一本もつかさうと。思うた事も喰ひ違ひ。現在親の手にかけて。殺すは何の因果ぞと。歎けば女房もむせ返り。さつきの別れの其の時に。父様なうと取付いて。詞跡追うたのが名殘とも。知らずも一度逢ひたさに。人目を忍び漸うと。説経來た甲斐もなう死別れ。一世の縁と聞くからは。長い未來で逢ふ事もならぬ事かと搔口說く。夫婦手に手を取交し。叫び歎けばほどばしる。血汐は秋の龍田山落ちて流れて。谷川もフシ紅染める如くなり。地庄司も悲歎

にくれながら。斯くては果てじと聲はげまし。詞ヤア懺悔に滅する汝が重罪。殿御歸館の道を變へさせ。人手を借つて主君を害す。誠の敵は望月左衛門。まつた又助が白狀は。反逆人の訴人も同然。功に免じて谷澤求馬。歸參は庄司が刀にかけんナコリヤ。心殘さず成佛せよと。地慈悲の一言ハ、はつと。求馬が悦び是とても。夫婦が フシ節義と添け涙。地ハアコハ冥加なや悅ばしや。詞我を計る謀叛の望月。生きかはり死にかはり。思ひ知らさでヤ置くべきかと。地怒りの面色 コハリ血走る眼。フシ折から息せき庄屋の治郎作。足もいそ〳〵馳來りコレ〳〵〳〵又助殿。詞庄司樣のお情で。堤普請を御免の上。惡事の元締望月が。絞り取つたるお金まで 地五ケ村へ下された其の悅びに扱ひ金を。合直ぐに亡八の親方へ戻していざこざ内儀の身の代。さつぱり濟んでもまだ濟まぬ。お家を茶筅で掻きさがす茶道坊主の成上り。望月。賃搗。臼取りの 地粉にしてくれうと言合せ。御家老樣へお味方と言ふもいそ〳〵 フシ勇み立ち。地庄司制してヤレ待て汝等。詞事の實否を糺すまで無事に差置く望月左衛門。地我は求馬と諸共に謀叛に與せし輩を密に今より詮義せん。最早歸國と友治の。下知に從ふ 道具屋旅用意。我は冥途へ旅立ちと。拔身逆手に我が腹へぐつと突込み引廻す。今ぞ知死期と。女房も。劍を拔けば一時に 表具カヽル惜しや此の世を秋の風散りて跡 フシなき世の哀れ。地げに忠臣のかゞ見山國の御家老。不易の礎。やがて。敵を討亡す。門出を祝する鯨波本國。指して 三重へ立歸る

加賀見山舊錦繪 六ツ目 一六

草履打の段

局 岩藤
中老 尾上

〔解題〕 天明二年正月二日から江戸薩摩外記座上場。作者容楊黛。

享保九年四月三日の事であるといふ、松平周防守の内邸に於て、局澤野（岩藤に當る）中老お道の方（尾上に）がその草履をはき違へたのを散々罵つて果てはその草履を爪先にかけてお道の方に抛つたのでお道の方はその侮辱を憤つて自害し、侍女おさつ（お初に）澤野を刺して復讐した。この事件を加賀騷動に取合せて、前記歌舞伎の「加々見山廓寫本」を飜案して、多賀家のお家騷動を足利家のそれにして脚色したもので、その大筋は次のやうである。

管領足利持氏老臣仁木將監等の謀叛によりて相模川（廓寫本では筑摩川）に於て暗殺せらる。同家の局岩藤叔父大膳と謀りて主家横領を企てたが、その密書を中老尾上に拾はれたので、岩藤は尾上に喧嘩を挑んで相手にして陷れようとし、遂に鶴が岡代參の時草履打の侮辱を加へた（六つ目）。尾上は主家の大事を思つてその場を堪へ忍び、局に歸りて遺書をのこして自害した。近仕のお初はその夜奥庭に岩藤を刺殺して主の仇を討ちて御臺より二代の尾上として召抱へられる（七つ目）。一方に於てお初の父高木十内は足利家の老臣神崎主膳の家來であつたが、主人主膳が惡人のために斥けられた後、致仕して郷里鏡山に隱棲してゐる。こゝへ娘のお初は二代尾上となつて御臺の使として乘込み、かくまひ居る持氏の弟縫之介とその許嫁操姫とを鎌倉に迎へようとする。同家に食客となつてゐた主膳の弟畑介（廓寫本の又助に當る）は、惡人にたばかられて、相模川に於て螢江一角を殺さうとして誤つて持氏を討つた科を自白して、縫之介に代つて自害して綸旨を惡人に奪はれた縫之介の罪を償ふといふに終る。九段目の十内住家の段は「廓寫本」の又助内の段の改作である。尤も現存の義太夫正本では「廓寫本」の方が後の作であるが、これは歌舞伎を淨瑠璃に仕立てたもの故「故鄕錦繪」の十内住家から出たのではない。

お初が出世して故鄕の鏡山に上使となつて錦を飾るのに、女の鑑と加賀騷動とを取合せて外題としたものであらう。

草履打の趣向は既に元祿十年正月中村座興行の「參會名護屋」に仕組まれ、その後も用ひられたものであつ



役割

露ヅ園

竹本定太夫
鶴沢林蔵
竹本友太夫
鶴沢熊蔵

長いをばゞ孫

竹本関太夫
鶴沢文吾
竹本住太夫
鶴沢文蔵

たが、本曲に於てはこれを實說と巧に結び付けて效果を收めてゐる。本曲では六つ目と七つ目とが最も名高くて、初演の時は七つ目を語つた豐竹住太夫が好評であつた。而して翌天明三年二月大阪の竹本太市座で興行された時竹本住太夫七つ目で好評、爾來六つ目七つ目のみが流行したが、後には加賀騷動の色彩を明かにするためか、前に述べたやうに筑摩川や久助內の段が取合せられるに至つた。

歌舞伎では、江戸では、天明三年四月森田座で、又大阪では同年七月十六日から道頓堀角座で「鬼一法眼」の切に六つ目七つ目だけを出し、その後は諸座で繰返され、多くは彌生狂言として演ぜられ、一年一度お宿下りの御殿女中がこの芝居を見て、ふだん錦繪であこがれて居た役者の活動を舞臺の上に見たものであつたといふ。

地求馬は跡に只一人。文の返事をとやかうとスエテ暫し木蔭に佇めり。地斯くとはいさやしらにぎて。緣の糸いふ結合す人目をそつと腰元早枝。としやおそしと走り寄り。物をも言はず求馬が顏。スエテうらめしさうに打眺め。詞エ聞えませぬ。アノ意地惡の岩藤が目顏を忍び轉び寢の。その睦言の度々に。地そなたを退けて。そもやそも外に枕

は交はさぬと。言はしやんした其の時の其の一言を樂しみに。思うて居るに悶慾な。つれないわいなとばかりにてフシ喞つも戀のならひかや。地求馬はほうど持てあまし。詞これは又嗜みやいの。人にこそよれアノ局を。イエ／＼よもやとは思へども。油斷のならぬ男の心。私しや夜の目も合はぬわいな。ハテ疑ひ深いと手を取れば。地ア、嬉し

やと寄添うて。フシ割なき仲ぞ睦まじき。不義者見つけた動くなと。聞くより二人ははつとばかり。思へど猶もそらさぬ顏。詞コレ申し必ず麁相おつしやるな。私が身にとり不義がましい。コレおしやんすな。たつた今も求馬殿と吸付いたり。引付いたり。抱付いたり取付いたり。したゝるい事の有り條。コレ此黑い目で見て置いた。サそれで

も何とあらがふかと。歯に衣著せずフシ言ひまくれば。地求馬は堪へずコレ岩藤樣。詞人の不義を改める。こなたこそ不義の詮議。エヽ何ぢや。わしを不義の詮議といへ。オヽ其の詮議は此の文と。出して見すればはつとばかり赤面すれば早枝が引取り。コリヤ潔白なお局樣ちやわいな。不義はお家のきつい御法度。サア／＼此方より申上げうかえ。サアそれは。但し拙者が言上いたさうか。サアそれは。サア。サア／＼。アヽそんならもうよござるわ。不義の詮議は互に是切り。ナア求馬殿。スリヤ申分はござりませぬかと。早枝と目と目見合して。フシ別れてこそは立歸る。神歌勇ましき。かしこき神の神ナホスいさめ。フシ折から告ぐる。地供廻り。イザ御立ちとゆふ映の。中老尾上先に立ち。多くの。女中が取圍み。

行烈カヽリ對の帽子も一樣に。群れゐる鷺の如くにて。ナホス賽のフシ鳥居前。地イザお局樣御一所と。いへど岩藤不承不承フシ立歸らんとする所へ。地來かゝる鷲の善六が兩手を土に。詞イヤ申しお局樣。最前申し上げうと存じましたれど。かの事に取紛れまして。はつたりと失念仕りました。エヽ外の儀でもござりませぬが。此の間仰せ付けられました金の儀で。ヘイ／＼／＼御受取り下さりませ。地と半分いはせず。コレ善六。詞この岩藤は局役。むさくろしい物取扱ふ役ぢやない。其の金は召使の。澤に手渡ししやと地詞數。言はぬ色なる山吹のフシ包み取出し。詞ヤモ神佛より尊う思ふこの金を。むさくろしい物などとお手に觸れられぬといふは。アヽ又格別なお歴々樣。うなる程金持つても。町人といふ者は賤し

い者でございます。地と言ひつゝ金を懐へ。合お屋敷さして。フシ急ぎ行く。地跡打見やり局岩藤。詞なんと尾上殿。町人には珍らしいアノ善六。町人は賤しい者と。モ感心した今の言ひやう。ヤコリヤほんにこな樣には差合ひであつたもの。オホヽヽヽオヽわしとした事がつか／＼と氣の毒な。ホヽヽホ。イヤ何尾上殿へ。こな樣の宿といふは金持なれど町人。假親しての御奉公。スリヤ今わしが言うた事。氣に障りやしませぬか。地と味な所へ仕掛ける意地と。思へどもわざとそらさぬ顔。詞これは又岩藤樣の痛み入ります御挨拶。何の私が左樣な事。ガおつしやる通り。親どもがお出入の緣を持ちまして。かやうな重い御奉公も。有難い身の仕合せ。根が町人の私がこと。さぞや不束な事ばかりでござりましよ。こ

の上とても岩藤様。憚りながらよい様に。地お差圖頼み上げます。と柳流しのしなやかに。フシいひ廻したる利發さよ。詞オヽ何ぢやえ。町人の娘御故。是らはぬ事を差圖してくれいかえ。エほんにつべこべ〳〵と。薄い唇ぢやなう。何のお前の御發明で。わたしが差圖受けさうな事かいなう。ヤ次手ぢやによつて言ひますが。こな様の親御と言ふは。お屋敷のお金御用を勤めやるといふ。その用達顔の高慢が。鼻の先へぶら付いて。コレこの顔に見えるわいなう〳〵。ヤ又上の事いふぢやないが。金の威光はきついものぢや。此の後とても其の金持顔やめにして下され。ヤ。ヤ。御役向はお中老。この岩藤は局役。オヽお局役。お表ならば御用人格ぢやぞや。女一通りは勿論。萬一狼藉者又盗賊などが忍び入り。サ其の時は

役柄ぢや。女ながらも御前の堅め。討止める器量がなけりや勤まらぬ御奉公ぢやが。定めて長刀の一手も心得がござらうの。オヽソリヤアノ誰に稽古なさつたぞ。ヤアノ。そのお師匠様は何とへひますえ。コレ〳〵尾上殿〳〵。エヽマこな人わいの。人にばつかり物言はせ。こなたは耳でも潰れたか。地と噛付けられて尾上は只。赤らむ顔を押隠し。お恥かしいフシ事ながらその。心がけは詞無いといふのか。アノ心がけはない〳〵。オホヽヽヽ。オヽ皆の者。アヽアレ聞きや。重い役を勤めながら。心がけは無いといの。アノ心がけは無いといの。オホヽヽヽ。ヤがをれ。ソリヤあの何ぢやぞえ。オヽほんに是が祿盗人ぢや。オヽ知行盗人ぢや。盗人ぢや〳〵。なんとさうではあるまいか。地とまくしかけたる雜言を。

尾上はこたへ〳〵ても。無念の涙保ちかね。スヱテ齒を喰ひしばり堪へ居る。詞オヽ何ぢや泣かしやるか。オヽ悔しかろ。町人の娘でも。今では武家の御奉公人。オヽ悔しかろ。オヽ道理ぢや〳〵。ヲヽアレ見や悲しさうな顔わいの。オホヽヽヽアハヽヽヽヽヲホヽ〳〵〳〵ヲホヽヽヽ。ヤ最前も仰しやるには心付かぬ事あらば。御指南頼むと言はしやんしたの。地ム、ドレ教へてやろと立上り。持つたる扇振上ぐれば。身をかはして打落す。手向ひなさば一討ちと懐刀拔放せば。是はと驚く女中達。尾上も今はたまりかね共に拔かんと立寄りしが。思ひ廻せば廻す程。大恩受けし御主人の御先途も見届けず。我が身に過ちあるならば跡に殘りし親達の。御歎きは如何ばかりと。こたへる辛さ。苦しさは。胸も張裂く

血の涙。身も浮くばかり歎きしは　フシ傍で見る目も哀れなり。詞ムヽ相手にならぬは此の岩藤が怖いのか。但し刃物三昧が恐ろしいか。オヽ恐しい筈。道理ぢや〳〵。そんならもうこりや納めましよの〳〵〳〵。ドレヤ納めましよわいの。ドレ〳〵歸りましよ〳〵。ヤほんにこな様にかゝつて。オヽこれ見やしやんせ。足袋も草履も砂まぶれになつたわいな。イヤ何尾上殿。何とこの草履の汚れたのを。拭いて下さんせぬか。アノ私に。オイノエヽいやか〳〵。ぢやと申してそれがマア。何ぢやそれがマア。サアサヽヽ拭いて下されれ〳〵。エヽ臆病者の腰抜に。刃物よごしせうより幸ひな此草履。地と脱ぐより早く追取つて。尾上が頭丁々是はとばかり奥女中。氣の毒あまり立騒ぐを。尾上は聲かけ。詞アヽコレ〳〵〳〵騒ぐまい〳〵女中達。岩藤様がこの尾上を。御意見の爲の御打擲。わしやもう有難うて〳〵。母様の御折檻と。地思うて此身のふし〳〵迄。有難うて忝い。詞ホヽホヽホヽヽヽヽイヤ申し岩藤様。産みの親も及ばぬ御意見。エエ有難う存じまする。此の上は隨分と武藝をも心がけて。御奉公を致しませう。また此お草履は。私が爲に御教訓の此の一品。申し請けて私が守。地と懐中したる心根は言はぬ色をやいひ草履。フシ胸に納めし利發さよ。地さすがの岩藤呆れ顔。詞何ぢや。その草履わしに貰うて守にかける。アノ守にや。テモマア恐しい辛抱な人ぢやな。意見した甲斐がある。以後きつと嗜ましやれ。サア〳〵〳〵行きませう〳〵。地お暇申そとかへ草履心は跡に尾上をば睨み。フシ廻して立歸る。地尾上は跡を打見やり。堪へ〳〵し溜涙一度にわつと伏轉びスヱテ　フシ身も浮くばかり歎きしが。地數多の女中が立寄つて。詞コレ〳〵申し尾上様。アノ憎ていなお局の。氣質は常からよう御存じ。お腹立ちはお道理なれど。いつもの事ぢやと思召し。必ずお氣にさへられずと。先づ〳〵屋敷へお歸りと　フシ諫め立つれば。地泣く〳〵も抱へ引締め立上り。タヽキ女心の一筋にまた。思ひ出す口惜し涙。はや寺々に。暮の鐘。あすは我が身も。消えて行く。夕告げ鳥の泣く〳〵も打連れ。館へ　三重へ急ぎ行く

一七

金毘羅利生記 花上野誉碑

四つ目　志渡寺の段

〔解題〕天明八年八月廿一日から江戸の肥前座で興行。作者しば芝叟・筒井半平、補助萱俣多蔵・玉木筆二。田宮小太郎の復讐事件を仕組んだ作。小太郎の父田宮源八は讃岐丸龜の生駒家に仕へて田宮流の劍術をよくしたが、同藩士堀源太左衛門に暗殺された。小太郎は幼にして江戸に出で柳生飛騨守に就て劍道を修め、十八歳の時官許を得て寛永十八年歸藩して復讐の素懐をとげて、名聲をあげた。諸侯の招聘を辭して江戸に出で、壯年にして病歿したとも、或は上野山内觀成院で自刃したともいふ。その碑は上野櫻木町の青龍院内にあつたが、今は天王寺の墓地に移されたといふ。

始めて劇に仕組まれた時は明かでないが、寶暦三年七月十五日から大阪の角座で「幼稚子敵討」の外題で興行されてゐるのなどは早い方であらう。淨瑠璃では明和元年七月十五日から竹本座興行の「敵討稚物語」が始めてである。近松半二・竹本三郎兵衛の作で、荒筋はかうである。丸龜の藩士民谷新左衛門が堀口五左衛門に暗殺されたが、その妻お時と娘お梅一子小太郎の三人が復讐を企て、千辛萬苦の末、遂に金毘羅權現の利生と紀州の侍矢流加島の後援とによつて本望をとげるといふ筋で、外題に「金毘羅御利生」と角書をつけてある。

本曲はこの改作である。田宮坊太郎は父源八が深く契つた品川の遊女其朝との間の子であつた。源八が森口源太左衛門に暗殺された後、同藩士樋谷内記の情で丸龜家の菩提所志渡の方丈に預けられ、敵に油斷させるために僞啞となつてゐたが、坊太郎は忠實な乳母の身を捨てゝの祈願と金毘羅權現の擁護とで武藝が上達し、品川

松坂屋に二度の勤めをして居る母を訪れ、その手蔓によつて敵を捜索し、遂に青柳左島の後援で素懐をとげるのである。初演の時の正本は、第一箱根湯元の段、第二八幡普請場の段、第三丸龜の段、第四志渡寺の段、第五碑文谷の段、第六八丁繩手の段、第七品川宿の段の七段迄であつたが、翌寛政元年二月、八・九・十の三段が補足されて、目出度く敵討をとげる大團圓となつてゐる。こゝに收めた志渡寺の段が最も名高い。

へ泣く〳〵立つて行く。地跡見送つて菅の谷は フシ暫し。しをれて居たりしが。詞身腹分けねど育つれば。それ程にまで可愛いものか。そなたのその親切が。届かいで何とせう。地長者の捧げし萬燈より。僅か貧女の一燈が。百倍ましたる未來の手向。草葉の陰の兄様がさぞ悦んでござんせう。詞嬉しうござる忝い 地爰から拜んで居るぞやと伏拜む手に露涙。フシかゝる所へ奥庭より。息もすた〳〵腰元信夫。御注進と手をつけば。詞ム、あわたゞしき注進とは。森口殿との立合ひ。夫の勝を知らせの爲か。サア奥様の仰せの通り。意地悪の森口殿。定めて負けと思ひの外。ヤアと言ふより旦那様。俄にがた〳〵震ひが來て。竹刀持つ手も定まらず。二打ち三打ちその跡は。しどろになつて森口殿。勝に極まり鼻高々。ほんに悔しう存じまする。地と聞くより菅の谷口惜し涙。物をもいはず一間の内駈込む向うへ。源太左衞門。はつと猶豫ふその内に。つゞいて内記弟子方丈。フシ各々座席定まれば。地團右衞門進み出で。詞扨々先生きついお手際。晋に聞えし内記殿。定めし手ごはい立合ひと思ひの外。猫に追はれた鼠同然。イヤはや。驚き入りましてござるテヘ、、へ。コレ〳〵。コレハどうした御挨拶。尤も殿へ御師範申す身どもなれども。内記殿も聞ゆる達人。畢竟時の張合ひと申すもの。スリヤ何内記殿。互の勝負は時の運。團右衞門殿只今の麁相。まつぴら御免下されて。必ずともにお心にさへられな。地と面にかざる仁義の詞。針を含みし内心と。察しながらも慇懃に。詞コレハ〳〵。痛み入つたる御挨拶。武藝未熟のこの内記。なか〳〵貴殿のお相手とは。存じも寄らぬ事な

がら。主命是非なく今日の仕合ひ。イヤモ。面目次第もござりませぬ。地と互に卑下はありながら。善と惡とは見て取る方丈。詞イヤ〳〵。勝つも負くるも時の運。差出がましき事ながら。只今までの如く水魚の因み。それが卽ち殿への忠義。意恨殘らぬ印の盃。ナニコリヤ坊太郎。申し付けたる銚子盃。急いで是への地幹の下。豫て用意の三方長柄。持つて出でたる小坊主の。おとなしやかに控ゆれば。源太左衞門じろりと見て。詞この小兒こそ噂に聞く。民谷源八が悴と見ゆる。幸ひの酌人。コリヤ小僧よ。是へ參つて酌致せ。イザ內記殿。お始めなされ。イヤ先づ〳〵其許より。ハテ扨て。申さば古參の其許。平に先づ貴殿より。左樣ござらば。たつて申すも却つて無禮。何れも御免下されい。地と取上ぐる盃へ。酌する行儀しとやかに。フシまた押下つて畏る。地內記は盃改めて。詞然らば何森口殿。慮外申す地と互の禮儀。盃取つて森口が。差出せども。きよろりくわん。詞コリヤヤイ。注がぬか〳〵。ヱ、酌せぬか。地といへども啞の返答なく。虫が知らすか子心に。イヤフシと冠を振るばかり。地源太左衞門目に角立て。詞ヤア憎い小悴。內記殿へは酌しながら。我に恥辱を與ふる不屆。是へうせう地と立ちかゝるを。方丈暫しと押しとゞめ。詞御立腹さる事ながら。辨へなき小兒の不作法。それと申すも。貴殿の威勢に怖ぢ恐れ。子心にも怖いと見えます。お酌は餘人に。申付けるでござりませう。アイヤ〳〵方丈。さうでござらぬ。三つ子の魂百までと。只今折檻加へねば。又重ねてかかる無禮。以後の見せしめ覺えよ。地と首筋取つて引据ゆる坊太郎が袂より。桃は零れて二つ三つ。それはと立寄る內記が目先。ひらりと拔いて差付くる。刄の光に身はがた〳〵。臆病風に顏の色。槌谷が妻は口惜し淚。方丈はじめ門弟もフシ興の覺めたる風情なり。地森口は思ふつぼ。詞ムヽハヽヽハヽハヽヽ。今日の立合ひ。合點行かずと思ひしが。內記殿の臆病未練。かてゝくはへて此の小悴。いま袂より落せしは。當寺に名高き園の桃。殿へ獻上の濟まざる內。盗み喰ふコナ橫道者めが。アアその筈でもあらうかい。元が足輕。成上りの民谷が悴。盗人根性がある故に。罰が當つて啞となつたる業さらし。獻上の申譯。この儘には濟みますまい。地と底に意地持つ詞のはし。菅の谷たまらずづつと出で。詞イヤ森口樣。いつにない夫の有樣。病ひの業か。障

碍かと。案じ重なる坊太郎が。折悪う取落せしアノ桃は。盗んだのではござりますまい。枝が朽ちて二つ三つ。落ちたを拾うた物であらう。ならうか／＼。アレ／＼。點頭いてをりますれば。モウ了簡しておやりなされたが。よからう様に。地存じまするど菅の谷が。フシ甥の難儀を言抜ける。詞イヤ／＼／＼なりませぬ／＼。常の桃とは違ひ。西王母がたとへを引き。殿へ獻上の桃を盗む大罪人。折檻は身どもが脛。地と坊太郎を縁より下へどうと蹴落す傍若無人。驚く方丈菅の谷があはやと見る内廣庭より。こけつ轉びつ乳母お辻。走り寄つて坊太郎を抱きかゝへたる涙聲。詞コレ／＼／＼和子大事ない／＼。乳母の辻が來た程に。心を慥に持つて下されヤ。怖い事はない／＼／＼ぞや。マいかに誤りあればとて。かよわい此の子を滅相な。そのまあ高い所から。顛落すといふ様な意地の悪い。ホヽ／＼ホヽヽヽ。惡い／＼。アイ。此の子が惡うござります。塵一本でも人様の物。盗むといふ様な事があるものでござりますか。是ばかりは子供ぢやとて。アレ。天道様が御赦しなされぬぞえ。ハイ。／＼／＼。森口様へ申し上げます。私は辻と申して。此の子の乳母でござりまする。方丈様への申譯は。きつと折檻の致し様もござりますれば。幾重にも御了簡。地ひとへに願ひ上げますと。フシ額を土に蹲まる。詞ム、。スリヤ其の方は。この小悴が乳母とな。ハイ。乳母でござります／＼。エヽむさくろしい形をしあがつて。うそ汚いわいコリヤヤイ。方丈への言譯ばかりで。殿へ獻上の申譯は。何とせうと思うてをるぞ。サア其の儀は。辨へ知らぬ女郎の猥言。すつ込んでけつからう。御前への申譯に。今森口が眞二つに打放す。地と持つたる刀振上ぐれば。方丈その手をしつかと留め。詞イヤ。お手討にはなりますまい。それや又なぜな。されぱでござる。坊太郎に誤りあれば。誡むるは愚僧が了簡。獻上の名物なれども。果物に人の命。よもや取らうと御意もあるまじ。よし又左様の儀もござらば。人を助ける出家の役。いづくまでも坊太郎が。命乞ひを仕る。ム、。シテまた。獻上の申譯は。ハテお聞入れなき時は是非に及ばぬ傘一本。餘人のお世話は頼み申さぬ。貴殿も刀を納め。御歸宅あつて御休足。然るべう存ずると。地出家氣質に言ひまくられ。さすがの森口あんごりと。刀を鞘に。フシ納めた顔。詞ハテ扨。命冥加な仕合せ者。方丈の詞

に従ひ。屋敷へ歸り休足致さん。ナニ方丈。今日はいかい御雜作。イヤ何內記殿。お先へ參る。是はしたり。まだ震うてござるか。コレ〳〵御內證。ソレ。藥でも進ぜられい。ア、片腕とも思ふ內記殿はアノ臆病。最早武藝一通りに於ては。凡そ日本に。楯衝く者はなき源太左衛門。武士たる者はあやかる樣。隨分と機嫌を取り。稽古出精召されたがようござる。ひよつと機嫌のとり樣が惡いと。殿であらうが。どなたであらうが。ヤ又どいつであらうが。打放して他國いたす。さすれば天照太神が。天の岩戸へ籠つた樣なもので。讃岐一國は。常闇となり申すム、、ハ、〳〵〳〵ハ、、、、程に。氣をつけて勤めさつしやれ。ハ、委細承知いたしてござる。この數馬十藏も。臆病師匠を破門いたして。其許と師弟の契約。直ぐに囿めの盃は。お屋敷にて仕らん。然らば一所にドリヤ。お暇申さうか。地と飽迄高ぶる高慢我慢。門弟引連れ森口は。フシハヅミ惡口たら〳〵立歸る。地無念と思へど詮方も。內記が傍に差寄つて。詞是申し。今の惡口聞かしやんしたか。お前は悔しうないかいな。地と押動かせど正體も。詞なければ方丈制して。詞コレ奥方。內記殿をば客殿へ。同道あつて御介抱。坊太郎は乳母お辻。地よきにとばかり跡言はず。內記が心計りかね。勞はる菅の谷方丈も。オクリ打連れてこそ入相の。フシ花は昔と散失せて。今は老木の乳母お辻。思へば思ひ廻す程。恐ろしや稚氣に。盜み心の付いたるは。如何なる天魔の魅入れぞと。顏打守り〳〵。フシ暫し。涙にくれけるが。詞コレ和子。エ、こなたは〳〵。〳〵なう。此の乳母は敎へはせぬに。いつの間に其の樣な。さもしい氣にはならしやつたぞいの。アノ桃は此の寺の名物。殿樣へ御獻上の濟まぬ內は。方丈樣はおろかな事。觀音樣へも上げぬげな。地サハリいかに頑是がないとても。こなたは今年でもう七つ。恐しい。恥かしいといふ事の。ちつとは分ちはないかいの。方丈樣の手前。內記樣御夫婦の思はく。おりや恥かしうて。〳〵コレ。顏さへもよう上げなんだわいの。詞その邪な心から。父御樣の非業の最期。無念とも思はしやらぬ。不孝の罰が身に報ひ。生れも付かぬ不具者。啞となつたに氣が付かぬか。地母御は賤しい傾城と素性あらはす今日の時宜。コレ人間と生れては。只一心の置き所。賤しうても汚うても腹は借物。こなたの父御は誰あらう民谷源八樣といふ。侍の子のする所作か。

詞さう言ふこなたの心と知らず。この乳母が明暮に。旦那様の無念の御最期。おのれ敵を詮義して。討たさんものと思ふ内。啞となつたるこなたの業病。藥祈禱も利かばこそ。詮方つきて當國の。金毘羅様へ立願かけ。病氣といひ立て本心は。金毘羅様へ火の物斷ちに食事を斷ち。果物に命をつなぐ此の乳母が。淸き體を犧牲に。その病ひを治して給はれと。地祈るお辻が誠の心。稚心にわかるなら。どうぞ心をため直し。詞コレ紙一枚塵一本。人様の物盜むやうな。さもしい心止めて下されヤヤ。コレ見やしやれ。こなた故に此の乳母が。地元の姿はどこへやら。たとへ襤褸は纏うても心を錦になぜ持つて。父御の敵討畢せ。名を上げうとは思はずかと恨みつ泣いつ様々に。五臟を絞る血の涙息も。たえ〴〵斷食に。心苦しきその風情 フシ目もあて。られずいぢらしゝ。地何思ひけん坊太郎。白砂を搔きならし〳〵。かくと仕方に乳母お辻。涙拂うてつく〴〵眺め。詞何書かしやる。何ぢや。エヽ父様が死なしやつたを忘れはせぬ。口惜しい〳〵。又。桃を盜んだは。先きに。伯母様へ乳母が話には。おれが病ひが苦になつて。米も。粟も食はれず。果物に命をつなぐと言うた故。ひよつと。われが死なうかと。それが悲しい故。つい桃を取つたのも。われにやらうと思うた故。もう是からあんな事はせまい程に。堪忍してくれい。ナホスヤア〳〵。そんなら桃を盜ましやつたは。アノ此の乳母にくれうと思うてかアノ此の乳母に。オヽよう盜んで下さつた〳〵なう。オヽ可愛の子やと地引寄せて。抱きしめ〳〵。詞コレこらへて下され。赦して下され。地さうとは知らず色々に。恥しめたはエヽ何事ぞいの。詞元をいへば盜人の。惡智慧つけたもやつぱり此の乳母。思へば〳〵これ程に。地賢い智慧を持ちながら。何故果報つたないぞ。父御が此の世にござるなら。馬の稽古よ學問よと。座敷の内もお手車。乳母も衣裳を著飾つて。ちよつと出るにも徒士若黨。美々しい行列あるべきに。詞小僧よ。〳〵と口穢う。森口づれが足にまで。かゝる憂目は地何事ぞ。現在母御はありながら。三つの年より生別れ。又。父御にも死別れ。よく〳〵親御に縁薄き。こなたがいとしうござるわと口說き立て〳〵。わつとばかりに フシ歎きしが。地はつと心を取直し。詞オヽそれよ。よしない歎きに時移る。乳母が命は權現へ捧げし犧牲。この和子が業病を。一度

本復なさしめて。本望遂げさせたび給へ。南無象頭山金毘羅大權現〳〵。地 一念凝つては是逆立ち。眼血ばしるノン有樣に。詞 坊太郎は只うろ〳〵と。脊撫でさするを見向きもせず。豫て嗜む守り刀。拔けば稻妻逆手に取り。ぐつと突立て引廻せば。驚き縋る坊太郎が顏打守り打眺め。詞 サア物を言はつしやれぬか〳〵。南無金毘羅大權現〳〵。サア物を言はつしやれぬか。南無金毘羅大權現〳〵〳〵。ヤア。是ほどに祈誓をかけ。命を斷つて願うても。やつぱり物が言はれぬか。扨は金毘羅權現も。見放し給ふか。ハア。地 はつと力もお乳の人。呆れて詞なかりける。詞 ヤア〳〵お辻。そちが誠心相屆き。權現納受あつたるぞ。地 と一間を出づる槌谷内記。菅の谷もろともかけ出でて。詞 そなたの誠は屆いたぞや。コレ氣を確かに持ちやいなう。コレナウ是と 地 抱を直ぐに腹帯と。心を添ゆる介抱に。おろか内記は聲はげまし 詞 ヤア〳〵坊太郎。今こそ致す暇乞ひ。乳母が冥途の餞別に。引導せよと 地 槌谷が詞。地 聞くより坊太郎合掌し。詞 迷故三界城。悟故十方空。南無阿彌陀佛〳〵。ヤア〳〵〳〵そんなら物が言はれるか〳〵かいなう。乳母よ。堪忍してくれ。と 地 わつとばかりに泣出す。詞 オヽよう言うて下さつたなう〳〵。ホヽ悦びは尤も。口留めなし置く仔細とい



ふは。五ヶ年以前三月十八日。國府八幡造營の節。我も社參と馬場先を。通りかゝりし鳥居前。血に染む死骸心得ずと。改めみれば民谷源八。南無三寶とは思へども。はや敵は逃失せたれば是非もなく。もし手がゝりもあらんかと。提灯の明りにすかし。よく〳〵見れば筓にて。とゞめをさすが敵の拔目。また坊太郎かくてあるならば。根を斷つて葉を枯さんと。窺ふ者もあらんかと。此の寺へ預け出家となし。詞を制して啞となし。たとへ如何なる事ありとも。此の内記が赦す迄。必ず物をいふまじと。教へし詞守り詰め。そちが最期の今までも。扨こそ啞となつたるぞ。地 と始めて明かす槌谷が本心。フシ 天晴れなりける武士なり。詞 スリヤ是まで此の和子が。啞と見せしは拵へ事か。さうとは知らず一心に。金毘羅様へ祈誓をかけ。三七日の斷食。艱難辛苦も水の泡。イヤ〳〵。そなたの誠心。正しく金毘羅權現納受あつたるしるし。その譯知りし我々夫婦。坊太郎に敵を討たせんと。密に屋敷へ招き寄せ。教へる武術もさすがは子供。忘れし事も多かりしに。地 心得ぬは此の程より。武術の覺え智慧才覺。大人も及ばぬ發明は。不思議。〳〵と言ひ暮す。日數も丁度三七日。詞 そんなら私が此の命。捨てたが功に立ちましたか。オヽ立つたとも〳〵。疑ひなき證據は。まざ〳〵蒙る夫の靈夢。軍術の聞えある。東國の青柳家へ。坊太郎を送られよと。見し正夢を幸ひに。東の母にも巡り合ひ。コレ。此の筓の偏を以て。首尾よう敵を討つた後。必ず出家得道して。地 乳母が亡き跡亡き父の。菩提を弔へとくれぐ〳〵も。伯母が詞を守つたる。この稚子の敵討。首尾よう仇を討ちし後。其の名は空仁大德と。道德末世に咲匂ふ。花の上野の片ほとり。古蹟を殘す石碑の。フシ 譽れは今にいちじるし。地 お辻は苦痛も打忘れ。詞 エヽ有難や忝なや。念願屆きし此の世の本望。只不審なは内記様。日頃に似合はぬ今日の立合ひ。オオそれこそは。森口が日頃の振舞ひ。源八を討つたる者。正しく彼れとわが黑星。わざと勝を讓りしは。死んだる民谷へ寸志の情。靈夢に任せ青柳家の奥儀を傳ふそれ迄は。足を留めたる我が計らひ。未練と見せしも拵へ事。ヤアヤア。わが腹心の門弟たる。敷馬。十藏。急いで是へ。地 はつと答へて庭の面。木陰を出づる二人の弟子。内記が前に頭を下げ。詞 仰せに從ひ森口が弟子となつて胸中を。探る麞の妙藥は壽命をのぶる藥とも。心のつかぬ源太左衞門。

先生を忌み嫌ふ底意はたしか源八殿を。討つたる實否を糺すは我々。コレ〱〱必ず氣遣ひあられな。詞と語るこなたへ方丈立出で。詞委細の樣子はあれにて聞く。不便なるは乳母お辻。命を捨てし心願の。空しからざる其の證據は。内記殿の正夢に。割符を合はす愚僧が夢。スリヤ貴僧にも。其許にも。地是は不思議と人々も。あらたなりける權現の。フシ奇瑞を感ずるばかりなり。地ハア、。重ね〱の靈夢の告。念願叶ひし此の世の思ひ出。心がかりも晴れ行く月。西方淨土に赴きて。

旦那に申し上ぐるのが。この乳母が冥途の土産早や。お暇と腹帯を解かんとする。ヤレ待て暫しと押しとゞめ。詞汝が歳聞いたる坊太郎が武術の上達。草葉の蔭の源八に未來の土産餞別せん。ナホスそれ〱用意と地内記が下知。菅の谷心得坊太郎に用意の。襷りゝしくも小太刀構へてフシ待ちかけたり。地十歳數馬は左右に別れ。片唾を呑んだる時しもあれ。さつと吹き來る風につれ。杉の梢にあり〱と。顯はれ給ふ御姿は。正しく金毘羅大權現と。中ならぬ身のしら砂には。睨み合うたる

晴れ勝負。ヤア〱。やつと打合ふ早業早足。上より使ふ神力の風に。隨ふ小腕の働き一眼。二早足。上段下段。いらつて打込む兩人が竹刀を丁ど坊太郎。希代の手練見る嬉しさ。顏は笑へど胸の中早やせぐり來る斷末魔。物言ひたげに伸上る。手負ひの目にはまざ〱と。拜まれ給ふ梢の方。詞アレ〱。金毘羅大權現。エ、。地有難いと伏拜む。心弛めばがつくりと嵐に。誘ふ。乳母櫻。はかな。かりける三重へ次第なり。

小田の結納
齋藤の色直

木下蔭狹間合戰　七冊目

一八

竹中砦の段

〔解題〕　寛政元年二月廿一日から北堀江市の側豐竹此吉座初演。作者は若竹笛躬・近松余七・並木千柳。

數ある太閤記種の淨瑠璃の中でも名高いものの一つである。初編五冊、次編五冊合せて十冊物である。初編と次編との間に十餘年の間を置き、初編に於ては美濃の齋藤尾張の小田の確執の因つて來る原因、石川五右衞門、木下當吉、蓮葉與六等の生立ちを明かし、その山を五の卷參州岸が崖の來作住家の段に設け、次編に至つて順次に前編で設けた發端伏線動機等による葛藤解決を示して、その間に智謀神の如き木下當吉と、大盜石川五右衞門との面目を發揮させようとする仕組になつてゐる。その中ではこゝに收めた七の卷の竹中砦の段（左枝犬淸は千里の母の計らひで娘に逢はせようとして窃かに連れて來られたのである、それはこの段の口にある）が最も名高くて、しかも全編の山といつても差支ない。

この段では、流石の軍師竹中重晴も、木下當吉の神策と、命を捨てゝの左枝犬淸の働きとによつて、却つて裏をかゝれて、主君の齋藤義龍が、犬淸の子を母衣の下に負うて犬淸と名乘つて奮戰する當吉の槍先に討取られる事に仕組んであるが、これは言ふ迄もなく今川義元が桶狹間の討死を附會したもので、その犬淸の子は木下の庇蔭によつて、敵の軍師の娘と密通したといふ父の科も宥されて春永に召抱へられるといふ趣向に因んで「木下蔭狹間合戰」と題したものであらう。

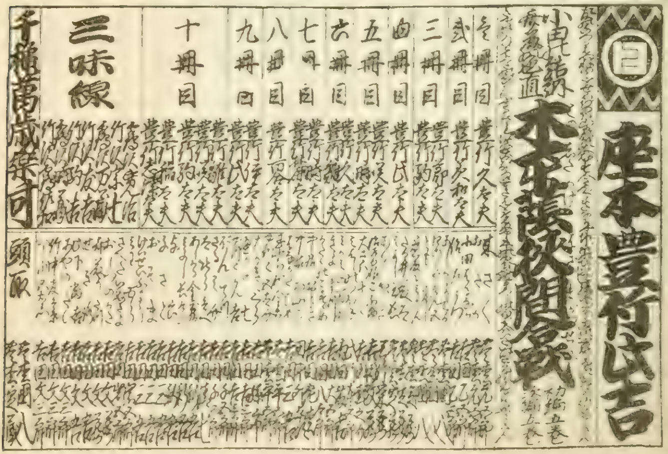
附けていふ、八の卷以下は、石川五右衞門と木下當吉の智惠くらべ術くらべが、足利義輝を弑しようとする三好長慶父子の陰謀をめぐつて描かれて居るが、發端なる芥川の妊婦殺しの伏線が、八の卷の五右衞門の養父治左衞門の懺悔によつて明かされる趣向、及び大詰の五右衞門の働きなどを思ひ合せて見れば、本曲は全體としては、木下當吉よりは石川五右衞門を主として居ると見てもよい程である。

へ内こそせつなけれ。曲れる枝を直(なほき)に　癪に屈せぬ丈夫の顏色刀を。　フシ杖に　し寄り。　地暑氣の頃とは申しながら。撓(た)め木は木と分くる竹中官兵衞重晴(しげはる)ギ　立出づれば。　地こは〳〵ながら娘はさ　風が當れば御養生のさゝはり。御用も

あらば。御病架へなぜお呼び遊ばしませぬ。ナニサ〳〵拳未熟の弱敵ばらが錆矢是しきのかすり疵いつかな屈せぬ甚なれども。たつて保養仕れとの上命。據なく引籠り居る折を窺ひ、親も許さぬ忍び逢ひ。不屆至極の女郎め。縁の下に這ひかゞむ。色に寄り來る傾城の犬清とは名に相應。サア爰を出よわつぱめと。地言はれて二人は氣も消え〳〵。言合はさねど一時に。フシ汗の淵なす心地せり。地思案極めて犬清は目通りへつつと出で。詞御存知の上は包むに及ばず。敵々と隔てし中。御目を掠めし此の身の不義お手討は覺悟の前手向ひ致さぬ御存分と。地雨腰ぐわらりと投出す命。フシ悪びれもせず。詞床を占むれば。色じろりと見やり ハル 健氣の一言助け置かば一方の攻め口持兼ねまじき若者。春永に繁富受けしは幸ひ。義龍公に奉公し官兵衛が聟とならば。小田が家にて莫大の所領に勝る武名の譽。いやか。應か。サア分別して返答せよと。詞和らぐ詞に千里はいそ〳〵。詞今まで案じた父様の御機嫌直り。女夫にせうとは夢ではないか。コレ申し思案どころかお請け申して下さんせ。地やいの。やいのとしどもなき。フシ娘心ぞ道理なる。地犬清は只默然と暫し詞もなかりしが。以前に手に入る笠印懷中より取出し。詞平家支流の春永公へ仕ゆる故濃紅の某が笠印に。望むらくは官兵衛殿の姓名を書記し春永旗下の武士となし度きわが念願。御所存はいかにと言はせも立てず。ムヽ當時尾濃兩國に於て。この竹中に左程の事言はんず者覺えない。一器量ある武夫の擇。尋ね聞ふべき仔細あり。ヤイ娘。用あらば手を鳴らさん。地次へ立てよと會釋なき。父が詞にいや應も。言はれずいはぬ夫にさへ心を フシ 奥へ立つて行く。地跡打見やり聲をひそめ。詞若年ながら音に聞いたる左様犬清。色に引かれこの砦へ入り來らん様あるまじ。所存包まず物語らば答むるは武士の表。娘の縁に繋がる其方。一方ならば心置かず。我が存念もいひ聞かさん。イザまづ是へと睦まじく。初めにかはる重晴が。詞に解する色目なく上がる書院の縁者と縁者。間みも厚き式臺に作法フシ正しく座に直る。犬清威儀をかい繕ひ。詞御賢察の如く此の砦へ入込みしは全く息女の色香に迷ふ某ならず。折入つて官兵衛殿へ。縋み入りたき一大事と。言はんとせしが傍りを見廻し。詞當國の人心うかつに口外なし難き密談御推察下されよと。地猶窺ふ氣色見てとる重晴。詞しも〳〵

こそあるべき事。他言せまじき勇者の潔白。只今見せんと差添の。地笄抜き取り突先のオクリ松が枝。傳ふ藤かづらの。花を目當にはつしと打つ。フシ手練に落散る紫藤の英。地大青きつと打守り。詞ム、赤色は小田の旗色。朱を奪ふ紫は武勇鋭き斎藤氏。姓は即ちアノ藤原。落花枝に歸らざる官兵衛殿の花の金打。地底意も知れて安堵の上は。様子包まず申し上げん。詞扨も去る天文十九年の頃よりも。蝸牛と争ふ小田斎藤。つひに取合ふ干戈の動き。去年の冬より領知の境。洲股川に對陣し勝負は互角と見えたる所。貴殿の下知にて美濃路の兵士こゝ三州より取圍み鷲津丸根を始めとして。味方の砦を打破られ。地殘るは丹下フシ中島兩所。詞爰ぞ主人の御陣所なれど。矢種兵糧玉薬も至つて乏しき小勢なれば。敵の多

勢に比べては嚴に玉子を打つが如し一つの頼みは官兵衛殿何とぞ主君春永に御味方下さらば。百萬騎の勇兵にもをさ〳〵劣らぬ貴殿の軍略。御許容願ひ奉ると退つて フシ頭を下げければ。詞ム、スリヤ春永は。小勢にて。丹下の砦に籠りをるとな。サ、その御主人へ犬清が。勘當御免を願ひの綱。結ぶか切るかは足下の胸中。ム、ウ。智勇兼備の名將と聞きしに違ふ春永が度度の敗軍。必定奇計やあらんかと。心迷うて主人の出馬を留めしが。味方の英氣に聞き怖ぢして敵勢過半落失せたる。兩所の砦は明き



城同然。今こそ疑念散じたり。地防戦の用意せよ者どもやつと フシ呼ばはる聲。地思ひ寄らねば母娘共に駈出で。ヤア何事。詞出勤御免の御病中防ぎの用意とおつしやるは。オヽ敵の空虚を義龍公の本陣へ、告げ知らせん支度ちやわい。ヤア〳〵〳〵。スリヤ最前の花の金打。謀計であつたよな。オヽ兩家雌雄を爭ふ時節。表裏の金打識と思ふか。何ぞや娘が縁にたより。我を味方に付けんとは。猪小才な小わつぱと。地見透す如き官兵衛が。一句に逆立つ無念の齒がみ。主君の勘氣ゆるされんと一途にはやつて味方の大事。わが舌頭に引出せし小田の滅亡今この時。ヘエヽ是非もなや口惜しや。犬清が一世の不覺。恨みの切先受取れと。地ずばと抜いて駈向ふ中を隔つる女房闘路。マア〳〵待つてと身を惜します。縋る千里を突退け刎退け。斬込む刀をすかさぬ重晴。かはして利腕しつかと取り。詞手疵は負へどもわれ達が手に及ぶべき業ならず。命は助ける早や歸れと。地刀たぐつて遙かに投退け。詞味方へ示す合圖の狼煙知らせは斯うと地件の白刃。目當は庭先烽火臺丁どなぐれば筒口へ。石火移る見えけるが。狼煙臺に立登り殘る砦も一時に合はす煙は フシ豫ての要害。地手筈を見るより南無三寶もう是までと犬清は草添逆手に弓手の脇腹。ぐつと突込む必死の深手。なう悲しやと千里は駈寄り。あんまり我強い父様のお心一つでこの御最期。母様仕様はない事かと スヱ カヽリ縋り歎けば母親も。詞オヽ道理ぢや〳〵。日頃戀しい床しいと案じ暮した其方がいとしさ。地それに引きかへ官兵衛殿。可愛い娘に連添はゞ聟は子ちやないかいの。武士の意氣地が立てたいとて見殺しにする無得心。憐れを知るは武士の常に引きかへ胴慾と恨み歎くを耳にもかけず。忠義に凝つたる氣丈の老人。腸を練る。フシ軍慮の工夫。詞ムウ五星を鑑みれば。味方は北方坎爲水。時は三更子の上刻水に水を重ぬれば南方の火の尾州を討つに利ある刻限。君の御出馬この圖をはづさずイザ本陣へ乘換へ引けと。地下知する内に一間より。詞ヤア〳〵官兵衛。病中の苦勞に及ばず。齋藤治部太夫義龍。疾くより是にて聞いたるぞと。地襖さつと押開かせ。江戸黒革縅の鎧投げかけ。鍬金物の頭盔兜花にあれたる走馬の勢ひ。前後を守護するナホス諸軍勢。あたりを拂つて見えたる有樣。存じがけなきお成りやと低頭。フシ半身なしければ。地義龍快氣の聲高く。詞鋭き味方

の鋒先にて。過半攻取り敵の要害殘りし砦は丹下中嶋。只一戰に攻崩さんと。進む手勢を其の方一人。遮つてとゞめしは犬淸が内緣に引かれ。二心やあらんかと密に立越え窺ふ所敵の空虛を計り知つたる臨機應變今にはじめぬ竹中官兵衞。疑ひ晴れる上からは短兵急に押寄せて。春永が頭を得る今宵の一戰。ハ、、、心よや。悅ばしと。地我慢に募る剛氣の詞。官兵衞猶も恐れ入り。何條娘が愛に溺れ。義心をいかで忘るべき。戰場の働きこそは叶はずとも。御供御赦免下さるべし。イヤサ〱。手疵も未だ治せざる中。心勞は保養の妨げ。砦に殘つて勝利の知らせ相待ちゐよ。時刻うつさず出陣せん。地いそふれ續けと勇み立つ。門出を告ぐる鯨波フシ手勢隨へ。出で給ふ。地跡見送つて官兵衞重晴。主人の疑ひ散ぜし上は今こそ赦す。犬淸と未來を契る水盃。女房よきに計らへと。地思ひがけなき一言に。詞エ、そりや眞實でござんすかえ。オ、不便の生害見捨つるも武士の誠忠。義心は義心恩愛は恩愛。ソレソレ早くと情ある。夫の心汲み取りし。柄杓の長柄短か夜や。月の滿干も。幾千里。タ、キ手に取上げて親々の。情戴く。フシ水盃。詞申しわが夫。今といふ今お赦し受けた二世の堅め。未來は女夫でござんすぞえ。オ、〱悲しい目出度い取結び。酌は此の母。手負ひには忌物なれど。娘が心濁りない柄杓の盃。手をかけて下さらば儀式は濟む。サア〱早う犬淸殿。ヤア祝言とは穢らはしい。目前主人の仇敵。竹中が娘の千里。盡未來際夫婦の緣切つたる印はこの通りと柄杓摑んで フシ投付くれば。詞エ、。そんならわたしが未來の緣は。オ、詞交はすも是限りと。地烈しき手負ひが詞の尖り矢取るより早く我と我が咽にがはと突立つる。母は駈寄り狂氣の如く。詞この憂き事を見まいため盡した心も仇事に。地成果てたるか悲しやと スヱカ、リ涙ながらの介抱に。手負は苦しき目を開き。ア、思へば儚ない私が身の上。地この世の緣こそ薄くともせめて未來は蓮葉の。玉の臺で夫婦にと。樂しんだ甲斐もなう。お主大事と父樣の。忠義の刃鐵に情なや。二世の緣さへ。斷ち切りし心の內の悲しさを。推量して下さんせ迷ふわいのとばかりにて フシ涙に。血汐あらそへり。地折から風が吹送る貝鐘の音寄せ太鼓。さも物凄く。フシ聞えけり。詞官兵衞は耳そばだて。遙かに聞ゆる人馬の物音。早や合戰と覺えたり。地勝負はいかにと心せき見やる外面へ物見の軍

卒。大垣三郎御注進と呼ばはり〳〵。勝利を知らする勇みの大音。詞扨も味方の三萬餘騎。二手に分かつて中島の。柴田佐久間が堅めし砦へ。ひた〳〵〳〵と押寄せ〳〵。鬨をつくつて攻めかくれば。見せかけばかりの旗差物無勢の小田方うろたへ眼。詞鬼と呼ばれし柴田を始め。井桁遠山森佐久間。僞をくゞつて八方へ逃がしは立てじと追詰め〳〵春永が後詰せし丹下の砦も一挫ぎと。味方は破竹の勢ひにて未だ合戰最中なれども。地十分勝利疑ひなしと申し捨てゝぞ引返す。ムヽ味方の手番ひよくしたり。ハテ心地よき知らせよな。ナウ官兵衛殿。一旦味方の勝利とあればお前の忠義も立つた道理。此の上のお願ひは理を非に曲げて小田方へ。お味方あらば犬清殿娘と未來の縁も切れず。せめては清い臨終を勸めるが親の慈悲。ヤア喧ましい二心を抱く所存あらば。きやつらを眼前見殺すべきか。主家より賜はる高祿にて身體髪膚を養へば。親子が命は主君の物さ。無益のくり言聞く耳ない。地默りをらうと愛想なき。夫の詞にわつと泣きソレ。その意地づよいお心が劍となつて可愛げに。蕾の花を二人まで散らすが親の慈悲かいなう。子よりも可愛い初孫のありとは聞けど顏さへも知らずに暮すばかりかは。詞月日もかへず一時に孤兒となす忠義道は。地親子夫婦が修羅道の呵責の種となつたかと夫に恨みの數々を。數へたてたる八つ橋の。涙ちまたの三河路やフシ澤邊の。水も增すやらん。地程もあら砂踏立て〳〵。息を切つて馳來る注進。詞官兵衛見るより如何に藤太。いよ〳〵味方の勝利なるやさん候。初度の戰ひ。勝に乗つたる味方の勢まつしぐらに追ひかくれば。逃げたと見えしは敵の術。場所よき所に引返し。詞初めに代つて柴田が強勢必死と定めし切つ先に。味方もしどろに喰留められ。桶狭間に屯ある。義龍公の御陣の勢追々に駈付け〳〵。先手に加はる虛を窺ひ。地山道けはしき狹間より。詞君の御陣の後を目がけ思ひ寄らざる小田春永。諸卒を隨へ現れ出で。所々の砦を餌に飼ひ負け色見せしを術と知らず。死地に入つたる大將義龍討取れ。地射取れと下知につれ群がりかゝるを近習の强者。防ぎ戰ふ其の内に。敵勢より母衣武者一人眞先に大音聲。詞春永の御内にさる者ありと呼ばれたる左枝犬清これにあり。義龍公の御首。イデ賜はらんといふより早く槍を捻つて飛鳥の如く。突伏せ薙伏せ瞬く内額み切つたる味方の人々只

一人に斬立てられ。手負ひ討死死人の山。人間業とは見えず申さずと大息ついでフシ物語れば。詞ハヽア扨こそ小田が謀計に落入り給ふか氣遣はし。それのみならず春永が。馬前に働く犬淸とは不審し〳〵。シテ主君には別條なきや。されば〳〵。かく亂軍となる上は主人の生死覺束なし。地御先途見屆け奉らんとフシ元來し道へ驅り行く。地物に動ぜぬ竹中も初めて吐息つぎあへず。詞スリヤ若者が切腹も苦肉の術であつたよな。オヽ推量の通り味方の空虛と僞りしは。まつ此の如く義龍をおびき寄せて討取らんず。これ皆軍師久吉が謀計。今といふ今犬淸が。お役に立つたるこの切腹。アヽ嬉しや本望やと。聞く度々にせき立つ官兵衞。詞チエヽ口惜しやなア。重晴程の弓取りが鼠輩の輩に計られしか。心許なき主人の存亡。

駈付け救ひ奉らん。女房物の具。物の具。エヽ不吉の吠面。いまはしと地足踏みこたへ鎧櫃手はかけながらよろ〳〵〳〵。氣ははやれども手疵の惱み。よろぼひ〳〵緣先へ。立つては轉けつ居てまろび。心あがけばせき上し。矢疵破れてほとばしる。血汐の眥目も紅。また打立つる引鐘に連れて駈來る四の宮源吾朱になつて立歸り。詞エヽ是非もなき御運の末。謀計に落入つて。諸卒も殘らず討死し。御大將義龍公手いたく働き給へども。敵勢鋭き狹間の圍み遁れん方も犬淸が。刃の下に御落命大崩れして士卒もちり〴〵。陣所々々も敵に奪はれ。殘る砦はこの一箇所。御油斷あるな官兵衞殿と。地いふ聲もはや息切れし。其の儘そこに倒れ伏す。詞ハヽア天なるかな命なるかな。多年の計策一時に破れ。主家の滅亡今日只今。

かゝる大事を引出せし。根さしは汝等と這ひ寄り〳〵。地兩手に二人が襟髮摑みぐつと引寄せ。詞五十年來不覺を取らぬ官兵衞に。地よくも恥辱をとらせたなア。主君の怨敵國賊めと。捻付け〳〵齒ぎしみ齒ぎり。怒れる眉毛も逆立つ癇癖。五臟六腑を込み上げて。拳に傳ふ血の涙スエテとゞめ兼ねてぞ見えにける。地時しも爰に寄せ太鼓亂調に打立て〳〵小田上總ノ助春永勇名かがやくその出立ち。欣然と入り給へば。それと見るより無念の息さし飛びかゝらんず氣の勇雄。義心を察して春永公。詞ヤレ騷がれそ竹中氏。齋藤道三を毒殺し。勿體なくも足利の四海を奪はん義龍が陰謀。その身の敵はその身の積惡。誰をか恨み敵とせん。元より齋藤旗下の貴殿。譜代恩顧といふにもあらねば。我が軍術の師範となり政治を助

け國民を憐むこそは誠の義者。有無の返答せられよと。道理に服せず嘲笑ひ。詞ヤア無益の舌客。千變萬化に理は說けども。眼前主君の仇敵。爰へ來るは火に入る虫。地フシ素頭取らんとせき立つたり。詞ヤア〳〵官兵衞。義龍が首取つたる當の敵左枝犬清見參せんと。地鎗ひつさげて駈來る母衣武者。歩み寄つて頰當兜。かなぐり取れば木下當吉。御前に向ひ謹んで。此の久吉が下知に從ひ敵地に入つて命を落し。謀計を行ひしはあれなる犬清。また戰場にて義龍を討取る。武功を現はす犬清は。地卽ち是にと鎗投捨て。母衣絹取れば脊負ひし稚子。ヤア淸松かと手負ひの千里寄りも寄られぬ深手の苦痛。母も心根思ひやり千々に亂るゝ胸の糸。地久吉重ねて。詞この稚子の犬淸に御勘氣御赦免下さらば。われに加增の君恩にも遙かに勝る地御仁惠と思ひ。入つてぞ願ひける。地大將莞爾と打笑み給ひ。ホヽウ。一名二人希代の犬清。死しての忠臣生きての勳功。よく勤めたり。地出かしたり。詞駈引はげしき戰場にて心よげなる寢顏の樣天晴れ大勇賴みあり今ぞ勘當赦すぞと地慈愛の詞に久吉はじめ。痛手も忘るゝ手負ひの悅び。心を察して御大將。詞未來へ赴く犬清に恩賞せんずソレ久吉。地ハツと答へて母衣絹に包みし首を故實をフシ正し差置けば。詞ヤアこれこそ主君義龍公の御首。エヽ淺ましき御有樣。犬清に恩賞とは我に迯つて情をかけ勇氣を挫かん結構よな。いよ〳〵鬱憤重なる春永。覺悟ひろげと詰寄れば。ヤア麁忽麁忽。當の敵はこの久吉が負うたる犬清サア討て竹中。地オヽいふにや及ぶとすらりと引拔き振上ぐる。白刃の光に身を惜しまず。サア〳〵と突付けられ。翳す刃の下蔭に紛ふばかりの。しよぼしよぼ髮。すや〳〵寢入る稚子は。聟や娘が面ざしにた〳〵顏の愛盛り。思はず見惚れて。詞ハテよい子だなア。孫と祖父とが初見參。產着の一重もくれもせず。邪見に振りし刀の下。さぞ恐しき夢や見ん。地不便の孫が寢姿や。現在娘の別れにも淚一滴こぼさぬ官兵衞。義に張詰めし强弓も血の緒の弦に折れたるか拔て。可愛やと大聲上げ。勇氣挫けて身もふるひ刀持つ手は大磐石。鐵丸の如き魂も今ぞとろけてはら〳〵とゞめ兼ねたる。恩愛の淚。汲出す如くなり。地犬清につこと打笑ひ。久吉殿の厚恩にて御勘氣御免ある上は。思ひ置く事少しもなし。今こそ女房舅殿。仇も恨みも是まで〳〵。お暇申すと突込む刀引廻す。

久吉暫しと押しとゞめ。詞孤兒となる　地盲兵衛數行の涙を押さへ。詞敵ながり。哀れを見捨つる御大將　詞義龍亡び
この淸松。某が守り育て生先めでたき　らも情ある小田に刃向ふ弓矢はなし。し上からは不日に都へ上洛し。管領三
榮えを見せんと。地抱上げたる。うし　地我は是より女房諸共。栗原山の閑居　好長慶が底意を探らん此下當吉。ハ、。
ろ細。蜻蛉結びも秋津國。四海に覆ふ木　に籠り。主君をはじめ聟娘が。菩提を　ハ、。ハ、、、仰せにや及ぶべき。
の下の。露の惠みに生ひ育つ。唄いん　吊はんいざさらば。詞オ、この犬淸も　時日を移さず奇計をなさんと。地聲も。
のこ／＼。いんのこや犬の子。ナホス犬　近付く知死期。我が君おさらば。いづ　淸洲へ御凱陣よそに見送る竹中夫婦二
の子／＼は犬淸が。殘す嫩は末の代に　れもさらば。さらば／＼の聲慕ふ。今際　人が末期一時に。小田の旗色茜さす。
左枝政右衛門時家と。名に知られたる　の娘を母親が。フシカヽリ未來の道連れ　朝日まばゆき鎧の袖。綺羅一天に輝か
弓取は。フシこの稚子の事なりける。　はぐれぬやう。賴む／＼もないじやく　す。武名の。程こそ　三重へ類ひなき

薫樹累物語　一九

八つ目　埴生村の段

〔解題〕　累與右衛門を材題とした戯曲は歌舞伎にも淨瑠璃にも澤山あるが、「薫樹累物語」の外題で演じられたのは寛政二年四月廿七日の道頓堀東の芝居の竹本石之助座であつた。番附によれば、屋形の段、吉原の段、大門口の段(高尾殺し)、千本通の段、豆腐屋の段、祇園の段、屋敷の段、埴生村の段、絹川堤の段(累殺し)を出して居る。この丸本は見ないが、六行稽古本目錄には、豆腐屋の段、埴生村の段、累殺しの段が掲げてあり、

後の操りの繰返しでも大抵は埴生村の段と累殺しの段とを出して居る。

前の番附面を見、又現存の稽古本によるに、これは紛ひもなく「伊達競阿国戯場」(安永八年作、浄瑠璃名作集下、傳記先代萩の解題の條參照)の改作で、その九段目迄を出したのである。茲に收めたのはその八段目の埴生村と与右衛門内の段の切で、原作の金五郎が鉦八、豆腐屋三婦が戸平と變つて居るくらゐで、他は殆んど同文である。

本曲の梗概はかうである。足利頼兼が傾城高尾に惑溺し奸人共之に乘じようとするので、お家は危殆にならうとする。頼兼の恩顧を受けた力士絹川谷蔵はこの禍根を絶たうとして高尾を殺した。その後谷蔵は南禪寺前の豆腐屋三婦といふ高尾の兄の家に頼兼と共にかくまはれ、妹の累に想はれて夫婦となると、高尾の怨念の祟りで累は二目と見られぬ醜婦となつた。併し兄三婦の頼みもあり、又自分も因縁と諦めて谷蔵は、累に鏡を見せぬ事を戒心した。のち谷蔵は与右衛門と變名して累と共に下総埴生村に世を忍ぶ身となつたが、悪人金五郎（鉦八）が頼兼の許嫁の歌方姫を身賣りしようとすることを救はうとして百両の才覚に窮するを累は代つて身を賣らうとして初めて鏡を見てその昔に變つた醜貌に驚愕悲憤して絹川に身を投げようとする。こゝで歌方姫と与右衛門との関係を誤解し、嫉妬の一念に高尾の怨念がのり移つて鎌を振つて殺さうとしたので、与右衛門は止を得ず累を殺す。後から尋ね上つた三婦がこゝへ来合せて、共々に因果を歎くと共に、怨念退散して元の美貌に返つて往生した累の首を頼兼の身代りとする。これが九段目の終りである。十段目は例の先代萩の對決の場の原作となつた場面、

へさして立歸る。地跡は思ひに花ぞ散
る。物思へとや入相の。鐘にせかるゝ
百兩の。才覺何と與右衛門が。スエ思
案に胸の暮れ近く。フシ思ひ廻せば廻
す程。詞御館の騷動故。一旦この絹川が
御供して立退きしと。風聞せし賴兼公。
都の内におはすとも。辨へなき姫君樣。
女心にはる〴〵と慕うてお出で遊ばし
たか。何にもせよちよつとマア。お目
にかゝつて。アイヤ〳〵。曲みに曲ん
だ鉦八め。絹川と知られては我が身の
大事。姫君の御身の上にかゝる難儀。
とあつて百兩の金はなし。所詮手短か
に鉦八めを。追つかけて打殺し姫君の
御供して立退くより外はなし。オヽさ
うぢや。地さうぢやと駈出すを纏ひ付
く。前垂の細恩愛の。本フシ緣に引かる
る後髮。詞此のまゝに立退かば。嘸や
跡にて女房が。何にも知らず見捨てた
かと。恨むであらう泣くであろ。兄の戸
平に詞をつがひ。たとへどの樣な事あ
つても。一生見捨てまいと言うた女房。
義理の缺けるもお主の爲。了簡して下
され戸平殿。こらへてくれ女房ども
地せめて一筆殘さんと探す硯の石の
海。フシ浮世に秋の日の足も。片足短
き女房の。累はとつかは酒屋から。歸
る フシ我が家の黃昏時。地はつと驚き
懷へ。隱すあいろも夕間暮。詞オヽさぞ
待兼ねさしやんせう。この在所の酒は
惡いと言はしやんすに依つて。隣村ま
で往て貰うて來やんした。それはマア
さうと鉦八さんは何處にぢやえ。イヤ
モ待兼ねて疾うに去んで了うた。エヽ
モほんに氣の短いお人ではあるぞ。折
角買うて戻つた酒。そんならお前飮ま
しやんせ。アヽいや〳〵。おれはもう
酒どころではないわいのと。地どこや
ら濟まぬ夫の顏。つい目に付くも愡れ
た中。心にかゝる傍へ寄り。詞コレこ
ちの人いかう顏の色も惡し。お前は何
とぞさしやんしたか。さうして。マアつ
ひにない日頃の好きの酒もいや。ムヽ
何ぞこりやこなさん樣子のある事でご
ざんすの。女房のわしに隱さずと。ち
よつと聞かして下さんせと。地聞き
たがるのも夫思ふ フシ心遣ひぞ道理な
る。地不便とは思へども。洩れては事
の妨げと。それとは言はで。詞コレ累。
今迄そなたに言はなんだが。何を隱さ
うアノ鉦八には。親の代から百兩とい
ふ借がある此の中からその金を。戻せ
〴〵といらだての催促。色々と言ひ延
ばしたが。せつぱ詰つて今夜の夜半。
どうあつても其の金立てねばならぬ事
になり。請合ふ事は請合うたが。土か
砂か見る樣に百兩といふ大枚の金。早

速調ふ當てもなし。いつそ毒喰はゞ皿。アノ鉦八めを斬殺し。エヽサコリヤ。サさうも思うて見たが。また外に工面の仕様もあらうかと。今その思案最中と。語る夫の今の間に。降つて湧いたる身の難儀。妻も途方に。くれは鳥。たゞ涙ぐみ。居たりしが。日頃夫の突詰めし。心をそれと汲取つて。詞エヽやくたいもない與右衛門殿。何のマア百兩やそこらの金。其の様に苦にさしやんす事はないわいな。又よい思案もござんせう。コレ短氣をやめて下さんせえ。お前のその短氣故。人をあやめて。コリヤ。サアもし其の事が顯はれてどんな憂目に遭はしやんせうかと。ほんに夜の目も合はぬわいな。地サハリ今この日陰の身となつたも。皆こなさんの心から。若しもの事が。あつたらば跡に殘つたわしが身は。どの様にあらうぞと。ちつとは又女房の心推量してくれたがよいと。夫思ひの一筋に聲も得上げぬ。フシ忍び泣き。地夫も不便の涙を隠し。詞それ程に迄おれが事。思うてたもる志。悪うは受けぬ嬉しいぞや。コレおりやモ何もかもよう得心して居る。ム、そんならば何事も。聞分けて下さんしたか。エヽ嬉しうござんす。九つ迄はまだ間もあり。一寸延ぶれば尋延びる。マア〳〵奥へござんして酒でも一つ飲ましやんせ。又よい思案も出よぞいなと。フシ奥へ勸める女房の顔。見るにほろりとをち方の。涙を胸に與右衛門は。フシしを〳〵立つて入る跡へ。地所見馴れぬ一腰も。派手な合羽の取成は。フシさすがそれ屋と門口から。詞ちつとお頼み申しませう。與右衛門様とはこなたでござりますか。鉦八様といふお方がお前様にと承りましたが。ちよつとお目にかゝり度うござりますと。地言へどこなたは耳にも入れず。詞通つて下さんせ。エヽ何ぢややら邪魔らしい奉加どころかいな。私が所は宗旨が違ひます。地と胸のもやフシもや愛想なき。詞イヤ左様な者ではござりませぬ。私は江戸吉原の女郎屋でござりまするが。鉦八様に御相談仕掛けました奉公人。金持つてこいこなた様に待つて居るとおつしやりましたが。ハテ面妖な。どつちへお出でなされました。どうぞお目にかゝりたいものぢやがと。地いふ内ふつと氣の付く杲。我が身を賣つて百兩の。金調へる手寄には。フシこれ幸ひと笑顔して。詞どうで見える鉦八様。這入つてお待ちなされませ。ハイ〳〵左様ならばお邪魔ながら。ヤ御免なされませと地知らぬ人にも取入るは。商賣筋の上手者。

果は脇へたばこ盆。いひ寄る機會にツシ茶を差出し。詞イヤ申し。お前はアノ吉原の女郎屋さんでござんすか。そんならお前に折入つて。お頼み申し度い事がござんす。といふは外の事でもない。夫が手詰めの難儀につき。急に金の入る事があつて。身を賣りたいといふ人がござんすが。今いうて今相談が出來るものでござんすかいな。イヤもうそれは商賣づく何時でも談合出來まする。そしてまあ其の本人の年頃は。アイ十七八でござんする。ヨシ。顔の住居立入れの様子。サア顔形風俗は大阪でいうて見ようならば。歌舞伎芝居の野鹽によう似てござんすといな。それはけうとい代物ぢや。どうぞわしが方へ相談を極めませう。そして金の望みは。マア百兩にさへ買うて下さんすりや。年は五年が十年でも。それに厭

ひはござんせぬ。ヤモ今の咄の通りなら。隨分百兩に買ひませう。幸ひ金は持つて居る。相談さへ極つたら直ぐに連れて去にたいもの。そんならさうして下さんせ。シタガ今いふ通り夫のある身。地互に得心づくの上。暇乞ひする其の間。アレあの納戸で暫しが内。詞そんなら必ず何もかも。コレ手廻し早う頼みますと。いそ〱としてかの男。納戸へこそは入りにけり。フシ果は跡を見送りて。手詰めの金の今の間に。つい調うて嬉しやと。思へば悲しき憂き別れ。アヽ是とても男の爲。詞とてもの事に潔よう。夫に泣顔見せぬのが。別るゝ此の身の冥土產と。フシ氣を取直す一間より。何心なく出る與右衛門。顔を見る目も塞がる思ひ。押隱して。傍へ寄り。詞イヤ申しこちの人。わたしやお前に願ひがある。聞届けて下さ

んすか。是はまた改つて女房ども願ひとはそりや何事。サア日頃お前の言はしやんすには。鏡を見ると添うては居ぬ。暇をやると言はしやんした。その鏡が見たうござんす。ヤ何といやる。そんならそなたは暇をくれと言やるのか。アイ。今宵に迫つた手詰めの金。勤めにやつて下さんせと。我が形の變りしとは。知らぬ不便さいぢらしさ。何のマア其の顔でと言ふも言はれぬ苦しさの。胸に涙を呑込みながら。エヽ埒もない。たとへどの様な事があつても。そなたに勤め奉公さして。兄の戸平へ立つものか。サイナ。それぢやに依つて暇の狀。暇下さんせ與右衛門殿。とはいふものゝ中に。女房は夫に去られまい。暇取るまいとする筈を。縁切られても嬉しいと思ふ心を推量して。可愛と思うて下さんせと思はずわつと聲立

て〻。取付き縋る蔦の葉の。袖に柵む憂き涙とゞめ。フシ兼ねたるばかりなり。詞ほんに私とした事が。よう得心して居ながら。どう狼狽へて泣いたやら。地年の立つ間は。射る矢より。早う戻つて元の女夫。必ず〳〵それ迄は。健で暮して下さんせと。つらい苦界へ身を賣るより昔に變る面ざしとも。何にも知らぬ心根が。その百倍のいぢらしさ。五體をしめ木に締付けられ。油抜かるる フシ憂き涙とゞめかねたる折からに。地息せきと來る村の歩行。詞申し〳〵與右衛門様。山名宗全様から繪姿を以つてお尋ねなさるゝ者がある。今ござりませとお代官の言付け。サア〳〵今ぢや〳〵とせり立つれば。地はつとばかりに與右衛門が重なる思ひは今を的。胸を据ゑたる魂の。一腰ぼつ込み立つれば。詞コレ待たしやんせ與右衛門殿。さつきにお前にいふ通り。短氣を出して下さんすなと 地いふ間もせはしくサア申し。早う〳〵とせつかれて。代官フシ所へと出でて行く。地後影さへ名殘かと。見やる目に湧く雨涙。しを〳〵立つて押入れの。冬の支度の。綿入れも。漸う裾をあはせ物。半太夫はなれ物とは。言ひながら。文彌豫て斯うなる身と知らば。せめて不自由のなき様に。洗濯物の。糊立も。涙にしめる糸筋や。針のみゝづの見え分かぬ欠伸まぜくら納戸より。立出づる以前の男。詞アヽ旅草臥れで思はず知らず。する〳〵とやつて退けた。サア申しお内儀様暇乞ひも濟んだならをり極めしましよかい。オヽ嘸ぞお待遠にござんせう。サアそんなら其の百兩の金渡して下さんせ。オヽそりや何時でも渡しませうが。シテマアその奉公入は。アイ私が事でござんすわいな。エヽ何をじやら〳〵と。サア〳〵氣が急きます早う頼みます。イヤ申しじやら〳〵ではござんせぬ。眞實誓文私が身を賣るのでござんすわいな。エヽこなさんは〳〵そりやマア何を言ふのぢやぞいの。ソレさつきに言はんした野鹽とやらいふ代物。サイナア私が事でござんすわいな。ヤア此の人は氣が違うたさうな。ムヽそんならこな様が野鹽か。こいつは胡麻鹽が聞いて呆れるわい。これいなうこな様を誰がマア惣嫁にも欲しがる者はないぞや。アヽそりやマア何で其の様に。何で其の様にも厚かましわ。あんまり呆れて物が言はれぬわいの。ハア貴様こりや鏡見た事はないの。アイちと様子がござんして。鏡見る事はならぬわいな。ムヽいか様さうであろ〳〵。生れてから鏡見た事はある

まい。コレこなたの顔の容體を言うて聞かそか。ぐるり高のちよつぽり鼻。顔にべつたり痣があつて。しかも出歯で。横から禿が見えて。其の代りに跛ときて居る。エヽ。ヤエヽも凄じわいの。幸ひ爰に髭抜鏡稀有けげんな御面相。とつくりと見やしやれと懐より取出しやら腹立ちに差付くれば。思はず初めて見る顔に。はつと悔りまだ外に人も居るやと見廻せば。我ならずして面影はよもやと又も取上げて。見れば見る程情なや。コハそも如何に悲しやとあなたへうろ〳〵こなたへ走り。狂氣の如く身を悶え鏡をはつしと打付けて。我が身をどうど打倒れ聲をばかりの叫び泣き哀れにも又いぢらしき。詞エヽ忌々しい隙づひやし。イヤモ此の様な化物を百兩は扨て置いて。米一升でも買手はないと。つぶやき〳〵立上り。

せめてお腳で腹癒よと。泣入る累を踏飛ばし　フシ足を早めて立歸る。　地跡は正體泣き崩折れスヱテ顔も得上げず。居たりしが。アヽ思へば〳〵恥かしや。斯ういふわしが顔故に。鏡を見せぬ夫の心。其の顔もせず朝夕に。可愛がつて下さんした。お情過ぎて情なや。なぜ打明けて有様に。言うて聞かせて下さんせぬ。また姉様も胴慾な。現在の妹を是程までに。憎いかえ。斯ういふ事とも露知らず。今の今迄わしが身で器量自慢をして居たが。恥かしいやら。エヽつつともう。悲しいやら。何面目に與右衛門殿。どうマア顔が合はされう。せめて夫と同じ名の。絹川へ身を投げて。死ぬるは未來で連添ふ心。とは言ひながらさつぱりと。思ひ切られぬ惚れた中。死んだ跡では美しい。女中を女房に持たしやんしよと。そればつか

りが氣にかゝり是が迷ひの種となり。よう浮まぬでござんせう。可愛と思うて折ふしの。御回向頼み上げますと口説き立て〳〵　フシ絶え入る。ばかりに泣き盡す。地沈む重りと邊なる。刈豆籠を。身の垂に負はれ追はるゝ死神の。もし仕損ぜば身の恥と。見廻すあたりに錆びもせでオクリ研立て。鎌は今宵置く。草葉の露と消えよとか。いとゞ哀れを添へに來る。フシ降る秋雨の。足音に見付けられじと吹消す行燈。詞灯が消えてある女房ども。累。地累と與右衛門が。揩れ違うたる門の口。詞誰ぢや。誰ぢや。そこへ出るのは累ぢやないか。地といふ聲跡に聞きさして。女心の一筋に倒けつ　フシ轉びつ走り行く。地ハテ怪しやと見る影は。慥に女房と思へども。あやも分らぬ眞の闇跡を。慕うて　三重へ駈り行く

蝶花形名歌嶋臺

八つ目　小坂部館の段

（二一）

〔解題〕寛政六年七月十五日から道頓堀大西芝居（座本豊竹染次郎）で興行。作者若竹笛躬・中村魚眼。

敵味方と別れた武家の棟梁眞柴久吉と周防の國主大内義廣との仲を和解すべき勅命を受けた兩家の重臣加藤正清と出海左衞門宗貞とは義兄弟であつたが、共にその妻の父に當る日本無雙の軍略家たる安藝の小坂部兵部音近を味方として事件を有利に解決しようとの心底を有ちながらも、體面上共に義として妻を離別して舅の緣を切つた事とした上に、各共の子を使者として音近を父への味方にと一命をかけて勸誘させる。音近は義理ある孫の笹市（清正の子）には名刀、實の孫の松太郎（宗貞の子）には双引の鈍刀を與へて眞劍勝負をさせ、その間に自双して身の立場を明かにするといふ八冊目を以て全篇の山として五段十一冊から成つてゐる。本曲では大内義廣は島津義弘、小坂部音近は長曾我部元親をモデルとして、太閤記を種として夢幻的に想を構へ、眞柴大内兩家和睦して、源氏系統の大内義弘が、平家末流の小田家の姫君春姫と婚禮をするので、外題の角書に「舅君は源家の嫡葉、嫁君は平家の落人」と置き、又作中に「男女別あり夫婦有る、かためは雌雄の蝶花形、相生祝ふ島臺や」とか「御祝言、蝶花形は春姫の輿入圖入り……」といふ句などのあるに因んで「蝶花形」「島臺」の外題文字を据ゑ、その上に柴田勝家の女大鬧が父の辭世である「夏の夜の夢路はかなきあとの名を雲ゐにあげよ山郭公」の短冊を所持して岩國山で母の小谷の方に再會する（十冊目）條から「名歌」の文字を取入れて外題名を作つたものと思はれる。

地秋は殊更もの淋し。千草にすだく蟲ならで。ホフシ臺子の釜の音澄みし。地數奇屋待合前栽の。路地と勝手を忍び足。隔て合うたる姉妹が。心も先へフシ飛石傳ひ。地それと眞弓が姉様か。詞オヽ妹。爰へは何しに。エヽ聞えた。わしを出し抜き父上を。大内方へ味方に付けうと思やるのか。さう言はしやんすお前こそ。先へ廻つて久吉方へ。勸める心でござんせう。エヽつべこべと口答へ。地そこ退きやらぬかと突退けて行くも姉我意隔つる眞弓。邪魔しやんなと振りほどく。風に屏風の柳腰。帶際とつて引戻す。腕も。かよわき糸薄亂す黒髪兩方が。掴み合うたる姉妹喧嘩。爭ふはずみ縁側へ。轉る拍子にはつたりと。フシ思はず開く障子の内。地閑を樂しむ音近が。臺子にかゝり獨服の濃茶の。フシ手前他念なく。詞出海。加藤が妻と言はるゝ身を以て。はしたなき振舞。さりながら。主家を思ふの貞節。さのみは叱らぬ。仲直りは幸ひ〳〵。姉妹仲も濃茶の盃。サ爰へ。地〳〵と機嫌よき。父の詞に葉末は差寄り。詞今四海一統に。久吉様へ從ふ時節。理を非に曲げてお味方を。イエ〳〵姉様まんがちな。申し父上。義廣様へお味方せうとつい言うて下さんせ。ハテ姦しい。是非返答が聞き度くば。雙方とも罷りならぬ。此上はそち達が持參の品を改めよと。地取出し渡す以前の箱。心濟まねどめい〳〵が。あたふた明けて取出す。様子は何かしら布に。詞ムウけふの細布胸合はずと古歌の下の句。手跡は夫正清殿。わたしが方はコレ此の扇。ドレ〳〵。秋來月を見て歸思多し。自ら籠を開いて白鷴を放つ。ム、コリヤコレ。故郷をおもふ詩の心。娘ども。篤と工夫を仕れ。アイ。地とは言へど姉妹が。長地夫の心しら布とかけし扇の判じ物。解けぬ色目を見て取る音近。詞眞柴が招きに從はざる。舅も聟も心々。けふ細布胸合はずと。一家の縁も此の如く。斷ち切る布は離縁の印。エヽそんなら私は正清殿に。オヽそちばかりでない妹も。故郷を慕ふ詩を。扇面に書し送りし左衛門。要をはづせし其の扇。親骨子骨ばら〳〵に。因を切つたる扇の去状。地ハアはつとばかりに詞なく。目には涙の。玉手箱フシ明けて。悔しき思ひなり。地時しも次より近習の武士。詞眞柴家より使者として加藤正清。大内より使者として出海左衛門宗貞。只今是へと知らすれば。しをれし葉末も露持つ心地。詞オヽよい所へ夫の使者。子仲なした夫婦合ひ。合點もさせず去

られた様子を。オヽさうでござんすと
も。私とても同じ事。お使者であらう
が此の恨み。頼むは姉様呑込んだと。
地初めの縺れはどこへやら。解け合う
ては引締める帯も親身の。フシ姉妹思
ひ。詞ヤア縁切れたれば。他人向。無
禮の挨拶仕るな。地身も禮服に改めん
と。言ひつゝ立つて奥深く。入る間に
程もなが廊下。加藤虎之助正清と。親
の名をかる筐市が。まだ十才の腕白盛
り。年も相生ふ松太郎。父左衛門と是
も亦。オクリ名は芳しき栴檀のフシ實生。
ゆゝしく打通れば。地思ひがけなき母
と母。詞ヤア左衛門殿と思うたは松太
郎か。ようおちやつたの。筐市も父様
の御名代ちやの。長上下の著こなしぶ
り。よう似合うた事わいの。サアヽヽ
お使者の口上此の母へ。イエヽヽ。父
様と縁が切れた。お前は餘所の小母様

ぢや。オヽ筐市殿の言はしやる通り。
コレ餘所の小母様。祖父様へのお取次。
お頼み申し上げます。地と言合さねど
両方が利發に困る母親も。フシ何と答
も口ごもる。地一間に斯くと洩れ聞く
兵部。老の氣丈の長袴。左右に小太刀
携へて作法。フシ亂さず歩み出で。詞
久しく對面せざる内。ハテ大人しく生
立ちしな。娘が縁に引かれざる。小坂
部が性根を知り。縁を切つて孫どもを。
使者に差越す發明々々。が若し。此の
祖父が承引せずば。其の儘では歸られ
まい。篤と思案を定めよ。地と詞も待
たず松太郎。詞この役目仕畢せねば。
生きて屋敷へ戻るなと。父様のお詞。
地と云ひつゝ手早に上下上著脱げば白
無垢麻上下。母は見るより。詞オヽさ
う無うてはならぬ筈。大人も及ばぬ健
氣さを。眞似がなるならどなたでも。

地して見やしやんせと聞けがしの。詞
も耳に當り障り。詞コレ妹。親の口から
子を賞めるは聞き難い。それ程の事し
かねる様な。筐市ではないわいの。ア
イ祖父様が味方に付いて下されずば。
死ぬる覺悟に極めて居ます。オヽさう
であろヽヽ。早う用意地と上下の。紐
を解くやらほどくやら。上著脱がせば
同じくも。フシ下は無紋の死出立。地
見るよりはつとは思ひながら。詞オヽ
出かしやつたなう。詞實極めたそなた
の覺悟。誰も口では立派に言へど。ま
さかになると臆病風。詞出易いものと
初めの嵐。吹き戻されてコレ姉様。詞
臆病風とは誰がこと。儀によつては命
を惜しむ。松太郎ぢやござんせぬ。ソ
リヤこちの子も同じ事。父上のお返事
次第。立派な覺悟見物しや。イヤ松太
郎が覺悟を見せう。見事そなたが。お

前がと。地我が子贔屓に取りのぼしフシ詞しどろに爭へば。詞ヤア無益の論談。左程離縁が悲しくば。切つたる縁を繼合はす。工夫は樣々。さりながら。われ達は此座に叶はぬ。早く立て。うじ〱と立兼ねるは。父が詞を用ひぬか。地と老のいら立ち是非もなく出づる心のしをり門。親子の中も。フシ隔つる切戸。地掛金かけて申し祖父樣。詞久吉方へお味方あらば。わしや侍が立ちませぬ。オヽ武士が立たうが立つまいが。祖父樣はこつちの味方。イヤさうはなるまい。して見せう。オヽ出かす〱。天晴れ勇者の悴ども。しかし。大内に付けば笹市が恥辱とならん。とあつて眞柴に從はゞ。松太郎が身の上。いづれを捨ていづれを取らん。かの獅子の子を試すに等しく。此場に於て兩人が。眞劍の勝負を試み。勝つたる方

へ祖父が味方。心覺えのこの二腰。是を以て立合へ。地と渡せば取つてめい〱が。腰にさすがは武士の。小太刀の目釘喰ひしめし。ハズミ股立りゝしく身拵へ戸の隙間より差覗く。母と。母とはあられぬ思ひ。年端もいかぬ二人の子供。命にかゝる眞劍の勝負さすとは餘りな。惨いわいのと掻口說く フシ親の。思ひぞやる瀬なき。地耳にもかけず音近は。床に直せし鼓取上げ。詞われ壯年の頃。武將足利義晴公。數度の軍功御賞美あり。猶も武名を鳴らせよと。谺と名付けし此鼓を下し賜り。年賀每に打つが吉例。今六十の賀を祝す。地謠ひ終らぬ其内に用意よくばと打鳴す。鼓の調べ。白刃の刄拔放して立向ふ。互のかけ聲。鼓の矢聲。謠有難や治まる御代の習ひとて。山河草木穩やかに。五日の風や十日の雨。雨が下照る日の光。

ナホス地劔の光打合ふ刃音。見る目ひやいさ危なさに堪へ兼て駈入るを。いつの間にかは物蔭に忍び姿の宗貞加藤。制しとむれば詮方も泣けど叫べど白砂を。一足去らず斬り結ぶ。武士の育ちの直燒刃付入る刀受けはづし。弓手の肩先松太郎。斬込まれてたぢ〱〱。母は見るより悲しさの。心あせれど詮方なみだ。謠さも潔よき山の井の水。〱山の井の。ナホス地手疵も屈せぬ松太郎尖き刃先笹市が。高股四五寸斬付くれば。詞アレ笹市が斬られたわいの。ソレ〱〱油斷しやんなア、危ない。必ず負けてたもんなと。地あせりながらも親々が詞の助太刀互角の手練。斬つつ。斬られつ迸る。血汐染めなす秋草も色を。爭ふ修羅の庭。勝負いづれと氣を配る。父と。父とは千萬無量。母は外面に血の淚。祖父は早むる

孫のせめ。詞君は船。／＼。臣は水。水よく船を。浮べ／＼て。臣よく君を。仰ぐ御代とて返す／＼も。よき御代なれや／＼。萬歳の。道に歸りなん／＼。ナホス地深手に弱る松太郎氣嵩の笹市まくり立て。止め刺さんと立寄るを。詞ヤレ待て。勝負見屆けたぞ。娘どもは手負ひの介抱。早く。地早くに母と母我身をしづに東西の。掛金はづれ押明くるとしや遅しと駈入つて。我子々々に縋りつき。詞オヽ、嬉しや笹市そなたは淺疵。神や佛のお蔭ぞと地姉は喜ぶ妹は。手負ひにひしと抱き付きスヱテ介抱おろか。泣叫ぶ。詞ヤア武士の家に育ちながら未練至極。笹市勝負に切り勝つ上は。兵部音近今日より。久吉公へ味方ぞと。地聞くにいそ／＼姉葉末お馬の先の高名にも。勝つた手柄と賞めそやす餘所の悦び子心に。聞くも無念さ松

太郎。詞エヽ、わしや負けたか口惜しい。地今一勝負と刀を杖。立上れどもよろ／＼／＼。見る目に母は堪へ兼ねて。詞オヽ、道理ぢや／＼。道理ぢやわいなう。地武士の。意地とはいひながら。孫は子よりも可愛いと世の諺もあるものを。見殺しにする片意地は。むごい無情い父上と。恨みの數矢かぞへ立て。いふも眞弓が子に迷ふ。悔みにいとゞ。フシ苦しさの。地引入る息氣を張詰めて。詞アヽ、母樣。祖父樣に恨みはない。地負けたはわしが未熟から。大事の役目を仕損じた。憎い奴ぢやと父樣に。叱られうかとそれが悲しい。もし尋ねてなら笹市に負けはせぬ。詞怪我につい斬られたと。地いうて詫びして下されと。今はの際も名を惜しむ稚心のいぢらしさ。堪へ／＼し祖父兵部。以前の刀抜くより早く腹へかばと突立つれ

ば。ナウ何故の御最期と。右と左に姉妹スヱ取付き歎けば氣丈の手負ひ。眞弓が顔を打眺めて。フシ涙を浮め。詞オヽ、恨みは尤もさりながら。何をか包まん。松太郎へ最前渡せし一腰はな。刃引も同じなまくら物。さるに依つて笹市が手疵は薄手。斯く計らひし一通り。本意ならねど言ひ聞かさん。姉の葉末は先立ちし。我兄元胤が忘れがたみ。某とは生さぬ仲。同じ血の緒といひながら。義理ある孫の笹市が命を助け。肉身の松太郎を殺せしは。指す敵加藤正清に。縁を引いたる親左衛門。返り忠もあらんかと。地主家義廣の疑念を晴らすは。骨肉の一子を殺す義者の潔白。此上なしと思ひ寄りしも。義理といふ二字が劔となつたるかや。月にも。花にも代へぬ程いづれ。劣らぬ不便さも。産みの娘が産みの緣。分けて可愛い松

太郎コリヤ無駄死とばし思ふなよ。年こそ寄つたれ無愛の勇者。小坂部兵部晉近をそちが刀でこの如く。小腕に仕止め潔よく。討死せし手柄者。出かしをつたと父親が褒めこそすれ叱りはせまい。心殘さず臨終をと。義理の孫子と恩愛に捨つる命の有難さ。姉はもとより妹が。さうとは知らず父上を恨んだが勿體ない。コレ松太郎聞きやつたか。そなたが死ぬるは父御のため。負けたのぢやない勝ぢやといなう。アヽ嬉しうござる。そんならお前も緣切れず。地元の通りに父様と。中よう添うて下されや。母様。母様はどこにぢや。オヽ爰に居る〳〵。悲しやそなたは。もう目が見えぬかいなう。アイ。侍の子が未練なと。笑はれうか知らねども。死ぬる今はに父様や。お前の顏がたつた一目それが。地それがといふ跡は舌も縺るゝ斷末魔。詞オ、苦しかろせつなかろ。地その苦痛より此祖父が。斬つつはつつの度々を。謡鼓で紛らしても。肉骨を裂く苦しみは。一百三十六地獄の呵責を一度に請くるとも。よも此の上のあるべきか可愛の孫やと取亂し。歎けば姉はせき上げ〳〵。孫子の爲にお命を捨てゝ恵みの父の恩。船車にも積まれうか。それはかりかはいとし子を。義理の刄に殺すのが悲しう無うて何とせう。こらへてたもと妹に手を合はしたる詫び涙。詞アノ姉様の勿體ない。斯うなり行くも先の世の約束事と諦めても。地こんなゆゝしい子を殺す其日も變へず父上まで。同じ刄の憂別れ。神も佛もなき世かと手を取交し姉妹が返らぬ悔み宗貞も。加藤が手前恥ぢらひて爰にとだにも得も言はぬ。胸の苦しさ目に餘る。涙見せじと喰ひしばる。心を察し正清も保ちかねたる共涙親は泣寄り眞實の涙々に。暮近き。フシ秋や。哀れを添へぬらん。し。地左衛門悲歎の涙を拂ひ。詞一子を殺が孝心男の情。地命を賜はる返禮は再び結ぶ聟舅。詞ホヽ、、正清とても左の如し。大内義廣征伐に小坂部が討死と。地記錄に殘さば松太郎。男の追福此上なしと。聞くよりにつこと打笑みて。詞ハヽ、仁あり義ある。味方は名のみ相果つる。兵部が末期の置土產。德市に與へし太刀こそ。我が重代。北辰の二字を刻し。武運守護ある七星丸。蕪夫不當の正清に。劍の威德加はりて。地和漢に美名を殘されよ。此上頼むは末子和三郎。小坂部九郎晉近と。我が若年の名を繼が世厚恩ある久吉公。御子孫の時に至り。スハ御大事と見るな

らば。粉骨盡し忠義を立てなば。草葉の蔭より悦ぶと傳へておくりやれ聟殿と。末期の一句孫娘。ナウコレ今が別れかと歎けど更にその甲斐も。嵐が告ぐる螺太鼓遠音にひゞき。フシ物凄し。地加藤が郎等木村和田藏。馳來つて大音聲。詞大内が本城山口は要害堅固の絶所なれば。地數日の對陣時を待ち計り知つたる海手より。足利慶覺西國へ下向と流布せし六字の旗。武器を隱せし兵船に。押立て〳〵押渡る。味方は必勝の破竹の勢ひ。急ぎ御出馬然るべしと フシ申し捨てゝぞ引返す。地スハ一大事と左衛門宗貞。劣らぬ正清雙方が忍び裝束脱捨つれば。肌には小具足身をかため。勢ひ込んだる フシ軍場の出立ち。地やをれ正清確かに聞け。久吉樂毅が術をなすとも。味方は臥龍が備へを立て。只一戰に追つ散らさん。詞早く歸つて猿冠者が。首を堅固に用心せよ。シヤ。案外なる非禮の過言。山口如きの破れ城。正清先陣蒙らば一摑みにひしいでくれん。吠え頬かはくな左衛門と。地互の廣言雙方が。詰寄り詰寄る。フシ勇者と勇者。地女房々々は正體も。なみだながらに勞はれど。フシ枯るゝ老木と。地諸共に惜しや樣の松太郎。フシあへなく息は絶えにける。地わつと一度に聲立てゝ。妻が歎きに目もやらず。互に睨み相聟同士。又も聞ゆる。攻め太鼓。哀れを跡に三つ羽の征矢。射るが如くに兩人は戰場。指して 三重へ出でて行く。

箱根靈驗躄仇討

二一

十一冊目　箱根　瀧の段

〔解題〕　享和元年八月四日刊行、同年十一月三日から道頓堀東の芝居（座本豊竹吉太郎）で興行。作者司馬芝叟。

實說は明かでないが、天正十八年正月廿一日に飯沼初五郎が兄の仇加藤幸助を討つた事件で「太閤記亡錄」にあるのを脚色したのだと「傳奇作書」續篇の中に見えて居る。伏見桃山築城の總奉行柾桐壹岐守の配下であつた佐藤剛助が同僚飯沼三平を妬んで暗殺し、飛龍丸の寶劍を奪つて北條氏に身を寄せて瀧口上野と改めて威を振ふ。三平の弟勝五郎は忠僕筆助と共に復讐を企て、勝五郎は三千助と變名して北條氏の臣九十九新左衞門に僕仕して敵を搜索したが、その間に新左衞門の女初花に想はれて遂に夫婦となつた。然るに豫て初花に戀慕して居た上野の迫害を受けて新左衞門は切腹し、二人は流浪の身となり、奥州路をさすらひ、勝五郎は風疾のために蹙となつて非人と迄零落したが、奥州白石の庄屋德右衞門の情で躄車を餞別に與へられ、貞實な初花に引かれて箱根に向ひ、初花の身を捧げての祈願によつて初五郎は恢復し、忠僕筆助と共に上野を箱根權現の社前に討果すといふ筋で、十二冊より成り、その十一冊目の口餞別の段と、こゝに收めた箱根山瀧の段とが名高い。

オクリへてこそ入りにけり。地忠孝の。身にも因果は廻りくる。ホフシカヽリ片輪車の飯沼を。乘せて綱手を初花が。引くも。たよわき女氣に心ばかりは勝五郎。車の助け竹杖を持つ手も寒き雪おろし。箱根颪の風の足フシやう／＼庭に引きとゞめ。地非人施行と書いた札。嬉しや爰と立寄つて。詞勝五郎樣。この邊りは山家ゆゑ。紅葉のあるに雪が降る。さぞ寒かつたでござんせうな。イヤ／＼。おれは車に居れば辛抱もしよいが。大きな體を乘せて。かよわいそなたが引く苦勞。過分なぞや嬉しいぞよ。アレ又そんなこと。女房に禮いふ者がどこにあるものぞいな。それはさうと。この阿彌陀寺は氏政が菩提所。今日の法事を手がかりに。敵の安否を。アヽ。コリヤ壁に耳。心を付きやいの。アイ地と呑込み氣を配る。折からどや／＼非人ども。振舞ひ酒の。戻り足。初花それと見。詞オヽ治郎さん。八さん。月の輪さん。よい貰ひがあつたやら。打揃うてよい機嫌。施行はまだあるかえ。地と尋ねに治郎は目を据ゑて。詞何ぢや。施行はまだあるか。あるか無いか往て見りや知れるわい。一體マア此治郎樣に。ずばら／＼ぬかすはドヽど

いつぢやい。どいつぢやい地と足ひよろ／＼。月の輪は打笑ひ。詞ハ、、、こいつは面妖喰ひしめると腹立てをる。コリヤヤイ。ありや鼈の女夫ぢやわい。何ぢや。鼈の女夫ぢや。サ、それがけたいぢや。一體マアあいつは鼈だてら。何であんなよい女房持つてけつかるのぢや。けたいが悪うて腹が立つわい。其上まだ業の涌くは今日の施行ぢや。仰山な札建てあがつて。米なら僅か二合か三合か。くれあがるのであらうと思うたは。エイカ。所を一人前に新太一貫つつぢやわ。其上生酢迄引かして。つひに喰うた事もない結構な料理まで振舞ひあがつたは。譯が知れぬぢやないかい譯が。それでおりや腹が立つて／＼。腸が煮返るわい。ワハ、、ハ、／＼／＼乞食一生にない錢一貫づつ貰うて。醨でない上白たらふく飲んで。結構な料理まで戴いたが何の腹の立つことぞ。ハ、、、、。ハ、、、、。ナア八よ。さうとも／＼。一文の錢貰うさへ、五丁七丁付いてもくれぬ世の中。こんな結構な法會に逢ふといふは。何たる有難い事ぢやと思へば。おりやもう有難うて有難うて。地嬉し涙がこぼれると。地しく／＼と泣き出せば。詞ワツハ、、、、。ハ、、、、こいつは又泣きをる。色々のけれ又もあるもんぢや。ハ、、、ハ、、、、。コリヤ月の輪。わりや何がをかしいぞい。こんな結構な法事する人さへあるに。おれは身上皆飲上げ。二親の彼岸に當つても。油揚げ一つづつさへ。配られぬ様に成果て。嘸やさぞ。父上や母上が。詞草葉の蔭から。えらい獄道ぢやと。思うて居やしやるであらうと思へば。地是が泣かずに居られうかと。しやくり上ぐれば。詞ヤイ／＼。わいらは泣いたり笑うたり。人をあへくるのかい。けたいが悪いぞ。何がけたいが悪いぞ。此様な有難いことがどこにあらうぞい。何が有難い忌々しいわい。勿體ない。そんな事言やんないの。何が勿體ないぞ。何が忌々しいぞ。何が勿體ない。何が忌々しい何が／＼。何が／＼。ウハ、、ハ、ハ、、、、。コリヤたまらぬ。ハハ、、、。ハ、、、、。臍がよれると地打轉けて。腹をかゝへる笑ひ上戸。泣き上戸。めつた矢鱈に腹立て上戸。果ては一蓮托生に。フシ皆々倒るゝ其風情。地笑ひこぼれて初花が。詞とう／＼皆寢やしやんしたわいなア。イヤモ見て居るがよい慰み。治郎めが理屈もない事ぬかして。腹立て居るをかしさ。サイナア。八様の愁ひの段で。私やお腹がよれたわいナ。ホ、、、。

ハ、、、、。地と諸共に。笑ひ上戸の月の輪が。むつくと起きて兩人が。寢息を窺ひ手をつかへ。詞若し旦那様。初花様。筆助殿。ハツア只今この所で承れば。北條氏政今朝鎌倉を發足し。參覲との取沙汰。地と聞くより飯沼車をにじり。詞ナニ氏政が上洛とな。エ、忝い。敵討の時節到來。シテ。上野もろとも發足したか。ハツア。否やの安否は此筆助。大磯中食と承れば。近寄り様子を窺はん出かした急げ。ヤして來いな。地と尻引つからげ。フシ大磯さして駈り行く。地跡に夫婦は勇み立ち。天を拜し地を拜し。悦ぶこなたに臥したる兩人。むつくと起きて。詞ヤア汝は飯沼勝五郎。おのれは初花。侍の額みで詮議する。サア有様に白状せい。イヤ。我々は左様な者では。ヤないとは言はさぬ。今三人が呼き話。寢た顔で皆

聞いた。大磯へうせた月の輪めは。筆助といふ力強。出し抜いたらもう佛の椀。サア襷め。ぬかせ〳〵地ぬかさにや斬うぢやと締めかゝる。腕首かついで雙方どつさり。性懲もなく起上り。摑みかゝるを手玉につく。手練と手練に兩人は。コリヤ叶はぬとフシ逃げて行く。地油斷ならじと勝五郎。見廻す後に立切る障子。さつと開けば瀧口上野。火鉢にかゝり寛々と。見下す敵は優曇花の。時待ち得たる對面と。初花諸共つめ寄つて。詞珍しや瀧口上野。うぬを討たうと此年月。艱難を盡したはやい。その方故に父上も。むざ〳〵と御切腹。恨みはおのれ兄の敵。父様の仇。サア尋常に勝負。地フシ〳〵と詰寄つたり。詞ム、ハ、ハ、、、、。汝が兄の三平さへ。只一討ちにした某。腰抜けの分際で。敵討とはしやらくさい。うぬ

ら兩人箱根あたりに。乞食と成つてへちまふと聞き。釣出す爲の非人施行。計略の罠と知らず。うか〳〵來るうつそりども。最早八方を取卷かせたれば。じたばたしてももう叶はぬ。此の瀧口が心を懸けた初花を渡し。その方は自滅致せ。ヤアたとへ腰膝立たずとも。うぬ等如きに渡さうか。ム、ならぬか。コリヤ初花。わりやどうだ。フン冠ふるは厭だな。ハテ惡い合點。この上野様に從へば。活計歡樂。心のまゝだがな。オ、たとへ縊れて死ぬるとも。おのれに枕を交さうか。何だ。それでも厭とな。ヨイ〳〵。厭と言うても今日前。吠頰かはかし靡けて見せう。ヤア。〳〵久馬。縄付き是へと地下知の下。いつの間にかは早蕨を用捨縄目の猿轡。フシ引立て〳〵立出づれば。地それと見るより二人は仰天。絶えて久し

き芽娘。なら懐かしと言ひたさも。身はいは猿の猿轡。スヱテ泣くより外の事ぞなき。地瀧口はしたり顔。詞何と見たか。娘を所望すれども與へず。くたばつた新左衛門が死跡闕所に致させ。早蕨めを擒にしたわが威勢。立てうと。伏せうと某が心任せ。箆めを思ひ切り。上野が與になれば。九十九の家を取立て。早蕨めを姑と崇めてくれる。又。いやだと言へば。腰抜け諸共嬲り殺し。否か。應か。生死の境。初花。サどうだ。地と非道の詞も差しあたる。人質取られて初花も。スヱカヽリ倶に無念の勝五郎。齒ぎしみ齒切り。胸先へ差込む癪。アツと悶える有様に。初花掬り駈寄つて。詞ア、コレ勝五郎様〳〵。エ、時も時と。折惡う此癪氣。せめてマア誰助なりとも居やつたら。コリヤ女。其奴めは出し抜いて。跡より多勢をかけたれば。今頃はもう寂滅。思案しかへて某に従へ。應とさへ言へば其腰抜け。母諸共に助けてくれるが。そちへの心中。人我につらければ。我また人につらし。魚心あれば。水心ありぢや。初花。何と憎うはあるまいがな。地と猫撫で聲のフシ面憎さ。地喰付いてもと思へども。眼前母と夫の命。我が身一つに比ぶれば。何惜しからじと思へども。現在敵に肌ふれて枕を交す苦しみは。身は八つ裂きの刑罰と。思へば胸も張裂けてフシ泣く音。血を吐く思ひなり。地瀧口は笑壺に入り。しづ〳〵庭へ下り立つて。勝五郎が襟髪取つてぐつと引据ゑ。詞サア。勝負せぬか。立合はぬか。ナ、何だ。とこぼえるか。無念なか。足が立たぬか。ムウ手も叶はぬか。フ、いぢらしや〳〵。此様な態をひろいで。敵討とはしやらくさいと。地砂に摺付けにじり付け。詞何と初花。是でもいやか。サアそれは。ヤア猶豫に及ぶは不承知な。よい〳〵ソレ母親めから刺通せ。地畏つたと取つて引伏せ。段平ひらりと差付くれば。詞ア、コレマ、、マア待つて下さんせ〳〵いなア。待てとはいよ〳〵抱かれて寢るか。サア。〳〵。サア〳〵〳〵と地絲體絶命。身の大難に初花が。何と詮方なき身ぞと思ひ極めて。詞得心ぢやわいなア。抱かれて寢るな。アイ。其代り二人のお命。ムウ得心とあれば。言うた詞は反古にもなるまい。立上り。詞ソレ。繩付めも助けてとらせ。地ハツと共儘猿轡繩目も一度に解き捨てゝ。白洲へかつぱと蹴落せば。せき止められし溜涙わつとばかりに取亂す。詞ア、コレ母様〳〵いなう。其お

歎きは尤もながら。是非に一羽は狩人の。網にかゝつた身の因果。此身さへ得心すれば。波風なう納まる此場。私やそれが本望でござんす。サア。本望ぢやに依つて勝五郎様。必ずお身を大切に。オヽ娘出かしやつた。此母が身一つなら。切刻まれても厭はねど。大切な聟殿に。代る其身は手柄者。オヽ過分な女房。源氏の仇に身を任した。常盤御前がよい手本。心の肌身を。ナ打解けて。サア。肌ふれるは此身の覺悟。何事も私が胸に。ヤ此瀧口を清盛とは心地よい。劒を抱いて寝るも一興。これより小田原の菊館へ立越え。酒宴の上で比翼の床入。その時にはコリヤ初花。今の悲しい共涙を。上野様おいとしいと。嬉し涙にしつぽりと。泣かせて見せうサアおぢや。地と引立てられて行く思ひ。見送る思ひも鴛鴦の。胸の劒羽呑込む瀧口。久馬も跡に引つ添うて フシ小田原さして出でて行く。地見送る母は正體なく。わつとばかりに伏沈む。地勝五郎顔を上げ。詞御尤もぢや御尤もぢや〳〵。我々に代り敵の手にかゝるとは。目の内に見えたれども。所詮なき命なれば。肌身を穢し一刀に刺通せよ。と言含め遣はせども。何の及ばう女業。不便の最期をさせます。地と聞くより母は身も世もあられず。さうぢや〳〵。と駈行く裾を引きとゞめ。詞コリヤ狼狽てどこへござる。どこへ行かうぞ。菊館へ駈行き。娘に加勢をするわいなう。サヽお心のせくは尤もながら。多勢の中へ踏ん込んで。親子諸共三途の道づれ。ヤ何と。サアせめてあなたはお命全う。一遍の香花を手向けてやつて下さりませ。詞 地カヽりと頼む夫も頼まるゝ母も涙にくづをれて。亡き身と聞けば力なく。せめて未來は助けんと。御寺に有合ふ鉦撞木。常念佛の法の縁。詞俗名初花。頓生菩提。地南無阿彌陀佛〳〵。フシ鉦鼓の聲の心身を。勞く如く勝五郎。可愛やなと取亂す。詞アヽコレ聟殿。悲しいは理りながら。宿世の業と諦めて。母のわしさへもう泣かぬ。男だてら未練な人。地と言ふ母の顔打守り。詞男であらうが鬼であらうが。是が泣かずに居られうか。地南無阿彌陀〳〵。詞聟殿。母様。地南無阿彌陀〳〵。夫も珠數を繰返す。回向に フシ時をぞ移しける。地女程げに恐しき者はなし。戀に凝つては千双の劒の中もいとひなく。漸う遁れ駈戻る。顔は紛はぬ。詞初花ぢやないか。勝五郎様。よう爰に居て下さんした。地としがみ付く〳〵母親は。顔見て恟り。ヤアそなたは娘。

恐しい敵の中マどうして抜けておぢやつたと。増嬉しい中にも氣はそゞろ。勝五郎面をあらゝげ。詞我々を慕ひ歸りしを。貞心とはいひたけれど。夫婦の緣も今日限り。妻でない。女房でないぞ。エヽ。そりやマアどうして。何故に。ヤア何故とは狼狽者め。我腰抜けとなつたる上。敵は氏政加勢すれば。八十萬騎に餘る助太刀。女ながらも近寄るこそ幸ひ。肌を許させ一刀にても刺通せと。最前常盤に準へて。巾し合め遣はせしに。命を惜しみのめ〳〵と。立歸つたる不覺者。何を言うても此體。一足だにも引かれぬ苦痛。増さあればどて斯くまで思ひ込んだる我が存念。やはか晴さで置くべきかと。用意の刀杖となし。立上れども踏みためず。どうと轉びつ這廻り。チエヽ淺ましや。いかに天命つくればとて。得難き時の



際となり。神も佛もかほど迄見放し給ふか口惜しやと。スエテ大聲上げて叫び泣き。増初花夫を打守り。詞ソレ。其様に業病を。悔ましやんすかいとしい故。

敵の手へ捕はれて行くは幸ひ。どうぞすかして一刀にても。恨みんものとこそ思へ。お前の機嫌を損ねうとて。私や戻つて來やせぬわいな。モウ〳〵

いふに言はれぬ。せつない。悲しい憂目をして。戻つて來たもな。お前の病氣を今一度。おのれと思ふ一念で。殘つた願が滿てたさ故。ヤア娘何といやる。殘つた願とは何の願。サア其樣子は御存じない筈。そも鎌倉を出でしより。計らず夫の大病。冷え病ひに腰膝しびれ。蹇となつたる業病。敵が討たれぬ〳〵と。悔む主より女の身で。傍で見る目が地フシいとほしく。詞今一度本復させまし。兄御の敵討たさんと。私が命を代りに立て。この箱根の權現樣に祈誓をかけ。塔の澤の白瀧に百日がその間。朝夕兩度身を打たれ。垢離に清めて捧げる命。日數も滿ちて百日の。今朝まで行を遂げおふせ。今一度にて滿つる願。悲しや思はぬ災難で。身は捕はれとなつたれども。夫の爲に權現へ捧げたこの身。のめ〳〵と何の死

ならぞ。死にやせぬ〳〵と。思ひ詰めたこの願望。幸ひ爰に流れ寄る。この水上は向ふの瀧津瀬。白瀧と心に念じ今一度の願を滿て。權現納受ましますか。驗を爰にて試し見ん。地とかひ〳〵しくもフシカヽリ身繕ひ。躯寄る。山路に散りしく紅葉。嶮しき岩壁いとひなく脛もあらはに分け登る。その身は鼯木傳ふ猴オクリなんなく。瀧に近寄れば。音凄まじく飛散る水勢。白糸亂す瀧の面。ざんぶと飛込みどう〳〵と。落ちくる水を掬び上げ。念力凝らして一心に。合掌したるその有樣。物狂はしく髮逆立ち。フシ身の毛もよだつばかりなり。地操を感じて母夫祈誓を添へて諸共に。合掌したる後より。窺ひ出でたる刎川久馬。飯沼めがけ斬込むを。心得ひらりと飛んだるはずみ。すつくと立つたる勝五郎。悔りしなが

ら打込む刀。久馬が首は花火の白玉。フシ虚空はるかに飛散つたり。地母は見るより打驚き。詞ヤア〳〵。こなたは足が立つかいの。地と言はれて其身も心付き。詞扨こそ〳〵。初花が念力の。奇特正にあらはせしか。地チエヽ有難い地フシとぞく〳〵小躍り。地母は嬉しく伸上り。詞コレ〳〵娘。そなたの祈誓は屆いたぞやと。地いふ聲響く瀧の面。凝らす兩眼見開きて。あら〳〵嬉しや。權現納受あつたるかと。いふぞと見えしが一團の靈火閃きて。俄に山鳴り震動し。ありし姿は脱の衣。血汐の小袖瀧浪に。フシ流れ落つるぞ怪しけれ。地こは〳〵如何にと見やる内。寄せくる形見取得る母。折から一つの首引つ提げ。戻る奴の筆助が。それと見るよりどつかと坐し。詞チエヽ口惜しや初花樣は。敵上野が手にかゝ

り御最期でごはります。地とわつとひれ伏す忠義の涙。飯沼不審晴れやらず。詞今まで爰にありつる初花。心願満つると其儘に。姿は消えて小袖のみ。爰にとゞまる一つの不思議。ナニ。初花様は今まで爰に。オイナウ。聟殿の業病治さんと。我が一命を權現様へ捧げ祈つた驗。聟殿の病氣は平癒コレ腰膝が立つわいの。ナニ。若旦那の御病氣平癒し。お足が立ちしとな。エ、忝い。お足が立つかいやい〳〵〳〵ハ、ハ、。敵の様子窺はんと。大磯へ駈行く道にて取卷く多勢。合點行かねば細子を捕へ。締上げて様子を聞けば。初花様を奪取らん工の次第。聞くと其まゝ一足飛び。無二無三に斬込めば。奴が手並に皆ちり〴〵。その跡見れば女の死骸。五體も切れ〳〵離れ〴〵。よく〳〵見れば初花様。南無三寶。おのれ上野め。ほつ駈けて一討ちとは存じたれども。若旦那の御身の上が氣遣ひさに。戻つて聞けばこの有様。何の事だ。どがらちやがらと。嬉しいと悲しいとがごつちやになつて。一向この奴めはとんと譯が分らない。夢ではないか地フシと呆れ顔。地勝五郎心付き。詞扨は我が詞を守り。上野を恨みんと。斬付けたれども女業。返り討になつたるよな。ヤア。そんなら今のは。幽靈であつたかいなう。コレ。此お首が。初花様でごわりますわいの。地と見せる現世の俤を。見る目もくれて勝五郎。詞扨は。凝り固まつたる一念にて。かゝる奇特を見せけるか。ハア出かいたな。地と聞くより母は正體なく。ほんに武士ほど世の中にはかない者があろかいなう。蝶よ花よと思ひ子の。戀に病む目がいぢらしさ。添はしてやり度いばつかりに父御は刃に身を捨てゝ。思ふ男に添ひ遂げさせ。初孫産ませて華々しく。榮える末を見ようぞ。と思うた事も水の泡。夫といひ娘まで刃にかゝるのみならず。娘は五體も離れ〴〵。切れ〴〵にまでなりしと聞く。この胸の苦しさはどの様にあろぞいなう。是を思へば先達つて死んだが増であつたもの。味氣なき世の憂目やと。わつと一度に聲立てゝ。歎く涙は白糸を フシ亂せる瀧に異ならず。地フシかゝる歎きの其折から。二人の非人は大勢從へ駈來り。詞ヤア逭め。最前はよう手ひどい目に合はしたなア。其代りに手下ども連れて來たのも侍の賴み。衒妻めさへたくつたら。親めもおのれもぶち殺せと言付けられたは寶 ナホスの山。息の根さへ止めたら金ぢや。かゝれ〳〵地と一同に。群りかゝれば飯沼筆助雜立て。〳〵追つ散

らせば。詞ヤア覺めが足が立つた。覺の場所は箱根の切所。先へ廻つて其方御出でと勇み立ち。地母も支度と娘のめが足が立つた／＼と地一同に。○フシは。一々同勢改めよハツハ、、、、面首。形見の小袖にしつかりと結ぶ。其むら／＼ぱつと逃散つたり。地追ふも白し／＼。加勢いかほどあるとても。の間に飯沼が。車に仕込みし用意の着無益と勝五郎。コリヤ／＼筆助。詞正奴の忠義の切先にて斬伏せ。地斬伏せ込。姿は昔に返り咲き。武運も光る玉しく敵は氏政が同勢に紛れん間。勝負上野を。引摺り出すは瞬く内フシイザ權筥箱根を。さして三重へ急ぎ行く。

日吉丸稚櫻　三の切　二二

〔解題〕享和元年十月四日から北堀江市の側の芝居（座本豊竹時太夫）で興行。作者は近松やなぎ・近松加造・近松萬壽・近松梅枝軒である。

數ある太閤記種の一つで、日吉丸の出生より桶狹間の合戰に至る迄の間の事を材とし、殊に木下藤吉が堀尾茂助の案内で間道から進んで齋藤龍興の居城である稻葉山の城を陥れた事、淸正が鍛冶屋の悴であつたが母の緣で秀吉の許に人と成つて武名を顯す事を主題として脚色したもので、番附及び正本表紙見返しに示した場割りは次の通りである。〔發端〕竹生島（此間三年たつ）今川館、日吉丸誕生、千僧供養、春長出陣（此間十三年たつ）〔初段〕壺割、土橋、茶碗屋（此間十六年たつ）〔二段目〕八幡、松下屋敷兵法、東吉部屋〔三段目〕蘆原、鹿狩、割普請、大手口、花壇〔四段目〕道行洲股、陣屋、熱田の社、つゝじが嶽〔五段目〕桶狹間の段から成る。その中では初段の切、三段の切、四段の切などが名高く、殊にこゝに收めた三段の切が山である。

茶碗屋源左衛門の義子源太郎は小田春長の駒木山城を預る木下藤吉に召抱へられて堀尾吉晴と名のつて侍とな

つたので、その時のお政は父の鍛冶屋五郎助や母や弟の竹松と共に尋ねて来て、城の大手口で吉晴に出逢ふ。この時五郎助は故主齋藤明舜の女萬代姫が信長に嫁したが此の駒木山城に押籠同然で暮して居たのに信長は今背藤吉に命じて首を討たせるといふ事を立聞きして、奪ひ出さうとして、城内の花壇の邊迄忍び寄つた處を吉晴に捕へられ、こゝで始めて城主藤吉に對面して、昔色々と世話をした猿之助であつたのを知つて奇遇に驚き、又茶碗屋源左衛門を殺した事も述懐するので吉晴は始めて舅五郎助が義理ある親の敵と知つて驚く。五郎助は藤吉に折入つて頼み度い事があるといつて連立つて奥へ行く、こゝ迄が三段目の花壇の段の口で、これから、こゝに收めた切になるのである。俗にこの段を「五郎助住家」といふが、それはこの一段のみを切放して呼んだ誤りで、丸本によつて見れば、舞臺は駒木山城中である事は明かである。

へこそは入りにける。詞散る花の。別れを暫し慰むる。花とや仇の名残とは。知らぬお政が千鳥足。詞オ、こちの人爰に居やしやんすか。今の夜寒に酒一つたべ過ぎてゞす、皆やのホヽヽヽ。私とした事が滅相な。今までの源次郎様とは違ふ。久吉様の御家来。堀尾茂助吉晴様。侍の女房が。こちの人どうさしやんせとに言はれまい。今から行儀改めて。お奥方にはお居間へござつて。お休みなされ遊ばしたら。自らは然るべう。地存じまするも慇懃に。武家の三つ指手はもぢ〳〵。アヽ、ノシ幸気やと寄添へば。地吉晴は取つて突退け。詞女房去つた縁切つたぞ。エヽ語るに及ばぬそちが素性。五郎助殿が手にかけられし。茶碗屋の主源左衛門は。我が爲には義理ある親。殊には隔つ敵味方知らぬ内は兎も角も。知つては片時も添ふ事ならず。暇の印はこの一腰。叶はぬ縁と締めよと。詞立上る裾引きとゞめ。マア〳〵待つて下さんせ。詞最前からのあらましは。襖の陰にて聞きました。詞とは言ひながら情ない。長地過ぎし逢ふ夜の睦言を。身に泌みさと片時も。タヽキカヽリ思ひ忘るゝ隙もなう。年月隔つ其内に。移り易きは殿御の心。若しや見捨てはなされぬかと。ほんにあらゆる神様や。佛様まで無理いうて。案じ暮した甲斐もなう。添は

れぬ義理の離別とは。あんまりむごいと取付いて。フシ涙先立つ口說き言。地色に惹かるゝ吉晴も。きつと心を取直し。詞悔んで返らぬ互の緣。重ねていふな。聞く耳持たぬぞ。スリヤどの樣に申しても。ホヽ尋ねに及ばぬ。養父の敵は汝が親。緣につながる茂助にあらず。武士の詞に二言はないと。地言放したる理の當然。ハア。はつとお政が突詰めし。女心の一筋に。スヱ詮方涙なく〳〵も。斯くと覺悟は夫の魂。拔く手も見せず我と我が咽にがはと突立つれば。驚く茂助母親も襖あらはに轉び出で。ナウ何故の自害ぞや。早まつた事しやつたなう。詞コレ〳〵五郎助殿。娘が自害しましたと。地明くる障子の打寛ぎ。竹松膝に抱きかゝへ。我が子の最期に目もやらず。煙草すぱ〳〵騷がぬ五郎助。母は詮方なく〳〵も。スヱテ手負ひに取付き勞はれば。地お政は苦しき顏を上げ。詞母樣堪へて下さんせ。地生きて詮ない身の覺悟。思ふ夫に見放され。冥途の道をうろ〳〵と。嘸や迷ふでござりませう。親に先立つ不孝の罪。赦してたべと手を合はし フシ喞ち歎くぞ道理なり。地始終聞き居る五郎助は。手負ひの方へ フシ見向きもせず。詞それ。齋藤龍興が立籠つたる。稻田山の城廓は。凡そ東國第一の名城。一夫是を守らば萬卒破り難き堅固の要害。この城を落すには。瑞龍山の峯傳ひ。西に聞ゆる瀧の音を。心の當途に谷へ下り。水に從ひ出づる時は。搦手の水門口。敵の油斷はこゝ一つと。地聟の堀尾に餘所ながら。知らす間道聞取る吉晴。敵を攻討つ味方の英氣。フシ開くる武運と心の悦び。地母は何の氣もつかず。詞コレコレ五郎助殿。氣が違うたかソリヤ何ぞ。娘のお政が此樣にコレ。自害して死にました〳〵わいの。オヽ男故に命を果す徒ら女郎。勘當ぢや。親子でないぞ。エヽそれはあんまり胴慾な。地可愛娘が命の際。勘當とは何事ぞ。心強やとふし沈めば。五郎助は聲あらゝげ。詞天地の間に生ある物。子を憐れまぬ物があらうか。まして人間。不便にならうて何とせう。可愛さ餘つて緣を切り。聟に知らせし稻田山の間道イヤサ我が子の勘當。堀尾茂助吉晴殿。篤と承知あられしかと。地それと知らする五郎助が。恩義を籠めし一言に。フシ胸の底意を現はせり。地一間の内より聲高く。詞ヤア〳〵齋藤明舜が家臣。加藤忠左衞門淸忠殿。木下藤吉改めて。對面せんと。地名智の一聲鶴の間の。襖左右へおし開かせ フシ悠々。

然と歩み出で。地五郎助に打向ひ。詞孔子も我が子に後れては。思ひの火を胸に焚く。肉親の娘が恩愛に惹かれ。又二つには。齋藤の傾く運の未然を察し。稲田山の間道を教へたる身の誤りと。古主への言譯に。命を捨つるは天晴れ〱。ホヽ推量の如く。齋藤の恩祿を喰ひ込んだる此五郎助。ガ一命を捨てたとは。イヤ隱されな五郎助。五音はづれし音聲にて。久吉疾くより承知致した。ア御心勞の程察し入る。地と大地を見拔く木下が。詞に五郎助張詰めし。心弛んで思はずも。苦しき息をほつと突き。詞天晴れ明智の久吉殿。古主の無道を見限りし。拙者が覺悟御覽あれと地肌おし脱げば血汐の腹帶。朱に染めなすフシからくれなゐ。地見るに驚く手負ひより妻はあるにもあられぬ思ひ。ナウ情ない五郎助殿。可愛我が子を先立てゝ便りなき身のその上に。こなたに別れ何とせう。命を捨てずとどうぞマア。仕樣もやうはない事かと。縋り歎けば竹松は。頑是なき身もおろ〱聲。詞父樣も姉樣も。なぜ一時に死なつしやる。地坊も殺して下されと。稚心の孝行心。聞く五郎助は顏眺め。詞オヽしをらしい事よう言うたな。サア吉晴殿。勘當すればこの五郎助とは。赤の他人のその女。誰に憚る事やあらん。女房に持つて下さるか。ホヽウ勘當ありし其上は。最早緣なきこのお政。未來永々一つ蓮。半座を分けて相待つべし。エヽ忝い。あれ聞いたか娘。ではないコリヤ餘所の女中。アイ其お詞が智識の引導。地先立つ此身の經陀羅尼。さは言ひながら勿體ない。親の御恩を露程も。送らぬ娘に命を捨て。お情お慈悲の御勘當。あんまり冥加恐しい。詞母樣弟吉晴樣。未來は女夫でござんすぞえ。地せめて別れににし〱と顏見て死にたいわが夫と。苦しき體を這寄つて。ぢつと見かはす目の内に。盡きぬ妹脊の名殘の涙フシ餘所の。見る目もいぢらしゝ。地何思ひけん五郎助は娘の首を討落せば。是はとばかり驚く人々。茂助は手負ひに詰寄つて。詞血迷はれしか五郎助殿。とても助からぬ女なれども。首を討たれし所存はいかに。ホヽウ賤しき鍛冶の職人とは成り果つれど。元は齋藤明舜が家臣。加藤忠左衛門淸忠。血迷ひしとは何の戲言。サア木下藤吉殿。齋藤の息女萬代姫が首。心を定めて實檢あれと。地我が子の首を引寄せて。差出す老の岩乘づくり。久吉ハアと感じ入り。ホヽウ出かされたり〱。詞命一つを三方四方へ。切りかけられし妙策頓智。久吉遂

背あるべきか。春長公より仰せを受けし萬代姫の首。木下藤吉受取つたり。さりながら。義理は今生一旦にて。魂去れば恐れはなし。斯く連なりしは重縁一家。親子は一世その首に。地篤と名殘を惜しまれよと。情の詞に五郎助は。子故に迷ふ輪廻の紲。こらへこらへし悲しさを保ち兼ねて大聲上げ。初めてわつと伏轉び。我が子の首を抱きしめ。詞オヽ娘よく死んだ。出かした／＼な。コリヤ徒ら故に命を果す不孝者ぢやと思ふなよ。齋藤の息女。萬代姫様の御身代りに立つて死んだは。古主へ對して大忠臣。カヽリ親は不忠に無慚の最期子はまた忠義に命を果す果報者孝行者。極樂淨土の東門を。忠臣貞女に命を捨てた。手柄者ぢやと名乘つて通れ。息ある内に得心させ殺したいはやま／＼なれど。可愛さ故に勘當と言うた詞を反古にせまい。茂助殿と夫婦にしたさ。ぢつと堪へてむごたらしう。花の盛りの娘をば。首打落す親の氣はコリヤ。どの樣にあらうと思ふ。健氣に死んだこの娘。賞めてやつて下され聟殿。見苦しい死顔を見て。必ず愛想つかさずとも。表具思ひ出して折々は。香花の供養頼みます。こなたが手向の一滴は娘が爲の善智識。百億萬の御首題を。唱ふるよりも百層倍。嬉しう成佛するわいのと。死ぬる今はの際までも子に惹かさるゝ恩愛の。母も思ひに正體なく。詞氏も系圖も揃うたる武士の胤とは露知らず。宵に尋ねて逢うた時母樣わしは仕合せ者。立派な殿御持ちました今から武士の女房ぢや。地髮の結樣飾りまで幾千代祝ふ丈長も心。説經祝ひの友白髮。何をどうして斯うして樂しんで居やつたもの。こんな悲しい身になつて髮も形も入るものか。可愛の娘と死首を顔にあて身に添へて數けば父も諸共に。聲を限りに泣きつくす恩愛別れの。血の涙。胸に磐石打たるゝ思ひ。堪へ兼ねたる吉晴が心を察し久吉も絞る。袂の雨車軸四人が涙谷川へ落込む水の。逆落し フシ山も。崩るゝ如くなり。地堀尾茂助は涙を拂ひ。詞恐れ入つたる五郎助殿。忠義の最期遂げられし上は。茂助が養父へ義理も立つ。跡に殘りし御内室。御子息諸共吉晴が。身に引受けて養育せん。心置きなく成佛あれと。地緣に引かるゝ フシ堀尾が詞。地久吉手負ひに打向ひ。詞由緒正しき清忠殿が。忘れがたみの此稚子。凡人ならぬ勇士の蘖。久吉が家臣となし。竹松が名も改めて。加藤虎之助正清と改名し。家名を永く殘さんと。地慈

愛の詞に悦ぶ手負ひ。虎之助はにこ〳〵顔。詞アノ殿様の家來になれば。今からおれは好きの侍。軍に行つたら大將の首。幾つも〳〵切つて見せう。父様見て居て下されと。地聞くも涙の深見草。花壇の蔭に最前より。忍び込んだる永井早太。物の具堅め踊り出で。詞ノリ稲田山の間道を告げ知らしたる鍛冶屋五郎助。味方の陣へ注進と。地駈出す早太吉晴が。立切る切戸虎之助。詞久吉様へ奉公始め。目に物見せんと立上り。地フシ飛んで降り立ち庭先の。苔むす石に手をかけて。門より高く差上ぐる。希代の小兒が金剛力。打付けられて早太が最期。フシ微塵になつて死してけり。地堀尾茂助つつ立ち上り。

小田の幼君
北畑の名君

八陣守護城

八ツ目物　二三

政清本城の段

詞稲田山の間道を聞取つたるこそ究竟一。イデ搦手より攻入つて。只一戰にかけ崩さん。御用意あれとせき立つ吉晴。ア、イヤ〳〵。稲田の城廓は袋の内の鼠同然。久吉が手裏にあり。先づさす敵は今川義元。討取る術ぞ肝要ならん。ハ、、、げに尤も仰せの如く。目に餘つたる五萬餘騎。僅か味方の小勢にて。勝利を得るの術やいかに。ホ、ホ、、それにこそ計策あり。この桶狹間の戰ひは主人小田家の一世の晴業。丹下中嶋善照寺。地鷲津丸根を始めとして。七箇所に砦を築き變に應じ機に乘じ。見よ〳〵今に義元が。首提ぐるは瞬く中コレ〳〵氣遣ひ無用と フシ軍師が金言。地イザ本城へ出立せん。正清來れと勵ます木下。はつと勇みの聲高く。詞是から好きの軍ごと。稚な遊びの戰場にて。地敵の首は面はじき。菖蒲刀の繪かんだけ切立て。切立て切りまくり。六十餘州はお手車。でん〳〵太鼓攻め鼓。見ぬ唐土の名に高き。下里が竹馬一またげ。手綱かい繰り兼詰め引詰め武士の。武名は轟く鬼上官。目には涙の別れ路や。見送る父は勝木麾。なら是今が別れかと留むる甲斐も無常の嵐。フシつひにあへなく散りて行く。地涙なく〳〵妻と子が。手向くる法の夕、キカ、リ導きは。妙法蓮華の台の玉。照らすは月の隈本に。正清宮と仰がれし。神の双葉を櫻木に傳へて。今に殘しける。

〔解題〕　文化四年九月十日から道頓堀大西芝居（座本吉田芳松）興行。作者佐川藤太・中村魚岸。豊臣家の末路を材題として、加藤清正の忠烈を主とし、「厭蝕太平記」などの所傳により、清正が二條城に於て毒酒を飲まされ、熊本の本城に歸つて、豊臣氏の前途を案じつゝ遂に卒去したが、遺命によつて武裝した木像を城の天主に納めさせたといふ傳説を取つて脚色したもので、北畠春雄が小田春永の孫春若を亡して家國を我が有としようとするのを加藤朝清（後に政清に改めた）が身を以つて防止し、又その歿後の事を大内義弘・兒島政次・佐々木高綱等に委囑するといふ大筋として十一冊に仕立ててある。即ち〔一冊目〕大序〔二冊目〕小田春若館〔三冊目〕南禪寺門前、南禪寺〔四冊目〕東山假御所門前、毒酒の段、舟の段〔五冊目〕粟津松原〔六冊目〕此村屋敷、堅田浦〔七冊目〕お通の方館〔八冊目〕朝清（後改、政清）本城〔九冊目〕粟津陣所遠雲諫言〔十冊目〕次郎作（佐々木高綱）住家の段〔十一冊目〕南軍和睦大團圓とから分れて居る。

題名は、十一冊目に佐々木高綱が八陣の計をめぐらす事あるに、政清が本城に籠り死しても尚小田家を守護しようとの悲壯な末路を取合せてつけたものと思はれる。

作中の人物で、加藤政清は書き下しの時には番附面では清生朝清であつたのを、操りでは文政十一年の三度目の興行の時から加藤政清に改めて清正を利かせた事をいよ／＼明かにした。その他お通の方は淀君、春若は秀頼、兒島元兵衛政次は又後藤又兵衛基次、佐々木左衛門高綱は眞田左衛門幸村、大内義弘は島津義弘にあてたものと思はれる。

こゝに收めた八冊目の切が全篇の山である。

地フシ行先は。二重に建てし思惟（しゆゐ）の間。人の出入りはとゞむれど。秋を告げくる風の聲。庭の。木草（きくさ）におとづれて。すだく蟲さへフシ物凄き。地我が本城へ我ながら。心置く露踏分けて窺ひ來る主計之助（かずへのすけ）。隔ての垣に身を寄せて。

母の教への綱手繩。長地引けばすゞ虫それぞとは。豫てまつ虫繼絹が。手燭携へフシ庭におり。地母様お越し遊ばしたか。イザこなたへとゆふしでの。神の結ぶの縁ぞとは思ひがけなき主計之助。なうなつかしやと繼絹が切戸おし明け走り寄り。夢ではないかと嬉しさのフシ跡は詞もなくばかり。詞ヤレ音高し密かに〱。先づ何よりは父の身の上。餘人を遠ざけお身一人。お側仕へあると聞く。物忌みなりとは心得す。コレ様子聞かして下されと。地賺し宥めて尋ぬれど。こなたは猶も摺寄つて。詞ア、コレ申し。久し振りで逢うた私。無事であつたか變らぬかと。たつた一言おつしやつても。カヽリ不孝の科にはよもなるまい。地其お心とはつゆ知らず。サハリ都でお別れ申してより。勿體ない事ながら。父様や母様を思ふ案じはどこへやら。あなたの事が苦になつて。ほんに寢た間も忘れかね。逢ひ度い見度いと明け暮れに。こがれ慕うて居るものを。聞えませぬと娘氣に。跡や。先なる恨み言。詞ホヽ尤ながらそれは内證。今日國へ歸りしは。我のみならず母御も同船。湊口より魁せしは。父の安否を尋ねん爲。コレ御病氣に相違あるまいがの。アイ別間の様子は母様はじめ。誰にも言ふなと口止めなれど。さうおつしやればお食も少なし。折々手箱の草の根を。出してお上りなさるゝばかり。亥の刻よりは樓にて。御祈念あるも只お一人。ム、それにこそ仔細ぞあらん。母上お聞きなされたか。委細はこれにて聞きましたと。地思ひがけなき切戸の陰。出づる藥末を見て悔り。様子あかせしフシ案じ顔。地母は娘を押し鎭め。別間に向ひ手をつかへ。詞都の御所より上使として。主計之助參上と。地取次ぐ母の詞より。外に。フシ答もなき折ふし。怪しや庭の草隱れ。現れ出でたる數多の鼠。コハ不審しと三人がすかし眺むる間もなく。隙を窺ひて樓閣へ連々として入るよと見えしが。俄に人聲はげしき物音。スハ一大事と駈寄る障子蹴はなす別間は燈火も消えて分らぬ眞暗がり。數輩を相手に政清が。或は捻首手足をもぎ。當るを幸ひ人礫。投出す庭先主計之助。得たりと仕止める早速の働き。後に控へし鞠川玄蕃。政清やらぬとしつかと組む。振りほどいて髮束掴み。膝にひつ敷き大音聲。詞ヤア鼠と變じ我が居間へ。間者を入れしは時政の家來。忍びに名を得し鞠川よな。首引抜くは易けれども。助け歸すは都へ使。我が存命を物語れと。地宙に握つてゐいや

つと。投越す身體は堀の外。フシ鼠となつて逃去りけり。地主計之助は父の聲。聞く嬉しさに差寄つて。詞時政公より父への使。何にもせよ明しを照し御教書御披見下されと。地フシ緣側に直し置く。地開きもやらず高笑ひ。詞ハハ、、、此書面見るに及ばず。日本無雙の政淸を。味方に付けんなんどとはあざとき計略。ヤイ主計之助。おのれ生年十七歳。忠孝信義の是非をも分たず。大切なる幼君の。守護に殘せし甲斐もなく。時政の甘き詞にたらされて。おめ／＼と歸つてうせたは女に迷ふ大馬鹿者御教書などとは穢らはしと。地引裂き庭へフシ投捨てたり。地主計はハツト赤面の。詞なければ母が引取り。詞ソリヤあんまりお氣强い。何ぼうお氣に叶はいでも。助けられたる恩は恩。地あの子の難儀になる事を。思ひ返して給はれと。スエテ母の願ひも慈悲なりし。思案を極め主計之助。座を立上つて實に誠。詞親子兄弟矛盾となるも。戰國の常武士の習ひ。母上地御無事と駈出すを。ア、コレ／＼。詞その一言が敵味方。侍の義といひながら。母が悲しさこの子が思ひ。地跡の難儀を推量して。マア／＼待つてたもいのと。母が諫めに雛絹も。たとへお返事おそくとも父上都にましませば。お首尾惡うはなされまい。やがて母樣お越しまで待つて給はれ待つていなう。コレ／＼申し舅御樣。親子夫婦の生別れ不便と思し只一言。お留めなされて下さりませお慈悲。／＼と手を合せ。拜む内にも戀人に離れがたなき女氣は。フシ哀れにも亦いぢらしき。詞ホオウ娘が願ひさる事ながら。執成しすべき三左衛門は。疾くに落命いたしつらん。ガ女の縁に主計之助。その身を立つる心なるや。アイヤ。父上の御意とも存ぜず。三左衛門殿死去ある事。御存じあれば猶以つて。御身の上氣遣はしく。立歸りしは變ある時この本城を守らん爲。ハ、、、何さ／＼。たとへ如何なる變ありとも。六十餘州と釣替の政淸がこの本城。いつかな／＼人手に渡さぬ。この身この儘樓にて。四海を守護する我が精神ナホス跡構はずと幼君へ。忠義を立つる心を見せよ。親子の對面これ限りと。地烈しき詞諸共にはたと。フシ立切る障子の內。詞ハアその御賢慮を聞く上は。所存を立てゝ御目にかけん。この一封は雛絹殿。跡にて披見致されよ。母上樣おさらば。と地ハズミ言捨てゝこそフシ駈り行く。地ならこれ待つてと雛絹が。夫を慕ふ娘氣に。呼べど詮方。なき倒れ。伏フシ沈みた

るばかりなり。地泣聲聞いて母柵。小陰を立出で傍に寄り。詞ナウ雛絹。何ぼうこがれ慕うても。主計殿には添はれぬわいなう。ヤア母様か。そりや又なぜでござります。オヽ驚きは尤もぢやが。コレ夫の最期もお三の業。恨むに甲斐なき家來の我々。縁を切られねば主計殿は。時政公に助けられし。恩に命を捨てねばならぬ。コレ引別るゝも操ぢやと。諦めてたもいなう證據は硯せしソレその文と。地忍びの燈火さし寄すれば。涙ながらに押開き。詞ナニ〳〵父の仇たる時政の忠臣。森氏の娘たれば。所詮添はれぬ敵同士。縁切る上は一旦の。恩も情もこれかぎり。ハア地はつとばかりに讀みさして正體涙にくれけるが。地覺悟極めて懐刀咽にがはと突立つれば。はつと驚く母と母。ヤレ早まつた何事と。抱き起して介抱に。娘は苦しき顔を上げ。詞ナウ早まつたとは愚かの仰せ。主計様に添はれずば。斯うなり行くは身の覺悟。地アヽ思へばはかない私が身の上。父の最期といふ事も今聞くまでは夢にも知らず。御無事でござると思ひ詰め。仇に寐した不孝者。その罪科が報い來て。二世を誓ひし殿中も今日を。限りと成果てしを。可愛い事ぢやと思召し。未來は女夫にならるゝやう。取りなし頼み上げますると。今死ぬる身の際までも輪廻に迷ふ心根を。思ひやりつゝ二人の母。いぢらしいやら可愛いやら胸一杯にせき上げて。とかうの詞なき倒れフシ心も亂るゝばかりなり。詞ホヽ雛絹が最期の願ひ。加藤主計之助清正。是にて承知致せしと。地聞く隙には父政清。以前に變る六具の出立ち妙法蓮華の七字の旗。主計が俗名書添へて。弓手に押立て坐したる妻。武威三軍に鳴響き。唐國までも今の世に。フシ怖ぢ恐るゝもことわりなり、地實に見るよりヤア〳〵。詞我が子の佛果をその旗に。お書きありしは死ぬるつもり。地御存じあつてか何故にと。地問ふもうろ〳〵柵親子共に様子をフシ氣遣へり。詞オヽ時政の恩を受けましと。我強くいひしは都にて。命を捨てよと教へる謎 親が胸中よく知つて。歸國以前に雛絹へ。離縁の状を認めしは。女に心惹かされず。忠義に死ぬる倖が潔白。ハヽア健氣にも出かしたり。それに連添ふ身ほどある娘が貞女も育てから。我が子へ立つる心の操。ホヽ天晴れなり雛絹。敵となり味方となるもこの世の業。せめて未來は佛果の縁。地結んでくれんとこの旗に。二人が俗名書付けしは。親が許せし夫婦の堅め。コリヤ寂

光淨土に生を受け。妻よ夫と睦まじう。誰憚らず添ひ遂げよ。南無妙法と閉ぢる日に。不便の涙はら〱〱。唱ふる經も口の内。手負ひの耳に通じけん。詞エヽ有難うございます。そのお許しを聞きまして。嬉しう成佛いたしまする。主計樣にも覺悟とは。悲しい中にも私が樂しみ。地あの世の道で待合せ。一つ所に參ります。二人の母樣舅御樣。御息もじでとばかりにて。娑婆の名殘ににつこりと。フシ笑うて息は絶えにけり。地ハア悲しやと柵葉末。死骸に取りつき抱きしめ。身も世もあられぬ悔み言。詞生れてこの方二親の手元離れぬこの娘。よく〱思ひ慕へばこそ百里二百里この國へ。勇み進んで只一人來た心根がいぢらしい。夫婦となつた其日から地國と都へ引別れ。死ぬる今迄一夜さも添臥もせぬ薄い縁。結ん

だ神も恨めしいそれはかりかは夫にも後れ。殘る一人のいとし子の自害するのを見ようとて。はる〲來たは何事と。甲斐なき骸を右左。惜しや可愛の數數を露置く葉末柵も。數へ立て〱。涙々は漲りて滿ちくる汐の上クル荒岬波打ち寄する如くなり。地歎きの中へ灘右衛門。息を切らしてフシ駈戻り詞コレ旦那殿。小陰に忍んで樣子を聞き。息子殿を助けうと追駈けた一里の松原。長持へ入れ駈出す所。南無三寶と走りつき。組んづ轉んづして見たが。多勢に無勢雲霞。跡に殘つたこの狀箱。上書は加藤氏へ湖水の何某。お前は知つてござりますか。地とフシ差出す。地樣子を聞いて政淸は。物をも言はず封押切り。詞八十川のその源はかはるとも。心近江の水をみづうみ。フウハレ心よき秀句ぢやよな。地と吟ずるこ

なたに聲高く。詞ホヽウその歌の心は大内義弘。疾くより是にて承知せり。政淸殿に對面せんと。明智の大將物かげより。フシ欣然として出で給ひ。地携へ持つたる藁苞の。中なる劍取出し。詞燒刃にあらはす足下の本心。よく見られよ地と差出せば。仔細あらんと頂戴あり。とつくと眺めて拔放せば。俄に一天照り輝き。北斗に映ずる劍の光。赫々たるフシその有樣。地政淸はつと押戴き。詞これぞ北辰尊星より。授かる所の七星丸。某年來守護せし名劍。幼君の御味方になるべき勇士を選り出し。劍を渡して下されよと。片岡殿へ頼み置きし甲斐あつて。今日只今劍を證據に來られしは。それなる船頭は備前の住人。兒嶋元兵衛政次殿。今日只今幼君の。味方に屬する割符の一腰。確に落手仕ると。フシ劍を鞘に納むれば。地

地詞異議たく兒嶋元兵衛。眞中にどつかと坐し。詞ホ、ウ天晴れ眼力政淸殿。片岡氏に盟約せし。わが本名を藁苞に。包みかくせし劍の割符。兒嶋元兵衛政次なり。某味方に屬する上は。先君恩顧の諸侯を語らひ。スハ合戰の時來たらば。地道具屋近江路に根城を構へ。美濃信濃路へ出張して。時政が多勢を切所に支へ追詰め。〱泡吹かせ。狸親父が白髪首ひつさげんは瞬く内。我が方寸の胸にありと勇み進みし勢ひは。フシ軍師とこそは知られけれ。地義弘につこと打笑ひ。詞ホ、、、こはをこがましき兒嶋が廣言。國戚たる北條に刃向ふ心底聞捨てならず。しかし小田家より恩義を受けし事なれば。只何事も餘所に見ん。今の一首に八十川やその源とあらはして主計之助を助けしは。近江源氏に隠れなき。佐々木左衛門高綱ならん。地二人の軍師揃ふ上は。最早安堵の加藤氏。我も察祝仕ると。始終をはかる名將の詞は鐵石うしろ楯。フシ實に大國の主なり。地政淸きつと空打眺め。詞アレ〱〱光を失ふ將星の。今まで地下に落ちざるは。北辰尊星感應あり。百日の滿願に。佐々木兒嶋の兩大將。味方に加へし今月今日。アラ悦ばしや嬉しやと。地いふ息ざしも心の弛み。忽ち變るその面色。見るに葉末がまた惘り。扨は噂に違ひなき。お身の惱みか悲しやと スヱ縋り歎けばヤア愚か〱。詞時政が工みは知りながら。否まば違勅に落さん方便。元より命は天にあり。とはいひながらお通の方。地斯くなる果ては御存知なく。歸國の砌。幼君をわれに抱かせくれ〱も。お賴みありし其時は。勿體なしともいたはしとも。百萬軍の強敵を摑み拉ぎし政淸が。五體を貫き。肉を裂くよりつらかりし。その心を休めんと百日の今日まで。胸を苦しめ。身を苦しめ。祈り〱し甲斐あつて。念願屆きしわが身體。フシこの樓にとゞむべし。詞三左衛門の落命も。時節と諦め柵殿。葉末も共に様をかへ。都の悴が先途を見よ。さるにても嫁雛絹。地さぞや悴を待ちわびて。草葉の蔭を行きなやみ。迷はん事の不便やと。百錬の明鏡を。照らすが如き兩眼に。スヱ血汐を注ぐ。ばかりなり。地歎きをとゞめて兒嶋元兵衛。詞この上は葉末殿柵殿。この政次が附添うて。子息の安否を尋ねし上。佐々木に牒じて治國の計策。日本はおろか唐高麗。刃向ふ奴ばらみな殺し。幼君四海太平を。その樓に安坐して。見物あれよ加藤殿。地と突つ立ち上れば大内義弘。詞ホ、ウ勇しゝ

兒島政次。しかし天運至らずば。幼君　至らせ給へ南無妙。法蓮華經〳〵　出づる本城外内縠。注連引きはえし樓の御供して、わが本國へ來られよ〳〵。唱ふる功德は先の世にやがに。端坐合掌古今の英雄。見上ぐる空と、渡す詞は番强が妻と妻へも來々　てぞ廻り。愛別離苦。會者定離とは聞き　に星象光照らす。感德ぞ有難きを。諫めて直ぐに歸國の絆路。女　たがら。返らぬ事をくり返しおさらば。心の二人連れこなたも法の、蓮葉に　さらばの聲ばかり跡に。名殘は升形を。

卅三間堂棟由來　三の切

平太郎住家の段　二四

〔解題〕　卅三間堂棟由來を材題とした淨瑠璃としての古いものは、延寶九年刊行の宇治加賀掾の段物集「大竹集」の中に出てゐる「熊野權現」などが古いものであらう。その完本は未見であるが、該書に載つてゐる「平太郎道行」は、柳の大木を平太郎親子の力によつて都迄曳くといふ筋で、明かに棟木の由來を材題としたものである。次にほゞ同年代のものかと思はれる古淨瑠璃の正本として私の見たものに「熊野權現開帳并平太郎奇瑞物語」がある。同じく「平太郎道行」はあるが、前のものと同文でないから別の物と見てよいと思ふが、これは平太郎の復讐、棟木の由來、お柳の子別れなどが鮮かに取扱はれて居る。尙この外に「都三十三間堂棟由來」と題するものがある。これは山本河内掾の作で伊藤出羽掾の正本であるが、前記の作の改作と思はれる。尤も作柄は原作より劣つてゐる。

處で上記の古浄瑠璃を藍本として出來たのが「三十三間堂平太郎縁起祇園女御九重錦」で、これが即ちこゝに收めたものの原作である。この曲は寶暦十年十二月十一日から豐竹座で興行されたので、作者は若竹笛躬・中村阿契である。白河法皇の前生は蓮花王坊といふ修驗者で、熊野に籠つて修行した功德によつて今法皇と生れ給うたが、その前生の髑髏が柳の古木の梢に留つて居るが故に頭痛の御惱を遊ばすのだとの御夢想によつて、その柳を棟木として一宇の御堂を建立して、その髑髏をこゝに奉納する事となつた。處がその柳は既に五年前に故あつて伐倒されるべきを熊野參詣の武士橫曾根平太郎の働で免れたので、その精魂は女と現じて平太郎と契り子迄儲けてゐる。然るにいよ〳〵その柳が伐倒される時となつたので、こゝに別離の悲しき場面が展開される、それが即ちこゝに收めた三段目の切である。都よりの奉行進の藏人からいよ〳〵柳が伐られるといふ事を聞いたお柳はこれ迄と、外から戾つた夫にお神酒の餘りをすゝめてそれとなく別れを告げ、醉つて眠るを見屆けて夫と子とに別離の述懷となるといふ段取りである。葛の葉子別れと類型の作柄で、夢幻的の情景の裡に人情がしんみりと融け合つて居る。

本曲は三段目の切が初演の時も好評であつたが、翌年四月曾根崎新地で豐竹座一連によつて繰返された後、操りでは久しく上場を見なかつたのを、文政八年七月十七日から御靈境內で「卅三間堂棟由來」の外題で三段目だけが上場され、爾來、同じ外題の下に三段目卽ち平太郎住家のみが度々上演されて今日に及んで居る。その詞章は「九重錦」のと殆んど同文である。

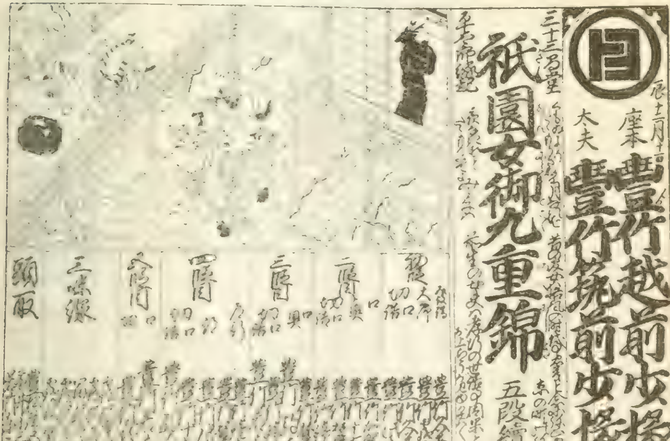
へ夢や結ぶらん。地フシ妻はあたりを立
退いて。ウ、キカヽリ奧を覗いつ立戾り。
おづ〳〵傍へ立寄りて。搖り起せども。
夫は寢付きの高鼾。風が持て來る斧の
音。伐木とう〳〵てう〳〵と。木を伐
る音やこたへけん。お柳は身內の苦し
みを。ぢつと堪へて立寄れど。長地カヽリ
得も岩代の結び松。我は柳のみどり子
が。顏を眺めつ フシとつ置いつ。地やう

やうに氣をしづめ。詞オヽそれよ。互に顔を合せては。身の上語るもおもはゆし。寢入り給ふを幸ひに今。自らが言ひ殘す。地必ず夢と思さずと。あからさまに聞いてたべ。詞ナウ我こそ誠は柳の精。雨露の惠みに生育ち。かやうに夫婦となる事も。一方ならぬ因緣ぞや。先の生にて誓ひたる。契りを結ばんその爲に。假に女の姿と變じ。地柳がもとに待受けて。夫婦となりしも五年の。春や昔の春の頃。詞季仲が鷹狩に。鷹の足緒にかゝりし時。數多の武士に切崩され。既に枯れなんこの柳。其時お前が一矢の手柄。鷹を助けて葉柳の。枝に障りも。合アレ〳〵〳〵。又もや爰に散り來る葉は。我を迎ひに來るかと。地思へばやる方詮方も。なく〳〵見やる足元へ。散り來る柳の葉隱れや。フシ亂るゝ心押鎭め。詞其時の情

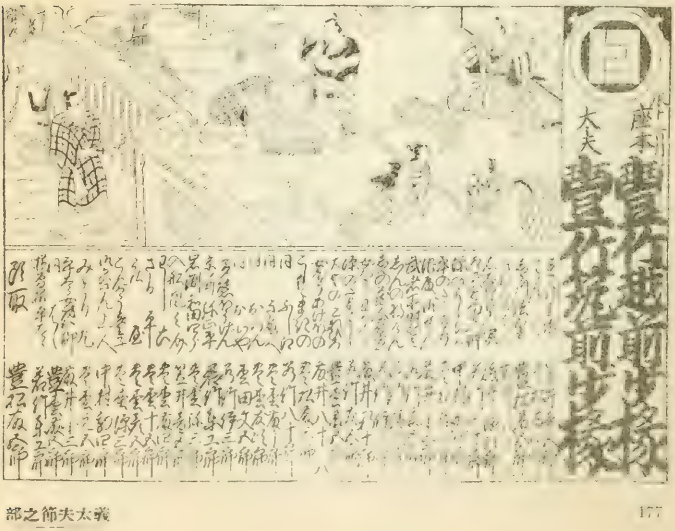
の恩。送る月日も重なりて。柳の花のコレこの緑丸。もはや今年で五歳の。春秋の重なれば。乳がなくと育つべし。成人の後々は。父の弓矢を受け傳へ。潔い名を上げてたも。ヤヤ。地母は今を限りにて。元の柳に歸るぞや。必ず草木成佛と。回向を頼む夫よ子よ。離れがたなや悲しやと。いふ聲さへも忍び泣き立つて見居て見聲上げてわつとばかりに泣叫ぶ。音に目覺す平太郎。扨は夢とも現とも。聞きしは誠でありけるか。何とてつれなくやるべきぞと抱き留むれば一間より。老母も共に轉び出で。詞様子は聞いたコレお柳。嫁女なうと地呼ぶ聲も。散り來る柳の葉がくれに フシ形は消えて失せにけり。地そこよ爰よと母と子が。尋ぬる音に緑丸。詞母様どこへ行かしやつた。母様イなう。〳〵。地母様と父が後に駈

廻り。尋ね迷ふ稚子を。見るに堪へかね父親も。詞緑が母やい。嫁女なう。地母様と聲をばかりに三人が尋ね。廻ればさすがにも。引かるゝ心執着の。叉も姿を フシ現はす有様。ヤア母様かと駈寄る稚子。夫も涙の聲を上げ。詞非情の草木と言ひながら。情あればこそ是までに。睦まじくも馴れなじみ。一人の若を儲けし身が。何とて振捨て歸りしぞ。地せめては母を見送るまで。共に介抱してくれよと スヱカヽリ喞ち歎けば。漸うに。しをるゝ顔を振上げて。詞傳へ聞く。安倍の童子が母上も。丁度わが身と同じ事。一人の子を殘し置き。カヽリ信田の古巣に歸りしとや。地それは野干の年ふる身。我はもとより草木の。歸る古巣の柳は今。切崩されて枯れ柳。歸るといふは消ゆる身に。何とて形を殘すべき。哀れと思し。フシ

給はれよ。詞白河の法皇の。御悩み頻りとて。都の使来りつゝ。我を切捨て申すなり。最早朽木も時を得て。一宇の棟となる事も。一つは妙なる法の縁。佛果につれし縁あれば。地情の恩を報ぜん為。一つの形見参らすると。平太郎が手に渡し。詞ノリそれこそは白河の法皇い前生の御頭なり。ナホスそれを手柄に御身の上。再び出世をなし給へ。必ず〳〵緑が事お頼み申し参らする。エ、〳〵。離れがたなや可愛やな。アレ〳〵風の音につれ。柳の糸を切揃ふ。地斧鉞が丁々々。フシ斧は次第に。魂碎る。時こそ来たれいざさらば。さらば〳〵の聲の下フシカゝり妻は。見えずなりにけり。わつとばかりに三人が。闇より闇に迷ひつゝ互に手に手を取りかはし。スヱテ前後不覚に。歎きしが。地涙ながらに平太郎。我が子を膝に抱き上げ。詞ナウ母人。我よりはこの若が。愛著に引かされて。さぞや名残りの惜しからん、たとへ妻は見えずとも柳は妻が亡き面影。今一度この緑に見せもし。又我も見もしたし。蔵人とやらんにも對面せん。母人にはこの髑髏。佛間へ直し下さるべし。某は今すぐに。悴を連れて柳の元へ。オ、それ〳〵。一時も早う孫を連れて。ハ、



ア然らば直ぐさま。サア綠よ來い。唄と我が子の手を引き一足二足。深山がくれの山寺に入相告ぐる鐘の音。數へながらもそろ／＼と。探る足元見付ける母。詞コレ平太郎。そなたは何とぞしやつたか。コレ爺様。父様は目が見えぬわいの。ヤア／＼。そりやマアいつから。ハイさればでござります。一月あまりふと鳥目が起りましたが。女房にもいひ含め。是まではお隱し申した。エヽ聞えぬ平太郎。さういふ事なら狄くよりわしにも。アヽコレ何にもお構ひなさるゝな。したがお前にもこの坊めも。マ今夜からさぞ便りが。オイノ。折も折とそなたの眼病。猶更わしも力がない。アヽアレ／＼。モアノ雪の降る事わいの。マア火を燈しませうと唄行燈に。手早く燈し提灯を移し持つたる綠丸。蓑よ笠よと打着せて。詞そんなら。一寸参つてさんじませう。オ怪我せぬ様に。ソレ綠よ。手を引けよ。アイ／＼／＼。唄おいとは見えぬ鳥目の父。杖は我が子を力草[illegible]柳が〜木へと辿り行く／＼。唄母は佛間の石經に。鉦もかすかに六字詰め。本フシ風も身に泌む黄昏過ぎ。唄心の鬼の和田四郎。晝間の騙りのかねてより。夜は山賊の大膽不敵。何でも掘り出し 道具カヽリ



しこためんと。大だら差足コハリ窺ひ足。ぎしつく壁の物音に。誰ぢや〱。詞イヤ大事ない盗人ぢや。ヤア地と愕りしながらも。詞イヤモウ。折角這入らしやつても。見込みのない此内。了簡して去んで下され。イヤコリヤ婆。おれぢや。貴來た者ぢやが見知らぬか。ふゥナニ。貴來たと言やるからは。オ、燧主と言うたはありや嘘ぢや。山家のとろくに似合ぬ。黄金十枚はハ、よい仕打。まだ隙くりがあるであろ。ありだけそこへ淺へ出せ。コリヤ命は助けてやるわいやいと。地フシ鯉口ならし威しける。詞エ、口惜しい。それと知つたら其時に。やみ〱とはやるまいもの。エ、平太郎は戻らぬかいの。ニ、喧しいわやい。コリヤモウ。どうで素直では出しをるまい。ドレ探してくれんと地駈行くを。さうはさせぬと取付くを。蹴飛し〱のつかのか。納戸を引出す古葛籠あたふた明けて手に當る。親子が着替に包んだ大小。鮫は鼠がまだ外。に、御廟上げた釣おまへ。供へし髑髏を見て驚り。どこやらぞゝがみフシ立退きしが。地打ちうなづいてコリヤ婆よ。詞葛籠に用があるからは浪人に極つた。ガ又、あの髑髏は何の爲ぢや。サアそれぬかせ。オ、あれはの。息子が出世する大事の物ぢや。ム、何ぢや出世する。ガ其出世が耳寄りぢや。コリヤ。何者の髑髏ぢや。サアぬかせ。ぬかさぬかやい。ぬかさにや斯うぢやと地引抜く段平。詞ア、目の先へ差付くれば。イヤ〱〱〱。喉へずた〱に切られても言はぬ〱。ヤアどしぶとい老耄め。骨を挫いで言はする。と地命もあら縄見つけ出し屋字絡にくる〱卷。見上ぐる欄間の釣縄ほどき。結びフシ付けたる猿しばり。詞サア〱ぬかせぬかせ。地というては引張る釣縄に。次第に締るしばり縄。血筋赤らむ首枷。フシ命の蔓ぞ危ふけれ。詞ハ、、、、もがく〱。情の無い根性から。詞痛い目を見をるわい。コリヤ。下は滑らの溜り池。氷の地獄ぢや。サアぬかせ。ぬかせと地責めせつちやう。老母は苦しさ聲も出す。降りくる。雪に爭ふ白髪。簾にしたふ血の涙。見やる向うに提灯の。光にびつくり南無三と。縄を放せば眞逆様。水の溜りへおちこちの無慚たりける次第なり。さすがの四郎も狼狽へ眼。表へ逃げんも一筋道。やり過して行かんずと。庵の庭にフシ身を忍ぶ。地斯くとは知らぬ平太郎。案内はいつも我が門に。常燈明の光さへ提灯の火に緣丸。詞コレ父様。佛様へとぼした行燈が落ちてある。ヤア。ど

れ〳〵。ほんにコリヤ落ちてある。不思議。地不思議と門の口。詞母者人。申し漸う今歸りました。母者人〳〵。コレ〳〵緣よ。母人は見えぬか。アレ〳〵父樣。婆樣が池へはめてあるわいの。地ヤアと驚き走り寄り。探り尋ぬる手先へ觸る。繩を力に親と子が。やう〳〵に擔ぎ上げ。詞コレ〳〵申し母者人。何者がこの樣に。婆樣イなう〳〵。地といへど答もあら悲しや。體は氷と冷え切つたり。こりや何とせうどうせうと。駈出しては駈戻り。立つたり居たり氣は半亂。詞エヽ〳〵目が明きたい。聞きたい。地鳥目は何の因果ぞと。母に取付き身を悶え スヱテ聲をばかりに。歎きしが。詞ハツアさうぢや。水に溺れし體には。藁を焚いて温むれば。再び息を返すと聞く。オヽそれよ〳〵と地父親が。差圖に蓑を搔集め。蠟燭の火を差寄せて。心をフシカヽリ焦す煙さへ。親子が心通じけん。うごめく體に猶も口寄せ。詞コレお心慥かに。母人樣〳〵と。地聲を限りに呼び生くる。やう〳〵に目を開き。糸より細き聲を上げ。詞オヽ平太郎。孫もそこにか。ハイ〳〵緣も爰にをりまする。お心が付きましたか。モ何やつがこの仕業。オヽ何者とは晝來たやつが。ムヽ扨ては騙であつたるよな。シテ〳〵。どつちへ失せました。アヽコレ〳〵平太郎。母が橫死は定まる業。隨分身をば大切に。曾根の苗字を起しなば。これに上越す悅びはない。地隨分親子長生して。末の榮えを見せてたも。詞それが冥途の土産ぞや。地取分け不便は孫緣。今一度顏をと引寄せて。聲を限りの口說言。可愛や親には思はぬ別れ。辨へもなき子心にもさぞや便なう思ふであろ。可愛の者やいぢらしや。又一つには緣お柳。可愛い夫子を振捨てゝ。歸る柳は切崩され。魂宙宇をうろ〳〵と。紲に引かれ迷ふであろ。コレ〳〵〳〵魂家の棟離れずは。今一度妾をば見せてたもと口說き歎けば平太郎。今日はいかなる惡日ぞ。妻には別れ其上に天にも地にも掛替なき。たつた一人の母人が非業の別れは何事ぞと。悔みの涙はら〳〵〳〵。かゝる憂目をみ熊野の那智のお山の。瀧津瀨も一度に。フシ落ちくる如くなり。地老母は今はの聲の下。詞ナウ平太郎。緣が事を賴むぞや。と地いふが親子の一世の別れ。フシカヽリはかなく息は絕えにけり。重なる思ひに親と子が スヱテ前後不覺に。歎きける。地樣子をとつくと和田四郎。後に立つてせゝら笑ひ。詞ハヽヽヽ婆めはくたばる。父めは眼が潰れたな。

ムさう言ふは昔うせた騙よな。目前母の仇敵。覺悟ひろげと言はせも立てず。コリヤヤイ。眼も見えぬ態をして。じたばたひろげば命がないぞよ。コリヤ。あの髑髏は。出世の種とぬかすから。何者の髑髏ぢや。あり様にぬかせ。ぬかさにや汝も小忰も。今日前に芋刺しぢや。ヤぬかしたり。汝らが手に合ふ某ならず。コリヤ〳〵絲よ。刀を奥で取つて來る。此手をちやつと引いてくれ。ヤイ〳〵。其大小はひつ淺へ。爰におれが持つてゐる。是が欲しくば。サアぬかせ。ぬかさゞ是ぢや。と地ひらめく刃先。目先は見えぬ眞の闇。怖い〳〵と絲丸。逃行く首筋引掴み。詞サア小びつちよから苛もか。サア。サア〳〵〳〵何と。と地人質取つたる手詰と手詰。詞エヽ〳〵此日が明けて欲しいな。南無権現様〳〵。お榊やい。ヤア喧しいわい。いつその事に此小忰。芋さしにしてくれん。と地段平逆手に取直せば。アレエ〳〵と泣く聲に。今は堪兼ね手を合せ。詞アヽコレ申します〳〵。何を隠さうアノ髑髏は。白河の法皇の。と地半分聞いて。詞ムヽヽよし〳〵。ツイ一言で濟む事を。ソリヤ餓鬼めをこます。地と投げやれば。親子が嬉しさ縋り寄り。溜息ほつとつく空に。鳥の羽音二聲三聲雲間をさして飛んで行く。その隙に和田四郎。髑髏を小脇にかい込んで。詞白状をひろいだ褒美これを喰らへと地斬付くる。かい沈んで利腕しつかり。詞コリヤどうぢや。イヤ汝は眼が見えるかよ。オヽ。アレ〳〵〳〵、鏡の違ふまで見えるは不思議。ヤア〳〵〳〵〳〵。ヤそんなら生けては置かれぬ。と地斬込む刀ひつたくり。池の深みへ頭轉倒。フシ尻ひつからげ突つ立つたり。詞ヤア父様。強うなつたの。オヽ坊よ。父はモウ目が見えるぞよ。嬉しいか〳〵。何より大事はこの御頭と。地しつかと渡す後の方。這ひ上つたる和田四郎。腕を固めて斬込むを。心得鍬にてしつかと受止め。詞かう日が明けば百人力。盗人風情のおのれらに。刀を當てるは刃の穢れ。うぬに似合うた鍬の刃先。老母が敵觀念せい。と地打つてかゝるをはつしと受け。ヤア盗人とは案外なり。詞季仲の謀反に與し。軍用金を集めん爲。山賊夜盗は假の渡世。鹿嶋三郎義連なり。こけ猿めらが命の宿がへ。一々そつ首並べん。と地廣言たらぐ付入る早速。こなたも身は手練の若者。受けつ流しつ斬結ぶ。鎬を削る吹雪の空。霙交りの雨の足。踏み込れば踏止り組んづ轉んづ。三重へ挑みける。地平太郎は多

年の誠神や力を添へぬらん。斬伏せ〳〵乗つかゝり。老母の敵嬉しやと。親子は體踏付け〳〵フシ嬉しさ限りなかりける。地折からさつと冷風の。身にしみ〴〵と沁み渡り。親子は顔を振上ぐれば。影かあらぬか緣が母。詞ナウ平太郎殿。御身多年の孝行と信心の功徳により。月日の兩眼明らかに。忽ち敵を討つたるも。大權現の神勅なり。肌の守りを見給へ。と地いふ聲ばかり聞ゆるにぞ。始めてはつと心付き。誠に不思議はこの兩眼。眼前敵を討つたるは。偏へに神の加護なるか。と懷中の守より牛玉取出しよく見れば。詞數多の鳥の影もなく。扨こそ大靈權現の。不思議を見せしめ給ふかや。ハア〳〵〳〵地有難し〳〵と。肝に銘ずる折こそあれ。又も羽音は悦び鳥飛びつれ〳〵フシカヽリ目のあたり開きし紙は忽ちに。元の牛玉となりにける。かゝる奇瑞をみ熊野の牛王の威徳末の世に。門戸に押して諸人をフシ防ぐ守ぞ有難き。地フシはや東雲の街道筋。木遣はやしで地車の。轟々音ぞ勇しや。音頭和歌の浦には名所がござる。一に權現二に玉津嶋。三に下り松。四に鹽釜よ。ヨイ〳〵ヨイトナ。地俄に車地に坐り。ゑいや聲して人夫ども。押せども引けども一寸も。フシ先へ行かぬぞ不思議なる。地警固の武士進の藏人騒ぐな者ども。詞思ひ當る事こそあれ。せくな〳〵と地制する所へ。身拵へして平太郎。緣を連れて出で迎ひ。詞扨こそ此木の動かぬは。目前親子恩愛の。別れを惜しむと覺えたり。地妻が靈をも諫める爲。何卒綱をこの悴に。引かさせて給はらばスヱテ有難からんと願ふにぞ。詞ホヽさこそ〳〵。某もさは存ずる所。左様たらば此柳。新宮の濱先まで。跡は海手を流さんと。地錦の袋を手に渡し。詞御頭を是に包まれて。跡より登り給へかし。我は先立ち法皇へ。この趣きを奏聞せば。曾根の家を引起し。父の敵時澄。折を以て某が。宜しう手引き仕らん。イザ御用意と勸むれば。ハヽア。地忝しと一禮のべ。緣諸共立ちかゝり。木遣音頭は父が役。かざす扇もしをれ聲。音頭無慚なるかな稚き者は。母の柳を。都へ送る、元は熊野の柳の露に。育て上げたるその緑子が。ヨイ〳〵ヨイトナ。詞こりやおれが母様かと。地綱引捨てゝわつと泣き縋り歎けば父親は。涙に聲も枯柳。引けば。引かるゝ恩愛の。孫よ。孫よと夕まで　いとしがつたる老母さへ。道の巷に捨らんと。かきいだきたる孝の道。忠義に厚き藏人がいさめて歸る

都の土産。カン郷と柳と契りたる。連ふ。棟の由來因緣を語り。傳へていち
理がへりや楊枝村。女夫坂とて言ひ傳 じるき。

東海道四谷怪談　二五

伊右衛門住家の段

〔解題〕　文政八年七月江戸中村座興行の鶴屋南北の傑作「東海道四谷怪談」を淨瑠璃に仕立てたものである。お岩の役で評判を取つた三世菊五郎は文政九年春大阪の角座で「いろは假名四谷怪談」の外題で上演して、お岩の幽靈で大當りをとり、同じ外題で繪入の根本さへも後に刊行された程であつたので、これに刺激されて操りでも、その作を轉用するやうになつたものと思ふ。而して操りの初演は天保二年七月廿五日から御靈境内（太夫吉田小竹）の芝居で一番目に「信州川中島合戰」（大序より三段目迄）、その跡へ「東海道四谷怪談」として出したのである。番附によれば、大和田峠の段、伊右衛門住家の段、師直下館の段、玄辰屋敷の段、向島の段、深川の段となつて居り、伊右衛門住家は竹本氏太夫が語つてゐる。この操り芝居は人氣があつたと見えて、九月九日から一番目の「川中島合戰」を「孃景淸八島日記」に替へて、四谷怪談はそのまゝ据置で興行し、翌年正月太夫本の小田小竹が兵庫の芝居でも興行してゐる。その後大阪の操り芝居で度々上演されて居るが、場割は同一ではない。例へば文久元年五月稻荷の文樂で興行の時は、深川八幡宮の段、伊右衛門住家の段、板返しの段、賴母住家の段、一つ家の段とかうなつて居る。

こゝに收めた伊右衛門住家の段が最も名高いが、原作の宅悅の代りに權平を出して居る外に、淨るりに仕立て直したので多少變つて居るが、詳しい事は本全集の「歌舞伎脚本集」に收めた原作と御比較を願ひ度い。

へ指して出でて行く。地既にその日も入相の。フシ鐘から／＼と。告げ渡り。籬にすだく虫の音も。ホフシいとゞ淋しき留守の宿。地お岩はすめぬ案じ顔。いつか晴れなん胸の闇。行燈取出し火打箱。移す附木の硫黄さへ。タヽキ花なき夫の心根を。とやかう思ふ女氣の。ナホスフシカヽリ一人くよ／＼喞言。詞ホンニ浮世といひながら。水の流れと人の行末。もと此身は細川家の奥勤め。縁でかた伊右衛門殿に思はれて。お暇願うて嫁入の。間もなう産んだアノ伊之助。主の世繼と樂しんで。カヽリ育つる甲斐も情ない。地生れ落ちると疳の虫。我が身は産の惱みより血の道といふ立ち病ひ。其上にはかの浪々に。尾羽打枯らす今の身の上。よく／＼武運に盡果てし。親子夫婦が身の上と。浮世を恨み身を喞ち フシそゞろ涙にくれけるが。

地思ひ嵩じて血の道の。のぼせに思はずよろ／＼。詞ア、又持病のこの逆上。どうぞ仕様は。オヽソレ／＼。最前の粉薬と。地白湯に掻立て一口三口。飲むは毒とも神ならぬ。フシ身の成る果てぞ哀れなり。地納戸の暖簾そつと上げ。物をも言はず権平が。フシお岩が腰に抱付けば。エヽ誰ぢやぞいの。イヤ誰でもない。鼻ぢや／＼。オオ是はしたり権平様。又ござんしたか。地エヽあたいやらしいと振放し。立退く袖を引止めて。詞アヽコレ待つておくれいな。最前は伊右衛門が咳拂ひに嚇されて。去ぬる振りして裏へ廻り。ほんまの留守を考へて。忍び込んだる心底男。ちつとは可愛と思うておくれ。ハテマア下に落付いて。おれがいふ事聞き給へ。コレそ様こそ一筋に。伊右衛門に貞女を立つれど。伊右衛門の魂は。疾うに餘所へ。ヤ。ホイノホイ／＼。と飛んであるぞえ。ホヽヽヽ。オヽまた権平様の性わるな。夫に限つて其様な外心はござんせぬ。必ず案じて下さんすなと。地塵灰つかぬお岩が顔。穴の明く程打眺め。詞テモ扨もさりとてはマア。疑ひ深い人ぢやなう。イヤモこの事は言ふまいとは思うたれど。あんまりそ様がいとしさに言うて聞かす。サマ聞かしやれや。あり様は伊右衛門が八幡へ参るとは。跡かたもない皆赤嘘。誠はそ様も御存じの奥村喜内が一人娘に。お梅というて。モそれは／＼美しい。顔形なら風俗なら。春の柳の腰付きに。喰付いたアノ伊右衛門。その證據といふは。即ち爰におはしますぢやて。此状と守り袋。此中伊右衛門が袂から落したを。そつと拾うて斯くの仕合せ。オツトどつ

こい。久しいもの。ござんす。サマそれから御覧じ。その文何のいやらしミ、サツパ聞遊ばせや。エ、何ぢや、詰ミカヒダ技擢しき御見に向以山々御嬉しく今しもはれかれかし、



そのふし御申しの事。必ず／＼御逢へなう。一日なりとも早う夫婦になり。朝夕の御宮仕へなしたい様に。神かけて祈りたい。エヽ何々。惜しにてもお傍を離れ候事が悲しく候まゝ。此守りを御肌に添へさせ。今宵も早や／＼御越したいの程。待ちこがれたい。ナントマア憎い奴ぢやないかいたう。詞ミクセ痛またお岩様御事は。御氣の毒にはしまし候へども。前世の因果と御諦め下されまし。必ず／＼御變らせなう。詳しきは御見もうじと。をしき筆とめたいあら／＼かしこ。主様まゐる。こがるゝ梅より。何とお岩様。サ是でもこなた何ともないか。イヽヤイノコレ。現在男を寝取られても。口惜しうはないかいの。エヽテモマ幸抱づよい女子ぢやナ。オヽヽヽさうぢや／＼思ひ出した。それにまだ／＼どえらい事があるてや。その小梅と母親との相談で。ソレ美しい其顔を片方はぶうと腫らし。目を大きうにして。片つらの方は小さうして。髪の毛は皆抜けて。モそれは／＼どうとも斯うとも言へぬ。見つとむない顔にして。伊右衛門が愛想を盡かす様にせうと。アヽ何とやらいふ毒薬を。水庵とやらを頼んで。調へたといふ事迄。此鼻がへヽ聞いて置いた。オヽこは／＼怖やの。コレうか／＼として。生れも付かぬ片輪者にしられうより。こつちから伊右衛門に。隙やるが上分別。ハテモ是程たしかな證據のあるに。何の思案もへちまも入らぬ。コレ思ひ切つて應といや。地いかにお名が堅いとて。さうつん／＼と召さる程。いとゞ思ひが増す穂の薄。靡いて給はれコレマ／＼お岩様。詞イヤモさうぴんとした顔付きが。どうもたまらぬ／＼と。地惡風がる者を無理無體。抱付き喰附きフシしなだれかゝる。詞手先を取つて突放し。腹立ち涙声はー詞ヤア女と思ひ侮つて、ようある者に無體千萬。たとへ夫に抱かれても。さもしい心持つ様な女子と思ふか慮外者。いらぬ肝精を焼かうより。足元の明い内早う去にや。遅いと斯うと地有合はす。小助が脇差抜放せは。さしもの權平氣味惡ながら。弱身を見せぬへらず口詞エヽこれ程心底盡くすのに、聞分けのない片意地者。今に吠え面見る様な詞ヨイ／＼此上はモウ破れかぶれ。代官所へ御願ひ申し。貸して置いた金の元利。取りたくつてこますわい。待つて居らうと詞言捨てに。詞は強う足は空。有合ふ草履片足には。木履片ひつかけてフシ足ばやにこそ逃げ歸る。地ツン跡にお岩はせきのぼす。胸の

炎の下萌を。焚付けられて女氣の。もしやさうかと取つ置いつ。フシ思案ちまたの物案じ。詞ア、氣合の惡い折からに。かて〻加へて憎てらしい。權平づらの告げ口。地と言ひつ〻傍なる以前の文。見るにつけても疑ひの。長地カヽル心をぢつと納めても納めかねたる胸の内。フシしんき辛苦の亂れ髮。鬢の後れも氣障りと。有合ふ鏡臺引出しの。半太夫フシ黄楊の小櫛も。いつしかにオクリ替り。果てたる身の變きや。冷泉心のもつれ。解き櫛に。タヽキかゝる千筋の後れ髮。ナホスコハ心得ずと又取上げ。解く程抜ける額髮中手に丸めて打眺め。詞ハテ合點の行かぬ。今日に限つて逆上の強さ。殊更髮の此様に。抜けるは病ひの業なるかと。地言ひつ〻鏡の蓋取退け。向へば寫る怪しき顏。はつと惻り立退いて。フシ見れども遐りに人もなし。ハテ不思議なと立寄つて。また差向ふ鏡の影。よく〳〵眺めて。ヤア〳〵いつの間に此顏が。此様に變つたぞと。地言ひつ〻我と我が顏を。ためつすがめつ目をとめて。見れば見る程惡女の相好。ハアはつとばかりにどうど伏し。コハ何とせん悲しやと狂氣の如く立ちつ居つ。スヱカヽル身悶えすれば胸先へ。持病の痞が差込んで。その儘そこへ伏轉び フシ悶え。苦しむ折からに。地かゝる事とはつゆ知らず。泣く子を賺して漸うと フシ歸る小助が門の口。詞奥様。さぞお待兼ね。何がモウ坊様がやんちやばつかり。四つ谷中をあちこちと。賺し廻つて漸う只今。ソレちやつと添乳をなされませと。地言ひつ〻立寄りこれは扨て。御病中に大膽千萬。宵惑ひのお轉寢。エヽちとお嗜みなされませと。地傍に稚子そつと置き。見れば苦痛のその有様。詞ヤア是はしたり。また例のお癪が發つたか。奥様。地申しと呼び生けても正氣なければ抱起し。つく〴〵見れば怪しき相好。詞コヽヽヽ奥様のこのお顏。マどうした事と 地うろ〳〵きよろ〳〵。詞エヽかて〻加へて旦那はお留守。コリヤマアどうせう。地何と詮かたへに有合ふ土瓶の温み。口押分けて一口飲ませ。其儘耳に口差寄せ。詞奥様。奥様イたう。お岩様と。地背撫でさすり様々と心を碎く介抱に。フシお岩は漸う息吹返し。詞ハアオヽ小助か戻りやつたか。さうして坊はどこに居やる。イヤモお氣遣ひなされまするな。地どうやら斯うやら叩き付け。只今漸う寢かしましてごわりまする。オヽそれはマア〳〵嬉しうござる。アヽイヤ申し奥様。それはさうとお前様は。いつ

の間に其樣な。怖しいお顏にはならつしやりましたぞいのと。地問はれて又も女氣の。涙は胸に漲りてフシ暫し。答もなかりしが。地やう／＼に押鎮め。詞されぱいの聞いてたも。いつもの通り伊右衛門殿。八幡宮へ參詣と出て行かしやつた其跡で。あんまり逆上が強い故。水庵殿の加減の粉藥。二口三口飲みし所へ。直助の權平が。裏から忍んで横戀慕。樣々口說く其中にも。伊右衛門殿は奥村の。娘に深う言交し。神參りとは僞りにて。小梅と契る其上に。わしに愛想を盡かさそうと。相好變る藥まで調へしとは聞いたれども。戀の叶はぬ意趣晴し。權平が拵へ事。よもや夫が其樣な非道な事はあるまいと。心で心取直せど。逆上は次第に強うたり。髮をすけば拔落ちる。剰へこの顏の。俄に變りし我が相好。ムヽ扨は權平が詞に違はず。奥村親子が工にて。水庵に言含め。毒藥を飮ませしよな。エヽ思へば／＼腹立ちや。大事の夫を寢取られし。恨みはこちからあるものを。却つて毒を飮ませしは。鬼とも蛇とも魔王とも。譬へがたなき奥村親子。おのれ其儘ヤ置くべきかと。地すつくと立つて表の方。駈出さん其勢ひ。小助はあわて抱き留め。詞コレ／＼申し奥樣。氣相かへてコリヤ何所へ。ハテ知れた事。奥村の屋敷へ行き。憎しと思ふ小梅親子。恨みをいうて言破り。伊右衛門殿を引つ立てに。イヽヤソリヤ惡い御了簡。權平が詞を信じ。奥村へござつても。先に覺えのない時は。こなたばかりか旦那の恥。サマヅ／＼／＼／＼お心をとつくりとハテモお鎮めなされて下さりませ。イヤ／＼／＼。恥にならうが笑はれうが。モウかうなつた上からは。姫御前の嗜みも。色も花香も捨たつたわいなう。サア留めずと放しや。そこ退きやと。地角目立つたるコハリ瞋恚の炎。行くをやらじと留むる小助。音に驚き目覺す稚子。母樣なうと泣出す。さすが血筋の恩愛に。詞オヽ坊か／＼／＼いとほしや地可愛の者やと引寄せて抱きつく／＼母親の。顏を眺めて。詞イヤ／＼この母樣はさうでない。こはい地怖いと稚子が。泣く／＼膝を這ひおりて。詞べいよ。ほんの母樣呼んでくれ。地母樣なうと泣く聲を。聞く悲しさにいとゞ猶。詞アレ／＼／＼／＼あれを聞いてたもいなう。また辨へなき子心にも。我が相好の變りし故。現在母を怖がつて。傍あたりへも寄付かねば。何と／＼のめ／＼此顏が。伊右衛門殿に逢はされうぞいの。エヽ思へば／＼わしが身は。

詞どうした宿世の因果にて夫といひ我が子に迄。見捨てられしぞ悲しやと聲も惜しまず泣きければ。小助も道理とばかりにて フシ共に。涙にくれけるが。地お岩は髮も逆立つ顔色。詞とても此世に永らへて。生恥を曝さうより。死んで恨みを晴はんと。地取出す刀を引止め。さうはさせぬ。そこ退きやと。互に爭ふ帶の端。繻子のしやら解け因果のはし。挑み爭ふ フシ折こそあれ戻りかゝりし羽宮伊右衛門。何心なく我が家の内。地入るも知らぬ兩人が思はずばつたり行當り。たがひに見合はす顔と顔。ホこれはお旦那お早いお歸り。詞と その場の首尾の手持ちなく フシ小助はもぢ／＼扣へ居る。地お岩は夫の胸ぐらに。しがみ付いて コレ伊右衛門殿。詞ようも／＼わしを欺し。毎夜々々ぬつけりと。小梅と枕を交しやつたなうと。詞いふも嫉妬の上がれ聲。角目立つたる形相に。驚きながらさあらぬ體。詞ム、合點の行かぬ此場の樣子。ゲマ それは格別。その方が面體は。何故にその樣に。見苦しくは爲しぞ。何故。何故とは。エ、しら／＼しいわいの。小梅親子が工にて。地良藥に言附けて毒藥を此身に呑まし。コレ此樣に見とむなう。生れも付かぬ片輪にしたも。皆こなさんの心から。サア／＼／＼元の顔にして返しやと。詞取付き歎くを取つて突退け。詞ヤア言はして置けば樣々の戯言。おのれ等こそ身が留守に。地帶紐といて不義密通。主の目をぬくコナ不忠者。成敗の重ね斬り。覺悟ひろげと難題を。地聞くより小助は律儀一遍。涙と共に膝突きかけ。詞コレ旦那殿。イヤコレ伊右衛門殿。この小助を不義者とは。ソリヤこなた無理だ／＼。胴慾でごはりますわいなう。下郎めは坊樣を。四つ谷一遍すかし廻り。戻つて見れば奧樣が。思ひも寄らぬ此有樣。樣子を聞けば右の段々。奧村へと駈出すを。やらじと留めた帶の端。それを不義ぢやの。イヤ密夫とは。ソリヤあんまりだ／＼／＼。餘りでごはりますわいの。ホンニ／＼此年月。こなた樣を世に出さうと。おらが此。サ此態を見さつしやれ盆も正月もコレ一點。日がな一日。町小使に駈歩き。地犬に吠えられ夜廻りに。お役人にはエ、見咎められ。詞憂き艱難はいく何度。夜の目も／＼寐た事は。今の今迄ごはりませぬわいなう。地それに氣強い今のお詞。詞エ、聞えませぬ旦那殿。と地縋たゝいて恨み泣き。お岩も共にせき上げ／＼。詞上は女御お局より。賤しき賤の下々でも。連添ふ夫を大切に。思

ふは女の道なれど。お前に貧苦を見せまいと。濯ぎ洗ひの賃仕事。心を砕く女房を。捨てゝ日影のます花に。移り。變るのみならず。覺えない身に疑ひは日頃の氣質に似合ひませぬ。むごいわいなとばかりにて。恨みのたけを夕闇の雲に篠つく村時雨 フシ晴れ間は。さらに泣くばかり。地伊右衞門は耳にもかけず。詞ヤアその言譯暗い〳〵。主の留守に帶紐とき。狂ひ廻るが不義の證據。サア眞直ぐに白狀ひろげと。地手強き夫の一言に。お岩は猶も聲震はし。詞エヽその身の罪を隱さうと。覺えなき身に惡名つけ。わしを追出しその跡で。小梅と女夫になるのぢやなう。モウ此上は是非もなし。憎や恨みの奧村親子。おのれおめ〳〵添はさうかと。地以前の脇差追つ取つて。駈出す肩口引戻し。詞ヤアどこへ〳〵。此場をはづす間に合ひ詞。詮義濟むまでこの座は立たせぬ。イヤ〳〵〳〵行かいで置かうかと。地互に爭ふその中に。小助はうろ〳〵稚子も。共にうろ〳〵おろ〳〵聲。詞母樣どこへ行かつしやる。父樣堪忍。地堪忍と裾にもつるゝ恩愛の。二人は修羅に コハリ目も見えず。引きつ引かれつ刀の柄。捻合ふはずみに鞘走り思はず肩先五六寸。アツトばかりに倒るゝ女房。南無三寶とお岩が刀もぎ取り捨つる切先が。因果の廻りか小助が胸。痛手にわつと七轉八倒。コハしなせしと伊右衞門が。立寄る足元稚子の急所にや當りけん。うんと一聲卽死の有樣。さしもの夫も途方にくれ フシ只忙。然たるばかりなり。地お岩はむつくと起返り。詞コリヤ〳〵〳〵こなた殺すのぢやなう。オヽ殺さば殺せ一念は。憎しと思ふ小梅親子。取殺さいでヤ置かうかと。地恨みの顏色髮逆立ち。睨み詰めたるその形相。さながら鬼女の如くにて物凄くも又。フシ恐しし。地夫は思案の胸を据ゑ。詞手にかけうとは思はねど。刄の廻りは自業自得。不義密通の天の罰。地思ひ知れよと非道の詞。小助は苦しき息をつぎ。詞エヽこなたは〳〵こなたはなう。是程いうても聞入れず。無慈悲無道のこの成敗。カヽりたとへがたなき大惡無道。地如何なる天魔が魅入れしぞや。數ならぬ下郎が命。さら〳〵惜しうは思はねど。覺えない身に不義の惡名。呼ばれて死ぬるがエヽくやしいわい。地それのみならずおいとしや。奧樣迄が同じ惡名。まだ其上に和子樣が。思ひがけない非業の御最期。詞他人の身でさへおいとしいに。現在の親の身で。こなたは〳〵何ともござらぬか。コレ悲し

うはないかいの。エ、地むごい無情い心やと。我が身の手疵は苦にもせず。にじり寄つて稚子の。空しき骸を抱き上げ。スヱカヽル卿ち歎けばお岩も這寄り。我が子の死骸抱きしめ。詞コレ〳〵伊之助々々々。父様の胴慾と。地母の心が愚痴なから。詞そなた迄が此最期。さぞ恨んで居やらうが。コレ堪忍してたも〳〵〳〵や。地親子は一世と聞くなれば。今別れてはいつの世に。又逢ふ事がなろかいなう。廣い世界に生ある者。物の哀れを知るといふ。現在家來や女房子が。今はの際に一遍の稱名さへ唱へもせず。餘所に見捨つる胴慾な。心は鬼かエ、蛇かいなう。むごいつれない我が夫と。恨みの數々數へ立て。口說き立つれば小助も共に。歎く涙は滿ち〳〵て四筋の雨や五月雨の降りしく死出の田長鳥フシ泣音。血を吐く如くなり。詞ヤア曲にも立たぬ世迷言。念佛。申して成佛せよ。地南無阿彌陀佛と兩人を。嬲り殺しに七轉八倒。虚空を摑み四苦八苦。此世からなる劍の山。無慚と フシいふも哀れなる。地かゝる所へ表口。息を切つて駈來る水庵。コレ〳〵〳〵伊右衞門殿。詞お岩殿の相好を變へた藥は我らが秘藥。皆奥村の母御の賴み。氣の毒ながらお內儀を。手にかけられしはもつけの幸ひ。是からは天井拔け。小梅殿と盃事。地誰憚らぬ三國一。聟になり濟ました。しやん〳〵〳〵。ハヽヽヽ。サア〳〵フシ早うとせき立つる。地夫も今更後悔の。詮方なみだ押包み。詞現在女房子家來まで。不便ながらも手にかけしも。定まる過去の因緣事。しかし後難の恐れあれば。本意ならねど兩人の死骸をばゞ。納戸の戸板に打付けて不義密通と書きしるして。根無川へ押流さん。妾は端近奥の間で。用意よくば裏道から。地早う〳〵に實に尤も。詞幸ひ隣の團助をと。地門口覗いて聲ひそめ。團助々々に出で來る團助。水庵差寄り耳に口。ナム〳〵ム、、、點頭き呼き兩人は。二人の死骸を引つかたげフシ奥の間さして入りにけり。地最前より始終の樣子。窺ひ聞いたる直助權平。物陰より現れ出で。詞ヤア科なき女房家來まで無成敗の羽宮伊右衞門。代官所へ注進と。地駈出す帶際引戾しヤアどこへ〳〵。詞大事を聞いたは汝が寂滅。地覺悟ひろげと斬付くろ。こなたも我武者のだんびら物。二打ち三打ち戰ふ中。手練の羽宮に斬立てられ フシ逃ぐるをばつさり後袈裟。地イデ此上は我が子の死骸。せめて人目を包まんと。幸ひ片方に有合はす石を重りの水

葬禮。詞南無阿彌陀佛と　増井筒の中。　多の鼠。コハ心得ずとためらふ中。伊　數は二つか三つどもゑ廻る。報いは末
打込む間も。アラ不思議や。コハリ俄か　右衛門目がけ飛びかゝるを。シヤ面倒　の世に。殘れる四つ谷怪談の因縁。か
に家鳴り震動して。いづくよりかは數　なと斬拂ふ。刀は稻妻燃え立つ陰火。　くと。三重へ知られけり

増補 生寫朝顏話

四の切 二六

宿屋の段

〔解題〕 朝顏日記の原據は司馬芝叟の長話の一つである「蕣」で、芝叟はこの話を本として、璃寛に宮城阿曾次郎をさせ度い希望で、狂言作者の近松德叟に話して歌舞伎に仕立てさせ、大抵出來上つたが深雪をさせる適當な役者がなくて上演を見ない中に德叟は文化七年十二月に歿した。處が翌八年に兩香園柳浪の讀本「朝顏日記」(十卷)が刊行され、これを粉本として文化九年に堀江市の側で「生寫蕣日記」と題して市川團三郎の駒澤で興行したがさしたる事もなかつた。處が文化十一年春澤村田之助が江戸から歸阪したので、前の德叟の遺稿を奈河晴助が潤色して「けいせい筑紫𤢖」と題して田之助に深雪、璃寛に阿曾次郎といふ適役で上演して大當り大評判をとつた(傳奇作書殘篇中)。

この田之助の朝顏が大好評であつたのに刺戟されたものか。淨瑠璃の方では、天保三年正月二日から稻荷の文樂芝居で「生寫朝顏話」と題して上演された。その時の番附によれば、添削者耶麻田加々子とあるが、これは近

松徳叟の別號山田案山子を襲名した人かと思ふが、天保頃の淨るりに添削の筆を執つたものが相當にある。〔初段〕大内館、松原、宇治川、茶店、岡崎、〔二段目〕明石船別、弓之助屋敷、大磯揚屋、〔三段目〕小瀬川、摩耶が嶽、〔四段目〕濱松、島田宿屋、〔五段目〕駒澤閑居、山岡屋敷、多々羅濱に別れて居り、島田宿屋の段は時の文楽座の櫓下竹本重太夫が語つて居る。

然るに重太夫は天保十一年五世政太夫となつて同年歿したが、その子鶴澤才二及び義弟鶴澤儀左衛門が翠松園主人に依頼して故人の語物に更に刪補を乞ひ「増補生寫朝顔話」と題して嘉永三年正月刊行された。爾來朝顔日記としてはこれが弘く世に行はれるに至つた。

藝州岸戸の家臣秋月弓之助の女深雪は一年宇治の螢狩で宮城阿曾次郎といふ美しい武士と戀仲になつたが、秋月一家は國許に騒動が起つて急に歸國する事となり、明石の浦で圖らず宮城とはかなき船別れをするや深雪はいよ〳〵思ひ焦れる身となり、大内家の臣駒澤次郎左衛門と縁談が起つた時、それが阿曾次郎とは夢にも知らず、言交した夫へ操を立てようとして家を拔出て小瀬川へ身を投げようとする處を助けられた。併しその助けられたのは荒妙といふ强惡の老婆で、摩耶嶽の隱家に伴つて逆待を加へ、遊女に賣らうとするを、この家の入聟となつて居た淨洲の仁三郎實は駒澤次郎左衛門の弟三郎春次に助けらて、又々夫の行方を尋ぬるうち、盲目となり、螢狩の時宮城の書いてくれた「露のひぬ間」の唱歌をうたつて露命をつなぎ、それより島田の宿屋となるのである。〔以下こゝに收めた場面〕眼病平癒の深雪は關助に伴はれて駒澤の上屋敷に尋ねつき、こゝに主君大内義興の許しを得て晴れて夫婦となるといふ筋で、これに大内家に滅された大友一味の者と内通して居る惡人岩代多喜太が駒澤を暗殺して主家を滅さうとする隱謀、摩耶嶽の荒妙は大友宗鎭の遺孤菊姫を守り立て主家再興を計る女丈夫である事等を取合せて筋を複雑にしてゐる。二の口明石の船別れ、三の切摩耶嶽、四の濱松小家から切の島田宿屋等が名高い。

二重へ入りにけり。地いづくにも。暫しは旅とつゞりけん。フシ昔の人の。筆の跡。つれ〲侘びる假宿の夜の襖の隙もりて。小オクリ風に。またゝく燈火の。本フシ影も。淋しき奥の間へ。地立歸る治郎左衛門。フシ何心なく座をしめて。ふつと目につく衝立の。張まぜの歌讀下し。詞テ心得ぬ。この張まぜの地紙の歌は。先年山城の宇治にて。秋月が娘深雪が扇に某が。また逢ふまでの形見にと。書いて與へし朝顔の歌。その後計らず明石にて。船がかりせし其砌。琴に合はして深雪が節付け。折ふし思はぬ互の出船。飽かぬ別れを悲しみて。女の手づから我が船へ投込みし此扇。然るに今また此家にて。思はずも此張まぜ。ア何者が唄ひ傳へて。計らず東の驛路に。見るも不思議と地ひとり言。其折からの。忍ばれて。眺め。入つたる時しもあれ。襖おし明け徳右衛門フシ小腰かゞめて入來れば。地こなたは扇押隠し。詞オ、亭主。先刻は。扨て〱きつい働き。危き難を遁れしも。全くそちが志。サ、是へ〱。ハ、冥加に餘る御詞。エ、最前



こなたへ参る砌。何か二人がひそ〱話。合點行かずと忍んで聞けば。しびれ薬を茶に交ぜて。あなた様へ差上げんとの。ア、コリヤ。サア恐ろしい工み。エ、憎さも憎し。直ぐに申し上げうとは存じましたれど。それでは又どの様

な科人が出來うも知れぬと存じ。へ、幸ひ先日慰みに。求めました笑ひ藥。ヤコレ幸ひと。しびれ藥と取りかへたを。知らずに飲んださつきの時宜。この後とても旦那樣。御油斷はなりませぬぞえ。ホ、其儀は某もとく承知致した。マそれは格別。この衘立にある朝顏の唱歌は。何人の手跡。又どういふ事からお身が手に入りしぞ。エ、それでござりますか。その歌についてア哀れな話。エ、元は中國邊。歷々の娘さうなが。何やら尋ねる人があるとて。親元を家出し。それより方々と流浪致し。はてはとうく目を泣潰し。跡の月までは濱松邊に。その歌を唄うて袖乞ひ。所に又國元から。所緣の女子が尋ねて來て逢ひました。ガ其女も程なう病死。それから又一人ぼし。この邊までその歌を唄うて歩きましたが。何が盲目でこそあれ。器量はよし聲はよし。見る程の者がいぢらしがり。朝顏々々というて。その歌を知らぬ者はござりませぬ。私も餘りの不便さに。此宿に足を留めさせ。今では宿屋々々のお客の伽。何とまあ。不仕合な者もあるものでござります。地と濱片手の物語も心にひしびし應ゆる駒澤。もし言交せしわが妻かと。轟く胸を押鎭め。詞ム、これはさて哀れな話。身も今宵は何とやらもの淋しい。欝散の爲その女を。呼び寄せる事はなるまいか。イヤモ何が扨て

壹
大序 大内館のだん
同次 [illegible]のだん
序中 宇治川舩のだん
同次 眞葛ヶ原茶店の段
序切 岡崎隱家のだん

貳
二ノ口 明石浦舩別の段
同次 弓之助屋舗の段
同切 大磯揚屋の段

三
三ノ口 小瀬川のだん
三ノ中 摩耶が嶽の段口
三ノ奥切 摩耶ヶ嶽の段奥

四
四ノ口 濱松小家の段
四ノ切 嶋田驛宿屋の段

五
又ノ口 歸り咲吾妻路道行
大切 駒沢上屋舗の段

お易い事。只今呼びに遣はしましよ。お慰みに琴か三味。ム、何分よきに頼み入る。地と言ふは仔細のあるぞとも。知らぬ佛氣德右衛門。フシ尻輕にこそ立つて行く。地跡へ相役岩代多喜太。のさ／＼と庭に直り。詞ヤ駒澤氏。さぞ御退屈でござらう。コレハ／＼岩代氏。殊の外お早い事でござる。地と表面は解けても解けやらぬ。前垂がけの下女おなべ。次の間に手をつかへ。詞申し／＼。只今朝顏殿が見えました。是へ通しましよかいな。ナニ朝顏とは何者だ。アイヤ。此道中で琴三味を彈き。旅の徒然を慰むる瞽女とやら。拙者も何かもの淋しうござれば。チト琴でも聞かうと存じ。亭主を頼み。呼び寄せましてござる。アイヤ。そりや止めになされ。とは又なぜな。サレバサ。先刻身どもが知音たる萩の祐仙。同席いかがと言はれた貴殿。乞食をば座敷へは通されまいかい。ハテ高の知れた盲目女。まんざら怪しい。ナ。ソレ。茶箱も持參いたすまい。地としつぺい返しにぎつくりと。言句に詰れど減らず口。詞左程御所望ならばともかくも。併し。座敷へは叶はぬ。庭へ呼出し。琴なと。三味なと彈かし召されて。早く此場をぼつ返されよ。地と飽くまで意地持つねぢけ者。寄らず觸らず駒澤が。指圖におなべは心得て。詞朝顏殿召しまする。朝顏殿々々々と地呼立つる。フシ無慚なるかな秋月の。娘深雪は身に積る。長地歎きの數の重なりて瞳失ふ目なし鳥。杖柱とも頼みてし。淺香はもろく朝露と消え殘りたる身一つを。さすがに捨ても緣先の。飛石さぐる足元も。危き木曾の丸木橋フシ渡り。苦しき風情にて。地漸う坐して手をつかへ。詞召しましたは。此お座敷でござりますか。地拙い調べもお笑ひ草。おはもじ樣や。地と會釋する。顏も深雪がなれの果。不便の者やとせぐり來る。涙呑込み控へゐる。岩代はそれとも知らず。詞ヤア見苦しいその樣で。我々が目通りへうせたは。エ、、聞き及んだ朝顏めな。エ、きり／＼立つて失せをらう。アイヤ／＼岩代氏。さうもぎだうに仰せられな。この方に呼寄せたればこそ。思ひがけなうアイヤ。思ひがけなう來たものを。叱るは武士の情にあらず。コリヤ／＼女。大儀ながら。その朝顏とやらの歌。サ、。早く唄うて聞かせい。地と望む心は千萬無量。知らぬ岩代頬ふくらし。詞さて／＼駒澤氏には。イヤモきつい御執心。コリヤ／＼盲目。何なりともエ、唄へ／＼。サ、早く／＼。ハイ／＼／＼。唄ひまするでござりま

す。地とこがるゝ夫のあるぞとも。知らぬ盲目の探り手に。戀故心つくし琴。誰かは憂きを斗爲巾の。糸より細き指先に差す。爪さへも八つ橋のやつれ。果てたる。身を啣ち。涙にくもる爪調べ。二上り唄露のひぬ間の。朝顔を合。照らす日影のつれなきに合。あはれ。一むら雨の。はら／＼と。降れかし。詞ムム夫を慕ふ音律の。我々が身にも思ひやられて。思はずも感涙致した。ナウ岩代殿。いか樣。琴といひ器量といひ。イヤモ中々感心仕るて。イヤナニ朝顔とやら。そこは定めて冷えるであらう。身どもが傍で今一曲。サア／＼所望だ／＼。ア、イヤ岩代殿。もう赦しておやりなされい。さりとては駒澤氏。身どもが望むを留めさつしやるは。ソリヤ意地の悪いと申すもの。イヤさうではござらねど。彼も定めて。疲れませうと存じて。ハ、ア然らば曲はやめにして。コリヤ／＼女。そちも腹からの非人でもあるまい。身の上話もまた一興。話して聞かせ。サ、どうだ／＼。ハイ／＼。よう問うて下さります。お詞にあまへ。お話し申すも恥かしながら。元私は中國生れ。樣子あつて都の住居。一年宇治の螢狩に。こがれ初めたる戀人と。カヽリ語らふ間さへ夏の夜の。地短い契りの本意ない別れ。所尋ぬる便りさへ思ふに任せぬ國の迎ひ。詞親々に誘はれ。難波の浦を船出して。身をつくしたる地憂き思ひ。タヽキ泣いて明石の風待ちに。たま／＼逢ひは逢ひながら。つれなき嵐に吹分けられ。國へ歸れば父母の。詞思ひも寄らぬ夫定め。立つる操を破らじと。屋敷を拔けて數々の。憂目をしのぎ都路へ。上つて聞けば其人は。東の住居と聞く悲しさ。地又も都を迷ひ出て。いつかは廻り逢ふ坂の。關路を跡に近江路や。美濃尾張さへ定めなく戀し／＼に目を泣潰し。物のあいろも水鳥の。陸にさまよふ悲しさは。いつの世いかなる報ひにて重ね／＼の歎きの數。憐み給へとばかりにて。聲をフシ忍びて歎きける。詞テ扨て哀れな話。しかし男日照もない世界に。エ、氣の狹い女だな。イヤもうしゆんだ話で氣が滅入つた。寢酒でもたべ氣を晴らさう。イヤナニ女。暇をくれる立歸れ。ハイ／＼。左樣なればお客樣。もうお暇申します。オ朝顔とやら大儀であつた。始めて聞いた身の上話。もし其夫が聞くならば。さぞ滿足に思ふであらう。ナウ岩代殿。左樣々々。ハ、ア是はマア御親切なお詞。有難う存じます。地と杖探り取り立ちながら。蟲が知らすか何とやら。耳に

残りし情の詞。名残り惜しさに。泣く〳〵も。フシ心は跡にさぐり行く。地折しも奥より若侍。詞最早よほど深更に及び候。御両所ともに早やお休み。いか様。明日は正七つの出立。イザ駒澤氏お休みなされぬか。イヤ拙者は今暫し用事もござれば。お構ひなく先づお先へ。左様なればお先へ臥せらう。ドリヤムヽヽ、御免下されう。地と立上りしが胸に一物。心を跡に奥の間へ。フシ伴はれてぞ入りにける。地行く間遅しと駒澤は。手を鳴らして女を呼び。詞コリヤ〳〵。德右衞門に急々對面したし。呼んでくりやれと地言付けやり。旅硯の墨すり流し。以前の扉押開いて。フシ何か書付け用意の金子薬の包。取認める目の先へ。疊を貫く白刃の切先。氣轉の駒澤有合ふ溫湯刀に注げば。下には血汐と心得て。してやつたりと疊はね上げ。現はれ出づる笆久藏。駒澤覺悟と斬付くる。刄を恐れぬ煙管のあしらひ。廊下傳ひに來かゝる亭主。スハ何事と窺ふ内。苦もなく刀打落し。取るなり斬るなり途端の拍子。フシ首は遥かに飛散つたり。ヤレ天晴お手の内。アヽコリヤ。ムハヽヽヽヤ出來ました。イヤ申し旦那様。シテこやつは一體何者でござります。ホヽウ某を欺し討ちにせんと。飛んで火に入る夏の虫。ハヽハヽ、死骸はよきに頼み入る。ハヽお氣遣ひなされますな。エヽシテ只今召しましたは。何の御用でござります。イヤナニ德右衞門。折入つて頼み度きは先刻の朝顔といふ女。今一應呼び寄せてたもるまいか。ハイ畏りましたではござりますが。彼は直ぐに清水と申す方へ參りました。御用事ならば呼びには遣はしませうが。アヽどうで今夜はお間には。ムヽハテ残念至極。身は正七つの出立。マよく〳〵縁の。エヽ何と御意なされます。アイヤナニ德右衞門。今の女に謝禮の爲。この三品を其方にしつかりと預け置く間。朝顔が參らば渡してくりやれ。ハイ〳〵。オオコリヤマア夥しいお金。その上結構な女子扇お薬までも。オヽサ其薬は大明國秘法の目薬。甲子の年に出生せし男子の生血を取つて服すれば。いかなる眼病も即座に平癒。朝顔に渡してくりやれ。コレハ〳〵。何から何まで。お心を籠められた下され物。參り次第相渡し。悦ばしますでござりましよ。地と受取る折しも時計の七つ。詞ムヽアリヤもう七つの刻限。地と數ふる内に岩代多喜太。裝束改め旅出立。フシ同勢引連れ立出で。詞イザ駒澤氏。出立仕らう。地とすゝめる詞に治郎左衞

門。衣服繕ひ立出づれば。見送る亭主が暇乞ひ。心そぐはぬ駒澤岩代 フシハズミ 打連れてこそ出でて行く。地 跡見送つて徳右衛門。詞 ハ、ア同じ侍でも黒白(こくびやく)の違ひ。意地くね惡い岩代に引きかへ。情深い駒澤殿。ア、あつぱれの侍ぢやな。ヤそれはそうと朝顔に。今夜の禮にはそぐはぬ下され物。ハア何ぞ様子のありさうな事。地フシ と思案の折から。地 深雪は何か氣にかゝり。座敷しまうてうと〳〵と。フシ 又立歸る切戸の内。地 徳右衛門目早やに見て。詞 オ、朝顔か遅かつた〳〵。宵のお客様が。も一度呼びにやつてくれいとおつしやつたれど。清水へ往(い)たと聞いた故。お斷り申したれば。今の先お立ちなされた。しかしマア悦びや。大枚(たいまい)のお金と扇。又結構な目藥。わが身にやつてくれいと。ソレ此様にお預けなされたわいの。是はマア〳〵冥加に餘る事。お禮申さいで殘り多い。ガ申し〳〵旦那様。此扇に何ぞ書いてはござりませぬか。ちよつと見て下されませ。オ、ドレ〳〵。エ、金地(きんぢ)に一輪の朝顔。露のひぬまが書いてあるわい。裏に。宮城阿曾次郎(みやぎあそじらう)事。駒澤治郎左衛門と書いてあるぞや。エ・アノ宮城阿曾次郎事。駒澤治郎左衛門とその扇に。オイノ。ハ、ア。地 はつとばかりに俄かの仰天。詞 エ、知らなんだ〳〵知らなんだわいな。道理でよう似た聲と思うたが。そんならやつぱり阿曾次郎様であつたか。申し〳〵旦那様。其お客様はいつお立ちなされたえ。オ、今の先の事ぢや。ガわが身は又お馴染(なじみ)か。エ、馴染どころか。年月尋ねる夫でござんすわいな。かういふ内も心がせく。追付(おつつ)いてたつた一言(こと)。地 と行かんとするを引き留(と)め。詞 ア、コレ〳〵〳〵マア〳〵〳〵待ちや〳〵。エ、折惡う雨も降出し。この暗いに一人は危ない〳〵。イエ〳〵〳〵縱(たと)へ死んでも厭ひはせぬ。サ、、、、それはそうでも盲目(めくら)の身で危ない〳〵 イエ〳〵放して下さんせ。是はしたり訳ないと言ふに。イヤ〳〵放して〳〵と。地 突退け刎退(はねの)け。杖を力に降る雨も。いつかな厭はぬ女の念力(ねんりき)跡を。慕うて 三重 へ追うて行く。地 名に高き街道(かいだう)一の大井川。篠(しの)を亂して降る雨に打交りなる霹靂(はたゝがみ)。漲(みなぎ)り落つる水音は物凄くもまた。フシ すさまじき。地 夫を慕ふ念力に道の難所(かんじよ)も見えぬ目も。厭はぬ深雪がこけつ轉(まろ)びつ。やう〳〵爰に川の傍。詞 ナウ川越し達(たち)。駒澤治郎左衛門様といふお侍。もう川をお越しなされたか。まだか聞かして聞かして。地 といふ聲さへも。フシ 息切れの。地 聲に川(かは)

越口々に。詞オ、其侍は今の先渡つた。ガ俄かの大水で川が留つた。笑止地笑止とばかりにて。フシ皆ちり〳〵に行過ぐる。詞ヤア。ナニ川が留まつた。ハヽア。地悲しやと張詰めし。力も落ちて伏轉び。スヱテ前後不覺に。泣きけるが。地父起き上つて見えぬ目に。空を睨んで。詞大道樣。エヽ聞えませぬ〳〵わいな。此年月の艱難辛苦も。どうぞも一度其人に。逢はしてたべと片時も。祈らぬ間とてもないものを。今日に限つてこの大雨。川留めとは〳〵エヽ何事ぞいの。思へば此身は前の世で。いかなる事の罪せしぞ。扨も〳〵。地フシあぢきなや。地こがれこがれた其人に。逢うても知らぬ盲目の。此目はいかなる惡業ぞや。夫の跡を戀ひ慕ひ。石になつたる松浦潟。カン領布振山の悲しみも。身に比べては數ならず。三千世界を尋ねてもこんな因果が又と世に。あるべきかはと口說き立て。拳を握り身を震はし。泣涕こがれ歎きしは フシ餘所の。見る目も哀れなり。地やゝあつて起直り。詞オヽさうぢや〳〵。とても添はれぬ身の業因。この川水の增りしは。所詮死ねとの事なるべし。未來で添ふを樂しみに。爰を三途の岸と定め。地弘誓の船に法の道。急がんものと泣く〳〵も。夫を戀ひし小石の數。袖や袂に拾ひ込み。南無阿彌陀佛の聲もろとも。既に飛ばんず其所へ。ヤレお待ちなされ深雪樣と。聲に恟りけしとむ內。駈けくる關助德右衞門。かくと見るより抱きとめ。詞マア〳〵お待ちなされませ。イヤ〳〵誰かは知らねど放して〳〵。マア〳〵待たしやれ朝顏殿。コレ關助殿とやらが見えたぞや。ハヽア下郞めでごはります。先づ〳〵氣をお鎭めなされませ。地と無理に手を取り フシ抱きのくれば。詞ヤア關助か。遲かつた〳〵わいの。此年月艱難して。尋ねこがれた阿曾次郞樣に。折角逢うたに目くらの悲しさ。それとも知らず別れたれど。どうやらお聲が氣にかゝり。戾つて聞けばやつぱり其人。おのれやれ追付かうと。跡追うて來たれば此川留め。關助どうせうぞいの〳〵。オヽお道理だ〳〵御尤もでござります。何が拙者めも。あなた樣の行方を。尋ね廻る內。一昨日の夜の夢に。淺香殿に廻り逢ひ。則ちあなた樣は嶋田の宿。戎屋德右衞門方にござると。言はしやると思へば目が覺め。シヤ何でも不思議と。夜を日に繼いで參つた甲斐あつて。すつての事に危ない所を。ヤレ〳〵嬉しや〳〵〳〵なハヽヽヽ。イヤモ。

下郎めがお口にかゝる上は。駒澤様にお添はせ申す。しかし淺香殿は坂東順禮となつて東海道へ尋ねて見える筈。ガお前様にはお逢ひなされしかな。サレバイノその淺香に跡の月濱松で巡り逢うたが。其夜惡者に出合ひ數ケ所の手疵。死ぬる今はにわしを呼び。嶋田の宿には私が産みの親。古部三郎兵衛といふ人あり。この守刀を證據に尋ね行き。秋月弓之助が娘と。名乘つて逢へといふ教へ。可愛やづひに死にやつたわいの。ムヽスリヤ淺香殿には最期とや。ホイ。地はつとばかり驚く内。始終聞き居る德右衛門。詞ムヽそんならお前は。秋月弓之助様の御息女。又淺香といふは。我が娘であつたか。ムン。地と心にうなづき件の短刀。拔く手も見せず腹へぐつと突立つれば。コハ何事と驚く兩人。詞ホヽ御不審は尤も。

ガ先づ〳〵一通り聞いてたべ。ハハア私事はそのお尋ねなさるゝ。古部三郎兵衛と申す者。則ち。あなた様の祖父。秋月兵部様には三代相恩。若氣の誤り奥女中と忍び合ひ。お手討になる所を弓之助様に助けられ。女諸共國を立退き。産み落せしは女の子。貧苦の中に育つる内。二つの年に母は病死。男の手で育てもならず。伯母が方へこの短刀を添へて養子にやりしが。廻り〳〵て思はずも。親が命を助けられし。秋月様へ御奉公。死んでも忠義を忘れず此親を。導きをつたか。オヽ出かしたな。又最前駒澤様の仰せには。唐土傳來の目藥。甲子の年の。男子の生血にて服する時は。いかなる眼病も卽座に平癒との事。則ち。某甲子の生れなれば。我が血汐を以て。件の藥に調合し。早く〳〵あなたへサヽ早く〳〵。地實にもと關助用意の水吞取出し。手負ひの血汐受止め〳〵。泣入る深雪が懷中の妙藥取出し差寄れば。深雪受取りわが夫の情にあまる賜物と。押戴き〳〵。只一口に吞み干せば。不思議や忽ち兩眼開き。蟻の這ふ迄見えすくにぞ。深雪が嬉しさ關助も。フシ悦び合ふぞ道理なり。詞アヽ嬉しや。最早この世に望みなし。いづれもさらば地さらばと刀引廻し。笛のくさりを刎切つて。名のみ流るゝ大井川。フシ水の泡とぞなりにける。地跡や枕に取縋り。わつとばかりに泣く涙。露のひぬ間の朝顔も。開きし此目は盲龜の浮木優曇華の。花にまさりし夫の賜物二つには。吾故この世に亡き人かと。取付き歎くを關助が。諫める後に祐仙が。深雪やらぬと取付くを。首筋摑んで擔ぎ上げ。川へさんぶと水煙。早や明け渡る鳥の聲。山田の

惠みいや增る。茂れる朝顔物語末の。世迄もいちじるし

伊勢音頭戀寐劍

二七

油屋の段

〔解題〕お紺貢の油屋の騷動の實說として關根只誠翁の情死錄に載せてある要領は次のやうである。志州鳥羽の藩醫佐藤某の二男享次郎幼年の頃伊勢の御師孫福九太夫の養子となつて名を齋と改め、寛政四年頃京都へ出て醫術を修業し、同七年秋歸つて開業しようとした折柄友達に誘はれて古市油屋の茶汲女おこんといふに馴染み、のちしば〳〵通ひ、末は夫婦と契つた。此の時大阪の商人で井澤文三郎といふものが參宮の折柄古市で遊びおこんの容色をめでて身請しようとした。これを聞き知つた齋は憤怒して油屋の亭主淸右衞門の母並に下女を殺害し、おこんその他六人に手を負はせて庭口から逃走した。これは寛政八年五月四日の夜の事であつた。そして齋は六日の朝自宅に歸つて自害した、時に廿五歲であつたといふ。

この事件を大阪の角座では近松德叟が脚色して同年八月五日から「伊勢音頭戀寐劍」と題して福岡貢に中山文七、おこんに芳澤いろは、喜助嵐雛助等の役割で演じて大當りであつた。尤もこれより前七月に京四條南側の早雲座で「みやげ川崎踊拍子」と題して興行したが、やはり「伊勢音頭」の方が好評で、のち度々繰返されて今日に及んで居る。

人形芝居の方では天保九年七月廿五日から稻荷の文樂座で「一谷嫩軍記」の切として「伊勢音頭戀寐劍」と題

して上演したのが始めで、松原の段、十内住家の段、福岡屋敷の段、二見浦の段、古市油屋の段から成り、その油屋の切は竹本大隅太夫が語つて居る。

地跡にお紺はうつとりと。暫し思案に暮れ告ぐる。唄遠寺の鐘も身にナホス泌みて。フシカヽリ心。ときつく胸の闇。地やゝあつて顔を上げ。折角思ひ思はれて。二世と交した貢さん。退かねばならぬ浮世の義理。詞昨日伯母御様のお詞には。許嫁の榊様と。祝言をさゝれば。養子親へ義理が立たぬ故。思ひ切つてくれいと。モ事を分けてのお頼み。とは言へ是が何とマア。地一夜流れの仇夢も。別れは惜しき。明けの鐘。炎の中に暮らさうがあなたを退いて片時も。浮世の日影が見られうか。むごいつれない胴慾な。別れといふ字を聞いてさへ。胸にしみ〴〵悲しいとフシ恨み涙にくれ居たる。詞モ此中からもくれ〴〵と。頼ましやんした折紙の詮議。アノ奥の客が慥に持つてゐるとは思へども。帯紐解かねば肌身は許さず。アアマどうせうぞ。オヽそれよ。此身を任すも夫の爲。折紙を取返し潔う自害して。未來の契りを。地待つが樂しみ。長地カヽリせめては死後の言譯と泣く〳〵硯冷泉カヽリ引寄せて。書置く鹿の卷筆も。今宵限りの命毛と。スヱフシ又伏沈み泣き居たる。詞お紺さん〳〵。お紺さんはどこにぞと。地言ひつゝ出て來る遣手の萬野。見附けられじと文ナホス卷取り。心も浮の空封じ。知らぬ萬野は聲高に。詞お紺さん〳〵。オヽお紺さんそこにかいな。そんな事知らずに一遍と尋ねましたわいな。イヤコレシコレお紺さんえ。モ今更いふぢやないが。此間からも勸めてゐるアノ岩次樣。大抵よいお客ぢやないぞえ。それにお前も物好きな。いかに心中立てるとて。アノ滓禰宜の貢づら。オホヽヽヽ。お紺さん堪忍しておくなはいや。ホヽホヽヽ。モ今も今とてお鹿さんが。貢樣から度々の無心狀。誠かと思うて身の皮剝いで打込んだが。モウ悔しいと私への懺悔。コレシコレ。此文を見やしやんせ。アノ口先でちよぼくさと。古市中の女郎の油をねずり廻る油虫。モヽその油虫の事はとんと思ひ切り。

岩次様に靡かんすりやお前も出世。コレシコレお紺さんえ。この萬野は惡い事は勸めませぬぞえ。モウ〳〵ふつつりと思ひ切らしやんせと。地焚付けかける詞の薬。それとは知れど眞顔に受け。詞オヽ成程この狀の樣子では。與の覺めた貢様。そんならお前の言はしやんす通り。岩次様に乘替へうわいな。エヽアノお紺さん。そんならお前様ほんまに岩様に乘替へる氣かえ。何の嘘をいふものかいな。お紺さん。オヽ好きやよやよ〳〵〳〵。ホヽヽヽヽ。コリヤコレ近年の大出來ぢやわいな。お紺さん。オヽよさやよやよ〳〵。ホホヽヽ。そんなら直ぐに奥へ往て。改めて堅めの盃。地サア〳〵お出でと無理やりに。引つ立てられて詮方も涙。フシ隠して入りにけり。地斯くとは知らず。唄うと〳〵と。ナホスフシ戀には心惹かれくる。身の災難に福岡貢。スエ、兎や角案じイみける。詞ム、ウアノ唄は油屋の二階座敷。阿波の客が居續け騒ぎ。テモマア面白さうに唄ひをるなア。ガそれに引替へ心ならぬは萬次郎様のお身の上。今宵につゞまる御身の難儀。お紺に頼んだ折紙の詮議。今に何の返事のないは。岩次の手にないのか。マア何にもせよお紺にちよつと逢ひたいと。地見廻す内より出で來る喜助。出會ひ頭に。詞ヤア若旦那様。オオ喜助かヤ幸ひ〳〵。どうぞ首尾してお紺に一寸逢はしてたも。ヘイ畏りましたと。地奥口見廻し。詞イヤ申し若旦那様。憚りながら一寸あれへ。喜助わしにか。ヘイ。何の用ぢや。モ今改めて申上げまするは如何なれども。いつぞやお國の騒動より。この伊勢路へお引越しなされまして。あなた様には福岡へ御養子。それ故親どもも奉公引いてこの古市にて僅な暮し。その後大病を煩ひ。今際の枕元へ私を呼び。アノ福岡孫太夫様の御養子貢様は。我々親子が古主の若旦那様。隨分ともに心を付けて忠義をつくせと遺言でござります。それで私も。どうぞ御恩が送りたいと存じますれども。モ高が料理人風情の私。其大切なあなた様が。毎日毎夜の遊所通ひ。お紺さんとの浮名は古市中一杯。福岡様には許嫁の奥様もあり。御養子の御身分で。あゝいふお身持ではお爲にならぬ。いつぞは御意見申したいと思ふ折から此お出會ひ。イヤ申し若旦那様。餘りせき〳〵お出でなされます所ぢやござりませぬぞえ。何を猪小才なと思召しませうが。モ斯様に慮外を申しまするも。つゞまる所はあなたのお爲。ホンニ私は夜の

目も合はず。案じてばつかり居りまするわい。ハヽヽヽ。ヤ是はしたり。何事も御存じのあなた様。必ずお氣にさへられてヘイ下さりますな。ムヽスリヤそちは喜兵衛が悴であつたよな。ヤコレハシタリ。モさすれば我が爲にも家來同然。古主を忘れぬそちが意見。悪うは受けぬ忝い。ガマアそれは格別。コリヤコレ大切な一腰。わしが持つて居ては人目に立つ。歸る迄預つてたも。ヘイ私がしつかりとお預り申しました。アヽコレその一腰は青井下坂。エヽそんなら是が。いかにも刀は手に入れども。是に付いたる折紙を騙られ。モ色々と詮議をすれども。今に於て行方知れず。何卒折紙を取返さんと。毎夜爰へ入込むも。若しや詮議の手がかりもあらうかと心を砕く某。コレ必ず他言は無用ぢやぞや。ヤ是は是は左様とも存ぜず。慮外の段はまつぴら御用捨。シテ其折紙を騙つた奴がこの油屋の内に。サ慥にそれとは知らねども。客やと思ふはアノ奥の。コレ喜助一寸耳を貸しや。ニイ。そんならアノ岩次が。コレシイ。密かに〳〵。何かは奥の大騒ぎに。首尾を作るは最究竟。そんなら喜助。若旦那様。サア〳〵こちへと 地 先に立つ。案内につれて福岡貢。フシ 暖簾の内へ入りにけり。地 こなたの障子引きあけて。窺ひ出でたる徳島岩次。何か心に打點頭き。差足拔足暖簾の内。忍び入つて二腰の刀をそつと跡先見廻し。おのが刀と貢が刀。手早やに目釘コッチ〳〵。身を擦替へる即座の悪智慧。暖簾の陰より窺ふ喜助。それと白刄の二腰を。元の如くに差し納め。又も納戸へ フシ 持つて入る。地 お紺は過す無理酒の醉ひに心も亂れ足。詞 岩次様〳〵と。地 呼立てられて出て來る岩次。詞 オヽ岩様とした事が。座敷をはづしてお前はどこへ。アヽイヤ一寸手水に。アノマア嘘ばつかり。エヽ何の嘘を言うてよいものか。詮擽人は北六萬野。ソレ用意よくば早や是へと。地 いふ内奥に聲高砂。謡 相に相生の松こそ目出たかりけれ。ナホス 地 北六萬野がとり〴〵に。道具屋 渡盞盃硯蓋。めい〳〵に携へて。詞 サア〳〵申しお紺さん。岩次様の堅めの盃。地 色直しは直ぐに床入り。詞 サア〳〵媒介役はこの北六。嫁君から飲んで差し給へと。地 無理に突付け注ぎかくれば。怺へ兼ねて駈出る貢。お紺が盃ひつたくり。フシ 落花微塵と投付けたり。詞 ヤイお紺。おのりや此盃しては濟むまいぞよ。オヽ誰かと思へば貢様。お客と盃するがどうして濟まぬえ。イ

ヤサ一通りの盃なら格別。この盃ばかりは差す事はならぬわい。コリヤお紺。おのりや是迄いひ交した事皆忘れたな。モ最前から見て居ればほてくろしい座敷ぶり。エヽもう了簡がと 地 立ちかゝるを岩次は引退け。詞 ヤイ〳〵浮粋禰宜の大馬鹿者め。身が揚詰めの女郎に指でもさゝば。腹も脛もぶち折るぞよと。地 いふに萬野がしや〳〵り出で。詞 コレイナア是し貢様。お前はマアこちの内へ。誰が許してござんしたえ。お前の様な油虫はな。顔見るのも胸が悪い。アイぎえんが悪い。サア〳〵とつとゝ去んで貰ひましよと。地 ずつかり言はれて猶せき立ち。詞 コリヤ萬野。マ味な事いふな。この貢が女郎の油をいつ吸うた事がある。サア〳〵それ聞かう。アノマアしら〳〵しい顔わいな。ヤ是しコレお紺様。最前の文見せてやらんせと。地 いふにお紺が懐より。取出し渡す以前の文。一々貢が見て恟り。詞 ヨウコリヤおれが名を騙つて。女郎のお鹿へ無心の状。何と覺えがあらうがな。イヤ知らぬ。元より譯ある中ぢやなし。こんな文やつた覺えない。あた汚いアノお鹿。風俗といひ面といひ。しつかい猿芝居のお染。あんまり呆れて物が言はれぬと。地 悪口聞いて駈出るお鹿。貢が前に臺臼なり。詞 コレシ貢様。最前から聞いて居ればあんまりぢやぞえ〳〵。アイ。私やどうでお紺様の様に。美しうはないけれど。顔でお客は取らぬぞえ。コレ肝心の時にはな。くつたりお客に堪能さすに依つて。終に一日お茶引いた事はござんせぬ。お前もそれを見込みに。アノ萬野様を頼んで附文。その度々にコヽヽコレ見なされ。此通りにナア。二歩ちよつとお貸し。ソレ又この状に三歩貸し。まだ爰にあるソレ見なされ。また一兩入るのと。モ親にも聞けぬ無心をば。五度十度の 唄 事かいな。エイ何をそれに今更知らぬとは。ソリヤ卑怯ぢやわいな〳〵。筆先でたらし込み。身の皮剝いだ生盗人。エヽ腹の立つ〳〵と。地 いひつゝ兩手に胸づくし。引つ摑む手をもぎ放し。詞 エヽ様々の戯言。身不肖なれども福岡貢。そちらに無心いふ様なおれぢやないわい。コリヤお紺。是には何ぞ譯があらう。譯をいへどうぢや。どうぢやい。オヽお前の内證の文が私の手に入り。腹の立つはコリヤ尤でござんす。ガ申し貢様。お前と私が中は人も知つたサ中ぢやぞえ。金の入る事があるならば。打明けて斯う〳〵と言うて下さんしたら。何ぼ甲斐性のない私でも。三十兩や五十兩の金。ま

んざら否とも言ふまいに。僅か二歩や二歩の端金。お鹿様に無心いふとは。せみす〳〵知れたイヤサ。見下げ果てた心ぢやな。モウ〳〵色も戀もさめ果てたわいた。サそれぢやに依つてふつつりと。お前の事を思ひ切り。岩次様に靡くのでござんす。アイさう思うて地下さんせと。けんもほろゝに言放す。詞コリヤやいお紺。おのりや氣お違うたなおのりや。モ流れの身にも義ある者と思ひ。取交はした起請誓紙。まだ其上に大切な。イヤサ。大事の事まで請合ひながら。わりやそれぢや。エヽイあたどんな違ひました。イヤサ氣が違ひました。アイ性根が腐りましたわいな。モまい〳〵巻い付かずと。早う去んで下さんせと。地口には言へど心には。オヽ道理でござんす、道理ぢやと。言ふに言はれぬ此場の時宜。血を吐く思ひ フシカヽリ押隠す。知らぬ貢は腹立ち涙。傍に北六高笑ひ。詞ハヽヽヽコリヤをかしいわい。客が女郎の物騙して取るとはコイツハ新しいわい。コリヤ新版ぢやわいハヽヽハヽこれがほんの伊勢乞食ぢや〳〵と。地何がな當る憎て口。岩次も片頬にせゝら笑ひ。詞アヽイヤモ聞けば聞く程馬鹿な穿鑿だわい。お紺が心底聞く上は。今夜中に身請けして身が女房。ドレ金の威光を見せうわいと。地お紺が膝を假枕。詞ふんぞらす。ノシ傍若無人。地見るに貢は歯ぎしみ背切り。詞エヽ見違うたあの変たどう畜生。その根性とは知らず。大事を明かしたがエヽ無念なわい。アとは言へおのれに限つて。よもや其様な根性とは知らなんだ〳〵わいと。地睨む眼にはら〳〵



伊　　場

涙。お紺が胸は猶百倍。張裂くばかり
のせぐろしさ。涙まぎらす煙草さへ。
フシカヽリ炎にむせる思ひなり。地納戸
に始終立聞く喜助。刀を持つて走り出
で。詞貴様。モウお歸りなされませ。
悪い事は申しませぬ。サお預り申した
お腰の物と。地差出す刀引つたくり。
腰に差す間も氣はしゆらくら。フシ刀
の違ひに目も付かず。地萬野は傍へ立
寄つて。詞コレシ貴様。お前はもうし
やべり仕舞ひかえ。オヽ氣の毒やの。お紺様を恨みたさるゝ事は微塵もない ら忠孝の二字に引かれて喰ひしばる。
ヤコレシ貴様。一寸こちらへお出でなぞえ。お前のその素寒貧を恨まんせ。詞チエヽうぬ。何ぢやえ。歯をむき出
んせ。サアノ\早うごんせ。エヽ早うモほんに／＼お前の様な貧乏神。片時し。草薬子をひねくつて。何かえ。私
おいなんせ。ヤナニ貴様。最前から段々置くのも内の不吉。サアとつとゝお歸りを斬る氣かえ。面白い／＼。サア／＼
段の失禮。サアお腹が立たう尤もでごり／＼。ようお出でなさつたえ。ヱ何斬られようッサどこから斬りなんす。コ
さんす。ガ私に免じてどうぞ堪忍して煙草入を忘れたのかえ。ドレ／＼／＼リヤ萬野おのれはな。サア斬りなん
上げておくれなさんせ。ヤコレシ貴さ取つて来てあげませう。サア／＼お歸せ。エヽ勝手にさらせと。[illegible]
ん何ぼお前がやき／＼思はんしてゐ。サノ／＼エヽ其にやかれと奥出す門口。て。フシ立歸る。地萬野は跡を見送つ
貸の切目が縁の切目ぢやわいな。アノ 地こらへ[illegible]て刀の柄手はかけながら て。詞サアノ\抽出の[illegible]れた。サ



頭 音

ア岩次様北六様。是からは色直し。お床入りの玉子酒。お紺様も一緒に。サア／＼二階へ／＼と。地言ふもそれ者の フシ髙調子。詞イエ／＼私やまだ岩様に帯紐は得解かぬわいな。ム、スリヤなぜ／＼。サイナア。お前の持つて居やしやんす袱紗包。定めて色の起請か文。それ見ぬ内は疑ひは晴れぬわいな。ナニ是か。アイ。コリヤ大切なアアイヤ。大切な／＼金比羅様の御守。サ金比羅様の御守にもせよ。私に見せて下さんせにや。眞實心が解かぬわいな。テモ扨も女郎といふ者は疑ひ深い者。ハヽヽヽ。ア、是非に及ばぬ。大切な品なれども。そちにしつかり預けるぞ。アイ。地あい／＼合點も一寸遁れ。嬉しさ怖さ胴震ひ。足を踏みしめ段梯子。二階へこそは フシ上り行く。地岩次は跡に窺ひそめ。詞コリヤ萬野。身が刀をはや是へと。地いふに心得暖簾の内。刀抱へて フシ走り出で。地渡すを取つて打眺め。詞ヨウ／＼。コリヤ是身が刀ではない。エ、そんなら貢が取違へて去んだに違ひはないと。地いふに北六勇み出で。詞何ぢや貢が刀を取違へて去んだとは天の與へ。是こそ望む青井下坂。ア、イヤ／＼それが大間違ひだわい。最前密かに貢が刀と身が刀。中子を摺替へ置いたに。取違へて去に居つたがほんの下坂。エ、鈍な。私がちよつと一走り。ア、イヤ／＼申し。そのお使は私が参りませうと。地いひつゝ納戸を出る喜助。詞オ、喜助かよく氣が付いた。貢に追付き腰の物を替へて來い。サ早う／＼と手に渡せば。地ヤまつかせ合點と。フシ駈り行く。地萬野は俄に心附き。詞コレ／＼申し岩次様。お前はマア滅相なお方ぢやわいな。アノ喜助はなア。慥か貢が譜代の家来ぢやといなと。地聞くより岩次は興覺め顔。地サア／＼壺ぢや／＼。岩次様壺とは何壺ぢやえ。水壺かえ鹽壺かえ。エヽ子壺ぢや／＼。コリヤコリヤ萬野周章てな／＼。と言うて身どももあわてゝ居るわい。コリヤ／＼萬野。そちは喜助に追付きて刀を取り。貢が刀と替へて來い。ハイ／＼心得ました。貢に逢うて刀をたくり。きつとお渡し申しませう。ドリヤ。地一走りと身繕ひ褄引上げて。詞オヽイ／＼喜助殿。／＼と 地聲は先。體は跡に心も空足を早めて フシ走り行く。地岩次は跡を見送つて。詞萬野が戻つて來る迄は。皆を相手に二階で飲まう。地サア／＼こちへと引連れて フシ二階へこそは行く跡へ。地フシカヽりまた引返す福岡貢。取違へたる脇差の身は正眞の下坂とも

オクリ知らず。知らねば氣もそゞろ。門の戸引明け内に入り。詞コリヤ喜助々々。萬野は居ぬか。エヽ居らぬか。地と見廻す折しも。遣手の萬野。フシ息もすたく〳〵立戻り。地顔見合はせて。詞ヤア貴様。お前もいかに周章てるてゝ。腰の物を取違へるといふ様な。麁相な事があるものかいな。その刀こつちへと。地取りにかゝるを突放し。詞イヤ身が刀から先へ渡せ。エヽマア渡さぬとて取らずに置かうか。エヽこの刀と。地取りにかゝるを續けざま。打てばぱつしり鞘割れて。思はず知らず一刀。詞アヽちめた。オヽウ貴様お前斬りなはつたなア。アレイ〳〵と地泣叫ぶ。聲立てさせじと口に手を當て。見れば血汐に身はくれなゐ。詞ヨウヤヽヽヽ。南無三手が廻つたか。地モウ百年目と又ずつかり。斬られながらに逃行くを。髻摑んで引戻し。肋骨をぐつと一刳り。フシその儘息は絶果てたり。地折しも奥より北六岩次。跡に續いて出て來るお鹿。詞岩次さん北六さん。〳〵と。地尋ねる向うに立塞がる。詞ヤア貴さん。アレ人殺しぢや。〳〵。アレ〳〵と地いふ聲に。コリヤさせぬわと北六岩次。留めにかゝるを身をかはし。左へ廻る北六を。肩先さがりに斬付くれば。こりや叶はぬと氣轉の岩次。フシカカリ奥庭さして遁れ行く。タヽキお鹿は足も地につかずこけつ。轉びつ這廻る。地おのれお鹿といふ聲に。思はず知らず立上り。逃行く後を遁さじと。踊り上つて。フシ幹竹割り。地拍子物音聞きつけ勝手より。起き番男仲居下女。物騷がしきは何事と。差出す仲居が手燭の光。振向く拍手貴が顔。見るより三人足わな〳〵。詞ヤレ人殺し。〳〵。〳〵。地といふ間も待たず左より。右の腕を斬落すうんと仲居が即死の有様。見る兩人がうろたへ。廻り。奥と表へ逃行く男。外へ出でなば面倒と。聲をもかけず後袈裟。返す刀に下女が脊。水も溜らず斬り。落す。地音も分らぬ寢とぼけの。小女郎が出る足元に。血に辷つて。ばつたりと。倒ける拍子にお鹿が傍。詞オヽ此樣な所に水を流してオヽ冷めた。オヽ爰に寢てぢやは誰ぢやいなア。コレ起きんかいな〳〵と。地言ひつゝ立寄り見て恟り。詞アレお鹿さんが斬られてぢや。アレ〳〵といふ間もなく片足。地丁ど斬放せば。片足立ちに。一二。三よろ〳〵〳〵と。鉢前のスヱ手洗鉢に取付いてフシその儘。息は絶果てし。フシ無慚といふも餘りあり。地サア此上は岩次一人。取逃しては。刀の有所。詞この一間ナホスこそ。ムそれと

詞顔ふ[illegible]容。[illegible]ヤア、[illegible]坂の刀はいづくへやりしぞ。眞直ぐに[illegible]ホヽ、そんなら宵のつれなきは。サイナ
一杯機嫌に[illegible]付けられ[illegible]アノお前に忠義が立てさせたさ。どうや
[illegible]の火の[illegible]、、、、[illegible]ア申し私は何にも知りませぬ。ヤア今ら[illegible]うやら岩次を騙し、首尾よう手に
コリヤ灯が消えてあるわい。地と言ひ[illegible]入るこの折紙と。地いふに貢はハヽア
つゝ出づる[illegible]とて言はさいで置かうかと。地いふ内今更に スヱカヽリ後悔。涙の フシカヽリ折
リヤたまら[illegible]に來る人音に南無三と。ためらふ隙にからに。地喜助は心ならされば。若し
岩次と心得。フシ追うて行く。地投節寢[illegible]やと思ひ立戻る。詞喜助か。ブウ若旦
間より出づる[illegible]那。シテこの有樣は、どうも堪忍たら
心得て。詞申し此人さんわいな。どこ[illegible]ぬ故。喜助救してくれいと。地刀の柄
へ往きなんす。申しそちらは[illegible] スヱ拳を[illegible]に手をかくれば。その手を押さへて。
すよ。落ちなんすなえ。危ないざます 驚き心も空[illegible]詞コリヤ狼狽へて何となされます。オ
よ。水さいますか。コレシ水はこちら 詞貢さん[illegible]ヤアお紺か。地覺悟致せとオ狼狽へた。最前そちに預けた刀。サ
にあるわいな。と 唄扱も脇へ。しども 突きかける。詞マア〳〵待つて下さん それはそこに持つてござるのが[illegible]の下
なき。[illegible]せいなア。サア〳〵腹の立つは尤もな 坂。ヨウそんなら是が。エヽ有難や〳〵
ナホス振返つて拜み打ち。客はふ〳〵 れど、是[illegible]には々々譯のある事。ヤア何い な。サア申し二色ともに揃ふ上は。一
樹木の陰に。息を詰めてぞ[illegible] 譯の事と。地又振上ぐる刀の下コレイ 時も早う萬次郎樣へ。早や〳〵お渡し
コハ心得ずと燈籠の陰にすかして。憶 ナア。詞マア氣を鎭めてとつくりと。なされませ。喜助お紺。段々の心遣ひ
に岩次ごさんなれと、[illegible]摑み引出し これ[illegible]と。[illegible] 何にもいはぬ。チエヽ忝い。シテ此場
フシ上に差付けにじり付け。詞サア下 手に取上げ。詞ヤアコリヤコレ折紙。の首尾は。ヘイ私が呑込みました。跡

構はずと蔦次郎様へ。ム、然らば喜助。尋ねしに。爰へ出たは百年目と。地打 少しも早う其刀をヽ、言ふにや及ぶ。地跡を頼むと言捨てゝ。フシ立出でんつてかゝれば切拂ひ切結び。際(すき)を見合 詞忠義を立つるも二人の情と。地心もとする所へ。地小陰をぬつと德島岩次ひ一刀(ひとかたな)。うんと倒るを乘つかゝり。恨 勇む足勇む。忠義に心勇み立ち屋敷を。ヤアどこへ〳〵。詞大事の刀こつちへみの刀受取れと。刺通されて七轉八倒(しつてんはつたう)。さして急ぎ行く渡せと。打つてかゝれば身をかはし。フシ心地よくこそ見えにけり。地傍にシヤよい所へ德島岩次。おのれを方々 お紺は心せき。夏の夜なれば早や明方(あけがた)。

浦里 時次郎 明烏六花曙

二八

山名屋の段

〔解題〕 明和六年七月三日に、幕府御賄方伊藤伊左衛門の悴伊之助(廿一歳)と吉原京町二丁目蔦屋抱へ三芳野と情死したのを材題として最初に淨るりに綴つたのは新内節の「明烏夢泡雪」(本卷同項參照)であつた。これより浦里時次郎の名は名高くなつたと共に、新内特有の物のやうであつたが、嘉永四年二月市村座で「明烏花濡衣」の外題で坂東しうかの浦里、八世團十郎の時次郎で淸元太兵衛が淨るりを語つて大好評を博し、又同年三月大阪の大西芝居でも「明烏夢泡雪」を興行して居る。(只誠翁の情死錄には弘化四年興行とあるが、大阪歌舞伎年鑑には見えて居ない)。かういふ大勢に刺戟されたものか、嘉永六年二月大阪新築地淸水町濱の竹本綱太夫の

操芝居で、妹脊山の切として「明烏雪の曙」と題して山名屋の段を出し、口を竹本田喜太夫、切を竹本咲太夫が語つてゐる。これが人形芝居の明烏の始めらしい。越えて翌安政元年四月道頓堀の竹田芝居で興行の時に外題を「明烏六花曙」とした。これが今日行はれる外題である。詞章は新内の明烏を取入れてある點もあるが、大分義太夫式に改められて筋も複雜になつて居る事は本文を讀めば分る。

一座敷も靜かなる。節雪はまだ。殘りて寒き春の風。吹き晴れぬ身の浦里が。スエカヽリ湯上り姿その儘に。禿の綠打連れて。上る二階の　フシ部屋の内。地それと綠が煙草盆。長地カヽリ煙に憂さは晴らしても晴れぬ思ひの時次郎。文彌誰が戀人と夕間暮れ。せかれて今は山名屋の。浦里にさへ恨めしく人目の關を忍ぶ身の。雪の夜道を逐ひ來て。塀の外面に。フシしよんぼり。と。詞ア、浮世の中とは言ひながら。水の流れと人の行末。先達て御主人の重寶。臥龍梅の一軸。紛失したる我が過り。地それ故に勘當受け。忍び〳〵に詮議すれども。今に於て手がゝりもなく。浦里に迄憂き苦勞。とても生きては居られぬ身。せめて綠が顏なりとも。餘所ながら暇乞ひ。ア、思ひ廻せば廻す程。これ迄契りし甲斐もなし。通ひ廓に咲く花の色香も深く馴染めし。浦里にまで今は早や逢ふ事さへも儘ならぬ。浮世の中の有樣かと。スエテ身の成果ての悔み言。地それとも知らずナウ綠。詞そなたに渡した昨日の文。見附けられぬ樣に。持つて往てたもつたか。ソリヤ氣遣ひござんせぬ。時次郎樣に。直に渡しました。ア、コレ聲が高い。もそつと靜に言やいなう。アイ。地と綠が心得て傍をそつと高欄より。塀の外面を見おろして。目早く綠がアレ申し。詞時樣が塀の外に。來て居さんすわいな。地と聞くに嬉しさ浦里は。走りかゝつて高欄に。手をかけながら伸上り。詞ナウ時樣。よう逢ひに來て下んした。地と言ふに思はず時次郎。振仰向けど松ヶ枝に。せきくる涙はら〳〵。と互に積る戀の淵　フシ心に濡るるばかりなり。詞イヤ申し時次郎樣。どうした因果でこの樣に。堰きにせかれて逢ひたさの。猶いや増る戀の闇。地初會にふつと可愛さの。長地身にしみ〴〵となつかしく人目の闇の夜着の

中明けて悔しき。鬢の髪ついとき上ぐる櫛の歯も。言ひ度い事の數々も今は言はれぬ二人が中。戀しい人を振捨てて一人。ぬる夜の手枕も。彼の邯鄲の枕なら。夢になりともせめてまあ。添臥す事もあれかしとわしや。幻に見ようとて惚れはせぬものあぢきなやと。我が身をとんと高欄にもたれかゝりし立姿。柳の枝に春雨の風吹き添ゆる。フシ風情なり。地男は漸う涙を抑へ。詞いつ迄斯うして居たとても。限りもなき互の中。長居する程そなたの身づまり。とは言ひながらその絲。地親ともえ言はず親方の口顔を忍び子心にも。さぞや恨みん不便やと。くどき歎けば二階には絲を膝に引寄せて。はつとばかりに取亂し。フシ又も涙にむせびける。地折から來かゝる足音にはつと驚き立上る。氣轉きかして禿の絲。延を丸めて塀の外投げやる知らせに時次郎。樣子あらんと用水のフシ陰に隱れて忍び居る。地部屋の戸明けて髮結のお辰。それと見るよりオヽ花魁え。詞さぞ待遠にござんせう。最前から氣がせいて。早う來たいと思ふ程意地の惡い今日はたんと仕事もつかへ。又あつちこつちの部屋々々から。呼びに參じてあるけれど。そこ〳〵にして拔けて來やんした。しかし花魁。お前はきつう濟まぬ顏。そして目元もうるみ。どこぞ惡うござんすかえ。コレ絲。ちと氣をつけて。藥でも上げやいなう。アイ最前から。さう思うて居さんすけれど。藥はいやぢやと言ひやんす。オヽ絲の言やる通り。ちと氣分も惡けれど。藥飮むのも厭になり。櫛入れるのもきつう好まぬ程に。お辰樣。今日はまあ止めにしやんしよわいな。オヽさうぢやてゝ。其まあ髱のばらつき樣。ついちよつと櫛入れたら。お前の心の縺れ髮。モウさつぱりと氣も晴れさうな事ぢやぞえ。オヽお辰樣の言はんす事わいの。たとへ縺れる氣が晴れても。斯う結び目が弛んでは。ついばら〳〵にならうかと。それが悲しい。ホヽヽヽホ氣にかゝるわいな。サア其氣にかゝる結び目を。しやんと留めるが私が手の内。マア鏡臺に地と無理やりに。フシ勸められても。タヽキ進みかね向ふ鏡は曇らねど。曇る。冷泉思ひの海山に。茂りてつらき憂き涙。流れの身には猶積る。フシ雪風。寒き塀の外。通ふ心の穗に出づる。色目を絲が汲取る目遣ひ。そらさぬ顏で吸付くる。フシ煙草の煙容に吹く。地お辰もさすが物馴れし。世間咄を取交ぜて。詞イヤ申しおいらん。モウ世間の事と言ふものは。其身にな

らねば知れぬもの。わしも昔を思ひ出せば。まんざら斯うでもなかつたが。斯う言へばをかしい話する樣なれど。どうした事やら常々から。お前の事が氣にかゝり。イヤサ。お前に聞いて貰ひ度いと思うて居た話。マア一寸聞いて下んせ。アノわしがやうな見つとむない女子でも。譬にいふ鬼も十八とやらで。どないか思うてくれたが。今の主ぢやわいな。ホヽヽ。モウ色々と口説かれ。マア〳〵今のが濟んだと思はんせ。サア深うなつてきて。モウ何の事はない。指切り鎌切りといふ樣になると。コリヤ友達に斯うした事で金が入る。二歩貸せ。三歩貸せ。サアしまうた。コリヤ小遣ひの錢箱にしられたわい。と思うたれど。サア迷うたが因果。エヽ儘よ。若い時は二度はない。と仕面工面して。とうど小袖簞笥もいつの程。狀の取りやり澤山に。紙屑が一杯詰つた揚句には。心中に出ようと乘が來た所。常から中よい友達が留めてくれたが幸ひとなつて。今では女夫が氣安う暮す。モウ斯うなると榮耀の八百。モウ一寸氣に入らぬ事があると。ヤイ出て失せい隙やるわ。とモウ憎てらしい。愛想もこそも盡果てる。千年の迷も覺める。とよう言うた事ぢや。とサ思ふも年の功だけぢやわいな。オヽお辰樣とした事が。わし等が樣た勤めの身で。可愛と思ふ人もなし。思うてくれるお客も。亦廣い世界にないものちやわいな。サア〳〵そこちやわいな。さうは言ふものゝ花魁も。今が戀盛り。每夜々々のお客にも。深い可愛。モウ命もやり度いと言ふやうな主が出來ると。サア何が親方は嚴く。逢はれはせず。せうことなしに突詰めて。長い命を短うする事。わしが身に覺えがある。殊に又その內此緣といふ樣な。可愛らしい子でもあると。無分別は出されぬ〳〵。義理といふのも。可愛と言ふのも。命あつての事いな。オヽ是はしたり。つい話に身が入つて。髱直すのを忘れた。地とつい立上る筋立の。氣さくた意見浦里が。目には泣かねど心には。滿つる淚の增鏡 フシ月も哀れと曇るらん。地緣もなく〳〵櫛箱を。取片付けばお辰も共に。波取り淚立上り。詞ドレ〳〵。是から向ひの東屋へ往て參ぜう。花魁さらば。と地言ひつつも。おりる梯子を廻り緣そつと切戶を明けて出る。お辰は二階を振返り。詞コレ緣。勝手へ廻ると隙が入る。此切戶から向ひへ行く程に。部屋でナソレ。しつぽりと締めてたもと。地小陰に忍ぶ時次郎を。無理に押しやる切戶

口。ぱつたり閉めてさあらぬ體。傘ふりかたげ小提灯。フシさげてお栄は急ぎ行く。地人の情に引入れられし時次郎に段梯子としや遅しと駈上り。走り寄つて浦里が。手に手を取つてしめ泣きにスヱテ只むせび入るばかりなり。地涙ながらに時次郎。詞何時まで口說き歎いても。返らぬ今の我が身の不運。地とても生きては居られぬ此身。そたたも共にと言ひ度いが。表共二人一緒に死すならば。跡で。可愛やこの繚は。どうなるものぞ不便やな。今死ぬる身を永らへて。我が亡き跡で一遍の。回向を頼む浦里と。歎く程せきくる涙ながら。ソリヤあんまりぢや情ない。今宵別れてわしが身や。可愛繚は何とならうと思はんす。死なねばならぬ覺悟なら。三途の川もコレ。この様に親子手を取り諸共と。なぜに言うては下さんせぬ。

氣強い男とばかりにて。身を隱はして。る足音浦里が。胸に轟き時次郎を。無
立ち寄たる ウシいぞ。思ひやられけり。地に炬燵へ忍ばすれば。繚は機轉有合
地折から禿子も障として。地浦里様はす。フシ夜着打着せて立退けば。地



浦里折檻の場

〳〵。ちよつとお目にかゝり度い。ち さあらぬ躰に 詞オ、おかや様としたやつと下りて下んせ。はやう〳〵と 地 ことが仰山な。何の用でござんすえ。せはしなく。わめきながらも段梯子上 エ、何の用。何の用とはしら〳〵し

い。サアお前にちよつと用がある。旦那様が呼んで來いと言はんした。緑も一緒に。きり〳〵ごんせ 地 と引立てられ。長地 何といらへも浦里が心を殘す炬燵より。胸の動悸のやるせなく。禿の緑諸共に。呵責の鬼に追つ立てられ。オクリ しをカヽリ〳〵立つて行くあとから。あたりを睨むかやが目の。光り輝く。奥座敷引立て。こそ 三重 行く空の。長地 闇はあやなき浦里が。ふさがる胸の憂き思ひ。タヽキ 足もしどろに震はれて。冷たさ怖さ禿の緑。木靈にひゞく駒下駄の音も。するどき縁先の。障子明ければ主の勘兵衛。白髪交りの頭丈親仁。火鉢に差込む鐵橋のさも物凄き。フシ その顔色。地 見るに二人ははつとばかり。氣も魂も消入る思ひ。胸おししづめ縁がはに。手をつかゆればじろりと見て。詞 コリヤ浦里。そちに尋ぬる用事といふは外でもない。わりや時次郎といふ毛二才めに。何ぞ頼まれた事がサあらうがな。有様に話して聞かせ。と 色 問はれてはつと浦里が。暫く胸を フシ 撫でおろし。詞 旦那様のお詞なれど。私や誰にも頼まれた。覺えは更々ごさんせぬわいな。フンとても此分ではぬかし居るまい。ヨシ〳〵。コリヤおかや。最前言附けた通り。庭の立木にくゝし上げ。白状させよ 地 と鋭き詞。アツとおかやが立寄つて。泣入る浦里引起し上帶といて縛り上げ。雪持つ松の荒皮も フシ 喰入るばかりくゝり付け。庭に有合ふ竹箒。振上げてサア浦里様。詞 もう叶はぬぞえ。有様に白状さんせ。アノ餓鬼の様になつて居る時次郎めに心中立て。意見しても抜け歩き。其お報いが來たのもコレ。わしが業ではごさんせぬぞえ。必ず恨んで下んすな。日頃のことは扨置いて。最前も旦那様にわつつ口說いつ。詫言してもお聞入れ遊ばさぬ。白状さんすりや其通り。痛い目せぬ中。サ言はんせ。地 と嚙付く如く罵るおかや。何といらへも泣入る浦里。エヽしぶといと振上ぐる。箒持つ手に取縋る。緑を突退け刎退けて。りう〳〵はつしと打叩く。叩き立てられ浦里が髪も形も取亂す雪の。肌にいとゞ猶。見るに悲しさ稚氣に。主の方を伏拜み。おかやが裾に取付いて。もう堪忍なされて上げまして。下さりませと歎く緑を引つ摑み。おのれも共に見せしめと。上締の紐引きほどき後手に縛り付けたる有様を。見るに不便と時次郎。もう是迄と高欄より。飛んで下りんとする處。浦里目早く。詞 アヽ。コレ今こた様が出やしやんして。イヤサ今こた様が縛

らんじた緣は可愛。サア可愛と思うて居さんしよけれど。おかや様はお主の手前。ナサア夫ぢやによつて惡い〱〱。地と目の中で知らすを悟る時次郎。出るに出られぬ此場の時宜。かゝろ歎きも我故とスヱテ蒲團に喰付き泣き居たる。地物をも言はず主の勘兵衛。鐵橋提げ庭の面。泣沈みたる浦里が。髻掴んで聲荒らげ。詞ヤア斯様に嚴しく折檻するも。おのれが心に覺えがあらう。拔前裏の切戸から。忍び込んだる時次郎。この勘兵衛が預り置いたる金岡が一軸。詮議などとは片腹よれる。コリヤ。あれを見よ。床にかけしは金岡が一軸。指さす事もいつかな叶はぬ。サア浦里。わりや時次郎に頼まれしに相違ない。サア左様な事頼まれし。覺えはござりませぬわいな。ニヽしぶとい女郎め。とてもおのれでは吐し居るまい。ア、聞けば時次郎めと汝が中の。眞實の子といふ事は知れてある。サア緣め。その時次郎はどこに居る。それからぬかせ。イヤ知りませぬ。アコレ申し。緣が何の知りませう。ア、イヤ〱。お前が傍に居ながら。緣が知らぬとは言はさぬぞえ。オ、それ〱。サア白状しをれ。地と言ひつゝはつたと打据ゑられ。ア、術ないわいなう。サア苦しくばぬかせ。イヤ知らぬ。コレ申し花魁。詫言して下され。死んだらもう逢はれぬ父様。地逢ひたい見たいと子心に。親を慕ふ心根を。傍で見る目の浦里より。こなたの二階に時次郎。オヽ道理ぢや。是にと口の內。聲をも立てず喰ひしばる。とは知らず主の勘兵衛。詞ア、何をいふやら耳へは入らぬ。サア小びつちよめ。思ひ知らさん。ヤ是くらへ。地と鐵橋振上げ續け打ち。打据ゑらるゝ悲しさは。此世からなる八寒地獄。大焦熱の苦しみに息も。絕えぐ絕入る緣。逃げんとすれど締めからむ。か弱き背中厭ひなく强氣の勘兵衛引掴み。はつし〱と打据ゆれば。惜しや色増す若緣アツト一聲倒れ伏す。さしもの勘兵衛フシ呆れ果てにがり。切つて座に直れば。浦里重き顏を上げ。誰を恨みん身の罪科。戀故今のうき苦痛。わが身一つはいとはねど何にも知らぬ此緣。かゝる憂目を見せるのも皆わしから起つた事。堪忍してたもこらへてたも。子供心に聞分けて。親は目先にありながら陽氣浮氣の酒事に所體くづして殿御の事。逢ひたい見たいとしどもなき母を待つたがそなたが因果。因果同志が報い來て。惡緣深き契りぢやと。前後もさらに辨へず。庭に喰付き伏轉び流す淚は春雨に。雫

傍け フシ寢すばかりなり。地欠伸まぜりにおかやは立寄り。詞テモしぶとい子やなア。とても白狀せぬからは。おのれも次手に冥途の供。と地又も帯を振上ぐる。折から來かゝる手代彦六。此體見るよりコリヤどうぢやと走り寄つて引退くれば。おかやはむつとしコレ彦様。詞お前はマア何で浦里が。肩を持ちに出やしやんした。へ、無躾なおらこの手代。貴様たちに用はない。まつとそちらへ寄つて居や／＼といふに。へ、、、。憚りながら此手代が。旦那へ一寸お願ひがござります。エ、何でござりますわい。ム、アノ可愛らしい。アノ浦里ではないアノ緑。また浦里は常々から私が。アイヤ常々から氣質はよい者でござります。ヘイそこを見込んでこの彦六が。アイヤ折檻は手代の役。白狀は私が致させまする。

どうぞお任せ下さらば。ヘイ／＼＼有難い仕合せ。地といふに主は打ちうなづき。詞ム、外の者なら赦さねども。暫しの内は彦六。おかやそちら二人に預け置く。きつと白狀致させよ。その間に我は休息せん。と詞おのが住家の罪科も。後日の難は兩人に讓る心の奧の間の フシ襖押明け入りにけり。詞跡見送つて彦六が。浦里が傍によつつく這ひ。詞コレ今旦那が何と言うたえ。外の者なら赦さねども。暫しの内は彦六。その方に預け置く。何とどうぢやえらい者ぢやあらうがの。ぢやに依つて。常々おらがいふ様にさへすりや。此様な酷い目に合はすまいに。イヤ冥。おかやが素振を見て。わが身とおれと[illegible]。コレ腹立ちやんなや。姿が辛抱ぢやわいの。廓にある中ぢやがな大事ないがな。こゝは

又おれ次第ぢやがな。ヤコレお浦。そ様さへム、と言や。コレこの手代が。ノソレ深き心のありそ海ぢやモウ／＼＼女房の様に。新内思うて居るに情ない。エたぞとへ、へ、／＼。コレ／＼彦六様。旦那に請合ひたから。白狀さゝうとはしもせいで。浦里さへ見りやべた／＼と見苦しい。わしが心の思ひのたけ。堪能さゝうとはしもせいで。あた面憎い。お前に任して置いたらば。この白狀は得さすまい。ドレわしが代つと地立寄るを。取つて突退け詞どつこいさうはならぬわい。ヤ又貴様のいふ事ぢやが。その御面相とした事が。惡指宣德の向ふ獅子見るやうな面をして。この彦様に惚れたとは。旦那の手前も面目ないわい。それよりマア浦里が。縛から解いてやろ。と詞後へ廻るをおかやが取つて突退くれば。帯追つ

取り會釋なく。おかやが腰骨めつた打ち。叩き倒され雪まぶれ。忽ち凍え取詰めて フシうんとばかりにどうと伏す。地其間にちやつと彦六が。二人のいましめ解きほどく。はずみに緣は目を開き。ヤアかゝ様はそこにか。と聞いて浦里夢見し心地。まだ生きて居てたもつたかと。緣を膝に抱き上げ。フシ嬉し涙ぞ限りなき。地彦六は出かし顔。詞斯う二人を助けたからは。斯うしては居られまい。若しも知れたら。おれを縛つて斯くの通り。ヤアこいつは壺ぢやわい。とても遁れぬおれが身の上。詞ノリ君ム、いつそ二人を連れて退き。を我らがかたげて出て。二人しつぽり暮すなら。雪に凍えて死すとても。だんない〳〵コレ大事ない。ほんに忘れた臍くりの。路銀を取つて來る間。爰を離れず待つて居や。見付けられなと。

ナホス地足早に。おのれ一人が呑込んで。フシカヽリ勝手へ走り入る跡は。こはさひやいさ身はわな〳〵。見やるあなたの二階より。忍び。忍びて屋根傳ひ。傳ひてたわむ松が枝も。今宵一夜のかけ橋と。足もそゞろに定めなきオクリ何なく。下りくる時次郎。見るより二人は飛立つばかり。詞ヤアお前は時次郎様。いつの間に。ア、コレ聲が高い。最前から何事も殘らず聞いた。可愛二人が憂き目に逢ふも。皆我ゆゑと悲しい中の悦びは。最前主が言ひしを。二階で聞くや否や。忍び入つてよく見れば。是こそ誠に日頃尋ぬる。金岡が自筆の一軸。エ、忝いと。人無きを幸ひに。我が手に入りしはそなたの蔭。コレ。地斯う〳〵と呼き合ひ。庭へ折しも足音に。機轉の浦里行燈の火。吹消す合圖に彦六が。探り足してコレ〳〵お浦。

詞是さへあれば一飛びに。そ様と一緒に抜けそぢや〳〵。幸ひ裏の切戸から。二人は先へ出で給へ。我らは最前見て置いた。アノ床の間の掛物を。せしめて來る内この銀子を。必ずきつと預けると。地財布を渡し彦六が。奥へ行く跡浦里が。緣が手を引き切戸口。出づる後に時次郎。虎口の難をフシ遁るゝ思ひ。地奥をうろ〳〵彦六が。掛物なければとつかはと。出づる足元行當り。拍子に氣の附く遣手のおかや。ヤア彦様かいのとしがみ付く。顔見て愕り騒ぎ出し。ヤア桑原々々助け船と。叫ぶにこなたは又愕り。緣を背に時次郎。サアおぢや。ござれと頷き合ひ。互に地手に手を鷄の聲。いづくを指して行く空や。早や。東雲の明烏。飛ぶが如くに遠近や。後の。噂や殘るらん。

卅三所花の山

壺阪靈驗記　一九

澤市内の段・壺阪寺の段

〔解題〕西國卅三番の札所の第六番なる大和壺阪寺觀世音の靈驗記で、德島縣教育會の「義太夫司齊井」によれば、明治八年に成り、作者は加古千賀で當地櫻瀬の添削となつて居る。千賀女は豐澤團平の妻女であつたが、團平はこれに作曲し、明治廿年二月十日から大阪博勞町稻荷の彦六座で、大隅太夫が團平の三味線で語つて大好評を博し、爾來大隅太夫によつて度々語られていよ／＼名高くなつた。正本は明治廿四年七月刊行で、作曲初代豐澤團平、著作者加古千賀と奥附にある。これを始めて歌舞伎に移したのは明治卅一年の春で、坂東鶴助が大隅の淨瑠璃に刺戟された結果で、京都の四條芝居上場が最初であるといふ。

ニ上り唄「夢が。浮世か浮世が夢か。夢てふ里に。ナホスフシ住みながら。詞住めば住むなる世の中に フシよしあし曳きの大和路や。壺阪の片邊土佐町に。澤市といふ座頭あり生れ付いたる正直の。琴の稽古や三味線の。糸より細き身代の。薄き煙の營みに。妻のお里は健やかに。長唄カヽリ夫の手助け賃仕事つゞれさせてふ洗濯や。糊かひものを打盤の。フシ音もかすかの群しなり。眼鳥の棲。鐘の音さへ身に泌みて。思ひ出す程。涙が先へ落ちて流るゝ妹脊の川を。詞オヽ、是はく／＼澤市様。今日は何と思うてやら。三味線出して。よい機嫌ぢやの。ホヽヽヽヽ。ナ、お里か。そなたアノおれが三味線弾くを。よい程嬉に見ゆるかや。アイナア。ハテナア。おりやそんな苦労や無いわいの。セヤく／＼氣が詰つてノヽ。いつそ死んでものけう。ニヽ。イヤサアノ死んで了ふ程。氣が塞いでならぬわいなう。

イヤコレお里。わしやそなたに。チト尋ねたい事がある。マア〳〵下に居や〳〵。ハテさて下に居やいなう。外のことでもないが。いつぞは聞かう聞かうと思うて居たが。丁度幸ひ。光陰矢のごとしとやら。月日の經つはア、早いものな。アソレわが身とおれが。カウ一緒になつてからモウ三年。地稚い時より許嫁。互に心も知つて居るにマなぜ。其様に隠しやるぞさつぱりと打明けて。言うてたもとどこやら濁る詞のはし。お里は更に合點行かず不審ながらに。詞コレ澤市様。そりやお前何をいはしやんす。嫁入してから三歳の間。モほんに〳〵露程も。隠し立てした事はござんせぬが。それともに何ぞ又。お氣に入らぬ事あれば。言うて聞かして下さんせ。サそれが夫婦ぢやないかいな。ムヽさう言やればこつちも言はう。オヽ何なりとも言はしやんせ。オヽ言はいでか。コリヤお里。マよう聞けよ。われと夫婦になつて丸三年。毎晩七つから先。寐所へ手をやつても。つひに一度も居た事がない。ソリヤもうおれは此様な盲目。殊にえらい疱瘡で。モ見る影もない顔形。どうでわれの氣に入らぬは無理ならねど。外に思ふ男があらば。さつぱりと打明けて。言うてくれたら此様に。何の腹を立てうぞい。尤もわれとおれとは従兄弟同士。專ら人の噂にも。アノお里は美しい〳〵と。モ聞く度毎におれはもう。よう諦めて居る程に。悋氣は決してせぬぞや。コレどうぞ明かして言うてたもと。地立派に言へど目にもるゝ。涙呑込む盲目の。フシカヽリ心の内ぞせつなけれ。聞くにお里は身も世もあられず。縋り付いて。詞エヽソリヤ胴慾な澤市様。いかに賤しい私ぢやとて。現在お前を振捨てゝ。外に男を持つ様な。そんな女子と思うてか。ソリヤ聞えませぬ〳〵。エヽ聞えませぬわいな。モ父様や。母様に別れてから。伯父様のお世話になり。お前と一緒に育てられ。三つ違ひの兄さんと。地いうて暮してゐる内に。情なやこなさんは。生れも付かぬ疱瘡で。詞眼かいの見えぬ其上に。地貧苦にせまれど何のその。一旦殿御の澤市様。たとへ火の中水の底。未來までも夫婦ぢやと。思ふばかりかコレ申し。お前のお目を治さんと。此壺阪の觀音様へ。明の七つに鐘を聞き。タヽキそつと抜出で只一人。山路いとはず三年越。せつなる願ひに御利生のないとは如何なる報いぞや。觀音様も聞えぬと。今も今とて恨んで居た。わしの心も知らずして。外に男がある様に。

今のお前の一言が。私は腹が立つわいのと。口説き立てたる貞節の フシカヽリ涙の。色ぞ減なり。地始めて聞きし妻の誠。今更なんと澤市が。詫びの詞も涙聲。詞アヽコレ女房ども。何にも言はぬ堪忍してたも。誤つた。〱わいなう。モウさうとは知らず。不具の僻に愚痴ばかり。地コレ堪へてたもれとばかりにて。手を合はしたる詫び涙。フシ袖や袂を浸すらん。詞アヽコレ連添ふ女房に何の詫び。お前の疑ひ晴れたれば。私や死んでも本望ぢやわいな〱。イヤモウさう言うてたもる程。わが身の手前面目ないわいなう。ガそれ程にまで信心してたもつても。おれが此眼はコレ。マ治りはせぬわいの。エヽ。ソリヤマア何を言はしやんすぞいな。この年月の憂き艱難。雨の夜。雪の夜霜の夜も。厭はぬ私が跣参りも。

みんなお前の爲ぢやぞえ。サア。それ程に祈誓をかけ。願うてたもつた志。有難いとも。嬉しいとも。其貞節なそなたをば。この年月の廻り根性。觀音様ちやと言うたとて。罰こそあたれ何のマア。此目が明いてたまるものか。エヽ何のいな。私の體はコレイナアコレ。お前の體も同じ事。そんな愚痴を言はうより。ちやつと心を取直し。觀音様へ共々に。お頼み申して下さんせ。〱。地と夫を思ふ貞心の。フシ心遣ひぞ哀れなり。地澤市涙にくれながら。オヽ過分なぞや女房ども。詞さうそなたが一心の。据つた上は御佛の。枯れたる木にも花が咲くとやら。見えぬ此目は枯れたる木。アヽどうぞ花が咲かしたいな。と言うた所が。罪の深いこの身の上。せめて未來を。イヤサアノ女房ども。地手を引いてたもいさ〱。といふ

に嬉しく女房が。身拵へそこ〱に。勞はり渡す細杖の。細き心も細からぬ。誓ひは深き壺阪の御寺を。さして。三重辿り行く。地傳へ聞く壺阪の觀世音は人皇五十代。桓武天皇奈良の都にましまず時。御眼病甚しくこの壺阪の尊像へ。時の方丈道喜上人一百七日の御祈禱にて。忽ち平癒あらせられ今に至つて西國の。六番の札所とは皆人々の知る所。フシげに有難き靈地なり。地折しも坂の下よりも 詠歌詠歌を。道の栞にて。ナホス長地カヽリ澤市夫婦漸うと御寺間近く フシ詣で來て。詞コレ澤市様。信心は大事なれど。病ひは氣からといふからは。お前の様にしを〱と。鬱いでばかり居やしやんすと。猶病ひは重ならう。コレこんな時にはわつさりと。日頃覺えの唄なりと。氣晴らしに歌はんしたらどうちやの。ムヽほんにさ

うちやの。わが身の言やゑ通り。くよ〳〵思ふは目の毒ぢや。そんならアノ淡へと思うてやつて退けう。しかし。誰も見て居やせぬかや。エヽ儘よ。唄憂きが情か情が憂きか。チンツチヽンツチツンツ露と消行く。テチン我が身の上は。チンチチチリンツテチリツテントンシヤン 詞アイタヽヽヽ。アレもた。今躓づいて。跡の合ひの手皆忘れた。アハヽヽヽ。ホヽヽヽヽと。地唄を暫しの道草に。御本堂へと フシ登り來て。詞サア〳〵澤市様。ソレ觀音様へ來たわいな・ハアモウ爰が觀音様か。ヤレ〳〵有難や有難や。ハアヽ南無阿彌陀佛。南無阿彌陀佛〳〵。〳〵。コレ〳〵こちの人。今宵こそゆつくりと。御詠歌を夜もすがら。上げませうではあるまいか。地と夫婦して。フシ唱ふる詠歌の聲澄みて。本フシカヽリいと森々と殊勝なる。順禮歌岩を建て。水をたゝへて壺阪の。庭の砂も淨土なるらん。ナホス詞コレお里。叶はぬ事とは思へども。そなたの詞に從うて。來ごとは來ても中々に。此目は治りさうな事はないわいなう。エヽ此人わいなう。又しても〳〵そんな事。コレこの壺阪の觀音様。昔桓武天皇様。奈良の都にまします時。眼病にて御惱み。それ故にこの觀音様へ。御立願なされた時。早速御眼があいたげな。それ故お前に勸めるも。ハテモウ天子様ぢやと言うたとて。蟲螻のやうな我々でも。あなたに隔てはないわいな。モ兎角信心といふものは。氣を長う歩みを運んで。心を鎭め一心に。お縋り申せば何事も。叶へてやろとのお慈悲ぢやわいなう。そんな事をいふ手間で。地早うお唱へ申しませうと。力を付くればいかさまなう。詞ほんに言やれば其通り。そんならわしは今宵から。三日の間。爰に斷食する程に。そなたは早う内へ去んで。何かの用事仕舞うておぢや。治るとも。治らぬとも。この三日の間が運定め。オヽよう言うて下さんした。そんなら私も内へ歸り。何かの用事片附けて來ませう。ガコレ澤市様。このお山は嶮しい山路。殊に坂を登りて右へ行けば。幾何丈とも知れぬ谷間ぢや程に。コレ構へてどつこへも。オヽどこへ行かうぞ。今夜から觀音様と。首引ぢや。アハヽヽヽ。ホヽヽヽ。地と笑ひながらに女房が跡に心は置く露の。散りてはかなき別れとも フシ知らでとつかは急ぎ行く。地跡に澤市只一人。こらへし胸の遣瀬なく スヱテかつぱと伏して。泣きゐたる。詞コレ嬉しいぞや女房ども。此年月の介抱其上に。貧苦

にせまろも厭ひなく。只の一度も愛想つかさず剰へ。眼かいの見えぬこの身をば。大事にかけてたもる志。それとも知らず色々の疑ひだて。コレ堪忍してたも／＼。増今別れてはいつの世に。又逢ふ事のあるべきか。不便の者やいぢらしやと。大地にどうと フシ身を打伏し前後。不覺に歎きしが。地漸うに顔を上げ。ア、歎くまい／＼。詞三年が間女房が。信心凝らして願うても。何の利益もないものを。いつ迄生きても詮ない此身。世の諺にもいふ通り。退けば長者が二人のたとへ。わしが死ぬるがそなたへ返禮。生き永らへていづれへなりと。よき緣附きをしてたもや。ヤ。ヤ。ム、。最前聞けば。アノ坂を登りて右へ行けば。幾何丈とも知れぬ谷間との事。これ究竟の最期所。か丶る靈地の土となれば。未來は助かる事もあらん。ム、幸ひに夜は更けたり。人なき中に。オ、さうぢや。増さうぢやと立上り。亂る丶心取直し。タ、キ上る段さへ四つ五つはや曉の鐘の聲。舞イザ最期時急がんと。ナホス杖を力に盲目の 林清カ、リ探り。探りて漸うと オクリこなたの。岩にかき上れば。コハリいと物凄き谷水の。流れの音もどう／＼と。響くは彌陀の迎ひぞと。杖を傍につき立て丶。南無阿彌陀佛と諸共に丶がはと飛込む身の果ては フシカ、リ哀れなりける フシ次第なり。フシカ、リか丶る事とも露知らず。息せき道より女房が取つて返すも氣はそゞろ。常に馴れにし山道も辷り落つやら轉ぶやら。漸う登る坂の上。詞ヤア。コリヤコレこちの人が見えぬわいな。澤市様。澤市様いなう。澤市様いなう。と 地尋ね廻れど聲だにも。人影さへも見えざれば。あなたへうろ／＼こなたへ走り。詞澤市様いなう。澤市様いならと 地変かしこ木の間をもる丶月影に透せば何か物ありと。立寄り見れば覺えの杖。ハツト驚き遙かなる。谷を見やれば照る月の。光に分つ夫の死骸。ハアこりやマアどうせう悲しやと。狂氣の如く身を悶え。飛び下りんにも翅なく呼べど叫べど其甲斐も答ふる物は山彥の フシカ、リ谺。フシより外なかりける。詞エ、こちの人聞えませぬ。聞えませぬ／＼わいな。この年月の艱難も。厭はぬ私が辛抱はな。只一筋に觀音様へ願込めて。どうぞ早う眼の明きます様。お助けなされて下されと。祈らぬ間とてもないものを。今日に限つて此したら。跡に殘つて私やまあ。どうなるぞいなア。どうせうぞいな。どうせうぞいな／＼／＼。ア、是を思へば最前に。歎

はしやんしたアノ唄は。どうやら心にかゝつたが。今で思へば共時に。死ぬる覺悟であつたのか。エヽ知らなんだ。知らなんだ〳〵わいな。斯ういふ事なら何のマア。お前を無理に連れて來ませう。堪忍して下さんせ。堪忍して下さんせ〳〵。地ほんに思へば此身程はかない者があろかいな。二世と契りし我が夫に永い別れとなる事は。神ならぬ身の淺ましやかゝる憂目は前の世の。報いか罪かエヽ情なや。此世も見えぬ盲目の 説経闇より。闇の死出の旅。誰が手引をしてくれう迷はしやるのを見るやうで。いとしいわいのと掻口説き。口説き立て〳〵歎く涙は。壺阪の フシ谷間の。水や増さるらん。地漸う涙の顔を上げ。アヽ悔むまい歎くまい。詞皆何事も前の世の。定り事と諦めて。夫と共に死出の旅。地急ぐは形

見の此杖を。渡すは此世を去つて行く。行先導き給へや南無阿彌陀佛彌陀佛の。聲諸共に谷間へ。落ちてはかなき身の最期 フシ貞女の程こそ哀れなり。フシ頃は二月。中空や。本フシカヽリ早や明け近き雲間よりさつと輝く光明につれて。聞ゆる音樂の音も妙なる其中に。長地いとも氣高き上臈の姿を假に觀世音。微妙の御聲うるはしく。いかに澤市承はれ。詞汝前生の業により盲目となつたり。しかも兩人ながら。今日に迫る命なれども。妻の貞心又は。日頃念ずる功德にて。壽命を延ばし與ふべし。此上はいよ〳〵信心渇仰して。三十三所を順禮なし。佛恩報謝なし奉れ。コリヤお里。〳〵。澤市〳〵。地と宣ふ御聲諸共に。かき消す如く失せ給へば早や。晨朝の鐘の聲 フシ四方に。響きて明け行く空。地ほの〳〵暗き谷間に

は。夢とも分かぬ二人とも。むつくと起きて。詞ヤアこなたは澤市殿。アヽ。コレこちの人。お前の眼が明いてあるがな。エヽ。アノ。ほんにコリヤ眼が明いてある。オヽ。眼が明いた。眼が明いた〳〵〳〵。眼が明いた。眼が明いた。チエヽ觀音樣のお蔭。有難うござります。有難うござります〳〵〳〵。わいなう。ムヽ。そしてアノ。お前はマアどなたぢやえ。どなたとは何ぞいの。コレ私はお前の女房ぢやわいな。エヽ。アノお前がわしの女房かえ。コレハ。シタリ始めてお目にかゝります。アヽ嬉しや〳〵。それにつけても不思議な事。正しくわしは谷へ落ち。死んだと思うて何にも知らぬ其中に。觀音樣がお出でなされ。前生の事。こま〳〵と御知らせ。サイナア。私もお前の跡を追ひ。谷へ落ち

たに違ひはない。が身内に一つも疵つかず。其上お前のお眼は明く。ホ。コリヤマア夢ではないかいな。ム、そんなら今。澤市〳〵とおつしやつたが。コリヤ觀音樣が直々に。お呼生け下されましたに違ひはない。增ハ。ハ。ハハア有難や忝けなや。是より直ぐにお禮參りは浮木の龜。始めて拜む日の光は。年立返る。心地ぞや。是ぞ誠に觀音の。二上り唄御利生ありけるや。見えぬ眼も見え明らかに。有難かりける新玉の。年立返る如くにて。水も漏らさぬ夫婦の命も助かりけるは。誠に目出度う候ひける。今日は嬉しや杖を納めて折しも朝の。日の目を拜んで。お禮申すや神や佛。萬見せ給ふはこれ偏に觀世音。これ。偏に觀音の。誓ひの重きは岩を建て水を。たゝへて壺阪の庭の。砂も淨土なるらん御示し有難。かりける 三重へ御法なり

義士忠臣藏

三〇

本藏下屋敷段

〔解題〕大外題は一に「增補忠臣藏」ともいふ。著作者も年代も明かでないが、恐らくは明治に入つてからのものであらうと言はれる。忠臣藏の九段目の陰に置いた氣の利いた趣向の底を割つたやうな行き方で、成程增補には相違ないがまづい行き方である。でこの跡九段目を出すと興味は半減されて了ふから、歌舞伎でも操りでもこれだけを離して出すか、又は八段目の道行とこの段とを續けて出す行き方なのは當然な事であらう。

增人知れぬ。思ひこそのみ侘びしけれ。我が歎きをば我が身ぞ知る。三世の緣も淺草の。片原町にしつらひし。加古川本藏が下屋敷へ。主人桃之井若狹之介。ハズミ忍びと。見えて案内につれ。直ぐに乘物裏門より。座敷へ舁込むそ

の饗應或ひは美盡し善づくし。オロシあらん。フシ限りの饗應なり。地御用隙にや近習井浪番左衛門。家來引連れあたりを見廻し。詞コリヤ〳〵家來ども。主人桃之井若狹之介樣の妹姬三千歲殿。先達つて此本藏が屋敷へ差越され。病氣保養とは表向き。誠は許嫁の縫之助殿と。遠ざけん爲お預けなされし所。今日お迎ひの役目この番左衛門に仰付けられ。また殿樣是へ御成りなされたは。諂ひ武士の本藏を。御成敗なされうとの事だ。我かねて三千歲姬に心を懸くる所。本藏めが彼是妨げなす何に付けても邪魔な奴め。今日御成敗相濟んだ上。三千歲姬は身が御供申し。屋敷へ連歸れとある御上意。何と時節は待たねばならぬものだ。大願成就するは今日今夜。しかし豫て手剛き本藏ならば。必ず油斷いたすな。もし手に餘らばコリヤ。斯う〳〵と地耳に口。物は。詞成程心得ました。スリヤお姬樣の乘物は。オヽサ花川戸より御慰みと僞り。小船を出し向島から野道を横に。菜が屋敷まで。首尾よう行かばコリヤ。褒美は望み次第。そんなら井浪樣。必ずぬかるな。心得ました。コリヤシイ。密かに〳〵。と地牒し合はして下部ども。フシ小庭へ廻れば。地番左衛門臺子の釜の蓋取つて。豫て用意の毒藥を。懷中より取出し。煮立つ釜へそつと入れ。一人笑みする一間より。障子をそつと本藏が。見るとも聞くとも知らばこそ。仕濟ましたりと釜の蓋。フシ元の如くに直し置き。詞ハヽヽヽ本藏が成敗は扨置き。やがて濃茶の饗應手前。列をならべて皆殺し。ムヽハヽヽハヽヽ。うまい〳〵と地捻向く障子ぴつしやり。はつと思へどそらさぬ體。誰が糺して水屋の陰 ヘズミフシ忍んで樣子立聞くとも。地フシ斯くとしら齒も咲く花の。桃之井若狹之介が妹三千歲姬。慕ひこがるゝ縫之助に。別れ程經し物思ひ。タヽキ日には涙の玉簾。明けて一間を立出でて。釜の煮音耳にとめ。詞アノもずやの煮音は。松風に似しとやら。古へ須磨へ流罪の行平卿を。こがれ慕ひし松風が喞ち草。哀れに消えし憂身とや。ホンニ縫之助樣とこの三千歲が。カヽリ身にひし〳〵と片時も。地思ひ逢ふ夜の新枕。交す互の言の葉も。朝月の儘きぬ〴〵に。お別れ申した其後は。爰に月雪花川戸。霞が關と引別れ。いつか屋敷へ歸る雁。文の便りも音信も。泣くは鷗か百千鳥。翅あるなら殿樣の。お傍へ行きたい行きたいと。人目なければ聲を上げ。フシ喞ち給ふぞ痛はしき。地時分はよしと番左衛門。

園ひをそつと傍に寄り。詞姫君様。三千歳様。地といふにこなたは涙を隠し。詞ヤアそなたは番左衛門。いつの間におぢやつた。アイヤ只今参つた。イヤナニ姫君様。今日は本藏が身の落著。又お前様には。今宵屋敷へ連歸れと。郎ち此番左衛門。御迎ひの役目でござります。ム、何と言やる。兄上様が自らに。今宵屋敷へ歸れとかや。イヤモ歸るとも〳〵。肝玉がでんぐり返る俄かの御婚禮。なんとお嬉しうござりませうがな。ヤア〳〵。そんならアノ。縫之助様と祝言かや。ア、イヤ。拙者と祝言さゝうとある殿の御上意。エ是はしたり。お逃げなさるな〳〵。マア〳〵お下にござれ〳〵姫君様。さりとては難面と申すものハ、、、。お前様が戀ひこがれてござる縫之助殿は。鹽冶判官の弟なれば上への恐れ。御縁組は何として〳〵。ならぬ戀路にこがれうより。男に持つて何不足のない此番左衛門。又お前様がお力になさるゝ本藏めは。今日殿様御直の御成敗。何と御合點が参りましたか。コレサ〳〵三千歳様。何も其様にすげなう遊ばすものではござらぬ。兼好法師は何と申した。サ、、御存じなくば此番左衛門。ツイちよこ〳〵と御傳授いたそ地と。取付く手先を振放し。詞主に對して慮外の戯れ。無禮であらうぞ。穢らはしい下りや〳〵。地オツト下つて裾から手を。入れかはぬつと本藏が。出るとも知らぬ戀慕の闇。振りの袂をひき円。のくる〳〵廻り目に餘り。二人が中を加古川と。知らず抱付く番左衛門。詞非浪氏。コリヤ何となさるゝ。ヤア加古川氏か。エ、マ悪い所へ。何が何と。アアイヤ悪い〳〵〳〵ハ、、、、。オ、さうだ。悪いお遊びが始つて。何か其摑へとか申す鬼の役。拙者に仰付けられ。扨て〳〵迷惑千萬ハ、、、、。ア、それは御苦勞でござる。ナニ姫君様。かやうな人非人にお構ひなく殿のお傍へサ、早く〳〵と地勸めやり。藥子の傍に座を構へ。釜に目を付け氣を配る。扨はと氣付く番左衛門。本藏が前に詰寄つて。詞御家老殿。本藏殿。某を人非人だと蔑せらるゝ。こなたの非から改めよ。いつぞや鎌倉饗應の砌。金銀を以て師直にこび諂ひ。御主人に諂ひ武士の悪名附けたは。不忠とや言はん。人非人とや言はん。サ、、サレバサ。その越度故に先達つてより御目通り叶はず。此下屋敷へ蟄居の本藏。さりながら。横戀慕は致さぬ。ヤ何と。まだ申さうか。此釜の湯にムハ、、、。言はぬぞや。一命は主人へ捧ぐるが臣の

習ひ。御直の成敗少しも厭はぬ。イヤモずんと恐れ申さぬ。地と行國が詞に井浪番左衛門　フシしよげり入つてぞ閉口す。地折から下部が罷り出で。詞御家老本藏様を御成敗とあつて。急ぎ本藏に繩打つて奥庭へ引き。太刀取りは番左衛門に申付くるとの御諚でござる。地と聞くよりはつと驚く加古川。井浪は得手に本藏が。フシ大小もぎ取り早繩打ち。詞サア本藏モウ叶はぬ。御成敗だ詞御成敗だ。太刀取りは此番左衛門。ハレヤレ氣の毒千萬ハ、、、ハ。何にも周章てる事はないぞ。どうだ震ひが出たか。オヽ尤もだ〳〵。わりや最前何といつた。一命は主人へ捧げるが臣の習ひといつたぞよ。イヤサぬかしたぞよ。サとても叶はぬ事と觀念して。早く立て〳〵。きり〳〵立ち居らう。地とどうと蹴飛ばし引つぱれば。手先しまりて喰入る繩。目には泣かねど心には。是が忠義の仕納めかと。思へば足も。たど〳〵と。主人の賢慮測りかね奥庭へこそ　三重へ行水の。地フシ上へ流るゝ例なく。オクリ憂き事。積る行國が。文彌カヽリ消ゆる間を待つ庭の面。我を仕置の芭蕉葉の。廣きも今は恨めしく。人はそれとも白洲なる。フシ御前へこそは引かれ來る。地斯くと知らせに若狭之介。褥の上に座を設け。詞イヤナニ本藏。今日の成敗餘の儀にあらず。その方家柄と申し。勤功に愛で。先祖より家老職を勤めさせ。知行五百石を當て行ふ。然るに某。さいつ頃鎌倉殿中にて。師直を只一刀に斬捨てんと存ぜし所。彼奴低頭平身。イヤモ存外の詫びごと。コハ心得ずと思ひしが。汝師直が屋敷へ拔出で。不相應なる金銀を以つてこび諂ひし故。師直は討ちもらしたり。然る所諸大名の取沙汰にも。若狭之介は諂ひ武士。卑怯者と殿中一杯の取沙汰と聞く。その上汝へ遺恨の次第申し聞かせし砌。余が口通りで松の一枝切取り。眞此通りと金打致いたでないか。そちや某を誑つたな。ハヽ畏れながら我が君へ申し上げる。其不可を知つて諫めざるは不忠の第一。諫むれば以て背くに似たり。松が枝の金打。何故表裏に仕るべき。君御短慮の木の偏を切つて退くれば。公の一字に恙なく。國家長久祈り奉る。ムヽスリヤ松の木の偏を切取りしは。國家の爲。この若狭之介へ諫言の謎とな。ハヽ御賢慮いかゞでござりませう。ム、然らば受けし恥辱は如何に。ハヽア。コハ存じ寄らざる御仰せ。君辱かしめらるゝ時は臣死すと申す。だまれ本藏。左言ふ汝が何故に。なぜ切腹は

仕らぬ。命を惜しみのめ〳〵と。蟄居致せしは何事。それでも武士か。イヤサ家老と言ふか。既に番左衛門申すには。本藏をきつと御成敗なされねば。御家の瑕瑾に相成ると。某へ數度の諫言。是非に及ばず。只今死罪に行ふ。ハア、恐入つたる御仰せ。不忠不義の本藏。イヤモ何しに異存申し上げん。只御憐憫の御仕置。有難く御受け申し奉る。オ、よき覺悟。しかし余を恨むであらうな。コハ勿體なき御詞。下司下郎のなすべき太刀取。番左衛門に仰付けられ。死後の面目。ハ、ア有難う存じ奉る。さりながら。只一言申し上げ度きは。妻子の儀。と（地）いふを打消す番左衛門。（詞）ヤイ〳〵本藏々々。今になつて一言も二言もないわい。自體うぬ殿樣の御遺恨ある。師直を討ちもらし。その上陪臣者のうせる場所でもない。大廣間へ出居つて。判官公を抱き止め。一つとしてろくな事をさらさぬ奴だ。その様な馬鹿者を生け置いては。後日の妨げだわい。サア御前。やゝ時移らば御歸館の妨げ。（地）イデ成敗と裾引上げ。既に討たんと立寄る井浪。（詞）番左衛門待て。待てと言はゞ先づ待て。イヤサせく事はない。總て大罪人は長く生け置き。苦しめるも仕置の一つ。如何にしても憎い本藏。餘人に討たすも殘念。身が打捨てん。その刀是へ持て。（地）と優美の顏色。しづ〳〵庭へおり立つて。（詞）ム、覺悟の體はまだしも出かした。ナウ番左衛門。ア、イヤ〳〵左樣ではござるまい。今斯うなつてしよことがなさの覺悟と見えます。ヘ、、、、。コリヤ〳〵本藏々々。殿を卑怯者にしなし。大忠臣の某を。人非人だ。イヤ又不義者などとぬかした。その天罰で今この態。ム、ハ、ム、ハ、ハ、、、、。と（地）嘲弄なじる其内に。刀ひらりと若狹之介。（詞）今こそ最期觀念。と（地）振上ぐる手を振返し。ずはと斬つたる井浪が首。（フシ）水も溜らず打落せば。（地）本藏驚き。（詞）コリヤ番左衛門を御手討。ア、イヤ。其方とても同罪。（地）と繩目をすつぱと切拂ひ。（フシ）しづ〳〵座に着き。（地）詞を正し若狹之介。（詞）本藏本藏。近う參れ。その方が科。今日只今相濟んだ。長の暇くれる。スリヤ一命をお助け下され。長のお暇とな。ハ、有難く存じ奉る。ハ、、、、嬉しいか。嬉しいは道理々々。コリヤ本藏。妻子を都へのぼし。由良之助に對面なし。討たれて死に度い心であらうがな。イヤサ隱すに及ばぬ。判官を抱き止めたはそちが誤り。一命捨てねば娘が緣組

は扱て置き。判官が位牌へサ言譯立つまい。この若狹之介が爲には。身代り同然の判官。我が命ばかりか先祖へ對し。忠臣義心とは汝が事。諂うても苦しうないぞ。ナニ諂ひ武士は世間に幾らもあるわい。判官が今の有樣。後車の戒めと。ふつつり短慮とゞまつたもそちが蔭嬉しいぞよ。過分なぞよ。か程の家來に暇遣はす。若狹之介が心の内を推量せよ。さりながら義を見てせざるは勇みなし。此上の頼みといふは三世の緣。未來で。未來で忠義を盡してくれ。地と跡言ひさして顏背け。數かせ給ふ御有樣。有難しとも嬉しとも。申し上ぐべき詞もなく。かゝる智仁の名將の御馬先でも死す事か。僅かの義理と淚りに。命を捨つる不忠不義。何と先非を悔み泣き。御顏見上げ奉れば。殿も見下し御落淚。袖や袴に雨車軸流れて外へ。小柴垣フシ庭に。淵なすばかりなり。地本藏手を打ち。詞誰そお次の衆〳〵。薹子の釜を持ち來られよ。地はつといらへて持運べば。本藏立つて釜の湯を柄杓に移し鉢植に。注ぎかくれば竹蘭の枯れて萎まる。フシ釜中の毒湯。詞先刻番左衛門薹子にかゝり。皆殺しにせんと仕込みし毒藥。立聞きしたる本藏。幸ひ天目奉らざるは右の仕合せ。ハレ御運強き我が君樣。地と申し上ぐれば若狹之介フシ猶も忠義を感じける。地暫くあつて小姓ども。何か樣子は白木の臺。一重繰に並べしは。三衣袋に袈裟尺八。フシ餞別とこそ知られけり。詞ナニ本藏。その袈裟尺八は汝へ餞別。二人の娘を思ふ親の身は。燒野の雉子夜の鶴。巣籠の一曲。又この一品は。妹三千歳を預け置いたる止宿の一禮。心を籠めし此一書。由良之助が宅へ土産にせよ。地と手づから給はる御賜物。ハヽアコハ。有難しと押戴き。開けば高の師直が。屋敷の住居水門下部家侍部屋。樹木泉水居間廣間。委しく留めし繪圖の面。ハハハヽヽヽハ有難し〳〵と。戴き直に懷中し。土に喰付き三拜九拜。フシ有難淚にくれにける。地若狹之介四方を打眺め。詞誠や九枝燈火盡きて。只曉を期すとかや。名殘は盡きず。目出たう門出の盃せん。出立の用意致せ。ハヽ君には益益御機嫌よう。オヽそちも無事で。イヤ首尾よく仕果せ。目出たう〳〵。未來で逢はう。ハヽア。二上り唄馴れし衾の。夢を貫く寒山寺。詞ムヽ思ひも寄らぬアノ唱歌は。妹三千歳が餘所ながら暇乞ひと見ゆる。ム幸ひ本藏。そちも一曲致せ。苦しうない許す。ハヽハハア。唄送る素足の氷のくさび。朝明

の嵐に暮れの事と。浮かれし事も。最早迎ひの駕待つばかり。星の名残りの柴小船。詞本藏。近う〱。ハ、面を上げい。ハ、我二十五年の春秋を。朝には教訓の霧を拂ひ。夕には講說の星を敲き。晝夜旦暮のいつくしみ。滿足に思ふぞよ。是がこの世の見納めなるぞ。ハ、、、、。出立いたせ。ハ、ア。地盡きぬ名殘と本藏が。淚を隱す編笠の。深き惠みに淺き緣。コレなう暫しと三千歲姬。駈出で給へば若狹之介。袖の枝折戶袂の關。押し留まれて加古川も。笠の內より御顏を。見奉れば姬君も。いとゞ淚に糸竹の。未來は一つ一越斷金。やがて黃鐘鸞鏡は。君に仁あり臣に恩。あるは音律音曲の。榮え榮ゆる世のためし。筆に。傳へて加古川の武名を。永く殘しける

（義太夫節終り）

第二編　河東節之部

松の内　一

〔解題〕本曲は元祖河東が師匠江戸半太夫から分離して獨立した最初に語つたもので、河東節としては最初の作品といふべきである。本曲の由來について、「江戸節根元集」には、新吉原三浦屋の名妓某（一に花紫と）が享保戊年（三年）正月二日仲の町へ年禮に出た途上落した下紐を即座に打掛に包んで、遣手をして其處の茶屋へ與へたといふ氣轉と氣前とが大評判となつたので、竹婦人が廓の七草迄の狀景を綴つた文に作り込んだのに作曲し、春狂言にも興行されて大當りであつたといふやうに述べられてゐる。

併し現存の古正本の表紙によつて見れば、本曲は享保十二年春市村座で「傾城富士高根」興行の時に出したものである。町田博三氏は三條勘太郎の役であつた化粧坂少將の出端か何かに素淨瑠璃で聞かせたものであらうと言つて居られる。（江戸時代音樂通解）。又作者についても、原武太夫の「奈良柴」にはつるみ一魚の作と見えて居る。手附は梅都といふ盲人で、芝居では元祖河東が淨瑠璃を語り、三味線は山彥源四郎が勤めた。

上ハルあら玉の引。空青みたる 下曙は 中 移り香のユリ。峰に一刷毛（はけ）ムスビ夕霞。二ぞつもりて。何時（いつ）の間に。ちよつと百ギン常聽く鶏も。若々と オクリ若水。早 日は茶屋にゐの日にて。色地手まづさへ ついた鞠のムスビ數。本調子とんと落ちなき車井のめぐる。くる／＼歳の朝引。ギ ぎる羽子板に。軒より傳ふ。突羽根の ば名は立たん。どこの女郎衆の下紐ン去歳（こぞ）のまゝなる亂れ髮 ムスビこぼれか 中ギン笹にからまり裳へ。ハズミ鞠が／＼を。ムスビ結ぶの神の下心（したごころ）。かねて知りかれる差櫛は誰れ結べとか ギンカハリし 袖 ハズミくゞる手どりに一つ袂へ二つ合 たしアフミムスビ問はまほし。コレヨリ一中ブシ 三日どけなや引。しどけなりふり。品定め。笹にからまり。裳へ鞠が／＼袖くゞ は客のきそ始め抱いて子の日と一炷仕附廂（しつけそ）殘る戀衣。レイゼイどの袖引かんる。手どりに一つ袂へ二つ。合 中ギン戀 の。薫りほのめく奧座敷。本ブレ君が千

ぴきの廿の日やうしとやいはん。ギンハ君が代の繁榮は。虎も住みなん千本のシユリ沅湘日夜東は。雨戸も早く明くル我思ひ。二上リいつかウタ五日やみなんこりずも竹。梅イロオクリはづ○○○かしきユリ襟のる日の。ハヅミしめて寢なゝん七草は。通ふ。ギン七手に明けたる身ぞつらき。香にまだホブシ青陽の暮寒く借着の袂御形黄瓜菜佛の座。菘蘿蔔芹なづな。ウタ大磯の鐘は。七つ七もどり。虎に逢千早振引。神もハヤメ思ひのあればにや君がためとて若菜摘む千種の色こそ久をとて袴は露小褄は嵐松風。ハヤメ實にいつしか今日は引。三重きぬ〲の引。しけれ。

式三獻神樂獅子　二

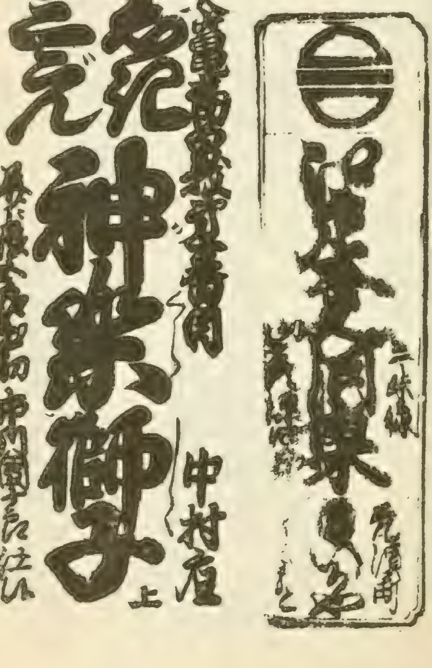
〔解題〕通稱「神樂獅子」。享保七年正月二日から中村座興行の「大篭商曾我」の第一番目に二世市川團十郎が從屋辰五郎實は曾我の五郎で、虎御前實は茨木屋吾妻を相手に婚禮から床入の所作に用ひられた淨瑠璃である。太夫は江戸太夫河東、三絃は山彥源四郎である。江戸節根元集に「此の文の内にからは小がらな男山、八幡きかぬ色好みといふは海老藏が事なり。この時芝居大當り、百日程興行、この事今に言傳へしなり。」と見えてゐる。

上の卷（神樂の段）

り。ワキ男にあまんの粟あり。國家隆ん堤に流れ。鳳凰その樹に巣をくひて。當に富み。シテ上下こも〲たる。かゝるが麒麟その園に到るとは。ツレハル今此時序へ報もその後。當女にあまんのぬのあ故に甘露その庭に降り。ワキ醴泉そのや平安城。花の都の花の春下初日○○○

輝くツナギユリ其の光。地やぶしわかねば石の上。古き世俗のたとへにも。シテ一つ星を見つけたらば長者にならうな。なればならるゝ。世の中の。これぞ寶の山崎や。淀のわたりにユリステ名も高き。下ノリ淀屋古安が獨り子にアイ。シテへ撞木島原新町の引。色に浮名は辰五郎。ワキ今を盛りとからなしの。からは小がらな男山。八幡きかぬ色好み。長者のはぎに見染めにし ワキ嫁は伏見の大納言實基卿の一人娘。ハルへ虎御前とて虎の棲む地竹より直ぐなおしたてに。丸綿帽子白無垢の。着付裲襠嫁入の。ワキへ先づ初献には引渡し。石勃卒海月打ち鮑。大引渡しに略しては。昆布搗栗熨斗。シテのつし〳〵と閨に入る。姿はいづれとりむしの。羽を並ぶる瓶子のロの ワキ雌蝶を下に仰のけて。シテ雄蝶を上に腑向けて ツレ抱き合はするは

今宵より。夫婦抱合ふしるしの祝儀。これぞ契りを結び熨斗。シテ儀式すみの陰陽和合を表すなりアイ。シテヲドリ歌さて土江高砂の松も恥し新枕。ワキへ待つと知器は三つ重ね。花嫁君に二度注ぎて合りつゝ待たせて置いて、まだ來ぬ人の



ワキ左へ二足立つ時は加へは六足歩み面憎や引。合ノ手ウツリ

▲市川團十郎川

寄る。ツレ雌雄の銚子の口と口。打寄りウタヒへ御酒と聞く。御酒と聞く引シヲリ

陘へユリステ酌取は。左々と立廻はる。名もことわりや梅か香の。色こそ見え

ね。丸綿の。内ぞ床しき。白梅花色直しとて紅梅の。薄きはいやよ君と我。心の底をくらぶ山。山の峡あり長廊下ユリく闇に越行く手燭の引。ナゲブシしんぞ此身は雪の梅。ゆきけしならぬ盃に。醉うたとさ／＼是は千鳥か。ワキへ鶯か引。さては雀の子持筋。ワキへ褐の袴ムスビ肩衣や。シテへかの銀公が唐衣。

下の巻（忍の段）

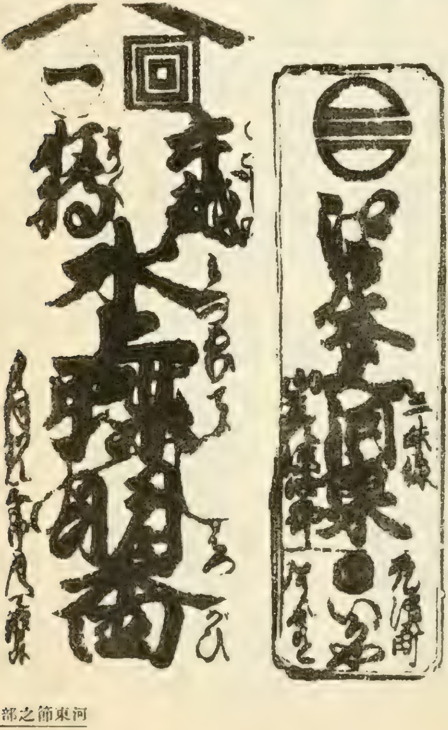
シラベアリへ御曹子は。浄瑠璃御前の閨の○○障子をニユリほと／＼と音信れ給ひてたいも無い事いはれける。ウタへ今夜はゆるす。嫁の夜は。ちとまた此よの憂さはらしクリ。その約束の筋故に。聟がこれまで參りたり。嫁君いかにとありければ。虎は此由聞き給ひ。夢覺めかつぱと起き驚き三重。誰そや誰そ引。誰そやクリ上誰そ閨の障子に音するは。深山隠れのこけふしの。月日星とは囀らで。[illegible]聲音かないたづら、宵の鶉と是[illegible]赤きは酒の、とがとがしく、何といふともかなふまじ早や／＼歸らせ半ユリ給ふべし。聟御の殿と云申しける。へ（此間狂言神楽人あり合ノ手）先づは岩戸の其始め。隠れし聟を出さんとて八百萬の色遊びにぞ社の始めた[illegible]の障子の隙の間（合ノ手）手を取りかはし取りかはし屏風を少し開き給へば[illegible]の身拵[illegible]／＼と[illegible]思へば[illegible]／＼神楽の太鼓のてれんとは。吹かせてしがな神風の風にうそぶく虎御前。實は九軒に隠れなき。刺も花さく茨木屋雛波なれども吾妻とて。ギンかの楊貴妃が生際にさも昭君が生ひさかり。又李夫人が一つ前。西施が履ける上草履花の鼻緒を踏みしだく鶴の歩みの豊やかに。嫁入廓の清掻や引。へ（此間狂言合ノ手アリ）縫り給ふなかはらじと。レイゼイ結べる帯をユリ。解く夜半の。烏は何鳥黄金の鶏の。八髷を黄楊の小枕の。解けるも知らぬ亂れ髪。亂れ心やくる／＼車。淀の河瀬の淀鯉の水も洩らさぬ二人が仲。ひとつ夜着にぞ入りにける。八幡長者の新枕めでたしともなか／＼申すばかりはなかりけり。

手越
少將

水上蝶の羽番　三

（解題）享保八年春江戸中村座「曾我曆開」の二番に、市川團十郎の曾我の五郎、富澤門太郎の手越の少將の役で演じた芝居に語つたもの。（歌舞伎年代記）尤も「十寸見聲曲集」は「役者紛撰舞」によつて、富澤門太郎はこの時大坂嵐座へ出勤し、少將は嵐和歌野が勤めたと考證してある。太夫は初代河東、三絃は山彥源四郎。

雀海中に入つて蛤となる。中 腐草化して螢となり。上 田鼠化して鶉となる 上ハル なるもならぬも。流し目の。流れにそよぐ川竹の、往き來るさに。さはさはと 文七フシ 縺る其の夜は。貰うて逢うて。とんと音じめの ユリスヘ 一二二 上 二重へ一つとや。人こそ知らね乾く間も。泣く程思ふ男には、なんぼ内から。ギンカハリ 堰かれても、鵲の橋の中絶えぬ 三重へ二つとや。人寢る夜の手枕に。かひなく立たん浮名がけ。三つとや。三つありとて ムスビ 蝶々そ。上カブシ 蝶はおぬしの替紋と。ハル 常に纏は



せて染めさせて。比翼の。羽を裲襠(うちかけ)の 抱蝶(だきてふ)や 此間狂言アリ アヒノ手 下さて盃に向ふてふ。坂(さか)。ハルこれは手越(てごし)の少將の。カヽル夜(よる)は上に亂るゝ洗ひ ユリステ 髮。しやんと揚 ノリ 首(げ)に君と我が飲み初めて差いつ〇〇〇差 來れども晝見せぬ。下ノリ 忍び姿の朧夜羽の。雨翼(もろつばさ)。レイゼイ 縫へるまいぞや。君胡(きみこ)されつ。酌むならば。しいふせんてふ の。ハル 突出し女郎。初枕(はつまくら)。庵(いほり)の中に二(ふた)蝶。我は千草の。上に ギンムスビ 置く。花の 舞ひ遊ぶ。ハル 花の雛の大磯や。こいそ 人寢(りん)は。風情なりける次第なり。筆のしつぽりと。又しつぽりと。上ハル 積りて アタリ 身ごしらへ。鏡に向ふ化粧(けはひ)

金作 初瀬 出端 雛(ひな)の出(で)遣(づかひ) 四

〔解題〕享保十年の作。作曲者初代河東山彦源四郎。河津祐泰の娘小松の狂亂の振を人形振にして上演したものと思はれる。當時大阪下りのお山人形の名手辰松八郎兵衛の人形が評判であつたので、それに倣つて、山下金作と早川初瀬との出端に用ひられたものと思はれる。古版正本の繪表紙に「鰤伊豆日記」第三番に出した「狂女あら所帯」(同じく河東節)並に「ひなの出づかひ」とある。或は享保十年正月中村座で興行されたものか。

シテ 上方調へあげぶたの扉開けし桃花門。早や に柔らかな女御更衣の柳うら山吹(やまぶき) オク めて。花めづらしの 地 初瀬山。大内山の參内の沓(くつ)の音 ナホス地へ 瓜田(くわでん)に沓を入れ リ〇〇襲(かさね) ボユリ 緋の袴 地 踏みしだき〳〵。雛(ひいな) 山下はお山遣ひの名を得たる。千代のす。李下に冠を直 さざる カヽリ 堅い男 の殿の出遣は。出羽が手づまにつまこ 緣も辰松が。姿の内裏上臈も。風(ふう)をば

やはり傾城に。殿人形の前渡り。せいぶしまくら貝盡し。心盡しに春の夜の床入りめでたしともなかく\／申すばか
つるませて摺りちがふ。二人が腰の反閨はあやなし綾錦。巻絹。とんとうちりはなかりけり。
り加減實にや古今の序文にも。ワキ 花に
啼く鶯 ハシリ 水に栖む蛙こけごのあと
訪へば。オドリ その業平 クドキ の友とせ
し。紀の有常の常なき世 下クリ 妹脊をか
けて言ひ寄らん筒井筒 〇〇 三重 井筒。井
筒にかけし丸が丈おいにけらしな妹見
さる間に。その時女もくらべこし ユリス
テ 我がつみ髪も肩過ぎぬ君ならずして
取上げん土肥の次郎が娘とも又は伊東
が嫁ぞとも ハル 恥しながら白らとひし
\／と抱きつき今は 〇〇 世に亡き ユリ
ツヾケ 祐泰の 上 形見の小松 忘れ草 ウタヒ
昔男に移り舞 此間舞アリ 打上 へさながら見
みえし今の殿御の烏帽子直衣は女とも
見えず男なりけり業平の其の面影のな
つかしや。また我ながら大膽や 地 亡婦 着せて。神樂の太鼓銅拍子も。揃へて
魄靈これとても。許させ給へ雛祭。床 祭る淡島の。宇治神の 上方ユリ 結ぶの 地 お



隅田川舟の内　五

〔解題〕通稱「隅田川」で、謡曲「隅田川」によつて作つたもの。享保七八年頃に初代山彦源四郎が作曲し、都の狂女を初代河東、東の渡守を都太夫三中でかけ合に語つたのが始めで、今日でも、河東・一中兩派のかけ合淨瑠璃の一として名高い曲である。

上の巻

三中へ斯様に候者は。隅田川の渡し。もう乗つてをりやるか。オ、その筈〳〵。今日は向ひの縁日さらば舟を。ヤア此邊にては見慣れぬ風俗の人ぢやが。先づ眼色が悪い。もし怪我でもあつては渡し守一文惜しみの百生瓢箪やみなや。渡してやる事はならぬ〳〵と石頭が頭。河東へ船頭がことは御免あらうずにて候 河東女へわらはは、遙き都の者。尋ねて東路に。浮きて漂ふ舟の雲。日も暮るゝ船に乗れとこそある ユリベ きに。かたの如く女の身を。ハル さのみ乗せしといた舟の。戻ろかやア、戻ろか。往こか戻ろか。隅田川の渡し守と、覚えぬ事ないたまひそ。三中へ實に〳〵女性の御事オ、やりませうとも〳〵、こゝは大事の渡りなれば舫の着く間は靜に召され候へ。さすがに都の人とて言葉のはし名にし負ひたる優しさよ。三中へ名にしおひたると承るはいざ言問はん都鳥わが思ふ人は。ありなしやと連ねにし伊勢物語も此所今は昔に業平の 三中へオ、その業平はあのそつとした祠。少しこなたの森つゞく若菜に植ゑし鳥居こそ。笠木ばかりを三囲の引伸び上がらねば見えぬなり 河東へなう船頭殿あの鳥はわが九重の都には見なれぬ鳥にて候ぞや。三中へあの鳥を知らずかても扨も〳〵さすがは女性ぢやあれは鳶でござるわいなう。河東へいやとよ波に揺られ揺らるゝ白き鳥名をば何とか夕汐の三中へ沖の鷗と申すなり。河東へよし千鳥とも鷗ともこゝにすみ田の鳥ならば都鳥とはのた

[illegible]三重へ實に〳〵是は[illegible]まつたり所には作めども心なくて今仰せられたる河東へ都鳥とは答へたまはで三重へ沖の鴎と夕浪の河東へ昔にかへる業平も三重へいかいすの字ちやあつたげなの。隅田川の東まで。それは女房を思ひ妻。シテドへわらはまた東路に。子故に迷ふも三重へ心は同じ河東へ戀路なればいざ言問はん都鳥。わが思ひ子は東路にありやなしやと。問へども〳〵答へぬはうたて都鳥。鄙の鳥とやいひてまし。實にや舟ぎほふ。堀江の川の水際に來ゐつゝ鳴くはギン都鳥。それは浪花江これは又。隅田川の果しまで。遠くも來ぬるものかなと宣へばツレへ舟人はなう旅の女中あれ御覽ぜよ。總じて此あひだ二三日降りさうにして降らぬ。嘘を筑波の山苞む。ちぎれし雲を吹き寄せて帶に駿河の富士の山。西に

當つて遠景色。紕ひの雪はさながらに白き。扇を倒に[illegible]風の[illegible]はら〳〵と ニリ離れてたてる磯崎を。行路に思ひつく〳〵と。夕べせはしき群鴎黄河千年過ぎて往[illegible]二たび澄める隅田川。牛田に宿する[illegible]例はあらがねの。[illegible]御代の春君に。すゝむと書くとかや。河東へ宿にや[illegible]景色[illegible]中をも[illegible]に[illegible]鼓の音の聞ゆるは[illegible]いかなる御法なるやらん。三重へオヽそれよまいの念佛について日本に一つの[illegible]かせ申さん。紙仕度して聞き給へ涙がやがて出ませうた。[illegible]の果ぞ何なる[illegible]は三月十五日、しかも今日が命日都より人商人の[illegible]を誘拐して奥へ下り候に。習はぬ長途の疲れにや此川岸にどうと倒れ伏しけるを醜い奴では

ござらぬか。せめて草鞋もはかせねば足より出づる血しほの浪。この川水を染めなして引汐に流れしも死ならはしの約束か。約束堅き石の火の小石まじりの長堤を歩め〳〵と引立てつゝ。腰には瞋恚の縄を付け。邪慳の杖を振りあげて。打叩き打ちたゝく有様は判じ物を見るやうに。旱の櫻色褪めて心ばかりは濫れども。口には綿の轡をはめ。叫べど聲の出でばこそ不便なりともあさましゝ。今はなた〳〵一足も引かれぬにや歩み困じて見えけるを。膝甲斐ないおつぱめと捨てゝ人はイヤ商人は生捕られたとも申し又は奥へ下つたとも申す。

下の巻

さるほどに此邊の人々立集り。これは所の大難儀。やれ水よ藥よと前巾着

を打ちはたき一粒つんで多田の薬師の夢想の氣付。目をふきかへしたわ息があいたわと後や先を抱きかゝへて。ハヽもうたまらぬわ。これ〳〵少人。おことの向ひたるは西の空阿彌陀樣がお迎ひにアレ。あの雲が來てゐます。念佛申して國へ往きや。また縁もあるならば盆に逢はうとばかりにて皆々涙に咽びける。幼き者世に苦しげなる眼のうちに西をつや〳〵打守り。阿彌陀樣のお國より都は西と聞くなれば母上樣こそ戀しさふ。われ空しくなるならば。此邊に築を籠めて標に柳を植ゑてたべ實は故郷の人の足手影もなつかしやと。標に望む青柳の絲より細き言葉の末弱り〳〵て既にはや。今は末期と見えければ。おことの父は都にては何と申す人ぞと。名をも尋ねて候へば。わらははは都北白河よし〳〵と字が足らぬやら餘るやら。所の者が聞きとめて書置く筆の命毛も斷れて。切れて空しくなりけるわと涙。やよしなき長物語に汀に着いて候。これ〳〵女中疾う〳〵御あがり候へ。河東ハルへ母は夢とも辨へず。なう船頭どの。吉田の何某が子と申せしか。三中へなか〳〵の事歴々人。河東へその稚き者の。名は何とか申し候ひしぞ。三中へ兒の名ははアたしか梅。河東へ若丸とは申さずや。三中へはていがうよう知つてぢやがもしこなたは親類ではおはせぬかや。河東へさて其後は母とても尋ね來ず。三中へ處で憎まれた故か五人組も參らず。河東へなう。母とても親とても。外に嵐の山松のみどり子の。母がなれる果ぞかし。こはそも如何なる報ぞと流涕。こがれ給ひける。三中へさても〳〵存ぜぬ事とて餘所事の樣に不調法なせめての事に御墓へ御供申しませう。あア物語をお聞きなさるゝにつけても。さぞ殘念にござりませう梅若樣の憂き目に遭はせられたも此途。やう〳〵勞り。たど〳〵と御墓三中へ所に伴ひける。サ程なう御墓でござりますお心靜にや。河東へこれは夢かやあさましや。此標は梅若が。柳にかはる面影かと。かひなき墳に抱きつき。今日の。今日の今までも。さりとも逢はんと頼みにこそ遥々尋ね下りしに今は此世に亡き跡の　上方柳ばかりは何事ぞ ユリ○三中ハキへ實にや死の縁。無量にて。生所を。離れまし〳〵て。末も東の土とのみ。青みだちたる苔の下　ハルへ此墳にこそあるらめや。殘りても〳〵。かひあるべきは果敢なくて。此世かの世と親と子の四鳥の別れ。知るならば喃いてくれよや都鳥。三中へあゝはや隅田川原も賽の河原も同然ぢやよ。人間憂ひの

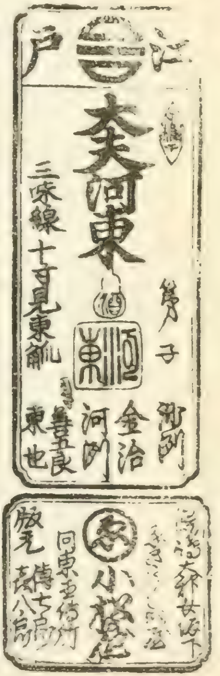
花盛り無常の嵐音添へて　河東へ生死長夜の月の影。不定の雲に隠れつゝ闇路に迷ふはゝきぎの見知らぬ花は咲きながら。我が子に似たる人もなし。さりとては此塚を。かへして崩して今一度せめて容しき顔なりと見せさせ給へと落ちたぎつ涙に絶え入り給ひけり。三中ワキへ村の衆庄屋殿ござれこれは梅若様のお母様申しても吉田殿の北の方疎かにはなりますまい兎角。庄屋殿へ入れませう。エ、勿體ないこと〳〵此女中を身が内へ入れると此方の山の神めが鍋釜がたまらぬぞ。其方が處にとも言ひたけれども氣違ひぢやとて唯は置きやるまい。と言うてもオ、あるわ〳〵。假令千人萬人の回向あらんよりも母の弔ひ給はんこそ亡者も悦び給ふらめ。塚のほとりに假屋を建てゝ入れませう。申し〳〵お母様お氣が付きましたか。傳へ聞く論語とやらんにも獨り子貢塚哨に露すること六年とかや。へそれは師匠のお別れへこれはいとしき御子の爲。カヽル終夜御回向ましませと夕波の船道具引。艪櫂を柱垂木に苫。葺きかけて假の。世に假りの庵の雫か引雨か。露の情を汲み入れて御法の水と諸共にひたすら袖をぞしぼらるゝ。

禿萬歲　六

〔解題〕遊里の禿の生活模様を萬歲唄になぞらへて語つたもので作者は竹婦人。節付は初代山彦源四郎で、元祖河東の語り出したもの。享保五六年頃出來たものかといふ。

中へ文に宿かす。振袖のリヨ曙染もやう〳〵と。紫立ちし初空に春も。幼き半ユリ鶯の。ハルわやくを己がよすがにて。下心に習ふとりなりは。勇みある身のさえかへる。ギンカハリ朝遅げなる雲の帶ユリステ。結びし下ハシリ水の地カヽリこほれるを。とく若に御萬歲と。下お家も榮うる。中しるしには豫てぞ植ゑし。門門三重の。松のいと口ショリ緑して。何れ

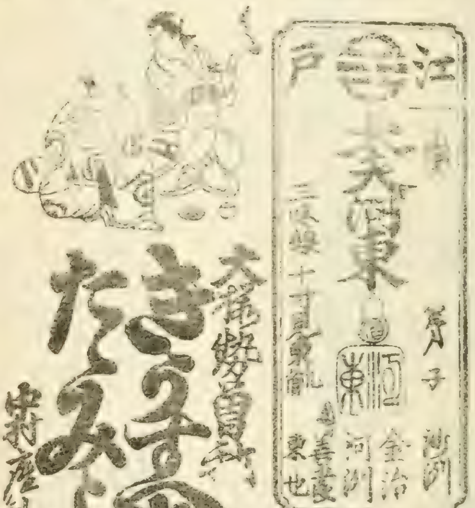
のをより調べけん アミド千代の。数ある ユリ何栄りの・リセドシ押せッ・ケさつ／＼ 羽織も久かたの長閑（のどけ）き春の舞の袖まこ
ホユリ御代ツキユリながら。枝も江戸谷泉鳴の音清く波の鼓は ヒ どう／＼／＼中コト とにめでたう聞えける。
ちさぬ。内氣はいやよ。世心知らぬ姫
ヒロヒ小松。上ギン初（はつ）ね歌ガカリ教へん。手
枕の夢見覺えていたづらや大人心の春
も来て。つとめせぬ間に ハル咲く梅の
下雪だまされし風情あり。ウツリしら
／＼雪の白々と下雪は。しきせのホユリ
みつぎもの。メリヤスフシへ賓の君の御殿造り
の掛カ、リ結構には中綾の襖いニ重ね。中
繻子の階梯（きざはし）。堆（うずたか）く。容さへ近き床
の山。夜もすがらに ト焚き捨てゝ今朝
は薄も匂はしき。ト香聞き行ふ初めよ
りウツリ客といふ名のいとしさはウツリど
うとも斯うとも言へばえに。岩根に生
ふる福草の二葉に物やナガシ思ふ／＼、
メリヤスへ烟草を口に啣（くは）へて職付け煙草
の初も ウソリハル 人の人の若序のしほと バ打てや囃せや鼓はやせ。ウクをとこ
なそ 濡手渡ら逍遊び路にす往 百舟 かぶろのいとけなき ハコヒユリ次つツマ





灸すゑ巌の豊夜着

〔解題〕通称「灸すゑ」。享保十一年春中村座興行の「大櫻勢曽我」の第二番に出したもので、虎が十郎の浪宅へ来て灸すゑをする間の所作事の浄瑠璃で、節付は初代河東(二世河東)・夕丈、手附は山彦源四郎。曽我の十郎澤村宗十郎、大磯の虎山下金作、禿中村ふかん。



中へ二人寝の夢ばかりなる春の夜の。短き年をうらやみて。世話になるのを姉といひ下嘆きを語るを。妹と名を呼び交はす世界なり。今日しも聞けば。虎御前。ハルいとしハル男と。イロ睦みなの寂しさ訪はん心ざし。常磐の。色の。持ちし。昔。[illegible]口に締め[illegible]懐は。下母あたる品々は。今日のたびと。ハルトン夕間松の葉に。上ギン包む事をも。中隠さぬはる人の心をやこれは。姉への土産物。暮。[illegible]風の裲を。さしも草。さしも文七ブシ仲よい同士の誰彼と。手づから茶屋あつらへは古めかし。中思ひつき習はぬ竹箸の。紙にハルウツリかゝれば。

レイゼイヤツシ取直し。節のないのは我二人。すゐて遣るのは。恩ならずユリ。ホブシするさするのを。恩にして男。心の。憎いのも嬉しきほどの野暮となり。下クドキへ貧の病は苦にならず。外の病の無かれかし。左より先づ据ゑ初めてユリステ。右に止めるも夫婦あひ。ウツリサイモン灸に良い日と定むるは。サシ暦に任す世のならひ誑し賺して。さながらに大人氣ないと辱しむる熱さ堪ゆる。ギン二上リへ戯れに。一方に。思し召すかや深きかや人を思ふか慕ふかや。逢へば別れを共儘かこち煙管とる手に横雲わたり梭を投ぐる間も遣る瀬なや。セリファリ下ハシリへ禿は傍に居眠の顔に愛宕の山を見よ。今二火との何偽りも。上ギン男思ひのかり言葉。根切りウツリ葉きりの禁厭のシヅメ熱湯に浸す手拭の濡れて乾かぬ。三重カヽリ合ノ手狂言少将出切へ勤めながらの。憂き身にも洩れてや人の戀衣。ウタカヽリ恨みられては又恨む。心の底の。ハル溜り水。澄ます濁らず出ず入らぬ其仕こなしも化粧坂。下ノリ知る人ぞ知る物思ひ。障る雲なき夕月夜照り添ふ中の戯れかな。

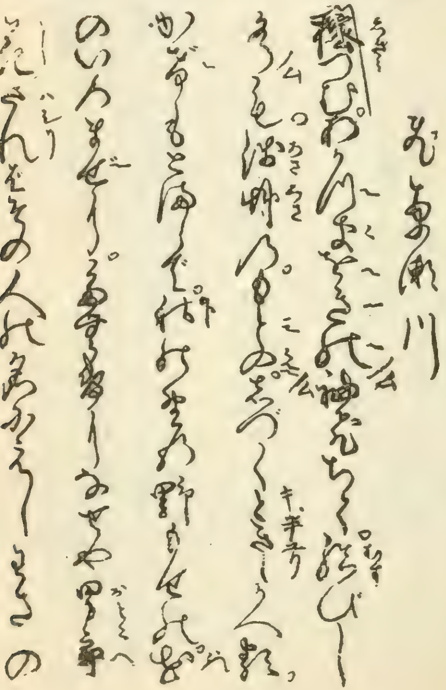
一瀬川　八

〔解題〕初代河東一周忌の追善淨瑠璃。享保十一年の作。作者竹婦人、作曲者初代河丈(二世河東)・夕丈・山彦源四郎。隅田川に舟を浮べてその封切をした時、これを聴かうとて貴賤の舟が河を埋めたといふ。

へ攏つむ。暁起きの袖ひぢて。捌びし水も浅草の。もとの雫と消えかへる。影も止まらで。秋の野の野もせの。ハル花の色交ぜに。手向になせや男郎花。ハシリされば其の人の名に得し業のこと種とて誰がすさみとも。しら。しら絲のとぢ目もしやんと小竹の。節も半ばに残る世の。ハル憂きだにあるにユリしかもその。筆の跡さへいつの間に。かいやり失せて。二瀬川。三重共にと書きし水莖の。すゐばかりこそ。今更に。よし蘆垣の。節の間も。はつかに残る形

見とて。上二瀬川共に渡らん濡れ衣のうらなく解けて。三重の帶。長しと誰か秋の夜の。ウタ閨の隙さへつれなくて。うしや。別れの鐘の聲。聽く度に怨みを。添ふる曉の我が身一つのきぬ〴〵か。とは思へども辛かりき。カン鐘に怨みの。つく〴〵と。中先づ初夜の鐘を聽く時は。契りし宵も有明の。月影遠く眺めやる。後夜の鐘もすぎの戸に百夜も同じまろ寢して枕恥し床の内。晨朝の響には。語りつくさぬ睦言に。添ひ臥す隙もなま竹の緣の空も明けぬれば暮るゝものとは知りながら。下ハシリなほ怨めしき鐘の聲へそれ遠寺の鐘の聲には。紗窓空しく暮れ。又明けなんとしては。ハル別れを催す。枕の鐘。月も數そひて。下ノリすはや名殘の袖と袖とを。招く尾花の影もほのかに。弱るか蟲の。機織る聲は。きりはたり

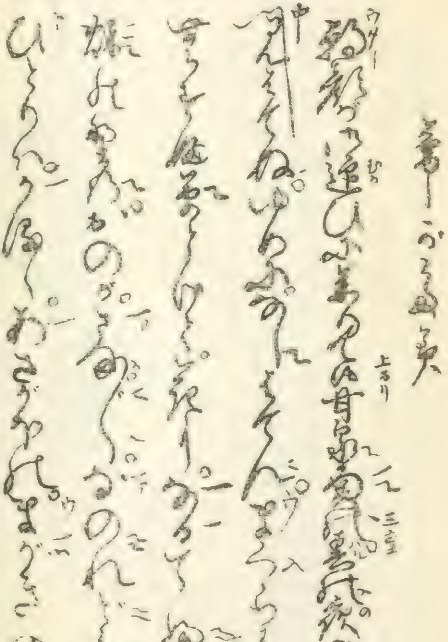
てふ。ハル〳〵。つゞりさせてふ。蟋蟀は又獨り寢の枕に寂しき蟲の音ばかり蜩の。ハル暮の契りを松蟲の聲。下りんや殘ろらん蟲の音。〳〵として合草葉の露の。起き別れて



葬は一流の江戸紫
露は門出の武藏鐙

追善花がたみ

九



〔解題〕享保十二年作。作者竹婦人、作曲者初代河丈（二世河東）・初代夕丈・山彦源四郎。初代河東の三回忌追善淨瑠璃で「一瀬川」と同じく兩國の川開の中で語り、大いに賑つたといふ。

ニナル回向院が御堂に參りて候 ハヅシ 甘泉殿の、其夜の夜のへ見果てぬ夢に。たぐひてん枝に結ぶ草とけて。花になれてふ野の野のおのが。様々。名の花どもう露にかゝる、御顔の。露の竹の一節を、今開を傳へ明日までと。今朝上咲日の花ならず。間なく／＼に咲きかへて心と計なと夕あらし日かげ待つ間の柴やは庵の ギン淺茅が宿も住みうかれこ と降る里の軒の雫のしのぶ草 エリ忍ぶの上にスヱし休らふものは誰やらん。名 忘れて。たどり 行く ハル末の シヲリ萩 に似たる。古へを。つい業平に見つけはおりながら數ならで。これともいさ か下枝も。尾花かあとも。果ては時雨 られ。あれはそれかと レイゼイ白玉か。何

ぞと人の間ひし時せめて夢とも。答へ　上ほろと泣いたは　上ほろ〳〵上落ちて　に。袖をしぼりつゝ。譬むれば元の幻
なば　ギン積る言の葉いひてましなには　流れて流れて末は。水に絵をかく鳰鳥　を見果てぬ夢に。なし果てん枕に結ぶ
につけて憂き事は。あしの假寐のあな　の乾く間もなきあはれよの　合干す日を　草とけて花になるてふ　ユリ手向草ツマケ
がちに。身をいねがてに思はねど。　いつと待ち出でん。　下恩かやとはに。　桔梗刈萱。女郎花。紫菀といふはかの
先づしをるゝは心にて下ノリわが身にけ　契るとも松壽千年終に朽ちぬ。槿花一　人の。教へし道に咲く花を知らでや仇
たぬ色ながら紅葉に置けば紅るの。た　日白から。紫花の露の宿りぞとかたみ　に手折るらん。
まく〳〵人に近寄れど。涙にやとふ袖の

酒中花　一〇

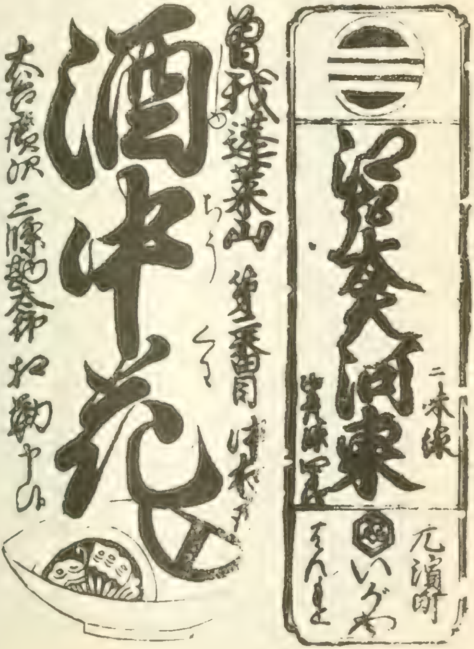
〔解題〕享保十三年正月中村座「曾我蓬萊山」興行の時、第二番目に出したもの。作曲者は江戸太夫河丈・夕丈・山彦源四郎。大谷廣次の東金茂右衛門、三條勘太郎の大磯の虎で、二人ともに好評であつたが、殊に廣次の東金茂右衛門は、上方に於て演じて名聲を博した當り藝であつたのを、この興行に久し振りに江戸の舞臺で演じたのであつた。因に、江戸長唄のめりやすの古曲「とうがね」は本曲終末の東金の唄から脱化したものであらう。

庭の。下たき火の。入しろ〳〵とあけぼ　中ギンしきせ小袖の一重上ギンこれも祝ひ　禮出たち禿は對の裾模樣。ツナギ梅は光
の知らす鶏は。そのきぬ〳〵に引きか　と。下着そめては。下ヲクシまた脱ぎか　琳あふぎやぞめのノル柳さいしく〳〵ハル
へてけさは。にくまぬ色ユリ聲ぞかし。　ゆるとり〳〵の。イイゼイ思ひつきなる　はづれ事白きはしゆすの　アタル上ムスビひ

ときりやう。ウタガカリ染めぬ手がらはァタルユリこの廓の。上素顔。素足に初春の改りゆくものごしは今日一日の。神ことば合ノ手狂言アリ　ウタヒ面白の有様や。下酒にうかめる上ギン花の紋三重。中二つ瓶子カン二つ瓶子しやく取る禿の手もたゆく。大洲流のなみ〳〵と受けてこぼさぬ。盃にオス開いて散るやはな空穂。酒に力を借すとてか　ノル風のさそへば自ら。ハルかをりもこゝにいたら貝ひとつ。ほしては思ひさし抑へられてはあちら向きムスビ。上イロ左巴に。右巴サイセンまはらぬ女郎の片意地は。しにせの。とらがギンガハリ右だたみ。へりへこぼすを咎められ。綱の手合はせ。ギンつなぎ馬セリフアリ　上クル大一大萬大吉と。　呼ぶにのみこむ。煙草盆きせるのらうの竹の雫。草の煙のたな　オスびきて白一文字輪ちがひは空に別れて三重。。月と星クリ三重。

迎ひシヲリ酒ならも一つとまたナガシ傾く　よめご里の勤めをいつか放れて心の

る盃に　ユリウツリ手のまひ鶴の両翼。下千　まゝに木の落葉を誰か知る。シヲリ知る



蔵も二人をりゐほし君が言葉を。立烏　人ぞしろ酒機嫌。カン花さへ酔を催せ

帽子。ウタへ東金の茂右衛門女房はよい　り。

水調子　一

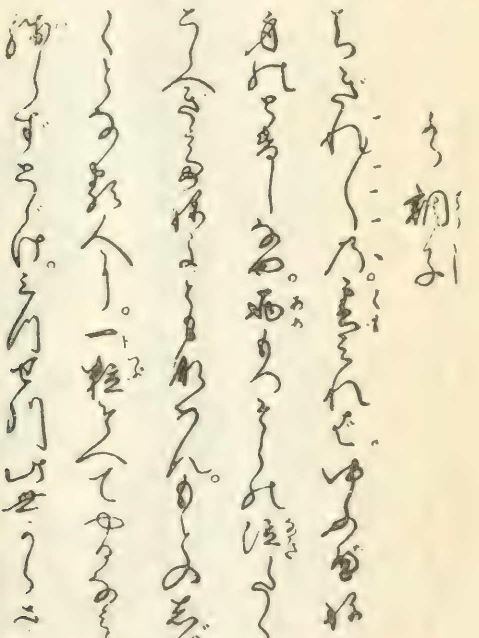
〔解題〕吉原角町中萬字屋勘兵衛が抱への名妓玉菊が酒のために享保十一年三月廿九日に廿五歳で人々に惜まれて世を去つた。この玉菊が生前河東節を愛好したので、その三回忌に當る享保十三年に吉原蔓蔦屋の主人であつた庄次郎事初代十寸見蘭洲が竹婦人に依囑して作つた淨るりである。古版正本の表紙に左の連名を掲げてある。

河丈　ワキ 宇平次
江戸太夫　山彦東瓢
夕丈　山彦宇右衛門
三味線 山彦源四郎　仝 上村文次郎

これによつて手附は山彦源四郎であつた事がわかる。因に玉菊の人氣のあつた事や、その追善に仲の町の茶屋で盆燈籠をつけた事や、河東節との關係などについては、「江戸節根元集」や「近世奇跡考」に見えてゐて世に知られた話である。

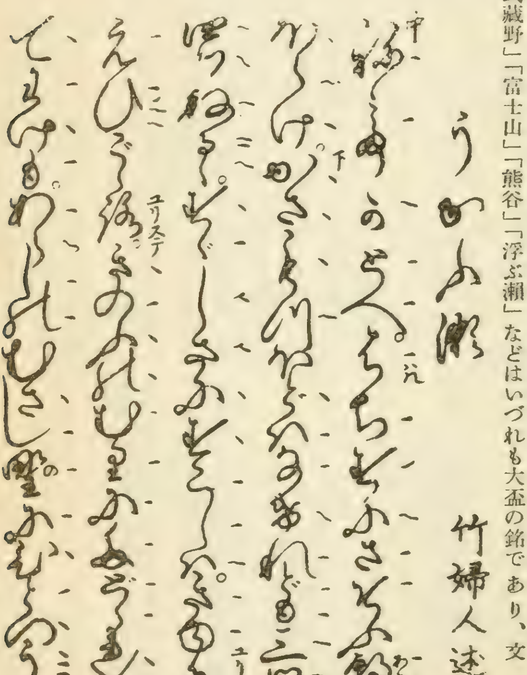
へちぎれ／＼の。雲見れば。ゆうべ寢れの身。うき寢の鳥の顔ひやす。その醉(えひ)まに。父の心は戀ひし蟲。戀しゆかしぬ身のとけしなや。雨もつ空の泣きた醒(さ)めの夢の世に。下ウさいつ。ユリさゝれの一聲を。ギン我は松蟲忘れずば涙。おくば。こゝへ來てねよ伴なはん。本(もと)のつ。ユリさゝれつさいつ。あひの押への。こせよたるら蠢。啼かねば惡う言ふこ雫となる人に。一粒添へてやる涙。殘 中替りめの。手もと／＼の。下暗くなる。とか。ハル知るも知らぬもおしなべて。らず届け。三つ瀬川此世からさへ。流 つひの闇路や親の闇。手向の水の逆さ 惜まぬ者は。ハル嵐ふく。草木も色を失

ふに。妻の悋氣は木枯の。枝葉枯らして枯らしてもいで。もいで契りて通ひ路止めて敵討ちたる顔つきを。憎や鴉（からす）と謡ひしも此夕暮はあはれにも。ほんに冥土のおろせなら便り聞かまし暫し待て。ド貫。やすめよ。禿松（かぶろまつ）。茂みにからむしのぶ草。しめ力なき兒心（こゝろ）に。二人が結ぶ白露を。日元で拾ふ延べ紙の。二折り三折り年を經て言うた言葉を。調ぶれば。ハル泣くより外の琴の音も二十五絃（げん）の曉に。砕けて消ゆる玉菊の。光は假のものながら。本來空の明りには。實に點（とも）すべき提灯も燈籠（とうろ）もいらず撥立てずありし夜店を共儘に。後世の燈（とも）しと明らけく曇らぬ月の俤は。梛（なぎ）の枯葉の名ばかりに。鏡のうらに殘るらん梛は鏡に殘るらん。



浮ぶ瀬　一二

〔解題〕江戸節根元集には、元祖河東の七回忌の追善淨るりで、池の端萬屋で開演された處が、大入で床も落ちる程であつたと見えて居る。併し既に十寸見聲曲編年集にも疑つて居るやうに、追善の淨瑠璃とは受取れない。この淨瑠璃の中に出て來る「武藏野」「富士山」「熊谷」「浮ぶ瀬」などはいづれも大盃の銘であり、文意から見ても、不忍池畔の某亭の酒合戰を綴つたものではなからうか。



近世奇跡考には奈良茂のために作つた淨瑠璃とあるが、奈良茂は享保十年九月に歿して居る（名人忌辰錄）からどうであらうか。「浮ぶ瀬」が大盃の銘として名高い事は、淨瑠璃三國志にも「大薩摩は上戸の聞えありければ、浮む瀬にて責めつけれど、いつかな少しもわるびれず」など見え、又大阪天王寺西新清水に隣れる料理亭に浮む瀬といふがあつて、大鮑の穴數十一あるを塞いで盃とし「浮む瀬」と命銘して藏した。七合五勺の酒を容れる大盃で、こゝに遊ぶ者が是

で飲み干すを一興としたとも傳へられて居るやうなわけで、これが大盃の銘として名高い事は明かである。蕉村の「小春凪眞帆も七合五勺かな」の句はこの盃に因んだものである。

作者は竹婦人、作曲者は十寸見河丈・夕丈、三紋由彦源四郎。享保十六年の作。

中寝てかとえ。蓮に誘ふ朝ぼらけ下傘持つほどはなけれども三つ四つ濡るゝ。涼しさに少しは。消ゆるユリ醉ひ心エリステ昨日の無理にたどられてわけも。あらしの武藏野に一つ受けたる草の露。こぼすな露の。中露の此身はころ／＼とこけて身をとんとさ。こけて性根もさい盃の一は。富士山時三重知らぬ。望に醒めては下その夜降る。色にも出さぬ下白妙のあまり大盞なればとて。母衣絹に包みしより。ギン熊谷とは。名乘りけりウツリそれより源氏榮ゆれば。光をかくし女院は。柴の門のウツリ御徒然の。明け暮は。大原と召されハルさむらひて。世を味氣なき界エリステ衣。身を捨てゝこそ。浮ぶ瀬のかひも信濃も吾妻路もくみて樂しむ。蘆原やこの不忍の七度まで呑みほす。御代は二萬歳かすゞ盃は重なれど。上色も變らぬ友こそは。買ひ得し市の寶なれ。

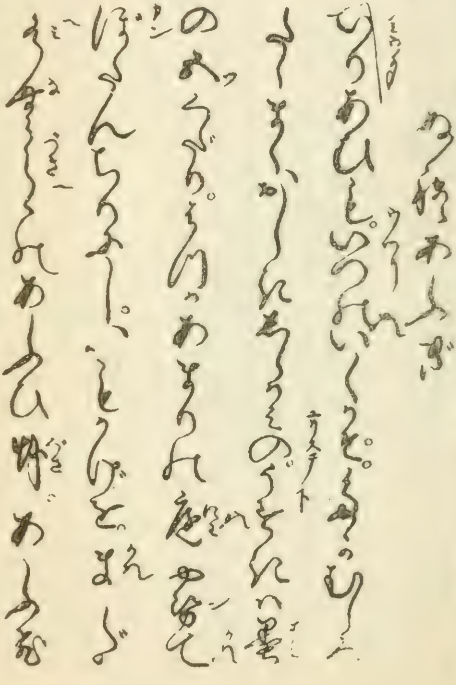
ぬれ扇　一三

〔解題〕享保十六年六月廿五日に歿した初代十寸見蘭洲の一周忌に、その追善淨瑠璃として作つたもので、作者は竹婦人、作曲は二代目河東である。

初代十寸見蘭洲は吉原江戸町二丁目の娼家鶴蔦屋庄次郎といふ者で、性來音曲を好み、初代江戸半太夫に學び、のち初代河東の獨立するに及んでそれに從ひ、河東節の故老として重んじられた。また能書で、享保四年「鳰鳥」を撰んだ時に、自ら筆耕をもしたといふ。

クミウタヘ入相も。ウツリいつのハル何日ぞたかむしろ。。たゝまく惜しき白紙のユリステ薄きは墨の五つくだり。廿日あまりのハル庭やせてクル。カン牡丹散りにし。面影を。クルまだ水無月の葵草。あふひてふ。名は咲きながら水に宿かる中ユリ假の世の。上ハル家名ばかりはまつはれて。上方蔦の細道踏み分くる。中君なればこそ。訪ひもすれ。上泣いてしまをか下ギン焦れて退きよか。蟬と。螢を。ハズムはかりにかけて。下ウないてしまをかのこがれてのきよか。しろかねつぼむ明方に。そこな露めも物を言へ何ぞと問へどクル答へぬは。殘る此身を。恨みてもユリツメケ花持つ葛の。若けれぱ。レイゼイ忘れやしなん夏景色。おそく暮るゝもひとともやうしをるゝ袖のウタ隙無きにさつと。染めたるこ村雨ムスビ淺黄縮に。黒羽織。中へ夜明烏

もいはど開け。氣の毒の山越えかねし木曾の御阪の紀行も隙行く駒の心地して。うつべき鞭はいたづらに。色ツナギ



筆のみ知りて笠とればセツ。涼しく曇る月の顏誰が短夜のしらく／＼ツハル知らぬ人なき名は武藏野に一聲かるゝ

三下リほとゝぎす。上人の心はむごらしや女子心はさうぢやないわいな。アヒ片時逢はねばくよ／＼と愚痴な思ひか泣いて居るわいな。アヒわしを可愛と思うてるやくだかけ鳥のハル啼くや一と聲。ハル現や夢の。下ひとねぶり我があ

らばこそハル。三重覺めもクルせめ。知識　身に沁みて。セツキカヽリ眉けうときなく　して何となされて。花や散るらむ。とは此枕なり。實に有がたき法の道。り書我が身の。ナホス花は散らし書されド偏に。頼む夏衣。ホブシ秋風ハズミ近く　ば歌にも山寺の。下カヽル春の夕を物と

夜の錦　一四

〔解題〕元文二年三代目河東作曲。作者は竹婦人かといふ。元祖河東十三回忌の追善に、玉菊の十三回忌を取越して作つたものであらうといふ。燈籠を中心として吉原の初秋の情致を敍してある。池の端の茶屋で開演し、出演者は三代目河東・沙洲・河洲・蘭示。三絃は山彦源四郎・宇右衛門・新次郎・孫四郎等であつた。

本曲中の「白鷺は使に來たか只來たか……」の歌は、或日三世河東が深川からの歸途永代橋を通りかゝつた折、四國船の船頭等が帆柱を引上げるのにこの歌をうたつて居たのを見聞して非常に興趣を覺え、新淨瑠璃に使つて見ようと思つて、こゝに取入れたものであると、江戸節根元集に見えて居る。

上へ千代の契りの。一踊り。松坂。ウツリ十字一文字。一筋に。軒も曲らぬ。仲ウツリヤレ花なれや。どうで。折らるゝ越えてえい／＼な。人をまつ坂越えたの町。ハル五町を色のえだ／＼に。花が　勤めのユリツケ身。つらき月日のくるえ中ウツリ治れる上御代の光を。掲げん燈籠かノリギン女郎が。花か。藤や櫻は。／＼と。カハウキブシ廻り燈籠の。相撲ととユリステともす燈の夕煙民の。竈の。顏ばかりほんの。香りは。袂より。合り。ウツリ肌を見するは。恥かしうないノル賑ひと。惠み自慢は。ギン御歌の三ウツリウタカヽリ洩るゝとめきの花なれや。か合ウツリいかにウタガカリ男ぢや馴染ぢ

やとても。蚊帳の内にも。ギンムスビ 仁義あり。イロ地 じやれに言うたを本にして。ウツリ 後の誠は。徒らにかはる燈籠の。ハルウツリ 飛鳥川 合 昨日の口舌。水にして。さつと流せば飛ぶ螢。上ユリツヾケ 燈籠の中へ。身を捨てゝ。共に焦るゝ。クルウツリ 鹽釜の 文七 あまり隈なさ。影おもはゆく。ナホス 月も頭巾に。顔隱す ハ ズミユリ。雲の往來の。繁けれど同じ風

なる星と星。ウツリ 雨の降る夜も。また風の日も。見つけよかしの。九十九夜。ふくら雀と。ハズム 通ひ路。オクリ 百になりても忘れぬ蹤。ウツリ 人目づつみを越えたえ 二上リ 白鷺はノウ クル 使に來たか唯來たか。使にも來ぬ。たゞも來ぬ。妻を尋ねて白濱越えて。逢うて戻れば千里も一里。逢はで戻れば 入 又千里ほんにえ。エイ〳〵〳〵〳〵、サテ

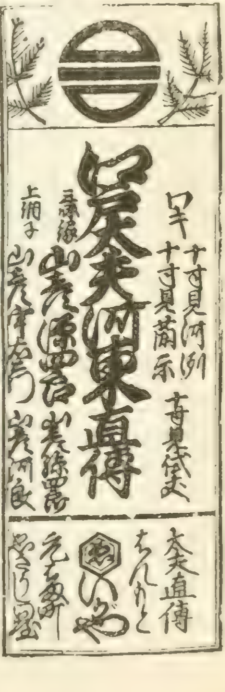
イカニ ドハシリ 行きては歸り歸りては。ハル 通ひくるわの。繁昌は。下ル いづれ世の中。よし原の。上ル 色の千種を押分け 合 かき分け、えいとう〳〵 クル えいとう〳〵とうからからろの舟燈籠。上ヒロヒ こがるゝ身よりと書き捨つる。これ文月の言葉なり。

亂髮夜編笠（みだれがみよるのあみがさ）　一五

〔解題〕　寬保二年春中村座興行の「娘曾我凱陣八島」の第二番目に出したもの。八百屋お七に中村富十郎、丁稚三吉に佐野川市松、八百屋久兵衞に嵐音八、お七狂亂の所作事で、大當りであつたと根元集に見えてゐる。出演者は挿圖に示した古正本の連名によつて明かである。本曲は安永三年春森田座で「着始初買曾我」に富十郎が二度目のお七で繰返されて又々大當り、更に天明五年春桐座の「重々言葉曾我」に三世瀨川菊之丞のお七で更に繰返されたもので、河東節としては、所作事淨瑠璃の尤たるものといへる。通稱「夜の編笠」。

上花の。姿を風車。吹けば狂うて散りぬらむ。上水にも波の。狂ひあり山にも。松の木ユリ亂れ髪。上取りあげて 入結ふ人も。泣いた顔せず腹立てず笑ふを鍔の。タル物狂ひ。合ノ手富士郎出 クリヒ しやんと小褄をとりかぶと。それにはあらぬ。編笠も男欲しさの。星祭。本七夕の夜も仇に見ん。ノリ小袖をかりの狩衣と脊流し ギンカハリ ながし長羽織。結べば笹の枝垂れて。正月遊び ハル戀草の。手先づ遣る手道具を 上並べた今の雁金も ギン二つ連れぬを。恨みとや。三つ四つ手鞠。つくばねの。上品を遣羽子。羽根うちをはす。カカル燕雀の。飛ぶさにも。マヒガカリ雪花が散るわの。客に羽根が揃ふわの。上唄は二の絲鼓をうつし。上方父戀しやと取付けば。つたくくかべに蔦葛。ほゝほけきやうと。啼く鳥は。梅を縫ふてふ。ノリ笠借りて。マヒ

いさや蘆を刈らうよ。よしあしの葉を。イサテイカニ ハル引けば袂を振り切り結ぶならば、文よりましの。かね言も。て昨夜の口説。今日の酒。うつらくニ上リ白鷺は使に来たか只来たか使にも と睡る蝶。菜種は蝶の花知らず。合ノ手



来ぬたども来ぬ妻をたづねて白濱越え 狂言ア、くく嬉しやな。上あれあれて。逢うて戻れば千里も一里逢はでで。を見や虫さへも。ハル露の命の置きど戻れば又千里ほんにえッ、エイくくエ ころ。命といふ字は誰が書いた。中白無

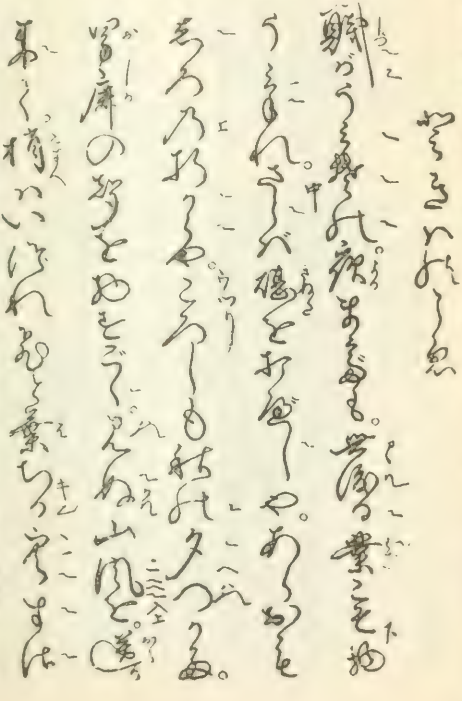
垢脱いで。見せさんせ。アヽあんまりな面憎や。ムスビ憎い／＼は可愛いの裏よ。罪ぢや／＼は。又其の裏よ。泣いて威すはそれ裏の裏ヨイヤナエ上又うち伏して泣く顔を襟につゝめば差し覗き。色地共に涙のこぼるゝ萩は秋の。花野を踏む足元も。伊勢音頭忍ぶ。人目のすき油解けてぬる上ギン夜の。中ギン中絶えて。獨りまろ寢の油壺。誰が小枕のかみわげもヲヽ短夜。ながら丈長に。思ひ廻せば明けかぬる。上其曉の櫛はらひ拂へど袖に散りかゝる。紅葉袋の鹿ならで。今は二人が憂き戀すれどだの。末の松山色變へぬ。萬代かけてえ。萬代かけてえ。ついでにひやらしにのりの道鉦も太鼓も打添へて。三ドリそなた戀しさに七里が灘を。命やすてがい來た物をほんにさ。ウツリはなれ／＼の彼の雲見れば。翠の別れがおもはるるほんにさ。ウツリ見れば見渡す棹さしや届く。何故に届かぬ我が思ひほんにさ。ウツスナホスかねてと結ぶ。手に手もたゆく。ギン西へちろり上東へちろりと星の影。ユリツヾケハル水の月かや。姿はあれども。手には取られぬ箒木のありや。ヤツハなしやと。尋ねて爰に。ムスビド戀しゆかしの。上人が笑はゞ明の鳥も下諸共笑へ。人が嘆かば共きぬ／＼の鶏も啼きスエハル鐘は生滅妙法蓮華。ハル清く響けばハル手向の水に。ハスミ花折り添へて佛の。御前の。それ其姿重戀人返せ。憂き人返せ。返し昇風の雲間も白む。早や東雲か。夫かあらぬか心の綱も。共に引かるゝ思ひ川下ノリ舟は無くとも濡れてゆく。彼處に。立てば。此方へ走り此處に止まる二人の袂そなた。ばかりの源氏雲。ハル思ひ桐壺地縮合せの君は白地の扇の風も倶にちり行く夢路の誠。上消えて果敢なき花の塵塚まどろむ宿にぞなりにけり。

常磐の聲　一六

〔解題〕延享三年四世河東・山彦源四郎作曲。謡曲「砧」の改作。根元集には小栗吾妻聟糸操の段の内より抜物なりとある。

上へ賤が紡苧の。夜までも。カヽル世渡る業こそ上物憂けれ。中さらば砧を打つべしや。あら面白の上折からや。ウツリ頃しも秋のハル夕つ方。牡鹿の聲を物すごく。ハル見ぬクル山風を。上迄り來て。梢はいつれ一葉散るギン空すさまじき中ユリ月影も。ハル軒の葱に。うつろひて巴重露の玉だれかゝる身の。思ひを。のぶる夜すがらや。スエ引ウツリ平家宮漏高く立つて風。北に廻り。隣砧緩く急にして。上月西に流る。カヽル故郷の軒端の松も心あれ。己が枝々吹くとても。嵐の音を殘すなよ。今の砧の。音そへて。イロ君が其方に吹け風や。餘りに吹きてギン松風よ我が心通ひなばもしその夢や。破らまし。色地破れて後はこの衣下誰が來ても問ふべき。來て訪ふならば何時迄も心はたちもかへなん夏衣。ユリツヾケ薄き契りは。ウリ忌はしや。君が命は下

長き夜の。ハル月にはとても寐られぬふ蟋蟀常磐の聲の松蟲に八千代を。。に。いさ〳〵衣擣たうよ。マヒガカリうた祈る三ツユリ祝子が。神をいさめの鈴虫るゝ度に蘆の屋の。ハル燈。ウツリゆり消の音。ハルりん〳〵と小夜更けて。砧の



す暗まぎれ月も三重傾き。置く霜の。音夜嵐。悲しみの聲蟲の音交りて。落いと物凄き折からに。蟲の諸聲何々ぞ。つる露。涙下ノリはら〳〵。ハルほろ〳〵手を助けんと機織の。ウタつゞれさせて〳〵と。。何れ。ウツリ砧の音やらん中ギン

いさ〳〵さらば機物の。衣を地織りて旅人の。御慰めを申さんと。カヽル錦を織るなる機物の中に相思の字を顯はし。ウリギン衣うつ砧の上にゑんれつの聲。こゝは所も浦近き松吹く。風と。諸共に。磯打つ波の音そへて。ギン頻りに隙なき機物の。ノル取るや。呉羽の手ぐりの糸わが取るは。綾羽ふむ木の足音きりはたりてふ上きりはたりアヒハヤメてふ〳〵と。かたきも恐るゝ聲なれや。中ギン實に織姫のかざしの袖。上たま〳〵逢へる旅人の。カン夢の精靈妙童菩薩も影向なりたり終夜。下〳〵賤が營み人目も恥かしお休みあれ人々と。かこちわびたるばかりなり。

助六廓の家櫻　一七

〔解題〕寛延二年春中村座「男文字曾我物語」の第二番目に二代目團十郎の海老藏が一世一代の助六を演じた時の出端に語つた淨るりである。揚卷は瀬川菊次郎、白酒賣二世中村七三郎、意久市川宗三郎、門兵衛澤村喜十郎、朝顔市川團太郎。作者は藤本斗文、作曲者は四世河東と山彦源四郎である。この年吉原仲の町に始めて櫻が植ゑられたので、舞臺にも櫻を飾り、外題にも詞章にもそれを通はせたのである。

カンこの里ばかり浮世ぞと。果敢なき身にも。今年より。春知りそむる三重櫻花。根こじて植ゑてギンガハリ待つ暮の。よすがとなりし仲の町。飛鳥の山を。居ながらに。爰に移して陸奥の。千賀の鹽釜。カヽル虎の尾に。通ふ千鳥のサツマ名に立てる。レイ須磨の若木の初櫻。ウリ浮氣の風に誘はれて。ウツリ群れ來る人のヒロヒ袂まで。匂ひ櫻の香にめでて。暮れなばなげの花の蔭。ナゲブシ吉野初瀬はものかはの。鐘に散り行く夕景色菊次郎出端カンこの面かの面に。木隠れて。首尾待つ君が仇櫻。映ろふ色や紅の。ウツリ薄花櫻や樺櫻上浅黄櫻や八重七重小褄揃へて。ハルしどけなく上きぬ〴〵

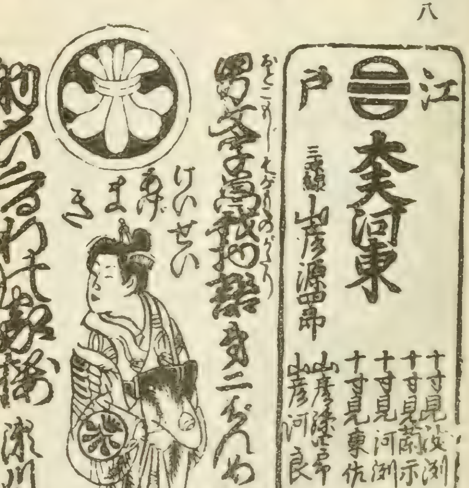
送る。曙の ハル花の吹雪の一景色。わ 戸。人に知られし家櫻 ウリ今日ぞ郭に り添ふ。珊瑚の珠の朱恋ふ ユリツマゲ江戸けて短も嵐吹く スヱル木の。ノル下蔭に 咲きそむる。ハシル谷蛙牡丹の五つ紋。紫の鉢巻に。色■所縁の色の。紅葉傘。かぐろひて ド時ろさ告げる犬櫻。口古の花 ■一中ほころびし袖を忝か力草。ヲハツレ 引かれて行くや後場 三重心強くも桐が谷 此間狂言ナリよしや頼むな。一と花心過ぎし夕の惜い事。開いた噂をたきつける、胸の緋櫻 上焦れては橋場に靡く ウリ夕煙容井櫻の容に消え ユリホノシ行方も知らぬ。継に身を移り香ばかり カヽル抱き締めて。 また庭の ハイ ムギ リ夢をこそぐられ浮世に返る。清掻の。ねむい目元の カヽルユリ上絲櫻。睡覚めよと。吹きかける煙草も薫る 三重花の雲海老蔵出端鐘は上野か浅草か。名もなつかしき花川 二重がさねの。一つ前ウツリ 一つ印籠光 さすが名に負ふ男山 海老蔵セリフ有 ナゲブシ



しんぞ命も總角の。これ助六が前渡り。風情なりける次第なり。

戀櫻反魂香　一八

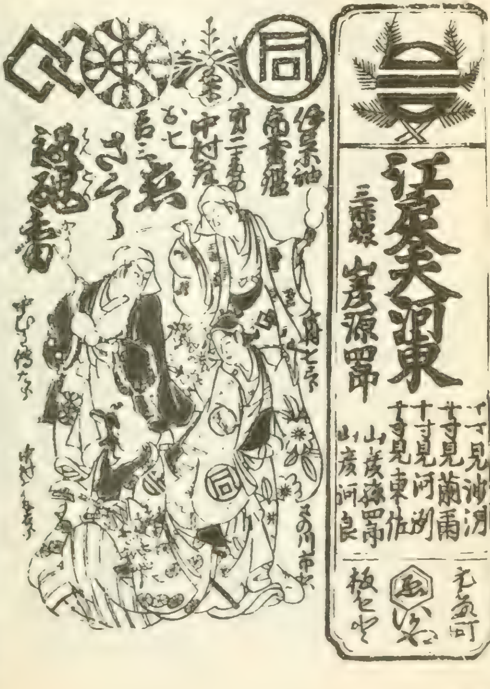
〔解題〕寶暦元年二月中村座「伊豆小袖商賣鑑」第二番目に出したもの。「傾城淺間嶽」の飜案で、お七が吉三の繪姿を灶くとその煙の中に吉三が姿を現して所作になる仕組。お七に佐野川市松、吉三郎に中村粂太郎、鉢叩き中村七三郎に中村傳九郎。作曲者は四世河東に山彦源四郎。



中三重へ春の夜の。夢ばかりなる手枕に。かひなく立ちし嫁が萩。アミドガカリ三葉四葉に中ユリ殿造り。ウツリその主樣の行方をも上ウリ聞かん便りの封じ文。かの雁がねも今茲に思ふも實にや戀の闇。百夜も慕ふ百千鳥合ノ手市松出いなおふせ鳥。呼子鳥。聲をばかりに迷ひしを。道行く人は狂氣とも。笑はゞ笑へ今日に祈る普賢象 三重いつか二人が家櫻。よりも。上飛鳥の山の。ひと霞。帶引き楊貴妃鹽釜樺櫻。淺黃櫻はいやぢやもしめて。小褄ほら〳〵八重一重。墨染のウツリよしや吉野の花よりも。君の面櫻立出でて。虎の尾を踏む心地にて佛影逆ひなく。レイセイうつす姿に抱きつ

き。中物言ふ如く顔と顔。上ハルよるべ
定めぬ道芝の。とある所に立寄りて。
暫く心を休めけり。狂言 合ギンカ、りへげに
絲遊と諸共に。たなびくうちにあり
〲と。吉三郎が姿こそ菊太郎出端 合二上り
通ひくるわを遠近の。たつきも知らぬ
姿絢を。姫となすは我を戀ふ。緣に引
かるゝ車の輪。カン巡り〲てきさらぎ
や。ウリ着つゝなれにし戀衣。ハルおし
も嬉しき紫の ウリゆかりほのめく仲の
町。源氏の君を手本にて。薫る大小掴
み着し。振つて振出す道中は 合ノ手上 外
八文字 ウリ大様に。足は千鳥か鶯の。月
日星ぞと鳴く時は。合ハル四方うら〲
とうらやまし。よその口說の手管にも
狂言 合恩にきせるの紋日にも。人にあ
はずの晴嵐と。さりし ハル〲近江屋
巴屋の。左と右に行違ふ。下ノル土手の
春色朝景色。羽織を招くきぬ〲に。

三下り 合 其方思ふかしら浪の。舟に筑波 路に。消えて 三重形は失せにけりおし
を載せて行くわいな 合へそなた思ふか は興さめ此處彼處。地 草葉に袖の引敷



しら藤小藤。駕籠に浮名を乘せて行く 物。ハル狂ひ巡りし有樣を皆。逢はぬも
合上ハル現に逢うて 下わりなくも。互に のこそなかりけれ。
手に手をとりの聲。下ノル横雲白む別れ。

〔解題〕寶暦十一年三月市村座興行の「江戸紫根元曾我」の第二番目所演の助六劇の助六の出端に用ひた淨瑠璃である。作曲者は四世河東に初代山彥河良、出演者は挿畫正本表紙の連名の通り。作者は金井三笑・櫻田治助。配役は、助六に市村龜藏（後の九世羽左衛門）揚卷に二世瀬川菊之丞、意休に二世澤村宗十郎、白酒賣に四世市川團十郎。

江戸の助六淨瑠璃は正德三年四月山村座興行の「花館愛護櫻」の外題で演じたのが始めで、この時は淨瑠璃は江戸半太夫であつた。次に享保元年二月中村座興行の和助六（半太夫物）、それより河東節でも「富士筑波二重霞」（享保十八年市村座）「助六廓の家櫻」（前出）「富士筑波卯月里」（寶暦六年中村座）等が上場されたが、本曲が作られてからは、これが助六淨瑠璃の代表作となつて、其後度々繰返されて、市川家の十八番物の一と迄なつて今日に及んで居る。詞章は前に出た諸作を取つて點綴したもので、さしてよい出來ではないが、作曲がよいので行はれたものらしい。



（特に原本の面影を示すために、初演當時の古正本を全部覆刻してこゝに掲げた。）


江戸太夫河東
十寸見東支
山彦河良
山彦秀次郎
山彦新次郎
元二丁目
市村座

所縁江戸櫻（ゆかりのえどざくら）

狂言作者　金井三笑
桜田治助

上クル一はる霞カン立てるやいづこみ吉野の山口三浦うら〳〵とうら若草や本ユリはつ花に本フシ和らぐ土手を誰がいうて日本めでたき國の名のウツリとよ蘆原や吉原に三重根ごして植ゑし上江戸櫻にほふ夕べの風につれ鐘は上野か淺草か其名を傳ふ花川戸「懸詞出カン」をちこち人の上ハル鳴子鳥クルいなにはあらぬ逢瀬よりこゝを浮世の中の町よしやかはせし來し方をウツリ

上一

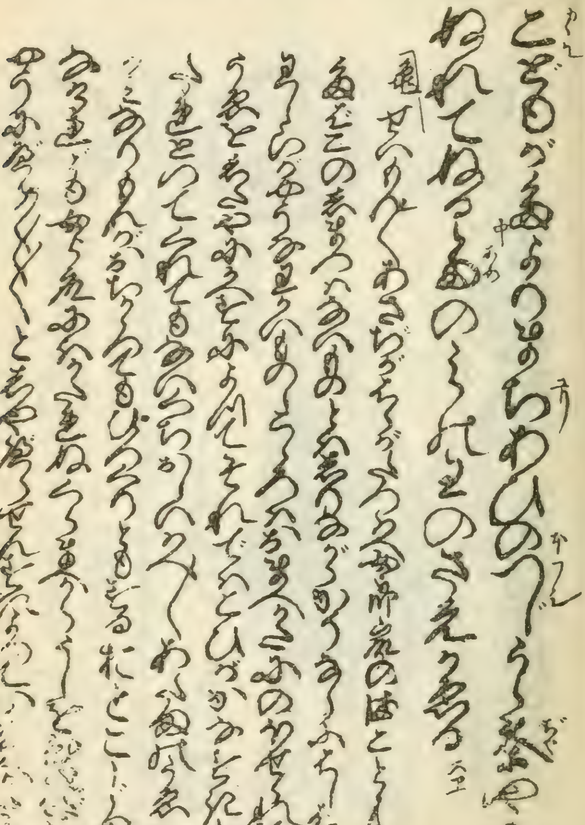
思ひ出見世やすがゝきの音じめの撥に上招かれてそれといはねどかほよ鳥まぶの名とりの草の花引スヱ

「(揚巻)笑止、地廻りの若い衆かと思うたれば助六さんぢやわいな

「(秀松)助六さん今迄さるお相方様がお前の事でこゝに氣をもんで居さんしたぞへ

「(揚巻)それにお前は悪性ばつかりしてゐさんすほどにのそのやうに浮氣では揚巻さんにしつぽりと叱られさんせ

と逢うてあや
まつたがよい
わいな助六さ
ん「[illegible]ほんに
「[illegible]さうちや
なあ
上ウリ 思ひ 上方ブシ
そめたる五所(いつところ) 上
入 紋日待日のよ
すがさへ カヽル 子
どもがたより ユ
リ 待合の 本フシ 辻
うら茶屋にぬれ
てゐる 中 雨の蓑
輪のさえかへる スヱ
「[illegible]せいもん
〳〵あさちが
はらが立つわ
え、女郎衆の
誠に煙草の始
末はないもの
とは知りなが
ら、かうなら
う橋場か、わ
しら等がやうな
若い者の心は
お前方にのほ



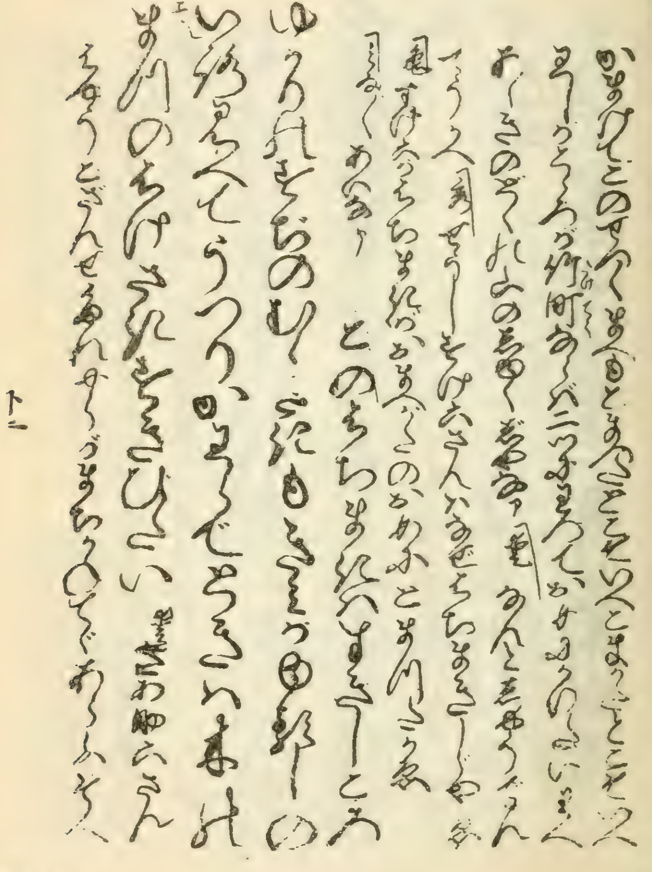
上二

せられて、上を下谷にかへすによつて、それでは戀が金杉と、たれとつてくれてもない、口惜しいわえ／＼、あたまの上へ雷門が落ちかゝつても、びつくりともする男ぢやァなけれども、女郎衆には勝たれぬ、藏前から牛を引出すやうに、べら／＼／＼／＼としやべらせんすによつて、おまへ方に、かまけて、この節句前も困つたとこそいへ、駒形とこそいへ、わしが心が竹町なら

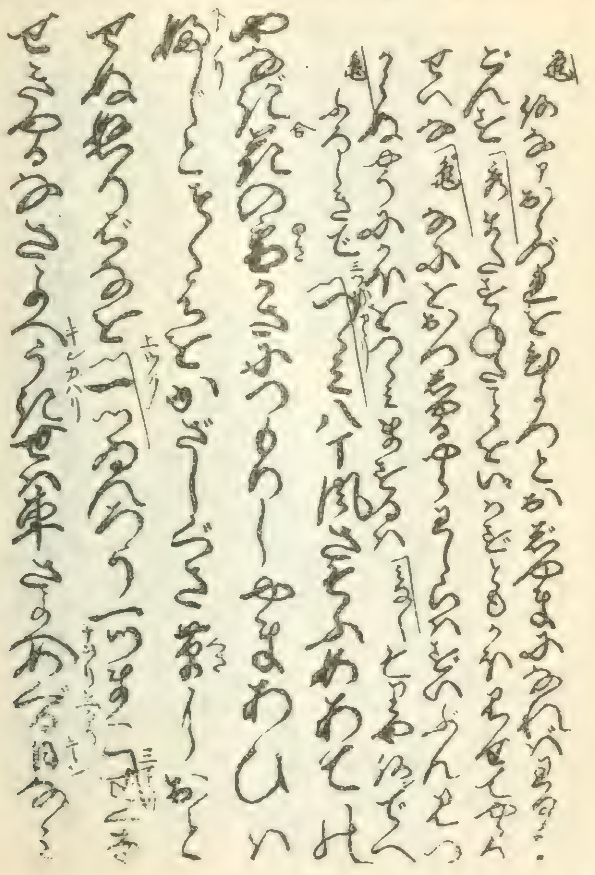


ば、二つに割つてお目にかけたいわえ、あゝ氣の毒の山の宿(しゆく)ぢやなア「(愛)なんとしやうでん町(ちやう)かえ「(亦)笑止、助六さんはなぜ鉢巻ぢやえ「(總)助六が鉢巻が、お前方のお目に止つたのかえ「(皆々)あついなア

イロ詞「この鉢巻は過ぎし頃由緣の筋の紫も君がゆるしの色見えて移りかはらで常磐木の上ハル松のはけさきすきびたひ「(愛)さあ助六さん、早うござんせ誰やらが待ちかねてであらうぞえ



「亀何なアおらづれを、ひよつとお邪魔になれば悪うごんす「秀またすねた事をいはずとも、顔見せてやらんせいな「亀何をおつしやるやら、わしらは隨分見つからぬやうに、顔を包みまするわ「皆々そりや何でえ「亀風呂敷で三ツ地カヽリ「つゝみ八丁風さそふ日あての柳合花の雪傘に積りし山あひは下ノリ富士と筑波をかざしぐさ草に晉せぬ塗鼻緒上ウリ二つ印籠一つ前三下リ「せくなせきやるなさよえギンガハリ浮世は車さよえナホリ上ルリめぐるギン日



なみのレイゼイ約束に離へ立てゝ訪(おとこ)れもオロシはてては口舌(くぜつ)かありふれたムスビ手くだに落ちて睦言とゥツリなりふりゆかし君ゆかし「[illegible]君なウ〳〵上ハルしんぞ命をあげ後のこれ助六が前渡り風情なりける次第なり

阿丈

江戸河東直傳之正本を以令板行者也

市村座板元
たちばな町
二丁め
いづみやごん四郎

筆始四季探題　二〇

〔解題〕略して「四季の探題」ともいふ。天明三年の作。例の十八大通の一人で、五代目河東の門弟であつた藏前の大和屋文魚（寛政十二年歿、年七十一）が自作自曲で、二代目山彦河良が手附をしたもの。和歌の探題の趣向で四季の景物を敍す。

シテへいつしかに硯の氷解けそめてへ筆試むる文臺に、今日初春の歌合せ。當座は四季の探り題、吟じ合ひたる詠歌の、聲もうらゝに日影さす、谷の戸出づる鶯の、木傳ふ枝や梅柳。霞こめたる野邊の色、子の日の小松今日よりも、君に曳かれて萬代も、變らで通ふ雁金の、都の花もいかなれば、後に見捨てゝ行く旅の、越路は雪のしら／＼し。しらけたる夜の睦言に、賤が垣穗に卯の花の、盛りはまだき郭公、おちかへり啼く五月闇、空のあやめも軒近く、花

ツレ橘のうつろひてシテへ昔ゆかしきツレへ袖の香も、風にまかせし夕涼み。晝の暑さも水無月の、御祓の今日の河の瀬に、晒の木綿幣淺くとも、ふかき緣の星の妻。まだ睦言の盡きなくに、明くるは早き朝顏の、花一時も千歳ふる、松の梢に望月の、照りそふ影のさやけさは、實に二千里の外までも、果しなげなる武藏野や。桔梗苅萱われもかうへ千草にすだく蟲の音の、ツレへいろ／＼なりしその中に、わけてやさしき松蟲の、聲りん／＼と更け渡る。夜の間は人も

白妙に、つもるや雪の朝景色、水に浮かめる 三重 鴛鴦の、シヲリ岸の枯蘆風さえて、身は隱れぬのかくまでに、あらはれそめし戀衣 二上リ シテ 誰か恨みん我が思ひ、ツレ深き契りの濃い仲を、忘るゝ戀のあだ事と 二上リへかはるも浮き人心 合ノ手 シテへうつゝ心が見し夢の、さめて淋しき鳥鐘の聲 本調子へ響く山家の程遠く、道に寄せたる祝ひこそ、實にも直ぐなる御代の春、なほ行く春の末遠く、數へかぞふる言の葉は、濱の眞砂の數もつきせじ。

露の二葉　二一

〔解題〕初代山彦源四郎の三十三回忌追善として詞章を馬場存義が作り、六代河東が作曲したものである。天明八年の作。

シテ〽靜に曉の夢にかたらへば懐舊の露　變らぬ色の緑どち。二上リシテ〽松の二葉　〽花の縫に燈籠の陰に、三つの友垣打
手枕に結ぶ。ツレ〽その年月も三十三、　はあやかりものよ。青葉はまして落葉　ちつらね、遊び戯れ行く久方の、天地
花橘に巡り來て、程時過ぎて鳴くなる　さへツレ〽妹脊變らぬ契とは、嬉しから　と共に常磐の山彦の、こたへぬ山はあ
も、昔ながらの聲なれや。絶えぬ音羽　うであるまいか。三下リ竹の小枝のそよ　らじ萬代。
の瀧の糸、三筋の末の百千筋。惠の露　〱ものよ。なびく姿にほのめくふし
の玉の緒に、かつ貫きとめし言の葉は、　は、風のよすがであるまいか　ナホルツレ

道成寺　二二

〔解題〕謡曲「道成寺」の改作。始め半太夫節にあつたものを取つて、式部節を取入れて改調したものであるといふ。六世河東（寛政八年歿）と二世山彦源四郎（寛政四年歿）との作曲である。江戸節根元集には次のやうに見えて居る。

「天明年中淺草駿河屋にて興行、河東、ワキ二代目蘭洲茅場町沙洲、三絃二代目源四郎手附、ワキ二朝、上

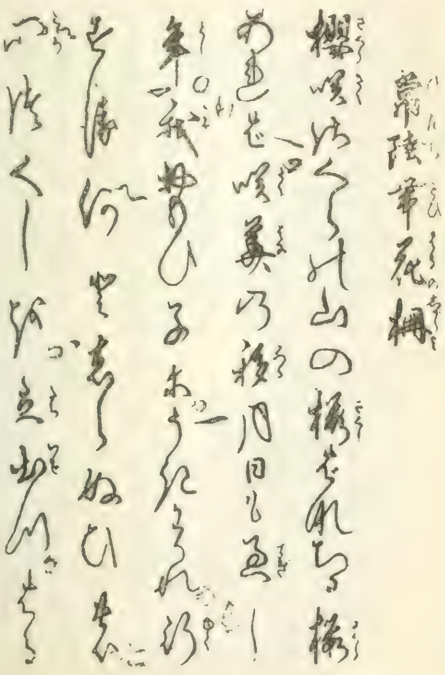
調子百次、貴賤群集なり。
寛政三年の開曲との說もあるが如何であらうか。

ワキへ扨も其後紀州道成寺には、さる仔細あつて、撞鐘退轉す。此程再興し、鐘を鑄させて候。今日吉日にて候程に、鐘の供養を致さばやと存じ候。いかに誰かある。鐘供養の場へ女人は堅く禁制と、ツレへ近國在々觸れをなし、鐘の供養す。シテへ作りし罪も消えぬべし。作りし罪も、同音へ消えぬべし。鐘の供養に參らん。シテへみづからと申すは、そも、同音へよるべ定めぬ忍び妻、紀の路の奥に住み馴れて、人の心を怨むる、白拍子の鼓草、鳴瀧川の流れの身。シテへ道成寺の御寺には、鐘の供養のある由を、同音へ皆人毎に夕まぐれ、月は程なく入汐の、さして我が身の罪科を、作らんことも嵐吹く、御室(みむろ)の山のもみぢ葉は、色に染みにし仇衣の、薄からざりし三從の、罪おそろしく殊には又、罪業深き川竹の、シテへ一夜ばかりの、同音へ手枕に、人の思ひを身にうけて、ながき闇路や、シテへ黑髮の、同音へ亂れ心のむすぼれて、煙滿ち來る小松原、急ぐ心かまだ暮れぬ、日高の寺にぞ着きにける。シテへやがて門前に立寄りて、物申さんとありければ、ワキへ聲聞の法師何事にやと答ふ。シテへさん候。みづからは、此國のかたはらに住みなれし白拍子、鐘の供養の御場を、拜み申さんその爲に、これまでまゐり候なり。ツレへ法師共聞くよりも、心ざしは殊勝なれども、女人は堅く禁制と、仰せ出だされたりければ、叶ふまじとぞ申しける。シテへ女性重ねて、鐘供養の御場を、拜ませたまはらば、常々馴れし舞の袖、面白う奏でつゝ、このほどうちの人々の。心づかれを晴らすべし。ひらに〳〵と申しける。ワキへ法師共是を聞き、所詮舞も一奏(ひとかなで)面白う候はん。幸ひ是に烏帽子あり、是を召されて面白う舞ひ給へ。拜ませんとぞ申しける。シテへ女性よろこび、さあらば一曲奏でんと、あれにまします宮人の、烏帽子をしばし假りに着て、扇おつとりいろ〳〵の、同音へ既に拍子をすゝめけり。へ花の外には松ばかり、暮れそめて鐘や響くらん。シテへひゞくらん。へ道成(みちなり)の卿承り、始めて伽藍橘の、道成興行の寺なればとて、道成寺とは名づけたり。同音へ山寺のや、

春の夕ぐれ來て見れば、入相の鐘に花ぞ散りける。花ぞちりける。さる程に遠寺の鐘に、月落ち鳥啼き、霜雪天に、滿ち汐程なく日高の寺の、江村の漁火愁に對して、人々眠れば、よき暇ぞと、立舞ふやうにねらひ寄つて、撞かんとせしが、思へば此鐘恨めしやとて、龍頭に手をかけ、飛ぶよと見えしが、シテ引きかづいてぞ、合同音へ入りにける。ツレへ磐固の法師驚き騷ぎ、急ぎ斯とぞ申しける。ワキへ住持大きに驚き、さればこそ女人は堅く禁制と、かねては申渡したり。是はひとへに眞砂が娘、霜夜が執心又此鐘に恨をなすと覺えたり。我人の行法は、斯樣の爲にて候へば、がいぶん祈つて、この鐘を再び鐘樓へ、引き上げんと、同音へ手に手に、珠數を押し揉んで、水かへつて、日高河原の、眞砂の數はつくるとも、行者の法力盡くべきかと、皆一同に聲を上げ、シテへ東方に降三世明王。ワキへ南方に軍荼利夜叉。ツレへ西方に大威德。ワキへ北方金剛夜叉明王。シテへ中央に大日大聖不動。動くか、動かぬか。さつくの、同音へ曩謨三曼陀、嚩日羅南、旋多摩訶嚕遮那、娑婆多耶吽多羅吒干𤚥、聽我說者得大智慧、知我身者即身成佛と、今の蛇身を祈る上は、一念毒蛇の恨みの數、何有明の、シテへ撞き鐘こそ、合同音へすはすは動くぞ、祈れ唯、引けや手に、手に千手の陀羅尼、不動の慈救の喝、明王尊體、力を合せてたび給へと、肝膽碎き祈りけり。祈り、祈られ、撞かねど此鐘響き渡り、引かねど此鐘躍るよと見えしが、程なく鐘樓へ引上げたり。ワキへあれ見よ、蛇體は現はれたり。合ツレへ謹請東方青龍清淨、謹請西方白體白龍、謹請中央黄體黄龍、一大三千大千世界の、恒沙の龍王、哀愍納受、哀愍慈勤のみぎんなれば、ワキへ何處に大蛇のあるべきぞと、祈り、シテへ祈られ、かつぱとまろぶを、又起き上つて忽ちに、鐘に向つて衝く息は、猛火となつて、その身を燒けば、あら恐ろしや、有難や、此後又も障碍はなさじ。跡弔ひ給へと、いふ聲諸共、日高の川浪深淵に飛んでぞ入りける。望み足りぬと驗者達、御寺に入らせ給ひけり。へ實に佛法の御威德、有難かりける次第なりとて、貴賤上下おしなべて、感ぜぬ者こそなかりけれ。

常陸帯花柵　二三

〔解題〕通稱「常陸帶」。謠曲「櫻川」の翻案。寛政三年六世河東、二世山彦源四郎作曲。詞章は滿口侯より下されたものといふ。淺草駒形駿河屋にて開曲。



へ櫻咲く、櫻の山の櫻花、散る櫻あれば咲く花の、移る月日も過ぎし年、我が思ひ子に憂き別れ。行く末何と不知火の、心づくしを立ち出でつ、遙々尋ね迷ひ來て、このごろ此處に筑波山。このもかのもの花の香も、名に流れたる櫻川、散り浮く花を堰きとむる、手先かよわき抄ひ網。女心の亂れ髪、取上げて結ふ人も、泣いて明かせし春の夜の、夢ばかりとも見まほしと　往來の人に立ち交り、行きつ戻りつ此處彼處、尋ぬる我が子は何國ぞや、教へてたばせ給へとよ。へ里の子供の日々に、面白う花をすくひなば、戀しと思ふその人の、在りかを知らせ參らせんへナ　ニ面白うすくへとか。我が憂き心も白

浪に、散ればぞ誘ふ櫻川、尋ぬるその名も櫻子と、會ひにあひたる所から、これぞ他生の縁ならん、あら心無の河風やへいで／＼花をすくはん。山花開いて錦に似たり、澗水湛へて藍の如し。面白の春の景色や、筆にもいかで盡さん 二上り へ霞の間には樺櫻、雲と見えしは三芳野の、芳野の川の瀧津瀬や、風に亂るゝ絲櫻、いとし可愛の兒櫻、忘れもやらぬ姥櫻、故郷を出でしその月の、その緋櫻もいつ／＼と、思ひ重ねし八重櫻、一重櫻に神かけて、祈りしかひも波の上、雪も櫻もみながらに、すくひあつめて持ちたれど、これは木木の花、まこと我が尋ぬる櫻子ぞ戀しき。わが櫻子ぞ戀しき へ花見群集のその中より、沙門一人立出でて、汝が尋ぬる思ひ子に、逢はせて得させん此方へと、幼き人の手を取りて、花櫻子ぞ是ならん へ母は夢とも現とも、思ひがけなき嬉しさに、これぞ誠に故郷の、木花咲耶姫の、御加護ぞと、親子手に手を取り交し、喜び合ふぞ有難き。かくて伴ひ立歸る、親子の緣の深きこと、目出たしともなか／＼申すばかりはなかりけり。

源氏十二段 淨瑠璃供養　二四

〔解題〕 通稱「源氏十二段」。一中節との合調淨瑠璃。文化四年八月廿日柳橋河內屋半次郎方にて開演。十寸見聲曲編年集に惠井志述とある。當日出演の連名左の通り。

十寸見　沙洲　　山彥源四郎（三世）
江戸太夫河東（七世）　　山彥　河良（三世）
都太夫一中　　山彥新次郎（三世）
同　榮中　　山彥文次郎（新次郎男）

この日深川八幡祭禮に見物が群集して永代橋が落ちた、河內屋の二階からはそれがよく見えたといふ。

河東中ギン シテへさる程に。武士の。ムスビ ツレへ矢矧の里に聞えたる。何がし長者の乙の姫、ハル シテへ浄瑠璃御前と申せしは。峯の薬師の申し子にて。ツレへ智恵も ツキエリ 器量も。菩薩なる。花の翠黛薄からず。中ギン ツレ 雪の袂の憎からぬ。年も十六よふ トヒスイ 月の頃。

一中シテ イロ詞へ夜遊の友に召されしは冷泉十五夜始めとして ツレへなまめき立てる女郎花。引く時くねる男山。男形して陸奥へ。御門出の牛若丸。此処に宿りをかりそめの。縁し導く爪琴や。

河東ツレ ウリへ時の調子も想夫憐。ハル 山の端出づる月冴えて。絲の調べの。ハル 音も澄めり。河東シテ 琴歌へ心盡しの秋風に。須磨の浦曲の波枕。衣かたしき獨寝に。夢も結ばぬ夜な〱。此中管絃

一中シテ イロ詞へ御曹子は妻戸に立寄り給ひて。面白の樂の音や。吾妻の琴は知られじと。名に逢坂のそれならで。斯程目出度きほど拍子世にも。妙なる音樂に。笛のなきこそ不審なれ。詞 吾妻の樂の習ひにて。わざと笛をば吹かぬかや。よしつねはあれ樵夫の歌。草刈る笛もあるものを。其音一つのなかりしは。一夜の節を カヽル 厭ふかや。よし〱我も埋れ木の。ツレへ春秋知らぬ蟬折は。關守る人もゆるせとて。歌口しめす草の露。樂に合はせて吹く笛の 合 音色や深き戀の淵。三河にかけし八橋の。渡り初めぬに縁ならん。

河東シテ 上カイドウへ妙なる節を。ツレへそれぞとも。知らで地うたふ小童の。手拍子やめて ワキへ姫君に。あれ聞しめせ宵ながら。妻戀ふ鹿か獵人の。鳩吹笛かとしどけなき。ツレへ言葉の露に玉琴の。爪音とめて音を止めて。聞くに色ある笛竹の。下しめやかなりし一間の内 ムスビ

一中ツレへ人々感じ。誰人の。合はす音色ぞかしがまし。野もせの溢にあらなくに。見て参れよや侍女と。冷泉十五夜仰を受け。手燭携へ レイゼイ 庭傳ひ。柴の アミド 編戸を。シテへ押し開けて。月影翳す殿ぶりに。さしも優しき御姿。

河東ツレ ウギンへ上に唐綾下襲ね。殊に袴の物好きは。黄船の社壇を畫きたる。朱の鳥居に玉垣の。三重玉をあざむく月額。

一中ワキへ柳の枝に櫻花。梅の蕾の香も〱ありて。

河東ワキナゲブシへ平氣上氣の、ツレへ顔紅葉言葉はなくて姫君に。ホウレイブシへさゝやき竹や心のたけ。

一中へ岩木ならねば若君も。今宵を千代の始めにて。いつの時雨の神無月。出雲に結ぶ。縁の帶。

河東シテ木ヲシヘ姫も思ひの近勝り。ぞッとする程いとしさと 河東ツレヘ逢ふ嬉しさと遣る瀬なき。言はねば胸に騒がれて。人目はかれぬギン戀草のウツリウタ思ひは千束の文ならで水に繪をかく上ムスビ筆つばな。うら薄の袖几帳。

一中ワキヘそれと悟りておもとびと。おもて伏屋に言ひ兼ねて。お茶の通ひの愛想に。姫の心を汲みかはす。濃染色の口切も。するで立派な前髪さまよ。尋ねて來ませ杉の門。三輪の酒屋の 詞ヘ娘ぢやないが。シテウタヘ竹にサアエ雀はナアエ。上ハル品よく止まる。とめて止まらぬ戀の道。留めさせ給へと押しやれば。

河東シテハルヘ今更何と姫はなほ 河東ツレヘ岩にせかるゝ岩にせかるゝ瀧川の。我から濡るゝ花の雨。君が恵みに咲き初めて。うつろふ色はしら絲の。縺れて解けぬお。スエル心と。夜の伏籠の香に匂ふ。恥かし盛り戀盛り。

一中シテ詞ヘ立並びては深山木の。花のあたりのあすならう。妾は賤しき陸奥の。金商人の。吉治が下部。

河東シテハルヘいゝや包めど紅は。園生に植ゑて隱れなき。君は源氏の左馬頭義朝公の八男にて。牛若丸とは申さずや。

ツレシヲリヘ今日の今宵の殿まうけ。御座巡りとて勸められ。

一中シテヘ思ひよらずや往昔は。ハル木屋七太夫ブシ日影鞍馬に人と成り。イロ世を牛若とも名乘らじと。

河東ツレヘつれなく見えし若君の。袖よ袂よとりとりに。閨の睦言私語。

一中二上リヘ妹脊の中を陸奥の。十府にや落ちいて上ハル諸るに落つる。合ヘ君を七布に我三布に。さんさ。合ヘさんさ。寝よもの我三布に。ナホスヘ寝よげに 色オクリ見えし御風情。

河東ツレヘはや明近き鷄鐘に。またの逢瀬を誓ひてし。ムスビ數の盃納まる御代。相生松の萬代と。御門出を祝しの樂。

一中ツレヘ又も調ぶる玉琴や。羯鼓銅拍子笙の音も。時の調子を越天樂。

河東ツレヘ春鶯囀の樂の音も。聞く春風と諸共に。花を散らしてどうと打つ。

一中ツレヘ秋風樂は秋の風。波を響かしどうと打つ。

河東ツレヘ萬歳樂はよろづ打つ。

一中シテウタヒヘ青海波とは青海の。

河東ツレヘ波たち打つは採桑老。

一中ツレヘ跋頭の曲はかへり打つ。

河東ツレヘ打つなりくく颯々と。ヒスイ盡きせぬ御代のしるしとて。流れは絶えぬ一河の東。

一中ツレヘ都の水も末清く。

兩吟ヘ語り傳へて睦ましや。く。

秋の白膠木(ぬるで)　二五

〔解題〕文政四年四世山彦河良の催主で四世河東の五十回忌(正當は文政三年なのを延ばした)三世山彦河良の七回忌追善淨瑠璃の會を河内屋半次郎方で開いた時、幕府小普請方大棟梁大谷友我が作つたものである。手附は山彦新次郎。

三下リシテヘ秋やくる。望(もち)の夜頃もたちまちに。この長月も有明の、月の名殘の盡きずして、殘るとしもの白むより、雁のほのかに聞ゆるは、かの稻舟の、いなにはあらぬ女郎花。ナホスシテヘたとはば阿波の内侍さへ、九日(こゝのか)小袖の ツレヘ 紋ぢらし、箱提灯や長柄傘。雨にほはする抱へ帶。ワキヘ夫(それ)もその〳〵おのが名の、仇にたてれど小牡鹿(さをしか)の ツレレイゼイヘつま戀ふ聲のもれてさへ、本アシ 秋風ぞ吹く吹上の、濱に咲くてふ白菊の ムスビ 星かと露を見まがへし、雲の衣(ころも)の絶間より、いともさやかに三日の月 シテヘ早くも五十(いそ)と七とせに、手向ぬるでの ユリステヘ紅葉(もみぢ)ばに、ツレヘ流れの末を汲みて知る。清き音色(ねいろ)も 三重 山彦の 合 ツレヘ谺(こだま)の響つきせねば、ムスビ 常磐の松の男ぶり。よしや女松(めまつ)の隔てなく、明くるも知らで鳥が啼く、吾妻振(あづまぶり)のすさみかな。

江戸鶯(えどうぐひす)　二六

〔解題〕文政七年三絃の名工小林幸榮(幸翁)が一世一代の演奏會を柳橋河内屋半次郎方に催した際に作られたもので、詞章の作者は鶯郁(抱一)、作曲者は山彥文次郎。

シテへ花に啼く鶯、水に栖む蛙(かはづ)まで、何　野のお通と申せしは、能書秀才世にひ　土(ここ)迄も隱れ無き、節にその名やくらぶ
れも温ふ一曲ありツレへ人は元より妙音　ろくツメへ淨瑠璃姫のむつ言(ごと)を、十二段　山、花の錦をひるがへす　へ月に浮かる
の、仰げば高き梁(うつばり)の、塵を動かすた　にぞ書きしより、この道初め起りける　る二人が中は　ツレへ恥しい程照りまさ
めしある、そのふし〴〵の中にしも、　ワキへそれより世々に絶えせずも　シテへ土　る、雪の振袖ならば振れふれ、結びて
廣まる道は大江戸に、響き渡りて朱欄　作　ワキへ外記　ツメへ又は大薩摩　シテへ半太　解けぬ仲ぢやもの　木男子へこの淨瑠璃の
下、昔語を今の世も、傳へ〴〵ていや　夫とてさま〴〵に、節はかはれど誰知　容事(ことごと)は、日々(ひび)〴〵にして又日々に、十
榮え、靡かぬ草もなかりけり。シテへさて　らぬ、東訛(あづまなまり)を引きかへて、面白しとや　寸見櫻の咲き匂ふ、貴賤上下おしなべ
淨るりのその始め、信長公の御側(おんそば)にへ小　取り囃す音曲にこそ止めけれ。ツレへ唐(もろ)て、皆感ぜぬものこそなかりけれ。

邯鄲　下三巻　二七

〔解題〕謠曲「邯鄲」の改作。七世河東十七回忌追善として、天保十一年十一月河内屋半次郎方にて開演。都一閑齋(後の初代宇治紫文齋)とのかけ合、その出演者連名左の通り。

十寸見魯生（四世蘭洲）　　山彦紫存（十寸見可慶）
十寸見河洲　　山彦河良（五世）
都一閑齋　　都松兵衛
都千中　　都二松

附ていふ、此曲上之巻は天保元年七世河東七回忌追善として、十寸見魯生催主にて河内屋半次郎方にて開曲半太夫の節を取つたもの。今は下之巻だけが語られる。

一中ツレ三重へ不思議さよ　シテへ有難の景色やな。ツレへ元より高き雲の上。月の光も明らけき。雲龍閣や阿房殿。寶にも妙なる有樣の。ワキへ庭には金銀の砂を敷き。シテへ四方の門邊の玉の戸を。ツレへ出入る人の姿まで。光をかざる粧ひは。誠や名に聞きし寂光の都。喜見城のたのしみも。かくやと思ふ氣色かな。

河東シテへ東に三十餘丈に。白銀の山を。築かせては。黄金の日輪を出だされたり。ワキへ西に三十餘丈に。黄金の山を築かせては。銀（しろがね）の月輪を出だされたり。ツレへ例へば是は長生殿の内には。春秋をとゞめたり。シテへ不老門の前には。合ノ手ヅク　ツレへ日月遲しといふ心を學ばれたり。

一中　イロ詞へ如何に奏聞申すべき事の候。御位に即き給ひては早五十年なり。然らば此仙薬をきこし召さば。御齢（おんよはひ）一千歳まで保ち給ふべし。さる程に天の漿（こんづ）や流瀣（かうたい）の盃、これまで持ちて參りたり。

河東シテへそも天の漿（こんづ）とは

一中シテへこれ仙家の酒の名なり。

河東シテへ流瀣（かうたい）の盃と申すことは

一中ワキへ同じく仙家の盃なり

河東シテへ壽命は千代ぞと菊の酒。榮花の春も萬づ歳。君も豐かに、ワキへ民榮え、ツレへ國土安全長久の。榮華もいやまして。なほ悦びはまさり草の。菊の盃とりぐ／＼にいさや飲まうよ。

一中ツレへめぐれや盃の、／＼　ワキへ流れ

は菊水の。流に引かれて。疾く過ぐれば。手まづ遮る菊衣の。シテへ花の袂をひるがへして。さすもひくも光なれや。ツレへ盃の影のめぐる空ぞ久しき。

河東シテへ我が宿の、ツレへ我が宿の、菊の白露、今日ごとに幾世つもりて淵となるらん。よも盡きじ、

一中ツレへ藥の水も。泉なれば。汲めども〳〵彌増しに。出る菊水を飲めば甘露もかくやらんと。心も晴れやかに。飛びたつばかり有明の。夜晝となき樂みは。榮華にも榮燿にも。實に此上のあるべしや。三下りツレ 樂合ノ手 へいつ迄ぞ〳〵。榮華の春も常磐にて。なほ幾久し有明の。月人男の舞なれば。雲の羽袖を重ねつゝ。歡びの歌をうたふ終夜。日は又出でて明らけくなりて。シテへ夜かと思へば。

河東シテへ晝になり、

一中ワキへ晝かと思へば、

河東シテへ月またさやけし、

一中シテへ春の花咲けば、

河東シテへ紅葉の色濃く、

一中ワキへ夏かと思へば

河東シテへ雪も降りて、

一中ツレへ四季をり〳〵は目の前に。春夏秋冬。萬木千草も。一日に花咲けり。面白や、不思議やな。

河東ツレへかくて頃過ぎ時去れば。五十年の榮華も盡きて。まことは夢の中なれば。皆消え〳〵と失せ果てゝ。ありつる邯鄲の。枕の上に。シテへ眠りの夢は覺めにけり。

一中シテへいかに御旅人。粟の飯の出來て候。疾う〳〵御目を覺まされ候へ。覺まされ候へや。

二上り河東 シテへ盧生は夢さめて。〳〵。五十路の春秋の。榮華もたちまちに。唯。茫然と起き上りてワキへさばかり多かりし女御更衣の聲と聞きしは。松風の音となり。シテへ宮殿樓閣は唯邯鄲の假の宿。

ツレへ榮花の程は五十年。さて。夢の間は粟飯の一炊の間なり。シテへ不思議なりや。ワキへ測り難しや。

一下り 一中シテへつら〳〵人間の。有樣を按ずるにワキへ百年の歡樂も命。終れば夢ぞかし。ナホス シテへ五十年の榮華にも。身の爲には是迄なれワキへ榮華の望も シテへ齡の長さも ツレへ五十年の歡樂も。王位になれば、シテへ是迄なり、ツレへ實に何事も一炊の夢。

河東シテへ南無三寶。よく〳〵思へば出離を求むる。知識はこの枕なり。ツレへ實に有難や邯鄲の。夢の世ぞと悟り得て、

兩吟へ望かなへて歸りけり。

熊野　二八

〔解題〕謡曲「熊野」の改作。山田流の箏曲の節を取りて河東節に作曲したもの。嘉永二年十寸見東甌（後に九代目河東）の手附。

二上リシテへ清水寺の鐘の聲。ツレへ祇園精舎を現はし。諸行無常の聲やらん。地主權現の花の色。沙羅双樹のことわりなり。生者必滅の世の習ひ。實にためしある粧ひ。シテへ佛の元は捨てし世の、ナホス ツレへ半ばは雲に上見えぬ。鷲のお山の名を殘す。寺は桂の橋柱。シテへ立出でて峰の雲。花やあらぬ初櫻のツレへ祇園林下河原。南を遙かに眺れば合シテへ大悲擁護のツレへ薄霞。熊野權現の移ります。御名も同じ今熊野シテへ稻荷の山の。薄紅葉のワキへ青かりし葉の秋。又花の春は清水の ツレ唯頼めたのもしき

春も千々の花盛り。合 ツレへ山の名の音羽嵐の花の雪深き情を人や知る シテへ妾御酌に參り候べしワキへ如何に熊野一指舞ひ候へ シテへ深き情を人や知る シテへなう〳〵俄かに村雨のして花を散らし候はいかにワキへ實に唯今の村雨に花の散り候よなう シテへあら心無の村雨やな。春雨の降るは涙か降るは涙か櫻花散るを惜しまぬ人やあるワキへよし有りげたる。詞の種取り上げ見れば。いかにせん都の春も惜しけれど シテへ馴れし東の花や散るらんワキへ實に道理なり。あはれなり。早や〳〵暇とらするぞ東に

下り候へ シテへ何お暇と候や ワキへなか〳〵の事疾く〳〵下り給ふべし シテへアラ嬉しや尊とやなこれ觀音の御利生たり。是までなりや嬉しやな是までなりや嬉しやな ツレへかくて都にお供せば。又もや御意の變るべき。たゞ此のまゝに御暇とゆふつげの鳥が啼く。東路さしてゆく道の。やがて休らふ逢阪の。關の戸さしも心して。明け行く跡の山見えて。花を見捨る雁の ワキへそれは越路へ シテへわれは又。東に歸る名殘かなツレへ東に歸る名殘かな

泰平住吉踊

（以下二段、外記節）

〔解題〕通稱「住吉踊」で本曲は元來外記節のものであつたのを、初代河東以來「傀儡師」と共に同流で預り淨瑠璃として語り傳へたもの。攝州住吉明神で行はれる住吉踊を主題とす。本文は現行河東節正本を底本としたが參考として外記節の古版本を添へて置く。

シテ〽千早ふる神のひこさのツレ〽昔より神をいさめの御祭。赤前垂に對の笠。皆一様にしやんと着て。袖は白露朝日影。裾うち揃ふ紅の。なびくは風の糸薄。莞爾と笑ふ顔ばせに。さてもいつくし夜目遠目。月のめしたるかさの中。鬢のこぼれの雲となり。雨とふりよし形もよし。人や眺めん風俗の。この身に移すなり形。中に傘鉾／＼いろ／＼の。團扇扇の模様よく。傘をさすならばエイ／＼エイ／＼春日山。これも神の誓とて。人が傘をさすならば。エイ

エイ／＼／＼我も傘をささうよ。げにもさうよの。ヤヨげにもさうよのと。げにまこと暑さ凌がん暫しとて。片山里に住吉の。御神事なれば打出でて。まだ手に入らぬ踊ぶりが面白や。二つ拍子に揃ふ聲。四社のお前の反り橋は。誰が架けたやら中高に。サア住吉様の岸の姫松めでたさよ。小松の蔭の下露に。よその袖までしつぽりと。濡れて濱邊の濡鷺か。沖に鷗がとん友呼びかはす。はんま千鳥のちりやちり／＼／＼。ちりやちり／＼。ちつとも漕出

せばなう。から艪の音がしつとん／＼からころり。からころからころ／＼りんとも賤が手織や布引の。瀧の白糸打ちはえて。天津乙女や晒すらん。星か澤邊の螢かと。彼のやさ人の歌の種。よむや眞砂のかず／＼も。波と渚に身を晴らす。その丈夫が増鏡。波になりたや磯打つ波に。女波男波の濡れに濡れたる中でゆかしき。あら羨ましいかなれば。片山里に生れ來て。遠き越路と住の江の。浦山國を隔てゝも。住めば都と思へとや。いづれ住みよき住の

正傳ちやうきらま　傳吉

大夫薩摩花内　同　金太夫

といゑいらく　同　左近

まとよし

ほたゝあさり

⊕

薩摩掾外記藤原直政

井筒屋
芝しんめいまへ
しんみち

兼平傾者頭

ちゑやあるおのもとこきみむしょりおさぬ
のれはまへりおらまぬへれつへのおさえみあれ
あやんとをそ袖へあらつゆわさひらげずそれ
そ?れのあひへ風の糸すさおのこゑ
かわべ世の様もうし荻国とわ月の出るか
さの内もんのこれのくもとありわとふれ
ありましはへやあるへふがをとせしこれらつもあり

かちゆはなくりくのうちとあかれのめ
やうよくあはれさきのかたじとそれ山里に住者の
ほどなれやうちわたしてまでのけねおきふ
あらがおりてやぶれ雪にそろふ家
に春のはまへのそりにはながれ中
だれさわすゝりさみのほのもわ松
めでさきよ　されだまつのみどりこ
まりおりとりそろてちよ栄わ中え

せのまひの祝。今日のはじめなり。
ありやたまづ京のその比。天保常れ
神あそそひてはやさむ。どうぐたら
まくらちりやたてさそいれ。はしん
ぜんのむ川せそたずさうたずさので
ふかく寿よまん万年らくと寿る
なりませんぜんいのりけの寿これ
いてくことさかくいるあそさのひさご。

さへさへとて神のうちで多んめぐう
ざまんざいらくまとやさう
いうふみたうぶひうつくうの音
おもいりせとうすの中へすみ
よはまやの神さまみちのへくと
かるへきたぬしのはうてぞと
まきしせきめまりめでさんまい

江の。踊りつ舞ひつ歡びつ。サア住吉樣の岸の姫松目出たさよ。されば祭の姫小松。おつ取揃へて千代八千代。中なる女の舞の袖。今日(こんにち)の御祈禱なり　シテへ在原や　ツレへ高天ケ原のその昔天津岩戸の神歌を謠うていざや清むべし。とう/\たらり/\。ちりやたらりはさていかに。これ眞言の祕密にて。絕えすたうたり瀧の鼓は福壽圓滿。太平樂を調ぶるなり。又萬代の池の龜。甲に戴く三極(さんきよく)は。渚(なぎさ)の砂(いさご)さく/\として。神(かみ)のうちには延命長壽。萬歳樂/\。誠かや堺浦には寶船が着くとの。艫(とも)舳には伊勢と春日と申すは住吉四社の神君が代は/\久しかるべき例(ためし)にはかねてぞ植ゑし岸の姫松めでたさよ。諷ひ奏でて舞ひうたふ合　シテへその時翁現れ給ひ。よきかな/\我はこれ。住吉の明神なり。汝誠の道守りつゝ。我をいさむる神祭。など納受のなからんや。天下泰平國土安穩と守るべし。ゆめ/\疑ふ事勿れと。宣ふ御聲と諸共に。御神體は忽ちに。御輿と變じ合へ給ひけり　ツレへげに神國のその不思議。ちやうさやようさの神いさめ。有難かりける次第なりとて。貴賤上下おしなべて皆。感ぜぬものこそなかりけれ。

浮世傀儡師(うきよくわいらいし)　三〇

〔解題〕通稱「傀儡師」。外記節よりの預り淨瑠璃。室町時代の末頃から行はれた傀儡師の小さい人形を舞はす模様を敍したもの。

へ浮世の業や。西の海。汐の蛭子(ひるこ)の里廣く。國々修行の傀儡師。スヱル連(つれ)に離れて春雨や。樂屋をかぶり通るにぞ。地へ塀構(へいがま)へなる。。。窓の內。呼びかけられてゆかしくも。立ちとゞまればうるはしき女中の。。。聲にて傀儡師。一曲舞はせと望まれし。言葉の下より取りあへず。聲あしけれど箱鼓。拍子とり/\人形を。數多。。。出だしてそれ/\に

唄ひけるこそ可笑しけれ。合ノ手小倉の野邊の。一本薄。いつか穂に出て尾花とならば。露が嫉まん シバガキ 戀草よな。積もり〳〵て足曳の。山猫の尾のなが〳〵と獨りかも寢んさびしさにゆうべ迎へし花嫁様は。鎌もよく切れ下草も刈け。心よさそなかみ様ぢや。おらが女房を褒むるぢやないが。物もよく縫ひ。機も織り候。綾や錦や金襴緞子。をり〳〵ごとの睦言に ユリ。三人持ちし子寶の。惣領息子は喧揚に。父の前でも イロユリ 懐手。物を言うても返事せず。二番息子は ホユリ 脊高く。三番息子は悪戯に。わるさ盛りの六つ七つ。中でいとしき血の餘り。肩にうちのせ都の名所。廻はれ〳〵風車 ホユリ。張子羯鼓や振鼓。手に持つて遊べさ。花が見たくば吉野へござれ。今は吉野の イロユリ 花盛り。花笠肴連れしやな〳〵と。このおはしたは吸筒を。袂に卷きてからたまや。ついあきらけき天津空。櫻ぐもりに今日の日も。呉羽綾羽のとり〴〵に。呉羽綾羽のとり〴〵の貢物。そなふる御代こそめでたけれと。箱の中にぞ納めける。

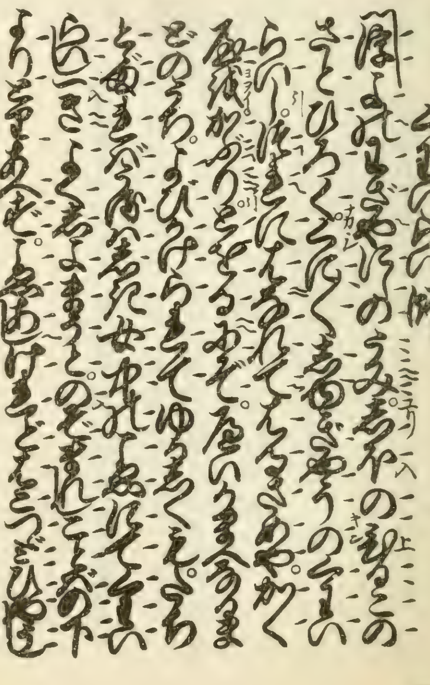


〔校訂者曰〕以下六曲は河東節に於て語り傳へられた半太夫物の中から、殊に名高いものを選んで收めたのである。初代河東が、その師江戸

半太夫と分離して一流を樹てるに及んで、その習得した半太夫物五十餘曲をも河東に移し、それが代々語り傳へられて、明治初年にもなほ四十餘曲を數へたが（十寸見聲曲編年集所載）、近年河東節の衰微と共に頓にその數を減じ、今は僅に翁式三番叟・きぬた・祐成相撲物語・八郎鰐の段・笠の段・小鍛冶名劍の段・信田妻釣狐・清見八景・槍踊・小袖模様等が殘つてゐるに過ぎない。

きぬた　三一

〔解題〕謠曲「砧」に基づく。前に收めた「常磐の聲」は更に本曲から脱化したものか。



へうば玉のわが黑髮のさしもなど。上
ハル比翼の上櫛の身をわけて。上ハル行
方も遠き戀づまの秋より先に必ずとゆ
ふべの。。數は牛ユリ空しくて。餘所にの
み下聞く。オトシ高砂の。レイゼイ尾上の寺
のかねごとも。上痴話も悋氣も獨り寐
の心に殘るは思ひ草。ハル思ひかへし
て見しユリ夢の。枕の塵の積りては身
の隠れ家の戀の下やま。相ノ手ウタ二人
寐ぬ夜はせまからぬユリ。狹布の細布
今日迄も。便りの風の下までをなる
三下リ相ノ手人待つの戸のさびしきに合へよそ
のうらみのおと相ノ手おとづれて本調子シヲリ
衣うつなり玉川の岸の秋風三ツ重。上クル

きそひくる寂寞たる闇の内。あはれ昔にうらみん下よしそれとても我も涙に衣まくり手にフシ打ちもねななん山賤を忍ぶにぞ 色へ蘇武が旅寐を思ひ妻打ち明かす 相ノ手 れんぼ二段引 これよりきぬた引 打上げ ウタヒ▲衣の。カゲラ五百機衣おりもかく錦の文字おなじ心の小夜砧我も打たなん唐衣。に落ちて松の聲〱 浄るり ハヤメ 夜寒ののあやにくにキザミ蟲の音まじりて落つへあけの上槌うつゝなくハルウタ更けて月にしで打つは誰が狭衣の浦風に靡やる。スヱつゆ。ハルなみだ下ほろ上ハルほ礫の拍子を鳴子に紛へてかりの。上空き。ごろ本ユリも。袖せばき地木曾の麻ろはら〱といづれ上砧の音やらん。

蟬丸笠の段　三二

〔解題〕本曲はもと江戸半太夫の操座にかけた長篇の浄瑠璃の一段で、本外題は「聖代時津風」といった六段に改題されて

戀と情は衞士のかゝり火
仇と恨は三つの鐵輪火蟬丸紅葉傘

となった。その中で

初段　鐵輪の段
三段目　逢坂山の段唐琵琶の段
四段目　清貫道行　釘打の段　笠の段　悟りの段　鐘の段

等が名高いものであった。

へ第一第二の絃は。さく〱として秋の風。松を拂つて疎韻落つ。上第三第四の絃は。われ蟬丸が。しらべも。四つの折柄なりける時雨かな引。流るゝ水のあはれよにそのことわりも。目に見えぬ月の入るさは。ハルいづこぞ上。

都の方のなつかしさ。まさきのかづら靑つゞら。地來る人ありとも知り給はず。槇や柱を押分けて。杖にしをりの岨傳ひ辿りかねさせ給ひけり。地直姫それぞと見るからに。走り寄らんとせし所を。兒達抑へてハッア音高し。ただ穩便にと制すれば。せん方涙にかきくるゝ。鏡の影か我が戀は。逢ふとはすれど物言はぬ。げに口なしの色香をも。

見ずや知らずやあさましと。こがれ啊のばせ給ひけり下へ宮はかくとも白糸の。琵琶取出し盤渉を平調にしらべかへ。やよや待て引。ハル天つ雁がね。ことづてュりん。故鄕の秋は。いかならん我は山路に住みわびて。琵琶より外は友なしと。地撥をあげさせ給ひしに。風がもて來る夕しぐれ。一むらさつと降りくれば。蟬丸琵琶を濡らさじと。こゝ

木の下彼處の蔭。濡れても寐んと詠ぜしは。花に戯れし歌のさま。我はまた賤の男が。かつぐ袖がさ肘がさの。雨に木の葉のはら／＼はつと。亂れこがれてあなたへ走り。こなたへ走り。さらり／＼さら／＼さつと。かけり巡れど身は濡衣。木かげもがなとこゝかしこ。求めさまよひ給ひしは。目もあてられぬ風情なり。

小鍛冶名劍之卷　三三

〔解題〕もとは半太夫の操座で興行されたもので、外題は「神刀小鍛冶初午參」といひ、これはその中の第三段目の名劍の卷である。軍記物の劍の卷などの系統を引く一種の名劍ぞろへである。序と名劍の卷とに分れてゐる。

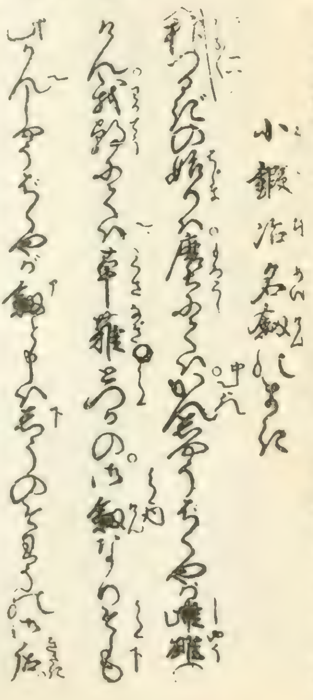
小鍛冶名劍之卷　序　•

〽三條小鍛冶宗近は。吉日をえらみつつ我が家の内を潔齋し。火を淸め水を棒へ。八方成就になぞらへて。四方四維に八重の注連。五社明神を象つて。五色の幣をぞ立てにける。香花燈明神洒洗米。靈供花形飾りつゝ。鞴鐵床磨き立て。宗近裝束改めて。壇にのぼれ

ばへ女房も。似あはぬながら狩衣の。露をむすんで玉襷。しどけ形姿うるはしく四邊も輝く風情にて。續いて壇にぞ上りける。

小鍛冶名劍之卷

へそもく劍の始りは。唐土にては。中ハル干將莫耶が雌雄の劍。我が朝にては草薙十握の。イロ詞御劍なりイロドそも此干將莫耶が劍と申すは下周の楚王の御后。御身常々ほとほる故御惱みましくてアタル下鐵の引柱に。中寄添はせ給ひつゝ御身を冷やさせ給ひしにハル圖らずイい懷胎なり給ふ引。月重なれば引誕生ある。取上げ見るに不思議やな。鐵の塊なり帝あやしみ給はずして。これ金鐵の精なるべし急ぎ劍を打たせよとて干將といふ鍛冶を召し。勅宣を下されぬ。畏つて了承し。妻の莫耶と諸共に上ハル呉山に引こもり。龍泉の水にて鍛ひ二口の名劍を鍛つとかや。へ又本朝の。その昔日本武の尊は東夷征伐あらんため。ギンカハリ關の東に逸〻と。色御下向ありけるを。駿河の國の夷共御もてなしに事よせて。尊を失ひ申さん爲御狩の御遊をすゝめつつ。限り知られぬ萱原へツヽル尊を御供申しける。へ頃は神無月スヱ引廿日あまりの事なるにドノル千草百草冬枯れて亭と怪しむ引尾花が末。日の及ぶべき果もなし。夷時分をはからひて。四方



より火をかくる。ヒロヒノリ富士颪烈しくて。枯草に吹きつくれば。餘焔しきりに燃え來り。既に尊の御命危ふく見えさせ給ひけり。へ其時尊劍を抜き。四邊をさつと拂ひ給へば不思議やな。劍の精嵐となつて焔。夷が方へ吹きかくれば猛火天地に滿ち〱て東夷殘らず燒け失せけり。へ其後マヒカヽリ四海治りて引。イロ下人家戸さしを忘れしも引ハルかの草薙の德とかや引。イロそれより代々に絶えせずも引。劍の細工發行し。上ギンカヽリ天武の御宇に當つては宇多の友光洞院文珠君萬歳と鍛つたるは イロこれ友成が打物なり。文武帝の御時は天國天座久勝なり イロ下亢明の治天には。宇佐の社僧神息と。アタリ打つて出せる銘のもの。アイロサイ ツメへ平城の御在世には。大原眞守備中貫次宇多の天行五郎太夫安綱なり。イロカヽルへさて當御代に及んでは物數ならぬ宗近が。普天率土の内に居て。今大君の御詔引 上ギン御選みに預ること。これまつたく私の。高名にあらばこそ。ひとへに氏神稻荷の神。擁護の德に アタルよつてなり引。されば誓ひの水 持入清く。十方恒沙の諸佛神。力を 色詞合はせ給ひつゝ最勝の御劍を打出させて給はれと丹誠を抽んでて。しばらく恭敬禮拜しへ鞴を吹立て見てあれば御劍の金こそ沸き合ひたれへすは時分ぞと引出だし。鐵床に押當てゝ夫婦互ひに目を見合せ拍子を揃へて打つたるは面白うこそ聞えけれ。へ小鍛冶もとより名人にて 下ノリ水に鈍し。火に鍛ひ秘密の槌をてうど打つ。引トリへ女房もとより心得ててう〱はた〱はつたりと合槌を アタル打つたりしは類ひ稀にぞ見えにける。へかくて御劍を打ちしまひ中心を磨り立て表には三條小鍛冶宗近と 大アタリあざやかに銘を打つ。へ裏の方には女房小狐丸とぞ打つたりける。色ツレ上ハル マヒガカリ双は雲を閣したれば引。天の叢雲の劍とも云つつべし。詞へ天下第一の。二つ銘の御劍にて四海を治め給はん事。掌の裏に在り。クリ五穀成就も此時ぞと小鍛冶大きに歡んで件の劍を取持たせ上ハル禁裏をさして上りける嬉しきとも中中申すばかりはなかりけり。

信田妻釣狐の段

三四

〔解題〕前の小鍛冶名劍の卷と同じ大外題「神刀小鍛冶初午參」の第五段目で、この前に「信田妻の序」「信田妻」があつて、それからこの「釣狐の段」になるのであつて、例の狐葛の葉の傳說を脚色したものである。現行の河東節の「信田妻釣狐の段」は本曲に基づいて、嘉永六年に九代目河東が改作して、初代宇治紫文齋一派との掛合で開演したものである。

〽友季鳥屋より立出でて。なういかに女郎。夜中と申し物凄き。この原中に只一人。何とて渡らせ給ふぞと。いと睦ましく問ひければ。〽女性につこと打笑ひ。自らは遠からぬ。あたりの者にて候が。聊かの事により。男を恨み家を出で。忍びて里へ歸るとて。道ふみ迷ひ候が。さもあれ御身は何をしてこゝには渡らせ給ふぞや 〽友季聞いてさん候。これは狐を釣り候。〽なに狐を釣らるゝとな。あらもつたいなや〳〵。それ殺生と申すは。五戒の内の第一なり。殊に狐は通を得て五社明神のつかはしめ五百歳七百歳命を保つものなるを。殺させ給ふものならば。御身に報いさむらはん。急ぎそのわな引崩し。きたなき鼠を捨置きて。歸らせ給へとありければ。〽友季笑つて殺生を。厭はせ給ふやさしさよ。さりながら今暫し。待つて樣子を御覽ぜよ。その面白さは限りなし。罠の仕掛餌の加減。あらうまさうなる匂かな。あれからこれへちよん〳〵と。かやうに飛んでや來るべし。とんとかゝらば此杖にて。づかうをしやんと抑へんと。仕方をすれば〽女郎は。恐れてひよつと飛上り。又騙寄つては鳴子を引き。かなたこなたと狂ひしが。次第に心亂れ髮。言ひがひなしや淺ましや 〽野干となつて狂ひしは。無慚なりける 三ドリ 〽梓弓の眞弓の。引くべきは引かいで。我ながら戯れぬるぞ ナホス〽くやしき〽さのみはいかでこらふべき。つひには餌に飛付きて。くはへて引けば南無三寶。罠はえりにぞかゝりける 〽友季主從悦んで。打殺さんとせし所へ 〽小鍛冶泣く〳〵來ら

れしが。はつと驚き此狐は。某に賜るべし。價は望みに任せんと。畏のかけ縄引き給へば。野干は咽ゆるまりて。畏引きはづし遁行きける へ友季主従腹を立ち。我を獵師と侮つて。かく狼藉を致すかや。今こそ斯様に世を忍べ則國が弟。友季とは我が事なり。観念せよと呼ばはれば。へなに友季か珍しや。我こそ小鍛冶宗近なれ。あますまじと太刀引抜き。飛んでかゝれば へ抜合せへ暫しが程は戦ひしが小鍛冶もとより手利にて。肩先かけて打放せば。へ下人は驚き逃行くを へ追つかけすかさず取つて伏せ。庇の下に引敷きて。おのれ殺すは易けれど。則國が住家を。ありのまゝに語りなば。命を助け取らせんと。たばかり給へば へ何がさて命を助け給はらば。住家を教へ参らせんと。ふるひ／＼ぞ申しける。へさあらば案内致せよと。先に押立て宗近は。へ敵の方へと急がるゝ。げにも稲荷の御恵有難しともなか／＼に申すばかりはなかりけり。

鐺踊　三五

〔解題〕本曲は「締合源氏色安宅」の第三段目の鐺踊の中の後半だけである。半太夫節としてはこの外に六段目の名寄祭文なども名高いものであるが、今は廢曲となつた。

へかゝるめでたき折なれば。勇みに勇んで一踊ふりやれおふりやれ 上大鳥毛の 上振袖 行列ぼつ立て あづまいり 下ちと／＼ 上ちと かちをめされの シツカトセ 中鐺はぢよん／＼。女郎ちよん女郎様に持たせろ マツカセもたせろ マツカセまつかせ／＼任せておけろのさて ユリ／＼な 下ハシリ任せておけろの 下さて／＼さて。ハツアちよん／＼／＼ちよん女郎衆／＼ぢよん

女郎様の鑓の手ッ對の塗笠お先で振れ〳〵。ハル あと先揃ふ道中閾は花の 上 吾妻路さして下りしを皆感ぜぬものこさ〳〵お先で〳〵さき〳〵先あと〳〵 お江戸に とつ着いたはや品川を スエテ そなかりけれ。

清見八景　三六

〔解題〕 半太夫の操座に上場された「好色與之助」の第三段目である。駿河の清見潟の八景を序したもので、「清見八景の序」が前にあつて、世之助が清見潟の三保の浦に着いて、白髪の老人からこの地の名所舊跡を教へられる由を敍して、それから本曲に移る事になつてゐる。

清見八景　序

へ急げば程なく駿河の國。さやけき月の清見潟。三保の浦にぞ着きにける。かゝる所へ向うより。白髪たる老人一人來りけり。世之助近づき。御身此浦の人ならばわれ此處始めて一見の旅人なり。この三保の浦に於て。名所舊跡殘りなく。教へ給へとありければ へ老人答へて。所には住み候へども。名もなき田舎の賤の男なれば。名所とも舊跡とも。いさしら雲の老の波。立歸らんもさすがなり。聞及びにし故事を。いづくに心を沖津川深き淺きは知らねども。あら〳〵語り申すべし。

清見八景

上 先づうしろには 引 ハル 靈驗の山高く。唐國よりも此寺に。法を 上 ひろめし匠鼇山清見寺と名付けつゝ。今に佛法盛んなり 前は蒼海 上 漫々と。三重 押し出づ船は風向ふ。雲の浮波立つと見て。本フシ 釣せで 入 歸る漁夫のわざ。ハル 打出で見れば眞白なる。雪の富士の嶺 本ユリ 積る雪は。色 その水無月の〳〵。望に消えてはその夜降る。さればこそ時知らぬ。入 山は八葉ほう(ウイ)の如し。

上には光明かぐや姫ハルフシかぐや姫の跡を垂れ。纔に淺間大菩薩。和光の光を塵に交へ。詞されば徐福と言ひし者。上不老不死の藥を求め。此山に入るなれば蓬萊山とも名づけたり。山の形は北へ遠く雲を踏んで愛鷹山霞たな引き峯を隱し言ふにいはれぬ絶景と。上ハル心はうきに浮島がァ原よりこなたはユリ田子の浦ユリ。ギンカハリ藻鹽やかぬと赤人が上昔も今も。世の中の。戀をするがの恨みわび。胸は富士 上ハル袖は清見が關なれや。煙も波も。立たぬ日の。波に消えさる篝火は。小舟上かすかに浮きぬ沈みぬ。イロげに藤原の。忠文が。下漁舟の。火の影は寒うして波を焼き。上驛路の鈴の聲は夜。下山を過ぐとの詩も。一入ハル思ひクル出て見ればへ風早の浦イロ袖師が浦ノリすゝき島庵原川。これ八景と。庵原やへとくと三保の海

面や。入日殘れるカヽル松原にカヽル羽衣の松とて。色増枝を垂れ。葉を並べ聞えは四方に。上高砂の。松にすぐれし名木あり。誠に松樹千年の昔。天女は天降り。天の羽衣稀にぬいで此松にかけ置きしに。へ伯龍といふ釣人が此所に來りしに。ノリ空に花降り四方に薫ず色香妙なる衣あり。下寶にせんと悦びしにへかの乙女袂に取つきなう悲しや。その衣なくしては色増飛行の道もかなはぬなり衣の丈は一由旬廣さはまた半由旬月宮殿の白衣なり。上らんとするに衣なしひらに／＼と由井の浦の。浦人これを用ひずして遂に天女は伯龍がツメ妻となりて年月を。賤が伏屋に日をギンカハリ送り霓裳羽衣のレイゼイ曲奏しユリ。東遊を。するが舞中へ此時なりける事とかや。増遂に夫の隙を窺ひ。隱し置きぬる羽衣を盗み取つて忽

ち天上にハヤメ飛去るなり。へされば神明帳に駿河の國庵原の郡三保の神社一座とは此有渡濱の事ぞかし其外名木は種々薩埵ツメ山數多ありとは申せども。若木に劣る親知らずなんどとて難所險しく寄する波どうど打つてはさつと引き道行く人も顧ず語りも盡くさじ旅人と息もつぎあへず語りしは面白かりける。次第とて貴賤上下おしなべて皆感ぜぬ者こそなかりけれ。

（河東節 終り）

第三編　一中節之部

辰巳の四季　一

〔解題〕初代都一中作曲。古版の拍子扇には「都の辰巳四季景」と題して卷頭に掲げてある。一中節最古曲の一と思はれる。都の辰巳の方位にあたる宇治の里の四季の景を敍したもの。

ウタヒへ杯霞棚引きにけり久方の。月の桂の花や咲く。實に花かづら。色めく花の フシへ都より。地辰巳に當る宇治の里。ハル地山の姿もにこやかに。色中笑ひ合うたる ウ相生の。スヱフシ松風の音 ウさゝんさの。地聲に乘り來る絲竹や ハル地琴の調べの何時迄も變らぬ色の ウ印とて容に知られぬ。ドギン雪 入やこんこ霰 入やこんこ。地寺の〳〵櫻が。下ハズ ミフシちんりちら〳〵春風に。地ウ誘はれて來る吹雪をば。ハル地雪と見紛ふ櫻花。地ウ吉野を寫し色々の花笠。日傘菅笠の。コハリ地紐を結ぶの神詣。ウ氏子は和子か。いや。フシ橋姫の。地宮詣りとて女の童。お乳やめのとの侍きて。ハル地笛や太鼓に風車。お車かけて川船に。ウ乘せてござらば神崎へ引。神崎へ。踊ブシさても〳〵和御寮は誰人の子なれば定家葛か離れ難やなう。〳〵。所々お參りやつて疾う下向めされ栂尾賣茶が フシ茶摘み山。地七種の園と傳へにし。地森岩井朝日山。山吹の瀬に影映す。ツナギフシその水鏡 ウハル品容。彩る姿 色ツキユリ美しく。地花橘の小島が崎。コハリ地峰の早蕨椎が本。宇治山里川の四季の景。色ハルカンへ網代の森(守)や。上波む鮎 下の 引。サイモンへあひあひぎせる煙草。吸付煙草雲を吹き輪に吹き吹くや涼風の。オクリ艶む。ウ扇の誓しやは。夏にもなれば賤の女が。赤前垂に置手拭で。ウ晒す 七ツユリ晒しの ノタル品も良く。ウ拍子とり〳〵連れ小唄 引 二上りへ其方。思へば。晒の臼よ。とかくつかれてよほ、やれ君樣を。十九や廿のいと愛らしく。帶の結よしなものよ。やんれ〳〵しなものよ。われは野に住む。雉子よ よほ、ん〳〵さて。〳〵扨々雉子 此ところ所作ごと 面白や。地カヽリ變らぬ御代は萬々歲。武運長久民繁 カン昌千代に引。八千代の秋津洲や引。四海波風靜かにて治まる。國こそ久しけれ。

松盡し　二

〔解題〕　初代都一中の作曲。古版拍子扇には「蓬萊松盡し」とある。詞章は元祿五年正月刊行の竹本義太夫の正本「雪女」の第一段「子日の松」の一齣を取つたのである。この「雪女」は後冷泉院の御宇に源賴光・賴信及び四天王等が關白萩原多銀丸・赤橋安景・湯原常滿等の叛亂を平げ、又多田滿仲の神靈の冥助によつて雪女と化して我が國を魔界にしようとする惡靈を退治するといふ筋である。本曲はその發端大內の場で、初子の日の祝儀に左近中將有之が千草丸梼丸の二人の公達を作ひ子松を手にして參內し、多銀丸の問に對して、松の目出度きいはれを仕方話にする條である。

ツレフシ中へ先づ今年の歳徳は。北野に當らせたまふ故。千代の古ヲトリ道跡とめて。地また改まる若松や。君に引かれて萬代と。スヱフシ雪打拂ひ。奉る。下オンそも〳〵。 此御神は西海の雲の浪入岩越す舟に棹さして。今の北野ゥに押し渡りヒロヒまだ御社の無きうちは。御身を置くに所なく。一夜に合ノ手千本の松植ゑて。ハル落葉片敷き。上フシユリナガシ假枕ユリ二神。シヅメテノルホユリ契らせ給ひにし。地御嬉しみを世に傳へ。女松男松を植ゑまぜて。色と情をゥ祈るにぞ神の惠の。本ツキユリ女夫松。地初子の松の若葉より。さし添ふ枝のかげ映る。日の出の松の二柱。やよ君が代の色フシ初めとかや。地フシ妹脊の岡の小松原。ハル月ゆりこぼす淺瀬浪ツナギフシ磯馴松に下宿かりて。須磨の浦松風寒み。ハル霜頂きし老松は。カン杖の貸したき姿にぞ。カハリセツユリ君の齡や。くらぶらん。地吹き靡きたる叢松の。ウ岸に寄るてふ姫松は。霞の衣かい取りて。立てる姿のウギンしをらしや引。フシ歌松の下葉で落ち合ひ初めて。抱いて寢ねして一つ松え。えゝ〳〵寢ねして抱いて。下抱いてウハズミ寢ねして一つ松。地二葉よりしていたいけに。ハルフシ松も藤咲く神津國。ハル幣取る音の颯々と。吹き亂れたる夕嵐。 かざす袂の入涼しきは。セツユリいきの松原まさるとも。

地遠津空なる唐松も。我が大君に引か　眞拆の蔓枝長し。限りなき世のためし　の日に奉ると。いと靜やかにぞ。かた
れては。常磐の松の色は ドウツリ なほ ギン には。かねてぞ植ゑし神垣の。松を子 らるゝ。

泰平船盡　三

〔解題〕 通稱「船づくし」。初代都一中作曲。元祿十六年五月竹本座興行の錦文流の作「本海道虎石」の第一段、源頼朝が箱根權現參拜の歸還の船中に於て、船頭や水主が船の起原から說き起して船づくしを述べて興を添へる條の詞章を取つたのである。後半に於て詞章に多少相違がある。尙詳しくは淨瑠璃名作集上の「本海道虎石」の解題及び本文參照。

現行の「都羽二重拍子扇」所收の本曲の詞章中、「抑船の起原といつぱ其昔皇帝の御代に當つて……」の「皇帝」は「黃帝」であるべきにより改めた。

又原本には句切りがないので、讀解の便を圖つて然るべく句讀點を施した。

〽還御をさそふ鐘の音も、朧々と告げ　御船頭の藤平は、御免の蒙り、櫓に上り。烏江の海を隔てゝ立籠れば、何と
わたり、夕日は山に端隱れて、こぼす　り、ヘヤンラ目出度やと壽けば、艫艪攻むべきやうもなし。皇帝是に宸襟を
が如く茜さす、波紅を染めしなり。君　の水主聲を揃へて、皆同音に奏でけ　痛ましめ、空しく數日を送らせ給ふ。
の召さるゝ御船は、大船數多組合せ、　る。抑も船の起原と言つぱ、其昔黃帝　臣下の貨狄是を悲しみ、寢所に入つて
下白の大幕に、無双の武具を立並べ、　の御代に當つて、蚩尤といへる逆臣あ　心を結ぶ。或る時貨狄、庭上の池の面

を見渡せば、折ふし秋の末なるに、寒き嵐に散る柳の、一葉水に浮みしに、又蜘蛛といふ虫、是も虚空に落ちけるが、其葉の上に取乗りつゝ、次第々々にさゝがにの、いと果敢なくも柳の葉を、吹き來る風に誘はれて、汀に寄りし秋霧の、立ちくる蜘蛛の振舞、實にもと思ひ初めしより、工みて船を造りけり。黄帝是に召されつゝ、海上を漕ぎ渡り、逆徒を易く打滅ぼし、御代を治め給ふこと、一萬八千歳とかや。然れば船のせんの字を、公に舟むと書き傳へ、又一葉と申せしも、此時よりの例なり。合へ千船百船遠つ船、稀に見ぬめの浦小舟、なほ風早き浪路には、釣せで歸る蜑小舟、遠き波間の沖つ船、洲崎の方に隔りて、逢見ん夜半の友舟を、慕ふ船とや下心、通船とやかよへとや、戀の船橋かけ初めて、渡りくらべて今ぞ知る、阿波の鳴門の浪風も、凪げばぞ出づる釣の舟、櫂の雫に袖濡らす、思ひ逢うたる通路は、人目の關に身を盡し、焦れて慕ふ此身には、いとゞ心の早瀬川、流れの末の何時となく、夜を重ね行く楫枕、思はぬ方に堰き止むる、船と比ぶる身のほども、末の願ひの綱解けて、深き縁の水馴棹、さすや眞潮の連れて行く、めでたき君の御座船は、龍頭鷁首と祝しけり。

高砂松之段　四

〔解題〕通稱「高砂」。初代都一中作曲。謡曲「高砂」の前半松の段の改作。或は長篇浄瑠璃の一齣かとの疑あれど未詳。

ワキへ誰をかも知る人にせん高砂の、松も昔の友成の、御臺所や若君も、しのべや聲も高砂の、浦邊に上らせ給ひつつ、あはれ里人の來れかしと、暫く待たせ給ひけり。シテへ音信は松に言問ふ浦風の、落葉衣の袖そへて、木蔭の塵

を掻からよ。木蔭の塵を掻くへしや。ワキへ里人を相待つ所に、老人夫婦來れり。如何にそれなる老人に尋ぬべき事の候。シテへ此方の事にて候か。何事にて候ぞ。ワキへ高砂の松とは、何れの木を申し候ぞ。シテへ只今木蔭を清め候こそ高砂の松にて候へ。ワキへ高砂住の江の松に、相生の名あり。當所と住吉とは國を隔てたるに、何とて相生の松とは申し候ぞ。シテへ仰せの如く古今の序に、高砂住の江の松は相生のやうに覺えとあり。さりながら此尉は津の國住吉の者。是なる姥こそ、當所の人なれ。知る事あらば申させ給へ。ワキへ不思議や見れば老人の、夫婦一所にありながら、遠き住の江高砂の、浦山國を隔てゝ住むといふは、いかなる事やらん。シテへうたての仰せ候。ツレへ山川萬里を隔つれど、互に通ふ心づかひの、妹脊の道は、遠からじ。先づ案じても御覽ぜよ。高砂住の江の、松は非情のものだにも、相生の名はあるぞかし。ましてやいはん人として、年久しくも住吉より、シテへ通ひ馴れたる尉と姥、松諸共に此年まで、相生の夫婦となるものを。ワキへ謂れを聞けば面白や。さて〱先きに聞えつる、高砂の松の物語を、所に言ひ置く謂れはなきか。シテへ昔の人の申せしは、是は目出度き代の例なり。高砂といふは、上代の、萬葉集の往古の義。住吉と申すは今此御代に住み給ふ延喜の御事。松とは盡きぬ言の葉の、榮えは古今相同じと、御代をあがむるたとへなり。ワキへよく〱聞けば有難や。今こそ不審春の日の、光り和らぐ西の海の、シテへ彼處は住の江。ワキへ此處は高砂。シテへ松も、ワキへ色添ひ、シテへ春も長閑に、ツレへ四海波靜かにて、國も治まる時津風、枝も鳴らさぬ御代なれや、あひに相生の、松こそめでたかりけれ。實にや仰ぎても、ことも愚かや斯かる代に、住める民とて、豐かなる、君の惠ぞ、有難き。

神樂高砂　五

〔解題〕初代都一中作曲。古淨瑠璃「神樂高砂」の中のしのぶ姫道行の一章を取つて、一中節の語り物としたのである。

上フシへうき身の業を。下我と我。地恨み葛屋の軒を出で。父の敵を狙ひ行く。地智惠もや渥美内匠之介。頼みをかけて伊勢神樂。小オクリ打ちつれへ立ちて江戸アシ出で給ふ。地まづ市殿には母と姫。さもありさうに出でたゝせ。長地敵を討たん太鼓の役とゞめを入刺すは笛の役。合の手盡きぬ恨は數馬之介。人目を深く忍ぶの姫。地さきに進みて歩まるゝ。風俗ならしだしなら。田舍そだちといひながら。都にまさる江戸鹿子。地抱へ帶した腰付は。歌上我が子ながらもしをらしや。ハル誰も戀には妻を戀ふ。長地飾磨の徒步路有明の。月毛の駒よ我が戀ふる。雲井を駈けれど。すさみぬる。かの濡人の浦づたひ。明石や。須磨のいよこのまことに。汐燒こうせん衣え今來て見れば朝霧に。地島隱れつゝ行く舟をクル見るにつけても。われ〳〵が。カン出てこし跡の偲ばれて。カン何時か歸らん悲しやと拍子なげ。く心を白玉か。露かと問はん人もがな。地ハル袖さし上げて答へんと。猶も思ひを須磨の蜑。下ユリ鹽燒く上けぶり。ノルくす〳〵と。地消えもや果てん胸の中。誰か哀れと夕日さす。和田の笠松きて見れば。ツナギなほこそ濡るれ袖時雨兵庫に早くスエテ入舟の。島かげよりも櫓の音が。からりころり〳〵と押して來ぬればつき島のあれに高きは久方の。天の海面雲の波。月の船入る湊山。麓の野邊の草枕。さめてや出づる。スエテ夢の村。下敵を尋ね生田の森。袖に鈴振る乙女塚。雲井に見ゆる布引の。瀧の白絲打ち榮えて。歌へ五尺いよこの手拭五尺手拭。地へ天津乙女や晒すらん。こなたの沖を見渡せば。綱の手を曳くみぬめの浦。綱手に縋り蜑人の。聲を揃へてえいさらさ。〳〵〳〵

さつと引く潮に。映るやハズミ月の御影 さしかゝる。津努の松原ちよと越えは。堀江大物打過ぎて。入江にこそは
山。地まだ旅馴れぬ我々が。疲れに痛 て。難波も近く鳴尾の宿。武士ならね 月の暮。カントメ狙ふ敵を打ち取つて雲
む蘆屋の里。マヒセメ過ぐれば跡は西の ども我々も。きてこそは見れ兜山人目 井に揚げん難波津に。一宿してこそ冬
宮。東にならぶ二崎の沖。引くや潮の を深く忍びの緒。しつかと締めて人々 蔵り。

萬屋助六道行　六

〔解題〕略して「助六」又は「助六道行」ともいふ。一中節の最古曲の一で、今では語り得る人も少い事である。實說はしかと解らぬが、劇に仕組まれたのでは、寶永四年に大阪の片岡仁左衛門の芝居で「京助六心中」と題して演じたのが古く、同六年には竹本座では「千日寺心中」と題して、大阪の事柄に作りかへて操にかけてゐる。一中節の助六淨瑠璃としては、歌舞伎年代記に延寶六年に初代一中が山本土佐掾座で語つたのが始めだとあるが、これは誤りで、寶永六年頃の作と考定されて居る。「助六心中」及び「蟬のぬけがら」の二種があるが、現行の道行は「蟬のぬけがら」の最後の一段である。難波の萬屋助六が放蕩の擧句三千三百兩を費消して勘當され、命を捨てようとしたが、最後に馴染の揚卷を一目見ようと紙衣姿で廓に行き、揚卷に逢つて痴話口說の果、心中しようと廓を拔け出るといふ筋で、「夕霧」の吉田屋の場と類型の作柄である。結局二人は死なずに助かる事になつてゐる。

是非もなけれ引ギン佛ハルも元は。ド凡夫 かはらめや。かれを見これを聞く時は。われ〳〵は。ハルたま〳〵人と生れ出。
にて。中地かの耶輸陀羅女の妹脊中。ウ ハル戀と菩提を引きわけて 冷泉フシ道は。ハルためしすくなき川竹の。流れに入沈
腚る夜の様も悋氣の品も。今の衆生に 二筋引。なきものを。中フシいかなれば む身の罪業。夫はわれ故ふた親の。ウ

氣にそむきにし故にこそ。誰にか引まカ、リ下心のツキユリわる
け。も。おゥとろべき。地智恵も器量い神様や。中地かくな
も身代も。ハルみなあは事と消え失せるやうの御守り。ハルさ
て。上かはせし事のゥかはるをば。かりとはつらや胴慾や。
はらぬやうに先の世で。長地さきで逢とても此世は此通り。
ふやら逢はぬやら。ヒウどうやらかうせめて未來を逢ひなく。
やら知らねども。ハルいとし可愛のあ夫婦一緒に極樂へ。そ
まりには。スエテかなはぬ時の神だ引たれもかなはぬものなら
きギンそもまあわしが氏神は中地どうしば。ヒロヒた。と。へ奈
たぐわちな神さまぞ。ハル京の吉川の落の底までも。セツユリ
神帳に。入つた神やら入らぬのか。カふたり手に手をとりく
カリわけもなさけもわきまへす。ツキユリみて引。地離れぬやうに
やぼ天神かうつじんか。中正五九月やとかけまくも。かたじ
月々に。サイモンアシ產生神殿の緣日と。けなしや日の本に。上
神酒奉り年毎に。神事といへばたいせ生れ出でにしるしに
つに。カ、リさいしよにゐやんす母さまは。地如何なる五障三
も引。祝ひ淨めてねんごろに。わしも從も。一念彌陀の御導
廓のうちながら。心ばかりの手向をば。願。なに歎くらんツキ
ナホス地どう受けさんした事ぢややら。エリたゞ賴め難波の事の



よしあしを。爪ぐる數珠の數取りに。り。明方近く玉鉾の。クウた中むる足は　てにつきにけり。

とりぐ〳〵さぞや噂せん。あれ御覽ツキユ　弱々た引。堤づたひのしのぶぐさ。明

りぜよ。行先に。はや横雲のたちわた　けば憂き身のすて所。トメ　さらしなは

助六上卷二度心中道行　七

〔解題〕一に「助六後日心中道行」。初代都一中作曲。作者佐渡島三郎左衛門。前掲「助六心中」の後日物である「傾城内房嵐」の道行である。この淨瑠璃の大筋はかうである。萬屋助六は心中にまで出たが親淨心の許しを得て、八百兩の金までもらひ、いよ〳〵上卷を身請する事になり、内祝言をする、その場へ上卷の母と叔父であると名のつて來て助六上卷を欺き、その油斷に件の八百兩を盗み去る。上卷は二度の勤めとなり、助六は再び紙衣姿となつて騙りの搜索に出たが、上卷が身請されると聞いて、二人は再び心中しようと駈落をするその道行がこの「二度心中道行」。結局二人は助けられ、かたりも身請も助六と許嫁の約束ある武州大野津の堀江彦次右衛門の甥彦助の計略である事が分明し、目出たく納まるといふ一種の喜劇式の作である。本曲は今では廢曲となつて居るが、前の助六心中が、近松の作かとの問題もあるに因んで、こゝに兩方比較の便にもと思ひ、且は名高い作であるので、かた〴〵收める事とした。

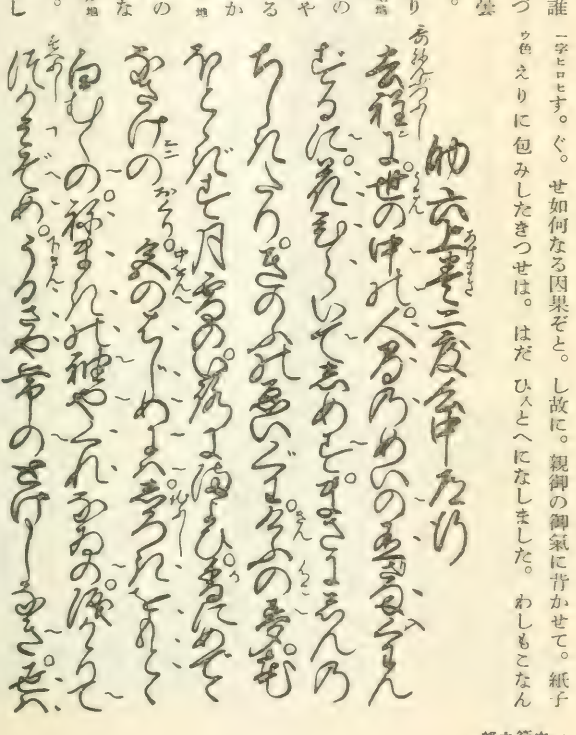
歌念佛フシさる程ゝに。ウギン世の中の。八重。ギン今日色の夢。花ほとゝぎす月雪と白無垢の。寝卷の袖や紅の。涙か

聞の命の有樣ゝ觀ずるに。花聞いてしの。色に迷ひ。香にめでて情ケスダ。かりてスヱノノつかみそめ。ギンうるさ

めす。まさに貢の知識たり。昨日の榮　中音色のはじめには。キンノ白きをもと　べ帯のとけしなき　世は成り次第死に

に行く身の。ヒヤウシ きさんじは。地 誰
恥かしと思はねど。川端づたひおのづ
から。上地 うつれば影を水かゞみ。曇
るや星の。ウ 行く道もハ 月も雨夜の。
ツキユリ ちしご時。地 五々八々と指折り
て。コハル地 爪ぐる數珠のたもと川。上地
水盃は醉ひもせず。下地 京の吉田の
神帳に。中地 顏出しもせぬ死神を。地 や
ほ天神か。ウ うつじんか。下心のわる
い フシナガシ 神さまと怨み喞ち咎めか
や。今また今の。色ツキユリ 身の恥を。地
さらしなはての見こしより コハル地 松の
位とそやされし。中地 常盤の松もうな
る松。うきふし松もかれ松の。コハル地
やにかうなればわか松や。後は衒と。
碎かれて ハズミフシ 燃ゆる煙のあさまし
や。下地 でもまあわしは主さんの。妻と
いはれたはつものが。上地 七十五日生
きもせで。カン地 死ぬるやうなる嫁入は

一字ヒロヒ す。ぐ。せ如何なる因果ぞと。し故に。親御の御氣に背かせて。紙子
ウ色 えりに包みしたきつせは。はだ ひ人とへになしました。わしもこなん



も スエフシ 淵にや沈むらん。三下リ上 祭文ブシ 太夫 に。ウ 逢ひそめて外の。オクルフシ 男は目
なく／＼申すやう。下 緣はいなものわ につかす。地 よい身になるを嫌うた

も。ゥかうなるはしの。詞ツキユリ約束の仇霞。クリ上ブシかゝる輪廻の。ウ本七とのりのきし。迎へとらせ。ゥ給へや
か。色下あゝ恨むまじよしや世に。上地い ツユリふたりづれ取るや手に手を力草。とゥやがて舟にぞ三重上のりにける引。
づれ歎きはありすか山。コハル地麓の原 地わけてつゝみの捨舟を。彌陀の弘誓

自然居士過去物語（じねんこじくわこものがたり）　八

〔解題〕　初代都一中作曲。通稱「自然居士」で元祿三年正月竹本座興行の義太夫の正本「自然居士」の一章を取つて一中節で作曲したもの。この原作「自然居士」は近松の作との說もあるがどうであらうか。大筋は次のやうである。轉法輪三條之房の最愛の御臺光房が惡臣に呪咀されて十八歲で世を去つたので、之房は悲歎の餘り出家し、雲居寺で受戒して自然居士と稱へ東國行脚の途に上つた。そして富士の裾野で曾我十郎の亡靈から示現を受けて、信濃の陣中で曾我五郎の再生である武田晴信に會ふ。のち京都の雲居寺で說教中に亡き妻の遺骸から生れて忠臣の手に育てられたが遂に人買の手に渡つた自分の娘に邂逅して之を救出し（こゝは謠曲「自然居士」の改作）、妻の供養を營み、晴信の力を借りて惡臣等を滅すといふに終る。

本曲は右の淨瑠璃の第一段の後半を取つたもので、自然居士が曾我十郎から、彼等の過去の物語を聞く條である。この想は恐らくは、地藏菩薩を信ずる大濱の眞如房が富士の裾野に宿つた夢に、甲州一條高砂河原の地藏堂で曾我兄弟の靈鬼に逢ふといふ夢を見て、その地に辿りついて地藏堂を建立したといふ「地藏菩薩靈驗記」の中にある說話から系統を引く曾我五郎法華經讀誦の功力によつて武田晴信と再生したといふやうな話を取合せられた說經系の說話があつて、それを作り込んだものであらう。

因に今は廢曲となつて居る一中節の古曲「二位前道行」は、この「自然居士」の第三段新の前道行を取つたものである。

シテへ植ゑて眺めし懸草は、ツレへ秋のならひと木枯れて、ねに残る虫はたゞ、鳴くより外の事ぞなき。ワキへ痛はしや之房卿、雲居寺にて受戒ありしが、自ら四徳備はりて、自然と悟る法の道。せい〳〵(先聖の誤)の跡を追ひ、自然居士と戒名し、程なく御寺を忍び出で、東國行脚と心ざし、急がぬ旅路日を重ね、富士の裾野に着き給ふ。ツレへ秋の日まなく早暮れて、野路の伏猪の合宿り、宿求むべき身ならねば、星の光を便りにて、歩み苦しく行く道の、松の一叢木深きに、ワキへ棟門高き一つ家あり。居士さし寄つて見給ふに、二十あまりの若侍、燈火幽かに掻き立て、蔀を繰りすつる垣間見は、心ゆかしと立ちよりて、少し御内へ物申さん。これは東國行脚の僧、苦しからずは、軒の端、敷寝に暫く休みたし。御貸しもやと伺ひ給へば、シテへ主人の男立ち出でて、御覧の如く住み荒らし見苦しくは候へども、苦しからずばいかでかは、旅泊を惜み申すべき。ツレへ先づ此方へと伴ひて、奥の一間に請ぜらる。ワキへ居士御挨拶終つて、見申せば御年若なる武士の、人倫稀なる野の末に、御一人住みは心にくし。何さま仔細の候はん。シテへさん候某儀は曾我嫡流の浪人なるが、かた〳〵様にも御存知の如く、此富士の裾野と申すは、先祖祐成時致の討死をせし所なり。さるによつて先祖をゆかしみ、此所に居住仕候。幸ひお僧の御一宿、靈魂悦び申すべし。御回向あつて給はれと、しみ〳〵とこそ賴まるれ。ワキへ旅僧重ねて、仰せ承り候如く、かの祐成、時致の御事は、末世の今に至るまで、現人神と名に呼ばれ、武士一同の慕れ高し。あはれ其時の御物語り、中傳へ[illegible]、[illegible]ばかり聴かせてたべ。我が國づとにと、のたまへば、シテへ男聴いて、[illegible]をこがましう候へども、御所望の上は是非もなし。然らば旅泊の御徒然し、あら〳〵語り申すべし。へいで其頃は建久四年皐月下旬の事なりしに、右大將賴朝公、富士の御狩有るべき旨、梶原平三景時に、豫て上意をなし下され、國々へ觸れければ、御旗本は申すに及ばず、御一家並びに大名小名、我も我もと馳せ集り、御勢都合百七十三萬人とぞ聞えける。三下りへ御寮の其日の御裝束、青狩衣に立烏帽子、尾花蘆毛の逸物に、白鞍置かせて召されたり。ナホルシテへ御馬添には左郎丸、赤地の錦の直垂を下し賜つて、是を着る。力は八十餘人が力。萠黃の腹卷着込みにし、四尺八寸の大太刀、一尺八寸の打刀、

十文字に差すまゝに、白柄の長刀、右手の小脇に掻い込んで、君を守護し奉る。〽さて又秩父の重忠は、賴朝一世の先陣役、一際すぐれし狩裝束。眞先かけて宇都の宮、これも狩場の横目役。後備へは御身北條親子を初めとして、シテ〽和田、ワキ〽千葉、シテ〽小山、ワキ〽上總之介。ツレ〽何れも狩場の出立にて、鷹据ゑて御供なり。シテ〽犬の鈴、ワキ〽鷹の鈴、シテ〽轡の音が、ツレ〽ざゝめいて、さしもに廣き、富士の嶺に、駒の立てどはなかりけり。〽三日かけて以前より、嶮しき峰に攀ぢ登り、絶頂を眞つ下りに、巖を起し、古木を叩きをめき叫んで狩り下す、數萬の射手は、シテ〽入れ違ひ、ワキ〽駈けちがひ、シテ〽飛び違ひては、ツレ〽分捕數多しつれども、シテ〽兄弟の人々は、鹿に心の付かされば、鹿の子の一つもとゞめ得ず。いかにもして祐經に、巡り逢はんとばかりにて、茂みの蔭に馬乘り据ゑ、前後左右に眼を配つて見る所に、四十あまりの大の男子、三つある鹿に目をかけ、かりまたつがつて追つかくる。ワキ〽時致目早き若者にて、祐經と見るよりも、シャ鹿こそ通れと囁けば、シテ〽十郎アッと嬉しくて、弓と矢とつて打ちつがひ、障泥をうつて追ひかくる。十郎は兄なれば、一の矢をと心がけ、敵の矢壺に目をも放さず、弱き馬に強く手綱をかい繰れば、とある伏し木に胸を突き、眞逆さまに落ちてけり。ワキ〽時致悲しさ遣る方なく、急ぎ馬より飛んで降り、祐成を引つ立て、馬起きんと犇く間に、ツレ〽敵名馬に乘つたれば、谷峰隔てて落ち延びたり。合〽無慙や兄弟は、思はぬ難にあいそなく、柴折り結ぶ草館に、泣く〳〵歸るぞ哀れなる。シテ〽されども兄弟思ひきつたる事なれば、其夜の夜半に忍び入り、親の敵祐經を、思ひの儘に打ちおほせ、小柴の蔭へさつと引き、忍びに息を吐いたりしが、思へば御寮は祖父の敵、いざ、ワキ〽オ、一と太刀恨みんと、ツレ〽聲々に名乘りかけ、兄弟添うて斬込みしは、二つ連れたる唐獅子の、胡蝶を追ひし勢ひにて、三百餘人に手を負はせ、兄弟ともに討死す。ワキ〽時致は、箱根育ちの稚兒上り、法華經讀誦の功德によつて、今甲州に隱れなき、新羅源氏二十七世、武田の家の總領、大膳太夫晴信と再來せり。シテ〽又某は兄ながら、たゞ好色に心染み、作善なき身の悲しさは、長くも修羅の苦患を受くる。是は又時致が、最期に及ぶ夕べまで、身をも離さぬ、兵庫鎖の片目貫、今晴信と生れても、緣を求めて此

太刀を、家に傳へて持つとかや。是を證據に祐成が、跡弔へと申して給べ。ツレ へ疑ひ給ふな、さらばよと、返す詞は有明の、月に殘りて影薄く、覺むるや夢の一と結び、庵と見えしは、亡き人の、標ばかりがほの〲と、夜も明け白む富士颪、清見寺の鐘となり、三保は松風田子は又、浦風遠き朝景色、不思議なりける次第なり。

椀久道行　九

〔解題〕初代都一中の正本「椀久末松山」の道行である。本曲は初代一中の語物中でも有名なものであるが、著作年代も作者も未詳であり、尙記海音の作「椀久末松山」（淨るり名作集、上卷所收）との前後についても斷言し得ない。尙詳しくは同曲の解題御參看を乞ふ。

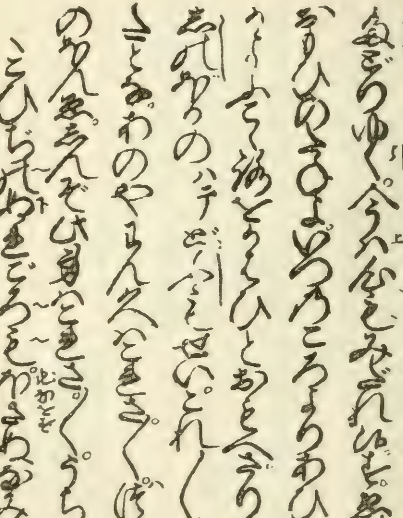
上卷

二上り歌へ辿り行く引。今にては心も亂れ候。末の松山思ひの種よ。いつの頃より逢馴れそめて。通ふ心を。かは。いと思へ。さりとは〲。忍ぼかの はて どうもせい。これ〲〲受けたとな 引。あのや椀久はこれさ。〲。鼓の革かのほんえ。しんぞ此身はこれさ〲打込んだ引。兎角戀路の濡衣。地ナホス 乾さぬ淚の露しぼり。ハル 朽ちなば袖よ今の身は。せいしが野邊の思ひ草。上 莟のスカス 宿に只一人。ウ 床離れ行く 本ツキ ユリ 曉の。地 そのきぬ〲の俤を。コハリ 問へど答へずしよんぼりと。スエフシ 昨日は引 今日の昔にて。ウタヒ 法師〲は木の端と。思ふは野暮か譯知らぬ。心の花の薰をば。知らせたいぞや 引。詞 ア、鉢々。色詞 此十德も過ぎし頃。ゆかり法師が一節に引。地 智惠も器量も身代も ハル 皆淡雪と消え失せて。かはせし事の變るとも。離れまいぞの ノルフシ 君琥珀。我は塵かや 詳ツキユリ 身に積る。地 心の芥胸に滿ち。コハリ それがかうじた物狂ひ。歌ガヽリ とても濡れたるや

引。やんやあ〳〵。身なれども下ハズミフシ一村雨を厭はじと。地立寄る軒の小簾の戸に。ハル黄無垢緋無垢の空炷の。洩れて見えしはウク白人か。色ヒツユリ色でまろめし夜の妻。太夫ハル ハチタヽキヘ堀江の文の便りさへ。ワキハル橋が無ければ渡られぬ。太夫戀のハル願ひも阿彌陀橋。ワキうきなが太夫堀も。二人わざくれじと。濡れて通ふか立賣堀。ワキ上遠つ空なる薩摩堀。太夫上戀しゆかしき我が妻の。ワキ行方を太夫問へど二人阿波座。堀。雜兒場安治川フシ福島を。地迷ひ行けども松山に。ハル似たる人なき浮世ぞと。色カン泣いつ笑うつ狂亂の。ハル身の果何と浅ましやと。芝を褥に伏しけるは。ナキブシ目も當てられぬ風情なり。

下　巻

ツレへかゝる折節染付の戀を素焼に松山を千代の子の日と曳抜きし土氣のとれぬ備前客人目も旅は遠慮無くさんさめかして通りしが　シテへ心にかゝる玉垂の駕籠の隙よりそれと見て胸の氷も消え〳〵に抱付かんと思へども分けを隔つる八重垣の泣きも泣かれず目の中に　哀れを持ちし身の辛さ心の底の涙なり　ワキへ早次郎駕籠立てさせヤアあの法師は此頃町を徘徊する氣違ひの御坊よなさて〳〵器量手足の尋常さ如何様金使ひの抜殻ならん不便の者やそれ〳〵調



市錢取らせよへ三助あつと立寄つてコリヤ／＼百錢ころりと寢耳に入るぞ且那のお蔭仇に思ふな起きよ／＼とゆすられてシテへ椀久むく／＼起直りヤなに此錢を主人が拙僧にくるゝとや過分／＼さりながらそれ善根といふは往來の旅人慈悲の袖より洩るゝ一錢二錢を受け悦んで貧僧が朝夕の煙を立つる助けとする膚を隱す布子は着る後世を願ふ十德は有りモ乏しき事は無き物を覺えなきに合力とは扨もたわいない借上人花にくるゝか錦にはずむか冠古けれど脊には腹かず大盡は腐つても太鼓は持たぬぞあれやくたいもなき和郎ぢやわホヽほんぼにトヽとんと入らぬぞ置いてくれへ許さんせ山椒の子／＼兎角戯れ遊べ色里の戀の奴と遣ひ捨て金の罰親の罰今の我が身に當りたる目前の法師が有樣見ても聞いても嗜み給へ返らぬ昔と返らぬは憂身の末淺ましや悲しやと涙を流し語るにぞワキへ誠に是は道理と皆々袖をぞ絞りけるへ所へ作兵衛初芝諸共驅來りさて曲もなき此有樣命の親の主樣に袖乞をさせまして何しに我々見て居られうぞ假令夫婦の者は飢ゑてもお前をかくまはんサヽ暫しの中も人が見るお草臥なら作兵衛が負うてなりとも抱いてなりとも歸りませうと恨みつ泣いつ搔き口說くは優しき夫婦が涙なりシテへ思ひ餘りて松山は編笠の内より顏を差出し誰方樣かは知らねども扨賴もしきお心や見れば物狂はしき御有樣夜晝附いて居てなりとも外へは出して下さんすな賴みまするといふ聲も心まで來る涙なりへ初芝そこへは目もやらずへこれ作兵衛殿私も同じ流れの身犬猫の樣な傾城と同じ事やうに思すところが恥しいあつたら金をせめて扨川へなりとも捨てたならモどんぶりとなど言はうものよしない四つ足の藥喰を遊ばして漸く逆境へ果て給ふとこ恨みの角をぞ生すにぞシテへ椀久ハツト居直りてヤナニ我を葉へた氣違ひとこなりや其方達のいかい見損ひの忝くも見ン事な大盡樣アレ歷々の手代もあり慮外ながら緩怠乍ら拙者も君を思へば徒步跣足花にはつらしと詠み置きし神の緣の三下りへ東西／＼聲は出でねどはならかして申さうぞ[illegible]／＼地體某は大阪の者でちよつと仕損うてこんな形になられた。やうか信濃へ信濃へ信濃越後の寄よりもへ冷たい心に晒されてアヽサテ正體ないお妾とせめていとしと思はずとも人が笑へば人並に笑ふは憎や卑怯やと睨み詰めたる編笠の中シテへ松山今は堪へ兼ねてオオ道理やことわりやお爲にかうはした

れども其お姿になり給へば今になつを絶つ道理命より實より重きは義理のしすうきを待つて親達へも勘當宜しく詫言せんッレへ先づは日出たき出船と極めては立ちはせぬ拵へ置きし言譯には是二字ぞかし我も鄙びた身ながらも太夫が色に目が見えず切なる金銀費して斯く迄はしたれども命かばはぬ心體の仲見給へと懷中に嗜み持ちし九寸五分拔き捨て是までと既に自害と見えし時ヮキへ早次郎聲かけヤレ先づ待て一言いふことあり彼の者を椀久とは始めより知つたれどももと傾城は賣物にて金が敵と言ひながら捨つる命に較ぶれば千金も塵埃なれども半錢掠めては是また命

久松山相輿に打乘せ舁き乘せいざさらばさらば／＼と立出づる日本開闢好色引分けて行く事は物の哀れを知らぬにの誠の道の親として越し方よりも今の似たりその上親久右衞門代々屋敷へ出世に盡きぬ妹脊の友白髪榮ゆる道こそ入致せば是以て餘所には見られずよし久しけれ。や某も愛着の根は枯れずとも松山には暇をやるぞ一先づ國許へ椀久松山同道

梅川忠兵衛　道行三度笠　一〇

〔解題〕　作曲者都半仲。都半仲は初代一中の門弟で、後に宮古路豐後掾と名のつて豐後節の開祖となつた人。詞章は近松の「冥途の飛脚」の中の道行「相合駕籠」を取つたもので、外題は紀海音の改作「傾城三度笠」によつたらしいが、文辭は關係がない。

節付、句切りは古版の正本によつてこれを示すと共に現行の語り本にあるものは括弧の中に入れて置いた、兩者對照の便にもと思つてである。

(三下リシテウタヒ)へ翠帳紅閨に。枕ならべし閨(床)の内馴れし衾の夜すがらも(に)。二上リウタ四つ門の跡(ウタツレ)夢も存し。さるにても我が夫の。ウ秋より先きに必ずと(木調子)仇し情の。フシ世を頼み。本調子地人を頼みの綱切れて。ハル地夜半の中戸も引きかへて。地人目の關に堰かれ行く。中地昨日の儘の鬢付や。門説経髮の髷口のほつれたを。わけて進じよと。櫛を取り(る)。ハル地手さへ涙に凍えつき。ウ冷えたる足を太腿に。杼リ小オクリ相合炬燵相輿の。地鴛鴦の息杖生きて又。祭モン續く命が不思議ぞと(ヨイサヨ)二人が涙こぼれ口。明けぬ其の間は。(ヨ)暫しとて。鴛鴦の簾を揚げてさへ。膝組み交はす鴛鴦の内。ウ狹き局のありし夜の。逢瀬に杼リツキユリ似たは似たれども。地炭の埋火いつしかに。地朝の霜と置き替へて。

中地夜半の嵐に呼ばれては。ウ答ふる野邊の禿松。過ぎし其夜が思はれて。ギン杼リいとゞ涙の種ならぬ(ん)。ヘホハズミフシ何く〵と思ふぞや。是ぞ一蓮託生と。慰みつ又慰みに。ハル地比翼煙管の薄煙り。ウ地朝出の賤や火を貰ふ。ツルギブシ野守が見る目恥しと。色地鴛鴦立てさせて暇をやる。あたへの露の命さへ。惜しからぬ身は。引取へ惜しからず。なほも惜しまぬ。徒歩跣足。スエフシ惜しむは名殘ばかりぞや。二上リ(ツレ)へつひに着馴れぬ綿帽子。太夫(シテ)へわしが顏よりこなさんの。ワキへ肌に是をと風防ぐ。太夫(シテ)へびらり帽子の(や)。へ紫や(の)。二人(ツレ)へ色で逢ひしは早や昔。太夫(シテ)へ今日は親身の女夫合ひ。ツェへ頼まば願ひ庚申。二人ウタガヽリ(ツレ)へ庚申堂よと伏し拜み。跡振り返れば勝曼と(の)。又取交し泣く涙。袖の氷と。閉ぢ合へ

り。本調子(ナホス)へ此處は知る人多ければ。ウ地此方へ〵と袖覆ひ。里の裏道畦道をすぢり縺りて杼リヒツユリ藤井寺。あれ。(〵)あれを見や。どこの田舍も戀の世や。他所の睦言妬ましく。上地それ覺えてか何時の事。かの初雪の入朝込みに。寢衣ながらに送られし。ウ地大門口の薄雪も今降る雪も變らねどハズミフシ變り果てたる身の行方。地褥に窶るる小笹原。霜に枯野の薄原。ぱら〵さら〵さつと鳴つたは。我を追手の尋ぬるよ(か)と。ウ地覗ひ重なり影隱し。ウレヒアシ妻戀鳥の羽音に怖ぢ。る身となるは。いかなる罪の報いぞと。スエフシ口說き歎きて。行く姿。ヘヤメ(シテ)泣くか笑ふか。富田林の群鴉。(ツレ)せめて一と夜の心なく。咎むる聲の高間山あの葛城の神ならで。貴の通ひ路つゝまじく。身を忍ぶ道戀の道。我から狹

き浮世の道。竹の内峠袖濡れて、岩屋越とて石道や。野越え山越え里越えて 行くは。戀路の慣ひにや。

頼光山入の段　一

〔解題〕 近松の作「酒呑童子枕言葉」（寶永四年）の第四段目頼光山入の詞章を取つて都半仲が作曲した。之は一時中絶の形であつたのを文化年中に初代菅野序遊が復活したのが現行の曲である。校訂用の底本は現行正本によつた。

ウタヒシテ へ秋風の。音に湛へて（原作たぐへて）西川や。雲も行くなり大江山 引。抑も是は源の頼光とは我が事なり。此度丹波の國大江山鬼神の事。思ふ存じのあればにや。兜に代る兜巾を着。鎧にあらぬ篠懸や。兵具を入れて笈を負ひ。さも行體の姿なれども。其主從は頼光保昌。貞光季武綱公時。まだ夜のうちに有明の。月の都を立ち出でて。フシ地 〳〵。月に別れて月に又。ハル地 昨夕は宿をかりわらはの。腰に着けたる法螺の貝。地 鐘より先に聲立てゝ。ギンオクリ 何處の夢（雲）も驚かす。百八煩惱の雲つきて。朝日や峰に スヱフシ 駈け出しの。ハル 行者と人は尊くも。オシフシ さながら。惡魔降伏の御門。出ぞ頼もしき。王城鎭護の スヱフシ 山々を（も）。ギン 歸るさ何時と待ち顏に梢 冷泉フシ 々を染めなして 引。地 秋に大比叡高尾山。ハル地 花の愛宕と恨みしも。ウハル 我が栂の尾や嵐山五百機立てゝ 入 山姫の。ウ 手織の錦誰に着よ我に清瀧。色ツキユリ 戸無瀬川 地 瀧津木の葉の漲れば。瀬にすむ鮎もうづもれて。ハル地 紅葉すなどり桂川。ウ地 麓の野邊は霧こめて。色地 淀は小暗き朝明けに（原作淀は夜ふかき朝霧に）ウ 玉の瑞垣あきらけくそれと 替りセツユリ 白斑の。鳩の峰。地 われ源の氏の神。ヘル地 流の末の弓矢とる。色地 我が魂に神慮移りませとて伏し拜み

ハル地三寶諸天納受と。色地鳥も唱ふる佛法僧。ウ松の尾山を他所に見て。心の駒に沓掛の宿を勇みて。引取へ過ぎ行けば引。ウ地おのが身ながら賴もしく。色地猛き姿や金剛杖に。長地伐つて突けとて堅木原おひもならはぬ老の坂引。色地越えて生野の道遠き。ウ地耳にも觸れず目にも見ず色地尖れる山は刀して削りなせるに異ならず。ヲドルフシ岩代り通す淵の音引。鑿もて穿ちし如くにて道なき山の名にも似ず。大江山の麓なる彼の懸。室にぞ着きたまふ。

丹波與作夢路駒　一二

〔解題〕近松の作「待夜小室節」の道行「與作小まん夢路の駒」の文を轉用して語句を多少改めたもの。作曲者は都半仲。因に江戸長唄の「與作」もこの系統を引いたものである。

歌へ與作丹波の馬追なれど。ソンレハ〳〵今は野末の放れ駒ぢや。ソンレハ〳〵しやんとさせ與作よさく。與作ォクリ地よさくと呼ばれつる。稻負鳥も音を入れて。ハル地野邊の苅萱軒端の荻。馬の秣に飼ひ殘す。長地草も我が身もこの曉は共に枯野の轡蟲。ハル地人を乘せたが乘せられて。ノルハル地限りの旅の坂の下なう。夜深に急ぐ乘掛の。ウ泊は知れた一ツツキユリ四日市。地我も泊はなゝ七日。ハル地中有の旅の馬羊。ゥ歩めシツ〳〵ア、〳〵しぶとい口を引けどしやくれどフシ行き兼ぬる。地畜類ながら生あれば。最期を惜しむ綱すくみ。歌わしは十二で人呼び初めて。今年二十一滿九年泊めし旅人幾萬人ぞ。關一宿は多けれど。男女に幾人か。友の好誼もフシとき時の花。無常の風に散り果てゝ。馬より外に訪ふ人も泣いてくれろか優しやと。鞍にひれ伏しはら〳〵と。スヱフシ袖には淚梢には。カヽリ地木の實こぼるゝ椋本や。ハル地契りそめしは一昨々年。ハル地抜け參宮の道連れに。ウ色地戀の重荷の馬追うて。

足もかろ〳〵心も廣き豐國野とこそ樂しみし。厭かれぬ中を秋の霜。今宵ぎりぞと氣も減りて窪田に浮名埋むかや。大阪音頭 阿漕の蜑のあこぎにも形見と。なれや石塔の標の塚を思ひ出す。清めし肌引きかへて。刄にけがし死する身は二見が浦を思ひ出す。返らぬ昔ツキユリ思ふまい。本調子 なくな〳〵

と啼く鴉。スヱフシ に聞きしが今ぞ知る。ましや。ヒロヒフシ 忌まはしやとて道もせに。道者にも。嫌ひ憎まれ人々のよもや回向もなさけなや。過去も未來も現世で知ると。スヱフシ 男見る目は泣く目許。ギンセメ 早や明方の。

人の末期を知らすとは。ウ 朝熊が嶽あさか。の齋宮の忌言葉。さらす姿は未刻の太鼓の音は

香 高田の寺ゥ泊り〳〵は多けれど。十萬億土馬次なしの。西は百味の旅籠屋に。觀音勢至手を取りて。蓮の臺に泊らんせ。夫婦の外は相宿も。カントメ 南無阿彌陀佛彌陀佛と。くわうの阿彌陀の影賴む。その誓願の詞の緣。千貫松にぞ着きにける。

お夏笠物狂　一三

〔解題〕 初代都一中作曲。近松の「五十年忌歌念佛」（寶永六年）の「お夏笠物狂」の章を轉用したものである。初代一中の語物中では世に知られたものゝ一で、正徳五年顔見世に江戸の市村座で本曲を語つて好評を博した事もあつた。

上歌 夜さ來いと。ハル 言ふ字を金絲で縫はせ。中 裾に淸十郎と寢た所〳〵。色 地 觀ずれば夢の世や。寢てゥ 溫めし懷

引。ろ子。中 何時の間にかは浮かれ出で。三界をたゞ 下 家として袖笠 引中地 雨の宿りにも クル 心とゞめぬ假枕。上地 流れ

にあらぬ川竹の。ハル さゝの小節のびんささら。中 花の手おほひ。下ギン お手を引かれた。ギン これも熊野の修行かや。

色詞姉さんなうこれ。中ウ 勸進柄杓の。笑顔よしとてドイロ 柳が招く。柳の髪の何故に引。ハル 浮世恨みて尼が崎。ハル 尼が崎とは海近し。ウ 何故にそなたは鹽がない。ハル 節は哀れにウ 身はスエフ シ 伊達に唄は念佛の唄比丘引尼。二上リウ タ 向ひ通るは清十郎ぢやないかの。笠がよく似た菅の小笠が。さりとはよく似た。えいやらえ。中地 笠を知るべのフシ 物狂ひ引。地 物に狂ふが我ばかりかは。ハル 鐘に待つ宵鳥には別れ。ウ 戀する人の夜な／＼を。氣違ひとてな笑ひたまひそ。詞 傳へ聞く孔子は鯉魚にわかれ思ひの火を胸に焚き。白居易は子を先立て丶枕に殘る藥を怨む。カン地 それは子故の色人 別れの涙。ハル 親より子より我が身より。上イロ いとし殿御のカンイロ いとしぼや。それよりウ びんぎ音信の。色 聲を聞かねば顔も見ず。ウ 我は秋鹿

夫を戀ふ。色ツキユリ かいろと啼くと知らせたや引。ワキ詞 なう／＼あれなる御僧我が殿御返してたべ何國へ連れて行くことぞ。太夫 イヤお僧とは僻目かや

二人三日に三枚七日に七枚。中 起請誓紙のハル 牛王のうらなく。灰に燒きつ丶互ひに呑んだる。ウ地 水も洩らさぬコハル 中々に。ハル 引きも合はせぬ神心。下ギ

我も焦がる丶丸太舟。中 浮世を渡る一節を。ウ 謠へや謠へ泡沫の。小歌 小舟作りてお夏を乘せて。花の清十郎

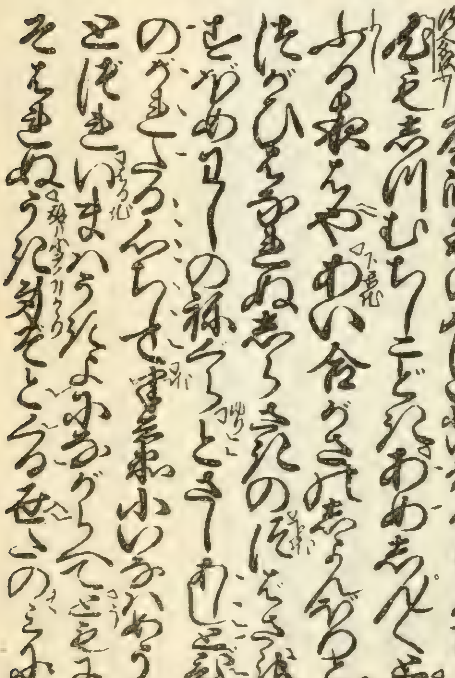


に櫓をおさしよえ。マヒブシ 觀音薩埵の、シ 熊野の神はお留守かや。ハル 足柄箱根誓ひには。枯れたる木にも花が咲こに。玉津島。イロ 貴船や三輪の色人 明神も神中地 さいたは椰の葉。大夫 一枝でワキ 一枝。とも覺えぬ神ならば イロ 尋ぬる人に逢

はせてみや。色それ。〳〵。〳〵。逢とハル譏つても祈りても。神の力も叶て狂ひ引。トメ嘆くぞ哀れなる。
はさぬ逢はれぬは皆。ウレヒ僞りの御神はぬかと。下スエテ笠も髭もかなぐり捨

小いな半兵衛 唐崎心中 一四

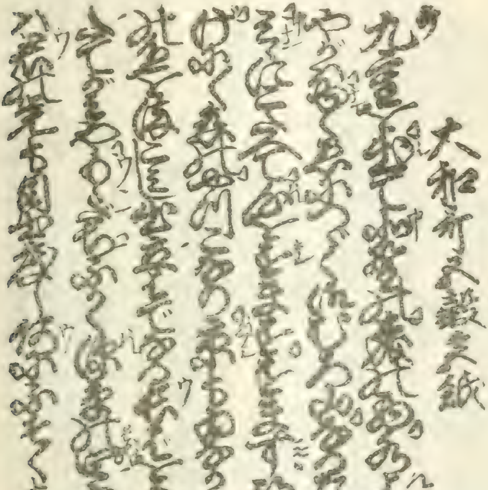
〔解題〕外題年鑑の都太夫一中の語物の部に「辛崎浪枕」とあるのが、この原作で、本曲はその心中道行であらうと思はれるけれども、原本未見のため斷言し得ない。尚又それが爲に近松の脚本「唐崎八景屏風」（元祿十六年作か）との關係の有無などをも判じ得ないのは遺憾である。兎に角小いな半兵衛物の原作と見てよからう。作曲者は初代都一中。



宮古路豊後の古正本「唐崎心中」

現行の譜本を底本として、便宜句讀點を施した。

へ心もしづむ知死期時。雨しんしんと降る夜半や。相合傘のしよんぼりと。番ひ離れぬ白鷺の。翅をすぼめ鶯の塒と着足し。預び通れたる心地して。半兵衞小いなは女夫連。今は浮世に存へて。共に添はれぬ憂き身ぞと。來る世を賴みに胸を摧ゑ。覺悟はすれど物の色凄くも夜の八つの景へ鐘さへ罪も懺悔には。消ゆると聞けば賴もしや。三井の古寺あれかとよ。今死ぬる身の今迄も。たゞ親方に張強き。矢橋のわしが歸帆をも。思ひ廻せば罪業の。秤にかゝる片絲の。我は千里の石山に。秋の月とは忌み詞。女心の果敢なさは。同じ事



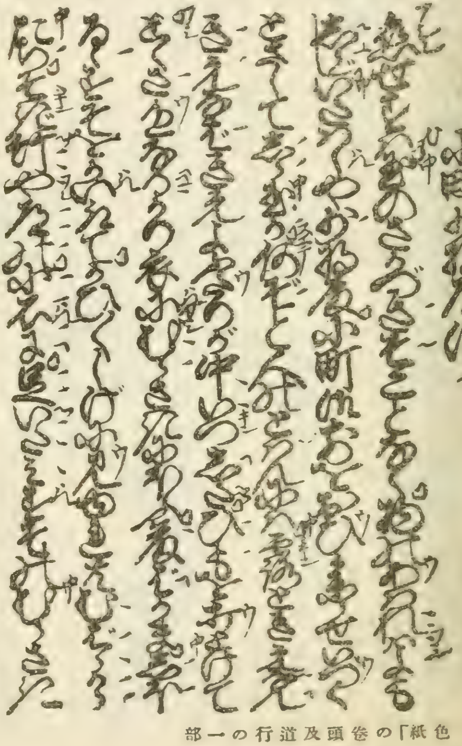
宇治の山本「大和歌五段

をば繰り返す。珠數の玉緒うと〳〵とに。たきつの瀬田の夕照と。罪恐ろしニドリへうつつ汀に打つ波も。堅田に落く先の世を。思ひ廻せば夢にさへ。片つる雁がねも。落つる涙を争へり。時粟津の晴嵐と。身に泌む風のヨイサヨ身は川竹の流れとて。客の數々啼ト我が思ひ。比良の暮雪と降り積るへ劍

の山の雪解は。三途の川に遠近の。雨を催す山颪。はらりはら〳〵さら〳〵さつと吹立てられて。傘を帆に轆轤を滑る雨雫。かゝる二人が身の行方雲の脚さへ定めなき。魂もぬけ唐崎の一つ松にぞ着きにける。

小町少將道行　一五

〔解題〕京都の宇治加賀掾の門弟で北野七本松で操芝居を興行した野田若狭宇治薩摩の正本「大和哥五穀色紙」の中之卷「小町少將道行」の文を取つて一中節で語つたもので、作曲者は初代都一中。この淨瑠璃の作者は清水三郎兵衛で、小野小町と深草少將の情事を主題としたもので、操のみでなく、當時の歌舞伎でも演じて好評であつた。一中の語つたのは或は歌舞伎上演の時かも知れない。

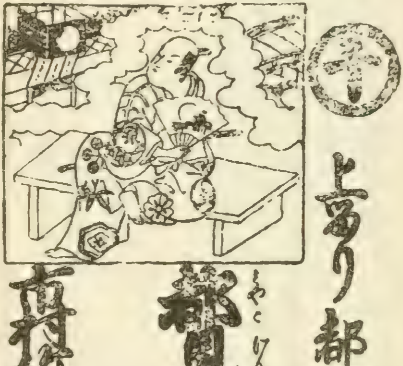

色紙」の卷頭及道行の一部

江戸ブシ戀せずばギン玉のさかづき引。そことなく。物のあはれはよも知らじ。中地いたはしや少將殿。色地小町御前を負ゥひ參らせ。ハルいづくとさしてしら玉か。何ぞと人の問はんには。露と江戸木ブシ答へて消えなまし引。あはれ二人が中々に。いつ下紐を打ちとけて。とくさ色なる狩衣に。ハルむらさきにほふ藤袴。しほるゝ裾をかいい取りて。かひ〳〵しげにゥ見ゆれども。むばらからたちツキユリそぎ竹や引。道の小石に足痛み。すそのむらさき引きかへて。緋の袴かとスエフシ疑はる。詞ハルいとゞ朧中夜に。ハルふるは村中雨か。おつるは涙かと。ハル袖打ちは中らひギン打ちはらひノル冷泉たどり〳〵と引。迷はるゝフシ戀ぢの習ひぞあはれなるワキ詞姫中君涙と諸共にげに數ならぬ我ゆゑにかく迄御身を困しむ勿體なやとの給へば。シテ少將顏をふり上げてカン上君ゆゑならば此命。何か惜しまん鴛鴦鳥の羽交ならべんあふせには。この年ゥ月のゥ胸の闇。一字ヒロヒウこ。よ。ひはれ行く天の川。渡りくらべてゥたなばたの。年に一ト夜の。思ひを粹りハズミしらば今のふたりが行末を引。守るちかひの神垣や。あれは御堂の光ぞと。涼ねめぐればさもあらぬ狐火の跡になりつゝゥ先に消えクリ上ちらり。ちらりとちらめくは。我を追手に來るかと。かくれたよらんゥかゞしにも。ゥ長地身をおのゝきて隱れ笠。かくれ家とてもあらし吹く引。心も足も冷えわたり。しんきもつかれはてければしん〳〵と物すごく。なき魂送る仇し野の。松の木蔭に立寄りてオクリしばらくへつかれをはらさるゝ。

都見物左衞門　一六

〔解題〕享保十一年夏市村座に於て「鷄鳥奥州源氏」興行の際、座元市村竹之丞が見物左衞門を演じた時、二世都一中、ワキ都千東、三味線都千蝶で演じた淨瑠璃である。京都の名物などが列擧されてゐるのが面白い。

ウタヒシテへ五色の外に色といふ。〳〵者は手染の情なり　詞へ斯様に候者は洛中第一の果報者。東西南北のわけ里を毎日見物左衛門とは我等でえす。親なし子なし商賣なし。世話なし苦なしたわいなし。世界は廣しわが庵は。都の辰巳耳塚の。京へは遠き聾谷。聞かぬが佛大佛殿。シテへ〳〵大きなお佛様。承ればあの鼻の穴から傘さして出らるゝ由。さうもござらう。あの佛様を生ませられたお袋様の腰のまはりけんちの程が思ひやられました。さて又あの兩の手の大きさでならう事なら錢が百しめてもらひ度い。誠に佛を拜んでから思はぬ欲が起りましたヤアあれへ見ゆるは戀のわけ知り好色女いたづらさうなしこなし。幸ひ所の名物をも尋ね。どうぞ道連になりたう存ずる　ウタヒへなう〳〵そさまは所の人か。ちと尋ね由度き事の候　ワキ詞へ所の者にお尋ねありたきとは何事にて候ぞ　シテ詞へイヤ苦しからず。我事は都見物左衛門と申す者。承れば此所に女太夫和歌の舞芝居興行めさる由。ちとのぞいても大事ならば。名さへ見物左衛門ちや桟敷下でも舞臺でも仕掛の穴の中からでも。そこが好物のぞきたい。どうぞちらとなるまいか　ワキ詞へヤこれは何より易き御事かな　浮ルリ　ツレへいざこなたへといふがほの。扇で招く手で招く。招くに來る幸ひの。色様がたの床几をば。假りの御縁も何をたね。身は浮草のいう〳〵と。よるべは島の千歳が。櫓太鼓のとうから〳〵。唐も日本も世さかりも。戀の市日と賑へり。わしが覚えし品々を。あらまし語り申すべ



し。聞し召され候へと語るぞ浮世なりけらし　三下リへまづあれをば御覧ぜよ。あの門前に隠れなき日本一の大佛餅大佛煙管さま〴〵に羅宇の數は　シテへ三萬　ワキへ三千　シテへ三百　ワキへ三拾　ツレへ三本なり。東に見えしは清水寺地主の櫻や音羽の瀧。心やさかの當世女。つくり眉黒鼠なき。すだれほのめく奥座敷。麓に花の眞葛が原。のぼれば石の階もかどの取れたる　ナホスへ丸山や。祇園香煎筒守。船の見合ひの樺と呼ぶ。名にこそ立てれ二軒茶屋。葭簾の内も甲ばりて　シテへすう　ワキへきう　シテへろまと　ツレへやん衆の聲。こつぽりてうい豆腐串。數は幾鉢煩悩の。鐘もべん〳〵だらにつく。明方知らす鳥丸。ゑぼしの紐の紅も。千鳥がけなる鼓屋と。聞けばとりやまあどうしやう（道正）の。解毒一粒萬倍と。たがはねそめしつんりきりの。かるたは笹屋布袋屋の。身を粉に碎く道喜の粽　ウタシテへ咲いたゞ櫻になぜ駒つなぐ。駒が勇めば花が散るとな　合　ワキへ　いさめば駒が駒が勇めば花が散る　淨ルリツレへ契りし人の艶歌を忘れもやらでうか〳〵と。歩む姿や花の露。伽羅の油やつや白粉。五兩入や三兩入。空價なしとや交りなし。植木だいざう三栖屋針。雨のもり來る沽價の。靑楽はらひ大黒舞。節季候姥ら鳥追の。老の姿や若緑。若水男若恵比壽。萬歳樂とぞはやしける。三下リへ年若やかなる御萬歳と。御代も榮えましゝます。愛敬ありける新玉の。年立ちかへる朝より。美面も若やぎ器量もひとときは上りけるは。誠にめでたう候らひける。昔の女郎は匠んぢやりと。中頃は張強く。今の女郎と申するは。よろづ吉野の花紅葉松梅かこひ局まで　ナホスへ色品姿の派手くらべ。かはらぬ中の友白髪。尉と姥とは高砂や相生の松尾上の鐘。金持大盡福大盡。福壽海山萬々年。國民樂昌千秋樂。萬々歳とぞ祝ひける。

夕霞淺間嶽　一七

〔解題〕享保十九年春中村座興行の「恋今様曾我」の第三番目大詰に出した淨るりで、出演者は都秀太夫
千中（初代一中の弟子、後の二世一中）スケ都〇太夫三中（初代一中聟）三味線都序遊で、役者は京の次郎に
澤村宗十郎、ときれの小まんに瀬川菊之丞であつた。作曲者は原武太夫との説もあるがどうであらうか。
元祿期の名物「傾城淺間嶽」の奥州執念の場を淨瑠璃所作事とした所謂淺間物は數多いが、その中の名曲の一
つで、一中節だけでも本曲以外に「追善淺間嶽」（享保九）「名香淺間嶽」（寶曆四）「姿視淺間嶽」（寶曆七）
「傾城淺間嶽」（寬政四）などを擧げ得るが、出來榮えに於て本曲に及ぶものはなく、現存するのも本曲のみで
ある。上演當時大好評であつた事について、「中古戯場說」の左の記事を引用して置く。

大詰は路考納子夕霞淺間嶽といふ千中ぶし淨瑠璃、所作は不得手の納子故に、如何と見物せしに、案に相
違して、納子至て大樣にて、やつたりとせし所作の相手却つてよく、大當りにて七月迄入り落ちず。江戸中
に鼠の蓑と夕霞の淨瑠璃本のなき所はないといふ位。吉原揚屋町に油紙の煙草入に路考納子が夕霞の畫すり
しを持たぬ人はないといふ程の事なり。

以てその大當りの一班は窺ひ得られよう。

ウタヒシテ〽あはれ古を思ひ出づればな　悲しさは。涙ぞ曇る雨夜の。ときれの　心の縺りやせんと。思ふ疑ひ思はぬ人
つかしや。行く年月に隔あれば。花に　小まんと名に立ちて。思はぬ雛に大磯の　合〽むごや辛やと泣く涙。身にも覺
嵐の　トルリ〽關守も　ツレ〽宵々毎の白雪の。露と消えしも我からと。我を苦　えぬ無き名をつけて。何故に煙となし
は。あかねさす日に解けてゆく　イロ詞シテ　しむ思ひの火。消えぬを富士の煙とは。たまふ　合〽恨みながらもいとしき中
〽夫婦が中の恨みごと。堅くも岩に離　香の薫に引かれ來る。魂は昔の一つ　の。昔忘れぬその取りなりは。かげらふ
れ鴛鴦。京の次郎祐重が。名殘男鹿の　前。ありし廓を其儘に。奥州が立姿。　姿もろともに。小褄とり〱打ちつれ
命毛や。描く姿繪の其中に。取分けて　二上りツレ〽恨みも戀も殘りねの。もしや　て　木遣子ナゲブシシテ〽馴れし　〽廓も今日　〽ば

かり　ツレへかはらぬ笑顔莞爾と。川の流れも枝次第。筋次第なる行先は流れ／＼て又元の。水に落した墨さへも。紙にうつせば美しき。花の鏡の面と顔。合せて見ても合ひかぬる。口舌した夜の斐ぢやとて。ほどけてゐるが目に立つか。立たぬか立つか浦千鳥。羽音ばかりはふは／＼と。羽織隠して止めた時。思に煙管の跡の月。ワキへ其夜の形見これ此處に。紫にほふ深い中。拜む／＼が曉の。かねてさうとは知りながら　ツレへまだその癖が大淀の。せきも出ぬのに重ね夜着。泣いて見せるを覗いて見たり。唄うて見たり弾く撥の。肘に返事を菅掻の。十に一つも云ふことを。シテへ聴いてもらへば遠山の松はツレへ色濃き夕霞。浅間が嶽に競べこし。胸の時計の車の輪。巡り／＼て明け六つの。別れに立てし誓文は。千も二千も三千も。世界に一人の男ぢやと。楽しむ中の若緑。立つといふ名も因果同士　シテへ苦しい　ワキへ悲しい　シテへ口惜しい　ツレへ欺された身は何がなる。思ひやつてと現にも忘れぬ姿繪姿事。扨も命のある時は。色に染み顚着の思ひ淺からぬ。中に中の間奥二階。梯子の立浪ばた／＼と。降りてはかこち離さじと。搖ふる袂振りきる斐の。亂れ／＼て山吹の。花色衣主や誰。問へど答へも山梔子の。耳無山の言の葉も。むづかしさうに木綿幣の。神かけてとはありふれた。背中叩けば閨の戸を。音づれがちの小夜風に。櫛も入れたる青柳の。動くもぞつと身にしみて。姿も見えぬ一と聲は。ほぞんかけたと啼いて行く涙に染めぬ　合へ岩躑躅。此處は紅。彼處は白玉。藪の　合へ椿は落ちて散る。



葉末々の雫の雨。にほふ草木の影も　取られずちら〳〵と。花壇の蝶の白粉ぞ立ちにける。
無く。追へば消えゆく朧夜の。手にも　も。羽根に殘して草がくれ。見失ひて

源平妹脊の鷄合　一八

〔解題〕通稱「鷄合」。元文五年作曲といふ。作曲者は都秀太夫千中か。鷄合を材題としたるもの。近松の「本領曾我」の鷄合の改作かとも思はるれど、まだその關係を明かにし得ず。

へ心も言葉も及ばれず。今日を祝ひの鷄合せ　イロ詞へ宗盛公の御前に飾り据ゑたるの鷄の數。一々次第に座を構へ、威儀を正してかしこまる。二上リへ先づ一番の鳥襷。結ぶ妹脊のきぬ〴〵を。今日吹返す松風と。名におふ鷄の聲聞けば。峰に通ふか琴の音に。爪を隱してしとやかに。第一番の勝鷄は、名も立浪と札付けて。すゝむは鷄の癖にこそ。寄せ來る浪に砕かるゝ。磯の立石　本調子へさら〳〵と。退く汐させば跡の波。うけてはずむは小鼓の。頭々を打ち上げて。拍子も揃ふ足どりは。立浪とこそ名づけたれ。合　ワキへ源氏の鷄は白地より。染めぬを何と結鹿子。妹脊といふは義仲の、契り逢へぬ妻鷄の。つまとつまとは誰が中言の。顏は合うても見ぬ顏憎や、逢うて別るゝ鷄の聲。ツレへ別れて合うて合せ鷄。末はしら絲絲かけて。車に袖を繰り返す。縮めつ弛めつ、後ろから。引寄せて結ふ唐子髷。結びのためと座につけば　シテへ今日の行司の朝顏が。源氏の鷄にかさしたる。團扇の影のおろ〳〵と。をろを大事に急かなる。言の葉ながら御前にて。かゝる相撲の結びには。鬪と鬪との勝ち負けに。弓矢のしるしとり〴〵に。鷄も斯くとや駈け引きは。團扇の風に任すなる。則ち相手は熊野御前。平家の幕のきぬ〴〵に　ツレへ旭彩

ろ鞆のさま。赤き紙鳥にさし添へて。縫ひ並べたる如くなり。いざと手合ひ丁と蹴上げて又沈む。源氏の鶏は勢
火かひながら悠々と。相手欲しげに招の袖かける。くるりくる／＼くるりよく。西の方屋へかたの丶雉子。逃れ
かれて〽十二／＼の手綱を。合せて四／＼と付け倒す。東は漣 ワキ〽西は以ところと押寄せて飛びちがひ蹴けち
拾八手とは。十二月網十二月。締りよ又紅くゞる大腰に。かけて蟄の血汐のかひ。負けじ／＼と蹴爪を立て。無念
り先づ明け初めて。東の空と開く時ゆび ツレ〽平家の鶏の装色は。勝色見の嘴ばみがた／＼／＼。身振ひ孫嘴き
は。蹴をおりて羽叩きの。鶏の足踏交せてしら鶏は。勝鬨上ぐる鬨の聲。こ尾かたげも。これぞ左右の攻め鼓。頭
字作る、傍にいろはは八文字合つ〽反れも東の手初めと。問喉を吞んで一番鋼よりも拍子よく。蟄かけ喰合ふ羽根
に反橋下枕の ツレ〽左右にすくふ高無鶏 シテ〽二番勝は源氏の勇み。朝な／＼の音。ばつとちり／＼散る櫻。紅梅よ
双。掲げて落すは腹構へ。鶏冠の動き逆の朝顔が。昼顔は袖に包むらん ツレ りは勇ましき。
毛にて。振りほどき振りほどき。鶏毛〽又もや合はす羽根と羽根。跳ねて流つ
鶏毛のさゞ波は。鍋の縁に仲流へて。しとつま蹴を。蹴爪にかけて頭上。

尾上の雲賤機帯　一九

〔解題〕追善二番目で、寶暦元年春、森田座、「吉野唐衣櫃」第二番目に出す。出演者は都秀太夫千中・都千國・都八重太夫、三絃宮崎忠五郎。作者壕越二三治、振付村上富五郎。三太郎松島茂平次、狂女澤村小傳次。江戸長唄の「八重霞賤機帯」はこの曲から脱化したものである。

シテへおもひ廻せば卯の花の雪。ツレへ若葉の雨と中が良いやら良いやら中が。中が良いやら。かゝれど消えぬ消えぬ思ひを力草。招く小褄に袖拂ふ。樹々の下風肌寒く。心は輕きその姿。名に大磯の八雲とて廓に殘る名取草。きゝりゝと締めし腰帯に。振りも筑波の山路經て。迷ひ出づるぞ子の行方。尋ね侘びたる旅疲れ。シテカケリへ夏も來る空も青の瀧の絲。亂れて名をや流すらん。ツレへ笹の小笹で風厭ひ。住ひしかひも情なや。花と愛でたるうなゐ子が。人商人に誘はれて行方は何れと白木綿の。神に祈りの道尋ね。いざゝ叢竹手折りつゝ。幣切りかけて皷草。なるみ涙の雨しぼる。悲しさ艱さ果敢なさの。竹ににくさの風たまる。空眺めても情なや。アレ雲間行く三日月の。かた〳〵水に影映す。聲を聞かねば顔も見ず。尾上に啼つほとゝぎす。子で子にたらぬ鶯の。四つの社に願ぎ事の。そのかひも無き別れ路を。尋ねて迷ふ東路は。雲また雲の果しなや。シテ詞へ三太郎は立ち寄りて。何んでも是はよい慰み。拍子にかゝつて戯れの 上ルリへ氣違ひよ氣ちがひよと。手を打ち叩き囃すにぞ　ワキへ狂女は聞いて振り返り。ハア氣違ひとは曲もなや。物に狂ふが我ばかりかは　シテへ鏡に櫻の物狂ひ　ワキへ嵐に浪の物狂ひ　ツメへ菜種に蝶の物狂ひ。ツレへ三つの模樣を縫にして。いとし我が子に着せばやな。子を綾瀬川名にも似ず。心關屋の里離れ。緣の橋場の土手傳ひ。しづ心なき狂亂の。泣くか笑ふか正體も。涙笑顔の二度目。友待つ千鳥都鳥。我も昔は川竹の　シテへ夜毎の枕川島の。數かく水の文起請。その泡沫やうたてさの。たれ言譯も奈良坂の。子を松枝の首尾不首尾。ワキへ夫に去られ見限られ。思ひ亂れて文字摺の。心を奥の旅の空。形見の雲の朝は照り。夕は雨とふり變る。心の中の悲しさを。推量さんせとばかりにて。縋り嘆くぞ道理なる。へ三太郎は氣の毒さ。何がなしほにと立ち上り。そもさつても和御寮は誰人の子なれば。何ほどの子なれば。尋ね彷ふ其姿。正體なやといさむれば　上ルリ謠シテへ亂れ心のなほ逆立つて葵蔓や黑髮や。ほどけたまゝに櫛取らず。歩めば映る水鏡。その顔よ花面變れ。姿やつして。派手捨てて　へ音頭々々と戯れの。引止められて是非もなく。教化をせんとて皷を取り　ツレへ一代教主の釋迦牟尼如來の說法なんどは。華嚴阿含法等般若法華涅槃法相律氣の廓通ひ。傾城狂ひ物狂ひ。狂へば狂ふ我が兒を慕

ふ。總じて浮世の有樣は。猪牙に順風めの南無阿彌陀。唱ふる念佛稱名は。へ武藏の國とワキへ下總とツレへ昔のまゝ
や風の征矢。花はちら〳〵月は朧ろに三世諸佛の大陀羅尼。十方薩埵の脫門の歌枕遙々來ぬる旅ならで。しばらく
ナホスへ影かくす。水に姿の果てしななり シテへ悟りは ワキへ迷ひ シテへ迷ひは 疲れをはらさるゝ。
き。狂女をいさむる不狂人。新醻のた ワキへ悟り ツレへ二つに分つて川淀や シテ

甲子 二〇

〔解題〕文化元甲子の歲の作。作者碌卿。作曲者は山彥新次郎（初代序遊）といふ。因に河東節でもこの年「甲子祭」といふ淨瑠璃を新作してゐる。

シテへ秋津洲や大國主の神祭。ツレへ人もども。ワキへ二ににつこりと笑ひ顏愛敬行く御代なれば。斧をかくるその家に
和らぎ幸ひも甲子を待つ。夜半の友歌あるのがしをらしや。ツメへ三に盃さし愁の。うの字あらかねの土に依を。米
の臺や綠竹を。合せたき物さま〳〵にやつて夫婦の中も睦じく。ツレへ數の子藏や富貴自在の福大黑。祭らぬ人こそ
その品かはる品定め合 シテへ扨この神の寶盡きせぬ寶。隱れ蓑笠寶珠の玉黄金なかりけれ。
御姿一に至つて色黑く背が低いと申せ白銀珊瑚珠の枝も繁りて末繁り猶榮え

廓の壽 二一

〔解題〕「都見物左衛門」の飜案のやうな趣向で、吉原の全盛を寫して、それを讃美したもの。五世一中が江戸に下つて吉原で旗あげした時、初代序遊の作曲で發表された曲だと言ひ傳へられた。

詞へ罷出でたる者は御存じのお江戸見物左衛門にて候。承れば百五十年以前二萬七百六十餘坪の地所を賜り。この所へ移されて。今の廓を新吉原と申せば。誠に目出たい色里でござる。猶千代迄と君が父を壽き。山谷風流のあらましを諸君子方へやつがれが。さらばお話中さんと 上ルリへ扇おつ取り立上り 二上リへ先づ御覽ぜよ西に富士。北に筑波の山際も。曙にほふ白繻子の腰卷 羽織伊達衣裳。白きお馬に召したる殿御。手綱とりんぼ姿がくわちで。粹な心と三浦屋の。たが思はくか白茶亭の下着に物を思へとて。移り香さめぬきぬ〳〵にへ旅人の井も凍てとけて見歸柳土手節に。合の手殘すすががきに。てんてつとんと打込んで。君が住家と思へばよしや。草の枕も玉の床。人目思はで通へば通ふ。しげれ松山細道。鶉格子に立出しの。非筒三よしが弄齋 を聞いて嬉しき郭公。傘賣も一聲を待つに長柄の紋日とて。振つて振出す八文字 ナゲブシへおろし歩みに左褄これ此里の習ひ事。どつとほめて通した。揚屋〳〵の水鳥ら。ある夜其夜は初雪を。酒に明かして對月と。噂に聞くの盃開き。君は千代ませ〳〵と。くりことを祝ひ歌。散茶梅茶も香に匂ふ太夫格子の花紅葉。都の錦こきまぜて。賑ふ里の全盛を萬々歳とぞ祝しける。

松襲　二二

〔解題〕作者榮思。文化三年初代序遊の作曲といふ。然らばまだ山彦新次郎時代の作か。何切りは便宜施した。

ウタヒへ松根によれば緣深し。萬花ひらけて 上ルリへ御代の春へ有がたや民も惠の永き日に。植ゑそめ給ふ御神も。夫婦と現じ相生の。松はめでたき世のためし。二葉の色に末かけて。五葉によそへ里の名も。五三の君が昔より。勤

めといふも品かはる。中に姫松とりな 松は太夫の八文字。襴に袞の老松。通 さゝんざ、濱松風の音はさゝんさ〜于りさへも、初音ゆかしき鶯の。まだ床 ふ千鳥か懸の海。あいたいのはた打越 関が夢の迎ひ酒。ほのぼのの酔きぬなれぬ藪の梅。鹿降るらし深山の底。して ナホス へ松を花とはさりとはく〳〵。に。又十返の約束も心浮立つ若緑。千代の古道穫代ふる。庭の焚火や神楽 たうよい首尾の松。嬉しさの君と手の 綠と栄え栄ふなる。十八公の粧に。明 ミドリ へ文にもまつの色見えて。屠蘇 日の小松曳 合 へみそぢかはして 松がさ 千歳の操をあらはして。変らぬ色のむの香にほふ花も。はや住の江や高砂の は うら葉もかごとなる。松も曽子の つまし月。萬々歳とぞ祝しける。

吉原八景 花紅葉錦廓（はなもみぢにしきのいろざと） 二三

〔解題〕略して「吉原八景」ともいふ。吉原の全盛を近江八景に擬した作意で、桜田治助の作。（正本に一蔵［illegible］と也」とあるのによれば、文化二年六月治助歿後に發表されたものであらう。）作曲者は何代菅野序遊で、この人が山彦新次郎から序遊と改名した披露の折（文化四五年頃か）の作で、菅野派に取つては由緒深き浄瑠璃である。

しへ名にし近江の八景を ツレ へ今の 日ノ夕照今こゝに、夕暮照らす仲の町。の浮寝の身ながらも ナホス へ花に粟津のさみに全盛の廓にうつして三井寺や。粋の蘊蓄の物好きは、色々様々花紅 晴嵐と、心で留めし晴嵐けに 合 ナホス へ風靡れて花咲く館の へ立ちつあれを 色の最中か姿見も。照る月渡り た晴れて一時雨。濡れて逢ふ夜は寝てば御覧ぜよ。日本一の大門は ツレ へ瀬 り 日とて、約束堅き石山や 夕へ鐘 唐崎の コトウタ へ松に翔ふる床背山こ琴

杵に落つる雁がねは　ツレ〽君が堅田の　知らで朝迎ひ早き矢橋のきぬ〴〵も。　品定め。うるはしかりける次第なり。文使。更けて青田に焦るゝ螢。櫺子まで來て蚊帳の外。ア、何とせう歸帆も　げに八朔の白襲。比良の暮雪をさながらに。描けど盡きぬ裝ひは。松の位の

墨繪の島臺　二四

〔解題〕 通稱「江の島」っ榮思作。五世一中頃の作曲と思はれるが、作曲者・年代共に未詳。或は文化六己巳年の作か。

シテ〽鵜來島や辨財天女降臨し　ツレ〽微妙の威力彌増しの。分けて中にも絲竹の。道を守りの驗とて。磯うつ浪は青海波。松吹く風はおのづから。萬歳樂を調べつゝ　ウタヒ　シテ〽實に有難き三つの宮　ツレ〽風色類ひあらかねの。つちのとの巳の幸と。報賽の暇なみ。まないた石の名にめでて。ちよつと押へた盃に　ワキ〽笑ひ上戸の酒迎へ　ツレ〽啼鶴が崎眺むれば。姿は見せずほと　とぎす。思はせ振は誰れやらが。戀の心をうつせ貝　二上リ　シテ〽わしは姫貝振袖貝の　ツレ〽まだな心で恥かしらしい。梅の花貝酢貝の粹な。殿御思うていつ忘れ貝。末は鮑と筆とり貝に文の傳手。三下リ〽逢見貝との返りごと。一日海松くひ嬉しさに。その月日貝指折りて。待ち明したる床ぶしに。うたゝ枕のかたし貝。ほんに辛氣な　木調子〽妹脊貝。〽立つ名いとはで屛風石。さつとさゝ舟蟹小舟。網曳の聲のヱイサッサ　ツレ〽濡らす袂が浦風に。裾吹き返す卯の花の　ツレ〽寄る邊も波の汐路かな　合管絃　シテ〽十二の簾八つ七つ　ツレ〽睦まし同士の兒が淵。案内子連れて其處此處と。殘る名所もみやこれん。まことに壽命長久を。擁護の神の御惠み。描き筆に墨繪の島の。ゆるがぬ御代こそ久しけれ。

鵜飼石和川

二五

〔解題〕通稱「石和川」。謠曲「鵜飼」を元としたもの。文化年中初代序遊作曲。句切りは便宜施した。

ワキへ是は安房の國清澄より出でたる僧にて候。我未だ甲斐の國を見ず候ほどに 上ルリへ唯今行脚と志し ツレへ行末何時と白浪の。安房の清澄立ち出でて。六浦のわたり鎌倉山。やつれ果てぬる旅姿。日たけて越ゆる山道を。過ぎて石和に着きにけり ワキへなう／＼御身は如何なる人ぞ シテへさん候是は鵜遣にて候 ワキへ見申せば早や抜群に年長け給はせて候が。斯かる殺生の業勿體無し 詞へあはれ御止りあつて。餘の業にて身命を御繫ぎあれかし シテへ仰せ尤もには候へども 詞へ若年の頃より此業にて。身命を助かり候ほどに。今更止まることもなり難し ワキへハツハ是非も無し。然らば 上ルリへ罪障懺悔の爲に 詞へ鵜を遣うて御見せ候へ。後世をばよきに弔ふべし シテへあら有難やいざさらば。鵜を遣うて御目にかけん 詞へ疾くとくこの舟に御移りあれかしと 上ルリ ツレへ僧の手を執り乘せまゐらせ。鵜籠を開き荒鵜どもを。此川波にさつと放せば。面白の有樣や シテへ一と夜假寢の草莚 ツレへ鐘は枕に遠近の。覺束なきに夢山を。見る甲斐もなき身の上の。鵜舟に灯す篝火は。こぼれ／＼て年々の。罪と報いを指に折る。齢長けたる眉の色。白きは霜か夏の夜の。月を惜むも心の闇。貴をばいさや石和川 合シテへ藤の衣の玉襷。つひの絆を結ぶかや。解けて契りし往古を。思ひ出せば戀しさの ワキへ妻は二十を二つ三つ。越ゆるばかりの床の山。夜着に凭れて睦言の シテへ傳へ聞く遊子伯陽は。月に對ひて願うた事よ。 ワキへそれは夫婦の二つ星。我も待ちにし其月を。今は厭うて更くる夜に。滋る松明振り立てて。驚く魚を追廻す。荒鵜も川の心知れ ツレへぱつと飛交ふ螢火の。光に見れば小鮎かと シテへかづき上ぐれば面白や ワキへ抄ひ上ぐれば面白や。ツレへ忘れ果てたる後の世を。

恐れもやらぬ境界も。筋は別るゝ鵜繩の末の。本は一つに夜の水。むすぶとすればくだかけの。鐘に遅れず先立ちつ。明けるに近く風わたる。舟と舟との影うつる。眞如の月や ウタヒ シテへ殘るらん。

競牡丹　二六

〔解題〕初代一中の語物を五代目時代に復活したものか。嫖客の吉原へ通ふ情致を材としたもの。

シテへ文は便りの翼にて ツレへ木枕かほる上包。日本堤にこがれ行く。道も心も眞ん丸な鏡入らずの衣紋坂。傘賣や郭公。雨の降る身のわが袖も。下谷上野の山かづら。かゝる戀路はおぼつかな。胸にうかめる仇言を思ふ間もなくゆく水の。深編笠や傘を。ひらく卯の花更衣。白無垢緋無垢黃無垢をば。重ね〲て鳥の子の。十づつ十は九十九に一夜殘して草の霜。雨の夜雪や風の夜も。通ひくらべに負けまじと。舟で行く身の小夜嵐 二上り シテへ忍ぶ頭巾で宵から門にの。氣の毒夜風身の妻。ちようちござれの身の妻夜風 ワキへしめてしめよや寐て〲ねよやの。たが子ぢやわれは。たが子ぢやちよ名を名のれの。たが子ぢやわれは ツメへ兒手柏のどちら向いてゐさんしても顏見にやならぬ ツレへ辛氣氣の妻いとしさの 本調子 へ一倍しほの道のべは。提灯あれど戀の闇。たどり〲て大門に今ぞ入るさの月の影。水に二つの桂男は。分つ刀の鞘とさやけき星の容。鞘に當ればのぼる男氣の。どちらもかどの行と岩。中に女郎の菫艸。うつむく襟の紫はもみと仲よく思ひ合ふ。逢ふは別の基とは。たが教へそめ說きそめし。元の心を知る人ぞ。汲み得て粹の名取川。魚は住みよし遊びよく。藻にわれからの鳴く音まで。噓とや人のいはばいへ。よしあし曳の山おろし。風にもまるゝ雨雲の。もれてばら〲雨が下。おなじ軒端に雫して。傳うて落ちて誘ひ合ふ末は流れの道ひろし。

曾我記念贈（そがかたみおくり）　二七

〔解題〕　曾我兄弟が、いよ／＼打入前に故郷の近親に形見の品々を贈る事を叙した文で、曾我物語以來、淨瑠璃でも名高いものである。一中節では元祖一中の語物に「形見おくり」があり、これは曾我五人兄弟の第五段の同じ條の文を轉用したものである。この曲が一時中絶したのを、五世一中の時に再興したものであるといふ。尤も文章も多少改修されてゐる。

へ頃は皐月末つ方。曾我兄弟の人々は　き。其二人へ手なれつる。形見にならぬ別れぞと。しを／＼狩場を立出る
今宵ぞ敵（かたき）祐經を。うつの山邊のうつゝ　と白露の。玉と貫く汗拭ひ。扇に書く　その言葉さへ姿さへ次第に遠く行く雲
にも。只なつかしき故郷（ふるさと）へ。形見の品　川千鳥　狩場狩の蝶の夢現（ゆめうつゝ）。宵寐まどひ　の。立入る方もわかざれば。兄弟顔を
品贈らるゝ心の内こそ哀れなれ　へ[illegible]　とゝひしも。その面影の丸鏡。果は涙に　見合せて。忍びかねたる風情なり。
守は母上へ。弓と靱は曾我殿へ。[illegible]と　[illegible]るとも。夕暮近きほとゝぎす傳へて
鐙（あぶみ）は二の宮へ。駒と鞍とは和田殿ばら。　くれとばかりにて。筆を捨ててぞかこ
恩愛（おんあい）主の形見ぞと思ひ出せし折々は。　たるゝか、ル鬼王團三涙を拂ひ　詞へハッ
念佛申し回向せよ。鬢の髮は虎少將夜　ハいづく迄も御供とは存ずれども。御
牛のさゝめに炷（た）きしめし。とめ木の香（かをり）　許しなき上は是非もなし。これより曾
うすくとも。煙は末に靡き合ふ二世の　我へ立歸り御形見の品々を母君へ御覽
形見と見せてたべ。一つ印籠[illegible]　に入れ奉らんと　フシへ武士（もののふ）の猛心（たけごころ）も
比奈殿へ參らせよ。思出せば雫らし　思ひ廻れ。涙にうすき夏の霜消えて歸

二八　曾我駒の涙

〔解題〕前曲の續きで、兄弟の命を受けて記念の品々を携へ、駒の手綱を取りつゝ、泣く〳〵曾我へ歸る鬼王團三郎と主なき駒との情致を寫したもの。作曲同上。

へ無慚なるかな二人の者主なき駒の口を取り。行かんとすれど五月闇。涙にくれて道見えず。思ひするがの富士の嶺の。煙は空に横をれて。隔ての雲となりにけり。裾野の草は露しげく。まだ秋ならぬ道のべに。螢かすかに飛びつれて。身より思の餘りてや。虫さへ駒をこがすらん。いとど涙をせきあへず。何と蛙の鳴き叫ぶ井出の館を別るらん。駒も心のあればげに。北風に嘶え行く。げに心なき畜類も馴るれば慕ふ習ひあり。ましてやいはん我々は。形に影の添ふ如く。明くれば鬼王暮るれば又團三郎よと召されしに。今宵離れて明日よりは祐成とも時致とも。誰をか指して申すべき。同じ浮世に生るるとも。曾我の祐成時致の其殿ばらにてなかりせば。か程に物は思ふまじ。我等ばかりと思へども。昔を慕ひ聞く時は。悉達太子は十九にて王宮を出で給ひ。檀特山のほうれい阿羅々仙人を師と頼み。御出家なさせ給ひし時。王の冠に石の帯御衣もろ共に脱ぎ捨て金札と書き添へ。犍陟駒諸共に王宮へ歸し給ひし時。車匿も君の別れを悲み。駒も生ある物にこそ黄なる涙を流せしは。人間物を知らぬなり へそれは佛の済度にて遂には廻り逢ひ給ふ。かの祐成や時致に。今宵離れて明日よりは又逢ふべき身ならねば。今より後の憂さ辛さ何となりなん悲しやと泣く〳〵曾我へぞ歸らるゝ。

鉢の木　二九

〔解題〕謡曲「鉢の木」を本とす。五代目一中の時初代菅野序遊の作曲。

ワキへさてそれよりも最明寺時頼御僧はツレへ諸國修行の御艱難。日数積りて今は早や。上野の國佐野の庄にぞ着き給ふ。へ頃は臘月末つかた。降積む雪に野も山も。皆白妙に埋みけるへとある藁家に立寄り給ひ　ワキへいかに此家の内へ物申さん　ツメへ廿あまりの女房立出で。誰にてわたり候ぞ。ワキへイヤ苦しからず。是は旅の修行者なり。一夜の宿を貸し給へへ安き御事なれども、主の留守にて候へば御宿は叶ひ候まじワキへ修行者由を聞き給ひ。さあらば主の御歸りまで。爰に相待ち申さんと暫く佇み給ひけり　シテカヽリへむざんやな源左衛門常世は。木の葉拾うて戻り道詞へア、降つたる雪かな。さぞ世にある人の面白うこそ見給ふらめ。へそれ雪は鵝毛に似て飛んで散亂し。人は鶴氅を着て立つて徘徊すと言へり　詞へされば今降る雪も。もと見し雪に變らねど。袂も朽ちて袖せまき細布衣陸奥の。けふの寒さを如何にせんと。しづ〳〵庵へ歸らるゝ　ツメへそれと見るより女房立出で。折悪しき此大雪にさぞ御難儀ッシへ先づ此方へと手をとれば　シテへイヤ我は雪にて道を急ぎたればあまりに寒うもなし。ヤあれに旅僧のおはするに。何とて内へは御入れ申さぬぞツメへされば修行者の御入り候て。一夜の宿と仰せ候へども。御身留守の由申し候へば。御歸りまで待ち給はんとて。あれに佇みましますぞ。ワキへアイヤ某は旅の修行者なるが。未だ日高く候へども餘りの雪に道見えず。一夜の宿を貸し給へ　シテへお泊め申度くは候へども。村長の掟厳しければ御宿は叶ひ難し。是より十八町あなたに山本の里と申して在所の一と村候。未だ日暮れぬ先に一足も早く行き給へ。フシへ痛はしさよと云ひければ　ワキへ掟とあるに力なし。さあらばあれへ參らんと立出で行かせ給ひけり。ツメへ女房泪と諸共に。ア、

淺ましや我々斯樣に成り果つるも。前世の戒行つたなき故。せめて斯樣の人に値遇申してこそ。後の世の便ともなるべきなれ シテへオ、この大雪に遠くは行かせ給ふまじ。某追付き留め申さんと。やがて常世は走り出で。なう〳〵修行者御宿參らせうなう 詞へあまりの大雪に申す事も聞えませぬか。フシ痛はしの有樣や。詞もと降る雪に道をわすれ。今降る雪に行方を失ひ。一つ處に佇みて袖なる雪をへ打拂ひ〳〵し給ふは。古歌の心に似た ぞや ツレへ駒とめて袖打ち拂ふ蔭もなし佐野の渡りの雪の夕暮 シテへ斯樣に詠みしは大和路や。三輪が崎なる佐野の渡り。是は東路の佐野の渡りの雪の暮にへ迷ひつかれ給はんよりナウ如何に御僧見苦しくとも一夜を明させ給へやと ツレへ伴ひ我が家へ歸らるゝ。シテへ常世跪いて。誠に御宿は申したれども。何にても參らせうずる物もなし。近頃恥しく候へども。折節爰に粟飯あり苦しからずばきこし召せ ワキへオ、それこそ望む物にて候へ。賜らんとぞ仰せける。シテへ常世泪を押隱し。總じて此粟と申す物は。古へ世に在りし時歌に詠み詩に作りたるをこそ聞き候へ。今は此粟にて命つなぎ候なり。へ實にや盧生が榮花の夢は五十年。其邯鄲の假枕一炊の夢の覺めしも。粟飯炊ぐ程ぞかし。我も亦夢にも昔を見るならば。慰む事もあるべきに。なう御覽ぜよかほどまで。住み憂かれたる古鄕の。松風寒き終夜。うち寢られねばこそ夢も見ず。何思ひ出のあるべきとしばし泪にむせばるゝ ワキへ不便の者やと修行者も倶に袖をぞ絞らるゝ シテへ常世重ねてアラ笑止や。雪は頻りに降りしきる 詞へ夜の更くるについて次第に寒うなり候へば焚火してあて申さん。某世にありし時鉢の木を好み。數多集めし其の中に。今も殘りし梅櫻松。是は秘藏の木にて候へども。今宵の御饗應に是を火に焚きあて申さん ワキへ修行者聞し召し。仰せ嬉しくは候へども。もしまた世に出で給はん時御慰みの爲なれば。平に無用と申さるゝ シテへイヤ〳〵とても此身は埋木の。花咲く世には逢ひ難し ツレへ唯徒なる鉢の木を。御身の爲に焚くならば シテへ是ぞ誠に難行の。法の薪と思し召せ ワキへしかも此程雪降りて シテへ仙人に仕へし雪山の薪 ワキへかくこそあらめ シテへ我も身をへ捨人のために焚く鉢の木へ伐るとてもよしや惜しからじと ツレへ雪うち拂ひ見てあれば シテへ面白や如何にせん。先づ冬木より咲初むる。窓の梅の

北面は。雪封じて寒きにも。異木より先づ先立ちては ツレへ梅を伐りや初むべき シテへ見じといふ人こそ憂けれ山里の。折かけ垣の梅をだに ワキへ情なしと惜しみしに。今更薪となすべしとかねて思ひきや。ワキへ櫻を見れば春毎に。花少し遅ければ此木やわぶると心をつくし育てしに。今は我のみ侘びて住む。家櫻伐りくべて緋櫻になすぞ悲しき シテへ扨松はさしも實に。枝を矯め葉を透かして。かゝりあれと植ゑ置きし。其甲斐今は嵐吹く ツレへ松はもとより常磐にて。薪となるは梅櫻。伐りくべて今ぞ御垣守。衛士の焚く火はお爲なり ツレへよく寄りてあたり給へや御僧と情も深き夫婦合。實に頼もしうぞ見えにける。ワキへ誠に御志の焚火忝し イロへ見申せば唯人ならぬ御風情。其姓名を明し給へ シテへさん候。もと某は鎌倉殿の御内にて。佐野の源左衛門常世と云ひし者なりしに。仔細あつて市橋修理大輔を討つたる故。某が妹聟平内兵衛に御預けなされ候處に。變り易きは人心。かの平内己が見正信と心を合せ。我を殺し本領を貪らんと企みし時。妹にて候者此由を語り。平に落ちよとすゝめしかば。落ちたる風情にもてなし。木蔭に隱れ見る處にへかの平内來つて散々に斬散らし。燈火かゝげよく見れば。討ち取りしは己が女房。某がためには妹なり。見るに心もたまられず。かの平内を討つて捨て。傍を見れば此書物あり。ナニ〳〵意趣は市橋が家來。主の敵たるによつて今宵忍び入り。源左衛門常世を討取るものなりと。書きしは己が惡事を逃れん爲。や、よしなき長物語。他處に漏らし給ふなと。ありし次第を述べらるゝ ワキへ修行者始終を聞き給ひ何とて鎌倉へ御上りあつて御沙汰には致されぬぞ シテへされば候。某が運盡き果て。經時公空しくなり給ひ。剰へ最明寺殿鎌倉を出で給ふと聞き。とても歸參は叶はじと。徒に月日を送り候ぞや。斯程まで落ちぶれては候へども。御覽候へ。痩せたれども馬一匹へちぎれたれども具足もあり。錆びたれども此の長刀 ノリへ押つ取り横たへ。今にも鎌倉に御大事あらば。一番に馳せ參じ。眞先驅けて思ふ敵と引組んで死なん此身を。エヽ淺ましや飢に疲れて死ぬる命。なんばう無念の次第やと。泪に袖をぞ濡らしける。ワキへホヽ潔し〳〵。今こそかくておはするとも天の照覽明かなれば。やがて開かん御運のほど。末頼もしう存ずるなり。へ自然鎌倉に御上りあらば。必ずとも

にお訪ねあれ 詞へけうがる法師の事なれば。甲斐／＼しくはなけれども イロへ公儀に所縁あり。御沙汰捨てさせ給ふなよ ツレへ唯頼め我れ世の中にあらんうち。またこそ參り候はめ。さらば／＼と暇乞ひ ワキへ出で行く名殘。シテへ止まる名殘。共に袂やひたすらん。

常世發馬 三〇

〔解題〕内容上前回の續篇とも見るべきもの。五世一中が旗上げの際、初代序遊が作曲したものと言ひ傳へられる。

へ誰に着せよとて五百機織りやる。いとしけりやこそ五百機の。妻が手業も僅かなる片山陰の草の戸は。佐野の常世がわび住居へ世に捨てられし埋木の。春をも知らで花咲かぬ。松の下枝や枯柴に。細き煙を立てかねる憂き身の上ぞ哀れなるへ山かせぎの狩人どもも晝休みとてどや／＼と門口から聲高にへサア／＼御亭主いつものやうに今日も亦お茶の御造作頼みますと。簀子の上に大胡座。是は／＼皆の衆よくこそおいで。イヤモウ手馴れた業とてそのやうに夜晝わかぬ山稼。さぞ御苦勞にござらうと。愛想さへも物堅き武家の作法ぞ知られけりへナンノイノ親の讓りのこの商賣。一日休むと骨身が痛うて結句身體のしやうがない。それはさうとこなさんは。元は立派な侍と聞いたが。いつまでさうしてござらずと。又侍にならつしやれ。此頃は鎌倉よりお觸が廻つて。軍勢とやらを集めるげな。こんな時には手柄次第でどんな出世も出來さうなもの。なんとさうではござらぬかと。聞いて常世は打驚きナニ／＼鎌倉より軍勢催促めさるゝとなへイヤモ何ぢやか知らぬが。此村の御地頭様も其如く近い内お立ちぢとや毎

日騎いでござるげな。御大名でもこちらでもほんに遣瀬の無い世ぢやと口々わめく折こそあれ〽俄に山々谺して。貝鐘太鼓亂聲に耳驚かす鯨波の聲。そりやこそ戰が始まつた皆來い〳〵と打連れて。あわてふためき立歸る〽常世はハット突つ立上りヤア〳〵女房。今村の者が噂といひ。俄に聞ゆる貝鐘は鎌倉殿のお召しにて出陣の軍勢ならん〽日頃の本望今此時。片時も早く發足せん用意〳〵と氣もいらち。かねて嗜む馬物の具取る間遅しと身をかため。鎌倉さしてぞ馳出す。

（一中節終り）

第四編　常磐津節之部

狩野雪姫
北條力之助

傳授の雲龍　一

〔解題〕豐後節の元祖宮古路豐後掾の數多くの語物中で、その直系たる常磐津節によつて語り傳へられる淨るり中の唯一の古曲である。宇治加賀掾の正本「女繪師狩野雪姫」の發端三輪明神の場を取つたもので、狩野雪姫が北條力之助の助力によつて、雲龍の名畫を描いて時の帝に獻上して名をあげる事を敍述したものであつて、後の「祇園祭禮信仰記」の雪姫の原據となつたものかと思はれる。

ウタヒ 中にもこの敷島は人敬ひて神力ます。平家ヘル 五濁の塵に交りて暫し心も足曳の大和の國や三輪の山大明神とあがめ奉るは 引 地 外に變りし宮作り。ヘル地 三つの鳥居のかう／＼と朱の玉垣みしめ繩。詞 山を御神と幸ひし則ち伊勢と三輪の神。一體分身の御事今更何とゆふ カヽリ たすき。かけし願ひの成就と 引 老若男女貴賤都鄙 オクリ 袖をへつらねて參詣す。詞 禰宜神主もそれ／＼に其役々を相勤め。はや暮れかゝれば身じまひし皆歸らんと言ひければ。老いたる宮づこ立留り。これ／＼皆の衆先づ待たれよ。尤も半時替りの役目ながら。日のうちは參詣も數多ある故に八人づつ相勤むる。夜は又一人とお頭殿の言ひつけなるに。今夜の番はのら者の相之丞が番なるが今に來ぬはどうした事。ム、合點ぢや／＼又例の宵寐まとひに己が役さへ忘れつらん。たま／＼なれば知らせもするが常住なれば愛想が。月夜も闇も辨へぬ野方圖者ではないかいなうとつぶやけば口々に野方圖ものらも程がよい月に一度か二度迄は廻るや廻らぬ此役を晝に當れば內に居ず。夜に廻れば御社へ誰がはひるやら盜むやら前後も知らぬ高鼾。其上口はからそつなり。世界ののらの氏神とはあの相之丞が事ならん。あのやうなやり放しに大事の御社一夜でも預くる事は氣づかはし。多分今日も近所迄來れども少しの內なりとも寐入らねば來ぬ者なり。あんまり憎き事なればいざ

〳〵神樂を奏しつゝ。びつくりさせて　とろ〳〵〳〵と解けて流れて谷川程な　〳〵早う〳〵と取付きひつ付き言ひまカヽリ呼寄せんヲ、尤もと夕まぐれ既　るあかゞりや鮫肌白くぼむしくひ齒お　ぎらし言うたやうな顔もせずア、ム、に。神樂を 三重ウタヒへしやう〳〵では明かぬ日も頻りに打つて。遠慮もなしの神樂の太鼓。あら曲もなの宮守どもやハヽ〳〵扨々皆の衆遅なはり面目ないイヤ今少し早う來ませうと思うたれどもなうあそこからは御祈禱のこちらからはお札のと。此中我等が祈禱の利く事はそれは〳〵〳〵〳〵すさまじい。疱はしかでも疫病でも疝氣寸白すぢけあしけ頭痛眩暈立ちぐらみ或は何程ぢやぎつく髮にてもこれ此お札たつた一枚お貼りなさるればしんとろ〳〵とろりや〳〵〳〵　望み次第に直しますサア〳〵爰ぢや　長口上には草臥れた。さらば是から撫



者が濟。何れも御免と神樂の鼓。枕にするより早や鼾ハルオトシ跡先。知らず寐入りける。詞在りあふ宮つこ輿をさまし。さつてもべつたりしやべつたり。最早これはたわいなし。我々が詮議する役目にてはあらねども。あのやうに寐込うでは若しもの事がありとてもこちとらが誤りになり。どうで仲間の恥さらしほんにこちとが物思ひ。勘ざぶ彌兵衛おぢやお頭へ斷ろと打連れオクリへ宿所へ歸りける地神に祈りをかけ帶のハル地結び目しやんこ小利口に。素足に雪駄雪姬は男なりけり髮の香の伽羅の匂ひもさつと慕ひし追風や。ギン蝶に成りたや揚羽の蝶にたとへ主ある籬の花も下露のまろねのさんさお手枕。ふり。地振つて出でたる風俗は。人目つゝみの深編笠やつすハズミ姿のはすは成る詞色嬉しやあたりに人もなし近く

へ寄つて拜まんと内陣にそつと入り。相之丞が臥したる上にどうと躓き。踏れあいたし相之丞。むく／＼と起上り欠伸交りにム、ア、／＼扨。踏んだり／＼人が氣味よう寐てゐるに腰の骨を拔ける程踏みをつた。今のは猫の足には少し鼠の足には少し大きし誰ぢやどいつぢやム、ム、今の私を踏んだは若衆さんのやうなアノ女中さんかえ。人を踏んで堪忍ともいはずに往なうと思はんすか。是非いなんすなら送りやせうが送り狼カハリオトシ一口喰はねば。おかぬとしなだるゝ。詞かの姬につこと打笑ひ。お道理やさりながら。全くわざと踏みませぬ。妾は深き願ひあつて。明神樣を祈れども野道と申し女の身目立つてはと此樣に姿をやつし參るなり免して下んせア、歸りませうと。行かんとすれば立塞がりはて免せなら

免しませうが。かう見た處只はならぬお方なりと見受けしに供をも連れず只一人御立願とはム、こんだ／＼扨は仲間の禰宜共と拜殿あたりを穢さうと見たは違はぬ粹か／＼さうであすかと寄添へば詞イヤさうした色がましい浮氣な事では侍はず。語るまじとは思へども神職勤のお方と見奉れば。我が願ひあらましお話し申すべし必ず漏し下さるまじカン詞恥かしながら自らは當國狩野の氏政が娘雪姬と申す者なるがウレヒガヽリ幼少にて母に別れ程なく父も過ぎ給へばウリ今の母上我等を疏み妹の。初霜は後腹故長地是に家を繼がせんと巧ませ給へど家の秘書。傳授の一卷父上のウリお果てなさるゝ其時に。詞自らに讓れよと。傅家老花筏兵庫之助が預ればウレヒ母上思ふ儘ならずウリ然るに此度大内には。諸國の繪師を集められ

雲龍を書かせよと。勅諚あれども是ぞといふ勝れし繪師もなき由聞けば自ら女の身なりとも氏政が娘なり。何とぞ神に祈をかけ勅意の雲龍を畫くならば廢りし父の。家の名をも クル 上げ申し度き願ひ故。夢になりとも生きたる龍の形を顯し見せ給へと。一七日詣でつゝ今夜七日に滿つる末なれど。神も憐みましまさぬか スエツシ 何の驗もないなれば。詞 扨男が有つたらばどうかかうかと談合の便りないとは妾が事若しもどこぞに私でも女房に持つてくれさうな。色 殿御があらばと抱へ帯口にくはへて尻目には戀を。ハツミ 丸めし詞なり。詞 相之丞ぞつとしてさりとてはお若が樣子を聞いて某も感じ入り申したり。其信仰の志神慮の御納受まさに顯れ願成就の御吉相とこそ見えてあれ。某不思議の妙を得て生きたる龍の姿をば水に顯す術を得たり イロウ いざ〱此方へ〱と姫君 オクリ へ伴ひ神前の 詞 手洗鉢に立ちかゝり守袋の紐を解き。これ御覽ぜと水に移せば。色 僅かに溜る石鉢の コハリ 水は逆立ち湧出でて眼前龍の形を顯れ九萬九千の鱗の光り角は火木に異らず眼の光は明鏡の ハルギン 面を向くべき ニ重上へ やうぞなき セメ 雪姫信心五體に銘じはつとばかりに感心あれば。有りつる龍は消え〱と。水に形も オトシ 守り袋に納り入るこそ稀代なれ カン 姫君夢とも現とも感涙袖に浸しつゝ。ウリ さて有難や忝や。是と申すも明神の御加護故といひながら 詞 さるにても如何なる御方樣にてましませば。かゝる稀代の重寶を持たせ給ふは如何にとあれば。今は何をか包み申さん我こそ相模の國の住人北條某が一子力之助と申す者。子細あつて國を立出で假名を隱し只今は此宮の社人となつて相之丞と申すなり。最前水に移せしは代々家の旗印。三つ鱗の不思議ぞやかう申せばいかめしけれど。男に持つて下されても筋目も餘り劣るまじ幸ひ爰は神前なり勿體なき事ながら。明神樣が結ぶの神やら仲人やら何やらかやら御利生の カヽリ 祝ひがてらと抱き付き イロ 女中に相生相之丞。それかまじやうよ北條の。子孫なるわと感じける。クリ上 不思議の縁に狩野の家 引 榮え榮ゆる雲龍の其名を。ハル 雲井に上げにけり。

老まつ　二

〔解題〕常磐津の最古曲の一として、又祝言物として名高い。所傳によれば元祖文字太夫が宮古路を關東と改め更にその筋の注意で常磐津と改めたのは延享四年十月の事で、三味線の佐々木幸八もこの時市藏と改名したが、その頃に作曲されたものであるといふ。正本に常磐津文字太夫をワキとして志妻太夫・造酒太夫、三味線に佐々木市藏を掲げてあるのも如何にも古體である。詞章は謠曲の「老松」の抄錄たるに過ぎない。

へそも〳〵松の日出度き事萬木に優れ　ユリ蔭に寄り給ふこの松。忽ち。セツ大木に日出度き松が枝に。巣をくふ田鶴の
十八公の粧ひ。千秋の翠をなして古今となり。枝を垂れ葉を重ね木の間すき齡をば。君に捧げて御子孫は　カンクル上
の色を見す。カヽリ秦の始皇の御狩のまをふさぎて。その雨を漏らさざりし龜の萬劫ふる川の流れ絶えせぬ金銀珠
時引天俄かにかき曇り大雨しきりに降かば帝太夫といふ爵を。賜り下し給ひ玉どう〳〵。と御藏の内納まる家
りしかば。帝雨を凌がんと小松の　ウキ　てより松を太夫と申すとかや。かやう　こそ日出度たけれ。

蜘蛛絲梓弦　三

〔解題〕略して「蜘蛛の糸」といひ、又一に「仙臺淨瑠璃・仙臺座頭」など呼ぶ。明和二年十一月一日から市村座「降積花二代源氏」の一番目に演ぜられたもの。作者は金井三笑、作曲者は初代佐々木市藏、出演はタテ初代文

字太夫、ワキ志妻太夫造酒太夫、三弦佐々木市藏同古流上調子佐々木市之丞等で、土蜘蛛の精靈九世市村羽左衛門、梓巫子芳澤崎之助、貞光澤村喜十郎、金時大谷廣治。近松の「關八州繋馬」などからの系統を引く土蜘蛛の精の化現の活動を材題として變化物所作として脚色したもので、源光の御所の夜の宿直に坂田金時と碓井貞光が詰めて居ると、切禿のお茶汲み童が現はれて赤貝馬の拍子を踏みつゝ賴光の寢所へ入らうとして、變化と見現はされて消え、更に仙臺座頭に化けて出て仙臺淨るりを語り、次いで山伏となつて現れ、これに梓巫子がからんで、とゞ梓巫子は楊由基の女桝花女と名のつて貞光金時と共に變化を退治するといふ仕組であつて、當時所作事の名人といはれた羽左衛門の變化の所作が眼目である。羽左衛門は赤貝馬の拍子事は幼少の時小夜中山の狂言に演じ、又座頭の所作は寶暦十一年五月まだ龜藏時代に上方上り置土産として市村座で「三重帶褄野模樣」といふ外題で常磐津の淨るりで七變化の所作を演じたその中の「うかれ座頭」の趣向を取入れたもので、共に好評であつた。今日では上卷の切禿と仙臺座頭とだけが殘り、下卷の山伏と梓巫子とは廢曲となつた。初代文字太夫時代の代表的古曲の一といふべきである。

ツメミ唄へ人知れぬ心は重き小夜衣の。怨みん方もなき袖を。片しき佗びる御夜詰の。碁打ち扁突十炷香の。ゆふべの色香引きかへて。今宵は髭の宿居もの。いかもの作りの雨雄士。君を守護なす有様は。げに只ならぬ多田の御所。武將源の賴光公。御心地例ならず。醫療百計たゆみなく。とり〴〵様々御枕に。御簾もる風の音づれも。いと物凄き折こそあれ〳〵ヘコレ貞光。コレ〳〵貞光。ヘムン〳〵〳〵。ヘハテ扨て〳〵〳〵大切な宿直をしながら。扨もよう寢るぞ。ヘヤコレ公時。人の一寸は見ゆれど。我が身の一尺とやら。あんまりそなたがこくり〳〵寢るから。おれもうつてやつたものよ。ヘヤ口賢い事をいふ。したが。今宵に限つて此様に眠いといふは。ナウ貞光ヘオ、サ。こんな時にはべと〳〵する様な茶を一服飲みたいものだナゥ。ヘサレバサ咽喉のひり〳〵ひり付く様な濃茶をおれも飲みたい。

ドリヤ目覺ましに一服と。煙管の火皿焰々と。煙草の煙謡へ更け渡る。夜もうば玉のきり禿。都育ちか京人形。ちよこ／＼歩く後紐。お茶の通ひのにこ／＼と。がつてん／＼鹽の目。かぶりふる／＼ふらぬ間に。合積んで置けとは。栂の尾山の。春の若草茶の木の事よ。ちや茶に浮かしてやつこのこの／＼。この目を覺ましてやろ。この此。このお茶参れと差出す。ヘ何だ茶だ。ヤコリヤよい所へ持つて來た。ドレと取らんとせしが。ムン遂に見馴れぬ小僧だが。ワリヤどこから來たえ。ヘアイわたしはお茶の間に居りまする者でござりまする。それを知らぬとおつしやるは。きつい嘘や。ヘ公時ムハヽヽヽあざ笑ひ。何だ。お茶の間にゐる。お茶の間にゐる者を我々が。知らぬといふ事はないが。茶道頭の名は何といふ。

ワリヤ知つてゐるか。ヘアイ。いうこく齋と申しまする。ヘムン。ナンダ幽谷だ。そしていうこくさいといふ字は何と書く。ヘ幽の谷と書きまする。かの商山の四皓を取つて付けられたと見えます。ヘムンはて形に似合ぬ小癪な事をいふな。そしてワリヤ誰が子だ。ヘアイ私は。ヘイヤサ何者の悴だよ。ヘサアそれは。ヘどうだと問ひかけられて。すつくと立ち。江戸へ月の澄む軒端にかゝる合蜘蛛の絲。あるか無きかの身を如何にせん。あるかなきかの合小童を。いたくも問はせ給ふなと。につと笑みたる有様を。心附かねば兩人は。扨も希代の童やと。顔を



眺めて居たりしが。眠た覺ましと貞光か。扨て一つ不審参らうか。我が神國の神の心は。ヘすなほに映る鏡の影。ヘいで公時が問ひかけん。兒童が胸にも明鏡ありや。唄ヘあればこそ合眞如の月も空にあり。ヘ其月の數覺えてか。ヘさればいなア。お月様いくつ。十三七つ。雲がかゝらば。ヘ風を以つて埃を拂ふ。

へ大千世界はさて如何に。おゝそれこそはいかのぼり。清く澄めるに欺くれて。伸ばせば伸びる絲筋の。棚引き昇つて天となる。へ切れて落つれば。へ地となりぬ。へ又隠れんぼの始まりは。どつと神代の其昔。天の岩戸に隠れんぼ。今に傳へて神國の。子供遊びとなりにけり。へ雛の祭は。へ嫁入の手習ひ。へ幟甲や菖蒲打。菖蒲刀はイカニ／＼。それは武藝の始めなり。駒の手綱はコレ。／＼。／＼／＼／＼。から取つて。やよや。やんちややや眞紅手綱の小綱小綱をこがら巻いた。サア合赤貝馬のしやん／＼／＼。しやんと乗つては手綱かいくり。しつしいどう／＼。どゞんど。ドッコイドッコイサ。伊勢の鈴鹿で朝の出がけにや小室節。出がけにや朝の。朝の出がけに。合小室節。合轡の鈴がりん／＼がら／＼。

りんがら／＼。りん／＼がら／＼。りんがら／＼。はいどう／＼。はい／＼／＼。合天晴れお馬の上手と上手が。乗つたか。乗つたぞ。しと／＼／＼それ／＼それ／＼／＼と。化生は其まゝ頼光の。寝所を目がけ入らんとす。へコハ心得ずと公時貞光。支へとゞむる袖袂。へ掻いくゞり／＼。こゝに現はれかしこに失せ。業通自在の其振舞。へヤア正しく變化ござんなれと。一度に刀抜きかざし。へ拂へば。へ後に有明の。突止めんにも居もためず。狙ひもためず へ切髪の。形は消えて失せにけり。

中の巻

へ兩人目と目を見合はせ。今の小僧は。へサア今の小僧は。ハテ殘念やな。へ討洩らしたか口惜しやと。腕をさすつて居たりしが。へコレ／＼公時心を附きやれ。へオ、サ眼を配れ貞光。餘り眠い／＼と思ふ其心の虚に乗つて。何か目に遮ると見える。何と目を覺ます仕様はあるまいかえ。へ貞光あたりを見廻し。オウあるぞ／＼。究竟のこの碁盤。夜の明ける迄打明かさん。へヤアコリヤよからう。サア來いと。黒白二つの石を分け。互に爭ふ先手後手。離離たる馬牧。連々たる雁行。翅鳥にかゝる盤上の切つて押へて。刎ねかけて。脇目も振らぬ折こそあれ。夢とも分かず現とも。影の如くに忽然と。座頭一人現れ出で。へオ、、地體某は奥州の者で。三味も彈きます諸藝も上手。よい／＼よい／＼よい。アリヤリヤコリヤリヤは何でもせい。へオ、、、杖を力に都の町を。巡り／＼て浮かれ座頭の坊。へチツ、、、。コレサ申し。コ、サ社頭でばしおんちやり申すか。内陣へつくばいつても苦しくなくば。

サアちくとんばい。拜ませても呉りやり申さないか。へ何だゞ。しやとうだ。爰はそんな所ぢやないわ。忝くも天下の武將の御座なさるゝ所だわ。へオヤさうぎやアれば。身共サアも。先年は爰さ通り申した。お待ちなさろ。ハアア脛かけ五年だア申し。へハア、奥州座頭か。幸ひの眠むた覺まし。國節の淨瑠璃面白い所。サア〳〵聞きたい。ペコリヤ〳〵お坊〳〵。賴むわ〳〵。へハア何とぎやアる。淨瑠璃を語れ。ソリヤハゑものだアが。古く思しやるべいから。よしになさろ〳〵。へイヤ古くても大事ない。聞き及んだ仙臺淨瑠璃。一段所望だ〳〵。へハア是さお坊。勿體附けずとも早く語つて聞かせろ。サア〳〵どうだどうだ。へイヤハアさうせちにぎやあらば。歸りがけの駄賃だ。ハ心得たりと。脊に負うたる三味線の。撥もしどろに彈き鳴らし。上るりへ是はでかばちないあばれ者。それ通すなと。扨置き。こゝに。漢の高祖の臣。樊噲扉へさへて。下控ゆれば引。なじかはといふ強者一人。おはしますとな思し以てたまるべき棟。梁下閂上ゆさ〳〵召せ引。上主君の歸館を迎ひの爲。下ウ〳〵。どろ〳〵下めき〳〵と鎧兜に身を固め。鬼面の楯。大たう押破れば。水もたまらず官人ども。ノルれん小たうれん。二振りの劍。金だかな銀だかな。あたり八間タアタハ。ひかり〳〵ひかり〳〵と光り渡るを。十文字に指すまゝに。風吹きには風まけすべいと。オヤ〳〵オヤ〳〵。オヤあぶない事だもさ引。さて鐵門に著きしかば。踏んばたがつてどさ聲上げ。詞主君の迎へに樊噲閖に打たれて目玉サ飛出し。首は胴へが出ばつたア。でば。上門のひらけ下へし込んで。臍のあたりで。桑原々々門の開けと呼はつたり引。内には官人〳〵々々アとぞ唱へける。上かの樊噲が力大きにたまげ。オヤホヽ〳〵〳〵〳〵の程。ゆゝしかりとも中々申すばかり



はなかりけり。へハヽヽヽ。ヤコリ
ヤ面白かつた面白かつたはえ。コレサ
お坊。是ばかりの藝ぢやあるまい。何
ぞ珍らしい踊歌でもないか。とてもの
事にサア〳〵所望だ〳〵。へオヤ扨て
〳〵それさま達。あこぎだアエ。アヽ
とても濡れた袖だ。おらア國さをんど
り歌を。さらばぶんまけ申すべい。歌へ
おらが在所にやナア合めん〳〵名所が
ござる。戀にや伊達なるいしぶみ書き
やれ。たより松島錦木立てゝ。如何な
る事にも雨にも。忍ぶ文字摺色ぢやえ。
色に通うて。アヽ合安達が原の鬼にな
るまで。見棄てられたる胸はほんに
〳〵。胸はもやつくむや〳〵の闘。ほ
んに萩の折箸杖がなうてはならぬぞ
え。二人も聞入り餘念なく。前後忘れ
し折柄に。怪しや今まで座頭と見えし
は忽ちに。兩眼見開き頼光の。一間を

目がけ窺ひ寄る。公時貞光。シヤ扨は
こいつも變化よな。手取りにせんと大
手を廣げ。爰の隅々かしこのつまり。
かげろふ稲妻石の火か。消えて姿は無
かりけり。へ二人は呆れ顔見合せ。最
前の小僧といひ。へ今また稀有なる座
頭の有様。狐狸の所爲なるか。何に
もせよ油斷する所でなし。御寢所こそ
氣遣はし。公時お往きやれ。げに尤も
と貞光諸共打連れ立ち。奥の一間へ驅
り行く。

下の巻

へ浮きたる雲の行方をば。風の心に任
すなる。その言の葉も白衣や。ヘリマサヘリ
千早ふり袖々ふる鈴の。鳴るか鳴らぬ
かなりそな色音。ならぬ操のいとすぐ
に。その弓張の梓巫女。築地はるかに
歩み來る。合跡に身なりはほら〳〵の。

かい繕はぬしよんぼからげの護法來。
拂ひ淨めタン〳〵タン〳〵タン奉る。
神は梵天てんの〳〵お天の一尺錫杖
ふり立て。巫女の跡から月待ち日待
ち。合前からお顔をちよつと巳待ちの
辨財天かや。美しやアあゝ美しや。合
大日代僧代參り。難行苦行のすた〳〵
坊主。すた〳〵云うてぞ休らひぬ。へア
アコレ〳〵。申し〳〵。最前から跡に
なり先になり。かう連立つも他生の縁。
コレ姉さん。お前はどこからのお出で
ぢや。へオヽ見ればお前も御修行の御
身さうなが。私も見さんす通りの梓巫
女。この度頼光様の御病氣に就き。お
召に依つて此所へ來たわいナア。へハ
ハア。コレハ〳〵幸ひ〳〵。我等も御
召によつて御祈禱に參りがけ。そんな
ら一所に是からと。手を引きしむれば。
へオヽこの山伏さんとした事が。コリ

ヤマア何をさんすぞいナア。エ、いやらしいと振放す。〽ハア、。堅いな〳〵。〽堅い段かいた。お前の様な生ぐさばんだばさらんだぢやないわいな。〽ハア生ぐさばんだばさら。ハア口合ひぢや。生ぐさ坊主といふ事か。ハア、ちつとも大事ごんせぬ。忝くも役の優婆塞の流れを汲み。女房はおろか生ぐさ物はお許しでごんすわいの。こなんも又天鈿女命より傳つて。八百萬の神いさめ。ドリヤ先づ天の岩戸を開かんと抱付くを。オ、けうと。お前もよつぽどな徒ら者ぢやわいナア。わたしや大切な御祈禱の内なれば。心まで清淨に持たねばならぬ。オ、〳〵うるさ。そつちへ退かんせ〳〵。お前にかゝつて大事の役目を忘れて退けた。さらばすゞしめにかゝらうか。〽さらば見物致さうか。〽やんもしろや荒神の。お前を見れば松植

ゑて。黄金の井戸に。合水も湧出で。松諸共に内ぞ御繁昌。末繁昌の千代の御神樂。詞〽ム、ハ、。それ其様な〽エ生溫いすゞしめでは。惡鬼惡魔の障碍は扨置き。揚錢花代茶屋船宿。催促生靈離れねば。そこを我等が口車。コリヤ此錫杖文句を合振立つて。そも〳〵勘定しあげ奉る。合拂ひはさつぱり福德延命。約束緣日七夜待二十六夜の愛嬌を。ヒロヒ守り本尊は一代男。のぼり詰めたるこけの行。詞〽ア、勿體ないコレ山さん。今の祭文聞くにつけ。お前もお山に伏ししげき。お山伏と見ゆるぞゑ。〽ハ、、、、。コリヤ〳〵〳〵。宣ふな。そもじも元は川竹の。合うきふし繁き梓の弓の。引く手數多に張強き。流れの果てと口に寄せ。とふに逢ひはごさんすまい。〽さつても見通し山ぶさん。やんもしろや。身の上咄。

〽笑ひ清め戀噺。いつしか色に蘇民書札。〽我も昔は戀知りの。戀の世界に住み馴れて。合朱雀の野邊の花薄。穂に穂合亂れてうつゝなく。合長地こちも浮氣に楢柴の。いぶり言葉も親方の。合つらい憂目を忍び馴れにし夜半の風。一中〽身に沁む逢ふ瀬末かけて。長地戀らじ仲と誓ひてし。戀の榮耀にかせ掛けて。合タ、キ〽口舌しかけて張合うて。別れし翌日の氣がかりに。下長地文は書けども惚れ意地の。筆の運びもぴんとする。〽拗ねた所をこちからも。そんなら今宵は行くまいと。合長地思ひ詰めても移り香の。下ウタ浮氣の。風に誘はれてつひ仲直る床の內。〽憎い男と胸づくし。合鷄の鳴く迄恨みつ泣いつ。果てはわりなき中々を。思ひ出づれば昔にて。今は二人が身の上も。巫女山伏のなり形。過ぎし緣のこしかたと。互

に笑ひを催せり。〽ホヽヽ、最前から
の仕方噺。イヤも。大抵の粋さんぢや
ないわいな。そしてお前のお名は何と
いふぞいな。〽わつちが名は。道樂山
道樂院道樂修業の本寺でごんすわい
の。〽道理こそ尊い寺は門からとやら。
其お心掛では御祈禱も利きやんしよ。
サア〳〵その尊い祈りが見たいわい
な。三下り〽おつと心得丹精ぬきんで。詞
祈るに驗なからんやと。珠數をさら
〳〵押し揉んで。合當分爰へござんせ
女房。南方ぐんにやり花車風流。合西
方色事ようぼう天女。北方ぼつとりや
さ女房。合中央大日大事の風俗。懺悔
々々。ぞつこん愛敬。南無振袖女房
振袖女房。生臭ばんだばさらだ。合左
のお寢間に三日三夜。右のお床に三日
三夜。合せて六日に。文七一日足して。
合七日の御祈念御祈禱成就。これ程功
德何のこつちや〳〵〳〵エ。合あの子
よい子ぢや。惚れて〳〵惚れぬいた。
アレ〳〵文をやろにも讀んだり書いた
り面倒な。それ〳〵いつそ居守の黑燒。
お藥なんぞを振りかけた。ヤ是も私が
思ひ付き。サア〳〵よい子ぢや〳〵。
エ合點か〳〵。うんたらたかんま。ち
やうか拙僧。獨りで氣をもみ知我身者。
卽時に靡きやれ。眞言秘密で責めかけ
〳〵。額に大汗玉の珠數。すり立て
〳〵立ち舞ふ體に。人の心を蕩かす化
生。詞〽梓の女は一心不亂。目たゝきも
せずにらまへば。〽化生は一間に立ち
かゝる。〽得たりと女は梓弓。本弭持つ
てちやう〳〵〳〵と。打つてかゝれば。
〽不思議やな。驗者と見えしは忽ちに。
八臂異形の姿を顯はし。はつたと睨ん
で立つたるは。恐しくも亦凄じし。女
は弓と矢小脇に掻い込み。突つ立上り。
自らを誰とか思ふらん。楚王に仕へし
楊由基が娘椰花女なるわヤイ。いま唐
土に父が弓矢を受繼ぐべき良將なし。
汝日の本に馳せ行き。武將賴光に讒し
て。この雷上動の弓。水破兵破二筋の
鏑矢讓り參らせよと。父楊田基が敎へ
に任せ。わざ〳〵此土に來る折柄。館
の騷動賴光の不例。變化の所爲と見受
けし故。わざと親しくもてなせしぞ。か
ゝる奇瑞の梓弓。引きは返さじ惡蟲の。
障碍を語れ何とと詰めかゝる。〽我
がせこが來べき宵なりさゝがにの。蜘
蛛のふるまひ豫てやは知る。我はコレ。
葛城山に年を經る。土蜘の精魂なり。
大日本を押領し。魔界になさんと思ふ
より。鬼童丸が亡念加被し合體なし。
賴光を惱ませしに。冥罰目前梓弓。殊
更枕に立て置きし。源氏の重寶膝丸の。
威德に恐れ立寄る事も叶はぬか。エヽ

口惜しやなナア。汝妨げなさば立ち所　ち。合へ公時　へ貞光兩方より。斬つてか　煙の。影に隱れて失せにけり。合かゝ
に引裂き捨てんと。をめいてかゝれば。　ゝれば。へ化生はおぼろ雲間の月のし　ろ合稀代の惡蟲も。つひには劍の威德
へひるまぬ女が弓取りのべ。裾を拂へ　んしんと。虹のかけ橋長廊下。花壇合　によつて。退治まします源氏の威光。
ば。合ひらりと飛び。へ馬手を打てば。　築山植込みの。山は鐵城水は淸劍。撓　感ぜぬ者こそなかりけれ。
へ弓手を開き。へ後を薙げば。　へ前に立　む枝々糸繰りかけ。惡風吹きかけ炎の

積戀雪關扉　四

〔解題〕　通稱「關の扉」。天明四年十一月江戸の桐座顏見世狂言「重重人重小町櫻」の大切淨瑠璃として演ぜられたもので、爾來度々繰返されて今日に及んで居る。常磐津の語物中第一の大曲たるのみでなく、我が所作事物中の一大雄篇といふべきである。作者は劇神仙寶田壽萊で、作曲者は、當時に於ける豐後節の作曲の名人鳥羽屋里長であらう。出演の太夫は常磐津兼太夫(後の二代目文字太夫)のタテに造酒太夫・大和太夫のワキ、三味線は二世式佐と上調子岸澤盧吉、鳥羽屋里長と上調子鳥羽屋里桂とである。役者は關兵衞實は大伴黑主中村仲藏、良岑宗貞市川門之助、小町姬と墨染三世瀨川菊之丞。
この芝居の筋は高野博士の「名曲選」(富山房、名著文庫)の「積戀雪關扉」の解說に詳しい。

上の巻

へ待ち得て今ぞ時に逢ふ。待ち得て今
ぞ時に逢ふ。關路をさして急がん。へむ　業。柴を束ねてかいやり捨てゝ。五尺
かし〳〵。昔噺の其樣に。しば〳〵似　いよこの手拭。五尺手拭。中染めたシ
たる柴刈も。關屋守る身の。合ノ手片手　ヨンガへ。へ樵夫の唄も世を厭ふ。身に

つまされて偲ばしく。忘る心に取敢ず。手馴れし琴を調べける。へ恨めしや我が緣 合方へハテしほらしい調べの音色ぢやな。へか丶る山路の關の扉に。さしも妙なる爪音を。聞くにつけても身の上を。思ひ出だせば錦の帳。玉の臺に人と成り。翡翠の簪たをやかに。ある人は。合初花の。へ雨に綻ぶけはひとは。合女子をのぼすかけ詞。へ今はそれには引替て。草の衣の袖狭き。姿を隱す簑笠や。へ杖を力にたど〳〵と。關の扉近く歩み寄る。へ宗貞琴をしづめ給ひ。雪降れば冬籠りせる草も木も。春に知られぬ花ぞ咲きける。へ何と關兵衛。どうも言はれぬ景色ではないか。へ成程左樣でござります。此雪を下物に一つたべたらよう御座りませう。と話のうちに小野姫。關の外面に立休らひ。申しちと御案内申しませう。へアレ關の扉に誰やら案内があるぞや。へなに案内とは何者ぢやと關兵衛が。關の扉開けて。へア、貴樣は女ぢやな。この夕暮に供をも連れず唯一人。此關へは何故來たのぢや。へアイ私や三井寺へ參詣の者。關を通して下さんせ。へ成程通りたくば通してもやらうが。手形はあるか。へその樣な物はござんせぬわいなア。へ手形がなくば通すことはならん〳〵。へコレその樣に言はずとも。この大雪に嗟難儀であらう。了



剃して通して遣りやいなう。へさう仰しやれば通してもやりませうが。これ女中。そんなら俺が尋ねる事があるが。それを一々答へるか。へ成程私が覺えて居ることなら。何なりとも答へませうわいなア。へまづ第一合點がいかぬ。へそりやマア何がえ。へサア其譯は。へ一體そさまの風俗は。花にも優る風姿。へ桂の黛青うして。又とあるまい。へお姿を。お公卿さん方お屋敷さん。多くの中で見初めたら。只は通さぬ筈なれど。其處をその儘捨て置くは。へ生野暮薄鈍情なし苦無しを見る様に。合惡洒落言うたり大通仕打もあるまいか。合どう云ふ理窟か。合氣が知れぬ。〳〵。へいやとよ我は緇衣。はや脱ぎ捨てゝ烏羽玉の。墨の袂もたらちねの。後の世願ふ菩提心。喝食の身にて候ぞや。へホウ言葉は殊勝に聞ゆれど。菩提の道に入りながら。何故黒髪を剃らぬのぢや。へ姿は世をも厭はどこそ。心で厭うて居るわいな。へシテ煩惱とは。へ菩提なり。へ提婆が惡も。へ觀音の慈悲。へ又槃特が愚癡も。へ文殊の智恵。へ智恵も器量もとりたりも。へ類なき身を百歳の。姥になるまで獨寢は惜しい事では。へないかいな。お目にかゝるも初深雪。凌ぐ木蔭もいとしやと。閨の戸ぼそを押開き。へこちへ。へこちへと通しける。へ小町は見るより。ヤアお前は宗貞様。おなつかしやと取付いて。暫し涙に暮れ居たる。へ是はマア思ひも寄らぬ。此處へは何うしてござつたぞ。へされば いなア。何時ぞや布留の御寺にて。お別れ申したその後。王子様の横戀慕。是非入内とある故に。館を出でて此様に。身を忍んで居りますわいな。へそれは嘸憂き艱難を。さつしやれたであらうなう。それがしとても同じ身の上。コレこの處は先帝の御陵故。移し置いたる御愛樹のあの櫻。非情のものとは言ひながら。崩御を悲しむ餘りにや。薄



紫色に咲きたるを。そなたの歌の徳によつて。盛りの色を增したれば。小町櫻と言ひ傳ふ。其名に愛でて少將も。一木の下に侘住居。思へば果敢ない縁ぢやナア。へ始終を聞いて關守は。そんならあなたは小町樣でございましたか。コレハ／＼少將樣にも。嘸お喜びでございませう。是からは打寛いで。其馴れ初めの戀話。お聞かせなされて下さりませぬか。へイヤもう此身になつて。今更語るも面伏せ。へ左は言へ迷ひの雲霧を。懺悔に晴らすも悟りの道。へそんなら戀の世語りを。へ早う聞きたい。所望ぢや／＼。へ其初戀は去年の秋。大内山の月の宴。其折柄に垣間見て。思ひに堪へかね一筆と。書初めしより明暮の。文玉章の數々は。何と覺えがあらうがの。へ其水莖はこまぐ／＼と。僞りならぬ眞實を。聞く嬉しさも押包み。結焦れても母さんに。一日誓ひを立てし身の。色に心は引かれじと。思ひ返していなせをも。言はぬは言ふに增す穗の芒。へ小野とは言はじ薄草に。百夜通うて誠を見せて。忍び車の榻に行く。やつし姿の夜の道いつか思ひは山城の木幡の里に馬はあれども。へさつても實ぢや眞實ぢや。一里餘りをわくせきとそんなら駕籠にも乘らずにか。へ君を思へば徒跣足。へ月にも行き。闇にも行き。へさて雨の夜に行く思ひ。蟋蟀は我が戀を思ひ切れとの辻占も。問ひ直して。へ行く夜の數も九十九夜。今は一夜ぞ嬉しやと。待つ日になれば先帝の。崩御と聞くに身の上の。へ戀も無常と立ちかはる。君の菩提を弔はんと。位を辭して石の上布留の御寺に終夜。御經讀誦の折も斯。へ私も其時母上の。後の世祈る志。一夜籠に思はずも。お顔を見るよりぞつとして合身にこたへ。後生菩提も。何處へやら。捨てゝ。合二人が一つ夜着。枕ならべて寢たれども。ア、。イヤ／＼／＼立てし誓ひは破られずと。つひ其儘の憂き別れ。思へば果敢なき縁ぞと。かこつ涙の流れては關の清水やまさるらん。へ關守傍から。ア、悲しいはお道理々々。何にもかもこれからは。此關兵衞が呑込んで居ります。へそんならお前頼むぞえ。へサアそれで定つたと言ふものだ。戀人は此關兵衞。四海波靜にでもあるまい。ハテどうしたものであらうナア。オ、それ／＼此關守には每年七夕祭があるが。其祭になぞらへて。あなたは牽牛。お前は織女。へオ、それ／＼秋と冬とは變れども。年に一夜の天の川。へとわたる星になぞらへて。へ七夕祭にかゝ

らうか。へ實に織姫のかざしの袖。秋の錦を織る機の。中に想の字をあらはし。砧の上にゑんれつ(怨別の歌)の聲。頻りに暇なき機の音。合きりはたりてう〳〵。賤が手業やことわざの。中に關兵衛懐中より。落せし割符を小町姫。手早く取れば。へヤそれは。へそれ〳〵〳〵〳〵。そつこでせい。二上リへ戀ぢやあるものナ。渡らでおこか。渡らばさうして。合斯うしてと。目褄隙間を何白河の。橋を渡ろか船にしよか。橋と船とは。合戀の仲立。ほんにえ。三下リへなか〳〵に初めより。馴れずば。合物も思はじ。合忘れは草の名にあれど。忍ぶは合人の面影々々。ナホルたまに逢瀬の七夕も。せめて一夜はあるものを。一期添はれぬ憂き戀は。つれない此身とばかりにて。流涕こがれ泣き給ふ。ヘア、。これ〳〵。コリヤマアどうでござります。其お歎きを見まいため。今宵しつぽり。へ露霜に。色づく紅葉の橋渡し。所詮媒人は宵の程。われ等は奥で酒の燗。長居は恐れと走り行く。へ折しも西の雲間より。眞一文字に白尾の鷹。合かしこの石に止まりしを。へ宗貞見るより。ヤアあれは正しく齊頼の鷹。足に何やら付いたるは。ハテ怪しやと立寄り見れば。片袖に血汐を以て。二字乗舟と記せしは。往昔衞の公子壽が。兄に代つて死したる詩擬は弟安貞は。へお前に代つてお果てなされましたといなア。へ不便の者の身の果てと。歎きの中に片袖を石上に取り落せば。血汐の汚れに鷄の聲。宗貞耳をそばだてゝ。ハテ合點の行かぬ鷄の聲。仔細ぞあらんと見廻して。石押し退くれば思はずも。見れば土中に怪しの鏡。へ小町は驅け寄り手に取上げ。コレ此鏡の裏に。生けるが如き雞の形。血汐の汚れに聲をあげしは。紛ふ方なき大伴家の重寶。八聲の名鏡。箕様よりお渡しありしこの割符と。最前關守が落せし割符。これから合はせて見る時は。へ鏡山といふ文字。何にもせよ合點の行かぬはあの關守。跡に殘つて尚も様子を窺はん。そなたはこれより立歸り。狼煙を相圖に。關の四方を圍まれよと。箕へ傳へてたも。へそんなら私は。へ小町殿。へ宗貞様。へ片時も早うと宗貞の。言葉にまかせ小町姫。戀しき人に別れても。又逢坂の山傳ひ。雪踏み分けて。三重へ急ぎ行く。

下の巻

へ今宵も既に降り頻る。雪の翼の羽風をも。音靜やかに更けてゆく。まさに先帝御なき跡を。弔ひ奉る御夜の讀經。

合なほも回向を忘れもやらず。誦するも弟。安貞と心ばかりの手向草。ヘ宗貞袖を取出だし。オ、さりながら。血汐に染みしこの片袖。身に添へ持たば先帝への恐れあり。如何はせんと四邊を見廻し。オ、それよ〳〵と件の片袖。箏の下樋へ押し隠す。ヘその間に奥の一間より。道具屋へ一杯機嫌で關守は。銚子盃携へて。足もひよろ〳〵歩み出で。エイ世の中に。酒程の楽しみはないわいの。ヤアお前はまだ寝ないか。エイヤ何故寝なさらぬよ。シテこの花嫁御は何處へ往た。ハア、彼奴床いそぎだな。エ、急ぐやつさ。コレお前も往つて寝なよ。寝ぬは損だばさらんだ。あれはさのえい。これはさのえいやと戀の淵。もしもはまる氣で四つ紅葉。ヘ成程わしは往つて寝ようが。そなたはきつい酔ひやうちや。ア、危ない〳〵。と云ひ様入れる懐中の。手先を押へて。ヘア、コリヤ何をするゑ。俺が懐中へ手を入れて。ドどうするのだ。ヘサア是は。ヘイヤサ。どうするのだよ。エ、聞えた。かみがないと云ふことか。神も末社も打連れて。日出た〳〵の若松さまよ。枝も栄えて葉も茂る。お目出度や。千代の子お目出度や。千秋萬歳。萬才〳〵萬々歳。ハアア、ヘいさゝせ給へと押しやられ。ヘ始終を胸に宗貞は。心残して奥へ入る。ヘ跡は手酌の一人酒。ア、さぞ今



頃は。しげれ松山。エイアえい氣味だぞ。コリヤ命を掻きむしるわエ。どれもう一杯。酒にうつろふ星の影。ヘこの盃中に鎭星の。きらめく影は寅の一點。今月今宵三百年に餘る。此櫻を伐つて護摩木となし。班足太子の塚の神を祀る時は。大願成就心の儘。この斧をもつてたちどころにどれ。ヘ彼處の石に斧の刄を。押當て〳〵磨ぎ立つる。合ヘ言はそう〳〵とう〳〵と。闇を照らせる金色は。玉散る許り物凄き。ヘ此斧の刄を試むるは。幸ひなる此箏と。突立上つて斧振りあげ。二つに切ればコハ如何に。内より出づる血汐の片袖。手に取上ぐれば懐中に。深く秘め置く勘合の。印綬はおのれと飛び去りて。鳴動するぞ不思議なる。ヘハテ心得ぬ。此片袖を手に取れば。我が懐中の勘合の印。櫻の梢に飛び去りしは。愈怪しき此櫻木。何にもせよと立ちかゝり。伐らんとすれば目もくらみ。覺えず後へたぢ〳〵〳〵。合ヘ暫し心も消え〴〵と。斧にすがりて茫然たり。ヘまぼろしか。深雪に積もる櫻影。實に旦には雲となり。夕にはまた雨となる。巫山の昔日のあたり。墨染が立ち姿。二上りヘ仇し仇なる名にこそ立つれ。花の莟のいとけなき。禿立から廓の里へ。根こじて植ゑて春毎に盛りの。色を山風が來ては寢よとのかねごとも。泊り定めぬ泡沫の。水に散りしく流れの身。ヘ關守は心付き。ヤア何處ともなく見馴れぬ女。この山蔭の關の扉へは。何時の間に何處から來たのだ。ヘアイ私やアノ撞木町から來やんした。ヘム、何しに來た。ヘ逢ひたさに。ヘソリヤ誰に。ヘ此方さんに。ヘ何俺に。そりや何故。ヘ色になつて下さんせ。ヘエ何がどうしたと。ヘサア恥かしい事ながら。私や見ぬ戀にあこがれて。雪をも厭はず遙々と。此處まで來た程に。何卒色よい返事をして下さんせ。ヘコリヤ有難いと云ひたいが。どうも合點がいかぬわエ。ヘアお前もマア疑ひ深い。そこが歌にも云へる。櫻咲く。櫻の山の櫻花。ヘ咲く櫻あり。散る櫻あり。ヘ思ひ〳〵の。人心ぢやわいナア。ヘさう聞けば有りさうな事。何にもせい。今日の下に二人とない容貌なら風俗なら。ろかう(路考)云はれぬ。撞木町の太夫職が。色で逢はうとは。コリヤ大きに仕合せが直つて來たわエ。そんなら愈々これからは。ヘ何時までも可愛がつて。秀鶴の千代八千代。諸白髪まで添ひ遂げて下さんせ。ヘそれは近頃忝けない。時に太夫さん。お前のお名はエ。ヘ墨染と云ひやんす。ヘな

に墨染。あの櫻の名も元は墨染。〽エ
エ。〽ハテえいお名でござりますの。
それはともあれ。遂に俺はマア女郎買
をしたことがないが。廓の懸引き。〽閨
身のしこなし。間夫狂ひ。實と。〽うそ
との。〽手管の諸分。〽裏茶屋這入り
の魂膽まで。〽そんなら此處で話そか
エ。ナケアシ行くも歸るも。忍ぶの亂れ。
限り知られぬ我が思ひ。〽月夜も闇も
この廓へ。忍頭巾で格子先。合〽行きつ
戻りつ立ち盡す。〽向へ照らす提灯の、
紋は菊蝶丁度よい。首尾と思へど遣手
が見る目。〽待つたぞや。〽オ、よう
來なんした。逢ひたかつたも目で知ら
せ。暖簾くゞりて入るあとを。〽殘り
多げに差覗き。ア扨て待たせるぞ/\
と。一人呟く程もなく。〽籬の内より
小手招き。江戸〽ふはと着せたる裲襠
の。〽裾に隠れて長廊下。毒蛇の口を

逼れし心地。ほつと一息つく鐘も。引け
四つ過ぎて床の上。〽ヤ。まだ此溫ま
りの冷めぬのは。先刻に歸つた客でも
よもやあるまいが。コリヤ外に出來た
わエ。何處の何奴か知らねども。お年
が若うて好い男で。お金もたんと御所
持なされた色男様と。しつぽりと御契
りなされたで御座りませうの。エ、。
腹が立つ。〽ホ、、ホコリヤ可笑しい。
覺えもない事言掛けて。口舌の種にさ
んすのかエ。〽エ憎らしいとふつつり
捻れば。〽アイタ/\/\ア痛いわい。
アこんな所に居ようより。ア歸りまし
よ/\。〽これいなア。○下り〽身は種々
の。合〽形姿。〽あしなかを。つま立てゝ
ちよこ/\。合ちよこ/\。合足を爪
立てゝ。〽ハアこれはしたり。煙草入
を忘れて置いた。ア儘よ何とせう。ア。
イヤ/\/\。うか/\として睫毛で

も讀まれてはオ恐い事/\。どれとは
思へども。アどうせうナア。イヤ/\
/\思ひ切つてどうでも歸らう。〽こ
れ。〽往なうやれ。我故郷へ歸ろやれ。
〽立舞ふうちに落ちたる袖。これはと
墨染取上げて。抱き締めつ身に添へつ、
床しき夫の形見やと。人目も恥ぢず泣
きければ。〽コレそなたは何を泣くの
ぢや。〽サアこれは。オ、それ/\。
此片袖は。他處の女中さんから書いて
よこさしやんした起請ぢやの。〽イヤ
そりや片袖だ。〽イエ/\起請でござ
んせう。〽オ、成程起請ぢや。〽エ、
お前はなア。○クドキ〽これこの様に初めか
ら起請誓紙を取交し。深いお方があり
ながら。隱して置いて又わしに。色で
逢ふとはようもよう。欺さんしたが憎
らしい。〽さうとも知らず慕ひ來て。
見れば果敢なや片袖の。血汐の文字は

亡き跡の。形見と思へばいとゞなほ。へコレ懐しい悲しいと。言葉に色は含めども。心の劒穂に現はれ。立ち寄る女をへはつたと睨めつけ。最前より此片袖に。心を懸くる怪しき女。様子を明せ。何と〳〵。へオヽ此片袖は夫の血汐。それのみならず。最前我が業通にて手に入れし。勘合の印を所持なすからは。様子があらう。本名あかせ。何とぢや。へ斯くなる上は何をか包まん。我こそは中納言家持が嫡孫。天下を望む大伴の黒主とは俺がことだわやい。へ扨こそ。へ我に恨みをなさんとする。そも先づ汝は何者ぢや。ツヾミ唄へなう。去りし恨みのあればこそ。そも人間の形うけて。女子とは見すれども。小町櫻の精魂なり。へ我は非情の櫻木も。人界の生を受くれば。七つの情も備はつて。五位之助安貞殿に。契りしことも情なや。へ不慮の矢疵に玉の緒も。絶ゆるばかりの折も折。御兄君の身に代り。敢なく此世を去り給ふ。



夫の形見の片袖に。引かれ寄る身はかげらふ姿。へ我が本性の櫻木を。邪慳の斧にかゝりしぞや。報いの程を思ひ知れと。在り合ふ櫻を呵責の笞。はつたと睨む有様を。へヤア小癪なと無二無二。へ斧取直して打掛れど。凡人ならぬ精靈の。業通自在の身も軽く。ひらりひら〳〵〳〵。合へ飛び交ふ姿は吹雪の櫻。霞がくれや朧夜の。水の月影

手にも取られず。会へ見えみ見えずみ又　かり。形は消えて櫻木に。春も斯くや　き。普く筆に書き殘す。現はれて。今ぞ則ち人界の。輪廻を離　と歸り花。雪を踏み分け踏みしだき。れ根に歸る。しるしを見よと云ふ聲ば　水にえれば墨染の。小町櫻と世にひろ

四天王大江山入　五

〔解題〕天明五年十一月桐座顏見世狂言「男山娘源氏」の第二番目として演ぜられたもの。內容上、上の卷は近松の「酒呑童子枕言葉」の四段目賴光四天王山入の飜案であり、下卷は近松の「嫗山姥」の後篇とも見られるやうな作意で、多田藏人時行と遊女との間に儲けた子を、その母が足柄山に分け入つて山姥となつて育て上げ、遂に見出されて賴光の家來となるといふ筋で、下卷の山姥の山めぐりから怪童丸の所作の條が眼目である。常磐津に多い山姥物中の最古の作であるから「古山姥」といはれ、又下卷の語り出しの句に因んで「遠近の山姥」ともいふ。作者は瀨川如皐。出演者は

同　造酒太夫	三絃　鳥羽屋里長
常磐津兼太夫	同　里桂
同　大和太夫	三絃　岸澤式佐
	同　總吉

で、前の「關屏」と同じ顏ぶれである。作曲者も同じであらう。役者及び役割は上卷——御幸介行成(市川門之助)牛飼淀八(尾上松助)中納言佐理息女初音姬(瀨川菊之丞)山がつ(市川團十郎)渡邊綱(中村十藏)卜部季武(市川

こま藏）碓氷貞光（坂田半五郎）頼光（坂東三津五郎）、下卷——山姥（瀨川菊之丞）怪童丸（市川門之助）柴刈杢右衞門實は足柄山神の化現（市川團十郎）。

今日行はれるのは多くは下卷であるが、こゝには上卷をも載せて置く。

■歌へ逢うて立つ名がナ立つ名の內か。あはでこがれて立つ名こそ。實立つ名のうちなれや。ア、さうぢやえ 合 ■へ歌も樵歌にうつり行く。又來る春に大江山。幾野の里の道遠く。まだ文も見ぬ谷傳ひ。淺い瀨川に洗濯の。衣の手先も白妙の。脛やあらはに見えわかぬ。血汐の文字のうす紅葉 へ見とるゝ人も世を牛の背にやどりたる旅衣。合 いづくをさして行く水の音を慕うて谷陰に。ふつと見そめし振袖に。水も花田の帶のはし。行き惱みたる風情なり 門之助へ行きなり牛を下り給ひ。山里は物寂しき事こそあれ世の憂きよりは谷陰に。若い女中の只一人。奥ゆかしい水仕の業。血汐にそみたる單の衣。洗ひそゝぐは何んと。様子ばしあつての事か。語り給へとありければ 菊之丞へ成程御尤ものお尋ね。いづれへお越し遊ばすお方かは存じませぬが。鄙の住居のあらましを。そんならお話し申しませう ■へしばしは宿り給はれと。愛想こぼるゝ蔦かづら。竹にかしづく如くなり。さすがは岩木にあらざれば。つい折れ易き男の癖 門へそんならお世話になりませうか 菊へゆるりとお話しなされませい ■カヽリへいふも他生の緣と緣引。假のやどりも スヱ假初の衣を盥に取收め。所態揃ふしとやかさ。賤にはあらぬ取りなりに。心引かるゝ片手綱。牛をかたへに繋ぎ捨て。草鞋とく〳〵內へ入り 門へさてから見晴らした雪の景色は。どうも言はれぬわいなう。とても事に休息が致し度い。近頃御無心ながら枕をお貸しなされぬか 菊へそれは何よりお安い御用。深山颪でお寒うござりませう。お裾へ何ぞ置きませうか ■詞へ何をがなもてなし振りの煙草盆。心は深き埋火の。木のはに包む眞實は。奥底もなき賤が家の。心ばかりぞやさしけれ ■へかゝる所へ向ふより。道に後れし牛飼は。谷の足跡目印に。今日の旦那の行先を尋ねてこゝへ雪道の。吹雪を防ぐ酒機嫌。醉うたとさ〳〵。天も花に醉うたとさ。右も合 左も合 人の山。

道は二筋三つ四つ ギンもみち。可愛とたれもいひ綿を。も一ツ返して重扇(かさねあふぎ)に抱稍 雪に花咲く 詞黒牡丹カヽリ繋ぎ捨てしは怪しやと引 ▲へ竹笠てらしてよく見れば。ハテ心得ぬエイついぞ見なれぬ谷の一つ家。たしか女と男の姿。シタリ。ハア、。聞えた〳〵そんならこゝがエ、、地獄谷だな。何でも様子紀さんと驅出でしが。イヤ待て暫し我が心へそれと知つても白雪のとけた姿の亂れ足。よろ〳〵歩みて来りけり

▲松助へエ、申しちとお頼み申しませう 菊へアイ〳〵何ぞ御用でござんすかえ。こちへお這入りなされませい ▲松へアイひえものでござります。ちつとお邪魔になりませうか 門へヤさういふ聲は牛飼殿。やれ〳〵待兼た〳〵 ▲松へなに待兼たとは旦那。お前どうもすまないによ。おれが大事のこの牛に乗つてめつた無上に先へ来て。おれをばあとへ捨小舟。ゆられて〳〵北山時雨(しぐれ)とよろめきかゝれば 門へア、これ〳〵あぶないい〳〵 ▲松へ何あぶない。あぶないとはお前の事さ。此山中の一つ家に。美しい娘と差向ひにたつた二人。是があぶなくなつてどうする物だ 菊へアモシ〳〵めつたな事をいうて下さんすな。アノ私(わたし)には。▲松へおつと皆まで言ふまい許嫁(いひなづけ)でも有るといふ事か 菊へサアそれは▶文七へいふにいはれぬもつれ髪結びし縁も名ばかりに 合まだ解きそめぬ雪の梅。匂ひを包む袖の香の。カン振の袂も末とめて。咲いて亂れて散る頃迄も。契り盡きせぬ仲なりと。逢ふ事ありや妹背鳥 合 むごや辛くも避けられて。此身一つは何としよと。心にねたむ悋氣の角。折もよし野のかへり花▲松へハア、いはれを聞けば尤もだなう旦那 門へなる程〳〵。シテ其男は許嫁ばかりで一度も逢はぬ其内に ▲松へ邪魔な嵐や雪めが出たか 菊へサア ▲長兵へその雲井より捨てられて。上かゝる山家に。やもめ住み。たゞ諦めて浮世をかこち。誰を憎み誰に恨みをへいふ事の晴るゝ ギン間もなき胸の内。あはれとも不便(ふびん)とも。汲分けてたべお二人と。悔み嘆くぞ道理なり。門へ行成そばへ寄添ひて。されぼこそ。始めより初音の噂と悟れども。それとは色に出されず。ハテはかない身の上であつたなう ▲松へ申し旦那。今の話を聞いてさつぱりと酔がさめました。もう此牛にお暇を下されませ。さらば牛はもうお暇申さうか。■カヽリへ繋ぎし牛を引寄せて引手綱しつかと我が帯へくゝりつけて笠と鞭 ●へサア。サア〳〵〳〵〳〵おらゝが。色のおくろ殿。連れて歸るが 詞嬉し

いか。とかく御亭様見るとはや。エイ涎は二尺八寸五分 ■へ五尺身體が三尺とけたなう。跡の二尺は下紐の。解けて逢ふ夜と見て取つた。◉ノルへ定めてこつてり極るであろ。我等もちゝ。ち。ちゝち。ちゝちくりあやかり度いと抱付きかゝれば ▲へにげのくを ■へ無理に捕へて鬚面を ◉へ寄すれば ▲へ拂ひ合■へ振切るはづみに竹緣を。踏みちがへて仰向けに。どうど轉べば荒けなく。牛は驚き驅出す引。綱に引かれてせん方なく山路を指して 三重歸りける 門イロへ跡見送りて行成は。扨はそなたは我が許嫁せし初音の姫殿 菊へそんならあなたが御幸之介様か。アおなつかしうござりましたわいナア ■へ二人飛立つ嬉しさは菊と紅葉の。色くらべ。合 連理と結ぶ景色なり 合 門へ最前それと知つたれど。明かさば互の身の難儀 菊へさう

とは知らで此年月こがれ／＼し許嫁も 門へ皇子の非道に支へられ。もう此世では逢ふ事も 菊へならぬと思ひ諦めしに 門へ不思議にめぐり逢うたるは 菊へ神や佛のお力か 門へ先の世からの約束か 菊へ思へば 門へ盡きせぬ 菊へ嬉しい 門へ緣で ■へあつたよなう ▶二上りへ互に交す袖ひちて合。上むすびし井出の下紐も。神やとくらん女夫中。庵の內を室の梅。冬にも春やたちぬらん カヽリへ初音は流石面はゆく引へ御幸も消ゆる思ひとは心に知れど白雪の。ハシルとけて逢ふ夜の新枕。オトシ重なる枕屏風山引立て庵へ入りにけり。■へ懸河渺々として。巖嶺々たり。山また山何れの工か青巖の形を削り成せるとかや引。水また水誰が家にか碧潭の。色を染出す世は樣々の樂みや引 樵歌牧笛引きかへて。げに一睡の肱枕千歲の夢や結ぶらん。團十郎へ山

賤ふつと目を覺し。常さへ大儀な此山坂。殊に此大雪。晴間待つ間についろ／＼と一と寐入やつてのけた。ドリヤ。目ざましに一服のむべいカ ■へ取出す腰の ◉へ煙草入 合ノルへ短き煙管のうさ晴し。ほたる火うちの 地友もなく伐木ならでとう／＼と谷の谺と響くなり ■ハシルへさなきだに暮るゝを急ぐ。み山邊の。雲に心をかけそゆる月の都を立出でていづくに。宿をかりばらや。腰に付けたる法螺の貝合 赤木の珠數のいらだかに 地百八煩惱雲つきて。朝日も峯に。かけ出での 合行者と人は道芝の露分。衣すゞかけに姿をやつす御大將。供に從ふ人々も。雪に迷ひて。立休らひへ賴光四方を御覽じ給ひ。イロいつとう空しき谷のこえ。道を問ふべき人家もなく 長州書叫ぶ猿の山彥はげに物すごき 詞深山ぢやナア ■カヽリへ松の響や谷

の水引。オクリ音をしるべにやう〳〵と姫が室にぞ着きにけり〳四人の人々言葉を揃へ。いかに杣人聞傳へたる大江山。千丈が嶽と聞えたる。姫が室はいづくなるぞ。詳しく教へてたもらぬか詞〳恐ろしき所のお尋ねかな。其千丈が嶽と申すはあれ〳〵。あの峯。これよりは乾に當つて●〳雪に埋れあらはには。見えわかねども御覧ぜよ木深く茂る高根あり白き雲かと見えたる恐ろしき鬼が城より流れて落つる瀧の水。血汐に見ゆる時しもあり。其峯のあなたこそ鬼が窟と聞くばかり人倫絶ゆれば詞誰あつて見し人とても候はずナウ。客僧達とぞ申しける。〳オ、いしくも翁教へたりとてもの事に案内頼むとありければ。カ、リ〳いざさせ給へとつく枝の。不案ながらも人々は。翁が後をしるべにて谷よ峯よと入り給ふ。

下の巻

〳遠近のたつきも知らぬ山中に。覺束なくもおほけなき。浮世に拗ねし露の身の。やどりを。合 思ひ白玉か。何ぞと問はん人もあり引。カン峯の櫻も冬枯れて。木々に花咲く老ならで。苦は色かへぬ若緑引。つれなき松の亂れ髪解けぬも。よしや足びきの。山姥とこそ人は云へ。合●〳我は苦しき。■〳山巡りして。浮雲の引。タ、キ行方定めぬ道芝や。枯木の枝折たど〳〵と。蔦のかつらの。絲わけて。錦織りかくむら紅葉。袖をかざせし越し方の。思へば昔戀しやと。そゞろ涙にくれ居たる。●〳ア、悔むまい〳〵。とても此身は雲水に。任せる中の樂しみは。夫の形見の怪童丸。この怪童は何して居やる。道草も程がある。怪童丸怪童丸やい。

■〳雪やこん〳〵。霰やこん〳〵。足の冷たいに草履買うてたもれ。オ、寒むこ寒む。猿のべゞかつて着しよ。合爰までござれ。甘酒進じよ。爰へ〳〵と招く手に。合 長地 根笹茅原くゞりにくい道を。くゞり〳〵くゞつて。松の小陰で隠れんぼ。母様うま〳〵下されと。手そゞふりして機嫌顔。●菊之丞〳オ、ようおとなしう遊んでおぢやつたなう。▶門之助〳コレ母様。おとなしう遊んだ程に。うま〳〵貰うて下されや。●菊〳オ、遣りませう〳〵。今日は取分け。なほ大人しかつた。其大人しい褒美に。此間からあつかのべゞ織つて着せうと思うてな。この母が山路巡らぬ其隙には。五百機立つる窓の内。二上り〳枝の鶯絲繰り。合 綿繰り織りて着せたる母のほんぞ子。合里へ下れば里の土産は。合でん〳〵太鼓にふり鼓。合うつや空蝉

の唐衣。合千聲萬聲の砧に合はす鼓の拍子面白や。我が子愛する母親の。共に浮かるゝ一節に。三下りへ鄙には住めど鶯の。合初音を。合そよと聞く時は。窓にうつかり。合うづらは鳴かうと思ひもつかず。合手活の菊と見る時は。床の牡丹は。合折れよとまゝよ。合仕業手業のうたてやつらや。霜に疾う出て時雨に歸る。袖の落葉のばら〳〵と。掻寄せ〳〵。澤の丸木橋を渡ろとすれば。踏返されて袂を濡らす。濡れても樣故君故と。思へば痛うも。◉へ冷うもない。■カヽリへ山姥親子はいつとなく。來るとも白髮の杢右衛門。▲へオ、お袋。爰に居られたか。小僧も機嫌がよいさうな。▶門へオ、爺さんか待つて居た。いつもの樣に相撲事して遊ばうか。四十四へオ、遊ばう〳〵。時にお袋。いつぞは聞くべい聞くべいと思つて居たが。そなたが身の上。親子連でこの深山へ引籠つて居るには。何ぞ樣子があらう。何と咄しては聞かせまいか。◉へ是は思ひも寄らぬお尋ね。わしら二人が身の上は。お咄し申すも面目ない。▲へハテそこが木の實を喰ひ合ふ中ぢやないか。隱さずとも咄さつせい。咄さつせい。◉へそんなら何もかも打明けて咄しませうかいなう。へオ、よからうよからう。恥かしながら私も。元は都九條の里の。流れの身でござんしたわいなう。▲へハテなう。◉へ又この怪童が父御といふは。北面の武士坂田の藏人時行殿というて。何が互に若氣の花盛り。夜毎々々の通ひ路の。嬉しい事は口には云はれず心では。思ふありたけ枕に云はせ。變るまいぞや變らじと。眞實惚れた。オ、、アいやもう此跡はよしにしませうわいの。▲へハテ是からが肝腎の所。昔の色事。故事來歷。廓の咄が聞きたい〳〵。▶へコレ爺さん。廓とは何の事だ。▲へ廓とは。オ、何さ。オ、それ〳〵。强い軍の事だ。コレお袋。小僧が合點の行く樣に。客と女郎を軍に譬へて。◉へそんならどうでも。▶へコレ母さま。早く咄しない〳〵な。▲へサア〳〵仕方咄で所望だ〳〵。■へ馴れし廓の憂き勤め。紋日の張に物日の意氣地。▲▶へ軒の燈籠や二度の月。菊の節句の伊達軍。客に後を見せまじと。嘘を誠に手管の手練。間夫を夜陣に忍ばせて。寢卷の鎧着なしつゝ。▶へ二世を。合三世と亂れ合ひ。合長唄其夜は別れて矢文に日文。又の御見に夜軍せんと。障子屛風を。合ギン小楯にかまへ。今や〳〵と待ちかけたり。◉ノルへこつちもそれと詞油斷なく。見立てぬ智略と黑皮縅。頭巾目深に。合身

を固め。●ハルヘ通ひ馴れたる朱雀野の。合露踏みしだく駿足は。二重鼻緒の前わたり。口へ大門口を忍び入り。合圖の咳嗽二つ三つ。●へエヘン。是來たぞや。來たわいなう。と云うても何の答へなく。▲江戸へ拗ねて見せても 詞逢ひたさの。胸にはあれどそ知らぬ顔。▲カヽりへ流石に附きも無き所へ。禿が機轉の小盃。●へヤ 何ぢや盃か。オヽ出來たく。コレ必ず花魁の眞似をしやんなよ。此頃聞けばどこやらの人は。狂歌師とやら連歌師とやらと。深草の少將ぢやげなう。其男をば上の句にして。我等をば下の句で。ぐつと突出さうとは。エ置いてくれ。エ置いてくれいやい。コレ知るまいと思ふか。この中も仲の町でお樂しみ。へ粋な不粋な初會から。帶解く客の醉醒に。などとエヽ有難いのく。さぞ其男が待つてゞあらう。サアく早うお出でく。さら びて逢ふ坂の。關よりつらい世の習ひ。ば我等は。歸りませうコレ。待たしや ▲引く手に靡く仇し野の。合草の葉末んせ。▶ハヤメへそりや何いはんす餘所ほ の露消えて。今は野澤の一つ水。合す



かに。待たるゝ人があらうとはコレ。ど まぬ心の中にも晢し。澄むはゆかりのの顔で憎てロ。逢ひ度いといふ眞實は。月の影。●ハシルへお顔を見れば氣にかゝお前は覺えて居さんせう。 長地人目忍 り。人の謗も仇口も。主の噂が嬉しう

て。忘るゝ暇はないわいな。是程思うて居るものを。愛想づかしの捨言葉は。さりとは聞えぬ男氣と。ずんと立つて胸づくし。ヘ取る手もたゆく身も輕く。■ヘ拂ふ袂に取縋るを。ヘ怪童見るより泣出だす。●ヘ母は駈寄り。詞アコレ〱。泣くな〱。あれは仕方咄ぢやわいなう。サア〱是からは機嫌直して。我が身の好きの馬事して遊ばうなう。▲ヘそんなら爺さんも立つて馬事をするか。▲ヘオヽおれも相手になつて遊ばう〱。●ヘサア〱母が囃して遣りませう。サアよいかや。殿様お馬。●詞ヘ行列揃へて。はい〱〱。■ヘ年より智慧も竹馬は。合斧に手綱の凛々しげに。▲ヘ山の主おれひとり。お馬が參る。▲ヘ先のけ〱先退けろ。●ヘ殿様いくつ。▲ヘ十三七つ。●ヘお供はいくつ。▲ヘ八十八つ。●ヘほんにそりや若いな。合

■ヘ振出す白髪の大鳥毛。詞さし出す腕に皺も寄つたり。年も寄つたり。八人前のお供先。合百里二百里股にかけて。乘りかけ馬の膝栗毛。合夜さの泊りは丹波の在所。山家踊りは。▲詞ヘ何と云うた。●ヘサアそれは。■二上りヘおらが在所はなア。奥山の爺打ちの。でんぐり〱。栗の木の合木の根を枕に合ござれ抱いて轉び寢。そこな小女郎は戀する山家の品物で。帶解いてござれ。抱いてころび寢。■ヘ在所祭に伊達染手染。浮名を流す市川。合瀬川に住み居る鯉の瀧のぼり。花菱矢筈鶴の丸。好いたお方へ繋ぎ馬。乘せて來る夜のあるならば。いとしとばかりだき柏。合文の數々四つ紅葉。いつか便りを菊蝶の。羽がひ重ぬる色は見事え。▲ヘア、疲勞れたくたびれた。此様に他人のおれさへ可愛ゆがるこの小僧。お袋はさ

ぞ此子が可愛からうなう。●ヘオヽ可愛うなうて何とせう。ほんに此子が顔を見るに付けても。ハシルヘ過行き給ひし夫の事。武門の家にありながら。柔弱非力の生れつき。一生是を無念の最期。其時お腹に宿りし子を。長地何卒勇士に育て上げ。名將見立て奉公させ。ヘ一天下に名を揚げさせよと。●ヘ母が身持を大事にて。詞ヘ育て上げよと夫の遺言。それより直ぐに身を隠し。足柄山に詞分け入つて。●ヘ山神に誓ひをかけ。ヘ夫の思ひを立てんものと。ウレヒヘ心をつけて育てしを。數へて見ればはや七年。ヘ笑はゞ笑へ此子が爲。■ヘよしあし曳きの山住ひ。髪はおどろを戴きて。合我が身も共に力業。或時は山がつの。樵路に通ふ花の陰。合休む重荷に。合肩を貸し。月諸共に山を出で。里迄送る折もあり。また或時は山巡り。合

法性の峯にのぼりては。上求菩提の道に出で引。◉ヘ無明谷深く下りては。下コハ◘ヘ下化衆生を表して。金輪際に至れり。たま〳〵逢ひし賤の女は。◉ヘ只鬼女とのみ恐るれど。◘上ヘ人を助くる事をのみ。これ山姥が。◉ヘ業なれや。◘三下リヘ四季折々の戯むれは。合春は梢に咲初めし。花を尋ねて山巡り。秋はさやけき月に浮かれて。夜すがら明かす山巡り。ナホルヘ有爲轉變の樂しみも。邪正一如と見る時は。◉ヘ柳は綠。ヘ花は紅の。◉ヘ春には會へど亡き夫に。又逢ふ事もなく涙。聲をあげろの山姥が。めぐる因果の物語。哀れといふもおろかなり。▲ヘオ、母が丹精籠き入つた。其貞女の一心にて。育て上げたる悴が勇力。力の程が見たい〳〵。▲ヘオ、わしが力を見せよう程に。相手になつて下されや。▲ヘオ、相手になつてやらう。力だめしに何をがな。オ、それよ。◘ヘひるまぬ心に身繕ひ。片方に生ふる老木の松。ぐつと引抜きにつこと笑ひ。オトシ仁王立ちに立つたるは。人も恐るゝばかりなり。▲ヘサア來い怪童。▶ヘ合點だ。◘ヘ勝負々々と打ちかゝるを。すかさぬ剛氣の力瘤。幹より腕の節くれて。しつかと摑む老木と若木。いづれ劣らぬ金剛力。えいや〳〵と捻合ひしが。中よりふつつとねぢ切つて。左右ヘ別れて立つたりしは。目覺ましかりける次第なり。◘ヘオ、出かした〳〵。その勇力を見る上は。頼光公へ随身させ。父藏人が家名を嗣ぎ。坂田の金時と名乘らせん。喜べ〳〵。◉ヘア、有難や忝なや。頼光公へ随身なせば武門の道も立ち。草葉の陰の父上も。さぞや悦びましまさん。ア。返す〴〵も有難やナア。母が願ひも叶ふ上は。◉ヘ暇申してかへる山の。◘ヘ峯も梢も白妙は。長地源氏の榮え盡きしなき。守る神垣は妄執の雲の。下コル塵積つて山姥となれり。鬼女が有樣見るや〳〵と。カン峯に駈けり。谷に響きて。今迄爰にあるよと見しが。山又山に山巡り。山又山に山巡りして。ヘ行方も知れずなりにけり。

〔解題〕天明七年二月一日兩國の旗亭萬屋八郎兵衛方で初代文字太夫の追善と、二代目文字太夫襲名披露の催しがあつた時に始めて演奏された曲で、その顔ぶれは

同　造酒太夫　　三絃　鳥羽屋里長
常磐津文字太夫　　　　岸澤式佐
同　大和太夫

であつた。常磐津の三番叟の中では最も古いもので、改名・襲名等の目出たい披露の催しにはよく出される。

淨瑠璃おゝさへおさへ悦びありや〳〵我が悦びを。此所より外へはやらじと思ふ。ハア、、狂言罷り出でたる者は。八幡大盡でス。太郎冠者あるか。〽ハアア御前に。〽念なう早かつた〽太郎冠者と召さるゝ故。隨分物に罷立つて候。〽太郎冠者に尋ねたき事のあり。身は福人と見え候か。又德人と見え候か〽ドリヤ〳〵ハア、賴うだる方は。天晴れ福人と見受け候。〽ヤレ〳〵目利かな〳〵。エ身どもこそ福者にてあれ。其中にも。子福者にて子供十二人持ち候。其上六人は瑠璃の様なる女子にて。下六人は玉の様なる男の子にて候。其十二人の子供等を。車座にぐるりつと直し置き。一度に呼ぶ様に名を附けて候。〽げに〳〵目出度き御事かなサテ其御名は何と御附け候ぞ〽まつ・おつ・とり・ちがひ・およ・けさよ・たつ松・ゐる松・たんだら・いなこにかいつくひつゝく火うち袋ぶら〳〵と附けてあれ〽扱々珍しき御名にて候〽サレバこの十二人の子供等が四季の遊びの面白さ。〽それは目出たき御樂しみ其若子たちの御遊び爰にてまなび御見せ候へ〽中々易き御事。先づ太郎冠者には。元の座敷へおも〳〵と直り候へ〽某座敷へ直らうずる事賴うだる方の御學びより易う候。平に御學び候へ〽平に直り候へ〽あゝらやうがましやとう〳〵御始め候へ〽心得申して候〽佐保姫霞のどかに明けそめて。今朝しろ〴〵と富士の顏。映る鏡の影添へて松と竹との二柱。賑ふ春の稚ごと門に遣羽子すめる代に風吹くな猶吹くな。金の團扇で追羽根せうとおしやる。突くや。手毬の數へ唄。

一つと。いひて如月の種蒔く小田の神詣り。振分け髪のいたいけに緋無垢は椿白無垢は。梅の蕾の風車くんるくる〳〵廻る日の。はや雛合せ雛遊び。妹脊変らぬもろ白髪戴く軒に菖蒲葺く。サハリ幟兜の勇しく。菖蒲打合ふ形姿の。猛きは猶も潔く隙行く駒の竹の尾に鞭をくれなゐ手綱かい繰りりん〳〵

〳〵すゞみに磯の蛍狩柳の水の。カヽリ キコリ影急ぐ 合 手に手を取りて鵲鳥の。逢ふ瀬を渡す天の川笹に一夜の散らし書。さら〳〵さゝら團扇太鼓の拍子よく皆撫子の手を揃へ優しき聲の張つよく 二上り へせりやひ申そはりやひ申そせり合ひ張合ひ石投げいやよこちの踊はアヽ花踊惚れたらござれ ギン〳〵 惚れ

てほの字の文書き初めて似合ぬとても縁ちやもの。その着綿の菊重ね香る袖垣仲もよくほたけ祭のへとり〳〵に花を飾りし袖襠匂ふ。合 産神詣黒髪に置く白雪の降れや積れや積れや降れや 合 招くや年の貢物。絶えず変らぬ童の竹馬遊びの千代かけて千代に八千代にさゞれ石の動かぬ御代こそ目出たけれ。

戻駕色相肩　七

〔解題〕通稱「戻り駕」。常磐津名曲の一。天明八年十一月中村座の顔見世狂言「唐相撲花江戸方」の第一番目四立目として出したもの。作者は豐後節淨るり作者として名手といはれた初代櫻田治助、作曲者は鳥羽屋里長、振付は中村仲藏から特に西川扇藏に頼んで當座の振付山口七十郎と相談の上で付けたといふ。

役割は浪花の次郎作實は石川五右衛門中村仲藏、東の與四郎實は眞柴久吉四世松本幸四郎、禿たより松本米三郎。島原からの戻り駕に禿を乗せて紫野の邊で一休みして、互に浪花と江戸との自慢から三都の廓話につれての踊の間に次郎作の懐から連判狀、與四郎の懐から千鳥の香爐が取出されて見現しになる筋で、芝居が太閤記の世界で石川五右衛門が出る仕組だからかういふ趣向になつてゐるのだが、眼目は廓話の所作事である。仲藏が三年振りで大阪から歸つて幸四郎と顔を合せたので、「新玉の年の三歳を待ちわびて、待たるゝ顔に待つ顔を合

せ鏡云々」といふ當り文句を冒頭としてある。
出演の常磐津連中は左の通り。
常磐津文字太夫　三絃鳥羽屋里長
同　造酒太夫　同　里桂
同　兼太夫　岸澤式佐
「戻り駕」の原據は元祿時代の名劇「けいせい淺間嶽」（元祿十一年正月）の上卷で、小笹巴之丞と花岡和田右衛門との兩人が東山の淺間權現開帳へ參詣戾の乳守の禿を駕籠に乘せて行く場面であると思ふ。江戸でこの淺間嶽が度々演じられたので、この場面も馴染が深かつた結果、それが飜案されたものであらう。尤も寛延元年中村座の春狂言で海老藏の景清と長十郎の重忠とが駕籠舁にやつしての仕草があり、尙それよりも早く延享元年十一月にも市村座で尾上菊五


戻り駕

郎の常磐御前を宗十郎の宗兵衛と宇左衛門の宇兵衛とが駕籠に乘せて來る趣向もあつたといふから（渥美氏の舞踊劇集による）、淺間嶽以外にも既にその趣向は江戸で用ひられて居た事がわかる。

■へ新玉の。歳の三歳を。待侘びて　長地　待たるゝ顔に。待つ顔を。合せ鏡の蒲團さへ。色でもてるか四つ手駕　合■二上り　へ花が人呼ぶ浮氣の花が月に。浮かるゝ浮氣な月に。うきに浮かるゝ　合　ヤレ月花に　●へをれこみぢや　▲▶へ合點ぢや　●へかた山ぢや　▲▶へ合點ぢや　■へ下戸は酒手で萩の花　●へ吞込んだ　■へ様はへなるほこちや色上戸紅葉も。風にやつしごと拍子とり　合〳〵來りけり　幸四郎へへエン罷り出でたる者は東の與四郎と申す駕舁にて候　仲蔵へへエン罷り出でたる者は難波の次郎作と申すえらい駕舁にて候　幸へアこれ〳〵何ぼおぬしが難波々々と言つても。江戸の様な紫はあるまいが　仲へイヤ何ぼこなんがさう言はんしても江戸に又大阪の様な揚屋はござんすまい　幸へア仲の町の燈籠が見せたいわい　仲へそんならまた住吉天滿高津の祭。あの様な俄はござんすまい　幸へ事もおろかや御殿山に飛鳥山上野の様な櫻があるか　仲へア傳法院の鶴が見せたいわい　幸へそんなら又江戸の様な結構なお屋敷があるか　仲へサアそれは。　幸へしやつとも言つて見ろ　仲へヤこいつはあやまつた　幸へちつとさうもござるまい。ハア、、、何の役にも立たぬ事をいかい痴けな。時に棒組あの山々の景色を見やれ　仲へどれ〳〵。成程アよい景色だ。あれを眺めて。さらば一服いたさうか　●へ鷹は鐘山に生じて。雄心自ら局すとや。（現行正本此句なし）■へ振りさけ見れば雪ならで。おのが羽こぼす白鳩や雲か。　合　煙草の薄煙。輪になる梅に鶯も。まださゝ啼きの。すり火うち。石より堅い棒組に角の。取れたる息杖は五枚銀杏に三つ銀杏。よい合肩の尻駕　幸へ何と次郎作。おいらが乘せて來た振袖は何であらうな　仲へあれは島原の傾城小車太夫の禿さ　幸へそんなら爰へ呼出して。島原の廓の咄を聞かうぢやあるまいか　仲へ是はよからうサア〳〵姉様こゝへお出で〳〵　●へ谷の戸明けて鶯のまだ里馴れぬ風情にて面はゆげなるその素振　米三郎へ申し爰はマア何といふ所でござんすえ　へ爰は紫野といふ所さ。時に姉さん。なんと島原の廓の咄を話して聞かせる氣はないか

ヘサアそれはヘコレその代りにおれも江戸の吉原の色事を後で話して聞かせるわコレ棒組。おぬしも新町の咄をする氣はないかどうだ／＼ ヘさう言へばおれも又新町では花をやつたものよ此駕舁に引きかへて。紋日物日の扮裝は腰巻羽織一つ前よしや男の丹前姿揺りかけ／＼寛濶出立ア見せたいわい ヘさうであらうよとてもの事に共咄が聞きたいわいな／＼ ヘ成程話して聞かさうが肝腎の大小がない ヘおつとそこらは合點と息杖取つて差出せば ヘ是も新し風俗とその儘取つて摑み指し ●ヘまた古へに ■ヘ立返り 合ヘ振つて振出す花吹雪 合振出す／＼花の雪よの 合 腰巻羽織。雲の帯 ▲ヘ上の町 ●ヘどつこい 合▲ヘ下の町 ●ヘどつこい 合■ヘ中の／＼中の町三下りヘ様にこがれて柴舟の。薫りゆかしき一つ前。どつと褒めて。通した。さすが東の男山 ●ヘコイヨ ▲ヘ ネイ ■ヘおらは元來遣はれ者よ今度この度召された。合氣轉利かせて智慧の環出して。やるぞ白紙。文箱地藏木調子ヘ衆生濟度に色がある 合晩にござらば窓からござれ。窓は。廣かれ身は細かれ



名古屋版「戻り駕」表紙

忍び來る夜のその風俗は。戀の奴の。通り者 ヘサア是からは相方の女郎がなければ話されぬ ヘコレ此子が禿でなくばなア ヘそんなら私が禿故その相手にはならぬかえオ、しんき ●ヘ禿々と澤山さうに。言うておくれな譯見習うて

やがて悪所を島原の。合ませより染む
る藍の花。合外でなぶられ。合内では
せかれほんに身も世もあられ降る雨の
柳の出口まで幾度通ふ小夜千鳥啼くが
しよさいか味氣なや(上終り)
(下)へやんや／＼どうも言へぬ。是でマ
ア京大阪の咄はすんだと言ふものだ。
サア／＼是から江戸の吉原咄を與四郎
頼むは／＼へ先づおれが色事といふは。
江戸町でなし二丁目でなし角町 京町
小見世でなし河岸でなし へそしてどこ
ぢや へ恥しながら河豚汁 へハア、鐵砲
かへあやまるの へサア其咄が聞きたい
／＼へ問はれて言ふも恥しいが廣袖で
あらうが細帯であらうが逢ひ度いとい
ふ日にやアやみくもよ。雷門にも柳橋
にも猪牙も四つ手も多けれど奴を思へ
ば日和下駄で帶を締め直してずつと駈
出すしやうがにやア ●へ地廻り節に聲

しぼるつい手拭の頰冠り ▲へ月待ち日
待ち薹まちや田町にござる法印さんの
守りお札や占やさんよくあひ性も木性
と火性。吸付け煙草の火皿さへ。鐵砲
店の氣散じは。合短き夜半をきり／＼
す枕も床もうは草履。浮氣同士の仇比
べ合廻らば廻れ女氣の。口舌せぬ日も
茶碗酒コハ。馬鹿らしいぢやないかい
な へア、成程きついものだ。イヤ又新
町の揚屋といふは別なものよ。太夫天
神引き舟圍ひ。限りの太鼓を打つ迄は
それは／＼賑やかな事なんと話して聞
かさうか へこりや面白からう。サア／＼
所望ぢや／＼へ先づ揚屋の數は十二軒
十二因縁を表したり。九品の淨土の。
九軒町 合瓢簞町の名に浮かむ。合彌陀
の西口つき節の。唄三味線の。音樂に。
合虛空に花を降らせつゝ。歌舞の菩薩
の。合揚屋入り●ナゲへ戀の山口。名も高

島屋。ハシル色の世界に仕吉や 合通ひ馴
れたる新町の井筒にかけし大和歌。ゆ
かりの橋の兼好が。酒に底なき盃も直
ぐには。受けぬ横町の。童子と聞けば
茨木や。手もとみやことねぢじやうご
アレ。曉の明星が。西の扇屋東にも
ちらり／＼ちらり／＼と千鳥足。生野
暮薄鈍情無し手なしの癖として悪洒落
いうたり大通仕打ちはあるまいか。合
どういふ理窟か 合氣が知れぬ ●へト太
夫が心を惹いたれば。そこで彼奴めも
むつとしてコレ。此胸づくしを此様に。
取つた方から涙ぐみそりやマア。何の
事ぢやいな。私やお前に打込んで。身
を盡したる難波潟。梅より粹な殿振に。
だまされて咲く。合 室の闇蕾も屛風の
冬籠り抱いてねじめの三味線もいとし
男をよそへ唄合 カンへやがて東へ。行く
身ぢやものと。袂に露を置き炬燵。浦

園の内の悪洒落がこの。紫の江戸自慢。い〔三下り〕口へ錦織るてふ木々の色濡れて〔合〕可愛らし。可愛らしさとゆふ日映え口へ
〔ヘ十メ〕抓らしやんしよが。叩かんしよが寢る夜の色見草。〔カン〕時雨に染むるきたよりは物馴れ事馴れて煙管を時の盃
ても邪慳な氣に惚れた。女子心の。一ぬくゝは。可愛らしいぢや〔合〕ないかいと二人が中へ差出せば互にわれからわ
筋はコレ。この癪と手を取りて。引寄せナア可愛らしへ水に住むてふ浮寢鳥様れからと早くも心解け合うて。〔上〕目元
入るゝ懐のへ内より取出す千鳥の香と寢る夜のぬくめ鳥別れもをしの思ひにふくむ笑の眉。開くや花の顔見世は
爐こなたに出づる連判状それをどつこ羽は可愛らしいぢや。ないかいなア、頼もしかりける次第なり。

其扇屋浮名戀風　八

〔解題〕通稱「夕霧」。近松の「夕霧阿波鳴渡」の扇屋の段を豐後節に轉用して語つたものとしては、既に宮古路豐後掾の正本「夕霧阿波鳴渡」があり、而して初代文字太夫は同一の外題で寶曆五年九月市村座で中村粂太郎の夕ぎり、市村羽左衞門の伊左衞門の地を語つて居るが、その曲は傳はらずして、常磐津の「夕霧」としては本曲が行はれて居る。これは寬政二年六月市村座で、夏芝居として、「四季風流彩色扇」と題して、春「いろは緣起」の堤の段鶯の段、夏「染分手綱」の涼みの段詮議の段、秋「平治合戰」の社の段踊の段の次に、冬の出し物として演じられた。夕ぎりは中山富三郎・伊左衞門は澤村宗十郎、喜左衞門は中島富右衞門、女房は瀨川增吉であつた。この狂言は富三郎、宗十郎以外は皆中通りの役者で、安芝居であつたが、珍しい仕組で大當りで盆過ぎ迄續けられた。出演の常盤津連中は、粂太夫、須磨太夫、三絃は岸澤式佐、鳥羽屋里夕等であつた。

へ戀風や。その。扇屋の金山と。名に立ちのぼる夕霧や秋の末よりぶら〳〵と寢たり。起きたり面瘦せて。へ藥も日數ふる雪の。重らぬ先の養生と。勤めも心の儘なれど深きよしみの吉田屋は。足元かろき道中の。暖簾くゞるも力なく。へア今日は目出度うござんする。アヽしんどうやと腰打ちかけ。我が身を横に投入れの水仙淸き姿なり。へ喜左衞門立出で。是は〳〵太夫樣。御氣色もよいかして聞いた程瘦せもなされず。お顏持もずんとよい。先づ今日は佳例の餠搗。格子へお出でなされてより。去年のけふ迄一度もおはづれなされぬに。今年の餠搗ばつかり。伊左衞門樣は流浪遊ばす。お前は御病氣佳例をはづすこの喜左衞門が頭痛八百。ちよつとなりと呼びましたいと願ふ折柄。けふのお客は四國のお侍。頭巾で頭は見えねども。角前髪のお小姓らしいが。その容貌のよさおぼこさ。道頓堀の若衆形女形ひつさらへても。けもない事〳〵。四國西國迄隱れのない夕霧といふ太夫に。近附きになり度いというて。わざ〳〵大阪に御越年。御氣合ひに構ふとて。初對面からお勤めなされぬも存じながら呼びに進ぜました所に。さすがお馴染の喜左衞門。否應なしのお出で。身祝ひと申し。どつと云うた餠つき。嚊も尻餠ついて祝ひます。コレ杉島之介。中の間へ往てぜんざい祝や。こゝは冷えます太夫樣先づ。お座敷へと云ひければ。へア、わたしが氣色も。良いがよいにたゝねども。伊左衞門さんと二人連れ。一度も缺かさぬ今日の日なれば。命の內にちよつと來て。伊左衞門樣に逢ふ心。こなさん達の顏も見たいと。思ふ折ふし呼びに來たを幸ひに。爰までは來やしたが。座敷は氣まゝに勤むるぞえ。さう思うて下さんせ。へはて何が扨てお氣任せ。どうなりとも候べく候にやらしやませとへ座敷へこそは出しけれ。へ冬編笠の赤ばりて。紙衣の火打膝のさら。笠ふき凌ぐ忍ぶ草。忍ぶとすれど古への。花は嵐の頤に。今日の寒さを喰ひしばる。はみ出し鍔も。かみさびて。鐺詰りて師走の日。へ胡散らしく吉田屋の內を覗いて。へ喜左衞門宿にゐるか。喜左々々と鼻に扇の横柄なり。へ男ども口々に。ヤ何者ぢや。風の神か鳥おどしの樣なさまで。何ぢや喜左衞門に逢はう。ハヽ百貫目も遣ふ大盡の云ふやうな。阿呆らしい棒まかされなと云ひければ。へオヽ百貫目それ程貴い物でもない。喜左衞門と云ふべき者でいふ程に。さりとては逢は

せてくれい。へどりや逢はせてくれろう。こんな目に遭はせてくれろうと竹箒。持つてかゝるを。へ喜左衞門飛び出で。ヤレ待て〳〵。もしねだり者かも知れぬ。麁相をすなと押止め。ハア喜左衞門に逢はうと仰せあるは何方でござります。どなたで御座ると笠を覗いて。シヤア伊左衞門樣か。へ何と喜左衞門。なつかしさに來ました。へ扨てお久しや。お珍らしや。京大佛の馬町に御逼塞と承り。夕霧樣よりは數通の御狀飛脚も二三度。奈良大津まで尋ねさせ。たつた今もお噂。先づお馴染の小座敷で。二年積るお物語。いざお通りと袖を引けば。へア、これ〳〵喜左衞門。さりとては紙衣ざはりが荒い〳〵。引けば破るゝ。摑めば跡に師走浪人。昔は鎗が迎ひに出る。今はやう〳〵長刀の。草履を脱いで編笠の。中のへ座敷へ通りける。へお寒からうと喜左衞門。縮緬に紅裏の。小袖をふはと打掛くる。へア、是は云はれぬ。寒晒しの伊左衞門。少しも苦しからねども。志を著いたす。と戴いて着る有樣。喜左衞門つく〴〵見て。ア、浮世ぢやナア。藤屋の伊左衞門樣に。この吉田屋の喜左衞門が着せまする小袖。たとへ蜀江の錦でも。二重鶴の古錦襴でも。戴いて召しませうか。ほんに涙がこぼれます。と目をしばたゝくぞ誠なる。へいやコレ喜左。この紙子の仕合せさら〳〵無念に存ぜぬ程に。總じて重たい俵物材木でも。牛馬が負ふは珍らしからず。犬猫が負うたらば。是はと人が手を打たう。身どもも其通り。紙子の袷一枚で七百貫目の借錢負うてもぎくともせぬは。恐らく藤屋伊左衞門。日本に一人の男。この身が金ぢや。それで總身が冷えてたまらぬ。ア、いかう冷える〳〵。ヘヤア總身が金とはヱ、忝い。喜左衞門が餅搗に。大きな金がおはいりなされた。コレ嬶。まだ蓬萊は飾らねど。先づ正月の心。三方飾つて持つておぢやと入りければ。へ内儀はあつと楪葉に。穗長折敷く橙柑子。蜜柑や何や榧勝栗。オ、おゆかしや〳〵。久振りで御無事なお顏。お嬉し樣やと會釋する。へ伊左衞門とかう挨拶涙ぐみ。夫婦の衆が懇に。蓬萊とまで氣が付くとも。夕とも霧とも云ひ出さぬ。ほのかに聞けば夕霧は。身が事を氣病みにして。命あぶなしと聞及ぶ。いかう重いか但し又。無常の夕霧と消え失せて了うたか。歎きをかけまいと云ひ出さぬのか。誓文泣くまい。語つて聞かしや。泣かぬ泣かぬといふ聲も。へ氣遣ひ涙濁りける。へいや〳〵。是はお

道理。霧様のお氣色も。秋の頃はさん〳〵で。勤めもお引きなされしが。寒に入つてちと快氣。即ち阿波のお侍。正月もなさる筈で今日これへと。〽云ひも果てぬに伊左衛門ぎよつとして。ヤそれは誠か眞實か。〽ハテ嘘か誠か。隣座敷を覗いて御覽なされませ。〽伊左衛門はつとせいたる顔色にて。暫し言葉もなかりしが。イヤなう内儀。天地開け始まりて此かた。誠ある傾城と。迦陵頻伽の雄鳥は。繪に書いたも見た者がない。惣嫁の様な傾城めに。モ、モ微塵心は殘らねども。知つての通りあいつが腹から出た身が悴。しかも男子で明くれば三つ。元の遣手の玉が才覺で。ノソレ里に遣つたとやら。今日來たはその悴が事に就いて來たれども。定めて里に遣つたも僞り。捻殺してがな捨てつらう。阿波の侍といふは。

ア、合點々々。この前身どもが張合つた阿波の大盡平といふ者。つら〳〵思へば傾城買ひより。紙屑買ひがましぢや。なぜと云や。はて金出して此方へ取る物とては狀文ばつかり。七百貫目が紙屑では。富士の山を張拔きにしようと儘ぢや。仕合せの惡い時は。何で損をせうも知れぬ。無用の涙で紙子の袖を濡らした。繼目の離れぬ先に罷り歸ると立たんとす。〽先づお待ちなされませ。それはあんまり御短氣と申すもの。奥のお客は平様ではござりませぬ。〽イヤ〳〵。平でも壺でも此方支度ようござると立出づる。〽それはお前の慳貪と申すもの。〽イヤけんどんならば夕霧より。蕎麥切に攻さうと拗廻るを。〽押しとゞめ。只今夕霧様に逢はせませう。暫く是に御待ちと。云捨て奥へ走り行く。〽伊左衛門は心せき。

駈出しては立戻り。奥の座敷をさし覗き。ア、誠に人の行末と水の流れ。昨日に變る我が姿。變らぬは廓の騒ぎぢやナア。〽可愛い男に逢ふ坂の。關よりつらい世の習ひ。〽ア、彈くわ彈くわ。ほんにあの唄で思ひ出す。去年の月見は世に昔。太夫とおれが連彈に。彈いた時の面白さ。彈くその主は變らねど。變り果てたは彼奴が胸。ア、ああした心であらうとは。〽思はぬ人に堰きとめられて。今は野澤の一つ水。〽ア、如何さま。さうぢやナア。戀も情も世にある時。人の心は飛鳥川。變る勤めの習ひぢやもの。變らいで何とせう。アイヤイヤ。もう逢はずに歸りませう。ア。とは云ふものゝ。喜左衛門夫婦の志。逢はずに去んでは此胸が。〽濟まぬ心の内にも暫し。澄むは由縁の月の影。〽無慙や夕霧は。流れの昔

なつかしき。飛立つ心おくの闇の。首尾は朽ちせぬ緣と緣。胸と心の相の山合明け暮戀しい夫の顏。見るに嬉しく走り寄り。我が身を横に裲襠に。引纒ひ寄せ。とんと寢て。抱締め締寄せ泣きけるが。〽なう伊左衛門さん。伊左衛門さん。目を覺して下さんせ。わしや煩うてな。疾うに死ぬる筈なれど。今日まで命永らへたは。神佛の控へ綱。コレ懷しうはないかいの。顏が見たうはないかいのと。搖り起し〳〵。抱き起せば。〽取つて投げ。夕霧殿とやら夕めし殿とやら。節季師走にこなたの樣に隙ではござらぬ。七百貫目の借錢負うて。夜晝稼ぐ伊左衛門。此樣な時寢ねば寢られぬ。邪魔なされな惣嫁殿と。ころりと臥して又ごろ〳〵と空鼾。〽ム、コリヤお前機嫌が惡いな。身に覺えはなけれども。恨みがあらば聞き

ませう。いや〳〵。モウ寢させはせぬと引起す。〽ヤこりや何とする。イヤあんまりちやちやもちやくちやにして貰ふまいぞえ。この體になつたれど藤屋の伊左衛門ぢや。今の如く奥座敷の侍に。その樣に踏まれたり蹴られたりする女郎に。近附きは持たぬ。こゝな萬歳傾城。萬歳ならば春おぢや。通りや〳〵と云ひければ。〽オ、この夕霧を萬歳とは。〽オ、萬歳傾城の因緣知らずか。知らずば云うて聞かさう。侍の足にかけて蹴らるゝを。萬歳傾城と云ふぞや。〽誠に目出度うさむらひける。しかも足駄はいて蹴るやら。〽年立ちかへる足駄にて。誠に目出度う候ひける。何と聞えたか。傾城の心の底と猫の鼻は。冷いものと世間の喩へ。おのれが樣な四つ足にはいつそ何にも云はぬのが。〽德若に御萬歳や。身請

けも納りましんまして。誠に目出度う候ひける。時分柄なにも身過ぎ。あの樣なよい客に蹴られても損はいかぬ。慾を知らねば身が立たぬ。〽慾若に御萬歳や。年立ちかへるあしだにて。誠に目出度う候ひける。町人も蹴る。伊左衛門も蹴る。ける〳〵〳〵と蹴散らかし。コレ喜左衛門。餅でも米でも遣つて早う去なしやと。煙草引寄せ吹く煙管の。さあらぬ。エン〳〵體にて居たりける。〽夕霧涙諸共に。恨みられたり喞つのは。色の慣ひと云ひながら。それは浮氣な水淺黃。逢初めた其日から。こんな緣が唐にもあろか。はでな浮名が嬉しうて。人の譏りも世の義理も。白紙に書く文の傳。返事取る手も心せき。口舌の床のよしあしも。嬉しいにつけ悲しいにつれて忘れた事はない。それにお前の惡性を。わしが案じ

帯文桂川水　九

は移り氣な。外にも若しやと合云ひがかり。脊中合はせて寢て見ても。ついそれなりに張弱く。仲直りすりや明けの鐘。合憎うてならぬ合鳥の聲合何の鳥が意地惡で啼くぢやなけれど。きぬ〴〵の。去せともない合心から。合儘にならぬが色の意地。そこを樂しむ粹な仲。それが嵩じて内方の。首尾は不首尾と結ぼほれ。勘當の身と梢の葉や。兒手柏の二人が仲。暇乞ひさへ泣くばかり。それから絶えて音づれも。内證知らぬ田舍客。厭な身請の沙汰聞いて。胸につかへや癪の種。氣あひが惡いと嘘いうて。身請を延ばし今迄も。逢はで亂るゝ片糸の。戀には義理のあるものを。去年の暮から丸一年。二年越しに音づれなく。それはいく瀬の物案じ。それ故にこの病ひ。痩せ衰へたが目に見えぬか。煎薬と練薬と。針と按摩でやう〳〵と命繫いでたまさかに。逢うてこんなに甘ようと。思ふ所を逆樣な。コリヤむごらしいどうぞいの。私が心が變つたら。踏んでばかり置かんすか。叩いてばかり置かんすか。コレ死にかゝつて居る夕霧ぢや。笑ひ顔見せて下さんせ。心强や胴慾な。憎くやと膝に引寄せて。さすつつ泣いつ聲を上げ。譯も性根もなかりけり。伊左衛門涙にくれ。オヽあやまつた誤つた。外にさして恨みはなけれども。命にかへぬ大事の女房。奥座敷の若い者が。わが物面がむつとして。思はぬ腹立ち堪へてたも。我とても憂き身の體。誠の正體見給へと。小袖くるり脱ぎければ。肌に袷の繼紙子。四十八枚彌陀の願。果ては平等施一切。胴震ひするぞ哀れなる。〽かゝる所へ喜左衛門駈出で。申し〳〵伊左衛門樣。只今お宿よりお人が參り。御勘當もゆりまする。里の御子息樣も母屋へお引取り遊ばし。夕霧樣の身請もさらりつと埒が明きました。此上は太夫樣の御氣色ばかり。これも此喜左衛門が勢力で。本復させて上げませうと。家内が勇む勢ひに。つれて浮立つ伊左衛門。悦びの眉を開くや扇屋夕霧。名を萬代の春の花。見る人袖をぞつらねける。

〔解題〕寛政八年正月十五日から都座興行の「振分髪青柳曾我」の第二番目中幕として出したもので、本曲を初日道行とし、お俊傳兵衛の道行である「浮偖吾妻森」を後日道行として、一日替りに興行した。作者は初代櫻田治助である。上方淨るりのお半長右衛門の道行に夜たかと座頭とをからませたのが特色で、それが爲に俗に「よたか入」と呼ばれて居る。上方の道行の江戸化すると共に、心中道行の眞劍味が次第に滑稽化されて頽廢味を加へられて來るやうになつた一例とも見られる。常磐津連名は左の通り。

同　政太夫　　三絃　岸澤古式部
常磐津文字太夫　　鳥羽屋里長
同　左名太夫

役割は、長右衛門市川八百藏、お半岩井粂三郎、辻君おそで中村のしほ、夜そば賣、座頭粂市坂東彦三郎。

〽月の桂の川水に合。浮名を流すうたかたの合。泡と命を信濃屋の。お半を脊に長右衛門。〽御池通りも影凄き柳の馬場を横に見て。急げば名殘り。押小路。妻にも別れ合鐘の音も涙含みて。雨ぞ降る堀川過ぎてやう／＼と。脊を下せば取りなりもまだ振袖のほら／＼と。跡や先なる。おくれ髪。櫛笥はそこよ壬生村を西へ向へば長福寺。後の世照らし給はれと。願ひをかけて闇を行く梅津の小橋渡れども。縁の淺瀬か水かれて。鰍も今は泣きつくし。男心をかこつにぞ。ほんに思へば昨日今日。小さい時から。合お前に抱かれ手習せいと言はしやんして。御手本書いて貰うたる。色のいろはのお師匠さん合それから思ひ染め浴衣。伊勢の戻りに相宿の石部とやらの木枕が。堅いお前と新枕。添寝の夢を覺せとや。その馬士節に起されて 二上り〽笠はてる／＼紅の紐戀を鈴鹿に袖くもる。雨の土山ぬれてぬるナアエ。合心のたけを結ぼれて。七條村に行惱む 八百藏〽コレお半道々もいふ通り。此長右衛門は大切なる刀を失ひそれのみならず。大恩受けし幸之進樣の御子息幸左衛門殿を手にかけたれば。おれこそ死なねばならぬ身の上。

そなたは跡に永へて我が亡き跡を弔うてたも。へ頼むとばかり言ひさして跡は涙に聲うるむ。へ聞いてお半は。差俯いて。何にも云はず振袖のへ袂翳して顔のぞき。これいナア合長右衛門どの。合共に行かいで恥かしい合。此腹帯はどうせうえ。殿御持たいでや丶産んで永らへ居よとはそりや胴慾な。わたしや死んでもお前よりいとしい者があろかいな。惚れたが因果堪忍して。一緒に殺して下さんせと露の命をませがきの消えも入りたき風情なり。お半が歎きいぢらしく長右衛門も胸せまり。其心根の不便さに。涙の淵に底意なく。共に沈まんいざこなたへと互に手に手を取交はし。行かんとすれば人影のもし。追手かと身を忍びしばし。かしこに隠れ居る。のしほ彦三郎出へさうかくと夕げせう。剰水ほどの流れの身蓙をか丶へて寝床が變る勤めがつらいとしよんがえ。へ様は山谷の三日月様よ宵にちらりと手拭に紅のついたを見たばかり。差かしい事岩ばしの夜の契りも仇枕。明くるわびしき商賣はわれらも似たか夜鷹蕎麦。闇が嬉しうて月夜が憎いテモ。よいこなに引かされて松原すぢを通り者のびて跡から生蕎麦賣。打連れ立ちてたはれ來る。のしほへ何と今夜は寒いぢやないかいナア。彦三郎へ



斯う寒くなければにうめんや蕎麦は賣れませぬ。おぬし達もこんな所に立つて居たら嘸ぞ寒からうの。のしほへ寒いもつらいも勤めでござんすわいなう。彦へ成程しかし。勤めといふ内にも島原の傾城とは違うて文を書かうでもなし。三味線を彈かうでもなしほんに氣樂な身の上でごんすなう。のしほへイエ〳〵其樣にもないものぢやわいナア。彦へそれでもどの樣な者にでも身を任せるがおぬし達の商賣ではごんせぬか。蕎麦より安い代物。一膳振舞ふ氣はないかのしほへアレまだいナアそりやマア。へ何の事ぢやいな。うらみな事を言はしやんす。



野稼ぎの身も立君といへば。歌にも詠むわいな夜鷹といへば錦繪に歌麿さんの筆の文いろに逢ふ夜は戀のやみ夜風身にしむ。勤めのまこと女の情はあるものを遊ばしやんせと寄添うて引張る袖をもぎ放し。ヘイヤ其手では參るまい。この蕎麦賣の商人を。ぶつかけのめして食はうでの。いろも鴨そばないものを。御神樂蕎麦ではやしかけ一つ八そばの坂東を。味な心にしなのそば。手もりを喰はぬ其内に思ひそば切り今晩は。南蠻うどんにうめんや總兵衛手早く賣り溜めに。紐かは付けて荷ひ行く。よねへ米市と名はたち花のゆかりとて昔の袖も香に匂ふ按摩けんびき

〱捻りひねりかけ。夜はいつか浮の空。四ツ塚過ぎて九つと東寺の塔も。水藥師。石にけつまづいてがつくりこ。そつくりこ。大道つつつく杖のかず。千本通りを惠方ともあき手の方とも知らうが佛。酒に目の無き浮かれ座頭の坊うか〱縄手を通りける。へおそではそれと見るよりも。ヤア米市さんぢやないかいな。逢ひたかつたとばかりにて。抱付けば突放し。エ、寄るまいぞ〱。イヤ置いてくんな。イヤおきやあんがんなさいよ。此頃は聞けば。アノ夜蕎麥賣の總兵衛とやらに足をつけるげなの。エ、腹の立つ。アヽいつぞやであつたわい。此米市に飽いたとて。煩うて居たではないか。それその時は此米市が夕霧もどきで療治してナそれ。針と按摩でやう〱と。エ、それ程に迄思うて居たではないか。そんな水臭い奴にかゝつて居ようよりさらば我等は歸りましよ〱と。行かんとすれば杖引きとゞめ矢庭に胸ぐら引摑み振廻されて米市は。オヤ〱〱どうするのぢや。へどうするとは米市さん。其樣にひぞりなさんす事はござんせん。私が心を知らぬか何ぞの樣に。そりやマア何の事ぢやいな。初に逢うたは六月の巳待の晩の蚊に喰はれ。こなんの膝へつちのとの。辨天さんが。お仲人。夫婦になつたらおのれやれ。按摩習うて肩ももみ。けんびき据ゑてやりもぜう手ひきにもなり月代もくちが剃刀お長屋の。合内儀さん達の愛想に。吸付け煙草の付けざしも心で詫びして飮むわいな。エ、じれつたいによ。まだ私をば勤めする身と思はんすか。ほんの女房ぢやないかいなと。泣くふり、しても目は見えず。涙に嘘の川ばたで手拭濡らすばかりなり。米市わつと泣出し。エ、それ程迄に眞實なそなたに腹が立たれうか堪忍しやと。手で探り〱。拍子とり〱機嫌とる。三下りへじたい某は白眼牛座頭。杖を月夜も心の闇よ色に逢ほとて桂の里をそゝつた樣が琵琶だんべいならべんつく〱。ひつぴいてもかんなぐさむべい座頭の坊。ハ、、笑ひに心とけ合うて手を取る所を杖ひつ張り露の蒲團に草枕。夜鷹塒や求め行く。へ折こそよしと小陰より二人は立出で身づくろひ。彦三郎へ長右衛門さん。八百へお半。へもはや夜明けに。なる鐘も二人が上の。無常音覺悟はよいかと長右衛門お半も共に手にさはる。石を拾うて袖袂思ひに沈む牛が瀬や。氷が淵に消え殘る浮名ばかりを命ぞと。歌舞伎の種となりぬらしゝ。

兩面月姿繪　一〇

〔解題〕俗に「怱賣」と稱へられ、常磐津の數ある淨瑠璃中「關扉」「戻駕」などと相並んで最も名高い曲である。現在行はれるものは、寛政十年九月九日から森田座に上演された「振袖隅田川」の大切に出した「兩顔月姿繪」であつて、詞章は同座のこの時の立作者木村圓夫によつて在來のものに增補が施された。而して作曲は町田博三氏の說では二世文字太夫の妻文字菊であつたらうといふ。

雙面と怱賣の所作とをつき合せてこれに道成寺の押戻しの趣向を取合せて隅田川物と抱合せにして作られたのがこの「兩面月姿繪」である。同一の姿の女が二人現はれて男を惱まし、とゞその一人は怨靈の正體を現すといふのが雙面の趣向であつて、これは既に近松の「赤染衛門榮花物語」(延寶八年正月刊)にその原型が鮮かに見えて居るが、それが淺間物に取り合はせられてこゝに二人淺間の趣向となつた。

寶曆七年三月中村座で初代常磐津文字太夫等の地によつて演じられた「妹背塚松櫻」(作者壕越二三治)はその古いもので、これは櫻姫を戀慕して軍助に殺された淸玄の亡魂と祐成に焦れて死んだ八つ橋の亡魂とが對の姿となつて祐成の前に現れて迷はすといふ趣向である。この趣向を受けて更に一步「怱賣」に近づいたのが「雙面花入相」である。明和二年三月中村座興行で、作者は金井三笑、常磐津若太夫等の出語りで演じられたもので、お花と半七が隅田川原へ道行をすると、眞砂の庄司の亡魂がお花と同じ姿で現はれて半七實は禪司坊を惱すので、曾我十郎に賴んで眞僞を見別ける事となり、トヾ庄司の亡魂は蛇體となつて道成寺のやつし模樣で終るのである。このお花と庄司の亡魂とを怱賣とし、その上に庄司を法界坊といふ破戒僧にすれば、それがやがて「怱賣」の戲曲となるのであるが、その怱賣も法界坊も既に常磐津の淨るり物として前からあつた。即ち怱賣とし

ては寶暦十二年二月中村座所演の常磐津地の所作事「垣衣草千鳥紋日」(作者金井三笑)で、白菊の亡魂が花賣になつて戀ひ慕ふ曾我十郎の許に現れるのが始めであり、法界坊の名稱は旣に近松の「雙生隅田川」に見えて居り、(後に隅田川物と花賣との結合するもとはこゝにある)明和二年正月市村座で興行の常磐津淨瑠璃物「江戸名所都鳥追」で中村仲藏が法界坊の役で大當りをとつて居る。

そこでこの三つの系統の趣向を取り合せて作られたのが、安永四年二月中村座興行の「垣衣戀寫繪」で、作者は初代河竹新七、淨瑠璃は常磐津兼太夫(二代目文字太夫)等であつた。主要な役割は、藝者おまつ實はあこや山下金作、油屋お染實は二葉前嵐雛治、丁稚久松實は經若丸市川門之助、大日坊・野分姬亡魂中村仲藏で、曾我の世界の二番目へ仕組まれたので、それに嵌るやうな役名になつてゐるが、大日坊は前の法界坊の轉化で、仲藏の花賣の所作が眼目で、この時から雙面と花賣とが結合し、勿論押戾しもあつた(和田義盛で)。この時軍助で大日坊を殺して後ろへ髮を引かれる役をつとめた市川團藏は、仲藏の役に興味を覺えて、歸阪後奈川七五三助に依賴して「隅田川續俤」四幕を新作してもらつて、天明四年五月から角の座で興行し、その大切で法界坊と野分姬の亡魂との双面を花賣の所作で演じた(本全集の歌舞伎脚本集「隅田川續俤」參照)而して團藏は天明八年春森田座で「雨顏月姿繪」の外題で、この花賣を常磐津の地で演じたが、その時には大阪で演じたも



「妹脊塚稚櫻」

のと殆んど同一であつたと思はれる。然るに寛政十年九月森田座で再演の時に増補されたもので、その要點は法坊界の出の「白波か…」や「尾花招けば…」や「過ぎにし梅の花見月…」のクドキの條で、即ち後に本曲の眼目となつた箇所である。

次に本曲初演の時の常磐津連名を見るに番附面には二代目文字太夫がタテに掲げられて居るが、實際は文字太夫はこの時は病氣で、政太夫が代つてタテを語つた事は常磐津家元の記錄によつて明かである。役割は永樂屋丁稚幸吉實は吉田の松若丸佐の川市松、永樂屋娘おくみ山下民之助、甚三郎女房・隅田川渡守都鳥のおしづ小佐川常世、聖天町の法界坊亡魂惣賣市川團藏、松浦五郎市川團三郎。

惣賣の淨瑠璃はこの外にも澤山あるが本曲が最も名高い。



「双面花人相」

へ名にし負ふ。月の武藏に影きよく霞を流す隅田川。岸をわくれば下總と昔は云うて今も猶。よしある人のこと問はば。ありのまに〳〵在原のまめな心を都鳥。群れつゝ寄する白波は瀬々に堰かれてはつとして。伊達な浮世を渡守。常世詞へ川淀にうつす姿もおのづから。色ある露の水馴棹。さす手も遠き唐土の五湖の景色はいざ知らず。知るべを松の名にめでて緣も深きふたば草。葉ごしがくれの二人連れ。來るを遲しと待ち居たる。常世へ待乳山夕ごえ來れば五百崎の。隅田河原に獨りかもねんとすさみしもことわりや。見ぬ唐土の八景はいざ知らず。はて面白き景色ぢやナア。それはさうと夫軍助殿の知らせ故。此所へお出でなさるゝ松若様をさつきにからお待ち申して居るが。どうして此様に遲い事ぢややら。

ほんに待たるゝとも待つ身になるなとはよう云うたものぢやナア。へ暫し案じてイめり。民之助市松出戀には身をも窶せと云うた〳〵。よう云うたよう云うた。その言の葉を忍ぶにまかせ。徒歩や裸足で人目の關を。茗々と賣り歩く茗賣る身は斯うもあろかと。小褄をしやんと川千鳥。ちどり鷗の名所なる隅田川原に着きにけり。それと見るより船より出で。常へヤアあなたは松若様でござりますか。大抵や大方お待ち申した事ぢやござりませぬ。市へヤアおしづかいの。嬉しや〳〵早速ながら聞いてたも。軍助が詞に任せ二人とも此様に茗賣と姿を窶へ。爰までは來たれども。道々も恐ろしい事のある條。コレあの壽姫は人手にかゝつて死にやつたわいの。へ聞いておしづも愕りし。常へそんならアノ姫君様にはあへない御最期で

ござりましたかいな。ほんにならはぬ旅路もお許嫁の松若様に逢ひたい添ひたいと。思ひこがれてお出で遊ばしたもの何の未來も成佛なされませう。ほんにはかない御緣でござりましたナア。へと涙の中に松若丸懷中より帛紗を取出し。市へ是を見てたも又とだに思はぬ中の別れ路を言葉のこりて名をや恨みん。稚い時の別れさへ許嫁の此松若へ形見に送りし此一首も。今は未來の置土産となつたかいの。民へ此世の御緣は薄くとも御本妻と定まるからは。未來は添うて下さりませ。假の此世の殿御をば私がお預り申しましてござんすぞえ。へ形見こそ今は仇なる其帛紗せめては妄執も晴るゝ様。姫とならば未來の門火。民へそれ〳〵どうぞ未來は成佛なされて下さりませ。三人へ南無阿彌陀佛々々々々々々と傍へなる岸根に

燒ける蘆の火へ。形見の帛紗打入るれば。へ又も瞋恚の立昇る。煙がくれに怪しの心火現はれ出づると見えけるが。ためらふ隙もなか〲におしづを始め松若おくみ。たゞ忙然と伏しにける。

へ白波の雲かあらぬか煩惱の墮落に失せし法界坊。姫が魂魄さそひ來て姿は一つ二面。恨みを爰にあり〲と同じ出立の優姿。岡藏出へわしが在所は京の田舍の片ほとり。八瀬や小原や芹生の里。世をしのぶ故姫御前の身で褄からげ。葱入らんせんかいな買はんせんかいにや世を忍ぶしのぶの乱れ限りなき。恨みの刄に情なや。浮みもやらで其人の。連添ふ事の恨めしく。うつらうつらと迷ひ來て小舟間近く立寄れば。松若ふつと心づき。市へヤアそなたはおくみぢやないかいの。岡へアイくみぢやわいな。へといふに心も晴れやらず。こなたの二人を呼び生けて。市へヤそなたはおくみか心が付いたかいの。民へヤア松若樣。又恐しい事でござんしたわいな。へと詞に猶も怖氣立ち。おしづ〲と呼び生けて。市へコレおしづ氣が付いたかいの。常へオ、お二人樣でござりまするか。市へコレおしづおくみがいつの間にやら二人になつたわいの。常へ何をおつしやりますやらどうしてお組さんが二人あつてよいものでござりまする へと言ひつゝこなたを見て愕り。暫し詞も出でざりしが。漸うに胸を据ゑ。常へモシお前の名は何と申しますえ。へアイ私やくみといふわいな。へと聞いてこなたへ立戻り。常へシテお前の名は。民へアイわたしやくみと云ふわいな。常へほんにマアこちらにもお組さん。こちらにもお組さん。へこりやマアどうぢやと驚けば。民へエ、何のこつちやいな。私をのけて外にお組があつてよいものかいな。岡へエ、何のこつちやいな私をのけて外にお組があつてよいものかいな。常へイヤもうどちらがお組樣ぢややらとんと合點が行かぬわいな。イヤ申しお組樣あなたはいつぞや柳橋の大黑屋で踊り初めのあつた時の振事。私やよう覺えて居りまするがそちらなお組樣お前もよう振りを覺えてお居でなさんすかえ。へそれを忘れてよいものかいな。常へそんなら爰で見ようかいな。岡へサア其振事は。民へ其振事は。岡へはづかしながらちよつと小褄を斯う取つて。へ尾花招けばうなづく小萩。何をくねるぞ女郎花。わしや可愛うてならぬのに扨もえにしが朝顏ならば。廓の女郎衆は見やせまい。開くを〲莟が開いたを見やせまい。サイ

ナ〳〵。さうぢやといな。人をしのぶの草隠れ。おしづもほつと持ちあぐみ。へいやもう不思議と云はうかとんと合點が行かぬわいな。オヽそれ〳〵そんなら此上は松若様が幸吉と名を變へて。お組さんの所へ行かしやんした其馴れ初めの睦言は。お前ならでは知つた者はござんせぬ。サア其話が聞き度いわいな。民へサア其睦言の話は恥かし乍らよう覺えて居るわいな。へハテマアこちらのお組様から聞かうわいな。民へそれ〳〵それを聞かうわいの。岡へサアそれは へ過ぎにし梅の花見月。目見え初めと手を取つて。ふつと見合はす顔と顔。いとしらしうて優形で。へほんに思へばいたづらな。人の前髪何んのその。晴んで見ても忘られず。目先にふだん業平さんも。及びやせまい殿振りと。惚れて心で譽めて居て。ついした譯になつたのが。積り〳〵ていつしかに。桃と櫻の色くらべ。へ雛遊びのさゝごとに へはづかしながら盃を。さしたわたしが心いき。べにが付いたというたれば。そこから飲んで下んしたその嬉しさに盃を」（校訂者曰、「はづかしながら」からこゝ迄は現在の正本は削除）二世の堅めと抱きしめて。つい手枕のそゝけ髪。直して上げよと簪に。お前の紋のさしこみは。癪といふもの始めて知つた。外に殿御の肌しらず思ひこがるゝ私ぢやもの。何の心が變らうと。あなたへ引けばこなたへも。もつれもつるゝ糸柳。風にもまるゝ風情なり。へおしづはそれと見るよりも。中を隔てゝ結柴のこちらも〳〵苦の花。へ若木の薫りゆかしさに見とれて居さんす其中へ。へ内の子飼の長太めが。阿呆のくせにいやらしい。稚遊びにかこつけて。めんない千鳥はんま千鳥。ちりては慕ふ磯隠れ。始終をおしづが止めても止め兼ねたる妹脊仲。結び柏や振袖の。垣根にまとふ蔦かづら。離れがたなき風情なり。へ誰とても思ひは同じあすか川。瀬と變り行く昨日今日。修羅の苦患の晴れやらず。名乗らで知れや我が思ひ。じつと見る目の物凄く。岡へ松若様おくみ殿。へ恨めしの心や。人の恨みの深くして刄にかゝりし身の因果。生きて此世にあるならば。いとし殿御と添ひもせう。へアヽ可愛い女と寝んものを。なま中出家をとげし身は。苦患にさへられ。法心の中立ちを忘れしも皆誰故ぞお組ゆゑ。へわたしが迷ひは松若様。稚なじみの許嫁末を頼みの甲斐もなく。思はぬ憂き目三つ瀬川。へ胸にみなぎる思ひの淵。へ淺いはえにし。へ深いは恨み。へ恨みは人をも世をも思ひ思はず只そ

の人こそ。〽にくし〽つらし〽情ないぞと卿ち泣き。〽かつぱと伏して泣き居たる。おしづはそれと氣は付けど猶も樣子を見屆けんと二人が傍へ立寄つて。常〽成程聞けば聞く程合點の行かぬ二人のお組樣。此上の思案にはそれ〳〵去年の秋神田祭に稽古した踊の振。私等も相手になつてサア共振が見たいわいな。四民〽サアその踊の振はな 常市〽それ 四民〽それ 四人〽それ〳〵そつこでせい。花がたの渡に色の綾瀬川。姿みのわと浮名は受けじ。人がいほ崎心の闕屋天神樣の御世話なら。片葉の蘆ぢやないかいな。それ〳〵誓文さうかいな。花川戸戀を待乳に三囲や逢はにや牛島わしの森。緣の橋場もうれしの森よ。白髭樣のお世話なら吾妻橋ぢやないかいな。それ〳〵それ誓文さうかいな。離れぬ中の緣ぢやもの揃ふ

姿の品形。おしづも今はもどかしく懷中の尊像取出し。常〽此上は夫軍助殿もろ共日頃信心なす淺草の觀世音。此尊像の功力を以て化生の姿を現はし給へ南無淺草の觀世音。〽と一心籠めて差付くれば。今まで見紛ふ顏ばせも震ひわなゝき忽然と。〽あゝら恐しや苦しやなア娑婆の業因深き故。〽思はぬ此身に苦患の受け。共に奈落の底迄も引立て行かんとせしかども。觀音薩埵の誓ひにおそれ。我と我が身を責めに責めくる冥途の使。影もよしなやはづかしのもりてよそにや白露の。見えつ隱れつ面影のありとは見えて春風に。姿は消えて失せにけり。〽人々奇異の思ひをなし。げに觀音の御功力と。奇瑞を感ずる折こそあれ。間近く聞ゆる貝鉦太鼓。おしづはきつと心を付け。〽あれ〳〵あの太鼓はたしかに常陸の大掾

百連より討手の者。日にかゝつてはお爲にならず。イザ〳〵〽と共に呼きつき鐘の小陰へ忍ばす間もなく。百連が手の者ども我先にと馳せ來り。〽たしかに見付けし松若丸。又一人は壽姫注進あつて聞きしより搦め捕らんと來りしが。影も形も見えざるは。逃げ隱れしに極つたり。ありやうに白狀なせ何と〳〵。〽とひしめけば。脇へかはしてさあらぬ体。常〽オヽけうと。私は今爰へ參りました者。その樣なお方は存じませぬわいな。筆〽それでも今の知らせは此釣鐘。ちよつと樣子を改めん。〽と立ちかゝるをおしづはつと押隔て。常〽是は又疑ひ深い何ぢやぞいな。左十〽イヤ見せともながるが猶怪しい。常〽それでも爰にぢやないわいな。大五〽それが定なら誓言を立てゝ見せろ。常〽何とえ。筆〽神や佛を誓ひにかけ

大五へ僞りならぬ 筆誓言を 四人へ見ようは。常へサアそれは。へ敬つて祓ひ清め奉る。上は梵天誓文どうして爰にござんしよ明王。へなんぼうすんがりきしや明王愛敬に大威德。ぼつとりこんりんやさ女房。大日大事の神かけて。なまくさばんだばさらにも詞はすはに誓ひける。筆へム、ハ、、、、間に合ひの空誓文。文へどうでも樣子が 左十へ有明の。大五へつき鐘こそ へすは〳〵動くぞ祈れたゞそれ者どもと下知の下。イデへ承ると大勢が走りかゝつてつき鐘を。程なく梢に引上ぐれば。二人にあらで化したる姿。筆へそも先づうぬは。四人へ何奴だやい。へおよそ輪廻は小車の。六趣四生を出でやらず。へ人間不定芭蕉葉の。哀れはかなき身の果を。弔ふ人さへも情なや。修羅の巷に迷ふらん。おしづは以前の尊像を。成佛あれやと差付くれば。謹請東方靑龍淸淨謹請西方白体白龍一大三千大千世界の。恒沙の龍王哀愍納受。哀愍頻の砌なれば。いづくに大蛇のあるべきぞと。祈り祈られ又立向ふ。其勢ひ猶も恨みは盡きせじと。木陰に忍ぶ兩人へ。飛びかゝらんとする處へ。松浦五郎則光はそれと見るより馳せ來り。四へハテ怪しや今松浦五郎が來て見れば。天地にうづまく黒雲雷電心得ずとよく見れば。稀有なる女の立姿。たとへ如何なる惡靈なりとも此則光が。降魔の利劍立去れェ、へとさしも銳き勇士の太刀風。おしづは始終一心不亂。へ觀音薩埵の妙智力に怨靈忽ち遠ざかり。波間へ飛んでぞ入りにける。かの怨靈の舊跡も日高にあらぬ隅田川。鐘が淵とぞ今の世に。傳へて其名を殘しける。

夜の鶴雪の氅

一

〔解題〕 通稱「子別れ」又は「うぶ女」といふ。寛政十年十一月中村座の顏見世狂言「花三升芳野深雪」の第二番目大切として出したもの。大塔宮の愛妾戸野兵衛の女呉羽の前が、錦の御旗を持つて居たので、六部姿の尾崎次

郎に殺されたが、大森村の六部の宿で、長崎次郎と小山田太郎とが泊り合せて勝負を爭ふ爲の卒塔婆曳の場へ、吳羽の前の幽魂がうぶ女の姿で現れて、宮の若君を小山田に托するといふ趣向である。

作者は福森久助、常盤津の連名は次の通り

同　伊勢太夫　　三絃岸澤古式部
常盤津兼太夫　　同　兼八
同　出雲太夫

役割は、長崎次郎高麗六世市川團十郎、小山田太郎高家坂東簑助、吳羽の前の幽魂四世岩井半四郎であつた。

原本には少しも句切りが無いが、讀者の便を圖つて適宜句讀點をつけた。

つよみ歌へ實に世の中は仇浪の、よるべはいづく雲水の、身のはていかで知らざりし 半四郎出へ御いたはしや吳羽の前、一念すでに亂るれば、迷悟三界出でやらぬ、名殘も鴛鴦のつま戀し。こひし子故にとぼ／＼と、心のやみに迷ふなる、



「うぶ女の場面」

涙身をしる雨やさめ、つもりつもりて柳の絲のつながれて、父にも夜の鶴ならで、いとあはれなる立姿 半四郎へ申し

〳〵高家へハテがてんのゆかぬ、いま申しく〳〵と呼んだるは 吳へアイわたしでございますわいなア、どうぞ此子を抱いて下さんせ みのへ待て人里遠き此山中、雪間をわけて來る女、狐狸妖怪の類ひなるか 吳へイヤ全くわらはは其樣な者ならず、熊野八庄司の其一人戸野の兵衛が娘吳羽の前ぢやわいなう みのへヤ何と、其吳羽の前樣は大塔の宮樣に思はれ給ひ、たゞならぬ御身の上と承はつたが、がてんの行かぬ今の一言 吳へすなはち抱き參らせしは、其若宮樣 みのへスリヤそれが若宮樣とな。して又あなたが此あづま路へお出でなされし其仔細は 吳へサアそれは宮樣にお目にかゝるを樂みに、海山越えてはる〴〵とへたづね木曾路のたび枕、はやうお顏の都をば。雲と共に立出でていつか近江や美濃はても、どう信濃なる淺間しや、戀

の峠も碓氷とは、縁のことぢやと氣にかゝり、思ひはとけぬ上毛を越せば吾妻のあふせさへ、月の武藏のうかれぶしへ鳥がなこが夜があきよが、てんとさん出ぬうちや歸しやせぬと、ひく三味線のいとしさも、ばちか報いかしのび路を、あだなる人に隔てられ、お姿さへも道芝の、燒野のきゞすつま戀ひて、なくね悲しき身の上と、かこち給ふぞ道理なる みのへだん〳〵の御歎きお道理でござります。さだめて御聞も及ばれん、私は小山田太郎高家と申すもの、宮樣の御行衛も存じ居れば、御供致すでござりませう。何に致せ若宮樣、御尊顏の拜せんと、抱き取ればおあぐり泣さへいとゞ愛らしく へねんねこせい〳〵、ねんねがもりはどこへいた、山を越えてさとへいた。さとの土產に何もろた、でん〳〵太鼓にふりつゞみ、お

きやがりこぼしくるり〳〵、くる〳〵〳〵〳〵肩車、あぶないがてんぢや〳〵花見に行こな。東山や西山、みんなみなみにきた山の鄙の踊は、對の手拭しやんときて、をどるふりのおもしろやへあれをみやこの花の山、子であるかるゝめうとゝも、いはれんものを情なや、つれなやにくやその人の、太刀にとゞまるおもかげの、たまよぶ子鳥遠近も、おぼつかなげに見えにけり みのへがてんまゐらぬその御なげき、仔細包まずおあかしなされて下さりませ 吳へサアそれは みのへなんと へ今は何をか包むべき。自らこそ人手にかゝつて此世を去り、娑婆になき身のはかなくも、宙有に迷ひ來りしは、此子を賴まんためばかり みのへスリヤ人手にかゝつてお果てなされしとな。して又敵は何者なるや 吳へ其敵こそ長崎次郎高繁が、邪

慳の刃にかゝれども、神の御末の若宮樣、御運つよく御命も、つゝがなう疵口より御誕生、何とぞ此若宮をお供なし、父宮樣に御渡し申し、行末頼むは小山田太郎、力になつてたもいなう　みのへスリヤ敵は高綮となサヘサア彼こそは自らが、所持なせし錦の御旗奪ひとり、肌身はなさず所持なせば、取戻さぬ共内は恐れあり　みのへハヽヽ、惡事かさなる長崎次郎、御旗を奪ひ返した上、あなたの怨みも晴らさせ申さん。さり乍ら此若宮樣、都へ御供致さんにも、女房に乳はなし、何とぞあなたも御一緒にへこれそれが叶ふ事ならば、今のなげきはせぬわいなうへ子を持つて知る親の恩、七十五たび泣くといふ、たとへは物のかずならず、かゝる歎きはいにしへの、安倍の童子が母上も、それは信太の生き別れ、尋ね來いとのがたみの歌、又逢ふこともありなんに、いかなればこれ限り、相見る事もなき魂は、なんと見捨てゆかれうぞ、かならずまめで成人し、父宮樣の力となり、朝敵退治に母が名を、あげてもかぞへつくされぬ、かはいのものやいとし子に、一世の別れこれがまあ、たとへ導く十萬億土、佛の誓あればとて、なんのうかまううかまれう。死出のたをさの鳥ならで、ないて血を吐く思ひなりへスリヤ是が親子一世の御別れでござりまするかへサア今別るれば未來永劫、顏見る事もならぬわいなう、若よさらばへさらばさらばも果しなく、子の恩愛にま一度見たし、抱きたしと、立寄ればこはいかに、あの世此世と隔たる罪障、もはや別れのあら堪へ難や、又の罪に修羅の太鼓、目にこそ見えね踏む足もと、山へのぼれば劍につんざき、谷に下れば紅蓮の氷、白無垢却つて唐紅の冥火の煙恐ろしなんども愚かなり。へとくより窺ふ長崎次郎、大勢引連れ現れ出でへ呉羽の前が幽靈、又うせたか、附添ふうぬが魂の、太刀にとゞまる佛丸、降魔の利劍立去れ〳〵　みのへ呉羽の前を討つて立退く强惡無道の次郎高綮、錦の御旗をこつちへ渡して、觀念ひろげと詞鋭き太刀風に、獄卒惡鬼にひとしき次郎、打つてかゝるを追つかけ追詰め、錦の御旗業通にて、取得し上は若宮を、いよ〳〵賴むといふ聲ばかり、姿は消えて失せにけり〳〵。

倭假名色七文字

七變化の内　えびら　一二

〔解題〕　文化五年十一月森田座顔見世狂言「花兼見雪梢」の大切所作事として出したもので、坂東三津五郎の七變化所作事である。即ち田舍娘、源太、桃太郎は常磐津、官女、猿廻し、老女、三番叟は長崎の地で演ぜられ、就中、「源太」が好評であつたらしい。「役者大學」の坂東三津五郎の條に「七變化の所作事にて、小町、猿廻し、梶原源太、そとば小町、桃太郎、田舍娘、三番叟、さりとは達者な事。中にも源太の所作はさりとは手の利いた事。梅が枝の身振などして、又梶原の振など、七變化の中での大出來」とある通り、源太が殊に上出來であつた。その詞章が即ちこゝに收められたものであつて、俗に「源太」といはれる。「ひらがな盛衰記」以來馴染の源太を全くの遊冶郎と仕立てて梅が枝を借りて一の谷の働きによそへて廓の所作をさせるのが眼目。作者は二代目櫻田治助。常磐津小文字太夫(三世文字太夫)綱太夫、伊勢太夫、三絃、岸澤古式部・式佐等で出演。

■へ云はずとも。それと知れかし三つ大の。紋日日柄の約束も。引きは返さじ二度の駈け。梶原源太景季は。合 ■へ坂東一の若武者と。皆人ごとに昨夜から。今朝後朝の仲の町。味噌を揚屋の峯酒に。勝つて兜の緒を締めて。締めて結んで結ひ付けて。振りかたげたる梅ケ枝は。折を箙の太夫職。てんとたまらぬ花の顔見世。早咲の笑顔もよしや足元も。よろ〳〵もので歩み來る。三津五郎 へエ、イ。罷り出でたる者は。梶原源太景季といふのら者にて候。ソリヤ何ぢや。身どもに生田の話をせい。オ、話さうとも〳〵。先づ生田の森の合戰は。へさる程に平家の軍勢十萬餘騎。一の谷にぞ籠りける。合 味方の勢は六萬餘騎。範頼義經兩大將。二手に別れて押寄する。その時景季思ふやう。●へ色にはなまじ連れは邪魔。一人先駈け高名せんと。駕にも乘らず只一騎。■へ生田の森の柵ならで。神崎へとぞ差しかゝ

る。合新造禿花車仲居。あつぱれ粋よ通すなと。八騎が中に取込められ。頭巾羽織も打落され。大童の姿となり。へつい深入りの奥座敷。待ちまうけたる梅ケ枝は。それと見るより胸づくし。コレ何ぞいなう。源太さん。お前と一體斯うなつたは。並大抵の事かいな。へ初の御見に惚れた客。どこへも遲う行く筈を。一座の前も何のその。明日嬲られよと儘にして心でやぼな床いそぎ。しごきもわきへ投島田　へ枕の下へやる手さへ。つとめぎはなれ馬鹿らしい。女郎冥加に叶ひしと。樂しむわしを振捨てゝ。へ餘所の二階へ行かうとは。何ぼ強者さんぢやてて。氣強い男と取付けば。へ取つて突きのけ大音上げ。ヤアぬかしたり猫傾城。其手で是まで搔きのめされ。眞受に乘地でそゝり節。へ蓼喰ふ虫も好き／＼とやら。今年や南瓜も當り年。なぞと遣つたも氣恥かしい。突出されぬ内こつちから。切上げあげ貝ちよん／＼幕。どりやお暇と立上れば。イヤ／＼去なさぬ。へいや去ぬると。せり合ふ中へ若い者。アヽモシ／＼。こりやどうで御座ります。私がお貰ひ。和睦は田町の法印さん。へさんげ／＼の法印様よ。神おろし奇妙頂禮と。錫杖振立てまいかいな。アコレナア。錫杖を振らしやんせいな。エヽしん氣な人さんぢや面白や。へ浮きに浮立つ景季が。勝つ色見する箙の梅ケ枝。閨の早業分捕を。生田の森の功名と。歌舞伎の記錄にとゞめけり。

五節句の内 正月 松色操高砂　一三

〔解題〕通稱「太神樂」。作者瀬川如皐。文化十四年三月河原崎座「櫻姫東文章」の大切五節句の所作事として出したその正月の所作事。やつし尉と太神樂市川團十郎、やつし姥に高砂岩井半四郎、淨瑠璃は常磐津小文字太夫、綱太夫・喜美太夫・三絃岸澤右和左・式佐等であつた。「役者當撰鏡」の團十郎の條に「〔頭取〕杜若丈御兩人五節句の所作大評判、〔ヒイキ〕中にも高砂の尉と姥は幽玄なる振あつて直に引拔にて太神樂と鳥追諸見物一統

の悦びお手柄〲」と見えて居る。

參考迄に他の所作事を次に揭げて置く

三月　櫻草娘髻華（櫻草賣）長唄連中
五月　鬘分身五郎（矢の根）大薩摩連中
七月　誓比翼鳥鐘（玄　宗）富本連中
九月　禮獅最屓物（新獅子）長唄連中

以上五節句の中では、初めの太神樂と終りの新獅子とが上出來で、今も曲が殘つてゐる。

●へ今を初めの旅衣〲。日も行末ぞ久しき。■へ久しきためし君が代に豫てぞ植ゑしすみ吉の松は非情の物ながら。目出たき御代に相生の千年の緣と年毎に。若やぎ返る春の色。妹脊の操高砂の松も常盤の名所かな。團十郎中村四郎出へ枝を鳴らさぬ時津風。治まる國の有難き。民も戸ざさぬ浦の波。靜けき春の長閑さに。鶴の毛ごろもそで添へて木陰の塵をかこうよ。玉の箒に黄金のさらへ。さらりさら〲さしも世の。幸ひ心に任せては。何所の翁の鶴の曾孫の産まれ月日をいつぞと問へば。●へ福徳元年正月三日まだ卯の刻に安々と。へ此浦やすの神の國。神の御末の産聲高くうまし男の。あな嬉し延年不老を壽きて。和子の産衣を縫ひ奉る。あやが千反金襴緞子。加賀に加賀絹越後に縮。奈良のナアさんさゝらしに麗の白きを粂の山ぢの仙人だにも。通を失ふ繼路のならひ。喜美太夫へ繼があらずば浮世もあらじ。それよげに。色も世にしる三千年の。■太夫へもゝのこびとは西王母。彭祖が昔戀ゆゑに。七百餘歳をふる事も。■へなど面影の戀らめや。高砂住の江二木の松の夫婦と現じ睦まじき。神と君との道すぐに。月住吉の神遊び。●へ御代萬歲の小忌衣。はや住の江や高砂の。■へ松の言の葉散りうせず。まさきの葛ながき代の豐かなるこ

そ日出たけれ／＼。團十郎出〽供にはぐれた屠蘇機嫌。●〽その癖雜煮も腹八杯。■〽今朝の出がけに出がけにや今朝の。たぼが給仕で。〽エ、、、、舌鼓。■〽打てや囃せやこれさんまの鳥追ひ。半四郎出 〽イヤおつかな。わりや誰だ。ぬしの事なら小腹も立てぬ。てんとおてんとてんとう樣かけて。天から落ちた天人か。キミ〽エヽ置かしやんせ。口車丁字車は曳かれぬ袖を振りあふ緣もあろかいな。御贔屓うけにきそはじめ。■〽春の物とて箱たゝき。萬歳鳥追ひ神樂獅子。機嫌上戸の氣も輕く。●〽サアきなこもち。ツナ〽あゆばんせ。●〽ヤツトまかしよと打連れて肩もしどろに千鳥足。■〽八百八町まち／＼を。いさめ囃すや庭神樂。ツナ〽わだ三尺の劍を拔いて。■〽あまの岩戸の昔より。撥と太鼓の中よくて。男も女も笑ふ門。福神達の寶船。たから御藏にずつしりと黄金桝にて米計る。千町や萬町の鳥追ひが參りて。ツナ〽イヤオヽイ。●〽殊に廓の春景色。亥子は今年の惠方から。ござるお客のはつ子の日。キミ〽松の君たち根引きして。よい初夢のふみ枕。〽ふつつり顏も見まいぞと。いうたは嘘の可愛ゆさに。■〽通ひ編笠野暮らしい。おらが馴染は新町河岸を。キミ〽肩に手拭中路次を。きいたふうだに主や見たやうだ。コウ／＼寄つていきな。じれつたいよ素見して。■〽是も神樂の神いさめ。ツナ〽ほんに高天が原の立つ。來なさる度におかめやおかめ。オヽかめ女郎や。おかめ女郎うぬに見しよとて髮かしら。是が當世荒神さんの。お供へふうだと人ぢらし。■〽跡はかごまり水の曲。さて粟餅の曲づきや。ツナ〽すとゝんまかせてきた／＼／＼何餅に。こと／＼金持にこと／＼あれはさのよい。是はさのよい。やつとことつちやアうんとこな。生玉やでござい。名代々々。■〽浮かるゝ春の幸ひありや。惠みを江戸の女わざにも。春稼ぎ又ある方へと辿り行く。●〽是さ待ちなよ。イヤ待てしばし我が心。■〽やつちやかしらに叱られたんぽのかは鼓。なるもならぬも目もとのしほに。あたぼうあだ付あだもうけ。ナニとう／＼御神酒もさめて。是から芋の呑み酒や。獨り囃して太神宮樣へ。うつたり舞つたり惠方道。萬よしとぞ祝しける。

去年見し雪に
あらねども

再夕暮雨の鉢木

一四

〔解題〕 文政二年六月十六日から中村座夏狂言の大切物として上演。通稱「雨の鉢の木」。作者は二世櫻田治助。夏芝居として謠曲の「鉢の木」を飜案したもので、雪の代りに雨、鉢の木は蚊遣りの爲に燒くといふ趣向。常磐津綱太夫・同安和太夫・同瀧太夫、三絃岸澤式佐・同松藏。役割は佐野源左衛門常世中村芝翫、弟源次郎三十郎、松下禪尼に中村大吉、百姓太郎作中村傳九郎。本曲は文久三年七月中村座で再演の時には三世治助が筆を加へて、富本と竹本とのかけ合で出した。

●へ行方定めぬ道なればこし方もいづくならまし。大吉へこれは一所不住の沙門にて候。我この程は信濃の國に候ひしが、先づ一度鎌倉にのぼり、秋にもなり候はゞ、又々修業に出ばやと思ひ候。へ宿りもがなと夕立の、空まだ晴き小家の軒、たるきまばらに傾きて、月にはあらでもる雨を、凌ぎ兼ねたる庵の口、主か下司か前髮が、霤ふせぐ手に傳ふ、袂もつらき風情なり。へ尼前髪にイみて。大へ申し〳〵お若いの。夏の習ひと夕立に、先へも歸へも參り難し。貸のこの端にも只一夜。へ御勞志あれとありければ。三十郎へそれはお易きことながら主の留守にて候へば。お宿は叶ひ候まじ。大へム、ウ主のお留守とは、扨はこなたは御内業か。三十郎へイヤ主と申すは下郎が兄。大吉へそんならこなたも主同然。行の上に旅寢をすればと詠みかけしはそれは手弱女。これは又輪廻はなれし尼法師、色事の用心なら、氣遣ひあるなと宣へば。三十へそりやもうそつちに氣遣ひより、こつちに氣遣ひ有難い。へ尼法師でもばく〳〵の鼻のそげばた積であらうとも、どうしたこつちのはすみでは、油斷がならぬと走り込む。へ天下の賢者を持ちし身も、此返言に行暮れて、イみ給ふぞ殊勝なる。三吉へ世の中はなにか常世が佗住居。いとたゞ窓も内證の、軒の代

と鮎の魚、釣り得て歸る道もせに、小川なすてふ潦。芝へ扨も嚴しう降つたる雨かな。夫遶檐點滴如琴筑 支枕幽齋聽 始 奇なりと、されば今降る雨の音も へ元きく雨に變らねど、今は抓なす琴の音と、聞けば氣心なか／＼に。解分け衣もさしつまる、刀もにぶき素浪人。アラ面白からずの雨の口やな。へ松下禪尼これこそは以前の男の子が兄ならめと。大へなう／＼主の御方候か。待ち設けたる御歸り、前後を忘ずる此吹降り。今宵ばかりの御惠み、頼みまするると仰せける。芝へオ、それこそ易き御無心ながら、御覽の通りの此埴生。何とてお宿申すべき。大へいやとよ。草の莚も我が爲には玉の臺と有難し、是非に一夜の御芳志を。芝へさはあれ我等兄弟さへ、住ひ兼ねたる體なれば、留め申さん様もなし。是より十八町あなたに山本の里と申してよき泊りの候へば、暮れぬ間に一足も へ急がせ給へと言捨てゝ庵の内へぞ入りにける へ尼公は跡をつく／＼゛と。ア、如何にせん曲もなや、大へよしなき人を待ちつるよの へ浮世の人の情なきも民を惠みの屆かぬと、思ひ惱みて迯らるゝ へ内には弟が目をしばたゝき、三十へイヤ申し兄者人。最前是へ尼法師の宿の無心とありたれど、お留守の事故斷つてはござりまするが、せめてかやうの人に知遇いたさば其報いにて、惡事致した様にもあるまいかと。芝へ成程コリヤよう氣が付いた。しかし泊めては進ぜても、何を斯うとの。三十へハテ泊めてさへ進ぜたら、何も別に馳走にも。芝へ如何さまそれもそんなもの。吹降りと云ひぬかり道、遠くはよもやと表へ出で。へなう／＼旅人。お宿參らせうなう。餘りの吹降りに、申すことも聞えぬのなう へ痛はしの有様やな。常さへ惑ふ道の邊を、ましてあやなき夕まぐれ。雨を連れたる風の手に、笠を取られじ倒けまじと、一つ所に彳みて、打佗び給ふ其けしき、古歌の心に似たるぞや。苦しくも降り來る雨か三輪が崎、佐野のわたりに家もあらなくに へかやうに詠みしは萬葉に。かの大和路の佐野のわたり、是は又、東路の佐野のわたりの雨のくれに、惱み疲れ給はんより、見苦しくは候へど、一夜は泊り給へやなう。オ、イ／＼旅のお僧と招かれて、杖を力に戻り來て、大へヤレ／＼それは嬉しきお志。イヤモウ假の浮世に假の宿。芝へ假初ながら知遇の縁。三十へ一樹の陰の宿も。大へ此世ならぬ契りなり。芝へそれは江口の雨の木陰。三十へこれも雨の軒ふりて。大へうき

寢ながらの草枕へ是へとこそは請じけれ。㐂へイヤコレ弟、折角お宿申しても、何も供養致さんものが。三十へモシさもしい物ぢやが、此粟飯を上げましては。㐂へア、コレ〳〵。何と申すぞ暑氣拂ひに拵へた粟湯をか。イヤ其様な物も上られまい。エ、コレ御酒はあれども肴がなしへお菓子はないかといふしもの、置かぬ棚をや探すらん。心遣ひをそれと見て。大へア、コレ〳〵お二人。承れば粟湯とやら、暑熱をさます能ある物、それで日本一の醍醐味。御馳走に預りたし。㐂へすりやアノ粟湯を。それは祝著。ソレ〳〵源次その白湯へと、日まぜを心得粟飯を。藥罐の白湯へ搔きまはし茶碗へ移し差出す。切なる心尼公も賞翫あれば源左衛門。㐂へはづかしや旅の御僧。此粟と申す物、我等世に在りし時は、歌に詠み詩に作りたるをこそ承つて候に、今はこの粟を以て身命を繫ぎ候も、前世の戒業つたなき故へげにや盧生が見し榮華の夢は五十年。その邯鄲の假枕、一睡の夢の覺めしも粟飯かしぐ程ぞかし。㐂へ哀れやげに我々も、打ちも寢て。へ夢にも昔を見るならば、慰む事もあるべきに。㐂へなう御覽候へ。住みうかれたる古里の、松風の音聲そへて。へ寢られねばこそ夢も見ず。何思ひ出のあるべきと、そゞろ涙を浮べけるへ旅僧も哀れに催され、墨の袂をしぼらるゝ㐂へア、いはれぬ事に夜も更け行き、さぞ御僧にもお疲れならん。蚊帳の設けも候はねば、蚊やりを焚いて參らせん。それにて暫しお休みあれ。オ、幸ひかな某が、世にありしとき鉢の木を好き、數多持ちて候ひしが、かやうの體に衰へて、いはれぬ貧の花好きと、昔人に參らせて、今は漸うあれに梅櫻松を祕藏いたし候が、是を今宵のもてなしに、蚊遣りとなして參らせん。大へア、いや〳〵、是は思ひも寄らぬ事。お志は有難けれど、重ねて世に出で給ひてのお慰み。御無用になし給はれかし。へイ、ヤ、とてもこの身は埋れ木の、いつの盛りにいつの花、いつの時をか待つべきぞ。㐂へたゞいたづらなる鉢の木を、御身の爲に焚くならば、これぞ採菓汲水のへ法の薪と思し召せ。㐂へ雨もとぢては雪となる。かの仙人に仕へし雪山の薪へ斯くこそあらめ。我も身を捨人の爲の鉢の木、伐るともよしや惜しからじ。㐂へとく〳〵伐つて蚊遣りにと、いふに弟が立ちかゝり、いづれを伐りやそむべきと、暫し眺めて打ちわびる。經世は其間何がなと。㐂へ邊鄙と申し客人へ甚だの馳走ぶり。イヤほんに此頃

里の子供等がざれ唄を、某もうろ覺えにはござれども、時の興にお聞きに入れうか。大へそれは何より御所望が致したい。サ、シテ其唱歌は。芝へイヤ物とてござると手拍子に。へ逢うて戻る夜半の花が候もの、逢はで戻る夜半の花も紅葉も見もわかぬ。佐野の船ばし思ひをかけて。とても濡れたる袖ぢやもの。やれうきな厭へばちんちぎりが淺いよえ、深き戀路に沈み參らせう。芝へハ、、ハ、、イヤ蚊遣りはいかゞと言葉の內、火鉢に入れて差出し。三十へ松はもとより常盤にて、薪となすは梅櫻。芝へ伐りくべて今ぞ御垣守。三十へ衞士のたく火にあらねども。芝へいたくも更けし夜の蚊をへとく寄りて防ぎ給へや。大へ是は一入御親切。なほざりならぬ梅櫻。蚊遣りに春の心して、蚊の愁ひをば忘れしぞや。扨しもいかなる人の御行末。お名は何と候ぞ。芝へア、人がましや。古へを名乘るも流石面ぶせ。是こそ佐野の源左衞門經世。三十へ同苗源次經俊と申す者のなれる果て。兩人へ哀れと御覽候へや。大へム、すりや佐野氏の兄弟とや。よしある人とは初めより、見しに違はぬ武具のたしなみ。シテ如何のよしあつて斯くは成行き給ひしぞ。芝へいかにも、某零落の仔細語らん聞いてたべ。へいで語らんと座を占めて。芝へ扨も過ぎにし仁治三年。將軍の御供なし在京の折にのぞみ、武士の身に靑丹よし。へ奈良の都の八重櫻。古へ今に無禮の衆徒等、君へ忿怒の弓矢を張り、若草山に城構へ、それと忽ち六波羅の討手を蒙り、斯くいふ經世芝へ卽ち傳へしアノ鎧、まだ其頃はさはやかにへをどし立てたる金小札ざつくと着なし駿足に、一鞭あてゝひた〳〵ひた、風を起して眞先がけ。三十へげに某も聞き傳ふへそれと見るより惡僧ばら、放逸無慚のだんびら物。抜きつれ〳〵討取らんと、蚰蜒なんどの群るゝ如く。どつとをめいて馳寄する。芝へシヤ小ざかしと蹄にかけ。へほんはか〳〵破戒の罪、目にもの見せんと縱橫無盡、かけ立てられても懲りばこそ、又むら〳〵と追つ取り卷き、遁さぬやらぬと打ちかゝるをへ坊主さうから拜み打ち。或は袈裟斬撞木割。佛倒しにばた〳〵ばた、當るを幸ひ薙立て〳〵、千變萬化と秘術をつくし、一時に逆徒を討平げ、勝鬨あげて歸陣なす。芝へ折に鎌倉表より、父たる佐野の兵衞政經闇討ちに打たれしとの告げにひとしく下向の折柄、一族の讒に依り、御勘氣とて所領殘らず類葉たる源藤太に押領せられ、敵もそれと極れど、彼は大名寄付

蝶と衛の
名にし負ふ虎少將が
今やう姿

寄罠娼釣髭（てくだのわなきやつをつりひげ）　一五

かれず、時節を窺ふ故郷に、生甲斐もなき武士のヘ身の上憫み給へやと、兄弟かつぱと伏沈み、泣き口說くこそ道理なれ。ヘ旅僧も至極のことわりに衣の袖をぞしぼらるゝヘ折もこそあれ百姓太郎作。傳九郎出ヘ息もすた〳〵走り來て。傳九郎ヘ經世殿々々々。豫て敵とねらはるゝ。ヘこなたの縁者の源藤太。常々こちともチト小ぎもが入らぬ世話ぢやがおかばら立て、道陸神へ願かけた其御利生か、奥州へ討手とやらに拔けがけして、手勢ばかりで海道筋、道の掃除を庄屋殿が、知らせを聞くと駈けて來た。瓜や茄子を見る樣に、敵の首を斬ろならば。サア今ぢや〳〵と馬さくり、踏散らしてぞ引返す。兄弟聞くより勇みをなし。きヘ待ちまうけたる父の仇。兩人ヘいで首取らんと立上るを。大ヘヤレ待たれよと押止め、目出度う尼が門出と、何か心はしら紙へ、筆取上げてさら〳〵と、書き認めて、ヤヨ經世、今宵蚊やりに折りくべし、其鉢の木の返報に、加賀に梅田越中に櫻井。三十ヘ上野に松ケ枝と三ケの庄のこの御教書。きヘ時頼判と記されて、我へ賜はる。兩人シテあなたは。大ヘホ、ウ今は何をか包むべき。我こそは時頼道崇が母松下の禪尼ぢやわい。時頼坐禪に籠るの間、我鎌倉に歸りなば本領安堵の沙汰なさん。きヘコハ有難き御仰せ。然らば拙者は是よりすぐ、差しあたる多年の本懷弟は殘つて尼公の御供なせと身繕ひ。ヘヤレとゞめて。三十ヘ兄者人、敵は討手の鎧武者、立向はんに素肌はいかゞ、ちぎれたりともこの具足。きヘオ、いしくも心附いたりな。錆びたりとも此長刀。今こそ勇め痩せたりともコレ此馬に打乘つて。ヘ上野や佐野の船橋取りはなれし本領の敵父の仇。三十ヘ念なう本望兄者人。大ヘいそふれ經世と御聲の下。ヘ勇み勇んで駈り行く。

〔解題〕　文政八年正月十五日から市村座の「皐富士曾我初夢」の大詰として出したもの。作者は二代目櫻田治助。

通稱「釣狐」。朝比奈が虎少將を相手にして、この二人に釣狐の所作をさせ、更に禿を加へて望月の羯鼓の條をさせるといふ趣向で、狂言の「釣狐」と謠曲の「望月」とがもぢつて取入れられて、全體としては滑稽で賑かな吉原氣分を出すやうにして居る作柄である。常磐津の連名は

同	造酒太夫	三弦	岸澤仲助
常磐津	小文字太夫	同	和助
同	兼太夫		

役割は小林朝比奈坂東三津五郎、化粧坂少將岩井紫若、禿坂東玉三郎、大磯のとら瀨川菊之丞。

現行の稽古本以外に初演當時の正本を以て對校した。

■へ既に今樣始まりと。告ぐるや春の興　水鏡。照る日の雨に濡れてぬる。嫁入／＼と夜の殿。兼へどつこい此文ちよつ
添へて。合その仕手方は名にし負ふ虎　り盛りの可愛ゆらし。合爰に手業も狩　かいに。掛けて取ろとは大木の合切口
少將が振事に引。色ぢやなけれど小林　人の。畝や合田の畔。合ひよつくり／＼　太いの根ときた穿鑿。合しかし彼から
が。イロ手管の罠に釣狐。菊之丞紫若三津五郎出兼太夫へ　／＼こ。そこか合こゝらか。どこらが　參らせ候と。合思やこそやれ欲しかろ
我は化けたとコヘリ思へども。▲中地へそれ　よかろ合取りなり輕き鳴子罠。罠にあ　けれど。そこをぢらして釣狐。■へ釣ら
者とどこか三重の帶。ギンへ結ぶ由縁の　らぬ痴話文を。懸けて忍んで合道ばた　れ寄る身のしどもなき。これこんくわ
蝶千鳥。合姿も花の塗笠に。杖突きの　に。合造酒太夫へアレ又誰かいたづらな。　いの風情かや。三津へヤンヤ／＼。今日大
道二人づれ。あさげの風のそよ吹けば。　手管の罠に懸け腕の。とは合思へども　姫君この館へお入りにつき。召寄せら
犬の聲ぞつとした。そつとそげ立つ霜　筆の綾。よもしやと心惹かされて。捨　れた虎少將。マア是で釣狐は濟んだと
柱合薺交りの若芝に。かげろふまだき　ても行かれず足爪立て。ちよこ／＼　いふもの。是から跡が望月だ。菊へム、

そんなら。まだ何ぞせにやならぬのかいな。三津へオ、ヨ。嫌だといふと肝腎の。祐經にや逢はれないぞよ。葉へさうして。その両人へ望月とはえ。三津へサアそれにも子方が一人なけりやならぬが。ハテどうしたものであんべいな。■へ思案半ばへ揚幕を。下三郎出へ花魁の合跡大磯を合うかくと。禿千鳥は稚氣に。何の遠慮もない玄關。臆面なしにつかくと座敷舞臺の合橋懸り。それと見付けて走り寄り。へ申し花魁。爰にかいなア。菊へヤア其方は千鳥どうしてマア。玉へサア私やお二人さんのごさんしたお屋敷といふものはどんな所ぢやと。それで跡から來たのぢやわいな。菊へモシ朝さんコリヤどうしたらよからうと。云ふに小林。三津へ幸ひく。この千鳥を花若役の子方にして。羯鼓を打たせ。おぬし達が。獅子舞だが合點か。菊へその獅子舞とは。いつもアノ。葉へ格子で舞はす太神樂の事かいな。三津へマアあんなものよ。両人へさうして。あの太神樂はえ。三津へサアアノ太神樂はオ、それよ。■へ野暮な神代の其昔。高天が原や吉原で。合天照むしやう大盡の。合屛風の岩戸常闇に合鈿女といひしとんてきの。合女藝者が立上り。榊にあらぬ酒機嫌。幇間が神樂囃立て。合禿へやんもしろや。爰も茶釜が原なれや合はらと云つても腹が立つ合オヤく。■髷が藁なしになりやしないか。見ておくれ。アレサそんなにおいぢりでない。ねぶきになるよ。アノネわつちがおつかあさんがね合おかめやく。おかめ女郎やおかめ女郎合エ、厭だよ。アレサおよしな。お放しな。そんな事をおしでないよ。合昨日北風今日南風。明日は浮名の辰巳風。オヤ好かねえよ。■へ聡で知らせて目で受けて。かんならずやいのと。合約束したも。今に於いて今以つて。首尾もまあひもない事か。エ、エ、儘たらぬ。儘たらぬこそ浮世の中ぢや。娑婆世界ぢや。合次はお何と。合木綿襷。傳へて今に太神樂。清酒へその神の代の神樂獻。流れ廓の晝見世に。まだ身じまひも果てやらぬ。おはぐろ獅子の合付きかねて。合禿にぢれて幾度か。合向うの人へ遣り手衆や。■へ通ひお針は子持獅子。金じしつかふお客ほど。廻す勤めの意氣と張。へ厭なその夜は枕元。文長々と浮名取草まゝにして。■へ隣り座敷のはやり唄。三下りへ袖頭巾浮氣も今はほんになり。土手をしつぽりゆきの囁。只一人通ひ來る。どこやらの女郎衆は。上酒へ可愛い男を待つかいな。好かぬこちら

がしこなしは。最早御しんにすめぬや〳〵。ら。さらば我等は歸りませう。エヽならんぞえさりとては。■へ裲襠の下に狂ふや獅子舞の。三津へオツトその獅子舞は跡での事。マア花若に羯鼓を打たすが望月の本行だ。玉へそんなら私が羯鼓を打つのかえ。コリヤ面白いわいなア。合へ吉野龍田の花紅葉。合更科越路の月雪も。里の櫻に及ばりよものか。餘所は散行く。合二上りへ一つとさアのやアの

一夜あけぼの春霞。二つ二日は一様に。三つ見事な禮小袖。四つ夜見世の賑かに。合五ついつもの買ひての衆ともせうかいな。色ぢやもの。合六つとさアのやあのや。結ぶ縁の嬉しうて。七つ名に立つ振りの袖。八つ約束。九つこゝへ合消らんせ。へ入相に合衣紋櫻の褄取揃へ。仇に緋櫻合夜櫻おくる。合淺黄櫻のきぬ〴〵に合人丸櫻合約束の。手まり櫻を樂しみに。合一二三四い

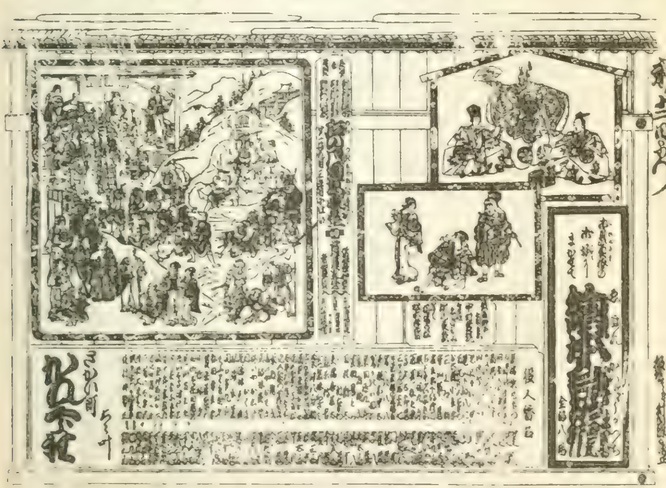
つも嬉しき合色の仲の町はなばなし。■へ既に時節も時知るや。合花を見よとて二つの獅子の。誘ひ連れたる牡丹花に合蝶も小蝶もひら〳〵ひら〳〵。我も狂ふや一連れ。へ獅子團亂旋の舞樂のみぎん。牡丹の花の盛り賑ふ俳優を。合爰にうつして奏でける。うつして爰に奏でける。

后の月酒宴島臺　一六

〔解題〕　通稱「角兵衛」。文政十一年九月十二日から中村座興行の「繪本合邦衢」の第一番目に三立目に出す。作者瀬川如皐。三番叟引抜にて角兵衛獅子、千歳引抜にて鳥追、翁引抜にていさみとなるといふ趣向にて、勇みの取持ちで角兵衛と鳥追とからませて、とゞ越後の俚謠を聞かせるところが山となつてゐる。常磐津と長唄との掛合であつた。作曲者は常磐津は岸澤式佐（後の古式部）長唄は杵屋三郎助（後の十世六左衛門）。役割は越後獅子角兵衛中村芝翫、鳥追ゑくぼのおとみ瀬川菊之丞、いさみ揚場の松松本幸四郎。

浄瑠璃へ神樂囃して町々めぐる　合同じ世渡り　合梅咲くや　長唄へ笠の內さへ覗かれて。人も見送る愛嬌は。てんと　合おてんと天から落ちた　合天人か　浄へわツちやいややの。なに馬鹿らしい　合とても色にはこんな身で。成駒屋ならそれこそは　ウタへこツちも首たけ濱村屋。なぶらしやんすな　合世は情　合旅ぢやなけれど道連れに。なるとはなしの　合跡や先。へこれ／＼お前はいつも得意場で逢ふ鳥追どのか。合へほんにお前もどうか見たやうだと思うたが。遠い國から此御江戸へ。へアイサ誰しも稼ぎは相互　浄へゑツちり越後の　合山坂越えて　合來て見りやほんに江戸の花。いつも黄金の　合眞盛り　ウタへ花に浮かれりや咽喉さへ乾く　合酒がな欲しやさりとては　合まだ／＼イヤハよいとな／＼。獅子の洞入り　合洞返り　合すめぢや互の思ふ事

浄へ岩木ならねば恥かしの森の烏か鷺ならせめて。一つ塒にオヽ嬉し。幸四郎へア、コレ／＼さつきにから。默つてこゝで見て居たが。何からまさうな二人。幸ひ俺が仲人役。今樂屋へ行つて酒を持つて來るから。二人ながら此處でゆるりと待つて居なよ。ウタへ待ちな町々御贔屓の。若者育てる通り者。捌くは年の高麗屋。宵の仲人の　合酒に花。持たせて奥へ走り行く。へほんに氣さくなアノお人。へよツ程通り者ぢや。是では



ちつとも氣兼なし。へ氣兼なしならコレ角兵衛さん。浮へこんなぶさまも眞實は。お前のお氣に入りたさの。蟻の恩ひも天とやら。どうで女房にやなられぬけれど。せめてやさしいお言葉に。あまえた女ぢやないかいな　ウタへ云うてもおくれな月がたの。田舍者ぢやとおなぶりか　合思ひくらべをせうならば。淺間の烟と煙草の煙。やにはに惚れた　合正直男　浮へ叉嘘らしい眞顏で人を。たまさかも　ウタへほんにさうなら山の奥　浮へ千尋の海に離れ島　ウタへ二人暮らさば都も同じ　浮へ嬉しい世帯であるぞいな　ウタへあるはいやなり思ふはならの　浮へ木賃の錢さへまだ取れぬ。遊び過ごして　ウタへ風ひいた。うつかりのろさのお恥かし　浮へほんに茶化した獅子舞さん。わつちもそんならひやかしの傳法肌でひやかしの　ナゲ節へ親兄弟にまで見放され。あかの他人の傾城に可愛がられう筈はない。菊之丞へオヤ。聞いたやうだよ。ウタへ雛の清搔　合ヤセつかいで　合搔き廻したる。てんてつとんだ情夫と客　浮へ仇な戀路の色廓通ひ。夜は軒端に立ちつくす。へエヽ待つわいな。お部屋の目顏が有るわいな。無理な首尾して逢うたが憎いかえ。さりとては。戀には粹も愚痴になる。これは五色の色の外　ウタへ新發田五萬石は荒そとまゝよ。新潟通ひがやめられりよか。へ氣さく惡性が浮世にや德で。ねまり地藏に色の願。徒跣參りの土ふまず　浮へ内の嬶どの疳癪押へて。夜間も晝間も三度栗　ウタへサノセノ〳〵サノセツセノセ。せつたら黄粉の　合稗團子搗いてほし　浮へ沖のえ。沖の題目波に浮んで　合風に搖られて　ウタへ朝日に輝く夕日に靉びく　浮へ南無妙法蓮華經。ウタへ南無妙法蓮華經　浮へあじよだか當世ひねりがはやる　合客と女郎衆の機嫌氣づまも逆さ竹　ウタへ犀濱三里を乘るとても　浮へ米山三里を乘るものか　ウタへ様はナアエ八ツ目のある鰻の性で　浮へぬらりくらりと。氣が多い　兩方へ國の訛りの笑ひ草　ウタへ身の生業は八百八品　浮へ八百八町の御贔屓を　ウタへお惠み願ふ　浮へお取立て　ウタへ仰ぐ舞臺ぞ久しけれ。

〔解題〕 通稱「宗清」。文政十一年十一月市村座の顔見世狂言「貢玉雪源氏贔屓」の三立目に出したもの。作者は奈河本助。作曲者は岸澤式佐。近松の「源氏烏帽子折」の第二段宗清館の場の飜案で、この場が居所變りになると鞍馬山の場で、この淨瑠璃の條は牛若丸の夢であつたといふ趣向であるので、淨瑠璃のキリにもそれが暗示されて居り、外題角書にもその意味が利かせてある。で、安政三年十一月市村座で再演の場合には、このあとへ長唄の「鞍馬山」を出したのである。役割は宗清に坂東三津五郎、常盤御前に岩井粂三郎。初演當時の正本と現行のものとによつて校訂した。

■へ君命受けて宗清は、身を片糸の夜の闕、守れば敵も夜嵐も、彌猛心の矢屏風に、隔て嚴しき板廂。三津五郎出へ降つたる雪かな。野も山もみな白妙と、いつか頭に積る雪。寒さに負けぬ宗清が、六波羅よりの上意を受け、左馬頭が枝葉の子供、見附け次第に首打てと、清盛公の嚴しき掟。その制札に、松を手折つて松を助くと、内府重盛殿の詞を賜ふは、何樣心ありげな御諚。兎にも角にも闕守は、話相手のないので退屈、睡魔を避ける此兵書。治世に亂の忘れぬ爲、かの孫康が雪あかり、どりや友人を開いて見ようか ■へ故郷を出でしにまさる涙かな。夢に別るゝ枕とは。げに定家が詠歌も 粂三郎出へ身にくれ竹の伏見なる、知邊のかたを尋ねんと、紫竹を出でて跡や先 ▲へ歩み習はぬ道芝の、雪の劍に裳さへ、紅さそふ照草の。今は果敢なき常盤の前。いたはしや今若丸、乙若君を兩袖に、包めど餘る憂き事の、世を牛若は懷に、凍る乳房を抱き寢の ■へ顏を見るさへいとゞ猶、歩み疲れておはしける。へ母樣危なうございます。必ず怪我して下さるなや。へオ、。今若よう云うてたもつた。紫竹の里を出でしより、賴りに思ふはそなたばかり。思へば昨日は昔にて、鏡が石に影賴み、三人の子供は儲けても、御運拙き源のこの行末。必ず平家の侍に、見咎められぬ樣にしてたもや。とから云ふ内伏見へも間もない。二人とも辛抱して歩いてたもや。へいへど乙若頑是なくへもう歩くのは厭ぢや〳〵。へア、これは又どうしたもの。今にねんねをさす程に、聞分け

て歩くものぢや。それ見や、向うが雪明りで、鳥羽の畷や木幡の里。■へやがて木幡の山越えて、馬はあれども徒歩はだし。君を思へば行くぞとよ。歩くものには花紅葉。花の手車手を引いて■へ歩みかゝれば雪風に、笠を取られて突く杖の、雪に涙も玉鉾の、その道もせを行悩む。へヤア夜中といひ怪しい女、稚兒を大勢つれ、この關を越す氣であらうが、爰は木幡の關。へ義朝が殘黨詮議のため、宗清殿の嚴しい堅め。サア有樣に名乘つて通れ。へサア妾は元都の市人、伏見のあたりへ知邊あつて、尋ぬる内に此大雪。二人の子供に道捗ゆかず。思はずも日を暮したり。どうぞ情に此關をへヤアさう吐かす程猶怪しい。サア女めと立上ればへヤレ待て兩人。聞けば子供を連れた女とな。源氏の餘類に似合ひの注文。身がぢきく／＼に糺してくれう。■へ何か思案の宗清が、凍る足駄に善惡の、邪正の道を踏分けて、關の扉の庭傳ひ。へ卑しからさる上臈の、供をも連れず只一人。見れば稚い子供を連れ。ハテあでやかな。■へきつと眺めて居たりしが。へコリヤ／＼女よく聞けよ。今四海漸く穩かなるも、先立つて亡びたる左馬頭義朝、大勢の子供あつて、諸所方々に漂泊なし、殊に五條の雜仕常盤が腹には。三



節供遊戀の手習　一八

人の男子あるよし。生け置いては後日の爲、見付け次第に首打てと、新に立てし此關所。この宗清が眼力に、一目見たれば逃れはない。常盤なりと白狀いたせ。〽様子問はれて塞がる胸。〽ホホそんなら三人の子供がある故に、サアその疑ひも子供故。子のある女はいづくにも〽ア、云はれなその言譯。子供の事は扨て置いて。云はずと知れた芙蓉の目眦。國色の聞えある常盤御前、外にあらう筈がない。身が引立て丶福原殿へ。〽アノすりや妾をどうあつても、ほんに思へば此身の濡衣。是非もなき世の有樣ぢやなあ。〽コリヤ沓ども、大事の落人關所の庭へ。〽サア女め立たう。■〽是非なく／＼もあらしこに、引立てられて常盤御前 ▲〽隙間もあらば遠近の、たつきも知らぬ關の庭、巣を離れたる黄鳥の ■〽吹雪に迷ふ風情なり。〽もう斯うなつては籠中の鳥。逃ぐるとて逃しはせぬ。然し一人ならず三四人思へば不便な事でもあり。オォ幸ひ／＼。■〽後に立てし高札の。雪打拂ひ文字のあや。〽コレ是を見よ。この高札に松を手折つて松を助く。〽操にかけし詞詰め。返辭をまつの高札に、手折るとも又助くるとも 〽この宗清へ仰せなれど〽生けては置けぬ落人の〽素性を明かして助かるか。イヤサもし常盤なら手にかける。又松ならば助けるとも、思案極めて返答いたせ。〽サア〱〱〽成程妾こそその常盤。とても叶はぬ此身の行末。サア潔う手にかけて〽オ、よい覺悟觀念なせ。〽拔放したる氷の刃、峯の吹雪に照りさそふ、光は夜半の月代と、見紛ふ内には如何に、刃物は外れて谷影の、岩の間に雪散つたり。〽ヤ、、そりや自らを助けんとて〽松を助くる制札の、掟きびしき淸盛殿。松の操を破れといふ、謎が解ければ其松の、雪も解けよと君の嚴命。〽スリヤ其松に松の操を〽色かへぬ松。〽色かへる松。〽シテ三人の此子供は〽小枝も共に〽雪を拂うて〽直ぐ様これより、サ、參らう。〽イザ御供と宗清に、助けられたる稚兒の、其源は谷の音、峯の谺と訪れて、南柯の夢と覺めにける。

〔解題〕　通稱「三人生醉」。天保四年六月十八日に三代目式佐の悴仲助が、四代目式佐と改めて、その改名の披露を兩國の中村樓で催した時に始めて封切りされた曲である。この時上卷は常磐津小文字太夫・同松壽齋・同男女太夫、三絃は岸澤式佐・仲助、下卷はワキ松壽齋の代りに若太夫、三絃仲助の代りに三藏で演奏された。大川の夕涼みの船中で笑ひ上戸、怒り上戸、泣き上戸の三人が生醉になつてそれ〲その癖を出して大騒ぎといふ趣向である。

へ四季の詠めも自ら、五つの節を代々にひく、小松の囃し竹の笛、波の鼓も春秋の、調に通ふ四つの海へしづけき空もほの〲と、通り神樂に明けそめて、豐年祝ふ鳥追の、聲も軒端に豐かなるへ海上遥かに見渡せば、七福神の寶船、長閑に風も富貴自在、徳若に御萬歳とは御代も榮えてましんます、君が千歳を打ちはえて、貢ぐ七野の七草に、拍子も揃ふ梅若菜、鞠つく羽根つく福引や、きみにゆかしき春遊び、頃も彌生の雛祭。梢に花をうちかけし、藤の姿に櫻のかさね、松の操を立てる雛、妹背を結ぶ檜扇に、ならす合圖の爪琴は、音も細殿に音づるゝ、しげき廊下の御簾のひまへ九重匂ふ櫻時、團扇になびく戀風もへ桃や柳のいたづらにへ色香へ互に爭うてへ鷄に恨みのかず〲も、別れて逢うて合せ鷄、ヤツト聲かけ己が羽に、はつしと受けて妻鳥を、蹴爪にかけて鷄冠の上、身ぶるひ鳥なき尾かたげも、これぞ互の攻鼓、鳴く音羽音の勇ましく、踏歌の節會ぞ勇ましくへ夜風山風富士颪、筑波東北風に兩國のサア　笑へオイ船公河岸を突いて下つし　腹へすてきに船が出たぢやアねえかへ名にし涼みの夕景色、三人乘りの騒ぎ船　泣へア、暑いこつちや、〱、イヤ又大川の涼しい事だえ、オ、涼し〱、イヤ同じ騒ぎでも、こちは野郎の三すくみ、あつちは三味線發入ぢや、へゝ畜生めへ色がある知りつゝ惚れた横戀慕、言ひ出すからはどこ迄も、立ててもらはにやならぬぞえ　腹へエ、でえぶ心意氣をやつつけるぜ　泣へアレを肴に此大盃でぐつと一杯飲み廻しとやりませうか　笑へヤそいつはよからう　腹へコウそんなら一つ注いで下つしトむちやくちや酒の筒茶碗、エイア、いゝ氣味だ、浴び

ゐばかりの瀧飲みに 笑へ浮いた機嫌のくせへと癖 へ三人生酔これならん 腹へエイ何だかむか〳〵癪に障つて來たぜ 笑へハ、、、、ハ、、、、なんだ癪に障つた、ハ、、、癪に障つたが可笑しい、ハ、、、、こいつは可笑しい〳〵、ハハ、、、ハ、、、泣へコレサ〳〵そのやうに譯もない事に腹を立てたり、可笑しくもない事に笑つたり、そして貴公達の顔がノヤ六チにも七チにも見えて、そこらあたりが、ぐゆり〳〵とママ、廻るやうでノヤ、どうしたらよからうと思へば、何だか悲しくつて〳〵、エ、、、思はず涙こぼれ雨、袂を絞るばかりなり 腹へエ、べらぼうめ、涼みに出てほえやアがる事はねえ、アレ見や向ふの船で美しい姉さんが、可愛らしい手で、アレ何かすらア、エ、モシ〳〵お押へなら、お相手を致しやせうぜ

へ縋ばつたりをちこちの、人目といふも知らばこそ、じつと身に添へ抱きしめて 腹へオヤでいぶおれを安くするな 笑へハ、、、コレサ〳〵、三人かうして極く粋な事づくしで、おもいれぶつ洒落ようと思つて來たのに、そんなにハハ、、、腹を立てたり、へ、、、泣いたりするも野暮ぢやアねえか、そつ達ア酒の上が悪いと思つたら、水の上迄やつぱり悪いぜハ、、、アレ隣りの船で何か始めるぜ、通り者の寢言ぢやアねえが、おつう調子を合せるぜ へ送つて出やる肌薄な、姿を見れば胸せまり 泣へヲヲ達えねえ〳〵、その胸迫りが尤もだ〳〵〳〵〳〵 笑へコレサ又泣くかア、困りもんだぜ 泣へそれだと言つて、これが泣かずに居られようかア、、、 笑へなぜよ 泣へアレあの新内を聞くにつけ、憂き河竹の苦界の身でも、實に惚れれ

ばあの通り、わしもちつとやそつとは掛り合つて見た覺えもあれど、今のこの身にエ、ひしと當つて熱い涙が、エエ胸先へどうも〳〵悲しうて、男泣きに此様にと、二人が袂に取りすがりへへ、、笑へハ、、、泣へエへ、、、笑へハハ、泣へへ、、、笑へハ、泣へへ、笑へハ、泣へへ、、、泣へわけも涙のすゝり泣きへ腹の皮よる、ム、、、ハ、、、ム、、、ハ、、、ハ、、、大笑ひ 腹へなんだ〳〵〳〵、先刻からぐつと蟲を押へて聞いて居りやア、泣きと笑ひの掛合だア。エ、見たくもねえ、いゝ加減にしやアがれ 笑へオヤ又怒つたぜ、どうも丸くねえ、兎角浮世は色と酒、ハ、、、コレ飲み給へ涼み給へ、酒の燗主はちつとぬるいが、サア機嫌直して一つお上り 腹へなんだ機嫌直して、〳〵がおらア氣にくはねえ 笑へヤところを是非とも 腹へ

いやだよ笑へコレ〳〵〳〵〳〵飲まし　の賑ひは、高尾川一吉野丸、家臺囃し　合へ見渡せば〳〵峯の梢も紅葉に、露が
やませ、のほよほ〳〵〳〵さんな〳〵　に騒ぎ唄、繁華の御代の様なれや　へ初　しぐれて面白や〳〵　へ立つ波が〳〵、
またあろかいな服へ飲んだらモ一つ、エ　秋や名も文月の戀の謎、銀河祭りの戯　瀬々の網代にさへられて、流るゝ水を
エ廻しやアがれ泣へオ、さうぢや、〳〵　れに、サアいつか女夫の約束は、ヨイ　堰き止めよ〳〵　へ晒す細布手にくる
〳〵、おさるは目出たやナ、泣くも笑へ　〳〵〳〵〳〵よいやサ。風も夜寒にな　〳〵と〳〵、いとしほらしき賤が業へげ
笑ふも服へ腹立つも　へ酒に興ある船遊　るまゝに　へさえ行く月の光まで、霜か　にや九日の菊の香の、殘るうれしき常
び、月も及ばぬ雪も及ばぬ、眺め花火　と紛ふ河波や、賤が手業に晒す細布　磐木の、枝葉繁りて榮えける、〳〵。

くりごとながら御最屓を　願絲縁苧環　一九

〔解題〕　天保四年七月十八日から河原崎座興行の「時代世話讀切功言」の第一番目六幕に出したもの。通稱「お三輪」又は「妹背山道行」。寶田壽助補綴。「妹背山婦女庭訓」の道行の補綴で、十津川の黑木賣の娘をからませた處が、江戸末期の淨るり物道行の特長を示して居る。出演者は常磐津小文字太夫岸澤市藏等。役割は酒屋娘お三輪市川鯉三郎、橘姫市川升壽、烏帽子折求女中島勘藏、十津川黑木賣おはま瀬川多門。

鯉へ言初めて心變らば中々に。契らぬ先　橘姫。へ面影かくす薄衣は薄い縁かと　▲へヤア戀人か。何故に爰まで跡を追鳥
ぞ戀すてふ。變るまいぞの睦言に誰が　氣にかゝる。其戀人を道もせの心も心　は。もしや塒の契りをも叶へてやろと
水させし憂き思ひ。升壽出へ包めど薫り　ならの里。鯉鯉出　升へ求馬様かっ　勘へコレ。　のお心かと。胸にはいへど詞には面は

ゆげなる草の露。消しとこそは休らひぬ。(唄)へ爰まで來れども縮の手前何とやら。そなたは是より早う館へ歸つて下され橘姫殿。(升)へソリヤお胴慾でござりますわいナ。●へ姫は思ひに堪へかねて。館を出でし其日より。君故ならば露と消え。花と散りなん我が命惜しからぬとは思へども。解けぬあなたのお心は。あんまり結ぶの神さんを。祈り過した咎めかと。恨みつ泣いつもつれ寄る。姿やさしき姫蔦の。放れがたなき風情なり。■へ折も向ふへ急ぎ足。名も十津川の黒木賣(多門出)へ黒木めせ〳〵黒木召せ。御所や町々お得意様へ。押賣りながら御贔屓を。眞砂のかずの濱村屋。いつ〳〵迄もかはら崎。詞の花や花道の千草尋ねて浮かれ來る。(多)へこのマア暗い所に美しい男と女の二人連れ。ハヽア聞えた。こりやお前方は色

ぢやの〳〵。(唄)へどうして滅相な。私は三輪の里の烏帽子折。その様な者ではござりませぬ。(升)へさうしてそなたは何處へ行くのぢや。(多)へサア聞いておくれなされませ。十津川の村里から丹波市へ朝商ひに行く黒木賣でござんすが。まだ夜の明けるか明けぬ內。この黒木を持つて往て市へ賣るのでござんすわいナ。(唄)へそりやマア大抵の事ではあるまいが。其せはしない中にも。定めて樣はしやるであらうの。(多)へサア それはな。▲へその逢初めははづかしの。森川村にかけられたかへし踊の稽古とて。夜さり〳〵の寄合ひに。ふつとせなあを相惚は。■へ踊の品がよいとやら。私もどうか乙聲の音頭の節が氣に入つて。ぞつとしんから戻りがけ ▲へ身に泌み〳〵と村雨は。ほんに結ぶのかみ細工。味な緣と思はんせ。(■二上リ)へ逢ひ

にゆこやれおきせんさまにヨウ。忍ぶ便りはヤレ憂やつらや。衣くゞり戸でぐわら〳〵ぴつしやり。南無三寶。背戶は茨の垣つゞき。顔も手足もちく〳〵と。こいつはたまらぬどうしよぞいな。しどもなや。(ナホル)へとからいふ間に明け近き逸寺の鐘にそこはかと。會釋こぼして走り行く。(唄三下リ)へお三輪は跡におくれ咲き。花野に蝶のせかれ行く。姿愛らしし可愛ゆらし。▲へ嬉しき中に縁言ぞ。いとし〳〵を苧環に。●へたへぬ思ひを亂れ合ひ。露置く野邊をうかノ\と。■へ道もせ氣もせ心さへ。おのが羽風に威さるゝ雀の森か宮が辻。尋ねさまよひ來りける。(唄)へヤア求馬樣。爰にお出でなさんしたか。サア私と一緒に三輪の里へ。へイエ〳〵さうはならぬ。サア求馬様自らと御一緒にお出でなされませいたア。へ取る手も

ゆらぐ胸の火の。お三輪は中を押隔て。雙へエ、聞えませぬ求馬様。そりや氣の多い。●へ惡性な。そもや私が初戀は。思はで三輪の過ぎし夜に。葉越しの月の面影は。お公家さんやら侍さんやら。知れぬ姿振すつきりと水際の立つよい殿御。▲へ外の女子は禁制と。締めて固めし縁結び。●へ主ある殿御を大膽な。斷りなしに惚れるとは。どんな本にもありやせまい。▲へ女庭訓躾方よう見やしやんせ。エ、たしなみなされ女中さん。▶へイヤそもじとて父母の許せし仲でもないからは。戀は仕勝よわが殿御。▲へイヤ私が。▶へイヤ私がと。■へこなたへ引けばあなたが留め。互に顔も朱奪ふ。是も戀路の習ひかや。二上りへ月雪花を名所になぞらへ言へば嬉しかろ。何れの月が氣に入らしやんす。何れの花が氣に入らしやんす。雪に戀路を鴫立つ澤の夕の文を。まきたつ山にのぼるも戀の習ひぢやものを。浦の苫屋と思はんせ。ナホルへ名に負ふ三つの名所かや。へ戀のしがらみ蔦かづら。縁の苧環いとしさに餘るお三輪が悋氣の針。男の裾に付くるとも知らずしるしの絲筋を。慕ひ慕うて尋ね行く。

奴島田の八幡諸侯
奴容形の太郎冠者　花舞臺霞猿曳　二〇

〔解題〕　通稱「うつぼ猿」。天保九年十一月市村座顔見世狂言「白旗世界樹々鏡」の四立目に出したもの。作者は中村重助、淨るりは常磐津小文字太夫岸澤式佐等、能狂言の「靱猿」を原據とした事は言ふ迄もないが、常磐津に於ては、既にこれより先、文化十二年七月中村座に於て福森久助作の「壽靱猿」を演じて居る。この曲は文章も狂言の「靱猿」とほゞ同じである上に、實演の舞臺裝置も能狂言式であつて、猿廻しは三世歌右衛門がこれを勤めた。その緣故によつて、今度四世歌右衛門が更に靱猿の猿廻しを勤めようとするに當つて、作者は工夫をこらして、徒に舊套に囚はれずに成るべく狂言臭を脱して歌舞伎式にしようとして本曲を作つたわけである。

で當時これを「新うつぼ」と稱へた。本曲は一讀しても分るやうに、江戸末期の淨るり物中での、能狂言歌舞伎化の一代表作といふべきである。役割は猿廻しイ四郎の中村歌右衛門の外に、女大名三芳野に市川九藏、奴橘平十二世市村羽左衛門、小猿中村琴次郎であつた。

前の「壽靭猿」が松羽目式であつたのに對して、本曲の舞臺裝置は全く面目を異にして居る。卽ち場所は鳴瀧八幡の場で、正面廻廊の中遠見で、上手に梅の立ち樹、下手に楓の立ち樹、ズツト下手に淨るり臺に常磐津連中居並び、紅白の吊り枝、直にヘ新玉の春ぞ……の淨るりになり「姿も花の返り咲き」の文句の上りにてセリ上げの鳴り物になり、橘平奴好みの着付け、靭を擔ぎ、三芳野素袍着つけ烏帽子にてセリ上るのである。

■ヘ新玉の春ぞと告げて人來鳥むつまし月の名にし負ふ、是も歌舞妓の周の春、姿も花の返り咲 九羽左衛門繰出 ■ヘ時も一陽來復の、當りを願ふ弓始め、弓矢八幡大名の、頼うだ人の代參に、向ひ町から又今年報賽の願事の、戀といふ字が花靭、脊中にしよつた太郎冠者、傘をさそなら春日山、霞を分けて梅笑ふ、春の野面の色ふくむ、こゝ鳴瀧の花の顏見世 九ヘ立歸り今を春邊とこの花の、色香爭ふ源平の、それは隔てし播磨潟、都の內はおだやかに、袋に弓の八幡大名 羽左衛門ヘ頼うだお人は北面の、更科主水經春様今日例年の弓始め、なほ泰平を祈りのため、此鳴瀧の八幡宮へ御名代の三よし野殿お役目御苦勞に存じまする 九ヘイエその御苦勞は橘平殿も互の事、願ひ叶うて又今年、お前と二人物詣、こんな嬉しいことはござんせぬ、もう御代參の役目しまうたからは、春の野もせを眺めながら、サア〳〵一緒と手を取るを振拂ひ 羽ヘア、是はしたり寄らしやりますな〳〵狂言詞もかたくなに ■ヘ烏帽子素袍を假初ならぬ、頼うだ人の御名代、御用であらば橫柄に太郎冠者あるかいやい ▲ヘハア御前にとうづくまる ■ヘこちは元より使はれ者よ、色戀の道白川や、人目の關の袖褄ならで、網引き餌引く四つ手引く、山ぢやエ〳〵木を引く麥の臼廻らば廻れ伊勢道者、昔は車今は錢投げさんせ〳〵、縞さん紺さん花色さんコレ〳〵コオレ小紋さん、や

てかんせと引戻された、アヽ長繩手心も倭な太郎冠者　羽へハヽヽもう道草のおどけは取置いてサアお館へ　九へイヤ〳〵まだ滅多には歸らぬわいな　羽へそりやなぜでござりますな　九へサア御主人經春様毎年の古例故、弓矢と靭をこの様に、持たせて氏神様へ参らせ給へど、今年はいから靭が損じた、戻りには靭になる皮を調へて來いと言ひつかつて來たわいな　羽へハア女中には似合はぬ事をおつしやりつけでござりますなア　へ話半ばへ向ふより、手飼の小猿の折よくも、二人が中へ駈込めば、びつくり飛退き　羽へヤア何だと思つたらこりやア猿であつたわえ　九へオヽ丁度な所へ放れ猿、皮を取つて幸ひの靭に　羽へいえ〳〵こりや大方主がござりませう、何でも猿遣ひなどが放した猿と見えまする　九へそんならその主に斷らいでは悪いかえ　羽へ何にしろ此主に逢ひたいものだなア　へ見やるあなたへきよろ〳〵目へこゝら在所の得意旦那をくるり〳〵と猿廻し　歌右衛門出　二上りへ隣村から今日此村の葺屋町へと御贔屓の、風に廻されまつかいな赤かんべ、初心は知れた初舞臺、罷り出たらめ出放題、酒のさの字のその隙に、見失うたる猿丸の、迷子の〳〵太夫やい、迷子の〳〵お猿やいと呼子鳥、紅葉にあらで咲きまさる、まさる目出たき猿曳が、紋もでつかり裏梅が、梅の林を浮れ來る　歌右衛門へオヽ、太夫爰にゐたかサ、爰へこい〳〵、寄るを隔てゝ　羽へすりや其猿の主は貴様か、コレ〳〵何と物は相談ぢやが、その猿をどうぞ讓つてはくれまいか　歌へ滅相な、この太夫殿を手放しましては、明日から商賣がなりませぬ　羽へ成程尤もぢやが、アレあそこにござる女中は、更科主水經春様といふお大名の御代參、今度賭弓の御遊に大内で用ゆる靭に猿の皮が入用ぢやほどに、あなたに猿を賣つてはくれまいか　歌へイエなんぼう大内の御遊でも、是ばつかりは御免下さりませ〳〵わびるにへこなたは附けあがりへそんならどうでも成らぬと言やるか、女と侮り上様の上意を聞きやらねば仕様がある　口へ素袍投げかけ大名の、威を張詰めし弓張の、矢先鋭く立ちかゝる、猿曳驚き飛びしさりへアヽもし待つて下さりませ、待つて下さりませ、成程からうなるからは猿の皮を上げませうが、射殺されては猿の皮に疵が附いて役に立ちますまい、ハテどうか仕様がと小首傾け點頭いてへオヽよい事がござります、猿の一打ちと申して、急所がござります程に、皮にも疵を付けぬ様に打

殺して上げませうへそんならきつと打殺してサ早う渡せへハツ●へ畏つてござると立上り、又あるまじきお望みは、只今殿様殺せとある。ならぬと言へばおれ共に、只一矢にて射殺すと、引くに引かれぬ強弓の、仰せはかなき今日の仕儀、コレましよ▲へ小猿の時から飼ひ置いて、朝夕の煙さへ、そつちが蔭にて樂々と暮せしものを情ないへ畜生なれどもよう聞けよ▶へせめて今度は人間に、生れ代つて來る樣に、敎へ込んだる一節にへエ、さりとは〳〵、エエ又あろかいな、さんな又あろかいな■へ是非なくなくも立上り、振上げし鞭の下、廻る小猿のいぢらしさへアレ〳〵今のを御覽なされしか、打殺さるゝ鞭とは知らず、船漕ぐ眞似をしまするわいのへそんなら何といふ、殺さるゝ事知らいで藝をするかやへ畜生でさへ物を知るに、いかに主命なればとてへ物の哀れも顧ず、どうしてそれが殺されう、命を助けた連れて歸りやへエ、それは誠でござりまするか九へおいなうへヤレ〳〵〳〵嬉しや、お禮に猿に舞はせませう、天下泰平御武運長久御祈禱に、猿が參つて能仕る■へ御知行もまさる目出度き踊るが手もと面白や、ハンヤコリヤ〳〵〳〵黄金の數々積み揃へ、庭に黄金の花盛り、花實も榮ふ目出たさよ▶へさらば我等はお暇と行くを引きとめへコレ待つた●へそりやまあ何の事ぢやいな▲私やお前に打込んで騙されて咲く●コレハ何ぢやい▲室の梅、鶯鳴きかける鶯菜、なと納豆の朝ごとに、飛んで行きたや主のそば●見れば見る程くつきりと、水際の立つよい男、男やもめと南瓜の蔓は、どこ迄も已灰原の中迄も、こちやお前ならば構やせぬ、お前と女夫になるならば、お薯や好きないし〳〵を、斷ち物したがへ、憎いかえ▶へエ、女子には何がなる、こがれ〳〵しお姿を●へ縮には書かせはせぬものを、のろけさ惚れたが解るまい■まひ〳〵廻るは煤拂ひ、枝も榮えて葉も繁る、お目出たや千代の子お目出たや〳〵●へおきよ所の笑ひム、、ム、、、ホ、、、ぐさ■へおどけ交りに小垣の小陰の小暗い所で、夜のおとゞのねんねこエ、念が屆いてぱつちりと、焙烙割とは大膽な、亭主をよくもさる座頭、二人袴の綻びし、中を押へて●へやるまいぞ〳〵花盜人をやるまいぞ■へおのれ逃げよとてついおいそれと、やつちやして來い寢ずの番へ棒と手拭枕元寢れにたわい轉寢の、寢息窺ひよる鼠、そろ〳〵這出しちよつかいに、箸箱膳棚を踏みあら

したる畜生め、是も喰はず樫の棒、す　殿こそ勇健なれ、泊り／＼を眺めつゝ、　コレ太夫おりてくれ　▣へさうに三人立
ちつてもぢつてかぎやりや　●エイ／＼　千秋や萬歳と、俵を重ねてめん／＼に、　ちかゝり、屆かぬ梢の綱渡り、三筋の
▸トウ／＼　▣やつとうの、納め太刀豐　樂しうなるこそ目出度けれ　へ立舞ふ内　霞猿曳や、橘薫る花舞臺、笑ひ興じて
かの御代の一踊り　二上りへ一の幣立て二　に以前の小猿、あたりの梅へ駈上れば、　祝しける、
の幣立て、三に黑駒信濃を通る、船頭　見るより悔り　へアレ／＼猿が梅の梢へ

一つ家に遊女も寐たり芳宜と月　忍夜戀曲者　二一

〔解題〕外題は後に「忍夜孝事寄」と改めた。通稱「將門」又は「瀧夜叉姫」。作者寶田壽助。天保七年七月十五日から市村座興行の「世善知鳥相馬舊殿」第一番目六立目大詰に出したもの。大宅太郎光國が源頼信の命を受けて將門の餘類詮議のために相馬の古御所へ忍び入ると、將門の女瀧夜叉姫が京島原の傾城如月となつて色仕掛で味方に引入れようとするを、光國はその本姓を知つて相爭ふといふ仕組で、例の「嵯峨やお室」以下のクドキの場が名高い。常磐津小文字太夫岸澤式佐連中の出演。役割は、傾城如月實は瀧夜叉姫市川九藏、大宅太郎光國市村羽左衛門。

▣へそれ五行子（五雜爼）にありと云ふ。澄めるは昇る天津空。雨も頻りとふるの。山より落つる流れの身。うき音の
かの紹興の十四年。樂平縣なる陽泉の。御所に。解語の花の立姿。三下り九響出　●へ戀琴のそれならで。▣へ妻呼び交す雁がね
昔をこゝに湖水の。水氣盛んに浩々と。は曲者世の人の。迷ひの淵瀨きのどく　の。其玉章をかくばかり。色に手だれ

の傾城もこがるゝ人に逢見ての。後の思ひにくらぶ山。忍ぶ涙の春雨を。傘に凌いで來りける。羽左衛門へ大宅の太郎は目を覺まし。將門山の古御所に。妖怪變化すみかを求め。人倫を惱ます由。頼信公の仰せを受けし光國が。暫し目睡む其内に。見馴れぬ座敷のこの體は。正しく變化の所爲なるか。へ申し〳〵光國様。羽へ扨こそ變化ごさんなれ。イデ正體をと立寄る光國。女はおわて押止め。九へア、申し。様子いはねばお前の疑ひ。私や都の島原で。如月といふ傾城でござんすわいなア。羽へヤア心得難きその一言。波濤を隔てしこの國へ。傾城遊女の身をもつて。來り住むべき謂れなし。よし又都の遊女にせよ。つひに見もせぬ其方が。何故我をと不審の言葉。九へサアお尋ねなくともお前の胸。晴らすは過ぎし春の頃。羽へ何と。

九へ申し。口說キ●へ嵯峨や御室の花盛り。浮氣な蝶も色かせぐ。廓の者に連れられて。外珍らしき嵐山。▲へソレ覺えてか若様の。袴も春の朧染。朧氣ならぬ殿振りを。▲へ見初めてそめてはづかしの。森の下露思ひは胸に。▲へ光國様といふ事は。その折知つて明暮れに。女子の念が今日の今。届いて嬉しいこの逢ふ瀬。疑ひ晴らして下さんせ　そいのやいのと取縋り。赤らむ顔の袖屏風。光國わさと打解けて。へいかさま切なるおことが心底。左程に思ふ愛情を。棄つるは却つて本意ならず。疑念はさつぱり晴れたれども。武邊修業の我が身の上。望みを果さば兎も角も。それにつけても古への。東內裏の莊嚴を。思ひ出せばオ、それよ。●へ扨も相馬の將門は。■へ威勢の餘り謀叛と共に。企て並べし大內裏。驕者の振舞ひ都に聞

え。朝敵討手の三大將。頃は二月の百千鳥。眞先かけて押寄する。數度の軍も辛島に。集り勢の悲しさは。風に殘んの雪崩れ。むら〳〵ぱつと吹散つたり。平親王が最期の一戰。見よや見よやと夕月の。鹿毛なる駒に打乘つて。向ふ者をば拜み打ち。立割。ほろ付け。車斬り。斯くと見るより上平太が。放つ矢先に將門は。顳顬深に射通され。馬よりどうとあへなき落命。寄手は勇む勝鬨と。今見る如く物語る。九へ思へば無念と如月が。齒を喰ひしばる忍び泣き。さこそと光國詰寄つて。羽へ合點の行かぬ女が振舞ひ。今合戰の様子を聞き。頻りに催す落涙は。と見咎められてそらさぬ顏。へホ、ホ、、、。何の私が泣くもので。泣いたと云ふは。オ、それ〳〵。可愛い男に別れの鷄鐘。後朝告ぐる朝雀。雀が啼いたといふ事

いなア。●へほの〳〵と雀さへづる奥座敷。燈火しめす男ども。▲へ屏風一重のそなたには。まだ睦言の聞ゆれど。へ我は見足らぬ夢を裂き。早やきぬ〳〵と引締める。●へ帶隱さるゝ戯れも。▲へ憎うはあらぬ移り香に。また盃の數ふれて。三の切れたる三味線も。彈かるゝ程は彈いて見ん。仇し心の仇枕。●へ交さぬ先もあるものを。去なば去なんせよしや只。ひとり憂身を數へ唄。廓の手管に紛らかす。はずみに落せし錦の御旗。羽へコリヤこれ慥に。九へイヤそれは。へそれとは。へそれ。兩人へそれ〳〵〳〵そつこでせい。二上りへ一つ一夜の契りさへ。二つ枕の許しなき。三つ三重四重まはり氣は。いつまで解かぬ常陸帶。六つむごいと思ひはせいで。七つの鐘の恨めしや。艶めかし。羽へ扨こそ〳〵。相馬錦の此旗を。所持なすからは問ふに及ばず。將門が忘れ形見。瀧夜叉姫であらうが。九へイ、ヤ知らぬ。覺えはないぞ。羽へヤア覺えないとは卑怯の一言。肉芝仙より傳はりし。蝦蟇の妖術習ひ覺え。この古御所に隱れ棲むこと。叡聞に達せし上は。最早遁れぬおことが身の上。本名名乘つて降參なせ。九へチエ、。殘念や。口惜しや。斯くなる上は何をか包まん。まこと我こそ平親王將門が娘瀧夜叉なるわ。羽へ扨こそナ。九へ一器量ある汝故。命を助け味方にと。思ふ心が仇となり。見現はされし上からは。習ひ覺えし妖術にて。光國そちが命を斷つ。覺悟なせ。羽へ何を小癪な。▲へ怒れる面色忽ちに。柳眉逆立ちつく息は。炎となつて焰々たる。妖術魔術の業通に。流石の勇者もたぢ〳〵〳〵。梢木の葉のさら〳〵さら。魔風と共に光國が。襟髮摑んで宙宇の爭ひ。怪し恐し世にうたふ。時を繪本の忠義傳。歌舞伎に殘す物語撰き筆に書き納む。

乘合船惠方萬歲　二二

〔解題〕通稱「乘合船」。本曲の原作は天保十四年正月十一日から市村座興行の「祭禮歌會我花幡」第二番目大切

として出した「魁香樹いせ物語」であつて、當初は常磐津・富本・竹本・長唄で出したが、後に常磐津のみの所作事として獨立して外題も「乗合船惠方萬歳」と改められた。作者は三世櫻田治助。隅田川の渡し場へ、白酒賣（市川三猿）巫女（尾上菊次郎）大工（關三十郎）俳諧師（市川團三郎）渡守（坂東しうか）才蔵（中村歌右衛門）萬歳（市村羽左衛門）等が落ち合つて、思ひ／＼の振り事をするといふ仕組みで、初春の隅田川附近の洒脱風雅な氣分がよく出て居る曲である。作曲者は五世式佐（古式部）である。

へ賑ひは花のお江戸の隅田川。月の都も及びなき景色を爰に都鳥。いざこざなしの乗合と浮いた同士の渡守へ筑波根のこのも彼面と口眞似に問はず語りを庵崎の。横に素顔の富士びたひ。蓮葉者でも悪性は觀音さんへ願籠めて▲へ裸参りの子飼から。脊中に皺の出仕事をたゝき大工の共稼ぎへそんなお方と添ふならほんに。嬉しかん酒白酒とその御贔屓を山川に■へ比べやうなき有難さ。睦み咄の向うより■へ海上遥かに見渡せばへ五色いろどる寶船。よい乗合とわせられても。乗り遅れたはいぶかしなへ色にやかしこいそれ様なれど。なじよさつしやれたエ継知らずへイ、ヤ悔むなそこへ氣の付かぬエエ太夫ぢやなつけれど。何れも様へ改めて御祝儀申入りのあるへ芝居をちよつと立見して。ツイ遅なはる御無禮と。足を早めて來りける オ亀へヤレ／＼嬉しや／＼。わしは又向うへ越える船ぢやと思つた。ヤア美しい姉え達が。これは有難い／＼ 万歳へアコレ／＼その様に女さへ見ると埒もない事を。女のない國から參つた様に無性に有難がる事はないわさ。第一外聞が悪いわさ オ亀へアコレ／＼太夫様。はる／＼三河の國から斯うして來るもお江戸サアの美しい姉え達を見物がてらぢやて。マア一服吸ふべいかな 通人へホ、ウ扱は足下達も頗る好色家と見えるネ。極られたのハ、、、ヤ頼母々々 大工へ併しながら袖振合ふも他生の縁だ。何ぞ面白い咄をみんなやつつけねえ 女へほんにそれがようございませう 大工へ先づ初春の事だから白酒屋さん。おめへ先へやつつけねえ 白酒屋女へ左様ならばお望みに任せ。抑も白酒の始りは へ富士の白雪は朝日でとける へ解けたがどうしたえ

へ娘嶋田はサロ舌の半ばでサ寢て解けるへヤレヨイ〳〵よい評判で賣りかける　通人へ是は白酒の先生妙々ハヽヽ才藏へサア〳〵これから番匠殿。お手前の番ぢや〳〵　大工へエヽ仕方がねえ。そんなら大工道具になぞらへて。惚け咄をやつ付けべいへそも　へ番匠の始りは。叩き大工のこちとらが。聞いても浮の空仕事。嘘をつき鑿差曲尺を使ひ馴れたる友達とへ直ぐに裏釘かへして後は。ほんにしん氣な溝鉋　へ互に二世と誓さして。誓女くさび離れぬ仲をへ此頃は。聞けばお前はしん手斧。また新店に廻し挽き。憎くや節木の性惡とへサア〳〵是から宗匠先生。玉句を承りたうござる　大工へ發句とやらぼつくとやら早く聞きてえねえ。サア〳〵早く〳〵〳〵〳〵　通人家へア、さな宣ひそ。諸事風雅の狂道は士農工商のなりはひ迄も穿たねばならぬて。エヽ凝つては思案に能はずと申せば。各々騒がせ給ふな〳〵。エヽヽカウツト春風エヽ春風や　■へ春風や黑い羽織に小脇差。さしてゆらり〳〵と船場へおりやるへエイヤ甚だ酩酊エ。時に景色は未明の事に限りやすネ。白晝は埃まん〳〵として野暮ものたつぷコレ恐るべだネ　■へ跡を慕うてなまめて聲々サアサヤツトナへイヨ〳〵うつらか〳〵エ今のアノ茶を賣買する翁はアリヤ只者ぢやアござえせぬネ。淺黄の頭巾引きぬきギツク木名あるべだネハヽヽ〳〵。サア向うへ押出しやせうへ船ばりしつかと召された空には歸る雁の聲へ先月の月末か今月の月初めか。木へ往きの菜飯の田樂で朝飯とこてへやした。すると未明だから豆腐が一夜水中に御逗留。ヤ眞平と答へてどろんとけし。棹てふ物にてオイへはや直中へ出でにけるへ希はくは船楽急ぐべだヨ　■へこちらも急ぐ迄り船。程なく着岸へサア一つ聞し召せ所を重ねてへ薫りつん〳〵花に風。輕く來て吹け酒の泡へハヽヽヽアハヽヽハハヽヽヽオイ笑ひかうじて腹立てゝエヽ筋をいふべや泣上戸　▲へサア〳〵太夫さん是からお前の番ぢや〳〵へ是はまた迷惑。才藏仕方がないは。先づ初春の事ぢやからお目出度う壽きを。さらば御祝ひ申さうと　■へ鼓おつ取り聲つくろひ　●へやんりや目出度やナア。鶴は千年の名鳥なり龜は萬年のヨ御壽命保つ。鶴にも勝れ龜にもます今日このお家をば長者のしんと　へ祝ひ榮えましんまする　へ建初の柱をばヨ綾と錦で包まして　へ弓んと矢をばつけんさせて。是ンは火防の柱とて　へ鬼門を守らせ候へばへ一本の柱が一の宮ヨ。

二本の柱がにせんだか。三本の柱が榊の明神。四本の柱がしろくや天王五本の柱が牛頭天王〽六本の柱が〽六八幡とや〽七本の柱が七尾の天神。八本の柱が正八幡九本の柱が〽熊野三社の大權現とョ。十本の柱が十羅刹。十一本の柱をばョ十一面觀世音。十二本の柱オンハヤ藥師の十二神とよ。千本あまりの柱オンハヤおつ取り立て歡ばれたり〽誠に目出度う候ひける〽彌勒十年たつての後諸神の建てたるお家は〽雨が降れども雨落ちせず〽風が吹けども寶風〽ちと吹いてはョウ春風よ。こちら〽吹いては御万歳。萬歳樂まで祝うて千秋繁昌参り榮えたんまふは〽誠に目出度う〽候ひけるとは是からそろ〳〵万歳〽オヤ萬歳〽エ万歳〽オヤ万歳エ万歳々々万歳々々万歳樂でお悦びだハ、、、〽さん度な〳〵三度鶴が舞

にて〽あだな舞に候はず〽昔また後白河の法皇様の御時に〽コレハイ〽熊野山〽御参内の折柄に〽コレハイ〽諸太夫の裝束で〽左折りの烏帽子にて〽コレハイ〽その時京都まで上りてはコレ大内の御門かや〽コレハイ〽お江戸サア〽下りてはコレ將軍樣の御門かや〽コレハイ旦那さんの御門と三幅は一對にて〽コレハイ〽元日に潔く開かア。ヤレきりゝやきりゝや〳〵〽オヤさらり〽エ、さらりオヤさらり〳〵〳〵〳〵〽さらりさつと才藏開いたハ、、、〽開いた〽コレ開いたりはだけたり。是樣の御身代は大きなものだ。でつかいものだに〽コレハイ〽又も取りては目出たき者が参る〽何が〳〵参る〽お歡びの大判や小判が〽コレワク佐渡で湧いた金かや〽お江戸で出來た金かや〽旦那さん〽湧くはヤレさつく

〳〵にやアざくら〽オヤざくら〽エざくら〽オヤざくらエさくらさつくらさつと。湧いて來たハ、、、、〽太夫さんあらけねエ〽コレ錢や金の湧きようたに〽コレハイ是樣のお座敷に掴み取りが始まる〽子供等も油斷するな〽畚ウ持つたらしよこない込めだに〽コレハイ〽木鉢を持つたらすつくひこめ〽升を持つたら計りこめ〽美しい姉さんにやア才藏なんぞは。內證づくなら五兩や三兩はさつくれべいに〽コレハイ〽そこらの姉樣の。ほう〳〵の廻りお鼻の廻り。おでどらてんの出臍の近所の〽、、〽、、べつちやりこ〽まつちやらこ〽べつちやらこ〽まつちやらこョイホ、ヤレ〳〵まんじやらこにまんさらこ。まんさら野暮ではどうした才藏ありやせまい〽代々榮えて〽御萬の長者よ猶万歳樂までもやら〽エお目出度

う 三下り 唄へサア〳〵是からは總踊り〳〵 唄へ初御空。霞色どる春の山。鶸や駒鳥歌よみ鳥の。さへづり〳〵梅の梢の下清水。姿うつして我影法師と。舞ひ狂ふ聲もしをらし百千鳥 へ共に嬉しき乘合に聲春雨と鳴りひゞく。初雷に人々は。我が家をさして急ぎ行く。

薪荷雪間の市川 二三

山姥松枝の蔦葛
怪童照葉の紅楓

〔解題〕前に出した「四天王大江山入」を「古山姥」と呼ぶに對して、これを「新山姥」といふ。嘉永元年十一月四日から河原崎座興行の「東都内裡花良門」の第二番目大切に出したもの。「古山姥」の改作で、數多く作られた江戸の所作事の山姥中、最も世に知られた曲である。作曲者は五世岸澤式佐。役割は怪童丸市川小團次、山姥八世市川團十郎、山がつ斧蔵實は三田の仕四世坂東彦三郎、猪熊入道坂東善次であつた。

唄へ四面峨々たる足柄山 唄へ麓に通ふ椎が本。巖に染める蔦かづら。君命受けて丈夫が 彦三郎出へ曲げたる肱の高枕。げに一瓢の樂しみの眠りを覺ます山颪 彦三郎へ山高うして雲行客の跡を埋む。君命受けてこの日頃かく山賤と樣を變へ。深山幽谷きらひなく。行きなり次第の氣儘酒。眠むた覺しにドリヤ一杯やるべいか へ酒量りなき盃に注げば映らふ星の影 彦へア、ラ怪しやナア。客星爰にたんだくなし。我が盃中に影さすは。扨は一定人傑のこの山中にありといふ。天の知らせか何にもせよ。奇異なる事を見るものぢやナア。ハ、ア是でよめた。心當りは山住みの女が連れるいつもの小倅。ドリヤ一服のんで待つべいか へ錦の袂引きかへて木の葉衣を露霜に。染めてあげろの山姥と。人や岩間の苔清水。心細道たど〳〵と杖を力に歩み來る 彦へオ、お袋。今日はまだ逢ひませぬの 團十郎へオ、山賤のよき藏殿。また焚火の御馳走しませうかいなう 彦へそれは忝けねえ。時に小倅はどうしましたな 團へさればいの。跡の麓ま

で連立つて來ましたが。大方猪猿を相手に角力がなとつて居ませうわいな 彦へそれは危い早く爰へ呼ばつせえ／＼ 岡へほんにマアおとましい事ではあるぞいなう ●へア、おとましとかこち言。それと見付けて 岡へあれ／＼御覧じませ。あの様な大きな石を弄んで怪我でもしたらどうせうと思やるぞ。道草も程があるコリヤ快童丸／＼ヤイ 小 岡次へオ、イ 合へ神樂月とて片山里を。笛や太鼓で面白や。足の冷たいに草履買うてたもれ。子を取ろ／＼どの子が目つき。あとの子が目つき。籠め／＼籠の中の鳥は。いつ／＼出やる。夜明けのばんにつる／＼／＼つゝはいた。木の根笹原くどりくどつてひよいと出た稚子 岡へコレ／＼怪童早うおぢやいなうへアイへ母を慕うて山道を。尋ね木吹きの梅の花よきへ母おらこんな花折つて來たよ ▶へ花打ちせうと振立てゝ悪戯盛りぞ愛らしき 彦へヤレ小倅よく歸つて來たな 岡へオ、よう戻つておぢやつたなう。サア／＼いつもの通り小父様へお辭儀ぢや／＼ 彦へオ、お辭儀がよく出來ましたな 小へ母様何ぞ下されや 岡へ大人しう遊んでおぢやつたその褒美に。此間から赤の衣織つて着せうと思うてな。山路巡らぬその隙に。五百機立てる窓の内 ■へ枝の鶯糸くり綿くり織つて着せたる母のほんそ子。里へさがれば里の土産は。ごん／＼太鼓にふり鼓。打つや空蟬のから衣。千聲萬聲の砧に合はす鼓の拍子 合へ面白や 小へサア是から馬事ぢや／＼ 彦へドレ／＼おれがいゝ物を貸してやらう。此鉞刀を馬にして 岡へ母が囃してやりませう ■へ月毛にあらぬ斧の駒 合取るや手綱の凛々しげに へ先退け／＼先退けろ 岡へお月様いくつ 小へ十三七つ 岡へお供はいくつ 彦へ八十八つ ●へほんにそりや若いなア 合へ母の胎内蹴破つて ●へ産所も産湯も山なれば。取上げお婆に事を缺き。產湯の代りに四方の赤。浴せられたかどつこもかも眞赤くなつて北嵯峨の踊りくどきは 岡へ何と言うた 二上り へおらが在所はな。奥山のてゝうちのでんぐり／＼。栗の木の木の根を枕にごされ抱いて轉び寢 小へ母様乳のまう へ乳飲みたいと足摺りは頑是なき子の習ひかや 岡へコレハしたりどうしたもの。サア／＼是から又いつもの山巡りの唄をして聞かせうぞや 彦へなに山巡りの唄コイツは面白からうわえ 岡へ何のいなア。昔語りも恥かしい。ありし姿もどこへやら。無明の流に髪洗ひ。若葉を見ては春を知り。妻戀ふ鹿の音を聞いて。秋と思うて深山路を。あした／＼

の山巡り●へよしあし曳きの山巡り■へ四季の眺めもいろ〳〵に二上りへ浮立つ谷の彌生山。合桃が笑へば櫻がひそる。柳は風の應揚に ▶へ誰を待つやら小手招ぐ■へ霞の帯のしん氣らし。締めて手と手の盆踊 合▲へなゝこの池にうつり氣の。恨み過しの梶の葉は。露の玉章落ちそめて▶へこがれて濡らす袖の梅。つい欺されて室咲の ■へ梅の暦もいち早く 合へ門に松立ちやナンナつい雛も出ろかと思へばほとゝぎす。菖蒲葺く間に盆の月。待つ宵過ぎて菊の宴。はや祝ひ月里神樂。ほんに〳〵忙しき浮世も我も。白雪積る山巡り〳〵 彦へホウ此程より心を付けて窺ふ所。柔弱非力をくやみ。横死を遂げし坂田の藏人が妻悴。この山中に籠ると聞きしが。若しや二人は 岡へいかにも其坂田の家を起さんと。山神へ祈誓をかけ卽ちまうけし此怪童 彦へさてこそ我が推量に違はず時行が妻悴よな。かくいふ我こそ源家の老臣三田の仕といふ者なり。さるにても女に稀なる志。その丹誠に山神の加護。悴が勇力さぞあらん。力の程が見たい〳〵 小へおもちれえ〳〵 岡へコレ〳〵怪童大事の所ぢや負けまいぞ 小へオヽ合點だ ■へ神變不思議の怪童丸。こなたはあしらふ勇力士。怪童いらつて傍なる松を根こぎに引拔いて。につこと笑つて立つたりしは。人も恐るゝばかりなり 彦へ松の根こぎ面白い。サア打つて來い怪童丸 小へ合點だ ■へ打つてかゝれば身をかはし。すかさず剛氣の力瘤。幹より腕の節くれて。しつかと摑めばめり〳〵〳〵へえんや〳〵と捻合ひしが。中よりやつと捻切つて。左右へ分れて立つたりしは。目覺しかりける次第なり 彦へホウ力の程は見えた〳〵。今よりしては頼光公の家臣となし。父が家名をその儘に。坂田の金時と名乘らせん悅べ〳〵 岡へハハア有難や忝や。コリヤ怪童今日から坂田の金時といふ侍に成るのぢやが嬉しいかや 小へそんならおれは侍に成るのか嬉しい〳〵 岡へさりながら今別るれば。此母はもう逢ふ事はならぬぞや。コレ怪童爰へおぢや ●へ夫の形見と見るにつけ。そなたの大事さ大切さ。今日別るれば今宵より。母一人寢の閨の内。さぞ面影のなつかしかろ。頼光公へ御奉公勤むる暇の明暮れに 岡へ武術を勵み立身せよ。必ず〳〵人様に ●へ山姥が子と笑はれな。今別るゝとも此母が ▲へそなたの影身に附添うて。猶行末を守るべし。とはいふものゝ是がまあ ●へ名殘惜しやいとほしやと抱き上げ抱き付き思はずわつと一聲が。谺に

響きて哀れなり 岡へかくては果てじ怪る所へ猪熊入道。手勢引連れ馳せ來り童ぬかるな 小へサア弱虫めらみんな一童丸。お賴み申すは仕様。名殘は盡き怪童丸を見るよりも 善次へ正盛公の上度に來い／＼ 善へ何猪小才な。者じ早やおさらば ●へ暇申して歸る山の意を受け。汝を味方に抱へんと出かけどもそれ ■へやらぬと組付く手の者を。

■へ峯も梢も白妙は。源氏の榮え盡きして見れば三田の仕。扨は源氏へ引取つ一度に摑んで礫投げ。勝つ色見する金なき。護る神がきは妄執の。雲の塵積たな 善へ知れた事だわ。怪童丸はたつ時が。眞先かける冬至梅。一陽開く智つて山姥となれり。山また山に山巡りた今賴光公へ推擧したわ。奉公始めに勇の花。歌舞伎の榮えぞ目出度けれ。して。行方も知れずなりにけり へかゝこいつらを引縛つて君へのお土産。怪

曾我兩社の祭禮に 勢獅子劇場花𥜽 二四

〔解題〕 通稱「勢獅子」。嘉永四年四月五日から「世界花小栗外傳」の第二番目の大切として出したもの。作者は瀬川如皐。曾我祭の趣向に手古舞姿で獅子を踊る仕組で、配役は、祭手古舞延吉（獅子）市川小團次、祭手古舞竹松（獅子）坂東竹三郎、大磯の藝者あづまやおよし岩井粂三郎、大磯のげいしやなにはやお梅尾上菊次郎であつた。のち慶應三年四月守田座で「競獅子富貴攝物」の外題で岸澤連中で興行した時には山王祭の趣向に改めた。

■へ春夏と惠はいとど厚原の。盡きぬ眞子が。菊も四つ手をかきつばた 菊次郎 粂三郎 出 が香を。顏もほんのり色上戸。音羽も砂の御贔屓に。木の下曾我の祭とて。皐 二上り へおつとなげ杖ヤレコレ小杖。をれ對の蝶千鳥。浮れ拍子に來りけるセリフ月賑はす氏子中 三輪 菅々出 人呼ぶ花の開柏 こみぢや。がつてんぢや。大和屋と梅 見渡す廓の軒毎に。菖蒲ふくなる若紫

と。紅の花褄くらべごし。重ね扇に三つ扇。よい相肩であるぞいな ◘へ花と月夜の色廓へ。曾我の兩社を御祭と 小團次 竹三郎 出 へ猿鷄の花踊り花。家臺練子若衆もそれ〳〵に。行きとゞかせる世話番は ●へ兄イヤ頭と招かれて。オットト受けこむ盃は。なほ御贔屓に大江戸の。風もうれしく戻り道。セリフ●へ今も噂は春毎に。虎少将の共名さへ。幾夜かこゝへ通ふ神。もつれた酒も解け合うて。▲へ祐成さんの殿ぶりに。欺されて咲く室の梅。●へ初元結のすみかづら。紋日をかせに小林が。留めた放せときぬ〳〵の。そこを祭の勢ひよく。▲へヤンレかつかれ〳〵。そこで中綱きりゝやしやんと。締め上げて。相の拍子が揃うた。▶へ今年初めてヤレコレナお役にさゝれたョイ〳〵。熊野のお山はのぼりが ▲へエ、ヤレョイヤア。引くに引かれぬ七里。はつち里九里から十里から。峰か江戸育ち。セリフへそれ建久四つの皐月ら谷から。あれから是までえんや是は闇。忿なら父の仇がたき。歩みの板迄さえいやとな。そろ〳〵澡入り公つトつ。ノ直す。即車ま雨のつれ〳〵に。英氣を



養ひ盛る酒に。オットちりから。ちつたぼう舞ひ謡ひ。長は閃めく太刀長刀。そりやこそ御狩が始まつた。怠くな者ども。怪我すな遊女。りんき太平さそくの兜。えものは。三味線。どんちやんの。音に驚き裾野の猿が。三番ふみ〳〵逃出す。鹿へ飛乗る曲馬。アリヤ〳〵〳〵〳〵えいとう〳〵日覺しや。セリフへ譯知る甲は猶更に。好いたらしさと表面には。云はぬが色の深見草。▲へ浮氣な風の友呼んで。心のたけの割りくどき。オヤ馬鹿らしいころび寢を ●へ人目にこゝろ奥の庭にすだく虫の音まつ身をこがす。ほんに螢のやるせなき。そこでせなぢよがおどけ節。▲へ主にサア逢ひたさに。びたぬか栄の葉エ。やろぞときめせサア。判じ物よのエ。■へそんじよそのこんだ色戀するなら。からべの早いが一の手 ▲へなぜに來ぬか。どの智惠さいかくはエ。我をれこんだとサアめけて來たよのエ ■へそれ來た。やれ來た。たらふく大盡。新造禿もお手てを引船に。こづく遣手にさゞめく藝子も。おひけのチリチツどん〳〵。太鼓が。唄ひはやせや大黒頭巾で撒出す惣花。さん〳〵盃。巡るお

しげりなんしえ。そのあとはどうでもなんなとちよつくら。ちよつとやらしやんせ。しどもなや。セリフへ今を盛りの名取草。花の姿の扇の蝶の。色に視しみ交す翅の面白や。へ時を感じて牡丹の花の。咲くや亂れて風にちり〳〵。散るは。〳〵。ちり〳〵〳〵。散りかゝろ花の露そひ 合方へ獅子の頭をうなだれて 合方へ比翼の蝶の共に狂ふや。谷を隔て あなたへひらり。此方へひらりへ舞ひ遊ぶ。へ眺めは梅に櫻時。菖蒲のけふも打續く。當りことぶく曾我祭。日出たかりける次第なり。

三世相錦繡文章

豐後がくだく邯鄲の枕
式部があやとる荘子の蝶

二五

〔解題〕通稱「おその六三」。作者三世櫻田治助。安政四年七月十日から中村座の二番目狂言として興行。義太夫

物の「八重霞浪花濱荻」（寛延二年三月豐竹座）以來名高いお園六三を材題としたもので、全部を常磐津の出語りとした。その場割り及び常磐津の主要な役割は次の通り。

仲町福島屋の段	常磐津小文字太夫	岸澤三藏
洲崎堤の段	常磐津國太夫	岸澤和歌吉
十萬億土の段	常磐津小文字太夫	岸澤金齋
墮地獄の段	常磐津芝江齋	岸澤式佐
極樂淨土の段	常磐津豐後大椽	岸澤古式部
三社祭禮の段 かけ合	常磐津小文字太夫	岸澤式佐
	常磐津國太夫	岸澤三藏
	常磐津豐後大椽	岸澤古式部

配役の主なるものは、福島屋おその片岡我當、福島屋清兵衛市川猿三郎、梶野長庵關歌助、福清女房おかぢ嵐小六、六三郎澤村訥升である。

吉原から深川仲町へ鞍がへしたかしくのお園が六三郎のために色紙を手に入れたい一念で惡者の兄長庵を殺し、抱主福清夫婦の情で六三郎と駈落をして、洲崎堤で心中し、亡者となつて三途の川を渡つて閻魔の廳へ來て、こゝで苛責されるが、とゞ長庵はお園の兄でなく却つて母親を殺した敵とわかる。こゝ迄がすべて夢であつて、大切の三社祭の場で六三郎が首尾よく色紙を手に入れてお園と夫婦になるといふ筋である。

趣向の奇抜と、全部を常磐津の淨るりとした事とが大いに變つて居た爲か、夏の安芝居ながら大當大入であつた。その結果常磐津の家元豐後大椽と作曲者古式部との間に功名爭ひが起つて、紛擾の結果遂に兩派分裂の素因と迄なつたといふ淨るりであつた。

序　仲町福島屋の段

へ世を夢と。荘子が蝶を住み替へて。譯深川のおの字名に。園と替へても呼び馴れた。仇名かしくと夕まぐれ。廻しが下駄の音高く。マハシへハイ。かしくのお園さん。山本でござります。梅本にも跡が付いてござります。梶へ是はしたり。お園はあんばいが悪い故。マハシへサア寄場へお斷りはござりましたれど。山本のお客はかしくさんが吉原にお出での時。お移になつた紀越様ゆゑ。病氣ならちよつと顔さへお出しなされば。梶へそれはマア生憎な。昨日までは當分の事と思うて居たれど。夕から飯も食べぬ程の事。よい様に斷り云うて下さんせ。マハシへイヤそれ程の事とは知らず受けましたはこちらが麁相。大事にして早う出勤させ申して下さりませと。人を思ふも身を思ふ。身勝手いうて走り行く。お梶は屏風そつと明け。梶へさつきにから間もある。藥でも飲みやらぬか。オヽお湯漬にしてやらうわいなう。そのへア、モシ。まだ胸がつかへて欲しうござりませぬ。梶へどうぞして早う落ち着かせたいもの。どれ胸先をさすつてやりませう。そのへ有難う存じます。ホンニ何から何までお氣を付けての御介抱。梶へア、わつけもない。モ大事にかけるは此方ばかりか。どの親方も同じ事。皆共すぎちやないかいの。そんな事いはうより。精出して藥も飲み。飯も食べて一日も早う座敷へ出て貰はねば。わしが肩身が狭い。男氣なこちの人故。何とも思うてはござるまいけれど。そなたを内へ連れて來たは。この春本家へ年始に往た戻りがけ。判人の善六殿の所へ寄つたら。梶の長庵殿が。兄の威光を笠に着て。住替へにさがつた其方を捉へ無理のあり條。殊には質にして遣うてゐた。今年五つになる子迄引放すとの無得心。見兼ねてわしが横合ひから手附渡して。そなた親子を抱へて戻り。仕立てて出した其日より。自慢して居た程もなく。一旦そなたを世話にして。子なかなした六三さんとやらのお身の御難儀。かてて加へて兄御の無慈悲。それやこれやが病の種。コレ必ず氣で氣を病んで。ひよんな事などしやるとの。年はも行かぬお松が難儀。まだ此上にどの様な事が出來ようとも。福島屋清兵衛が抱へた奉公人。悪い様にはさつ

しやるまい。恥かしい事悲しい事。必ず聞かせてたもんなやと。異見交りの介抱に。如才内儀の氣をかねる。お園は始終目に涙。夫の事に取交ぜて。兄のたくみのいとゞ猶。明けて云はれぬ胸の内。梶へどうぢや。ちつとは開いたかや。そのへお蔭様で落着きました。さうしてお松はどれに居りまする。梶へ案じやんな。主の晝寢をして居る傍に。草双紙見てゐるわいの。何にせい落着いた間にお湯漬をして。イヤ／＼勝手へ言付けて。米から粥を拵へさせませう。そのへ何のマア別段にならいでも。梶へハテお粥の煑えるは直きぢやわいの。其内も風に當てゝは惡い。サ横になつて居や。ドレ拵へて來てやりましよと。氣輕に屏風引きそばめ。勝手へこそは立つて行く。跡は病苦の夢うつゝ。へ足もしどろに。へヤリヤコリヤドツコイ。長へカウ／＼アブナイ。たわいなき。七郎助を肩にかけ。腕で梶の長庵は。長へこれさしつかりしにやいけねえやな。七へエ、イ。なゝ。生酔ひ本性違はずだ。コレかしくの事はいゝかョ。長へはて。ようござえす。もしそれは。愚老が匙加減。二番煎じのざは／＼と。騒ぎ打連れ歩み來る。門口から大聲に。長へ清兵衛殿お宅かな。生酔ひ連れでお見舞に參つた。清兵衛殿。お梶殿。アア空店だなさうだト。へちよつといふにも惡を持つ。言葉に心奥よりも。梶へアイ／＼今參ります。コレ／＼我身たち。其様に火を强らせずと。稈よう焚いてたも。七へオイ／＼お内儀。そつちの用は跡にして。こゝへ大事のお客様が御來臨なされたに。エ、さりとては。長へ不埒。不埒とあがり口。梶へオ、誰かと思うたら。七郎さん長庵さん。ようござんしたなア。長へイヤ。あんまりよくも來ませぬのサ。梶へあれ又其様なこと。お二人ながらきつい御機嫌な事ぢやなア。七へなぜ。エ。お前に振舞つて貰ひはせぬ。わしらが好きで我等が飲んだ。それが惡いかな。梶へホ、、、、。其様に云はしやんすと。私の様な不調法な者は。挨拶に困るわいな。長へイヤ困るといふは此長庵。お梶さん。此中の挨拶は。梶へサア。かしくと兄弟の縁を切つてさへ下さんすりや。跡金はお前の云はしやんした通り。併し。アノ子は昨日から。どうと寢てぢやわいな。長へさつぱり知らなんだ。ハア此屏風の内にか。どれちよつと容體を。へ隔て明ければ。そのへお内儀さんの御介抱で。やう／＼快う寢たと思うたら。兄さんの高聲に又氣合が惡うなつた様な。色色咄しもござんせうが。今日は何にも

云はいで。直ぐに戻つて下さんせいな。長へそりやモウ。大事の妹が病氣の障りになると云へば。直ぐに歸りもせうが。先づ脈體を。へと採み手して。上の空目に首傾け。長へイヤ／＼。何にも案じる事ぢやない。時候の當りぢや。幸ひ病家先で頼まれ拵へて來た丸藥がある。お内儀お世話ながら白湯を一つ。へと云ひさま出す懷の。鼻紙挾みのあはひより。迂散らしくも藥袋紙。心ならねば顏そむけ。そのへ何ぢややら知れぬ丸藥。私や厭でござんす。へとすげなう云ふを。へお梶はひつ取り。梶へほんに折角の思し召しながら。良玄様がお藥を下されて。必ず外の藥は飲ませなとおつしやつた故。長へそりやモウ。我人ともに醫者はさうしたもの。殊には懷妊。煎藥と違つて丸藥はさして身に障るものではない。ハテ大事の妹に麁相な物を飲ませてよいものか。それ見やい。此香氣の高いこと。サヽヽ。それよう噛み碎いて。オヽ／＼。白湯ぢや／＼。へと猫撫聲に背撫でさすり。長へ七郎助殿。お園は藥を飲みましたぞや。七へオオ。それでおれが胸もさつぱり。此上はこゝの内儀から受取つた二十兩の手附金。それ返してしまやれ。へと投出す財布取上げて。紐を解く間もあら不思議や。俄にお園が顏色變り。悶え苦しむ體にびつくり。梶へこれそなたはどうしやつた。心を確に持ちや。どこがどの樣ぢや。物を云や／＼。そのへサア今の藥を飲むと其まゝ。コヽ此お腹の内が。長へ苦しいか。オヽ其筈。ありや月よどみのおろし藥だ。そのへエヽヽ。長へしかし命に障りはねえ。ちつとの内の辛抱だ。それも是も。又六三めが胤を宿し。産み落しては足手搦みと。思案した故飲ました藥。苦しいぐれえは我慢をしやれな。梶へこれ長庵殿。手附けを渡せば。此お園はこちの抱への奉公人。長へイヽヤ。跡金の取引濟まねえ内はおれが妹。七へそれだに依つて戻しに來た二十兩。金さへ渡せばおれが妾。六三めが胤をおろしても大事ないわい。そのへエヽ聞くもうたてな七郎助殿。お前の妾になる程ならば。只一思ひに死ぬ覺悟。へとは云ふものゝ腹な子に。月日の光も見せずして。水に流すがいぢらしい。人を助くる藥こそ。藥とは云ふべけれ。生あるものをおろすのが。何の藥であろぞいの。砒霜石より斑猫より。此子が爲には毒藥と。聲を限りに身を震はし。悶え歎くぞいぢらしゝ。共に涙の女房は。お園を引寄せ氣を勵まし。梶へ尤もぢや道理ぢやが。それとても斯うならぬ先の事。この

上兄御があまさかさまなことと云ふと。そなたの望みはこちの夫婦が請合うて叶へてやる程に。ちつとも案じる事はない。爰に居ては面倒な。奥の圍ひへ床を敷かせ。早う良玄様をお呼び申して養生してたも。女子ども男どもも居やらぬか。へちやつと〳〵と呼立つれば。お針雇はれ下女まゝ焚。笑止なことやと抱きかゝへ。介抱してぞ入りにける。跡にお梶は胸を据ゑ。梶へサ長庵殿。跡金はこなさんの望み通り渡す程に。長へ面白え。田を行くも畔を行くも同じ事。金高の方へ落すが當世。七へコレ〳〵長庵。それちやア約束が違ふ。百兩と相場を定めて。爰へ持つて來た内。二十兩はお梶殿へ手附を返し。殘り八十兩を貴様に渡しさへすりや。アノかしくのお園は餓鬼ぐるみおれが代物。長へハテマアせはしない。お梶殿の方で幾らに買ふかも知れもせぬ内。七へイヤ〳〵。百兩と取極めた上は。是非とも此金はお身の懐へ。長へ是はしたりそれは無闇。七へイ、ヤ。長へイ、ヤ。へと戻せば拂ひ。押返し。やつつ返しつ揉合ふはずみ。茶の間の障子打拔いて。行方失ふけてん顔。七へエ、是今のはずみに。長へオ、アノ障子が破れて居る。確かにあの内。七へまつかせ。合點と有頂天。脛踏込みし一間より。ずんでんころり投足に。傍杖喰つて長庵は。長へアイタ、、。七殿。何をだゝけるのだ。七へイ、ヤ。おれはだゝけぬ。誰やらが。へと見返る後へ主の清兵衞。清へ長庵殿。オ七郎助殿もお出でか。さうとは知らず樂寢して。お構ひ申しもしなんだ。女房ども御馳走でもしやれな。長へイヤ〳〵構はつしやるな。今七郎助殿の投足の相伴して。腹中充滿食べたも同様。七へコレ〳〵長庵。なぜそんな弱音を出す。おりや怖くはないぞ。福島屋清兵衞。イヤ福清。面白い。なぜ此七郎助を投げたのだ。清へサア七郎助やら八郎助やら。寢入つて居れば顔も知らぬ。面白い。夢の胴腹。有無を言はずに飛込んだ狼藉者。七へイ、ヤ狼藉ちやない。おれが財布を。清へナニ財布とは。此事か。長へ如何にも小判で百兩はいつて居る財布。こゝの内へ廿兩の手附さへ返しやア。言ひ草なしに妹は。七郎助殿の方へ渡す約束。清兵衞どん。マアさう思つて下せいまし。へと云ふのを納戸に聞くお園。病苦を忘れ轉び出で。園へ申し旦那さん。私やあの方の所へ行くことは死んでも厭でござります。へどうぞお慈悲によい思案と。縋り歎けば。清へハテ。なんにも案じることはない。おれも晝寢の間を缺いて。

こゝへ出るからは。爪をくはへて引込まれもしめえ。へと云ひさま財布の金改め。清へオヽそんなら此金は七郎助殿の金か。七へオヽおれが金ぢや。清へコレが貴樣の金ならば。面白い咄もあるのさ。ドレそれへ參つて話し合ひませうト。へけぢめを桑の煙草盆。煙管片手に座に直り。清へナニ長庵殿。この中女房が手渡した二十兩は櫻銀。その壹步銀で返すと云はしやるのかな。長へ野暮を云はしやる。その一步銀をいつ迄持つてゐるものか。おれが金箱の妹を。懇望の七郎助殿。その二十兩も返してくれて。八十兩渡さうと云ふからの相談。清へそんならこの中の小判で手附の金を。長へなぜ〳〵。小判は通用せぬといふお觸れでも。清へあいさ。しかも昨日の今時分。さるお屋敷で紛失した。小判の裏にあり〳〵と。三星のこの刻印。

七へヤア。清へこの金所持なす者あらば。召捕つて差出せと。嚴しいお觸れの其中へ。丁度持込むこの小判サ。ムヽ。そんなら七郎助殿は同類で。長庵殿は上前取りか。イヽハ。二人ながら引つくゝつて代官所へ。七へエ。清へと云ふやうな。そんな清兵衞でもない。この金持つて足元の明るい內。とつとゝ早く歸らつせえ。へと投出す財布を七郎助。こは〳〵取つて內懷。長へコレ。〳〵。七郎助殿。そんなら其金は。七へ何の〳〵そんな怪しい金などを取扱ふおれぢやアない。長へそんなら早く手附を返して。七へサア返しは返すが。オヽさうだ。今聞けばこなたが請取つたは櫻銀。とても返すなら一步銀の耳を揃へて。よし又手附を返さずに。こゝの抱へになるにもしろ。惡足のある女を合點で。諸文したと云はれたら。人先へ出て口を利

く福清とも云はれまいかい。清へコレ。女房ども。此奉公人の洗ひ方は。お主がしたと云やつたが。畏へさいなア。此子に限つて。長へイヽヤ。お松といふ餓鬼を產ませた六三めが。屋敷を出て其後すつぱりと手を切つたと思つたら。また骨揃みになつた證據といふは妹の腕に。へと遁る手先引つとらへ。隱す腕の入れぼくろ。長へ六三命と刺つたるは。何と證據でござらうがな。へと目先へ突出す理の當然。ぎつちり詰まる煙管の火皿。お園が腕に押し當つれば。そのへアッ。ツヽヽ。畏へ可愛やそれをと驚く女房。清へコリヤ〳〵。そりや何をいふ。イヤサ。夕の酒の持越しで。氣合ひの惡いこのお園。まだな醫者より藥より。福清が情の灸。サ灸でなければお園が虫は治るまい。どうせ持病はうはゑの緣を切り艾。

それより早い荒療治は。よつぽど熱くと堪へて居やれさ。へあつい切ない辛抱を。させもが露の命まで。消ゆると知らず外面には。へ諸行無常の鐘の聲。寂滅爲樂と響くなり。聞いて驚く人心清へ折も折とて表に立つた相の山。提へホンニマア人の心を知らいで。早う去んで下さんせ。へと。やら腹立ちのひねり錢。門口明けて。提へヤアお前は六三さん。長へなんと。提へイ、エイナ。この中彈かせた六段戀慕。今度來たならこの子に逢はして。ヤサア。このお園に胡弓をすらせ。合はせ物して聽きませうと。約束はしたれど。時も時とてこの。サア。この子の病氣。長へへ、、その合はせ物も離れ物。胡弓の合はぬ浪人の。手ごとに乘らずと今の內。見切りが肝腎かん所。一も。二もねえ清兵衛殿。そんなもんぢやアごんせぬか。

清へそりやハヤ。義理も。情もめりはりも。水調子の仇彈きならば。こけやうが。はづれやうが厭はねど。互の心も合の手に。二世と音締めを定めたら。ひかぬが江戸の女郎の意氣地。ハテ。人の落日を救ひ撥は。うるさく思へど持てぬが人情。七へイヤもう三味線の受け答へ。七郎かんちん。さりながら。六三はおてちんチヤンコロなし。どうぞ終ひは。ナウ長庵。長へ直ぐに乞食。サ、、、、腹を立てずにとつくり思案を。そのへエ、知らんわいな。相の山へ思や二人が生き長らへて。居るもふしぎの內なるか。久しぶりにて相のや。そのへヤお前は。清へアコレ。相の山へま。清へエエ。かてゝ加へて間の惡い時。イヤサ。間拍子のわりい一こうな。デモ。三味線いらざる調子の狂はぬ先。手の內遣つて去なしてしまやれ。提へアイ〳〵。

相の山へ逢ふ瀬せはしき三日の月。長へどうやら怪しい。清へハテかけ構ひのねえ物貰ひ。それより大事のお園がおりのり。長へそんなら奥で清兵衛どん。七へとは云へ小胸の。提へハテ惡い様にはせぬ程に。清へマア御座らつしやりませ。へと。詞は輕く聞ゆれど。どこやら氣味の惡者ども。あるじ夫婦に誘はれ。心殘して入りにけり。奥口見廻し相の山。編笠とつて內へ入り。六へコレかしく。逢ひたかつた〳〵わいなう。そのへオ、六三さん。よう顏見せて。へと。手を取つて。とかく答も泣くばかり。六へサ、、、サ。逢ひたい見たいはそなたばかりか。娘が事もあらましは聞いたれど心ならず。いよ〳〵こゝの內へ證文してか。たゞし七郎助の方へ行く氣か。どうぢやぞいの。そのへサアその事でござんす。へと云はんとせしが。疾くよりも。添は

れぬ縁と諦めて。死ぬるが今はの思ひ出と胸を定めて氣を勵まし。その〽六三さん諦めて下さんせ。六〽なに。諦めいとは。その〽サア。わたしや七郎助さんの所へ行かねばならぬわいなア。六〽エエそりやどうあつても。兄の長庵殿が得心せぬ故にか。その〽何の。兄さんには構はねど。お前が元お屋敷のお首尾を損ねたは。わたしから起つた事。大切な色紙とやらの紛失も。お前の知つた事ではなけれど。わたしと云ふ者あつた故。もし放埒に質入れしたかとのお疑ひ。寳の詮議さしやんすとは云はしやんすれど。そのお姿では人交はりもならぬ仕儀。まだしも私と縁が切れたら。御歸參の取持ちをさしやんすお方もあるまいものでもござんせぬ。わたしとても。いつ〳〵迄もお前に引かされ苦勞しようより。寳を盡して金に

あかし。お松はもとより兄さん迄も。樂々と過してやらうと云はしやんす七郎助さん。まんざら憎うもない程に。わたしや行く氣でござんすと〽ずつかり云はれ。六三郎更に不審の晴れやらず。六〽是々かしく。いゝやいの。お園。そりやわが身本氣で云つたか。今年五つになるお松といふ子のある上。お腹にもわしが胤を宿して幾瀬の思ひ。これを苦にして煩うて居やるとの噂。どうぞ逢ひたい〳〵と。〽思ひ付いたる門付の。袖乞ひするとは情ない。世が世の時なら鑓一筋。馬も引かせる家柄の〽小柴の嫡子六三郎が。身の成る果てが口惜しい。まだ此上にどの樣な。つらい苦勞も堪へようと。思ひ詰めたるわたしを棄て。その〽さいなア世の譬へにもいふ通り。背に腹は替へられぬとやら。わたしの體一つなら。仕様もや

うもあろけれど。可愛さうに生先のあるお松まで。苦界の淵に沈めるがくやしさ。六〽サヽ。さう思ふは尤もながら。この身が本地へ歸參すれば。その〽道かしやんせいナ。お前の歸參も聞き飽きた。サ飽きたに依つて美しう別れて下さんせ。ハアテ。いとし可愛も昔の事。浮氣な戀に登り詰め。手鍋提げよとはには云へど。寳は乘りたい玉の輿。越し方思ひ合はせて見れば。つらい苦界もお前故と。今日この頃は心底から。お前の顏を見るのがいや。サヽヽ斷せ。突かしやんせ。どうしてお前に殺さう云はれるがくやしくば。斬らしやんれう。浪人すれば心迄。さうも未練になるものか。エヽ不甲斐ない。愛想の盡きた男やと。〽ぴつしやりうつゝ胸の闇。〽あやも知らねば六三郎。せきり苦しき心を沈め。六〽六年このかた云

ひ交し。つひに一度わしが云ふ事背いた事のない者が。打つて變つた愛想づかしは。オヽこりやてつきり。誰ぞに水をさゝれたのぢやナ。何のマアわしに限り。そなたを除けて浮氣心があつてよいものか。たとへ此上一年二年離れて居ても。互に刺つた入れぼくろ。お園命のこの腕を。抱いて寢ればわしにかはりはないわいナ。そのへホヽヽ。お前は兎もあれ。わたしはお前に別れた證據。へと右の腕を押しまくれば。六へヤコヽリヤ。燒消して。フム。そんなら若しやと懐へ。へ手を差入れて二度びつくり。六へヤヽヽ。そのへ是ぢやによつて。六へもう是までと脇差を。探れど丸腰。へ重なる無念。六へおのれ畜生待つて居よ。へと出で行く袖に取縋り。そのへイヤ〱〱。立ち端がなさに。氣相してござんすか。内へ去

んでも脇差は。六へヤア浪人しても六三郎。重代の刀は放さぬ。そのへそんなら見事アノ私を。六へいふにや及ぶ。そのへそれで望みも。六へ待つてうせう。へ無念涙に心も空。小宿をさして走り行く。へ跡見送りて張詰めし。お園は正體泣き倒れ。涙淵なすばかりなり。やゝあつて顔を上げ。そのへ六三さん。さぞ腹が立つたでござんせう。へ命をかけて誓文の。腕の黑は義理に消え。左り孕みは男の子。歸參をなさば跡目だと。喜ばしやんしたお腹の赤子は。兄さんの爲に跡もなく。言譯なさに死ぬ覺悟。せめて此世の思ひ出に。そのへお前のお手にかゝり度いばつかり。心にもない愛想づかし。この言譯は長い未來で致しまする。へ娘のお松は賴もしい親方さんに餘所ながら。お賴み申せば何一つ。心にかゝる事も無う。迷はず臨終しま

すると。手を合はしてぞ伏沈む。へ餘所の歎きは白紙の障子引きあけ長庵が。長へお園手前あんばいが惡いと云ひながら。そこに何をして。アヽ。又愚痴を並べて。モウ六三の事は思ひ切つてしまへ。それよりは七郎助の方へ行けば。今日は芝居。あすは花見。御新造さん〱と。云ふ日が出らサ。さうすれば此お兄さんも左團扇。七郎助の金を絞り取り。いゝ頃に見切つて來い。其上ぢや又われが好いた所へも遣つてやらア。兄が惡い事を云ふものかよ。うんと云や〱。何だ頭を振るは。わりやどうしても厭だとぬかすか。そのへサア。今にも主が本地へ歸參なさんしたら。お前を樂に。長へ置きやアがれ。お勝が茶をわかさア。一生たつても歸參の出來ねえと云ふはナ。六三が科になつて居る小倉の色紙の行方が知れた

か。それ知れめえがな。そのへサアそれ故に草を分つて。長へべらぼうめ。鉢斯か赤蛙を探しやアしめし。草を分けて知れるものか。たとへ知れても其色紙は。大枚の質にはいつて居るわ。そのへエヽ。そりやどこのいづくに。長へそれも是も。われが七郎助の心に従へば。たつた今でも手渡しする。そのへ又しても兄さんの嘘ばつかり。長へ嘘か誠か。どれ拝ませて。へと懐より。かねて企みし上包み。帛紗ほどけば飛立つお園。ちよつと持ち替へ。長へどつこいしよ。得心もせず引上げて六三に遣る氣か。イヤおつかねえ畫とんび。是もおれが百兩で質受けし。折を見合はせ大金儲けをせにやアならねえ。そのへサア其金も御歸參の上にては。長へイヽヤ七郎助と寝ぬ内は。金山築いても賣る事ならねえ。そのへさう云はしやんすりや斯うして。へと隙を窺ひ引取るを。放しはせじと争ふ色紙。中より引裂け二人は轉倒。長へヤヽヽヽ大枚の小倉の色紙。そのへたとへ裂けても夫の言譯。長へさう云やいつそ破れかぶれ。へと兩方取つてずた／＼に。引裂き棄つる傍若無人。折柄奥より駈出るお松。松へアヽ母さんをと取縋るを。へヤア邪魔な餓鬼めと蹴飛ばすはずみ。わつと一聲息絶ゆれば。そのへヤヽヽヽ。娘は死んだか。へもう是までと長庵が脇差抜取り斬付くるを。さ知つたりと身をかはし。手早く柄元しつかと押さへ。長へヤイ／＼／＼。わりや兄に刃物三昧するな。そのへたとへ兄でも無理非道に。夫の望み絶えたれば。死物狂ひ覺悟さしやんせ。へと又打ちかゝる修羅道の。隣二階は連彈に。人の心と花の盛。濡れにぞ濡れし鬢水の。長へあぶねえ放せ。そのへイヽヤ放さぬ。長へ放しやアがらにや。うぬ斯うして。そのへあいたゝゝゝゝ。唄へ道理流れの身ぢやものと。へ油斷見すまし後袈裟。長へヤア。わりやア斬つたなわりや兄殺しだ。兄殺しだ。へ人に誘はれ結ひたての。櫛の歯に追かけられし。つく／＼どうか鉾の。へ竹鋸も男の爲。長へヤア人殺しひと。クヽヽ口をおせへ。おせへやがるな。レヽムヽヽウ。へ階子揚屋の別れ坂。へ敵同士の兄弟親子。へ今日ぞ此世の別れ坂。へと。のたうつ兄を又一かせ。斬つて互に倒るゝ目先。そのへこれお松。娘やアイ。こりやモウ事は切れたか。可愛やなア。モシ兄さん。お前を殺したはな。わたしが死んだその跡で。六三さんへどの様な。難儀をかけうかと案じられ。惡いながらも勿體ない。お前ばかりを殺しやせぬ。あすとは云はず今宵の内に。お松を連れて

跡より追付き死出三途。へ他人交ぜずに越えまする。許して下され兄様と。止め刺す間に主の聲。清へお園やお園や。そのへヤヽ、アリヤ旦那さん。へ何と詮方かたへなる。蒲團を二人に打ちかくる。途端に見かはす顔と顔。清へお園。そのへエヽ。清へ是は又きつい恂り。どうだ兄貴はモウ歸つたか。そのへハイ。兄さんは確か今しがた。清へ何をとぎまぎ。オヽ爰によく寝て。何だお松もいつの間にやら伯父御の傍に寝入つて居らア。成程親は泣寄りだなア。それはさうと。先つきからよつぽど間があつた。藥を飲みやつたか。そのへハイ。いゝえ。清へどうしたものだ。コレ誰ぞお園が藥を温めて來てやらねえかい。へアイと答へて女房が。手づから茶碗藥鍋。捉へ勘忍してたも。今日は色々な人が。清へおれが内に居る時には。何も人愛想するに及ばねえ。まだろく〳〵に馴染のねえ内は。こつちから氣を付けてやらにやアいけめえぢやアねえか。そのへ何から何迄お内儀様の御介抱。その様におつしやつて下さりますると却つて罰が當りまするわいなア。捉へそれ〳〵その様に遠慮しやるが病の種ぢやと。良玄様がおつしやつた。一體そなたの病ひの原と云ふは。清へ是はしたり。役にも立たぬ事を云はつしやるな。お園だつて年はいかねえが苦勞人だ。併し十九や二十は箸の轉んだ事も氣に病むものだが。誰やらの發句に。けふは今日の風に任せる柳かなと。とかく浮世は風次第。目出たくかしくの几帳面を取替へて。お園その〳〵べく候でやつて置きやれナ。へと口合ひ交り何氣なく。云はるゝ程なほ玉の汗。斯かる折から門口に。廻へハイお園さん。尾花屋でござります。御病氣ならば。ちよつとお座敷へ。お顔ばかりでよいとの事。早うお頼み申します。へと云捨てゝこそ引返す。捉へ何の事ぢやぞいなア。めん〳〵の云ふ事ばつかりいつて。廻しにしては聞き馴れぬ。へと立上るを押止め。清へエ麁相な奴。此頃來た下廻しの喜助だア。そのへモシ旦那さん。わたしや行き度うござんす。清へハテよしにしや。丑の時參りが夕立に逢つた様な姿をして。どう座敷が勤まるものか。そのへさうで御座りまするが。お馴染のお座敷なれば。清へコレサ詰らねえ事をいへ。又ぶり返すと取つて返しがならねえ。さうして見やれ。今にも降つて來さうだ。へと覗けば暗きたそやの灯影。扨はさうかと推量の。胸にあるじは。清へムヽム。それもさうかい。寝てばかり居るより却つて氣が晴れて

よからう。捉へお前もマアわつけもない。夕から飯さへ食べぬ病人を、清へハテいゝわい。座敷は又さう案じたものぢやアねえ。捉へそんなら身じまひもせずに顔など拭いて。ちよつと往たら直ぐに戻つておぢやヤ。清へこれ/\その代り。しかけは立派にしてやりや。たしか尾花屋の客衆は御大身の御一座。是非下着は白無垢。上は何ぞ伊達な物を着せてやりや。帯は此中の蝦夷錦の方が派手でよかろ。捉へわたしもさうと小袖櫃。あくる手ぐりも手ばしかく。生地に着榮えの檜の木柾。板頭とぞ見えにける。清へオヽお梶燗が通り過ぎはしねえか。捉へほんに忘れたわいなア。清へエヽそゝつかしい。早く持つて來やれ。そのへお内儀さん行つて参じまする。清へア、コレ待て/\。そなたも病中の門出。一寸なりと口を祝うて。捉へほんに縁起に盃を取りや。どれ酌して。へとこ/\も。へ主は膝を立直し。清へなにお園。そなたは知らぬ事だが。おれも以前は中裏に居て。子供を大勢抱へ込み。店頭もした身上であつたが。近年の不仕合せから。此横町に逼塞なし、一人か二人の子供を抱へ取り積いで居る渡世。大黒柱とも思ふそなたが。ひよつと病氣で死ぬか。色事で駈落でもすると。迷惑なのはおればかり。と云つて金儲けをしようの何のと云ふ。そんな小さな清兵衛でもない。どう云ふ事かおらア貴様が一番不便だア。聞けば六三郎殿とやらも。きつう難儀をしてぢやさうな。女房が知つてゐるが。おれも若い時にや覺えのある事よ。互に思ひ思はれたのが身の詰り。そんなら死なう死にやんしようと。髪剃を咽喉に當てたが。イヤ/\と辛抱したればこそ。暑くなく寒くなくして暮して居るといふもの。何でも人は辛抱が大事だア。必ず無分別な事はよしやれ。相談づくなら其人の顔の立つやうもありさうなもの。捉へハテ夏ばかり日は照らぬわいなう。清へこりやおのしが云ふ通り違ひない。コレかしく。貧乏しても福島屋清兵衛は男だサ。手前味噌には聞が悪いか知らねえが。ひよんな事などして。おれの顔の汚れる樣な事してくりやるなヨ。是を晒さうばかりだ。サ客人が待つてござろに早く行きや。そのへ何のマア左樣な事を。捉へ必ず悪う聞きやんな。オヽアノ寄場の者は言ひ棄てゝ。よい/\わしが送つて。清へ何のそれには及ばぬ。ツイ角を曲るばかりだ。そのへハイわたしや一人でよろしう御座ります。左樣ならおかみさん。旦那樣。随分御機嫌よろしう。捉へアレ

此子はいの。遠い所へでも行くやうに。清へべらぼうめ。御機嫌いゝとは平素の挨拶だ。併し病み上りのおぬしこそ。随分達者で。サア機嫌よく勤めて來やれ。そのへハイとばかりに主の顏。見上げ見下す心の暇乞ひ。涙隱してくゞり戸を。出づる外面に佇む六三。六へおのれ先刻の。そのへモシ是見てたべと差出す書置。心ならずも常燈の。暗き灯影に讀下す。內には清兵衛腕を組み。梶へ旦那殿。最前からどうやら濟まぬお前の顏付き。清へハテ我が抱への奉公人を。駈落させに遣るのぢやもの。梶へエエそりや又どうして。清へコレ是故に。へと蒲團まくれば二人の死骸。梶へオ、こりや長庵と可愛やお松も。清へサ此病ひばつかりは。耆婆扁鵲でも治らねえ。これぢやによつて。今の様に言付けやつたは。一日なりと女夫にしてやつた

なら。あいつが望みも遂ぐる道理。衣裳も着せかへ立派にしてやつたは。賣代なし其日々々を送らせう爲。ア、追手の者に遣らぬになア。痛い足を引きずつて歸るであらう。馴染の淺い者なれど。心も素直な生れつき。可愛い事をさせたな。梶へほんに思へばいぢらしや。わしも素振を見てゐる故。さつきの様に異見すりや。泣いてばつかり居たわ

いな。へと夫婦あきらめ泣く聲を。立聞く二人は手を合はせ。洩るゝかたなき情の程。伏拜み／＼。思はずわつと聲を上げ。泣くを聞きつけ。梶へアレ誰やら表に。へと立寄るお梶を押しのけて。包み引提げ門の戸明け。清へ二人の死骸は引受けた。ソレ是も形見ぢや持つて行け。へハットばかりに押戴き。倒けつ轉びつ。三重へ走り行く。

第二　道行蝶吹雪　（洲崎堤の段）

へ春更けて。江戸の淡路の上總山。洲崎に通ふ濱千鳥。幾夜寢覺めの閨もなく。今は身で身をうら紫の。褄にかしくを反古染に。覺悟も對の晴小袖。六三お園へ蝶花の外を吹雪の二人連れ。狂ふともなくほら／＼と。風に押されて踏所なき。足弱車引き惱む。お園を抱きいたは

りて。背撫でさすり聲曇り。へ世の成行きとは云ひながら。長の病氣の其上に。苦勞のありたけし盡して。情と義理に身を捨てる。不憫の者やと抱きしむれば。顏つく／＼と打守り。へアレ又そんな勿體ない事云はしやんす。大切な寶を失ひ御浪人にした。元はと云へば私

故。今更いふも愚痴なれど。誓ひは二世と三世相。あけて數へて相性に。金と水とは上もない。よい子まうけていつ迄も。仲睦じう榮えると。書いてあるのは眞實の。本と思うた甲斐もなう。ヘアノ兄さんの胴慾故。子は儲けても情ない。苛責の責めのおろし藥。日の目も見せず其上に。幾せの思ひで育てたる。ヘお松も非業に先立ちて。お前へ何と言譯なく。くやしと思ふ一心に。ヘ兄を殺した身の罪科。親子兄弟夫婦まで。一夜の内に死ぬると云ふ。こんな因果があるものぞと。男の膝に縋り付き。前後正體泣き沈む。ヘ六三は心勵まして。ヘ是はしたり。二人ながらヘ居るならば。其歎きもさる事ながら。娘にも長庵にも。死ねばあの世で又逢はれる。今はの際に其樣な。愚痴をいふものでない。人は最期の一念に依つて生を引くといへば。心を淸う持つて死ぬるものぢやわいなう。ヘほんにさうでござんす。お松を先立て跡に心殘りはなけれども。旦那さん御夫婦へ御恩も送らず。六三ヘハテそれがやつぱり迷ひの種。もう／＼思ひ切つてアレ見やいの此マア土手から袖が浦。見晴らす夜半の春景色。そのヘ月は冴ゆれど晴間なく。涙の雨に掻曇り。六三ヘ袖の雫を後の世の。手向の水と花見月。そのヘ十八日を命日に。なるとも知らずせかれて後。六三ヘ逢うたも丁度跡の月。そのヘ數へて見ればヘ同じ日に。送りの船の三味線も。どこへ佃の上の空。心矢走にそれから崎は。文で知らせて松本へ。左にこがれ夜となく。書も洲崎で靑嵐。一寸ひぞりて三井ならぬ。八幡鐘の別れ路に。まめでと云ふを汐濱の。涙と共に落つる雁。富士の暮雪に夕照らす。軒場の月の影淸く。今ぞ後生の雲晴れて。即成佛と立ちどまり。六三ヘ病みあがりのそなたを步ませどこ迄往たとて。爰こそ人の死所と。定まつた場所もないもの。そのヘ其上わたしは兄さんを殺した科。繩目にかゝらぬ其先に。早う死に度うござんすが。此マアじだらくな姿。ちよつと帶を締直す迄待つて下さんせ。ヘと死ぬる今はに前後。所體つくろふ心根は。夫に見する女氣の。哀れさいとゞ柾木垣。洩れて念佛の聲かすか。念佛ヘ南無阿彌陀／＼／＼。六三ヘオヽ幸ひ。アリヤ靈巖の定念佛。聲をしるべに。そのヘ死出の山路へ。六三ヘ手に手を取つて。そのヘエ嬉しうござんす。念佛ヘ南無阿彌陀／＼。六三ヘ心靜かに支度しや。そのヘアイ。申しこの扱帶で足をしつかり結はへて下さんせ。六三ヘほんに亂さぬ樣に。わしが斯うして。

オ、是はしたり。きつう痛むであらうなう。そのへ何のマア。今死ぬる身にいとひはない。六三さん今一度顔見せて下さんせいナア。へ南無あみだ。南無あみだ。／＼。六三へ覺悟はよいかと。へ此世の念も明け近き。女夫の命短か夜や。今ぞ最期と引寄せて。泣顔残すな残さじと。笑顔つくれど手も震ひ。刃の立てども泣く涙。そのへコ、此胸元を。六三へオ、せきやるな／＼。そのへイエ／＼早う。へと女が勇めを力草。風さそひくる題目も。我を勸むる妙法の。利劍とぐつと貫けば。七轉八倒こはいかに。切尖咽喉の笛を除け。死にもやらざる最期の業苦。共に亂れて苦しみの。氣を取直し引寄せて。我と我が身に貫き立て。ゑぐる苦しさ曉の。一聲死出の田長鳥。あの世の空へと行迷ふ。

第三　十萬億土の段

へ行き迷ふ。へ馴れぬ冥土の旅の空。これや戀慕の闇の夜に。鳴かぬ鳥の聲聞けば。生れぬ先を問ふ事も。奈落の底か情ない。へ死んでも苦患は去らぬかと。暫し途方にくれにけり。そのへこりやまアどうして此様な。暗い所へ來たことぢややら。それにつけても六三さんは。へ何を隙取つて居やしやんすやら。ひよつと死後れて追手に捉へられ。憂目に遭うては居やしやんせぬか。と云うて先へ往た娘も氣がゝり。跡も氣遣ひ。こちの人いなう。六三さんいなう。へ聲を限りに呼びたつる。女の念の屆いてや。谷の嵐に谺して。六へオ、イ。そのへアレ／＼跡の方で返事した様な。六三さんいなう。六へオ、イ。そのへイヤイヤ／＼。ありやわたしの聲が谺とやらで響いたのぢや。ア、こりやどうしたらよからうなア。六へお園やアイ。そのへオ、ありや此方の人の聲。早う來ていなう。へ嬉しさ限り泣聲と。へ袖の追風髮の香を。知るべに辿り探り寄る。六へお園はどこに。お園。そのへこちの人。よう來て下さんした。逢ひたかつたわいなア。へ待つに甲斐ある蔦かづら。根がらむ草に躓きて。へオ、怖は。へと縋り付き嬉し涙ぞ誠なる。六へオ、尤もぢや。さぞ待遠に思やらうと心はせいたれど。わしも侍。跡で笑はるゝやうな事があつてはならぬ故。見事に腹を切りわが身の上へ俯伏に。そのへそんならアノ私が上へ。六へオイなう。そのへ嬉しうござんす。したが此まあ暗いこと

わいな。早う夜が明ければよいになア。六へエ、何を云やる。心中で死んだ者は四十九日の間暗闇を行くのぢやわいなう。そのへソウニんならお前はどこやらの女と心中した事がござんすな。六へ何のマア。實にわしは初めて死んだ故。さつぱり勝手が知れぬ。と云つて斯うしても居られまい。マア何でもそろ〳〵あつちの方へ行かうではあるまいか。そのへ今度はしつかりと手を引いて下さんせ。六へサ、我が身も斯うひつ付いて歩いたがよいぞや。へ歩めば歩む水音の。そのへ何ぢややらわたしや怖うて。足がちつとも先へは出ぬ。そしてマア氣味の悪い風が。アレ何やら顔へ。六へマアその様に云はいで心をしつかり持つたがよい。人ごみの中よりこの様な所ではぐれては取つて返しがならぬ。それ木の根が出て居るぞや。そのへほんにマア。少しは見えて來た様でござんすなア。へ流れに添うて行くにつれ。虚空明ろく煌々と。名に往還の三途川。へ渡し場にこそ着きにけり。そのへこれ見やしやんせ娑婆を立つた當座とは。打つて變つて此マア明るい事わいな。そして見やしやんせ。家のない所に門松が立つてあるわいな。六へさいなう。この街道には所々にある門松はの。ありや冥土の旅の一里塚ぢやわいの。そのへほんに餘所事に聞いては居たが、見るは始めて。何にせい、アノ茶店へ往て。足を休めて行かうではござんせぬか。六へ成程せく事もない。そんなら一服のんで行かうかいなうと、片方の床几に腰打ちかけ。女夫の仲も愛想に。吸付けて出す忘れ草。煙草に憂さを貼出しの。ビラは端唄の天狗連。こなたは昔の朝寝坊。ならくの落し咄から。劍の刃渡りいろ〳〵の。中に歌舞伎の櫓下。お園は目早く。そのへこちの人こりや芝居の番付ぢやござんせぬか。六へオ、さうぢや。ムム何ぢや。假名手本忠臣藏。役人替名。大星由良之助助高屋高助。早野勘平市村竹之丞。高師直中村歌右衛門ム、。本藏は誰ぢや。オ、故人の團藏。平右衛門が先の關三。定九郎が幸四郎。ハテよい座組の芝居ぢやなア。そのへこちの人、さうして判官とかほよの役は誰でござんすえ。六へホンニ判官とかほよの役割が見えぬわえ。モシ茶店のおふくろ。判官とかほよは誰がしますな。ばゝへオオお前方は番付の下の役を見てぢや故わからぬわいの。新入の役者ぢや故。番付の肩の所へ庵に出て居りますわいの。六へオ、成程爰に書いてある。エ、かほよ御前坂東秀佳。鹽谷判官市川團十郎。そのへソリヤ八代目の事でござん

すかえ。ばゝヘイヤモウ其八代目の判官で。地獄も極樂も半ら一面。腹切りの評判ばかりでござるわいな。六ヘほんに今の話も聞きました。シテ其芝居のある所は。ヘサア爰からはまだ餘程の道。アノ地獄と極樂の眞中でござるわいなう。そのヘこちの人早うその芝居をしたがそれに付けても娘も連れて行きたいもの。六ヘイヤナニおふくろ。ダ五つばかりの女の子は迷うては來ましなんだかナ。ばゝヘオ、來たとも〳〵。たしか名はお松とやら。そのヘオ、それ母樣おや〳〵。六ヘマ、、、せくには及ばぬ。ム、、さうしてどつちの方へ。ばゝヘム、此お方わいの。親に先立つて死ぬ不孝の罪で直ぐに賽の河原に行きましたわいの。ヘと聞く母親の氣も狂亂。そのヘ其賽の河原とやらは。ツイ御近所でござりますか。こちの人サアご

さんせ。ヘア、これ〳〵跡先も聞かず。ハ、ア扨はあの子の母御で。フウそれにしても年若な夫婦の衆。マ、、、氣を鎭めさつしやれ。娑婆で仕置いた行跡次第で。そりやモウ逢はれぬ事もなけれど。斯う見た所がハヽ。お前方は心中してござつたな。ヘエ、。ばゝヘア、コレ何にも驚く事はない。襟にかけたる長ぶさは。夫婦和合の日蓮宗。ヘエ、何より罪障。ヘ消滅と。持つて廻つた愛想に。お心よしとホ、、、、。ばゝヘ見せにけり。六ヘ扨は噂に聞及ぶ。三途川の老女とは。ばゝヘアイノ私が事でござります。二人ヘエ、。ばゝヘイヤ〳〵此樣に顏は怖いが。ハテ人は外見より心とやら。そりやもう昔は色々な。罪人が夜晝となく群集した故。行輪に暮らしたが。泰平になつてこの方。罪ある者は千人に一人たり。商賣はあがつたり。

せうことなしの。ヘ立場茶屋。今日この頃は其日々々を送りかね。この上何とせうぞいの。婆は名ばかり内證は。後生菩提で心は佛。そのヘさうおつしやればどうか見申した樣な。ばゝヘオ、その筈。お前も新宿へ島田の頃は月參り。六ヘ是が誠に地獄で佛。ヘ變つた所で逢ひましたなア。ヘと見かはす顏は娑婆以來。盡きぬ縁とぞ喜びぬ。ヘ折も向うへ二度荷を付けて越し來る地獄馬。頭は人間馬士いらず。馬ヘ無間なア血の池我慢もなろがなアヨ。六ヘ越すに越されぬナ劍の山ヨナアエ。ヘソレ熱鐵地獄は熱いが性根だ。色ごた奈落の底だぞ〳〵。馬ヘ婆さん出店へ狀でも遣らつしやらぬか。ばゝヘ忝ないがセウ來月が稼日ぢや程に。馬ヘほんになう。一年にたつた二度なれど月日の立つは早いもの。だ。おらも此頃は足瘻が發つたから。

婆婆へ出たついでに四谷の馬醫者へ行つて。一廻りも鍼をして貰はうと思ふから。戻りにはこなた樣を乘せて來べい。ばゝへそれは丁度よい。したが療治して貰ふなら。鍼より灸の方が利くではないか。馬へエ、馬に灸がいけるもので。譬にせえ馬ハア鍼の療治と云ひますわい。ばゝへエ、又年寄をなぶりをるか。馬へハ、、、そんならあつちで逢ひましよと。驛路せはしく急ぎ行く。そのへテモ珍らしい。首が人間で體が馬。私や初めて見たわいな。六へあれはどこへ行くのでござるナ。ばゝへありや地藏の株の三度飛脚。ア、婆婆ならば室町の京屋ぢやの。瀬戸物町に島屋。或は天滿屋なんぞの皆同店で。驚風屋死ぬ屋。癲癇屋など云うて。年中あつちへ生きたり。又こつちへ來たり。イヤモ大抵の事ぢやござらぬわいの。六へハテなうシテ極樂はモウこの近邊でござるか。そのへオ、嬉しや。早う宿屋へ著いてわたしや落ちついて寢たうござんす。ばゝへサア旅籠屋へ著くにも。閻魔の御前で一旦お調べを受けた上。そのへエ、そんなら閻魔樣の前へ行かねばなりませぬか。ばゝへハテ嘘さへつかねば。そのへぢやと云うて。現在の兄さんを殺し。サア苦勞した甲斐もなう。へ別れ〳〵になる樣な事でも若しやあるならば。私やどうせう〳〵と。歎けば夫も疵持つ足。暫し當惑。へ婆は見て取り。ばゝへハテ若い身空で。一所に死んで來るほどの事。罪はありうち案じまい。へ此婆がよい樣に。何かべつちやらくちやら云ひくるめ。極樂往生ハテさせますわいの。ハ、、、。そのへそりやマアほんまでござんすか。六へ何分共許御推擧をと。へせつない時の婆頼み追從するこそ道理なれ。へ何のマア。こなた衆ばかりか。多勢の願がけを聞く此姥ぢや。氣遣ひへせまい横町を。相撲太鼓の音高く。合へアリヤ相撲の太鼓ではござんせぬかいな。ばゝへ餓鬼相撲には太鼓は廻はされど。勸進相撲は婆婆も同じ事ぢやわいの。六へどの樣な取組ぢややら。マ、靜かにして聞きやいなう。へ明日は相撲七日目ぢやぞやイ。へ怨靈には六つが辻ぢやイ。へ死出の山には三途川ぢやイ。へ修羅の火には劍の山ぢやイ。合へ相撲勝負附〳〵。へ觸れ行くこなたの川端より。へオ、イ船が出ますと呼ぶ聲に。へ我後れじと道者ども。へ弘誓の船にのりの道。樓門近きかの岸の。中日にこそ當りけり。岸邊にこそは著きにけり。

第四　墮地獄の段

へそれ人間の地を離るゝこと五百臾膳那にして。無佛世界黄泉國の中央に當り。閻魔王宮の一構へ。餘寶の慶門四畔に開き。庭上離中赫灼とまばゆくも又物凄し。へ程なく獄司の聲として。へヤア／＼冥官倶生の面々。今參りの奴ばらを。亡者溜りへ繰込み召されい。へ心得たりと立出でて。衆生を警固し黒鐵の。廻廊土邊へ突据ゑられ。怖さ見たさに伸び上り。遥かの廳をさし覗けば。業の秤や淨玻瓈の。鏡を左右に立て並べ。臼杵黒繩持運ぶ。牛頭馬頭異形の眷屬が。姿見るさへ齒の根も合はず。身の毛も悚立つばかりなり。へ身の落着きは知らねども。跡じさりする人情を。棄てゝ怯まぬ我慢の肱。

長へこれ／＼押すな／＼。經帷巾が皺になるわえ。へサア込合ひますから御勘辨なされまし。長へオイ／＼前の禿頭。さう伸上つては跡の者が見えぬ。低う居をれ。へト聲に權兵衛振向いて。權へヤアおのれは足力按摩の長庵だな。長へオ、お前は金貸しの權兵衛さん。へ、へ、、いつもお達者で。權へ喧ましいわえ。イヤ貴樣の樣な太い者を見たことがない。長へシッ／＼。場所が惡うござります。太いの何のと爰で云つては。權へエ、金を貸して催促をするに。地獄でも極樂でも遠慮があらうか。サたつた今元利揃へて。長へもし／＼／＼。御尤もだが御覽の通り經帷巾一點。それに引替へ定めてお前は。死ぬ時に有り金は爲替に振つて。權へ何のつき。今の若さに死なうとは思はぬ故。六道錢の外一朱も持つては來ぬ。長へへゝ。嘘々。權へエ、地獄で嘘をつくものかえ。長へハ、アそれで思ひ當つた。人の噂に。お前の溜めた有り金は。かみさんが殘らず取集めて。權へおれが菩提を弔うて居ような。長へ何の／＼。こなさんが病氣の内から。手代のすん八と懇ろして。今では夫婦になり。その睦じさ仲のよさ。權へエ、そりやほんまの事かいやい。／＼。長へ嘘と思ふなら來年の盆に。へエ、それまで待つて居られるものか。ヤイ／＼。女房聞えぬやい聞えぬやい。勿論おれは吝いから。食はせるものや着る物は不自由させたが。コレ。爲べき事はしてやつたに。よくも不義を働いたな。チエ、おのれはな／＼ア。長へオイタ、、。おれが胸ぐらを捉へて咽

喉が。おほん〳〵。へコリヤもうちよつと娑婆へ立歸りにいつて來ねばならぬ。サ長庵急に路銀が入る。半金でまけるからよこせ。長へイヤサわしこそだし拔けに殺されたから。六道錢も持たぬと云ふに。婆へイヤ何でも。へト掴みつく。目のない天狗の強慾に。さすがの長庵もてあぐむを。見兼ねてお關は割つて入り。そのへまあ〳〵お待ちなされまし。長へヤアわりや妹。おのれは兄を。そのへ待たしやんせ。その言譯も。六へハテ何事も斯うならぬ先の事。長へ扱は六三も一緒にうせたな。へと喧嘩に枝葉盤高に。我を忘れて立ちかゝれば。へ默り居らう。爰をいづくと思ふ。三千世界の其内に。ひつこぬきの怖い所で喧嘩を致すは。王法佛法轉しむる大罪人。一々みじめを見せてくれん。疾く〳〵御前へ罷り出でをらう。へト引つ立てられ。へ四人を先に神子山伏。飛んだ相伴掏摸盜人。善惡邪正の分け隔て。なく〳〵白洲へ。冥へ下にをらう。へ畏る。冥へ醫者を初め夫婦の奴ばら。なみ〳〵の罪人ならず。御詮議に隙がいらう。それより先に。後に畏まつてゐる亡者。それへ出をらう。はなしへへイハイ。私は。冥へ娑婆の渡世は。へへイ噺し家でございます。へフム。はな鹿と申すは角のない鹿の事か。はなしへいえ〳〵。役者物眞似落し話。端唄新内。何によらずやらかしまする者でござります。冥へハテ奇體な獄物もあるものだ。何なりとやらかせ〳〵。はへ畏りましてござります。私も御當所へは初めて死んで參じました故。何ぞ御意に叶ひまする樣な音曲のはいりました新作を。お耳にふれませうと存じますれど。當時は落し噺も古めかしい事のみで。お慰みに相成りませぬ。何でも眼前にあつた事を其儘申し上げたら。少しはお笑ひにもなりませうか。先づ新らしい事なら。此中御當所へ下りまして。今極樂の芝居で勤め居ります八代目と大和屋の太夫の。浦里時次郎のお物語でござります。へなに新内ぶしか。コリヤ面白からう。はへエヽ御案内の通り。時次郎もまだ三升さんになるやならず。いろ〳〵な團十な事が重なりました故。相方の浦里も今更坂東しうか心中しうかと。苦勞を致して居る内に。時次郎は一足先へ驅出しました故。浦里はびつくり致して。時さんお前と云ふものは聞えぬものだ。女房に成田屋と思ふ女は。世間に大和々々ある中にも。外に亭主は持つまいと。思うて居る私を置いて。上方へ行くのみか。ひとり死ぬと云ふがあるものかと。袖にしが

み附きます故。時次郎もやう／＼涙を拂ひまして へそなたも共にと云ひ度いが。いとしそなたを手にかけて。どうなろものぞ。長らへて我亡き跡で一遍の。回向を頼む。さらばやと云捨て立つを取付いて。あんまりむごい情なやト。是迄でござります。鬼へヤイ／＼是からが明烏のかんちんだ。跡をやれ／＼。はへヘイ私のは明烏ではございませぬ。五へさらして今のは。はへ新内のあとやらすでござります。鬼へエ、何を馬鹿な。五官へオ、吟味は相濟んだ。サア藪醫者。おのれは見る／＼から太て／＼しい奴。身が手をおろして詮議する。ヤア／＼獄卒。責道具の用意々々。へト呼ばはる折柄。玉簾間近く大王の。微妙の御聲高やかに。あんまへア、ラ輕々し五官王。勘録舍を預りながら。手づから呵責は粗忽。退いたり。へト綸言と共に聞ゆる音樂の。心耳を澄まし差上ぐる。錦のとばり。警蹕は出御とこそは知られけり。罪人に御目もかけず。大王四方を打眺め。霞に籠る殘雪の山梅匂ふ。泥梨の底。ハテ風情ある景色ぢやよな。へト御機嫌斜ならされば。五官王御前に進み。五へハッ某が手づから罪人を呵責なすをお止めありつれど。娑婆の罪人。佛法を歸依なし。近年地獄衰微に及び。儉約のお觸れ出しあるに依つて。獄卒の人歩も減少なれば。よんどころなく手をおろして。王へホ、ウお身の心底神妙ながら。諸卒の減少は佛意に叶はず。たゞ愼むべきは十惡の內。口より作る四つの罪。それ故地獄の口は。とかく兩儀に通じ。詞數の儉約が第一。娑婆にても地獄の詞は地口と稱へ。專ら流行と聞及ぶ。一言いつて兩方へ聞える樣に。方々その旨心得てよからう。五官へ其儀はとくより承知の濟。それ大王の御退屈。お茶箱でも差上げい。鬼へばつばア。へト簡略地口牛頭馬頭の。返事も無駄はなかりける。長庵始終を聞きすまし。長へエ扨は御當所も御儉約でござりますか。それならば私をお抱へ下さりませ。けんやくはもとより針も按摩も大名人。ちよつと揉ませて御覽じれば。明白に解ります。へ明白と儉約と鍼と按摩で。やう／＼命繋いでたまはれと。地ぐつてかゝれば。あんまへヤアその地口古い／＼。おのれよつぽどの惡黨と見ゆる。陳じ立てせず白狀致せ。へくわつと御口開き給へど。長庵ひるむ氣色もなく。長へサ、、、。その土茯苓は御木香なれど。大黃樣の前で。桂枝で陳皮は致しませぬ。五官へヤイ／＼。藥づくしの言譯。我大君にわからうと思ふかい。長へサ、地獄御尤もでござりま

すが。斯う見えましても私は。さる諸侯方のお匙でござります。王へこいつ兩舌を使ふ奴。只今按摩は上手だと申して。うぬ按摩にお匙があるものか。長へエ、達磨にお足といふ地口かナ。五宮へ默れ按摩。イヤはりとはりやうじな。ひい／＼亡者。それ靑鬼秤にかけい。はつと眷屬。長庵の襟がみ取つて秤の皿。五道轉輪天秤を。ためつすがめつ打眺め。輪へハテ心得ぬ。面に似合はぬ輕い罪。何とも以つて合點の行かぬ。へト不審るこなたに赤鬼が。赤へオ、輕い筈／＼。あちらの片足地べたへ踏ん張つて居ります。輪へイヤ秤目盜む橫着者。おのれ俗性盜賊ならん。へ俗名なのれ。長へへエ私の名は長庵。五宮へさてこそ熊坂。長へア、もし。それは長範。私は長庵。輪へヤア範でも庵でも用捨すなと。下知の內より駈出づる。年增亡者の梓神子。逢ひたかつたと取縋れば。へ情用捨もあらけなく。女を引きのけ五宮王。五宮へ長庵が罪を糺すに邪魔ひろぐ女。汝は何者。いち子へハイ私はいち子で。五宮へその又いち子が何故あつて。へサア此醫者どのが前かた私の在所へ參りました時。亭主にならうの何のかのと。厭がる私を身持にして。果ては衣類を持逃げなら致し。長へヤイ／＼夢にも知らぬ事を。そしておのれの樣ないち子の亭主に誰がなるものかエ。いち子へイエ／＼見違へてよかんべエか。長へイヤ知らぬ／＼。五宮へ兩人とも扣へ居らう。シテそちが亭主になつた證據があるか。いち子へあい御座ります。しかも其頃唄に迄謠はれ。浮名の立つた仲だもし。五宮へシテその唄は。いち子へアイ。へ長庵の目論見で。いち子の亭主になるべエと。それから神樂の笛吹いたアレヤトコセ。五宮へもうよいわさ。それ程の證據があつても。長へイエ／＼こんな奴を孕ませた覺えはござりませぬ。いち子へナニ無いエこれいなア。へ長庵さん。年も行かいで恥かしい。齒吹如來のお十夜に。おどけ云うたが深草の。少將ばかり九十九里。上總木綿の丈のない。お前と知らずに打込んで。白立つ波の底迄も。何の厭ひはあら磯に。夜の目鮑の片思ひ。離れぬ仲と思うたに。ようもよう欺さんしたが。エ、憎らしい。棄てゝ行くとはあんまりな。わしや口おしい。と取付けば。取つて突きのけ。へ大王樣の前ではござりますれど。われを欺した覺えはないぞ／＼。五宮へヤ飽く迄陳ずる橫道者。うぬ骨を拉いで。冥へア、イヤ待たれよ五宮王。彼に白狀さす術あり。某きつと思ひ付いた。ナニお園とやら。其方長

庵が妹とあれば。是なるいち子に水むけ致せ。そのへアノ私が。へサヽ兩親を心に念じ。はや疾く〳〵。へト鋭き詞に是非なくも。搔き爪切唱名なし。梓の弓に手向ければ。忽ち神子は面色變へ。五體を震はし茫然と。聲も殊勝に。いちこへアワア。寄來るは〳〵。番かはれ。品かはれ。銚子の水もかはりくる。我こそからの鏡ぞよ。へらとりは微塵もなくて。烏帽子寳はお身一人。あいの枕に別れて末は。別らの人に預ける內。お身の臍の緒手繰り上げ。我を非業に果てさせて。へらとりと僞りしぞ。名殘は盡きじこれ迄よ。彌陀の淨土へさアらばエ。六三へエ、、、これお園。今の神子の梓にかゝり。寄りに立ちしはそなたの母親。そのへそんならからの鏡と云ふは。六三へオイノその母御前の云はるゝには。へらとりの男の子は一人もなく。ゑぼし寳の子と云ふはそなた一人。あいの枕の父親が過ぎ行かれた後。里に預けて育てる內。この長庵が母を殺し。所持せしそなたの臍の緒書を奪ひ。それを證據に兄と僞り。年月せたげて金を貪る大罪人。そのへスリヤ眞實の兄さんと云うたは僞りでござんしたか。長へア、これ〳〵。いち子の云ふ事が當てになるものかエ。五官へたつてな。强情かゝば。それ鏡に寫して。鬼へハツ。心得丹色皮色の。鬼は手取りに引つ摑み。片意地張りを淨玻璃の。鏡の面に。へヤイ息を吹きかけるな。へ突据ゆれば。へふしぎや光明輝き渡り。前世の罪障惡業の。微塵も違はず顯はれたり。六へオ、あれ〳〵寫るわ〳〵。所は正しく淺草の。しかも三社の宵祭。この惡者の長庵と。七郎助が領き合ひ。そのへほんにお前の越度となりし。小倉の色紙を取出し。六へオ、石橋の曳き物に飾る牡丹の英へ押込め隱す惡事の段段。へあり〳〵映る鏡の照。長庵は心も空。長へヤアイ七郎助の大べらぼうめ。そこへ隱すといふ事があるものか。へ爰へよこせと手を伸ばせば。へたはけづらめと揶り退くる。六へスリヤ色紙の盜賊も。おのれが企みであつたよな。王へホ、凡俗何ぞ悟らんや。六三郎が主人より。預りの寳失ひしも。もとはお園を手に入れんと七郎助が企みに乘り。僞りはかる長庵が。無量の惡逆。まつたお園が母を殺せし當の敵を。圖らず討ちしも信心の御德。ホヽ感儀々々と歎息まし〳〵。大王賞美の御詞。長庵なほも首振立て。へイヤ〳〵〳〵。さうはならないの閻魔樣。たとへ兄でないにもしろ。人を殺した者を赦すといふは依估ひいきだ。それで閻魔の制度

が立ちますかえ。上へそれ鐵札を持たせ。詮議中熱鐵地獄へ打込み置け。へト聞くより權兵衛しや〳〵り出で。權へコレ長庵。その熱鐵地獄とやらへ往つたら。おぬしの體が焦げて了うだらう。して見るとおれが貸が無茶になる。せめて利分ばかりでも。五官へヤア大罪は長庵ばかりか。おのれも是まで高利を取り。人を苦しませし科輕からず。等活地獄へぶち込むのだわ。權へエ、そんなら私はアノ。へ等活地獄で。長へ熱鐵あつ馬。權へ三月雛様。長へ四月がお釋迦で。權へ五月がお幟。上へ默り居らう。地獄閻魔この方の重罪人。それに引替へお園六三が善根功德。その誠直の心を感じ。人殺しの罪を赦し。金札與へて速やかに。寂光淨土に引導致せ。六へスリヤ我々を。兩人へエヽ忝ない。權へア、もし〳〵。長庵はともあれ。この權兵衛もおついでに。冥へヤア蟲のよい奴。それ兩人をどやしつけい。長へこれ〳〵大王様がどやせとも云はつしやらぬに。冥へイ、ヤ大王様はどやすがお好きだ。へ大王様はどやすがお好き。冥へぐい〳〵とどやせ。長へぐい〳〵とどやせ。冥へそれなく〳〵よ。へと拍子にかかつてやたら打ち。兩人へアイタ、タ、タ。へ追つ立てゝこそ。へオイタ、ツタ、、おゝオ、。王へさらば。六、そのへおさらば。善悪邪正の二道へ。別れ〳〵て行く先は。

第五　極樂淨土の段

へ開きまさる。安樂淨土は山賤の。庵もし寶ちりばめて。四方に蘭奢の風薫り。王の樞に鶯の。聲朗かに法華經の。さながら讀誦にことならず。へ見聞くにつけて珍らしく。六三郎は經卷の。机に身をよせ打ちまもり六へナニサマ。軒端の梅の咲匂ひ。櫻さだめぬ遠山より。落つる雪解の瀧の音も。冷々としておのづから。心耳をすまし。雁金の友呼びかはし睦む有様。池の蓮の花にさはらず。四季の景色を一日にあつめ。見わたすは實に極樂の境界ぢやなア。へあかぬながめによねんなく。底におりしも花降り來り。かたへの南陀米迦樹の梢に天童のあまくだり。輝きわたる光明に。あたりを照し赫奕たり。へ六三は鷲き身を淨め。唱名念誦し奉れば。へ童子御聲さはやかに。童子へ善哉々々。汝たま〳〵に受けがたき人身に生れながら。双劍に身をはたせし罪輕からずと

申せども。前々生に信心の功を積み、天上の善果を受けし功徳により。修羅の巷にさまよひし父母までも佛果をたもつ。然るといへども。此後た御身顚倒迷妄して。發心のなかだちを失ひ。愛執の根を斷たずんば。父母は忽ち奈落へ墮罪。へ聞くに六三は。エ、コリヤ此身に迷ひの心を起さば。過行き給ふ兩親は。奈落に沈むの御告げなるか。妻子へまつた其身佛體を得ば。妻子の罪も消滅せんと示し給へば。へ六三郎心に浮む妻子の恩愛。情なきには似たれども。勿體なや父母の奈落に落つるを。子の身として。へ何と見捨つる法やある。へまだその上に我一人。寂光淨土に入る時は。妻子の五障三從の。罪も消ゆるとあるからは。へいかでか天勅背くべき。アラ有難の御告げやと。へ心を決し一心に。禮拜することぞ道理なれ。

ホ、速かに解脱なし、童子も猶善根上は、諸天善神に誓ひをたて。ゆめ／＼相違あるべからず。これまでなりやと夕日影。忽ち紫雲に法の道。西の方へと行方なき。御跡見送り伏し拜み／＼。六へハ、ッ。有難き菩薩のおしへ。さりながら娘お松に逢見んと。賽の河原へ行きし女房。只今にも立歸り妻子の緣を斷切りしと聞さば、さぞやさぞ。へ火宅の娑婆にあるうちも、我へ操をたて通し。思ひ幾瀨のうき沈み。其善根のめぐり來て。一つ蓮とよろこびしを。不來永劫逢ふ事の、ならぬと聞かばいかばかり、恨み數かん不便やなア。へア、イヤ／＼。一度諸天善神に誓ひを立てし我は。佛身八萬四千の妄想を斷つて。實相無漏に入るの門出。さうぢや／＼、と、へ又引きよせて經卷と。共に悟りや開くらん。お松出へ前の世の。惡趣如何なるむくいにや。親に先だつ罪科は、今へ賽の河原に立迷ひ。一重積んでは父の爲に、一重つんでは母のため。小石々々に泣きはらし。へ不便やお松は盲目の。風の便に聞傳へ。杖にすがりてやう／＼と。庵の外面に。へうれしや爰ぞと立ち休らひ。折戸さぐりて、そへもうし／＼。物を御尋ね申します。へといへど庵主は一心不亂。鈴打ち鳴らせば。松へオオ鈴の音するは。誰やらござるに違ひはない。申し。近い頃此極樂へお出でなされた若い御夫婦の御庵室は此方でござりまするか。ト。聲も姿もかれ／＼に。どうぞ教へて下さりませ。へトいふ聲耳にさすがの血筋。引かるゝ緣をおり立ちて。垣の隙より見てびつくり。扨は娘か何故と。云はんとせしが待て暫し。なまなか名乘り改めて。親子の緣を切るといはゞ。其悲みは幾千倍。

さはさりながら何として。盲となりしが餘所ながら。聞かまほしやと聲音をかすめ。六へハ、、、、。さすがは子供。かずある淨土へ往生なす。佛は日夜に限りなし。近い頃來りしと聞歩くとも知れ難からん。殊更見れば盲目となりしてい。ハッア其二親が聞かれなば。飛びつくやうにも思はれんが。爰をよう合點しや。妻子の因を斷ち切らねば。佛體を得る事叶はぬ掟。たとへ此ほとりにてめぐり逢ふとも。よもや名乘りはエ、すまい。益なき事に隙取らば。河原へ戻つて憂き目や見ん。サ、元來し道へ怪我せぬやうに。去んだがよい。松へアイ／＼。其やうに云うて下さるとどうやらお前が父さんのやうに思はれて。わしや爰が去にともない。どのやうなお方か御顏が見たい。目があきたいわいな。六へヲ、尤も。嘸その親の身も。へまことあかしの浦ならば。われにも見せう人丸の。古歌にもまさるいとしさつらさ。苦しき胸をおし沈め。ヲ、さう思ふも道理々々。シテいつの頃よりそなたは盲となつたるぞ。へト問へどお松は眞實の。父とも知らでやう／＼と。涙を袖におしつゝみ。松へ知らぬお方の頼もしう。よう問うて下さりました。わたしの父さんは。由あるお家の御家老にて。小柴六三郎と云ふお方。惡人のために御流浪なされ。間違にて私が殺され。逢ひたい見たいに目を泣きつぶし。悲しい中にも悦びは。程なく兩親此冥土へござんして。へこゝらあたりと聞いた故。せつない怖い思ひして。逢ひに來たれどなさけなや。俄盲のその上に。勝手知らねば何として。モウ逢ふ事はならぬかと。身をかきむしり聲をあげ。歎けばへ親もたまりかね。ヲ可愛のものやと抱きしめ。われこそ父よ六三よと。名乘りて譯を云ひ聞かそか。イヤ／＼。こゝぞ悟道のふくろび口と。齒を喰ひしばり堪へしかど。胸にせきくる血の涙。娘の顏にはら／＼／＼。へ聰きお松は小首をかたげ。松へ最前よりのお前のお聲。父樣に其儘。そのお歎きは合點ゆかずと。ひつしと抱付き撫でまはせば。へさとられてはと聲音をつくろひ。ア、イヤ麁相はし申すまじ。我はもとより妻子なければ。子供持つべきいはれなし。去りながら。物の哀れを見捨てねば。我を親だと疑ふは。無理ならねどそりや盲目の心の迷ひ。我も讀誦の暇なし。早や此所をとく／＼と。へ柴折の外へ連れ出づる。其手にすがり取りついて。走り躓きつけ入るを。へなだめ賺して押返す。風情はさながら胡蝶の吹雪。

あさる千鳥の浪がしら。追ひつ追はれつかゝ猫の。狂ひまとはる裾袂。はなれがたなき時しもあれ。へすまのおそのは駈戻り。そのへこちの人。わしやどうせう／＼ぞいなア。へト縋れど夫は折惡しと。へためらふ隙に追ひくるけんぞく。けんぞくへヤア夫の善根につけ入つて。閻魔の廳を僞りし罪人。鬼へあとにて糺せば。邪淫妄語を犯せしおその。一旦地獄へ取戻さねば。せいとうが立たぬきり／＼失せうと。左右に鐵杖ふり上ぐれば。へおそのといふ名にお松は周章て。探りかきのけ押し隔て。松へマア／＼待つて下さりませ。今のは若しや。そのへヤア我が身は娘か懷かしや。逢ひたかつた／＼わいなう。松へさういふ御聲は母さんか。フムそんなら爰に居なさんすは。父さんでござんすかえ。そのへエ、モ知れた事いの。わしはそなたに逢ひたさに。賽の河原へゆく道で。此おかた／＼に捕へられ。是非とも地獄へつれ行くと無體の有ぜう。モシ我が夫。ことわけ云うて下さんせと。へいへども言葉かはさねば。へお松は母にとりすがり。これ母さま。お前や父さまが戀しさに。夜の目もあはず泣きこがれ。盲とは成つたれど。父さまのお聲知らいでなんとしませうぞ。さつきにから尋ぬれど。親でない子でないと。そのへ何すげなう此處を去なさうとさしやんしたか若しこちの人。ゆうべまでも今朝迄も。娘の事を思ひ續け。賽の河原へ往て尋ねて見てくれいと云はしやんした。最前の言葉にうつて變り。目かいも見えず幼い身で。漸う尋ねて來たものを。日頃にも似ぬむどくしん。佛になればそれ程に。邪見な心になるものか。そりやなさけなや胴慾と。我を忘れて胸づくし。へとらるる夫も黑白に。身をひしがるゝ憂き思ひ。そら嘯いて泣顏を。見せぬつらさも猶百倍。へお松は母に探りより。松へ母さんもういうて下さんすな。私はどうせおそばに居らるゝ身ではなし。それにお前が父さんと。諍やなどして分れ／＼にでもなつたなら。わしや何どせうどうせうぞ。心を直しいつまでも。仲ようして下さんせと。あなたこなたを這ひまはり。拜み歎くぞいぢらしゝ。へおそのは猶も正體なく。そのへアレ／＼邪見な親を怨みもせず。結句こちらを案じるが。お前の目には見えぬかいなアトかきくどく。へ心不便と氣をとり直し。六へその怨みさる事ながら。仔細を申さば猶さらに。跡の歎きはいかばかりと。わざとつれなく云ひしぞや。善果を得たる我一人。佛體に

そなはらねば可愛なや。父母は奈落に沈みその上に。そちやお松は未來永劫。浮む瀬なしと天帝の。御告必ず怨みと思はれなと。夫の詞の理に伏しへ何と答も泣き沈む。へ娘は涙おし拭ひ。へ何のまア女は只さへ罪深く。殊に私は親に先立つ不孝の罪。何未來まで浮まいでも大事ない。早うとゝさま佛になつて祖父様や祖母様を。助けてあげて下さりませ。こちへオ、可愛い事を云やつたなう。我が子を膝に抱きあげ髪も背ますり泣き沈む。へ見る父親はたまりかね。コリヤもうどうも。へト心もそらに弟子の衆。[illegible]へヤア[illegible]に誓ひを破り。父母を奈落へ落すや如何にト。勵ます詞に。へハ、ハツト袖うちふつてかき合はす。へ折も遠音に梵鼓の響き。眷屬共は纏に立ち。鬼へおれ〳〵修羅の太鼓の音やする。きり〳〵

行せうト引立つるを。へおそのはどうございま暫しと。叫ぶれど容赦あらばこそ。骨もひしげと打ちたゝかれ。へアレエ〳〵。へと聲にお松は身を惜まず

どうぞわたしを母さんの代りにやつてと縋る手を。へ打拂ひ打倒す。極楽かへつて地獄の苦しみ。無量の業苦に身を責められ、悶え悲しみ泣叫ぶ。

大切　三社祭禮の段

へ愛染の業苦に責白焔の　胸に四鳥の愛別れ　身を岩が根に鬼泣き。なんへ驚にお松は走り出で。きつう夢に魘はれてあやる。目を覺ましや正氣になりやと撫でつさすりつ揺り起す。こちへ子を振放し駈出すお園。女へ袂しつかと女房が見はしたりそこは縁端落ちるわいのと抱止むれば。そのへお園はあたり見廻し〳〵へオ、お内儀さん。妾はやつぱり内方。そんなら兄さんを殺して言譯なさに。主と洲崎で心中。女へヤア。そのへサアそれから逆い十萬億土。女へエ、お氣味の悪い。その様な怖い夢を見てつたのかいなう。そのへモウ怖い悲しい悲しい地獄へ落ちてやう〳〵と言譯立つて極楽へ成佛したと思うたら父もや地獄へ取戻す。邪魔に親子は別れ〳〵。可愛やお松も今頃は　冥土の笞に打叩かれ。さぞ母戀し父戀しと。泣き呼び立てるを見る様な。可愛やなうと身を悶え。我を忘れて歎くにぞ。清兵衛へ枕斗にあるじ清兵衛も。一間を立出で。コレ〳〵お園。そんならおぬしも地獄の夢を。そのへハイ閻魔様の前

へ引出され。満へアノ長庵が企みの根ざし。あり〱映つた淨玻璃のそのへ鏡の面で言譯立つた。そのへ始終の様子をどうしてお前が。満へサア聞きやれ。讀みさしの小夜嵐を見ながら。とろ〱と寝るともなく。日頃信心する日朝様に連れられ飛んでもねえ。佛頼んで地獄へ落ちるとは此事。しかし怖い物見たさに。お衣の袖の間から。覗いて見たらお園兄妹。六三殿も込入つた詮議最中。そのへかりそめならぬ十萬億土。言譯立つて極樂までの。月日も數へ盡されぬ。満へ唐土の盧生といふ人は。粟の煮える間に。五十年の榮華を夢に見たとの事。女へそれに引きかへ。私がお粥を煮る隙に。婆婆と地獄と極樂を。そのへ此身ばかりか旦那さん迄。満へあり〱見たる夢合せ。そのへ斯うした事も。へあるものかト顔見合せて三人は。只不思議ぞと夕まぐれ。松へお松は六三を押しとゞめ。行くをやらじと爭ふ外面。六へさりとては聞分けのない。一大事を聞いた故。慥な事を見屆けて來るのぢやわいの。満へトいふに主は聞耳立て。あれは慥に六三殿の聲と。くゞり戸明けて。何を表に親子の爭ひ。マア〱。こちへと呼入れて。女へ女房が差出す茶の愛想。六へ六三はやう〱氣を鎭め。これは〱清兵衛様御夫婦。心ぜき故御挨拶も致さず。眞平御免。コレお園。閻魔堂橋の煮賣屋で。隣座敷のひそ〱咄。小倉の色紙を質受けして。國屋敷へ差出せば。小柴の家は一生埋れ木。さすればお園は心の儘と。耳に入るより差覗けば。そなたの兄の長庵が。七郎助との物語。そのへスリヤ斯うしたお松といふ子のある。お前と私の手を切つて。七郎助へ渡す兄さんの企みかいなア。六へイヤ〱兄と云ひしは皆僞り。そなたの母が持つてゐた。臍の緒書を奪ひ取つて是まで兄妹と云つたは拵へ事と。長庵が明はす語り。満へエヽそんならこりや。此お園がありあり見たる地獄の夢は。寸分違はぬ咄の符合。女へしつくり合つたも佛の加護力。そのへもしや鏡に映した通り。淺草祭の曳物の。満へオヽソレ牡丹の花へ隱した迄。まざ〱見たも御利益ならば。六へ如何にも二人が咄を聞けば。三社祭へ連立つて。惡者を語らひ。清兵衛に喧嘩をしかけ。その間にお園を釣出すとの云ひ合せ。手延びにしてはと跡追つ駆け。詮議せんと思ふ折柄。松へ母さんが是非に尋ねてと。云はしやんしたそれ故に。女へオヽ賢い。そなたが六三さんを連れ申したばつかりに。さらりと事が解つたわいなう。そのへスリヤ旦那

さんにはお祭の。清へオ、サ。石橋の仕手方が間違つた故。よんどころなく頼まれて。六へそれぞ究竟。この六三がその今様の役に代らば。實詮議は心のまま女へほんにそれ〳〵。こちの人に喧嘩を仕かけ。そのへその間に私を手込めにするとあれば。清へ成程内も氣遣ひ。其内にお園が支度した上で。わしも跡からソレ女房。女へアイ〳〵合點と取出す。衣裳赤熊を一包み。六へ六三は受取り門の口。清へアコレ町人ながら多勢の惡者。女へ必ずともに怪我せぬ様に。六へ氣遣ひあるな。一期の大事。そのへ丁度宵間。六へ月の出ぬ間を幸ひに。へ心も空もまつしぐら。祭場さして。清へちつとも早く。六へヤ合點だ。（上総り）◉へ屋臺囃子に浮き立つや。晝と夜との花見の群の。中押し分ける淺草の。利益は深き宮戸川。三社祭の賑はしく。

へお祭番附。三社様お祭番附。◉へ蛇の目傘早替り。お茶臺お茶壺お茶碗となる。八つ八通りに替る。へ鬼灯や。海ほほづき〳〵。丹波ほほづきや。ほほづき。へハ是は新版竹田近江がつもり細工。お座敷にて のお慰み。◉へ節は一流太白練。柔らかにて歯に附かず。名代々々。へ聲かまびしく割竹に。大へ先を拂はせ鐵棒は。眞間の手古奈か手古舞が。小へ女とも見え。又男とも。見えてやさしき梅柳。大へ色香をますの揚障子。踊り屋臺と右左。詞へモシ頭。お頼み申します。へオット所望と拍子木に。大へ茂り合ふ。草も淺茅の一つ家に。宿りもとめし稚兒櫻。小へ軒もる月にお姿を。ふつと見上げて賤の女は。大へ言寄るしほもなま中に。叶はぬ戀を思ひ染め。小へ焦れよるとも片糸の。大へかせの車や。小へわくらはに。大へ一夜たもたぬ

仇枕。小へ石の枕と聞くならく。底の苦患を助けんと。大へ好色菩提と帶の。小へ契りも深き福壽海。大へ利益は正に國芳の。■へ額に寫して。小へヤア千代の初めの一踊り。雀踊りが所望ぢやが。合點か。大へおう。さて合點だ。小へアリヤセ。大へコリヤセ。小へヤットセ。■へよい〳〵。小へ宵の口舌の白けた跡を。大へ鳴いて通るは。アレ時鳥。小へ梅鉢ぢや。大へ合點だ。小へアリヤセ。大へコリヤセ。小へソコセ。大へソコセ。小へソコセ。へアリヤ。リヤン〳〵〳〵〳〵。大へヤットセ。■へヨイ〳〵。大へ好いた同士の手を引連れて。小へよれつ。もつれつアレさゞめ言。大へ反り橋ぢや。小へ合點だ。大へアリヤセ。■小へコリヤセ。大へヨイセ。小へヨイセ。大へヨイセ。小へヤットセ。■へヨイ〳〵勇ましや。大へ又もしやぎりに練出す。へ次は牡丹に石橋を。曳

いて木遣りの聲々に。●へオ、イヤレヨ。●エ、イ。ヨイヤレテコ。▲▶へコレハセエ。●へイヤ。ホウイヤネ。▲へヨウレエイ。●へオンヤト。▲へエ、ヤトコトツチメテ ハ。●へイヤサコレハ。へイヤサノセ。▲▶へヤア。●へエンヤコレハ。■へエンヤラエ ●へ千秋萬歳常磐の松に代々こめて。■へ女夫睦みて丹頂の。鶴のヨイ／＼數の雛鳥。ちん／＼。ちよ／＼。さへづるヨイ／＼。枝に錦とな。▲▶へヨイ／＼。●五色彩る呉服綾葉の三つ蔦。▲▶へヨイ／＼。●へ蔓さま／＼。八重に根絡む。定家かづらに豆かづら。▲へヨイ／＼。●へ離れや千歳。萬歳も添ひ逐ぐる。滅多やたらに。めん／＼目出たいなアツか中。■へオイカケ／＼中綱。●へオイヤレヨ。■へヤア。合長へアア目出度い／＼。一つしめてくれ。へヨイ／＼／＼。詞へそりやさうと。長庵さん。こちとらを手古舞に仕立て。曳物に附いて來い。賴む事があると云ひなすつたが。へシテその賴みはどんなこつてござえます。七郎助へイヤその本人はこの七郎助。仲町の福清が。今日石橋の役に指され。爰へ來るを幸ひに。叩き締めて貰ふ魂膽。長庵へその內この長庵はお園を卷上げ。おぬし達にも骨折り代を。詞へイヤモウ惡い事なら命がけ。清兵衛が筋骨拔いて。へさう云ふ內も勢揃ひの刻限。七へおゝさうだ。長へ赤熊をかけて。アレ／＼向うへ。七郎へ必ずぬかるな。皆々へ合點だ。大へ松風の。花を薪に吹き添へて。雪をも運ぶ山路かな。小へ常に笙歌の花降りて。簫笛琴箜篌。夕日の雲に聞ゆべき。月前の奇特あらたなり。合大へ峯に立木も嵐につれて。六へ谷の谺の。合大へ物凄く。小へ苔滑かに。合大へ露添へて。合方●小へ渡り危き石橋の。長へヤア清兵衛と思ひの外。七郎へわりやア小柴の六三だナ。六三へオ、汝等が企みにて。この身の越度となつたる色紙。きり／＼渡して繩かゝれ。へ何を小癪な。合方へ牡丹に戯れ獅子の曲。大巾利巾の獅子頭。小へ打てや囃せや牡丹芳／＼。大へ黃金の蘂顯はれて。●小へ花に戯れ枝に。大へ臥し轉び。げにも上なき獅子王の勢ひ。合方小へ雉立てられて加擔人は。皆散り／＼に逃げて行く。大へ折しも來かゝる清兵衛が。夢の知らせの牡丹の英。內より取出す小倉の色紙。●六三へヤ、。それこそ尋ぬる紛失の。清へ色紙手に入る上からは。この兩人に繩打つて。七郎へさうは行かぬとかくる手を。●清へ直ぐに折分け下緖の縛め。六三へ何から何まで御夫婦の。清へハテ禮には及ばぬ歸參が肝要。●長へスリヤこちとらは。六へ惡事の

成敗。しもへまだ國はどうでも。両へ小柴の　へ賞や目出度き常磐津に。語り傳へて　御代こそ久しけれ。
花嫁。六へチエ忝ない。両へ目出度い〳〵。岸澤の。惠み潤ほふ君子國。ゆるがぬ

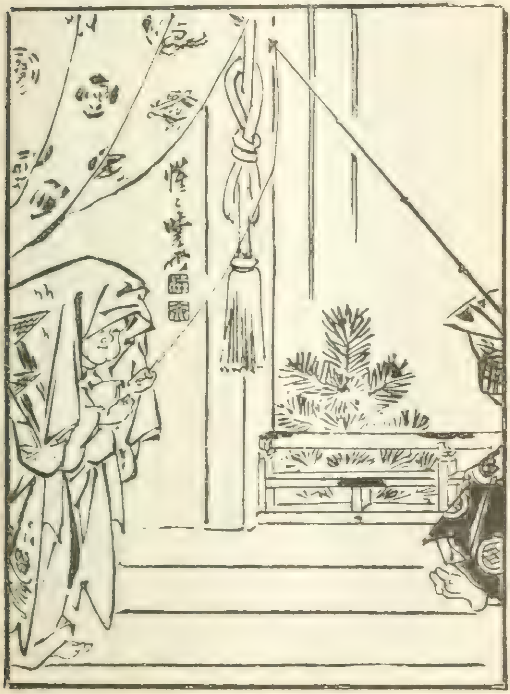
新曲 釣女　二六

〔解題〕狂言の「釣女」を本としたもの。作者河竹默阿彌。明治十六年十二月常磐津岸澤両家和解の披露を兼ねて新作されたものといふ。明治二十四年七月七日東京座で、竹柴晋吉の補筆で「戎詣戀釣針」の外題で上演された。市川猿之助（後の段四郎）の太郎冠者、中村勘五郎の醜女、市川壽美藏の大名、中村銀之助の上﨟で好評を得、その後も度々上演されて今日に及んで居る。

へ抑も是は猿樂の昔よりして其業のをかしといひし狂言師名に大藏や鷺流の姿を寫す釣女　大名へかやうに候者は此所の大名でござる。ヤイ〳〵太郎冠者あるか　太郎へハア御前に　大名へ居たか　太郎へハア　大名へ汝も知る如く此齢まで定まる妻がない承れば西の宮の惠比壽三郎殿は福者と申すこと是へ參り妻を申受けうと存ずる汝供をせい　太郎へ誠に仰せの如くでござる西の宮の木びす三郎殿へ參るがようござりませう私も定まる妻がござりませぬ次手ながら申受けませう　大名へ扨々おのれは卒爾な事をいふ者ぢや惠比壽三郎殿とこそいへ木びす三郎と申す事があるものではない　太郎へハテ繪に描いた折は惠比壽三郎と申す木で造つた折は木びす三郎と申しまする。大名へなか〳〵汝は物知りでおぢやる某は道不案内ぢや程に名所舊蹟を語り聞かせよ　太郎へ畏つてござる　大名へさらば急いで參らうサア

サア來い〳〵 太郎へ參ります〳〵。イヤなう〳〵賴うだお方先づ參る程に是がはやへ小唄に唄ふ奈良法師行くも戻るも心のとまるも山崎の〳〵女郎とねはんの長袖結ぶ緣の尼が崎 大名へヤ面白い〳〵シテ向うに見ゆる山は何山ぢや 太郎へハテあれは山でござる 大名へ爰なやつ山は山ぢやが何と申す 太郎へハヽア何山は山でござるオヽそれ〳〵へあんの山からこんの山へ飛んで出たるは何ぢやるぞ頭にふつふと二つ細うて長うて凛と刎ねたをちやつと推した 太郎へ兎ぢや 大名へ何を申すぞ シテ西の宮はまだか 太郎へ最早この森の內でござりまする 大名へさらば參詣を致さう手水々々 太郎へハア 大名へ先づ鰐口に取付からちやぐわん〳〵いかに申し上げ候 へ我この齡迄無妻なり 大名へ三郎殿の利益にて定まる妻を授け給へ へ授け給へと一心籠めて伏拜む 大名へヤイ太郎冠者汝も拜め 太郎へ畏つてござる ぢやぐわん〳〵いかに木びす三郎殿へ申し候へ我も定まる妻はなし似合ひ相應美しき妻をお授け〳〵と三拜九拜したりける 大名へヤイ太郎冠者今宵は通夜をせう汝もまどろめ 太郎へ畏つてござる 大名へアラ尊や〳〵へ內陣の內ぞゆかしき我妻を千代と契らん手枕の袖を敷うてまどろみしが程もあらせず夢覺めて 大名へヤイ〳〵お告があつた〳〵汝が妻になる者は西の門の一の階にあらう程に連れて歸れとお告が 太郎へ是はいかな事私がお告も其通り 大名へ急いで參らう〳〵へ勇み悅ぶ足元に落ちたる竿を取上げてへヤ是はいかな事妻ではなうて竹の先に糸が附いてある是は何であらうぞ 太郎へ不思議なお告でござりますな 大名へイヤ是は悟つた惠比壽殿は不斷釣竿を放さず釣ばかりしてござるに依つて此針で妻を釣れといふ事であらう先づ急いで釣りませうエイ〳〵へ釣ろよ〳〵神の教への釣針を下しみめよき妻を釣らうよ釣らうよへ針をおろせば不思議やな氣高き女を釣上げて 大名へアラ有難や扨もよい妻がかかつてござる嬉しや 太郎へ何が扨てお悅びでござる 大名へこれ〳〵そなたは定まる妻ぢやに依つて目をかけてやる程に夫を大事にしませうぞヤ小野の小町か楊貴妃かアラ美しや〳〵 太郎へイヤ申し〳〵道々こつそり樂まうと背中へ入れて來たこの吸筒お二人樣の三々九度是にて目出度う御祝言 大名へヤ是は一段の事ぢやサア〳〵注げ〳〵 太郎へ心得てござる 大名へ先づ女子の方よりさしませい 女へ申し我夫必ず見捨てゝ下さるな 大名へなんの見捨てゝよいも

のか女へオ、嬉し 大名へ太郎冠者祝して一つ謡うてくれ 太郎へ畏つて候へ高砂や此盃が二世の縁結のお前で祝言は三郎様がお仲人よしそれとても浮氣心があるならほんに罰が當るであろぞいな必ず見捨て丶下さるなやいの／＼と寄添へば へ傍に聞き居る太郎冠者氣を揉みあせり 太郎へヤ申し／＼其釣竿を私にお貸し下され見事釣つて見せませう 大名へ早う釣れ／＼ 太郎へイヤ釣る段ではござらぬエイ／＼へ釣ろよ／＼釣る物は何々鯛に鰹に恵方棚に撞鐘信田の森の狐にあらぬ釣針をさげておろして三十二相揃うた十七八を釣らうよおかつさんを釣らうよ へ餘念もながき鼻の下オ、當るぞ／＼どつこい〆たと引上ぐれば被衣目深にかつぎし女アラ尊やかゝつたわ／＼サア／＼こちへござれ嬉しや／＼へサア／＼是からは三々九度の盃ぢや是へござれ何も羞しいことはないそなたと夫婦になるならば春は花見夏は涼み秋は月見の酒盛に冬は雪見のちん／＼鴨天にあらば比翼の鳥 地に又あらば連理の枝必ずそもじは變るまいな 醜女へなんの變つてよいものかな 太郎へまづ何は兎もあれ御面像を へ被衣を取ればこは如何に河豚に等し



き醜女故太郎へヤアワゴリヨは鬼か化物かなう消えてなくなれ／＼悪女へなう／＼我夫今おつしやつた樂しみは嬉しうて嬉しうて私や忘れはせぬわいなア太郎へヤレ情ない許いてくれ／＼悪女へそりや無情いぞえ太郎冠者殿へコレこつちら向かんせエヽ何ぢやいなア へ思へば深い戀の淵沈む我身を釣糸に結んだ縁の西の宮蛭子まうけて二世三世變らぬ色は棹竹の末葉榮ゆく女夫仲放れはせじと取縋る 太郎へなう恐しや／＼大名へヤイ太郎冠者三郎殿の授け給ひし妻ぢやによつて否應はなるまいぞ太郎へアヽそなた様はよい月日の下でお生れなされたこの太郎冠者は月も日もなく黒闇で生れたと見えます 大名へ何はともあれ目出たう舞はうではないか太郎へ勝手にさつしやれ 大名へ高砂や此浦船に帆をあげて へ月諸共に舞ひの袖へ女

新曲 釣女

常磐津小文字太夫直傳
岸澤式佐節付
振付 花柳壽輔
作者 河竹其水綴

抑是ハ猿楽の者にして其業の
可笑といひし狂言師名ハ太郎や
爰に流れ寄る宮を写そ釣る女
大名 者ハ此の大名でござるヤイ／＼太郎
冠者あるか 太郎 ハア 大名 に居りまする

蝶男蝶の中もよく遠く鳴尾の沖の石堅い契りは住吉の千代に八千代をかけはしや千秋万歳の千箱の玉を奉る目出たさよ大名へ目出たいな 太郎へヘンお目出たうございます へ笑ひ興ぜし能舞臺鏡の松の常磐津に昔へかへる岸澤の波の鼓の打ちふりて睦じかりける次第なり。

睦み語らふ陸奥の名所 岸漣漪常磐松島　二七

〔解題〕　通稱「松島」。作者河竹其水(默阿彌)。作曲者十一代小文字太夫(後の林中)六世岸澤式佐。明治十七年七月、常磐津岸澤和解の際、家元小文字太夫が東北の出身であつた緣故で、松島を題材にして綴つたものであるといふ。外題にも兩家和睦の意を利かせてある。

◉へ日の本に。三つの景色の一といふ。陸奥なる松島へ。今日思ひ立つ旅衣。着つゝ馴れにし古里を。跡に三春の驛路や ◉へ名古曾の關は名のみにて。ふりし昔をしのぶ摺り。文字もそゞろに名所を。記す便に里人へ。利府の菅菰七布三布。旅寝の日さへ淺香山。憂きを白石白露の。萩の宮城野枝撓いて。おのが心のまに〳〵に。瑞巖寺へぞ着きにける ◉へ黄金花咲く山遠く。千賀の浦邊へ立出でて。望む波間に朝日島。春ならねども棚引きし。霞の浦の朝ぼらけ ◉へ櫻の名にし鹽竈も。夏の茂りに御社を。埋む若葉の若濱や。涼しき風の福浦に。妾へ寄る島すなどりの。漁士には惜しき女子島。共に語らふ戀の道　クドキ　へ磯の苫屋の苫島に。汐馴れ衣濡れそめて。立てし莚の屏風島。隱せど浮名立つ秋の。夜の長濱も長からで。沖の千島の痴話言に。名殘雄島の霧隱れ。離が島に又の夜の。約束堅き石の濱へ網引の唄の鄙めきて　浦唄へ雁金の山に便りの玉章を。松の黑崎冬の來て。積る思ひに身にしみ〳〵と。雪の白濱小松島 ◉へあさる千鳥の大濱に。波の鼓の拍子につれ　合立舞ふ振の面白や　三ガカリへげに〳〵鷗と鶴崎に ◉へ松が浦島竹の浦。岸のさゞ波打寄りて。昔へかへる常磐津の。松の榮えぞ目出たけれ。

新古演劇十種之内 戻橋　二八

【解題】作者默阿彌。作曲者六世岸澤式佐。始め岸澤式佐の依囑によつて常磐津の素浄瑠璃として執筆されたものであつたが、五代目菊五郎の懇望によつて、明治二十三年十月歌舞伎座に於て「戻橋戀の角文字」の外題で興行された。扇折娘小百合實は愛宕山の惡鬼尾上菊五郎、郎等左源太市川新藏、同右源次尾上幸藏、渡邊源次綱市川左團次といふ役割で大當りをとり、新古演劇十種の一に加へられるに至つた。

●大藤内がかり へそれ普天の下率土の濱王土にあらぬ所なきにいづくに妖魔の住みけるか睦月の頃より洛中へ惡鬼現れ人を取り夜は往來の人もなし へされば内裏の警衛に都へ登りし源の頼光朝臣は暇なく。去る頃深く語らひし。維仲卿の姫君へ便りもなさでおはせしが へ今日しも渡邊源次綱。使に立ちし歸り道 へ卯の花咲きてしろ〳〵と月照り渡る堀川の。早瀬の流れ落合うて。水音凄き戻橋 綱へ武威逞しき我君も。戀は心の外にして。かね〳〵語らひ給ひたる維仲卿の姫君へ密々の仰せ蒙りて。路次の用意に御秘藏の髭切の御太刀賜りしは武門の譽れ身の面目。片時も早く立歸りかの御方の御返事を我君へ申し上げん へ夜更けぬ内と主從が。行かんとなせし後より。一吹き落す青嵐に岸の柳の騒がしく。心ならねば振返り 綱へハテ心得ぬ。妖怪出づる取沙汰に夜に入りては表を鎖し。男子すら通行せぬに女子の來るはいぶかしゝ へさては我等を威さんと。姿を變へて妖怪が爰へ來ると覺えたり。幸ひなるかな討取りて 綱へ君へ土産にまゐらせん へ二人の者に打呫き ●へ機密を授け退けて 綱へおのれ妖怪ござんなれ ●へ太刀引きそばめ仄暗き木下蔭へぞ入りにける へまた叢立ちし雨雲の陰洩る月をよすがにて 三下りへ辿る大路に人影も。火影も見えず我影を若しや人かと驚きて。被衣に身をば忍ぶ摺り。けふの細布ならずして女子心に胸合はず思ひ惱みて來りける 妖へ卯月の空の定めなく降らぬ内にと思へども。爰は一條の戻橋。見れば往來ふ人もなく へア、便りもなやと佇みて。暫し休らひ居たりける へ綱は小陰を立出でて ●綱へ女性はいづれへ參られるぞ ▲妖へ妾は一條の大宮より五條のわたりへ參りまするが。只一人故夜道が怖く。爰に佇み居りました 綱へ怖いと申すは尤もなり。五條のわたりへ

參るとあらば某送りて遣はさう 妖へお詞に隨ひますればお伴ひ下さりませへ折から空の雲晴れて月の光に見かはす顏 鬼へハテあでやかなへ水に寫りし影を見て 鬼へヤ、今水中へ寫りし影は 妖へエ、鬼へ夜更けぬ内にイザ疾く／＼へ西へ廻りし月の輪に。遠く望めば愛宕山北野に近く清瀧の。森を越え來る時鳥初音ゆかしく振返り。見上ぐる顏にはら／＼と。樹々の雫も雲運ぶ雨かと暫し立休らひ 鬼へ歩き馴れぬ夜道にて嘸ぞ草臥れしことならん 妖へイエ妾よりあなたこそ足弱をお連れなされ。お草臥れでござりませう 鬼へ暫らく是で憩はれよへ連立つ道に馴れやすく今は隔ても中空の朧も春の名殘かな 鬼へ都人とはいひながら。いとも優しき形風俗。御身が父は何人なるぞ 妖へ父は五條の扇折り。舞を好みて舞ひし故。妾も幼き頃よりして教へを受けしが身の德に。この程迄もある御所に御宮仕へを致しました 鬼へ恥しながら某は未だ舞を見たる事なし。一さし舞を見せられまいか ●妖へお送り下さる共お禮に只今御覽に入れませう へ女性は扇借受けて會釋をこぼし進み出で 鬼カヽリへ空も霞みて八重一重。櫻狩する諸人が群れつゝ妾へ清水や。初瀬の山に雪と見し花の散り行く嵐山。惜しむ別れの春過ぎて夏の初めに後れにし花も青葉に衣がへ。木々の緑の美しや 鬼へイヤ面白き事なりしぞ。かゝる技藝のある者を妻に持ちなばよき樂しみ●へ言ふをこなたはよき機會と 妖へ定めてあなたは奥樣をお持ちなされてどございりませうな ●鬼へ未だ妻は娶らぬが。見らるゝ通りの無骨者誰も妻になり人がない 妖へ何ない事がござりませう クド



早百合（惡鬼）

きへお情深きお心に今宵見みえし姿さへ。縁を結ぶ露もがな思ふ戀路の初螢へ言出でかねて胸こがし若葉の闇に迷ふもの。都女郎は取分けて ●へ姿やさしき花菖蒲引きつ引かれつ澤水に袖も濡れにし事ならん 綱へそれは御身の思ひ違ひ。かゝる名もなき田舍武士誰が思ひを懸けようぞ 妖へイエ〳〵立派なお名故に 綱へなに立派な名とは 妖へ當時内裏を警衛に都へ登りし源の頼光朝臣の御内にて。渡邊源次綱殿故 綱へヤいかゞ致して其名をば 妖へ戀しく思ふ殿御ゆゑ疾くより存じて居りまする 綱へ戀しく思ふと言ふは僞り。御身が我名を存ぜしは妖魔の術であらうがな へ星を指されて打驚き ●妖へなに妖魔の術とは 綱へ見目よき女に化するとも其本性は惡鬼ならん 妖へ何と 綱へ汝は心附かざりしが。月の光に映りたる影は怪しき鬼形なりしぞ 妖へヤヤ 綱へその本性を顯はせよ へいふに妖女も忽ちに忿怒の相を顯はせば へ後に窺ふ郎等が。觀念せよと組付くを事ともなさず振拂ひ 皷唄へ我は愛宕の山奥に幾歳棲みて天然と業通得たる惡鬼なり。車輪の如き目を見開き炎を吐きし有様は。身の毛もよだつばかりなり 綱へ扨こそ惡鬼でありしよな 妖へイデ此上は汝をば我が隱れ家へ連行かん ●綱へ小癪な事を へ引立て行かんと立ちかゝれば。綱は生捕りくれんずと勇力振ふ時しもあれへ一天俄に掻曇り震動なして四方より黒雲覆ひ重なりて。綱が襟がみむんづと摑み へ砂石を飛ばす暴風に連れて虚空へ引上ぐれば へ髭切の太刀拔放し。鬼の腕を斬拂ひ。どうと落ちたる北野の廻廊 へ惡鬼はむらがる雲隱れ。光を放ちて失せにけり。



早百合（惡鬼）其二

三保松富士晨明　二九

〔解題〕通稱「三保の松」。作者古河默阿彌。作曲者は十二代常磐津小文字太夫（今の豐後大掾）と六世岸澤式佐。明治廿五年四月刊。

●へほの〴〵と。明行く空の雲晴れて。千本の松に風もなく。波も靜けき君が代の。惠みを仰ぐ朝日影。へ東を照らす富の名も。高き山路の久能山。遠く望めば玉櫛笥。箱根が岳の二子山近き眺めは青嵐。吹上の濱薩埵越。へ岸打つ波の清見潟。清水の港朝込みに。船の往來の眞帆片帆。風のまに〳〵風早やの。三保の社の三保神樂●へ音に聞えし羽衣の。松は常磐に色かへず。幾年ふりし物語へ有渡の濱邊へ雲井より。天津乙女が天降り松にかけたる羽衣を。漁り人に拾はれて。歸るよすがも荒磯の。荒れし苫屋にはかなくも。結びし夢の別れ路に。東遊びと夕汐の。指す手引く手の駿河舞　舞の合方　へ霓裳羽衣の一曲に。袖を返して歸る波●へその乙女には劣るとも。伊達をするがの彌勒町●クドキへ通ひ廓の遊女に。旅寢の憂さを忘れ草。朱の煙管の長かれと。かはす袖師のうらなくも●へ語らふ間さへ短か夜に別れともなく興津川。へ又の御見と約束の。日どり數ふるきぬ〴〵に。へ鐘に恨みぞ有明の。月は殘れる吐月峯。へ跡へ心は殘れども。狐が崎の名もあれば。是も手管と庵崎や。へ手越の里の少將が。昔を偲ぶ厚原の。曾我の祭の賑はしく。賤機山の賤女が。浮島が原浮き立ちて。へ田子のエ、。へ田子の浦邊へ打ちくる波へ。姿映して見る水鏡。雪の化粧のその美しさ。誰に靡くか夕煙。しよんがいな。わけもなや●へげに時知らぬ山といふ。不二は四時に變りなく。三保の松原千代かけて。枝葉榮ゆる常磐津の。賑はふ家ぞ目出たけれ。

大森彦七　二〇

〔解題〕作者福地櫻癡居士。始め五代目菊五郎が「鬼女の出る中幕」といふ註文で書いたところが、氣に入らなかつたので、そのまゝになつて居たのを九代目團十郎が熱心に望んで明治三十年十月明治座で女寅の千早姫で演じて好評を博し、新歌舞伎十八番となつて今日に及んだもの。作曲者は岸澤式佐。

●淨カカリへ頃は北朝建武三年春の暮に伊豫の國の住人大森彦七盛長は。御堂の庭に急がんと。まだ夜深きに立出でて。合へたどる山路に道芝の。淋しさかこつ賤の女を。いたはり連立つ夜の道。二上リへ彌生の末の若葉たち合殘んの合へ花の白雪も合朧に見ゆる小夜中に。雲の脚さへ叢立ちて。谺に響く合水の音本調子へ身も輕々と賤の女が。石を傳うて川中に。立てば危ふき瀨まくらに押流されん風情なり。盛長へきのふの雨に水増せしか。小川なれども此水及勢。女性の身にて歩渡りとは及ばぬ事。某背負うて參らせん。姫へそれでは恐れ入りますが仰せにあまへお背中に。盛へサア遠慮なく。お掛りあれ。へ乙女を背負ひ大森が。漲り落つる谷川の。流れを渡る折こそあれ。へさつと吹き來る夜嵐の。空にきらめく北斗の光り。不思議や乙女の相好は。忽ち變る惡鬼の姿。鐵杖ならで氷の刄。盛長目がけ斬りかゝる。合へ女ながらも希代の早業。かなたへ離れ合こなたへ飛び合かけらふ稲妻合蝶千鳥合下弦の月影水の面岩に碎けてちら〳〵へ流石の盛長驚きしが素より聞ゆる無双の勇士。難なく乙女を取つて押へ。盛へ女性の身にて盛長を欺し討たんとは何者なるぞ。淨るりへ照る月影に顏打詠め。盛へ御身は目元鼻筋まで正成殿に生寫し疑ひもない楠家の御息女姫へいかにも妾は楠河内守が娘の千早。何故あつて湊川の合戰に。父上に詰腹切らせ。菊水の寶劍を奪ひ取つては立ち退きしぞ。其恨みを晴らさんと。待設けたる今宵の出會。

●盛へ天晴の御心底。さりながら。御身

の恨みを解かんため。其日の軍のあらましを盛長語り申すでござらう。浄るり〽それにてお聞きあれかしと。盛長は座を構へ。盛〽扨も建武二年の皐月。正成殿には一族引連れ 浄るり〽旭に輝く菊水の。旗靡し堂々と。湊川へと打つて出で。海陸二手の足利勢を。引受け〱攻破り。合〽風に木の葉を散らすが如く。合〽敵を悩まし戰ひしが。一村ある家に馳せ入りて。息を休めて在したり。盛〽某斯くと見るよりも。〽イザ一戰と押寄すれば。御着長を脱がせられ。既に最後の御支度ありしが。〽來れや應と立ち上り。再び物の具召さんず有樣。コハ勿體なやと押止め。御最期すゝめ奉れば。〽御心靜に稱念唱へ。正季殿と刺違へ。御痛はしくも御兄弟。同じ枕に臥し給ふ。〽父が最期の物語。聞くに涙も瀧津瀬や。むせぶ小川の水増して。

胸も漂ふ切なさに。姫は御聲曇らせて。姫〽その御物語を聞くからは。御身を父の敵なりと。恨みしは妾が誤り。又二つには。御身が預かる菊水の寶劍手に入れて。弟正行に得させんと。願ひし事も空頼み。クドキ〽故郷へ歸る雁金の。一羽殘りて恥かしや。身は片よりの苧環に。繰りてかへらぬ朽絲の亂れて絕ゆる玉の緒と 合〽豫て覺悟の上なれば。岩屋の内か淵の底。せめて亡骸隱し置き。恥を包むが身の言譯。姫〽御暇申す大森どの。●〽心の最期死出の旅。力なく〱立ち給ふ。御有樣の痛はしさ。〽盛長暫しと押止め。盛〽アイヤ待たれよ千早姫。御身の孝心義烈に感じ。菊水の寶劍御讓り申さう。姫〽エヽ、。盛〽楠家の息女千早姫に。此菊水の寶劍を讓らばこそ惡しからめ。幸ひなるかな鬼女の面。楠判官正成殿の怨靈現して惡

鬼となり。この盛長を悩まして。寶劍奪ひ去りたりと。世間に披露致されよと。浄るり〽劍を取つて差出せば。姫は嬉しさ遣る方なく。落ち散る面再び掛け。寶劍取つてすつくと立ち。盛うた 合〽なうわれこそは楠判官正成が怨靈なり。今ぞ朝敵調伏の劍を奪ひ立去らんと。はつたと睨みし鬼女の形相。物凄くこそ見えにける。盛〽扨こそ汝は楠の怨靈なりしか。やはか寶劍渡さうや。姫〽何を。●〽また聳立ちし雨雲に。爭ふ姿も月落ちて。曉近き明星のきらめく光り〽合チラ〱〱。見えつ。隱れつ。惡鬼の姿。見失ひてぞ失せにける。

（常磐津節終り）

第五編　富本節之部

年朝嘉例壽

〔解題〕通稱「長生」。から呼ぶのは、序の數行を省いて「長生の家こそ…」から語り出す習はしになつて居るからである。富本の祝言物中最も名高い曲であつて、寛延二年正月、初代富本豐前掾が常磐津から分離して一派を樹てたのに對して、雲州松江城主松平宗衍（寶暦五年南海と號す）からこの詞章を賜つたので、これに曲節を付けたのだといふ事になつて居る。

ヘシルヘ新玉の年の入フシ始めに筆取りてギン萬の寶 地かきぞ集むる大和歌ハルフシ筆試むる。千代合紙に。長地墨色げにも。下堆高く。雲の容色雲上紙の。色紙。合短冊詠初のウ三つ物連歌俳諧も盡きせぬ詞眞砂なり。合ウタ、キ濱の眞砂は詠みつくすとも冷泉盡きせめや。中我が國と。君が代の謠●ヘ長生の家こそ。又老いせぬ門の若々と。中地若水汲みの朝わかき。お湯殿はじめ庭竈。烟ぞ今日の初竈。長地たな引きにけり合一刷毛に繪の書初めの熨斗寶珠●ウヘ玉の櫛笥に髮かゝさるウ白紅入と繪元結▲カンヘ結ぶ縁の妹と脊も。命長掛け諸白髮まで。長地變らぬ仲と睦まし月の着衣。はじめはやり模様の伊達小袖合●ウヘあだと色とをこい紫の十九や二十は色盛り■ウヘなまめく風を姿見に●ウヘ映せば戀のます鏡月の黛花の顏。合地雪の肌の。衣紋つき又長地ヘ裲襠しとゞ振る袂ゆらな手元に爪ギン琴の合二上りヘ茶路といふも合草の名合茗荷といふも草の名。合富貴自在。ウク德ありて冥加あらせ給へや合春の入花の琴曲。ウ花風樂に柳花苑合柳花苑の鶯は。同じ曲を囀づるカヽリヘ彈初めうたふ連れ歌やヘその色糸の音に通ふ。ウ峯の松風松囃子。ウ中四海波風しづかにて〳〵。上ル國も治る代のためしギン射初のどかに弦の音射垜も菫鼓草。ウ春の姿も山笑ふ笑ふ家には引合福引のウ手に絲遊ぶ綱手繩深紅の色の厚總や合ギン飾り立

てたる黒の駒。合 ウクル 誰いはねども 鞍は梨子地の鐙に泥障。合 手綱かいくさて/\見事な御馬乘り初め勇ましノル お召しぞと 合 道具屋 へ對の口取り りしつとん/\。合ウ 立鼓。ちきりを き。ナホルカヽリ 勇む春駒芦原の。ウ 園鮫鞘を踵らたせて落し差し。中 揃ふ奴 乘廻しくるり。くるりくる/\/\ に羽をのす鶴の丸鶴の齡の千代八千代の聲揃へ 二上リ ウ へ二人つん/\連立 と。合 車にあらぬ輪乘りの拍子と 合ウノ 久しき御代こそ日出度けれ。ちさあ/\行くべいさあ行くべい嬉し ル 轡の音がりん/\がら/\りんがら、日出たの日の出まばゆき。金覆輪の。/\。合 はいどう/\はい/\/\ ド

四十八手戀所譯　二

〔解題〕安永四年中村座顔見世狂言「花相撲源氏張膽」の第二番目に出したもの。作者金井三笑。出演者は富本豐志太夫（後の二代目豐前太夫）富本伊津喜太夫（後の富本延壽齋）三絃初代名見崎德治等。配役は股野五郎初代中村仲藏、河津三郎と鴛鴦の精二世嵐三五郎、傾城喜瀨川實は股野妹誰が袖と鴛鴦の精三世瀨川菊之丞で大當りであつた。此淨瑠璃は上下二段の長篇で、上段は、鬼王の取りなしで河津と喜瀨川との雙六の勝負から、股野河津の相撲となり、喜瀨川の行司の見えでの相撲の來歷から四十八手の裏表を戀の所譯になぞらへての仕方ばなしがあつて、相撲の取組となり、四十八手をつくして引合となる。これが上の卷で、今日でも「相撲」の稱呼で、後半喜瀨川の相撲の故事來歷からあとだけ曲が殘つてゐる。下の卷がこゝに收めた「鴛鴦の段」で、股野が毒酒の中へ鴛鴦の雄の血を搾り込んだのを河津に飲ませて喜瀨川に惑溺させようとしたが、雌鳥の精が現れて、血汐の働きで鴛鴦の姿となつた河津との間に色々の所作があり、又股野に飛びかゝる、股野は名劍の威力で追拂ふといふやうな趣向である。

本曲の外題は上巻「相撲」には適するが、下巻「鴛鴦」には向かないので、文政十一年正月中村座で再演の時には瀬川如皐が添削を加へて、上巻に「四十八手戀所譯」と出して富本の淨瑠璃、下卷は「鴛鴦客姿正夢」として常磐津で出した。(挿圖參照)

第三回目は弘化四年正月中村座で演じ、外題は「戀角觝閨顏競」「鴛鴦襖閨睦」と並べて共に富本で出して居る。俗に「新相撲」「新鴛鴦」といふ。詞章は多少改められて居る。

こゝには今尙富本で出される原作の詞章を收めた。

相撲の段

◯へ抑相撲の。濫觴を。　Ⅰ地　語るも聞くも遠つ國。天竺にては佛在世唐土にては晉の御代。扨日の本にて始りしは。詞へしかも人皇十一代。垂仁帝は粹な君。だきつかせたり手をしめさせ。叡覽あるのがお好きにて。▲へ御たはむれが誠となり。諸國の力者に命ぜられ。相撲の勝負ぞ　Ⅰへ始まりオトシける。　詞へ大和に。當麻蹶速とて。毛だらけ男の毛澤山。毛ぶかい。髭地のけんまくにて。けんべきはつてぞ　Ⅰへ控へたる



其骨柄こそゆゝしけれ。合▲詞へ相手に罷り出雲の國。野見の宿禰と申せども酒は少しもならの京 ●へ九重匂ふ花角力 ⧗地へ大内山の春の色 長其立合も百敷や桃に櫻にたをゝ柳 合●へ色香爭ふ▲へ其風情 ■合へ前代未聞の 合へ晴れ業は ⧗へ花々しくぞ見えにける 合■へ蹴速は。人ぴやうぼさつなり 合色淺黑くさしかたにて 合●へ意地の悪そなお顔つき ■へ何を 合▲へ宿禰は人ぴやう力士なり。かしら小さく 合すそぶくら 合●へしかも色白よい男 心だてなら器量なら。ほんに女子のすくねさん。戀の手取おや ●へあゝいおとこ 長いつかお前と取組んで手くだいて末かけてゝふかく大關縁ならば嬉しからうちやないかいな。合●詞へ妹脊によせし言の葉は 土俵のかたち陽にして開ち天を表したり 合▲へ柱に四方の其かたち。

地になぞらへし地てんだい 合■へ幕は北より引きはじめ。北へ廻して引き絃る。合▲へもとより へ北は。陰にして■へ水にもとづく陰陽の ●へ妹脊の中も末かけて。▲へ結ぶといふも 合 ⧗二人へ相撲の名 ●へ絲のとりもち取組に。忍び大關逢ふ夜を使り。人目關脇いとうても。二人が中に小結の 合約束固き岩田帶はやかぞいろの 合前頭。あらはれ月の。恥かしや ●カゝリへ喜瀬川はかひ〳〵しく。すそひきあげて土俵眞中軍配もつて歩み出で。詞東のかたやは股野さん。西のかたやは河津さん。▲へ源平勝負の ■へはな相撲 ●へイザ立合うて ▲へイザ ■へイザ ⧗へイザ〳〵 三下りへひきすて 合背負投げ 合かいなごり。詞ノルへアリヤ〳〵〳〵ヨイヤサ 合方上ルへやがら四つがいひさやぐら。コリヤ〳〵〳〵ヤットセ 合方イロノルへひねり。つまどり 合大ごしやアリヤ。〳〵。アリヤ〳〵〳〵ヨイヤサ 合へかものいれくび腰車コリヤ。〳〵。コリヤ〳〵〳〵ヤットセ 合方へしぎの羽がへしむかふづけアリヤ〳〵〳〵ヨイヤサ ノルへかくればはづし。合つればあます 合とうくわのせちゑのとりあはせ勇む心は 合春駒の ノル立ちあがらぬが風情にて四十八手もなほたらで百手を碎いてとつたりける 合萬夫不當と呼ばれたる。股野河津が取組は。めざまし。かりける次第なり。

鴛鴦の段

●上ノルへ鏡影水波。月の雲。ウギン我に境涯の念慮あり ⧗へげにや拙き浮世ぞと思ひ知れども捨てやらぬ。ウ妄執の縁こそキン恥かしけれ。二上りへ一人伏す床の假寢の物憂さを。誰かは問はん哀

れ知る。合上ル鴛鴦の衾のいたづらに。合荒れにし床や散る涙露と答へてもろ共に消えぬ此身ぞ恨みなる。合方●詞へ黄昏時を知る。鴛鴦ひとり寝ず。情なや夫鳥を邪見の矢先に射止められ。詞へその血汐生を隔つる人界の。祐安殿を迷はさんとかの。仇人の股野が企み。告げ知らせ度く二つには。我が夫鳥の血汐の酒。五體に受けし祐安樣こそ慕はしく。思ひを述べんと夫鳥を。こがれて爰に。迷ふわいの ●色 水鳥の ドタ、キへはかなき跡に年を經て。唄ガカリ 通ふばかりのえにこそありけれ。ウレヒ 其言の葉も身に白雪の。ウ積り／＼し愛執輪廻情かはすも戀の柵。長 色の淵瀬と水の 合かしはの浮沈み。中 身は浮草の根を絶えて。ウ さそひし物を神沼のァハブシ眞菰がくれの獨り寝ぞ。ウうき身ながらに夫鳥のこれまで來り。ウ色 さむらふぞや ●詞へありし契りの縁らずば。今血汐の加被なせし。祐安殿の五體をかり。見えてたべよ我が夫鳥。逢ひたい。見たい。なつかしい。お懐しうござんすわいなう。⧗ 唄ガカリへ眞菰刈る。文七 堀江に。浮きて寝る鴛鴦の霜の劍に。あらねども。邪見の矢先に貫ぬかれ終に此世をはかなくも。合 去りし契りの忘られず血汐に加被して祐安の五體を假の諸羽交ひ。▲タ、キへ交はす言の葉。睦まじくありし添寝の妹脊川。浮世を渡る花筏。離れ／＼になるとても。深き契りの思ひ羽は。かさまじとこそ契りしに今は蘆間の水筋も誰が通ひ路と スエフシ なりたるぞや。へ妬まし小夜の友鳥やいかでか夫をかさゝぎの。橋の置く霜更くる夜毎の獨り寝も。合 逢ひたや見たや戀しやと思ひ亂るゝ身すがらを。なに疑うてつれなやと。恨みかへすも恨むるも泣く音は カハリオトシ なくて哀れなり。へ此身もとより植木にあらねば合 臺に輝く鏡もなし。煩惱菩提は法の道連れ 合ア、ラ樂しの契りながらも 合●謡へ是までなりや花は根に。⧗三下りへ鳥は古巣へ歸れども。歸らぬ此身 合此世を去りし瞋恚の炎。▲ナホルへこがるゝ胸は我とてもその仇人を恨みの劍羽比翼の思ひ羽。▲中を隔つる罪障の雲霧起つて庭の面迷々。杳々。朧々 スエル たり。▲色へ疾くより後に景久が。それと見るより突立ち上り。合 ア、ラ怪しき女が振舞ひ。また祐安があの姿扨は血潮を以て。河津が五體へ鴛鴦の精魂乘移り女鳥と契り交はすよなア。血氣の景久堪へ兼ね。ひらりと拔いて斬りかくれば。●フシへ拔けつ潜つつ祐安が五體を苦しめ惱亂しかつぱとばかりに

伏轉ぶ。色へ景久髭をあらゝげて。詞こる心にも。へ浮世の網は離れ得ず契りの景久が劍に怖れてたぢ〳〵。双の股野に恨みをなさんと企みし化生の合末かけて残る心も有明の。月は五は忽ち玉あられ。猶降りかゝる血の涙め。それこそは思ひも寄らず。尋常に障の雲晴れて。空も緑の御にて。花はの日も紅に染め渡るは紅葉の橋のかさ其處。立去るまいか。●露唄なう恨めし紅と隔てなき。フシ草木國土みな佛さぎか合聲を上げ得ぬ鴛鴦の道がたの仇人や。我が夫鳥を射止められうき體と聞くものを ●へ情なくも夫鳥を矢なの威徳に怖れて翔けり羽たゝき飛上寝の夢のさゞめ言假の逢ふ瀬の今も先にかけし其恨み。思ひ知らさん思ひり。蘆邊を指して水煙形は見えずなり猶。妨げられし憂き別れア、ラ思へば知れと。Ⅹへ瞋恚の劔羽磨ぎ立て〳〵にける。はかなやなア。へ水に棲み。雲井に翔け合翅打つて立ちかゝれば。猛勇烈士

關寺小町 通路小町 百夜菊色の世中　三

〔解題〕　通稱「關寺」又は「檜垣」。　安永五年十一月市村座顔見世狂言「姿花雪黑主」第一番目四立目に出したもの。作者櫻田治助。出演者富本豊志太夫・伊津喜太夫、三絃名見崎德治等。役割は傾城小野照屋のたかむら實は小野小町、四位少將市川八百藏、荒卷耳四郎中村助五郎、傘賣六郎兵衛實は大伴黑主二役關寺の檜桓老女亡魂市村羽左衛門。小町と少將とは戀仲であつたが、小町は惟喬親王の妃となるを避けて小野照崎の廓へ身を寄せ、少將は太政官の正印論議のため廓へ入込み、こゝで二人は戀ばなし、それを傘賣の六郎兵衛が取持つといふのが上卷。下卷は少將を嘗て見染めた關寺の檜桓の老女の執念が現れて二人の戀を妨げるといふ趣向で、曲の現存するは下卷だけであつて、玆に收めたのがそれである。

下谷坂本の小野篁を祀つた小野照崎神社の事や、檜桓の傳説を關寺小町と抱合せて趣向をこらしたものと思は

れる。役としては羽左衛門の傘賣と檜垣が重いもので、評判記によれば上出來であつたらしい。

●平家へ五蘊假に形をなし中閻浮に通ふ。ギン闕寺や⧗下人も咎めぬ老の身のウク戀に迷ひし。コハリ魂呼ばひ。●謠へあしたに一鉢を得ざれども求むるに能はず⧗ウ色にかまけて此年月を。合ウ入戀し〱と殿御を戀ひて終に一夜の契りさへ▲ツヤミ歌ゆるさぬ仲の情入なや●謠へつひには老の鶯の⧗フシ古枝にかへる●ウタヒ道もなきとよ鉢タ、キわれと我が身を白川のみつはぐむ。●ウへ姿恥かし影ぞなつかし下戀せしギン人を綻取られて枕一つの物憂さに。よろぼひながら來りしぞや。ウ恨めしや。ウ恨みながらもいとしさは猶深草の花薄ウ露も起居に忘られず是まで參り詞候ぞや●詞へ百年に一年足らぬ九十九髪。へ我を戀ふらし面影に

立つ ■へ百年に。一年たらぬ九十九髪 ▲へ我も戀ふらし面影に立つ。ハテ合點の行かぬ。此歌を口ずさみしは何者ぢや。ヤ、それに佇みおはするはそれがし弱冠のみぎり先帝仁明天皇御惱平癒の祈願のため兄興風殿に附き參らせ。近江の國多賀明神へ參詣なす。頃は嘉祥三年文月七日。いまだ殘れる暑さ強く。路次の砂をも焙ずるばかり。その暑さを避けんがため。所は江州關寺の門前にて。水やあると乞ひしかば。とある内より老女立出で。我に水を與へし其時の老女。最早年經て十年あまり。よもやとは思へども生死の存亡計り難なし。それかあらぬか身の上をこの興則へ明かし召されい ●へそんならそれをお忘れなう ▲へいかにも少

將（興則）覺えて居る ●へア、嬉しや〱それを覺えて居さしやりますからは何しに身の上を包みませうその時關の清水を汲んで參らせし檜垣の老女は妾ぢやわいなう ▲へそれ〱思ひ出すも一昔其時の檜垣の老女であつたかいなう ●へまだ其時は侍從之助興則様とて可愛らしいお稚兒さま ▲へ今は官位も四位の少將 ●へあの藤原の興則様 ▲へそもじは今に年ふれど ●へ其折からの檜垣の老女 ▲へ不思議にめぐり逢坂の ●へ關の清水を掬びしも ▲へ深い縁で ●へあつたよなう ▲へ時に老女。尋ねたいは。あの江州の關寺から。はる〲遠いこの廓へは。どういふ事でごさつたぞ。其譯は ●へサアそれは ▲へどうぢや ■文七へ問はれていふも恥かしや

その文月に逢坂のギン関の清水に影とめし ウ月の雲井の御方を●クドキへふと見初めて縁はこがれ。此年月の物思ひ 朔日をも知らぬ ウク 老の身の佛一枚取り置いて、結ぶの神に手を合はせ後生の為の念佛も珠數にはまらで數珠を繰り せめて一夜さしつぽりと抱いてだかれてねゝするならば。それが未来の土産ぞや情ぢや、慈悲ぢや善根ぢや我が願叶へて給はれと。水に織よる涙川白髪のトルオトシ 雫や解けぬらん ▲へ數ならぬ身の此少將殊に當時は世を忍ぶ身の上。あるに甲斐なき某を。さまで執心との志は嬉しけれど、年にも應ぜぬ老女の願ひ、假初に詞を交はし。手に手を取りし。此首尾を初音の今日の思ひ出に。サア〈〈早う關寺へ。歸つて下されい。あれ〈〈あれは憶か。越し方にて馴き馴れしエギン

カヽリ へ浅草寺の鐘の聲八聲も告ぐる山かづら ツキユリ あさまにならば恥かしの森の木隠れよも スヱ あらじ ●詞へイヤ〈〈どの様にあらうとも枕かはさにやおかぬ〈〈。ヤナニ小町どの、少將様は此檜垣の老女が男にせにやならぬぞ。そなたはどつちへなりと行て下され。その古へは我とても逢坂山の關寺へつらくも人に捨てられしが、今又人を捨つるも戀。せめては老女が形見を遣らう。コレ〈〈是はわしが手馴れし杖と笠。少將様ぢやと思つて大事にかけて持つて行きや ■へこりや又あんまりぢやわいな。身は關寺にありながら年甲斐もなき横戀慕。言ひ交はした自らを戀の山路へ捨てるのか ●へいかにも山は老女が住家 小■へ昔にかへる秋もなく ▲へ月の友人團欒して ●へ今宵はそなたも獨り寝しや ■へ女夫の中を更科や

●へ時に取つての姥捨山行かぬか〈〈行きをらぬか ▲二上リ へ盛り老けたる女郎花露の袂をしをたれて 合上ル 晴れて逢はれぬ因果同士いつか雲井に澄む月の 合 都の昔慕はしくそなたの容と眺めしが ●フシ へしかるに月の名所。いづくはあれど更科や ■取組 へわけて添寝の明石潟。長地 心も須磨の恨みさへ堅い石山打解けて ウ 曇らぬ仲と誓ひしを今宵の雲に隔て。られ又も涙の雨催ひ笠 スヱル 傾けて伏沈む ▲へコレ小町御前思ひも寄らず胸を痛めて苦しうてどうもならぬ水を一つたも ■へあい〈〈 ●へヤこれ〈〈わが身には汲まさぬ汲まさぬ。今も昔の影とめし關の清水を憂き人にいざ〈〈汲んで參らせう エ 三下リ へ置き手拭に前垂たすき小桶かゝへて 合 しやならく と。合 腰は柳か老曽の森か 合 箒木がありとは三重の抱へ帶底

澄む水を波まうよ波まうよ●詞向ふ釣瓶の水鏡▲カンヘなう浅ましや我とわが身を苦しむるコハル苛責の罪⧗水は忽ち炎となり。猛火の釣瓶に熱鐵の桶もさながら三つ瀬川。冥途の責めを眼のあたり。顫ひわなゝきくる/\合●上ルへあら堪へ難やと身を悶えかつぱと伏すと見えけるが此苦しみも誰故ぞや ウ 思ひも深き深草の其仇人に纏ひこがれ⧗ウ枕かはさぬ執着心■絆に繋がれ纏はれて▲ウ双にかゝりし亡骸の魂魄是までコハル来りしぞや●詞へ恨めしやなア。おことを深く思ひそめ妥やかしことさまよふ内。立烏帽子とやらんが邪見の刃にかゝりしも、是みな汝が故なるぞや。小野の小町とも添はさぬ/\共に奈落へ連れて行き、思ひ知らせん思ひ知れ⧗上ルへ思ひは山のかせぎにて。招けど更に留まるまじ。さらば煩惱の犬となつて七重の鎖は切れるとも。未來永々生々世々附纏ひ行く玉蔓梢を。引取しのぐ木枯しや雨か木の葉かばら/\/\。合さら/\さつと懸風合山風はやち風クリ上昔を今に吹返す小野照崎や小町塚江戸の名所と上栄えける。

夫婦酒替奴中仲　四

〔解題〕通稱「鞍馬獅子」。安永六年十一月市村座顔見世芝居「兒華表飛入狐」の第二番目に出した淨瑠璃所作事。作者中村重助。出演連名掲出の通り。（豐前太夫、齋宮太夫は本年正月それ/\改名）役割は靜御前三世菊之丞、太神樂獅子實は御厩喜三太初代仲藏、饅頭賣日向屋實は姥が嶽の雌狐、酒賣伊勢屋實は源九郎狐。靜御前は惡人から義經は殺されたと告げられて、悲しみの餘り狂氣して、父の形見の長刀をかついで狂亂となる。太神樂獅子に扮したお厩喜三太がこれにからんで種々の振があつて、トゞ本名をあらはし、靜の供をして義經の跡を慕つて鞍馬へ行く。こゝ迄は曲が現存する。原作ではこのあと酒賣と餅賣とがからみ、更に引拔きと

なつて狐の本性をあらはして種々の所作をするとい
ふなか／＼の大物である。こゝには曲の殘つて居る
上卷の前半だけを收めた。

二上リウ▲へ嵐のさそふ花の雪散れば狂じした。詞へホ、
て柳髪。合上ルへ雪は飛んで散亂し狩風ホ、、、オ、を
に似たる。白砂も。長狂ふ狂女の姿かかし。逸足早う。
や詞へコレその人に物問はう。妾が尋逃げていたか。
ぬる公達の⧗へウ綾の狩衣たをやかに。ホ、、ホ、、、
十六七の細眉にウ鐵漿くろ／＼と粧ひ笑へ／＼⧗ナホ
し。ウお稚兒の旅に逢ふ事の。もしやル下ハル妾も人が
ちらりと三日月ならば教へてたべの里笑はなん合。さ
人と。うつゝスエル涙に譯もなき詞へヤもし恥かし此
ヤ、何ぢやわが君様は鞍馬にぢや⧗姿の。ウ小春へ殘
三下リ長へ鞍馬の里は八瀬大原。大原ろ亂れ菊とり形
木可愛々々合大ウ原女が引く牛に合戀映す水鏡。御裳
しき人を打乘せて。引いて行きましよ濯川や八十瀬
我が故郷へ。合大原木かはい／＼／＼川。合所は伊勢
なウ可愛々々と啼く鳥に憎や添寢を起のかみ。二人神





正本繪表紙

風に。連れて聞ゆる神樂歌 ●詞へ惡魔を拂つて。そつこでせい ウノル合方へ諸國廻りに 合天照らす 合ゥ 神を商ふ 合す ぎはひに 合 襟にかけたる曲太鼓 合詞ノル 頭に獅子の二人前 合 一つに寄せて 合詞 打つたり舞うたり 地 月の朔日十五日。大晦日も元日も 文彌 股引がけの旅神樂。ノルゥ 我と浮れる道草に獅子の眞似して カハリ 來りける。詞 へコレ/\里人々々爰へ來てたもや 仲彌 へ大神樂は傍へ寄り。詞 見ればお若い女中の只一人。お前方の樣な美しいお方のお傍へ寄つたならどんな太鼓の撥が當らうか知れぬ 菊 へヤこれ/\そなたの頭のは。そりや何ぢや 仲 へエ是かえ。是は獅子さ 菊 へフゥ其獅子わしに貸してたも 仲 へエヽ是を貸してくれえ是をお前に上げては。私が鼻の下が干上る。菊 へそんなら我が身舞うて見や 仲へ合點

合點。お望みに任せつゝさらば神樂を囃さうか エ 二上り へ抑も神樂のその初め天の岩戸の屏風の内の 合ゥ 天の鈿女の魂膽に神の心を 合 取りはやし 合中 手練手管の眞實に 合 ナホル 正木の蔓よりかけてしなだれ蔓王蔓。長 長鳴鳥の常闇にしつぽり汗を角兵衛獅子。詞 獅子はお家のでれつくでん。つく/\見れば ●詞クル へてんとたまらぬ品物め エゥ へ誰と寢て來た亂れ髪どこの岩戸の睦言を。問はまほしやと寄添へば ▲ゥ へもとより狂氣のうろ/\と 合エ へ長刀取つて打ちかくる ●詞イロ へオット危ない鼻の先。エ中 へ受ける曲撥三尺の。劔にひやうす業物は是ぞ千卷の玉鉾に。追ひ立てられて大神樂。逃げる拍子に狂ふ獅子。こなたは戀の物狂ひ 合ロ へ狂ふは獅子の冬牡丹獅子團亂旋の 合 遠くとも逢はではてなん。へ我が夫の鞍馬

の方と聞くものを。ゥ 鞍馬の方は。いづくぞとそこはかとなく エ へ走れば走るうつゝなさ。留むる男を振袖に。拂ふ羽袖や飜へる。ゥ 賤の苧環くり返し。ゥ 昔を今に戀しさの 合ゥ▲ へ戀には翅もあるものを添うて行きたや逢はせてと アハブシ 口說いつ泣いつ正體なく エゥク 取縋られて大神樂。乗りかゝつたる灘の船寄るべ兼ねにし風情なり。

其俤淺間嶽（おもかげあさまがたけ）　五

〔解題〕 通稱「淺間」。安永八年、市村座興行「一代目細川劇」一番目狂言として出したもの。（富之丞は之即ち二代目。「淺間物」に名をあげてゐる）。「其俤」は二代目の傑作で、淺間を初めさせてゐる。小柴補部實は京の小次郎澤村四郎五郎、傾城奥州二代目富之丞、富本豐前太夫・富本大夫、三味線名見崎德治・三保崎東四郎であつた。作者は增山金八であるが、實はこれより前に屢上演された幾多の淺間淨瑠璃の文句を取つて綴合せたもので、決して勝れた曲とはいへない。然し、節付がよかつた爲であらう、一中にも當時中に移されたものもあり、富本自身にも三つの淺間を數曲づゝ移されるほど、長唄にも移されて劇後度々繰返されて、「淺間」といへば直に富本を聯想するほどになつたのである。即ち淺間物中の名曲の一で、また富本名曲の一に數へられるものである。

〽あはれ昔へなし。思ひ出すれば懷しし ひの聲中 上はいかなるに引かれ はてこがるゝ胸の火の煙くらべん淺間で、〽行く淺川に同じれば在し里の明け行く 此世のことなれ共別の其僞に 出して 胸を押へヤア／＼そなたはも 詞〽常々ことの内外は 〽尚さす目 奥州おもとなり 詞〽恨みも 奥州ぢやないか。どうしてマア爰へはに解けてスカス行く。ウ 床存の仲の恨み 戀も殘りねの若しや心の變り下 やせん おぢやつたぞいなう 富之丞〽只忘られぬ詞。長唄 かたくも岩に離れ給ふ。キン と下 思ふ疑ひウ 晴らさん筐の誓紙をば は互の戀路。お顏が見たい。戀しい。京の小次郎祐俊が。タ、キ名殘雄鹿の命 下 なぜに合 煙オス となし給ふ怨めしや 床しい。懷しい思ひこがれて。是迄參毛も 中地 きのふの露とはかなくも。ウ 合ウ上ル 早くも變る飛鳥川中ギン きのふの りましたわいなう 四郎〽オヽよう來て消えて此世に亡き妻スカスの。ウ 胸に思 誠今日の嘘。なげの情の恨みをも合 云 たもつたなう。アノそなたは人手にか

かつて死にやつたと聞いたに依つて。おりやもう大抵や大方案じて居たのに。マアよう顔見せに來て。たもつたなう 菊へわたしは此樣に思うてゐれど。水臭いはお前の心。ほんにあんまり 四郎へソリヤ何がいなう 菊へ何がとはアレあの 四郎へエ、起請の事か へアイナア 唄ガカリへ淺い心とゥ白絲の染めて悔しき馴れ衣。ゥありしながらの一つ前地小棲揃へて。しどけスカシなく。風に。柳のヱへ吹くまゝに。ゥ任せる筈の勤めぢやとても。●ゥ厭な客にも比翼莫蓙合思ふ男の山鳥の。ヱへをろの鏡の影をだに ロゥ見ぬ目に曇る薄月夜。▲上カンへ閨の障子に俤もれて漏れて浮名の流れて末は。つひの寄る瀬の浪枕 ●へ變るまいぞや ▲へ變らじと ●ゥへ筆に誓ひの神かけて。ゥ墨と硯の濃い仲を誰が水さして濡衣の。無き移り香と ヱゥへしらべの絲の胸づくし。名を立てゝ無理な事。▲ゥへ昨夕の床の雞の啼くまで ゥ口説して ●ゥへ抓りし夜すがらに背中そむけて物云はぬ ●ゥ痕がこれ爰に ▲へ紫式部が筆の章。

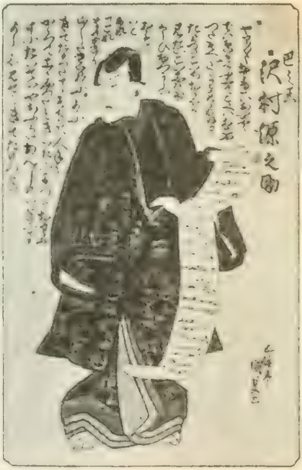


「淺間」富本出語（寛政元年三月市村座）

へ無言の鐘の煙草盆煙管に科のあるか 女の上の品定めも。悋氣は下品。下生いなう。こち向かんせと寄添へばひんとぞや。いたらぬ〜。四郎へコレ〜振切る。袖の香は ロゥへ誰と寝て來た 奥州。もうそなたもその野暮は抜けさ

うなものぢやぞや。ちつと粋になりや
粋になりや 菊へなんぼ其様に言はしやんしても。打つちやつて置いたなら悪性の仕飽きであらう。ほんに油断がならぬわいなア 四郎へソリヤ誰がいなう 菊へアノお前が 四郎へ何と 菊へコレ ● クドキ へちつと引寄せ引寄せて 詞 ほんにまあ ⧗ウタノル へ憎いおさんがあるわいな此頃のしなしぶり 四ウ へ聞いた夜すがもよしそれとても花染めの。カンうつろひ易き癖ぢやもの。合 露の喞言の樂しみならば。ウ だんない／＼急きやせぬと嗜んで見ても落付かぬ ●へ心の駒の亂れ髪結ふにいはれず云へばえに。懸ける合／＼と口癖に云うたお前にかけられて。ウ 登り詰めたる戀の山。浮名いとふも初手の事 ▲へ云ひ立てられて ●へ歌はれて ⧗へわさくれ橋の名に辿る。三下り 首尾の合圖の箱梯

子 合ギン 手管に馴れし裲襠の下に流るゝ 引合 いさや川。ナホル 我が名もらすな。告渡る。カヽリ地 八聲の鶏のとり／＼に。合 長餘所はきぬ／＼是からが間夫の畫ぢやと短夜を。夢も結ばぬ睦言に。恨み云うたり笑うたり別れに立てし誓文は。一中 千も二千も三千も。ウ 世界に一人の男ぢやと樂しむ中を。むら雲の。合 憎くや思はぬ疑ひに。飽かぬ別れの浮世の名殘。鴛鴦の劒羽我からと貫





きとめし玉の緒の■へ苦しい▲へ悲しい●ゥへ口惜しい。カン誑された身は。何がなるしかも共日のめぐり來て。ゥ今日と知らでや忘れてや。ゥせめて未來は違ひなくハル蓮の臺に。二人寝の合✕へ誓ひを頼む起請をば。上カン煙となして後の世は。●へ添はぬ心か胴慾や。情フシ無いぞと身を悶え。歎けば共に。涙ぐみ▲カヽリへやがて此身も葉末の露と。ゥ消えて行く身中ぞ。二世かけて。ゥ誓ひし起請はこれ。合此胸に有明の。月は曇らぬ西の空。遠い國で添はうぞや。待つてゐやいと手を取れば✕へ恨みも晴れて身の上を。ゥ語るも恥かし淺ましや。未來の罪は現在の果に依るものをさなきだに。重きが上の色小夜衣。上變る枕の數々に✕ゥへ指切り。●へ髪切り✕へ僞りの。起請の血汐は紅蓮の波。嘘の涙の水增さる。三途の川の唐紅。ウノル劍の山は此世から我とゥ貫く刄の苦しみ合。人の思ひにあこがれて此身をこがすコハルへ焦熱の。合ギン炎の責めも諸共に。奈落の底の底までも合。離れはせじと附きまとひノルくるりくる〱〱と。追ひめぐり追ひめぐり合ゥ輪廻の車。煩惱の。ゥ絆に引かるゝ我が魂を。ゥ結びとゞめよしたがひの合。ゥ夫よ妻よと呼びかはす聲も亂るゝ朧影見えみ見えずみ。合ゥ幻のノル姿は消えて陽炎の。花壇に飛び交ふ秋の蝶合。手にも取られずちら〱〱。合ゥ風に亂るる白粉も羽に殘して草隱れ。

梅川 忠兵衛 道行戀飛脚　六

〔解題〕安永九年七月市村座盆興行「聽淨瑠璃坂」の切に出したもので、義太夫の正本「けいせい戀飛脚」の新口村を書き改めたものである。富本豐前太夫・齋宮太夫・安和太夫、三絃名見崎德治等で、梅川に瀨川菊之丞、忠兵衛に松本幸四郎、孫右衛門に大谷友右衛門であつた。

本曲は翌天明元年五月「契情戀飛脚」と題して森田座に上場され、又天明四年にも森田座で繰返され、更に寛政元年三月「艶容垣根雪」と題して、やはり富本で演じられて居る。

倘梅川忠兵衛の淨瑠璃の系統については近松名作集下「冥途の飛脚」の解題御參照を乞ふ。

中オン落人の。地 鶯かや今は冬枯れて長地 薄尾花はなけれども世を忍ぶ身の跡や先人目を包む頬冠。隱せど色香梅川が馴れぬ旅路を 地 忠兵衛が ウ 勞はる身さへ雪風に 長地 凍えるウ手先 懐へ。ウ 温められつ温めつ行原道を足びきの 地 大和路さして行く姿や 合ウ 木々の梢も紅葉して色で逢ひしは早や昔今日は親身の女夫合。ウ 頼まば願ひ庚申。ウギン 庚申堂や勝曼の廿六夜も影くらき ウ へ身の繰言は愚痴なれど。大恩受けし養子親妙閑様へ一日も孝行らしき事もなく御苦勞と啼ち涙に目もうるむ クドキ へ顏つれ子のせうがには仇な勤めを實にして。かけし其上に。明日の歎きの數々は解づれと打ちまもり。それ其樣に云はん ウ お前と寐た夜は 合 曉の鳥の啼くまくに解かれぬ三度衛の重き不孝の罪科す程此梅川が身のつらさ。ウ 惚れた女で繰返し〳〵同じ噺の其中に。ウ 末は



「艶容垣根雪」の富本出語

女夫と言交はし 且 枕忘れて引寄せて ギン ちつと締めたる肌と肌常の女子とうつゝなく取亂したる眞實が 合 なま中下届いて木津川のほんにわたしがある故に。ウ 今のお前の憂き難儀。堪忍してとばかりにて跡は涙の カハリオトシ 村時雨。ノル下 野邊のみづおりしほるにも。裾にやつるゝ小笹原行き悩みては カハリ 立止まり 菊之丞 詞へ申し忠兵衛さんよしない私故お前の心遣ひ何かの事を思うて見れば此梅川に愛想が盡きやうかと思うてそれが悲しうござんすわいな必ず〳〵死ぬるとも私も一緒にお前の手にかけ殺して下さんせえ 幸四郎 へそれ程まで思ひ詰めたるそなたの事どうして愛想が盡きやうぞ道々もいふ通り新口村の忠三郎といふ者は百姓でこそあれ頼もしい男頼んで一夜逗留してハテ梅川も此忠兵衛も死ぬるとも故

郷の土 ウレヒ へ産みの母の墓所へ一緒に埋まれ嫁姑の未來の對面させたいと スエオトシ 日もうろ〳〵と泣きければ クドキ へそれは嬉しうござんせうさりながら。ウ わたしが父様母様は京の六條珠數屋町。ウ 定めし此間は詮議に逢うて居さんせう母樣は目まひ持ち。若しもの事はあるまいかと我が身の上より案じられ今一度。せめて京の二親に一目逢うて死にたいと オスフシ 又も涙にむせび居る。カヽリ へ我もそなたの二親に。聟ぢやと云うて逢ひ度いと人目なければ抱き付き涙の霰ばら〳〵と袖より ハルオトシ 落つる雨や小雨 カヽリ へ富田林の群烏。せめて一夜の心なく咎むる聲の高間山あの葛城の神ならで カヽリ 夢の通ひ路つゝましく。ウ 我から狭き世の中や竹の内峠岩屋越え野越え山越え里々を。急げば早き故郷の新口

村にぞ オトシ 著きにける、幸 へコレ〳〵爰が此忠兵衛が生れ在所向うに見ゆるはさつきに話した忠三郎の居宅 ヤ、ヤ、アレ〳〵あれへ見ゆるはこれ〳〵此忠兵衛が實の親の孫右衛門様ぢやわいの此世のお別れお暇乞ひせめて餘所ながら拜まうとはる〴〵と爰まで來た念願が屆いたかエ、有難い〳〵。菊 へもし〳〵あの綟子の肩衣がお前の父さん孫右衛門様かいなほんにまあ親子は爭はれぬもの目元なら鼻筋ならお前によう似た事わいなア 幸 へサアそれ程よう似た親と子が詞さへも得交さぬはマ何とした此身の因果お年も寄る足元もいかうお弱りなされたもしこれが今生のお暇乞ひでござりまする 菊 へほんに今がお顔の見初めの見納めもし私は嫁の梅川でござんすわいなア夫婦は今をも知れぬ命百年の御壽命過ぎて後

未來で孝行いたしませう。あなたへ御苦勞かけまするもみんな私故この梅川故 幸へア、これ〳〵ひよつと人目にかかつては二人が身の上あの辻堂に隠れて居て餘所ながら親父様への御暇乞ひ梅川おぢや。

下之巻

唄ガカリへ大阪の 地義理と故郷の恩愛の道は二つに分れども血筋ばかりは一筋に道場參りの歸り足 キヤリ 身をしる雨の小止みなく 冷泉 野風に迯る畑道 ギン 後しぶきの ギン 頻吹には 中 傾げて急ぐ阿彌陀笠。 長地 孫右衛門は老足歩むとすれど合とぼ〳〵と。ウ野口の溝の薄氷。 色滑るをとまる高足駄。鼻緒は切れて横ざまに。どうど轉べば。ノル忠兵衛是は南三無と悶けども出られぬ身梅川周章て走り出で抱き起して裾しぼり。菊へもし〳〵どこも痛みは致しませぬかお年寄の危ない事お足も洗ひ鼻緒もすげて上げませうやれ〳〵危ない事でござりましたなア。友右衛門へア、戴きます〳〵ヤレ〳〵何誰か知らぬが忝なうござるお蔭で怪我も致しませなんだ若い女中のお優しい年寄めと思し召し嫁ごもならぬ御介抱もう〳〵手を洗はしやつて下さりませ。幸ひ爰に藁は澤山鼻緒はわしがすげますもう〳〵構はしやつて下さりますな〳〵 菊へア、もし〳〵爰によい紙がござんす紙捻つて上げませうと延紙取出すその手もと 友へ孫右衛門不思議さうにフウ爰らあたりには見馴れぬ女中マアこな様はどなたなれば此様に懇ろにしては下さると顔つれ〳〵と眺むれば 菊へ梅川いとゞ悲しくて涙は胸に餘れどもわざと色には出さずしてハイ私はそれ〳〵旅の者私が舅の親父様も丁度お前の年輩で恰好も生寫し外の人にする奉公とはモさら〳〵以つて存じませぬお年寄つた舅御様の臥惱みの抱きかゝへ孝行は嫁の役 詞御用に立つて何ぼうか嬉しうござんす。さぞ連合ひは飛立つ様にも思はれませう申し其紙と此紙かへて私が申し受け ウレヒ 父御に似たる親父様の形見にさせ度うござんすと塵紙袖におし包む涙にそれと カハリスヱ 知られけり 色へ詞の端に孫右衛門。さてはさうかと恩愛の盡きぬ涙を押隠し 詞フウこなたの舅にこの親父が似たというて孝行かうれしうござるが腹が立ちますわいの〳〵わしも年たけた悴めを様子あつて久離切り大阪へ養子にやつたが傾城といふ魔がさして人の金を盗んだとやら擧句に所を駈落したとの噂この大和は生國なれば十七軒の飛脚屋仲間

御上からは隠し目附或は順禮古手買ひ節季候にまで身を窶しこの在所は詮議最中誰ゆゑなればその傾城の嫁ご故詞カヽリヤ近頃愚痴な事ながら世の譬へにいふ通りゥ盗みする子は憎うなうて縄かける人が怨めしいとは此事久離切つた親子なればよからうが悪からうがぺして構ふ事はなけれどもゥ大阪へ養子に往て利發で器入用で身を持つて。詞身代もよう仕上げた。あの様な子を勘當した。親は大きなたはけ者と指さしせられ笑はれたら何ぼうか嬉しうござらうにゥキ今にも探し出され縄かゝつて引かるゝ時。詞孫右衛門は目水晶よう勘當した出かしたと褒めらるゝのが悲しうござるわいの〳〵。アヽそれを思へば一日も早う往生お救ひカヽリなされて下されと拜み願ふは今参る如來様御開山。佛に嘘がつかれませうかいの〳〵ゥ佛に嘘がつかれうかとどうど伏せばゥハシル梅川もわつと聲を上げへ忠兵衛は辻堂より手先を出して伏拜み伏拜み身を揉みクドキスヱ歎くぞ道理なる友色へ孫右衛門涙をおさへ詞様子聞いたか聞かぬか知らぬが子を釣出さうと御上からの計らひ養ひ親の妙閑殿を一昨日牢へ入れたげな菊エヽ友へサそれでつく〴〵思ふには實の親を便りにしてもしも忍んで來はせまいか來たらば何ぼう不便でも養子親への義理あればかくまふ事はさて置いて親が縄かけ出さねばならぬアヽどうぞ來てくれねばよいが又爰らあたりをまい〳〵〳〵〳〵と迷付きはせまいかと四年此かた逢ひもせず懐しいと思ふ子の顔見ぬ様に〳〵と神佛を拜むもあいつが不便さからアヽとは云ふものゝ若死する人の一生義理ある親を牢へ入れおめ〳〵と逃げ隠れ末世末代不孝の悪名取らうよりは所詮遁れぬ命なら一日なりと妙閑殿を早う牢から出すが孝行覺悟極めて名乗つて出いしたがそれもどうぞ親の目に懸らぬ所で縄かゝつてくれい現在血を分けた我が子に早う死ねといふのも浮世の義理なぜ又前かたに内證でかう〳〵した傾城にかうした譯の金が要ると便宜でもしをつたらハテ久離切つても親子ぢやもの隠居の田地を賣立てゝも首に縄はかけまいにみんなおのれが心からソレ其身もせまい苦をしをつてアレいとしぼなげに嫁ごに迄思ひも寄らぬ憂目を見せ知音近附親にまで隠れる様に身を持ちなしろくな死もせぬ様に此親は産付けぬわやいエヽ憎い奴とは思へどもへ可愛うござると泣沈み分けたる血筋ぞ哀れなる色涙の隙に巾着より金一包み取出し

友へこれ〳〵コレハ京の御本寺様へ上げうと思うた金なれど嫁御と思うてやるではない只今のお禮の爲是を路銀にちつとなと遠い所へサア〳〵早う〳〵 菊へア、有難うござりまする お心づかれし此お金逆様ながら戴きます へ大阪を立退いても カンウク私が姿日に立たば。ゥ借銭に日を送り 合ハル奈良の旅籠や三輪の茶屋 合長五日三日夜を明かし二十日あまりに四十兩遣ひ果たして二歩殘る 合金故大事の忠兵衛様科人にしたも私から。さぞ憎からうお腹も立とが因果づくぢやと諦めて。合 お許しなされて下さりませ。ゥ 親子は一世の緣とやら此世の別れにせめて一目。ゥ 逢うて進ぜて下さんせと立つ梅川を 色へ押しとゞめ 友へア、これ〳〵やくたいもない〳〵たつた今も云ふ通りたとへ詞を交はさいでも顔見合うたりや縄かけるかおれが口から訴人せにや養ひ親への義理が立たぬ何ぼう義理が立てたいとて現在親の手づからどう縄がけられうぞいの 菊へ御尤もでござりまするそんなら顔を見ぬ様に勿體ない事ながら此頬冠でお前のお目を斯うさへすれば縦へお傍に居やんしても何と構ひはござりますまいがな 友へオヽ忝うござる物いはずと顔見ずと手先へなと觸つたらそれが本望逢うた心親子一世の暇乞ひ必ず〳〵こなたの連合ひに物いはせて下さるなよ 菊へアイ 中ギンへ親子手に手を取交はせど へ互に親ともへ我が子とも云はず云はせぬ カンへ世の義理は へ涙湧出る水上と身も浮くばかりに クドキオトシ 泣き喞つ 友へアレ〳〵あの人聲は慥かに追手この裏道の小川を渡り藪を抜ければ後所街道早う〳〵 菊へ段々のお志有難うござりまするとてもの事に親父様のお顔をちよつと 友へア、これ〳〵ちよつとでも顔見ては妙閑殿へ孫右衛門が立たぬわいの未練な事いはずとも此所を早う〳〵 菊へサアそれは。友へ兩人さらば 下へ子故の闇の目なし鳥。平沙のうたふ血の涙長き親子の別れには安方ならで安からぬ心殘して別れ行く心殘して ウレヒ三重 別れ行く。

小むらさき
白井權八
まゐらせそろ
連理橘
七

〔解題〕通稱「蟲賣」。天明元年七月市村座興行の「室町殿榮花舞臺」第一番目に、「道行瀨川の仇浪」（お半長右衞門）と一日替りに上場されたもの。作者は櫻田治助。富本豐前太夫・齋宮太夫・安和太夫、三絃名見崎德治等。蟲賣瀨川菊之丞、燈籠賣市村羽左衞門、白井權八坂東三津五郎。
白井權八の隱家へ七夕の晩に蟲賣と燈籠賣とがやつて來ての仕方話の趣向。

長唄カヽリ〽色かへぬ常磐の里に住みなれる荷ひ賣り合其とりなりも拍子よく合く。只家の長久を願ふが第一と。星へて合中カン琴の音に聽く松の風螢と雪の窓の前。月に讀むなる文月に若衆盛り歩みくる。イロ詞〽二人の商人枝折にかに。表の方に物音するは。何者ぢや。を三津五郎ウ〽錦の綵をかけまくも星祭る夜はウ梶の葉に。言の葉ぐさを書添へて深き願ひと白露も奧ゆかしくぞ見えにける合ウ〽粹な浮世のなん〱〱中を。合野暮に暮して合町スカシ町の長唄得意を廻る影燈籠なれも。ウ戀路に身をやつしごと二十四日は愛宕樣。長唄ノル月の八日は茅場町大師參りや合不動樣はなれぬ中の御緣日。ウ色には仇な八つ橋を江戸紫の由緣とて。引く手あまたの花あやめ。家橘に似たかり羽左衞門詞〽ハイ私は今度仕出しの燈籠賣でござります。燈籠の御用はござりませぬか菊之丞〽ハイ私は秋を音に啼く蟲賣でござります。蟲の御用はござりませぬか羽〽燈籠の御用はござりませぬか菊〽蟲の御用はござりませぬか兩人〽お求めなされて下さりませ三津五郎詞〽七夕の祈る手向や受けつらん。上げて數へる梶の言の葉。物數ならぬ白井權八。室町殿より下し置かれし吉岡一文字の刀。武士の冥加と有難羽〽ハイ私どもは。此お屋敷をお見かけ申しまして參りました。商人でござります。菊〽オ、それ〱。色を音に啼く蟲賣と。暮れて花咲く燈籠賣と。思ひ思うて。參りましたわいな。三津〽二星たま〱逢うて。別所に恨みを述べず。たま〱言問ふ二人の商人。ハテ珍らしい營みぢやなア。どれ〱身どもが求めてくれうか。マこつちへ這入れ〱。ハテ見る程奧床しい女子商人。そなたの商ふ蟲の數々。其名が

一々聞きたいわいの 菊〽そんなら私が商ひます蟲の數々お耻かしながら。東西々々 三下リ〽商ふ蟲の數々は。千草にすだく武藏野の 合燈にあらぬ。轡蟲蝗鈴蟲黄金蟲 合馬追ひ蟲の遣る瀬なや。ゥ我は及ばぬ簑蟲なれど。合ゥ父よと啼いで 合戀に身を 合ゥ やつれ果てたるきり〳〵す 合 蚊帳も思ひの片釣にひとり焦るゝ螢籠 合ゥ 濡れなんものと松蟲の。合仇に日暮し啼き明かすゥ長き其夜にあきつ蟲逢ふ瀬も合 あらば天の川帶さへ雲の綾錦 合 きりはたりてふ 合〳〵機織蟲や 合賤の業連ねし露の玉蟲に詞の花や結ぶらん。三津詞〽うき草に。浮かれ遊ぶや女七夕。今の蟲づくしを聞いては。滅多に此屋敷の內へは置かれぬ。サア〳〵早うそつちへ出てたも 菊〽そりや又。なぜでござりますえ 三津〽サア其仔細は。今日は大切なる乞巧奠の星祭。家內を清淨潔白にせねばならぬ。早う歸りや〳〵。菊〽そんなら何とおつしやります。今宵は七月七日の夜。七夕祭をなされます故御尤もでござります。とても事に鵲の渡せる橋の二つ星其お話をどうぞお聞かせなされて下さりませい 三津〽アノ七夕の星祭を 菊〽アイナア 三津〽サアそれは 菊〽お願ひ申しますわいな ゥ〽昔々唐土に。遊子 合伯陽といふ夫婦あり。明暮れ。ヘル月を念じつゝ 合 つひに天上に果を受けて。ノル牽牛織女の 合 二星と現はれ 合ゥ 銀河を渡る烏鵲の橋別れの涙翼を染め紅葉の橋ともいひ傳ふ。ゥ その鵲の假寢にも。合上カン〽水も漏らさぬ天の川それも及ばぬ事ながら只の女子の心から包み 合ゥ 兼ねたる胸の內是この 合帛紗にもお前の手跡。ゥ 楊子差にも藻鹽草。二世と云はれて嬉しさに秋の扇と捨てやらず 合人目といふも知らばこそぢつと身に添へ抱締めて。ゥはかなき戀の力草どうで女房にや持ちやさんすまい 合ゥ わたしばかりが惚れて居て嘘の 合返事 合を誠と思ひ。長地 堺定めぬやもめ鳥長き月日をうか〳〵と。ゥ中 騙されたさの身の願ひゥ笑はしやんすな 合叱らしやんすな 合ゥ せめて一夜の。お情に アハアシ 露の命も捨小舟。ゥ 楫を絶えたる涙川行方もオトシ 知らぬ風情なり。中〽我も任かする。ゥ 水馴棹下ゆく水と心には。ゥ 思へどさすが前髪の亂れもやらぬ武士氣質 合ゥ 色に立つ名をおしまづき寄り汐もなくオトシ見えにける 詞ノル〽これ。これ〳〵〳〵〳〵 そこを我等が商賣柄。照らす所を取持つて。ちよつと拍子に糊細工。長地 放しはせじと押遣りて好いた女の燈籠鬢ほつれかゝりし

色御見もじ。ウ憎からぬとの挨拶が聞　大の字に結綿の。其中々に橋や。二上リ子燈籠の眞實は。ウ變らぬ仲の花燈籠。
かまほしと星合ひに。ウノル妹脊の橋の　へ今の浮世の名取草　合　牡丹燈籠の軒の　ナホルカヽリ簾の内を戀草の。妻籠れりと夕日
渡り初め。詞ノルサア〳〵〳〵と手　つま　合　こがれて通ふ船燈籠　合上ル　前渡り　影。あせや思ひの種ならん。夢や枕に
を引けば心はとけし顏と顏。ノル三つ　する舞燈籠。長地　文の綟張り指髮を切　殘るらん〳〵。

新曲高尾懺悔　八

〔解題〕通稱「高尾さんげ」。天明二年八月一日から中村座興行の「伊達染仕形講釋」の第二番目に出した淨瑠璃。作者櫻田治助。富本豊前太夫・齋宮太夫・豐志太夫、三絃名見崎德治等。土手道哲市川團十郎、高尾幽魂瀬川菊之丞。賴兼のために非業の最期をとげた高尾の幽魂が現れて土手の道哲に、ありし頃の廓に於ける懺悔話をするといふ趣向。延享元年春市村座で長唄地で演じられた有名な「高尾さんげの段」に對して「新曲」と銘を打つたものであらうか。

へ一度淸容を見てそも人に叶ひ。ウ又　やらぬ溫め鳥雪の朝の白無垢は消ゆる　團十郎へハテ合點の行かぬ。申し〳〵御
ある時は聲を聞き。哀ギン愁の心いと　思ひと謎かけし。ウ心のたけを云ふな　出家樣と呼んだは誰ぢや　菊へ妾ぢやわ
深しぞつと素顏の流し目も。馴れし廓　らく。奈落の。入底に入る時は閻浮の　いなア　團へヤ、、そなたは三浦の高
の八ギン文字ツナグフシ松の位に柳の　昔なつかしく是まであギンらはれウさ　尾ぢやないか　菊へアイ高尾ぢやわいな
姿。ウ梅が香と上めし後朝もまだ覺め　むらふなり菊之丞詞へ申し〳〵御出家樣。ア　團へ南無阿彌陀〳〵〳〵　菊へ六

道四生の巷に迷ひ。浮かみもやらぬ此身の上。頼兼様がなつかしいわいな関へ不便や〳〵。喜怒哀楽は人情の常。勤めの内の憂さつらさを。何と話して聞かせまいか菊へサア姿もお話し申し度く。是まで参りましたわいな関へサ共話は菊へサそれは三下りへ羞かしながら川竹の合憂き節繁き中々にゥ年が明いての楽しみはやがて。おの字の名を嗣いで。二日酔ひせぬ身とならば素足も野暮な。足袋になり。抓めるを常の合此指に。ゥ絲針持ちて物縫ひ習ひ。合肌着仕立てゝ。着せて見て。合ウ殿御のたけに眞實がア、入肩かばほんにう入れしかろ。ゥそして斯うしてどうしてと儘になる身か何ぞ入の様に。中思ひ暮せし其内に頼兼様とおほけなき。ゥ二世の縁を入結びしがア、仇な契りか情なや。合カン別れの淵の泡沫も

あ入はれ果敢なき身の入上と。涙は袖に槇の葉の露重げカハリなる風情なり。関十郎詞セリフへ南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛。とても事に懺悔には重罪も滅すると云へば。ありし郭の事どもを愚僧に話し召されぬか菊へさなきだに女は五障三從の重き罪。それさへあるに小夜衣。我が夫ならぬ重ね夫。僞り飾りし身の罪を。そんなら懺悔致しませうか関へ罪障消滅の爲に。詳しう咄して聞かせ候へ。南無阿彌陀佛〳〵タ、キへ懺悔に罪も消えぬべし懺悔に罪も消えなんと露の此身を草枕。長地夜ごと〳〵に變り行く昨日の逢ふ瀬。入今日の淵瀬に寝る夜を酒事に。笑うて。合つゥらき日もあれば。泣いて嬉しき夜半もあり。蚊帳より外に。紙一重任せぬ身とて胸の苦を云ふに云はれずぐる〳〵卷きのオ、それ。其入文の數。ゥ

屆いて明日の仲の町客を松虫合秋津虫合ウ主を待つ夜は人こそ知らね夜着を枕に。鈴虫なれや我も虫にはゥあられども殿御戀しと。草葉にすだく哀れとも不入便とも。いふべき人は面影も見えみ見えずみ箒ノル木の長へ無慚や高尾は世の人のギン思ひをかけし報いにて。罪障の雲ゥ立ち蔽ひ。めい〳〵まう〳〵ろう〳〵たり修羅の太鼓をうつつなく早や。ゥ時來ぬと夕まぐれ。ゥこは口惜しや入淺ましやと立退けば又。行く先に。ハル炎々と合コハリ猶に苦しむ身の業苦獄卒。惡鬼の笞に打たれ山に登れば劍に貫ぬき合アタル谷に沈めばゥ紅蓮のこゥほりに。白無垢かへつて唐紅。合血は瀧つ瀬や酒の波。ノル嘘の涙は焦熱地獄。仇に浮ひしノル浮紙の烏黒鐵の。嘴を鳴らし兩眼がけて飛びかゝる合ノル追へど拂へど立去ら

す襲ひわなゝきたぢ／＼／＼。追廻り　廣大觀世音あみりたていぜいきやらう　花降りかゝる法の庭紅葉の塚と夕映もてくる／＼／＼。苦しき思ひに魂きはんそはかと。朝日の彌陀を唱ふれば。代々に其名や照らすらん。る。道哲こゝぞと念珠を揉み。合　南無　野分夜嵐目前に。忽ち紫雲靉靆し　クリ

花川戶身替の段　九

〔解題〕通稱「身替お俊」。天明三年春中村座「江戶花三升曾我」興行の時第二番目に出したもの。作者櫻田治助。富本豐前太夫・齋宮太夫・豐志太夫、三絃名見崎德治等。藝者おしゆん岩井半四郎、井筒屋傳兵衞市川八百藏、關取白藤源太市川門之助。

文政八年三月中村座で「其噂櫻色時」の外題で菊五郎（傳兵衞）粂三郎（お俊）團十郎（源太）が淸元の地で演じて以來、芝居では大抵淸元と定つたが、曲だけは富本でも現存してゐる。

本曲は通し狂言の一部であるが、その筋が分らぬので前後の關係が判明しないけれども、「其噂櫻色時」上演の時の臺帳（日本戲曲全集、舞踊劇集所收）によれば、次のやうな筋らしい。花川戶の藝者お俊と井筒屋傳兵衞とは深い仲であつた。處が義仲の子冠者太郎恒若の跡を慕つて園生の前が淸見が關の關所破りをしてお尋ね者になり、傳兵衞（本名があるらしいが不明）はこれを討つて身を立てようとする際、お俊實は景淸の娘人丸がお主に當る園生の前のために傳兵衞に愛想づかしを言つて切れ、關取白藤源太の手にかゝつて園生の前の身替に立つといふ趣向である。この源太は、當時人氣の高かつた力士小野川喜三郎に市川門之助が似てゐたので、それを當込み、淨瑠璃の文句にも「深き思ひは小野川の」と利かせてある。

淨瑠璃の文句だけではお俊が身代りになる場面は出てゐないが、「其噂櫻色時」の臺本によればこのあとに次の

やうな段切れがある。
へ心の闇の屛風山。うちに思ひやこもるらん內に思ひぞこもるらん。
ト段切りにて、太夫連中を消す。バタ〱になり、奧より傳兵衞走り出て來り、
傳兵 園生の前が首討つ時刻、延引致さば役目の越度。
トこの內屛風の內にてエイと聲して、
源太 その首級はお痛はしくも、只今討ち奉り、卽ちこれに……。
ト屛風の內より、源太お俠の切り首を花籠に入れて、
園生の前の御首級イザ。
ト籠の中より出して、傳兵衞へ渡す。傳兵衞探り取つて、
傳兵 ヤ、不便な女がこの最期……イヤ、如何にも御首、慥かに落手。
トこの時、奧より以前の平次、窺ひ居て、
(校訂者曰、平次は鎌倉の武士で、園生前召捕のためにこゝへやつて來て忍んで居たもの)
平次 ヤア、園生の前と思ひの外、正しくお俠。
ト言ふを傳兵衞、拔打ちにあびせ、
傳兵 これより直に。
源太 片時も早う。
傳兵 範賴公へ。
ト傳兵衞、刀を引く。平次見事に返る。これを木の頭。
ござれ。
源太 ハツ。
ト傳兵衞は首を抱へ、ホロリと思入れ。源太はこれを窺ひ見る。時の鐘の送りにて
よろしく幕

唄カヽリヘ雨の降る夜は一入ゆかし。合中カン冴えては。月に猶ゆかし。合ウヘお俊は一人湯歸りに合。浴衣をちよつと合抱へ帶。ウ紅葉袋にうつろひて。長地笧ならぬ横櫛に。つい髱あげの平元結合顏にかゝれば合ハル仇名スカス草。中夜は嵐の花川戸馴れにし潜り合押上げて內にカヽリ入るさへ物スヱ案じ。詞ヘ昨日傳兵衛さんの云はしやんした事を思へば。關破りといふは。此お俊が爲には大事の〱御主様。どこにどうしてお出でなさるゝ事ぢややら。其お主様の御難儀を。我が身に替へてお救ひ申したい心故。アノ傳兵衛さんに。モ心に思はぬ愛想づかし。さぞ腹が立つたでござんせう。傳兵衛さん。堪忍して下さんせえ。イヤ〱此様な事いうて。ひよつと人に聞えては一大事。ドリヤ身仕舞ひしてしまはうか 中ギンヘ昨日より。ウ今日は思ひの合冷泉カヽリ増鏡。ウ曇るとならば花の空合。ウ上野の鐘か淺草か。無常を中カン告ぐる風のあや引。八百露出中ヘ浮名が中に傳兵衛はお俊が。心疑ひて下忍ぶ姿の頰冠り。ウイむ軒は見覺えの慥かに爰ぞと門の戸を。叩く內にも心せき。八百詞ヘ爰開けて貰ひませう 牛ヘさういふ聲は傳兵衛さんかいな 八百ヘオヽ傳兵衛ぢや 牛ヘマアこつちへござんせ。お前はマア何しにござんしたえ。八百ヘ何しに來たとはお俊。この傳兵衛はおぬしが心を聞きに來たのぢや。昨日秋葉であの様な愛想づかし。どうも合點が行かぬわい。どういふ事ぢややそれが聞きたい 牛ヘもし私が心聞きたくば傳兵衛さんお前の心から先へ云うたがよいわいな 八百ヘソリヤ何を 牛ヘ傳兵衛さん。お前はほんに。アノ園生の前様とやらを。尋ね出して。お首を打たしやんす心でござんすかえ 八百ヘオヽソリヤ知れた事ぢや。アノ駿州清見が關を越えたる。園生の前は關破りの科人。今宵中に尋ね出し。首打つて出さねば。此傳兵衛が身の上の願ひが叶はぬ。ぢやに依つて。草を分けても詮議するのぢや 牛ヘそれさへ聞けば何にも聞く事はござんせぬ。サア〱早う歸つて下さんせ 八百ヘコレお俊。今思ひ出した様に此傳兵衛に歸れ戻れとはエヽ聞えた。昨日秋葉の素振といひ。わりや心變りだな 牛ヘアイ知れた事いな 八ヘエヽおのれはな〱ウノルヘ變る心に傳兵衛はせき色立つ胸を。押鎮め。思ひ直して凭れ寄り。合女子心は疑ひの深い中にも猶深い。二人が仲に水差して。合長地たとへ退かしてあるとても言交はしたを反古にしてそなたは添はぬ心かと。無理に引寄せ

色占問へば。半詞へ傳兵衛さん。切れて下さんせ八へ何がどうした半へ傳兵衛さん。いつ迄云うて居ようより。お前に愛想が盡きたといふ證據は。お前の紋の附いた私が小袖。お前の見る前でずん/\に引裂いて了ふ程に。心の殘らぬ様に。それから見て居やしやんせと。ウ色押入の戸を引明くれば。以前忍びし園生の前。顔見合せて惘りし。詞ヤアあなたはと云ふ様戸棚の戸を引立て詞ほんに私とした事が。未練らしう小袖を引裂かうの何のと云ふ事もないかいな。傳兵衛さん。たつた今。切れ文書いて貰ひませう。八へ何だどうした。半へサア今の戸棚の小袖の代りに。私が身を。切れ文。サ私へ切れ文書いて下さんせ八へハテ心ありげな詞の端。今のは慥かに染模様。小袖替りの切れ文を半へ早う書いて下さんせ八へそんなら切れ文。今書くぞよ半へアノマ御山な顔わいな唄カヽリへ世の中を何にたとへん飛鳥川に合ウ昨日の淵は今日の瀬と合變り易さよ人心。へ硯引寄せ傳兵衛は墨さへ薄き縁ぞと。ウ思ひ諦め書く文のたけ、も跡や先傍にお俊は見ぬ振りも、合風につれなき露の蝶。今は此身に愛想もこそも。ヒルカン月夜の。ウ客や鸚鵡を恨みし事も仇枕。八へソレ望みの切れ文書いたぞ。受取れへこれで心が、さつぱりとしたわいな八へお俊。もう此世では。逢はぬぞよ、唄カヽリ更けて砧の音さへゆかし半へお俊は跡を見送り。見送り變る心のつれなさを。ウ嘸や恨みて腑甲斐ない。ウ女子心と思はんしよが云ふに云はれぬ身の願ひ。愛想づかしのあり狀も合胸に涙を押入の傍へそろ/\色立寄つて。半詞へお前様のお行方を。はら/\とお尋ね申しましたに。ようこそお出で下さりました。園生の前様。へ人丸へ申しお聲が高い壁に耳。色へ人や聞くとも白藤が。暖簾の内より。門之助へお俊坊半へエヽ。門へハテきつい肝の潰しやうの。イヤ肝が潰れると云へば。ア、よく見れば見る程美しいものだ。此愛嬌で傳兵衛殿と色事だもの。有難いわえ/\半へ白藤さんやつぱりお前は邪慳かえ。へナニサたとへ邪慳でなければとて。誰も構ひ手はねえのさ半へ其様に云はしやんすな。構ひ手があるまいものでもござんせぬぞえ。申し白藤さん。アノ昨日秋葉でちよつと云うた事。マどうして下さんすえ。門へコレサ/\そんな事を云つておれに困らせる事はねえわな。お前はアノ傳兵衛さんと二世迄もといふ仲ぢやアござんせぬか半へサ其傳兵衛さんと切れて了う

たわいな門へナニ傳兵衞さんと切れて了うたとは牛へ切れて了うたと云ふ。慥かな證據は此切れ文。これ見て下さんせ門へアウ成程こりや傳兵衞の切れ文。そんなら疾うに切れたのかえ。牛へどうしてマア嘘に切れ文が。取られるもので。ござんすぞいなア門へこれで讀めた。アノ傳兵衞殿と緣を切つても。アノ押入の内の命が。助けたいとの事か牛へエ、サアそれは門へハテ。縫つた色事でごんすの。傳兵衞殿になり替り。戸棚の内を牛へア、コレ待たしやんせ門へナゼとめる牛へオ、憎く門へソリヤ誰が牛へ白藤さんが門へ憎いとは牛へわたしやお前に門へナニがどうした牛へ待つて居たわいなア唄カヽリへ松になりたや有馬の松にウ縒て見て譯も白藤に這ひまつはるゝ嬉しさは合長地菜種の花も山吹もいはぬ色なるしなし振り。ノルへそれと人目に關取は。お俊を突退けきる物を。抱へながらに立上り。色行かんとするを引据ゑて。中見て見ぬ振の背と背。男の髮を粹で掻撫でながら聲くもり。ウそりや素氣ないぞえ白藤さん源太さん合ウいかに關取樣ぢやてゝギン力ばかりか。心まで合そのよに強い合ものかいな。ほんに相撲の噂にも手取々々と聞き馴れて思ひ初めたる其日より。中カンへ氣に癖つけて忘られず心のたけを打明けていうて島田の縺れ髮。取上げられぬ仇惚れに。女子の道が立つものか。憎からうとも渡り合ひなげの情と一夜さの。ウ枕交はして下さんせ。やいの〳〵と顏隱す深き思ひは小野川に。濡れてオトス戀増す風情なり。門へそれ程までにこの白藤を。思うてくれる忝い。そなたの願ひ叶へてやらう牛へそんなら。縒て下さんすか門へイ、エそりやならぬ牛へシテ又何の願ひをえ門へ傳兵衞殿の切れ文。そなたを切り文叶へてやらう牛へエ、嬉しうござんす長へ目と目の内に心解け義理と忠義の假枕合。ウ思ひは二つ二筋の合帶こそ戀の命ぞといふ内粹な風吹いて合消ゆる燈火暗きより。心の闇の屏風山。内に思ひや籠るらん内に。思ひぞ籠るらん。

春夜障子梅　一〇

〔解題〕　通稱「夕ぎり」。天明四年正月森田座興行。夕ぎり三枡徳次郎、伊左衛門松本幸四郎、喜左衛門中村助五郎。出演者は富本齋宮太夫・飛佐太夫・登美太夫、三絃佐々木市四郎で、齋宮太夫はこの時始めて家元二代目豊前太夫と別れてタテとして芝居へ出たのであるが、のち延壽と改め、その門弟齋宮太夫が分れて清元の一派を樹てる事となると共に、この淨瑠璃も外題もそのまゝ清元に移され、同流でも名高い曲の一つとなつた。本曲の原作及びその系統については、近松名作集下卷「夕霧阿波鳴渡」の解題の條御參照を乞ふ。

地へ冬編笠のあかばりて。紙子の火打ち膝の皿笠吹きしのぐ忍ぶ草しのぶとすれど古への中花は合嵐の顋にハル今日の寒さを喰ひしばる。ウ食出し錺も神さびて鐺ハネハズミ詰りし合師走の目。色へ胡散らしくも吉田屋の内を覗いて詞へ喜左衛門宿にか。喜左々々と色鼻に扇の。横オトス柄なり。色へ喜左衛門は立出でて。詞お珍らしや伊左衛門様。いざお通りと。色袖を引けば詞へア、これ〳〵喜左。さりとては紙子ざはりが。荒い〳〵。中引けば破るゝ摑めば跡に師走浪人。昔は槍が迎ひに出る。今は漸う長刀の。合草履を脱いで編笠のオクリ中の座敷に通りける。色奥の様子を伊左衛門。腹立ちまぎれ床の間の。三味線引寄せ調子さへ。合はばどうして斯うしてと。ウ胸は二上り三下入り。唄の唱歌に合の手や合。唄可愛男に逢ふ坂の關より。つらい世の習ひ。詞ア、誠にそれよあの唄で思ひ出す。去年の月見に太夫とおれが連彈。弾いた時の面白さ。弾くその主は縒らねど。縒つたはおれが身の上。あいつが心底あの様にあらうとは唄へ思はぬ人に堰きとめられて今は野澤の一つ水合詞ア、いか様さうぢやなア。縒も誠も世にある時。人の心は飛鳥川。縒るは勤めの習ひぢやもの。逢はずといつそ去んでくれうか。アイヤ〳〵逢はずに去んでは。此胸が唄へすまぬ合心の中にも暫しすむは由縁の月の影。中へ無惨やな夕霧は流れの昔なつかしき。

ウ夫の音締身にこたへ。飛立つ心奥の間の首尾が朽ちせぬ縁と縁合胸と心の相の山間の襖の具合よく。上ウヘ明暮れ戀しい夫の顔。見るに嬉しく走り寄り。抱き付いたるきり〴〵す泣くより外の事スエルぞなき。詞ヘ伊左衛門は夕霧を突退けて立上り。コリヤモウ其涙に懲りたもの。傾城の心の底と猫の鼻は冷いと。世間の譬へに違ひはない。イヤ変な万歳傾城め。万歳ならば春おぢや通りや〳〵。通りやと言ひければ。詞ヘムウこの夕霧を万歳とは。ヘオ、万歳傾城の因縁知らずか。アノ侍の足にかけて蹴らるゝを。万歳傾城といふぞや。下誠に目出たうさむらひける。詞しかも。足駄はいて蹴るやら。合中ノル年立ちかへる足駄にて誠に目出度うさむらひける。詞ナント聞えたか。さりながら何も身すぎ。あの様なよい衆に

蹴られては損はいかぬ。慾を知らねば身が立たぬ。ウノル慾若に。御万歳とや。合中ノル年立ちかへる足駄にて誠に目出度うさむらひける。詞町人も蹴る。伊左衛門も蹴る。ヤ、蹴る〳〵と蹴散らかし。ウ煙草引き寄せ吹く煙管さらぬ體オトシにて居たりける。合クドキヘ夕霧涙諸共にウギン恨みられたり喞つのは。色の習ひと合云ひながら。合ウそれは浮氣な水淺黄合ウ逢初めた其日から。唄こんな縁が唐にもあろか。合ウク派手な浮名が嬉しうて人の誹りも世の義理も。合ギン白紙に書く文の傳ウ返事合取る手も。心せき口舌の床の合よしあしも。ウ嬉しいに付け。悲しいにつれて忘れた合事はない。合ウそれにお前の惡性をウわしが案じは移り氣の外にもしやと言ひかゝり。合ウしまひつかねば小夜更けて背中合はせて

寝て見てもつい。合それなりに張り弱く。仲直りすりや。明けの鐘憎うてならぬ合鳥の聲。ウ何の鳥が意地悪で合カン啼くぢやなけれど後朝の去なせともない心から。合ウ儘にならぬが色の意地そこを樂しむ粋な仲。合ウそれが嵩じて内方の首尾は不首尾と結ぼふれ。ウ勘當の身と柏の葉や兒の手柏の二人が仲暇乞ひさへ合泣くばかり。ウ去年の暮から丸一年二年越しに訪れなく。ウそれは幾瀬の物案じそれ故に此病ひ痩せ。ウ衰入へたが目に見えぬか煎藥と練藥と。針と按摩で漸うと。ウ命繋いでたまさかに逢うてこなさんに甘えうと。ウ思ふ所を逆様なこりやむごらしいどうぞいの。ウ心強や胴慾な憎やと膝に引寄せて。さすつつ泣いつ聲を上げ。譯も性根もウレヒスエなかりける。詞伊左衛門涙を押さへ今日來た

はかの里の悴。是をつぎ立て母人へ訴
訟して藤屋の家を取立てる談合最中。
其悴取返す思案がしたいと云ふ 色へ所
へ。喜左衛門は立出で 詞申し〳〵伊左
衛門様。お前の御勘當もゆるまります
る。里の御子息様も母家へお引取り。
夕霧様の身請もさらりと埒明けまし
た。サア〳〵お目出度いわ〳〵と へ家
内が勇む勢ひに連れて浮立つ伊左衛門
悦びの眉を開くや扇屋夕霧名を。萬代
の春の花見る人。袖をぞつらねける。

きの國や小はる 紙屋治兵衛 道行野邊の書置

一

〔解題〕 通稱「野邊の書置」。天明四年二月十四日から興行の「傾城皐富士」の第二番目に出した道行淨瑠璃。作者櫻田治助。治兵衛澤村宗十郎、小春山下萬菊、太夫三絃連名挿畫の通り。近松の「心中天網島」の道行を本としたものかと思ふが、とても比較にならぬ文である。本年七月夏芝居に、中村座で宗十郎の飛入で岩井半四郎の小春を相手でこの淨瑠璃を、同じく富本豐前太夫一連で出してゐる。

ウギン へ思ふ人。ハシル あればこそねぬ
江戸 ほとゝぎすウ 枕に殘るヨイ 恨みに
は。長地 紙屋治兵衛が身の行方引 高カン
家名もついのきの國屋ウタ、キ 今宵小春
が名殘ぞと合 ひばりはうきを鳴きつく
しオトス。地 雁はかたみの文ばかり反故
にもならず捨てられず。合 十九と廿八
年の合 歳を限りと繰りはたす。命合 二
つを珠數二連。なまいだ。〳〵合上ル な
まいだ〳〵カン〳〵合 南無網島も遥かな
る願ひの岸の土手傳ひ ギン おぼろ〳〵
にうつろひて角ぐむ ハネハズミ 蘆も心か
ら刄をヨイ 歩む思ひ川。深かれとこそ
契りしに丸三年もなじまいで。此災難
に大江橋合 あれ見返ればカン 住みなれ
し我が家に殘す妻や子の。明日の歎き
を思ひやり胸は板間か樋の上へ急ぐ心
も行惱む。合長カ、リ へぐちな女子に未練

な男へよく相惚れの術くらべ。合 宵はんどの〳〵先の世まひそりて夜中のくぜつ合カン泣いてしのでも夫婦ぞとツナギ手ぎのかうがいも中ウ 折れて別れの後朝に手を取りし戀の闇にほどけし髪を結ぶ手の。合 袖より奥若葉が中に。から。の入黒子。治兵衛命をウリ 鏡にうつ〳〵とはや大長寺のし。合長地 心の中の樂みは肌身につけてあけの鐘身にこたへ未來まで。合カン 消えぬ思ひの星明イイたる無常音。最期をこれこの道が冥途かと。見かはす顔も急がん此方へと露の見えぬ程落つる涙に堀川の橋も水にや命も草の上。頃しもギン ひたすらん ニ上リ 淀と大和の二河を月の十五日うき名の一つ流れの大川や。合 水と魚とは連れ日にや殘るらん。て行く。ナホル 我も小春と二人連合長地こ

新曲神樂獅子　一二

〔解題〕 通稱「神樂獅子」。寛政五年春市村座「貢曾我富士着綿」興行の際の淨瑠璃所作事。富本豐前太夫・齋宮太夫・安和太夫、三絃名見崎德治・鳥羽屋里長。曾我





五郎坂東彦三郎、化粧坂少將中山富三郎、近江八幡之助大谷德治。作者未詳。少將と五郎とが女夫の獅子舞に扮して廓を廻り歩き、工藤の近臣近江八幡之介の所望で獅子舞の後、八幡之介がこれにからんで大盡舞の所作になるといふやうな趣向である。

ワへ神樂囃して大磯合大門合化粧坂。ウ女郎さん方の晝見世に文の半切合十二銅。誰が云ひそめて角兵衛獅子。合出中カンへ頭にふける鳥の毛も合いやな客をは合振亂し。好いた蝶々合仲もよき地相生つれて道もせを。ウ招いて呼んでくれ竹の雀の聲や忍ばしく呼き合うてぞオトシ來りける。富三郎詞へ是やこなたへ御免なさんせ。これは大磯小磯化粧坂。廓を廻る獅子舞でござんす。富三郎へお望みならば十二銅。十二神樂の二人連れ。舞ひ舞うて見せ申すが。一年の惡魔拂ひ 富三郎へ女夫揃ひの獅子舞を。舞はせて御覽なさんせんかいなア 德治へヤアこりやよかろ。牡丹の花を眺めてゐる所へ。獅子舞とはどうも云へぬ。サア〳〵早う舞つて見せい。所望だ〳〵へ扨て獅子と申すは合獅子と申すはこれ外記西天の逸獸にて。かの石橋の浮橋や。をのこと化して色好み合ウ妻を慕うて峯を越え合ウ逢うて戻るが洞がへりウ花に戯れ合ウ岩にかくれ合長地狂ひくる〳〵枝にころ〳〵風にひら〳〵合ウおのが毛衣身を洗ふ瀧の糸もてウ繫ぎ繫がれ合背に子獅子を乘せて渡るぞ文殊の智慧の輪合中抜けるか合。潜るか習うたら戻らう合中ノル宙にてひよつくり刎返る合ノル一つも抜け目は內證中の間。下から上迄どんどと囃せや鼓太鼓の合音もよし原牡丹の花房匂ひ滿ち〳〵合長地花魁おいらが姿比べや仇比べ。げに獅子王の意氣張りに靡かぬ客も仲の町禿新造引連れてウくれなゐ纏ふ毛氈の獅子の。座にこそ直りける 德治へイヤどうも云へぬ。サア〳〵茶でも飲んで行きやれ〳〵。ヤどうか見た樣な振袖。たしか化粧坂の少將ではないか 富へほんにお前はきつい見通し。私が今日爰へ來たのはな、三日三夜揚詰めのお客があつて。身ままに主と連立つて來たのぢやわいな。まあお前さんは。どなたさんぢやえ 德へ何おれか。忝くも當時一臈別當。工藤左衛門祐經が近臣。近江八幡之介だわ。殊にこの八幡之介は大福神だ

ぞ。その曾我の様な貧乏神とは違ふ。ア、ちと福神仲間へ入れてやりたい。コレ少將そもじは入れてやる。先づ斯う見た所が。差詰めそちは辨財天女。この八幡之介は大福神コレ大盡舞を見さいな中ノヘ名も傾城伽羅うんそはか。我等は古風なまん丸頭巾で出かけやす。長ノル一に俵や踏みまへて。合二上り彈くは二丁目の。丁子車に廻されて。三枚肩で押させたり合ノル中既に共夜の大持ては。福壽海の盃に圓滿無量福地の酒七福合即生の手を出し紫摩黄金の肌と撫でれば合ウ後向きの地藏でも忽ち合ウ文箱地藏と和ぎて合ウ通ふ神の封じ目とひつたり糊付け百福百壽の屛風山。起請書いたり入れぼくろ中扨て指切りの始りは。ウかたばみ屋のかた岡が高安彥太に贈らるゝ又合三下り髮切りの始りは。九郎助稻荷につまゝ

れて合ウこんな姿になられた。もとより福德自在の身なれば合中文福茶釜に毛が生えた合生えたが大事か云うてたもなう。吉祥天女と寄添うて抱いて巳待とたはオトシむるゝヘエ、見ともない置きやがれ。この時宗は福の神は嫌ひだ。おれが信ずる福德はヘ其福德はヘそれよヘ寶の山に入ればとて何か益なし名を萬天に揚げるこそ人の福とは云ふべけれ我がウ竹馬の頃よりも小弓に小矢を取りそへて。障子襖の破れ次第。ウ彙の藁的目當は色工藤詞ヘなに工藤とはヘサア工藤これクドキウヘくどう云ふのがお前の癖か何ぼそのよに急かしやんしても。逢ふに逢はれぬ仇仲をどうがな首尾を拵へて合ウ逢はしましたら合コハ恨みのたけをカン云うて見たなら氣もほどけ結ぶ緣者の末かけて合長いこちらも女夫ごと樂しみにする

合憂き勤め。ウ年の明くのを必ずスエ間違へまえと言交はし無理約束にいやとも云はれずつい合斯うなつた深見草。ウ主の心は木なし川の薄氷。さうとは知れど私が胸は。那智の御山の苔清水。ウ洩らさぬ二人が仲ぢやもの。誓紙書かずと指切らずと色何の互に心が濟まぬ。ウ明かし合ふのが誠と誠こんな女夫が餘所にもあろか合。忘れ給ふな忘るなと。言はしやんしたを覺えがあらうあのしら〲しい顏をしてええ憎らしいウさりとはつれない心やと冠合振ることそわりオトシなけれ。ウ傍で見て居る八幡之助。中自體そさま稚兒の舞覺えあるやと色取付けば。ヘ放せヘ留めたヘ放せヘ留めた〲留めたわいなア唄ヘ留めて見たさよヘ時雨降る〲霰降る振りの袖振袖合いつそ年增が羨しうてお齒黑じしの合かね言や。

待つたり〱謏つた。合 張がつよても れる色に惚れるか浮氣な色で 合ウ しば 度の松。鐙かけ松鞍かけ松の枝を垂れ。
君にはもろい。待つたり〱あやまつ 〱是が樂しみに錸つたり〱あやま ウ 葉を重ねたる年々の幾代の春をや數
た。合ウ 色と 上ル 間夫とはどちらに惚 つた嘘と手管の二瀨川 中 三人茂みの三 ふらん。

一三 お菊幸助 名酒盛色の中汲

〔解題〕 通稱「お菊幸助」。寬政五年春市村座「貢曾我富士着綿」の第二番目の淨瑠璃として上演されたもの。出演太夫三絃の連名は前の「神樂獅子」と同一。お菊に瀨川菊之丞、幸助に市川門之助。作者瀨川如皐。加賀の菊酒屋の娘お菊は子飼の丁稚幸助と相通じたが、お菊の兩親がお菊を他の男と添はせようとするのを悲しんで二人は情死するといふ筋は、豐後節の始祖宮古路豐後の語物として「加賀お菊妹脊中酌」といふのがある。芝居年代記によれば享保十九年に中村座で興行されたらしい。本曲はこの作を原據としたものであらうか、詞章の上に類似の文句も少からず見える。この影響を受けたものとしては、寬政九年閏七月河原崎座上演の「詩和歌分根牡丹」（常磐津）や、文化十三年正月河原崎座で富本の地で演ぜられた「ちらし書仇命毛」（通稱新お菊）などがある。

二上リ へ咲く花の。ウ 散るとはかねて知 はす籠の鳥。ウ 雲を戀路の身一つに。 そゝのかし。今更なんと言譯も內證知
りながら。合中 も中の中で。 心なくお 定めかね ギン たる胸の闇 門之助詞 へ思ひ つたお作殿。今日の手づめを身に代へ
とすは風かや春雨の。合上リギンカヘリ 晴 まはせば我ながら。惡いと知つてうか て救うて下さる志。何と仇には思ひま
れぬ思ひをしよんぼりと。ウ 袖うちか 〱と。大恩のお主樣。そのお娘御を せぬ。とてもお暇受けし身で。國へと

ても歸られず。旦那様への申譯。お菊様へお詫ながらにこの身の科(とが)を書殘し。今宵中にこゝを立退き。人知れず淵川へ身を沈めるがせめてもの申譯。幸ひ床に見えるは硯箱。さうぢや〳〵ニ下リ へ墨と硯のいろこい中も。ウ 水の出ばなの墨にごり。ナホル合ウタカヽリ その水ぐきのかず 冷泉 〳〵は。ウ 筆の命毛惜しからぬ 合 心のたけを 合 かき ナガス くもり。中カン 跡や先(さき)なる文の綾。此世を夢のかへすがき。菊之丞出 へ同じ思ひにめもあはで。ウ お菊は闇を忍び路の 合 ウ かつて覺えし裏づたひ 合ウ 潦(にはたずみ)にも薄氷戀の素足に 中ウ 褄からげ ナガスハル地 ふりの。袂に手とぼし人の合。長地 かげさへふるふ夜半の風 ド 木々にも 合 宵の一時雨 合ウ 染手拭につゆいとふ 中 娘心のしどけなき。我が影にさへ 合 おどろかれ ウ 火かげを袖にやう〳〵と藏をめ

あてに ギンスエ 立寄れば。イロノル はつとばかりにうは書も。そのまゝかしこへ ハシル かくすうち 色 へお菊は柴折戸押開き 合 菊之丞詞 へ幸助そこにか 門之助 へヤさうおつしやるはお菊様か 菊 へ幸助。逢ひたかつた〳〵。逢ひたかつたわいなう。門 へモシ〳〵お聲が高うござります。どうしてこゝへはお出でなされました 菊 へわしやそなたの事が案じられ。ちよつとなりと逢ひたいと思ふ程。なほ意地の惡い父(とゝ)さんまで。今宵にかぎりわしがそばにおよると言ひ。奧座敷には傳三様が。寢てゐやしやんすゆゑに 門 へそれではお前はかつてから。庭を廻つてお出でなされましたか。それ程迄にわたしが事を案じなされて下されまするお志。何の忘れは致しませぬが。さいぜんからとつくりと思案を極(きは)めて置きましたれば。もうこの上はふ

つつりとわたしが事は思ひ切り。無い昔ぢやと思召し。許嫁のむこ様と。お添ひなさるが御身のおため。思ひまはせば ウ へ世上の戀路にひきかへて道に背きし恩知らず。ウ中 朋輩衆の情さへ云ふにいはれぬ身のおちど 門詞 へその申譯はこま〴〵と。認め置きしを御覽なされ。只何事も今迄は夢の浮世とあきらめて。お許しなされて下さりませ ウハシル へ拜みまするると手を合せ顏も得上げぬ オトシ いぢらしさ。ウ へお菊は始終伏沈み。ウ 心をあせり身を悶え。ウ こけし岩間の羽拔鳥聲を袂に ウレヒオトシ かくしなき フシ へ言ひ度い事のかず〳〵の。あれど胸につかへのてい 中色 へ幸助大いに驚きて。手水鉢なる水を汲み。色 抱き起して口うつし。詞 申しお心がつきましたかと。へいへばお菊はないじやくり クドキ へ恨み顏さへ恥か

しい合色といふ字はいろはより合外に習はぬ筆始め。長地もとはといへば父さんが合わしにウかくして世の人のウ結納とやらの合約束は。ウほんにせいもんしらゆふの神と合親とが合結ばぬ縁と。合言譯ながらせめてもの合ウへ白山様へ願かけて茶斷ちするのもウわたしやそなたに添ひたいばかりウへ立山様へ願かけて煙草たつのもウわたしやお前に添ひたいばかり合。中カンへ誠と云はゞ此道は親のまゝにもならぬが憎ひ。ウ女子のすいた女夫事。ウそれさ

へけふの。今迄も。中人め籬に隔てられ心ばかりを亂菊の。合露の玉さか逢ふたびに合長地へわしが黄菊を打ちあかし岩にせかるゝ菊水の合ウ中われても末に相生の契りは盡きぬおきな草ウへともしら菊の千代迄も變らぬ中を何ぢややら。ウいかに殿御の癖ぢやとてやゝともすれば中御主人のお主様のと憎て口。ウいたづらぎくと振捨てゝ合故郷の花のよめが萩合カンハシルいとしらしさに見かへられかへる羽音のとりかね言も。いつか丸ねのきくがさね。一重は

おろか百夜菊輪廻はつきじわすれ霜ウへ消えなば共に消えもせでつれない事をと寄り添ひてウ胸のほむらは紅菊の。花の露すふまさな事。短き春の夜半のトルかね中なるかならぬかうぶ神の。ウあはれを結ばせ玉の緒つなぐ夫婦のえんめい酒合中情にふたりが中汲分けて色親の心をほん直し。ウ末は夫婦ときく酒ならばそれこそ家の寶命酒ウノルやんがてやゝをうめ酒と積る話は色々の。きくのはもりをゑがいたる屛風の。ウうちにや忍ぶらん。

松風行平　徒髮戀曲者　一四

〔解題〕　通稱「松風」。寛政八年十一月桐座顔見世狂言「銀積松行平」の第二番目に出したもの。富本豐前太夫・同延壽齋・安和太夫、三絃名見崎喜總治・富本兵助。松風瀨川菊之丞、須磨の此兵衛嵐龍藏、磯馴松の松兵衛坂東彥三郎。

この淨瑠璃は初演の時は、この前に「上」として「戀すてふ鄙手枕」といふのがあつて、松風の菊之丞が行平の宗十郎相手で色々の所作があり、次いで「下」として本曲になり、こゝでは主として松風の狂亂を見せ場とした。この時菊之丞の狂亂の所作事は好評であつた。詞章は謠曲の「松風」などに系統を引いたものでそれが一段と碎かれて所作事に適するやうに綴られてゐる。

ウへ松島や。小島の蜑の月にだに。影を汲むこそ心あれ〳〵地運ぶは遠き陸奥の。中カヽル千賀の鹽竈。松の村立ち霞む日に。ハル地汐路や遠く鳴海潟。爰は鳴尾の。松蔭に月こそさはれ芦の家。合中カンへ袖を結んで肩にかけ長汐汲む中爲と思へども。離れ難なや合ウ行平の中納言合ウ三年はこゝに須磨の浦合歸洛の裝ひ御立烏帽子。上ルカン狩衣のもとの雲井に返り咲き花のお姿見る嬉しさも又悲しさも。長地君と連理の松風がかたへはあとに思ひ草。合ウその戀草の葉末に結ぶ露の間も。忘れねばこそ味氣カハリスヱなや。合包めど空に有明の月は一つ合影は二人が馴れそめは汐汲む憂身合見つ。見られ合つひには寄るべ渚漕ぐお情の程棚なし小舟合ウ苫を敷き寢や梶枕一夜合二夜と重なりて。最早二年今宵まで。ウ人には誰もつげの櫛さしくる涙合ウ汲み分け給ふ中納言。あり合ふ硯引寄せて筆に云はするオトシ御名殘り菊之丞へ立別れ因幡の山の峯に生ふる。松とし聞かば今歸り來ん。そんなら是が宗十郎へ形見の一首。迎ひの輿を待つてるや中色へさらばと云ふも未練の繰言。へいゝえ〳〵殿御の心は飛鳥川。ウ淵が合瀬となり照り降り知れぬ譬へごとノル詞中へハテ村雨と聞えしも引寄せて見れば合やつぱり色松風合ウへ變るまいぞやウへ變らじとウへ仰せ嬉しく答へさへどう云うてよからうやら合ウ思ひ直せど喞つ身を祈れど更に神さんも。カン惚れた同士は是非がない只世の中は誠と誠。ウそれを樂しむ私が心必ずやいのと寄添うて。ギンノル汐馴れ衣の濡れそめて。わりなき仲やカヽリ盡きせぬ名殘の折しもあれ。ウ歸洛を急ぐ鐘の告げ。ノルいとゞ別れの今更に。縁も花の仇嵐千々のうらハルオトシみや籠るらん。▲上ルへ波こゝもとや。ウ須磨の浦長地つらや隠れん袖笠を合ウタヽキ片し

く末は手枕に一人寝ろには。中カンウ後の日向染みたる汐馴れ男合ウクル酒もなし船の。合色船頭殿。合ウノルやれ／＼や側知らぬウ知られ知られぬ中ならば。ろ口磯ぜせり吞まねばすまの松に寄つとよい男。彦へフウさては行平様に合ウ断うはなろまい捨草のヨイサヨ僧る。長へ樓嫌上戸の色松兵衛さ合二上りへさ捨てられて。そなたは氣が違うたの。都の身とや笑はれん合長ウ色に狂ふがつと寄る浪合點ぢや合詞ノルコレハサひ菊へヤなに行平様は。あれ／＼あそこをかしいとて中ギンノルうなゐ子が合下よいとせいウアノ波越えて此波越えてに。彦へどれ／＼。フウありや松ぢやわ／＼石を礫のから／＼と●へ笑ふ／＼足は。ひよろ合／＼ちろ／＼目元ウげやいウノルへおろかの人の云ひごとやあほんに何がをかしいぞウノルへ笑はゞ笑んぢよ見る目の色より可愛い酒の奴との松こそは我が夫よ。ウ誓へ暫しは別へ。ちつともそつとも大事ないへ、エ浮かれ来る彦三郎へヤア松風かいやいるるとも形見は今も在原のウク其面影エ大事ないものをウ濡れて添寝の戀菊之丞へフウそなたは誰ぢや彦三郎へ船頭は行平の合ギンノルひと木の松に合衣著衣。ウそも此程の御情又いつの世に晋の松兵衛ぢや菊へそなたの持つたは。そせて烏帽子參らせ紐しめて。假の殿御づれを。長ウ松風が身に及びなき戀にりや何ぢや。彦へこれか。是はな。長ノルと傳けば。ノルこなたは呆れて逃げ水心もこりずまの。ハネハズミ啼いてさわへ是が今年の手造り酒。合中ノル飲んだの去なしはせじと引止めて似氣なき戀たる合浦千鳥ア、羨まし●へあの鳥さる達磨の合ウ縁でがな合様にほの字の千草染風情をかしく見えにオトシけるへも女夫ウ々の諸翼。ウ二世と誓ひし帆が見えた。合帆かけて走ろとオトシ慕彦へおれに此様なものを寄せて行平様我が夫をなど合情なの沖の波ウノル沈ひ寄る菊へフウこの狩衣が欲しいか欲にして。心のたけを言ふのかそんならめはやらじ怨めしとあなたへ走り合こしか夜さりの星守りや彦へハア、可愛行平ぢや行平ぢや。エヘン／＼御臺所なたへ狂ひ合思ひ亂る、藻鹽草。音にやそなたは。氣違ひぢやの。菊へオ、の松風々々。菊へその様な事。おつしこそ立てめ我からとあこがれ焦れ合伏氣違ひぢや／＼。わが身は氣違ひか長やつた事も。あつたわいなア●クドキオトシ儘ぶ合詞頭長ガヽリへ褄に此頃戀知りカヽリへわが身も戀に迷うたか。あたらへほんに思へば形見こそ今は仇なれウ

忘られぬ三年の昔此里へ。▲ウ中雲井に近き御方の。合●上ルカンへさすらへとやら憂き月日お茶の通ひや酒事の合に名されておほけなく。▲合ウ引く手あまたの其中に相馴れ合初めし恥かしさウ朧月夜も憎からぬ●中カン詞咎めや胸づくし。鷄がうたへば別れがいやで長離れともない仲直りウそれが戀路の常かいな 合ウタガカリへ戀にや歌詠むお定まり。ウしかも其時このおれが色ウア、何とやらわくらはに。合ギンノル藻鹽たれつゝ詫言もきかぬ癇癪合羽織もそこにウ扇。ウおつ取り。刀差いて去なうよギン戻らうよと云うては小腰に抱付いた(此身に戯れた)。長いつそ假寢の此儘こゝで。ノル詞我等も情にあひたいなア。菊へそりや誰に 彦へ松風さんにへそれで常磐の深緑松を太夫といふわいな 彦へ太夫とは傾城の 菊へいや／＼此

烏帽子狩衣で。萬歲の太夫ぢや／＼ 彦へそんなら我等も才若の 菊へ幸先よしの 兩人へ壽は 二上リへ德若にウ御萬歲とは御代も榮えてましまします。ウ愛嬌ありけるぽつとりもの 合色の菊蝶結び綿や比翼に染めた鶴の丸。上ル 實結ぶの神さんへ戀の願ひの誓文たてゝ合ウクさらばこれから我等が思はくそろ／＼ 合やれ／＼ 合ノル詞斯様申す才藏なんぞは夜も晝も合 おつ付きやつて 合くつ付きやつて合 くつ付きやつて。おつつきやつて ナホル長 ふたり添寢の床の内。ウ下夜を一夜の睦言も。長 盡きぬ妹脊の戀仲を。カンアハブシ振捨てられしノル捨小舟。ウ 共に亂るゝしづえの風の 現心や オトシ 果てしなき。ウノルへ咲きつれて 合長 色にまじへし十返りのウ花の顏 花吹雪 ギン 松に吹來る風も狂じてな 合ノル須磨の浦波どう／＼ 合ウノル岩

根を洗ふ村雨も。ウ跡なく晴れて須磨の浦松風ばかりや殘るらん。

もろともに
名をあげる　夜や
ほとゝぎす

茂懺悔睦言　一五

〔解題〕通稱「扇賣高尾」。享和元年四月十四日から市村座興行の「全盛伊達曲輪」の第一番目大詰に出したもの。富本豐前太夫・鳥羽屋里長等。扇賣お靜後に高尾幽魂瀬川菊之丞、團扇賣四季庄兵衛市川高麗藏、土手の道哲市川八百藏。

高尾懺悔の飜案で、左金吾頼兼は、高尾の死後出家して山谷の西方寺に道哲と稱へて念佛に日を送つて居る處へ、扇賣の女となつて、團扇賣の庄兵衛と連立つて來た高尾の幽魂は、道哲の所持する高尾の形見の打懸を緣に兩人で馴れそめの廓話から、痴話口舌の仕方話となり、とゞ扇賣の女は高尾の亡魂と姿を現すといふ趣向である。

文政八年六月河原崎座で常磐津の地で上演の「和事色世話」（新高尾）は本曲の趣向をそのまゝ踏襲して、外題と詞章とを改めたに過ぎない。

上ルへ流れは常に溶々と。ハル 盡きぬ眺 八百藏出へ逢ふ事のなきを浮田の森に棲む。ウ 仇に暮せし戀風の。長地 間夫にあふめの宮戸川束の間絶えぬウ 山谷船誰を 呼子鳥こそ我が身なりけり。思ひ出せ ぎと謎かけて浮氣な風に招かれて。色待乳の山裾え。日本堤を通ふ駕籠 長地 ば昔ぢやなア。一世と誓ひし三浦屋の。 に要の手取者めぐりくる〳〵 合舞ひ扇憂きを悟りし左金吾が。世を遁れたる 高尾が苦患助けんと。形見の小袖この 男扇も迷ふなる女扇と御影堂。高麗藏出草の庵 八百藏出へ以前の姿引きかへて高 黑髮。切つても切れぬ凡夫心。ア、不 長地ノルへこれも跡から月に柄をさすが尾が中 菩提のギン 閼伽の水身も住み侘 便な最期であつたなア 菊之丞出へ扇召し に輕き合團扇オトス賣。我も昔は色柄をびしゥ 墨染の袖の薫ぞギンスヱ 奥ゆかし ませ〳〵 合ウノルへ粹な浮世の營みを。 握つた腰の辨當も。締めねば邪魔に 色

なら團扇。心も有頂天地金カノ文さへも今は早や反古團扇とも浮草の靡きやすさよ。風と風。ウ時に扇と團扇賣ギン輕い商賣氣も輕く頭に宿る紙細工色ノル張つて見る氣かのりが來て何と結ひ綿久しぶり合色割花菱とは 合詞ノルどでごんすと 色しなだれかゝれば。其手を拂ひ 菊之丞へ何の事でござんすぞいな。最前から跡になり先になり肝腎の商賣物の團扇は賣らしやんせいで。お前もよつ程なまくら者ぢやわいな こまへなまくら者とは情ない。隨分わしも精を出さうと思ふ所へ。うつつい姉さん。お前はまアどこから出なさる。扇賣だえ 菊へ問はれて何と庵崎の。ほとりに一人隅田川。しづと云ふ扇賣ぢやわいなア。こまへしたり。しづ心なくとは奧床しい。わしは三の輪の四季の庄兵衞といふ團扇賣。團扇をお召しなされませ 菊へイエ／＼扇をお召しなされませ こまへイヤ團扇を召しませ 菊へいえ／＼扇をお召しなされませ こまへどうぞ扇を買うて下さりませ 菊へいえいえ團扇を こまへこれさあんまりかつかちめく故ソレ賣物が間違うた。 菊へほんにこれは麁相な。しかし團扇も扇も通れぬもの。是から仲よう一所に商ひせうぢやないかえ こまへそれ／＼。そんならから荷を一所にして。坊主持にせうではないか 菊へ坊さん持はよからうわいな こまへ先づから荷を一つにした所が。扇や／＼。團扇や團扇と。云うてはあんまり横つ倒しではないか 菊へハテどうなと云はんせいなア ウノルへ心も合ひし荷ひ賣打ちかたげてぞ歩みオトシくる。色 庄兵衞庵の内を見て こまへサア／＼替りませう／＼ 菊へそりや又なぜにえ。こまへなぜといふ事があるものか。あの庵の内に坊主が居るから。こなたの番ぢや。菊へいえ／＼行逢はぬ内は。坊主持ぢやござんせぬ こまへイヤ／＼何でも坊主を見たからは。こなたの番ぢや 菊へそりやお前無理でござんす 色へと爭ふ二人が其中へ。道哲内より立出でて 八百藏へア、これ／＼最前から聞いてゐれば。坊主々々と愚僧に當てつけた二人商人。何を其樣に爭ふのぢや 菊へホ、、こりや何でござります。あなたへ扇を。召させませうと存じまして 八百へ成程扇も團扇も時分の物なれば買うてやらう。色へサアサアこちへと招かれて二人は内へ入るよりも こまへサア團扇を先へお召しなされませ 菊へいえ扇から先へ召して下さりませ 八百へア、これ／＼其樣に爭はうよりはまア。此世で扇が先へ始つたか。團扇が先か。何でも先へ始つた

方から買うてやらう。どちらが先ぢや こまへサア是はむつかしくなつて來たコレおしづとやら。何が先か知るまいが の菊へサアそれはな こまへ知つて居るなら云うて見やれ。どうぢやのどうぢやの 菊へ東西々々 三下りへ扇は漢土が濫觴にて夫婦の約も合歡扇 合ゥ 源氏に櫻の三重重ね。斑女が閨にも扇の風 合ウノル 月重山に入りぬれば是を。あげて月にたとへ角はあれどもまん丸に 合 見えて開けば初霞立てるや門に禮扇 ゥ 戀にかけては目せき笠 ナホルウ へ浮氣々々で逢ひ馴れそめて 合ゥ 色で扇のちん／＼契りは 合 それが誠であろぞいの。いつか浮名が立つや白地か淺黄地か。さつと墨繪の一筆鳥戀の地紙ぢやないかいな 上ノル へイヤ／＼／＼おしやますな。中ノル そも團扇は天竺に白月といふ異人あり。清秋の三五夜に心も澄みし月を見て始めて團扇を 合 製しつゝ三伏の暑さを拂ふ便りとて。長唄 法界の空理をさとる 唐土にてはしゆんのりほつ日の本にては信濃なる。小柴の翁が皺くちやに澁い顔して張つた故澁團扇とは申すなり 色 へ話聞きゐる道哲に。しづ心なく寄 合 添ふを合點行かずと振切つて 八百 へこりや／＼女寄るまいぞ。假にも三衣を身に纏ひし此道哲。とは云へど見れ



和事色世話（上）

ば見る程はてよう似たわ 菊へエ、あの私が誰に似ましたえ 八百へ二世と誓ひし三浦屋の高尾太夫に生寫しぢや こまへ似たこそ幸ひあの女中を相手にして。高尾太夫の馴初めのお話が承り度うござります 八百へ成程懺悔に罪も消ゆる道理。形見に殘る裲襠を見るに付けても思ひの種 こまへシテその馴初めは●へ受け給ふしもは合下しだいの天王なり合いで共頃は正月二日の事なりしが廓はあと着の着衣始め 合船乘初めと纜解き柳橋より押出し。北へ／＼と急がるゝ 色合中へそも／＼共日の扮裝は羽織は羽二重三所の。ゥ紋日物日の嫌ひなく通ひ馴れても衣紋坂。どつと云うて囃されたゥ若しもそれかと見返り柳まだうら若き 冷泉へ仲の町。茶屋が見付けて手を取つて打連立ちし揚屋入り 八百へその大寄せは廓の名取り。端からはしへ橋立の 菊へ數も千山引連れて。茶屋の床几に立並び こまへ誰を鶴町 八百へ間夫を雛松 ゥへ松山に若紫を染之助。打ちかけ九重綾越しの こまへ小褄をしやん と斯う取つて 合●ナゲブシへ袖にかをりを瀧姫や渡りに丁度瀧橋渡してんと 合玉菊たをやぎ姿 八百へ其鶴の尾につられぬ内さらばお暇いたさうか こまへこれ待つた クドキウへわしが心を合 疑はさん



（下）　　　　同

すか 色 お悪かろ 合中カン 此陸奥は戀故に細くやつれし糸瀧や。深くぞ思ひ染川の。トルカン いつか氣儘に花扇逢はぬ夜たゞは一夜も千春。逢うた其夜はいそ山 合脊山 合たんと話も在原なれどあれみさ山の明渡り。合ウ 空に一すぢ小紫口舌篠原つひに住の江又の 合御見を松の戸を。明けるは茶屋の 合 朝迎ひ 長埴 寢覺めの顏どり機嫌とり押付け。あなたの花妻と瀬川叩いて詞の八汐 ハトハでミ つれて巣立ちの雛鶴や賤機ならでばた〳〵と。廊下を傳ふ瀧川の流れは深き山谷船。合ノル色 押せやれ男子 合 二挺立 合三挺立 合椎の木ぢや。合點ぢや 合拍子とり〳〵 合ウ 下り船 合へ見れば見渡す棹さしや屆くなぜに屆かぬ我思ひほんにサア 長ノルへ差す手も潮に濡れそめて。君の心を取楫や。氣の重楫をわつさりと。さつと捌いて奥座敷

茶屋船宿に 合若い者。遣手禿を取りこみ勝負。色ノルまあ〳〵〳〵〳〵爰へと。合ノル無理やり話の取持ち顏 へ二枚屏風の風凌ぎいかなる夢をや結オトシぶらん。中へ冥途の道を教へ鳥。合 しでの田長と聞く時はげに味氣なき短夜や。別れの鳥は里ばかり。ウ 啼いてぞ人に告渡る去りし高尾が。ウ 立姿 二上り へ消えず消えずみ水の月うつり心はあるなれど思ひ。切るせと氣強うも岩間にとんと碎かれて流れ寄る瀬の 合浪枕 合 過ぎし誓言忘れてか花は根元へ歸り來て現に見え候ぞや ●詞 へ申し〳〵左金吾さん 八百へヤアそなたは 菊へ高尾ぢやわいなア 八百へまだそなたは迷うてゐるか 菊へ迷うて居るとはえ 八百へ賴兼公の計らひとて。浮世戸平が手にかゝり。此世を去つたぢやないか 菊へ此世を去つても去りやらぬ輪廻の

絆。形見の小袖諸共に。お前に預けし山鳥の印まで。なぜに川へ沈めて下さんした。恨みを云ひに來たわいなア 八百へヤヽ何と 菊へコレ ウへあはれ此身は。うき川竹の。ウ 沈みもやらず浮きもせず。ウ 縺り果てたる三つ瀬川昨日今日まで肌と肌 合中 鴛鴦の衾の羽を並べ塒はなれぬ一つ夜著。ウ中 重ねばうとし二人寢て。未來は蓮の臺ぞとウ 形見に殘す 合唐衣 合ウ 著つゝ馴れにし甲斐もなく此荒川の藻屑とは。ウ 添はれぬ心か情なや。ウ 氣強いお方と身を背け恨み喞つぞ ウレヒスヱ 誠なり。カヽリ へよし我とてもいつ迄か。ウ 憂きを浮世に永らへんあの世は上品上生の二人暮すが極樂と引寄せられて クドキへ心で笑ひ。ウ たとへ嘘でも其様に云はんす人を殘し置き。何の此身は浮かもぞえ 合それ故水に誘はれて 合色の世界

にすみ田川。合ウ深い浅いはよう汲分けて庵崎の合いつか廓を花川戸。合中カン待乳に残す里詞三浦兵庫も合投島田結うて見たいが山の宿無理な願ひも金杉の毘沙門さんへ朝参り。ウ浮氣心に欺された女子心はさうぢやないわいな。片時逢はねばくよくと涙を隠す薄化粧泣けばこそ長向ふ鏡の影曇りあふとはすれど物云はず。見ずや知らずや味氣なき心ぞ心カハリオトシ迷はすれ。色へ思ひがけなき後より豫て忍びし國

連が。左金吾やらぬと隙間なく。ひらりと見せし電光石火。み山おろしに吹送る冥途の使の責め鼓。合上ノル悶え苦しむ有様は恐しなんどもおろオトシかなり。菊へ左金吾さんのお身の上に凶事ある時は。此高尾が附添うて。冥途へ連行く覺悟しやこまへ事をかしや罪人め。山鳥の印を渡せばよし妨げなさば目に物見するぞ菊へ小癪な來れ両人へどつこいウノルへ煩悩業果苛責の杖。劒の山も今眼前ありと見ゆれば合水の月

雲を彩る稲妻の手にも取られず合見れば又昨日今日まで作りなす合牛王誓紙の血の烏ウ可愛々々と鳴きもせず吸付け煙草は焦熱の炎となつて身をこがし別れの酒は三途の流れ白粉忽ち紅蓮の氷合紅は即ち阿鼻地獄。打てば飛退き合拂へば開き合くるりくくるくと合纏ひ付いたる輪廻の絆離れがたなき妄執の冥途の罪障西方寺。彌陀の光に晴渡り印に一樹ぞ殘りけり。

全盛操花車

一六

〔解題〕通稱「木やり」又は「花車」。文化元年九月九日から市村座の「漢人漢文手管始」の第二番目「吉原俄番附」の中幕として出したもの。作者は並木五瓶。富本豐前太夫・大和太夫・和泉太夫、三絃名見崎喜惣治等。吉原の藝者おたか松本米三、水茶屋おはな瀬川路之助、藝者おちか瀬川雄次郎、藝者おてる岩井梅藏。吉原の俄に若い藝者が景氣のいゝ男姿で花車を曳く情景を材題としたもので、木遣の條が眼目。いきで濶達な大江戸の昔を偲ばせるやうな作。

へさても見事え。
合 秋の錦の派手
姿今を盛りの花
車合 中カン引く〳〵や
先綱よい中の綱
合長地色にや手頭
の合 きほひナホス
はだ。 文七 ガカリ
十七八や十六の
し〳〵の木遣に引
替へて ▲□三下リへ
ヤアしめろやれ
ウよいさよいこ
れわのサよいさ
よいこれわのサ
よいやナ ◎中へよ
い〳〵ヤレわつ
さりとしめかけ
やれこれ是はな



「全盛操花車」初演當時の辻番附

こいへをしよ。ウと言つちやアなんぐ〱りかけなんでもこつちの方〱。ウやんれうて〱うつたるものにはなに〱▲ウへつゞみ●へヤレ太鼓にかんこに手拍子が状雙六が御百姓。うしろばた田畑ナ與三郎がお米がちきねナ砧背牌には南鐐りんが極印か。近江の三味線舍人の鞭がナ鹿の角しよこ〱打つのが痃癖。まだも打つのがナ鍛冶尾か▲詞へヤレこの衆●へコレちん〱からりが槌の音打つたる狸の腹鼓。中正月が節分の豆とてナぶり〱にはかきだま。七種合▲詞へヤレなじよ●へおしよせ▲へかき寄せ●へほつとり〱叩いたナ憎ちや打ちやせぬいとしけりやこそお尻をちつくり叩いた。どつこいやれこれ手がそれたか。堪るかもんではないによよい〱よいやな▲■へよい〱よいやなへそうよがしめかけ中綱ア▲■へゑんやアゑんやこれはあれはさのえ●へゑゝやるよ合工へ初雁の。連れてきつれて染めて濃き合千草の野邊の花道を。ヨリうきに浮かれオトシて勇み來るクドキ●へ手生けの花をどこの山長地梅に鶯待たせて置いて合さゝに一夜の仇心■へ松に小藤もうら紫の誰にひぞりし合かほよ烏合上ルカンへいつか紅葉のもみうつろひて合はかなき戀は朝顔の へ共日暮しの女夫仲長地するゐな水仙室にねて椿とかはす合手枕はかはいらしいぢやないかいな二上りへ四季上ルのながめと成る花にさへ合實と浮氣な八重一重合戀の所譯も様々に有るが中にも仲の町ナホル●カゝリへくるわの工櫻根びきして。長地戀の逢ふ瀬も我ながらめぐりくる〱くる〱と合松にうれしき廓の花眺めにあかぬ風情なり。

道行念玉蔓　一七

〔解題〕通稱「長作」。文化二年四月十日から中村座興行の増補薄雪物語「邌供養妹脊緣日」の七幕目大切に出したもの。作者櫻田治助。富本豐前太夫名見崎喜惣次一連。薄雪姫瀬川龜三郎、南部左衞門尾上紋三郎、引田

村のおよし實は五平次妹おみつの亡靈岩井半四郎、木津川の船頭長作坂東三津五郎。

五平次の妹お光が南部左衞門を戀ひ慕つて兄の手にかゝる、その亡魂がおよしに乘り移つて木津川の渡し場で嫉妬の荒れになるといふ趣向が、薄雪の道行に取合せられて居る。筋は淨るりの文でよく分る。富本としては今日でもよく演奏される曲の一つ。

ウへ槃特が。愚痴にはゥあらで愚なる中ヤン身は木津川の渡し守。ナガス軒のヘル地聲も苫洩れて中カン笑ふ雲雀に濡れ燕長姫と南部の左衞門は合紋三郎中ノル へ心せかれて旅立ちにゥ日のよし合あしも夏衣。合長地うらなき戀の誠と誠。いつかゥ女夫となら坂や。合長地あれ〳〵あれに懷しき。ゥ柞の森の冷泉陽炎もゥ當麻を出でて昨日けふ合飛鳥もあとに遲れ咲き椿も合藪の渡りよりゥ狛の船場に下ル着きにけり㊀へコレ申し左衞門様。爰はマア何といふ所でござりまするぞ紋へ爰は山城。大和の境。木津川といふ所ちやわいの㊀へそんなら早う渡しを渡りましてあの妻平を待ちませうかいな紋へ成程それがよからうと。㊀二人は船場へ立寄りて。㊁船よなう▲へふ㊀ねよく〳〵と起されて。●㊀へ寝耳へ水の船頭が。苫押上げてどつちやう聲三津五郎へどいつだえ。どのべらぼうめだ。渡し錢なら五文か十文出すといつて。あた喧しい。



「長作」初演辻番附の一部

折角面白く見て居た夢の。胴ぶくらを起しやアがつた。見かけた夢を返しやアがれ。色 あた符が悪いと佛頂顔。紋 へそれは何とも氣の毒千萬。腹は立たうがコレ船人。早う渡してたもひのと 色 頼む二人が姿素振 三津色 へ、ためつすがめつじろ〳〵見て 外記詞ノル へ長作はたと手を打つて。それよ。合 それよ。オ、それよ。中ノル 大膳様からお尋ねの。中 薗部薄雪でさんなれ ゲキ 搦め。詞 取らんと身拵へ。ゲキノル 鉢卷しめて櫂おつ取り。振上げながら 色 思案顔。詞 イヤ 合 待て ノル 暫し。我が心。つく〴〵見れば姿素振。ウ 奈良の旅籠や三輪の茶屋。長 梅川もどきで日を送り。上ルギン 二十日あまりに四十兩遣ひ果して二歩殘る。色ノル なぞと二人がやりかけて。すつぽらぽんと逃げる氣か。ウノル 但しア、舟にて 合 あたいやらしい

道行と 色 出て死ぬる氣で 中ノル 爰迄ござれであらうがの 詞 オ、〳〵〳〵〳〵そりやならぬ。ならぬと息せい引つぱり。ウ 櫂を構へて立つたりしは日もおもながに見えにける 紋色 へ我が身の上と左衞門は。はつと思ひて 詞 ア、これ〳〵。其様な者ではない。こちら二人は。オ、それ〳〵札所を廻る順禮ぢやわいの 三津 へ何ぢや順禮ぢや。順禮ならば報謝渡し。御詠歌唱へて乘らつしやれと 色 律氣一遍正直に ●色 へ早く〳〵とおだてられ ▲ウ へ詮方もなく ⧗ へ御詠歌も跡や先なる ■ウ へ父母の 合 めウぐみもウ 深き粉河寺不孝者よと我々を。合▲ウ へさぞ未來から三熊野のたぎつ思ひに胸せまり ■長地 へ昨夕のまで帶さへも結び捨てたる藤井寺 ▲ウ へ南圓堂か行先も 合 楽じ下 過ごして。賴もしき佛の誓ひ願ふにぞ ●詞ノル へイ

ヤ。おつしやつたりな。長 その自墮落やの二人づれ。色ノル 合點の行かぬ美濃の國。ウノル 親と賴みし仲人にもウ 沙汰なで惚れた帆かけ船 合色ノル おりや。駈落と見て取つた。ウ ちん〳〵加茂へモウ一里 色 サア梅谷へ廻るがよい船には乘せぬ渡しやせぬ。ノル ならぬ〳〵と枕箱。ウノル 煙管で叩き立つたるは。思ひの外の悋氣坊 ▲■ウ へ二人は返す詞なくウ 人の情をま オトシ つばかり。へ住馴れし。ウタ、キ 菅原村に夏の來て干すてふ布の女子業。牛四郎出 二上り へ色氣ないとて苦にせまいもの見やれ 合 茨にも花が咲くこのえいこのえい 合 背戸や河原で 合 袖褄引きやる ウ 引田生れの氣散じは。ナホルハル地 般若寺 合 あたりで ウ 一口はなりそに見えて 色 ぶつきら棒。晒し盥を 色 引つ抱へ ギン 笑顔作りて カハリ オトシ 走り來る 三津五郎色 へ長作それと見

るよりも。詞これ〳〵およし坊〳〵。金儲けが出來た〳〵褒美は二人が山分けと 半四郎色へ云へどおよしは合點行かず 詞へそりやマア何の事ぢやぞいな 三津 へサア何の事やら知らねども。 蘭部の左衞門薄雪姫束ねて出せば褒美の金。濡れ手であはれや二人づれ。 確にそれに極まつた。 繩かけうではあるまいかと 色船の纜を解きかゝる。半四郎へおよしは驚き押しとゞめ。 詞是はしたりわつけもない。 この木津川は伊賀の守様の御領分。その伊賀様のお姫様。薄雪姫様をどうして其様な事がなるものかいの。 嗜ましやんせと 三津色へ長作はおよしに云はれ悄氣になり。 詞 いか様そこもあるわいの。 サア是からはどうなりと好いた同士の戀話。 色 聞かまほしやと立寄れば 半色へおよしも共に身の上を。 色 問はれて 色、地 へ二人は 詞 憂き

事の始め思へば。それいなア▲クドキ長地へ逢見し時は過ぎし春 合下 地主の櫻の 中 花盛りほんに思へば清水の觀音樣のお仲人。互に人目つゝましく 合。 文七 忍ぶ籬が橋渡し 合■上ルカンへ解けて縒よとの ウ 判じ物。 書いた此手が我ながら徒ら者ぢやないかいな。 合▲ウ中へその憂き事も今は早や。ウ 我が身の 合 曇り晴渡り 中ギン家の寶も手に入れば。ウ 小枝の笛を尋ね出し二つ揃はゞ幸咲の家をも立てたき身の願ひ 合■カンへ共お心の嬉しさに離れがたのゝ雉子ぞと。 ▲■ へつま戀ひ侘ぶる風 ギン 情 スエ なり ●ノルウへアレ聞かしやんせ長作さん。 ウ 羨しうは 合 ないかいな。ウ わたしやお江戸の勢ひ肌。 聞けば地廻り節とやら。 手拭取つて 色 斯う冠り 合中カンソ リ 齒 可愛男の聲がすりや蝶々の簪ヤ飛んで出る 合詞ノルこりや又何のこつた。

何のこつた中 下駄で長屋の前渡り。 長ノル こんな勇みが 色 但し又 合ウ 野暮で律氣でウ御贔屓の今たんとある役者なら三津五郎に似た者あらば鈍くなりたい願ひとはウチトはね者ぢやないかいな ▲詞ノルへオヤ〳〵どうせうそりや嬉し。ウノル ちよつと聞いても初松魚。 合ウノル よく時鳥と氣が合うて 合ウ こがれし船の櫂枕 ウ 横から見ても半四郎。ノル こちらから見ても半四郎ゝ ウ そんな嬉業が持ちたさに待てば燗酒 色 茶碗酒。 色 ぐつと ノル 一杯 色 やりかけて 合。 ▼ 二上りウ へおつとまかしよと一日を横に幕して渡し守 ウ へそんならそなたは 詞ノル へヤツシツシ 合上ルこがいでどうせうお前はえ 合ウノル へさらして振を見せ參らせう〳〵。 ヨイ へ女夫さらしの水仕事 合ウ へ立つ浪が〳〵。 合ウ 瀬々の網代に支へられて 合 流るゝ水を堰きと

めよ〳〵合へ所がらとてな〳〵シル中布を手毎に槇の里へと打連れ立ちて戻らうやれ賤が家へ。賤が手業も面白やと。色見やる間も情なや。ウノルおよしは忽ち物狂はしくアット倒れて伏轉ぶ。色ヤア〳〵是はと驚く長作。藥よ水よとたどうろ〳〵。狼狽へ騒ぐ其内に。正氣附きしも物の怪の業とも知らず左衛門は。詞どうぢや心が附きしかと色尋ぬる園部が顔つれ〴〵。ぢつと見やりて流し目に忘らるゝ日は何がなる上ルリ唄ガカリへ京内参りせしときに。アノ清水で手枕を合中ギン交はせし跡の恥かしさ又其折の嬉しさを忘れぬものをさりとては●合ウへ薄雪姫にゥ見かへられ添はれぬのみか剰へゥ邪見の刄にかゝりしぞや。▲長カヽリへそれ程迄に此はなを思ひ給ふか詞ノルこりや。有難い。ゥそもじ故なら船玉様かけて中カン水も汲みましよ手鍋提ぎよゥさんやれ〳〵合●へせめて私が心なと思ひやつて下さんせゥ上ルへ修羅の奴と成果てしも合長へ皆殿御故。合コハルへ妬ましやエギンノルへ恨みは盡きじと寄添へば。驚く二人長作は。色ノルサア〳〵船で好いた同士。ゥ可愛ゆがらうと手を取れば。俄に吹來るはやち風。若葉の闇の冥々といと物凄く見えにける。色怪しき物と左衛門は姫を圍うて窺ひ居る謡唄上ルリへ我はお美津が亡き魂の。合ウ浮みもやらで詞髣髴と合。中有に迷ふも。合ウへ淺ましや。ウレヒ邪淫の罪に。犯されてノル角組む芦は劍の山エウノルへ肌の卵の花紅躑躅合ノル鳥も八汐の血の涙合ウノル我と我が身を責めくる鬼百合ノル落つる椿も眞逆様合ウ此世からなる苦しみを思ひ知らせん思ひ知れ合恨みの笞打寄する。ギン紅蓮の藤浪どう〳〵〳〵烈し恐し色いつの間にかは妻平が。二人を圍ひ立塞がり。怨敵退散々々とお美津に家のかざし草ウノル寶揃へば上ル雲晴れて。クリ上皆紫の杜若今こそ解脱の花衣。解城佛品の數への道有難。かりける次第なり。

母育雪間鶯

一八

〔解題〕通稱「山姥」。文化二年十一月中村座顔見世芝居「清和源氏二代將」の二番目に出した淨瑠璃所作事。作曲者鳥羽屋里長。富本豐前太夫・大和太夫・常太夫、三絃名見崎喜惣治・鳥羽屋里長等。山姥坂東三津五郎、怪童丸岩井半四郎、山がつ市川男女藏。

豐後節諸流派の中では注目すべき位置に立つ山姥である。卽ち常磐津としては、本曲よりは前に「古山姥」があるが、現今行はれる「薪負雪間の市川」(新山姥)は本曲の影響を受けて居り、又清元の山姥として現存する「月花茲友鳥」も本曲の改作である。

上ルへ四面峨々たる足柄山。麓に通ふ松のもと。ハル地巖に染むる蔦かづら。長地へ君命受けて壯夫のなりも氣儘の山賤がへ曲げたる肱の高枕實に一瓢の樂みの眠をさます山おろし 出 詞へ君命うけて此日頃かく山賤と姿を變へ深山幽谷きらひなく行きなり次第の一寢入どりや目覺しに一杯やらかさうかへ酒はかりなき盃につげば映らふ星の影やゝ打眺め 詞へハテ怪しや客星こゝに拱くして我が盃中に影をひたすはヲ、さうだ先年我が君賴光公この足柄の山中に力量勝れし者ある事しろし召されて貞光が仰を受けし東國下向今の客星何にもせよ心にくきはいつもの小僧一服のんでどりや待たうか へ雲の行方に誘はれて歸る山路の初時雨。出 ウタヒ へよし足曳の山際もしらがと見ゆる雪ふゞき積れば老の鶯も今日ぞ初音と花に來て ウタヒヘ一とふむなしき谷の聲 ギン 風か木靈か呼子鳥夜寒の月にうづもれて鬼女が有樣山姥と見る目いぶせき山紅葉昔の道の枝折ぞと覺束なくもたどり來る へ山がつ見るより 詞オ、怪童がお袋か。今日はまだ逢ひませぬ 詞へオ、峯藏殿かいの見て下され。わやくなあの子がまた道草コレ〳〵怪童。怪童やアい へオ、イ へ木靈に響くやんちや聲 出ウタへ神樂月とて片山里も笛や太鼓でにぎはしや 長地 足のつめた

いに草履買うてたもれ雪やこんく＼あられやこんく＼積れお寺の茶の木の枝に大さむ小さむ山がらこがらちらつくわいのくわいくぜるうづらも鷲づかみわやくさかりの笑顏よき 詞へかゝちやんこんな花折つて來たへ花うちせうと振りたつて餘念なきこそ愛らしきへ山賤これよと立て 詞へオヽ怪童戻つたかく＼ 詞へサアく＼ちやつとお辭儀しやく＼ 詞へそんなら母さん何ぞくだされ 詞へオヽやろともく＼そなたにやりたさ着せたさに五百機立つる窓の內 二上リへ枝の鶯絲くる綿くる織りて着せたる母のほんそ子里へさがれば里の土産にでんく＼太鼓にふりつゞみ打つや空蟬の唐衣千歲萬歲の砧に合せ鼓の拍子面白や 詞へサアく＼怪童お馬事して遊びやいなう 詞へオヽそりや嬉しいハイく＼ 上ゥへ月毛にあらぬ斧の馬取るや手綱も凛々しげにお馬が參る先のけく＼先のけろお月樣幾つ十三七ツほんにそりや若いなへふり出す大力大鳥毛轡の音がりんからく＼りんく＼から母の胎內蹴破つて產所も 道具ヤ うぶやも山なれば取りあげお婆に事をかき產湯の代りに四方のあかゑいが廻つて北山の 中ギン 踊にあらでおどりくどきは何というた 二上リ おらが在所はナ奧山のてゝ打ちのでんぐりでんぐり栗の木の根を枕にござれだいて轉び寢 コナ 小女郞が戀する山家の品物で帶解いてござれ抱いてころび寢 詞へ母らやん乳のまうへ乳呑みたいと足摺は頑是ない子の習ひかや 詞へオヽ此子わいのわやく云やると抓めく＼せうかへ脅すも母の躾とは知らぬ稚子泣顏を見兼ねて共に山賤が 詞へオヽかはいさうに泣くなく＼へこれさぞ辛氣に其樣に人目には見ゆれども 長地ガカリ へあいだてなさに親心老を忘れて山遊び四季折々は日のあたり 三下リ 春は梢に咲く花見事ェ折りておまそか手折りてやろか 合 桃や櫻の花色衣誰に着せうとて山姬織ろぞ 合 衣紋揃へて和子に着しようとて三重八重一重霞を分けて山めぐり ナホルへはや立秋の盆踊たはむれ遊べよんやさ 音頭 人の心の花の露濡れし鬢水もどうで流れの身ぢやものと櫛の齒にまでかけられて ギン 頑是なき子の手をひいて月に浮れて山めぐり 二上リへ冬は後生の願ひ月十夜參りに孫子をつれて ウタヒ いたらぬ寺のおくもなしへおらが在所はなア鼻を摑むやうな晩にや必ず背戸や小納戸で互ひちがひのお手枕今は十五夜の晩もはなぐれ枕の一人寢色氣はなれて老木の柳雪持つ枝はなきものを我も子故に室咲の梅を尋ねて山めぐり

詞へ成程親の丹誠は有難いもの然し話の其うちに流れの身との物語察する所先帝の北面坂田の藏人時行その身非力を悔み無念の最期を遂げたる故その妻これを深く歎き何とぞ勇士を生まんずと懷姫の身にて伊豆の深山にこもり山神に誓を立てしと聞きつるが扨はおことは時行が妻萩野屋の八重桐にてはあらざるや へ問ふにこなたも詞を改め 詞へ察しの上は何をか包まん我は賤しき流れの身なれど坂田の家を起さんため山神に誓をたて産落せしは此怪童頼光公へのお宮仕へ何とぞ頼み上げまする 詞へ得心あれば先づ重疊(ちやうでふ)イデ貞光が相手になり力の程を試し見んサア來い怪童 詞へ合點だ神變不思議の怪童丸こなたはあしらふ勇力士怪童いらつてかたへなる松を根こぎに引抜いてにつこと笑うて立つたるは人も恐るゝばかりなり勝負々々と打ちかゝるをすかさぬ剛氣(がうき)の力瘤幹より腕の節くれておつと摑めばめり〳〵〳〵互に劣らぬ大丈夫えいや〳〵と捻ぢ切つて左右へ別れて立つたりしは目覺しかりける次第なり へ貞光につこと勇みをなし 詞へハハア名將の眼力違はず君に仕ふる時を得し心をもつて今より坂田の金時と名乘れよ怪童 詞へそんならおれは侍か嬉しい〳〵 詞へオヽ嬉しい筈さりながら今別るればモウ此母には逢はれぬぞよ是が名殘かコレ怪童 ウレヒガカリへ夫の形見と見るにつけ。そなたの大事さ大切さ今日別るれば今宵より母一人寢の閨の內嘸ぞ面影がなつかしからう頼光公へ御奉公勤むる內の明暮も武藝を勵み立身せよ 詞へ必ず〳〵人樣に山姥の子と笑はれな 長地カヽリ へ今別るゝとも此母がそなたの影身に付添うて猶行末を護るべしとは云ふものゝこれがマア名殘惜しやいとしやと抱上げ抱付き思はずわつと一聲は梢に響きいぢらしき へかくては果てじと怪童丸 詞へ御頼み申すは貞光殿名殘は盡きじ早やされば ウレヒへいとま申して歸る山 舞カヽリたづねし花の春過ぎて姿は夏の雪の峰はれて源氏を守らんと山また山に山めぐりして行方も知れず失せにけり へげにや勇士の二葉より名は芳(かんば)しき四天王手がらも家の譲り物歌舞伎に殘りて有難き。

幾菊蝶初音道行

一九

〔解題〕 通稱「忠信」。 文化五年五月五日から中村座「義經千本櫻」興行の時、その道行淨瑠璃として出したもの。作曲者は鳥羽屋里長で、富本豐前太夫一連の出語り。靜に瀨川路考、狐忠信中村歌右衞門、大當りで殊に淨瑠璃が好評であつた。今でもよく演奏される富本名曲の一。

本曲の原作及び同材題の他の流派の諸作との關係などについては、淨瑠璃名作集、下「義經千本櫻」の解題御參照を乞ふ。

⧗上ルへ戀と忠義は。ウいづれが重い。長地かけて思ひは量りなや。靜に忍ぶ都をば跡に見棄てゝ旅立ちて大和路さして合行く野路も。路考出合ハル地へ馴れぬ茂みのまがひ道。弓手も馬手も若草を分けつゝ行けばあさる雉子のはつと立つては合ほろゝけん〳〵合ギンほろろうつ。合●長へ汝は子故に身をこがす▲ウへ我は戀路に迷ふ身の合ア、羨し妬ましや。合●ウへ初雁の。女夫づれウつま持ち顏の合はね袴。中人よりましの眞柴さす⧗ウへ宇迦の御魂の御社はいと尊くも神々と。ウ霞の中に甕の原。●合上カンへわきて筐の鼓のかはい入可愛。可愛の睦言も。長カヽリ人には包む帛紗物⧗合ウへ夫を便りにウ突く杖の心細野を打過ぎて。合へ谷の合鶯ハル初音の鼓合〳〵合ギン調べ綾なす音につれて連れて招くさ音につれて。ウ後れ走なる忠信が東からげの旅姿合歌右衞門出ウへ背に風呂敷色しかとせたら負うて合ノル野道畔道ゆらり合ゆらり。ギン輕い取姿いそ〳〵と合目立たぬ様に道スエル隔て●歌詞へイヤ申し靜様テモ早いお足。さぞお待兼ねなされましたでござりませう。▲路詞へ忠信殿。道すがらの心遣ひ。我が君様の御隱れ家。吉野の里へも今暫しと。聞いて心はせかるれど。道捗取らぬ女子の足。●歌へハテ其様にきな〳〵と思し召さぬがようござります。やがて目出度うお二人の。緣は盡きぬ妹脊川。▲路へかはらぬ春を三吉野の。山も霞みて今朝は見ゆらん

工中フシへ見渡せば四方の梢も。綻びてウ梅が枝うたふ。歌姫の里の男が聲々に合長へ我が妻が。上ル天井拔けて。据ゑる膳畫の枕はつがもなや。天井拔けて。据ゑる膳畫の枕はつがもなや。をかし鳥のスエ一節に。▲中へ我も初音のこの鼓工へ君の榮えを壽きて二上りへ德若に御萬歳とは君も榮えてましんます合上ル愛嬌ありける柳入腰よい中村の櫓幕。櫓太鼓の合にぎ〳〵と商ひ神の若戎繁昌まします其德に。御田の稻には穗に穗をさかえ。合ウ寶御船へ萬石船色の寶入りに今年綿誠に目出たうさむらひける合やしよめ〳〵京の町のやしよめ賣つたる物は何々蛤々合蛤蛤合蛤々合ウ蛤見さいなと賣つたる物は何々。蛤早き貝合はせ。合三下りへ彌生は雛の妹脊仲合▲ナホルへ女雛男雛と並べて置いて合眺めに飽かぬ三日月の

●ウへ宵に寢よとは後朝に。ウせかれまいとの戀の慾。櫻は酒が過ぎたやら。上ルカンへ桃にひぞりて後向き。羨しうはないかいな。■長へまして女子の果敢なさは男の嘘と露知らず▲中カンへ誠明かしの恨みなく合そして明かすが實の實。其眞實も知らずして仇惚れらしい何ぢやいナ合。工長ノルへはや東雲の時鳥けふぞ五月の花あやめ賀茂の葵に藤の森代々のためしの競べ馬。ハルはい〳〵〳〵〳〵合ウノルへそもそも馬に七箇の秘所。三箇の手綱五箇の鞍。眞先かけて合乘出す。合運べ小足に千鳥早に合ウ木の根岩角のり越えて天晴れ見事や派手オトシらしや●歌詞へせめては憂さを。オヽ幸ひ〳〵●中へ姓名添へて賜りしカヽリ御着長を取出し。君と敬ひ。スエ奉る▲色へ靜は鼓を御顏と。よそへて上に。沖ギンの石工

カヽルへ人こそ知らね西國へ御下向の御海上波風あらく御船を住吉浦に吹上げられ。それより吉野にまします由合やがてぞ參り候はんと。互に筐を取りをさめ實に此鎧を賜りしも兄繼信が忠勤なり▲路詞へなに繼信が忠勤とや▲歌へ誠にそれよ越し方を●謡へ思ひぞ出づる。上ルへ浦波にひらり合ひらり〳〵合工へ閃く太刀先三保の谷がノル行くをやらじと景清は合長刀小脇にかい込んで兜の錣引きちぎり合分つて左右へ合別れ行く合へいづれも働き兄。繼信が合ウノル八嶋の戰わが君の御馬の矢面に駒を駈け据ゑ●色へ立塞がる合。▲路詞ハルへオヽ聞及ぶ其時に。平家の方にも。名高き强弓。合■上ノルへ能登守敎經と合名乘りもあへずよつ引いて。●へ放つ矢先は怨めしや兄。繼信が胸板に。たまりも敢へず合。ウ眞逆樣。あへなきアハフシ

最期は武士の。忠臣義士の名を残す。に春の柳生の糸長く 合 枝を連ぬる御契 捗取らぬ芦原峠鴻の里。雲と見まがふ思ひ出づるも涙にて袖は乾かぬ ギン 筒りなどかは朽ちしかるべきと 合ノル 五 三吉野の麓の里 三重 にぞ著きにける。井筒 合✕中ノル へいつか御身も伸びやか にいさみいさめられ。急ぐと。すれど

登庸の御贔屓 御恵に縋りて 拙筆力七以呂波 二〇

乙姫

〔解題〕文政十一年三月七日から中村座の大切所作事として上場。中村芝翫（後の四代目歌右衛門）七變化所作事。その細目は次の通り

傾城……長唄
ごみ太夫……常磐津
供奴……長唄
乙姫……富本
浦島……長唄
瓢箪鯰……長唄常磐津かけ合
石橋……長唄

作者は二代目瀬川如皐。出演者連名は富本豊前太夫・斎宮太夫・大和太夫、三絃名見崎徳治・同金升。この豊前太夫は三代目であつて、丁度この時午之助改め三世豊前太夫となつたのである。因に名人の二代目豐前太夫は文政五年七月六十九歳で世を去つた。

ニヽ上ルへ日の本は合。長歌に和らぐ國の風
合ウタ、キ龍の都に。吹傳へ。合ハル地地
神代に。當らせ給ふ合。彦火々出見
の長尊よりゥ情交はせし妹と脊スカの
合中ウン綾は深き豊あし原。地豊玉姫の
産みナガス給ふ合長産家にゥ鵜鵜羽葺不
合ギン合の尊の。御末中とこしへに治ま
る御代こそ中スカシかしこスヱけれ。へ其
うまし國。ゥ故郷の。合文ヒカ、リ丹波の
國の水の江を。長忍びかねつゝ出で行
きし。人の行方の覺束な。合上カンへそ
なたの容も合雲霧スカスも波も合一つに
見渡せば合雲路の雁の女夫連れ合クドキ
へア、羨し只一人。中カン捨てられし身
の。ゥ何を花何を便りに告げやらん。
合上カン心一つに沖の行乾く間もなき袖
の露合ゥ契り變らぬしるしには。別れ
に送る合玉手箱合ウ中又逢ふ迄は必ず
や。中カン明くるな明けそ恨みわびにし

夜半の鳥鐘覺束な合カン堅い心にいつ迄ゥ東に富士のギン姿よき。花の吉原合
も花の。都の姫御寮合長君の睦言閨馴よし。それとても合上ルよもや悪性はあ
れし譯知る里もたくさんな三下リゥへ京るまいと。思ひ捨てゝも合男の心合。
に嶋原難波瀉合新町とやら。色ツキ所合愚痴よ未練よ恥かしや合へ佛の在世



色 虚空會に。上 八歳の龍女成佛の。悟 くる潮のどう〳〵〳〵。波を蹴立てゝ（文政十一年子ノ春三月狂言 中村座）れば玉の 合 都へいざと夕風に。ゥ さし 入りにけり。

柳絲戀苧環　二

〔解題〕通稱「お三輪」。文政十一年八月十六日から中村座興行の妹脊山の道行として出したもの。富本豊前太夫・大和太夫・志賀太夫、三絃名見崎徳治・金升。求女坂東彦三郎、橘姫中村大吉、おみわ中村芝翫。芝翫の人形振が好評であつた。

この「柳絲戀苧環」といふ外題の淨瑠璃は、こゝに挿畫で示したやうに既に天明三年正月中村で二代目豊前太夫によつて語られて居る。但しこれは妹脊山の道行ではなくて、その飜案であるらしいが、全體の筋は明かでない。今この外題名を生かして、その文句を變へて妹脊山の道行としたものと思はれる。語り出しの「戀をする身は若葉のかいで」から「色になる間に散る思ひ」の二上りの置きは双方共通であるのも、兩者に關係のある事を示してゐる。

安政元年十一月市村座で、同じ外題で常磐津でも演じてゐる。

二上り へ戀をする身は若葉のかいで 合 そ 來て。互にはたと行合の星の光に顔と 心かと。ゥ 胸には言へど詞には面はゆまぬ緣ならせう事もないが色に成る間 顔。詞 へ求女さんか へコレ ▲ゥ へヤア戀 げなる スヱル 袖几帳 合方 ヱゥ へお三輪はに散る思ひ 合 上ル 包めど薫り橘姫。面 人か何故に。 こゝ迄跡を追鳥は。 長地 あとに。後れ咲き 長地 采種に蝶のせか影隱す 合 薄衣を。ゥ それと求女が慕ひ 若しや塒の契りをも叶へてやろとのお れ行く姿愛らし 合 かはゆらし 合ゥ 嬉し

き中に繰言も中カンいとし／＼を苧環に絶えぬ思を亂れ合ひ合 中カン柳の髮も影うつるハル鏡が合池や瓦町。長地 北斗の辻も名のみして地晝の日向をうか／＼と。道もせきもせ合心さへおのが羽風に。おどさる丶雀の。森か宮が辻人目なければオトシ立止り詞へコレ申し求女様。こ丶迄一緒に來て下さりましたは。妾が戀路を。叶へてやろとのお心かいなア。へサア共心ざし仇に思はねど。二人一緒に伴うては行先の妨げ。こ丶から二人歸つてたもへすりやどうあつてもへ目立たぬ内にへそりやどうよくなもとめ様 回クドキ へ姫は思ひに堪へかねて。館を出でし其日より。ゥ 君故ならば露と消え。花と散りなん我が命。合ウ 惜しからぬとは思へども。解けぬあなたのお心はカン あんまり結ぶの神さんを祈り過した咎めかと。ゥ 怨みつ泣いて寄り添へば 回中ノル へお三輪に。長地 葉越しの月の面影はお公卿さんは中をおし隔てエ、聞えませぬ求女やら 合 侍さんやら 合ギン 知れぬなりふり様。そりや氣の多い。ゥ 惡性な。ゥ そすつきりと。水ぎはの立つ 合 よい殿御もや私が初戀は思はで三輪の過ぎし夜 合 ほんに女子の名聞にお肌あらして 合



「柳絲戀苧環」天明三年正月興行

うれしさに袖を油の新枕。其移り香の我が殿御 ●ウ へイ、ヤ私が ▲へイヤわしらの苫屋と思はんせ。名におふ三つの身に添ひて 合 ▲カン へ外の女子は禁制とがとこなたが引けば ●色へあなたが止め名所かや。●ウカヽリへつれるも緣のつな締めて堅めし緣結び。ウ 主ある殿御を ▲へそちよ ●へこちよと ✕へ互に顔もでなは ✕ウ へ戀の柵蔦葛つきまとは大膽な斷りなしに惚れるとはどんな 合 朱奪ふ。是も浮世の慣ひかや 合 二上リ れてくる／＼ 合 まはるや三つの小車本にも 合 ありやせまい 合●ウへ女庭訓躾月雪花を名所になぞらへ云へば嬉しかの。われからさきとせぐり來る ギン 緣方よう見やしやんせコレナアヱ、嗜みろ 合 何れの月が氣に入らしやんす何れの苧環。ウ いとしさに餘るお三輪が悋なされ 合 女中さん。離れはせじと縋りの花が 合 氣に入らしやんす 合 ゆきに 合 氣のはり。男の裾につけるとも。知らつく ●ウへイヤそもじとて垂乳根の許戀路をしぎ立澤の夕の文をまき立山にずしるしの絲筋を慕ひしたうて 三重 尋せし中でもないからは ウ 戀はしがちよのぼるも戀の 合 ならひぢやものを 合う ね行く。

御注文に染返したる　澤紫色水上（さはむらさきいろのみなかみ）　二二

〔解題〕　通稱「船の高尾」。文政十二年三月七日から河原崎座興行の「伊達競阿國戯場」の第一番目三立目に出した淨瑠璃。出演者三代目豐前太夫・大和太夫・豐美太夫、三絃名見崎與三治・同德治。左金吾賴兼澤村源之助、傾城高尾岩井紫若。有名な高尾吊し切の場面になる淨瑠璃で、好評であつたが、同月廿一日類燒のために一週間興行されただけであつた。

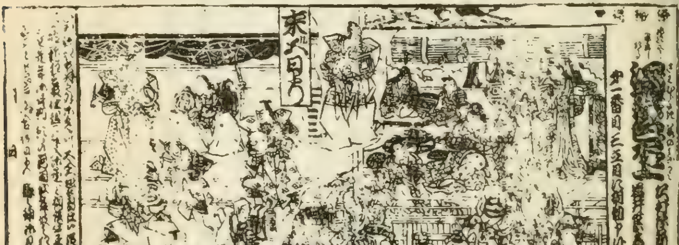
本曲は嘉永二年四月二日から中村座で上場された。その時刊行された淨瑠璃薄本の繪表紙をこゝに挿入して置く。

へ茂り生ふ蘆の若葉に潮満ちて影澄む川の船遊び。浅きえにしは浅妻の流れて同じ浪枕 頼兼へ春宵の殘月空に帶び。雁鳴いて風情を添ゆると。斯く見渡せし川の面。月に一入春景色。何とよい眺めではないかいなう 高尾へサア月は晴れても晴れやらぬ。わたしが胸の薄曇り。ハテ何としたものであらうなア へあだにうつらふかね言も戀と情の二道に。苦界にはなれし涙の一立添ふ胸の川霧を。時雨紅葉と色まさる宵のまゝなる酒機嫌 頼へコレ太夫。なぜに今宵はそのやうに物思はしき顔の色か。モウ打解けたがよいわいなう へ寄添ふ枝も吹く風につれ 高へエ、ッットモウ 頼へハテこちら向いたとてよいではないか 高へわしや何ぢややら氣合が悪いわいなア 頼へ何ぢや氣合が悪い。そんならさうと早う言うたがよい事に。こりや誰そ参れ／＼ 侍へハッ御用でござりまするか 高へ典薬を呼べ／＼ 侍へハッ 高へア、それには及ばぬわいナア 頼へでもそなたが 高へモウよいわいなア 頼へム、へまださめやらぬ袖の香も。すねてひぞりて陸奥の。しのぶの亂れ誰かまた へ深き思ひは戀衣。うちぞゆかしとかけ叫。よそ目わびしくやる方も。つけ廻す程かの人の。いとゞ思ひの十寸鏡。曇りがちなる戀の闇晴るゝ氣色もなか／＼に 頼へこれはいかな事。ちと浮き／＼としやいな



嘉永二年興行の時の薄本繪表紙

う 高へサアその仰せは嬉しいけれど。言ふにいはれぬ私が心。おほけなき例なれど建禮門院は誰あらう一天の君の母君ながら。御船の内にて御名を流し。また祇王祇女佛御前は賤しき白拍子の遊女なれど。清き操を後の世迄殘すも同じ女の身。此上のお願には。どうぞ此身を廓へ返して下さんせいなア 頼へハ、、、、なる程そちが廓にありし時は。間夫もあらん深間とやらんもありつらんが。今頼兼が心を思ひ。モウ打解けたがよいわいなう へ栞に言の葉折添へて。さすがにいつか閨の花 高へエ、モ置いて下さんせいナア 頼へハテ何がそのやうに腹が立つぞいなう 高へサア私やお前がいやで／＼ならぬわいなア 頼へそりやこれ程に申しても 高へオ、くど へあたら櫻も夜嵐に。さわ立つ心取直し 頼へ酒を持て。早う持て。早う酌せい。そも廓へ通ひそめしより心をかけし傾城高尾。流れを立つる賤しき女に執心深く。これ迄我につらかりしが。夜毎にかはる勤めにも。十三とやらに操を立てるは是非に及ばぬ。思ひ切つた。今取上げし盃は。欝氣を散ずる船中の良藥。禁酒を破つて一つ飲まん 高へ待たしやんせ。三歳此方愼みの禁酒をお破り遊ばして。あなたはお氣ばしちがひなされしか 頼へ氣が違つた。サ氣も違はいでなんとせう。よしなき事を申さずと。そなたも一つ過しや



いなうへ色にほのめく花の醉。誰が名をそれとつけざしにそむけし顔の仇名草 高へハア、 瀬へコレ高尾なんでそなたは泣きやるのぢや 高へサアこれはな。言ふにいはれぬ胸の中。五十四郡の殿樣がこの身をそれ程まで思うて下さんすは冥加ないやら悲しいやら嬉し涙がこぼれますわいなア 瀬へ何をまあそれを泣く事が。ハテ傍へ寄つてもよいではないか。コリヤなんぢや 高へア、それはナ 瀬へイヤ／＼見せともながるはなほ不審。ソレ讀上げい 侍へハツこりやこれ勝の緒。備前播磨美作三ケ國の大守赤松満祐が息女歌染姫 瀬へサ、一つつぎやれ 高へハア、イへ花のさはりに雲晴れて。影もきらめく三日月の空に音を啼く杜鵑 瀬へ何も驚く事はないく 肌身放さぬそなたの守。取上げ見たるあの者を手討にせしはそちへの心中。かほどに心を砕く賴兼をつれなうしやるは太夫そりやあんまり曲が無いぞや 高へどのやうに言はしやんしても。私はいやでいんすわいなア 瀬へそりや何が 高へアイお館へ行く事が。サこれ程に言はれたらお前は腹が立たうがな。なんぼお大名さんぢやというて。客と思へばいやになり。又貧しい暮しのお方でも。間夫と思へばいとしうなり。二世も三世も先の世と言ひ交した大事の男。その間夫のある私が身。それぢやによつてお前はいやでござんすわいなア 瀬へチエ、おのれはナ。曲輪に在つては君傾城。館へつるれば腰元はした。最前よりの悪口も。女と思ひ宥免なせしが。最早これ迄。今賴兼が刀の錆思ひ知らせん思ひ知れへ短き夜の契りもと。戀慕の闇の愛着も。卯の花雪の肌そむる。闇に色づく紅葉の。後の浮名となりぬらん。

草枕露の玉歌和　二三

〔解題〕通稱「玉川」。作曲者初代鳥羽屋里長。寛政三年十一月里長が常磐津と絶縁して、二代目富本豊前太

夫と提携して富本に入つた時に「惠方萬歳」「寶船三組盞」と共に本曲を土産淨瑠璃としたものであるといはれる。

初代里長は此時代の江戸三絃界切つての作曲の名人で、天明から寛政の初年迄は常磐津にあつて、幾多の名曲を作り、又一中節などの爲にも乞はるゝまゝに作曲したといふが、二代目豐前太夫の招聘によつて富本に入つたのである。

江戸ガカリ へ鳥が鳴く東からげの草枕 謡 へ急がぬ旅も敷島の道を辿りて六玉川 へ筆に綴りて書殘す景色は歌の德ならん 合 へ足曳きの 合 山踏み分けてはる／＼と霞たなびく遠近の眺めは飽かぬ七重八重花の 柵 影添へて色には井手の山吹に 合 蛙の歌の風情あり 合 へかゝる名所に紀の國の 合 高野の奥の流れをば汲みやしつらん旅人のア、忘れても 合 へ二上り 野路はゆかりの色深く 合 中カン 錦の萩の下葉まで洩れてぞ置ける白露に 合 月は宿りて夜もすがら戀しき人は鈴虫の 合 振捨てられて機織の 合

夜寒を侘びる閨の戸に 合 つゞれさせてふきり／＼す 合 誰を松虫 合 こがれてすだく我も思ひに堪へ兼ねて 合 ナホルクドキ へいとゞ心の遣る瀬なや迫まる悋氣の津の國や 合 中カン 解けてしつぽり合ひ槌のそれさへなくて小夜衣 合カン 濡れる袂や袖の露一人こがれて繰返す打つに砧の 合 音づれも 合 絶えて梢の松風は 合 憂きつま琴の音に立ちて夜毎調べる 合 床しさに仇は浮名も調布や 合 二上り へ照る月の浪に漂ふ玉川に へ干してさらして晒す白布 合 へ立つ浪が／＼瀬々の網代木さへられて流るゝ水を堰きとめ

よ堰きとめよ 合 へ馴れし手業の賤の女は馴れし手業の賤の女はいさや踏らん賤の戸へ ナホル へげに面白き陸奥の野川の苫屋の浪枕千鳥は歌の友なれや 謡 へ筆のすさびを家づとに殘す言葉は富本の榮え久しき里の長目出度くこそは聞えけれ。

那須野　　二四

〔解題〕箏曲「那須野」を取つて富本の淨るりに作曲したもの。慶應三年秋名見崎八五郎（五世德治）作曲。

次第へ梟松桂の枝に鳴きつれ。外記亂す鳥羽の帝に宮仕へ クドキへ夜毎に君がられぬ恐しの雲を蹴立てゝ庭の面に菊の花に隱るゝ野狐の臥床荻吹き送る枕づく閨のひまさへつれなしな明くるきらめき渡る稻妻の光を放ちて失せに夜嵐にいと物凄く更け渡る 二上りへ野邊間惜しき鴛鴦の重ね衾の明暮れにへ洩しがへつひに矢先に果敢なくもかゝの狐火思ひに燃ゆる燃ゆる思ひも白露れぬ情もいつしかに秋風立ちし枯蘆の る此身ぞ恨めしきへ殺生石といでや世と消えし玉藻が立姿へ風に亂るゝ絲萩音にこそ泣かめ我ながら憂き世の中に名のみ著くぞ下野の那須野の原に降の花こきたれし白妙や 琴唄へ紅深くや變らじと カンへ千年をかけて契りつり亂す時雨に匂ふ紅の木の葉をおろ月影に合うつし心や仇言のへ早くも變るつひの寄る瀨も今更に流れて早き流す小夜風に拂ひし露の玉藻の前消えにる飛鳥川あした面なの面伏せに翳す扇川の割れて後こそ果敢なけれへ過ぎしし跡をや殘すらん。も隱れ笠。へ都を餘所に見なしつゝ雲井の御遊びに司つらねし宮人の聲々秋風ぞ吹く陸奥の關の白河知らざりき澄みてさしのぼる。月待つ闇にあらは那須野の原に世をぞ經ぬ。へそも我こしゝ 詠ウタへナウ淺ましき我こそは三千そは天竺にて斑足太子が塚の神唐土に歲經にし野狐の形を變へて今爰にへ荒ては幽王の側女とめでて傅かれ扨てぶる神のかしこくも祈りたゝへぬ烈し日の本に渡りしは七十四代におはしまきに合俄に荒るゝ眼のあたり手にも取

御代榮益穗富種

〔解題〕 通稱「豐の前」。富本の祝言物の一として名高い。三世豐前太夫頃の作か。

中へ豐の前 長地 豐の後とはゆかりある 買ふ 合 市の聲 合 フナウタ へ黄金の升に白へ嬉しよすがの 合 朝夕に櫛と鏡は 合 ど地 豐葦原や富く ナガス さの五風十雨の時 銀の 合ギン 量り知られぬ末の代に。留む うした中ぢや 合ウ 千筋百筋木枕添へてを得て惠みぞしるき君が スヱ 御代 合ウ る跡もおほけなや 合 一下リ へ夏の鶯 合ウ ウ 共に白髪の松の雪色さへ深き 合 操ぢ浪も 合 靜に四つの海四つの民の戸 地 高 若竹に拙きながら 合 ふし ノル 込めて 合 やえオ、さうぢやかさ〳〵 合二上リウ へ思き家に。長地 賑はふ御言かしこくもこ ウ 傳へしまゝ 入 の 合 家の風。花も 合 ふ殿御に 合 相生の 中 女松男松は 合 どうのめる文の梅が香に勝つ色見せて武士 ウノル 亂さじ 合ウ 月は猶流れに影も絶え した中ぢや 合ウ 千代の數添ふ小松の緑の。ウ 智仁の教へとこしへに。勇み弛 やらぬ 合 長地 くすりの水ときくのその ウ 常磐の友と楢の葉の色さへ深き 合ウ まぬまつ ギンスヱ りごと合。ハル地 仰ぐも 合 ナホルウ へめでて胡 入 蝶のアレ 合 かは 眺めぢやえ 合 オ、さうぢやかさ〳〵合 高し位やま。長地 大和言の葉古へ ゆらし 合ウ 二つ連れたは女夫ぢやも ウ へそれも久しき歌の名所。謡 へげに住も 合 上ルカン 雲井に聞えあげ巻きやどんのを鴛鴦が妬むか冬川に 合中カン へ氷ら吉や。ナホル 高砂の 合ウ 尾上に鶴の 合 千どとなるは瀧の水。苗代水に種かしぬ情とけて逢ふ 合 いつの契りぞ思ひ羽代八千代。汀に龜の萬代も。ノル 語りて。ウノル 御ん寶の 合 千町田にいとゞ長は カン へ變らぬ色のいつ迄も比翼とや つきせぬ筆の綾。壽長く御代やすく治閑けき春日影 ギン 千代の影添ふ殿づくらの私言 長地 へ枝を連らねん睦言も神 まる國こそ目出度けれ。り 中 三つ葉 ハネハズミ 四つ葉に 合 咲き草 の結びし 合 二世三世 合 縁のいとしさ苧の。カヽリ 企みの業も品多き。ウ 中に賣 環の繰返したる ギン まさな事 合 二上り

（富本節終り）

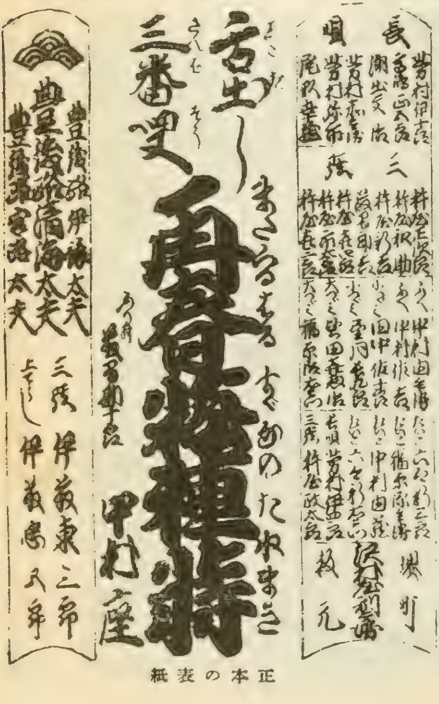
御六編　清元節之部

再春菘種蒔

一

〔解題〕通稱「舌出し三番叟」又は「種蒔三番」。文化九年九月九日から中村座で三世中村歌右衛門歸阪の名殘として出した所作事。廿四年前に初代中村仲藏が中村座で踊つた志賀山流の三番叟「壽世嗣三番叟」に據つたもので、その意味は淨瑠璃の語出しにも示してある。作者は二代目櫻田治助。豐後路清海太夫等の淨瑠璃と芳村伊十郎等の長唄とのかけ合であつた。出演者の詳しい連名は、こゝに揭げた正本の表紙によつて明かである。

この豐後路青海太夫は二代目富本齋宮太夫の事で、家元と不和を生じて退いたのであつたが、この時かく改名して出演し、のち上阪して滯在したが、文化十一年市村座の顔見世狂言に清元延壽太夫と名のつて出演するのである。で、本曲は淸元に取つては由緒深い淨瑠璃である。



正本の表紙

手事カヽリへその昔秀鶴の名にし負ふ都上りの折を得て合教へ請地の親方に舞の稽古を合志賀山の合振もまだなる稚氣に合忘れてのけし合三番叟合揉み出し合繰出し一奏目出度う榮えや仲藏をへにせ業もなか〱に及ばぬ筆に寫し繪も合いけぬ汀の石龜やほんに鵜の眞似烏飛び合とつぱ一重に　合有難き花のお江戸の御贔屓を頭に重き立烏帽子　●へあら目出度や物に心得たるあどの太夫殿にそとげんさう申さう．▲へ丁度參つて候　●へあどの太夫殿をお見立て申して候　▲へ何と御覽じ候や　●へ福人とお見立て申して候　▲へ又色の黒き尉殿をお見立申して候　●へ何と御覽じ候ぞ。▲へ德人とお見立て申して候　●へ仰せの如く德人の中にても子德人にて候十人の子供等を車座に並べ一時に名を付けて候　▲へ何とお付け候ぞ　●へまづおつとりちがへおとよけさよ辰松ゆる松だんだらいなづにかいつくひつつく火打袋にぶらりと付けて候　▲へあら目出度やその和子達の祝ひ月一段と賑はしき事に思はれて候　●へ先づあどの太夫殿には重々と元の座へお直り候へ　▲へ先づ色の黒き尉殿には一舞御舞ひ候へ　●へイヤ〱御直りなうては舞ひ候まじ　▲へイヤ〱御舞ひ候へ　●へイヤお直り候へ　▲へあらやうがましやさあらば鈴を參らせうこなたこそ　へ天の岩戸のナ合へ神樂月とて　合祝ふほん〱その



歌右衞門の三番叟錦繪

歳も合五つや七つ三つ見せうと合縫ひ
の模様のいとさま〳〵に合竹に八千代
の壽こめて合へ松の齢の幾よろづ代も
變らぬためし鶴と龜ぴんと跳ねたる目
出たいに　合へ海老も曲りし腰のしめ賓
盡しや寶船へやら〳〵目出度たいのへ
へ四海波風治まりて合常磐のえエ、木の
葉も茂るえいさらさ鯉の瀧のぼり牡丹
に唐獅子唐松を見事に〳〵さつても見
事に手を盡くし仕立て榮えあるよい子
の小袖着せてきつれて合參ろかの肩車
にぶん乘せて合乘せて參ろの氏神詣で
合きねが鼓の　合でんつくでん合笛のひ
しぎの合音も冴えたりな合冴えた目許
のしをらしき合中の〳〵中娘をひたつ
長者が　合嫁に欲しいと望まれて　合へ藤
内次郎が栃栗毛に乘つてへエイ〳〵
〳〵えつちらおつちらわせられたので
その意に任せ合申したへさて婚禮の吉日

はへ縁をさだんの日を選み合送る荷物
は合何々やろな瑠璃の手箱に珊瑚の櫛
笄珠をのべたる長持に數も調度のいさ
ぎよくへ様はナア百までナアエ、わし
や九十九迄ナアエへ何の性だえ合へ共に
ナア白髪のナアエ、生ゆる迄ナアエ、
へ嫁とは言へど合世間見ず合駕籠の內
外の思はくが恥かしみ〳〵案じられ
へ初に添寢の新枕交はす詞も何と言て
合どうして宵の　合口と口　合互に手さへ
鷄鐘の　合聲が取持ちやう〳〵と明行く
空を月にしてへ妹脊結んで女夫仲睦ま
し月と岩田帶やがて孫彥玄孫を儲け合
末の樂しみ此の上やへ心浮立つ踊り
唄　二上りへ欲しか合おましよぞ一枝折り
てそりや誰に合いとし女郎衆のかざし
の花にホウヤレ　合戀の世の中面白や
へ直ぐにも歸りお目見得をへ又こそ願
ふ種蒔や合千秋萬歳合萬々歲の末迄も
賑はふ芝居と舞ひ納む。

北州千歳壽　二

〔解題〕 通稱「北州」。清元名曲の一。北州は江戸の中心から北方に當る新吉原を指した言葉で「北里」「北」などと同じである。この吉原の年中行事を素材として、その里の繁昌長久を祝つた作で、太田蜀山の作であると稱へられ、作曲者は川口のお直であるといふ。お直はもと吉原の藝者で、後に橋場へ料理店を出して川口といひ頗る繁昌しだ。清元、河東に堪能で、三絃も上手であつたといふ。開曲の年代については忍頂寺務氏は文化十五(文政元)年春であると考證して居られる(清元研究第七號)。

〽凡そ千年の鶴は 合萬歳樂と謡うたり ギン 又 合萬代の池の龜の甲は三曲に曲りて廓をあらはさず 合新玉の霞の衣衣紋坂 合ヘ衣紋つくろふ初買の袂ゆたかに大門の花の江戸町京町や背中合せの松飾り ナゲブシヘ松の位を見返りの 合柳櫻の仲の町 合いつしか花もちりてつとんと 合見世清掻の風薫る簾かゝげて時鳥啼くや皐月のあやめ草 中ギンヘ黑白もわかぬ單衣 カンヘいよし御見の文月の亡き玉章の燈籠に星の痴話ごと私言 合銀河と聞けば白々と白帷子の袖にそよ〳〵 三ドリヘはや八朔の白無垢の 合雪白妙に降りあがり 合馴染み重ねて 合二度の月見に逢ひとて見とて 合合せ鏡の姿見に ナホルヘ露うちかけの菊がさねきくの增せたる禿菊 合ヘいつか引込み突出しの 合ヘ約束堅き神無月に誰が誠より本立の山鳥の尾の酉の市妹許ゆけば千鳥足 合ヘ日本堤を土手馬の 合ヘ千里も一里通ひ來る淺草市の戻りには吉原女郎衆が 合手鞠つく 合ヘちよつと百ついた淺草寺 合筑波の山のこの面かの面 合葉山茂山おしげりの繁き御蔭に榮え行く 合四季折々の風景はげに仙境もかくやらん ヘ隅田の流れ清元の 壽延太夫どの君は千代ませ〳〵と悦びを祝ふ天權和合神 合日々に太平の足をすゝむる葦原の國安國とヘ舞ひ納む。

梅の春　三

〔解題〕 前の「北州」と共に清元の祝儀物としては代表的の名曲。作者及び作曲年代に關しては從來異說も多かつたが、近年毛利子爵家で發見された原刻本によれば、卷頭にす田のほとり梅䢭門主人述とあつて、終りに文政十亥のはつ春とある。この梅䢭門主人とは長府侯毛利元義の事で、元義は鹿津部眞顏の門に入つて狂歌を學び、狂名を梅䢭家眞門と呼んだ。(天保十四年歿、五十九)。狂歌の外、漢詩をも作り、遊藝を好んだ多才多趣の人であつて、殊に梅を愛したといふ。この人が判者の列に加つた時に、その披露の際に語らせたものであるといふ。文の出來がよいから師匠の眞顏の代作ではないかといふ說もある(狂歌人物誌)。淨瑠璃の段切の「盡きせぬ流れ清元と、榮え壽く梅が風……」は當時清元の家元でタテを語つてゐた榮壽太夫がいよ〳〵好評で、清元の一流が榮えるのを祝つたのはいふまでもないが、この榮壽は本年三月二代目延壽太夫と改名するので、その邊の消息をも暗示して居るのかも知れない。

〽四方にめぐる扇巴や文車の合ゆるしの色も昨日今日心ばかりは春霞合ひくも恥かし合爪じるし合雪の梅の門合ほんのりと合匂ふ朝日は赤間なる合硯の海の合青疊合文字がせき書かき初に筆草生ふる波間より若布刈るてふ春景色浮いて鷗の一二三四合〽いつか東へ筑波根の合かの面この面を都鳥〽いざ言問はん惠方さへ合よろづ吉原山谷堀合寶船漕ぐ合初買によい初夢を三つ蒲團辨天さんと添臥しのカン〽花の錦の飾り夜具合二十ばかりも積み重ね蓬萊山と祝ふなる富士を背中に家がための鹽尻長く居据れば。ほんに田舍も眞柴たく合橋場今戸の朝煙つゞく竈も賑はうて 二上り〽太々神樂門禮者合框が笠木も合三圍の合土手に囀る鳥追は合三筋霞の合連彈や 三下り〽君に逢ふ夜は誰れ白髭の森越えて合待乳の山と庵崎の合共鐘が淵かね言も樂しい仲ぢやないかいな面白や〽千秋樂には民を撫で合萬

歳樂には命を延ぶ首尾の松が枝竹町の渡し守る身も時を得て目出度くこゝに隅田川盡きせぬ流れ清元と榮え壽く梅が風幾代の春や匂ふらん／＼。

四季三葉艸　四

〔解題〕式三番叟をもぢつた題名で、その名の示すやうに、四季の花を巧に綴込んだもの。略して「四季三葉」といふ。作者年代未詳。

へとう／＼たらり。たらりら。たらり。あがり。らゝりとう へ所千代まで變らぬ色の緑立つ春松の花曾我菊の名も翁草そよやいづくの 合花の瀧 合玲々と落ちて水の月素袍の袖も千歳の梅が香したふ鶯も初音ゆかしき我が宿の竹も直ぐなる一節に 合うつして四季の三葉草へ立舞ふ姿いと榮えて へ桃は初心に柳はませた風のもつれに解けかゝるこちや海棠蕾の儘ようら山吹に若楓藤色衣ぬしとてもかざす袂の櫻狩へその盃の數よりも 合へおゝさえ／＼悦びありや／＼幸ひ心にまかせたり へ千早振る神の昔にあらなくに へ卯の花垣根白浪の渚の砂さく／＼として朝の花の富貴草 クドキへ女子心は芍薬に思うたばかり姫百合の 合へまだ葉櫻も染めぬのにそりやあんまりな梨の花氣も石竹に軒の妻へ菖蒲も知らで折添へていつか手活の床の花へ元の座敷へおも／＼とお直り候へえうがましやさあらば一枝參らせうへそなたこそへ君が由縁の色見草うつろふ水に杜若池の汀に鶴龜の緣うれしき踊り花 二上りへ女郎花 合宵の約束小萩が元で尾花招けば絲薄 合通ふ心の百夜草こちや／＼ 合眞實いとしらしさうぢやいなおもしろや ナホルへ時雨の

紅葉寒菊や水仙清き枇杷の花花の吹雪　いさをしは　へ千代に八千代の玉椿眺め　る家とぞ祝しける〳〵。
のさら〳〵さつと山茶花や惠みに花の　盡きせぬ花の時今も榮えて清元の治ま

小紫 權八 其小唄夢廓　五

〔解題〕　通稱「權八」。文化十三年正月十五日から中村座興行の「比翼蝶春曾我菊」の中へ出した淨瑠璃。作者は福森喜宇助、作曲者は初代延壽太夫の妻お悅であるといふ。この芝居は曾我狂言の中へ比翼塚で名高い權八小紫を取合せたもので、淨るりの上卷は權八が鈴が森に所刑される間際に廓をぬけてかけつけた小紫と最後の水盃をすると思つたら夢は破れるといふ夢の場、下卷は、この夢が氣にかゝつて憂欝になつて居る權八を小紫は勵して、自分の變らぬ眞情を明かして、前髮を剃つて落してやらうとする「髮梳きの權八」といはれる場である。出演者は初代清元延壽太夫・理喜太夫・宮路太夫、三絃清澤萬吉、清元順三。權八七代目市川團十郎、小紫三代目尾上菊五郎。

この外題に「其小唄」としたのは、權八が鈴が森でいよ〳〵處刑される時、(延寶七年十一月三日)その當時流行の「八重梅」の小唄を口誦したのが人心を動かして、その死後に「八重櫻」の替唄が流行したといふ。「八重梅」の小唄は松の葉の第二卷にも載つて居る。全文は左の通り。

二上り梅が咲けがしいよ八重梅が、枝を手折る振して、必ずごさせとさ樣を招く合ノ手必ずごさせと樣を招く、夢になりとも逢ひたや見たや、夢になりとも合ノ手浮世ぢやな、稀に逢ふ夜は現か夢か、稀に逢ふ夜は、語る間もなきさんさ短夜や、よしなの思ひ、合ノ手うき世ぢやな。

この替歌として殊にうたはれた「逢ひた見たさは飛立つばかり」の全文左の通り、

我は野に咲くつゝじの花よ、折つてお見やれ散らぬ間に、我は野に住む螢の虫よ、土手の松明火をとぼす、逢ひた見たさは飛び立つばかり、籠の鳥かや恨めしや、さんさよしなの思ひ。

この浄瑠璃にはこの替唄を用ひてある。

上の巻

二上りへ榮え行く 合人一盛り花一時 合明日は白井が身の果も思案の外のナホル罪科に 合へ引かれ廓へ通ひ路の派手な姿に引替へて今日は哀れに散りかゝる淺黄櫻と夕嵐隙行く駒の道もはやかゝる縄目に大木戸の色故にこそ命さへ へ逢ひた見たさは飛立つばかり籠の鳥かや恨めしや へこれも由緣の紫と 合二人が仲を世に唄ふ色品川は變れども 合今日ぞ鮫洲の無常音駒をとゞめて 圍十郎へかく數萬の御見物へ我が身の懺悔生れ故郷は因幡の國後先思はぬ若氣の短慮義によつて人を害し逝々下りしこの東路ふと色里へ通ひ初めしげ〳〵行けば浪人の貯へ盡き盜み取りたる金故に我と苦しむ此身の罪若いお方は取分けて見る程のこと羨しくつい思ひ付き不了簡色と慾とに身を果たす此身の見せしめ業晒し劫の秤や淨玻璃の鏡にうつる罪科と今更思ひエ、當りましたハシルへ我と悔みの教訓も心の駒の急がれて 合こゝぞ名にふる鈴の森最期場さしてくる折しもへ廓を抜けて小紫裾もほら〳〵駈來り 菊五郎へヤア權八さんまだ死なずに居て下さんしたか。圍へヤそちは小紫扨はこの權八に 菊へサア此世で一目逢ひたさに廓を駈落ちして來たわいな 圍へ未練には似たれどもせめて別れの水盃 菊へ最期の折は何事も一つの願ひは叶ふとあるどうぞ暫しのお許しとフシへ涙と共に願ふにぞ へ情ある警護の役人いかさま暫時の猶豫は免してくれん。菊へエ、有難うござります へ嬉し涙に取縄り 合手桶の水を汲交はす 合柄杓の緣長かれと 合あの世を頼む 合カン南無妙法蓮華經〳〵カンへ妙法蓮華今日の今 合へあの世の雲と紫が縛め切つて劍の山直ぐに白井が修羅道もこれなん南柯の一夢にて眠りの夢は覺めにけり〳〵。

下の巻

琴唄カヽリへ間夫といふも 合廓の名 合客と

いふも廓の名 合噓と誠の分隔て 合へそをかける輪飾りは 合慾徳棚の惠方からはしやんす 唄へサア仔細あつて多くのれも鳴く音の鶯も 合梅に三浦の小紫 合ちく大黑がござつた 合踊りもつてござ金子調達せねばならぬ權八身を捨てゝ粹な由縁と我ながら我がつま琴とかきつた口から出放大黑舞天てれん女郎のこそ浮む瀨と心に思はぬ惡事の樣々同鳴らす思ひのたけの尺八も 合へ戀慕流能には一に 合たはけの文枕 合二に二世類の本目丈八が心變り若しも彼奴めにしは權八が一節切とは氣にかゝり 合へかけた張りもなく三にさながら仇惚れ訴人されなばいつぞや見しが正夢にてまた黃鐘の調子とて合はせられても春の慾大黑を汚いなへさう云はんすりや刑罪に遭ふは知れたこと 菊へム、そんの夜の 合夢もさながら合の手に 合拗ね 合こちからもそれが男の德若に御全盛ならせんどの夢が正夢で 唄へ愛想が盡て見せたる瘤柳 合煙る柳の煙草盆互にとてわしに逆ひましんます 合客立ち歸きたら小紫さらばぢや 菊へア、モシ何 合引合ひ 合顏背け 合身を背けたる風見る旦より水も洩らさず 合相惚れの誠の の斯うなつたら死ぬるも生きるも豫て草。 菊詞へコレイナ權八さん最前までも色にて候ひけるへそれにその樣な胴慾の約束 唄へスリヤ立退くなら一緒に行今までも機嫌ようして居ながらなぜにな 合若水臭い拗ね詞 合つらい勤めのそくか 菊へサア立退くまでもお前のまへマア其樣に 唄へ腹が立たいで何とせうの內に 合情は賣れど 合心まで 合賣らぬぶり人目に立てばどうぞまア 唄へ如何最前白柄とやらが相方になつたとの事私が苦界の誠 合カンヘ緣に曳かれて破魔さま姿までも變へ逃げ隱るゝと世の嘲 菊へアレマアそんな廻り氣ばつかり 唄へ弓のやがて廓の年明けてへ名も呼びかりも望みの叶ふまでの辛抱 菊へそんなコリヤぬかし居るなエ、おのれはなへておかもじと樂しむ甲斐も七草と豐ら得心して下さんすか 唄へオ、如何にへ人の心と飛鳥川今日の今まで其樣な叩いて泣く淚目も春雨に染めぬらん 唄も 菊へエ、嬉しうござんす幸ひ爰にこ移り心のひも鏡冷たい心はへオ、それへオ、その親切は忝いが最前よりつれの鏡臺千筋と撫でし前髮も 唄へ剃られよ 合女郎の誠と玉子の四角泣いて騙しない仕なしは緣にひかされそなたを憂ばならぬ男なり 菊へ胸の鏡もかき曇るてあやなして噓つきぞめを正月か 合男目にあはせまい爲 菊へエそりや何と云淚に櫛笥取添へて 唄へ心の內の亂れ髮

合へ結ひ直して上げうわいな　歌ガカリへ散ればこそ合身に降積る花吹雪はかなき緣の合はせ砥に合かゝる思ひの合あらうとは合へ神ならぬ身の權八が祝うて落す前髪を合カンへ涙で採んで剃落す向ふ鏡の小紫男なりせし面影を合見交はす袖も比翼塚後の浮名や殘るらん〳〵。

絲の五月雨

六

〔解題〕　通稱「小菊半兵衛」。作者福森喜宇助。文化十三年五月中村座興行の「時鳥貞婦噺」の中に演じた淨瑠璃である。この芝居は、大阪で朝顏日記の深雪で名をあげた澤村田之助が江戸へ歸つて出したので、配役によつて見れば朝顏日記に御堂前の敵討を綯ひ交ぜたものらしく、詳しい筋は分らぬが、小菊は主人の敵磯貝實右衛門の敵島川太兵衛を討ち度いために呉服屋半兵衛に事情を打明けて夫婦の盃を交すといふ場面である。出演者は初代延壽太夫、悴巳三治郎、三絃清元順三・清澤萬吉。小ぎく中村松江、半兵衛市川團十郎。

へ夢結ぶ轉枕に時鳥合翼も梅雨につい濡れて濡れて羞かし忍ばじとこゝろ小菊と半兵衛は取亂したる姿振も合締めて結ぶの緣ならで解けぬ思ひと三重の帯　團十郎へこれ小菊さん思ひかけない屏風の内契りを込めたその上に斯う云へばどうやら逃げる様にも思はうが色絲を見破つて樂しむ酒の介抱を小富と思ひ出來心枕交して今更に納まらぬ今宵の仕儀　松江へそれいな私も浮氣を取置いて此身に深い願ひのある故それを頼まん爲ばかり心に染まぬ殿様へ得心したに振替はつて　團へ互に思はぬ間違ひづく今宵の事は何事も　松へサア水にし度う思うても枕交して胴慾な申し半

兵衛さん流れの廓に身は住めど 合色氣 も 合吹けよ川風あがれよ簾中の小唄の サア御主人磯貝實右衛門様の敵は島川
離れて分知りと褒められた身を胴慾な ひとロにへおもひ佃もうつかりと主に 太兵衛とやら紛失の武術の秘書の詮議
合寝て眞實は知りながら是限に 合なろ 見とれて嬲られてぢらされた身の嬉し 助太刀共に頼むとある 唄へそなたの兄
ぞいな 合地體私は深川へ藝子になりし さも 合及ばぬ戀に揚羽の蝶染めて染ま の賴みの狀町人なれども武士氣質一大
始めから店のお方の出番にも呼ばれて らぬ 合比翼ぞとヵンへ浮世に拗ねて暮せ 事を知つたからは引きはせぬ及ばずな
一度二軒茶屋然も其時この內で主に始 しにどんな浮氣な神さんが今宵結びし がら 松へ力となつて下さんすか 唄へ如何
めて合の手も へ一座の中で水際の立つ 緣の糸解けじ 合離れじ 合青柳の風にも にも改めて夫婦の盃 松へエ、嬉しうご
た一人が目に立つてどうか調子のよさ つるゝ風情なり へ落散る狀を半兵衛は さんすわいな へ緣ある仲はくどからず
さうな如才は內證の取捌きいとしらし さつと開いて讀下し 唄へヤ、この狀の つい氣も解けて盃の互の心汲み交はす
いとかせかけて 合へ色に高音の三味線 表を見れば扨はそなたは敵討ちか 松へ 二世の契りぞ羨まし〳〵。

七小町容彩四季 七

雨乞小町

〔解題〕 通稱「女太夫」又は「七小町」。文化十三年九月廿四日から中村座の「源平布引瀧」の第二番目大切として中村松江の上阪名殘の所作事として出した七小町やつしの七變化所作事、傾城・田舍娘・女太夫・老女・鳥さし・女達・石橋であつて、清元では雨乞小町(女太夫)と關寺小町(老女)、他は長唄である。

この雨乞小町即ち女太夫は福森喜宇助の作。出演者は前の「權八」と同じ連名。女太夫が雨の晴間に四つ竹打の振をするといふ碎けたもの。

江戸ガカノへことわりや 合 賤しき身にも絲竹の 合 道嬉しくもその名さへ へ女太夫 荒砂を持つて來て紙へ包んで袂へ入れと夕立の晴れ間いとうて取出す 合 身は三味線のかはゆらしへ月待ち日待ちだいまちやその町々を門附も 合 味な世渡り四つ竹にへ東上總の夷隅の郡村の小名をば金置村よへ疋田源兵衛が總領息子相撲取にて白藤源太その白藤にあらねども一人相撲を色に持ちやほんに口說の土俵際突出されうと氣がぢれて百手どころか新手を出して取組んだ日は何のそのへ酒と肴で六百出しや氣儘よ我儘のかは世の中を思へば三日忘れぬ身は氣散じぢやないかいな色の調子も合の手に 二上リへわしにさ逢ひたくば 晴れて雲

上州前橋敷島河原の小砂利まじりの 間〳〵に入りにけり。てわしがお寢間の三尺小窓の小障子の間から姿かくしてばら〳〵と儘やれやんれ面白や ナホ ルへかゝる契りもありもせめさりとては又雨



雨乞小町正本

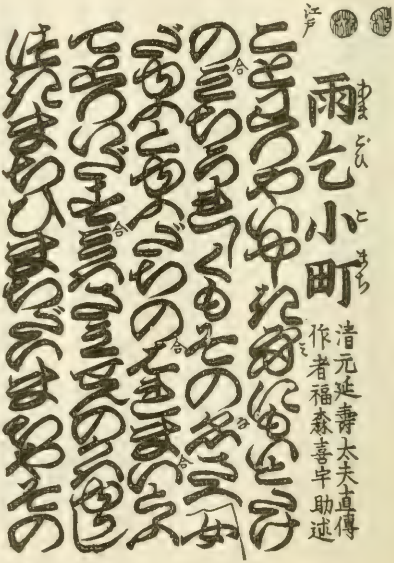
深山櫻及兼樹振

保名　八

〔解題〕文政元年三月七日から都座の大切所作事として三世尾上菊五郎が四季七變化の所作事として出した中の春の部の小袖物狂ひである。尙七變化の內容を示せば次の通りである。

春の部…傾城のろくろ首……長唄
　　　　座頭の木琴……長唄
　　　　小袖物狂ひ……清元
夏の部…蝦蟇仙人……長唄
秋の部…玉藻の前……常磐津
　　　　蔦の者……長唄
冬の部…振袖の骸骨……長唄

この中では清元の小袖物狂ひが最も有名で、今日でも獨立の所作事として舞臺生命を有して居る。「蘆屋道滿大內鑑」の小袖物狂ひの一齣を改作したもの。作者は篠田金治、作曲者は後に初代の瀬兵衞となつた清澤萬吉。出演者の連名は挿繪（淨瑠璃名作集上解題六七頁參照）に示した通り。非常に好評で、世に清元の出世淨瑠璃と稱へられる。



の見返しと巻頭

逢へ戀よ戀われ中空になすな戀へ戀風が來ては袂にかいもつれ思ふ中をば吹き分くる花に嵐の狂ひてし合心そゞろにいづくとも合道行く人に言問へど合岩堰く水と我が胸と碎けて落つる泪にはかたしく袖の片思ひ合へ姿もいつか亂れ髪誰が取上げて言ふ事も茶種の畑に狂ふ蝶合翼交はして羨まし合野邊の陽炎春草を合素袍袴に踏みしだき狂ひ〳〵て來りける　詞へ何ぢや戀人がそこへ往たとはどれ〳〵エヽまた嘘言ふか

わつけもない事言ふわいやい　へアレあれを今宮のへ來山翁が筆ずさみ土人形の色始め高根の花や折ることも泣いた顔せず腹立てず　合へ悋氣もせねば大人しうアラうつゝなの　合妹脊仲　合へ主は忘れて合ござんせう合しかも去年の櫻時植ゑて初日の初會から合逢うての後は一日も便り聞かねば氣も濟まずうつら〳〵と夜を明かし合晝寢ぬ程に思ひつめ合たまに逢ふ夜の嬉しさに合酒事やめて語る夜はいつよりもツイ明けや

すく去なら去なさぬ口舌さへ　合へ月夜鳥に欺されていつそ流して居續けは日の出る迄もそれなりにへ寢ようとすれど寢られねば寢ぬを恨みの旅の空二上りへ夜さの泊りはどこが泊りぞ草を敷寢の肘枕〳〵一人明かすぞ悲しけれ〳〵合葉越しの〳〵幕の内　合昔戀しき面影や移り香やその面影に露ばかり　ナホルへ似た人あらば教へてと振りの小袖を身に添へて狂ひ亂れて伏沈む。

道行思案餘　九

〔解題〕　通稱「お半長右衞門」又は「お半」。文政二年正月十五日から中村座興行の「曾我綉妹脊組帶」の大切淨瑠璃として出したもの。作者は二世櫻田治助。「桂川連理柵」の道行その他先行の諸作を本として、江戸前に仕立直してある。長右衞門三世坂東三津五郎、お半岩井松之助、丁稚頭徳市關三十郎。淸元連中は初代延壽太

夫・榮壽太夫・政太夫、三絃清澤萬吉・名見崎德治。この時巳三治郎が榮壽太夫と改名したのであつて、時に十八歳。この人が後に清元の名人太兵衛となるのである。

なほお半長右衛門については義太夫節の部「桂川連理柵」御參照を乞ふ。

へ浮名を流す川水も合桂にあらぬ綾瀬川合月も朧に春の夜の夢ばかりなる手枕を結ぶ帯屋の長右衛門 三津五郎 松之助 出 へお半を背に逢ふ瀬さへ今身につらき仇事のかへらぬ道と一筋になんのうれしの森過ぎて名残はつきぬ中の郷吾妻橋を跡になしへ背を下せばさすがにも姿繕ふ振袖に風の含みてほら〳〵と合空に雨持つ鐘の音も九つこゝに北東隅川に手ぐりの合火影さへ明日待たぬ身の何かせん長命寺とも頼まれぬ世は牛島の憂き世ぞとはかなき事をかこつにぞ 合へほんに思へば昨日今日まだ三味線の手ほどきも合お前にならひそれからがお師匠さんへいくた流琴や豊後の文句にもへみんな女子は一生に男といふは只一人合二人と肌をふれるのはどんな本にもとし〳〵の草雙紙にも無い事をよう見て聞いて合いたづらなへ顔にも咲きしはつ花はすぎたの梅の合かもしらぬ 合へその江の島へゆきのした合あいのいしべやで 合ちやうどマアかたいお前にあひ宿も辨天さんの引合せ合始めて怖い恥かしいあとで嬉しい枕してそれから旅の夢見草 二上りへさても見事なおつゞら馬よ合蒲團かさねて合あとづけ付けて合お江戸のぼりのナアエ三度笠ナアエ合島さんこんさん中のりさん合やてかんせ合はふらんせ合知らぬ伊勢路を道もせもさめて内外の義理づめに 三津五郎へコレお半道々もいふとほり此長右衛門は義理に義理所詮死なねばならぬ身の上そなたはまだ老先のあるからだ殊に又親御のうらみおきぬが思惑そなたは兎に角ながらへて我がなき跡を弔うてたもるが此上のこと思ひ直してこゝから早う歸つてくれ聞きわけてたもコレお半 クドキへお半はなんとないじやくり袖に泪をもちそへて顔打眺め長右衛門さんなんぼわたしが年がゆかぬと思うてからにお前ばかりが死なしやんしてこちやゝ産んでな

がらへて居られうかいなコレ申しそりや合可愛のぢやない憎いのぢやへちひさい時から子心に長右衞門さんが贔屓ぢやといへばぢらしてわるういふ合そんなお人にや物いはぬ笑はれる程いとしいの念が通つて一度でも合緣を結ぶの神さんが合粗相であろとかまやせぬ合一緒に殺して下さんせこれいなこれと取付いて膝に涙の濡れまさる 三津五郎 へ今死ぬる身ながらもせめてはこの癪をさめてやり度いものぢやがなへかくとは餘所にしらひげの塒へかへる日なし烏 三十郎出 手ひきもいらず女房も持たぬ亭主の氣散じは合屋根代出せば家主へへ上手もつかはず夜番せずへ宵からではう大道を合按摩針さへ合當世は合笛でそれぞと知れかしの杖に目がありや暗の夜にてつぱう見世もそゝり節合

へかはい男の聲はせで蕎麥や合按摩の聲ばかりこいつはちつとけんぴきをいふ聲くれて庵崎の土手をぼつくり〱たどり來る 三津へア、もし〱わしは通りの者ぢやが連れの女が癪が起つて難儀しますどうぞ療治をしてやつて下されぬか 三十郎へム、何ぢやこの土手で今時分療治してくれいとはハ、アオ、さうぢや 紫太夫へいとしかはいのかず〱が積ると書いてしやくとやら合字はよめねども大方は違ひ馴染の女郎か合娘か合下女か女房か但しやおんばか何にせい心中して死ぬ病人と見てはとらねど聞きとつた薗八節でやらうなら 合へ手に手を烏の一聲は月が鳴いたかほととぎす合冥途の烏とかいふげなが合これまでついしか極樂で二人中よう世帶して合暮し候べく候と言傳て一つ狀一

本何處へも來たる音沙汰はない〱どんな譯にせい短氣は損氣ぢやコレナあるまいか 三十郎へとはいふものゝ若しやお前方は狐ぢやないかその手ではまいるまいへつまゝれぬ中どりやこゝを眉毛ぬらして歸りましよ 二上りへほんにうつくしみたらいつつじあれはサこれはサよるはひらいてひるしぼむ合ヨサ〱やつとこせあれはサこれはサよい〱へ私が思ひはしほやの煙あれはサこれはサ仇なうき名が立つわいなイヨサノ〱やつとこせあれサこれサよい〱面白やカヽリへよいまに早くと歌市は懷おさへて急ぎ行くへ見つけられじと手をとつて亂るゝ雨の絲柳おびのあやせの川なみに二人が名をや立ちぬらん。

御名殘押繪交張　一〇

〔解題〕 通稱「鳥羽繪」。文政二年九月九日から三世中村歌右衛門が歸阪の名殘の所作事として中村座で演じた九變化の所作事。その內容は天人(長唄)狂亂(長唄)黑ん坊(常磐津)知盛(竹本)女伊達(長唄)鳥羽繪(清元)巫子・關羽・傾城・玉藻の前(以上四曲長唄)。清元の出し物は鳥羽繪だけであるが、輕快飄逸味に富んだ作である。作者は櫻田治助。出演の清元は初代延壽太夫・榮壽太夫・宮路太夫・三絃清澤萬吉・名見崎東三郎。

へしめたぞしめたオットどつこい合逃してなろか合おのれ齧らば合三味は合齧らいで合戸棚飯つぎ揚句の果てにや可愛い女房の鼻柱それで憎さが枡落しへハヽハックサメとこ萬歳見をれお蔭で風邪ひいた合外に引く物は何であろ合ちん〵合跛に合船合鐵棒合酒が跡ひく女郎がお茶引く。夜鷹が眉ひく畑ぢや大根うつつい姉えの袖褄ひく手合あまたであろぞいなはずみに南無三畜生め合摺古木とる間にちよいと逃げためう〵〵〵鼠に起きて月見かなへア、ラ怪し怪しゝの十六文で九官鳥は見たれども摺古木に羽根が生えて鳥羽繪はほんに我ながら見るは始めておや〵〵合いでや捕へて友九にと足を伸ばしつ手を上げつ捕らんとすれば鳥はついと飛んで逃げたへエ、あつたら物をエ合見送る後に逃げたる鼠振向く途端に見付けてうぬと駈寄るをそのまゝ膝に飛付いてへ何故その様に腹立てゝ合私を何とさしつけに合言ふも恥かしそもや又合藁紙屑の巣を離れ合流しの下や膳棚でいたづら習うた時分からふつと心で思ひ染め猫や鼬の目を忍びどうぞ抱かれて鼠とは合カンへ及ばぬ戀の身の願ひ合知らぬお前の木枕をせめて齧つて念晴しそれに聞えぬ胴慾と合山椒の様な目に涙泣いて喰ひ付き喞つにぞ詞へエ、畜生め合へ可愛いお方

の合お聲はせいでへあがるお客の面憎く駕籠へホイ駕籠〱〱かけ聲に旦那　やチウ〱チウ〱ラノちよいと跳ね
や惡洒落かねびらいき過ぎたへ蕎麥屋　は中で空寢入りおつこちたこれには困　返し鳥羽繪の御無理は御尤もと地口で
按摩の聲ばかりへその外おでんに正月　り入りやした　食へそこらでどつこい引　逃げる大鼠跡を慕うて走り行く。
や割竹鐵棒火の用心にあけ烏の四つ手　いて來る頭の黑い溝鼠合打で押さへり

月雪花名殘文臺　二

玉兎月影勝

〔解題〕通稱「玉兎」。文政三年九月九日から三世坂東三津五郎の上阪名殘として中村座で演じた七變化所作事。
內容は次の通り。

浪枕月淺妻……………長唄
玉兎月影勝……………清元
狂亂雪空解……………長唄清元かけ合
猩々雪醉覺……………長唄
女扇花文箱……………富本
戀奴花供侍……………長唄

この所作事は非常に好評で十月廿日迄興行を續けた。
玉兎は二世櫻田治助の作で、作曲者は清澤滿吉。前の鳥羽繪などと同じく、輕妙洒脫な清元の特長を最もよく

發揮した曲の一つである。

この所作事が非常に好評であつた模樣は時の評判記「役者甚好記」によつて明かである。その中の玉兎に關係のある部分を左に抄出して參考とする。

淺妻船の居姿一蝶が畵精あらはれたるが如く(中略)次に日覆より霞下り、破風に大きなる月輪の作り物、火をともしあり、月の中に臼ありて、こゝに秀佳鉢卷襦袢一つにて兎の見えに成り杵を持居るなり、破風よりせり下す中途にて月輪より飛下り、かげかつ團子曲搗にてをかしみの所作事(中略)是迄秀佳丈七化も度々出され、十二月十二支の所作數多の事なれば人も珍しからぬ筈なるを、幾度見ても飽かざる證據は此度九月九日より十月廿日迄永當〳〵との大入……顏見世の境がなくば春迄も入續かんとの評判、すでに棧敷は十餘日も前から皆つけ込、つんぼ棧敷も引舟も毛氈並ぶ歷々の御見物樣、かやうな繁昌昔より覺なく中々詞に盡し難し。

へ實に樂天が唐詩に連らねし秋の名に　さてへ是はさて　合へどつこいさてなへよ　合かち〳〵　合かち〳〵のお山と云ふ內
し負ふ　合三五夜中新月の　合中に餅つく　いと〳〵よいと〳〵よいとなとな　へ是　にアッ、合アッ、合そこで燒傷のお藥
玉兎餅ぢやござらぬ望月の月の影勝ニ　はさのよい　へ是はさて置き　ナホルへ昔々　と蕃椒なんぞでみしらして今度は猪牙
上りへ飛び團子　へやれもさうやれやれ　やつがれが手柄をゆうべの添乳にもば　船合點だ　合心得狸に土の船　合面舵取舵
さてな合へ臼と合杵とは合女夫でござる　ば喰たぢゝやがその敵　合へ打つやぽん　合ぎつちらこ　合へ浮いた波とよ合山谷
合へやれかさ〳〵　合へ夜がな　合夜ひと夜　ぽらぽんと　合腹鼓　合狸の近所へ柴刈に　の小船　合こがれ〳〵て通はんせへこい
おゝやれ　合へとゝんが上から月夜にそ　合きやつめもせたら大束を　合ゑつちり　つは面白おれ樣と洒落る下よりぶく
こだぞ　合へヤレこりやよいこの團子が　〳〵　合ゑぢかりました合シヤござんなれ　〳〵〳〵なう〳〵これはも泣つ面　合よ
出來たぞおゝやれ　へやれさて　へあれは　こゝこそと　合跡から火打でかつちかち　い氣味しやんと敵討それで市が榮えた

手柄話に乘りがきて 一上り へお月様さへ にサアお若いあの子を生んで へヤト來 な 合品物め 合しどもなや ナホル風に千嫁入よなさる へヤトきなさろせとこせ なさろせとこせい〳〵 へ誰に抱かせま 種の花兎風情ありける月見かな。い〳〵 へ年はおいくつ十三七つ 合ほん せうぞおまんに抱かしよ 合見ても甘そ

詠梅松清元　二

〔解題〕 通稱「茶筅賣」。文政三年十一月河原崎座顏見世狂言「伊勢平氏額英幣」の第一番目四立目に出したもの。作者松井由輔、作曲者清元齋兵衛（清澤滿吉この時清元齋兵衛と改名）。淨瑠璃所作事の上卷が常磐津の「操常磐島臺」で下卷が本曲である。茶筅賣稗了實は崇德院御愛樹松の精（關三十郎）小原女お糸實は崇德院の愛樹梅の精（尾上菊五郎）とが崇德院の御胤を失はんとする淸盛の捕手關原藤太（淺尾友藏）を惱まして白峯の內侍を救ふといふのが山であるが、前半の茶筅賣と小原女との所作が見せ場である。

へひとり思ひを枕に語りせめて賴みの 生にて緣は田舍の畦傳ひ 菊五郎三十郎出 へ釋迦 箪見せよ。鉢叩き へエ、なんぢやいな夢さへも晦の衣に置く霜の 菊 かの唐土 の涅槃も目を覺ます。水の出ばなの茶 置かしやんせ今は其身でありながら嗜の劉君が愛せし名をも黒牡丹 合黒木お の花香 合二十の人の喜撰までしやが父 ましやんせ坊さんと戀にはひぞろ二つろして歸り道。 報謝に乘せて茶筅賣。 に似た時鳥待つ身になれば曉までも廻 文字重ね扇に。三つ重ね 合衣紋にそよその曳く綱も糸に寄る。佛の御手も他 り〳〵て長嘯が墓も古へ其の古き。瓢 と凩や鬮のこなたに音づれて 菊 へ姿は

名に負ふ逢坂山新たに建てしこのお關所女子は行く事ならぬ故これからお前は徒歩路ひらうて下さんせ三十へ成程愚僧は雲水の身の上是より東へ赴けば又縁あらば逢ひませう　菊へそんならお前は三十へ不思議な縁の道づれも佛も元は凡夫なり　三下りへそも我は色に拗ねたる世捨人月のみひとり昔顏　合これも涙の種瓢酒はなけれど瓢簞を見るに付けても凡夫心　ナホルへ思ふ絆に結んでは御師の涅槃の長枕これが別れの辻占とへ行かんとするを押隔て　クドキへコレ別るるとは氣にかゝる七夕さんの雨の夜は身につまされておいとしうござる戀といふ字にうつり香乘せて　合牛の脊にまで憂きやつれへ逢ふ夜短し逢はぬ夜長し來ぬ夜困じて苧環を手繰りくる〳〵車の轍仲よい同士と唄はるゝそれが私が願ひぞや三十へコリヤ小原殿は

藝子おやまに仕込まれたかとてもの事に梅幸がこしらへた流行唄今專ら藝子が彈くさうだが何とそれを聞かしてはくれぬか　菊へその唄のことならたしか斯うであつたわいなアへそなた思へば照る日も曇る鑿や才槌鉋までそなたの顏に見ゆるとはどうした因果な事ぢやいなア　合へそれさにうつ惚れ申して夜も晝も物が手にやつかぬ野良で見初めて背戸口で口說くにそれ程憎いのかさりとはつれない男づらエ、面憎や三十へコリヤ面白い今の振事これからわしが相手になつて關東座頭の話やら　菊へ私はまた陸奥瞽女のその素振兩人へさらば是より話さうかへ地體我等は關東べいの座頭瞽女は奥州金華山のほとりへひとり行くとは胴慾な見られぬ箕面の辨天へこもる地びたのつちのとの巳待の晩の嬉しさを忘れてかいなと胸倉を見

えねば脊筋と取違へ言ひたい事も痰の灸紫竹の竹の心なら割つて見せとも見えぬ故戀でなうてもいつも鬪つい抱付くも背中同士灸を擦りむくばかりなりへ隣藪からによき〳〵出たは去年の竹の子のこの眞竹オ、樋竹に見て置いたヤレ見て置いたコレこちの樋竹にヤレ見て置いたしよんがいなア　合踊ろと儘よ跳ねきろと儘よいとし殿御とこちや寝たが　合よいわいなア　二上りへ竹の丸木橋や危ないけんども君となら渡ろえまだ〳〵〳〵まだかいなおしやらく娘がじよなめいて惚れたが無理ならしよ事がねえ。へ松の葉越しに一筆啓上候べく候書いたる文は元來た〳〵〳〵〳〵來たわいな道樂息子があちよなさる內の親父もしよ事がねえしどもなやかゝる所へ關原が內侍を捕へ走り出で友高へ新院の胤を宿せし白峯の內侍今こ

の處にて首ぶち放す覺悟なせ　へ刀振上　二人が姿忽ち愛樹の松と梅　へ扨てこそ　から御懷胎の內侍樣現身に附添ひ守る
げ立向ひ既に斬うよと見る所に五體す　二人がこの有樣そも先づ汝は何奴だエ　なり　へ邪見の相國清盛が院のお胤を失
くんでたぢ〳〵〳〵ためらふ隙に何處　エ　へなう我々が身の上こそそも人間の　はんずる　合　報いの程を思ひ知れと有合
より怪しの忍び現はれ出で支ゆる關原　業受けて見えし姿の二人の者崇德新院　ふ枝を苛責の笞打つて掛りし業通自在
はね退け突退け何か樣子は白峯の內侍　の御愛樹にて舊梅古松の精魂なり　へ扨　凡人ならぬ精靈のひらり〳〵と飛交ふ
を小脇にひん抱へ逸足出して駈り行く　てこそなア　三十　へ奢る平家の其爲に新院　姿北山颪吹送る　へ八百八町御贔屓町木
へ不思議や爰に今迄もあり〳〵見えし　は讃岐へ遠流　菊　へ今は世捨ての二木な　毎に花の顏見世と深き惠みぞ有難き。

美しく人に
見え候
けふの雪

色山解深川　一三

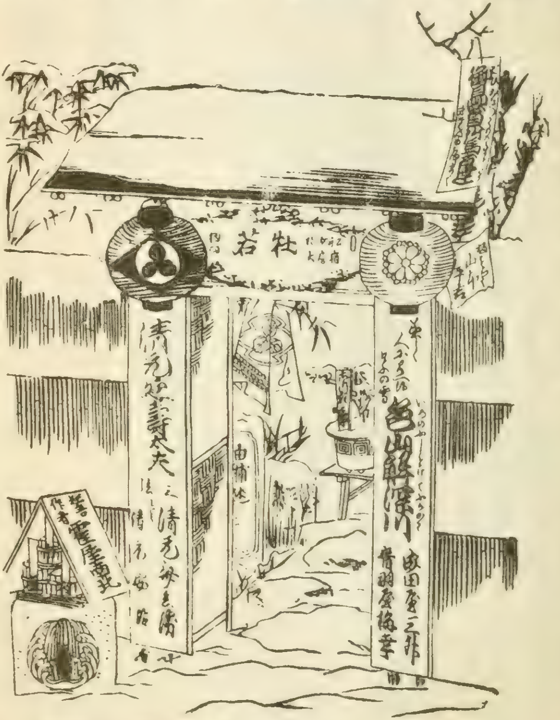
〔解題〕　通稱「待人」。文政五年十一月市村座顏見世狂言「御贔屓竹馬友達」の第二番目序幕に出したもの。作者松井由輔、作曲者清元齋兵衞。船宿女房お大岩井半四郎、板もと山本平吉市川鯉三郎、船頭喜之助尾上菊五郎筏乘橫竪の角藏市川團十郎。二年目で巡業先から江戸に歸つて市村座へ出勤した五世半四郎(杜若)の御目見え淨るりである。半四郎の住居は深川の永木橫町にあつたので、それを利かせた文句などを綴り込んで、七世團十郎と五世菊五郎とがつき合ひに出るやうな仕組になつてゐる。

へ待人は　合　床しき色の杜若花　合　見るに　心も牡丹草濡れて思ひに雪の夜も　合　君　ゆゑならば梅に啼く鳥折を惠木にもや

ひ舟色で丸めし庭の雪（半四郎・彌□郎出）戯れをの　筆すさみ　合戀知る身とて二道を（菊五郎・國十郎出）含みし花ぞ美し　へ今日お目見得の口上

こがいたづらも合寒さ厭はぬ道もせや合妹脊にならぶ二軒茶屋合へそも〳〵富が岡と申せしは合へ東に當りて矢頃よき合戀には粋を通し矢と南は海の底深く合思ひは千尋痴話口説　合　北には峨々たる富士聳え合西には川口お客を乘せて合送り迎ひの船の内　合へ撞いてくりやるな合八幡鐘よ可愛男と合いちやつきは合うまい仲町ぢや合ないかいなへ流石踊の門弟子とて道草ながら振りもよく合つれは船宿大和屋の内儀御存じ評判の今度東へ返り咲き浮きに浮かれて來りけりへハイお目出度うござりまするも淨瑠璃で挨拶するぞ道理なり　へ夏來れば素顔や見せん富士筑波歌よむ人の

へ心の合うた　合友千鳥　合いづれ兄と　もお馴染だけにお定まり　合言はぬは言も弟とも合色添ふ梅の雪分けて笑を　ふにます花の一座も色の岩井月その顔



正本表紙

見世ぞ賑はしき花の顔見せぞにぎはしき。

大和い手向五字　一四

五變化の內　子守

〔解題〕文政六年三月七日から森田座の大切として出した岩井紫若の五節句の所作事。その內容は、

子日小松曳(官女)…………長唄
上巳雛櫻狩(女奴)…………常磐津
端午粧人形(牛若)…………大薩摩
七夕星祭祀(子守)…………清元
重陽菊花傘(振袖娘)…………長唄

「子守」の作者は增山金八、作曲者は清元齋兵衞。初代延壽太夫・榮壽太夫・宮路太夫、三絃齋兵衞。輕妙な清元一流の特色がよく出て居る曲。

へオヤツかな何としよえ。アイタヽヽ　な物やろな　合へお月さまいくつ十三七　ばかりは諦められぬぢやによつて讃岐
合膝頭をすり剝いた憎い鳶づら油揚さ　つ合まだ年やいかぬ　合山出　ナガスしが　の金比羅さんへ願でもかけませうかへ
らうたゝヽ〳〵泣くなよい子ぢやこん　合へわたしやどうでもからでもあの人　仇口の花さへ咲かぬ生娘ゆ。枝姿振も

色ぶつきらぼう 合鼻緒切らして片々提げてがつくりそつくりみどり子おろしてこれからは 合へ並べ立てたる人形店サア／＼／＼安賣ぢや何でもかでも選取りぢや 合縁は忝く入れなゐは 合花の。姿の 合あ オトス ね様を 合中ギンへ口說き文何は淨瑠璃で 合聞き覺えた 色を其儘に 中口說きへほんに思へば跡の月。宵庚申の日待の夜 合甚句踊や小唄節。數ある中にこなさんの 中ギンお江戸で云はゞ勇み肌。好いた風ぢやと背戸家から。見かぎり申してなま中に 合氣もあり松の藍 オトス 絞り 合色に鳴海と打明けて 合晩げ忍んで。來召さるならば イロコレナ嬉しかろではないかいな 合へなぞと浮かれて座頭の坊 合へ冴えた月夜にやみ市ではないかいなア 合やみ市なりやこそ眞黒な 合炭屋のお客と行くわいな 合座敷で何を彈かんすえ盆の踊になまめかし 合へお前越後かわたしも越後お國訛が出てならぬ へ新潟出る時や涙で出たが 合今は新潟の。夢も見ぬ 合オオイ船頭さん寄てかんせの戻りに鯨でも積んでごんせの。合へ踊。をどらば品よく踊れ 合品のよいのを嫁に取ろ 合へ松前殿樣持ち物は烏賊蛸海鼠にちんの魚 合へ寄らしやんせ面白や ナホルへ又も鳶めとろゝとは太い奴と豆腐屋へ子を引きかたげて 三重急ぎ行く。

夏もみぢ御あつらへに染ては

色彩間苅豆

一五

〔解題〕 通稱「かさね」。文政六年六月森田座興行の「法懸松成田利劍」の第二番目序幕木下川堤累殺しの場に出した淨瑠璃である。この芝居は第一番目に日蓮記、第二番目に祐念記を對立させ、この二番目の祐念記に累與右衛門を仕組んで、極めて大膽な妖怪劇に仕立てたもの、作者は四世鶴屋南北。南北は累與右衛門の怪談を生涯に五度も書いたといふが、その中ではこの作が最も名高い。

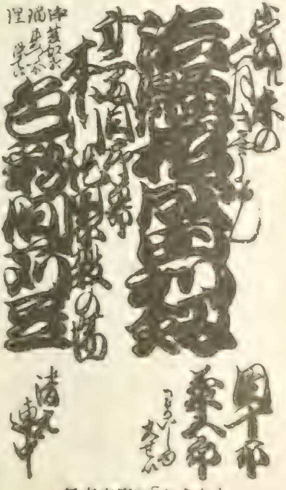
但し本曲の詞章は正本によれば松井幸三が執筆してゐる。役者は與右衛門の七世團十郎、累の三世菊五郎で、清元連中は初代延壽太夫・榮壽太夫・政太夫、三絃清元齋兵衛、同元治。

本曲は清元の名曲の一として、芝居としては舞臺に中絶した後も語り傳へられてゐたゞ處が大正九年十二月歌舞伎座で梅幸・羽左衛門・延壽太夫等によつて復活され、その後大正十四年七月には湊美清太郎君等の研究と盡力とによつて、私の所藏の臺本が緣となつて、市村座で原作通りに上演を見るに至つた。

へ思ひをも心も人に染めばこそ戀とゆふ顔夏草の 合消ゆる間近き末の露もとの雫や世の中の遅れ先立つ二道を 團十郎菊五郎唄 へ同じ思ひに跡先の別ぢ しどけも夏もみお楢の雨や 合覺めやらぬ 合夢の浮世と行きなやむ男に丁度青日傘骨になるとも何のその跡を逢ふ瀬の女氣に 合怖い道さへ 合やうやうと 合互に忍ぶ野邊の草 合葉末の露か 合螢火も へもし追手かと へ身繕ひ心せき屋も跡になし木下川堤に着きにけり 唄へこれ累思ひがけない此所へ其方はどうして來やつたぞ。唄へどうしてとは胴慾な一緒に

死なうと言ひ交したをお前一人覺悟の故 合へ勿體ない事ながら長年の初秋盂蘭盆に新盆様のお十念その時ふつと 合 昔置一緒に殺して下さんせえな 唄へ切なる心は尤もなれどそなたの義父は頼りの撫子の茶入紛失ゆゑ殿様よりお咎め受けそれさへあるにそなたと死んでは親への不孝思ひ諦めこゝから早う歸つてたも

日說キへ言ふ顔つくづく打守りひよんな 見染めたが 合へほんに結ぶの神ならで緣で此様についし 合からなつた 合仲ぢや 佛の庭の新枕初手から逢の恋ぞと 合心



「かさね」の臺本表紙

で祝ふ菩提心後生大事の合殿御ぢやと合へ奥の勤めの長局役者贔屓の噂にもどこやら風が成田屋を 合へお前によそへて楽しむ心お年忘れに奥御殿打交りたる騒ぎ歌 合へ入黒子〳〵起請誓紙は反古にもなろが合五月六月はまんさら反古にも合なりやせない へ唄ふ辻占今の身に當りて私が恥かしと後言ひさして口籠る 與十郎へハテ是非に及ばぬそれ程までに思ひ詰めたそなたの心可愛や腹の伜まで此儘殺すも世の成行き不便の者の心やなア へ深き心をしら玉の露の命の我ゆゑに 合思へば便なき心やと手を取交し歎きしがせめて義理ある、親達や生みの親へも餘所ながら合今宵限りの暇乞ひ合不幸の罪は幾重にもお許しあれと諸共に川邊に暫し泣き居たる へ不思議や流れに漂ふ髑髏。 助が魂魄錆びつく鎌それと見るより與右衛門



が心に覚えあり〳〵としるしの鎌を引抜けばハツト累が美しき顔も忽ち悪女の相好これも報いか浅ましやと立退く裳裾に取付いて へそれ共様によそ外に深い楽しみあればこそわしを騙して胴慾な 合へもしやにかゝる戀の慾とかく浮世が儘にもならばカンヘ帯のやの字を前垂に針打ちやめておとしばら合へ駒下駄はいて歩いたら戯に〳〵 合嬉しから 合へならぬ先まで思ふのも今更身で身が恥かしい酷いわいのと取付いて變る姿を露知らず色を含みし取成りは哀れ

にも亦いぢらしや。國十郎へ道理々々死ぬると言ふは皆僞り國へ歸參のこの與右衛門足手まとひと思へどもそなたを連れてこれより直ぐに菊五郎へそんなら一緒に國へサアおぢやへいそ〳〵先へ忽ちに邪慳の刄血汐の紅葉龍田の川の瀨と變る男の裾にしがみ付き菊へコリヤわたしを騙してへオヽ殺すのだ仔細と言ふはこれを見よと鏡にうつせばへエヽヤヽヽコリヤマアどうして此のやうに私の顔が變りしはエヽ口惜しい

へコリヤ果因果の道理をよつく聞け汝が爲には實の親菊が夫の助を殺したその報めぐり〳〵て其顔の變り果てたは前世の約束この與右衛門は親の敵これも因果と諦めてへ成佛せよと無二無三打つてかゝれば身をかはしカンへなう情なや怨めしや合身は煩惱の絆にて戀路に迷ひ親々の仇なる人と知らずして悋氣嫉妬の口說ごと我と我が身に惚れ過ぎし心の內の面なや合つらき心は先の世のいかなる恨みか忌はしと合へ口說

いつ泣いつ身を掻きむしり人の報いのあるものか合なきものか思ひ知れやとすつくと立ち合振亂したる黑髮は此世からなる鬼女の有樣合摑みかゝれば與右衛門も鎌取直して合土橋のうへ襟髮つかんで一抉り合情用捨も夏の霜消ゆる姿の八重なでしこ合これや累の名なるべし後に傳へし物語恐しかりける次第なり。

法花姿色同　一六

山歸強桔梗

〔解題〕通稱「山歸り」。文政六年八月一日から、三世三津五郎が七世森田勘彌の五十回忌追善として森田座で演じた五段續きの所作事。その內容は次の通り、

契情籬朝顔（傾城）
福助東藤袴（福助）｝……長唄
松風浦月草（汐汲）
山歸强桔梗（大山道者）…………清元
都見物栞萩（見物左衞門）……清元長唄かけ合

「役者神事競」によれば、件の五役共に仇矢なく大出來なれども、如何せしか一向不入にて骨折甲斐なく殘念〳〵と見えてゐる。度々類似の趣向を繰返したために不當りだつたと見える。

清元の「山歸り」は仕事師が相模大山の石尊樣へ參詣するのを材題としたものである。作者は未詳。初代延壽太夫・榮壽太夫、三絃清元齋兵衞等である。

へ伊勢の御が合玉なしの里ならずして合魂棚かざる我が宿の合跡は野となれ山參り。合ノルへ何のその男は裸百貫の合かけ念佛も向う見ず合夜山で盆をすつぱりと合切拂つたる納め太刀合諸願定宿合子安までおりて五六の蚊帳の內。合へ四六のあまに劣つたる合どぶつに二朱文有難い。合へよい福の神江の島に合喰合ひないとこ合唐人と横にかすつて神奈川の。合へ便りの文に鞍替を尋ねて奇特なべら棒は我が身乍らも合羽根澤屋合のろい腕の刺青へ合まだ引導を渡さずにあつたとこから物言ひを合厭味な奴さどうだらう。新内口說キ合へ四谷で始めて逢うた時合好いたらしいと思うたが因果な緣の絲車。合へめぐり〳〵て大山も石尊樣の合引合はせ。合へ思へばほんに南無奇妙頂禮なむまい中ではオトシないかいな色にや命もやりぱなし合大和人形を合大和屋が庄內節でやつてくりよ合へ親が叱ろが折檻しよがのまゝよナウ是惚れた殿さが捨てらりよか。合へいかさかサツと出す船は合船は。へ稻荷丸船頭衆は合狐ヤツトコセ合汗かいて。合へしよんなぐれ若い時や二度ない。合へその氣でなければ生物喰はれぬ。合へしよんなぐれ恐しいでは合あるまいか。合へあす朝顔のかけながしそこが江戸つ子紫と勇みは水によるならん〳〵。

月花茲友鳥　一七

〔解題〕 通稱「山姥」。文政六年十一月九日から市村座興行の「大和大和花山樵」に出した淨瑠璃所作事。山姥坂東三津五郎、怪童丸岩井半四郎、山がつ實は三田仕市川團十郎。淸元連中は、初代延壽太夫・榮壽太夫・政太夫、三絃齋兵衞・德兵衞。

これより前に出た常磐津の「古山姥」や富本の「母育雪間鶯」などを元として作つたもの。作者は正本には淸元家元の號たる紫雲庵述とあるが、實際は座附作者の手に成つたものであらう。

へ懸河合渺々として巖峨々たり山また山の大合名題新に花の山賤は團十郎出へ曲げたる肱の高枕煙草の煙合えん／＼と雲を吹くなる中空に團へア、ラ不思議や今思はずもまどろむ內空にあり／＼赤色の雲の有樣目前不思議は此。山中に人こそ隱れ住むといふ知らせなるか何にもせよ稀代な事を見るものぢやなアそれはさうと賴光公の仰せあつたは此の山陰の嫁娶と小倅めどれ訪れて見べいかへ立寄る軒の柴の戶にの錦を織姬の五百機ならぬ絲車廻る浮世を捨てし身は櫛せぬ髮の合おのづから合鬼とや人の見るやらん團へお袋この頃は逢ひませぬノ三津五郎へオ、誰かと思へば斧藏殿團へ時に小倅はどうしました三津へさつきに迄いたづらして居ましたが大方また猪猿を相手に相撲がな取つて居ませうわいの團へそりやマア危ない跡先見ずの頑是なし呼ばつし

へ蔦やい／＼三津へほんに怪我でもせねばよいがへいたづらな子には目のなき親心木の間がくれにちら／＼と赤いはそれか白膠木の紅葉合エ、合そでもないもしや谷間へ合石斛捕りか入らぬものちやに迂らば何とへしやうどない子と言ふ內にそれと見付けて母は立寄り怪童丸やアイ／＼手を拍ち叩き招くにぞへ神樂月とて合片山里も笛や太鼓で面白や合足の冷たに草履買うてたもれ合

子を取ろ子取ろどの子が目づき 合跡の子が目づき 合かごめ〳〵籠の中の鳥はいつ〳〵出やる夜明けの晩につる〳〵〳〵つつぱいつた木の間笹原くゞり 合〳〵 合くゞつてひよいと來たみどり子 牛四郎〽コレ母さんおりやこんな花を折つて來たよ 〽花打ちせうと振立てて喚く盛りぞ愛らしき 岡〽どれマアー服やらかすべいか 牛〽母さん何ぞくだされ 三津〽オ丶遣りませう〳〵と言ひさま傍の風車見せれば怪童手に取つて〽こんなよい物誰にやろかにやろいつちいとしいほんそ子に 〽鈴やつぼ〳〵でん〳〵太鼓廻れや廻れ風車くるり〳〵る〳〵くる〳〵と世をうつ蟬のから衣 合千聲萬聲の砧に合はせ 合鼓の拍子で打つや 岡〽コレ〳〵小僧この鉞を馬にして 三津〽オ丶コリヤよからうサア〳〵怪童お馬が參る 牛〽ハイ〳〵〳〵〽月毛にあらぬ斧の駒取るや手綱もりゝんしげに 〽先退け〳〵先退けろ 〽お月樣いくつ 〽十三七つ 〽お供はいくつ 〽八十八つ 〽ほんにそりや若いな 〽山家踊は何と言た 二上り〽おんらが在所はナア奥山の斧打ちの 合でんぐり〳〵栗の木の 合木の根を枕にござれ抱いて轉び寢こな小女郎が戀する山家のしなもので帶解いてござれ抱いて轉び寢 牛〽母さま乳飮まう 三津〽又かいなうそれよりは山めぐりして遊ばす程に機嫌直して 岡〽そんならお袋山廻りの話を爰で聞くべいか 〽よし足曳きの山めぐり四季の眺めも面白や 合梅が笑へば柳が招く風のまに〳〵早蕨の手を引添へて彌生山つくらふ花の仇櫻 合〽桃は氣儘に山吹も見果てぬ内に 合〽春過ぎてはや卯の花と花がつみ 〽そして 合あやめ菖蒲や杜若ほつそりと時鳥アレ夕立に濡れ忍涼風が 合え 合〽雁が屆けし玉章は 合小萩の袂 合苅萱に返事紫苑も朝顏の 〽遲れ咲きなる恨みわび露にも濡れてしつぽりと伏猪の床の菊がさね 合ヨイ〳〵〳〵〳〵〳〵ヨイヤサ 〽よいやさえ行く初時雨松も杖つく老の坂 二上り〽おらも嫁入つてナア 合來た時やほんにサア 合爺樣上下わしや丸綿で顏に茜も恥かしかつた盃今は朝茶に念佛拜んで 合おありがた衣角かくし 合女夫で參るお朝路や我は子故に室咲の花を尋ねて山めぐり 岡〽如何さま親といふもの有難いものだ併し女の身にて此の山中へ引籠り仔細ぞあらん我こそは源家の長臣三田の仕といふ者願ひに依つて力となつて得させん樣子は何と 三津〽そんならあなたが三田の仕樣とやこの上は何をか隱し申さん我々こそは坂田の藏人時行が妻子の者でござります 岡〽さて

こそなア三重へ願ひは夫時行殿過ぎ去る折から胎内に宿せし一子武士に育て一天下に名を上げさせよとの遺言この足柄の山神に祈誓をかけはや七年の歳月を送るある夜の夢の内神のお告に成長なしたこの怪童 詞へホヽ心驚き入つたる物語母が丹誠山神の加護勇力さぞかし思はるゝ怪童此場で某とコリヤ力を試して見るか 三重へコレ／＼怪童負けまいぞ 詞へサア来い怪童 中へ合點だへ詞も不思議の怪童丸合こなたはあしらふ勇力士合怪童いらつて片方なる合松を根こぎに引抜いてふんぢかつたる有様は人も恐るゝばかりなり 詞へ其松の根こぎ面白いサア打つて来い 中へ合點だへ勝負々々と打掛かるを透かさぬ強氣の力瘤合幹より腕の節くれてしつかと摑めばめり／＼／＼へえいや／＼と捻ぢ切つて合左右へ分れて立つたりしは目ざましかりける次第なり 詞へすゝ、力の程は試し見た今より頼光公の家臣となさん 三重へ何おきて母が悦びこの上なし 詞へ然らば今より父が其名を坂田の公時と名乗らせん 中へそんならおれは侍になるのか 三重へオヽ嬉しかろ／＼さりながら今別るれば母に逢ふ事はならぬぞや怪童こゝへおぢやへ夫の形見と見るにつけそなたの大事さ大切さ今日別るれば今宵より母一人寝の閨の内合さぞ面影の懐かしからう 合頼光公へ御奉公勤める隙の明暮れに 三重へ武術を励み奉公せよ必ず／＼人様に へ山姥が子と笑はれな 三重へ今別るゝともこの母がへそなたの影身に附添うて猶行末を守るべし合とは言ふもののこれがマア名残惜しやいとしやと合抱きあげ抱き付き思はずわつと一聲は梢に響き哀れなり へ折柄向うに聞ゆる陣鉦親王の下知を受け猪熊入道馳せ来り怪童やらぬと詰めかくれば 詞へべらぼう坊主め怪童丸はこの仕が頼光公の御家来にしてしまつたわへ討手はきよろりとあんごり怪童とらへて猪熊が首筋つかんでエイ／＼ヤッと引廻せば忽ち體は粉微塵強勇力士かくならん 三重へオヽ、出かした／＼今の働き見るといひ望み足りぬる上からは輪廻を離れん怪童丸名残は盡きじ早やさらば 三重へ暇申して歸る山の へ峰の梢も白妙や 合源氏の武名盡きせなき實さへ花さへ橋の賑はふ櫓ぞ久しけれ栄ふる櫓ぞ目出たけれ。

筐花手向橘　一八

〔解題〕 通稱「吉原雀」。文政七年二月十三日から市村座興行の「茶の湯景清」の大切所作事として出したもの。放鳥賣おしづ岩井紫若、放鳥賣七兵衛市川團十郎。清元連中は初代延壽太夫・榮壽太夫・佐賀太夫、三絃齋兵衛・東三郎。

詞章は長唄の「吉原雀」(明和五年)を取つて、これに筆を加へたに過ぎない。外題名は四代目市村竹之丞の百年忌追善興行として出したので、それに因んでつけたものと思はれる。

〽俳優の昔を今に教へ草 合吉原雀の古事をこゝに移して三つ扇誰も三升とやつし事 ●〽凡そ生けるを放つ事人王四十四代の帝元正天皇の御宇かとよ養老四年の中の秋宇佐八幡の託宣にて諸國に始まる放生會 〽浮寢の鳥にあらねども今も戀しきひとり住小夜の枕に片思ひ可愛心と深みもせで何ぢややら憎らしい 二上り〽其手で深み〽濱千鳥通ひ馴れたる土手八町口八町に乘せられて沖の鴎の二挺立 合三挺立素見ぞめきは椋鳥の群れつゝきつゝき格子先叩く水鶏の口豆鳥に孔雀ぞめきで目白押し店清搔のてんてつとんサッサ押せ〳〵え〽馴れし廓の袖の香に〽見ぬやうで見るやうで客は扇の垣根より初心可愛ゆく前渡り 詞〽サア來たぞ〳〵來たぞよ〽サア來た又來た〽ナニあのあまは差しがあると〽障りぢやないか〽置きやあがれ差しも凄まじいわえ〽又おさはりか〽オイせんしう頼むぜ〽お腰の物合點か〽それ傘そこへ置け〽二階座敷は〽コウ右か左か〽ずつと奥座敷でござります〽新造さまは〽寢ても覺めても忘られぬ〽どうぞ二人がこつそりと〽深山の奥の其奥のぐつとの奥の侘住居〽コウ〳〵町人さん見たやうだよ〽置きやあがれ憎いぞえ〽さうした黄菊の白菊と同じ勤めのその中に ■〽義理と呼ばるゝ 合果敢なさは〽年が明くのを

待兼ねて合やつぱりしたばと呼ばれたく男故なら合樂しみに苦界する身を立てるとて義理一遍の仇付きは結句心のもめる種へ勸めする身も素人も女子に二つはないわいなへよしてくれ／＼よしてくれよへ吉原雀の雛から飼はれてへ山雀小雀の嘴なんぞで手練の初音を

聞いてもくんねえ合うそ鳥やないとの日文の駒鳥合そこらの目白が合見付けて鶺鴒合約束雲雀は晝でもよしきり一寸格子へかほどり出せとは合さりとはひわ鳥合鶯の合魂膽祕密は手管のくだかけへきめうちやうるゐ合籠の鳥。へわけも何やらをかしらしへ文の便りに

ナア今宵ごんすとその啼いつの紋日も主さんの野暮な事ぢやが比翼紋離れぬ仲ではないかいな面白やへ實に花ならば櫻時月なら最中竹むらにその青樓の名にし負ふ新吉原といふ雀今に啼や殘るらん。

復新三組盞　一九

〔解題〕 通稱「傀儡師」。文政七年九月九日から「双蝶々曲輪日記」の第二番目大切に出した坂東三津五郎の所作事で、傾城（長唄）傀儡師（清元）雀踊（長唄）の三つから成立つて居る。外題はそれを利かせたのである。清元の傀儡師は河東節で預つて居た外記の傀儡師の改作であつて、作者は二世櫻田治助。清元連名は、清元延壽齋・榮壽太夫・宮路太夫、三絃齋兵衛・東三郎。外題の角書に「改名の延壽齋が御目見えを祝して」とあるのによれば、この時初代延壽太夫が延壽齋と改名したのを祝した意味で三組盞として出したものと見える。

へ蓬萊の島は目出度い島での合黄金枡にて米はかる紗の／＼袴紗の袴よの合　へ竹田の昔囃し事合誰が今知らん傀儡

師阿波の鳴門を小唄とは晋子が吟の風流や古き合點で其の儘に 合へ小倉の野邊の一もと薄 合いつか穂に出て尾花とならば 合露が妬まん戀草や 合へ戀ぞつもりて淵となる淵ぢやごんせぬ花嫁に合仲人を入れて祝言も四海波風穏かに合下戸の振して口きかず物もよく縫ひ合機も織り 合心よさそなかみさまの三人持ちし子寶の 合總領息子は親に似て合色と名が付きや夜鷹でも瞽女でも 合巫子でも 合市子でも 合可愛い〳〵が落合うて へ女に浮き身やつし事 合へ二番息子は堅藏で 合ぽき〳〵折れる 合刺茨へ三番息子は色白でお寺小姓に 合やり梅の吉三と名をも夕日影 へそれとお七は後ろから 合へ見る目可愛ゆき水仙の初に根締めの嬉しさに戀といふ字の書初めを湯島にかけし筆茅花 合へ八百屋萬の神さんに堅く誓ひし縁結び へ必ずやいのと寄添へば へそこらへひよつくり辨長がいよ〳〵色の實生たち差合ひ繰らずにやつてくりよ 合へやれどらがによらいヤレ〳〵〳〵〳〵おぼくれ へちよんがれちよつと へそこらで へちよつくらちよつと へ聞いてもくんねえ 合へ嘘ぢやござらぬ本郷あたりの 合へ八百屋のお娘が十六さゝげにならない先から 合へお寺の小姓にちよつくらけへつて へそつくりけへつて へ引つくらけへつて へぶつくらけへつて へあの子におぼくれ 合へほうれん草でな へ折をまつ茸ね芋とやらかし 合へ互に初物しめじで忘れず へ二世も山椒もかひ割りなんすな 合へ末は女夫にならゝ漬なんぞと小老たかためを 合松露の印に起請が書いたり小指を胡瓜はさりとは〳〵 合うるさいこんだにホヽ 中へ歸命頂禮 合どら娘合め へ是は扨置き へ既に源氏の御大將御曹子にてましますᕕ頃長者が姫と語らひも小男鹿ならで笛による へ想夫連理の戀すてふをし曉のかごとにも 合へ矢矧の橋は長けれど 合逢うたその夜の短さよ 合ヨイ〳〵ヨイ〳〵よいやさ合へよいやさをのこ へ女と數度の戰ひに合勝鬨あげくに大物の恨みつらみも波の上 へ抑々これは桓武天皇九代の後胤平の知盛幽靈なりアヽラ珍らしや へいかに へどうだえ へ義公 へ娑婆以來 へ馴染の辨州伊勢駿河早々盃サアさし汐吸物椀にて叶ふまじと浮いて散らして拍子取り へすいてうゑいちや〳〵 合すいやい〳〵 合すいやいみんちや 合現なややつちや子供よ振鼓そこで仲よう遊べさ 二上りへ花が見度くばナウそれ〳〵吉野へござれそりや嘘やなんの今頃花があろイエイナやがて咲きます六の花そりや〳〵〳〵ほんかいな木毎にえ見事

にえ景色よし野の花と雪面白や　ナボル籠と替はればぱつと忽ちに雀追はへて
へ眺めあり合ふ箱鼓とり〴〵なれや鳥　慕ひ行く〳〵。

お染久松　道行浮塒鷗（みちゆきうきねのともどり）　二〇

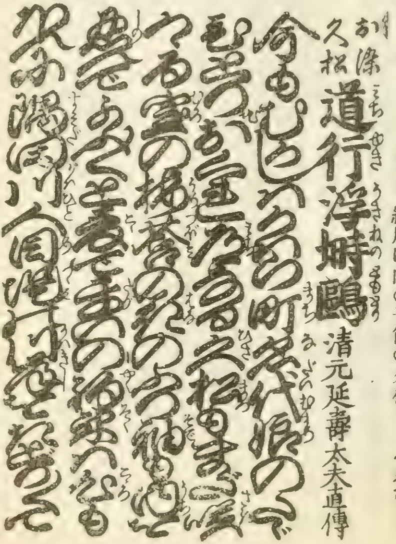
〔解題〕　通稱「お染」。文政八年十一月一日から中村座興行の「東若根元曾我」の第二番目序幕に出したもの。場所を隅田川の橋場附近に取り、お染久松の道行に猿廻しをからませて、例の「開いて鬼門の角屋敷……」の歌祭文以來お定りの文句を利かせての猿廻しの所作の條が眼目である。お染に岩井紫若、久松に岩井粂三郎、猿廻しに市川團十郎。淸元連中は、榮壽太夫。宮路太夫・政太夫、三絃齋兵衞・德兵衞。榮壽太夫の父初代延壽は今年五月廿六日芝居からの歸途四十九歲で横死を遂げたので、この時榮壽は始めてタテとなつたのである、時に二十四歲。

なほお染久松劇の原作や實說については淨瑠璃名作集上、「袂の白しぼり」の解題御參照を乞ふ。



「お染の見返し」

へ今も昔は瓦町名代娘の只一人おくれ道なる久松もまだ咲きかゝる室の梅 合蕾の花の振袖も内を忍んでやう〳〵と愛で互の約束は心もほんに隅田川人目堤の川岸を辿り〳〵て來りける へお染さまやつぱりあなたは山家屋へお歸りなされて下さりませ へわが手枕に梅が香のまだ床馴れぬ 合鶯も子飼の内から御恩を受け大事の〳〵お主樣勿體ながら家來の身 へお染はぢつと顔を見てアレ又あんな 合無理 合いうてそんなそのよな 合言譯を へそれよりわしが嫌ならばひとり未來へ行つて見や男心はさうしたものか へ小さい時からなま中に手習ひ迄も一つ所何やら草紙へ 合書いたのを へそなたに見せて問うたれば戀といふ字といふたのを へ結び初めの殿御ぢやと思うてゐるにその樣な 合へ恨みつらみも何からと袖に縋りて涙ぐむ娘心ぞ可愛らし へ鶗湖が筆を寫し繪に眞似て三枡の彩色も三筋は足らぬ猿曳が 團十郎出二上り へ得意廻りの口祝ひ 合宿の出掛けにや嗅薬とさしで 合ぐつと熱燗 合引つかけたえ 合顔は太夫と 合花もみぢ ナホルへまさる日出度や眞赤いな赤かんべ 合べい〳〵ごまぢやなつけれど 合くるりやくるりのら廻り 合くるりと廻つて 合茶種の蝶よ流れ渡りの隅田堤機嫌上戸の氣も輕く浮かれ拍子に來りける 團へヤア見れば男と女の二人連ハ、ア聞えた扨は此頃噂のあるハテ何であらうとわしが言ふ事を開かつしやりませ へこゝに東の町の名も聞いて鬼門の角屋敷 合瓦町とや油屋の一人娘に 合お染とて 合へ年は二八の細眉に内の子飼の久松と 合へ忍び〳〵



の寢油を親達や夢にも白絞り 合へ二人は莟の花盛り 合しぼり兼ねたる振の袖梅香の露の 合玉の緒の 合末は互の吉丁字 合そこで浮名の種油 合意見まじりに

興じける 唄へ春を取越すお猿万歳日出撥がむつくり〳〵むつくり〳〵しやん 合はせて目は涙 へ今は二人も束の間に
度うこゝで奏でませうか猿若に御万歳とおつ立つて へホヽヤレ〳〵 合まんざ 合彌陀の御國に隅田川 合蓮の臺の新世
とは櫓も栄えてましんます 合青陽新玉らとや〳〵 合まんざらこぢやありや 帯いさ言問はん都鳥 合是と橋場の明け
の年立返る園の春愛敬ありけるぽつとせまい へ百萬年の壽と祝ひに祝うて猿 近き早や長命寺の鐘の音も笑に浮名や
りもの 合へ二八十六で諸人の引つ張る 曳は里ある方へと走り行く 合へハテ知 流すらん〳〵。
合色娘 合お染といつたら立つたりしよ らぬ人とは言ひながら親切なるアノ意
へお猿は目出度や目出度やな へさりと 見さりながらとても死なねばならぬ二
は〳〵 へ斯様申す才蔵なんぞは太鼓の 人が身の上ちつとも早うお染様 へ顔見

歌へすぐ〳〵餘波大津繪 二

大津繪の内 座頭 船頭

〔解題〕 文政九年九月十九日から中村座興行の「傾城反魂香」の大切として出した二代目関三十郎の五變化の所作事で、藤娘(長唄)座頭(長唄清元かけ合)天神(長唄)奴(長唄)船頭(清元)の順序で演じられた。関三歸阪の名残としての大津繪に因んだ出しもの故にこの外題をつけたのである。
座頭は俗に「関三の座頭」又は「ヒョックリの座頭」といはれ、作者は勝井源八である。「船頭」の作者は三枡屋二三治。清元連中は榮壽太夫・政太夫・志喜太夫、三絃斎兵衛・勝八。

へひよつくり／＼／＼ひよつと合へまかり出でたる合やつがれは合色にも酒にもへ目なし鳥どつこいさうは虎の皮合褌の端は取られても合戀の手取の優法師なか／＼その手ぢや參るまいへヤアわるじやれな合へ梅に鶯合へ垣に朝顔合へ按摩合はり合へまんさら退いた合へ仲ぢや合ない合一番相撲で參るべい合へ引拾負投内無雙獅子の洞入合洞返り合エエ畜生めと負腹で追へど合叩けど合へくる／＼くる／＼とア、合ほつとしたエ、まゝよ外にまはるは何であろウタへ佐屋を廻ろか桑名を乘ろか心二見の沖の石乾くひまなき雨の宮やら風の宮上るりへちはや古市手拍子そろへウタへまはる音頭の一節は浄ルリへ花に置く露ウタへ小笹のあられ浄ルリへこぼれやすさよウタへわが涙浄ルリへよいやさアウタへよいやなア詞へアイタ、へエ、合又してもゝつこい杖振上げて打たんとせしがいや／＼／＼これでは行かぬと氣をかへてコイ／＼／＼合へコレわんちやいな合その様にへわしをぢらすが楽みか主の毛色の合よしあしは合へ目には見えねど初雪や合その足跡の梅が香のウタへもれて慕ふも嬉しさの聲で聞知る私ぢやものを合餘りむごいと寄添へば



正本表紙

浄ルリへざれて添寝の仇枕 ウタへぞめきも
通ふ 浄ルリウタへ紙ぎれた合ウタへ月に浮るゝ
拍子どり 浄ルリへ姑嫁ふる嫁下女をふる
下女はな エ釣瓶の繩を振る、ずいと
こきや、いつかな構ふ事はねえ ウタへわ
しが願ひが叶はうならば今の浮世に獨
り寢せずに寢もせまい 浄ルリへずいとこ
きや、いつかな構ふ事はねえ合せまい
浮世ぢやウタへな 浄ルリへいかウタへいいな 浄
ルリへ我等も浮かれ座頭の坊 合ヲヤ〳〵
〳〵又わるじやれめが杖と笛盲さがし
の身は四つ辻ひ跡を慕うて走り行く

船頭

へ船頭殿の顔の色合ぢつと眺めて竹煙

管 合へおかんだちでもあんぺいかへそ
りやこそ雷落ちてぴつしやり膽ひやす
合へ篠をたばねて突くよな雨に濡れて
通ふか 合へ憎からぬ 合その御贔屓の且
那を送り江戸船の へわつちや是でも水
道の水がしみ渡つたる有難さ 合お惠み
受けて 合上り船 へオイ河岸を突きやす
ヨウ へあたりやす へ相手嫌はぬ勇み肌
こはい物なく惡たいをこは〳〵いふも
へコレ雷サア落ちるなら落ちて見ろ今
年で丁度廿歳のお江戸つ子だえ へ蝦夷
松前のお方でも又は東のわつち等でも
心に二つは無いわいな へこれも偏に皆
様のお蔭で小いろも土地がらで へいふ
ものろけて受けさせる此の頃あひるの

女めに合へかゝとぢやないが喰ひこま
れこつちも血道を上げ潮に 合客と 合船
頭の 合二人前 合へとう〳〵小づりを入
れあげてとゞの詰りは 合どう考へて見
ても末は詰らぬごろつきは今日かみな
りの仲間入り 習ひ心にやつてくりよ
二上りへ扨もをかしや雲の上からごろり
合〳〵 合へごろ〳〵〳〵と仰山な雷どん
の色戀は 合へ太鼓腰にくつつけて 合へ虎
の皮の蟬被り光つて見せてぶら〳〵と
合鳴るがしよさいでそりやこそ 合〳〵
落ちて 合戀しやるわけもなや ナホルへこ
いつはとんだ色事と勇みは浪を走るも
の惡い地口も出たらめにいつもの酒屋
へ走り行く。

〔解題〕　通稱「納豆賣」。文政十年三月廿一日から市村座の二番目狂言として演じた月（長唄）雪（淸元）花（長唄）の所作事で、先づ月の卷で仕丁（三津五郎・團十郎）と御所女中（粂三郎）で所作があり、それが引拔きで雪の卷となつて、市歸りの勇み（三津五郎）湯歸りの藝者（粂三郎）納豆賣（團十郎）となり、更に引拔いて花の卷では、茶摘娘（粂三郎）草摺引の五郎（團十郎）朝比奈（三津五郎）となつて所作があるといふ趣向である。

淸元の雪の卷（納豆賣）は二世櫻田治助（左交）の作で、淨瑠璃の連名は二世淸元延壽太夫・富士太夫・政太夫、三絃齋兵衞・德兵衞。

榮壽太夫はこの時二世延壽太夫となつたのである。

ヘ風に隨つてしひて柳花の舞を學ぶとは朝湯でおみがきのうまくどこぞヘお先凍らせてこそ歩み來て　三津ヘコリヤ異國の人の詩も合木毎に花ぞと詠じけくはせにヘイエなんのまそんな厭味はアいつもの納豆尾さんか何といゝ物がる我が敷島の言の葉もいづれ眺めは變斷りやヘエ、いかさま小町の因縁がわ降つたぢやアないか　團十郎ヘ何のよいもりなき面白妙にいざさらば　粂三郎出ヘ雪かつておしや穴かしこ遠慮も納豆に葱の所か私等が爲にはつめたい物さ　粂ヘ見に船と朝まだきうかれ烏に合起され陳皮からしはよしか吉原へまぐれて今モシお前は市歸りの持越酒よい機嫌でて合ねむい所を奇妙とは世辭と勤めに朝の市戻り　三津五郎出ヘ緣起でいつも買物今お歸りかえ　三津ヘサアとんだ奴に引つ湯歸りの足駄も怪我に轉ばずやむきなの道から無理に引つ張られ今日もえてかゝつて昨夕の酒の腹あんばい　團ヘモ藝者で立通す　團十郎出ヘ世すぎ身すぎをめがるなんしと留めるその手をよい氣シその腹直しは商賣物の納豆汁　粂ヘコ合せて見れば合七つ起してナト納豆合さと連を殘して　合きぬ〳〵に　合ヘ雨がレサお前が一所に行くなら用心して内たゝき納豆と合よそはまだ夢の内から降るとて居續けの所を雪に歸るとはしぢやてつきりこれかえ　三津ヘナニおきや賣場先合コリヤもしとんだお早いね扨まりの小口と我ながら思案あり顏鼻のアがれ　粂ヘイヤおきやすまい　モシ　ヘか

うあらうとは始めから合思うて居ても眞實と言はれてのろき合女氣にへほんに雛へ入黒子左に名をば堀の內御顧かけたり合人に人へやつと一緒になつてまだ間もないに市へ行き泊りがけぢやのなん合ぢやのと內ぢやよもやと夜一夜を今か〳〵と合明の鐘へそこらを和らでコレ野暮め 二上り へ上り夜舟と櫂や艪ぢやとて艫を取つたえ合佐川や牧方淀水に車がくる〳〵と伏見へ着くえへオ、イ〳〵親父どの其の金こつちへ貸してくれ與一兵衛仰天しへイエ〳〵金ではござりませんよ娘化粧すりや狐が醜くへ賽の河原の地藏尊へ一つとや一夜明くれば賑やかで〳〵飾り立てたるへ松一木變らぬ色の世界に色なき物はへ私と母さんと絲とつてゐたにとのごとよのへ東上總の夷隅の郡村の古名をばかねへ沖に見ゆるは肥後様のえソレ〳〵船よ紋は九つ九曜の星へ蝶々とま命頂禮騒げ〳〵六人一座で合おしめれや茶の葉がいやなら殿の先へとまら初買根よくどなたも合逢ひ見ての後色



正本繪表繪

んせへされが嵩じて高聲のへオツトロぢや禮拜へチトあちらへと比翼の枕紋說に取りなしてへもしやそれかとこち日物日の約束かけて合へとてもしやれや出て見れば味なぞめきの格子先へ歸るなら大きな事いやれ合名ある藝者達

よ皆總揚に合五町殘らず皆見世引かせ大門打たせ。合遣手末社に總花ざく／＼合黃金の雪が降つて來たさうだコレ箕をもつてすく／＼こいつはたまらぬ合歸命頂禮大きな事まき出したすてきな大盡ぢや戀にや誰しも上の空へ酒で乗出す總長屋へ船で合ヤレコレこりや神いさめ合へエ、賴むにえ龍神さん扱又美い合乙姫さん水の底迄手は屆かねど書いてやるぞえ投文をよえ紙は何紙油紙小石をくるんでどんぶりこそりや／＼つむりへ當りますまゝよ合浮名が龍の宮へ面白やへ話に雪もとけしなき道をたどりつ打連れて道をたどりて急ぎ行く。

花の雲助合肩　二三

〔解題〕通稱「雲助」。正本には淸元延壽太夫直傳、作者松井幸三とあるが、作曲年代は明かでない。忍頂寺務氏は文政十一年頃の作と考證して居られる。比丘尼・梓巫女・越後女・御殿女中・遊女などが今は成り下つて女雲助となつて長持をかついで出て、交ぜこぜ節をうたつたり、昔の身の上話をするといふ趣向であるが、實は當時の江戸の私娼を材題とし、當時の流行唄を連綴したものであらう。

へ水の流れと人の合身は果てはどうなる事ぢややら。どうとも斯うとも合今更に合愚痴は言やんな氣楽がましよいとし可愛に合そやされて合かゝつた戀の取持ちに蠅ぢやなけれど。雲助と合落ちても。雲の名は拔けぬ。世は逆さまな營みも合へ昔や金持地面持合今は分持とんぼ持ち合餅ぢや恐れる酒なら來なせ合醉へばナア醉ふ程ナアエ。長持や輕い。ヤットコ道心合佛の性かえ何のこつたえ合女で。男の豆煎はあられもないぢや合ないかいな直ぐな街道

横に行く合交ぜこぜ節でやりやんせう二上りへのぼり夜船の櫂や艪ぢやとて棹を取つたえ合佐田や牧方。淀合水に車がくる〳〵と。伏見へ着くエオ、イ〳〵親父殿。其金こつちへ貸してくれ。與一兵衛。びつくり仰天しイエ〳〵金ではござりませんへ娘。化粧すりや。狐が。覗くへ賽の河原の地藏尊合一つとヤア。一夜明くれば賑やかで〳〵飾り立てたるへ松一木縫らぬへ色の世界に色なき者はへわしとかゝさんと絲取つて居たら。トノ事いのへ東。上總の。夷隅の郡。村の小名をば金へ沖に見ゆるは肥後様のエソレ〳〵船よ紋は九つ九曜の星へ蝶々止れや菜の葉が嫌なら葭の先へ合止らんせ合へ泊る宿々部屋々々の。身の上話もをかしかろヤへこれでもわつちは合流れの身登り詰めたる山形に星の二つもついたもの味噌揚卷ぢやなけれども合月ぢや花ぢやに。うか〳〵と。奢り盡くした。間夫狂ひ合。それから末は並長家。一疊半も。玉の床合へ來る度々に。貸せ〳〵と。金のなる木は。持つまいし。へまして勤めの。身ぢやものをへその勤めより氣の重い。そも白らは。雲井の上の宮仕へ。三十一文字がかけ橋の戀ゆゑ位をする〳〵と天から滑り落ちの人。多くの戀の歌所でも。烏丸ではないわいなへわしは越後の後家の子で。濱も田畑も澤山に。その仕事さへ手にやつかぬ合かの獅子舞の角兵衛どんに打込んで合是が野中の一本杉を合主と思うて抱付いて合顏も身體も脂だらけ合へ陀羅尼千卷よみし身も。熊野へ。出たが墮落の始め。丸太舟ぢやと。名に立てられて。ちと。癇癪も頭にめでて。佛の御手の合緣の綱合始めて往生。びつくり比丘尼の合なれの果てへ宗旨違ひの神の告げ合千早ふるびし戀話合京の大原の。梓巫女。湯立ての時に。負はれた男。ツイいたづらが合評判の。名さへ高天が腹の中只ではないと合嬲られて合とう〳〵とうかみ。緣でこそ合こゝに集る野良仲間。手柄者では合ないかいな。これも氣散じ酒機嫌二上りへ吉野の合山を雪かと見れば合雪ぢやござらぬナア是の。花の吹雪で。こん〳〵ござるよこれの。エ、汝はなぜ見えぬか合午の刻だにサツサ何の氣の。迷ひだ合へ立田の合川を錦と見れば合錦ぢやござらぬナアこれの紅葉の柵でごん〳〵ござるよ合これのエ、汝はなぜ見えぬか合午の刻だに。サツサ何の氣の迷ひだ合へ酒に浮るゝ色上戸ハア面白やへげに全盛の色遊び賑はしかりける次第なり〳〵。

道行旅路の嫁入　二四

〔解題〕 通稱「八段目」又は「おかげ參り」。天保元年四月十九日から市村座興行の忠臣藏の八段目道行の淨瑠璃である。忠臣藏の原作の道行を改作して、となせと小浪の道行におかげ參りと女商人とをからませたもの。作者は三枡屋二三治。おかげ參り坂東簑助、となせ尾上紋三郎、小浪岩井紫子松、女商人岩井粂三郎。清元は延壽太夫・政太夫・喜勢太夫、三絃齋兵衞・榮次郎。この道行は好評であつた。

〽誰がいうた言の葉ぐさも飛鳥川合淵も知行も瀬と變る浮世の中の習ひとて結ぶ鹽谷の緣あらば慕うてのぼる加古川の娘小浪が物思ひ母の思ひは山科へ聟の力彌を力にて押して嫁入の乘物もやめて親子の二人づれ紋三郎紫子松出〽遠目に富士の景色さへ今を初の道中は雙六の外しら雲のカン〽心は先へ都へと急ぐ徒歩路の足元は氣も浮島が原三保が崎へ續く並松街道を狹しと打つたる行列は二上り〽どの國司か知らねどもア、羨まし世が世であらう物ならば一度の晴れと花かざる伊達を駿河路さしかゝり〽蹟く石場大石や小石拾うて我が夫と撫でつ擦りつ手に取つてやがて殿御と添寢して二人が仲に赤兒產んで〽ねん〳〵ねんねこせねんねが守はどこへいた合山を越えて里へいた〽まだ宿次も遙かなる山科さしてぞ辿り行く〽短夜に夜がな興津のおかづけはそぐはぬ姿の魚荷持　粂三郎出〽女子だてらに諸分さへ言譯いはず謝らぬ向ふ鉢卷なんのその〽あひがなア遠けりやなアエ、立場が長いつぎ場〳〵で合酒々とエ、〽その氣散じも天井拔け女の名さへ輕子とはなぜ深川で付けたやらそんな無駄口沖の石〽可愛男の仕事のかはり〽問屋の仕切り算盤の玉は御存じ大和屋の家名も對の菅笠に　簑助出〽伊勢參宮の目印は今度この度阿波の國まめおはらひの御託宣てんとおてんと天から降つた天人か合三保のあたりであらうかと合開いて跡から御贔屓受けてお蔭參りは

皆様へお禮にちよつと旅かけの連れに鳴海の染浴衣 合二上リへ色氣ないとて苦にせまいものサッサ隱して鐵漿付けたコノしよんでこえ 合へ鐵漿つけて笠のサッサ締緒で隱すしよんでこえ。ナホルへ浮立つ心の面白酒や合爰も所の名物に名代の二人打連れて仲よくこそは來りける。錢詞へコウ姉さん見りやおめへは女の身としてコリヤどういふ譯だえ 粂へサアわたしや女子の輕子でござんすわいな錢詞へハア、女の輕子といやアノ江戸の深川や岡場所でいふ女の名そんなら女の魚荷の輕子かえ 粂へアイさうでござんすアノ私よりはお前さんはえみのへわしや今度伊勢のお蔭參りに出かけた旅人さコウ姉さん何とお前は道連れになる氣はねえかえ 粂へそんなてんがふ置かしやんせいなへおどけまじりにいはしやんしても此方は御亭の味

知らぬ得ては旅人がてんがふに手を出したらば此方からぐつと抱へて押出して前からかゝりやはねを取り四つに渡らば腹櫓へもし後から抱付けば負ひ投げ背負ひ投げ腕反り合足のいたづら合爪返しへなげの情は露ほどもしらの勢ひの娘肌此方はちよつと仇口にへ粋で小勇みで粧さず澄まさず物數いはず高等で合底に情のある男可愛うなうて何とせうへ廻らぬ舌でしよくだいや丼火箸で南無三寶へそふに忽ち泣上戸へこの丼の割れたのを見るに付けても娘が事合今年十二で麻疹も輕く合はやり風さへハックショ引きもせずツイ十三でこの樣にと合しやくり上げたる溜涙合へ傍にはむつとへエ、ナ、、何のこつたえこの丼が割れたといつて合お娘の事で泣くならば水甕が割れたなら婆合樣の事で泣く氣かよ 合へエ、イあた合

外聞のと合腹立ち上戸 へ笑ひ上戸は吹出しへフウフ、へフウフ、こいつはいいぜハ、、、腹を立つたり泣いたりして合どうもかうも言へねえ〳〵とハハ、ハ、、、何でも物のふえるのは 合目出度い事ではごんせぬか 合へそれに涙をこぼしたり合筋を出したりへハ、おいたゝへハ、おいたゝへハ、ハ、、ハ、、ハ、、、おいたたゝゝ合わけ生醉の合しどもなく騷ぎ一座の浮立ちて 二上リへさまによエイコノさまにやろとて手織の木綿を新田紺屋誂へた合なじよ〳〵 合なじよ染めるえ 合へ桐に鳳凰合竹に虎合いつも離れぬ合判じ物え 合へそりや又いしこい注文だついでに摺小木摺りこばちこれも離れぬ染模樣面白や 粂へモシあの音は何でござんすえ 錢へありや三島の明神樣の神樂よ 粂へわたしやびつくりしたわいな 錢

へサア行きやせう へこゝに三島の神垣や 幸ひあれや道づれと足を早めて急ぎ行く。

六歌仙容彩（ろくかせんすがたのいろどり）

二五

文屋の康秀 喜撰法師

〔解題〕 天保二年三月廿五日から中村座で、中村芝翫（後の四世歌右衛門）が岩井粂三郎（後の六世半四郎）等を相手に演じた六歌仙の所作事で、その内容は次の通り。

僧正遍照 ワキ小町……大薩摩 後に義太夫に改む
文屋康秀 ワキ官女四人……清元
在原業平 ワキ小町……長唄
喜撰法師 ワキ茶汲女……清元長唄かけ合
大伴黒主 ワキ小町……大薩摩

作者は松本幸二。清元の連名は二代目延壽太夫・政太夫・志喜太夫、三絃清元榮次郎・齋兵衛。この榮次郎は四谷新宿の住人で、清元三絃の名手であつた。

六歌仙の所作事は、上方の所作事の名人嵐雛助が寛政元年九月大阪の角座で一世一代を勤めた時に「化粧六歌仙」と題して演じたのが始めで、雛助はその後も京都・堺又は大阪で再三再四繰返して有名になつた。その子二世雛助が寛政十二年四月市村座で「化粧六歌仙」の外題で長唄の地で演じたのが江戸に於けるこの所作事の始めであつた。然るにその翌年雛助の死（廿八歳）と共に一時中絶して居たものを、三十二年目で中村芝翫が復

活して大いに増補改修を加へたのが本曲であつて、天保期の江戸に於ける所作事の一代表作といつてよい。この中特に清元の「文屋」と、かけ合の「喜撰」とが傑作として歡迎され、今日でも舞臺生命を有するのみでなく、清元としても名曲の一に數へられてゐる。

文屋の康秀

へ烏帽子きた合鷹の羽おとしきよろ／＼と合小鳥目がけて一のしに其人柄も康秀が裳にじやれる猫の戀 芝居出へ届かぬながら狙ひ來て行くをやらじとコレ待つたへあた憎らしい何ぢやいな御清所の暗まぎれ晩にやいのと耳にいヵンへむべ山風の嵐ほどどつと身に沁む合嬉しさも合へ秋の草木かしを／＼と一人寢よとは男づら鮑の貝の片便り情ないではあるまいか寄るを突退けコリヤどうぢや 合へ鼻の障子へたまさかにへねぶかの薫るあだつきは 合へ時候違への河豚汁で一人ばかりか盛りかへを強ひつけられぬ御馳走はそも／＼お辭儀 にあかつきのすご／＼歸る憂き思ひなは仕らぬ是を思へば少將が九十九夜く らぬながらも我が戀は 合末摘花の名代よ思ひ詰め 合へ傘を 合かたげて丸木橋やおつと危ないへすでの事鼻緒は切れて片足はへちんが 合ちが／＼オヽ冷めたへその通ひ路も君故に衣は泥



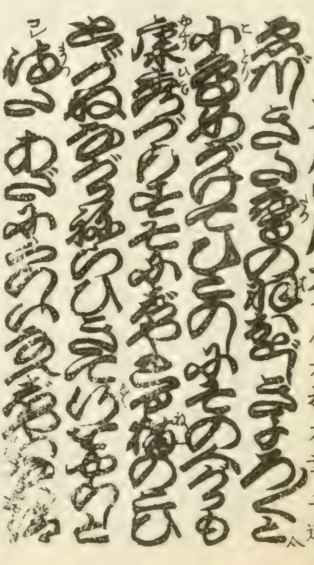
を突付けられて合羞かしい。合〽地下の女子の口癖に〽田町は昔今戸橋法印さんのお守も〽寢かして猪牙に柏餅夢を流して隅田川合男よけならそつちから腮は高天がはらの上乗せる合手ごとはお斷り〽逃げんとするを戀知らず〽引留むるのを振拂ひ〽イヤ／＼／＼〽逢ふ戀〽待つ戀〽忍ぶ戀合〽駕籠は〽シテこい〽萌黄の蚊帳〽呼んでこい〽ぎつちり詰つたやに煙管ゑくぼのいきの上ばかりこれぢやゆかぬと康秀が 三下り〽富士や淺間の煙は愚か合衛士の焚く火は澤邊の螢焼くや藻鹽で身をこがすさうぢやえ〽合縁奇縁は味なもの片時忘るゝ隙もなく一切身體もやる氣になつたわいな合さうかいな ナホル〽花に嵐の色の邪魔寄るをこなたへ遣戸口なか殿さしてぞ走り行く。

喜撰法師

六歌仙之内

文屋の康秀

清元延壽太夫直傳
作者松本幸二述



〽わが庵は芝居の辰巳常盤町しかも浮世を離れ里 芝翫出〽世辞で丸めて浮氣でこねて合小町櫻の眺めに飽かぬ合彼奴にうつかり眉毛を讀まれ 長唄〽法師々々はきつゝきの合素見ぞめきで歸らりよか合わしは瓢簞合浮く身ぢやけれど 合〽主は鯰のとり所合ぬらりくらりと今日も亦浮かれ浮かれて來りける 長唄〽もしやと簾をよそながらきせんの花か茶の給仕〽波立つ胸を押撫でて合しまりなけれど鉢卷も幾度締めて水馴棹 長唄〽濡れてみたさと手を取つて小野の夕立合縁の時雨〽化粧の窓の手を組んでどう見直して胴震ひ 長唄〽今日の御見の初むかし惡性と聞いてこの胸が朧の月や松の影〽わたしやお前の政所いつか果報も一森と合褒められたさの身の願ひ 長唄〽惚れ過ぎる程合愚痴な氣に〽心の底の知れかねて 長唄〽ぢれつたいでは合ないかい

な〽なぜ惚れさせたコレ姉長唄〽白惚れ過ぎた悪洒落な〽わつちもそんなら勢ひ肌五十五貫でやらうなら廻りなんしえがら／＼鐵棒に路次や締りやす〽長屋の姉が鐵砲絞りの半襟か花見の煙管ぢやあるめえし素敵に首にからんだは合廊下鳶が油揚さらひ合お隣の花魁〽知らねえ顔も凄じい何だか高い觀音様の長唄〽鳩は五重や三重の塔の九輪へとまりやす〽粋といはれて浮いた同士長唄〽ヤレ色の世界に出家を遂げる合ヤレ／＼細かにちよぼくれ合〽愚僧が住家は京の辰巳の世を宇治山とや人はいふなり合〽ちや／＼くちやさゑんの話す濃い茶の緣の橋姫合〽昨夕の口說の袖の移り香花橘の小島が崎より一散走りに走つて戻れば合〽内の嬶が悋氣の角文字牛も涎を〽流るゝ川瀬の合〽内へ戻つて我から焦るゝ螢を集めて

手管の學問長唄〽唐も大和も里の戀路が山吹流しの水に照り添ふ朝日のお山に誰でも彼でも二世の契りは平等院とやさりとは是はうるさいこんだにホウ〽歸命頂禮合どら如來長唄〽衆生手くだの歌念佛〽釋迦牟尼佛の床急ぎ抱いて涅槃の長枕睦言替りのお經文〽なまいだ／＼なんまいだ何故に屆かぬ我が思ひほんにサ〽忍ぶ戀には如來まで來て見やしやんせ阿彌陀笠黃金の肌で有難い〽なまいだ／＼なんまいだ何故に屆かぬ我が思ひほんにサ〽こゝに極まる樂しさよ〽難波江の片葉の蘆の結ぼれかかり〽ヨイヤサ〽コレハイナ〽解けてほぐれて逢ふ事もまつに甲斐あり合ヤレ夏の雨〽ヤアトコセ〽ヨイヤサ〽アリヤ／＼〽これはいナ〽コノなんでもせえ合〽住吉の岸邊の茶屋に腰打ちかけて〽ヨイヤサ〽コレハイナ〽松で釣ろやれ蛤を逢うて嬉しぎ合ヤレ夏の風〽ヤアトコセ〽ヨイヤナ〽アリヤ／＼〽これはいナ〽コノなんでもせえ〽姉さんおんじよかえ合島田金谷は川の間旅籠はびたでお定まり長唄〽お泊りならば泊らんせお風呂もどん／＼沸いてゐる障子も此の頃張り替へて合疊も此の頃替へてあるお寢間のお伽も負にして合草鞋の紐に仇どけの結んだ緣の一夜妻唄〽あんまり憎うも合あるまいか〽テモさうだろさうだろさうであろ合〽住吉さまの岸の姬松めでたさよいさめの御祈禱清めの御祈禱天下泰平國土安穩日出度さよ〽來世は生を黑牡丹己が庵へ歸り行く我が里さしてぞ急ぎ行く。

朝風や櫻ちり込鳩の豆 彌生の花淺草祭

〔解題〕通稱「善玉惡玉」又は「三社祭」。天保三年三月七日から中村座興行の「櫻時女行列」の大切に出した所作事。作者は二世瀬川如皐。上卷は常磐津で、淺草の三社祭の場で、その山車人形で神功皇后（四世三津五郎）と武內宿禰（中村芝翫）が出る。それを引拔くと下卷清元で宮戸川の場となり、漁師濱成（三津五郎）と武成（芝翫）で網を打つて居ると、天から舞下つた善玉と惡玉とが濱成と武成とに乘り移つて踊り拔くといふ仕組、淺草觀音の緣起に、京傳の「心學早染草」（寛政二年）以來大流行となつた善玉惡玉の趣向を取合せたものである。簑助はこの時四世三津五郎と改名し、芝翫と一座して得意の所作事を演じたので大人氣であつた。清元の出演者は二世延壽太夫以下挿畫に掲載されて居るので略する。



正本繪表紙上

へ弥生なかばの 合花の雲 合鐘は上野か浅草の利生は深き宮戸川誓ひの網の古へや三社祭の氏子中 合 三津五郎 芝翫 出 へ浅れぬ誓ひや網の目に今日の得物も信心のおかげお禮に朝参り浅草寺の觀世音網の光は夕鰺や昼網夜網に凪もよく乗込み河岸の相場にしけば生貝生鯛生鰯なまぐさばんだばさらんだわびた世界ぢやないかいな へそなた思へば七里が灘をなう 合命や捨てがひ來たものなじかえ戻らうよ捨てがひ來たもの命や捨てがひ來たものなじかえ戻らうよサッサ何としよかどしよかいな へ撞いてくりやるな八幡鐘よ可愛いお人の人の目を覺ますお人の人の可愛い〳〵お人の〳〵目を覺ますサッサ何としよかどしよかいな歸りましよ待たしやんせ悄や鳥が啼くわいな へかゝる折から虚空より風



同 上 下

なまぐさく身に泌むる呆れて暫し両人 なら 合長者にもならんで出たる二ない

は大空きつと見上ぐれば へ善か悪かの 星現はれ出でたる二つ玉思ひがけなく

二つの玉 へ現はれ出でたは へこいつは 落散る風のゾット身に泌みうろたへ伏

けうだなへア、ラ不思議やなアへ一つ星 し悶絶するこそ へ悪に取つては事も愚

かや 合惡七別當 合惡禪師 合保元平治に や合ないけれど 合カンふられて歸る晩も しげ 合明けてくやしき玉手箱 合へかよ惡源太梶原源太梅が枝を蛭の地獄へ落 ありそれでお宿の 合首尾もよく 合へとう玉鉾玉松風の 合もとはさゝんさで歌したためしもあるとかや へこれは昔の かく浮世は儘にはならぬ 合善に强きは へや／＼ 合浮かれ鳥のうば玉やうやや物語 へそれが脈さに氣の毒さにおいら コレ善の綱 へ牛に引かれて善惡は浮か れ／＼さうだぞ／＼聲々にしどもなやが宗旨は有難き弘法大師のいろはにほ れ拍子の一踊り 二上リへ早い手玉や品玉 ナホルへ歌ふも舞ふも法の奇特に善玉はへと變る心はからくりまど北山時雨ぢ の品よく結ぶ玉襷 合かけて思ひの玉く 消えて跡なく失せにけり。

おどけ俄煮珠取　二七

〔解題〕 通稱「玉屋」。天保三年七月廿六日から中村座興行の「蔓一筋加賀文臺」の第二番目の大切に出した中村芝翫の所作事で、惠比須・龍王・珠取海士（長唄）・しやぼん玉賣（清元）の四變化である。作者は二世瀨川如皐。「玉や／＼」と呼びながら、子供の弄びに江戸の町々を夏になると賣り歩いたしやぼん玉賣を材題にしたもの。輕妙洒脫な清元の一代表曲といつてよい。出演の清元の連名や、玉屋のいでたちなどは挿畫によつて御覽を願ひ度い。

へさあ／＼寄つたり見たり吹いたり評判の玉屋々々商ふ品は八百八町毎日ひにちお手遊び子供衆寄せて辻々でお目にかけ値のない代物をお求めなされと 廻り來る へ今度仕出しぢやなけれども お子樣方のお慰み御存じ知られた玉藥 鐵砲玉とは事かはり當つて怪我のない お土産で曲はさま／＼大玉小玉吹分け はその日／＼の風次第まづ玉づくしで

いはうなら へたま〳〵来れば人の客 オヤ馬鹿らしい へ口説きついでにおど 佛がかめ泳ぎ坊さん忍ぶは闇がよい月
なぞとじらせば口真似のこなたもいつ け節へ伊豆と相模はいよ國向ひ橋を架 夜には天窓がぶらりしやらりとこちや
かよぶ子鳥たつきも知らぬ肝オト
ス玉も締まる時には算盤玉の堅い
親父に輪をかけて若い内から珠数
の玉オツト留まつた性根玉しやん
とそこらで留まらんせ留まるつい
でにわさくれの蝶々とまれや菜の
葉に留まれ菜の葉いやなら葭の先
へ留まれそれとまつた葭が厭なら
木にとまれ へつい染め易き廓の水
へもし花魁え花魁えと云つたばか
りで跡先は戀の暗闇辻行燈の陰で
一夜は立明かし へ格子のもとへも
幾度か遊ばれるのは初めから へ心
で承知しながらも若しやと思ふこ
け未練貴の稼ぎもうはの空鼻の先
なる頬被り へ吹けば飛ぶよな玉屋でも きよやれ船橋を橋の上なる六十六部が 構やせぬ衣の袖の綻びも構やせぬ へし
お屋敷さんのお窓下火に躓つまづいて 落つこちた笈は流るゝ錫杖は沈む中の どもなや へ折も賑はふ祭禮の花車の木



正本絵表紙

遣りも風につれ ヘエンヤレヨ へいとも 畏き御代に住む江戸の惠みぞ有難き 〳〵。

道行旅路の花聟　二八

〔解題〕 通稱「落人」。天保四年三月五日から河原崎座上演の裏表廿三幕の假名手本忠臣藏の第四段目の裏のおかる（尾上菊五郎）勘平（市川海老藏）の道行淨瑠璃。作者三枡屋二三治。清元は二世延壽太夫・政太夫・鳴尾太夫、三絃榮次郎・市次。語り出しの句を取つて俗に「落人」と呼んでゐる。今日でも舞臺生命を有する作。

〽落人も 合見るかや野邊に若草の 合長薄尾花はなけれども世を忍び路の旅衣着つゝ馴れにし振袖も 合どこやら知れる人目をば隱せど色香梅が花 合散りても跡の花の中いつか故郷へ歸る雁 合まだはな寒き春風に 合柳の都あとに見て氣も戸塚はと吉田橋墨繪の筆に夜の富士よそ目にそれと影暗き鳥の塒を辿り來る 海老藏へ鎌倉を出てやう〳〵とこゝは戸塚の山中石高道で足は痛みはせぬかや 菊五郎へなんのそれよりはまだ行先が思はれて 海老へさうであらうしかし晝は人目を憚る故 菊へ幸ひこゝの松陰でへ暫しが内の足休め へほんにそれがよいわいなへ何も譯なき憂さ晴らし憂きが中にも旅の空 合初時鳥明け近く 口說きへ色で逢ひしも昨日今日 合堅い屋敷の御奉公合 あの奧樣のお使が 合二人が鹽谷の御家來で 合その惡緣か白猿に 合よう似た顏の錦繪の カンへこんな緣が唐紙の鴛鴦の番の樂しみに 合へ泊り〳〵の旅籠屋で 合ほんの旅寢の假枕嬉しい仲ぢやないかいな 合へ空定めなき花ぐもり暗き此身の繰言は 合戀に心を 合奪はれてお家の大事と聞いた時 合重きこの身の罪科と喞ち涙に目もうるむ 海老へよく〳〵思へば跡先の辨へなくこゝまでは

來たれども主君の大事を餘所にしてこの勘平はとても生きてはゐられぬ身の上そなたはいはゞ女子のこと死後の弔ひ頼むはお輕さらばぢや　菊へあれまたその樣な事いはしやんすかわたし故にお前の不忠それが濟まぬと死なしやんしたらわたしも死ぬるその時はアレ二人心中ぢやと誰がお前をほめますぞえサ爰の道理を聞分けて一先づわたしが在所へ來て下さんせ父さんも母さんもそれは〳〵頼もしいお方もう斯うなつたが因果ぢやと諦めて女房のいふ事もちつとは聞いてくれたがよいわいな　口說キへそれその時の狼狽者には誰がした　合みんなわたしが心から死ぬるその身を合ながらへて　カンへ思ひ直して親里へ連れて夫婦が身を忍ぶ　タ　キへ野暮な田舍の暮しには機も織り候　合賃仕事常の女子といはれても取亂したる眞實がへ

やがて屆いて山崎のほんにわたしがある故に　合へ今のお前の憂き難儀堪忍してとばかりにて人目なければ抱き付き顔に色をや含むらん　海老へ成程聞屆けたそれ程までに思うてくれるそちが親切しかし我が身の親達へ面目ない一先づ立越え時節を待つてお詫びせん　へそんなら聞屆けて下さんすかうれしいぞえへサヽ支度しやれへ身拵へするその所へ家來引連れ鷺坂伴内　梅五郎へヤア〳〵勘平うぬが主人の家の斷絶その中でおかるを連れて駈落ちからまいな〳〵ちつとこつちに言分あればおかるを渡して縄かゝれへやらぬとかゝる家來を投げのけ四人がかりの櫻狩りへさくら〳〵といふ名にほれて　合どつこいやらぬわ　合そりやなぜに　合しよせん　合お手にはいらぬが花よ　合へそりやこそ見たばかり　合へそれではいろには　合な

らぬぞへ　合へもゝか〳〵と色香にほれて　合へどつこいやらぬわ　合へそりやなぜに　合へしよせんまゝにはならぬが風よ　合へそりやこそたわいない　合それではいろには　合ならぬぞへ　へ口のへらない鷺坂は　合腰をかゝへてこそ〳〵と命からがら逃げて行く　海老へ彼を殺さば不忠の上にかさなる罪科もはやあけがた人目にかゝらば二人が身の上　菊へアレ山のはの　海老へ東がしらむ　兩人へ横雲にへねぐらを離れなく烏かはい〳〵の女夫づれ先はいそげど心は跡へ御家の安否如何ぞと案じ　二人行くこそ道理なれ〳〵。

小紫 権八 時鳥霽間の雲色

〔題解〕語り出しの句に因んで俗に「一夢の権八」と呼ばれる。内容上では「其小唄夢廓」（前出）の續篇のやうな作意で、権八の跡を追つて廓を抜け出て一緒に寄合つて、身の上について色々の話を交した二人は、幡随院長兵衛の情によつて虎口を遁れて高飛するといふ仕組。天保四年五月十九日から中村座興行の「三銀杏御存地錦」の大切に出したもの。白井権八岩井杜若、小紫中村芝翫、長兵衛は松本幸四郎でこの時一世一代。作者は二世瀬川如皐 清元の連名は挿畫の通り。

へ夢の浮世と思へばやいつか二人が亡き跡の。標の石に手向の水も。丸に井桁を二世かけて重ね桔梗の紋所比翼と契る妹脊鳥古木に濡るゝ俄雨小紫へヤア権八さん杜若へ小紫か へ顔見合せて目には涙 へ長兵衛が情にてこれ迄は落ちたれど 共方はどうして爰へはこのなり へサア



お前の跡を慕うて廓を駈落してやゝ〳〵とこゝで逢うたも盡きせぬ縁ぢやへこの權八はとても死なねばならぬ身の上そなたは存らへ我が亡き跡を賴むは小紫へアレあのやうに行先を塞がる胸を打明けてなぜにかうした事ならばへ言うて聞せて共々に問ひ談合もござんせう苦界の身とて水臭いそんな心ぢやないわいなへ主は覺えてござんすか始めて逢うたその時にいとし嬉しさ身にしみ〴〵とへ粋な夜風は神風がもしや出雲で結ばれた緣ぢやあろとこつちから無理な意氣地を立通しへ又その上に

私まで捨てゝ行くとは胴慾なへいかに戸ささぬ御代ぢやとてそりやあんまりな情なしとぴんと拗るも戀の癖 合へわざと見ぬ振行過ぎるその手をしつかと胸づくし取る手をかへして右左はずみを打つて合投げぶしにカヽへ死なさ止むまい惡性を合駿河の合富士のお山さん合今宵はしつぽり色客をお迎へなされと立上る合へざんすへありんす、拜みんす、オヤなんざんす合馬鹿らしいぢやないかいなへ丸に井筒の戀仲を。下行く水を合汲みかはすお前が汲んで合揚屋町互の胸も合へ角町を人目を忍ぶの篠笹。

萱にも心おくの間の首尾繕うて地檻合しつぽり濡れた仲の町。肌と肌とを引締めてへ殘す浮名を江戸町や。京町までも口の葉にかゝる取手を手練の働きへ又も障碍の無きうちにいざと二人はかひ〴〵しく最期の場所は道かへて夜明けぬ程にと行く向ふへほのかに照らす小提燈 幸四郎出へヤアたしか二人は權八小紫といふを無闇に切りかけるを早速の提燈身をかはし 幸へコリヤ高飛しやれへ聊爾あるなと大鵬の意氣地は江戸の花川戸今にその名や殘るらん〳〵。

初霞淺間嶽　三〇

〔解題〕 通稱「淺間」。天保五年正月廿二日から市村座興行の「三幅對書始曾我」の第二番目四立目に出したもので いにしへを思ひいつもの其儘に」と角をつけてある。曾我狂言の中へ取入れたために、巴之丞と逢州幽

魂とを京の次郎(海老藏)と三浦屋奥州の幽魂(菊五郎)とにかへてある。清元は二世延壽太夫・政太夫・鳴尾太夫、三絃齋兵衞・榮次郎。

詞章は富本の「其俤淺間嶽」をそのまゝそつくり轉用してある。清元で富本の詞章を轉用したものとしては「榮能春延壽」(長生)や「春夜障子梅」(名霧)や「夫婦酒替奴中仲」(鞍馬獅子)などと共に好適例の一つである。

詞〽あはれ古へを。思ひ出づれば懐かしや。逝く年月に關あれば花に嵐の。關守も 地 宵々毎の白雪に茜さす日に解けて行く。妹脊の中 入 の恨みごと昨日の露とはかなくも。合 消えて 合 此の世に亡き妻の。胸に思ひの煙とは。〽香の薫りに引かれ來る魂は。昔の一つ前。在りし廓のその儘に奥州が 合 立姿 菊五郎出 〽恨みも戀も殘り音の。もしや心の變りやせんと 合 思ふ。疑ひ晴らさん爲の誓紙をば。なぜに煙となし給ふ怨めしや早くも。變る飛鳥川昨日の誠今日の嘘。なげの情の恨みをも言はでこがるる胸の火の煙くらべん淺間山。〽祐俊は心づき 海老藏〽ヤアヽヽそなたは奥州ぢやないか。どうしてマアこゝへはおちやつたぞいの 菊〽サアわたしはお前にお別れ申してより。さがない人の手にかゝつて。淺ましい身の上になりましたわいな。さはさりながら只忘れられぬは互の戀路。お顔が見たい。戀しい床しい懐しい。思ひこがれて。是迄參りましたわいの 海老〽オヽよう來てたもつたなう。アノそなたは人手にかゝつて死にやつたによつて。おれやもう大抵や大方案じて居たのに。マアよう顔見せに來てたもつたなう〽わたしはこの様に思うて居れど水臭いはお前のお心。ほんにあんまり 海老〽ソリヤ何がいなう 菊〽何がとはアレあの 海老〽エヽ起請の事か 菊〽アイナア 〽淺い心と白絲の染めて。悔しき馴れ衣。ありしながらの一つ前小褄揃へて。しどけなく 合 〽風に柳の。吹く儘に任せる筈の勤め 入 ちやとても 合 嫌な客にも比翼莫蓙 合 思ふ。入 男の山鳥の 合〽おろの鏡の影をだに 合。見ぬ目に曇る薄月夜。〽閨の障子に面影もれて。漏れて浮名の オス 流れて オトス 末は 合。つひの寄る瀬の波枕

[illegible]ぞや、[illegible]にもにまあ、憎くいおさんがあるわいな[illegible]ひに。[illegible]
誓ひの神かけて合黒と硯の濃い中を誰[illegible]此の世のしなし樣へ聞いたよすがも鶺鴒の鶺羽我からと合貫き止めし玉の
[illegible]て[illegible]移ろひ易き緒の合へ苦しい合へ悲しいへ口惜しい合
[illegible]楽しみたら[illegible]れた身は[illegible]
[illegible]ば合だんない〳〵急きやせぬと嗜んでめぐり來て。合今日と知らでや忘れて
[illegible]見ても落着かぬへ心の駒の。亂れ髮。[illegible]せめて[illegible]は逆ひなく[illegible]に。
[illegible]いはれずいへばえに。[illegible]
[illegible]お前に[illegible]
[illegible]の浪。嘘の涙の水まさる。三途の川の
[illegible]
[illegible]
女の上の品定めも悋氣は下品下生ぞや[illegible]
[illegible]
[illegible]やぞの下に流るゝ合いさや川。我が名洩らに[illegible]離れはせじ
や。ちつと粋になりや〳〵合へなんぼすな。告渡る。八聲の鷄のとり〴〵に。と附纒ひくるりくる〳〵くる〳〵と。
そのやうにいはしやんしても打つちや[illegible]追ひ廻り〳〵合輪廻の車煩惱の。絆に
[illegible]が
ほんに油斷がならぬわいなア合へソリ[illegible]と呼びかはす聲も亂
[illegible]も二千も三千も合世界に一人の男ぢや[illegible]の姿は
へこれ[illegible]ぼと樂しむ中を。合叢雲の。悋や思はぬ[illegible]花壇に猶交ふ秋の蝶。

手にも取られずちら〳〵 合風に亂るゝおしろいも羽に殘して草がくれ。

〽能色相圖　三一

〔解題〕通稱「神田祭」。天保十年九月九日から河原崎座興行の「義經千本櫻」の第二番目大切に出したもの。祭の手古舞浮世之介澤村訥升、ねり子樽井おせん尾上榮三郎、手古舞三筋の綱五郎市川海老藏。清元は二世延壽太夫・榮壽太夫・志喜太夫、三絃齋兵衛・一壽。延壽太夫は天保六年以來芝居は休みがちで、殊に八年からは全く出座しなかつたが、今度忰榮壽太夫の目見得淨瑠璃のために久々で出勤して好評を博した。作者は榮壽太夫の實父三枡屋二三治である。延壽太夫がかく芝居休座勝ちなのは、贔屓の屋敷方の座敷が忙がしい爲であつたといふ。

〽秦の始皇の阿房宮その全盛にあらねう以たく〳〵心も形も優り劣らぬ花紅葉も亂れ咲き嬉しがらせて オトス にくらども粋なしも三浦屋の 合 米屋は上總屋南中に柳のどちらへ靡く風次第とは浮氣しい手に一つも誠なら勿體ないではな介と喜撰も菊の籬さへ山谷風流あらまらし丸にいの字を命とかけて重ね扇にいかいな見返り柳合の手に 二上り〽月をしを松の位の品定め〽君か山繭と思三枡とは模樣も同じ丈夫の色へ手管も便りに夜の雁 合 二つ三つ四つ並んで通ばよしや扇を顔にはなに太ちよつと杵やさしけれへほんに私も籠の鳥苦界のふ 合 道を照して忍ぶとはあんまり粋な子へよぶ子鳥人目思はで通ひ路の思ひ内は初會から嘘も口舌も 合 いふ オトス た山の端に 合 せできて濡るゝか 合 しよん比べん戀の山 合 富士と筑波を中々によとてそれ見やしやんせ世の中は離の菊がいなしどもなや ナホル〽采女の衣にあ

らねども二人はやらじと慕ひ行く ㊇へ一年を今日ぞ祭りに當り年警護手古舞華やかに飾る棧敷の毛氈も色に出にけり酒機嫌神田囃子も勢ひよく ㊇へ來ても見よかし花の江戸 ㊇祭に對の派手模樣 ㊇牡丹 ㊇寒菊裏菊の由緣も丁度 ㊇花づくし ㊇へ祭のなア派手な若い衆が勇みに勇み身姿を揃へてヤレ囃せそれ囃せ花山車手古舞警護に行列よんやさ男伊達ぢやのヤレコレサ達引ぢやのといふちや私に ㊇困らせる へ色の慾ならこ

つちでも へ常から主の仇な氣を ㊇知つてゐながら女房になつて見たいの慾が出て ㊇神や佛を賴まずに義理も糸瓜の皮ばかり ㊇親分さんのお世話にて ㊇渡りを付けて是からは世間構はず人さんの前憚らず引寄せて ㊇樂しむ裏に又外へそれから閻と口癖に へ森の小鳥われはまた尾羽をからすの羽さへもなぞとあいつが得手物のこゝが木遣りの家の株 へヤアやんれ引け〳〵よい聲かけてエンヤラサやつと抱締め床の中から小

夜着蒲團を ㊇なぐりかけ何でもこつちを向かしやんせよい〳〵よんやナ ㊇よい仲同士の小諍ひなら痴話と口說は何でもかんでも今夜もせい ㊇東雲の明けの鐘ごんと鳴るので仲直り濟んましたよい〳〵よんやな ㊇そふよが締めかけ中綱へえんや〳〵これはあれはさのえエンヤリヨウ へげにも上なき獅子王の萬歲千秋限りなく牡丹は家の物にしてお江戸の惠みぞ有難き〳〵。

淺からず思ひ
染井の植木屋に

造釟菊睦言　三二

〔解題〕 通稱「菊畑の三勝」。弘化元年五月一日から市村座で、幕なし十六段續きの忠臣藏を出した時、その八段目の染井の植木屋で、蘭の方が菊畑で與茂七に師直の屋敷の圖面を渡す口說の場に使つた三勝の淨瑠璃である。本曲は常磐津の「其常磐津仇兼言」(文化九年正月)の改作である。作者は篠田瑳助。お蘭尾上菊次郎、與

茂七澤村訥升。清元は二世延壽太夫・松壽太夫、三絃八五郎・忠次郎と番附に見えてゐる。

へ常磐の松と契りしも合今は仇なる睦言と。なるも金ゆゑ。色ゆゑに合身を書き入れの文の責め合思ふに添入はで思はぬになげの情を懲りもせで逢ふ瀬を待つと夕月の。上身は空蟬の足元は。跡に引かるゝ。亂れ髮　長十郎モシ蘭の方様この菊の花も美しう咲亂れて居る故こんな花はあるまいと思ふ内。いつか人の眺めとなる。あだ腹の立つ菊の花へ人の心も知らず花によそへし今の當言思はぬ人の眺めとなり手折らるゝ辛抱も其のあだ人に近寄つて寢間の様子をイヤサ菊は不便なものぢやわいのへそんなら手折らして其の人のハテナア上へ金の代りに女房になれとせがみ立てられ返事もならずへ隣座敷で彈き

唄ふアノ唱歌三勝とやらが半七に請負うた金の日ぎりどうしようと思ふ内意地の惡い善右衛門が金の權威の無理口說きへ思はざりにしこの恥辱今の此の身は捨草入や二人が。緣をさつぱりと。切つても切れぬ。浮草や寄るべ定めぬ戀の闇へ穢らはしい事ながら善右衛門に身を任せ枕交はしたばつかりに日頃の望みも叶うたぢやござんせぬか彌七さんサア半七が心には何と思うて居やるやらへされば名を取らうより得の世の中尾羽打枯らした浪人より當世時めく善右衛門に從ふがよいわいのへ三勝取付きなう。情なや。是が世間にありふれた合色や浮氣ぢや合あるオトスまいし合初手から知らず知らぬ同士合それ

何時ぞやの巳待の日合カン人目のギン關を不忍の蓮見の折の合雨やどオトスり合ふつと見かはす目づかひに合し入めからむ手がどこやらが。ひつたり。濡れた汗のあや。深い緣ぢや合ないかいな嬉しい緣を神さんが。ひよんなお世話の其の後に。先の男と。添ふ心なら。何のかうした話はしましよへどうぞ疑ひ晴らしてほんの女夫というて下さんせと三勝が定めて言つたであらうわいへそんなら敵イヤサ金が敵の善右衛門が心の奥の間知らんが爲へ金を調へ半七に手渡ししたいばつかりにへスリヤそれ故に天晴れ貞女な三勝ぢやナアへ最早この世に秋の月嵐の雪と散る花の浮名は石碑に殘るらん。

浦里時次郎 明烏花濡衣（あけがらすはなのぬれぎぬ）

三三

〔解題〕通稱「明烏」。嘉永四年二月廿一日から市村座で裏表廿二幕の忠臣藏を演じた時に、その第八段目の裏に出した淨瑠璃である。四郎兵衛大谷友右衛門、やりて文五郎、かむろ吉蝶若左衛門、浦里坂東しうか、時次郎八世團十郎。淨瑠璃は清元太兵衛連中。太兵衛は二世延壽太夫で、弘化二年十一月に俗稱のまゝに改めたのである。

この場は當時第一の人氣物であつた團十郎としうかに名人太兵衛の顔合せであつた爲に大好評大當りであつた。上卷は山名屋の浦里の部屋で二人の口説の場から、時次郎が叩き出される迄、下卷は浦里の折檻から、愁歎それより段切の淨るりになつて、時次郎が塀を乗越し、浦里の縄を切り助ける、四郎兵衛始め大勢出て來る、時次郎實は佐藤與茂七と名乗るといふ仕組で、忠臣藏に「明烏」を取入れてある。

「明烏」といへば新内の代表的名曲であるが、この頃新内は芝居では使はなかつたので、これを清元で出すに當り、太兵衛は新内の富士松魯中に交渉し、金子五十兩を渡してこの曲を讓受けたといふ。詞章は原作より餘程短くなつて居る。（新内の明烏對照）

上之卷

カヽリへ白雪の中積るも癪にヤンたくらべて。解けぬ思ひを浦里が合文七ブシどうした縁でかの人に。逢うた初手から可愛

さが。身にしみじみと惚れオトシ抜いて 合明けてくやしき鬢の髪撫上げ〲。 團十郎詞へ浦里 モウ誰も差合ひはないか や しうへ店が出たれば今の間は誰も來る事ではござんせぬわいナ 團へヤレ

ヤレこの廣い二階に身一つの置き所のないと云ふはア、因果な身になつた事ぢやナア しうへサア此様に堰きせかれさぞ氣詰りでござんせうそれを堪へて下さんすもみんな私が可愛いと思うて

のお志嬉しうござんす忝ないわいナ　は下さんせぬ殺し
ア　上へ抱き締むればいや合おれ故と引　て置いて行かんせ
[illegible]はず[illegible]て後には[illegible]　上男の膝に縋り付
に[illegible]いや[illegible]そうして　き身を震はして泣
居たとても限りもなき二人が仲長居す　き[illegible]へ[illegible]の
ろ程そなたの身づまり此程段々話す通　[illegible]として文
りカノお人へいろ〳〵と手を廻し言入　[illegible]やみどり
れて[illegible]望みし願[illegible]　やア誰も居ないの
これしずの本意な[illegible]そなたの世に　かオヽ浦里さんし
[illegible]いとしいとしなたを手にか　うかへアイ〳〵おか
けて合どうなるものぞ侭らへて我が亡　やどん何の用でご
き跡で一遍の回向を頼むさらばやと。　ざんすえ　文五郎へ外
[illegible]取付いて　カンおんまり　の用でもござんせ
酷い情なや今宵離れてこなさんの傚で　ぬ[illegible]から居[illegible]
る[illegible]身なら又逢ふ事のあらうか　けの客人ありやど
と楽しむ事もあらうべきがへ强て二人か　このお方でござん
取[illegible]はす起請誓紙はみんな仇へどうで　すえ　しらかへサアど
死なんす覚悟なら三途の川もこれ此様　こやらの御子息さ
れ二人手を取り諸共とへなぜに言うて　んぢやといふ事で



ござんす 文五郎へイエ〳〵さうは抜けさせぬ惜かに堰かれたアノ時次郎サア旦那さんが呼んでぢやほどにサアござんせ しうかへコレおかやどんどうぞ許して下さんせ。友右衞門へエヽまだるい〳〵そんな甘口で聞く奴ぢやアねえサアおれと一緒に失しやがれ へ罪も報いも後の世も白髪頭の顳顬も張切るばかりのやら腹立ち引立てゝこそ降りにける へ跡に大勢男ども屏風の内の時次郎むさんに引出し踏むやら打つやら叩くやら直ぐに表へ突出し門の戸はたと締めにけり。

下之卷

へ折ふし降來る雪吹雪 合内には亭主が浦里を庭の古木にくゝりつけ笞おつ取り聲荒らげ 友右衞門へヤイ浦里其苦しみは心がらだア總別遊女を折檻して客をせくこと客の爲二つには女郎大切身代が猶大事アノ客もまだ若い人だがあんまり繁々通はれては親懸りなら勘當受け主持ならば親方の手前仕損ふは知れた事だこの中年期を切替へしも皆あの客のため此上は心中するか駈落かとゞの括りは知れてある詮索だアこれまで度々言つても聞入れのねえ業突張りめアノ時次郎の事をすつぱりと思ひ切つてしまやアがれコレ男ども浦里を氣を付けいへと言捨てゝこそ奥に入る へ浦里跡を打眺め 合別れとなれば今更に涙にくれて居たりしが しうかへアノ時さんはどこにどうして居さんす事ぢややらま一度顔が見たい逢ひたいわいなア へ昨日の花は今日の夢 合今は我が身につまされて義理といふ字は是非もなや しうかへアノ二階で彈く三味線を聞くにつけても思ひ出すいつぞや主が居續けに寢卷のまゝに引寄せて彈く三味線の面白さそれに引替へ今宵の苦しみア、味氣ない浮世ぢやなア へ好いた男にわしや命でも 合何の惜しかろ露の身の消えば恨みもキンなきものを しうかへわしが此身はどうなるとも へたとへ此身は淡雪と共に消ゆるも厭はぬが 合此世の名殘に今一度逢ひたい見たいとしやくり上げ 合へ狂氣の如く心も亂れ涙の雨に雪解けて前後正體なかりけり へ男はかねて用意の一腰口にくはへて身を堅め。忍び〳〵て屋根づたひ見るに。浦里嬉しやと悲しさ怖さ危なさに可愛と一聲明烏後の浮名や殘るらん〳〵。

白糸 主水 重褄閨の小夜衣（かさねづまねやのさよぎぬ）

三四

〔解題〕通稱「白糸」。嘉永五年三月三日から市村座興行の「隅田川對高賀紋（すみだがはおはつのかゞもん）」の六幕目橋本屋の場に出した淨瑠璃。石塚豐芥子の續歌舞伎年代記に、「當狂言鏡山に此節はやる瞽女のうたふ鈴木主水と四つ谷新宿妓樓橋本屋白糸小唄取交ぜ仕組……さて內藤新宿の世界を芝居に仕組し事を聞かず、此度を初めとするが櫻田左交（三世治助）大出來なり。」とある。千葉の家中で村正の刀詮議の爲に浪人して居る靑山百人町の鈴木主水は內藤新宿橋本屋の白糸といふ宿場女郎に耽溺したので、その妻のお安は一夜男裝して白糸の客となり、眞情を打明けて主水との緣切りを賴むのである、それがこの淨るりの場である。白糸坂東しうか、おうた中村歌女之丞、おやす尾上菊次郎、主水澤村長十郎。淸元連中は太兵衞・美代太夫・千吹太夫、三絃千藏・梅二郎。

〽しら糸の昔懷かしなま中に合染めて しんくの八重結び。互に縺れ今更に。解く甲斐もなき物思ひ。ア、何とせう 新造〽今お前を呼びに行かうと思つて居たわいなア 白糸〽さつして下さんせ。今宵の樣なつらい事はござんせぬわいなア 新造〽在鄕（ざいがう）の衆はおとなしい者でござんすに。あれは腹立ち上戶といふもの

でありますわいなア 白糸〽モシエ主（ぬし）に言ひたい事がござんす。私の樣な所へ初會に上らしつてこんな始末をするとさぞ腹が立つでござんせうが。長酒のお客人（きやくじん）で。やう〳〵寢かして來ました。必ず惡く思つて下さんすなヤ、、、ヤ初會に上つた侍客と思ひの外。あなたはあなたは確かに主水（もんど）さんの おやす〽

ハイ女房お安でござんすわいなア 上〽思ひがけなき恟（びつく）りに。ナント答（いら）へも奈良柴の顏に火を焚くばかりなり 女房〽サ、〳〵〳〵さぞ恟りさんしたでござんせう。あられもない此樣な姿（なり）をして客と僞り上つたは夫の恥と二つには定めし朋輩衆（ほうばいしゆう）へ外聞にもならうかと。あなたこなたを思ひやりわさ〳〵今宵參

つたは。折入つてわしやお前にお頼みがあつて來ましたわいなア。白糸へ勿體ない其お詞なんの御用か知らねども。お心一ぱい仰しやつて下さりませ。モシ龜里さんお茶など入れて下さんせいなア。モシエ言譯ではござんせんが一通り聞いて下さんせ。吉原に居る頃はまだ振袖の譯知らずクドキへしかも櫻の初日の夜 合派手な一座の其中で。つい目惚れの浮氣からオトヽ 人の客衆に忍び合ひ。合末はどうした主水さん。絡んだ緣の橋本へオトス 合住替へに出るそれまでは眞實あるとは露知らず。始めて聞いて悲しさと 合又いとしさがいや增して。深く溺子の 合野暮らしいスカシ。合腕に二世と堀の内。苦界の中野。合嫌しようみよ、カン今は堰かれて逢ふ事もまた山の流れの此身辛抱してとばかりにて袖は涙に濡うるむゃ〳〵

サア勤めの内にも眞實の心を盡して主を呼んで下さんすお前の心底。風の便りに聞く度毎悦びこそすれ恨んだ事はござんせぬ。其誠あるお前ゆゑ打明けて頼みといふは外の事でもござんせぬが。去年の冬より病氣といつて勤めを引いて一夜さも内へ寢ぬ事お頭へ推言しよたく聞き。主水が身持密々にお調べなさるとお仲間より私へお志してくれたのを、それにいへど上の客へ押返して言にはたにも出時内へ歸らねばトト取付く島も渚濟ぐ。合たゞ宵毎に此うらへ來ても客には表向き上れぬ身ちやと聞いた故女房へどうか首尾して金とゝのへ所帯を盡らし上げて 上へ眞實心の姉妹と互に心奥底も話し合ふのが樂しみに打明かしたる夫思ひ。武家には昔しきれそかし口で始めて聞いたお前さんのお志お情過ぎた。私へ罰が當りま

するわいなア。女房へア、是はしたり。私へ一途に義理立てゝ愛想づかしでもしやしやんすト知つての主の氣質故。ひよんな事でもあつた時は男大事も水の泡。それよりは意見して二度に一度は上れぬ樣にして下さんせ。必ずともに緣を切るのぢやござんせぬぞえ白糸へ何から何まで事を分けての御親切何にとまあれ夜も更けたればお客から私の着替へを女房へア、イエそれには及びませぬ。躰に氣が疑ひ立てう程に私はやつぱり此羽織を白糸へトレ私がお召替申しませうわいなア 上へ眞實と誠が行合ひの 合階子の脚も引過ぎの。合濡れに寄るてふ借着衣へ主水はひとり佇みて主水へオヽいゝ心持だ。やう〳〵の思ひで湯へ這入つた。ア、去年の冬から二階をせかれ藏前は止つたし親類とても痛めてしまひ。オヽそりやアさうと今

夜お糸が所へ上つた客頭巾をかぶつてゐて顔を見せねえが色白なおれよりは若い好い男だといつたが宵から一遍もおれが所へ來ねえ鹽梅といひ此頃何だか奥歯に物のはさまつたやうな處置ぶり。何にしろそつと座敷へ這入つてどんな野郎か屏風越しに一寸覗いて見よう。さうだ〳〵。
上へかん氣の角文字振立てゝ一間へ走り入る折から廓里あわてゝ抱きとめ 總へこれはしたり滅相な。座敷には初會の客人主にも似やはぬ。どうさゝんしたものぢやぞえなア。主水へナニどうもしやしねえが。オヽさうだ今風呂から上つて咽喉が乾くから次の間の湯を一杯貰つて飲んだと云つて。アノ女の損にもなるめえと思つて 總へそんならお呼びなさんしても 主水へオヽさうだ湯殿へ守りを忘れて來たによつて。どれ一寸取つて來よう 新造へアヽお前が行つてはお部屋の内つま。私がお湯も汲んで來て上げる程に必ず彼處へ行つては惡いぞえ。主水へムヽどうしてそんな野暮はしねえ今のはほんの出來心だ 總へドレ取つて來ませうかいなア 上へとつかは立つて行く空の 上へ早や更渡る風のつて物思はする 合爪彈はどこの間夫めと忍び駒 主水へそりやこそな。鑑定の通りだ。薄暗え所で二人でめそ〳〵泣いて居やアがる。あの鹽梅ぢや此頃の事ぢやアねえ。とうから色になつて居たと見えるわえ 上へ餘所で解く帯とは知らでくけて居る 合糸より細き縁ぢやもの 合ツイ切れ易くふくろびて 主水へこんな事とは知らねえで可愛さうにアノ女房の意見も馬の耳に風。しつこくいへば打叩き。お安堪忍してくれ〳〵。今日といふ今日思ひ當つた。エヽ口惜しい是へ引出しずた〳〵にしてくれう。それ。イヤ〳〵大小は無しチエヽどうしてくれうカ 上へ胸に据ゑかね隔ての障子砕くるばかりに押開けて白糸目がけ駈寄りしが。侍客の思はくも。流行に恥ぢて手持ちなく 主水へ白糸ぢやアねえお糸。よくも今まで欺しやアがつたなア。この返禮はきつとするから覺えて居ろ。モシ〳〵お客さんお前さんにはお氣の毒だがこの女郎には少し用がござりますからお貸しなすつて下されませ 主水へヤアわれは 女房へアイ女房の安でござんすわいなア 主水へエヽヽ〳〵〳〵 女房へモシ主水どのえ。お前さんはナア 合 私が云へば悋氣らしう思はんせうが。此子を頼み意見して下されと頼みに來たも家が大事又二つには娘のお徳。明日が日お前がお暇にならさんしたら。何をたづきに人らしう育て

なさんす。エ辨へのない。モシ子心にも上へ私の顔が痩せるのを見て餘所ながら父さまへ。合眞實親身の強意見お糸も涙押拭ひへモシ私ばかりの子ぢやないぞえ。それに付けてもお糸殿の心底からした勤めの身の上。繋き入った心の操上合へさうした邪慳なお前でも堰かれて後は身を狭う合人目忍ぶが味氣なくあるとあらゆる嘘いうて合客に無心も誰故ぞ。みんなお前に入れオトスあげて。合朋輩衆のかり小袖破らるゝなら破つてと。合部屋着と共に身を投げかけ身悶えするこそ道理なり主水へア、あやまつた〳〵お糸そなたの眞實お安わが身の心配今までと違ひこれから心取直しきつと勤めをする程に二人とも堪忍してくれ〳〵。上合へ心直きは折れ易く眞實見えて頼もしく女房へモシ旦那さま何のマア。何事もお前のお身が大切ゆゑ。お糸どのといひ私まで詞が過ぎましたわいなア。白糸へ男にあやまらせるが女子の手柄でもござんせぬ。モウ此後はお安さんとは實の姉妹上へ主水もさすが恥入つて主水へオ、案じやるな場所も所もよく知つてゐる。何にもいはぬ二人の者白糸へそんなら是が長い別れに上へ口惜し涙をせきとめる義理と情の潮境今を名殘と白糸が合胸に滿ち來る濁り水別れ〳〵て走り行く。

朧夜に憎きものは男女の影法師　梅柳中宵月　三五

〔解題〕通稱「十六夜」又は「清心」。安政六年二月五日から市村座興行の「小袖曾我薊色縫」の第一番目四立目に出した淨瑠璃。作者は河竹新七(默阿彌)、十六夜岩井粂三郎、清心市川小團次。淸元は四世延壽太夫・家内太夫、三絃美佐太夫・梅次郎。

鎌倉極樂寺の所化清心は大磯の遊女十六夜に溺れて女犯の罪を犯した爲に追放される事となつた。一念發起して上京して修業しようと思つたが、追跡した十六夜から、自分の胤を腹に持つて居る事を聞かされて口說かれ

たので絕體絕命と觀念して、二人は稻瀨川の百本杭のほとりに身を投げる。こゝが淨るりの場である。そのあとはかうである。十六夜は川下で俳諧師白蓮實は盜賊大寺正兵衞に助けられてその妾となり、清心は泳ぎの心得があるので死なれずに岸に上り、騷ぎ唄を聞いて氣が變り、若衆を殺して金を取り、「こいつアめつたに死なれない」と生れ變つた惡人となり、鬼薊の淸吉となり、遂に十六夜に逢つて白蓮の許へゆすりに行き、それが實の兄と知つて驚くが、とゞ捕へられるといふ例の默阿彌式の代表作である。詳細は歌舞伎脚本集御參照を乞ふ。

∑へ朧ろ夜に星の影さへ二つ三つ ハル四つか 合五つか鐘の音も 合もしや我が身の追手かと胸に時打つ思ひにて廓を脫けし十六夜がフシへ落ちて行方も白魚の船の篝に網よりも人目厭うて跡先に心置く霜川端を風に追はれて來りける。

粂三郎詞へ嬉しや今の人聲は追手ではなかつたさうな。廓を脫けてやう〳〵と。こゝまで來た事は來たれども。行先知れぬ夜の道。どこを當所に。行かうぞいのフシへ暫し佇む上手より 合梅見歸りの船の唄 合ハウタへ忍ぶなら忍ぶなら 合闇の夜は置かしやんせ 合月に雲の障りなく 合辛氣待つ宵十六夜の 合内の首尾はエ、よいとの〳〵 合 フシへ聞く辻占にいそ〳〵と雲足はやき雨空も思ひがけなく吹晴れて見交はす月の顏と顏



初演當時の繪草紙

小國次へヤ十六夜ではないか粂へ清心さまか逢ひたかつたわいなアフシへ縋る袂も綻びて色香こぼるゝ梅の花さすがこなたも憎からで小國へ見ればそなたは只一人。廓を脱けてどこへ行くのぢや粂へどこへ行くとは胴慾な。今日御追放と聞いた故。ひよつとこれぎり逢はれまいかと。思へば人のいふ事も。心にかかる辻占に。人目を忍んで。來たわたし。いづれへなりと。共々に。連れて退いて下さんせ 小へその志は忝いが。ふとした心の迷ひより。御恩を受けし師の坊の。お名を汚せし勿體なさフシへ只何事もこれまでは夢と思ひて清心は今本心に立返り 小へ京へ上つて修行なし。出家得脱する心。そなたは廓へ立歸り。よい客あらば身を任せ。親へ孝行つくしやいなう。粂へそりや情ない清心さま ●クドキ へ今更いふも愚痴な

から悟る御身に迷ひしは合蓮の浮氣や一寸惚れ合浮いた心ぢやござオトスんせぬオトス。▲へ彌陀を誓ひにあの世までかけて嬉しき袈裟衣合結びし縁の珠數の緒オトスを。■合カンへたま／＼ギン逢ふに切れよとは佛姿にありながらミナサシ▼へお前は鬼か清心さま聞えぬわいのと取縋り恨み歎くぞ誠なる。小へさう言やるのは嬉しいが。見る影もない所化あがり。わしに心中立てずとも。思ひ切るのがそなたのため粂へそんなら。どうでも私をば。連れて。退いては下さんせぬか 小へサア悪い事はいはぬ程に。早う廓へ。歸りやいの 粂へそのお詞が冥途の土産フシへ岸よりのぞく青柳の枝も枝垂れて合川の面水に入りなん風情なり 粂へ南無阿彌陀佛 フシへ既に斯うよと見えければ清心あわてて抱きとめ 小へア、これ待つた。早まるな粂へイエ／＼

放して。殺して下さんせ。所詮ながらへ居られぬ譯ゆゑ 小へナニながらへて居られぬとは 粂へ勤めする身に耻かしい。私やお前の小へエ、そんなら。もしや懷胎が胤を粂へアイなア小へムウア、このまゝ別れて行く時は腹の子まで闇から闇と。なつて一緒に伴はゞフシ小へ廓を脱けしそなた故捕へられなば誘拐し小へ再び縄目に遭はんより。いつそ此場で。共々に 粂へそんなら死んで下さんすか 小へ外に思案は。無いわいのフシ●へほんに思へば十六夜は 合名よりも年は三つまして丁度十九の厄年に中カン我が身も同じ二十五のこの曉が別れとは花を見捨てゝ歸る雁それは常世の北の國これは淨土の西の國頼は彌陀の御誓ひ ●合へなまいだ／＼南無阿彌陀 ▲フシへこれが此世の別れかと▼へ互に抱き月影も又もや曇る雨催ひ 小へ此世で添

はれぬ二人が悪縁 粂へ死なうと覺悟。極 陀佛。 フシ粂へ西へ向ひて合はす手も 合 の浮名を跡に殘しけり。
めし上は 小へ少しも早う 兩人へ南無阿彌 凍る夜寒の川淀へさんぶと入るや水鳥

三光之内 七夕の星 日月星晝夜織分

三六

〔解題〕 通稱「夜這星」、但し今では「流星」と呼んでゐる。安政六年九月廿三日から市村座興行の「假名手本忠臣藏」の第二番目大切に出した日月星三段返しの所作事。日は「淸盛の日招」で竹本、月は「吉原の俄」で常磐津、星は「七夕の星」で淸元と竹本のかけ合、卽ちこゝに收めた淨瑠璃である。牽牛河原崎權十郎（九世團十郎）、織女岩井粂三郎、流星市川小團次で、牽牛織女が七夕の晩に年に一度の出會ひの場へ流星が素裸で雷夫婦の喧嘩を御注進に來る、その喧嘩の動機が當時流行の端唄に滲つたからといふ滑稽で皮肉な作。作者は河竹新七。淸元は四世延壽太夫・宗內太夫・鳴尾太夫、三絃順三・二世齋兵衞。こゝに收めたのは、竹本と掛合の樣式になつて居る原形のもので、長唄の中の語句は、現今語り換へて居るのを示したのである。

竹本へそれ銀漢と唐詩につらぬる九百七歳に今宵一夜の契りゆゑへまた明星の 雲路を辿り來る 合へこれと見るより鵲
言のかたい詞を和らぐる 合三十一文字 影薄き暮れぬ內より織女が 合待てば竹 の 合飛立つ思ひ押し鎭め 粂三郎へ懷かし
の大和歌天の河原にかはらじと深くも 木へ待たるゝ牽牛も牛の歩みのもどか や我が夫樣お變りとてもあらざりしか
願ふ 合女夫星 竹本へその逢ふ瀬さへ一 しく心は先へ行き合ひの 竹本へ八重の 權十郎へア、思へば年に只一度この七夕

に逢ふのみにて 柔へ雁の便りもなき身の上へ懐かしきはいかばかり 柔へ取分け去年は雨降りて 柔へそもじに逢ふも三年越し 竹本へしかも續きし霖雨に八十の河原に水増してつまこし船に棹させどへとわたるよすが明け近く長鳴鳥に短夜を 竹本へ思へば憂しと引く綱も跡へ引かるゝ後朝につれなき別れも昨日と過ぎ ●へ今日は雨氣も中ぞらに心も晴れて雲の帶解けて 合へ寝ぬる夜の嬉しさと寄添ふ折から闇雲に 詞 小雷へ御注進御注進 竹本へ呼ばはる聲も高島や飛んで氣輕な夜這星。へ色い(丸い)世界へ生れしからは 合色(戀)をするのが犢鼻褌 合寝るに手まはし宵から裸 竹本へぞつと夜風にへハヽハックサメきやつが嚏をして居るかエヽ畜生めと夕闇をへ足も空に。て。 駈け來り へ誰かと思へば夜這星 柔へ注進とは何事なるか 雷へ様子はい

かに 小へハッされば候/＼も一つまけてさん候 へ凡そ夜這と化物は夜中のものに宵の内とろ/＼やらうと思ひの外一つ長屋の雷が夫婦喧嘩の 合亂さわぎへ聞けば此夏流行の端唄の師匠へ 合落ちて氣は失はねど肝心の 合雲を失ひ 合居候 竹本へそこで端唄を聞き覺えこの天上へ歸つてもツイロ癖になる時も 端唄へ小町思へば照る日も曇る四位の少將が涙雨 へごろ/＼/＼ へごろ/＼。合へエヽごろ/＼ へ聞く女房は呆れはてコレ へそんなのろけた鳴りやうでは怖がるお臍で茶を沸かさう へ鳴るなら大きな聲をして 竹本へごろ/＼/＼。ぴか/＼ごろ/＼/＼。ぴか/＼/＼イヤごろ/＼/＼/＼ぴつしやり ●へト鳴らねば様を付けられぬ 竹本へトいへば亭主は腹を立て 詞へそれは昔の雷だ大きな聲で鳴らずとも粹に端唄で鳴るの

が當世それが厭なら出て行きやれ 詞へなに出て行けとえ。詞へヲヽサ角を見るのも厭になつた 端唄へ我が物と 合思へば輕き傘の雪。竹本詞へ我がもの故に仕方なく我慢をすれば附上り亭主を尻に引摺り女房サア戀の重荷の子供を連れきり/＼と出て行きやれ ●詞へイエ/＼こゝは私の家 へお前は聟の小糠雨傘一本も無い身の上 竹本詞へ汝さうぬかせば了簡がと打つてかゝるを ●へごろ/＼竹本へごろ/＼/＼/＼と鳴る音に合へ傍に寝て居た小雷 へこよ/＼/＼と起上り 詞へコレ父さん。可愛さうに。母さんをへ背負つた太鼓ぢやあるまいし 合何で其様に叩くのぢや 合へ堪忍してとこよ/＼/＼ 竹本へかゝる騒ぎに隣りから婆ア雷が止めに來て 詞へエヽお前方はどうしたのぢや夫婦喧嘩は雷獣も喰はぬに野暮をゆふ立はどんな太鼓の八つ

當り出て行けとの一聲は ●端唄へ月が鳴いたか時鳥いつしか白む短夜にまだ寝もたらぬ手枕や 竹木詞へコレおなゑさんもくよ／＼と へ愚痴なやうだが 合竹木詞へコレマ泣いて居るわいな竹木へ端唄に免じて五郎介どの了簡してとごろ／＼● 詞カヽリ へイエ／＼私や打たれたからは了簡へならぬとごろ／＼ 竹木へならずば汝とごろ／＼ へ父さん待つてとこよ／＼／＼竹木へこれはしたりとごろ／＼留めるはずみに雷婆アうんとばかりに倒るれば。こりやころりではあるまいか へ醫者よ針醫とへ立騷げば竹木へ入齒の牙を呑み込んで胸につかへて苦しやといふにをかしく仲直り へ夫婦喧嘩のあらましは斯くの通りと 合褌へ手拭）で汗を拭うて居たりける へ織女は更け行く小夜風に名殘を惜む卿ち言 ●クドキ へ今宵逢うたる嬉しさに 合又一年の悲しさは別れし跡の物思ひ 合身は空蟬のうつゝなく五百機立てゝ織り立つる 合筬の通ひも上の空 合カンへ歸る雁がね來る燕春過ぎ夏にこの秋を へ待つ身にながき悲しさを酌み分けてたべわが夫と 竹木へ卿ち涙にくれければ へ中を隔てゝ夜這星これはどうした文句やら 竹木へ口説はさゝらさらりつと箒星にて掃き出しサア／＼早くお床入り へこれから我等も色まはり へ西へ飛ばうか 合東へ飛ぼかどちへ行かうぞ思案橋エヽ 竹木へ浮かれ浮かるゝ脚の下撞出す鐘は淺草か へ雲の上野の明け六つに南無三夜明けにこの姿では 合竹木ノリ地へ日の目もあればと云ひ捨てゝ。虚空はるかに 小へハヤおさらばへ牽牛織女もきぬ／＼に 竹木へあきさり衣去りかぬる へ契りも深き霧がくれ 竹木へ姿は 合へ消えて へ失せにける。

吉三／＼の三人は
太鼓にめぐる三つ巴

初櫓噂高島

三七

〔解題〕通稱「三人吉三」。萬延元年正月十四日から市村座興行の例の默阿彌の傑作「三人吉三廓初買」の大切

本郷火の見櫓の場に用ひられた淨瑠璃である。お坊吉三河原崎權十郎、お孃吉三岩井粂三郎、和尚吉三市川小團次、八百屋久兵衛米十郎。清元は四世延壽太夫・家内太夫・千代太夫、一壽・千歳。竹本とのかけ合。

安杏の家と木屋再興の爲に二人の吉三を助けようと、畜生道に墮ちた二人の兄妹を斬つて身代りに立てゝお坊お孃を逃したが、結局和尚は捕へられる。その和尚吉三を救ふためにお坊吉三とお孃吉三との二人は、必死となつて本鄕の火の見櫓の太鼓を打ち、とゞ三人は目的をとげて刺違へるといふ仕組で、振袖姿のお孃が雪に凍つた竹梯子を上る姿は、八百屋お七の火の見櫓を連想させる趣向でしかもお孃の父が八百屋久兵衛なるが如き、この一場は疑ひもなくお七吉三の火の見櫓の場の飜案である。

外題名は正月芝居に火の見櫓の場を利かせ、それに小團次の家號の高島屋を取合せたものである。

へ春の夜に降る泡雪は輕くとも罪科重き身の上に吉三々々も世を忍び派手な姿も色さめて竹本へ去年の椿の花もろく落ちて行方は白妙の へ四つの街や六つの花 權十郎へ思ひ出せば十年以前盜み取られし庚申丸今宵はからず我が手に入り粂三郎へ義理ある弟が失ひしその代金の百兩も廻りめぐつて持ちながら 權へ晝は人目を忍ぶ身に夜明けぬ内に屆け度く 粂へ思ふばかりに行く事のならぬ

は二人が身持り宵。權へ水のあはれ[illegible]こに[illegible]まりし木戸 へ塞がる胸の晴れやはれて捕縛となりし和尚吉三 粂へ助けらで星はなけれど雪明りもしやと顏を度いにも此如く權へわれ／＼二人を捕へ見合せて 權へヤそこへ來たのはお孃吉んと 粂へ行く先々の木戸を打ち 權へ行く三か 粂へさういふ聲はお坊吉三か 權へアに行かれぬ粂へ今宵の仕儀竹本へ後見らるコレ へ逢ひたかつたと木戸越しに縋る落人に軒の氷柱も影凄く へぞつと白手さへも震はれて竹本へまだ春寒くぬく刃にあらねども襟に冷たき夜風は竹本へめ鳥離れ女野に餘所目には へ色と見よ筑波ならひか。へ富士南。竹本へ吹雪嵐うりの片寬 權へ和尚吉三が意見により惡てへエ、來りける 權へ漸く跡の木戸を越事に染まぬ白縁の心をもとへ繰返し手しヤレ嬉しやと思ひしに 粂へ又もやこに入る短刀渡せし上この鎌倉を立退い

て家名の汚れをすゝぐ了簡 条へ同じ心に百兩を親へ渡して是からは男姿に立歸り生れ變つたつもりにて善を盡して亡き人の菩提を弔はんと思ひしに 掛へ天罰二人にめぐり來て行くに行かれぬ四つ辻に 条へ遁るゝだけはと思へども今宵の内には へ捕へられ 掛へ縄目の恥に死ぬのも約束 条へ今さら言つても返らぬことと クドキへ五つの年に誘拐され 合故郷を離れ旅路にて 合憂き年月を越路潟苦勞信濃につい何時か慾には迷ふみちの奥 竹本へ立ちし浮名の白浪に跡を隱して鎌倉で同じ吉三に兄弟の結びし縁の薄氷へ砕けて今日は散り／＼に落せし金の百兩は我が手に入つて行く事のならぬは何の 合因果ぞや 竹本へまだ其上に花の兄木咲きにまがふ室の梅その身替りに捕へられ へ散行く覺悟と聞くからは魁なしに救ひし上死なば諸共死出

三途 竹本へ思へばこれまで親達へ孝行さへも白玉の身の詫びするは冥途でと へ心の根締め哀れにも 竹本へ落つる涙ぞ誠なる へ暫し嘆きに沈みしがふつと目につく櫓の太鼓 掛へム、あれに掛けたる觸書に我々二人を捕へなば合圖に櫓の太鼓を打ち四方の木戸を開けとある 条へもしまた濫りに打ちし者は曲事なりと記しあれどどうで逃れぬ上からは罪に罪を重ねるとも 掛へ四方の木戸を開かせて首尾よく二品渡せし上 条へ命を捨てゝ和尙吉三を 掛へ助けてやらねば義理が濟まぬ 条へやはか打たいで置くべきか へ見上ぐる空に吹きおろす夜風に邪魔な振の袖帶に挾んで裾引上げのぼる後に窺ふ捕手 取手へヤア櫓へのぼる狼藉者 四人へ動くまいぞ 掛へム、見咎められたら 条へモウ是まで へ命一つを捨てて鐘と胸に時打つ左右より 竹本へ打つて

かゝるを身をかはし雪に喜ぶ犬ころ投げシヤ小賢しと前後よりむんづと組付く捕手の人數折重なりて へ降積る雪に山なす屋根の上お坊吉三は邪魔させじと支ゆる捕手を切拂ふ刃風に散るや吹雪の花 へ裾もほら／＼やう／＼にお孃吉三が竹梯子 合登れば滑る氷水足に覺えもなく雁の亂れて聲も跡や先 竹本へ一度にかゝる數多の捕手 へ雨は降れ／＼降れ／＼小雨濡れて嬉しき屋根の上追ひつ追はれつ戲れ 合狂ふ猫の戀路の仇枕ヨイ／＼ヨイ／＼よい仲を 合羨ましさが塀越しに覗く柳のみだれ髮 竹本へ手だれの捕手にあしらひかねたぢ／＼／＼と庇よりすべり落つれば諸共に逃しはせじと飛下れば此方は難なく火の見の上攀ぢ取つて打つ太鼓響きにつれて へ打つたる音に開きし木戸よりも遺恨の胸を開かんと和尙吉三は敵の武

兵衛逃ぐる遣らじと追ひかけ來る三人へ何を小癪なへ雪は降れ〳〵降れ〳〵小雪合積る話も小屋の中追ひつ追はれつ戯れ狂ふ合犬も女夫の草枕ヨイ〳〵ヨイ〳〵よい仲を合羨ましさが垣越しに覗く梅さへ合笑ひ顔ヨイ〳〵ヨイ〳〵よいやさ。竹本斬込む劍打落し訴人の遣恨覺えよと難なく武兵衛を刺殺す折から來る八百屋久兵衛米十郎へヤそちや別れたる悴なるか粂へさういふ聲は親父様か米へあなたは安森様の若旦那こなたは傳吉殿の息子殿か權へさてはお嬢が親父といふは屋敷へ出入りの八百屋なるか小岡次へ思ひがけない三人に繋がる縁の久兵衛殿粂へ弟が失ふ百兩が手に入つたれば權へまた我が家で紛失せし此短刀を彌次兵衛へ粂へスリヤ噂に聞きし庚申丸百兩の金が手に入りしかチエ、忝けない小へ又も捕手の來らぬ内久兵衛殿には二品を米へオヽいふにや及ぶ是さへあれば安森のお家再興に木屋のお内も再び立たん心殘れど長居はおそれ三人へ少しも早く米へオヽ合點だ竹本へオヽ合點と勇み立ち二品携へ久兵衛は飛ぶが如くに駈けり行くへはやこれまでと三人は互に手を取りかはし小へもはや思ひ置く事なし權へこれまで盡せし惡事の言譯粂へ我と我が手にへ身の成敗へ櫓太鼓の三つ巴めぐる因果と三人が竹本へ刺し違うたる身の終りへ惡事も消ゆる雪解けにへ浮名ばかりぞ殘りける。

歳旦 青樓春道中雙六　三八

〔解題〕　通稱「雙六」。萬延二年（文久元）正月作られた歳旦淨瑠璃。作者は河竹其水（默阿彌）、作曲者は二世清元齋兵衛。吉原の遊里の情景を東海道五十三次の道中雙六によそへて綴つたもの。

へ立春に廓の遊びの雙六も賽さきよしや吉原へ抜ける乞日の三つの朝、五十路にあまる宿々を茲に准へて五十間日本堤や日本橋へ共振出しの袖の梅昨日のまゝの二日醉若湯の聲に起されて心浮立つ彈初に色品川の海ならで二挺つづみの波の音川崎かけて門禮の名札もしやれて神奈川に臺の扇の不盡祝ふ程が谷すぎてほの〲と窓の戸塚に朝日影かすむ筑波に藤澤はゆかりの色の江戸町や青物賣も大磯に肴市場の名をしのぶ小田原越えて仲の町茶屋に藝者の箱根山へ戀の關所の大門でちらと三島のとりなりにはまる沼津の座敷から初會ながらも惚れすぎてツイ蒲原の勘づかれ遣手に氣をば興津川わざと鞠子のそらしてもをか目岡部の傍輩に松にしがらむ藤枝のはなれぬ仲となぶらるる、髮のほつれの島田宿大井川をも相乘に末は女夫と神々へ心で願ひ掛川も見つけられじと今切の人目を忍ぶ樂みは外にあら井ぢやないかいなへまだその譯も白須賀の二人禿の双川や仲も吉田に御油赤坂とんで算へる賽の目も一イ二ウ三ツ四日市いつか桑名に船漕いでカラ〲目出度の艪拍子も七里の渡七福神鶴と龜山初夢に鈴鹿を越えて雲となり又土山の雨となり約束かたき石部から二つ餘つて草津まで後朝送る朝歸り又も大津と京町へ上る一座の裏なじみ睦月に双六の名札もまして淸元の流の榮えぞめでたけれ

やの字結も
うちとけて

貸浴衣汗雷

三九

〔解題〕 通稱「夕立」又は「お熊」。慶應元年八月市村座上場の默阿彌の作「處女評判善悪鏡」（白浪五人女）の四幕目染川二階の場に於て御殿女中竹川實は須走りお熊（市村家橘、後の五世菊五郎）が眞野屋德兵衛實は盜賊神道德次（坂東彦三郎）を夕立の雷鳴を利用してたらし込む場の色模様に隣の二階座敷で聞かせるといふ趣向の淨

ゐり。四世延壽太夫に家内太夫、三絃は順三に磯八。

白浪五人女（雲切りお六、須走りお熊、木鼠お吉、おさらばお傳、山猫おさん）は「雲切五人男」を女に書き換へた趣向で、さして好評ではなかつたが、この淨瑠璃の場は大層受けたといふ事である。

へ夕立の雨も一降り雨の脊を分けて涼しき川岸に 合 柳の枝の寄添ひていつしか色に鳴神の。音さへ遠き筑波東風 合 へ殘る暑さを川水へ 合 流す上手の歸り船 合へ 草の葉に宿りし月も小夜風に 合 惜やこぼれてはらはらと露か雫か 合 雫

か露か濡れて色増す野邊のいろ 合へ 粋なお方に釣合はぬ 合 野暮なやの字の屋敷もの十の歳からお小姓の勤め通しておそば オトス 役 合カン へ二十は越せど色戀は掟きびしく内主の露にも濡れし事はなく。へ跡はいらへも長づとの洒落り

てなまめかし 合へ 惚れた男に手を取られ飛立つ程の嬉しさは オトス 合 轉より胸に波打ちて 合 紅麻うつる顔のいろ 合 へ又一しきり降る雨に仲を結ぶの雷や 合 こはさに抱きおほ川の深き契りぞかはしける。

空も曇りて
雲ながす墨田川

夕立碑春電（ゆふだちづかはるのいなづま）　四〇

〔解題〕通稱「夕立碑」。明治十年四月新富座興行の默阿彌の作「富士額男女繁山」（女書生繁）の第四幕目大切隅田川の場に用ひられた淨瑠璃。惡車夫御家直實倉橋直次郎市川左團次、妙法蓮七市川小團次、お繁尾上菊五郎。清元連中は挿畫に詳しい。

上州伊香保在の妻木右膳の女繁は男裝して育上げられ、廿五六歳の頃東京に遊學して神保の食客となつたが、郷里の貧困な父の重病との知らせに、主人の金廿兩を盜んで歸京する。その途中で惡車夫御家直のために女と

親破されて犯された。金を父に渡して歸京した繁は一切を神保に告白すると、神保は思ふ處あつて彼を表面權妻として庇護する。然るに右膳は御家直のために殺されて金も奪はれた。これを知つた繁は色仕掛で直次郎をたらして駈落の體で夕立のあと夜更けて隅田川の堤へやつて來て、折柄來かゝつた妙法蓮七の酒を貰つてこれを直次郎に飲ませ、その醉つたのにつけ込んで親の敵と名のつて斬かけて首尾よく復讐の目的を達する、これは父が殺されてから三ケ月目の事であつた。こゝに收めた淨るりが卽ちその道行から敵討迄の場面であるが、セリフが省かれて居るから筋が通れないけれども、この場を中心にしていへばざつとこんな仕組である。（詳しくは「默阿彌全集」の原作御參照）

合山家は雪もふるさとの 合使りに急ぐ 藤尾からはぐれて一人畦道を 合肩に掛〽卯月とは合いへど櫻も莟がち合川風寒き角田堤筑波颪に花よりも合更けて往來の人散りて空に殘りし朧月合〽誰を待乳の山かげへ漕ぎ行く船の合艪の音も絶えて中洲へ落つる雁なれも女夫か合これも亦埘へ急ぐ二人連〽岸に枝垂し青柳の糸の音〆も川水に合さえし端唄の障子船合〽香水の合かをりゆかしき髮の毛を。合掻上げしまゝ横櫛に。合さすや窓洩る月の顏。どれが合女か男やら。合わかぬ。姿の梅柳。合にくい仲ではないかいな合〽まだその時は如月に。

旅の オトス 笑。合〽思はぬ人に相宿の合人目忍びし風呂上り合〽ツイほころびし梅ならで合〽つゝむ素性を香に知られ合〽中を隔てし垣越えて結びし夢の合草枕〽見返る此方へ柴又から歸る法華の合講中が合〽連に四つ木の



繪表紙

けたる吸筒の合瓢を友にぶら〳〵と土橋を跡に隅田村や里の子供が合鄙びたる唄に興じて來りける合ヘ上總濱邊は。合七里の法華爺さまござれや。婆さまもござれ合葛籠脊負うて千ケ寺參り合太鼓叩いて題目唱へ合どこどんどがやれ合どがやつしよ叩く拍子の合面白やヘ祖師のエ祖師の眞筆帝釋天王合利益はあぶるゝ合井筒の清水庚の猿ぼて合七杯呑んだら腹がだぶ〳〵合だどぶだぶ合ヘ野がけ半分合女中の一群合キヤツキヤと騒げや合お申の緣日合賑はしいではないかいな合ヘぞつと怖氣も立つ鳥の羽音に畏ぢて合跡も見ず眉毛ぬらして急ぎ行く合ヘ折しも告ぐる淺草の合鐘の音沈む雨催ひ合水にうつりし星影を。一つ二つと。算ふれば。三つは。うき世を捨鐘と。心。せはしき。十二時に合堀の灯影も影薄く。暗き堤へ。立出でてヘ南無妙法蓮華經〳〵ヘ姿といへど名ばかりに夜の臥床も別にして淺き御緣にありながら合深き御恩を蒙りし合ヘ勝負〳〵と詰寄れば合隱す由なく枯蘆の穗にあらはれて覺悟なしヘ傘追取つて立上れど合風に追はれる鷺ならでふらつく足を合踏みしむればヘ盡せし孝も不孝となり。水のあはれや父上は合はかない最期なし給ひヘ覺悟をせよと振上ぐる合白刃の光。川水にきらめく春の電合夕立塡の三圍に後の浮名ぞ殘るらん〳〵

忍逢春雪解　四一

〔解題〕通稱「三千歳」。明治十四年三月新富座興行の「天衣紛上野初花」（增補河内山――默阿彌作）の第六幕目大口寮座敷の場に出した淨瑠璃で、直侍が入谷の寮なる三千歳に逢ひに來た所の色模樣に使つたもので、「軒の雫に袖ぬらす思ひ入谷の別莊に」と角をつけてある。大口抱三千歳岩井半四郎、寮番喜兵衛中村鶴藏、新造

千代川澤村清十郎、新造千代春尾上梅三郎、くらやみの丑松市川小團次、直侍事片岡直次郎尾上菊五郎。清元連中は挿畫に詳しいから述べるまでもない。

へ冴え返る合春の寒さに降る雨も合暮れていつしか雪とキザミオトスなり。上野の鐘の音も凍る合細き流れの幾曲り。末は田川へ入谷村合へ廓へ近き畦道も。右か左か白妙に合往來のなきを幸ひと合人目を忍び佇みて。合菊五郎詞へ思ひがけなく丈賀に出會ひ頼んでやつたさつきの手紙。モウ三千歳の手へ屆いた時分、門の締りが明けてあるか。ソツト門からあたつて見ようか。へ雪をよすがに直次郎合確に爰と目覺えの門の扉へ立寄れば。風に鳴子の音高く合驚く折から新造が燈し携へ立出でて。詞へ今門の鳴子の鳴つたのは風の様ではなかつたが。へ大方こゝへ直はんが。へア、

モシ静かにしなましよ。へ差足なして千代春が扉へ寄りて聲ひそめ。へ直はんざますか。へさういふ聲は千代春さんかえ。へ早くこつちへ這入んなましよ。へ氣轉利かして奥と口合互に心合ひ鍵に。扉を明けて作ふ折柄。門の外には丑松が。内の様子を窺ひて。ひとり頷き雪道を。飛ぶが如くに急ぎ行く。合へ晴れて逢はれぬ戀仲に合人に心を奥の間より。知らせ嬉しく三千歳が

飛ぶが如くに立出でて譯も涙に縋り付き。合詞へ花魁。へ直はん。へ爰でゆつくり。へお咄しなんしえ。へ廓に馴れたる新造が合話の邪魔と次の間へ粋を通し



て入りにける。へ跡には二人差合ひも合涙拭うて三千歳が恨めしさうに顔を見て。クドキ新内へ一日逢はねば千日の。思ひに私や煩うて合針や薬のしるしさへ。泣きの涙に紙濡らし合枕に結ぶ夢覺めていとゞ思ひのオトスト十寸鏡。合へ見る度毎に面痩せて。どうで存らへ居られねば。殺して行つて下さんせと。男に縋り歎くにぞ。へ今更いうて返らぬが。悪事をなしてお仕置を受ければ先祖代々の墓へ這入れぬ此身の上。回向院の下邸へおれが墓を建てゝくれ。へこれが頼みと手を取りて合共に涙にくれにける。合へ男も愚痴にからまれて持餘したる折柄に合始終を聞いて寮番の合喜兵衛は一間を立出でて　かう云ふ内も寸善尺魔。障りのなきうちサア〳〵と合云へどこなたは水鳥の浮寝の床の水離れ茂廬原を立ちかぬれば　合へげに桓山の悲しみも合斯くやとばかり降る雪に積る思ひぞ残しける。

色増艶夕映

円二

〔解題〕通稱「屋金」。明治十四年十一月新富座興行の「島鵆月白波」（明石の島蔵）の三幕目望月輝妾宅の場に使つた淨瑠璃で、その角書に「隣で語る淨瑠璃に過ぎし其夜を思ひ出で」とあるやうに、望月輝（市川團十郎）とその妾辨天お照（岩井半四郎）とが隣りで語る清元を聞いて身の上を語り合ふといふ場の色合に用ひられたもので、こゝへ松島千太（市川左團次）がやつて來て強請るといふ仕組になる。この淨瑠璃は四世延壽の妻女お葉で、初演の時も好評を博したといふ。

この芝居は默阿彌が一世一代白浪物の書き納めといふので執筆したもので、悪事のありたけをした上改悟した明石の島蔵が、とゞ同じ仲間の松島千太を眞心をこめて說き伏せて改心させるといふ作意であつて、今でもよく上演される。

へ雁金を合結びし蚊帳も昨日今日合残る暑さを忘れてし肌に冷たき風立ちて晝も音を鳴く蟋蟀に合哀れを添へる秋の末。合三下りへ我が身一つにあらねども合憂きにわけなき事にさへ合露の涙のこぼれ萩曇り勝なる空癖に合夕日の影の薄紅葉梅も櫻も色變へる中に常磐の松の色。上クドキへまだ其時は卯の花の初めに白河の。關はなけれど人目オトスをば合厭ふ隔ての旅の宿合飛交ふ蝶に燈火の。消えて若葉の合木下オトス闇。合カンへ思はぬ首尾にしつぽりと結びし夢も合短夜に覺めて恨みの明けの鐘。

合ハウタへ空ほの暗き東雲に。木の間がくれの時鳥。鬢のほつれを掻揚げる合櫛の雫か雫か雨か。濡れて嬉しき合朝の雨。へはや夏秋もいつしかに合過ぎて時雨の冬近く。散るや木の葉のばら〳〵と。風に亂るゝ萩すゝき。へ草の主は誰ぞとも名を白菊の咲出でて匂ふこの家ぞ知られける。



絵表紙

四君子 四三

〔解題〕明治時代に於ける清元お座敷物の一代表曲。四君子（蘭・竹・梅・菊）を材題とした祝言物。正本によれば明治二十年八月廿日の開曲。作曲者清元梅吉。作者鈴田徳之助。

ヘ鶏の八聲もわきて花やかに、きらめき出づる初日影、岩戸のひまの オトス 見えそめし 合神代もかくや明らけく、治る御代の空のどけく 二上リ歌ヘ咲く梅が香も手弱女の、袂に通ふ都の春 合大宮人も遑あれや 端歌ヘ櫻かざして如月や、彌生の花の白雲もいつしか青葉になりぬれば 合おのづからなる 合雨露の恵にたかく生ひ出でて クドキヘ誰がぬぎかけし藤袴 合カンヘ風のまに／＼かをる香の深きぞ花の 合操なる秋待ちて咲く 合菊の オトス 花 合下行く水の流汲む人も齢を延るてふ ナガシイロ その故事も名にし負ふ東の野邊の黄金艸 二上りヘ誰が貢の數に積む 合それは花の 合しめやかなる 合イロ又此君と名づけしは霜をも凌ぎ 合雪にも折れず 合雲井に茂る千代のかげ ウタヒ ヘ竹の園生の末永かれと ヘ君が千歳を祝ひける實に佳色あり御代の春。

新曲 青海波 四四

〔解題〕 五代目延壽太夫（現家元）名びろめの時に作られたもので、作者は永井素岳。清元家元の定紋青海波に因んで題とし、海の四季を敍したもの。作曲者は延壽太夫と梅吉。明治三十年六月三十日兩國中村樓で披露、タテ延壽太夫、ワキ延壽翁（四世）ツメ志津太夫、三絃は梅吉、上調子菊輔。五世延壽太夫時代作曲の淨瑠璃中の一代表曲。

謡唄ヘ神代より光り輝く日の本や。干珠滿珠の世語りを今に傳へて陸奥の千賀の鹽竈煙立つ霞に明けし松島の。眺めは盡きぬ春の日の汐の干潟を行く袖にうつす薫りもなつかしき。梅の花貝櫻貝。みるめの磯のあかぬなる。花の跡

踏む夏山の筑波が覗く。船の中。クドキへ逢ふ瀬の浦の私語いつか浮名も立つ浪の。打込んで居る眞心に。待つとは戀の謎々も解けた素顔の。夏の富士。淸見の沖や三保が崎。まつに本意なき靑東風に憎や蘆邊の片男波。その通ひ路は星合ひの中かけ渡す。鵲の。天の橋立きれ戸とは。裏表なる播磨潟。汐汲む海女のしるしとて。みどりの秋を。殘したる戀は昔の謠ひ物。二上りヘアラめで鯛は神の代に。赤目と召され初めしより蛭子の神の釣上げし。二世のかための懸鯛に緣を繫ぐ諸白髮若やぐ尉とうば玉の。闇の景色は。漁火のちらりちら〳〵。月の出潮に。網引の聲の節も拍子も。一樣に。三下り船唄ヘヤンラ月の名所は餘所外に鳴いて明石の濱千鳥ヤサホウ〳〵　合ぬしに淡路は氣にかゝる。室のとまりをソレ松帆の浦よヤサホウエンヤ〳〵　合面白や。ナホルヘ波も靜かに靑きが原を中にひかへて住よしと。名も高砂の女夫松。雪にもめげぬ深緑榮行く家の壽を。猶幾千代も延ぶるなる直ぐな心の淸元と。目出度く祝ふ泰平の君が餘澤ぞ有難き。

新曲　助六曲輪菊

〔解題〕　大正四年市村座彌生興行の中幕に用ひた淨瑠璃。作曲者は五世延壽太夫。從來何十回となく繰返された助六劇に淸元を用ひた事は無かつたが、この時始めてであつた。淸元連中は延壽太夫ワキ桂壽郎ツメ喜久太夫、三絃梅吉上調子吉太郎であつた。桂壽郎は今の榮壽太夫で、この時始めてワキとして公開の席を勤めたのであつた。

配役の主なるものは助六菊五郎、意休榮三郎改め彥三郎、揚卷芙雀改め菊次郎、白酒賣勘彌、門兵衛薪助、福

山東藏、朝顏新十郎、白玉國太郎等であつた。

前彈合〽鐘は上野か淺草の名もなつかしき花川戸合よしや交せし來し方を思ひ出見世や淸搔の。音締めの撥に招かれて。間夫が名取の草のはな。出江戸ガカリ〽思ひ染めたる五つ所紋日待つ日の便さへ。子供が便り待合のカンヘ辻占茶屋に濡れて寢る。雨の三の綸の冴え返る詞〽此鉢卷は過ぎし頃由緣の筋の紫も。君がゆるしの色見えて。移り變らぬ常磐木の。アゲブシ〽松の刷毛先透額今堤八丁風さそふ。日當の櫛花の雪。傘に積りしオトシ山合ひは。合カンヘ富士と筑波を挿頭草合草に音せぬ塗鼻緒〽一つ印籠一つ前。三下り合〽せくな急きやるなサヨエ。浮世は車サヨエ。ナホルヘめぐる日なみの約束に。廓へ立ちて音づれも。果は口說のありふれた。手管に落ちて

睦言の。姿振ゆかし君ゆかし〽しんぞ命をあげ卷の。これ助六が前渡り。風情なりける次第なり。

（淸元節終り）

第七編　新内節之部

中根屋綱五郎 傾城花さき 二重衣戀占（ふたへぎぬこひのうらかた） 一

〔解題〕 通稱「花咲綱五郎」。本町の中根屋綱五郎は吉原の傾城花咲に溺れて勘當の身となり、その後花咲は請出されて淺草に圍はれる身となつた。陰陽師となり下つて花咲の行方を捜して居た綱五郎が、三年目にめぐり合はせて、花咲の變らぬ眞心を知つて、共に相携へて駈落をするといふ筋で、如何にも豐後節の初期らしい、又新内特有の構想らしい作柄である。文章は相當に整つて居り、又占ひ師綱五郎の口に任せての言葉なども手に入つたもので、作者に相當に文筆の力があつた事を示してゐる。

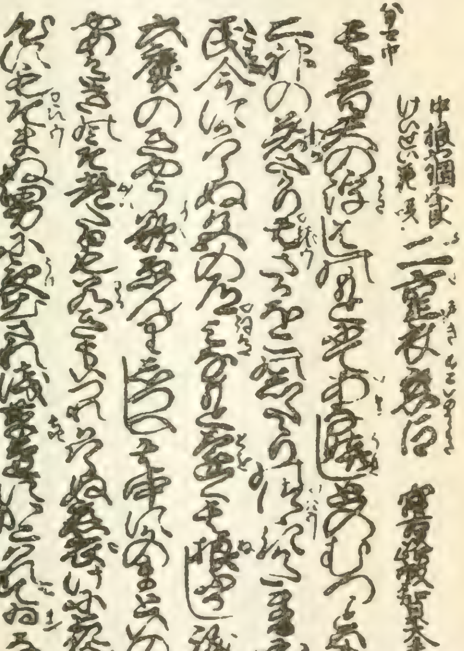
新内節の元祖若狹掾の作であるが、同流の語り物としては最も古いものの一つであつて、若狹掾がまだ宮古路敦賀太夫と名のつて居た時代の正本のあるのによつて見れば、寛保、延享頃迄の作かと思はれる。

本曲と宮古路豐後の正本「二世の組帶」との二篇が「糸櫻本朝育」の有名な粉本となつたものかと考へる。（淨瑠璃名作集下、糸櫻本町育解題參照）

この後篇として富士松魯中の作曲した「道行花の島臺」といふのがある。相携へて駈落した花咲綱五郎の二人は、佃島在の綱五郎の乳兄弟忠七の許に辿りつくと、待構へた綱五郎の叔父中根屋善兵衛の取り成しで二人は目出度く夫婦となるといふに終る。しかも善兵衛は綱五郎の父綱左衛門と諜し合せて花咲を身請して居つた旦那といふ仕組である。「明烏」に對する「眞夢」よりは目出度い行き方。

鶴賀若狹掾は初め宮古路敦賀太夫といひ、宮古路豐後の高弟宮古路加賀太夫の高弟であつた。寛延元年、朝日若狹掾と改めたが、朝日を止められたので、敦賀太夫に因んで鶴賀若狹掾と稱へた。その改名披露として寶曆八年にこの「二重衣戀占」を森田座で語つた。晩年薙髪して鶴翁といひ、狂歌を好んで狂名を大木戸黑牛と號した。天明六年三月七十歳（或は七十五歳）で歿した。その相弟子で無類の美聲家であつた加賀八太夫（鶴賀新内）と提携して新内節を大成した人で、新内節中初期に屬する多くの名高い作は大抵この人の自作自調であるといふ。その女を鶴吉といつてこれ亦新内の名手として聞えた（文政十年歿）。

其昔天の浮橋のもとにてあな嬉しとの睦ナス言は。地中また二神の若盛り。ハル地その逆鉾の滴りの。續きハル固まる國津民今に變らぬ色の道。詞色 源遠くぞの根深し誡に六塵の樂慾厭離しつべし其中にかの惑ひの一つ止めがたきのみぞをいたるも若きもいづれ變らぬ戀衣げに花咲は心にも。ハル染まぬ男に請出され 長地淺草邊に圍はれて ギン居ながら見ゆる觀音のカヽリ塔は五重か三重の罪深い身のいとゞ猶。かの人戀しゆかしいに心浮かればおのづから。ギン地通ふ男を袖に置く。露の涙の乾く間も。泣きハツレ暮すこそ。哀れなる。詞女子どもは寄合ひてつべこべ話すも人の噂。飯焚のお鍋がコレおかね殿。おぬひ殿。何とアノ御新造様の御煩ひいつようなる事ぞ。さして取りかぶつてお臥るでもなく。只しく／＼とおむづかつてばかり。旦那様も此様に女ばかり 過ぎて合點がいかぬ。何とマア旦那衆では氣遣ひと、毎晩々々遠い所からお の心は大人しいものではないか わし



古版正本巻頭

通ひしかしお一つ所にお臥りながら何 らなら夜晝の立て分けなく障子も襖もも徒らなされぬやら。アノ信心な旦那 差詰め引詰め軍して直ぐに討死する氣が手水召すと直ぐに看經。どうも奇麗 ぢやにと オトシ顔を。締めて話しける。半

太夫節行く水と過ぐる月日とユリ散る花と。遣ひ棄てたる身は元へ。ギンいづれ返らぬ世の下オス中や。地憂き勘當に逢ひ馴れし。かの花咲を尋ねんと身は占の裏表町屋々々をスヱル聲高く。詞當卦本卦の占願ひ望みの考へ手の筋見るは法樂と。呼歩く身は本町に名高き中根屋綱五郎が成れる果てこそ。淺ましき。詞女子ども聞付けて何でも是はよい慰み呼込んで手の筋見せ貰らうではあるまいか。コリヤよからうと立出でてコレ占と呼入れられ。上り口に腰打ちかけ。この法印が占は弘法大師一子相傳にて或は人相のよしあし失物賍落夢判じ嫁入聟取勝負事病人の生き死に釜の唸り犬の遠吠え猫の屋根歩き鷄の宵鳴き鴉の行水年寄の齒みがき若息子の看經する迄奇妙な見通し錢次第手筋見るは法樂なりとフシしやべりける。そんなら法樂から見て貰はうと。腰元のおかねが出す手を打眺め。ハア是は美しい手の筋。先づ器用筋と見ゆる名を指して見せうム、おぎんか。イヱ／＼。おりんか。イヱおかねと云ひやす。ムム成程その管鈴も銀も金ぢや。さて斯う見た所がこなたの望みは堺町が見たからうのソリヤ笑を含んでぢや。サアわつちにも見て下さんせ。エヽこの鍋殿はおれが仕舞ひもせぬもの。オヽ待つたり／＼。扨とこなたの年を當てヽ見せう今云ふから當つたら返事をさつしやれムヽ顔付から姿格好から。手の筋に合はせて見れば大方十五六七。アイ七でござんす。七か。エいやと云はれぬものぢや。手の筋に年の數がある。サアお鍋殿どれコレハ汚い手ぢや。いか樣お鍋殿ぢや眞黑な手に弦かけ筋がある。ドレとてもの事に人相見て進ぜうヤア貴様は飯焚ぢやな。その證據は顔が杓子ぢやハヽ、何と。奇妙か。そんならわしが願ひが叶ふか叶はぬか見て下さんせ。ムヽ是はちとむつかしいがそれも叶ふすべならつい叶ふ叶はぬ事ならほつても叶はぬ。マア何の願ひぢや。アノわしが身の上。アヽそれがどう知れるものか世間の喩にも陰陽師身の上知らずと云ふ。いかさま是は尤もとフシ頷いてこそ退去りける。詞お物師のぬひが思ひつきナウ御新造樣の御病氣占うて聞くまいか。コリヤいか樣よい幸ひコレ坊樣。これの御新造樣疾うからの御煩ひ考へて見て下さんせ。ヤア是はよつ程むづかしいが。端的に占ひましよと懷より書物取出し押開き算木を並べ。心肝腎肺脾命門。ハヽ是は幾つばかりの人ぢや。二十四五でござんす。ムヽいつからの病み付きぢや。さ

れば床に就くと云ふでもなければ。いつとも知れずマア二三年このかた。オオよし〳〵ハヽア知れたそれはぶら〳〵といふ病ひぢや。神佛を御信心なされ拙者が祈禱致したら早速ようござらう。總體病にはそれ〴〵の神佛の受取りがござる先づ頭の病は愛宕山。胸の燃えるは淺間の明神腰より下は穴八幡とねの聖。紺屋の病は愛染明王若菜の病は南無地藏菩薩熱病さますは比叡の山。番太郎なら根津權現。勤めの身なら蛸藥師。泣く子供には雨の宮。胴取りならば四三五六の明神。借錢乞ひには泣き不動。よみ打ちならば南無釋迦如來と摩耶の明神。皆それ〴〵の品に依つて祈禱いたす。マア御新造樣にお目にかゝり樣子見て上げませうと。云ふ聲洩れて奥よりも。上ギン主の女は思ひある。地氣は浮かねどもかの人に ヒロヒ もしや。逢ふ瀬の緣もがな占ひ開くも念晴らしと立出でて見る顏と顏。ヤアそなたは花咲。コレ〳〵確にそれと見通しの法印樣滅多に麁相な事はあるまいが考へ違へもあるもの。急かずと私が身の上。樣子があらうと何事もあたり障りのない樣に。占うて下さんせ。扨々不思議な占ひさんにお目にかゝり。嬉しや私が願ひ占つて貰はうと思へば胸が塞ると スヱフシ 隱し淚にくれ居たる。詞エ お前樣がこれの御新造樣でござりますか。ハテナウ御病氣とはおつしやれど。達者さうに御苦勞もなささうなお顏付。皆の業が合點いかぬがお道理いか樣知れぬ人心よもや是程の御病氣とは思はなんだ。エヽ聞えた。金性に目が立ち眩み請出されたは福德か慾德か。テモ水臭い水性。定めて手足が冷えませう。これ八卦の表に書いたる木性も嘘土性までもと燒いて佇んだる火性が高ぶつたる顏付。エ胸が燃えるでござりましよ。夜晝となく通ひ詰めたる通ふ神の祟りがあらば。私が遊年祈禱してさつぱりと除けを致して上げましよ。アヽ手前が生家なまゝに。人の詞を眞實震の卦と思ひ兌上斷まぎれてのぼり詰め。親の坎中連受けて當卦本卦をば追出され。モウ絕體絕命とは思へどせめて今一度は逢ふも不思議逢はぬも不思議と占や算。離坤さうに女の詞を一代守本尊とはいかい癡け。アヽ巽下斷々々微塵も遊魂は殘らぬと淚もこぼさぬ當言の心ぞ。思ひやられたり。詞女は顏を打赫め。段々樣子のある私が病ひ差向ひに心を明かし占うて貰ひたい事もあればナウ皆の者。今から觀音樣へ往て伊織が能でも見て日が暮れたら直ぐに馬道

の伯母様へ寄つて遊んでおぢや。必ず内に氣遣ひせずゆる／＼と少々は泊つてなりともおぢや。アイそんならおぬひ殿。おかね殿。奥山へ往て腹一杯遊ぶが嬉しさ跡も見ず駈出し行くこそ愚なれ。花咲跡を見送りてア、嬉しやと傍へ寄り。明暮れ戀しいゆかしいの心が通じてお健な顏。不思議な所で悲しいお姿見まするとスヱ抱き付くを突飛ばし詞ヤイおのれが腐つた眼にもおれが姿が悲しいか。誰あらう中根屋綱五郎とも云はるゝ身が願人坊主同然のこの有様。これ皆おのれがする事ぞ。ふと逢初めしカヽル其日より。ウレヒ一日逢はねば戀しうて。内に居るにも居られぱこそ。堅い親父や手代の目を忍びて通ふ夜ばかりか晝も宿へは歸らずに上り詰めたる色二階の梯子親に逆らふ此身の上勘當受けしは一昨年の夏の衣は薄くとも。互の契りは厚かましう我さへ見にくい形をしてそなたの方へは行かれぬと逢ひたい見たい戀しいも我が身に恥ぢて自ら。遠ざかりたる其内に請出されしと聞いた時。腹が立つやら悔しいやら。無念な命永へたもおのれに逢うて此恨み云はう／＼と一筋に思ひ付いたる陰陽師。ほんに斯くまで欺さるゝ。身の上知らずうか／＼と。死なずに居たが口惜しい請出されて榮耀する慾の熊鷹夜鷹め犬め畜生めと叩いつ踏んづ恨み泣き。頭巾も衣も投付け。打付けやつぱり元の厚鬢の油氣もなき亂れ髪スヱル言譯もなき風情なり。花咲涙の顏を上げ。カンコレ聞えぬぞえ綱五郎さんお前に進ぜた此身體。打叩かるゝは厭はねど今云はんしたが眞實ならそりやあんまり酷いぞえ。何ぼお腹が立つとても心からわしが可愛けりやさう氣強うはならぬもの。いふは今更過ぎし秋初の一座の連れの内お前の姿振挨拶が。どうやら逢うて見たならば面白さうな男ぢやと。ひよつと思ふとしみ／＼と好いた心が通じてか私にお前が逢ひたいと云はんす時の嬉しさは飛立つ胸を納めた返事。嘘ぢやないかえ誠ぢやと。詞の根をも押晴れて逢うた其夜の面白さ。初手は色浮氣で相惚れの指に互の名を彫合ひ。後は眞實いとしうなり。疑ひ晴らす誓紙の數々重なる仲を親方がッカンせけば一倍逢ひたさに隠れて通ふ夜毎に。首尾して逢うて歸す夜は。其移り香を其儘に抱いて寢てゐる夢心ツキユリカヽリ逢はで戻せし其時はギン外へも寄りて増す花の中色を稼ぐか飽きやうかと。一人氣を揉み寢もやらず。カンほんに浮世と諦めても。アハブシ猶いやまさる物思ひ。勤めのつ

らさもこなさんに添ひたいばかりに凌ぐぞや。それに久しう便りもせず茶屋船宿へ日に千度文言傳の返事もなく。恨み楽ぜし折柄に。今の御人に請出されて死なんとせしかども此世でお前に今一度と。思ひ苦しき明暮れの露忘れたる夜半もなく泣かぬ日とては色ないわいな。カハリ長點殊に今添ふ男には例の昔山宿かへ猶來る度に。床で帶さへ離かぬ身を請出されし今日迄も。氣合ひが悪いと振付けて肌を觸れぬは神かけて僞りならぬ證據ぞや。是程心を盡すもの連れて退ことは云ひもせず。今の詞の胸戀ミ。カン何の因果で其様に氣強い男が色わしや可愛と。人の聞くをも打忘れスヱフシ口說き立てゝぞ泣叫ぶ。詞色時次郎も涙にくれ、オヽ誤つたさ程深い心とは知らず恨みの段々許してたも。其心を聞く上は少しも早く連れて退き。添ひ遂されず捕へカヽリられ。屍は梢に曝すとも。此世の本望いざ來いとクリヒ夕暮暗き宵闇に紛れて。出づるぞ危ふけれ。

山名屋浦里
春日屋時次郎　明烏夢泡雪　一

〔解題〕　通稱「明烏」。新内といへば直に聯想される程の名曲。鶴賀若狭掾作。明和六年七月三日に幕府の御賄方伊藤伊左衛門の悴伊之助(廿一歳)と吉原京町二丁目蔦屋の抱へ三芳野(廿四歳)との情死事件を材題として安永元年に作つたものであるといふ。本曲は非常に世に行はれて、後には歌舞伎でも演ぜられるに至つた。關根只誠翁の情死錄によれば、その始めは弘化四年大阪大西芝居で時次郎中山文七、浦里澤村其答で、鶴賀馬蝶が淨るりを語つたのであるといふ。併し大阪歌舞伎年鑑ではこの年にはその記載はなくて、嘉永三年三月大西芝居で「明烏夢泡雪」興行と見えて居る。江戸では嘉永四年二月、操芝居では嘉永六年二月である事は、清元及び義太夫の明烏の條下に述べて置いた。

色へ夕暮ごとの。中浮ギン雲に。地心を戴せし四つ手駕籠。ハルほんに揃うた肩と肩。カン重き戀路もギンガカリ輕々と。かけると思ふ己が身も。かけられて居る心同志。逢へば別れが思はれて。鳥はさのみ引憎合からで。ハルあの雞がめかりせぬ。早く唄ふも客による合。ギン辛氣々々が差詰めて。中唄胸の痞も今は早や。ド押すに下らぬ揚屋町引地五丁まち/\ウタ中噂ギンある。時次郎は。山名屋を。ハシルせかれて忍ぶ鷹の目にかゝる憂き身ぞ。カヽリ夜のユリ鶴トメ。唄カヽリ吉原雀口ギン々に。ニ死んでしまへば時鳥冥途の鳥も聞くものを。死なぬ先から先の世を。思ひやりたる涙川オトシ心の。カハル底は人知らじ詞へ夜店支度にそれ/\の部屋へ櫛箱鏡立伸のよい同志二三人新造交り寄合うて。憂き身の上に取交せて。客の噂もマエ数々に。詞昨夕の色口舌この中の涙話の溜息に。詞昔戀しと云ふもあり。いつもの事とは云ひながら取分け今日の身拵へ可愛い男に見せるのが。ヒロヒ羨ましいと云ふもあり。新造子供色あどけな/\。詞今日は私は好かぬ客約束でござんすが。どうぞ晩には來ぬ樣にと。色詞觀音樣を拜んだり呪ひもする疊算。來ると當れば置き直す。話の腰をかしさ堪へ。詞好いた好かぬはまだ早い。馴染の一人づつも取止め樣とはせず。唄人の名代に出るばかりが手柄ぢやないと。カヽリ姉女郎の一聲に。ミン鼠フシ婦ひして。合衣桁なる小袖疊めばま一人は。座敷掃くやら鏡立片トシ附け廻るぞ忙がしき詞へさあ/\もう見世が出たぞえ身拵へが濟んだらば早う出さんせ/\と。遣手のかやが罵れば。カヽリ皆一時にばら/\とドりる階子の音絶えて座敷オクリ座敷も靜なる江戸へ春雨の。眠ればそよと起されてナホス亂れそめにしギン浦里は。文七百どうした縁でかの人に。長地逢うた初手から可愛さが身に泌々とシヅム惚れぬいて。こらへ情なきなつかしさ。ツナギ人目の關の夜着の内明けて悔しき鬢の髮スエ撫上げ/\詞ナウ時次郎さん此樣に堰かれさぞ氣づまりにござんせう。それを堪へて下んすも私可愛と思うての御志。嬉しうござんす忝ないと。色抱き締むればい引やおれ故と引締めて。物をも云はず縮合ひて跡は涙にくれけるが。男涙をはらりと流し。詞いつ迄かうして居たとても限りもなき二人が仲。長居する程そなたの身詰り。此程段々話す通り國の親父の江戸表地頭の方へ出す金。二百兩はさて置いて。其外一門出入り屋敷。騙り盡くして此有

様、そなたも共にと云ひ度いがいとしいそなたを手にかけて。どうなるものぞ永らへて我亡き跡で一遍の回向を頼むさらばやと。云捨て立つを取付いてあんまり カン 酷い情なや。ハシル 今宵離れて。こなさんの儘で居さんす共身なら。又逢ふ事のあらうかと。樂しむ事もあるべきが、死なうと覺悟さんした身をいかな氣强い女子ぢやとてどうして放し遣られうぞ。合長地 擁て二人が取交はす 合 起請誓紙はみんな仇 合 どうで死なんす覺悟なら。三途の川もこれ此様に ハル 二人手を取り諸共と。なぜに云うては下さんせぬ。私を殺さぬお前の心。嬉しい様でわしや厭ぢや。此程お前の顏形變れさんした共折から 合 昨夕の床の睦言に。死期を憐しむこの白無垢。是程まで思ふもの。ハシル 捨て行かうとはさりとては鬼より怖い御心。わ

しや遣りはせぬ放しはせぬ 合 殺して置いて行かんせと。男の肩に喰付いて（男の膝に縋り付き）。身を震はして泣き居たる へ遣手のかやが聲として此子供は火を見ると眠むるかと聲はしたなく罵りて。浦里さん／＼ちよつとお目にかかりましよと呼立つれば。浦里はつと思へども素知らぬ顔して。何の用でござんすと云へばかやがつこど聲。いや外の用でもござんせぬが、ア お前の客衆は聞けば昨夕から居續けにござんすげなが。若い衆に問うてもどの客衆ごやら知らぬといふ今の口舌の臺詞も時次郎様に極まつた旦那が呼ばんすサア ござんせと、浦里が手を取つて引つ立つる。隣座敷に亭主待兼ね。髻を摑んでくる／＼と手に絡み。どうで口では聞かぬ奴と。罪も報いも後の世も。白 髪頭の顳顬も。張切るばかりのやら腹

立ち ハルオトシ 引立てゝこそ下りにける 詞 へ跡に大勢男ども。あの客故にあの様に憂目に逢はしやる浦里様殊に憐りも餘程あり。それに隱れて二階へ上り。居續けなどとは太い奴。引摺り下して踏みのめせと。戀路の闇の暗がりを。カヽリ 無二無三に引出し踏むやら打つやらむしるやら。叩き据ゑられ是非もなく／＼。箱階子やう／＼傳ひ下りけ 引 るを。直ぐに表へ突出し。門の戸はたと差固め錠さす音ぞ嚴しけれ。詞 内には亭主が浦里を庭の古木にくゝり付け。折ふし降り來る雪吹雪箒おつ取り打つ音に。禿みどりが取付いて。旦那様もう御堪忍なされませと歎く禿も共に縛り。浦里涙の 色 顏振上げ。詞 私が身は是非もなしみどりに何の科あつてあの子は赦して下んせと。色 云へば亭主も不便さと思へどわざと聲あら

く。詞ヤイ浦里客を堰く事客の爲女郎大切身代が大事。あの客も未だ若き人餘り繁々通はれては。親がかりなら勘當受け。主持ちならば親方の手前仕損ふは知れた事この程年切返しもあの客樂ぢやとある。此上は心中か駈落か行末迄が不便さ故。たとへ敵の末にもせよ。我が抱へとなりし女郎殊に禿の内より器量は人に優れたれば外の子供と違ひ。心を付けて育てしもの。何の憎い事があろ。爰をよう辨へて思ひ直して奉公せよ。度々意見を加へても。それをそれとも聞入れぬ。其苦しみも心柄。おのれが罪おのれを責むる。みどりめもおのれが遣ふ禿なれば。外の者に見せしめ思ひ切る心なら今でも縄を許してくれん。コリヤ男ども氣を付けいと言捨てゝ 拍子奥の一間に入りにける 色へ浦里跡を打眺め。涙にくれて居たりしが 詞エ、情あるお詞なれど。是ばかりはどうも忘られぬお赦しなされて下さんせ。まだ此上にどの様な。悲しい苦しい責苦でもわしや厭やせぬ。どう成つても思ひ切られぬ。いつそ添はれぬものならば一緒に死に度い時次郎さん殺して下んせ死に度いわいなう。唄へ昨日の花は今日の夢。今は我が身につまされて。合義理といふ字は是非もなや勤めする身の儘ならず。別れとなれば



今更に去なせともなき離れ際。合エヽ此苦しみに引替へて。あの二階の三味線はいつぞや主の居續けに。寝巻の儘に引寄せて。互に語る樂しみの今宵は引替へ今頃はどこにどうして居さんすやら。兎に角添はれぬ二人が身の上ハツア味氣なき浮世ぢやナア。唄へ好いた男にわしや命でも。ハル何の惜しかろぞ露の身の合、消えば恨みも無きものを 詞へコレみどり嘸そなたは悲しかろ。おれが憎かろ堪へてたも。惡い女郎に使はれて。思はぬ苦しみ堪忍しや。今宵に限り此雪は。何の報いぞ寒かろ可愛やなうイエ〳〵私は寒うはござりませぬが。次郎さんはあの樣に若衆に叩かれさんしたが。お前は悔しうござりませう。私も悲しうてならぬわいなう。よう云うてたもつたカヽルそなた迄も其樣に。主を思うて カンたもるもの。わしが心を推量しや。ウレヒカヽリ何の因果に此樣にいとしいものかさりとては。中傾城に誠なしとは譯知らぬ野暮の口からいきすぎの。ハル粋の粋程癇癪も強く合。唯なつかしういとしさの愚痴になる程戀しいもの。下たとへ此身は淡雪と共に消ゆるもいとはぬが。此世の名殘り今一度アハツシ逢ひ度い見度いとしやくりたげ。狂氣の如く心も亂れ。ウレヒ涙の雨に スヱ雪とけて前後。正體 オトシなかりけり 詞へ男は豫て用意の一腰口にくはへて身を固め。忍び〳〵て屋根づたひ。それと見るより悲しさの。合傳へて撓む松が枝も今宵一夜の掛け橋と足もそゞろに定めなきへ見るに浦里嬉しやと。ハル悲しさ怖さ危さに。飛立つばかりに思へども。身は縛めの蔦蔓。降積む雪に閉ぢられて。詮方なくも鶯の オトシ 塒漂ふばかりなり。

カヽリ何なく下へ降り立つて二人が縄を切りほどき。詞コレ浦里爰で死ぬるも易けれど遁るゝだけは落ちて見ん。此堀を越すばかり。幸ひ是なる松の枝傳へて行かん諸共と。カヽリ互に手早く身拵へ。ウレヒみどりも共にと取縋る可愛や此子は何とせん。オヽ心得たりとみどりを小脇に引つ抱へ。甲斐々々しくも時次郎松の小枝を浦里にしつかと持たせ邊りを見廻し。合忍び返しを引つぱづし。カヽリ梯子となして差下し漸う三人塀の上下りんと思へど女の身。詞ノリ浦里は胸を据ゑ死ぬると覺悟極めし身の上。何かいとはんサア一緒と。手を取組んで一足飛び。げに尤もと領きて互に目を閉ぢ一思ひ。ひらりと飛ぶかと見し夢は。覺めて跡なく明烏後の。噂や殘るらん。

浦里時次郎 明烏后眞夢　三

〔解題〕通稱「眞夢」又は「浦里時次郎道行」作曲者富士松魯中。内容上前の「夢泡雪」の後篇と見るべきものので、ずつと後に作られたものである。廓を拔出た浦里時次郎は相携へて深川猿江の慈眼寺に辿りつき、この寺の住職が時次郎の俗緣の叔父に當るので、後事を托する遺書を殘して墓地で相共に縊死した。然るに住僧の讀誦する法華經の功德と時次郎が所持した小烏丸の威力とで二人は蘇生し、住職の取計らひで夫婦になるといふ目出度い結末になつてゐる。

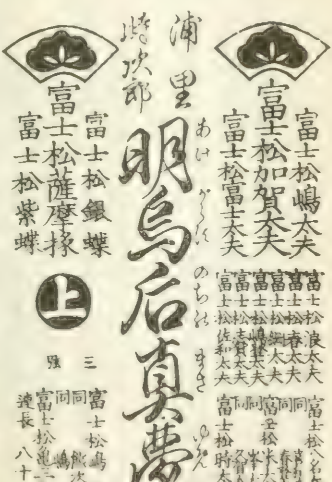
富士松魯中は初め四代目加賀八太夫と稱へたが、故あつて鶴賀派と絶ち、富士松加賀太夫と稱へて富士松の一派を再興し、のち魯中と稱へた。天保より文久頃迄の人で、新內中興の名人といはれた。

ナゲブシ 忍び寢の枕二つを共儘に取りも直さぬ眞夢の 引中地 破れて現浦里は。 合 廓を拔けし身すがらや 中 宵の口舌のハズム 縺れ髮。文ジ 取上ぐる間も中田圃寢卷ながらの抱へ帶 引 合 人目に立つを時次郎 上 鐘は上野か淺草の森を離れて花川戶 ハル 吾妻橋と手を取りて二人が影のまた一人月に映るも追手かと氣を芥子玉の頰冠り。素足につらき石原

の川邊づたひに朧波 合ツクゲ 灯影かすか に歸り船唄ふ小唄のしめやかに 合唄 川竹の 合 浮名を流す鳥さへも 合 番ひ離れぬ鴛鴦の中に立つ月すご〲と別れのつらさに袖絞るほんに邪氣な 上 死神に カヽリ 明日は無き名を立川や 引ギン 我から招く扇橋 合中 此世を猿江大島の森の繫 みに ユリナガシ 辿り着く 場所を。漸う濡れ髮まで來て。死ぬる

今際の心懸りは。かね〲話す二百兩は。地頭へ納める年貢金ゆゑ。親人に御難儀かゝるは必定。また此一腰は小烏丸と名付け。凶事ある節はおのづと聲を發する由にて。家に傳はる寶の一刀。是にて死すれば血汐に穢し。人手に渡る其時は。不孝の上の不孝の上塗りと。認め置いたる書置を差添へ。 詞 コレ浦里。危き アレニ見える慈眼寺の當住は。俗緣の伯

父なる故。陰ながら頼み置かば。死後には必ず親元へ確に届かん。最期所もアレなる墓場。ウレヒカヽル訪ひ弔ひも御回向引も逆縁ながら血の由縁。外の千僧供養より嬉しう二人が死出の旅。さはさりながら我故に。そなたも親に先立つ不孝因果な縁と諦めて詞心殘りの事あらば。返す／＼も云うてたもと色さすが亂れぬ男氣も泣かぬ顔するフシ目に涙。カヽル聞いて女は顔眺めアレまた愚痴な今更に中私が心も合知りながら。はかない親の瀬に立つて沈む苦界の浪枕中夜毎日毎に幾萬人通ひ廓の共中に。ふと逢ひかゝりし初めから仇と情の柵に惚れさせたのも神さんの結ばさんした縁と縁。中友朋輩や親方の氣兼ねに月日フシ小車や。客へ手管の入黒子誓紙書くのも指切るも眞實男の可愛さに。ハル盡くす誠は誰とてもギン勤めする身の習ひにて合私に限る事かいな合世にありたけの實情を盡し盡してカン諸共に死ね死なうとがほんになり合互に胸の疑ひも晴れて未來へ女夫づれ。何の心が殘ろぞと笑顔に覺悟フシあらはせり。カヽル男は見るに忍びかねこハルその潔よい心ざし此身と共に消ゆる身をそれ程迄にカン嬉しいか嬉しうならて何とせう今見納めと顔と顔合アハヅシ向む東につく／＼と。見交はし見交はし抱きハルオトシ締め盡きぬ名殘に時移るはや寺々の鐘の音にハット心を取直し見咎められじと立上りいざや最期を急がんと哀れ散行く若盛り引合若葉の抜き帯引きしめ引きしめ煩悩の繩に縊れて死なんずと消える其身の置き所そこかギン下爰かと見廻す墓所露にしだれる柳の枝これぞ佛のギンユリ御手の絲助け給へと觀念し抜き帯打ちかけ仲上り妙法蓮華經／＼唱ふる聲も諸共に既に斯うよと見上ぐればコハルいづくよりかは群がる鳥鳴きつれ／＼羽をふるひ二人が上に飛びめ



ぐり目先も眩む鳥羽玉の 三重 闇はあらぬか 合 分ちなく斯くては果てじと氣を勵まし退拂ひ拂ひ退け石踏みはづし縊れるはすみめり／＼／＼と柳の枝折れて其儘打重なり消行く霜や朝嵐つひに果敢なく フシ なりにけり。音に驚き寺中の人々住持諸とも馳來りそれと見るより走り寄り呼び活け／＼水吹きかけあまた手厚き介抱のその甲斐更になかりけり其間に見終る書置に上人立寄り珠數おつ取り ギン 妙法極意の加持曼陀羅高らかに讀上げ／＼死骸に投け給ふにぞ經力法力忽ちに不思議や二人は フシ 息出でたり 色 上人聲かけ。詞 皆騷ぐまい／＼是なる若者は我が血緣また此一腰は彼が家に代々傳はる小鳥の名刀聞きしに違はず時次郎が最期を助けんと群がり寄りしかハ、有難し／＼若氣の至りと云ひながら忠孝を顧ず色情に命棄つるは人道に背けりさるに依つて存命なる時は非人に落す世の掟恐るべし／＼幸ひなるかな山名屋はわが擅越殊に信者の義にあれば事穩便に取計らひ兩親へ言立て時節を待つて夫婦の語らひ致させん且また一旦絶えし二人が命蘇生りしは妙法の利益劔の奇特後の世までも傳へん爲しるしの石に建て置かん。と仰せは實にも道理や今に朽ちせぬ ギンユリ 比翼塚不思議の緣と津々浦里 クリ上 語り傳へ聞き傳へ開くや花の時次郎目度き春をぞ迎へける。

市川屋蘭蝶 榊屋此糸 若木仇名草 四

〔解題〕 通稱「蘭蝶」。鶴賀若狹掾作。作られた年代は明かでないが、その文中に「身振りは中車高麗屋」とあるのに注目して、これは二代目中車と四世幸四郎の事で、遲くとも安永初年頃迄に出來たといふ說もある。

浮世假聲身振師市川屋蘭蝶は、柳屋の此糸と馴染み、その妻のお宮が身賣をした身の代金迄も蕩盡したので、お宮は此糸の許に來て赤誠をこめて蘭蝶と切れてくれと賴み込み、此糸もその眞實に動かされて切れようと約

して歸す、これを立聞きした蘭蝶は妻の眞實は汲みながらも結局此糸と心中するといふ戀愛至上の作意。芝居では蘭蝶を翅蝶三郎といふ武士の成れの果とし、且つ茶入れ詮議のために苦心するといふ仕組にして敵役を設け、又此糸は主家の姫君の身代りに立つといふやうに仕組まれてゐる。現今語られるのは大抵は後半のお宮の口說の場からである。

色詞 娥々たる玉顔紅粉を粧ふ。願はくは輕羅となつて細腰に着かん。願はくは明鏡となつて嬌面を分たん。雲となり雨となる楚王の戀。比翼連枝は洞庭の驪山の夜半の私言。漢の武帝の傾城や。街賣女色と說くからに。地カヽル佛の國も唐國も堅い詞は表向き。其內證は和らナホスかな。ハル地神の教へし色の道。情商ふ店々の。ウハル格子と云へば野暮がたく。籬と呼べば優しうて。ハル粋な仕こなし當世の。長地役者の似面寫し繪や。浮世聲色身振師と。江戸名に流れたる市川屋。蘭蝶といふ鳥ならで。この棲屋に巣を組みて。ユリナガシいつも瑕と通ひくる。色船宿の提灯を妓夫臺へ行きなんし。アイ／＼お添け待兼ねから聲かけて。詞松宮様。おいでかえなえが聞いて呆れやすと。仇口惡口二お客様は。オヽまたきの田樂と。横手階の口階子上れば船宿が。詞コレ若衆の籬へ顔差入れ。モシ松山様。よう來たどうだずつと部屋へ入れ申さうか。ハかとも云つてくんなんせんなう。東雲イマアちつとの內文にと。色行燈提げ樣何だきつい凝りやうさ。ソノ伊勢暦て廊下座敷、詞ムウ惡しくするな。お客といふ文の。御文體が拜みたいわい。が在原の業平といふ色男か。イエ／＼ヨウ無駄を云ひなんすなう。ホンニ今女中客でござります。どうでも致しま朝は遲くてかみさんに角が生えんしたすからマアお下にお出でなされませ。らう。ナニサ遲い程首尾のよい性質さ。イヤ／＼立ちついでに直ぐに野郎の玉アノ福の神に角が生えたら。見世物に子で階老同穴。マア／＼お待ちなされ出して大金儲け。それぢやア又おごらませ。モシ此糸様ちよつと。ハイと其れやすわえ。惡口ばつかり云ひなんす。儘走り來てモシ何のこつてござりん此糸様が待兼ねてゐなんす。早う二階す。マアドにお居んなんしえ。オ痛い

わえ。エヽ此氣遣ひめが。サア斯うどつさりと坐るが最期の介。谷があらうが小便にも立たせないぞ。ソリヤモウ知れしさと。云ふに傍から。オットよし〳〵の木〳〵。是からは差向ひの勝負だ。コレ若い衆貴様も忙しからう。わしも今夜はほう〳〵だ。アイ旦那明日も又いつもの時分お迎ひにと。云ふもそこ〳〵こそ〳〵 ハルオトシ 二人は立つて下へ行く。色詞跡に二人は撚合ひの果てしなければ蘭蝶は。物をも云はずつと立つを。此糸は引止めて。詞コリヤどこへ行きなんす。どこへ行かうとお構ひなさんなおれが身體で。おれが足で向うへでも隣へでも好きな所へ行きやすと。また立上るを引戻し。ホンニあんまり虫がようありんすにえ。アイお前に似てさ。イヤ下腹に毛虫のない恐しい蛇蜈蚣。呑まれぬ内にモウ歸る。女房が松虫。さつぱり緣をきり〴〵す。ア、憂なしよにんのげぢ〳〵め。紙に包んで一昨日來いと。あつちへ蝗いなご〳〵と蹴散らかす。ハル身振りは中車高麗屋 ヒロヒ市川流の口舌なり。此糸は怨めしげに男の顔を打守り。お前のさうした癇癪はいつもの癖とは云ひながら。あんまり邪見な心意氣。合今更いふも古けれど。四谷で初めて逢うた時。好いたギンらしいと思うたが因果な緣の糸車。廻る紋日や常の日も。新造禿にねだらせて。呼んだ客衆の目を忍び。手管の咎め。鞍替も。二所三所流れ行き引。勤めする身も素人も。馴染重ねた女氣は。實に縺りはないわいな。長地粋も不粋も戀路には。ユリ苦勞をするが習ひぞと。いふが中にも私程世に味氣ない。客はなし。親に添寢の夢にさへ。ギン見も知りもせぬ人中へ賣られ廓の憂勤め。禿の内の氣苦勞は。眠る火影を追ひ起されて。文の使や返事さへ ウギン長い廊下の行通ひ。ハル間夫の手引きや合圖の手練。ギン氣を紅裏の色に出て引。遣手に抓られ合叩かるゝ。其苦を拔けてやう〳〵と。店へ出雲の神様も片贔負なる緣結び。好かぬ客衆にいびられて。泣いて明かさぬ。中夜半とてもなし。地それが中にも樂しみは。合たま〳〵逢へば明くる日は。姉女郎や傍輩に。當言いはれ身仕舞ひも遲い〳〵とせがまれて。合淚を包む振袖の留めれば最早年增役。伊達も意氣地も負けまいと氣を張る胸の癪痞へ思へば。思へばヒロヒ男程。我儘らしいものはなし。無理な首尾して呼んだ夜も。あちから恩に。きせるより詰らぬ事を云ひ募り。口舌は明日も歸されぬ。仕方と知れどこちも亦。留

めて苦を病む嬉しさが。嵩じて今の身の詰り。今日か明日かといふ内に。よい氣ならしい當言は。聞えぬお人と縋り付き。恨み涙ぞスエ道理なり。詞さう云へばそんなものぢやが。そなたの氣が變らうかと。コリヤ眞の事受け取つて。お前もマア。それ程氣遣ひなら。ちよつと覗いて見さんせと。色引連れて襖の隙間。詞アレあちら向いてゐる女中さん。わたしやあそこへ行く程に。とつくりと見さんせと。イロ暖簾押明け此糸は。詞さぞお淋しうござんしたろと。色傍に居寄れば。詞アイお前はお客が来たさうなが。蘭蝶といふお人かえ。アイイエ／＼。そりや誰さんでも構はぬが。コレ此糸様。お前はナアお顏に似合はぬ恐しい怨めしいお人ぢやなア。斯う云うたらアノ女子は。氣遣ひか。

とつけもない事いふと思はんしよが。私はのこな様のお深間。蘭蝶殿の女房おみやでござんすなう。エヽアノお前が。サヽ嘸ぞ悔りさんしたろが。私が今日来たのは。定めし逢うて存分言ふかと思はんしよが。そこをすつと取つて退けて。折入つて相談。とつくりと聞いて下さんせや。大方主の話で。何もかも聞かんして知り抜いて居さんしよが。云はねばいとゞ堰きかくる。胸の涙のウレヒ遣ろ方なさ。詞アノ蘭蝶殿と夫婦の成立ち。咄せば長い高輪で。一つ内に互に出居楽。地カヽル縁でこそあれ末かけて。約束かため身を堅め。世帯堅めて落付いて。アヽ引嬉しやと思うたはホンニ一日あらばこそ。ソリヤ誰故ぢやこな様故大事の男を唆かし夜昼となく引付けられ。商賣事は上の空。贔負で呼んで下さんす。馴染みのお客

茶屋衆も。来る度ごとに又留守かと。愛想つかされ後々は呼んでくれ人も内證の。詰り／＼てわしが身を。賣つて渡した其金を。又こな様に入れ上げられ。嬉しからうかよからうか。腹が立つやら悔しいやら。喰付き度い程思うたは。今日まで日には幾度か。其恨みを打捨てて。互の爲の色心底話。詞コレ妾をよう聞かしやんせや。わたしぢやとて根つからの素人でもない。藝者勤めは女郎衆も同然。憂いつらいも知つてゐるわいな。それに今では勤めの身。戀も意氣地も身につまされての談合づく。どうぞ蘭蝶殿と縁切つて再び呼んで下さんすな。地カヽルとは云ふものゝハル二人ながら。此様に盛んになつてゐる。最中。耳にも。入るまい。聞分けあるまい。人の異見は惡しく聞き。壞かるれば猶つのり。果ては詰ら

ぬ無分別。二人死なうといふ様に。なる事もウレヒある習ひ。詞道理ぢや〳〵。が私が心にもなつて見て下さんせイナ。入カヽル蘭蝶殿に。身を立てさせ。小商ひでも始めさせ。人並相應な暮しもして。末々長う添はうとの樂しみばかりに。恥も世間も顧ず。身を沈めたる深川竹の憂き勤め。人には私が好き好んで賣られたのイヤ徒ら故ぢや。緣切りの爲奉公ぢやのと。浮名立てられ指差され。詞悔しうて。悲しうて。腹が立つて〳〵泣いてばかり。ウレヒカヽリ涙に剝げし白粉の顏を直して呼出しの。客を勤むる苦しさは。詞どの様にあらうと思はんすぞイナ。ウレヒカヽリ其つらさをば是迄に堪へ〳〵た其代り。お前も今のつらさをば堪へて切れて下さんせ。さすれば蘭蝶殿の身分も立ち。私も苦勞した甲斐もあり。お前も心を入れ替へて勤め大事にさんしたら親方の悅び其身の出世。三方四方のよい事は。只こな様の。色心一つ。詞サア思ひ切つて呼ぶまいと。つい云うて下さんせと。カン中スヱ事を分けたる眞實を。聞いて下音道理に。伏し芝の。こるばかりなる思ひをば。合涙の水も消しかねて。中冷泉猶燃え上る胸の火を押沈め スヱテ押沈め。詞申しおみや様。成程思ひ切りやしよ。エヽ何と云はんす。思ひ切つて遣らうとか。アイだん〳〵のお話を聞いて。何ぼはかない私でも。是が思ひ切らずに居られうかいナア。何の〳〵誓文で。重ねてふつつり呼びやすまい。さぞ是迄のお腹立ち。堪忍して下さんせや。何のマア詫言がいるものかいな。オヽよう思ひ切つて下さんした。最早客にこそせまいけれ。兄弟分にして。末々迄の談合相手。是からほんの賴もしづく。必ず健でゐて下さんせや又近い内に來てゆる〳〵と。たんと禮をいひやんしよ。アヽどうやらそゞろに悲しうなつて。胸騷ぎがする様なと。中カヽリ物が知らする血の由緣。階子下りるも力。ユリオトシなく〳〵ユリオトシ立歸る。隱れ聞いたる色蘭蝶は。詞コレ此糸。蘭蝶さんか。定めて聞いて居さんしたろ。モウお前には逢はれぬわいな〳〵。ウレヒ是が今生のお顏の見納め。よう見せて下さんせと。スヱテ縋り歎けば色蘭蝶は。詞オヽ殘らず聞いて泣いて居た。そんならそなたは愈々切れる氣か。アイ切れねばならぬ義理づく。イヤそなたは切れる氣ぢやあるまい。死ぬる氣であらうがの。是が死なずに居られうかいな。おみや様への。カンクル義理立てゝ。此世で添はぬ其代り。お前は永らへおみや様と仲ようして。

百萬年のお命過ぎて未來は必ず私と女夫。蓮座を分けてウレヒ待つて居るぞえ。詞イヤ〳〵それではみやへの義理ばかりで。一所に死なうと言交はした。おれへの義理は何で立てるぞ。ソリヤ聞えぬ〳〵わいなう。ウレヒそなたを殺しておれ一人世に引永らへて人中へ何と顔が向けられう。とても永らへ果てぬ身を。一所にやいのと縋り付き。抱き締めたる心と心。二人が命短か夜の烏も告ぐるや鐘の音も翌日の。浮名や響くらん。

笠屋三勝 あかねや半七 千日寺名殘鐘 五

〔解題〕通稱「三勝半七」。作曲者鶴賀若狹掾。大和五條の茜屋半七と大阪長町の美濃屋三勝とが大阪の千日寺で心中したのは元祿八年十二月の事であつたが、これを始めて淨瑠璃に作つたのは、紀海音の「笠屋三勝廿五年忌」であつた。而してこれを改作したものに「女舞劍紅楓」(延享三年十月、春草堂作)がある。本曲はこの五段目の三勝緣切の段を取つて多少語句を改めたものである。宮薗節の「三勝長町の段」も同じであるが、この方は明和初年には既に出來て居たから、新內の方が恐らくは稍後であらう。併し今日義太夫で行はれる「艶容女舞衣」よりは前である。(義太夫節の部「酒屋の段」の解題參照)

三勝緣切の段

色この廣い大阪に住む所さへ長町。と言の葉草の露深き。地中裏の木枯し吹きそらす。色地美濃屋と書きし目印の。長地暖簾の文字は太けれど細き煙のかせ世帶。ハル浮名にふれし三勝が。娘お通が手を引いて樂屋戻りの取成りもハズミユリ伏見常盤に異ならず。親半左衛門立出でて。詞オヽ三勝戻りやつたか。イヤモ今度そなたが座元の芝居昔の靜御前の法樂の舞ぢやと大評判。それで昨日も言うたになぜお通を連れて行きや

るぞ。肝心の太夫に子があると言うては見物の見込がないコリヤ坊よ明日から附いて行くなよ。おりやそれでも母様が留守なら淋しい。あれ聞いて下さんせ。何ぼでも聞くこつちやござんせぬ。イヤ三勝このお通が着る物はいつ拵へて着しやつたぞ。さればいなあ聞かしやんせ。世にはしをらしいお方もあるもの。十七八な女中がこの門を通つて。此子を見ては可愛がり。人形遣つたりあいしたり此つぎ／＼も跡の月おこしてでござんした。ハテならそれはしをらしい。なぜ呼込んで禮言やらぬ。さあわしもさう思うてはゐれど留守の内ばつかり。間違うて逢ひませぬ。したが此二十日程根から見えぬげにござんす。それで此子が小母さんがお出でんと言うて毎日門に待つて居ます。ハア、、、坊めが又人形してやらうでの。悍い。スカシフシ奴ぢやと打笑ふ。詞イヤ父さん半七様は見えぬかえ。イヤ沙汰はなかつた。また此半七様でもあるぞ。今日見えいでは濟まぬ事よもや如才はあるまいが。内の首尾でも惡いかと。カン心にかゝる思ひ草。物案じの體見る色よりも。詞ハテ用があるなら見えるであろ。其間におれも一休み。坊主も來いと手を引いてオクリ一間の内へ入る跡へ カヽリ四十路餘りの女房が。ハル用ありさうに表口の暖簾の家名に色小頷き。詞チト御免なりませとずつと入り。こなさんが踊り子の三勝殿といふのか。ツイ逢うた事はなけれど。五年この方聞き及んだ三勝殿。わしや大和の五條茜屋の半七が母でござる。エエとびつくりアノそれは。と色云はんとせしが氣味惡く。ウロ／＼するを見て取つて。詞イヤこれ三勝殿もしやこなたを恨みに來たかと思はッしやろが更々さうした心はない。草で育つた大和の女子も。色梅の色よい浪花の女郎も色に迷ふはギン同じ事。詞わしやこなさんに禮いひに來ました。あの見る影もない半七に絆されて何ぼの出世も目にかけず。可愛がつて下さる。蔭で聞いてどの母でも嬉しがるまい様はない。殊にお通といふ子まで儲けた三勝。殿まめで顔見て嬉しいと。色餘念なければ氣も落着き。詞半七様の母御さんとて。さつてもきつい御するはう。さう御存じの上からは何を隠さん様もなく。色眞實ほんの母様に。逢うた心と打解けて。底意渚の海士小舟。ギン漕ぎ果せたる スヱ如くなり。詞ヘイヤはて世の中に君傾城を歴々が。嫁にするもある習ひ。ア、互に好いた同志半七と夫婦にして。睦まじい顔見るならば。老

い行く末の楽しみと。明暮思うてゐますると。ウイロ聞いて飛立つ嬉しさに手をギン合はすれば其手を取り 詞思ふこと儘ならぬ。こそ浮世フシなれ。詞私やこなさんに無心があつて来ましたと。色言葉の中より。詞これはいかな。頼むの無心のとは他人向きどの様な仰せでも背かぬが嫁の役と。色いふ顔ギン見るより涙ぐみ。詞近頃無心な事ながら半七と縁を切つて下され。エヽと悔りアノ半七様とかえ。いかにも。イエ／＼そりやならぬわしや厭ぢや。カンウレヒ一夜流れの仇夢も別れは惜しき人心。ましてて馴れ初めもう五年子までなしたる半七様。炎の中には棲さうが。あなたを退いて片時も。浮世の日影が見られうか。酷い。つれない胴慾な。別れといふ字は聞いてさへ。胸にしみ／＼悲しいと恨みスエル涙にくれ居たる。詞オ

オ悲しうなうて何とせう。さりながら此母がいふ一通り聞いて下されヽ三勝殿。アノ半七にはのお園というて許嫁の女房がある。呼取つてもう三年。祝言の日を極めても。こなたと深い半七。いかな事得心せず。同じ家に住みながらついに一言物いはず。親父殿の腹立ち無理でもなし。嫁の親の方からは大事な娘を素守にして。妄狂ひする半七。聟には取らぬ取戻すと。やつさもつさの一門中。それを苦に病みお園はとうから気のかた煩ひ。聞いても居てでござらうが二月あとから。カヽリ此ひの上に出養生。日ましに重る病の床。地見るも悲しさいぢらしさ。カンせめて一日夫婦にして此世の念を晴らして遣りたさ。地義理と情に詮方なく子まである二人が仲を縁切りに来た此母が心の中を推量して思ひ切つて見て下され。

ハル可愛がらしやる半七を不孝者と云はさうと。孝行者と云はさうと。コレこゝが辛抱ぢや。了簡をして下されと。語るも涙聞く涙スエ共にフシ思ひの淵ならん。三勝はうろ／＼と。退くも苦しく稲舟の合。否とも云はず。胸迫り。涙に咽び居たりしが。下オンつど／＼母のタヽキ詞をば合。聞くに思ひの結ぼふれ合地解けぬ氷の劔をば合。呑込むつらさ切なさを堪へ涙の玉の緒も。切らねばならぬ縁ならば。逢うての上かとやせんと。心一つに責められて。何とか胸を極めけん。我と我身に下暇乞ひ。むせぶ涙のスエテ顔を上げ。詞申しお袋様。ふつつりと思ひ切りました。ヤアすりやアノ半七と縁の切つて下さるかと。カヽル問はれて尚も泣いじやくり何はともあれ私が退けば。半七様のお名も出ぬといふ事はよう知り抜いて居ります

れど。ついした譯の仲でもなし。五年この方馴れなじみ子まで儲けていつしかに。去年より今年は深うなり。今日は昨日に増す思ひ。神や佛の御意見でも思ひ切る瀬の 色 あらばこそ親にも。子にも我が身にも代へていとしき殿御をば。ハル 不孝と云はせしお園様のおうらみや。お二人様のお歎きがあなたのお身にかゝるのが。色 わしや悲しうてならぬ故飽かぬ別れを致します。思ひ切らうと思ふ程。戀の罪科思ひの 色 修羅。胸の煙は阿鼻焦熱 カンイロ 八寒地獄の涙の面 合。今身の上に責められてわく方もなき三勝が。心の内の切なさを推量してたべお袋様。色 わしや。義理詰めになつたかと。目元うろ〱髪亂れワッとばかりの喞ち泣き。ノルオトシ 目も當てられぬ風情なり イロ 母も涙にくれながら。詞 オヽ道理〃〃退いて下さる併より退かしに來た此鬼が カン 心の内の苦しさを推量して下されと互に顔を見合せて スエル わつと泣入るばかりなり。詞 アヽいつまで言うても同じ事。モウ去にまする半七とこそ緣は切れ。孫のお通もある事なりや。心はやつぱり嫁姑。煩はぬ様にして下されヤ。禮とては云はねども今から朝晩此母がこなたの壽命を祈ります。色 アヽ苦しみの世界やと行かんとするを 詞 アヽ申し。お通にちよつと逢うてやつて下さりませ。爺様や婆様の所へはいつ行く事でござるやと逢ひたがつた稚心。せめてツイ顔なりと。アヽイヤ〱逢ひますまい。緣切らして去ぬるさへ悲しいに。孫の顔を見るならば。猶悲しうてなりますまい。オス 酷いきつい鬼婆ぢやと云うて聞かして下されと。互の ギン 涙繰返し。見送る涙行く涙。クリ上 しどろ。もどろの憂き別れ泣き別れてぞ立歸る。

たまきや伊太八
さかひや尾上

帰咲名殘の命毛　六

〔解題〕 通稱「尾上伊太八」。新内名曲の一。作曲者鶴賀若狭掾。本曲の材題となつた實説といふは次のやうな話である。津輕若松家の臣原田伊兵衛の伜伊太夫は江戸詰の祐筆であつたが、延享三年三月頃から新吉原江戸町一丁目太左衛門店太四郎抱遊女尾上と馴染み、勤めも怠り勝ちになつたので永の暇となつたので同年十二月十三日夜尾上と合意心中を決行する事とし、尾上所持の短刀で男は腹、女は咽喉を突いたが未遂に終り、日本橋で三日晒された上非人頭に渡されたといふ。時に男は廿七歳、女は廿三歳。この事件を脚色したものである。作られた年月は明かでない。相當長篇なので、現今は大抵前半は略して、逢ひそめしより」から語る習はしである。

浮ガカリ〽賑や中賑ふとこしなへ（おとしなへ）サハリいつも常盤の戯れは。ハル垣 しやんと一腰なでがくの。角の ハル取 れたる衣紋坂。五十間道カヽリいそ／＼ りしが三下リ歌なぜに八さん遅いやら。中 もしも心に妨げが入りもやせんと愚痴

其名も高き吉原と下戸も上戸も分ちな とずつと這入れば大門や禿が迎ひ待兼 心。上心の麻排結ぼれて。ほどけもやら

く。中さすがに猛き武士も昔のさまに ねて君達並ぶ仲の町縮にも及ばぬ全盛 す恍惚りと凭れかゝりし床柱すや／＼

引替へて 合上當世風の長羽織。黒の出 は。吾妻のサハリナガシ色の大港。皆人心 眠る ナホス 氣草臥。浮ガカリはや昔見世も

立(黒出立)に黒裏の大盡ぐゝり袖口も つくしける。詞廓評判とり／＼の堺屋 引けごろに。詞廊下をぐわた／＼／＼。

下ギン丸をば太くたゞ(だい)紋のぐつす 尾上は伊太八に。色深い戀しの物思ひ。色堀の喜作と仇名さへ世に知れ者の猪

り冠るツナギ覆面の頭巾で隠す顔の綾中 裏座敷にスエブシ只一人差俯向いて居た 才助が。尾上の傍へ走り寄り。コレ起

きな申し〳〵と揺れば怖はイヤ怖い事は何にもないがの八さんがお出で知らせに來やした。エヽほんにかえそりや〳〵嬉しいか〳〵。あいなぜ一緒に連れまして下んせぬ。大門へゟを付けて置いたのに。おつと云ふまい〳〵如才はない今仲の町で連れ衆が呼びかけ話をしてた追付け爰へござんせう。少しも氣遣ひないわいな。フシかう云うたらば叱らんしよかは知らねども男が男に惚れるのは少し衆道の氣味合ひぢや。アノ八さんの事ならはモウ〳〵〳〵玉の命も捨てやすよく〳〵ぢやと思はんせ。歌中觀音さんへ願かけてサア雉子を食べますまいのからいちごサアサ何としよかどしよかいな詞ハ、、〳〵ほんに心中仕損ひ曝された者も見たが。女のよいばかりであんな男はなかつた。かう云うたとて必ず氣にかけて下

さんすなと。色先を知らせる口占は一ばい機嫌に猪牙介が。氣さくに任せべら〳〵と阿呆たら〴〵云ひければ。尾上は胸にひし〳〵と。釘打つ如く辻占がもしや合當りはせまいかと。心で心取直し案じゐるこそ道理なれ。地世の中の儘にならぬを浮世とは誰が云ひ置きし言の葉や絆し心の伊太八は翌の浮名を包みかねさま〴〵胸の苦しみに氣も抜け果てゝうか〳〵とウキユリ馴染の家も目につかず。詞行過ぎんとしたりしな。ゟは其儘引止めてエヽ性悪な早う二階へ行かんせと。そゝり立てゝぞ入りにける。詞ソリヤ八さんが御出でと喜八は機嫌に立騒ぐカンウレヒ見るより尾上は寄り添ひて。今日は取分けいろ〳〵と合云ふこと聞くこと澤山ある其約束で今朝早う來さんす筈ぢやないかいの文にも云うてやる通り身請の

談合極まらば明日から見世を引きやんすそれに今まで私をば一日待たせて置かんした云ひかはしたる言の葉も厭なら厭と云はしやんせ。エヽさりとては邪慳な八さんと男の膝に抱き付きスヱ人目も恥ぢず泣きゐたり。詞オヽ尤もさりながら人の言ふこと聞きもせで滅多に泣いて威すのか。少しおれも氣むづかしく漸々と今朝枕を上げ堀までは來れども顏付が悪いと云うて喜作が所で一つ飲み元氣を直してこゝまでは來たサアそんなら昨夕歸らずにどこぞに待つてゐたであろサア云はしやんせ〳〵ナンノイナ内からずつとエヽ嘘ばかりと持つたる煙管振上ぐれば遣手の三が聞付けて又尾上さん氣の短いともぎ取れば猪牙介喜びコリヤお三殿ア、出來た大事の兄弟を對王丸にするのかえコレお三どのア金儲けがつよいかして

先から座敷に見えなんだ。イヽエナ今日は女郎様方に頼まれて觀音様から大師様といふを幸ひ大願し奉る芝愛宕中上野元三兩大師並びに笠森稻荷裸足で百日家内安全裸參りの濡れ坊主ア、冷たかろ 詞ハヽヽ面白い浮いて來たお三喜作一つ飲みやと。色ひらりと紙花二三枚枕に當てゝ轉寢の話の中に高鼾カヽり揺れど起せど他愛なし 詞喜作は遣手と睨めくらコレお三殿旦那は寢る尾上さんも淋しかろ二文四文の腕押しでもしよかいのハテ譯もない明日の迎ひもあらうしもう引け四つも打つぞやそれよう氣を付けて下んしたと手を差出し指を折り先づ二丁目の二人一座角町のお屋敷衆新町の九郎さん京町の旅人衆江戸町はウヽオヽ爰よ。色何をいふやら跡先の詰らぬ洒にふら〳〵と提灯片手に引かけて。尾上さん御寢なれ

お三殿お休みおさんばへと潜り半分明けながら聲高々とおいらは今からどうしたもんだ〳〵しよんがへオトシ足もしどろに出でて行くお三はそこ〳〵片付けてサ起しましてお床へ入れイヽエやつぱりかうして置かしやんせアイ私も往つて臥せりやしよお前もお休みなさんせとスカシどた〳〵降りる箱階子カン詞跡に尾上は伊太八が顏つく〴〵と打眺め私といふ者ないならば斯うした身にはならんすまい親御様の御勘氣もみんな私が仕業ぞや ウレヒカヽリ逢初めてより一日も鳥の啼かぬ日はあれどお顏見ぬ日はないわいなしげ〳〵逢へばお宿の首尾合惡しきは胸に知りながら好いたが因果束の間も傍離るるがいや増して。朝の歸りもまだ早い。もう一服と抱締めし。其言の葉が居續けとしげりし故にお前の身仇となし行く悲しやな

許して下んせ八様と手を合はせ伏し拜み思はずヒわつと泣出す。詞コレ喧しい靜にいやヤアお前はよう寢てハテどう寢られうぞ。先づこちおぢやと床の内あたりの襖立籠めて暫し物をも云はざりしが。詞ハテ誠に古人の言置きし人界の榮枯は糾へる繩の如く水上の泡に似たり。此頃は夜の目も合はず食事さへ胸を通さぬ身請け沙汰 詞家に代へ親に代へ身にも代へたるそなたをば人手に渡すが悔しさに様々才覺して見れど押詰つたる金の事。誰に談合するあても内證を知つたはそなたばかり生れ付いたる商人さへ今の世渡り過ぎにくいましてや昨日今日までも武家で育つたおれが事。勘當受けてウレヒカヽリまる二年僅な筆の命毛で住み永らへる其日過ぎ。上男の身でさへ生き難いに斯うした勤めの其中で物日節句も相應に 合茶

屋船宿への付屆け遣手禿に仕著まで。表向きをばおれが名でみんなそなたの才覺ぞや(くめんづく)。送つて出やる肌薄な姿を見れば胸一ぱい昔の身ならどの樣にも仕樣もようも知つたれど此身になつては一言の言葉の禮より外はない忝いぞや嬉しいぞやとても此身は埋れ木の末の案じもそなたの爲。今度の事が首尾してから先へ行きやれば玉の輿我が身の出世と喜ぶぞや。ふつふつ恨みと思はぬと身を恨み泣き沈み聲立てられぬ床の內尾上はいとゞしやくり上げ好かぬ事をば言はしやんすいかに流れの身ぢやとても心に二つはないわいなたとへ私が請出され御新造樣のかみ樣のと人に傅き敬はれ上見ぬ鷲で暮してもいやな男に添寢して朝夕苦勞するよりもやつぱり二人が手鍋さげ手づから私が飯焚いて內の者よこちの人明日はどうして斯うしてと言ふが樂しみわしや嬉しい 詞ハテいつまで言つても盡きぬ事どうで今宵は過されぬおれは覺悟をしてゐると押肌脫げば白無垢の思ひつめたる死出立。尾上悲しさ嬉しさにてはや簞笥押し スヱ明けて共に着替へる死用意 詞コレ尾上わが身は女子の事なれば合點が行くまいが唐土蒼頡といふ人始めて文字を作りそれより季子に傳へ日本にては菅相丞道眞公所持の一軸故あつて先祖へ傳はるこれ無くては筆道の家立ち難き故勘氣の節母の情に盜み出し賜りしは他門より跡を繼がせず我を返さん謀りごとこれ皆母の御恩ぞや。 詞せめて母への言譯に此一卷人手へ渡さず親元へ返せば家は相續するさりながらお二人樣幼少より御養育御恩も送らぬ不孝の罪許させ給へと手をつかね兩親傍に座ますが如く詫び歎くこそ道理なれ。尾上も共に居直つて私は嫁でござんすと言ひたい見たいお袋樣お心よしといふことを主に疾うから聞きまして年が明いたら早う往て私が親より大切にせうと思ふ甲斐もなく今宵死ぬるは何の罰 中さりとては世の中にわし程因果な者はなし。遠國隔てゝこの里へ來たは丁度七つの年 長引 父樣や母樣も少し覺えて居ますれど外に兄弟一門があるやら 合無いやら便りなく不通になつた此身ぢやからせめてお前の親御達お傍で給仕朝夕のお茶煙草にも氣を付けて孝行つくそと思うたに。一度もお目にかゝらいで カン打て變つた フシ逆樣な歎きをかけるのみならず手向の水や香花をお前方から受けるのはよく〳〵の緣でござんせう親子は一世といひながら此世は僅か假の宿。長い未來で嫁娘と御不便がつて下

さんせと聲も立てずに　ナホスフシくどき泣き哀れにも又いぢらし。伊太八涙押拭ひ　詞愚痴いやる間に夜が明ける。國の親達朋輩へ書置をしやつたかアノ認めて置きやしたヲ、おれも今宵と覺悟して此一通を持つて來た心で亭主へ頼み置き親元へ此一巻送り貰はん書置そなたのも一緒にと置床の上に置くのも此世の名殘合十念を唱へんと差向ひ　スエフシ　手を合はせ南無阿彌陀佛／＼／＼南無阿彌陀佛と用意の脇差するつと拔き今ぞ最期と襟元へ當つれど　ウレ　とさすが愛著の迷ふ心に女はわざと力を付け早う／＼とせり立つれば南無阿彌陀佛と一刀ずつと通せば血は瀧津瀬見るに男は後れじと刺通したる我が咽喉死にも　引　やらずに　ノル　苦しみて　セメ　間の襖を押倒せば隣の座敷も目を覺しヤレ心中よ斬つたわと呼はれば家内　ォトシ　驚き駈上り上を下へと返しける。詞　亭主はあわて手負ひの傍へ立寄つこ先づ二人ながら傷は淺し殊に急所を除けたれば命には氣遣ひなし皆騒ぐまい／＼　サテ／＼　早まつたる御仕業尾上が身請けの客と申すはお國の伯父御樣ひそかに此間お目にかゝり身請けの金も受取つて諸事は相濟み候へどもちと仔細あれば二人の者へは此事を沙汰なしとの仰せ故申さなんだは拙者が無念お氣遣ひなさるな本復次第に御祝言直ぐに私が仲人と。言へば二人が喜び顔浮木の龜と　クリ上　優曇華の花の妹脊の返り咲。浮世の沙汰を一節の筆に任せて書きとゞむ。

傾城音羽瀧　七

丹波屋七郎兵衛
兵具屋おとは

〔解題〕　通稱「音羽丹七」。鶴賀若狹掾作曲。兵庫屋音羽に耽溺して勘當され淡島となつて流浪した丹波屋七郎兵衛は、その身の上を案じて居た音羽の許へ五月目にやつて來て、淡島の言ひ立てに事寄せて心の中を語り女

に當り散らすと、朋輩女郎此里の情でその裲襠の下に忍ばせられ遣手の目を盗んで二階へ上らせられるといふ筋。

飯塚氏の歌舞伎細見によれば、享保十六年七月江戸吉原二丁目の山茶屋大兵庫屋で神田白壁町の大酢屋丹波屋九郎兵衛が遊女音羽と心中を企てゝ未遂のため日本橋で三日間晒された上非人頭に引渡されたのがこの淨瑠璃の實說であるといふ。

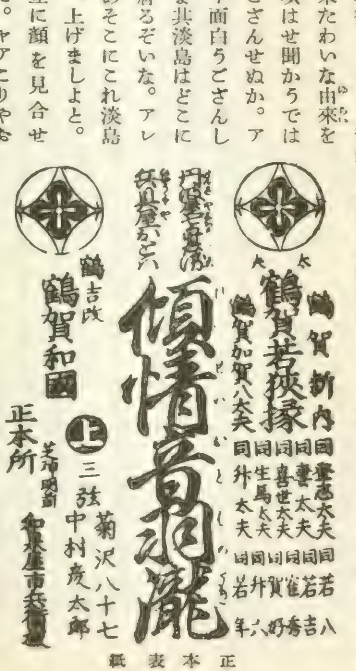
淡島の所作は始め關東小六と結び付いて、歌舞伎では先づ寳暦九年七月市村座で花園喜代太夫の淨瑠璃「粟島園生竹」で、市村滿藏の關東小六が粟島の修行者で廓に入込む所作があり、次いで明和七年秋市村座で長唄の「關東小六後雛形」、これは市村龜藏の淡島で、これは丹波屋七郎兵衛で、中村喜代三の音羽が取合せられた仕組らしい。このあとに出來たのが新内のこの淨瑠璃といふ順序であると考へられる。その後歌舞伎では、富本の「俠客形近江八景」(寛政六年)や、常磐津の「禿紋日雛形」(文化四年)などにも淡島修行者の所作が取合せられ、更に下つて安政六年四月市村座で、河竹新七(默阿彌)の作「種々薩埵誓掛額」が權十郎(丹七)粂三郎(音羽)歌女之丞(此里)等によつて吾妻路富士太夫の淨るりで演じられてから新内の音羽丹七は俄に有名となつた。この作は勿論新内の「傾情音羽瀧」を本としたものである。

ハル籬々で彈く上三味の。いとし男に。下又中あひカハリの手よ。か中はる枕のをかしさは。ハル地初手は互に客で逢ひ。それから後は。色で逢ひ。今は親身の上女フリ夫あひ。中ハズミ地飽きも飽かれもスカシせぬ仲を。地よしなき人の口の端に。ハル地かゝる憂身の我々は。戀の闇路の晴間なき。長地雲井の カヽリ人の詞にも 中地戀は心の誠とや。ハル地襤褸の錦兵具屋の。音羽の瀧の流れとて水漏らさじと。丹七と締めて寢た夜も今ははや。むエスかし〳〵の物語。語るも涙聞分けも。詞朋輩女郎口々に。まだきつう音羽様色が惡うござんす。それを押して見世へ出さんしたら又惡うならうぞえ縱へどのやうに内からせかれても。丹七様とお前の心にある。今日からうき〳〵と浮いた顏見せて下さんせ

と我が身の上を思ひやる女同士こそしほらしき。詞音羽は皆に手を合はせ嬉しうござんす。せめてお前方のどうぞ逢はせて遣り度いと。思うて下んす。皆さんの思ひでも。一度せめて逢ふ事もありはせうかと思へども此月で丁度五月。毎日文を持たカヽルせて尋ぬれトメども。中ほんに居るやら居ないやら人の噂によしあしを聞くに付けての氣苦勞が。上胸につかへて此様に中酒も通らぬ物思ひ。ハルどこにどうして居るとてもキレ變るわたキしぢやない入わいな。長地あの人様に流浪させそれから一度も逢ひませぬ。といふて起請の神シ様へ。どう入言譯がスエ立ちましよと。差俯向いて居たりけり。地今日は人の身スカシ明日は又。ハル地我が身の上と思へども。交せし事のギンガハリあるなれば。中オシ昨日に變オンる有様は。戀しき人に

淡島中の地姿となり爰入かしこ。兵具屋が門の口。爰ぞとスエカヽリ思ひ聲張上げ淡島大明神。女子は針ばし粗末にせぬ功德。アレ／＼音羽さん面白い淡島が來たわいな由來を唄はせ聞かうではござんせぬか。アイ面白うござんしよ共淡島はどこに居るぞいな。アレあそこにこれ淡島へ上げましよと。互に顔を見合せて。ヤアこりやお前は丹七様かと驚けば。朋輩女郎も野暮ならぬ。吸付煙草もわれ勝ちに涙と共に語り合ふ詞遣手の杉が聲高く。また一所へ寄合はすと各自に離れて居さしやんせ。癖の悪いと喚かれて。カン音

羽は顔見て。カン嬉しいやら。又かカンなしさが増したやら。ハルいうて返らぬ事なフリがら中必ず明日は歸入らんせといふたは二人がキシいつ迄も。中逢ひ通うしたい心故。宵の返事に裏がへし。長地雨が降る中下とて明くる日もいとし可愛の數々が積り／＼し雪の朝つ入い居カン續けが癖入になりそのよな姿になり振も。中皆わし故に親と子の。久離も



正本表紙

今は絶え果てゝ入いかい入苦勞をさし入やんすやら。ハル僅か四月キシか五月にキシきつう窶れキシさんしたの中煩うてばし下んすなと。人目の關にうろ／＼と。オトシ邊りまばゆき折節に。詞遣手杉が淡島もえい加減にしてやらしやんせ。見世の邪魔でござんす。通りや／＼といひければ。女も顔を振上げて。これ淡島様さぞいひ度い事もござんしよ。わしも聞き度いはやま／＼共いひたい事の由來を。よういうて聞かせて下んせと。互に目入交ぜにかけて素知らぬ。か入ほして居たりける。笠傾けて淡島は。スヱ又カヽリ高々に聲張上げ。忝けなくも紀州名草の郡加太淡島大明神の由來を詳しく尋ね奉るに。天照大神より第三番目の姫宮。針才女と申し奉る神の御身なり丑寅の御方は御一代の御守り本尊。ほぞんかけたはほとゝキシぎす八千八聲啼くと聞く。キシ森の小烏われまた尾中羽シをからすの羽ばたき。一門もなし入一家もな入し。梨も礫もないお女郎に此方少しも喰合入ひなし ハル襟袖口 キシも綻びの綿さへ足に上かゝりうど今は互に見ぬ顔をするがほんの通り者。詞長居はおそれ。お心もすぐれぬ様なお顔付。御暇申すと行かんとするを。格子よりこれマア待つて下さんせと引留むれば。おつとこれ大事のお宮が微塵になりますこりや私が商賣道具勿體ない穢れた手節付けて貰ふまい。ても仰山な針箱の様なもの。淡島ちやのお宮ちやのとこりやをかしいと吹出せば何がをかしい針箱の様なお宮でも此神主が此宮で今日の口過ぎを致す。何千兩元手入れても傾城買ひといふものは埒の明かぬもの。ほんに思ひ出すも腹が立つ。お暇申すこれ待たんせ放せ。イヤ放さぬヱ、面倒なと振放し行かんとするをこれ丹七様。喧しい名を呼ぶな。そんなら猶呼ぶ丹七様。是さ拜むシ、白血長血の病ひの體はさりとは不埒の御事なり。朝晩の起臥は腰より下の病ひとなり。眞實可愛い男に嘘をつくは罪となり。客への嘘はなんぼうも救ひ取らんとの御誓願なり。淡島大明神さても面白淡島様これ又重ねてござんせと。カヽリ地入人目入を忍び朋輩の此里は裲襠の キシ脇に隠し中入れやがて二階へ連れ行きぬ跡の名殘や惜しむらん。

星野屋平三 鹿島屋花園 夢血染抱柏　八

〔解題〕通稱「花園平三」。鶴賀若狹掾作。星野屋平三は吉原京町の鹿島屋の花園に溺れたために養父は二人の仲を割かうとして平三を上方の實家へ歸さうとするので、添はれぬを悲み、二人は合意の上で、座敷を嚴しく締切つて互に最期を潔く刃に伏した、と思ふと曉を告げる鳥の聲にふと氣がついてみればそれは口說の疲れに見た床の中の一場の夢であつたといふ筋。遊里に於ける耽溺生活の一面を扱つたもの。前半は二人の口說の不機嫌を執成さうとする取卷連中の酒の座敷の騷ぎを寫したもので、その頃の遊里の酒席の模樣がうかゞはれると共に、狂歌の素養のあつた若狹掾の好みも出て居るやうに思はれる。實說の有無不明。

ミセスガヽキ歌 伽羅は不斷の霧を焼き月常住の夜見世とは。昔の人の見立てかや ナホス地 津々浦々の色里のハル地中に取分け吉原と東に高き一構へ。夜晝ひびく淸搔の 中ギン 音締いとしき ギン 笑顏よし。あいきやう町の鹿島屋の花園がひとり客深い星川平三とて。今宵もこゝに大一座 ツナギ そゝりをうつゝ太鼓持。中地 禿遣手や ハル 若い者茶屋がしまらぬ仇口にカヽル載せて押せ〳〵船宿もよい機嫌なる高調子。ほかの座敷の女郞も知つた客衆と騷ぎをば覗きに來るを呼込んで差いた押へたあひ賴む下戶も上戶もちつとづつ過した上か下地から根もない事も目に立てゝ。氣に懸るのも兩方が オトシ 思ふ。中ユリなる。小諍ひ。色詞 傍は騷げど肝心の客も女郞も浮かぬ顏口說は何か白々しう遣手のまんが取持つ挨拶これは〳〵平樣花樣この賑かなに口說どころぢやござりますまいサヽ御機嫌直してお酒盛〳〵コレ〳〵兄樣オット心得こゝにある幸ひ浴衣の市松染上に引つ掛けうろ〳〵と探し出したる菅笠は茶屋の喜介が思ひ付き提げ煙草盆膏藥の箱を片手に引つ提げて ニヒリ 萬能灸代これさ〳〵〳〵揉み和らげて貼りまんしよ灸代が

膏薬これさ〳〵と呼出づる詞ハ、ハ、、これは思ひ付き飲める〳〵とそそり立ちカヽリ浮かせば二人もにつこりとサア御機嫌が直つたぞ。拍子を抜くなと幇間が氣轉衣桁にかゝりし紙子染打着て出でし頭巾つき兼好法師の聲作り詞これは興がる坊主でござるその興がるのがの字を澄んで。るの字を解略仕つれば即ち狂歌を詠みまするハテ斯うもござりましよか。鼠木戸ちいともいたちならばこそ猫でも爪の立たぬ大入。やんや〳〵これはほんに興がる坊様。幸ひこの泡盛旦那のお盃でサア一杯〳〵オット有難山出しの兼好また斯うもござらうかエ、敦盛を討つ熊谷に引きかへて泡盛を呑むくまがへ盃ハアア詠まれた早速御太儀その口へま一つ押へたヨあり〳〵〳〵イヤ又から引受けた所どうも言はれぬ楽しみ是をお釋迦の飲酒戒とは曲がないこの飲酒戒で又一首仕らうエ、やめよとは釋迦無理如來おしやれども飲まんそんじやと矢鱈燗酒。ハ、、、、いや面白い只今の褒美として忝くもこの船宿の長八が持合せの大茶碗貴様へ差いた何ぢやこの尊き上人へ大俗の身として其茶碗を差いたか。オ、差いたわ。差いたか。差いたわ〳〵二上りサワギ歌さいた櫻になん〳〵〳〵なぜ駒繋ぐなす下び漬喰うてお茶参れからりころり味噌するは隣りの臺所〳〵〳〵オ、自慢ぢやないが鰻一本手に持つならば天へも上ろ〳〵オ、それもよかろてと〳〵〳〵〳〵コリヤ〳〵〳〵〳〵。イヤもしもし花さま平さま御機嫌はオトシ如何にと〳〵と眞面目顔詞ア、さても〳〵面白い者どもどれ〳〵その茶碗我等あひ致さうと一つ受けるを花園聲かけコレ〳〵とめ治注ぐな。よいわい注げヤイとめ治注がぬかやいエ、みかた見苦しい花が贔屓ばかりしをるサアよい子やきり〳〵と注げ〳〵。イエ〳〵あげる事はなりやせぬほんにをかしい常にはあがりもなさらいで今夜に限つて茶碗酒コリヤ又味な事ぢやなう。何のあぢ事であらう常には飲まねど今夜は飲みたいから飲むのぢやム、それ程飲りたくば尋常に上げませうどれ其銚子こちへ寄越しやサア出さんせとドブ〳〵〳〵ア、こぼれる〳〵それでようござんすかオットよしなと飲まんとするを引つたくり廊下へ投出す茶碗酒カヽリ南無三浴びたと立騒ぐ。こちらは口說の蒸し返し是はならぬと大勢が何のかのして御機嫌がソリヤ直つたぞ打つて置けしやん〳〵。ま一つせいしやん〳〵。カヽリしやんと口說も納まれば。しらけ

し座敷をくろめる細工。いつそ男がまし〳〵と。色カヽリましくしや返る太鼓の拍子にのつて汗水になる茶屋の喜助が口やめぬ。一拳しよ一拳しよ一拳とんてきてきめんに取つて飲んだる足元はよろ〳〵よろふな〳〵船宿の長八が述べる口上の 詞ハアイ御機嫌ようお遊びも。酒が言はせて ノルオトシしちくどう喚き散らして立歸る。皆々歸れば遣手もそこら片付けて引廻したる屏風の内モウお靜まりださうなア、草臥れたコレ小兵衛殿おりや明日の朝觀音様へ參らうと思ふ。こなた夜番なら必ず早う起して下さいサアとめ治も來て寢やア、南無妙法蓮華經と欠伸しながら下へ行く。カヽリ小兵衛も背ける行燈の。油つぎたし燈心を細う搔立て引立て下りる階子の音も澄み ギンオクリ夜もしん〳〵と更け過ぐる されば夢は五臓の勞。七情の爵するに依つてなすとかや。座敷々々の睦言も 地やゝ ギンひつそりと靜かなる ハル夜嵐寒く吹送る。上ギン鐘指折れば子も過ぎて ギンもう丑三のうしやよ 中覺悟もと。清き白無垢を。ハル對に二人が行く道と。思案も若き若紫の扱き帶。切つて互の鉢卷に分くれど仲はカヽル分れまいウレヒ未來までもと手を取合ひ顔見合せて涙ぐみ スヱフシ物をも言はず居たりしが 色詞男小聲に言ふやうはナウ花園。そなたに染みて通ひたる日數も重なる不埒の段々。養父の咎めに 義太夫節逢ひ馴れし仲を引分け上方へ。上さうとある悲しさに。上死なうと極めしおれが身と。共に覺悟の志。忝けな入いぞや ナホス嬉しいウレヒぞや今の誠を見るにつけ。日頃は仇と疑ひし入 謎も本意も打入 解けて死なば一緒の誓ひの言葉。立通せども通らぬものは逢ふ度に。廓を出して女ども。こちの人よと言はれうとの。其言の葉は枯れ失せて。枯れぬ若葉の盛りのそなた。おれが手にかけ殺すとは。如何なる過世のカン惡縁ぞや。入許して袂に當て忍び涙に スヱル暮れゐたる。色詞女はとからの答なく フシ涙にくれてゐたりしが。下やう〳〵顔を振上げて ウレヒそれ。合其合悲しみは誰がさす業みんな私がさせまする。その御苦勞を露程もせめて私が身に受ける事も叶はぬ勤めの身。お前と切れてわしとても生きてゐられぬ身の上を一緒に死ぬるが何のそのお前に着せる恩かいな。長地からいふかくの繰言はこれまで歌や淨瑠璃に。語りつくして古けれど言はねば入胸も晴れやらぬ 合月日も忘入れぬ去年の春二人一座の初會の夜まだ。下打解けぬ花の紐心引合ふ弓張の。月の宵よりどこや

らが好いたお人と思ふから。お前の遊びや言はんす事。一つ〳〵に受取つてそれ。詞お前覺えが。ござんしよがのほんに床の納まるまで座敷を立ちし事もなく。しかも床へも朋輩より。早う往たとて嬲られて。惡口いはれし嬉しさはだくつく胸の打付けに。恥かしいこと厭ひなくほんの心で云ふ事を。お前はわざと憎らしい。逆はしやんす面白さ身にしみ〳〵といとしさに肌を離すは厭なれど。内のお首尾と茶屋からの。迎ひを憎う思ひしも下ギン無理な口舌で止めるさへ。馴染なき身と起き別れ。歸せしあとの床の波。夜晝かはる客の内。どうぞと思ふは來もせいで詞思はぬ客は來る習ひ。大方お前もござんすまいと。思へばいとゞ戀しうて。逢ひたう思うた眞實がお前に通ひ通はんす。夜毎日毎の可愛さは次第につもる富士の雪。互の雪の神かけて。合ながう誓ひし命をば。今宵死ぬるも前の世から。結びし緣と諦むれば スヱフシ悲しみ歎く事もなし。詞さりながらこなさんは上方の。親御樣たちさぞお名殘惜しうござんしよ。御兄弟樣御一家へも。言ひ置かんす事あらば。書置を認めて。又おつしやり度い事をも。言うて死んで下さんせ。オヽ優しいことよう言やつた。上方の親達よりも。御恩の深い今の親御の事をさへ。思はで死ぬる不孝者。なんの書置どころであろ。そなたは日頃から孝行な人なれば。定めて親御の事が氣にかゝろ。いえ〳〵何の氣にかゝろ。云へば云ふ。程心の迷ひ。未來の苦患を重ぬる種。わしや死ぬるが嬉しい〳〵色どうで永らへ居たとても。添はれぬ此世を思ひ切り。一緒に死んであの世にて。ながう添ふのが本望ぞや。早う殺して後からと聲を忍べば涙さへこぼさで作る笑顏の健氣さ。男は見るに忍びかね其心中の誠をば。知つてはまりし戀の淵。身一つ棄てうと覺悟せし。此身と共に死なんとてその潔き姿形。どこに刄が當てられうおれやもう目さへ當てられぬこれ。忝ない手を合はすと。拜めば其手を押戴き。左程私が可愛いか。因果な者に馴染めて。思はぬ苦勞苦しみを。かけるもみんな私が業合許してたべと手を合はせ。同じく拜めば。イヤ我ゆゑと。袂をくはえ抱き合ひ。スヱフシむせび入りたる忍び泣き。詞男はハツト涙をおさへハア、迷うたり〳〵かういふ内ももし人に。見咎められては一大事と。あたりに有りあふ三味線箱。双六盤も取寄せて唐紙襖に押しかけ〳〵誰が聞付け斯付けても。たやすく入れじと心張をと

つくとしつらひイザ潔う心中して未來の契りを急がんと。するりと拔いて女の胸先。突通したる刄の氷冷いやり冷や／＼冷汗の。下流るゝ血汐を押拭ひ。後まで殘る死恥と。つくろひ直して見る夢の。覺めぬ死骸の溫まり。遲れはせじとわが咽喉を。ぐつと一えぐり。抉る苦しき曉の。夢か現か俯向けに。伏すは正しく正夢の。覺めての後の此浮名。世上にひゞく明けの鐘。その晨朝によう死んだ。死んだ／＼の心中沙汰。かうぞとトル上告ぐる鳥の聲早や迎ひの聲々の。クリ上騷ぎに二人は夢覺めて。添寢の床に顏見合せ。果然として居たりけり。

池の屋義助 津田屋哥浪 戀衣對の白むく　九

〔解題〕通稱「哥浪義助」。鶴賀若狹掾作。吉原津田屋の歌浪に深く言交して是非夫婦にならうとして友達まで賴んで親に言入れたが、聞かれないのみか勘當しようとする程なので、遂に決心して歌浪と共に豫て用意の白無垢に着かへて書置をするといふ仕組、例の痴情の果てが心中といふ新內によくある型の作。實說の有無不明。

待つ宵に。更け行く鐘を數ふるは。飽かぬ別れの鷄よりも。ハルいとどつらしと來ぬ文を火寄につゝく占方も。來ぬと當れば門說經幾度も。消して仕直す待人の。來い／＼こいを文ヒブシ紙ありたけ。箒投げたりサハリ癇にナホス。ハル廻數へる帶の緣ぎはに。ちやうどあたりてツナギ表から呼びたつる間もあら嬉しハルすトシ見えた。さうなと立ちあがる。詞所へ廊下をくわた／＼／＼。池様の御用ぢや。歌浪様／＼とカヽリ中大聲あげて鳴神や。どろ／＼よろ／＼踏む足もせうぜうの夢介がわめきにつれて座になほる。客は淺學あさからぬ中よい對のお雛様。色コリヤ人形様とあだフシ

ロ〳〵。詞歌波は打笑ひ。コレ夢さん此頃は人形様もどこにやらよいお雛様が出来たげな。もしそれで今夜も遅いのかへエ、憎らしいアイタ、、さあいたか。そこにゐさんせ。ア、申し〳〵もう口説かへ。そこらを酒でけし人形。わつさりと。うき人形ぴいぴいや風車。くるり〳〵くる〳〵〳〵とのんでまはそサアだんなおはじめ〳〵。おしきせが相済んで。わたくしはいりやうまんぞくとカヽルしたぢの酒に又四五はい。色いつそ茶碗でぶつつけろ。若い衆やりさんおさへか。お手もと。おあいいたそと夢介がハルオトシまはらぬ舌でひよこすかと。詞もし旦那。昨日に今日は似ざりけりぢや。其様子といつぱ。ゆうし池様と二人一座で。深川邊へふかれゆき。おふかま様にふかされ。ふか〳〵と糊賣婆の。ア、口が辷つた。

へエ、くされなやつさ。大もて〳〵それにマア聞いてくんなさりやせ。アノわつちに女房があるかと聞いたと思ひなさりやせ。イヤ爰は一番あやなす場と思つて。イヤ〳〵おら女房もなんにもないと云うたと思ひなさりやせ。そこできやつめがきつと受取つて。嘘ばつかりと云うてわたしが顔をぴつしやりとくらはしやした。いやもう其痛さ。強いやつさそれでもわつちも負けはしやせぬ。夜一夜相撲とつて。大がち〳〵おすまう西のかたやにおいて。てれつく馬右衛門。豆が過ぎたか今日のねむたさ。此まあ色男には何がなる。カヽリならぬ地太鼓のどんくさい。イヤ色酒くさい。問はずがたりに口説の種をまきじたや。詞よろ〳〵〳〵ア、イよいやした。ヤア向うのきつかうやへ一寸見舞うて参りやしよ。ウタヒおいとま申

すかた〳〵よ詞ア、イこれ〳〵若い衆。やり衆。旦那を頼む又逢ふ迄はさらばだ。ちゝちん〳〵〳〵〳〵とつちん〳〵〳〵〳〵。口三味線も不器用にまはりかねてぞオトシ歸りけり。色詞すまぬ座敷を見てとる遣手。これはしたり歌様いまの夢すが。話をまことになされて。お腹が立つならいつそお横に。しつぽりとおしげりと。オクリみな〳〵へたつて下へ行く。カヽリ中跡中は互に顔そむけスヱフシ暫しはものも云はざりしが。歌浪は色振返り。詞もしお客様昨夜はさぞお楽しみ。おもてなされて面白かろ。そりや其筈さ深川とやらの小さんさんとやらいふ結構なお女郎様面白うなうては。わしや疾うから知つてるぞへ。サア顔を上げさんせ。サアどれ顔上げさんせ。ホウこりや泣かんすか。

何が悲しい。但しはわしへ面目ないか。それほど小さんが戀しいかエヽ。ウレヒ泣かしやんせ入泣かしやんせ。其涙が深入川へ流れて小さんが汲んで飲みやらうぞ引。ほんに云ふではなけれども。どこへ入どうして行かんすとは。知つてゐるのに實らしう。入くろめてわしを操なすのか。上こな樣の心意氣さうした入ものではないわいな。わたしが思ふ半分も。おまへのカハリ心にあるならばうか／＼はまりしも本望ぢやとは云ふものゝ。ねが好いた故いろいろと。愚痴な恨みに愛想が盡きよう。上どの道入からどう云うてもたゞ入こなさんがいとしい惡う聞いて下んすなと。わけも涙の口說言死ね死なうとの仲でさへ。疑ふ女の慣ひにぞ。粹も惚れては野暮よりも。くだらぬスヱフシ事

云ふものならし。男はほつと溜息つき。詞アヽ如何にかうした勤めするとて。よい機嫌な事云やるの。昨日も話すそなたの事此間よりだん／＼と。友達を頼み親一門へいろ／＼と云うて見ても。とかく女房にはさせぬ。たつて女房にせうといはゞ。子が一人ないと思へば濟むと。とつてもつかず云ひ切らるゝ。今家を出ては一門へも友達へも世間へもどうして立たう又そなたを。女房にカヽリ持たいでは生きてウレヒゐても何樂しみ。ハルかねてそなたと云ひかはせし。死ぬる覺悟に胸を据ゑ書置までも認めて。今宵限りのカン此世の入名殘。いまはの際迄その樣に疑ひ深い心では木乃伊の夫婦も覺束ないと。ヘルわつと泣けば。色ちやつとおさへ詞アア聲が高い／＼。そんなら今宵にとん

と覺悟を極めてか。アヽ嬉しうござんす忝ない。それでこそかねての本望。なんのまあ疑ふ心がござんしよ。そんなら少しも早う死用意。色詞おまへもわしも新しう仕立てておいた白無垢を。カヽリ共に中着替へて死恥を。人に見せじと嗜みてオトシ死ぬる若氣の哀れさよ。色詞とてもの事に私も親達や親方衆。傍輩達へも一筆づつ書置を殘したし。詞そのうちにこなさんは。二人の回向未來の緣心靜かに讀誦をと。涙しを／＼取りカヽリ出だす。ヘル硯の墨の緣薄き此世を捨ててあの世にて。永う添はうと見えもせぬ。オクリたさきを。合頼みの夜も更けて。心細くも書く筆の上命毛。短くなりにけり。

藤の屋喜之助 菱野屋早衣　藤蔓戀の柵　一〇

〔解題〕　通稱「早衣喜之助」。鶴賀若狹掾の作といふが疑はしい。この淨瑠璃は、天明五年七月九日、幕府旗本寄合格で食祿四千石の藤枝外記（廿八歳）と吉原京町二丁目大菱屋久右衞門抱遊女綾絹（十九歳）とが情死した事件を潤色して、藤の屋喜助といふ兩親も妻もある町家の若旦那が吉原菱の屋の早衣と添ひ遂げられぬを悲しんで心中するといふ風に仕組んだものである。

色詞へ旃檀は雙葉よりかんばしき。楠は二葉より名石を含むとかや。武士は腹中を出て腹中を定むるは。地カヽリ動かぬ國の教かと思へど夢の世の中や。ハル堅い青葉は表向。その内證は長地柔かや。情商ふ流れにも。ハル深い心のあればこそ。ギン花の菱野屋早衣に絡む藤の屋喜之助が。地ゆふくれごとの玉ぼこを人の噂に花川戸。戀の棧橋四つ手籠。ウレヒカヽリ肩を揃ゆる衣紋坂。誰がいひそめし吉原と。げに繁昌の大門を。

入りこむ人や仲の町。詞氣さくな茶屋の作次兵衛がサア／＼旦那がお出で遊ばしたおつれさんはどう遊ばしなされましたと。ハルオトシ機嫌笑顏の女房が奧へ伴なひ入りにけり詞サア／＼駕籠の衆。旦那がおつしやる酒一つ。コレ〳〵は有難うございます。コレ棒組よ。盃では面倒な。いつそちかづきの是がよいと。ぐつと茶碗でひつかける酒の。色詞機嫌に山吹の花の光に氣も勇み御亭主様お世話になりました旦那様へもよろしくとひよろ／＼足で踊りける。歌カヽリへ誰々で彈く三味に歌へ誰に見せうとて紅鐵漿つけうぞみんなお前へ心中立てヲヽ嬉し／＼メリヤスへ花誘ふ蝶は霞の野邊を待つ合日陰の木々は花を待つ合人はなさけの夜すがらの二つ枕のはなを待つほんに勤めは儘ならぬ江戸節へ夏の夜の蚊遣りのあとの轉寢に。座敷／＼も靜まりて。地寢卷のまゝに喜之助が。ハル身は空蟬の心地して消ゆる思ひの蚊帳の中。詞コレ早衣今宵ま

ではいろ〳〵と首尾して來たが。最早來る事も叶はぬゾヤ。なぜにえ。ハテ知れた事さ。つね〴〵そなたにも話し置く通り。親。女房友達の。意見と義理に責められて。此頃は酒も通らぬ物思ひ。どうした因果な事ぢややら。今宵がそなたの見納めと。スヱ顏つく〴〵と打守る。早衣タヽキ涙にくれながら。さしこむ癪を押しさげて。ヲカヽリ聞えぬ事をいはしやんす。逢ひ初めてから片時も忘るゝ日とてはないわいな。カンお顏の窶れを見るにつけお宿の首尾はいかゞやと。案じ暮せし甲斐もなや。無理は男の常なれど言譯するは女だけ。云うて返らぬ事ながらおまへに別れて早鳥の啼く間も生きてゐらりやうか。ハルおして止めたき朝毎の。別れの無理なお言葉に。わたしが強く逆らはゞ。粹なおまへのお心も。變らし

やんすであらうかと。あのゝものゝに紛らしてかへす思ひは色絲のハル結んで解けぬ悲しさは人に知られぬ胸の内。クドキ泣いて明せし。戀の闇焦るゝ胸は淺間山。逢ひたい見たいは。妹脊山いつか夫婦と待乳山聖天さんの御守りや。苦勞をかけた九郎助の稻荷さんや其外の廣い世界の神樣の願が叶うて嬉しいと。思うてゐたに。今更に。添はれぬやうになつたとはどうした薄い。カン緣じややら。ナホルわしほど因果な者はなし。五つや六つで兩親に死別れ兄さん一人を便りにして。朝な夕なの艱難を。泣明したる月や日の。恵みもつきて此廓へ賣られて來たは身の因果。阿波節西も東も知らばこそ遣手に叱られ。名代の客衆に終夜いびられて。涙を絞る袖とめておまへひとりを便りぞや合たとへ野の末山の奥どんな辛苦も

厭やせぬ手づからわたしが飯炊いて。キン樂しむも戀。苦しむも戀。戀といふ字がさすわいな。まことは辛抱一つぞや。カン可愛うて〳〵すいになる程愚痴になる。起誓を守る約束の神さんがたも聞えませぬ。とても添はれぬ中ならば一緒に殺してくださんせと。スヱ袖は涙の行潦。地男も涙の顏を上げ。詞コレ早衣人間はノ風の前の燈火の如く。此世は夢の假の宿。未來は同じ蓮華臺と。色詞男の言葉に早衣は。嬉し涙と諸共に。詞草葉の下で父樣や母樣もさぞお嬉しうござんせう。おつけお目にかかるから。刄にかけし我がつまを。必ず恨みてくださんすな。カン非業の死の罪科を。閻魔さんが叱るなら詫言をして下さんせ。ゆうてんさんや釋迦さんのよもや見捨てはさんすまい。おそばへ往んで朝夕のお茶香華を氣をつけ

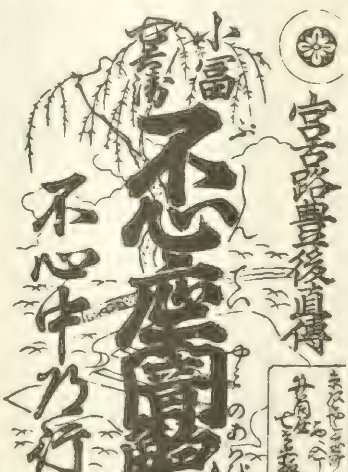
て。此世の罪を滅さん。詞南無釋迦如　ないうちに覺悟をせよ。アイそんなら　ほに染むる三つ蒲團後の噂となりにけ
來。ゆうてんさま。助けて給へ南無阿　おまへもオヽ覺悟はよいとカヽル用意の　り
彌陀佛。フシカヽリ此世の緣は薄衣（うすごろも）。遠寺　一腰拔きはなせば。陽炎稻妻燈火（ともしび）にけ
の鐘の聲過ぎて。互に顏を見合せて。　はしく映る。三重夏の夜の。涙の雨の晴
詞コレ早衣今こそ最期の時移る。妨げ　れやらぬ。クリ上はや東雲（しのゝめ）の亂れ烏血し

小とみ 七兵衛　不心底闇鮑（ふしんていやみのあはび）　一

〔解題〕通稱「不心中」。鶴賀若狭掾作曲。七兵衛といふ浮氣で薄情な男が、小富といふ一本氣で馬鹿正直な遊女に心中を迫られて、日ごろ約束の手前心中のため駈落したが、死ぬのがいやさに色々の難くせをつけてとう〳〵死なずして不心中者と笑はれたといふ、滑稽にして皮肉な作意の淨瑠璃である。

本曲の原據となつたものは寶永三年正月京都の都萬太夫座で興行された「鳥邊山心中」の結末のおまん源五の鳥邊山の心中の場へ取合せた車屋七兵衛とまつといふ遊女との不心中の趣向である。即ちこの作ではまつは熱心に心中をすゝめるを七兵衛は、やれ書置をしなかつたとか、脇差を忘れたとか、他人の相口ではいやとか、場所が惡いとか、難くせをつけ、とゞ「人殺し〳〵」といつて、大勢出て來たその紛れに逃げて行くといふ筋である。これを取つて淨瑠璃に仕立てたのが宮古路豐後の「不心底闇鮑」で、新内はこれから出て居る事は明かで、文章も同じである。薗八の方にも同じ物があるが、新内との前後は明かでない。

中地色かけ渡す。橋も涙にかきくれて。ヘル袖の氷柱の重たくも。なくスエル／＼彼處に坐しければ。色小富も共に座を占めて。詞中し七兵衛様。今からうして死ぬるとは。嬉しいながら。ギンあぢきなや。それ覺えてかこな様に。初の逢瀬は雨降りて。内もしつぽとギン相惚のいとしらしいと戀風に。ノル外の勤めはいやましく。水漏らさじの仲となり。いとしい男の體より。血を取る事のわしやいやでこなんにこそは隠せねど。私が起請はギン月々の始め／＼に改めて。先の世先の。クルその先の彌勒の世まで夫婦ぞと。言交したる二人が仲。それに田舎のうてすめが何の因果に上り詰め。又其上に身請して女房にすると言ひくさる。いとしいお前に別るゝつらさ。常々互に言交す。添はれぬ時は心中と。思ひ詰めて今宵の闇。こゝが二人が死所。一所に死ぬるは本望と。嬉しい半分同じくは生きて添ひたい半分の。名殘惜しの此一夜と。夫の膝にスエル打伏して聲をばかりに泣きければ。詞男は有りやう御迷惑。日頃可愛い二世と。言ひ過して引かれぬ義理不承々々に涙ぐみ。脇差ひらりと拔放し。詞小富成程見事相果つる。所存でこゝまで來たは來たが。見やれ有合ふ一腰はとうに曲げて花代となり見かけばかり鹹の竹光ぢや。モウそれでは朧豆腐も切れはせぬ。身を投げうにも下へ瀬々四五尺足らずの假橋。此上からは思ふやうに死なれまい。コリヤモウ肝心の道具が無うて氣の毒と頭を掻いて逃仕度。女うなづき涙を止め。詞サイナア私も自然お前の脇差に錆でもあつては仕損じも出來うかと。親方の合口をそつと取つて來ましたと。懐の大袱紗に卷いたをほどけば七兵衛は。これ幸ひのむつと顔。詞何ぢやア盗物で心中せいか。イヤホンニ慮外ながら緩怠ながら。生れてから此方



そちが所に四五十兩。殘りが有らうか知らず鐚半錢とんびせぬ此男。それに何ぢや。最期のいまは。極樂往生の門出。九品の蓮臺へ片足かけて彌陀の來迎のお影で。どうぞ助かる樣。心中に祈誓の只中。働いた物で死ねたゞ外聞惡いに浮名の上に掏摸の上塗。生壁叩いて。己が顏へ泥の刎る惡名が取り度いか。エヽ／＼そんな水臭いきだんと知らずさつぱりとしてよい物ぢやと。汝がそのかはらけとゑくぼにはまつて。長の年月心を盡した色あら怨めしや／＼と。橋どう／＼と踏鳴らし。やつちや踏出す腹立ち涙。ハルオトシどうぞ止めたい下心。カンわつとお富は咽び入り今が此世の名殘となる。機嫌ようして下んせと。色合口はらりと。又懷そこは氣遣ひさしやんすな。合口がもし切れずばと。これ見さんせ剃刀も二挺まで。よう研いで持ちました。これで見事に死にませう。サアござんせと死を急ぎオトシ進む心ぞ哀れなり。七兵衞も今はがつくり力を落し。これでなア。いかさま是では見事にいきさうな物ぢや。テモ扨もコレカレかれ足と貯のよい女子ぢやナ。何のその。百年目ぢや。清水の舞臺から落ちたと思うて死のまで。ヤさりながら。肝腎の數珠を内に置いて來た數珠が無いと冥土へいても閻魔殿が。佛仲間へ入れぬげな。其時は六道の辻に立つて。袖乞せうより外はない。一寸行んで取つてこう。そなたは爰に待つてゐや。アコレ／＼／＼何いはんす。それ數珠はお前の耳に掛けてあるわいなア。どうやらお前は死にとむなさゝうなぞえ。ハアテやくたいない事ばかりそもじと二人死ぬるに。何の死にとむない事があろ。モウ死にたうて／＼身内がぞく／＼／＼するわいの。なにを言ふもそなたがいとしさ故いとし可愛と締めつ締められつしたその肌へ。どこに刄が當てられうと。ひよつと迷ふ心より魂が先へ知らせにいたさうなと。欺して見てもどうしても仕舞の付かね逃口はオトシ泣いて見するぞをかしけれ。そんならこゝで早う／＼と坐を組めば。アヽコレ／＼どうやらそこは蛇の出さうな所ぢや。死體長蟲に刺さるゝと。冥土で蛇ぢいが出てかぶるげなまちつと脇にしたがまし。そんなら爰かへ。アヽそこには蜥蜴がゐるわいの。エヽモウそんならどうせういな。アヽ／＼。マチヤ／＼よく／＼思へば今日は黑日ぢやわいの。何言はんす死ぬに日を見る事かいな。エヽ文盲な和郎ではある黑日に死ぬれば地獄へいても。暗うて／＼

一足も歩かれぬ其上提灯は持つては來ず。地獄へ行ても蠟燭はあるまいし。角太夫喑きより喑きに迷ふ淺ましと。何をいふやら埒もなくは死にとむ涙なり。小富はせいてどうぢやいな七兵衛樣。明くるには程もなささうなに。早く／＼と剃刀渡せば是非なくも受取つて。サアそんなら覺悟はよいか　二。上にはいへど氣味惡く。スカスそろり／＼と逃行くを。コレなう／＼と追ひかくれば。ヤレ悲しや人殺し出合うてやいと聲をばかりにわめくにぞ。カヽリ里人立合ひ棒ちぎり追廻されて是非なくも。彼方へうろ／＼こなたへ逃げ。惜もいまはいつしかに。仇名を殘す不心中。語り傳へて世の人の。笑ひ草とぞなりにける。

鬼怒川物語　二

累身賣の段

〔解題〕　通稱「累身賣」。鶴賀若狹掾の作曲と傳へられるがどうであらうか。「伊達競阿國戲場」（安永七年作）の八つ目埴生村の段の累身賣の條を取つて新内に作曲したものである。尙原作についての詳しい事は、義太夫節の部の「薫樹累物語」及び「淨瑠璃名作集」下、「伽羅先代萩」の觧題御參照を乞ふ。

〽案じゐる折から表へ合羽がけ所に見馴れぬ一腰も派手な拵へ取りなりは流石それやと門口から。詞〽アイヤ申しちとお頼み申しませう與右衛門様とはこなた様でござりまするか金五郎さんと言ふお方がお前様にと承りましたが一寸お目にかかり度うござります。〽と言へどこなたは耳にも入れず。〽通つて下さんせ何ぢややら邪魔らしい奉加

どころかいなアわが所はアノ宗旨が違ひます。へと胸のモヤ〳〵愛想なき。へイヤ左様な者ではござりませぬ私は江戸吉原の女郎屋でござりまするが金五郎さんに御相談しかけました奉公人金持つて來いこなさんに待つてゐるとおつしやいましたがハテ面妖などちらへお出でなされましたかどうぞお目にかゝり度いものぢやが。へと言ふ内フツト氣の付く果わが身を賣つて百兩の金調へる便りにはコレ幸ひと笑顔して。へオヽ私としたことが粗相な事を申しましたどうで見える金五郎さん這入つてお待ちなされませ。へハイ〳〵左様ならばお邪魔ながらヤそんなら御免なされて下さりませ。へと知らぬ人にも取入るは商賣筋の上手者果は傍へ煙草盆いひ寄る機會に茶を差出しペイヤ申しお前はアノ吉原の女郎屋さんでござんすかえ。へハイ〳〵左様でござります。へオヽそんならお前に折入つてお頼み申したい事がござんすといふは外の事でもない夫が手詰めの難儀につき急に金の入る事があつて身を賣りたいといふ人がござんすが今いうて今相談の出來るものでござんすかえペイヤモウそれは私が商賣づくいつでも談合出來まするそしてマアその本人の年頃はえ。へさればいなあ十七八でござんせう。へオットよし〳〵。して何かえ顔のすまる立入りの様子はえ。へサア顔形風俗はエヽまア江戸でいうて見ようならば歌舞伎芝居の半四郎とやらにヨウ似てでござんすといなアペそいつはきつい代物ぢやどうぞわしが方へ相談を極めませうさうして金の望みは。へアノ百兩にさへ買うて下さんすりや年は五年が十年でもそれに厭ひはござんせぬといな。へイヤ モウ今の話の通りなら随分百兩には買ひませう幸ひ金はオヽ爰に持つてゐる相談さへ極つたら直ぐに連れて去に度いものぢやが。へオヽそんならさうして下さんせエヽ忝いしたが今いふ通り夫のある身ペ互に得心づくの上暇乞ひする其間アレあの納戸で暫しが内。へそんなら必ず何もかもコレ手廻し早う頼みます。へといそ〳〵としてかの男納戸へこそは入りにける果は跡を見送りて手詰めの金の今の間につい調うて嬉しやと思へば悲しき憂き別れアヽ是とても男の爲とてもの事に潔よう夫に泣顔見せぬのが別れる此身の置土産と氣を取直す一間より何心なく出る與右衛門顔を見る目も寒がる思ひ押隠して傍に寄りペイヤ申しこちの人私やお前に願ひがある聽屆けて下さんすかえ。へ改まつて女房

ども願ひとそりや何事。へサア日頃お前のいはしやんすには鏡を見ると添うては居ぬ暇を遣ると言はしやんしたが私や其鏡が見たうござんす。へム、何と言やるぞそんならそなたは暇くれいとサ言やるのか。へアイ今宵に迫つた手詰めの金勤めに遣つて下さんせ。へとわが顔形の變りしとは知らぬ不便さいぢらしさエ、まあなんの其顏でと言ふもいはれぬ苦しさの胸に涙を呑込みながら。へエ、埒もない縱へどの樣な事があらうともそなたに勤め奉公さして兒の三婦へ立つものかいの。へさいなアそれぢやに依つて暇の狀暇下さんせ與右衛門殿。へとは言ふものゝ世の中に女房は夫に去られまい暇取るまいとする筈を緣切られても嬉しいと思ふ心を推量して可愛と思うて下さんせと思はずワット聲立てゝ取付き縋る蔦の葉の袖に柵む憂き涙とゞめ兼ねたるばかりなり。へ折から息せき村の歩き。へ申し／＼與右衛門樣山名宗全樣から繪姿を持つてお尋ねなさるゝ者がある今ござりませと御代官の言付けサア／＼今ぢや／＼。へとせり立つればハットばかりに與右衛門が重なる思ひは命の的胸を据ゑたる魂の一腰ぼつ込み立出づれば。へコレ待つた待たしやんせ與右衛門殿さつきからも言ふ通り必ず短氣を出して下さんすな。へと言ふ間もせはしく。へサア申し早う／＼。へとせつかれて代官所へと出でて行く後影さへ名殘かと見やる目に湧く雨涙しを／＼立つて押入の冬の支度の綿入れも漸う裾を合はせ物離れものとはいひながら豫て斯くなる身と知らばせめて不自由のなき樣に洗濯物の糊立も涙に濕る絲筋や針のみゝぞの見え分かぬ欠伸まぜくら納戸より立出づる以前の男。へアアとんともう旅草臥れで思はず知らずする／＼とやつて退けたサア申しお内儀さん暇乞ひも濟んだならナント賣樣めしませうかいな。へオ、さぞお待遠にござんせう。へサアそんなら其百兩の金渡して下さんせ。へイヤもうそりやア何時でも渡しませうがして其奉公人は。へアイ私が事でござんすわいな。へエ、何をじやら／＼とサア／＼氣がせきます頼みます。へイエじやらじやらではござんせぬ眞實誓文私が身を賣るのでござんす。へエ、こなさんはコレ何を言ふのぢやぞいのソレさつきに言はんした半四郎といふ代物。へさいなア私が事でござんすわいなア。へヤア此人は氣が違うたさうなそんなら何かえアノこなさんが半四郎かえ。へアイ。へイヤ モウ丁四郎が聞いて呆れる

わいの是いのこなさんの様な者を誰がまあホンニ夜鷹にも欲しがる者はないぞや。ヘエヽそりやマア何で其様に。へ何で〳〵其様にも厚かましいあんまり呆れて物が言はれぬわいのハヽア貴様コリヤ鏡見た事はないの。へアイちと様子がござんして鏡見る事ならぬわいな。へいか様さうであろ〳〵生れてから鏡見た事はあるまいのコレこなたの顔の容體を言うて聞かすわトットまあ何ぢやあらうとぐるり高のチョッポリ鼻然も反歯でどうやら横の方にチットばかり禿が見えて其代りに跛と來てゐるわい。ヘエヽ。ヘヤエヽも凄まじいわい幸ひ爰に髯抜き鏡稀有怪訝な御面相それとつくりと見やしやれ。へと懐より取出しやら腹立ちに差付くれば思はず初めて見る顔にハット悔りまだ外に人も居るやと見廻せど我ならずして面影はよもやと又も取上げて見れば見る程情なやコハそも如何に悲しやとあなたへうろ〳〵こなたへ走り狂氣の如く身を悶え鏡を發止と打付けて我が身をどうと打倒れ聲をばかりに叫び泣き哀れにも又いぢらしき。ヘエヽ忌々しい暇潰しこの様な化物を百兩は扨置いて米一升にも買手はない。へと呟き〳〵立上りせめてお脛で腹癒よと泣入る累を踏飛ばし足を早めて立歸る前後正體泣き崩折れ顔も得上げず居たりしがアア思へば〳〵恥かしや斯ういふわしが顔故に鏡を見せぬ夫の心其顔もせず朝夕に可愛がつて下さんしたお情過ぎて情なやなぜ打明けて有様にいうて聞かして下さんせぬ又姉さんも胴慾な現在の妹をこれ程までに憎いかえ斯ういふ事とも露知らず今の今迄わしが身で縹緻自慢をしてゐたが恥かしいやら悲しいやら何面目に與右衛門殿どうまあ顔が合はされうせめて夫に同じ名の鬼怒川へ身を投げて死ぬるは未來で連添ふ心とは言ひながらさつぱりと思ひ切られぬ惚れた仲死んだ跡では美しい女中を女房に持たしやんしよとそればつかりが氣にかゝりよう浮まぬでござんせう可愛と思うて折節の御回向頼み上げますと口説き立て〳〵絶え入るばかりに泣き盡くす沈む錘とあたりなる刈豆籠を身のしづに負はれ追はるゝ死神の若し仕損ぜば身の恥と見廻す傍に錆びもせで研立て鎌は今宵置く草葉の露と消えよかといとゞ哀れを添へにける秋雨の音立歸る夫の足今更に顔を合はすも恥かしく見附けられじと吹消す行燈。へオヽ灯が消えてある女房ども累果。へと與右衛門が摺れ違うたる門の口。へ誰ぢや〳〵そこへ出るのは累ぢ

やないか。へといふ聲跡に聞きさして テ怪しやと思へども綾も分らぬ眞の闇女心の一筋に倒けつ轉びつ走り行くハ 跡を慕うて急ぎ行く。

草津之段 名物姥ヶ餅　一三

〔解題〕 通稱「姥ヶ餅」。新内滑稽物中の名曲。閻魔王の乳母が地獄を出奔した閻魔を搜すために草津の名物姥が餅の婢女となつて居る處へ、馬方と成り下つた閻魔が來て邂逅し、姥が餅を御馳走になるといふ仕組のもの。大體に於て重の井と自然生の三吉とのめぐり逢ひ、狂言の「朝比奈」の飜案との綯ひ交ぜであつて、それに下代萩の飯炊きのもぢりなどを取合せてある。

正本には「鶴賀若狹掾直傳」とあるが、作中に德本上人のために念佛の流行を當込んだ條などがあるのによれば、文化末年頃の作ではなからうかと思はれる。

三下りへ浮世色餅さて草餅や 合 粟の餅こそ杵の音。ヤレせはしない搗いて丸めし。ナホル 生業は。中 草津の里に名も高き。ハル 老婆が餅屋の繁昌は。ツナギ 商賣がらとてあゑさかす。群集は ヽリナガシ 餅もちぎられず。色 上下の旅人口々に。詞 サア／＼休みやれ／＼東海道名物姥が餅。一つ喰うて行かまいか。オヽよかろ／＼。イヤナニおばよ餅をくんなイ。ナントとんだエ、餅だネエ。ナウ錢助。東海道一番の餅だから。よくなくちやア叶はねえ。オヤナニ可内てまへは餅好きか。イヤモ餅でも酒でも鎌倉海道鐵砲の玉ゆき拔けといふのどの工合だハヽヽヽなんと錢助。はれはさ

てやれコリヤどつこいとひやうもないえい餅だ。時にアレアノ姥を見いアレハ冥途の道の名代もの。三途川の乳母といふわろであつたが。近年あつちも不景氣で。今此餅屋の奉公人。年に似合はぬ赤前垂。是迄人を剝いだ代り。今又どえらう使はるゝ。カヽリこれも前世の約束かと。面々土産に竹の皮。ハル我も〳〵と珍しがり皆々 ハルオトシ 買つて歸り行く。ハリマ跡見送りて。お乳母がつぶやき。色詞エヽ何ぢや人の心も知らず。面白さうにおれをばおだてくさる。ヤぞめきくさる。とは言ふもののうそでもなし。冥途を立退いてわしは此家の奉公人。おれが育つた閻魔君。若氣の至りといひながら。有難い地獄館を逐電し。今この娑婆におはするよし。モカヽル何とぞ廻り逢はんため赤前垂の品ものと。ハル往來に臀をつめられ

ても。尻をさすつて暮すのを。知らぬか聞かぬか閻魔様。何處に居るやら飛んだやら。梨も礫もうつとりと煙草喫んでも煙管より。咽へ通らぬ薄煙。人の來ぬ間に足伸ばしスヱテ案じ煩ふ折柄に。ニ上リ 合へ箱根八里は馬でも越すにナア合。長持ウタへ間がナ遠けりやナアニ上リへ越すに越されぬナア大井川ぢやアエ合 在郷ウタへ酒のナアさの字はナア。詞エヽいま〳〵しい畜生めだナア。百に一升の豆くらやがつて荷をつけると面ふくらがしやアがつて。百ばかりの老爺ンが歩む樣によぼら〳〵と。しつかりと歩みやがれ。ハイ〳〵〳〵賴みますハイ馬だ〳〵ヒン〳〵〳〵〳〵カヽリ驛路の鈴の賑はしき。ギン追立て來たるぢや〳〵馬は。地色此海道の仁田山奴。餅屋が門に馬引付け。お乳母をきつと見るよりも。駈寄つてしがみ付き。詞

コレ乳母。逢ひたかつた。スヱテ〳〵と泣き涙 地オトシ どうづけ。なうてハア〳〵〳〵哀なり。詞コレ乳母。逢ひたうて〳〵搜してばつかり居たわいやいと。色甘へかゝれば振放し。詞ヤイかす野郎め。己が乳母とはほてくろしい何のたは言。馬士づれに緣は無いと。突倒せばぶらさがり。エヽ何の無い事があろぞいやい〳〵おれはの冥途の主。ギン閻魔大王。閻大ぢや〳〵。ヤア〳〵〳〵ナニ。ウカヽルわしが育つた。クリ上和子かいなうコレナウ〳〵と取付いてためつ。ギンすがめつ詠め入り。詞オヽ合點の行かぬは理。朕は冥途をしくじつて詮方つきて娑婆住居。元服して髭も剃り。糠味噌を面に塗つて日に干しつけ。ひぬかの八藏と改名し漸う大津に。足を留め。地入八萬地獄の住居さへ。ならず者ぢやと笑はれて。合 カク太夫是

が閻魔の有様か。身に振り掛る火の車。
文詞餓鬼や亡者を責めた罰。ほんに鐘
つく劔の山。合針の山。合血の池へはま
つたら水がない。ぺい／＼破れし。
紙の罰。詞ヤレ乳母おれはの。どえら
う難儀したわいなう。ソレ／＼見やし
やれ。良薬は口に苦しと。年月この乳
母が言つたを聞入れず。今思ひ知らし
やつたか。御先祖代々何くらからぬ地
獄の支配。こなさんが去年七月十六日
釜の蓋の明いた。その朝からのこなた
の家出。色詞扨こそ鬼ども手分して。奈
落血の池或は叫喚大焦熱阿鼻修羅畜生
劔の山。一百三十六地獄尋ね ギン さが
せど知れぬ故。黒闇地獄のさぐり谷。
燈心持つて竹の根を掘つて居た。油屋
の娘にこなさんがホヽ惚れさつしやつ
ての。相傳の冠を賣拂ひ。飯椀に紐つ
けて冠の代りに天窓にきさらしてござ
つたをコレ汁椀ぢやと思うてか。コレ
近年は人間も後生を願ひ。信心に凝り
固つてゐるその中へ。徳本上人ぢやの
小田原の今弘法なぞが出て來ての。朝
も晩も念佛ばつかり。なまあいだ。ヘル
ヘ下ヘカン／＼／＼／＼。ギンなむあみだ
んぶつ。なまいだ。皆極楽へ／＼と引
込み。そこで地獄はどえら閑になつて
の。地獄は熱鐵銹る火の車には蜘蛛が
巣を張る。劔の山には草が生える。血
の池は旱魃で。此夏は雨乞ばつかりし
て居るわいの。番頭の倶正神は帳簿や
めて屈託顔。業の秤は看板ばかり。か
けて見る人無い故に。淨玻璃の鏡は曇
り。地獄の衰微とは。色マア／＼妥な
事ちやぞや。詞地獄の衰微を直さつし
やれ。餘り地獄が困窮する故。青鬼の
彦作は。どうもしやうが無い故に。人
形屋の看板に雇はれて行く。黒鬼の七
兵衛は鍾馗様の御傳馬に取られ。され
ども赤鬼の太郎作は忠義者。一人殘つ
てあつちこちとする内にの。虎の皮の
褌が破れての。ソレ今の物がのろ／＼
出よる。是を隱すにも褌を拵へるにも
金が入る。近年は虎の皮がどえらう高
うなつてナウ。どうも仕様が無い時に
幸ひと山下の黒焼屋に吊つてあつた狸
の皮を盗んで來て。それで。／＼／＼
ちんぽを。下隱せしぞや。地とはいふも
ののいとしやナア。ソノ ヘル 美しい黒髪
を。この様に剃りこぼち。手足は婆婆
と。スエテ又さめ／＼と泣きければ。色閻
魔は涙吸り上げ。詞コレ乳母何にも言
はぬ誤つた／＼／＼。此上はそなたへ
言譯。矢橋の川へ飛込んで仕舞ふと立
上る。色姥驚き。詞コレ和子待たしやれ
イナウ。イヤ／＼死ぬる／＼コレ待た

しやれイナウ放せ〳〵是はしたり地その荒くれないウレヒ王體を。ギンなん〳〵たる川中へ。どうマア一人ウレヒはめられう。下ギン扨しも今日は極月。寒の入り。視うて進ぜる物がある。君にもそれをば食ひ給へ。物うき世界の空腹を。兎れさせ給へやと。地在りあふ戸棚の小豆餅。ギン拵へスエテかゝれば嬉しがり。詞コレ姥。アレ〳〵鳥の親が子に何やら食はしをる。わしもあの様に早う餅が食ひ度いと。地鳥を羨む御心を。ヲヽ道理ぢや。と言ひたさを紛らす聲も。下ふるはれて。詞コレ和子。いつぞや冥途で教へた歌。それを謡うた待たつしやれと。地入言はれて閻魔はどつちよう聲。ウタこウちの裏のいしや軒に〳〵。犬めが三疋子を産んで〳〵。一疋のぶちめがいふ事にや〳〵。詞コレ乳母。餅はまだかや。ヲヽせわしない今拵へて居りまするシテ和子には幾つ程お上りなされまする。コレ乳母。七つ八つではまだ足らぬ〳〵。詞テモたんとお上り遊ばすな。ゴレ〳〵和子爰な内は十が一膳なれど。自らが贔屓ぶりで十五づつ入れて上げますぞえ。サア〳〵一膳でたんのう遊ばせ〳〵。イヤ〳〵コレ乳母。ウタ一膳たべてもまだ食へる〳〵オヤ〳〵〳〵お前さんマア滅法界に。詞たんとお上り遊ばすな。あんまりたんとお上り遊ばすと腹が裂けるぞえサア〳〵砂糖もたんとかけてあるぞえ〳〵。サア〳〵和子お上り遊ばせ〳〵。コレ乳母。此餅食ふのかや。シイ高い〳〵。コレ乳母。高いとは餅が高いかや。イヽヤ聲が高い〳〵。障子の内には此家の旦那。その旦那に知られぬその内に少しも早う冥途の吉左右。カヽリ一所にお供と言ふ所へ。見る目かぐ鼻顕れ出で。ノリヤア〳〵大王。冥途の歸參は叶はねども。地藏菩薩の佐平次で。佛法最初の靈地なる。荒陵山四天王寺の西。邪魔にならぬ所に一字を建て閻魔の。合古跡を殘されよコレ〳〵是は扨はれはさてどつこいそつこい。見る目殿。それは此方の思ふまゝ。其跡はこのかぐ鼻。三途川のお姥事は此草津にて餅を商ひ長き渡世を致されよと。殘る方なき御差配ギン今に殘りて天王寺。合邦ケ辻閻魔堂江洲矢橋のゝ姥が餅いはれはかくと知られける。

道中膝栗毛　一四

市子口寄の段

〔解題〕 通稱「彌次喜多」。言ふ迄もなく一九の「東海道膝栗毛」の中から適當の箇所を取つて淨瑠璃に仕立てたもので、富士松魯中の自作自調である。今日膝栗毛が新内に作曲されて居るものは「紐打の段」「富士川の段」「市子口寄の段」「安倍川の段」「赤坂並木の段」「蘭塔場の段」等であるが、こゝには「市子口寄の段」と「赤坂並木の段」とを載せた。
「市子口寄の段」は、吉原宿で富士川の川留の間に、彌次郎兵衛が巫子の口寄せで死んだ女房に逢つてあやまるといふ滑稽場で、今でも聞く人の腹を抱へさせる場である。
作曲の年月は明かでないが、嘉永安政年間に至つて、歌舞伎でも彌次喜多の淨瑠璃物が流行し出して居るのによれば、恐らくはこの前後の事であらう。

詞サア〳〵是から。お市様の口寄せの番だ。彌次様先へと汲み來る下戸は知らぬか水の味市子が前に合手向山合紅葉の錦縫箔の帛紗とく〳〵ドヤン梓弓詞そも〳〵謹み敬ひて申し奉る。上は梵天帝釋四大天王。下界には閻魔法王五道の冥官。二上り我朝は神のはじめ伊勢に神明天照皇内宮に四十末社外宮に四十末社雨の宮には風の宮月讀日讀の御尊天の岩戸は大日如來出雲の國が大社合神の數が九萬八千七社なり。佛の數が一萬三千四靈の靈場驚かしこゝに請じ奉る詞此時こなたの先祖代々の佛達。弓と矢のつがひの親。一郎殿より三郎殿。番も替れ水も替れ。變らぬものは五尺の弓。一打ち打てば寺々の佛壇にひゞく納受。詞ヤレなつかしやよく水を手向けて下さつた。わしが枕添

殿も出たかろけれども。此節は地獄の門番になつて暇がないから。わしばかり出申した。コウお前は誰だ。ハアわしは水を手向け殿のためには唐の鏡だ。彌次様唐の鏡とは。お前のお袋の事だ。ナニお袋に用はなし〳〵。ナニ唐の鏡に用がなくば。私はそなたの枕添だ。コウ符牒では分らねえ。枕添とは何の事だ。彌次様お前の死んだ嬶の事だ。ヤレ厚かましくも。よく水を手向けて下さつた。わしはこなたの様な意氣地なしに連添うて。一生食ふや食はずに。寒くなつても袷一枚着せた事はなし單衣物一つアヽラ裏ほしや〳〵。堪忍してくれおれもアノ時分には工面が悪く苦勞仕死にしたが殘り惜しい。南無あみだ〳〵彌次様お前は泣くのアハヽヽヽこりやをかしい鬼の目に涙だアハヽヽヽ忘れもしないそなたは横根を踏出す私は濕疹をかくオヽサあんな困つた事はなかつた思ひ出してもぞつとする南無あみだ〳〵たつたひとりの子寶は脾胃虚して痩せこける。米はなし。日なしはせがむ。家主からは店賃の催促。アヽもう〳〵云うてくれるな。胸が裂けるやうだ。南無あみだ〳〵。それに私が奉公して折角溜めた着物は。みんな置き失くしてしまひ。質は逆に流れ申さぬ。その代り。手前は結構な所へ行てゐるであらうが。おれは今に苦勞が絶えねえ。南無あみだ〳〵。ナニ結構どころか。小さい石塔は建ててくれても。寺參りはせず。付屆けもないから無緣同然。今では石塔も。垣根の下になり。時々犬が小便しかける。ホンニ長死をすると。いろ〳〵な目に逢ひますは。ヘオヽ尤もだ堪忍してくれ。南まいだ〳〵。そのつらい中で。そなたの事は片時も忘れぬ。どうぞ早く冥途へ來て下され。やがて私が迎ひに來ます。アヽこれ〳〵飛んだ事だ〳〵。遠い所から必ず〳〵。迎ひに來るには及ばぬ。云ひたい事は澤山あれど。あの世の使が繁ければ。彌陀の淨土へ歸り申すと。口寄せが冥途の道から暗闇の恥をわざ〳〵明るみへ並べ立てられ彌次郎兵衛 引合 佛になつた山の神死んで來いとはさりとてはあんまり酷いカン情ない結構はつこの極樂より。勝手の知れた此娑婆でモウ百年も共上も生きると覺悟極めしをどうして亡者になられうぞ。おりや何時までも死にはせぬとこぼす涙は大粒に玉屋がしやぼんの フシ 如くなり。折もさは〳〵表の方ソリヤ川明きと夕空に 合中 待ちあぐねたる人々は各自に荷物杖笠と騒ぎ立てられ詮方もなく〳〵立つて彌次郎

兵衛ちつとも早くと身拵へ喜多八聞く　ホヽ、天晴れ〳〵さり　ノルながら一本　なんぞはどでごんすオヽ　ノル出來た
より　詞コレ〳〵彌次樣ノル晩にも知れ　差しでは叶ふまじ油斷大敵いかに〳〵。〳〵氣の毒ながらお前は小者荷物かつ
ぬこの日和また留められては大難儀　中　詞何さ〳〵そこはぬからぬ喜多八が手　いで彌次郎兵衛參れネイ川端指して急
豫て夜越しと存ずれば川端へ參りし時　段の蟇皮をかう延ばせばどちらから見　ぎ行く。
合ギン四十七騎の其中にて竹森喜太八と　ても刀と見える今一本はお前の脇差こ
名乘りかけ船賃出さぬその計略。ホヽ　れをちよつくらチョットから差して侍

道中膝栗毛　一五

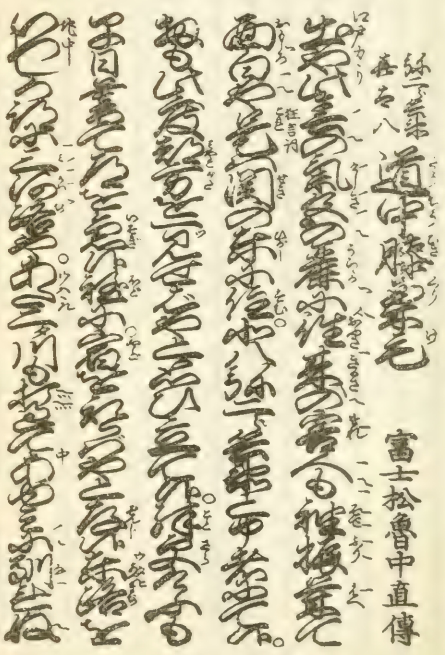
赤坂の段

〔解題〕　御油から赤坂の並木へかゝる處で、彌次郎兵衛が狐の眞似をして喜多八を威す場で、今もよく行はれる曲。

江戸カヽリいでやこの春の景色のうらゝ　此度都方を一見せばやと思ひ立ちて　二川も打過ぎて　中歩みに馴れぬ旅づか
かに合往來るさの客人も袖振りはえ　候。殊更今日も早や日暮れて道を急ぎ　れ物岩穴の觀世音　ギン御燈の影も仄暗
て面白や狂言詞これは關の東に住む。喜　候程に。宿を取らばやと存じ候　詞東路　き御油の宿をも出離れてツナダ並木原に
多八彌次郎兵衛と申す者にて候。扨も　を　中いつしか跡に三河　路や　ハルあた　ぞ　ユリナガシ著きにける　色喜多八片方に

荷をおろし詞ヤレ／＼草臥れた／＼。此彌次さんは何してぞと色後先見廻し詞ア、早く來ればいゝな。跡の茶見世で聞けば。此松原には悪い狐が出るといふ事だが。ア、暗さは暗し提灯はなし。何だかうそ氣味の悪い事だなア唄この彌次さんはなぜ遅い。草鞋が切れたか門止めか角太夫節跡を見やりつ伸上りナホス眉毛を濡らすフシ跡よりも合拍子彌次郎兵衞は喜多八が豫ての臆病知つたれば威してやらんと木隠れし思ひ付いたる狐の面手拭の端引結び顔へすつぽり引きかぶり差足抜足後よりコンと色一聲詞ア、御免なさい／＼。悪い狐とは申しませぬ。誠によいおきつ様と申しました。御免／＼と色いふ聲は齒のオン根も合はず膝がたフシ／＼色彌次郎兵衞俄に作り聲詞ヤイ／＼。ハイ／＼。おのれ憎い奴。今日も駕籠舁ど

もが銭を一本ちやらめかし。酒肴を脊 負さつて川を渡り。あまつさへ其座頭
りし事。よもや忘れはしをるまいな。 の買つた酒肴を盗み喰ふ。コナ横着者
ア、申し／＼。お前様ようお存じでご めが。ア、申し／＼其代り尻が割れて



正本巻頭

さります。あれはほんの出來心。慾氣 其酒代はみんな私が拂ひましたから。
ではございませぬ。ヤイ／＼まだある 其勘定は濟んでをります。ヤイ／＼ぬ
／＼。塩井川では故もなき座頭の眉に かすまい／＼まだある／＼。日坂の泊

りでは信濃越後の婆が所へ夜這にうせ。佛壇の中へ落ち。其騒ぎをおのれが連れの。佛様のやうな彌次郎兵衛に塗付け。おのれはぬく〳〵知らぬ顔。重ね〴〵の不屆者。其代りにこれを食へと傍にあり合ふ馬の糞。杖に突つかけ差出せば。エヽ其馬の糞を私に。オイヤイ。エヽ。厭か。ぢやと申してそれがマア。食はねば連行くサアうせい。アヽ申し〳〵私は子供の時分から。馬の糞は不調法でござります。此儀ばかりは御了簡しからばこの以後汝が連れの彌次郎兵衛が申す事。何によらず背きはせぬか。ハイ〳〵何も背きは致しませぬ。ムヽそれならば此荷物を汝が荷物と一所にして。赤坂の泊までかついで行け。エヽ。サアはや持て。ハイ。早やかつげ。エヽ何をうぢ〳〵するぞいやい。行けと云はゞ行かぬかハイ只今

参りますわいのと荷物取上げつく〴〵見て詞ハテ面妖な。此荷物は私が連れの。彌次さんの荷物に似たやうなと怖々眺める姿素振詞ヤお前は親分。彌次さんぢやないか。コウ〳〵ひどい目に合はしたなと色云へば彌次郎兵衛吹出し。アハヽヽべらぼうめ。いかに臆病でもあんまりだ。アハヽヽ。コウ〳〵。笑ひ事ではねえ悪い洒落だ。只さへ怖い〳〵と思ふ所へ。思ひがけなく後から。コンと云はれては。どんな者でも悔りするわ。サア〳〵喜多八早く赤坂へ往て泊らう〳〵。モウこれからは二人連れだ怖い事は何にもない。狐め出て見ろ。誰だと思ふお江戸は神田の八丁堀九尺二間に城郭構へ。十二文で汲ませる水道の水で。磨き上げた喜多八様だ。吉原町へ行くと吸付け煙草の降るやうな男だ。狐め出やアがれ。アハヽ

ハ喜多八そんなに力むと。又今のコンが出るぞえ。アヽ御免だ〳〵。何の怖いと思へば怖し。怖くないと思へば。拍子猶怖い。こんな所に長居は恐れだ。サア〳〵行かうと二人が荷物を一緒にからげて差擔ひ合唄坂は照る〳〵鈴鹿は曇るヨイトサ。コリヤ。彌次さん押してはいけない。マア〳〵待ちな〳〵。何だか向うの方に白い物が。ちら〳〵見えるがあれはマア何であらう。ドレどこに。アレ藪の傍に。ムヽあれは弔ひの提灯だ。ヘンうまく云ふぜ。又おれをおどすのか。何のよく見ろ。ムヽ成程提灯だ〳〵。そんならこゝは卵塔場か。アヽ氣味が悪い〳〵。何だか首筋元から。ぞく〳〵〳〵する。エヽ折悪うまた雨だ。いま〳〵しいと色呟き〳〵カヽル荷物ほどいて取出すツナグ身の毛もよだつてぼろ〳〵と道具屋節降

り出す雨の足元へ 合ちよこ〳〵〳〵と小坊主が中形にも似ざる竹の子笠徳利片手に フシ歩み來る 色それと見るより喜多八が。 詞ソリヤ出た〳〵〳〵化物だ〳〵。彌次さん油斷せまいぞト。ぶる〳〵震へば 色彌次郎兵衛 詞しよぼ〳〵雨の薄暗がり徳利提げた小坊主。江戸で繪に見る一つ目小僧。打ちのめして化の皮。現はしてくれんずと幸ひありあふ天秤棒腕に任せて打ちのめせば 合アイタ〳〵 詞父やい誰やらがづない目にあはせをるはヤイと呼はり喚けば駈來る親父この體見るより彌次郎が胸ぐら 色しつかと取りヤイ此悴に何科あつて。可愛さうに打ちのめした。サア有やうに吐かしをろ聞かぬ〳〵とせちがへば喜多八見るよりコリヤたまらぬ許せ〳〵と一散に跡をも見ずして ユリフシ逃げて行く 色彌次郎兵衛はうろたへ聲

詞ア、申し〳〵お前のお子とも存ぜず。化物ぢやと思ひ違ひ。打ちましたは大麁相。眞平御免下さりませイヤ〳〵聞かぬ〳〵。折角買うた五合の酒。雫も殘さずこぼしてしまひ。小さい者を酷たらしう。ひどい目にあはしたなと 色グツト締むればア、申し〳〵それでは咽の佛樣がつぶれます。少し弛めて下さりませ。ア、五合の酒がこぼれたとは。ごがふ道斷お氣の毒。代は私が出しますから。一升のお願ひ。かんにせうとおつしやつて下さりませ屹度お禮に三升致します。四升云はずと御了簡。コレ五升でござります。エ、こいつ洒落どころか。ハイ〳〵お腹立ちは御尤も。疵養生の膏藥代を出しますから。どうぞそれにて御勘辨。それなれば赦してやる。サア金出せ。ハイいくら上げます。オ、命代りには安いもの

だが十兩に負けてやるは。エ、飛んだ事をいふ。十六文の膏藥を。百貫付けても一分であまる二分に負けなせえ。イヤならぬ。二分がならずば三分よ。ア、駄目だ。そんなら四分か。エ、しぶといならぬ〳〵〳〵わい。申しそれでは出來ない相談ぢや。言ひ値ぢや高い。オウそんなら一兩負けてくれうわい。エ、十兩の内を一兩負けて九兩とは。面白い地口だ。しかし間男代でも七兩二分が當り前。マア知らずば半分値さ。ム、五兩に負けいか。ア、安いものだが負けてやるわ。サア金渡せ。エエお前現金かえ。知れた事だ。ハイ只今勘定いたします。コウト私が咽を。お前の其松の木見るやうな腕で。グツト締上げた苦しみが死苦八苦四九三百匁を五兩として。跡が八九七十二匁とすれば。お前の方から少々おつりが參り

ます。ヤ様々の戯言。モウ了簡がならぬ〳〵ならぬわい。ア、申し〳〵金は上げます。金は胴卷へ入れて腹に卷いてをりまする。ム、さうであろ〳〵。どれ〳〵おれが出してやろと 色懷へ手を差込みこれか〳〵。ア、それは虱紐。そんならこれか〳〵。アハヽヽヽくすぐつたい〳〵。そりや下帶。エ、そして金はどこにある。きんかえ金は其下に。四文錢が一本その側に。ぶらりと下つてをります。エ、いま〳〵しい。そんならいつそ此きんをと 色力に任せ引摑みグット縮むれば 詞アイタ〳〵〳〵それでは死ぬる〳〵。 吾ウントばかりに 色息絶えたり流石の親父も悔りし 詞ヤ、南無三。こいつ死んだはと 色口に手を當てコレ幸ひと彌次郎兵衛が帶くる〳〵と引きほどきすつぽり剝いだる ギンユリ 丸裸卯塔場よりとつかはと經帷子に角帽子手早やに フシ着せて 詞サアこれでちつとは腹が癒た。青葉代の其代り着物荷物を引浚ひ千松來いと手を引いて オトシ足早やにこそ立歸る ハル次第に 中更け行く 三夜嵐に連れて降來る雨の音 合野寺の鐘のこう 中〳〵と ギンいと物凄き並木の陰 ハル松の雫が潤ひのぞつと身に泌み彌次郎兵衛息吹返し起上りあたり見廻し 色見廻して。ハクショ 詞寒い〳〵。ヤこゝはどこぢや知らん。おりやマア一體どうしたのぢや。エ、先づ御油の宿を離れて。喜多八を威してやろと。狐の眞似をしたは。それから小僧が來たを化物だと思ひ。打ちのめしたは。喜多八は逃げたはそこで親父にきんを縮上げられ。それから跡は何にも覺えぬが。ハアこいつは夢か知らん。オ、寒い〳〵。ヤア向うに卯塔場が見える。して見りや夢ではない。マどうした事と撫廻し。ヤ、おれが著てゐるはコリヤこれ經帷子。そして額に三角な紙が當つてあり。ヤ、そんならおりや死んだか。エ、お力落しぢやなア。扨は睾を縮上げられそれで死んだか悲しやなア。そんならこゝは冥途の道かいやい。淺ましい心細い身になつた。こんな事なら嬶にも。とつくりと暇乞ひもしようもの。こんなに早く死なうとは。知らなんだ知らなんだ冥途の道は暗いと聞いたが。ほんに眞暗だ。どうぞ極樂の方へぶら〳〵行きたいが。さうは行くまい娑婆にゐる內。念佛一遍申した事はなし。親の日に魚を喰ひ。嘘ばつかり吐いて借りた物は返さず。どうして極樂へは覺束ない。しかし極樂の近所まで行きたいものぢや。ア、心細い〳〵 ウレヒカヽリ からうなる事とは露知らず 合ハル噺や跡にて女

房が。今日は御無事の便りもあるか合明日は使の人もやと日を數へ合指折つて待ちこがれたる甲斐もなう。死んだといふ事聞いたなら嘸ぞ悲しかろ口惜しかろ逢ひたかんべい顔見たかんべい合ナゼ逢はせては下んせん魂魄あの世へ歸るなら今一度嬶の顔見たやそれまでもなく今こゝでおれが死んだら後編にさぞや合一九さんが困るだろ引合それも悲しゝ嬶も可愛し合心一つを二道にカン冥途の道に迷ふとは何の因果か中情なや合どうぞ今一度生返り嬶と閨の添伏しがしたいわいのと身を悶えすり合上げたるアハブシ水鼻と涙と合涎とごた交ぜに落ちて流るゝ三つ瀬川する はハルオトシ漲る風情なり。

（新内節終り）

第八編　蘭八節之部

伊左衛門 夕霧 由縁の月見 一

〔解題〕 通稱「夕ぎり」。近松の「夕霧阿波鳴渡」の吉田屋の夕霧伊左衛門口舌の段である。豐後節系統の夕霧としては宮古路豐後掾の語物に「夕霧阿波鳴渡」があり、これは近松の吉田屋の段を取つて、その結末を夕霧の身請がすんで目出度く局を結ぶ事に纏めてある。この結構を受けて更に詞章を增補して特に口舌の場に力を入れて叙述したのがこの薗八の夕霧である。

この作曲は二代目宮古路薗八の作曲である。二代目薗八は初代薗八の高弟で、寶暦十二年に宮薗豐前と改名したが、程なく明和初年には宮薗鸞鳳軒と改めた(天明五年歿)。この人は文筆の才もあり、又作曲にも長じて居り、實に薗八節(宮薗節といふ方がよいと思ふが、慣習に從ふ。)の大成者といつてよい。寶暦十二年彼が二世薗八から宮薗豐前と改めた際に出版した「宮薗大全」といふ淨瑠璃集には同流の語物五十段を載せてあるが、その中の三十餘段は彼自身の作曲たる事を明示してある。この書中



古版正本の表紙

に本曲は載つて居り、しかも「作者宮薗豐前直傳」とあつて彼の作曲たる事を明示して居るから、現存の蘭八節中では最も古いものといふべきである。これは同年十二月刊行の「宮薗雲井櫻」といふ同流の正本集中にも收められて居る。それは「過ぎしよすがの連れ弾きを……」からであるが、現行のものは「冬編笠の……中座敷」迄の約一枚を前につけてある。これは恐らくは江戸で復活の時に、富本の「夕霧」などに倣つて添へたものではなからうか。兎に角豐後系の夕霧物としては現在の富本・清元などの先行曲として、詞章の上にも近松の原作と是等の曲との中間に立つものとして注目すべきである。

句切りは現行の「宮薗千草種」には殆んどないから便宜これをつけて置く。

本調子へ冬編笠の垢ばりて。紙衣の火打　りこドり。今の憂き目も心柄それぞと　さうぢや。戀も誠も世にある時。人の
膝の皿。笠吹きしのぐ忍ぶ草。忍ぶと　いさや白絲の。歌の唱歌も合の手や。心は飛鳥川。變るは勤めの慣ひぢやも
すれど古への。花は嵐の簡に。今日の　可愛い男に逢坂の關よりつらい世の慣の。逢はずといつそ去んでくれう。
寒さを喰ひしばる。食み出し鍔もかみ　ひへオ、彈くわく。あの歌で思ひ出　ア否やく喜左衛門夫婦が志。逢はず
さびて鐺つまりし師走の日。世間かま　す。去年の月見は奧座敷。底意隈なき　に去んでは此胸がへ濟まぬ心の中にも
はぬ吉田屋の内は鳴門の阿波大盡。今　夜とともに。飲み明かしたる大騷ぎ。　暫時。澄むは由縁の月の影。へ無慙やな
日夕霧を根曳とて。居續け酒の大騷ぎ。　太夫と俺が連れ彈きで彈いた時の面白　夕霧は。流れの昔懷しく夫の音締身に
羨まし氣に伊左衛門悄々這入る中座　さ。その彈く主は變らねど。變つたは　こたへ。飛び立つ心奧の間の。首尾は
敷。過ぎし夜すがの。連れ彈を。思ひ出　俺が身の上。あいつが心底。そあのや　朽ちせぬ縁と縁。胸と心の相の山。間の
して立つつ居つ腹立ち紛れ調子さへ。　うにあらうとは。へ思はぬ人に堰きとめ　襖の工合よく。明け暮れ戀しい夫の顏。
逢はば何うして斯うしてと。胸は二上　られて。今は野澤のひとつ水。へほんに　見るに嬉しく走り寄り。我が身をとも

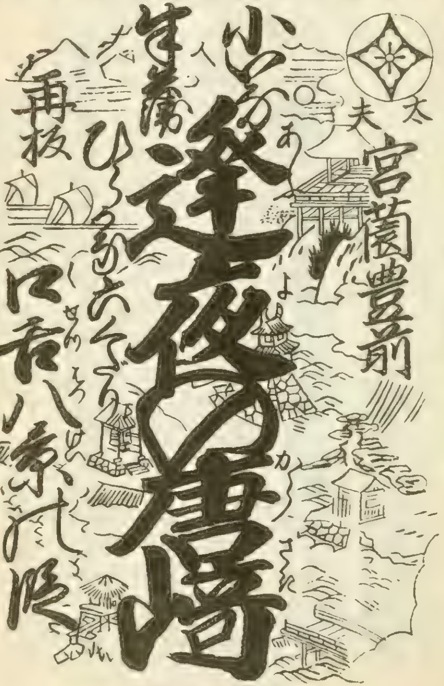
に裲襠を。引き纏ひ寄せとんと臥て。抱きしめ締め寄せ泣き居たる。へ申し伊左衛門さん。目を覺まして下さんせ。私や患うてなへ疾うに死ぬる筈なれど。今日まで命ながらへたも。神佛の控へ綱。これ懷しうはないかいな。顏が見たうはないことかと。搖り起し〳〵抱き起せば取つて突き退け。こゝな夕霧殿やら夕飯殿やら節季師走にこなたのやうに閑ではござらぬ。七百貫目の借錢負うて。夜晝稼ぐ伊左衛門。こんな時寢にや寢られぬ。邪魔なされな惣嫁殿と。ころりと轉けて空寢入へ恨みがあらば聞きませう。いや〳〵寢させはせぬ〳〵起きなさんせへヤア何んとする。此體になつても藤屋伊左衛門。今のやうに奥座敷の客に踏まれたり蹴られたりする傾城に近づきは持たぬ。ここな萬歳傾城。萬歳なら徐おぢや。通りや通りや〳〵へ此夕霧を萬歳とはエへオ、萬歳傾城の因緣知らずか。知らずは言うて聞かさう。侍の足にかけて蹴らるゝを萬歳傾城と言ふぞやへまことに目出度うさむらひける。しかも足駄穿いて蹴るやらへ年立ち返へる旦にて。誠に目出度うさむらひけるへ何も身すぎぢや。あんなよい衆に蹴られては損は行かぬへ慾を知らねば身が立たぬへ慾若に御萬歳とは。年立ち返る旦にて。誠に目出度うさむらひける。町人も蹴る伊左衛門も蹴る。蹴る〳〵〳〵蹴るわいやい。コレ喜左餅でも米でも早うやつて去なしや。わけも涙の捨て詞。烟草引き寄せ吹く煙管。そらさぬ體にてゐたりけりへ夕霧涙諸共に。恨みられたり喞つのも。色の習ひと言ひながら。それは浮氣な水淺黄。逢ひ初めた其日からこんな緣が唐にもあらうか。派手な浮名が嬉しうて。人の誹りも世の義理も。白紙に書く文の傳手。返事取る手も心急き。口說の床の善惡も。嬉しいにつけ悲しいに。つけて忘れた事はない。それにお前の惡性を。私が案じは移り氣な。外に若しやといひがかり。しまひつかねば小夜更けて。背中合せて寢て見ても。ついそれなりに張弱くへ仲直りすりや明けの鐘。憎うてならぬ鷄の聲。何の鴉が意地惡で。鳴くぢやなけれどきぬ〳〵の。去なせともない心から。勘當の身と楢の葉や。兒手柏の二人が仲。暇乞さへ泣くばかり。それから絶えて音信も。内證知らぬ田舍客。厭な身請の沙汰聞いて。胸に痞や癪の種。氣合が惡るいと噓いうて。身請を延ばし今までも。逢はで焦がるゝ片絲の。戀には義理のあるものを。仇に勤めの假枕。春の紅葉の色もな

く。辛い浮世をかり座敷。ま一度逢はせて給はれと。天神様へ願掛けて。梅を一代断ちしぞや。こなんに別れて餘所外へ。請出されて行くものか。粋なやうにもない事と。立寄つて夫の顔。袖で涙を押し拭ひ。いから顔に痩せが來た。かうは誰がした私がした。堪忍して下さんせ。エヽ、エヽ、心強や胴慾な。氣強い心と喞ち泣き。客に知られぬ袖の雨。涙は縫ひの玉霰。色香争ふ風情なり。斯かる處へ下女はした。遣手禿に女房が。勢ひかゝつて喜左衛門。もし／＼／＼／＼伊左衛門さん／＼。お前の親御さんの妙順様よりお人がまゐり。御子息様も母家へ引取り。貴方も御勘氣赦りました。ほんにそれいな太夫さん。お前の身請の埒が明き。大抵嬉しい事ぢやない。オヽ／＼この喜左衛門が腕力で。本腹させて見せませうと。家内が勇む勢に。つれて本腹伊左衛門。喜びの眉を開くや扇屋夕霧。名を萬代に春の花。見る人袖を連ねけり。

小いな半兵衛　口舌八景　二

〔解題〕小いな半兵衛の實説は明かでないが、これが浄瑠璃に仕組まれたのは一中節の「唐崎心中」が始めであらう（一中節の「唐崎心中」參照）。この心中道行は宮古路豐後の語物としても行はれたものと見えて「宮古路月下の梅」にも收められてゐる。本曲はこの系統を受けたものと思はれるが、唐崎心中の全篇が明かでないから明言は出來ないが、恐らくはこの作に本づいた二人の口舌の場であらうと思はれる。作曲者は宮薗豐前であるから、前の「夕霧」と同じく薗八節としては最も古いものゝ一つである。

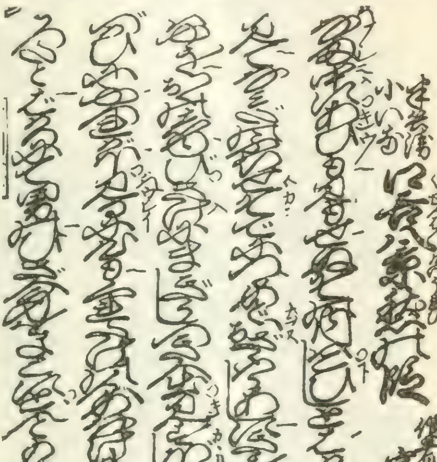
太夫子へ小笹原脚に疵持つ身のふるひ。小いなはやう〳〵奥の首尾。酒にまぎらし次ぎへ出て。見るに戀しい夫の顔。人目なければ走り寄り。逢ひたかつたとばかりにて。男の膝へ身を横に。とんともたれて沖の石。濡れて甘へて抱き付く。小いなを取つて突き飛ばし。詞へ嘘はつくまい隱すまい。勤めの中は外に男を持つまいといふ起請を當てに盡くし盡くして親の勘當。へ大坂の住居さへならず者ぢやと見限られ。やう〳〵こゝに知邊をもとめ。思はずそちに大津の勤め。藝子になつた心意氣。その心底にほだされ。おれも仕つけぬ太鼓持。旦那くわつとに手を上げて。いけもせぬ役者物眞似。これが稲野屋半兵衛と。人に知られた形かいやい。詞へそれにおのれはアノ客に打ちもたれ。面白さうに身請の相談。三味線彈いて居けつかりくさりくさるが腹が立つ。おれをだましたその代りヨウ腰骨に覺えよへ是で近江の八景と。蹴散らかしたる煙草盆。とても恨みの腹癒せと。聞いて小いなが胸痛み。癪と涙を押し靜め。不粹なこなさんぢやあるまいし。色里の諸譯をば。知らぬ野暮でもあるまいし。無理言ひかけて氣もせさせ。お前の心が濟むかいな。口舌するのが樂しみか。無理は男の常なれど。言譯するは女子だけ。今更な事ながら。互に初めて大坂の新町で見つけられ。私



古版正本の表紙

から先へ夜の雨。濡れ合ふ夜の嬉しさに。思ひ染めこむ二つ紋。對の小袖に對の帯。派手な有りたけ仕盡くして。深いは知れた二人が仲。堅田に落つるかりねにも。忘れたことはないわいな。来つゝの瀬田に乗せられて。人目にたたば夕照の。たゞ親方に張り強く。矢橋の私が歸帆から。仕替へられても亦姿に。盡きぬ縁の返り咲き。なほ面白さの増す花に。一夜逢はねば案じられ。どうぞお顔を三井寺の。いとしお前を待つ暮の鐘。こんと鳴るのも氣にかゝり。畳算やら禁厭やら。おもしろ過ぎて可愛うなり。夫が嵩じて戀しうなり。いつそ勤めも身に染まず。嫌ひな客は降る雪の。比良の暮雪と積もれども。勤め辛いは手管でも。辨慶さんの力でも。微塵もゆかぬ石山の。秋の月ほどまん丸に。角の取れたる粋な客。来る

夜も来る夜も揚詰に。揚句は知れた色晴嵐と。帯紐解かぬこの私を。身請の仕掛。磬子に情は無いものかと。下か 沙汰は彼の客の。思はれたさの追従と。



口舌八景古版本初頁

ら理詰の上手には。いかな私でも帯解 心一つに合點して。頼みまするといふいて。逢はねばならぬその義理も。あ たこと。座敷勤めて客さんの。機嫌をのゝものゝと紛らして。粟津にすます 取るが珍らしい。三味線弾くが不思議

なか粋に似合はぬ疳癪も。女房と思う死ねと云うたがよいわいな。聞えぬ事氣を紅裏の肌見えて。雪の中なる紅梅て下んす故。とても添はれぬ仲ならば。をと縋り寄り。わけも涙にはら／＼とと。咲いて亂るゝ風情なり。

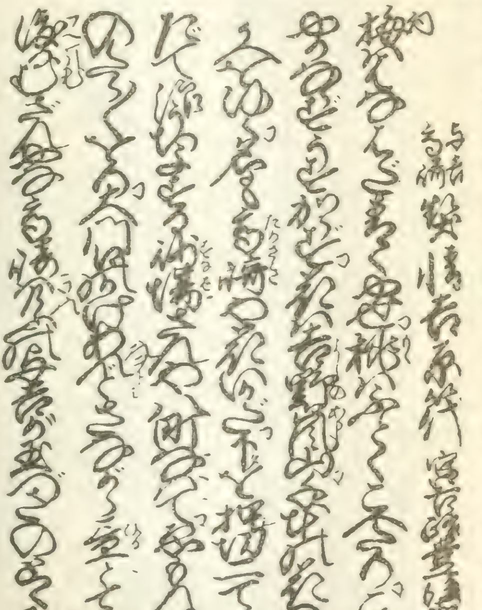
花街の色糸 三

〔解題〕 通稱「植木屋」。明和六年三月刊行の「宮薗花扇子」の中に初めて收められて居るのによれば、明和に入つてからこの年迄に作られたものと思はれる。作曲者は宮薗鸞鳳軒。江戸で吉原の萬字屋高崎と呼ばれた遊女が京に住替へて藝子おしづと名乘つてゐたが、その情夫の神田與吉事植木屋文藏と聖護院の森で六月廿日の夜に心中する爲の道行である。

本曲は內容上宮古路豐後の語物「契情吉原筏」の後篇ともいふべきである。即ち吉原筏は吉原の萬字屋高崎と馴染んだ神田與吉が戶平といふ者の奸計にかゝつて人殺しの罪を負はされた上に高崎をも奪はれようとしたのを與吉の叔父須藤森右衛門の身代りによつて二人は落行くといふ筋で、この二人が京都で植木屋文藏と祇園の藝子お靜となつて居たといふ仕組のやうに解せられる。尤も直接「吉原筏」から此作が生れたものか、その間に立つものがあるかは明かでない。

二上り〽憂き勤め義理には彈けど三味線の。いとし可愛の只一人。抱いてねじめの相の手に。一期添はうと二世かけて。なんの契りもたがやさん。本調子〽好いた同士のなか／＼に。浮世の淵瀨川傳ひ。浮き名の種を植木屋の文藏が身のうきつらさ。今宵限りと水無月の廿日亥中の月明り。人目忍べば跡になり。先になりふりはで姿。おしづ心もわく

せきと主に合図の咳拂ひ。またれつ町を離れては。誰に遠慮も夏木立。北をば指して道すがら。手に手を鳥の一聲は。月が啼いたか短夜の。はかなき緣のうす紅葉。思ひ染茶の江戸褄に。男は越後の紺帷子。肩にかけたる毛氈は鳴く音血を吐く時鳥。ほんに冥途の鳥ならば。今迄も色事で死んだお樣は仲ようて未來で添うてゐさんすか。便りが聞いて死にたいと。戀に迷ふは女子氣で。さう思やるも無理ぢやない。そなたは跡に存へて香花手向けてたもとにすがり。おしづ涙の露塵ほども。そんな事をば言はれたり聞いたりする樣な仲ぢやない。わけのありたけ仕盡して。馴れ染めながら濃紫の江戸鹿子。言ひ交したは千代八千代。萬字屋の高崎で。逢うた當座の二つ橋。色と意氣地を立て拔いて八丈縞の隱し裏。氣だてが粋で落ちついて。花色柄をさしづめに。惚れねばならぬ殿振りが皆の口說を明朝まで持越し髪の艶ぬいて。與吉命と入黒子。仲よし原で謡はれて。浮名は二度の歸り咲き。今この京へ仕替へられ座敷ばかりの情をば。介抱したから逢ふ度にお前の噂に無洒落な。與子／＼で內證は。三味線枕で客さんとねから無い事無理な事。ゆふべ／＼の揚先で花車さん方や仲居衆が。おゐの



古版正本初頁

もののと取持ちに。私やはふきの如來さんへ。蛤貝をたちまちに罰が怖いとまぎらして。きつと心の色糸は引締めて寝たお前の女房。わしが殿御ぢや主ぢやもの無理ぢやなけれど今迄も。誰ゆゑ私は氣もせをば。死ぬる終焉に。そんな事。きつい事をと一筋に。慕ふ涙は糸萩の。風に露ちる玉かつら切るに切られぬ輪廻の絆。二つ巴と抱きしめて見交す顔もとぢあかぬ。（涙もろともにイ）一つ蓮に法の庭。アレ黒谷の臨終に（晨朝にィ）最後をなにと聖護院森を目あてに辿り行く。



古版本の表紙

道行菜種の亂咲 四

〔解題〕 作曲者宮薗鸞鳳軒。「宮薗花扇子」の中に収められて居るから、その年迄の作といふ事は明かである。外題名は「双蝶々曲輪日記」の第七あづま與次兵衛の道行と同一であるが、詞章はこの原作たる近松の「壽の

門松」の下卷與次兵衞吾妻道行と殆んど同文で、これを轉用した事は明かである。系統的に見れば、先づ初代一中がこの道行文に作曲して語り、次にその門下の都半中事宮古路豐後がこれを語り、こゝにこの道行が豐後節で語られる事となり、傳へて薗八節ともなつたものと見られる。「花扇子」には道行の全文が載つて居るから、始めは通して語られたものと思ふが、現行の正本ではその後半だけである。よつてこゝにもその部分だけを收めた。安永三年刊行の「宮薗新曲集」といふ短篇淨瑠璃集には「秋篠」と題して、本曲の冒頭なる「今では人も秋篠や」から「……今は野末のはなれ駒」迄の詞章を古近松作として收めてある。

へ今では人も秋篠や。外山の松よ言問はん。待つがつらいか別れが憂いか待ちも別れもせぬやうに。親の許した女房を義理と情の二た面。かけて思へど中妻も無き今は野末の放れ駒。昨日はあづまに戀を載せ今日は故郷へ焦れなき。我から狂ふ秋の葉の亂れて袖におきもせず寢もせで露のたま〴〵に。へ戀する身にも待たるゝと待つ身になるな親と子の便りをしのぐ山崎の。妻もさこそは亂れ髮。言うた言葉が力ぞやわしが馴染は三重の帶長い夜すがら引締めて。妬み悋氣の心無く預るものは半分と。主は忘れて居さんすか。過ぎし月見は井筒屋で底意隱なき夜と共に。踊り明かした面白さわしや百までも忘りやせん忘れぬものよ見飽かぬ君が。外八文字の道中姿。目つきで殺す。へ初手(所體)になずむ。傾城ごまで(こまめでこ)たらひが女房。受けだせ盥の底拔けて影も宿らぬきぬ〴〵に。親を悲しみ妻を戀ひ心ひとつを二品に。名乘りて過ぐる時鳥しやが父に似て父に似ず。子は色里に初音ふる冠りは着ねど大盡の。へ花車がとゞろく口說の門。遣手がたゝく。禿が眠り。皆夢の世の境涯と。悟ればぐわちもなかりける。かくは言へども柳の絲のおどろを亂す山颪。烈しき親の諫め言葉妻が別れの一と言葉。身にしみ〴〵と戀しやと互に手に手を取交はし涙曇るや露の玉。夕陽容に程もなく。東南に向ふ雲の脚稍木の葉もばら〴〵〴〵小川の水音さわ〴〵〴〵。月は行けども果てしなき思ひは。日前親の罰當つて碎ける思の心。走れば走る留まれば留まる。廓の袖の亂れ心や命つれなき流れの身。流れ渡りの世の中と。しばしとてこそ賤が家の軒を目あてに走りゆく。

おひな吉三郎 江戸の繪姿　五

〔解題〕通稱「おひな」。宮薗鸞鳳軒作。「宮薗花扇子」に收載されてゐる。これは延享元年四月大阪の豐竹座上場の爲永太郎兵衛(千蝶)等の作「潤色江戸紫」の第三段のおひな吉三郎相合傘道行の齣から來たものである。京都五松家の雜掌稻垣平太が主家横領の奸計をめぐらし、惡人と共謀して吉原三浦屋へ同僚安森源次兵衛を呼ぶ。伜の吉三郎と許嫁のお雛をつれて衣紋坂の藥湯へ來てゐた安森は吉三お雛と共に三浦屋へ行つたが、話が面倒なので吉三とお雛を先へ歸す、二人は相合傘で衣紋坂を歸る。お七に情を立てぬく吉三におぼこ娘らしい當て言をいひながらも嬉しさうに歩く情景を叙した道行風の文である。寶暦十三年刊行の正傳節の段物集「春富士都錦」には「衣紋坂相合傘」として多少語句を改めたのが收めてある。これに較べれば薗八の本曲は更に詞章が餘程倒修されて居るが、これは恐らくは鸞鳳軒の手でなされたものであらう。

本調子ヘ乾く間も雨の振袖。人目を振りきる袖の衣紋坂。相合傘のしよんぼりと。吉三郎に一對のおひなが何と得も言はず。思ひ寄る邊の汐の目に。袂を掩ふや袖のうち。ぢつと差し込む手先さへ。おぼこ娘のもぢ〱と。もどかしさうに傘を。憎や嵐が吹きのけて。ソレそのやうに彼方向き。厭がらんすほどしやんとして。角前髪を立てぬいたお七さんへの心意氣。どうぞ私も百歩一。あやかりたさに色々と。言うたとて口說いたとて。私ばかりが獨り言。この中傍に付き添うて。せめて人目に女夫ぢやと。羨まるゝを樂しみに。暮らすわいなとばかりにて。身を知る雨も搔き坐る。空も涙に小歇みなき娘心ぞ遣る瀬無き。

鳥邊山　六

〔解題〕　薗八といへば直に本曲が聯想される程で、同流の代表曲といつてもよい。宮薗鸞鳳軒の作曲で「宮薗花扇子」（明和六年三月刊）にも「宮薗鸚鵡石」（安永二年九月刊）「宮薗都の春」（安永四年秋刊）などにいづれも收載されてゐる。本曲の詞章の元となつたのは、「太平記忠臣講釋」（明和三年十月、近松半二等作）の第五道行人目の重疊であるが、この原據となつたものは實に寶永三年正月京都の都萬太夫座で演じられた「鳥邊山心中」のおまん源五兵衛の道行である。その全文は左の通り。

妙法蓮華の力にて、寂光淨土へ行くぞ嬉しき、南無妙、法蓮華經。一人來て二人連れ立つ死出の道、照らすやいなや稻妻の、光りて跡の暗きこそ、我等二人が身の上よ。今はなまなか存へだてを、したら憂目に愛想もこそも盡きた浮世やいさあだし野の、露と消えんと身を捨小舟何處へ取付く島もなや。おまん泣く〳〵よほい申す樣、死ぬる此身は惜しうはないが、ひよんな私ゆゑ此方さん迄を、殺す事ぢやと思へば悲し。源五泣く〳〵よほい愚かの仰せ、とてもいつ迄存へ果てぬ、私と此方の身ぢやものを、思ひ切らしやれもう泣かしやんな。私は泣かねどそれ此方さんが。いゝや此方が、いやこなさんと、顏と顏とを見合せて、泣くより外の事ぞなき。梢々に鳴く村烏、かあい〳〵と鳴く時は、國の親達思ひ出す。春風寒く身にしみて、野邊の草葉のちら〳〵と、しなへてかゝる其時は、忍び逢ふ夜を思出す。日中告ぐる鐘の音の、耳に響きて聞ゆれば、別れの鐘を思出す。今は此世の暇乞、こゝぞ命の別れの辻よ。早うござれと手に手を取つて、歩めど道の捗ゆかず、辿り〳〵て死出の道。

これを一讀すれば、鳥邊山の歌詞は既にこの時殆んどその基礎は出來上つて居るといつてよい。而してこの寶永三年夏に大阪の岩井座で同じ外題で興行してゐる。脚色は大業なかつたらしく思はれるが、心中する男女

はおまん源五兵衛がお染半九郎と變つてゐる。處で注意すべきは享保期の歌謠を集めた「吟曲古今大全」の長唄の部や、寛延四年正月刊行の「糸のしらべ」の二上りの部に載つて居る「鳥邊山」であつて、これが今日地唄で謡はれる「鳥邊山」の歌詞で、心中する男女はお染半九郎となつて居り、前掲の歌詞に改修を加へられたものである。例の「歌系圖」に湖出金四郎調、岡崎檢校改調、近松門左衛門作とある「鳥部山」は取りも直さずこれを指すものと思ふ。すれば大阪岩井座興行の時に近松が筆を加へたものであらう。

この鳥邊山の歌詞を「太平記忠臣講釋」では、鹽谷縫之助が傾城浮橋に溺れて居るに乘じて、その取卷き連中がおだてゝ茶屋で二人に鳥邊山心中の道行をやらせる條に「道行人目の重縫」の外題で演じるといふ趣向になつてゐる。それで二人の名は鹽谷縫之助と浮橋の名を用ひたのである。鸞鳳軒はこの詞章を轉用して多少筆を加へたものである。地唄にお染半九郎とあるのに、蘭八に縫之助と浮橋となつてゐるのはかういふわけである。現行の歌詞は頗る改惡されて居るから、參考までに「宮薗鸚鵡石」の詞章を括弧內に示して置く。

本調子へ一人來て二人連れ立つ極樂の（清水寺の）鐘の聲。早や初夜も過ぎ四つも告げ。九つ心も戀路の闇にくれはとり。あやなき姿や浮橋に（と）繋るえんや縫之助。つい仇惚れも誠となりて（誠になじみ）眞の女夫になりたいと。思ふ思ひは（も）儘ならぬ（ず浮氣がさそふ派手などし）今は（なまなか存へだてを。したら）此身にあいそもこそも

二上りへ盡きた浮世やいざ鳥邊野の。（露と消えんと最期の用意。）女肌には白無垢や。上に紫藤の紋。中着緋紗綾に黒繻子の帶。年齡は十七初花の雨に焦がるゝ（しをるゝ）立ち姿。男も肌は白小袖にて。黒き綸子に色淺黄裏。二十一期の色盛りをば戀といふ字に身を捨小舟何處へ取り付く。島とてもヲ無し。本調子へ聽く（ナホスなく）度々につらかり

し（祇園林の群烏。曉ごとに引きかへて。ハル今は二人がギン身の上を。泣いてくれるもなじみから。かあい〳〵の聲聞けば）父母の事思ひ出し（す。われよりそなたの親たちの）跡の嘆きを思ひ遣り。こゝから（これから）去んで呉竹の。伏し沈みたる袖の露。浮橋涙諸共に。父さんや母さまのあるはお前も同じこと。その親々に苦勞をかける。不

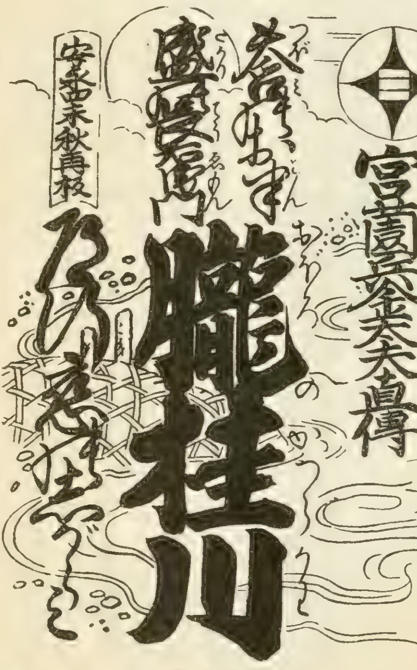
孝者には誰がした。(あゝ)合惚れといふ仲人や。枕の咎ぢやないかいな。戀は心の外とやら。昨夕も内の花車さんがわしに意見をしん實の(な)。色といふ字があればこそ好かぬ勤めの辛抱も(を)好いた殿御へ心意氣。いとし可愛が正(定)ならば五度逢ふものを三度逢ひ二度を一度の逢瀬には。親親方の機嫌もよく色で(戀に)身をうつ事もなく(い。)世間に多い心中も金と不孝で(に)名を流す(し)色で死ぬるは無いぞとよ。戀は思ひの始め(つぼみ)にて。盛りが憎い迎ひ駕籠。そいきぬ〴〵や(の)朝顔の(や)。夕顔にまで分け隔て。辛氣な苦界まゝならぬ悲しいことや辛いこと生きる。死ぬるの手詰にも。必ず〳〵若氣を出し短氣な心持ちやんな(や)と。重ね井筒の上越した粋な意見も上の空。お前に迷ふ心から面白い氣で聽いて居た。親御樣へも。世の義理もわしから起る此しだら。堪忍してとばかりにて(すがりより)。縋り付いて泣き居たり、(抱きしむればしめよせて。義理も不孝も今更にかへらぬ事をくど〳〵と)二上り へ思ひ切らしやれもう泣かしやんな。わしは泣かねど。それこなさんの。いゝやそなたの(が)。否やこなたの(こたんが)と。顔に(と)顔を見合はせて一度にわつと咲くにぞ。一足づつに消えて行く。終にこの野の、春降る雪(霜)や、折柄に早や寺寺の鐘も撞き止み、夜は白々と、烏泣山にぞ、着きにける(り)。

桂川戀の柵　七

〔解題〕 通稱「お半長右衛門」。作曲者宮薗鸞鳳軒。お半長右衛門の淨瑠璃として名高い義太夫の「桂川連理柵」(安永五年十月)よりは前の作である事は、既に「宮薗花扇子」(明和六年)に載つて居る事で明かである。尤も義太夫物のお半長右衛門の淨瑠璃としては、寳暦十一年五月の「曾根崎模樣」があつて、これが上方の豐後系の淨瑠璃に影響を及したものと見えて、正傳節の段物集「春富士都錦」にはこの「曾根崎模樣」の御馬場帶屋

の段があり、又「桂川戀の柵」（道行うきなの入物）の二段が收載されて居る。薗八節の本曲は直接にはこの正傳節の戀の柵を取つたものである事は明かで、文章には多少の改修を見るのみである。尙お半長右衞門の戯曲に關しては、義太夫節の部の「桂川連理柵」の解題をも御參照を乞ふ。現行正本と「宮薗鸚鵡石」とは相違する箇所もあるが、こゝには現行のものを收めた。

二上りへ白玉か。何ぞと人の咎めなば。露と答へて消えなまし。ものを思へば戀ごろも。それは往昔の芥川。〳〵。本調子へこれは桂の川水に。浮名を流すうたかたに。泡と消えゆく信濃屋の。おはんを背に長右衞門。逢瀬そぐはぬ仇枕。結ぶ帶屋の軒も早や今宵限りの月影に流れて連れて。行く身にも妻にも名殘り押小路。あはれは跡に遠ざかる。町を離れてやう〳〵と背をおろして。とり〳〵に。姿つくらふ心根はまだ娘氣の後や先き。連れて行く身は常よりも。心細道犬の聲。アレ壬生寺の鐘の數。九つこゝに北南東寺の塔や朱雀野誘はれて　詞へコレおはん。こゝは三條　思へども義理に柵む此世から。刄ではの。灯影幽かに三筋町。身にしむ風に愛宕道。露の命の置き所。草葉の上と　死なれぬ故。淵川へ身を沈めるがせめ



古版本表紙

てもの言譯。跡に殘せし我が書置。嘸今頃は女房が。二上り〽さいな。わたしも思のある。おきぬさんの申譯。油小路へ私をば嫁に遣らうと眞實の。お世話を無下にさせますも。かうして二人が死にたいばかり。晝も晝とてあじやらにも大阪で見た富十郎の八百屋のおじの狂言をあれが手本ぢや意見ぢやと。芝居話の御意見を脇へまはして勿體無い。本調子〽お前と斯うして死んだならさぞ憎からう腹が立と。こればつかりが悲しいわいナア。〽さればいなう。四十に近い身をもつて十四やそこらの小娘と一緒に死んでは義理知らずと。世間の人の笑ひの種。親御の恨おきぬが思惑。兎に角そなたはながらへて亡き我が跡を弔うてたも。頼むとばかり言ひ殘す。袖は涙の潦。〽おはん涙の露塵ほども。お前の無理ぢやあるまいけれど。私や否やいな。そんなその樣な胴慾な。年齢もゆかいで恥かしい。この腹帯はどうせうえ。殿御を先へ存らへて。身二つになり大膽な。淫亂者ぢや惡性な不心中なと人さんが。笑はんしても大事ないか。そりや可愛のぢやない憎いのぢや。少さい時からお前をまはし。祇園詣や北野さん物見見物跡追うて。手を引かれたり負はれたり。裸人形無理いうて買うて貰つた簪も。すかしたらして甘やかし。可愛いがられた親達より。人が尋ねりや長さんがたんといとしというた時。やがて女夫にならんしよと。乳母や丁稚に嬲られて。何にも言はずうつ向いて。恥かしがつた下心。外に殿御は持つまいと。思ひの種の伊勢詣。抱かれて寝たり斯うなつて。遠慮情も先の世で。定りごとと諦めて一緒に死んで下さんせ。父さんや母さんの憎い中にも死んだなら。貞女とやらぢや出來したと。また褒めらるゝこともあろ。エヽナアモシと頑是なく緒を立てぬく輪廻の絆。抱きつく〳〵顔と顔。男もとかう涙の淵共に沈まん此方へと。手に手を鶏の聲告げて。もはや桂に月のあし。アレ後ろに火の光り。見咎められぬそのうちに。いさや最期と諸共に。石を袂に絲と針。繻子の帯屋と信濃屋の娘々と呼ぶ聲に。見付けられじと足早に。こけつ轉びつ牛が瀬の。水上へこそ急ぎ行く、

道行相合炬燵　八

〔解題〕　通稱「梅川」「宮薗鸞鳳軒作曲。薗八節としては明和六年三月刊行の「宮薗花扇子」及びそれ以前の語物集に見えなくて、安永二年九月の「宮薗鸚鵡石」に始めて收載されて居るのによつて考へると、明和六年から安永二年の五年間に作曲されたものであらうと推定される。近松の「冥途の飛脚」を改修したものである。現行の「宮薗千草種」所收の詞章は、鸚鵡石に載つて居る原作中の梅川のウレヒの條だけで、僅に一少部分に過ぎない。こゝには先づこの現行の詞章を掲げ、次に參考として、鸚鵡石によつて、その全文を附載して置く。なほ梅川忠兵衞の淨るりの原作及びその系統については、近松名作集下、「冥途の飛脚」の解題御參照を乞ふ。

へ梅川もせきくる涙。今こなさんの其の鐘の恨み。お前に逢ふ夜の暁は。きでも。コレ此やうにこの如く。手に手やうな憂身は誰れがさすぞいな。味なぬく〳〵の鶏をかこち。笑うて別れて泣を取つて抱きつき。又取り交し泣く涙。一座の交際に。思はれ初めて思ひ初め。いて待つ。流れの里の苦を遁れ。身ま袖の氷と閉ぢあかん。いとし痞へに可愛が癪。逢ひたいが色まになつて儘ならぬ。同じ浮世に同じ見たいが病。戀しい顔が藥より按摩さ花。吉野初瀬の常夏に櫻が咲くぢやあんより灸より。氣合が好うなりや惡うるまいし。雪は白うてお月さんは。何なる。お袋さんの御機嫌を。損ねて見時でも丸いぢやないかいな。死んで下える明日の日も。文でくり出し口舌でんすお前に死ぬる私ぢやもの。掟に留め。他所の揚屋の勤にも。客待つ宵逢うてもあはいでも。二人一所に未來

道行相合火燵

宮薗鸞鳳軒直傳　「宮薗鸚鵡石」所載

三重翠張紅閨に。枕並べし閨の中。なれ合。ハルせめて一日一夜さの憂き世帯をし衾の夜すがらも　詞四ツ門の跡夢ももする事か。ほんに平氣な憂き身ぢなし。さるにても我が夫の。狄より先やと悔み　上人涙のこぼれ口。空に霙のに必ずと。中ギン仇し情のナホス世を頼みハヒ一頻霰交りに吹く木の葉常さへ憂き地人を頼みの綱も切れ夜半の中にも引に夜の道。オン物すごけれど忍ぶには。替へて。ハル人目の関にせかれ行く。人の往來も嵐に呼ばれ。答ふる野邊の長地忠兵衛と二人連所體くづをれ梅川秃松過しその夜が思はれて　フシいとどが中廓を出でし身すがらや。昨日のま涙の種ならん。詞忠兵衛は立ちどまり。まの鬟つきや髮の縮めの中ほつれたをこれ梅川それ覺えてかいつぞやの。カ分けて進じよと櫛を取る。入手さへ涙ン色かの初雪の朝込に寢衣ながらに迯にこゞえつき。入ギンつめたからうと。られし。ドギン大門口のうす雪も今降る其手をばぢつと袖から懷へ相合ドギン炬雪も縺らねど。詞縺り果てた二人が身燵相思ひ二上リ中廓で着馴れぬ綿帽子。の上。から連立つ嬉しさに跡先に氣もカンわしが顔よりこな樣の肌に　入これつかずこゝ迄は來たれども。もはや夜をと風防ぐ。びらり帽子の紫や色で逢明けに間もなければ若しや追手に見付ひしは昨日迄ナホス地今日は眞身の女夫けられ掟に逢ふに　ウレヒおればかりいとしや科ないそなた迄共に繋がる憂き繩目いつそこゝから引別れ往んで秋に積る雪スエテ涙みぞれを爭へり。ドウレヒ梅川もせきくる涙今こな樣のその樣な憂き目は誰がさすぞいな。ハル味な一座の附合に思はれそめて思ひそめ中いとし痞に可愛が癪。逢ひたいが色見たいが病。戀しい顔が藥より。按摩さんより灸より氣合がようなりや惡うなるお袋さんの御機嫌が入そこねて見えぬ明の日は。文で繰出し口說でとめ餘所の揚屋の勤には客待つ宵の鐘を恨みお前に逢ふ夜の曉は後朝の鷄をかこち笑うて別れ泣いて待つ。ハル流れの里の苦をのがれ身まゝになつて。まゝならぬ。長ウレヒ同じうき世に同じ花吉野初瀬も常夏に。櫻が咲くぢやあるまいしカヽル雪は白うてウギンお月さんはいつでも丸いぢやないかいな。死んでドんすお

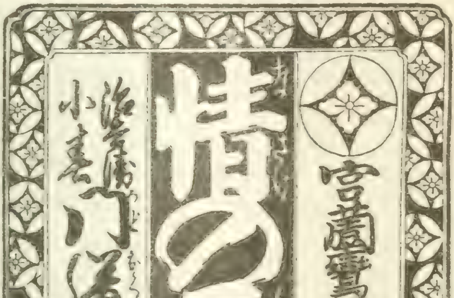
前や死ぬるわし 色ぢやもの。掟にあう 寺 ウリ涙に 色道の果しなく。延紙の三 くか笑ふか富田林の群鴉。せめて一夜
てもあはいでも二人一所に未來でも。 つ折しぼるにも裾 ギンにやつるゝ小笹 の心なく咎むる聲の高間山。 人あの葛
これ此様に 人この如く手に手を取つて 原。霜に枯野の薄原ぼう。〳〵さら〳〵 城の神ならで貰の通ひ路つゝましく。
と人抱きつき。ウ人ギンまた取りかはし泣 さつとなつたは我を追手の尋ぬるよ 身を忍ぶ道戀の道我からせばき浮世の
く涙袖の 色フシ氷と閉ぢあへり。カヽリ夜 と。掩ひ重なり影かくし。オンふりさけ 道竹の内峠袖ぬれて。岩屋越とて石道
も明け六つの鐘の聲 下胸にこたへて忠 見れば人ならで夫乞鳥の 上羽音におぢ やカン下野越え山越え 人里越えて戀路に
兵衛がこちへ〳〵と手を引いて里の裏 る。カン入身となるは 入いかなる罪の報 やつれ辿り行く。
道畦道をすぢり セツユリもぢりて藤井 いぞと口說き スエテ歎きて行く姿 ギン泣

小春治兵衛炬燵の段　九

〔解題〕通稱「小春」。宮薗鸞鳳軒作曲。前の「梅川」と同じく「宮薗鸚鵡石」に始めて收載されて居るのによつて見れば、やはり「梅川」と同じく明和末から安永初年頃の作であらう。近松の「心中天網島」の中卷紙屋の段の後半を取つたもので「情の二重帶」と題して、おさんの恨み言から、治兵衛の述懐、おさんの心づくしから治兵衛が質ぐさを三太郎に負はせて出かけようとする處迄である。處が現行のものはその前半のおさんの恨みごとだけである。こゝに收めたのは現行のものである。

と身さへ門送りさへそこ／＼に。敷居を跨さぬうち。炬燵に治兵衛は又ころり。被る蒲團の格子縞。まだ曾根崎を忘れずかと。呆れながらに立寄りて。蒲團を取つて引きのくれば。枕に傳ふ涙の海。身も浮くばかり泣き居たる。へ胸ぐら取つて炬燵の櫓に引据ゑ。エ、あんまりぢや治兵衛殿。それほど名殘が惜しくば。何故書かしやんした。勿體無い親兄弟や女房を欺し足らいで。神さんや佛さんを證據にして。モ先刻のやうなへ恐ろしい。誓紙書かぬがよいわいな。昨日年のこの月の中の亥の子に炬燵開け。その祝義ぢやとてこれ此處で。枕並らべてそれからはへ女房の懐には鬼がすむか蛇が住むか。歌念佛ぢやの夜語ぢやの庚申待ぢやとちよつぼくさ。跡から剝げる間に合ひに。欺されながら嗜んで五度に一度の悋氣さへ。

心に思ふ百歩一。思ひ遣りでもあろことか。元日から大晦日。年が年中そとへ寝て。内には水が。月夜も闇もようも奇特に際遁ひ。子の可愛さも商賣も。世間の義理も思惑も。おやまに代へた色事師。ほんに女夫は名ばかりで女房



「情の二重帯」古版本

に秋の夕烏。可愛々々は私がこと。泣いてくれるか但し又。大事のお前の身の上に。生きる死ぬるの義理詰めか。出来はせぬかと明暮れに。泣いて暮らした月と日の。二年といふもの巣守にして。嵩うじ／＼た色狂ひ。やう／＼

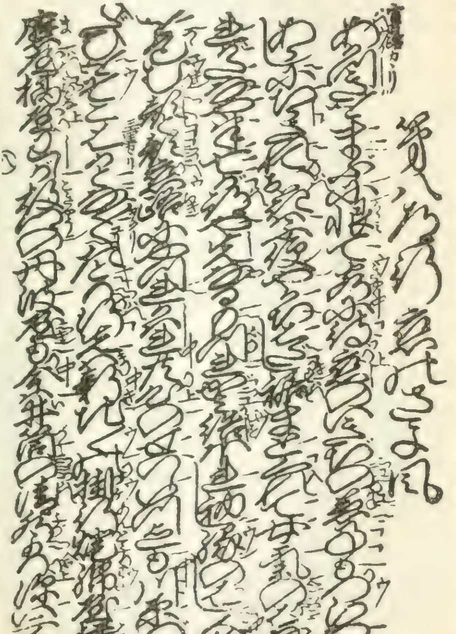
伯母さん伯母さんの。慈悲な意見で今
日の今。心置きなう睦じう。寢物語を
しようものと樂しんで居た甲斐もな
い。それほど名残が惜しくば泣かしや
んせ〳〵。その涙が蜆川へ流れ行て。
小春が汲んで呑むやろぞや。さりとは
邪慳な胴慾な。酷い難面い心やと恨み
喞つぞ道理なる。

おはな半七 道行縁花房 一〇

〔解題〕通稱「縁の花房」。作曲者宮薗鸞鳳軒。おはな半七の情死事件を始めて淨瑠璃に仕組んだのは近松の「長町女腹切」（正德二年秋）である。（近松名作集、下、同曲解題參照）その後享保十六年正月大阪角座で、この作を改作して「雙紋刀銘月」の外題で興行し、その道行を宮古路豐後が語つて好評を博し、また同じ外題で豐後の語物は殘つて居る。その後更に近松の原作を本として近松半二・竹本三郎兵衛の合作「京羽二重娘氣質」が明和元年五月竹本座で興行された。處が宮薗鸞鳳軒はその淨瑠璃集「宮薗集都大全」（寶曆十三年刊、一二年後に少し增補の跡がある）の增補の一つとしてこの「京羽二重」の中の「お花半七開帳場日古の段」を收めてある、かういふわけで兩者の關係は相當深く、而してこゝに收めた道行は實に「京羽二重」の第八道行戀の小夜風を取つて薗八節に改調したものである。併し殘念なことには、薗八節の古い段物集にはこの外題は見えないので、正確な作曲年代の見當はつかないが、恐らくは明和年間であらうか。こゝに義太夫の道行の原本の一部を掲げて、兩者の關係を示す參考に供する。

小調子へ 曉を。間夫に恨みて。客に待つ。
戀の意氣地のかね言も。つらや嵐に散
らされて。お花はふびんや徒步跣足。
裾まとくれて女子氣に。離れがたなや
半七が。後や先きなる縺れ髮。結ぼれ
初めし緣のはし。人目を包む顏と顏。

戀路に窶れ縺れども。心の誓紙何時までも。河原傳ひを。其處はかとなく。新地々々の懸行燈。綿屋。播摩屋。立花屋。わしが故郷の丹波屋も。今は井筒の淸水より。深い二人が港染め。眞ぞこひ中紫の。末で扇の二つ紋。とんと一から十文字屋。かくは逢ひし身の菱屋。ほんに壺屋と思はれて。京屋嫁入の若松屋。海老の腰まで鏈さげて。仲吉田屋の丸かれと。願ひ金屋の甲斐あらば。たとへ東の美濃。伊勢路。鄙の宿にも伏見屋と。船に積まれぬ思の數は。富士の白妙。比良の雪。妹脊の鳥や吽きも。人も菊屋と立つ羽音。互ひに追うつ。追はるゝも。戀の境の茨垣。身は津の國のよしあしも。詠み盡くされぬ世の憂さを。思ひつゞけて立留まり。へこれお花。今更言ふは愚痴なれど。石岡といふ侍の。奥様になるそなたの身。へよしない己れに氣を盡くし。憂き河竹の辛抱も。其甲斐もなき。この仕だら。堪へてたもとばかりにて。聲もおつなる繰り言に。へお花は顔を振り上げて。わしや初めから覺悟して。浮名にも替へ。身にも替へ。命に代へて可愛い殿御にする辛苦。口惜しがりそなものかいな。國で死ぬるを父さんが。左膳さんへ義理立てゝ。りうにお花の名をつけて。柳に花を替へ〴〵に。慈悲な情の浮き勸め。顔見る事を樂しみに。つらい互ひの辛抱も。戀といふ



「京羽二重娘氣質」の道行

字が。さすわいな。どちらからどう見ても。迷惑なはお岩さん。大事の殿御を寢取られて。嗔腹が立たう。無理ぢやない。私といふもの無いならば。仲好う添うてござんしよと。思ひ廻せばおいとしい。誓文私しや未來でも。あなたを除けて添ふ氣は無い。ふつつり思ひ切つたぞえと。云うては見たが。この胸が。どうした因果な緣ぢややら。やつぱり思ひ。エヽ切れぬ。堪忍してとばかりにて。わつとひれ伏し泣き沈む。

（薗八節終り）

第九編　江戸長唄之部

七福神 一

〔解題〕市村座の脇狂言として序開きに演ぜられるもの。作曲年代は明かでないが、初代杵屋宇右衛門の作曲と傳へられるから、享保頃のものか。長唄最古曲の一。七福神の題であるが惠比須大黒だけを材題としたに過ぎない。

木調子へそれ伊弉諾伊弉冊夫婦寄合ひ、漫漫たるわだつみに天の逆鉾下させ給ひ、引上げ給ふその滴、凝固まつて一つの島を、月讀日讀蛭子素盞嗚儲け給ふ、蛭子と申すは惠比壽の事よ、骨なし皮なしやくたいなし、三年足立ち給はねば、手繰りくりくるくる船に乘せ奉れば、靑海原に流し給へば、海を讓に受取り給ふ、西の宮の惠比壽三郎、いとも賢き釣針下し、萬の魚を釣

り釣つた、姿はいよさてしをらしや二上りへ引けや引け〳〵、引く物品々、様はきはずみ琵琶や琴胡弓三味線東雲横雲其處引け小車子供達は御座れ寳引しよ、寳引しよと、帆綱引つ掛け寳船引いて來たいさや若い衆網引くまいか、沖の鷗がぱつと〳〵立つたは三人張强弓、よつ引き絞りひようふつと射落せばサ浮きつ沈みつ浪に搖られて沖の方へ引くと、水無月半祇園どのの祭で、

山鉾飾つて渡拍子で引いて來た、拍子揃へ打つや太鼓の音のよさ、鳴るか鳴らぬか山田の鳴子、山田の鳴子、引けばからころからりころり、からりころりからころ〳〵〳〵や、轡揃へて神の神馬を引連れ〳〵、勇み勇むや千代の御神樂 合 神は利生を黄楊の櫛引き、〳〵、注連繩の長き緣を。

矢の根五郎 二

〔解題〕通稱「矢の根」。「鏃五郎」とも書く。享保十四年正月中村座「扇惠方曾我」興行の時に初演。曾我五郎二世市川團十郎。大薩摩主膳太夫が淨瑠璃を語り、杵屋喜三郎が緋縮緬の襦袢の肌ぬぎで三味線を彈いた

と言ひ傳へられる。

文獻上「矢の根」の原據と見るべきは、幸若舞曲の「和田酒盛」である。それが傳へられて上方では近松の作と推定される加賀掾の正本「賴朝濱出」の中に、又江戸では土佐少掾橘正勝の正本「風流和田酒盛」の中に仕組まれて居るが、この後者が大薩摩の「矢の根」の原據となつたらしい。尤も言ひ傳へでは、團十郎贔屓の神田佐柄木町の砥師の家で毎年正月吉例として行はれる矢の根研ぎの儀式の型から思ひつき、又裸馬に乘つて大根を鞭にするのも、その家に傳へられる祖先の功名譚に本づいたものであるといふ。かういふ挿話やモデルもあらうが、文獻上の系統も無視してはならぬと思ふ、兩者相寄つてこれが團十郎になつて立派な荒事として作り上げられたと見るべきである。

この矢の根は大入大當りで五月迄興行し、座元は土藏を建てて矢の根藏といつた。爾後本曲は度々舞臺上に繰返されて遂に市川家の十八番物と迄なつた。

へさる程に曾我の五郎時致は惠方に向つてふと祝詞、それ父の仇には倶に天諷和合樂、壽福圓滿卷の軍書の窓の北面は、殘んの雪のあさ緑、春風春水一枝の梅、くわつと開くや花の春、新しわんの物事に、改れども時致は、今年も古わんふる疊、古井といつし所にて、矢の根磨いて居たりけりへ傳へ聞く養由が矢先は遠き高麗唐土、近く和朝を尋ぬれば鎭西八郎爲朝 源三位賴政が、古今無雙の弓勢にも優りはするとも劣らじとへ天性ヤア不敵の氣丈者へ虎と見て行に田作かき膾、矢立の酢牛蒡煮醤り大根、一寸の鮹に昆布の魂 たとはゞ南經節汁の、鯨の威勢振ふとも、われ鯱鉾の飾り海老、赤いは親父が裏りの面、つら／＼世上を鑵子の蓋、ちろり銅



古正本表紙

鍋文福茶釜、毛抜鉄の折までも古金買が陋巷に 時へ一簞の食一瓢の飲 地へ粗末廣寶船、上下取つてイザ奥へ、祝ひに遣羽子の、一夜明けても舊冬の、鎖食を喰ひ水を吞み 時へ肱を曲げて枕とませう〳〵 大へいやさう致いては居り帷衣小手脛當、すねから干鯛も乾貝す 地へ樂みしんぞ其中に 時へあろに任ますまい、方々でござれば猶永日の時も、取るに取られぬ酒屋の通、〆て十する安煙草煙管おつ取り吸付けて、鼻を期し、ゆるりと御意を得ませうぞ

七貫八百六十四匁、横にねの日の初寅の先なるも喰合のない福の神、どうで貧乏する 春霞 時からは、自問自答の惡態を申して申さへうち眺く 時致へはて不斷頭巾をぬがぬはさめつゝ 地へ惠比壽は身持がうすぎたねえ 時致へ時致はへとはどうぢや 地へはて鯛をお抱きの寛々とし腋の下 時致へ江戸前にてもあらばこて居たりそ 地へ精進日には附合はれぬ 時致へ毘ける。大沙門天の兜頭巾な用心過ぎてうつとしさつまへ時い 地へ布袋はどぶつ福祿壽は 時致へ月に年始の代剃るに手間が入る 地へ辨財天は船饅門禮者、頭、浪乘り船の錢儲け 時致へ儲けられ素禮歳玉挾箱、三味線箱の一調子、擘 時へでも一寸盞を 大へイ、ヤ御免〳〵うがられめえが、苦勞にするは國土の張上げて物まう 時へどうれ 大へ大薩摩 春永に 地へと言捨ててこそ立歸る 時たはけ 地へ富貴天に在り死 命あり 主膳太夫年始のお禮申します 時へこれへ大薩摩主膳太夫なればこそ時致の所時へいづれ祈るに所なし 地へげに顔回は〳〵早々とのおいで殊に年玉としてへ祝うてくれる、ハテ奇特な男ぢやな



「矢の根」錦繪

アへその時五郎年玉を開くや屆寶船、ハテ氣のついたる年玉と、正月ごころ若輩に、上から讀んでも長き夜の、下から讀んでもながきよの、とをのねむりのとろ〳〵と、したゝか過ぎたる雜煮腹、食後の一睡一樂と、砥石を拭ひ無造作に、これ邯鄲の枕ぞと、踏ん反り返つて時致は、暫しまどろむ高鼾、豐かにこそは臥しにけれへあゝら不思議や轉寢の、かたはら淒き風の脚、實地を踏まぬ朧ろ氣、現ともなく夢ともなく、いと色蒼ざめたる顏色にて、舍兄十郎祐成忽然と顯れ出で 祐成へ如何に時致、我圖らずも今日祐經が館へ虜となり、籠中の鳥網裡の魚、働かんに力なし、急ぎ來つて急難を救ひくれよ、起きよ五郎覺めよ時致へといふかと思へば忽ちに、消えて形は失せにけり 時へ時致夢さめむつくと起き、あたりを見れども人もなく、茫然として居たりける へさては夢中に兄祐成念力通じて急難を救ひくれよと我への告、たとはば祐經天へ昇らば續いて昇り、大地へ入らば同じく分入り、日本六十餘州は目のあたり、東は奥州外が濱 地へ西は鎭西鬼界ケ島 時へ南は紀の路熊野浦 地へ北は越後の荒海まで 時へ人間の通はぬ處 地へ千里も行け 時へ萬里も飛べへいで追掛けんと時致が、勢ひ進む有様は、恐しかりける次第なり 馬士へかかる處へ向うより、馬附大根春商ひ、大根〳〵と呼來る 時へ時致これをきつと見て、これ幸ひの裸背馬、價は望みに任すべし、馬を貸せ〳〵、其馬貸せよと近寄れば 馬士へ馬子も氣負つて狼藉なり へ商ひ馬に乘らんとは、白癡成らぬ、成らないぞ 時へといふ所を引つ摑んで七八間、エイヤット人礫、手綱おつ取りひらりと打乘り へ手頃の大根千里の鞭へ直に往けば五十丁、廻らば三里三箇の莊、宇佐美久須美河津が次男、曾我の五郎時致が、曲馬の程こそこれ見よとへ工藤が館へ急ぎしは、ゆゆしかりける次第なり。

傾城無間の鐘　三

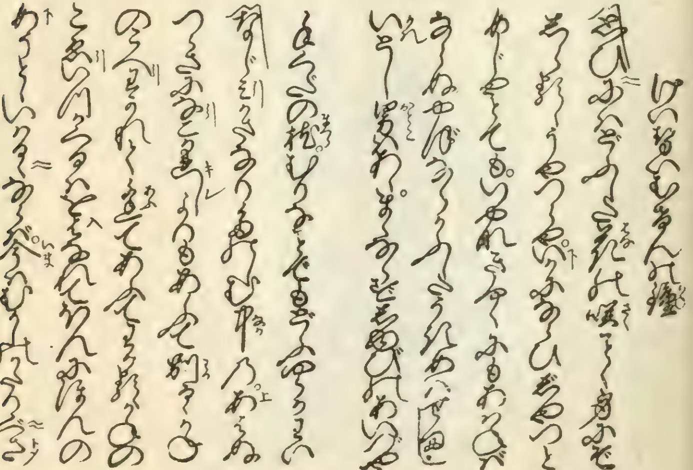
〔解題〕通稱「むけん」。世に「めりやす」の嚆矢と稱へられる曲。享保十六年春中村座興行の「傾城福引名

護屋」に元祖瀬川菊之丞が傾城葛城の役で、その二番目に演じた無間鐘の所作の時に用ひられたもので、唄は坂田兵四郎、三絃杵屋太十郎、琴三絃杵屋文次郎。尚無間鐘の系統については、「浄るり名作集」上、「ひらがな盛衰記」の解題御參照を乞ふ。

へ思ひにはどうした花の咲く事と身にぞ知らるゝうやつらや。下 如何に習ひぢや勤めぢやとても。いやな客にも逢はねばならぬ。野暮ならかうした憂き目はせまじ クル いとし男はあゝ。まゝならず首尾の合圖や手管の枕。無理な事でもどうやら可愛いへなじみ 引 重なり樂む仲の。上 あはぬ辛さにな 引 こがれし ギン よりも逢うて別るゝ鐘の聲 引
別れて逢うて逢うて別るゝ鐘の聲 引 いつかくるわを 入 離れてほんにほんの 下 女夫と言はるるならば。今は昔の語りぐさ トメ

傾城道成寺　四

〔解題〕一に「無間鐘新道成寺」とも「中山道成寺」ともいふ。享保十六年春中村座興行の「傾城福引名護



「無間の鐘」古版本

屋」の第三番目に出したもので、白拍子は瀬川菊之丞、唄は坂田兵四郎、三絃は杵屋喜三郎。

これは江戸に於ける道成寺所作事の始めで、菊之丞は大當りであつた。

伊賀屋版の「無間の鐘新道成寺」と題する十二行の細字本では

ウタヒ へ作りし罪も消えぬべし／＼。鐘の供養に參らん」。

と冒頭にあるが、現行のものにはない。

語へ我はこの世に亡き身の、そのまゝならぬその中に、可愛い男を娑婆に置き、思ひがけなき死出の山、迷ふが中の迷とは、千々に物こそ悲しけれ、佛の道に疎ければ、つらい勤の送る身の、月は程なく入汐の、／＼、煙滿來る小松原、懺悔に罪も晴れなんと、中山寺に詣りけり ウタヒ へ嬉しやさらば舞はんとて、あれにまします宮人の烏帽子を暫し假に着て、既に拍子を始めけり へ花の外には松ばかり、暮初めて鐘や撞くらん、色はにほへど散りぬるを我が世誰ぞ常ならめ、人里遠き鐘の聲、諸行無常の世の中に、戀は誠の菩提の道へ、引かるゝ迄の絲竹や、我も昔は皆人毎に、娘々と澤山さうに、言うてたもんな手習ひ事も覺え物縫ひ習ひ、やがて殿御と添寢の枕、二人寢勝ちに引締めていとさう／＼しき風の間に、霞棚引く峯の雲、愛並べしこの寺は、小夜の中山と承り、はじめて伽藍成就のあまねく十方輝けばとて、光明山とは名付けたり、山寺の春の夕暮來て見れば、入相の鐘に花ぞ散りける／＼、さる程に／＼寺々の鐘、月落ち烏啼いて、霜雪天に滿汐、程なくこの寺の江村の漁火愁に對して



「むけんの鐘新道成寺」古正本表紙

人々眠れば、よき隙ぞと立舞ふ樣に狙ひ寄り、撞かんとせしが、思へばこの鐘恨めしやとて、龍頭に手を掛け飛ぶかと見えしが、引被いで失せにけり

切の旦〽眞砂の數は盡くるとも、行者の法力盡くべきかと、皆一同に聲を上げ、東方に降三世明王、西方威德明王天子、北方金剛夜叉明王〽中央大日不動明王、曩謨三曼多嚩日羅、旋多摩訶嚕遮那娑婆多耶娑婆訶〽左の御手に三日三夜右の御手に三日三夜合せて六日に一日增して〽七日御祈念御經讀誦の奇特に任せ、降魔の利劍は何のこつちや〳〵、力に由りて吽多羅〽たかんま、聽我說者得大智惠、知我身者即身成佛、〽祈りければ〽祈り祈られ、しやむつかしい事ども、丹誠出し額に汗を玉の數珠揩り、皆聲揃へ謡撞かねどこの鐘響き出で、引かねどこの鐘躍るぞと見えし、程なく鐘樓に引上げたり〽朧月影も定かにしどけなく、山吹の瀬にほの見え小褄形振ほら〳〵春風、様は忍びの朝通ひ、小川淺ければ裾が濡れそろよ、なうさ〳〵、裃も濡れそろよ〳〵物に狂ふや憂き涙、間夫の男は面憎や抱いて寢た時や我ならで、外の女郎にや逢はぬと言うて騙しくさつたが憎や、えゝならぬ、誓文くつされ騙しはせぬが、引くに引かれぬ心があれば、それは寢てからその言譯をせうぞいの、あゝいやらしい何ぞいの、昔の惡性したらいでやら、今のしなしはをかしやな、これは過ぎにし言の葉の　上ゲ〽あゝ夜晝となき苦しみは無間の鐘、怖しや苦しむ苦患近付きて、〳〵、來世は六つの責め鼓打たうよ、何處鼓は僞の、契徒なるつま琴の引離れ、何處にか我が事〳〵忍び音のやはら〳〵打たうよ〳〵、まして冥土の修羅太鼓、劍をひつしと植並べ、罪人を追廻し巖石に結付けられて、峯よりどうど突落さるれば、骨は微塵に碎かれて、風に木の葉の散る如く、起請誓紙の數々に、恨の烏集りて、鐵の嘴を鳴らし、銅の爪を磨立て追廻し〳〵〳〵、流の罪科地獄の有樣、花も一時月の光も、移るや夢の、〳〵、定めなきこそあさましや。

風流相生獅子　五

〔解題〕　一名「相生獅子の亂曲」ともいひ、通稱は「相生獅子」。享保十九年春中村座興行の「十八公今様曾我」の第三番「夕霞淺間嶽」（一中節）の切に出した石橋の所作事。役者は瀬川菊之丞、長唄は吉住小三郎、三絃は杵屋喜三郎。

この杵屋喜三郎は杵屋系圖では七代目喜三郎のことで、寶暦二年歿して居るが、享保末年から寶暦初年に亘る江戸長唄の初期の三味線の名手であつた。

この曲は大好評であつて、爾後「淺間」の淨るりの跡に石橋を出す慣例を開いた。

へ花笑び。蝶鷺けども人知らず。我も運ふや様々の。四季折々の戯れは。その物毎にあはれなり。合蝶や胡蝶のせめて暫しは手に止れ。合見返れば花に紛れて見えつ隠れつ。色々の姿優しき夏木立へ心盡しの モッ な。この年月をえ。何時か思の晴るゝやら。心一つに餘るやらよしや世の中。へ花に戯れ枝に臥し牡獅子牝獅子の彼方へひらり此方へひらり〲 カン引 ひらり〲〲〲と舞ひ遊ぶ。八色九色の結迅の亂拍子は。合それて我々も心亂れて足も堪らず瀧の音の下は泥梨も白波の虚空をムスビ渡るが如くなり。夏の夕暮に山々を見渡せば折しも松風に青葉涼しく吹誘ふ。はら〲はつと鳥の群れ居るは。時もこそあれ一入さても面白や。又は時鳥垣根に結ぶ卯の花や。ギンカハリ 牡丹芍薬あつちりな。こつちりな。あちりこちりすぢりもぢりて。ゑりくりゑんじよの奥山の陰も。戀といふ事は誰も知るものを慘やな。何者か月も傾くほの〲鐘の。つらや恨めし別やまさる。涙玉散るスエ朝ぼらけ。合人目。忍べば。モッ恨みは。モッせまじ。爲に沈みし戀の淵。心からなる身の憂さを。やんれそれは〲え憂やつらや〲思廻せば昔なり。合牡丹に戯れ獅子の曲げに石橋の有様は。笙歌の花降り笙笛琴箜篌夕日の雲に。中ギン 聞ゆべき目前の奇特あらたなり。合フシ 暫く待たせ給へや。影向の時節も今。幾程によも過ぎじ。シヤクケウ 獅子

團乱旋の舞樂の砌〳〵牡丹の花ぶさ匂滿ち〳〵。大筋力の獅子頭。打てや囃せや牡丹芳〳〵黄金の蘂。現れて。花に戯れ枝に。臥し轉び實にも上なき獅子王の勢。靡かぬ草木もなき時なれや。萬歳千秋と舞納め。〳〵。獅子の座にこそ直りけれ。

二人椀久　六

〔解題〕享保十九年冬市村座顏見世芝居「陸奥勢源氏」に、平太夫國妙妻松島（瀨川菊之丞）と八幡太郎義家（市村竹之丞）との椀久の所作で、菊之丞が羽織大小片身がはり男女の身振の仕別け、竹之丞と井筒の連所作で大當り。唄は松島庄五郎・坂田兵四郎。作曲者は杵屋新右衛門。

へ行く水に。移れば變る飛鳥川。流の里に昨日迄。はて勿體つけたえ。誓文ほんに全盛も、我は廓を放し鳥。籬は恨めし心くど〳〵わくせきと。戀しき人を松山に。やれ末かけて搔取りしやんとしやんと〳〵もしをらしく。君が定紋伊達羽織。男なりけり又女子とも片袖主と眺めやる。思ひ差しなら。武藏野でなりと。何ぢや織部の薄盃を。なんしよしよ戀に弱身は見せまいと。ぴんと拗ねては背向けて。くねれる花と出て見れば女心の强からで後より戀の責め來れば。小袖にひたと抱付き。申し椀久さんさつても照つたりお日和樣。ふられず歸る仕合は松にはあらぬ太夫が袖。月の漏るより闇がよい。いゝやいや〳〵こちや闇よりもお月がよい。お前はさうかと寄添へば。月がよいとの言草に粹な心で腹が立つわいな。もうこれからが口說の段。仔細らしげに座を打つて。袖だけ。着だけ衣紋坂初冠の投頭巾。語るも昔男山筒井筒。井筒にかけし麿が丈。老にけらしな妹見ざる間にと讀みて贈りける程に。その時女も比べこし。振分髮も肩過ぎぬ。君ならずして誰か上ぐべきと。互に讀みし故なれば。筒井筒

の女とも聞えしは。有常が娘の古き名なるぞ。お茶の口切たぎらす目許に。え丶取付けば。あ丶何ぞいの。手持無沙汰に拍子揃へてわざくれ。按摩拳癖。々く／＼々。さりとは引く／＼捻る。地體其は。其は大阪者で。お江戸町中見物様の。馴染情の御贔屓強く。按摩拳癖朝の六つから日の暮る丶迄。さりとは／＼。忝い。按摩冥利に叶うて嬉し。按摩拳癖／＼。廓の三浦女郎様。ちえこちえ。袖をそつそと引かば、お暇きや。かんまへてよい女郎の顔を。おしやるなちえこちえ二人連立ち語ろもの廓々は。我が家なれば。遣手禿も。一緒に連立ち急ぐべし。遊び嬉しき馴染へ通ふ。戀に焦れて。ちや／＼とちやと／＼。ちやと行かう。やれ可愛がつたりがられて見たり。無理な口説の遊びの品よく。彼方へ言抜け此方へ言抜け。裾に縺れて。じやらくら／＼悪戯の花も否もあるしこなしは。一重二重や三重の帶。蒲團の内こそ。候。もし。

英獅子亂曲　七

〔解題〕寛保二年春、市村座で初代瀬川菊之丞所演。唄、松島庄五郎・坂田兵四郎。作曲者は杵屋新右衛門か。傾城姿から引抜いて石橋の狂ひになる仕組で、曲の初めに枕づくしがあるので、後に「枕獅子」と改題された。

〔三下リ〕〽樵歌牧笛の聲、人間萬事樣々の、世を渡り行くその中に 合ためし少き川竹の、流れ立つ名の憂き事ばかり 合寄せては返す浪枕、定めなき世のなか／＼に 合誠をあかす鏡の間、忍ぶ私や附枕、思ひそこらる新枕 合とんと二つに長枕 合ウタヒ〽されば迷ひの其中や、天の浮橋渡り初め、女神男神の二柱 合〽諾の根催の伊勢あま小舟、日々に 〽人の心の花の露、濡れにぞ濡れし鬢水の 合はたち鬢の水くさき、道理流れの身ぢやものと人にうたはれ結立ての、櫛の歯にまでかけられし、半元結の結紐も 合かゆいところへ爪の、届かぬ人につながれて 合繙

子おさへの針の先、つく／＼どうか笄の、ひぞりも鶴のはしたなく合はしごくるわの別れ坂 三下リ へ春は花見に心うつりて山里の、谷の川音雨とのみ、聞えて松の風合げに過つて半日の客たりしも、今身の上に白雲の合その折過ぎて花も散り、青葉茂るや夏木立、飛驒の踊は面白や合早少女がござれば、苗代水や五月雨合初の人にも馴染むはお茶よ合誰か邪魔して薄茶となるならば、こちや／＼／＼知らぬ、ほんにさ合 踊恨みかこつも實からしんぞ、氣に當らうとはゆめ／＼知らなんだ合見るたび／＼や聞く度に、にくてらしい程可愛さの合起請誓紙は疑ひばらし、オ、よい事の／＼合朧月夜やほとゝぎすへ時しも今は牡丹の花の咲くや亂れて散るは／＼散り來るは／＼ちり／＼／＼ちりかゝるやうで、おいとしうて寢られぬ合花見て戻ろ、花見て戻ろ、花にはうさをも打忘れ 合へ咲き揃ふ風に香のある花の波合へきつれてつれて合顏は紅白薄紅さいて、くどけど／＼丁度廿日草、君はつれなや、オ、それ／＼ぢや、まことに花車、くるりや／＼合くるり／＼くる／＼／＼牡丹に戯れ獅子の曲、げに石橋の有樣は、その面僅かにして、苔滑かに谷深く イヤア 下は泥犁も白波の、音は風に響き合ひ、笙歌の花降り、笙笛琴箜篌、夕日の雲に聞ゆべき、目前の奇特あらたなり ガク へ暫く待たせ給へや、影向の時節も、今幾程によも過ぎじ クルヒ 合へ獅子團亂旋の舞樂の砌、牡丹の花房にほひ充ち滿ち、大筋力の獅子頭、打てや囃せや牡丹芳／＼、黄金の蘂あらはれて、花に戯れ枝に臥しまろびげにも上なき獅子王の勢ひ、靡かぬ草木もなき時なれや、萬歳千秋と舞ひ納め／＼、獅子の座にこそ直りけれ。

百千鳥娘道成寺　八

〔解題〕 謡ひ出しの「さなきだに…」の句に因んで「さなきだ道成寺」ともいふ。延享元年正月中村座興行の「碩末廣曾我」の切に出した道成寺の所作事。役割は文覺胎藏界鐵拳二世市川海老藏、辨慶金剛界握拳元祖

大谷廣治、舞姫風流望月元祖瀨川菊之丞。長唄は吉住小三郎・早川新次郎、三絃杵屋喜三郎・上村作十郎等。
本曲は「末廣曾我」に關係を持つた仕組であるが、この芝居は曾我に源氏十二段を綯ひ交ぜにして居るので、それが爲に道成寺の場所は紀州ではなくて、箱根の鐘供養といふ仕組で、その上に矢剣から箱根への道行があり、それは「駒鳥戀關札」といふ淨るりであつて、宮古路文字太夫・加賀太夫が一日代りで語つた。その記事や挿畫が歌舞伎年代記の其條に詳しい。
本曲は寶曆六年十一月市村座で、瀨川吉次が二代目菊之丞に改名の出し物として繰返されて、又々大當りをとつた。現存の古版正本にはこの時の物が多い。參考として今こゝにそれを掲げて置く。

(大序)へ作りし罪も消えぬべし。鐘の供原。春の日永くまだ暮れ
養に參らん〳〵へさなきだに(詰引)重きぬ。日高の寺にぞ(スヱテ)參
が。上の小夜衣(合)我が夫ならぬ(フシ)徒りける。(此間海老藏慶次狂言アリ)
人に(合)迷ふ(ハル)心の戀の淵沈みも。やへ嬉しやさらば(クリ)舞は
らぬ物思ふ(オン)人目を忍ぶ濡衣の戀しんとて(合オン)烏帽子を寶し
懷しき念力の(合)作りし罪もせめて(ハヾム)假に着て。扇押取り色々
さて。戀慕の闇の晴れやらぬ。月は程の既に拍子を(ウフシ拍子)進
なく(オン)入汐の〳〵。嬋滿ち來る小松めけり(合)へさても(詰)名高





百千鳥娘道成寺（寶曆六年興行の時のもの）

き白拍子。天の鈿女の命より合ハル情色レヒ澄みてへさつ
音に彈く絲竹の。笹の一夜の契もあろさ廻れやモツ二つ
に合可愛〳〵も皆一持盛りハイハつらい太鼓の音もよしサ
心を露程も知らいで。月ならば十三夜ツサへさつさどん
持。花の引緣どて持。思染め合戀の手どんどとへど〻
習ひフシつい見習ひて下ル深き合ハル殿へつく〳〵でんづ
御に命もほんに。三年四年の思を捨てくどんづくどんか
て合物も言はずに嫌々と是非に嫌ならか合大小〳〵。
退きもせうぞ元の白地にして戻しやこれはさて措き
昔思へば今更によしなの恨。恨みフシへ龍田へ川にはちん
かこつも恥しや謡へ花の外には松ばか散り紅葉を流す合
り。暮初めてフシナホス羯鼓ハル響くら我は君故ナア浮名
ん　へ此間舞羯鼓へ彌生頃や春風の柳の絲のたを流す。のほんほ
よ〳〵と。枝垂柳か露の添寢の玉柳さどなどさよいよ
へ玉の笛の音聲澄みて合ハル菩薩も此處えへさあ〳〵合
に影向の天の鼓が打鳴り〳〵面白や合へ須磨や明石のま
よるべ定めぬハルフシ浪枕へ戀しき人のん丸月の名所合松
音をや出さん。調も夢か幻と今は太鼓は唐崎ナア引霞は
の現。なや合トリへ打つや太鼓の音もウ外山。のほんほさ



「百千鳥道成寺」舞臺面

どなどさよいよえへさあ〱合へ忍ぶ夜の〱様が傳かと走り出て見れば合夜半吹く風につん〱妻戸をほと〱きり〱〱〱やつきり〱合峯は嵐の音ばかり合オンへ君と我とがギン仲は結ぶ神樣ア、白體鳥は物かはつらいは鐘よの合一人待つ夜は悄てらし。モツ縺るまいとの合言うた言葉が嘘かいなア。そんれもさうだかえ合浮名はまゝよ結ぶの神樣ア、白體鳥は物かは。つらいは鐘よのオ、合モツ一人待つ夜は悄てらし。縺るまいとの合言うた言葉が嘘かいな。それもさうだかえ。鐘を恨むる罪深しへ質に難有き法の庭。笙笛琴箜篌。夕日の雲に輝きて合菩薩も此處に來迎の裝は。日

前の奇特妙なりや合此間石橋アリへさる程に〱。寺々の鐘。月落ち鶏。鳴いて霜雪天に。滿汐程なくこの山寺の。江村の。漁火。愁に對して。人々眠ればよき隙ぞと。ハル立舞ふ樣に狙ひ寄つて。撞かんとせしが思へばこの鐘恨めしやとて。龍頭に。手を掛け。飛ぶとぞ見えしが。引被いでぞ失せにけり。此間七三郎鐘ノカタリアリへ東方に。御座んせ〱富が岡には二軒茶屋の花盛り合南方に。品川入江の色は盡きせぬ船遊び合へ西方に。然も柏木右衛門櫻の盛りえ合へ北方に分も吉原太夫格子に合散茶壺に端女郎へ浮きに浮かれて第一中有に迷うた。懺悔〱六根罪障。南無。不動明王〱へ動くか。動かぬ

か。曩謨三。曼多嚩日羅嚩日羅。こりや。動かぬぞ。眞言秘密で。責めかけ〱。珠數のありたけ。やつさらさ〱合施多摩訶嚕遮那。何のこつちやえ娑婆多耶。吽多羅。何のこつちやえ此間海老蔵祈リアリへ謹請東方。青龍。清淨。謹請。西方。白體。白龍。謹請。中央。黄體黄龍。一大三千世界の。恒沙の龍王。哀愍納受。哀愍頻んの。砌んなれば。何處に大蛇のあるべきぞと。祈り。祈られ。飛上り合身は緋櫻の。炎となつて。追廻り〱〱行違ひ〱くるり〱くる〱合呼ぶも叫ぶも。恨の木魂。霞に紛れて失せにけり。

〔解題〕 通稱「高尾懺悔」。延享元年春市村座「七種曙曾我」の第三番目に出す。作曲杵屋新右衛門。長唄囃子連名は、唄坂田兵四郎・松島庄五郎・松島藤十郎、三絃杵屋新右衛門・同彌七・太田三十郎・須川幸次郎、小鼓宇野長七、大鼓太田市左衛門、鼓弓藤田平右衛門、笛西村三四郎・倉田庄八、太鼓山名文治郎・藤田助三郎。この連中出うたひ出囃子にて並ぶ。瀬川菊次郎お七で夢ともなく土手の道哲へ迷ひ來て高尾の塚に一人居ると、後ろから白い紙の姿がひら／＼と出て下へ落ちる。その下から市村滿藏契情姿で出る。上「鉦鼓の音も澄み渡り、名もなつかしき宮戸川……」とうたふといふ仕組（歌舞伎年代記）。この芝居はお七と高尾の絢ひ交ぜのためかういふ脚色にしたものであらう。「高尾懺悔」としては古いもの。この詞章を取つて荻江節でも用ひてゐる。

三下りへ鉦鼓の音も澄渡り。名もなつかしき宮戸川。都鳥も聲添へて。南無阿彌陀佛彌陀佛。浅茅が原のさら／＼と風冷に身にぞ染む　鼓唄へ不思議や紅葉の影添ひて。塚の後にすご／＼と。高尾が姿これ迄現れ出でたるぞや　へ紅葉の。青葉に茂る夏木立。春は昔になりけらし。世渡る中の品々に。我は親同胞の爲に沈みし戀の淵。浮かみもやらぬ流の憂き身。憂いぞつらいぞ勤の習　合へ烟草飲んでも烟管より咽喉が通らぬ薄烟り。泣いて明さぬ夜半とてもなし。人の眺となる身はほんに。辛苦萬苦の苦の世界。四季の紋日は小車や。合　先づ春は花の下。手折りし枝を樂みて。床に眺むる春の風そよりく／＼と花吹き散らす。ちらり／＼と櫻の薫り野山を寫す。廓景色　合　夏の曙有明の。つれなく見えし別れ鳥。ほぞんかけたと囀るは。死出の田長や冥土の鳥と。鳴き明す。流れて血潮の花の色。皐月五月雨降られて／＼。降る／＼／＼。降る夜は物を思はする。籠の鳥かや恨めしや。秋の夜中に牡丹花の。燈籠踊の一節に　合　殘る暑さを凌がんと大門口の黄昏や。いさ


「高尾さんげ」正本表紙

鈴蟲を思出すつらい勤のその中に。可愛い男を待ちかねて。幕松蟲の思出す。蟲の聲々可愛らし。吾が住家は草葉にすだく。露を枕に觸らば落ちよ。鳴いて夜毎に夫欲しさうに殿御戀しき機織蟲よ。露を枕に觸らば落ちよ。鳴いて夜毎の夫欲しさうに。殿御戀しき機織蟲よ。晝は物憂き草の蔭。あゝ悲しやな。苦しやな。雪の肌に情なく。氷の刃に貫かれ。さながら冬か八寒の苦み深し。物語 合セメ へ早時來ぬと言ふ聲も。顫ひ戰き身に染渡りどろ／＼。仇と恨と情の思。追廻り／＼震動稲妻凄まじく。無慚や高尾は世の人の思をかけし涙の雨。はんら／＼はら／＼／＼／＼。降りかゝれば身に染み耐へて。木蔭に寄れば。刃の責に煩惱の犬は集り。牙を鳴らして飛びかゝる。こは情なや午王の鳥。嘴を鳴し羽を叩き。眼を拔かんと舞下る。實に怖しき物語。

天人羽衣　一〇

〔解題〕延享二年春、中村座興行の「羽衣壽曾我」第三番目に瀬川菊之丞の演じたもの。作曲者は杵屋彌三郎といひ傳へてあるが、長唄連名未詳のため斷言し得ない。

三下り へ花降りて妙なりや。靈香四方に薫ず。面白の今の音樂。面白の樂の音 合 へ天の原ふりさけ見れば霞立つ。空も何時しか行雲の。羨しげに打眺め。伽陵頻迦の馴々し。聲更に雁の。歸り行く天路の聞けば懐しや。實に少女子の霓裳羽衣の曲をなし。天の羽風のひら／＼と。雨に潤ふ花の袖。東遊の駿河舞。この時や始なるらん。花の色香もよい姥櫻。姿優しやほら／＼／＼と。二重の帯をきりゝとしやんと縁結び 合 へ御乳や乳母の辭として。脊に子を負ひ寝させて置いて。狗の子／＼と言たもな日な懸けそよ可愛らしさにな。愛盛り愛すれば。頭振り／＼手打しほの目。さても其方は誰人の子なれば。定家葛が離れ難やの／＼。手車に乗せて参ろの。東山や西山北嵯峨

の踊は。對の帽子をしやんと着て。踊る振が見事え。花を見て戻ろ〳〵。花には憂さも打忘れ面白や 合へ九重の都歸りの江戸櫻。瀨川帽子を菊櫻。匂ひ櫻や八重一重。君が情の薄櫻。そんそれは誠によう言うた 合へ忍ぶ夜の。月も少しは遲櫻。有明櫻戀の邪魔。闇に照すは緋櫻や。濱で焦るゝ鹽釜や。そんそれは誠によう言うた 合へ假令々々野の末山櫻。虎のを住みし奥迄も。二人誓ひし伊勢櫻。起請誓紙を墨染や。そんれは誠によう言うた。吉野初瀨の花よりも紅葉よりも。戀しき人はどれ〳〵見たいものぢや。所々お參りやつて。疾と下向召されよ。科をばいちやが負ひ參らしよ。しをらしや。見れば五色の綾の竹。綾の襷もえ。君と我二人。緣を結ぶの常陸帶。天津少女は誰が袖ふれし姿よし。驛路の鈴振れば鳴りもよし。いえい〳〵〳〵十二の子寶揃へて〳〵。さつさ時雨か鈴の音か 合へ日本めでたい春日の山は三笠よいやさ。待てば甘露の日傘。月の暈程開いた〳〵。秋はなほ紅葉笠。それ〳〵それぢやいの。誠に鵲の橋を渡した〳〵。解けぬ思の戀もあるに。數々の文にわしや騙されて。忍ぶその夜は闇こそよけれ。こん〳〵來ぬ夜はつん〳〵面憎我一人。枕片敷き夜もすがら 合へ枕並べてさんさぁ待つ夜は稀に。逢ふ時ばかり可愛〳〵と騙して置いて。憎や鷄まだ宵ながら。後朝告げて。ほんに憎いぢやないかいな。憂やつらや〳〵。空も懷し雲の波。伽鳥飛び交ふ雲の袖。駈廻り翻す少女子の。聲も妙なり東歌。合へ樣は天人なそれとんとろり。少女の姿雲の通ひ路。ちらと見た見染めた〳〵。天人女郎衆の品もよく。歌舞の菩薩の遊も此處にかくやらん。さる程に時移つて。天の羽衣浦風に。棚引き〳〵三保の松原。合浮嶋が。雲の愛鷹山や。富士の高嶺幽になりて。合天津御空の霞に紛れて。失せにけり。

京鹿子娘道成寺　一一

〔解題〕通稱「京鹿子」又は「娘道成寺」。寶暦三年三月中村座に於て「男伊達初買曾我」の第三番目に出したもので、元祖中村富十郎が江戸下りの初目見得狂言として出した所作事。ワキ僧は中村傳九郎に市川八百藏。作曲者は當時の作曲の名手と言はれた杵屋彌三郎。長唄囃子連中は挿畫の通り。本曲は數ある江戸時代の道成寺物中で、集大成されたものであると共に最も優れたる曲で、今日普通に長唄の道成寺といへばこれを指す程になつてゐる。句切りは原本には無いから便宜つけた。

へ鐘に恨は數々ござる、初夜の鐘を撞く時は、諸行無常と響くなり、後夜の鐘を撞く時は、是生滅法と響くなり、晨朝の響は生滅々已、入相は寂滅爲樂と響くなり、聞いて驚く人もなし、我も五障の雲晴れて、眞如の月を眺め明かさん へ言はず語らぬ我が心、亂れし髪の亂るゝも、つれないは只移り氣な、どうでも男は惡性者、櫻々とうたはれて、言うて袂のわけ二つ、勤さへ只うかうかと、どうでも女子は惡性者、都育ちはすはな者ぢやえ、戀の分里、武士も道具を伏編笠で、張と意氣地の吉原、花の都は歌で和ぐ敷島原に、勤する身は誰と伏見の墨染、煩惱菩提の撞木町より難波四筋に、通ひ木辻に禿立から室の早咲、それがほんに色ぢや、一二三四、夜露雪の日下の關路も、共にこの身をなじみ重ねて、仲は丸山たゞ丸かれと、思初めたが縁ぢやえ、梅とさん〳〵櫻は何れ兄やら弟やら、分きて



「京鹿子」古版正本表紙

言はれぬ花の色え、菖蒲燕子花は何れ姉やら妹やら、分きて言はれぬ花の色え、西も東もみんな見にきた花の顔、さよをえ、見れば戀ぞ増すえ、さよをえ、可愛らしさの花娘〽戀の手習つひ見習ひて、誰に見しよとて紅鐵漿附けうぞ、みんな主への心中立、おゝ嬉し〱、末はかうぢやにナ、さうなる迄はとんと言はずに濟まそぞえと、誓紙さへ僞か嘘か誠かどうもならぬ程逢ひに來た、ふつつり悋氣せまいぞと嗜んで見ても情なや女子には何がなる、殿御〱の氣が知れぬ〱、惡性な〱氣が知れぬ、恨み〱てかこち泣き、露を含みし櫻花、觸らば落ちん風情なり〽面白の四季の眺や、三國一の富士の山、雪かと見れば花の吹雪か、吉野山散來る〱嵐山、朝日山々を見渡せば、歌の中山石山の、末の松山何時か

大江山、生野の道の遠けれど、戀路に通ふ淺間山、一夜の情有馬山、否諾の言の葉明日か木曾山待乳山、我が三上山祈り北山稻荷山、縁の結びし妹脊山、二人が中の黄金山、花咲くえいこの〱姨捨山、峰の松風音羽山、入相の鐘を筑波山、東叡山の月の顔、三笠山〽只賴め、氏神樣が可愛がらしやんす、出雲の神樣と、約束あればつい新枕、鄭に戀すれば浮世ぢやえ、深い仲ぢやと言立てて、こちや〱よい首尾で、憎てらしい程愛しらし、花に心を深見草、園に色よくナ咲初めて、紅を差すが品よく形よく、あゝ姿優しやしをらしや、さあ〱さうぢやいな〱、皐月五月雨早少少〱、田植唄、裾や袂を濡した皐月〽吉野初瀬の花紅葉、更科越路の月雪は、獅子團亂旋も時を知る、實に有難き法の庭、笙篳

琴箜篌夕日の雲に輝きて〽謡ふも舞ふも法の聲、何でもせい、ア、何でもせい、春は花見の幕ぞ懐しき、夏は屋形の船懐しよい〱よい〱〱ありやャこりやャよいとな、秋は武藏の月ぞ懐しき、冬は月見の亭懐し、よい〱よい〱〱ありやャこりやャよいとな、浮きに浮かれて第一中有に迷うた、懺悔〱六根罪障、南無不動明王〱、あゝ何でもせい〱、動くか動かぬか薩謨三曼多嚩日羅、これや動かぬぞ、眞言秘密で責めかけ〱、數珠のありたけやつさらさ〱、旋多摩訶嚕遮那、何のこつちやえ娑婆多耶吽多羅何のこつちやえと祈りける〽謹請東方青龍清淨、謹請西方白體白龍、一大三千大千世界の恒沙の龍王哀憫納受哀憫頻んの砌んなれば、いづくに恨のあるべきぞと、祈り祈られ飛上り、御

法の聲に金色の、花を降らせしその姿、げにも妙なる奇特かや。

金谷丹前　一二

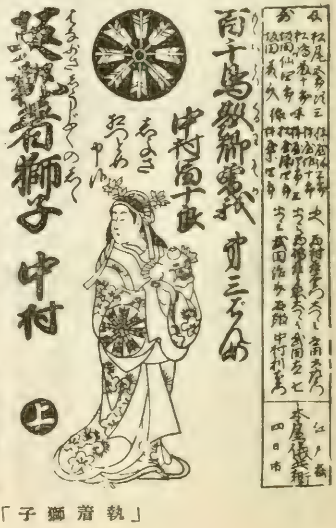
〔解題〕實暦三年の作と言ひ傳へられるが作曲者不明、又芝居で用ひられたものかと思ふがそれも分らぬ。初代荻江露友がこの詞章を取つて荻江節に作曲し、今では同派の一代表曲となつてゐる。

二上りへ春雨の降るは涙か〳〵櫻花、散るを惜しまぬ 合へ人やある 合へ月も木の間に木隱れて、花は匂へど遠山櫻、何をたよりに降る〳〵雪の、池の水の東頭は風を追うて衢に開く、籬に通ふ錦木の。思うて居りやこそ恨みながらも顔見れや嬉し、ア、いつかさて、女への十五夜の月を、〳〵、こゝにて眺夫連立ち往なう〳〵と思うたに、われめ、ながめ明かさん。へその更科の月が思をねん〳〵寢取られて、ア、朝まには劣らじ、戻ろやれ、しやなら〳〵だき明日の夜も、昔語と名に立ちしと。へ色の村田の中將も、戀にはやつす徒歩でやれお迎ひに 合へ今は金谷も入相

英執着獅子　一三

〔解題〕通稱「執着獅子」。實暦四年三月中村座で「百千鳥艶郷曾我」の第三番目に元祖中村富十郎が演じた石橋の所作事。作曲者は杵屋彌三郎。この長い曲が全部三下りで通してある。長唄囃子連中は揷畫にある通り。

〽花飛び蝶飜けども人知らず〽我も迷ふや様々に、四季折々の戯れは、蝶よ胡蝶よ、せめて暫しは手に止れ、見返れば見えつ隱れつ羽を休め、姿優しき夏木立〽心盡しのな、この年月をえ、何時か思の晴るゝやら、心一つに諦めん、よしや世の中〽短夜の夢は文なしその移り香の憎て手折ろか主なき花を、何のさら〳〵〳〵、更に戀は曲物〽露東雲の草葉に靡く、青柳の絲しをらしく、二つの獅子の身を擬でて、頭をうなだれ耳を伏せ、花に宿借る浮世の嵐、彼方へ誘ひ此方へ寄りつ、園の胡蝶に戯れ遊ぶ、己が友呼ぶ獅子の駒〽花にうつらふ戀の胡蝶の舞の袖〽戀すてふ比翼連理の可愛らし〽大宮人の庭櫻、檜扇翳す緋櫻の、地主の櫻や瀧櫻、月の影さへ明石潟、人丸櫻袖硯、筆の命毛墨櫻、誰が見櫻や憎からぬ姥櫻花櫻〽名取りの里に彈く三味の、手毬櫻の彈みよし、思染めたよ絲櫻、君の名のみ菊櫻、二人が戀の山櫻、祈る誓も伊勢櫻、色も變らぬ紫の、江戸櫻家櫻面白や〽時しも今は牡丹の花の、咲くや亂れて散るは〳〵散來るは、散るは〳〵散來るはちり〳〵〽散りかゝる様でお愛しうて寢られぬ、花見て戻ろ、花には憂さも打忘れ〽人





「執着獅子」初版の表紙

目忍べば恨はせまじ、爲に沈みし戀の淵、心からなる身の憂さをやんれそれはく〵え、誠憂やつらや〵朝な夕なに映す鏡のよい金性と、私は水性でお前と深い〵それを疑ふ事かいな、さらりと如にやらしやんせ、柳に〵やらしやんせ、思廻せば昔なり〵牡丹に戯れ獅子の曲、實に石橋の有様は、笙歌の花降り笙笛琴箜篌夕日の雲に聞ゆべき、目前の奇特あらたなり〵暫く待たせ給へや、影向の時節も今幾程によも過ぎじ〵獅子團亂旋の舞樂の砌〵牡丹の英匂滿ち〵大筋力の獅子頭、打てや囃せや牡丹芳〵、黄金の蘂現れて、花に戯れ枝に臥し轉び、實にも上なき獅子王の勢、靡かぬ草木もなき時なれや、萬歲千秋と舞納め〵獅子の座にこそ直りけれ。

風流妹背の柱建　一四

〔解題〕　通稱「柱建」。寶暦四年十一月市村座顔見世狂言「けいせい淺草鐘」の第一番目に出した柱建の所作事。作曲者杵屋新右衛門。飛騨の工匠市村龜藏、玉よの姫中村粂太郎。長唄松島庄五郎・同庄次郎・同幸次郎・同重五郎、三絃杵屋新右衛門・彌十郎・忠次郎・西川億藏、その他囃子連中。

〵やんれかつかれ。かゝれ引綱。頼む戀鷹。小拍子揃へて。川波木遣の水揚げ。今日吉日の初番に。浮々にぎ〵觴しのめでたの。顔見世。つらりと祝ひ納めた。〵そも番匠の出立は。黄金きつと立派風。一際優れて。愛敬ありけるあらしこ鉋。素袍羽織懸烏帽子。烏帽子引掛けしやんと召されたく〵。〵さて頭梁の大樣に。然し戀には濡れ衣。俺と其方は。手酌相酌。抑への手許。てうどのみよきかんな、仲を引切りく〵く〵笑ひ上戸の口すさみ。向ひのや小萬女郎わいの。鐵漿を附けたよサア、いよゑ、比翼枕にこのく〵く〵よいこの茂れ松山さゝんさの。いとも畏き詔。佛閣寶所の柱建。手斧始めの潔く歌に和ぐ大内の。宮も藁屋も戀の歌。法には懸魚蛙股。水を

象る虹梁のくひなき事工が家の口傳な　へたが誠より神樂月。豊の祓の神の子　した　ウタへ御代の盛りはなハフ棟造。り　亀蔵粂太郎セリフ　へそも佛閣の礎には四天の柱を名附けたり　謠へ毘沙門持國。增長廣目。須彌の四州を象つたり。亀蔵へ中央の柱をば本佛本くわをどつかと据ゑ　亀へ右に金色　粂へ左に赤色　二人へ二本の柱を太く立て福壽圓滿大黑柱　粂へ延命小袋これものにかまいて　亀へ打出の小槌を振上げて　二人へ天長地久と打納め　謠へ天長地久と打納め〳〵　ウタ

御子町〳〵の竈の清め。高天の原の神神樂　ウタへやんれ面白や荒神の。神の御前に松植ゑて。松諸共に氏子繁昌へあんもしろや荒神の。御釜の前で味唱すれば。味噌諸共に旦那繁昌え。ウタへあんもしろや鰶や。小鰭もよいものじや赤鰯に鹽鰹もうまいものぢや。河豚汁は暖つてうまいものぢや。打てば響く神樂の太鼓。羯鼓焙烙はや

中門樓閣男女皆充滿袖を列ねて。列ねて袖を。賑ふ都。繼は世界に誰が種蒔き初めて。おゝそれ〳〵〳〵。それが定かま定か。二人比翼の初枕。妹脊わりなき、女夫合へ柱の數は三千三百三十本。眞柱。小柱。見附柱。敷居。鴨居も水を湛へる伽藍組立て。百萬歲の槌の音。合　しつこい丁々長久と。御代の榮ぞ潔き。

門出京人形　一五

〔解題〕寶暦五年九月十八日から市村座興行の「蟬丸都尾花」の第四番目「夕霧阿波鳴渡」（常磐津文字太夫淨るり物）の次に出した、水仙丹前、槍踊、傾城道行、花笠踊、猩々の亂五通りの所作事の外題。これは中村粂太郎京上りの名殘狂言として出したもので、十月十日迄好評裡に演じた。作曲者は杵屋新右衛門。この中の「水仙丹前」だけは今も行はれて居る。又初代荻江露友はこれを荻江派に作曲して、これ亦現存する。長唄囃子連名は挿畫に詳しい。

丹前へ水仙の花の姿や若衆振女子なりけり室の梅合〳〵。あら面白の景色かな。山も色めく花紅葉。ちら〳〵袖に。袖にちら〳〵散る紅葉情もあらば。ちよと一筆合かき紅葉〳〵候べくかしこ。若しやおこゝろお心。心變らず。私や薄紅葉。實に戀は曲者。男出立の徒風に。しやん〳〵しやんとこぎりめに帶引締めて。とゝんと粂太郎セリフへどつこいとゝんと粂太郎セリフへどつこいとゝんと殿樣。殿樣事しに。長い刀に。長脇差をまあ。十文字にぼんじやりと。差してしこなし廓通ひハアしをらしや合君に逢ひたくば合毎日さうして通はんせ。さりとは。えゝどうぢやいな。忘るゝ隙もないわいな合戀は樣々あるが中にさ。分けて戀路は逢ふ戀。待つ戀。忍ぶ戀。我が戀は必ず今宵は合點か。合點〳〵。其方も合點。我らも合點。

合圖の手管呑込んだ。えい〳〵えいやつとも手を打ち合勇み勇んで。廓大寄合槍踊へ振れ〳〵振込めさ合振込めさお先を揃うてこれはとさありやんりやゝ。こりやんりやゝ合勇んでさ合進んでさ合行列揃へてぼつ立てろ。行くも。やれさて通ふも忍の亂れ風が吹くやら戀風が合連れて合連れてさつさ。落ちよものさつさ我が里の湊眺めん



「門出京人形」正本表紙

えいやらさらさ。〳〵とゝんとゝん
とこの身を。投げかけ。揺りかけしと
とんとん。とん。しとゝん枝垂柳の。
ほつそり坐り。黒繻子の帯合〳〵きり
りとしやんと〳〵結び締めたよ。やれ
さてなう。花の九重
道行へあれハア御覧ぜよ都路へ。今日
思立つ旅衣。花の東を立ち。出でて日
も行先の空遠く。裾はちらほら。ちら
ほら裾は。紅裏小袖ぞべり〳〵と。伊
達らしやハア懐しさよ磯に合鳴く千鳥
合明の別のつらさを告げてちり。ちり
〳〵や。ちり〳〵。ちり〳〵や。ちり
〳〵散飛ぶは合〳〵番離れぬ。川千鳥。

ハアしをらしや
笠の段へ見渡せば。月の鳴川は流も合
清う面白や新更科の。月は合一合入合
月の合猿澤の月よの。嵯峨の月よなほ
〳〵合廣澤の月花山の。月石山の月姨
合捨の月今宵昆陽野の。月は合松島の
月須磨や明石の合月の名所や。寄來る
波の合宮島の月合更科の月合景色は合
盡きじ合不破の月來て三井寺の月のよ
い夜の東に名高き武藏野の月合四方に
照らすや月の笠。來て見よかしの紅
葉笠
猩々亂へ月の紋日に。月待ち遊ぶ下戸
も上戸も三つ盃で。重ね〳〵し八重九

重へ老せぬや薬の名をも菊の水。盃も
浮み出でて友に逢ふぞ嬉しき。又君に
逢ふぞ嬉しきへ戀と聞く〳〵猶聞くに
付けても。樂の謡へ理や白菊の着綿
を暖め。酒をいざや進めん唄へ蘆の葉
の笛を吹き謡へ波の皷どうど打ち唄
へよも盡きじ〳〵萬代迄の竹の葉の酒
酌めども盡きず。飲めども變らぬ秋の
夜の盃。謡へ影も傾く入江に枯立つ足
許はよろ〳〵と弱り伏したる枕の夢の
醒むると。思へば泉は。そのまゝ。盡
きせぬ宿こそめでたき唄へ盡きせぬ宿
こそめでたけれ。

今様四季三番三　一六

〔解題〕通稱「さらし三番叟」。寶暦五年十一月市村座顔見世狂言「樸樕峠吉例相撲」の第一番目に瀬川吉次が二の宮の役で勤めた所作事。作曲者は杵屋忠次郎。長唄は松尾五郎治・松尾庄次郎・幸次郎、三絃杵屋忠次

郎・錦屋總治・西川與藏、囃子連中。

へ君が代は。千代を重ねし岸の松 合 梢梢に巣籠りて 合 鶴の羽を伸すそよや 合 どんとゝ。鳴るは瀧の水。冷々さらさら。鮮に。浮んだりや へ天が下戀と情は裏表。惚れて見さんせ愛しけれども堅御座る。止しやれ浮名の立田川。流も敢へぬ紅葉は。絶えず紅葉。絶えずとうたり。ありうどうあり。在原の。業平様にも負けやせまい。あゝ。負け

やせまい狩衣の。姿人は容事よなう 徒や 鈴囃 へ鳴ると鳴らぬは袖振る手の内 合 どうぢやえ 合 締めてしやんこえ。綏めてにこ〳〵 合 逢ふ夜。逢はぬ夜千早振 合 神の昔は二柱。天の岩戸を開くや。梅の見事え。花の姿のいとしらし へ春は萬代。花のさん盛りは 合 吉野山。御室の御所のよいさん櫻群集の中を北山稲荷。山の初午 合 ごんせ〳〵

夕涼み。鴨川の。川の瀬濡れにぞ濡れし濡るゝ小女郎小娘伊達。者と褰めては。それ。それ〳〵と。袖を引く へ秋は野山の色附く紅葉。枝にさりとは鹿も焦れて妻戀ふる 合 さりとは〳〵ほんにえ。思切る瀬と切らぬ瀬と。底の冷い雪の夜やさりとは〳〵ほんにえ。さをなぐる間の寄るべなき。

雛鶴三番叟　一七

〔解題〕 寶暦五年の作と傳へらる。作曲者未詳。長唄の三番叟中では前曲と並んで古いもの。

謡ガカリ へとう〳〵たらり、たらり、たらりあがりらゝりどう 唄 へ所千代迄翁草、菊の四季咲式三番、可愛らしさの

姫小松、木蔭に遊ぶ鶴龜も、座本の名にしおひ茂る、竹は櫓の幕の紋、御贔屓頼み揚幕や、とんと居なりにこの舞

壽、我等も千秋候う へ凡そ千年の綵は二つ枕に結んだり、又萬代を掛けし契は、水も漏らさぬ仲川に、橋を渡す

は何と言うたらよかろやら、つい言う〳〵悦ありや有明の、月の出潮に靑やほんかいな、逢ふとは嬉し、しんぞて言ふ樣に鳴るは瀧の水、絶えず逢瀨木が原の、波の聲々打つや鼓の松吹こちや嬉し、四社の御田の苗代水に、を松の葉の、色は變らじ只何時迄も、く風も、さつ〳〵として澄むなり〳〵結ぶ緣の種下し、そりや木かいな、結しやほんに、なじよの翁のあだつき音も住吉の幾代經ぬらん夜遊の舞樂ぶも嬉し、しんぞこちや嬉し、サア住は、添ふも千歳仲人して、心のたけをに、拍子を揃へて足拍子揃へて、時も吉樣の岸の姫松めでたさよへ實に樣々尋ばかり、明かして結ぶ妹脊山、さて夜明の鳥飛び合袖を飜して面白やへ在の舞の曲、差す腕に惡魔を拂ひ、納むもよい〳〵よい仲同士は、天下太平國原や高天原に住吉の、四社の御前で扇る手には壽福を抱き千秋樂には民を撫士安穩、今日の御祈禱なりへおゝさえを拾うた、主にあふぎの辻占は、そりで萬歲樂こそめでたけれ。

亂菊枕慈童　一八

〔解題〕通稱「菊慈童」。寶暦八年七月十五日から市村座興行の「星合源氏車」の第三番目に出した所作事。所作は中村初五郎がこれを勤め、市村龜藏は藤井小八郎（義太夫の人形遣の名人の名のり）の役で後見の格。作曲者は杵屋忠次郎。長唄囃子連名は挿畫に詳しく出てゐる。

謠曲の「菊慈童」を飜案して俗に碎いたものである。

一聲へ千代迄と咲添ふ花の優り草、久し慈童と云へる者にて候　唄上へ峰の初の空を戀ひ衣、夜半の嵐に梳り、朝しき君の例かな、藥と菊の村の雲色深花入谷の月、七百年も昨日今日合名をの雨に髮洗ふ合ハル木の葉衣の綾錦、我しみ溪水詞へこれは昔周の穆王に仕へも彭祖と呼子鳥、覺束なくも只一人、都から染むる秋の色、菊の一夜の夢にさ

へ、思出づるも恥しや合オン實に古は　飛交ふ蝶の、二つ
ギン宮中にて錦の褥玉の床オン君が情　連れたる比翼の
の言の葉に、露の契をハズム重ね菊、愛　車、ちらりちら
し可愛も妹と脊の、戀にも遙か增　〳〵ちらり合方へ袖
鏡、おろの妻戀ふ山鳥の、徒な假寢も　やハル袂に合方へ春
つれなきを、末白菊の玉葛合人目の關　ならで　合方へ胡蝶
は越えもせで、枕の科や亂れ引髮合今　の夢か幻　オトシ　か
は深山に世を捨て菊の下雁の僅の　ギン　へ風に翼の白粉も、
オクリ便も絕えて、菊の葉末にハル書く　亂れ〳〵て絲の縺
文字の。半太夫節筆の命毛ギンガハリ切果　れや思の絆へ花に
てもオトシせず、悔む流の菊の酒、あひ　憧れ月に浮れて、
もおさへも一本菊の　ク、キへ禿菊とはま　待つに來ぬ夜は氷
せ垣の、ませた形振川竹の　ハルへ緣に　の地獄に責めら
引かるゝ名も可愛らし　上ウへ戀カンの　れ、身を切る劍は
命は初時鳥へ月の影さへ空懷しきへ二　徒に明行く八聲の
度の逢瀨は時雨の紅葉へ見ればそのま　鷄鐘、火中の焰に
まス顏に火がへ高いも上へ低いも色の　苦みへくるりくる
道へ後は互に言ふ事さへも、袖に別　〳〵日影の小車、
ナホスるゝ留木の薫オトシへ君と我とは合　我のみものや合思



「亂菊枕慈童」正本表紙

ひ顔思へば昔懐しや、初春霞秋の風、と誓文我が思合それが浮名のナ、立つき、波の鼓どうど打ち、聲澄渡る浦風
四季物狂ひと人や問ふ合人の眺も合袖ともこちや嬉し合愛し辛氣の顏見たの、秋の調や殘るらん唄ハル〽元より藥
にそよ〳〵吹く風を戀風と思はんせオや、愛し辛氣の合なん〳〵情の露や、の酒なれば、醉にも侵されず、その身
オそれ〳〵〳〵誠々合上心も曇る胸の時雨やてんと誓文我匂ひ、それが浮名も變らぬ七百餘歳を保ちぬるもこの御
閨ハル合かんならずエノエ月の夜に御のナ立つとも、こちや嬉し、散らぬす枕の故なれば、如何にも久しき菊の
座んせ、つまかえ、さんつまかえ、さがたの少女菊謡へ理や白菊の、理や水、酌めや酌め〳〵盡きせじと、菊搔
んさん戀風と思はんせ、オ、それ〳〵白菊の、着綿を暖めて、酒をいざや酌分けて、山路の仙家に、そのまゝ慈童
〳〵誠々合誠合笠で逢ふ夜はナア月のまうよ、まれ人も御覽ずらん、月星はは歸りけり。
雲面憎、愛し辛氣の顏見たや、愛し辛隈もなし、處は潯陽の江の內の、酒盛
氣の合なん〳〵情のそれが、誠にてんり猩々舞を舞はうよ、蘆の葉の笛を吹

鐘入解脫衣　一九

〔解題〕通稱「解脫」。寶曆十年三月市村座興行の「曾我萬年柱」の第二番目に、四世團十郎が惡七兵衞景清の亡魂で演じたもので、歌舞伎十八番の一であつた。（近年左團次によつて演じられた解脫は新らしく作られたもの）作曲者は富士田吉治に杵屋忠次郎。長唄囃子方の連名は挿畫の通り。本曲の原據となつたのは寛保四年（延享元）正月中村座興行の「碩末廣曾我」の第二番目大詰に市川海老藏が文覺上人、瀬川菊之丞が傾城小紫で演じた「大蛇解脫物語」であらうとの說もある。（歌舞伎十八番考）

吉次露唄へあら恨めしや我は宵の稲妻。果敢なく消えし身の上を可愛と思うてくれもせで。嫉しき人の心やな合へ目に見えねど烏羽玉の闇路に迷ふあだし野の。戀しき人の見やば恥かしこの姿合へ聲ばかりこそ松の風梢に殘る空蟬の。も脱の衣打被き合へありしその夜の徒契り思出すもあぢきなや合三ノギンへ寐ても醒めても否諾のないは合どうちやいな〳〵待つ甲斐もなき宵々宵月夜何處やらしよんぼりと可愛らし合コド

りへ垣根傳ふや朝顔の。花の邊を避ぎて吹け合横雲の惱いこつちやにえ辛氣〳〵其處を嬉しや吹拂ふ。花の姿の怖しや合セメ思ひ知らさで置くべきかと聲はそのまま夕嵐合形に殘る薄衣の。怖しかりける次第なり。



「鐘入解脫衣」正本表紙

劍烏帽子照葉盃　二〇

〔解題〕　通稱「劍烏帽子」。寶暦十年十一月市村座顔見世芝居「梅紅葉伊達大閂」の第二番目に演じたやつし三番叟の所作。役割は、瀬川錦帽子實橋尾彥宗本名餘五平大將維茂市村滿藏、鳥の海彌三郎坂東又太郎、郡内兵衛有友澤村大次、長唄富士田吉治・坂田仙十郎・岡田平次郎・同市十郎、三絃杵屋忠次郎・同彌三郎・西川億藏、囃子連中。

和歌山ガカリ へ思ふ心のあればこそ。アド のアドの太夫殿のお顏の色がほに出た。今 穗に穗重ねてめでたうこそは。ヲイ候。翁カヘシ 今日の御祝儀を。舞うて折添へ寒梅の。白きは翁翁草菊の ギン 葉守の神ありて モツ 霜にも負けぬ。花なれや 合 花と名ざすは櫻と云へど。合カンアタル 冬の花には何々ぞ 合 水仙山茶花枇杷の花 合 春待ちかねて。鶯の。三番叟片 イロ 言ながらこの尉が。おさへたく この箱を 合 外へはやらじと遣水の 三派カゝリ和歌山 音もとうたり絶えずたうたり。カゝリ 絶えずに來るのがアタル 誠

の心。拍子 此方に如才はなけれども。其方の心に一物が。ありさうな口說するのも野暮らしい 合 和歌山 聞かずにめでたう元の座へ 合 お直り候へ あゝらやうがましや此方こそ。拍子合 段切 千秋萬歲萬々歲と謠ひ囃して舞ひにけり。



「劍ゑぼし」正本表紙

柳雛諸鳥囀　二一

〔解題〕 寶曆十二年四月、市村座「殘雪槑曾我」二番目大詰に出した所作事。うしろ面・鷺娘・傾城瀬川菊之丞、布袋市村龜藏。長唄はやし連名摺書に詳しい。この中「鷺娘」と「うしろ面」が名高い。この時所作の度毎に舞臺の廻る裝置で、これが歌舞伎の廻り道具の始めであるといふ。

第一 鷺娘

大鼓唄へ妄執の雲晴れやらぬ朧夜の戀に迷ひしオトシ我が心 設粋へ忍ぶ山。ハル口説の。種の戀風が 合へ吹けども傘に雪持つて。積る思は淡雪の消えてはかなき戀路とや タヽキへ思ひ重なる胸の闇 合へせめて哀と夕暮に。合 ちら／＼雪に濡れ鷺のしよんぼりと可愛らし 合へ迷ふ心の細流 合へちよろ／＼水の一筋に。恨の。オン 外は白鷺の水に馴れたる足取も。濡れて雫と消ゆるもの 合へ我は涙に乾く。間も。袖乾し敢へぬ月影に。忍ぶ。その夜の話を捨てゝ 合上へ縁を結ぶの。神様に。取上げられし嬉しさも。餘る色香の カンオトシ 恥かしや 合へ須磨の浦邊で鹽汲むよりも君の心は取りにくいさりとは。實に誠と思はんせ 合へ繻子の袴の襞取るよりも。主の心が取りにくいさりとは 合 實に誠と思はんせ 合 しやほんにえ 合へ白鷺の。合 羽風に雪の散りて。花の散り敷くへ景色と。見れどあたら眺の。雪ぞ散りなんへ雪ぞ散りなん オトシへ憎からぬ ホソリへ戀に心もうつろひし、花の吹雪の散りかゝり。拂ふもユリ惜しき。袖笠や合ヲドリへ傘をや 合へ傘をさすならば。てん／＼／＼日照傘 合へそ



「さぎ娘」正本表紙

れえ〳〵差しかけていざさらば。ハル花見にごんせ吉野山 合へそれえ〳〵匂ひ櫻の花笠 合へ緣と月日の。廻りくる〳〵へ車傘。それ〳〵〳〵さうぢやえへさうぢやえ へそれが浮名の オトシセメ 端となる 合へ添ふも添はれず剩へ。邪見の刄に先立ちて。この世からさへ劍の山 合へ一じゆの内に恐しや。地獄の有様悉く 合罪を糺して閻王の。合へ鐵杖正にあり〳〵と。等活畜生衆生地獄。或は叫喚大叫喚。修羅の太鼓は隙もなく 合へ獄卒四方に群がりて。鐵杖振上げ鐵の。合 牙嚙み鳴らしぼつたて〳〵 合へ二六時中がその間 合へくるり へくるり へ追廻り〳〵つひにこの身は ハルひし〳〵〳〵 へ憫み給へ我が憂身。語るも涙なりけらし。

第二　うしろ面

へ一念他生無量業 合へ佛の誓有難や ある ヨドリへ此處は待乳のな へ山中なればさましや我ながら 合偶々娑婆に生れ來 へ筆にや事缺く硯墨や持たず 合ウハギン 若て。人を僞る事を ハル のみ 合上 憂き業しも忘れずお尋ねあらば 合森の木蔭にとする畜生の何時か カン 流轉を脫るべ この身を寄せて。やがて逢はうと言ふし 合なまうだ〳〵南無阿彌陀。打つや て給もれさ。姿恥し オトシ なつかしや鉦鼓の 合 殊勝さよ。聞いて佛になりたかろ 吉次へ似たかなう オトシへ水鏡へ映る姿も恥しや ナホスへ我は化けたと面影を。それぞと悟る。火の聲。ぞつと身に染む 合鳴子風 吉次鼓唄 へ寒き へ夜嵐 ハル へ身にしみ〴〵と野寺の へ花の緣のかの間に合をぞ。へ畦道細道合鐘に憎や枕を驚かす 合ハル いや〳〵 廻れ〳〵。くる〳〵〳〵。鳥の羽音にの惡戲や。里の童が石投を。手々に 鳴子の繩に へひらりと へくるりと。腰合擲つ强者 ウタ へ辛氣辛苦のくが御座 をしなへて踊り舞うて往なうよ。我が



「うしろ面」正本表紙

故。郷へ歸らん合へ谷峰しどろにくるりくるりへ姿見紛ふ草隱れ。

第三

上　戀情

へ花と散っても消え殘る。雪に足駄の跡もなく合迷ふ心に慘やつらやさりとては。思ひ暮せし涙川合流の身にも始から。ほんに誠を盡した私が心も知らず合他所に色優す花眺め。そして待たせてそれ／＼／＼その顏で。無理な事言て腹立てさんす合憎い仕樣ぢやないかいな。合私ばつかりが調つても。ぴんとさんして彼方向き合宵の口説も曉の別に合直る酒事もレイセイ差いつ差されつおさへの手許合ほろ／＼醉の氣嫉顏。ナホヘ言ふも恥かし又言はぬのも。幸氣心の一筋に合お前と私がその仲は合神樣や佛樣とが世話燒かしやんす仲

仲を。隔てられたる襖さへ。明けて言はれぬ浮世ぢやえと。唄ふも奥の騷ぎ唄。暫しは憂さを忘れ草。

下　花笠踊

音頭カヽリへさても見事に揃うたとりなり合着連れて連れた花笠や内ぞゆかしき花の顏合どれが姉やら妹やら。よう似た／＼さつてもよう似たしやなしやな合どうともかうとも言ふに言はれぬ風俗やへ鎌倉風の今樣を合又和ぐる私語九十三騎の大一座。大磯小磯化粧坂。名ある女郎衆を引寄せて合思ひ／＼に差す盃の。まだ耳馴れぬ女郎の合名も菊川の菫草。濁らぬ戀を揚卷の合歌川小式部半太夫。この面白きその中に合虎さん一人御座んせぬわけに合心もすまぎぬのいと繰り返す口々に合和田さんも心づき。二度迎に遣手迄。行けど返事も白玉の。さらば吉野と言捨てて。朝さんを使に立てて。今や／＼とその返事。松坂越えてこれを來て見よかしのえヨドリへ今宵忍ぶと合さんさくる文枕。首尾に逢ふ夜は袖枕。合二人寢勝ちに引寄せて。鼓枕の縮めつ緩めつ合長枕合轉寢枕のしみ／＼と。交す枕の肱枕合肱枕合木は武の妹夜中へ積る思は其方も此方も物思ひ。言ふか言はぬか誓文かけて。中に誓ひし二世枕。見るも浮世の戀ぞかし

第四　布袋

へ諺に云ふ。唐ハル土の。へ合ゼンガハリ櫻と問へば。海棠や。ハルその花の香はすトン和國迄合隱れなむをみ經山寺合布袋和尚の朝勤め。木魚の音も世にハル高き合山々越えて谷水の。清く／＼も澄める。法の道。合佛の教雨の空合へ山時鳥雲隱れ。悟れば元の土塊や。土

に巣をくふ燕の。口を擴げて寶を見の移らせ給ふその家に。愁のうの字あれたで歩きにくう御座る合歩き了せてせんへとらのナアとらのナア。とうぎらがねの。ハル幸に寶を米藏や。先づ一息つけば口が乾いてならぬ故合びつんとうざんとうすいとうりうとうがん大黒は見苦しい。そりや何故ぢや。はくりしよつくり辛氣な合オトシ淡淡世界のとうけん合とうみんがとうくわのて合くどいぞ開いて見や。合拍子舞背がヲドリへさんさそれ〳〵〳〵合打つや太盛りを見んとて。ハル群衆んすんぺん低うて色黑く合辛氣笑止な形ぢやえ鼓のてん〳〵つく〳〵どんがらり。拍するといな合するといなハルへ稚な踊へそれなら此方も言うて見よさあ言う子取り。合聞けば音もよや。たん太鼓のに浮つかれ浮かれてにこ〳〵。子供こて見や。先づお惠比壽は不精者。そり面白や合朝疾く起きて合ハル起きて南無いく〳〵。ハル持ちやそびやろぞ。引けや何故ぢや合其方もくどい開いて見や阿彌豆腐合豆腐合悟り開いたへ潔や。や〳〵この綱へ一に倭やがら〳〵小合波に若蒸す岩に乘り。ハルあの腥ちやつぱ小太鼓笛竹の。ひいやひへお槌。ハルぴんと跳ね鯛釣竿つけて。中い魚抱いて合ほんに卑しの形ぢや。稚さえ〳〵。合へ悦び笑顔や合富貴自在ギン渡す浮橋二神の。合中にお顏も西な遊びもしをらしやへ水晶のな〳〵數の。福和尚。息災合延命。子寶のへ壽の宮。惠比壽の業はわだつみの合岩に珠の暇は子供に浮かれ合腹雀の合ぼきせぬ御代こそ。賑はしき。腰打掛け鯛の。鰭ます合ゐます大黒天つた〳〵合腹が大い山坂大儀。股が擦

初咲法樂舞　一二

〔解題〕通稱「法樂舞」。寶暦十三年春市村座「封文榮曾我」の第一番目に出した所作事。白拍子みどりの前中村かしく。長唄富士田吉治・本村源次郎・錦屋平治、三絃錦屋惣治・西川億藏・淺川藤七、囃子連中。

鼓唄へ大和歌和ぐハル風俗何時しかに。烏帽子狩衣着そ始め合舞ガカリ翳す袂の舞の曲カンへ錦の袖や。オン薫るらん合花のカン顔。ハルしをらしく合出立ちて合橋掛りの欄干を合しと〱歩む柳腰。實に旃檀は二葉より。直なる御代ぞ。久しけれ合へあゝ面白の春景色。眺は盡きぬ君が代の合幾千代かけて色はギンガハリ變らじ松の葉の。末も久しき。例かな。例に今は有明の合夢ばかりなる手枕に。君と。我とが。浮名や立たんあゝ辛氣さりとは合へ今宵忍ぶと。約束あれば更けて。合ハル妻戸の音づれは合誰そや誰ぞとせかれても合ほんに嬉しい憂き世の中よ。二人寢る夜は戀の花。散らすな嵐。花の邊を避ぎて吹け合へ開くや梅の。花扇合ちよつと見扇合ちらり合ちらり合散りかゝる花の吹雪は憎らしやハルへ拂ふ扇のひらり合ひらり〱〱くる〱〱〱合ハル扇車の合品よく廻れ。水車カン淀の川瀬の合水も濁らぬ君が代を合祝ひ奏づる。ハルオシ舞扇へ魚と水とはさんさ仲よい筈よ。それ何故に合何時も離れぬ仲ぢやもの。そんれも誠にさうぢやえ合へ花と嵐はさんさ思はぬ仲よ。それ何故に合何時梢に障るもの。そんれも誠にさうぢやえ合しをらしやへ傘を差すなら合春日山合これも神の誓とて。愛し殿御と合相合傘のしつぽりと合雨に濡れよたら日和に開く詞へそれえ〱へ實にもさうよの。やよ實にもさうよの實合にオトシまことへ岩に遊ぶや萬代の合ハル龜は水上清むなる太鼓地へ鶴の羽重ね千秋の鶴の羽重ね千秋の枝を鳴らさぬ御代なれや合ハル萬歳樂とぞ舞納む。

紅葉傘住吉丹前　二三

〔解題〕寶暦十三年十一月市村座「四海濤和太平記」に市村羽左衛門と吾妻藤藏で演じた丹前所作事。初代荻江露友が取つて作曲し、同派の唄ひ物となつた。初演の時は富士田吉治がうたつたと思はれる。

へ千早振合投節神を勇めのナホス御祭り外記オロシ　赤前垂に對の笠合皆一ナホス様に合揃うた〳〵紅の合色も變らぬ朝日影合裾打振ふ朝風の靡き榮ふる今日の神事えへ傘をや合傘をさそならえい〳〵合春日山合これも神の誓とて人が傘をさすならエイ〳〵我も傘をさそよ實にもさうよのやよ實にもさうよの實にオトシ誠合小松の蔭の下露に餘所の袖迄しつぽりと濡れて濱邊の濡れ鷺か沖に鷗が合友呼交す合はんま千鳥がちりやちり〳〵ちりやちり〳〵ちり〳〵ちつとも漕ぎ出せばなう合唐艪の音がしとゝんとからころ〳〵からころりとも賤が手おりや布引の瀧の白絲打晴れて天津岩戸の神歌を謡うていざや淸むべしヲドリへ濱の眞砂の合數々に何と波に身を焦す合その丈夫が增鏡波に合なりたや磯打つ波に合女波男波の濡れに濡れたる仲ぞ懐しあら羨し如何なれば片山里に住吉の踊りつ舞うつ喜びつ住吉様の三ノギン岸の姫松めでたさよへ筆取初めて〳〵戀と云ふ字を覺えさせたいさりとはさんさ〳〵合墨と硯はよい仲人の思ふたけをば知らせたいぞえさりとはさんさ〳〵筆に言はする戀の道一セイカヽリへそれ雲見る時は憂苦を思ひ花眺むれば形を慕ふへ桃李芙蓉の紅に合楊柳の細腰と合その詩の色事に疎き浮世を大和なるへ三十一文字に合和ぎて戀と情のその中々に口說の種を卷羽織寛濶好いて當世に合日本唐土摑み差し合大小さすが傘の天が下取る希人といはねどそれと三重の帶合美し色に映ろふ紅葉合梢照增す村時雨一振り合搖りかけ振れ〳〵〳〵濡れに賢き戀奴合笠に守を掛卷くも忝ない〳〵隱れ御座らぬ花の顏見世合江戸市村の御贔屓を便に受けて水仙のしやん〳〵しやんと姿は男らしいや男らしきつとしてぢつとしてぢつと締めたる風俗や三下リ吉次カヽリへその面影の暫し間も。忘れかねたる初戀に。合中ギン恥しい事言はるる物か假名のほの字も穗に現れて引。木ユリカヽリひとり思に木枯しの。風に便の音信も。鳴いて。合さ渡る浦モッスカシ千鳥。ナホルウタ幾世寢醒めぬ獨り寢も。誠戀路の新枕。鼓唄へ凡そ心なき女子でも。履ける足駄の端に。ギン作れる笛のその音には。必ず鹿もクルフシ夜の露。中ギン葉末便に結ぶ心の。戀すてふ詞へさつても見事なお女郎様。雲の鬢面初霜に。くわつとツキユリ笑ひし廿日草。詞それ。謠塲拍子京九重の美しき〳〵。御室の。合御所の八重。一重。語るも見事音羽山。へえゝ何ぢやいなこちや花よりも。お江戸所縁の濃紫。染まる色

かとアタル寄添へば。へちよとお邪魔に〱形振も [illegible]セリフへどうともかうともウタへ言ふにナ言はれぬ色香もありてなんへお供に取附き大手馬場先玄關前羽左衛門へ來いよないく〱なん〱情の戀の品合雨にも雪にも通はんせ戀は曲物寶に戀は曲物今の世迄も世の中の〱風は避ぎて吹け今吹く風に艪を押立てて合漕げや船長唐艪の音が合やつとんと合さつと立つ波濱千鳥合搖られて揉まれて合ぱつと立ち候びゝくり〱しかんかいな合そつこで揃へてさあ振れさ合殿様お召物何色に染めうぞ濃茶煤竹はんな色〱合ちやつきんはかまちやくしてきり〱ともこぎりめにてんと〱合あつた物ではないよさ合潔やヲトリへあれ見さいな合結ぶの神の仲立合ほんにおせいな縁結び合出雲八重垣妻定めあるは嫌なり思ふはならずそれぢや〱その一夜戀の始はすトシ恥かしや面白の色音妙なる神樂月合花の丹前顏見世狂言朝から疾うから永當〱黄金滿ち來る寶の市村千秋萬歳とこの橋櫓太鼓の音は久しき。

玉櫛笥寢鐘　二四

〔解題〕 寶暦十三年十一月市村座「四海濤和太平記」の第二番目に出したもの。奴鱗平坂田半五郎、龜壽丸市村吉五郎、いぬゐ御前吾妻藤藏。長唄富士田吉治、三絃錦屋總治・西川億藏、鼓弓錦屋半八。これを初代荻江露友が取つて作曲し、今は同派に傳へられる。

二上りへ髮取り二ノギン上げて解き櫛の合中ギン千々に涙の梳き櫛も言ふに言はれぬハル根なし草。合ハル解けぬ思を三ノギン後や先二ノギン鏡はちゝの顏と顏可愛合可愛と夕暮れの中ギンセツ鐘は惜みてヒロヒ四つ五つむべ山風を嵐とも合散らばギン散れかし花ならばギン雪の梢は恨むまじ。三ノギン絶えぬ涙の遣方も波に。二ノギン搖らるゝ淡路島。ギン通ふこの身の憂き別れ。胸に迫るを言殘す。トメハル盡きぬ心を返す〲も。

爪音幸紋づくし　二五

〔解題〕通稱「幸紋盡し」。明和元年正月中村座「人來鳥春告曾我」第一番目に出す。工藤祐經市川雷藏で、琴に合せて富士牧狩の陣屋〳〵の幕の紋づくしの趣向。唄中村兵藏、三絃杵屋作十郎・三郎助、小鼓西島吉之丞、大鼓田中傳左衛門。これも荻江節の唄ひ物となつた。

三ドリへ千代の春。花に移ろふ蝶百千鳥　繋ぎ馬白一文字黑一文字割菱輪違花筌　手やいたら貝。淸き流の水車。くるしをらしや打出で見れば白妙の。富士　穗。花の色香も名にし負ふ庵に木瓜抱　〳〵と二つ巴や三つ巴。打つや太の高嶺の薄霞。裾の葉露のぴか〳〵と。茗荷。抱澤瀉とはなあゝ。人が三つ鱗　鼓の拍子とり〴〵。開く扇の舞鶴は。朝日輝く御威勢君を始め奉り　へ皐月下　でも。まことは立烏帽子。その折烏帽子　大一大萬大吉日と馬の乘り初め弓始旬は我々も。憚りながら櫻かげ陣屋　忍ぶ夜の手筈矢筈にいやましは。月に　め。上覽ありて各も譽を殘す富士の卷〳〵に打つ幕も　へ染色々の紋盡し釘貫　星。笠を召したか三本傘。差す手引　狩。松皮黃蓋濃。三蓋松にしやんと手綱も　く手に二つ引三つ瓶子四つ目結。網の

猫の妻　二六

〔解題〕明和元年正月中村座「人來鳥春告曾我」第三番目に出しためりやす。下女おいち芳澤五郎市。唄中村兵藏、三絃杵屋作十郎・族間勘左衛門・杵屋三郎助。

二上リ へ三年なじみし猫の妻若しこひ死なば三味線の可愛いのものよへ色にひかるゝ中繼の棹は契りのたがやさんへ逢はぬつらさはどの上駒のばちあたり へ三は切れても二世の縁思切られぬ絲卷のだいてねじめは一期忘れむ。



「猫のまつ」正本表紙

鐘櫻黄昏姿　二七

〔解題〕 通稱「黄昏姿」。明和元年正月森田座「一諷袖粧曾我」第一番目に、二の宮太郎妹幽魂で森田勘次郎が演じた鐘入の所作事。坂田仙四郎・杵屋六三郎其他長唄はやし連中。初代狄江露友によって狄江の謡ひ物とされた。

へそも入相の鐘の聲寂滅爲樂と響けども我は思のある故に眞如の月を眺め明かさんつれなき人の仕業故若木の花を散らす悲しさ熟々世上を觀ずれば 合 雲上の花の宴春の朝の御遊びに仙洞の 合 紅葉秋の夜は月に戯れ色香に茫み艶やかなりし身なれども辛へぬれば朝顔の 合 日影待つ間の思の露。恨を晴らさんその爲にこれ迄顯れ來るぞや。 カヽリ 世の中の情は人の爲ならず我人の爲 ナホス 辛ければ必ず身にも報ひの數々の 合 千束に餘る玉章徒になしたる腹立やと床退り立たり フシオトシ オヽさりながら 合ノ手 へ眉目や形や 合 ヘカン 目許にや惚れぬ 合 意にぞ諸事迷へ 合 仰しやればそれもさう。それもさう 合ノ手 へ可愛/\と 合 カンヘ 口には言へど 合 爲せる仕業にや氣に入らぬ 合 おしやれば二れもさう/\。 ナホス 忘るゝ隙もないわいなへ恨は更に盡きすまじ。思を晴さん待ち給へと寛ひ寄れどもこは如何に 合 人

人眠ればよき隙ぞとて立舞ふ樣に狙ひ　に手を掛け飛ぶぞと見えしが引被いで寄つて思へばこの鐘恨めしやとて龍頭ぞ失せにける。

乘掛情の夏木立　一八

〔解題〕通稱「與作」。明和元年七月市村座「戀女房染分手綱」興行の時、その第八段目道行として演じたもの。丹波與作市村羽左衞門、關の小萬坂東愛藏。長唄富士田吉治、三絃錦屋惣治等であつた。長唄の與作はこの時が始めのやうであるが、實は本曲はこの時に始めて作られたものではない。「戀女房染分手綱」（寶暦元年二月作）が始めて江戸の中村座で演じられた寶暦元年秋、その八段目の道行中村七三郎（與作）中村粂太郎（小まん）の所作を「乘掛妹脊小室節」と題して、その道行淨るりを佐野川千藏が語つた。この千藏は始め女形であつたが、無類の美聲で、一中節をよくし、又義太夫や豐後節にも堪能で、出語りに好評を博した。この時も道行淨るりは評判であつた。而してこの佐野川千藏こそは寶暦十年に藤田吉次郎と名のつて長唄界に打つて出で、のち富士田吉治となつた斯道の名人であつた。かういふ關係で「乘掛情の夏木立」は、これより十三年前、吉治が千藏時代に語つた「乘掛妹脊小室節」を取つて、これを多少改修したものに過ぎないのである。尚「與作」の原作及びその系統については、近松名作集上「丹波與作待夜の小室節」の解題御參照を乞ふ。

〽旅人を留むるも關 身を忍ぶ。合ギン に招くおじやれの憂き勤。愛窓出 〽跡を らり帽子に染浴衣ハシル關路は後に有明人目の關や戀の關。關の小萬もその 慕ひて。都よりツナグはる〳〵來ぬる故 の合拍子川毛の 合駒を道知邊合中ギンしや昔。ハル いろはと云ひし舞扇差手引手 鄕の ニノギン松は見知りしアタル藤浪やび んと乘つたる横田村。オクリ アミドガカリ親里さ

して行く道の。羽左衛門出 へ同じ思は跡や先。道に後れて道芝の 合 させもが露の染手綱 合二ノ中ギン 刀に替る竹の鞭 合 不思議の縁に繋がれし 小オクリ 戀の。重荷を 文七ガカリ 打乘せて 合二ノギン 輿作〳〵と招かれて 合拍子 消るなら 合 消らん〳〵せ京へ通しかよいのを乘せた 合ホソキエリ あやかり者と夕時雨。合二ノギン 千雨取ろとも馬追嫁よ夾の師走も日の 三ノギン 六月も 二ノギン 駒の手綱で日を暮すオ、しよんがえ。オトシ 昔語と形振も。へさつても此方の品者め 義太夫ガカリ 吉次 へ抱き下せば。フシ 褄からげ。カヽリ 道はか行かぬ女旅。二人 へ坂は照る〳〵 吉次 へ鈴鹿は曇る。鈴鹿も我も曇る身を スカシ へ晴らす誓は親世音山より 合 山に行く道はえいさつ さ〳〵 二上リ吉次 へ宿根八里は馬でも越すが 越す に越されぬ大井川ナアヨ伊勢は津で持つ津は伊勢で持つ尾張名古屋はしん城で持つナアヨ 三下リ へ上り下りに手を引合うて 合拍子 あの人のこれの〳〵しやんこ〳〵鈴の音。花馬揃うてのんほのんいよ〳〵浮かれて 合 〳〵三度笠。フシ 旅の憂をも忘れ草 鼓唄吉次 へ名は伊達人の輿作とて。人に知られし戀男 愛 セリフ へなんぼお前がさういはんしても男の心と ウタ へ秋の空 合 嘘を戯に言うて置きお前。故ならどうな〳〵 合 逢ふ夜嬉しきその人なれど徒しかぬお前のつれなさと。ひんと拗るも何處やらが、互に思ふ戀仲も。フシ 伊達に蓮葉に振もよし マドリ へ此方の思はく近の御見と書いて來た。來たのんし

りと命は惜しまぬ モツスカス 心から。この身はまゝならぬさりとは 合 戀の上 アタル フシ この頃絶えて文も來ぬ。合 又 風船で押せ〳〵ようかよかよかのんし 頬さの仇心 二ノギン 私が思ふ露程も。屑〳〵 ナホス へ唄ふ小唄も面白や へつい聞



「輿作」正本表紙

捨てゝ行く道も市村合里村拍子早過ぎて日影も西に傾けば合二ノ中ギン吉原雀さながらに。留むる袖を合振切つて ヒロヒ急ぐ足さへ砂道合三重ナヽリ直には行かぬ駒の足横田、川にウタトメへ暫しとてこそ休ひぬ。

花錦嫩丹前　二九

〔解題〕通稱「嫩丹前」。明和元年十一月市村座顔見世狂言「若木花須磨初雪」の第一番目に、男山の神靈かしはで丸市村龜藏、同かぐら丸市村吉五郎で演じた丹前の所作。長唄富士田吉治、三絃錦屋惣治等の一連。

へお先道具の花槍合臺笠立傘合對の挾箱見事にさ合振込め〱よいやさ合ありやんりやゝ〱よい〱〱〱顔見世へませた奴の一様に紺のだいなし挘ぢからげ合氣性で振れさ〱合朝の出掛に十六羅漢や合廿四孝は酒鹽酒鹽氣もない〱合拍子冷酒燗酒嫌ひは御座らぬ何でもせい〱よい〱よい〱〱引掛け三杯微醉うた危い セリフへ合點ぢやへ危い セリフへ合點ぢや ウタへ任せておけろのやれ〱さて〱さつても揃うた花の顔見世人ヨセガカリ吉次へ陽春のけいかは空に棚引きへ青陽の合カン色青々と海原の合三ノギンへその島臺は何々ぞ蓬萊方丈瀛洲の島に晴へ花の顔二ノギンへ可愛らしさよ當世に合錦彩る襦襠の合それにはあらぬ長羽織男とも見え又女子とも三重の帶合しやんと差いたる大小に合戀にははまる緣頭人の目貫を忍び逢ふ合三ノギン苦界の中の間夫狂ひ合嘘でも眞實川竹の合カン流の里に昨日迄勿體つけて三味線につい乗せられし二上りに合三ノギン上り詰めたる戀の山路も踏分けて吉五郎セリフへオ、冷た ウタ拍子へ雪の朝の別れ酒合仄めく顔の照添ふは三ツ拍子日の出一流振れやれ合振れやれ振つて降り出す初時雨合二ノギン意氣地に濡れし ギンカヘリ朝歸り合又惡戯のぴんとしてぴんと揉髭寛濶姿合さすがお家の四花四様合ゆるすてがしの水仙花一本ならぬ嫩振り何れ合劣らぬ風俗は幾世ます〱名を橘の花も實もある常磐木や鼓唄吉次へ變らぬ事は

いつもの戀言葉ナホスへそれを便に取る合筆の合深い淺いは合墨色に問うて見や合それが嘘なら假名で書いて見しよか合二つ文字合牛の角文字直な文字歪み文字とは君は知らずやなんく情のギンガハリ徒枕エ、合何ぞいな悋らしとニアギンびんと拗られ手持不沙汰に燻らする合煙草は憂を忘れ草口說白けて誠の仲よ合カン此方寄らんせお手枕合二人寢ろ夜の色競べオトシヲドリへ比べこしとは非筒の女合稚立から見えつ見られつ合心知れずば辯の占正しかれそれさこれさ

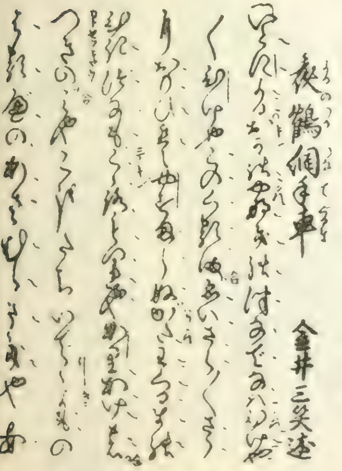
なるかならぬか言うて見さんせ問はしやんせ浮世は色の盛り眞中へ花の顔見せ西も東もみんな見に來た老若男女永當く抑せくやつさゝく合櫓太鼓の音は久しき。

夜鶴綱手車　三〇

〔解題〕 通稱「綱手車」。明和二年正月市村座「色上戶三組曾我」興行の時、第一番目四立目に山田三郎行氏本名京の次郎が一子小次郎を車に乘せて引く所作を演じた時のもので、說經風の歌調。作者金井三笑。



「綱手車」正本表紙



同上本文初頁

へ絲縒る。ギン岡の ハル 柳の綱手繩。ギンガハリ 笠 說敎オトシ 破れ扇。二ノギン 隱 供養の庭と聞くからにえいさらえいと
ハル 引けや〳〵引けやこの車。合 えい れ笠にもあらざれば ハル 親 ギン は空に 引く車引くや佛の御手の絲。ハル 藤 ギ
さら〳〵更に思は休まらぬ。ハル 片輪 て血の涙。跡に ガヽリ 祭文 殘せし柞の森の。ン 澤寺の門前に暫く車を。說經ドメ 留め
車の引き綱も。三ノギン 心纏れや有明の 合三ノギン 漏りてや袖に。ハズム 春風の ッ ける。
合 門說經 月の 合 都を立出でて。ギン 四方 ク 乾く間もなき車坂。へ一引き引けば
の春べの淺紫や東路へ。ハル 人目狹き 千僧供養。二引き引けば萬 僧 の。ツク

新そでづきん　三一

〔解題〕 明和二年正月刊行の荻江節正本集に載つて居る。精確な作曲年代は不明であるがこの頃のものであらう。上方唄の「江戸頭巾」と同文。

三下り へ人目忍ぶの。袖頭巾。モツ 浮氣 かうしてと。よすがも。合 睡い目を知
も今はほんになり。土手をしつぽり雪 らす情ない程いや增る。此方の心はさ
の驚。只一人通ひ來る何處やらの女郎 うぢやないものを。往なしやせぬ。合
衆は。可愛い男を待つわいな。好かぬ 風に柳の萎垂れて。酒が取持つ笑ひ顏。
此方がしこなしは最早ごしんにすめや 口說白けし。月の顏。
らぬさらば我等は歸りましよならんぞ
えさりとは男氣な。合 逢はばどうして

しきぞめ　三二

〔解題〕同じく荻江節正本集所收だから、同じ頃の作曲であらう。

へ積んである。迄は罪なき夜着蒲團。　に睦みて深き。深き思を呉竹の。葉末　な。合浮世ギン鴛鴦と燕は何處やら可愛
合昨夜は誰が敷妙の合枕二つを並べて　に濟。合積らば松の葉の絲で繋いで仕　い合鴛鴦にや思ひ羽　燕　は子迄なした
置いて。一つはお前ま一つは言はずと　立て絎て。交す言葉の諸翼合よしや錦　ろ仲ぢやものすさみ重ぬる。閨の敷初。
合點でギンガハリあろぞいの夜なに朝な　に織るとても一羽の鳥は厭ぢやわい

深草少將　百夜車　三三

〔解題〕通稱「百夜車」。明和二年秋市村座興行の「女夫星逢夜小町」の第一番目に市村羽左衛門が深草少將で百夜通の所作事に出したもの。唄淨るり富士田吉治、三絃錦屋總治、上調子西川與藏。

へさればにや。少將は合百夜通へと夕　ば徒歩跣足合行きては歸り歸りては。　り。嬉しの今宵や。又果しなの明日の
月の。合笠に降る雪積る雪。戀の。重　雪に降られて行くも誰故ぞや合いや降　夜や合明待つ鳥の中空は。風に鳴いて。
荷と打擲げ。涙の氷柱解けやらぬ。君　られてと云ふ心氣味の惡いと言直し。　山葛天の月。合螢の月。軒に漏る月時
の心は浮瀨川。合へ渡りかねたる砂川　同じ事なら積る雪。榻の端書百夜迄と　雨する。合袖引返し傘の。これも車
や。木幡の里に馬はあれども君を思へ　通ひしに。九十九夜にもなりたりけ　の我からとくる〱〱〱

くる〳〵〳〵くるりと振擔げエヽ立つき比叡颪傘を取られじ放さじものと。前の住み給ふ車の。許にぞ着き給ふ。
かひもなき神社。行き迷ふ身は川千鳥傘と時雨と揉合ひて。おのとはいはじ
鳴いて。立つこそ哀れなり。折節烈し苻故と。合獨言して行く程に。小町御

姿の鏡關寺小町　三四

〔解題〕通稱「關寺」。明和二年十一月中村座「神樂諷雨乞小町」の第一番に中村松江孔雀三郎妹しきたへの
役にこの關寺小町の所作。鼓唄富士田吉治、三絃杵屋六三郎・太十郎、小鼓西島吉之丞、大鼓西村小野八。

鼓唄へ白浪や漂ふ水にクル鏡山。夢かと。詞ナウ旅人何とたべぬかホ、、、
現か定めなき。思ひがけなき九十九髮ホそんなら色の踊唄。合三下り待つ身な
我が身うるさし。人日恥し。合面影のりやこそ疊算忍ぶその夜のわざくれか
變らで年の積れかし。假令命の限ある實さうで御座んすえ。誰ぞやこの夜中
とも。謠ガカリ誰は留めねど關寺の。訪に鎖いたる門を叩くともよも明けじ。
はれん身にし木枯しの果は落葉の夕日宵の約束なければ。手管も戀の習はせ
影。洛中洛外町々を只何となく立出てなり。謠地心附きて聲變り。怪しから
鼓花から食べよ人々よ。謠地物たべのず見ゆればすご〳〵と關寺の庭に歸る
旅人ちつとたべの旅人とあなたへさら有樣。トメハルフシ山田の畦の案山子よ
りこなたへさらり〳〵さら〳〵さつの。

春調娘七種　一三五

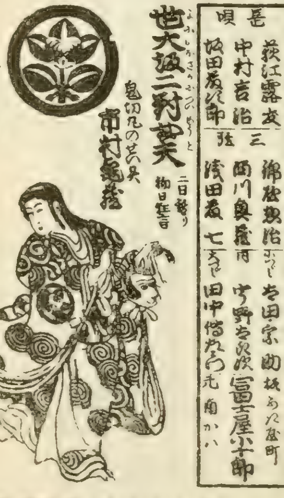
〔解題〕通稱「なゝくさ」。明和四年正月中村座「初商大見世曾我」第一番目に出した七種の所作事。曾我十郎市川高麗藏、曾我五郎市川辨藏、靜御前中村富吉、長唄富士田吉治、三絃杵屋六三郎等。

次第三へ神と君との道すぐに。神と君と〳〵と囀りてもゑばみも知らぬ雲けら　代々の例には。引くや夜の鼠の拍子をの道すぐに治まる國ぞ久しき　二上りへ若〳〵空囀いて　掛合セリフへ飛びかゝつて　揃へて七種拵　合カン　御形田平子佛の座菜つむとて袖引連れて。思ふ友達　合よは　高麗藏セリフへはて　ウタ中ギンへ氣を鎮め　上カン菘　ハル　清白芹薺七種揃へて恵方い〳〵　合ギン　仲のよいのを脇から見れて打囃し初若水の　スニフシ　若菜の御祝儀へきつと直つて　合しつたん〳〵どんがば。どれが姉やら妹やら。よく似たな　合ヲドリ　へ戀の假名文何時書習ひ誓文命らりどんがらりどん〳〵がら〳〵どんアよく似たさつてもよく似たしやな　もゝ〳〵べく〳〵と留袖。問ふにや落ちがら　ハル　から〳〵から　ハル　どんがらか〳〵行けば　合ギン　振もよし　カン　今來るいで語るに落ちる　合様は茨かわしやゆ　合唐土の鳥と日本の鳥と渡らぬ先に妓に見しよすもの〳〵　合袖引くな若きひかねて　合抱いて痛さよ何時とても誓　七種合カン　怨敵退散國土安全千秋樂〳〵人あら大膽な人ぢやえ。鼓唄ギンへ春は文命もゝ〳〵べく〳〵と留袖。問ふにや萬歳〳〵　合　中ギン　今を盛りの心の花も開梢も一様に　ハル　梅が花咲く殿造り目ざ落ちいで語るに落ちる　合様は茨かわしくる〳〵運な天天長地久萬里が外も打す敵は　皆々セリフへ敵とは　ウタカンへいゝやゆひかねて抱いて痛さよ何時とても納めたる今日の七種。や傍に鶯のホヽ、　鼓唄合方へほう法華經　合睦まじと君は知らずや瑞籬の久しき

童子戯面被　一三六

〔解題〕　通稱「めんかぶり」。　現存の正本によれば、明和四年五月市村座「世大阪二對女夫」に鬼切丸の精靈市村龜藏の役で、槍踊の所作と一日替りに演じられたものである。併し既に同一の詞章が明和二年正月刊行の荻江節の正本集に收載されて居るのによれば、作曲は既にその年迄に出來てゐたものを、更めて舞臺に上せたものかと思はれる。長唄荻江露友・中村言次、三絃錦屋總治・西川億藏等、その他囃子連中。

へとかく子供達はいたいけがよいもの　やれ／＼さてものちやおろゝとあらゝ／＼とおろゝ　／＼つくに勝るが徒に覺むれば手打ち／＼あわゝ冠り　しをらしや小猿め／＼しほの目頭てん／＼よ駒鳥雀の子　が枝に戲れ遊ぶ私踊りその尾に取付き太郎松米松たん　に取らるゝ夢を見／＼搔付き取付き引付き棹になつて縫　た守を掛けさへ避ふてふ鳥の花にくる／＼／＼／＼くる　けの守をサ守をサくるりと花を振袖徒や祭り／＼ちん　／＼掛けて參ろそがら此處迄御座れ手車に乘せてありや　れ様へぼ様／＼とこりや不倒翁犬張子猿の相撲に上つ　名計り坊様衣紋なたり下つたりえゝ／＼／＼如何なる惡　り女郎衆と寢たし戲盛りも此方の町へ御座れの張つて　それでは坊様と云れうものかそれぢや　言の葉口々に賀茂の競馬も騎栗毛赤が／＼張人形金平だんべい坂田櫻に猿が　／＼さうさんせ禿々と名計り禿馴染む　いの／＼眞紅の手綱に煽を打つてかけ三千ぶらりとさ下つて依轉びにころり　お客に痴話する目許それで禿と云はる　ぞん／＼乘りかけぞんお馬が三匹乘手やく／＼やつころりと滑らしやんななら　るものかそれぢや／＼さうさんせ今の　は一人はいどう／＼駈けつ返しつはい



「めんかぶり」正本表紙

大手馬場先櫻の花よ波打際に〱ざん ぶと寄せてはえい〱わいとつぱいひ やろのひのんほのんよ勇む春駒。

衣かづき思破車　三七

〔解題〕通稱「やれ車」。明和四年八月中村座「其名月色人」の二番目に出したもの。家主四も五もや九右衛門嵐音八、淺原八郎爲頼中村仲藏、長唄富士田吉治、三絃杵屋六三郎・太十郎、小鼓西島吉之丞、大鼓西村小野八。

鼓唄へされぱとよ スエ。一心は。鏡の面にかゝる 合三ノギン 悋氣〱と口癖に思を苦しめ妨なさで置かうかと恨の念に噤へたり。開けば直に春景色。有爲ふも 三ノギン 徒になさせじと。その瞎言力鐵の爪を磨立て齒嚼をなせば。彼一旦の有樣に。色に引かれて香に迷の數々にそれが迷の種となる 合只果敢方へ拂ひ。此方へ消え柳の絲の荊棘をふ。情ないぞや過し頃。我を仇とて惱なくも夕顏の蔓に離れし破れ車。可愛亂す亂れ髮。はらり 合はらりはら〱らしくその浮雲の稻妻に。果敢なくなと言うて暮れかゝる鐘も幽に響くなり〱。怖れ怖るゝ小車の廻る因果は苦りしその恨。晴さん爲に 合フシ 是非なく 合三ノギン 憎い〱は可愛の裏よ 合サハリ しきこの身に遣ひまとはれし紅葉の 合も ユリ。假に顯れ。來りしなり 三下リ クル 泣いて威すは又その裏よ。ほんに紅蓮の氷に打沈む 合憐れみ給へ我が憂へ花咲いて 合散る事なくば 三ノギン 世の譏かえ思ふが仲の戯に 二ノギン へ情なき身 ハルオントメ 語るも盡きぬ恐しや。中の 合主 憂は言葉の花ならじ。二ノギン いぞや恨めしや。鼓唄へ人の恨みのあるその夜すがらもくど〱と。浦の 合苦 ものか 合なきものか 合離れ難なきその屋の秋更けて 二ノギンガハリ 鶏鳴くさへ氣恨世々生々も付纏ひ。瞋恚の炎に 合身

童獅子

〔解題〕明和四年十一月二代目佐野川市松名弘めのために市村座に於て市村龜藏と共に演じたもの。作曲者は杵屋新右衛門といはれて居るが、年代が合はない、恐らくは杵屋作十郎か。現行正本の表紙にある長唄松島庄五郎、三絃杵屋新右衛門・杵屋彌十郎は寶暦四五年頃の顔ぶれであるが、明和三年五月刊行の常磐友所載の「市松石橋」（詞章童獅子と異る）の連名であるべきものが紛れたものではあるまいか、そしてこれは元祖市松の勤めた折のものではなからうか。

へ見渡せばあかねさすその緋櫻や雲か霞か八重一重合春なれや深山邊の花も雪かと散りかゝれば面白や合へ花の振袖寛濶姿合色も吉野の稚兒櫻合目許に君が鹽釜や濱でころがるゝ桐が谷合花の吹雪に一振りどつこい二振り時雨は嫌よ春は嵐の吹かぬものかは合櫻々とよ櫻の山に合一重櫻が獨りゐたほんにえなう獨りゐた合當り櫻が獨りゐたほんにえ君が方へと家苞に合雛の祭りの箱入人形竹馬の隙行く駒の足早み彌猛心か鞭打ち急げ鎭めて〱しと〱

〱〱召したるお馬は合寒竹唐竹呉竹弱竹合殿の秘藏のア丶お馬はつゝん繫いだ合紫竹の竹馬斑竹の竹馬合先退け〱退け〱〱合駒が勇めば心もしよぎ付く勇めやどつこい〱どこい其處で〱開いた〱合竹馬が開いたお供は振出せお先は振込めさ〱まつかせ〱振れ〱振れ〱〱さ合へ扱も見事に揃うた殿御合流行模樣でどつこい振込め〱よいやさ合京で一條柳屋の娘四つ割帶を褌に掛けて合破れた尺八やれ手が御座るちつと縮む

れば鳴るものをしよんがえ合お先〱〱振り振つてどう參ろとん〱〱、どう參ろ目許口許可愛らしいぢやないかいな繻子の髷付や、とゝん〱とん〱どう參ろ目許口許可愛らしいぢやないかいな國に隠れないよい〱〱男え合へ一樣に着つれて文字笠を形よく月の漏るこそさりとは優しけれ、色香にうつろふ花飛び蝶の飛ぶさにおよぶ豐さ合影も廻るや盃の數も重なり御遊の御酒の合折々影も廻るや盃の數も重なり御遊の御酒の折々返す〴〵も面

白や 合へ女獅子男獅子のさても優しや ひらり 合くるり 合ひらり／＼ 合寝たり 處やら可愛い花に戯れやんれ枝に臥し
てんと手使は、花に戯れ胡蝶をめがけ 起きたり／＼、獅子の羯鼓を打つて我 妹脊知らぬ嬉しさよ、實にもたなき獅
合庭の千草に骨を摺寄せて 合頭を振り が身を見れば、我が身を見ればさなが 子の勢ひ 合獅子團亂旋の 勢ひもかくや
てさながらに狂ふ姿のしをらし可愛 ら獅子の物狂ひよの／＼ 合さても其方 とばかり 潔く獅子の座にこそ存きに
い 合牡丹やつゝじの玉を見付けて傍の 腕振を何に譬へん 合立てば芍薬坐す けり。
へ縺れてしなだれかゝる、茂上りては りや牡丹 合歩き姿の 合揺りかけ／＼何

拍子舞 教草吉原雀 三九

〔解題〕通稱「吉原雀」。明和五年十一月市村座興行の「男山弓勢競」の第二番目に出した所作事。作者初代櫻田治助。鳥賣小笹の左次兵衛實は八幡太郎義家市村羽左衛門、出羽國平賀の鷹の精靈吾妻藤藏。長唄富士田吉治、三味線杵屋作十郎・佐次郎、小鼓堅田新十郎、大鼓田中傳左衛門。本曲はもと奥州攻の世界の顔見世狂言の一場として仕組まれたもので、八幡太郎が危難に遭はうとするのを鷹の精が現れて救ふといふ仕組にからんで、放生會から説し初めて、廓切の異名吉原雀を吉原の素見ぞめきの客に利かせて廓情調を出した趣向である。清元の「吉原雀」は本曲を本としたもの。

唄セリフ へ凡そ生けるを放つ事人皇四 始まる。 アタルスヱ 放生會 本調子中太夫ガカリ 陰唄 へその手で深み へ濱千鳥、通ひ馴
十四代の帝 ウタガカリ へ光正天皇の御宇 へ浮寢の鳥にあらねども、今も戀しき れたる土手八町、口八町に乘せられ
かとよ スヱ。 義太ガカリ 養老四年の末の 一人住み、小夜の クル 枕に片思ひ可愛 て、沖の鷗の。二挺立。三挺立 伊勢音頭
秋。宇佐八幡の託宣にて。 ギン 諸國に い心と波みもせで何ぢややら悋らしい 素見ぞめきは椋鳥の群つゝ啄木鳥格子

先、叩く水鷄の口まめ烏に 合掛子 孔雀騷ぎで。目白押し見世清搔のてんてつとん、さつさ押せ〳〵え 大津投節へ馴れし廓の。モツユリ 袖の香に、見ぬ樣で見る樣で、客は扇の垣根より、初心可愛く前渡り。さあ來だ又來た障ぢやないか、又お障か。お腰の物も合點か。合 それ編笠も其處に置け、二階座敷は右か左か奥座敷で御座りやす、早や盃持つて來た、とこへ靜に、お出なさんしたかえと言ふ聲にぞつとした、しんぞ貴樣は寢ても覺めても忘られぬ 詞 笑止氣の毒又かけさんす。詞 何な。掛けるもんだえ 三下りへさうした黄菊と白菊の、同じ勤のその中に、外の客衆は捨小舟流も敢へぬ紅葉の。ニノキン 目立つ芙蓉の分け隔て、只撫子と神かけて、何時か廓を離れて紫苑、さうした心のウクキン 鬼百合と思へばおもう(萬年青)と氣も付

竹に モツスエル なるわいな。ハルオン 末は 合方へ若の寢姿窓から見れば、牡丹芍藥姥百合男郎花その樂みも薄紅葉、さり 百合の花、しよんがいな、芍藥よほゝとはつれない胴欲と垣根に纏ふ朝顔 いほいゝいゝよほゝいほい〳〵よほゝの、離れ難なき マゲル 風情なり 詞へ東雲 いほ、芍藥牡丹牡丹芍藥百合の花しよかごとが過ぎし口說の仲直り 鼓唄へ一焚き薫る仲人のその。接木こそ緣の端。そつちの性が憎い故隣座敷の三味線に、合する惡洒落まさな事 二上り羽左衛門拍子 へ女郎の誠と玉子の四角、あれば晦日に月も出る、しよんがいな。玉子のよほゝいほいゝいゝよほゝいほい〳〵よほゝいほ、玉子の四角、あれば晦日に月も出る、しよんがいな 詞 一炷きはお客かえ



「吉原雀」正本表紙

んがいな 詞 附差は濃茶かえ 羽左衛門拍子 へ腹が立つやら憎いやら、どうせうかうせう憎む鷄鐘。曉の明星が西へちろり東へちろり、ちろり〳〵とする時は

拍子內の首尾は不首尾となつて、機縁の使になア 今三ノギン 今宵ごんすとその 雨内や 實に花ならば初櫻、月なは晝前夜は左面 三ノドキン 上向左向に睨 噂、何日の紋日も主さんの、野暮な事ぢ らば十三夜、何れおろぬ朋同志の、夜み付けられ往ならよ 合唄らうよと言ふ やが比翼紋 ハル 離れぬ仲ぢやとしよん 方へ言ひ抜け此方の伊達 何れもかては小腰に取付いて。ならぬぞ 三ノキン がえ 合 〜今宵ごんすとその噂何時の紋 れ候もこ往なしやせぬこの頃のしなし振。憎く 日も主さんの野暮な事ぢやが比翼紋離いおさんがあるわいな 三下リ羽左衛門 長唄ヲトリ へ文 れぬ仲ぢやとしよんがえ 〜染まる縁の

嫐染分紅葉　四〇

「解題」通稱「うはなり」。明和六年七月市村座興行の「一富清和年代記」の二番目に出したもので、浦島四郎（大谷廣治）が相馬屋娘おまき（中村松江）に惑溺したので、浦島の女房おさよの生靈が現れて「うはなり打」をするといふ所作に用ひたもので、唄は富士田吉治、三絃杵屋作十郎・杵屋佐次郎、小鼓望月新十郎、大鼓田中傳左衛門。男女の三角關係のために、捨てられた女の嫉妬の念が怨靈となつて男に恨みをなすといふ主想の「うはなり」物は、謡曲の「葵上」などにも仕組まれてゐるが、近世の戯曲としては近松の「花山院后諍」（近松名作集上所收）が始めで、江戸では元祿十二年七月中村座興行の「一心五界玉」は市川家十八番物「うはなり」の原作として名高い。本曲はこの系統を引いた長唄の「うはなり物」として世に知られた作である。

大鼓子へ今日は人の身明日は又、我が身ならく〜親する折柄にへいと細いたる女 戸の端に佇みしは、如何なる人ぞと見の上と白菊の、露の浮世の戀無常、つ 房の、その様怪しからぬ風情にて、妻 てあれば 二上リへ我はこの世をさる方様

が、裏山賤の折りて焚く、秋の紅葉萩桔梗、その女郎花數ふれば、年に一夜の天の川合逢ふ夜の數も千百年と、楊貴妃の雙六も、乞巧に色の爪紅も、君を慕ひて玉椿鼓唄へ返魂香に誘はれて、結ぶ緣の一筋に合思あれば領巾振る行の姿にもへさせもが露を命にて、深き契に秋風は嫌よ、逢瀬を松蟲の、戀風と思はんせ、道理ぢやえ合月雪花の比翼紋、嘘ぢやないわいな、ぼつとりとした袖の移り香三下りへ共に眺めし月影の鼓唄へ移れば變る飛鳥川、花紫の藤壺を、追出さるるは誰故ぞやへ思ひ知らせんその爲に藤壺の怨靈これ迄顯はれ來りたりへその面影の面憎や、あら恨めしの浮世やな〳〵、思ひ知らせん待ち給へと合言ふ聲ばかりは合有明の合月に殘りし裝は合怖しとも中中にトメ申すばかりはなかりける。



「うはなり」正本表紙

隈取安宅松　四一

〔解題〕通稱「安宅」。明和六年十一月市村座顔見世狂言「雪梅顔見勢」の第一番目四立目に出したもの。九郎判官の陸奥落の供をして北國路を行く武藏坊辨慶（市村羽左衛門）が加賀安宅關の手前で、その地の名木安宅の松の落葉を掻いてゐる里の子小松（吾妻富五郎）若松（龜谷姫八）に都名物の扇子を與へて、奥州への近道を踊に托して教へてもらふといふ趣向で、踊の場は俗謠を連綴してある。而してこの辨慶は鞍馬山僧正坊

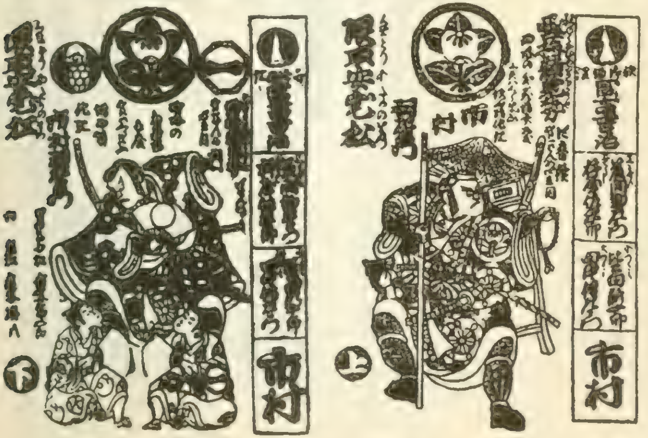
の化現で、義經の行く手を守るために辨慶となつて現れたもので、段切れはその天狗の飛去りを示して居る。

歌詞中の「坊主〳〵大坊主」の條は、本曲を或る藩邸でうたつた際、その席にあつた邸の御隱居が大坊主であつたので、唄ひ手の機轉で「葉越しの〳〵の月の影」と謠ひかへたのが評判となり、爾來さう改められる事となつたと言ひ傳へられる。

初演の時は、唄淨るり富士田吉治、三絃藤間勘左衛門、上調子杵屋佐次郎、大鼓田中傳左衛門、小鼓堅田新十郎であつた。

次第へ旅の衣は篠懸の、〳〵、露けき袖やしをるらん 合 都の外の旅の空。日もはる〳〵の越路の末思ひやるこそ遙かなれ 合 地カヽリ へ東雲早く明け行けば、淺茅色づく有乳山氣比の海 合 宮居久しき神垣や、松の木の芽山、なほ行先に見えたるは、杣山人の板取、川瀬の水の淺生津や、末は三國の湊なる、蘆の篠原波寄せて、靡く嵐 合 の烈しきは、花の安宅に着きにけり 合方木調子

なる里の童の、野邊の遊も餘念なく 合 こりや誰が目づき、ちつちや子持ちや桂の葉、ちんがちが〳〵ちんがらこ、走り〳〵走り着いて先へ行くのは酒屋のおてこ、後へ退るはおほかみ狐、尼が紅付けて父や母に言はうよ、言ふたら大事かそつ



「安宅」正本表紙

てくれよ、坊主〳〵大坊主（後に「薬　一に千石藏・合常陸の國の角岡に黄金の　つくばう、かいつくひつつく、しやん
越しの〳〵月の影」と改む。）二上リヲドリ　花が咲いたよさ、につこり合〳〵ホ、、〳〵扇に馴染む風の子や、風の木の葉
へ裏のなア、裏の背戸やの今年竹合笛　ホ〳〵合お笑ひ召したは悉皆在所の、の散々に三重里をさしてぞセリフアリゆ
にせうもの草笛に、笛になりたや忍ぶ　庄屋殿だんべい、いつかい〳〵、いつめ〳〵疑ひ荒磯の、砂を飛ばす土煙、
夜の、笛は思を口移し、ア、しよんがい　かい依に酒樽千倍萬倍合萬倍萬々倍打　梢木の葉もはら〳〵〳〵、俄に吹來る
な〳〵合へ忍ぶ合忍ぶその身は安宅の　つて置けしやん〳〵合へ神の鈴はしや　はやち風、天地も一度に鳴動して、岩
松よ合雪の夜毎の汐風に、揉まれ〳〵　んぐ〳〵と、さつても揃うた子寶合一　石古木ゆさ〳〵〳〵合どろ〳〵どつと
て立盡し、あれして合これしてしよん　度に問へば乙よ、けさよ合辰松ゆる松　山颪の、風かあらぬかその姿、見失ひ
がいな、面白や絶えずや合拍子〳〵子寶　だんだらいなごにかいつくばう合ひつ　てぞ三重立ちにける。

御代松子日初戀　四二

〔解題〕通稱「小松曳」。明和七年正月市村座「富士雪會稽曾我」第一番目四立目に出したもの。大房丸祐女
市村吉五郎、梶原娘えびら瀧中岩之丞。長唄富士田吉治、三絃杵屋作十郎・藤間勘左衛門等。

上へ萬代とハル三笠の山ぞ呼ばふなる、數多の殿御振、見染めて染めて後朝　私にばかりは合思はせて合思はぬ君が情
天が下こそ樂しかる、事も相生よい子の。合色咲く野邊の戀草や。合仕方でなや、まだ〳〵聞いて下さんせ合ハル袖
松、待つ間程なく鶴が岡へ、くる〳〵知せ目で知せても、合點なされぬあの　は涙かオトシ春雨かへ女子の誠と二ノオン
〳〵車の綱をえ、さあ緣の綱、引く手　お顔合ハル如何に御容貌なればとて、玉子の四角はなつけんけれども、緣の

あるのがハル戯なれ、髪切り合指切らんせ此方の人合ヲドリ戀と云ふ字を様参るチヽシへ筆を授くる君の行末守り
り起請誓紙はまだな事、嬉しがらせて合教へさんした人はさぞ粋であらう、て我が口託の合管を知する松風も梅も
笑をとは、ようしると思やいの合ニノギさぞ粋ならん、合ニノギン朝な夕なにカンハル久しき春こそめでたけれ合トメ久し
ンとは言ひながら初戀の、仲を結ぶの心で拝んでゐるわいな、お嬉しからうき春こそめでたけれ。
ニノギン合様次第頼みやんすハル可愛がニノギン上々様も我々も、送る玉章ニノト

其容形七枚起請　四三

〔解題〕明和七年正月市村座興行の「富士雪會稽曾我」の第二番目大切に出した市村羽左衛門の七變化で、その内容は、住吉踊、お福女郎、俺久、蘆葉の達磨、虚無僧、文七清川（清川尾上多見藏）石橋で、この中では虚無僧と文七清川が名高いからこの二曲をこゝに收めた。作者與風亭、長唄はやし連中は富士田吉治・杵屋作十郎等の連中。

虚無僧

次第へ月は昔の友ならば、く、世の外何處ならまし言へこれは諸國一見の僧にて候、我未だ駿河の國富士淺間へ參らず候程に、この度思ひ立ち富士の御山へ參らばやと思ひ候ウタへ風に靡く富士の煙の空に消えて、行方も知らぬ我が思かな合なう/\それなる御僧、なう今の歌をば何と思寄りて口ずさみ候ぞ、申しこれ申し御僧さんえ鉢々草鞋錢の所望笑止へ正月しまから何ぞいの千年を祝ふ松の内合鉢々と囃しい、俺久ではおるまいし、ほんに時知らぬ虚無僧は、何時も天蓋被るおやなうハルギン何時知らぬ虚無僧とやオ、時知らぬ。一中ガカリ山は富士の根何時とてか鹿の子斑に雪の降るらん、山は白妙海は綠の三保の松風、さらり/\さら/\さつと、葵の花の名に寄する、大磯の里に着きにけりへそれは昔の西

行の、江口の君と戯を、此處にうつして浪花なる、伊勢の宿狭こき雜ぜて 合 女の縺れる黒髪に大象も繋がるゝ人は眉目より只心、廓の色師の戀話。

文七清川

文七 へされば難波に名も高き、戀の分知り花ならば、櫻と人に宵の口、言葉に色を花宴り 二ノギン 文と異名を雁金の解く青柳嘘ぢやごんせぬ紋所、通ふちだねを結ぶしこなし 詞 申し文様何時ぞは私が此方さんに、言はう〳〵と思うてゐたが 二ノギン 今は返らぬ事ながら、彼處では喧嘩がある、此處では拔いた切つたわと、相手替れど主様は替らぬ名のみ雁金の文様なりと聞くに付け 三ノギン 夜の目さの目も阿波座の烏、泣いて明さぬ夜はとてもなし 三ノギン そのつらさよりこのつらさ、乾く間もなき袖の露 此間セリフ入 ヲドリ合方 へ雁と燕と仲よいは 合 行くも歸るも別れては ハルギン 花の盛りを待ちかねて、月に指折る深い中、戀のいろはも文と書くしよんがえ、ほんに〳〵嬉しいえ〳〵浮名立つ アタル フシ 名の戀衣 拍子 へ翼なけれど塗下駄の、當る尺八當るが最期、戀慕虚空のあしらひに レンボオクリ 君が清搔三味線の虚鈴無禮の善悪も、鶴の巣籠り達引に、あきた清搔嫌とは言はさぬ、獅子の曲迄吹納め 合 弱い者をば避けたがよい 合 強い奴をば投げたがよい、わしやさう思うてゐるわいな、さうだんべ〳〵菜種に蝶のしこなしを、頼みやんすで 合 小櫻の、深い淺いも木かけて ハル 名に呼ばれたる男一流、眉目よき心も花に鶯、通ふ神風葺屋町人の市村 合 男達、よき春の賑ひ。

關東小六後雛形

四四

〔解題〕通稱「淡島」。明和七年秋市村座興行の「一粧相馬紋日」第二番目大詰に市村龜藏が關東小六の役で演じた淡島の所作事。唄淨瑠璃富士田吉治、三絃杵屋佐次郎・吉村源治。

關東小六は慶長の頃江戸赤坂に住んでゐた馬方であつたが、小唄の名人で氷川明神の信者であつたといふ、こ

の小六の事を謠つた「小六ついたる竹の杖、本は尺八中は笛、末は女郎衆の、それ誠に筆の軸竹」。（寛文四年刊、糸竹初心集所收）といふのは名高い俗謠で、本曲にもこれが取入れられて居る。又この小六を劇に仕組んだものでは「關東小祿」（元祿十一年中村座）「關東小六今樣姿」（元祿十年、京、早雲座）などは古いものであるが、この「關東小祿」に於ては、その作の主人公關東小六は後に家來の彌五郎と共に出家して修業の爲に廻國するといふ仕組になつてゐるが、これが後に關東小六を淡島の修業者とする原據らしい。本曲は即ちこの系統を引くもので、關東小六が淡島の修業者となつて廓に入込んで、淡島明神の御利益の言ひ立てをする趣向である。

本調子 唄ヘ夕々の。品定め。仕着小袖潜上な大盡の。初會にはまつて裏約 ら山谷船意見で何の山屋が豆腐の耳に
の一樣に。脊連れて連れてさ渡る雁束。第二會目の姫宮にて張さへ手練女 殘りし睦言かごと。言葉の綾の卷煎餅
の。空さへ秋の定めなき浮世を渡るそ郎と申し奉る本
の中に 出合方イロ詞ヘ加太淡島の修業者の地は即ち虛空無
雛が許に鈴の音の振られ〳〵て。逢は天の御容貌に
れぬ戀も願へば何時かあはしませんとて。艮の御方
の御誓願。女郎衆の張の強いのも。つは一代男を守
い折針や打解けて。仲を結ぶの 合 締めり。本尊と掛け
括りさる浮世袋の。花形や雛形並ぶ妹られて腰より下
と脊を結ぶの神とはこれならん セリフは地に付かず。
アリイロ詞 ヘ抑々紀州名草の郡加太淡島とんとはまるが
大明神の由來を詳しくたづね奉るに。浮世川。空船や



「關東小六」正本表紙

御神樂。太鼓のからみそば。味喰占め ばんじん敬つて申すと戯るゝ 此間ニセリフ 二上リ 節。末は女郎衆のヤツコリヤ妻戀ふ鹿
ての流連に長居ふらちの病となつて へ君は春咲く梅の花。合 香ゆかしき間 の筆己が名のみを。泡沫の淡島なりと
も、金をば水の淡島と使はせんとの御 の戸にハテ 合 戀ぢやもの。小六〳〵。 戯に。人々興に入相のかねてもふけ
誓願、天上界の一廓。手練手管のよこ 小六突いたる竹の杖 合 もとは尺八中は の月の暮。トメ 樂しかりける次第なり。

其面影二人椀久　四五

〔解題〕通稱「二人椀久」。安永三年五月七日から市村座所演。享保十九年市村座で瀨川菊之丞と共に二人椀久を演じた市村竹之丞（八世羽左衞門）の十三回忌追善として九世羽左衞門（椀久）と瀨川富三郎（松山）とで、松永忠五郎・錦屋金藏等の長唄で演じた。詞章は原作「二人椀久」と大部分は同じである。

二上リ へ辿り行く 合カンハル 今は心も亂れ 圖の廓へ行こやれ〳〵、さつさ行こや の遣瀨なき 合 身の果何とあさましやと
候 合 末の松山思の種よ 合 あのや椀久は れ 合 昨日は今日の昔なり 合 坊樣〳〵ち 暫しまどろむ手枕は、この頃見する
これさ 合 これさ打込んだ ハル とかく戀 と嗜まんせ 合拍子 墨の衣に身は染みもせ トメカヽリ 現なり 合松山出二ノギン へ行く水
路の オトシ 濡れ衣 三下リ へ干さぬ涙のしつ で戀に焦るゝ身は浮船の 合 寄るべ定 に 合 うつれば變る飛鳥川 合 流の廓に昨
ぽりと 合 身に染み染み 合ハル と可愛さ めぬ世の泡沫や所緣法師がその一節に 日迄 セリフ へはて ウタ へ勿體つけたえ 合
のそれが昂じた物狂ひ 合投節 とても濡 中カヽリ 智慧も器量も皆淡雪と カン 消ゆ 誓文ほんに全盛も、我は廓を放し鳥 合
れたる身なりやこそ、親の意見もわざ るばかりの物思ひ、一人焦るゝ獨り言 鴛籠は恨めし 合 心くど〳〵わくせくと
くれと、とかく耳には入相の、鐘に相 合 戀しき人に逢はせて見や 合 とかく心 合 戀しき人を松山はやれ末かけて補襠

しやんとハルしやん〳〵ともしをらしく君が定紋伊達羽織、男なりけり又女子なり合片袖主とオトシ眺めやる合へ思案しなら武蔵野でなりと合何ぢや織部の薄盃を、よいさ、しようがえ合戀に弱身を見せまじと、ぴんと拗ねては背向けて合くねれる花と出て見れば合女心の強からでござガカリ跡より戀の攻來れば、小袖にひたと抱付き合申し椀久さんセリフへさつてもてつたりお日和様鼓合ガへふられず歸る仕合のカンスカシ戀にはあらぬ太夫が袖月の漏るより闇がよいカンへいや〳〵〳〵こちや闇よりも月がよい、お前はさうかと寄添へば合ギンガクリ月がよいとの言草に、粋な心で腹が立つわいなセリフへもうこれからが口説の段へ仔細らしげに座を打つて合舞ガカリ袖尺着尺衣紋坂鼓合方カンハル初冠りの投頭巾、語るもオトシ昔

男山ござガカリ拍子へ筒井筒井筒にかけし麿が丈、おいにけらしな妹見ざる間にと、詠みて贈りける程に、その時女も比べこし、振分髪も肩過ぎぬ、君ならずして誰か上ぐべきと、互に詠みし故なればハル筒井筒の女とも聞えしは、有常が娘の古き名なりしぞセリフへあゝ古い〳〵女郎買も嘘が辛うなつたへお茶の口切沸らす目元にとりつけばセリフへあゝ何ぞいなウタへ手持無沙汰に船子揃へて、わざくれ拍子按摩痃癖〳〵さりとはぴき〳〵捻ろ合地體某は東の生れ、お江戸町中見物様の、馴染み情の御贔屓強く、按摩痃癖朝の六つから日の暮るゝ迄セリフへさりとは〳〵忝い合へ按摩冥利に叶うて嬉し、按摩痃癖〳〵合ヲドリガカリへ廓の三浦女郎様ちゑごちゑ合袖をそつと引かばおう席をやれ、構へてよい〳〵女郎の顔をしや

るな、ちゑごちゑ合袖をそつと引かばお、腰きやれ構へてよい〳〵女郎の顔をしやるな、ちゑごちゑオトシ二人連立ち語ろもの合へ郷々は我が家なれば、遣手禿を一緒に連立ち急ぐべし遊び嬉しき馴染へ通ふ合戀に焦れてちや〳〵と、ちやと〳〵ちやつと行こやれ合可愛がつたりがられて見たり、無理な口説も遊びの品よく、彼方へ言抜け此方へ言抜け合裾にもつれてじやらくらしやらくら、惡じやれの合花も實もあるしこなしは、一重二重や三重の帯トメ蒲團の内ぞ候。

翁草戀種蒔　　四六

〔解題〕通稱「種蒔三番叟」。安永四年十一月中村座に於て、伊東娘辰姫（翁）吾妻富五郎、田代の冠者（千歳）嵐市藏、眞鶴（三番叟）山下金太郎の三人が演じたもの。作曲者八代目杵屋喜三郎。長唄湖出市十郎・富士田音藏、三絃杵屋喜三郎・住吉等、その他はやし連中。本曲を「種蒔三番叟」といふのは、三番叟の鈴の段が「その種蒔の種まきて……」の句に伴ふ種蒔の形に因んで呼ばれたのである。

へ裝ひ飾る錦の袂、翳す翳の手馴草、その舞扇大様に、隈なき月の光かや、右と左にしやんと坐したは雪やら花やらしをらしく、月雪花の樂みを、今目の前に見る如く、今様姿とり〴〵にへとう〳〵たらり〳〵らたらりちがりたらりとう、ちりやたらりや、女子たらしの目許にとんと打込んで、文は千束に及べども、否諾のないはさりとは〳〵辛氣な事ぢやえ、筐の手前の恥しく、今宵は逢うて心根の、なるかならぬかなうこれなうなるかならぬかへ鳴るは瀧の水〳〵、日は照るとも絶えずとうたり、常にとうたり君の千年を經ん事は、天津少女の羽衣よ、鳴るは瀧の水へ凡そ千年の雛鶴は、萬歳樂と謡うたり、又萬代の池の汀に龜遊ぶ、甲に三極備へたり瀧の水冷々と落ちて、夜の月鮮



「種蒔三番」正本表紙

に浮んだり、渚の砂さく〳〵として、可愛らし、様の召したる烏帽子をば、けさよ辰松いる松たんだら砂に取付く朝の日の色を潤ほす、天下國土安穏長何と申す烏帽子ぞ、仰の如くこの尉引付く少女の袂、返す〴〵も面白や、久と君を祝ひて千早振、一差舞はう鳶が着たる烏帽子は千代かけて、君を祝否でも應でも是非に一差御舞ひ候へ、歳楽〽おさえ〳〵喜びありや喜びの玉ひの立烏帽子、きりつとしやんと風折あゝらやうがましや、さあらば鈴を參章貰うて始めて所知に入りにけり〽相烏帽子、右折烏帽子左折り、さて數々のらせう〽その種蒔の種蒔きて、鳴るは撲の拍子鳥飛び、潔くこそ見えにけおめでたや〽十二の子寶座敷にづらり驛路の鈴の音も、盡きせぬ御代の寿を、れ〽さても見事や振もよし、舞の姿のと並べて〳〵、お直りあれかし、乙よ謡うてやがて、やがて扇を納めけり。

我脊子戀の合槌　四七

〔解題〕通稱「蜘蛛拍子舞」。天明元年十一月中村座「四天王宿直着綿」第一番目三立目の所作事。京六條の白拍子妻菊實は葛城山女郎蜘蛛の精靈（三世菊之丞）が頼光に障礙をなさんとその館に入込み、頼光（三世宗十郎）貞光（尾上松助）等を相手に名劍の問答から拍子舞にかゝつて隙を狙つたが、膝丸の威徳によつて遂に本性を顯すといふ仕組で、四天王の世界に土蜘蛛を取合せたものゝ一で、近松の「關八州繫馬」や常磐津の「蜘蛛絲梓弦」等の系統を引くもの。作者初代櫻田治助。作曲者杵屋佐吉。富士田音藏大薩摩主膳太夫かけ合。

浄瑠璃（大薩摩）〽それより世々の帝に到り、寶ウタ〽千早振りにし昔より、戀に片刄を、枕詞に眞金吹く吉備の中山なか傳はる鍛冶の道廣く、天國天の座神息刄の片思ひ、浮寢の鳥も寢覺して、氷〳〵に、千束に餘る文ならで、留めてが、太平治國の靈げんに治る御代の神に映る劍刄は、冴えた中子とよい金性留木の移り香も、昨日の夢を補禦み、

二人寝る夜は帯解いて、屏風にかけし様参る、二人が仲はたく／＼の寝姿に、ひぞりながらも夜着きせて、宵の笑は暁の、涙の露の起別れ 浄瑠璃へ謹上再拜謹上再拜鞴は陰陽和合を象り五行五體を堅めの槌文の直焼き武の亂れ、文武二道は二柱 拍子舞菊之丞セリフへサアちよつと姿を垣間見に、檜垣鑢は天がい重俊 松助セリフへさて薙刀は當麻の少將金剛正枝力王一乙 宗十郎セリフへこれ等は名に負ふ大和鍛冶 松へ利劍寶劍名作名物六百九十四振なり 菊へ九十四振は九十九夜、或夜その夜の廓通ひ、色に亂れし業物と、名乗りて和泉の加賀四郎 松へさて又相模の新造五郎新造五人引連れて、紋日物日は月詣り 宗へ月山森房雲頭 菊へ初行平を眺めんと、猪牙で長船四つ手に則宗 松へやう／＼三條宗近と 宗へ客は女郎に寸延びて、他所で口說を島田の義助 菊へ座敷も新身の付け方よ、あいと石見の酒盛綱 松へ心安綱焼刄 松へ文殊四郎の智恵借つて内外の 宗へ友成が 三人へ君萬歲とぞ打つたり手前兼光が、まだ流連はさりとは長光けり 三人へ打納まりし床の山、締めて大酒に青江の四郎が捻ぢ上戸 菊へちよ 音締めの一節に二人へ様に逢ふ夜は月影つと助光一文字、腹立上戸仁王三郎 に 合丸にいの字を結綿に 合重ね扇の比宗へ相手に長門の左利き、左文字や方 契紋離れぬ仲ぢやないかいなさいな、



「蜘蛛拍子舞」正本表紙

そんれもよう言うた〳〵 合へ様と一夜 き宵なりさゝがにの、蜘蛛の振舞に へ魔道に沈んで浮む瀬もなき我が谷の梭さへ、笹龍膽に抱柏、誰が睦言を て知る我が身の上ぞ遣瀬なや 合へ葛城山 處、長き奴とせんものと、又引立つれ荷蟆の、離れぬ仲ぢやないかいな、さい に年を経し、世にも名を知る女郎蜘蛛 ば恐しや ウタへ渦卷く炎漂る白波、庭なそんれもよう言うた〳〵、離れぬ仲 浄瑠璃へ盡ぬ恨の心の鏑や怨念力の張弓 の梢もさつ〳〵〳〵、池の水音どうの喚言へ不思議や火炎烈々と、谷中に翩に、射て落されん連理の枝 ウタへ瞋恚〳〵〳〵、天地顛つて逆上り、高天辟翻し落つると思へば忽ちに、身はさゝ 邪慳の斧鉞、打立て〳〵しつてい けて落つると見れば、猛火盛んに燃上がにのいと凄さ、一人六臂のその姿、 〳〵、伐木丁々 浄瑠璃へ枝も梢も打切 り、電光激して雷神凄じかりける次朧が仲に立迷ふ 鼓唄へ我が脊子が來べ り〳〵 ウタへ打折り〳〵打拂ひ 浄瑠璃 第なり。

めりやす 黒かみ　四八

〔解題〕天明四年十一月、中村座「大商蛭小島」の二番目で、伊東娘辰姫（三桝徳次郎）が頼朝を待ちわびる場に使つためりやす。唄湖出市十郎、三絃杵屋佐吉・同新太郎。

へ黒髪の結ぼほれたる思には、解けて は片敷く妻ぢやと云うて、合方へ愚痴な の聲、昨夜の夢の今朝覺めて、床しなつ寢た夜の枕とて、一人寢る夜の徒枕、袖 女子の心も知らず、しんと更けたる鐘 かし遣瀬なや積ると知らで積る白雪。

狂亂雲井袖　四九

〔解題〕通稱「仲蔵狂亂」。天明四年十一月、桐座「重重人重小町櫻」第一番目五立目に演じた所作。出羽郡司小野良實の女小野小町を惡人の張本伴健岑に奪はれようとするのを落して、それを上使の前でごまかす爲に

良實が僞せ狂亂となるといふ仕組で、これは所作事の名人初代仲藏によつて演じられた。作曲者杵屋正次郎、唄は松永忠五郎・重井新七・芳村伊三郎。

唄へいざさらばありし雲居の花の袖、思へばかゝる執着の、定家葛の離れぬ仲を、隔てられてもそもやそも、思出すとは忘るゝからよ、何の忘れよぞいたいけ盛りへさても〳〵我御寮は、踊る振が見たいか、踊る振が見たくば北嵯峨へ御座れの、北嵯峨の踊は對の帽子をしやんと着て、踊る振がよいと吉野初瀬の花よりも、紅葉よりも、君が面影現にも夢にも見たやなつかしや忠五郎へ古りにし事を聞くからに、比翼連理の契さへ、花に嵐の情なや、更に別れのなかりせば、千代も人には添ひてまし、よしや草葉に忍ぶとも、色にぞ出でし我が恨み三人へ千草も冬枯れて、雲の彼方に在や來て、風に散飛ぶ雪の散りやちり〳〵漂ふ君が袂に積るも嬉し、下々に心も亂れてへ戀しや昔ゆかしやと、彼方へ走り此方を慕ひ、別れの床の臺ぞと、人目も分かず伏轉ぶ。



「狂亂雲井袖」正本表紙

春昔由緣英　五〇

〔解題〕天明五年正月桐座興行の「重重人重歌曾我」第二番目に出したもので、二世瀨川菊之丞の十三回忌追善として三世菊之丞が演じた、盧生、羽根の禿、白酒賣、女助六、相生獅子の五變化の所作事。この中、羽根の禿と白酒賣とが名高くて、今も傳はつて居るから、この二曲をこゝに收めた。作曲者は杵屋正次郎、唄は松永忠五郎・重井新七・芳村伊三郎等。この五變化は好評であつたので、天明七年九月には同じく菊之丞は森田座で「擬露菊數品」の外題で、盧生、羽根の禿、白酒賣、揚卷、女助六、黑木賣、うかれ座頭の七變化を演じた。やはり白酒賣と羽根の禿が好評で、現存の正本にはこの時のものもあるが、詞章は前と同じである。

羽突禿

ミドリへ戀の種蒔初めしより色と云ふ、言葉は何この廓に、誠籠りし一廓、丸い世界や粋の世に、噓とは野暮の誤りと笑ふ禿のしをらしや〳〵禿々と澤山さうに、言うて下んすな、こちや華魁に戀の諸譯や手管の譯も、教へさんした筆の綾、よう知ると思はんせ、オヽ恥しや恥しどけ形振可愛らし〳〵文がやりたやあの君様へ、取りや違へて餘の人にやるな、花のかの様のサテ花のかの様の手に渡せ〳〵朝のや六つから〳〵上衣下衣引重ね、禿は袖の振初め突く〳〵庭に羽根を突く、一イ二ウ三イ四オ五重に七重に事は十三十四十五手はま置く二十一イ二ウ三イ四オ 合 見よなら〳〵松を翳して梅の折枝、それさこれさそれ好いた三味の手 此間拍子 へ梅は匂よ櫻は花よ〳〵、何時も眺は富士の白雪。

白酒賣

ミドリへ今朝の便りに文書き添へて、昨夜卷いたる玉章も日本めでたき廓の名の、分吉原へ通ひ路の、駕籠と船との山川や、末白酒の擔ひ賣 此間セリフ へそも白酒の始まりは、神代の昔素盞嗚尊と云ひし大盡の 合 かの足名椎手名椎の二人の末社に 詔り 合 八しほかもして作るとかや出雲八重垣妻ごひに 合 堅いお客も葡萄酒の、お腰の物は船宿の 合 戸棚の内に諸酒、笹の一夜を呉竹の、くねるは癖の男山、つい後朝の七つ梅、茶屋が迎ひの玉子酒、濡れてゐよとの霙酒、アヽまゝよ 合 いつそ伊丹の濁り酒 合 末は諸白諸共に 合 千年不老酒養命酒人の池田も 合 みりん用ひぬ氣まゝ酒 合 今白酒のほに出でて、赤きは酒の科、ならぬ 合 身は習の奈良酒屋、兒の手柏の二人寢は、盡きぬ縁の樂と、打擔げてぞ 詞へ白酒〳〵と急ぎ行く。

女夫松高砂丹前

「解題」通稱「高砂丹前」又は「高砂」。天明五年十一月、桐座「男山娘源氏」第一番目三立目に出した丹前所作事。初音姫侍女このは瀬川菊三郎、下部筆助實は源の美女丸市川辨之助。作曲者杵屋正次郎。

次第へ今を始の旅衣、〳〵、日も行末ぞ久しき 二上りへ高砂や木の下蔭の尉と姥、松諸共に我見ても、久しくなりぬ住吉の、この浦船に打乘りて、月諸共に出汐や、これはめでたき代の例へ老木の姿引替へて妹脊わりなき夫婦松、葉色は同じ深緑、見れども思の盡きせぬは、誠なりけり戀衣、實に戀は曲者、假令萬里は隔つとも、慕ふ心はそりや言はんすな、朝な夕なに空吹く風も、落葉衣の袖引纒ふ、思ふ殿御はつれなの身にし、塒に殘る徒枕へ扨も見事になア振つて振込む花槍は、雪かあらぬかちら〳〵〳〵と白鳥毛、振れさどつこい振れさどつこい、袖はひら〳〵臺笠立傘見世、貴賤の袂袖を列ねて、颯々の聲戀風に靡かんせ、ずんど延してしやんぞ樂しむいさぎよや。

と受けたる柳腰、しやなり振槍秋波は、可愛らしさの色の宿入り 三下りへ松の名所は樣々に、あれ三保の松羽衣の松にかけたる尾上の鐘よ、相に相生夫婦松、中に緑のいとしらしさの姫小松、二蓋三蓋五蓋の松、幾世重ねん千代見草、しをらしやへ西の海青木が原の波間より、現れ出でし神松に、降積む雪の朝香潟、玉藻刈るなる岸陰の 謡へ松根に倚つて腰を摩れば ウタへ千年の緑手に滿てり、指す腕には惡魔を拂ひ、納むる手には壽福を抱きへ入來る〳〵花の顔

拍子舞 寫繪雲井弓（うつしゑくもゐのゆみ）

〔解題〕通稱「高麗藏拍子舞」。天明六年十一月、桐座興行の「雪伊豆幡揚」第一番目四立目に出した所作事。奴こま平實は多田藏人市川高麗藏、盛長女房なぎのは吾妻藤藏。作曲者杵屋正次郎。長唄はやし連名摺畫に詳しい。

三下り 〽色の世の中浮氣の浮世、戀と情の港へは、ほんに船より三枚肩で、押せやれ男合點ぢや〳〵 合 廓通ひは皆駕籠で押す、見世清搔の音締に連れて、持てろか〳〵駕籠も持てますはい〳〵〳〵、えいさ〳〵えいさつさ、榮華の遊島原や、揚屋をさして急ぎ來る 豊九郎 〽花の吹雪に濡れぬが増しよ、濡れて結ぶ花の下紐 〽疑ひ深い何ぢやいな 合 そも突出しの始よりついの御見の源三位より、まさな事睦言に 伊三郎へ結ぶ妹脊や二世の緣明合うたる仲々を、無理な口說の拗言に、ひぞらしやんすが聞えぬと、憎い男の胸づくし 合 鳥の鳴く



「寫繪雲井弓」正本表紙

迄恨みつ泣いつ、かこち涙のしどけなく、互に悋氣の角目立つ、仲へ來かゝる御寶來、戀爭ひの仲直し、お二人ながらにつこりと合笑ひ清めて奉る、間夫に心中達引の、色の意氣地もいざこざも、當分私に下んせ、兩方南方手管の優女郎、西方色事裏茶屋小茶屋、北方今夜の相圖は中戸で、中央大日大師の約束、さつても奇妙な御祈念と、すた〳〵言うて祈りけるへやん面白や荒神の、御前を見れば松植ゑて、黄金の井戸に水も湧き、松諸共に内も御繁昌の千代の御神樂合千早振々鈴の音もゆかし、しやんこ〳〵と彈く三味線の、色音に浮れ面白の花に廓は世界の色の、上盛りと野暮は揉まれて粹となる、これを來て見よかしのゑ戲れ遊べやつさ勇み賑ふ神樂月。

菊壽の草摺　五三

〔解題〕天明七年正月桐座「雪薺幸曾我」に、曾我五郎(市川高麗藏)と化粧坂少將(瀨川富三郎)とで演じた草摺引の所作事で、朝比奈の代りに少將を用ひて例の荒事を和らかく碎いたのが特長。作曲者杵屋正次郎、長唄は松永忠五郎・重井新七・芳村伊三郎等。語り出しの文句によつて「いきほひ」と稱へる。

三ドリへ勢和朝に名も高き、曾我の五郎時致が、逆澤瀉の鎧蝶、裳に縋る鶴の丸、素袍の袖を掻撫でて、留めるは鬼か小林の、朝比奈ならぬ優姿、女の縒れる黒髪に、引かれて留まる心なら、やらじと引けば時致は、日頃の本望父の仇、妨すなと突飛し、くるわの戯とは違ふぞよ、放せ留めた 此間草摺へ留めてよいのは朝の雪、雨の降るのに去なうとは、そりや野暮ぢやぞえ待たしやんせ、起請誓紙は嘘かいな、嘘にもじやれにも誠にも他所に色増す花眺め、それして騙してそれ〳〵〳〵、その顔で怖い事言うて腹立てさんす、其方向いてゐさんしても、顔見にやならぬ末を賴

みの通ふ神へかよわき少將朝比奈が、　は、貴賤上下押並べて、感ぜぬ者こそ
力は素袍の袖添へて、互に劣らぬ有樣　なかりけれ。

八朔梅月の霜月　　五四

〔解題〕通稱「八朔梅」。寛政元年七月中村座「平家評判記」第一番目三立目に出した所作事。朝がほ妹お百中山富三郎、多田藏人行綱大谷鬼次。作者初代櫻田治助。作曲者杵屋彌十郎。長唄はやし連名は挿畫にある通り。

へかへろと鳴くはさを鹿の妻に 合引かるゝ心から 合男心のつれなさは 合枕並べて宵は待ち、夜中は恨み曉の、夢も結ばぬ 合身ぢやものと思ひはせいで 合憎らしへ廓と蓬は世帶に連るゝ 合襷のの字に前垂かけて、若い夫婦は苗代



「八朔梅」正本表紙

水の合水も漏らさぬ合漏らさぬ水の、中に小桶が欲しゆ御座る合晩に御座らば合窓から御座れ、起請誓紙は反古にもなろが、差いつ差されつ石ごきの合堅い契の一夜酒何時か逢瀬も七夕の合解いて投げて合ついそれなりに解合うたる雲の帯〽様に逢はうと背戸屋へ行けば、様にや逢はいで鬢の毛彫に憂いもつらいもしよんがえ、お出やり申して突伏べいとは、てんこちない事許しやれ申すな、こてめがあじやるさ膽が合でんぐり合つん出るこんだにえ／＼、恥しや鬼次〽惚れられたらば百年目、どうで此方は夜働き、二世より先へ命がけ富三郎〽戀の盜みと誰れ白浪、晩にやいのと合詞鬼〽合圖合鍵合性を、ちよつとこの場で刀の金性富〽ほんに不粹な水性の、私が心を打明けて、花によそへて鬼〽聞くべいかへ招く尾花にこちや招かれて合萩の浮氣な男郎花、我もかうなる合思ひ草それ／＼それで浮名が立つわいな〽露と情にこちや濡初めて合誰が苅萱女郎花、色も黄菊の合蕚り草、それ／＼それで浮名が立つわいな、浮名立つ〽星か螢かちら／＼／＼合雨の木の葉かさら／＼さつと一時雨合紅葉も何時か白妙の雪かと思へば月や花合風情なりける次第なり。

對面花春駒　五五

〔解題〕通稱「春駒」又は「對面」。寛政三年正月中村座「春世界艶麗曾我」に出した對面で、曾我五郎（市川八百藏）が小磯の藝者おとり（瀬川菊之丞）手越の藝者おてふ（岩井半四郎）と共に春駒をまはしながら敵工藤に近づくといふ仕組。作者増山金八。作曲者杵屋正次郎。長唄富士田音藏・同新藏。

〽めでたく／＼や春の始の春駒なんぞは、夢に見てさへよいとや申す／＼、オヽ／＼それ／＼よい振袖の梅と櫻のその

中々は、妾も年も愛敬も對のとりなり可愛とや申すく、しやんとりゝしき出立ばえ 八百藏へそれ白馬は陽獸にしてよく春の氣を則り 菊之丞へ春の始のめでたさを、門出よしや宝の山 半四郎へ寶の船の波の音、轡の音も乘初めよしや、三つ葉や四つ葉の殿造り 八百へ庵の内に木瓜の 半へ紋日物日の約束堅き 菊へほんに題見て 八百へ嬉しと申す へ大寄せ奥野のその狩くらに、伊豆と相模の殿様方は、愛澤八木下瀧口北條柏が轡にお並びあれば、廻る盃よい中村と、名にし大庭の朝歸り 菊之丞へ先づ一番に海老名黨 半四郎へ二番大樂平馬さん 八百藏へ遙か後陣に引退りへ降るは時雨か村雨月毛 菊半へそれを聞くさへ へ無念と申す 菊半へコレ二人へコレ鎭めてく へしとく召したる駒の手綱の色は赤澤山紫竹の竹馬三人へハイく へ淡竹の竹馬先退けく

退けくく駒が勇めば心もいそく 子を揃へて七草薺くこれ人日の白馬轡の音がりんがらく蹄の拍子がしつ の節會春の小馬の潔く 八百へ賑ひ會

とんしと 北川柏子へ壽祝ふ花の袖匂寄れ 我の 二人へ對面と へ唄ひ囃して祝しけて咲く梅の枝移りして鶯の囀る聲の拍 る。



「春駒」正本表紙

杜若七重の染衣　　五六

〔解題〕 寛政四年四月河原崎座興行の「傾城金秤目」の第二番目大切に出した四世岩井半四郎の七變化の所作事で、その內容は小町、手習子、座頭、汐汲、浦島、切禿、石橋である。この中手習子が好評であつた。半四郎は更に寛政九年八月「姿花秋七種」の七變化の中でもこの手習子を出し、のち文化三年二月中村座で五世岩井半四郎が「七字の花在姿繪」の外題で四世半四郎七回忌追善に出した七變化所作事の中にも出し、この兩度の手習子が稽古本として行はれて居るが、詞章は最初のと同一である。でこゝには原本のものを收めた。作者は增山金八。作曲者は杵屋正次郎。長唄は松永忠五郎・同鐵五郎・花形五三郎・中村山次・芳村九十郎等であつた。

手習子

三下りへ今を盛りの花の山 合來ても三吉野花の蔭、飽かぬ眺の可愛らしへ遲櫻まだ蕾なり花娘、寺子戻りの道草に 合てんと見事な色櫻 合雛草結ぶ島田髷、はしたないやら戀ぢややら 忠五郎へ肩縫上げのしどけなく、紙捻喰切る緣結び、解けかゝりし繻子の帶、振の袂の零れ梅、花の笑顏の愛しらし、二つ文字から書初めて、悋氣恥し角文字の、直な心の一筋に、御師匠樣のおつしやつたを、ほんに忘れはせぬけれど 鐵五郎へふつつり悋氣せまいぞと、嗜んで見ても情なや 忠五郎へまた娘氣の跡や先、あづまへもなきあどなさは、粹なとりなり目に立つ娘 鐵五郎忠五郎へ娘々と澤山さうに、言うておくれな手習ひ覺え、琴や三味線踊の稽古 合二上り忠五郎へ言はず語らぬ我が心亂れし髮の亂るゝもつれないは只移り氣な、どうでも男は惡性者へ櫻々と諷はれて、言うて袂の分二つ、勤さへ只うか／＼と、どうでも女子は惡性者、東育ちは蓮葉な者ぢやえ 合へ戀のいろはにほの字を書いて、それで浮名の散りぬるを、我が世誰ぞ常ならん、心奥山今日越えて、逢うた夢見し嬉しさに、飲めども酒に醉もせず、京ぞ戀路の清書なりへ夫の爲とて天神樣へ願かけて、梅を斷ちますめい はくサア、我れ一

代断ちますめいはく梅を梅を断ちま　さうぢやいな品もよや〜諸鳥の囀、〳〵、梅と椿の花笠着せて〳〵眺盡せす、めいはくサア、我れ一代實ほんに　梢々の枝に移りて、風に翼のひら〳〵ぬ春景色。

花車岩井扇　五七

〔解題〕通稱「花車」。寛政四年十一月、河原崎座「大船盛鰕顔見勢」の第一番目三立目に、岩井粂三郎が、玉ゆら姫の役で演じた所作事。作曲者杵屋正次郎。長唄松永忠五郎・鐵五郎等。

三下り〜曳けやひけ〳〵姿も霜の花車、白紅の染手綱、しやんと着なした風織の、烏帽子狩衣男舞 此間ゼリフ 散唄〜今日今様の壽を、祝ひ奏づる三つ扇、その舞ひ扇手もたゆく、實に旋檀の二葉振 此間舞〜冬の半に山里を見渡せば 合 梢は霜か雪の花、冬至の梅の色盛り、合香ゆかしき花の袖 合彼方へひらり 合此方へひらり 合櫻に紛ふ雪景色 忠五郎 〜初戀の人目恥し花紅葉、忍ぶの山の下紅葉、薄いは嫌よ戀衣、結ぶ縁は神

様の、お仲人ではないかいな、今宵逢ふとの合圖は何ぞ合妻戸叩かば誰そとも言はで、明けて霜夜の睦言も、只心なき鶏鐘に、いとど思ひの增



「花車」正本表紙

鏡、合せ鏡の比翼紋 二上りへ玉簾の内や 扇車や戀車、くるり〳〵くる〳〵〳〵 の山、飾り立てたる伊達なとりなりへ只ゆかしき御所車 合それえ〳〵 合筆に思 戀車しをらしや へ振込め〳〵初雪の、何時迄もこの舞臺、變らぬ花の顔見世を文車、返事美し花車 合くるり〳〵く 中に見事な花の槍 合振の袂に戀風がよ や、所繁昌河原崎、賑ふ御代の里神樂、る〳〵花車 合へ積る夜の通ひ車や れつ縺れつ 合ちら〳〵〳〵と 合さんさ 千秋萬歳萬々歳と豐かに こそは舞納雪車、それえ〳〵 合忍ぶ車の君と我、 雨時に濡れ〳〵初めて 合揃ふ槍の手花 む。

月顔最中名取種 五八

〔解題〕 通稱「鬼次拍子舞」。寛政五年九月河原崎座「姫小松子日遊」の第一番目三立目に出したもので、松の前(岩井喜代太郎)の持つ名笛を、長田の太郎(大谷鬼次)が奪ひ取らうとしての拍子舞の所作事。作曲者杵屋正次郎、長唄松永忠五郎・同鐵五郎・花形吾三郎。

ウタへ頃は壽永の白拍子、祇王祇女とて二人あり、雲居の刺繡の後帶 喜代太郎へ水干着たる舞ひ姿、烏帽子鞘卷佩く時はへ男舞とも名付けたり 鬼次へその頃加賀の生れにて、佛御前と名にふれし、舞の上手ぞ出來り、西八條に召されつゝ へいざよふ月の眉がかり、人々興じ望みけり 忠五郎鼓唄へ君を始めて見る時は、千代を經ぬべし姫小松 鬼へこりや何をする 喜代へサアこれはお前にナ 鬼へ俺にどうした へサアお前の池に龜浮び、鶴も群れゐて千歳經る、羽袖を翳すしを らしや、開く扇のとり〳〵に、三度飜して奏でける 鬼へサアそれはさうと今の返事はどうだ 喜代へそりや誰にえ 鬼へ難波殿へ、喜代へサアそれはな 鬼へどうだ へ問ふも憂し問はぬ もつらし武藏野と、掛けたる謎に愛敬の、零れかゝるや

花薄、君蟋蟀と男野花、返事松蟲螽蟖へお前にどうぞ扇蝶、此方はしやんと合轡蟲、鬼一口と寄添へば、置いて袂を振切つて、胸ぐら取つてコレ男吾三郎へさう言はんすりやお前一人が眞實で鐵五郎へ私が心にあるとあらゆる神かけて忠五郎疑ろ心はないものをお前は嘘と思はんす、それでもわしや倘可愛い三人へ平氣な事と寄添へば鬼へそれやア何だ喜代へ茶々上らんかいなアへ出花の花が汲んで來る、水も漏さぬ水茶屋の合味な緣も今更に、月待ち日待ち大待ちを、そゝる山伏の錫杖を、しやん/\/\と振立てて合懺悔/\ぞつこん其樣に惚れて/\惚抜いた、それ樣の御容貌を、今で譬へて言はうなら合浪華高島菊本も、跣足詣りの代詣り、辨財天と打込んだ仕が色香の蘇民書札、お茶の數さへ三千合三百合三十三杯、ら

つかれ浮々戀は曲者靡かんせ、これどうぢやいな喜代へコレは鬼へそれを二人へどつこいヲドリへ惡性な程倘思ひぞ增鏡、見るに付け聞くに付け、男の心と秋の空、緣のあるのが誠なれ、嬉し腕の命とは、心で拜んでゐるわいな閨に殘りし枕が物を、言はば悋氣の種と思ひ草喜代へサア長田の太郎と名乘つて笛を渡しや鬼へ小癪な女、其處退け二人へイヤどつこいへ互に劣らぬ千種の盛り狹萩桔梗蔦葛、裾もほら/\吹返し、さら/\さつと秋風に連れて梢の花紅葉露の玉散る風情かな。



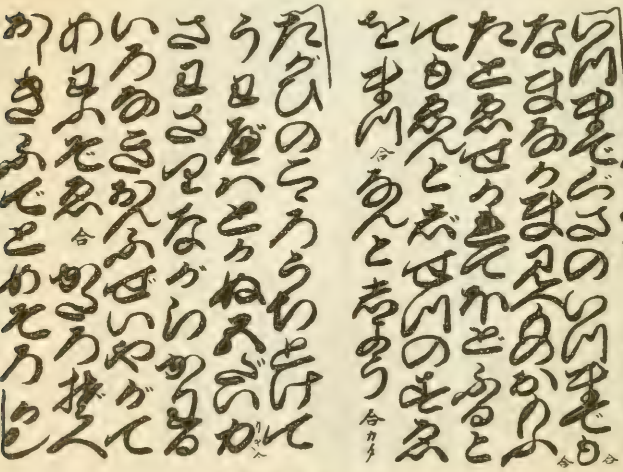
「月顏最中名取種」正本表紙

めりやす 五大力

〔解題〕 寛政七年正月都座興行の「江戸砂子慶曾我」一の第二番目「五大力戀緘」二幕目大和町浪宅の場に於て小萬（三世瀬川菊之丞）が薩摩源五兵衛（三世澤村宗十郎）のために誓のしるしに三味線へ「五大力」と書く間の合方のめりやすとして使つたものである。作者は並木五瓶。長唄芳村伊三郎、三絃杵屋彌十郎・錦屋惣治・杵屋源次郎。

この「五大力」は上方に於てうたはれた「五大力」の下半分を取つて多少語を改めたに過ぎない。その元の歌詞は左の通りである。

へ一筆と。書き初むるは懐しさのまゝ日々に。思ひ参らせ候へど。別れより程はあらず候へども。思ひ寢にする獨り寢の。我が心も澄みて目も合はず。多葉粉戀草縁となる。さりし御見の移りのみ。暮し候折からの。暑や寒やの起き伏しに。風など引かせ給ふなよ。さゝを控へて身の養生。これ第一に頼み入る。よしなし草のよしやよし。生中見え物思ふ。たとへせかれて程經るとても。緣と時節の末を待つ。はて何としよ。左の



「五大力本文」

心打解けて。上ひは解かぬ五大力。さはさりながら變る色なき御幕し。やがて逢をぞえ語ろぞえ。惜しき筆留め候かしこ。（吟曲古今大全より）

この「五大力」については天明元年刊行の「歌系圖」には「白川檢校調、李丈作。此李丈といふ人は、さかや七兵衞とて風流人なり、此人の作の歌猶多き由なれど今知れがたし、白川は作物の上手にて其作今に殘れり。」とある。

序にいふ、五大力といふのは、女の文の封じ目に書いて他見を憚る意味を示したものであるが、これは昔道祖神に習合された五大力菩薩を念じて、遠方へ送る文を守護してもらふ心から書かれたものであらうと思はれる。で、この芝居では、この文字を藝者の魂を示す三味線へ書いて心の誓をあらはしたのである。

本文は原本のまゝ覆刻して載せて置く。

姿花種七種（すがたのはなあさのなゝくさ）　六〇

〔解題〕寛政九年八月都座に於て四世岩井半四郎の演じた四季七變化の所作事で、その内容は左の通り。

春……小　町、手習子　　夏……座　頭

秋……傾　城、木賊刈　　冬……面かぶり、石橋

この中小町、手習子、座頭、石橋等は前の「杜若七重の染衣」のものと同じで、新しいのでは「木賊刈」が好評で、これが今日行はれるものゝ原作である。又「手習子」の稽古本もこの時のものが流布してある。でこゝには「木賊刈」を收める。詞章は謠曲の「木賊」によつて碎いてある。作曲者杵屋正次郎。長唄湖出市十郎・富士田千藏・スケ花形吾三郎等。

木賊苅

謠へ面白や梢は何れ一葉散る、嵐や音を殘すらん三下り市十郎へ木賊苅る合園原山の木の間より合磨かれ出づる合秋の月、露分け衣袖濡れて、牡鹿鳴く野の行末と、それは信濃路我は又、老を養ふ樂に、心を磨く種にもと半四郎セリフへハア頭を擧げて山月を望み、頭を垂れて見る地上の霜、浮世を秋の老の身も、昔を思ふ月の眺めぢやナア、「いさや木賊を苅らうよ合今宵の月を友として、昔話の獨り笑み鼓市十郎唄へ昔爺と婆とがあつたとさ、爺は山へ柴刈りに、婆は川へ洗濯に、互に跡を見送りて、山と川へぞ出でらるる婆は尾上を見やりつゝ、北山颪の烈しくて、さぞ寒からう愛しやと、我が身より尙爺殿の身の上思ふ諸白髮、打連れて急行く、へ俺が元氣はナア若い者にも合いつかな〳〵合滅多にや負けぬ、九十九折なるゑりくりゑんじよの山道なりと合いつかな〳〵滅多にや負けぬ、九十九折なるゑりくりゑんじよの山道なりと、足はしつかり腰を反して杖いらぬ浮世語となりにけり。



「ゆかりの月」表紙

めりやす ゆかりの月　六一

〔解題〕寛政十年春桐座、「着衣始小袖曾我」の第二番目大詰「澪標浪花眺」の吉田屋の段に用ひられためり

やす。

伊左衛門三世澤村宗十郎。作曲者杵屋彌十郎。この歌詞は上方歌の「ゆかりの月」と同文で、寛政七年正月刊行の「糸のしらべ」には本調子の部に收められてゐる。作者五瓶がこの歌をそのまゝ轉用したのである。

(本調子)へうしと見し流れの昔なつかしや (合仙十郎)かはい男にあふさかの關よりつらい世の習ひ(合下略)思はぬ人に塞きとめられて今は野澤の一つ水 (合仙)すまぬ心の(チ)中にもしばし 二人すむはゆかりの月の影(合)忍びてうつす窓の内、廣い世界に住みながら(合)狹う樂しむ誠と誠、こんなえにしが唐にもあろか、花咲く里の春ならば、雨もかをりて名や立たん。



「四つの袖」正本表紙

めりやす 四つの袖 六二

〔解題〕 前曲と同じ芝居の借座敷の段に用ひられたもの。作曲者杵屋彌十郎。この歌詞も亦前曲と同じ關係であつて「糸のしらべ」の三下りの部に收められて居るのと同文。

(三下り)へうき中の習ひと知らばかくばかり(合)花の夕(ゆふべ)の契りとなるも、始めの情(なさけ) 今の仇(合)いつそ逢はねばからした事

も、ほんにあるまいよしなやつらや 合 の涙の雨に、いとど朽ちなん四つの
あだに暮せし月日の程も、いはで思ひ 袖。

三重霞嬉敷顔鳥　六三

〔解題〕通稱「三重霞傀儡師」。享和三年正月廿五日から中村座興行の「松春壽曾我」第一番目大詰に出した所作事。曾我五郎(尾上榮三郎)が廓で化粧坂少將(中山富三郎)に髪を梳かせて居る處へ小林の朝比奈(坂東三津五郎)が傀儡師で人形を舞はしながら來て、道化た傀儡師の所作があるといふ仕組。傀儡師の所作は古く外記節以來江戸の芝居でも度々用ひられたのをこゝに用ひたのである。作者は櫻田左交。長唄芳村伊三郎、三絃杵屋正次郎等と、淨るり富本齋宮太夫三絃鳥羽屋里夕等とのかけ合。

淨瑠璃 さる程に時致十八年の天津風、そ 合 三津五郎 方出 淨るり へおはもじやまだ紅筆も初 見たくばお江戸へござれ、上野飛鳥のうらうらとして 自ら、雨にきくなる少 霞、未申ぐま巳午の間、向へばよろづ 花盛り、心ばかりで拍子さへ、阿波の將が、素顔も雪か化粧坂 榮三郎 富三郎出 歌 へ見 義盛が、髷つかぶりの大さはひ、こゝ 鳴戸も何くれと、小歌をこめて箱つどみえそめにしその日より、言はで思ひ までのたくり木偶まはし、お許しうけ み、手越の里へと浮かれ來る 此間狂言あつて拍子舞の十寸鏡、櫛笥の露にうつろはぬ心が てやつてくりよ 合方 歌 へすいてふゐいち るとな 三津五郎 エヘンエヘン 淨るり へかけまくも日本堤を花のかほよ鳥 此間榮三郎 富三郎セリフアリテ 淨るり へかゝ やがてやがて、すいやいいい、みんちやんお 天照かよふ神代の其昔 合方 三津五郎 へいはる處へ朝比奈が修行 のたいの傀儡師 てきやん、そふはらぎやんそふ、花が くす舟に突出しの、まだおいらんは若

惠比壽、ごんすやんすも白幣、間夫の男にあをにぎて、正月三日の揚屋入淨るりへ第三回目の事かとよ榮へしかもその日は全盛な事代主、惣仕舞神も色にはふかみ見草、廿日ながして惠比壽講歌へ夜も蛭子の床の内三蔵足立ち給はねば榮三へ天の岩戸の迎ひ酒、西の身あがり流連は、粋なおさんぢや、ないかいな三津へ二階もとん〳〵、内證もどんぐりの辻子宮川町榮三へ惠比壽の辻子祇園から榮三へかけてぞ頼む三津へ夕だすき淨るり結んで解いて釣竿の、糸より長き年のうち、羨しさに鶺鴒もかたい顔して浪枕、船乘りぞめも吉原や此間すがゞき三津へおせやれをのこ合一挺立三挺立歌へ見附箱崎くづれ橋此間拍子事三津へ椎の木ぢやはらつぽ、歌半分ぢやしつちやつぽ合ゆたのたゆたにこがれ行く、戀は曲者〳〵三津へ二人持ちし子寶の、惣領息子は大磯へ、通ふ千鳥の初紋日淨るりつか穗に出て尾花とならば、露が姤まへまだとりかぬる乙の雪、もどかしらんア、なんとしよ淨るりへ小倉の野邊の



「三重霞嬉敷顔鳥」表紙

しいぢやないかいな、箱の內外の口を惠比壽紙文に嬉しき樣まゐる、女子心忍び、二人から子に囁いて、廻し座敷を汲みもせで、ほんにいらへも茶種さを戀の闇歌へ小倉の野邊の一本薄、いへ、言はぬ色香の憎らしや榮三へ惠比壽

三郎左衛門祐經、歌へいつか神樂をうつつにも、我が念力の通れとて、三つ羽の征矢かつる柏、堅き巖に手束弓三津へこれ兄さん馬鹿らしいぞよ臺三へ心の內を言はぬが花歌へ十日夷のお宮には、鍵玉にたばね熨斗、はぜ袋にさい槌、立烏帽子入升俵、大判小判笹をかついで千鳥足浮るりへ見れば見る程よい花嫁の、心よさそなかみ様ぢや、心よさそに引かされて、今宵くるわの敷ぞめや歌へ綾が千反錦が千反、錦襴緞子紗綾や縮緬〳〵めん目出たい鯛を此髭が、釣つたる鯛を見さいなだモサ〳〵〳〵浮るりへあれ曉の明星が、ちらり〳〵と西の宮歌へ月もなさけに傾きて浮るりへはや東明の朝迎ひ此間セリフありてめた〳〵とめたわいなア歌へとめてとめ木のナアきぬ〳〵に、君が禿の袖袂合とめて梢の朝の雪、清見が關に三保の月、ちよつと湊へかゝり舟合方草摺引ありてへ面白や浮るりへ折から逃げ來る裸背馬、時致得たりと引寄せて、乘鎭めたる馬上の術、手頃の大根千里の鞭、曾我中村へと急ぎしは、ゆゝしかりける次第なり。宮三三津へと

法花四季臺　六四

〔解題〕文化二年三月三日から中村座の「全盛虎女石」の第一番目大切に出した五變化四季の所作事で、二代目瀨川路考の三十三回忌追善として三代目瀨川路考の演じたもので、その內容は次のやうである。

盧生……
- 春　鹿島踊
- 夏　螢狩
- 秋　黑木賣
- 冬　座頭

作者初代櫻田治助、作曲者は九世杵屋六右衛門。その中現存するは春の「鹿島踊」である。

鹿島踊

三下りへ晩の寝酒にやな、二合半買うてたもいの合俺らもいしごきでぐいと一杯しよんがえ合さても見事にサよう咲いた合花の春來べいとて常陸の國から諸國諸在所へ、ヤレ／＼ナさて／＼ナ、神のお告がござりや申す、おぢやりや申すとなアへ心うきすの宮若へ雨の宮にも通はんせ、風の宮にも通はんせ、月讀日和下駄がけで合通ふ十二のはしたなく合めがめをがめの乾く間も内外清淨ぞつこんそ様に、合要石合ゆるがぬ私を疑ふか、男一人を守らせ給へ、守らせ給ふ様が託宣へ御代はめでたのナア、ナア、エこれわいなへ御代はめでたのさんさ若松様よへおやもさ／＼へ鹿島浦にはナア、ナア、エこれわいなへ鹿島浦には寶木船がつんついた、おつやがとつ様抱いたら放すな辛抱どころだおやもさ／＼へ今年や世がようて、穂に穂がさいて、升にあまつて箕ではかる／＼、おかたがおいどがごつかくなつたと、こゑも高まの腹鼓へ鳴るかならぬか、ひいても見やれ合しめてよいのは緣結び、はづかしうござるおとましうござる．たび事お茶たて參らしよ、參りや腰膝くたびれ申す、こ



「法花四季臺」正本表紙

ちはご許しやれ、そべりや申すへすゞしめ給うて、女子の姿は春の花によそへて。

舞扇薗生梅　六五

〔解題〕通稱「舞扇」。文化三年十一月市村座「壯平家物語」の三立目に上方下りの女形市川團之助が白拍子佛御前で、清盛驕りの場へ女聟の姿で現れて舞ふ場に用ひられたもの、作曲者杵屋正次郎。長唄は芳村伊三郎伊四郎等。

伊三郎旋唄へ媚くや今も昔の男舞、返すや袖の折もよく、差手引手に白ら 木調子へあの山見さい 合この山見さい 合曙匂ふ紫の、引くよ霞も所縁とて、春告鳥も花に來て、謠へや謠へ梅が枝 伊三郎へ春の心地や花の顔、見せつ見られつその日より、千代も逢瀬の姫小松 伊三郎へ三度もくどう返す書、思の奥ぢやないかいな、逢うてふ夜半も言へばえに、殘る霜夜の鐘の聲、恨み勝ちなる時雨時、君に扇の要の契 合雪の白地は扇の緣、

班女が閨の花扇、その檜扇の翳の袖に、ひらり／＼木々の錦や縮に書く山の櫻花、散らぬ嬉しさ何時迄も、扇車のくるり品よく廻れ、末廣かけて開く八千代の手馴れ草へ青海波濤青海の、元より鼓は波の音、打つなり／＼長地にも、結び柏の妹と脊は、色も變らぬ松と竹、枝を鳴さぬ御代なれや、萬歳とぞ舞納む。

濱松風戀歌　六六

〔解題〕通稱「濱松風」。文化五年八月中村座興行の「行平磯馴松」の大切に出した所作事。作曲者九代杵屋六左衛門。配役、長唄はやし連中は挿畫にある通り。

濱へあはれ古を思出づれば三下りへ懐しや船路長閑き海原や四海の波を汲みて知る、見れば月こそ桶にあり、月は一つ影は二つ滿汐の、よるべ渚に立出で、いさやや汐を汲まうよ、磯馴松の夕煙り、三年は此處に須磨の浦、寄せては返す片男波、それは行平さんを合待明し波に漂ふ捨小舟、漕がれて渡る甲斐もなしへ待つはつらいと皆おしやんすけれどもナ、忍び待つ夜は樂みに、締めて寝松と二葉の松の、仲に小松と思ひしに、それ〱〱さうぢやえ、松に添寝の蔦葛へ慕ふ心はナ、皆元通り今宵やいのと文柿の本、首尾を見合せ逢ふ中臣の、最早夜半は權中納言合様に別は坂の上の是則様への心中立、おうよい事の〱へ恨み顔にてナ何にも言はず、壬生の忠岑氣を春道の、つらき憂身に大江の千里、假令何方が水差さうとも合深い縁は在原の業平様への心中立、おうよい事の〱、磯馴松の懐しやへ松に吹來る風も興じて、須磨の高波烈しき夜半の山颪、さらり〱さら〱〱合關路の鳥の聲々に、夢も跡なく夜も明



「濱松風戀歌」表紙

けて、村雨と聞きしも今朝見れば、松風ばかりや残るらん、〳〵。

美面(みめ)より　六七

〔解題〕　文化六年十一月市村座興行の「貞操花鳥羽戀塚(みさほのはなとりはのこひづか)」方一番目五立目に二世澤村田之助の淡路島蜑小磯での出し物。作者櫻田左交。作曲者二世杵屋正次郎。「人は美面より」の諺に淺草馬道の菓子「美面より」を利かせた趣向の作。「嬉遊笑覧」卷十飮食の部に「金鍔(きんつば)と同じ物なれども四方を燒たるを、餡を常のよりはよくして、みめよりと名付しは淺草の馬道に始て出たり、享和の頃にや、予が先人なども知りたる者の思ひ付なりし、そは程なく無くなりしかども、其名失せず所々にこれを作る、その頃(元はなくなりし後なり)澤村田之助みめよりといふ歌を所作事にしたり」とある。

鼓唄 へ姿の花の香に迷ふ 三下り へ姿の花の



「美面より」正本表紙

香に迷ふ、浮氣ぞ戀のひと盛り、美面よりは心の色や誠なれ、見やしやんせ梅の笑顔も美しい仇な櫻に皆さんが、つい移り氣の八重一重、咲いてゐる時や明日もと言うて、逢はぬ夜の間にどこへやら、誘ふ嵐に散るわの 伊十郎へ松の契はいつとても、霜がかゝろと深雪が降りよと、操すゞしく立て通し 四人へ變らぬ色の深緑へとても戀路に遊ばゝ吉原猪牙で押させよか、四つ手で飛ぼか 合 木幡の里ぢやなけれども、風味馬道召せやれ〱 合 家づとによい世の中も人は美面より。

奉掛色浮世圖畫　六八

〔解題〕文化七年八月中村座に於て「道中娘菅笠」の第一番目大切に出した所作事で、曾我蛇足の筆勢として武内大臣から小原女（中村歌右衛門）平惟茂（澤村源之助）神功皇后・廓のかむろ（瀬川路考）戸隱山の鬼女（坂東彦三郎）おそめ猿（瀬川多門）女猿曳（瀬川化女）等が出て色々の所作事をする仕組で、長唄と富本との出し物であつた。この中で長唄の三世歌右衛門の小原女でお多福面の踊から引拔いてひげ奴の所作が好評であつたが、それが今も「小原女」一名「黑木賣」として殘つてゐる。作曲者は九世杵屋六左衛門。

小原女　（黑木賣）

三下リへわしが在所は風雅に出でて、むくつけにねまるべいと、岳らふならば嬉しかんろの、桃や柿がぶらさがり、九十九疋のいぢわる猿に、おつ立てられても笑はれても、根こんす惚れたが性根ぢやえ、黑木買はんせ黑木召せ 合 方へ戀には八瀬の里そだち、軒の簾のゆかしさは、玉だれ髮を取上げて誰に見しよとて夕化粧 喜三へわしが器量はほめもせで、姿がよいの生え際が、よいの口説に無理なひぞりごと 下へわしほどすぐれた女子をば、嫌ふお前の氣が知

れぬ〳〵　合三へエ、女子冥利が盡きよ
うそえへ機嫌直して君と我、倶に落ち
よもの我が里をへとかく思ふやうにな
ア浮世がならば、可愛い殿御と野の末
迄も、糸もくります機織虫よ　此間虫の合方へ誰
を松虫こがれてすだく、つゞれさせて
ふ馬追虫の、長き夜すがを啼き明かす
〳〵、草葉にすだく鈴虫のふるやふる
野の　三重合方　鐘踊二上り　へ振りやれお振りや
れ、へうきん男の又とない〳〵一代奴
合ありやんりや〳〵　合こりやんりや
〳〵何でもせ　合へ國で評判男山　合方へ御
國堺の松の木の下り枝あぶない〳〵　合
お腰をかゞめて〳〵　合振りやれ〳〵其
月雪や花の鐘、見事にさ　合開いてさ　合
見事に開いた振もよし、引かば靡かん
松の木ごしよ振れさ　合振れさふれ〳〵
〳〵お先揃へて殿は所知入　合方　手踊へだ
めな事ばし言はしやるな　合あすは關東

さへまかるべいちやな、やれサテナぬ　さ別れちやアなア伊勢路へあんちうち
しさ別れちやなア伊勢路へあんちうち　くだぶんぬまやるさア池のどん龜なら



「小原女」正本表紙

くだぶんぬまやるさア池のどん龜なら　むんぐるべいとはヤレサテじつだんべ
むんぐるべいとはヤレサテ實だんべい　い〳〵へ掛け奉る寶前に、名筆名畫の徳
〳〵　合へいけすか女郎衆の旅立さ主　は目前、今目の前に　合ほかに中村人の

歌右衛門。

きのふ見た日に
めづらしき櫻かな

七枚續花の姿繪　六九

〔解題〕文化八年三月六日から市村座の「盬話水滸傳」の第二番目大切に出した三世坂東三津五郎の七變化の所作事で、作者は二世櫻田治助、作曲者は二世杵屋正次郎。七變化の內容は左の通り。

女三の宮……常磐津
梶原源太……常磐津
汐汲……長唄常磐津かけ合
猿廻し……長唄
願人坊主……常磐津
老女……長唄
關羽……常磐津

この中で長唄としては「汐汲」が今でもよく行はれるが、序に他の「猿廻し」「老女」をも收載して置く。

猿廻し

榮の祝ひ唄、黄金枡にて米量る、人も　手の景色も今更に、人目を包む頰冠り、
計りて山々を三つ大の紋夜の泊は何處　行かんとするを　セリフへこれなア　へはまり
二上りへさてもめでたやめでたやな　合へおが泊ぞ、室か明石か何處であろ、室が　易きは粋の淵、深いものぞと思へば胸
猿も共に脊に負うたる猿廻し、御代の　泊の花の顏、浮れ／＼て來りけり、土　も、セリフへエ畜生め　伊十郎へほんに　心の遣

瀬なや 吉四郎へ今はこの身に愛想もこそも、月夜の空や鳴く鳥 四人へ辛氣らしいぢやないかいな、先駈けも兄と嘗へん梅の花、氣まゝ育の枝振さへも 合笑ひ上戸に紛らせて、仇な微風留木の香 合エ、泊らんせ 伊十郎へお猿はめでたやなへ婿入姿ものつしりと〳〵 セリフへさりとは〳〵へのほよほよほよほえあろかいな、さんな又あろかいなへ嫁御の晝寝もころりとせい〳〵、ヤアハアえいあろかいな、さんな又あろかいな、起きたら互に抱付きやれ、オ、それで機嫌が直つたぞ、キヤツ〳〵えいあろかいな、さんな又あろかいな、くるりと飜つて立つたりな、立つてくれこれ〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵立たしやませ、序に日和を見て給もれ、よい女房ぢやに〳〵、ハアのほよほよほえ、あろかいな、さんな又あろかいな 合日和を見たらば落ちてたも〳〵へお猿はめでたやな 四人へ心の駒も引留めお猿めでたや潔や、意馬心猿もかくやらん。

老女

本調子へ九重の花の昔か夕の月か 合雲井に殘る面影も散りぼひ添ふる袖の露 伊十郎三下りへ極樂の内ならばこそ惡しからめ 合この世はかりの夢の花 合四人へ現に散りて百年に 合一年足らぬ九十九髮、か〻る思のあればにや、羅綾の袂引替へて、苦に垢づける破れ衣 伊十郎へ憂き節繁き呉竹の 吉四郎へ杖に縋りてよろ〳〵と、立出で見れば逢坂の、關の淸水に影映る、老の姿はあさましや、哀れ果敢なき身の行方 伊十郎鼓唄へうつし心と世の人の、何とよ我を 合狂はする 四人二上りへ肩に小袋腰に付けたる菅笠、忘れたり扇破れ素紙子の 合しやんと着成いたよのちよつと着馴いた 合誰は留めねど關寺の、庵淋しき 合明暮は、夜半の嵐や誘ふらん へ我も昔はナアなん〳〵情につれなうて心盡しに通來る、百夜忍ぶの深草も 合一夜があだしその恨、今では 合さりとは〳〵賴むものには 合杖ばかりうたてさや へ言葉の花の色も香も 合三十一文字や戯の、佛の衆生方便に、卒都婆何かは苦しかるべき。

汐汲

淨瑠璃へ松一木變らぬ色の印とて、今も榮に在原の 二上り唄四人へ形見の烏帽子狩衣着つゝ馴れにし面影と 淨瑠璃へ映し繪島の浦風に 唄四人へゆかしき傳も白波の寄する渚に世を送る 唄伊十郎へ如何にこの身が蜑ぢやと云うて、辛氣辛氣に袖濡れて 淨瑠璃へ何時か嬉しき逢瀬もと、

君にや誰か黄楊の櫛、差來る汐を汲まうよ 合 波分けて 唄伊十郎へ見れば月こそ桶にあり 浄瑠璃へこれにも月の入りたるや 唄吉四郎へ月は一つ 浄瑠璃へ影は二つ三つ 唄吉四郎へ見られつも雲の上、此處は鳴尾の松蔭に、月を荷うて 四人へ休ひぬ 浄瑠璃へ見渡せば面白や馴れても須磨の夕間暮漁る船のやつしつし、波を蹴立てて友呼交す、はんま千鳥のちりやちり〳〵ちり〳〵やちり〳〵ちり〳〵ぱつと鹽屋の煙さへ 唄四人へ立つ名厭はで三年は此處に、須磨の浦曲の松の行平立歸り來ば我も木蔭にいざ立寄りて 浄瑠璃へ磯馴松のなつかしや 唄四人へ形見こそ今は仇なれ見初めて 初めて 伊十郎 逢うたその時やつい轉び寢の帶も解かいでそれなりに、二人が裾へ狩衣を、掛けてぞ頼む睦言に 浄瑠璃へ可愛い鳥のエ、何ちやゝら泣いて別れよか笑うて待とか、待たば來んとの約束を 唄伊十郎へ忘る〻隙は 浄瑠璃へない 唄伊十郎へわい 浄へな へほんに指折りその日唐傘待つに長柄の辛氣らしそれ え〳〵 唄へ氣を紅葉傘 唄四人へそれから深う言交島の 浄へ水も漏さぬ仲々は 唄へ濡れに寄る身は傘さしてござんせ 合 人目寒き笠何時青傘と 浄 白張の殿御に操立傘も相合傘の末かけて 浄へ誓文眞實端折傘と云はれたら思も開くばんな傘 唄へしをらしや 浄へ暇巾



「汐波」正本表紙

して歸る波の音の 唄へ須磨の浦かけて や 淨へ殘るらん松の噂は世々に殘るら
村雨と聞きしも今朝見れば松風ばかり ん。

遲櫻手爾葉七字　七〇

御ひゐきにすがる
花の 見臺

〔解題〕文化八年三月十五日から中村座「年々歳々砂石川」の第二番目大切に出した三世中村歌右衛門の七變化所作事、地の音樂はすべて長唄で、傾城（かりそめの傾城）、座頭（官に登る座頭）、業平、越後獅子、橋辨慶、相模蜑、朱鐘馗から成立つてゐる。この中で今日行はれるものは傾城、越後獅子、相模蜑等であり、殊に越後獅子は有名である。

丁度この月市村座では前掲のやうに六日から三世三津五郎の七變化で、その「源太」の中で「今年やかぼちやは當り年」といふ句で、歌右衛門は憤慨して、急拵へに七變化を組織して十日後れて十五日から本曲を出す事となつたので、こゝに所作事の名人が兩座で七變化の競爭の姿となつたが、結局中村座の方が勝つて市村座は中途で興行を中止し、中村座は四月廿九日迄打續けた。この有名な七變化は全部長唄であるから、廢曲になつた詞章も併せ掲げて、變化物詞章の相互關係を見る參考に供しようと思ふ。

序に一言して置き度いのは「越後獅子」の中の「しらうさになる」といふ文句で、先年私は再板本に「しゝうたになる」（獅子唄になる）とあるのを見て、さうかと思つて居たが、此頃寛政七年正月大阪柏原屋與右衛門板の「琴曲糸のしらべ」の三下りの部に出てゐる「越後獅子」を見てその誤りを知つたから茲にこれを訂正して置き度い。その越後獅子の唄は後の文政の「時習考」にも出てゐるが、說明に必要な前半をこゝに引用する。

こしぢがた。お國名物さき〴〵なれど。田舍なまりの片言まぜり。しらうさぎなることのはに。面白そなこ

とを ゑゝ浦の海士の子がなゝつは八つ目うなぎ迄。うむやあみその綱手とや戀の心の米山のとをき浮氣でわうれんの名に糸魚川いとうをの。合もつれもつるゝ。くさむらの油賣る人まじはりて末松山の白布の。ちゞみは肌のどこやらが。見えすく國の風流を。うつし太鼓や笛の音の。ひいて唄ふや獅子の曲（下略）

これが長唄の「越後獅子」の元唄であらうとは一讀すれば直に首肯される。處で問題の「しらうさになる」は元唄の方には「しらうさぎなる」とある。これは「白兎なる」である、そして白兎は越後の名物だから、この句は白兎と同じやうに越後名物で、お國自慢になる言の葉の意味に解せられる。これなれば意味は取れるので、結局私は轉訛して意味不明となつたものと解釋し、出來る事なら元唄の文句に戻したらと思ふ。

傾城（假初の傾城）

二上り へ假初の夢も浮寢の徒枕、又何時かはと思ひやはなき 合 うつら／＼と眠る蝶、戀の胡蝶の袖ゆかし 合 誰が玉章を繰返し、卷返しぬる筆の文 合 これも前生の約束と、思や思ふ程愛しうてならぬ、何とせう、馴れし郭の春霞、立つや彌生の花の頃、ちよと見初めし打掛に何時迄草のしつけその、思ひ亂るゝ玉柳、又吹返す折もがな、あらば嬉し春の風 合 三下り へ閨の扇はなア皆繪空事、逢は

ぬつらさを焦るゝよりも、逢うて別るゝ事こそつらや、秋の扇と捨てられて／＼、私やどうもならぬえ、何と思うてゐさんす事か、ゆるがぬ様に要が大事、サアさうぢやえ 合 手折りもやせん人心、流の水に誘はれて、浮氣に靡く郭の鐘、聞けば心も澄めやらぬ 合 宵の口說に無理な私語、言はず語らず胸迫り、豫て退かうと思うてゐさんす心かえ、さうかいな／＼、惡性男の面憎や、オ、好かん／＼、品よく扇取る袖も、風に靡かん我が心、引くは嬉しき君が

つま琴。

座頭（官に登る座頭）

三下り へ官に登ると歩行から行けば、道のときとて瓢箪酒をくれた情の露時雨 合 守口の端で飲みじまひ、人の噂も七十五日 へ帶の牧方おぢやれが招く、せめて一夜は天の川、泊らんせ泊らんせと、言ふ口ちよつと嘗めたら惡い事しなさんな、振袖かもし詰か、但し年增がお好きかえ、見取りにさんせと言うたれば、否々我は水に住む蛙に往な

うと言うたれば、どつこいならんと後から、袴の腰板引摑み、振廻されて水車、淀から伏見へ一飛びに、越した鳥居の角の玉屋で休んだ床几のおりがへり、草臥足なら駕籠よかろ、合駕籠借らんすか駕籠擔くのぢや、雲が先肩日なし鳥が後肩ぢや、ハイ頼みましよ〳〵合杖に及ばぬ一散走りに下り船ぢやが合點か〳〵、艪を押せ〳〵二挺だち、エ、イエ、イエイエイえつさつさ合船は女子にあの似たりとうい〻しもな、嫌な嵐もひらきに受けよ合思ふ方へと入船なれや、エイ〳〵〳〵エ、〳〵〳〵さうぢやえ〽忍ぶその夜はナ杖突きのの字がおきらひか、杖突きのの字が嫌ならば探りながらもお寢間の後から行こかいな、サアサ行こかいな、それでもヤハ、戀にや日のない通り者と譽められた、野暮で浮世が渡られよか、それもさうかいな〳〵〳〵、氣も輕々と見えにけり〽浮れ者ぢやと惡戯するな〳〵、惡戯しやると浮名の種よ〳〵合止しやれ離しやれおしやれ許しやれ。

業平

三下り〽九重の都の空を立出でて、野にも山にも春霞合月も朧の旅路かな、古跡に暫し轉寢の、歌枕せん名所や〽唐衣着つ〻馴れにし妻しあれば、遙々來ぬる在原の態も形も風俗も、一際目立つ透額、伊勢や尾張の海面に、遠山松の色こそ勝れ藤波の、名に打寄する津の國の、鼓が瀧を打見れば、下にはたんぽ〻の音も澄渡り〽元より鼓は波の音、千里も通ふさつさ小波女波男波が打寄せ〳〵、青海立つ波高波四海波風どう〳〵〳〵、磯打つ波に揺れ揉れて、さらり〳〵さら〳〵〳〵、打つや鼓の拍子に連れて面白や〽名殘は盡きじと夕煙、遠村里へと急がばや、露けき袖を打拂ひ麓をさして入りにけり。

越後獅子

三下り〽打つや太鼓の音も澄渡り、角兵衛〳〵と招かれて、居ながら見する石橋の、浮世を渡る風雅者、謡ふも舞ふも囃すのも、一人旅寢の草枕、俺が女房を譽めるぢやないが、飯も炊いたり水仕事、麻よる度の樂みを、一人笑みして來りける〽越路潟お國名物は様々あれど田舍訛の片言交り、しらうさになる(校訂者曰「しらうさぎなる」の訛か)言の葉を、雁の便に屆けてほしや合小千谷縮の何處やらが、見え透く國の習ひにや、縁を結べば兄やさん合兄ぢやないもの夫ぢやもの　吉右衛門〽來るか來

るかと濱へ出て見ればノウほいの、濱の松風音やまさるさ、やとかけのほいまつかとなへ好いた水仙好かれた柳の、ほいの心石竹氣は紅葉サやつとかけのほいまつかとなへしんく甚句もおけさ節、何たら愚痴だえ牡丹は持たねど、越後の獅子は己が姿を花と見て、庭に咲いたり咲かせたり、其處のおけさに異な事言はれねまりねまらず待明す、ござれ話しませうぞこん小松の蔭で、松の葉のよにこん濃かに、彈いて唄ふや獅子の曲へ向ひ小山の紫竹竹枝節揃へて切を細かに十七か、室の小口に晝寢して、花の盛りを夢に見て候へ見渡せば〳〵、西も東も花の顔いづれ賑ふ人の山〳〵へ打寄する女波男波の絶間なく、逆卷く水の面白や〳〵へ晒す細布手にくる〳〵と〳〵いざや歸らん己が住家へ。

橋辨慶

三下り　へ三塔一の荒法師、その名は四方に隠れなき、七つ道具を飾立て、武藏坊辨慶は五條の橋桁蹈鳴らし、ゆらり〳〵と出でたるは、ちと〳〵自慢で我が身ながらもぞつとした、鬼神よりも怖しや、避けぬものこそなかりけりへ先づ宵闇の暗紛れ、もしや總嫁の口明に、そつと後で袖を引き、コレ申し遊ば



「越後獅子」表紙

んせ、一切り遊んでお出でんか、お僧様え、すはや痴者ござんなれ、これ程の小童合ひつてうともひつてうべ、擔ぐとも擔ぐべい、才槌で打つてくれよ、鐵棒で毆立て、鋸で引切るべい、熊手で搔寄せよく〳〵見れば女子、我は出家、夜陰の見參、笑止氣の毒、何と所作も荒けなき、辨慶も心浮かれて扇を開きへやんれかゝれ〳〵かゝれ〳〵引綱、元來國元は關東の生で、今年始めてやア役にさゝれて熊野の山へ登つた、熊野のお山はしほが七里八里九里から十里から、峰から谷からあれからこれまで、えんやらやつさら〳〵そろ〳〵〳〵〳〵、引出した松の木の大木、そこで若衆見事に揃うた如才はござらぬえへ既にその夜は明方の、月の出汐と辨慶は、柄も四尺刄も四尺合せて八尺の大長刀、眞中摑んで飛上り、風にかつ散る花車、よしや吉野の花吹雪、目覺しかりける次第なり。

相模蜑

二上りへ在所ながらもナめん名所がござる、相模女子の笑顔もよしや、振袖の模樣は濱の貝盡し、目籠に拾ふ海松房のふりさけ見ればまん〳〵〳〵と、月も宿借る武藏野の、空も一つに契りこし、眺に飽かぬ景色かなへ晩にや待たしやんせ、御器洗うて仕舞うて、牛に水くれうと言うてでん出合をのらさ嫌なら磯端でなりと、苫を敷寢の舵枕、戀に焦るゝ遠帆の鷗、波に浮寢のその仲々は、番離れぬ戀すてふ、あれあの花を見るにつけ、何故に見捨てて歸る雁、跡は嵐の吹こともまゝよ、花吹雪合雪の吹雪は富士の峰合それを見や、見てから〳〵、戀にや心もなかず〳〵のお詞に、ハッと騙されてそれで寢もせで泣や明す、これ誠に瀟湘の夜の雨にも濡れて來るへ千兩取るとも馬方止しやれ、なん何故に、腰にや馬柄杓手にや又煙管、吸付煙草でじらすのか、此方の大事の男をば、ほてつぱらめ何とするエ、何とするのぢやえ〳〵、唄ふ小唄の貝盡し　三下りへ君が姿を見初めて初めて、引く袖貝を打拂ふ、戀は蚫の片思ひ、徒し徒波櫻貝、櫻の花貝その身は粹な〳〵、す貝は男の心、此方は姫貝一筋な女心はさうぢやないかいなへ何時か仰を常節に、逢うて離れぬ蛤の、その月日貝馬蛤貝と、言ふを賴の妹脊貝、未だ戀に板屋貝へ日も早や西に入相の、極樂寺の鐘の聲、耳を貫くばかりなり、由井が汀に寄する波峰の嵐に揉合はせ寄する波はどう〳〵どつと〳〵打つてはさつと引く日本無雙の

名所や、雪の下へと急ぎ行く。

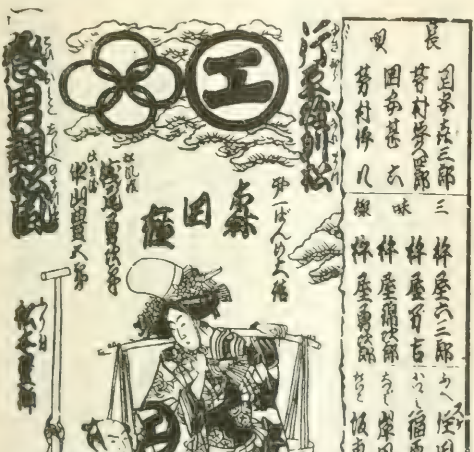
朱鍾馗

三下り へ寶劍の影凄じく、日月梢を拂ふが如くなり 合 惡鬼の亂れ切拂ひ、國土を守る誓の形相 合 實にも鍾馗の 合 精靈の、映るが如きその姿、惡鬼の眷族齒たり、風を起せば自ら、山川忽ち震動噛をなして、身振ひしてぞ居たりける す、人かと見れば人ならず、神かと見へ天に現はれ地に蟠りて、國土安穩 ればさにあらず、果敢なきものは陽炎とその名は代々に輝けり。

戀男調松風　七一

〔解題〕 通稱「勇次郎汐汲」又は「調松風」。文化九年六月森田座興行の「行平磯馴松」の第一番目大詰に松風（沈尾勇次郎）と此兵衛（中山豊五郎）とで演じた汐汲狂亂の所作事で大出來であつた。作曲者は四世杵屋六三郎（後の有名な六翁）で、前に出した三津五郎の「汐汲」と共に今日もよく行はれる曲である。

三下り へ妻琴の音色もこゝに松風や 合 心盡しの形見とて、その面影の派手姿 出 へ訪はるゝ人も戀しさに、寄るべも遠



「戀男調松風」表紙

き磯傳ひへ汐の重さは堪へもせうが、戀の重荷は遣瀬なや、エ、何とせうぞいなアえへ跡に男波の聲高く、共に浮立つ蘆の葉の、まだうら若きとりなりに、連れて濱邊を歩み來る 添ガカリ喜三郎へ旅人は袂涼しくなりにけりへ關吹き越ゆる須磨の浦風の便も空嘯いて 合 結ぶ煙は鹽釜に、胸のくまこそ添ひぬらめ 喜三郎へ月の口說か螢の悋氣、縺れ縺れて解けかぬる、君が一夜の情はつらや 合 結句思ひの増鏡、今は恥し亂れ髮、取上ぐる間も荒波の、寄せては返す遣瀬なや へ戀の奴のそれならで、悄てらしさの顏わいの 此間セリフへ首尾を船首にそと舵枕え 合 拗ねた錨は沖の石ぢやといの、しよんがいな へ思ふ片帆にちよと寄る波のえ 合 花を咲せし床の海ちやといのしよんがいな へ面白やあら恥しの我が心、狂ふ濱邊の松に等しきこの姿 合 とても離れぬ一念の 合 徹れと峰の雲の袖、忽ち風に裏返り／＼てはさながらに 合 へ形は慕ふ戀衣 合 既に焦るる舞の曲 此間舞へ波の鼓の音高く躍る眞砂のどう／＼／＼／＼、勢ひ告ぐる須磨の浦 合 千代を壽く松の枝振り。

戀罠奇掛合　七二

〔解題〕　通稱「犬神」。文化九年十一月森田座の顏見世狂言「雪吉野來人顏鏡」の第二番大切に出した所作事で、太平記の世界に楠狐と犬神とを取合せた趣向で、粟生左衞門賴賢（七世團十郎）が犬に追はれた狐を助けて、その狐が落して行つた寶珠を拾つて歸ると、その子狐なる楠の千枝狐（五世半四郎）がそれを取返さうとして館に入り、賴賢の愛妾となつて居ると、長崎勘解由左衞門爲基實は犬神遣ひが上使となつてこの珠を奪ひに來たが蘭奢待の名香の爲にその本性をあらはし、同じく狐の姿をあらはした千枝狐と珠の奪合となるといふ仕組である。作者は二世櫻田治助で、長唄と豐後路清海太夫（後の淸元延壽太夫）等とのかけ合で、長唄の作曲は初代杵屋正次郎である。出演者の連名は挿書に詳しい。

江戸の顏見世狂言で犬神を仕組んだのは、安永五年十一月の森田座の顏見世狂言「誘知矢聲太平記」（中村重助

作）の大切「雪尾花夜常」であらう。これは長唄の松永忠五郎と大薩摩主膳太夫とのかけ合で、わり酒賣實は長崎勘解由左衛門（初代中村仲蔵）、博多入梅左衛門實は楠正成（四世松本幸四郎）、入梅左衛門妾濡衣實は博多小女郎狐（四世岩井半四郎）。仲蔵がわり酒賣となつて博多の館に入込んだが蘭奢待の名香の薫で犬神づかひの態をあらはすと濡衣は小女郎狐の本性を現して親の敵を討たうとするといふ趣向である。この外に寛政十年十一月中村座顔見世の「花三升吉野深雪」の四立目に出した常磐津浄るり「錦着戀山守」も亦犬神を取合せてあるが、本曲の原據となつたのは前述べた仲蔵の犬神であると思ふ。參考迄にその場面の繪をこゝに掲げて置く。

浄瑠璃へ蠅營たる狗苟と韓非に截せられし、（校訂者曰これは、韓退之の送窮文中の「蠅營狗苟驅去つて復還る」の誤用）卷尾けんてい　白ら、この身に受けてあさましや　唄へ我も北斗を拜しては、心のまゝに姿をも、うつすや池の水鏡、かづく玉藻に梳るその通力も忽ちに浄るりへ蘭奢の香の馥郁と、かをりに恐れ本性を　唄へ見るに恐さも忍ばれず、野干の形現せし　浄るりへ果敢なの己が有樣や　詞へ野末の草の葉隱れに、葛の恨の恨めしく、親の敵を現にも、夢にも忘れ遣方も泣いて明してくよ／＼と、焦れて燃ゆる狐火は　浄瑠璃へ焔となつて去りや



「雪尾花夜常」(大切)の場面
(清長筆「誘知矢摩太平記」より)

らぬ煩悩の犬の如何にせん、絆に繋ぎ絡はれて、臥して見寝て見執着の、徇去りやらぬ思に寄り 唄へ我は化けたと面影を、慕ふに餘る口惜しさ酬はんものと立寄れば 浄瑠璃へ毛衣さつと振亂し、眼鋭に息卷きて、寄らば喰はん勢ひに 唄へぱつと飛退き振返り、エ、言ひがひもなき涙の雨の、はら〳〵はつと目に添ひて、かゝる憂き事なき身ならば、花を飾りて品繕うて 伊十郎へ嫁入〳〵里の子に囃立てられしつぽりと、露のかごとを草枕、一人寐の床の内 浄瑠璃へ眠るとすれど犬塚の、ちやつと起立ち身を振る尾花 唄へ此方は尾を卷き狙ひ寄る 浄瑠璃へ寄せじと猛れば 唄へ飛退いて瞋恚の劍 浄瑠璃へ憤怒の牙 唄へ研立て 浄瑠璃へ研立て挑み合ふ 鼓唄へ親の別のその場より所定めずうろ〳〵と、戀しゆかしはさながらに へ人間よりも百倍の、思ひ重なる胸の内 合浄瑠璃へ仇も報も白眞弓、犬追物や、唄へ鼠罠かゝるも知らぬ輪廻に引かれ 浄瑠璃へ引かれ〳〵て 唄へさらじと耳逆立て吼れば 唄へ叫んで駈向ひ、浄瑠璃へ追つつ 唄へ返しつその風情、往なうやれ我が故郷へ戻ろやれ 浄瑠璃へそは言へ親の恨の咎と菊押取り打つてかかれば 浄瑠璃へ寄付けず、貞女を守る張然犬、楊淸李信が犬とても、かくはあの名玉をと立ちかゝるを、賴賢やらじと引留むる 合唄へ千枚狐が歸り咲き 合浄瑠璃へ姿の花や六の花 合唄へ木毎の花の顏



「戀罠奇掛合」正本表紙

見世は、めでたかりける次第なり。

世話時代 年中行事 四季詠寄三大字（しきのながめよせてみつだい）　七三

〔解題〕文化十年三月五日から中村座で演じた三世三津五郎の十二ヶ月の所作事。内容は

正月　吉書始　傾城（長唄）　二月　半田稲荷坊主（長唄）
三月　雛人形　業平（富本）　四月　初鰹いさみ（富本）
五月　飾兜　虎狩（竹本）　六月　祭禮臺所唐人（常磐津）
七月　踊　田舎ごぜ（常磐津）　八月　龜戸祭　俄鹿島踊（長唄）
九月　月　木賊刈（長唄）　十月　爐開使　屁奴（富本）
十一月　雪・鷺娘（唄、常、かけ合）　十二月　亙時金太郎（長唄）

この中長唄として今日行はれるのは「傾城」（門傾城）「半田稲荷」「俄鹿島踊」等である。
「鷺娘」は前に掲げた菊之丞の鷺娘の改作であつて、今日は行はれないが、参考として載せて置く。

傾城（門傾城）

本調子へ門（かど）に立添（たてそ）ふ呉竹に松の位のしどけなく、間夫（まぶ）は勤（つとめ）の憂晴（うさばら）し、此方（こなた）故なら私（わし）が身を 合捨てるも二重三重（ふたへみへ）襷、かけてもほんに變るとは、言うてもおくれなつく〴〵と 合思（おも）ひや勤（つとめ）の嬉しい縁、此處（ここ）より外（ほか）で主（ぬし）に何時（いつ） 合逢はれぬ仲に誓交す 合上々様（うへ〳〵さま）の痴話文（ちわぶみ）も、別に變らぬ様（さま）参る、ついたらされて女氣の、辛氣（しんき）〳〵に容眺めへ霞む夕に見渡せば、土手を四つ手の通ふ神、淺茅が原の月の夜も 合待乳（まつち）に濡るゝ雪の日も、來るとは梅に鶯の、ほうほけきやうのほの字とは、知つてるながら水に住む、恥

しの初蛙エ、しよんがえへ更けて寝る夜の閨の戸を、叩くは夏の水鷄が打つとは秋の狹衣か合袂に殘る移り香を締めて、伏籠の埋み火に邊の春のうら若菜七種添へて幾千代も、榮え榮うる例かな。

半田稻荷

へひよつくりひよ合〳〵合ひよつくり〳〵ひよひよつと出でたる修行者の合辰巳上りの一調子、疱瘡も輕い痲疹も輕い、祈るは葛西金町の、半田稻荷の幟竿、意氣地に立てる三圍や合その妻乙合に玉子さへ、つい後朝の烏森、別れに後の一杯が杉の森やら千鳥足しどろもどろに來りけるへア、醉うた〳〵五勺の酒に一合飲んだら出來心へつい袖引いて轉び寢にこんなこの子のいたいけ盛り、ねんねこせい〳〵ねんねが守は何處へ行た、山を越えて里へ行た抱けば泣出す下せばじれる、お猿が守とはこの事か、願かけたる色色の繪馬も榮あり午祭へ姉も妹も仇者で、私に罹ことじやらついて、實かと思へばつん逃げた合俺が來た時や來もせずに、奴が來た時や酒飲んで、泣いたり笑つたり嘘つきめ、縮めろやれ〳〵中の綱合ヤアわつさりと毆りかけ何でも此方の方々合赤いものに取りては、南蠻辛子唐辛子、取上婆が右の手、未も赤いは山王の櫻の木にお猿が三萬



「四季詠寄三大字」正本表紙

三千三百三十三匹下つた、お猿のお尻は眞赤いな、ヤア締めろやれ締めろと、春の幸先もよしや世の中面白や。

俄鹿島踊

へさても見事な神勇め 合思寄せたる宮雀鈴振る袖振る振もよし、態も吉原全盛遊び、浮れ〳〵てこれわいな 合御代はめでたの何々なアえ、これわいな、御代はめでたのさんさ若松様よ、枝も榮えて葉も茂る、鹿島浦にはなん〳〵なアえ、鹿島浦には寶船がつん着いた 合波に黃金の花が咲く拍子とり〳〵來りけるへこれは廓の色競べ、花魁道中の道中は、雪の素足の雪の顔へヤレ富士の白雪は朝日で解ける、解けたらどうしたえ、娘島田はサア寢て解ける、その取持は幇間、練るか練れぬか粟餅の、これは根元名代〳〵 合私はこの臼お前は手作 合思ふ所をとんと突こ、突くべいと思へど、其方の顔見りや手を突く、臼と杵との拍子よく、これも俄の里神樂、廓の遊ぞ面白き。

鷺娘（常磐津との掛合）

作者瀬川如皐

浄瑠璃へ妄執の雲晴れやらぬ朧夜の、戀さへ更けて鐘凍る峰の吹雪に風寒く、結ばぬ夢か幻に、立つ甲斐もなき妹脊鳥、雪の上毛の濡れ翼、暫し宿も嬌柳の、枝垂れて重き雪風が、吹くとも傘に雪持ちて、積る思ひは泡雪と、消えぬ恨にくらぶ山、忍ぶ文なき胸の闇、果敢なき戀に窶す身をせめて哀と道芝も、皆白妙にちら〳〵雪の振袖白鷺の、姿しよんぼり可愛らし、へ迷ふ心の細流、ちよろ〳〵水の一筋に、思ふ殿御の愛しさと、逢うて嬉しき睦言を、神かけて願の外は白鷺の、水に馴れたる足取も、濡れて雫の乾く間も、涙は絶の常なれど、枕に語るかこち草、これも恥し振ぢやえ 唄へ鳥はものかはナア 合別の扉明くるはつらやしやほんに、更行く鐘に比べては、何方がどうともこちや〳〵こちや言はぬ、心比べの片思ひ 吉四郎へ春は野山に浮れ心の色見草 合夏の夕暮袂の袖にツレへ風も涼しき留木の薫、冴えた月夜にほと〳〵行けば、辻占千鳥氣にかゝる 合それ氣にかゝる 合生る様で生らぬ冬の梅 浄瑠璃へ振もよしやの巻羽織、花の大小擱差し、振出す練出す娘丹前、可愛らし 唄喜三郎へ忍び姿も思へば花よ、浮名立つのも厭はれぬ、鈍な私ぢやないかいな 浄瑠璃へ女子の嘴は口紅の、跡から剝げるいろはにほ 合蓮華經と鶯の口に任せた上の空 千蔵へ浮氣戯りの仇付きを、知らぬ白地に戻らうならば、とても候べく候とし

ツレへ盡ぬ縁を願ふもの へ振れさ〱振 葉色も時雨の降れやれ〱へ振つて振 唄へ龍田の楓紅の 淨瑠璃へ裾もほら〱れ〱振込めさ、お先を揃へて華か宿り 淨瑠璃へ振つて振込む伊達槍、おゝさ川波に 唄へ渡らば錦中や絶えなんへ歌入り下馬先所知入りはつちりちゝちつて合點ぢや槍はぢよん女郎樣の花の槍の言の葉末長く、眞榊の葛絶えず 合傳ともそつとも寄つたら大事ぢや、先退 合唄へ花に太鼓が浮き〱 合浮きに浮れへて日毎に榮え堺町歌舞伎の花とぞ祝け〱花を飾りて花の所知入りへ花紅た 合浮氣な風が 淨瑠璃へ競ふ吉野の花櫻しける。

閏茲姿八景　七四

〔解題〕文化十年六月十七日から森田座で「尾上松緑洗濯話」の第二番目に出した七世團十郎の八景の所作事。

姫垣の晩鐘に乙姫……………長唄
浦島の歸帆に浦島……………長唄
瀟湘の夜雨に景清……………常磐津
水賣の夕照に冷水賣…………常磐津
臘候の暮雪に節季候…………長唄
心猿の秋の月に猿……………長唄
晒女の落雁に晒女……………長唄常磐津かけ合
石橋の晴嵐に石橋……………長唄

この中長唄としては「浦島」に「心猿」に「晒女」が名高く、共に今日も行はれる。殊に晒女は一に「近江のお兼」とも呼ばれ、四世杵屋六三郎の壯年期の代表的名曲の一つである。近江のお兼の話は昔の近江の大力女の傳説などに基くものであらうが、劇に仕組まれたものとしては「加賀國篠原合戰」（享保十三年）の第二段目で近江の

酬女お兼が怪力を現して荒れたる駻馬の手綱を木履で踏み止める條などが始めらしく、この趣向は本曲の原據かと思はれる程類似してゐる。

浦島の歸帆

三下リ へ海の都を過ぎて浦島が、波の花道川汐の、跡に引るゝ戀衣、濡るゝとも夢と父母にのりぢの海の船唄や へ小手招く風の便の眞帆片帆、ゆたのたゆたのよんやさ影戀し、海邊離れて木曾路川、寢覺心地に辿り來る へ果敢なき齡を延ぶる明暮に 合心の水の泉近、老いせぬ例 合汲みて知る 合玉の釣瓶に玉の井の、内に影差す火々出見の、尊も戀に引かれ來る へその釣針の愛しさに、同じ流の結び目も 合堅い約束汐滿ちて別れを惜む波枕、浮名は高き乙姫の、情も深き物語 へ問はず語りも忘られぬ、舞の一手の優しさに、せめて一差面影を 此内舞へ玉の簪に 合柱の黛 合月の かな へさるにても、この箱の内ぞゆかしと見てあれば へうつゝ白波汐路をさ照添ふ花の姿の眩きに 合雪を廻らす袂



「酬女」正本表紙

して合通詰めたる戀の海、ほんに／＼／＼逢ふ夜は嬉しさも合何時か二重の越の海、行かんとすれど老松や へ實に百年の波路を越えて、睦じく盡きぬ契を語る家苞。

心猿の秋の月（心猿）

作者櫻田治助

唄へそれ意馬心猿の、心の駒は六塵の樂に走り、猿は五濁の枝に戯れ、唄へ中に動かぬ法性の、柱にこれを繋ぐとは人を教への譬へ草、結ぶ願ひのなにくれと、神の御前に掛卷くも、繪馬にや映す神馬引 合へ手綱許さぬ口取の、劍立烏帽子大幣も、人にはまさるのまめやかに合社詣での歸り足合しやならしやならの大振袖を合人目蜜柑や、合桃や柿より甘いお尻にお馬も太鼓を現拔してちよつと袖を引く、引かれさ木遣てじゆんわり引いてくりよ、よい／＼よんやなへ赤いもんのにとりてはなんば辛子に唐辛子、よい／＼まだも赤いがな山王の、櫻の木にお猿が三萬三千三百三十三匹、ぶら／＼下つたよい／＼、下りや下つたがな、只も下れかし重荷に小附と小猿を抱いて下つたよい／＼よいや、中綱ヤア締めろやれ、よよいさ／＼、よいこれわのさつても及ばぬ水の月かや面白や 合へ此處に浮名は曾根崎の、森にお初はしよんぼりと、姿映せし水鏡へほんに窶るゝ一筋に、色はまだ三筋皆樣に、足らぬ私が生れ故、捨てて行ことは何ぢやいな、恥しや 合へ神變不思議の心猿に、駒も勇みて花や散るらん。

晒女の落雁（近江のおかね）

作者櫻田治助

浄瑠璃へ留めて見よなら合菜種に胡蝶、梅に鶯松の雪、さては姉女が袖袂しよんがいな合色氣白歯の團十郎娘、强い／＼と名に振れし、お兼が噂高足駄 唄へまだ男には近江路や、晒し盥の誰が嬲らうと戀ぢやいや／＼相撲でならば、相手選ばず渡合ひ、ありやりや／＼／＼よいやさ 浄瑠璃へ四つに抱れて手事とやらで、二人しつぽり汗搔いて、なげの情の取組が唄へ面白かろでは 浄瑠璃へないかいな 唄へ力試しの曲持ちは浄瑠璃へ石でもごんせ 唄へ俵でも御座れ／＼に差切つて 浄瑠璃へ五十五貫は何のその、中の字極めし若い衆も、女子にや出さぬ力瘤 唄へほんにほうやれ逢ふ夜はをかし、折を三上の文さへ人目、闇の清水に心は濡れて 浄瑠璃へ今宵堅田と老蘇の森と、返事信樂待たせて置いて、まだ事ぢやと心で笑ひ、嘘をつくまのあた憎らしい 唄へ更けて今頃三井寺は、何處の田上と寢くさつて、夢醒が井の鳥床

の山 浄瑠璃へ此方は矢橋の一筋に、ほんも、一節切とは聞くつらさ、八聲の鶏 唄へ晒して振を見せ參らせう／＼ 合浄瑠璃
に粟津のかこちごと思ひ大津は初秋に堰かれては、よいやな／＼ 浄瑠璃へ炷へ立つ波が／＼瀬々の網代に障へられ
唄へ鏡の宿の盆踊り 合浄瑠璃へ天の川星の織姫の移り香を 唄へ寝衣ながらの 浄瑠璃 て、流るゝ水を塞止めよ／＼ 合さつさ
契も岩橋の、明くる侘びしき葛城の、へ起別れ 唄へよいやな 浄瑠璃へア、よい車の輪が切れて何思は何方にも 合へ晒
神ならぬ身は末かけて、よいやな／＼やな 唄へ笹の一夜を縁結び 合浄瑠璃へ野路す細布手にくる／＼と 唄へ晒す細布手
合唄へ懐紙の上も髷の、橋裏に立つ笛竹の玉川萩越えて色ある水に晒しのや 合 にくる／＼といざや歸らん賤が庵へ。

本名題 出囃 正札附根元草摺 七五

〔解題〕 通稱「正札附」。文化十一年正月十一日から森田座の「双蝶々假粧曾我」の第一番目大詰に七世團十郎の曾我五郎と市川男女藏の朝比奈とで出した草摺引の所作事。草摺引の荒事は實に元祿十年五月中村座の「兵根元曾我」に元祖團十郎と傳九郎によつて演じられてから、何遍となく繰返され、長唄地のものだけでも無慮十餘曲を數へる程であるが、その中で今日でも行はれるのは、前に出した「いきほひ」と本曲とだけである。作曲者は四世杵屋六三郎。

へそれ曉山霞ふ雲霧や、只引幕の初霞、擲げに提げ駈出すは目ざましくも亦見苦もなくやらじと力草に、引けども
蹴破る勢は鳴る瀧を登る鯉龍の如くに えにけり裾にしつかり小林が 合手を掛／＼動かばこそ、時致笑つて 合振放し、
て、曾我の五郎時致は逆澤瀉の重鎧、け鳥帽子鶴の丸、左右の髭に天津風 合 いらぬ腕立よしやその力あるとても、

そりや行かぬ仁王立なる勢は草木も靡く合鬼神や合鬼を欺く小林も、今は心を和げてコレ申シ 伊三郎へ野暮な力は奥の間の浮氣らしさの辛氣節合女子の愚痴な眞實が、届かぬ事か待つ夜半も 伊四郎へ蒲團重ねて敷妙の枕の土俵化粧髮 源太郎へ間夫に逢ふ夜の力水漏らさぬ仲の文角力 伊三郎へ人目を關の憂き思ひ煙草は憂を忘れ草煙比べん富士淺間そつと覗いてオ、コハ へそのマア顔は悋らしやと言うては又も取附いてえいや〳〵と引けども押せども合これやどうぢや セリフへ朝比奈力はそりきりかへムムエイ罷が試の力瘤合落しやせぬかと撫廻し引くに止らば堪へて見よモサ〳〵〳〵 へ別足蹈締め時致は時こそ來れ嬉しさよ合蛙の聲も身にぞ知る合今や遅しと夢の間も合忘れぬ父の仇敵討たんずもの飛上り合走行かんとする所を又もやらじと合引留むるへコレ待ツ夕止めて止まらぬナ無理酒に氣強い朝のひぞり言合エ、何ぢやいな措かしやんせ合肩に手拭染も構はぬ江戸自慢合構ひます妙でんす派手な所がわしや嬉しコレ止まらんせ合勇ましやへ互に爭ふ勢は前代未聞當世無雙後代無二の評判は東に並ぶ二見潟合こゝにうつして神風や、恵も深く若者と、貴賤上下押しなべて合恐れぬ者こそなかりけれ。



「正札附根元草摺」正本表紙

五節句の内九月 禮獅曷屓物　七六

〔解題〕通稱「新獅子」。文化十四年三月河原崎座「櫻姫東文章」の第二番目大切に出した五節句の所作事の一つで綱五郎に七世團十郎、おふさに五世半四郎で女夫獅子の所作事。作曲者は二世杵屋正次郎。

鼓唄へ花も紅葉もこき交ぜて へ賑ふ今日 風俗も合徒になさじと誠を見せて、粋橋 合私語の橋何時かその 合濡れてや他の神いさめ、盛り浮立つ江戸の花 合紫 なとりなり 合ほんに思の深見草、オ、所に岩橋嫌よ 合常磐の橋の千代かけてにほふ袖袂 合誰も三升の戀仲は、お房 名取草 合待たば岩と縁の綱五郎二人連れたる女夫獅子へ 間に、 合しどけな桃や柳の彩り彩る綾錦、分きて柳のしく、しどけ形振幼きなへてもつれて面白や、夏は時鳥卯の 獅子の、遊び戯れ花香る朝ぼらけ、花橘の香を留めて 友呼交す、揩れつ合菖蒲は軒の夫定め 合くるり合くるり 縺れつ 合彼方へ誘くる／＼くる／＼、車に乘せて重荷の ひ、此方へ寄りつ實に／＼戀は曲者 伊十郎へ咲揃ふ花の木 いとしをらしき風蔭に見えつ隱れつ 比翼の蝶の 合蝶の 情なり へ秋の眺や翼の白粉も 合派手に浮名の花より花 合通天の 合はしたに、移り氣は浮氣らしいぢやないかい なく散る紅葉は、眞間の繼橋まゝにし へ今を盛りの冬牡丹匂滿ち／＼大筋力なへ盛り咲ゆき花の笑 合紅を差すがに て 合千束の橋や文反故取散したる亂れ の獅子頭實に上もなき獅子團亂旋もか



「禮獅曷屓物」正本表紙

くやらん萬歳千秋と舞納め、萬歳千秋　と舞納め、獅子の座にこそ直りけれ。

三升猿曲舞　七七

〔解題〕通稱「猿舞」。文政二年十一月河原崎座興行の「奴江戸花鎗」の第一番目六立目に七世團十郎が此下兵吉の役で奴姿で松下の館へ行つて奴を相手に立廻りの場に用ひたもの。作曲者は四代目杵屋六三郎。

〽猿が參りて此方の御知行　ウタ本調子〽　伊四郎〽晩の泊は御油赤坂に　〽吉田通れ　仇者め合止めて止まらぬ戀の道、馬場
まア猿めでたき能仕る合踊るが手許及ばナア二階から招
びなき、水の月取る猿澤の、池の小波く、しかも鹿の子
悠々たり、指手引手の末廣や〽月に譬の振袖が　合〽奴島
へし止觀の窓合此方のお庭を見上ぐれ田に丈長掛けて、
ば、片割れ月は宵の程〽可愛い〳〵　先のが品やる振込
とさよえ合騙して置いて合松の葉越しめさ合手際見事に
の月見れば、暫し曇りて又冴ゆる、明投草履、ありやん
日は出ようずもの船が出ようずもの合りやりや合こりや
思たけげもなくお寢る君よの　孝次郎〽船のんりやりや合粹な
中には何とお寢るぞ〽苫を敷寢の楫枕　目許にころりとせ



「三升猿曲舞」正本表紙

先退きやれ合色めく飾の伊達道具へ昔模様の派手奴、これ構はぬの始なりへ龜の庭にも猿の神、厩の猿の馬櫪神合へ猿と獅子とは文殊の侍宿、時しも開く冬牡丹花の富貴の色見えて榮ふる御代とぞ祝しける。

石橋　七八

〔解題〕通稱「外記の石橋」又は「大石橋」。文政三年四月杵屋三郎助（後の十六代六左衞門）作曲。外記節の古正本の殘存したのに外記節を參酌して新に作曲したもので、長唄の多くの石橋中、最も莊重な大曲である。所謂外記節三部曲（猿と傀儡師）の一である。

へこれは大江の定基出家し寂照法師にて候、我入唐渡天の望み候て、只今思ひ立ち候、これは早や石橋にて候、向ひは文殊の淨土清涼山にて候程に、この邊に休らひ橋を渡らばやと思ひ候へ松風の花を薪に吹添へて、雪をも運ぶ山路かなへ樵歌牧笛の聲、人間萬事樣々に、世を渡行く業ながら、餘りに山を遠く來て、雲又跡を立隔て、入りつる方も白浪の、谷の川音雨とのみ、聞えて松の風もなし、實に誤つて半日の客たりしも、今身の上に知れつゝ妻木背負ふて斧擔げ、岩根烈しき岨傳ひ、小笹を分けて步來るへ如何にそれなる山人、これは石橋にて候かへさん候これは石橋にて候よ、向ひは文殊の淨土にて、清涼山とぞ申すなり、よく／＼御拜み候へへ我が身の上を佛慮に任せ、橋を渡らばやと思ひ候へ暫く候、その昔より名を得給ひし高僧貴僧と聞えし人も、此處にて月日を送り給ひ、難行苦行捨身の行にてこそ橋をも渡り給ひしか獅子は小蟲を喰はんとて、先づ勢をなすとこそ聞け、我が法力のあればとて、容易く思ひ渡らん事、アラ怪しの御事やへ謂れを聞けば有難や、尙々この橋の謂れ詳しく御物語り候へやへ語つて聞かせ申すべしへそれ天地開闢の以來へ雨露を下して國土を渡る、これ即ち天の浮橋とも云へり、その外國土

世界に於て、橋の名所様々にして、水と闇うして、下は泥犁も白波の、音はよも過ぎじへ獅子團亂旋の舞樂の砌、波の難を逃れては、萬民富めり世を渡る嵐に響合ひて、虚空を渡る如くなりへ獅子團亂旋の舞樂の砌、牡丹の英匂るも即ち橋の徳とかや、然るにこの石橋の景色を見渡せば、雲に聳ゆる粧滿ち／＼大筋力の獅子頭、打てや囃せ橋は巖峨々たる岩石に、已と架かる橋は、譬へば夕陽の雨の後、虹をなせるや牡丹芳／＼、黄金の蘂現れて、花になれば、石橋とこそ名附けたれ、實にその形、又弓を引ける如くにて、神變戯れ枝に伏し轉び、實にも上なき獅子この橋の有様は、その面纔にして、佛力にあらずしては、進んで人や渡る王の勢ひ靡かぬ草木もなき時なれや、尺よりは狹う渡せる長さ三丈餘り、苔べき、向は文殊の淨土にて、常に笙歌萬歳千秋と舞納め、／＼、獅子の座には滑りて足も堪らず、谷の若干深き事の花降りて、笙笛琴箜篌夕日の雲に聞こそ直りけれ。數千丈とも覺えたり、遙かに峰を見上ゆべき、目前の奇特あらたなりへ暫くぐれば、雲より落つる荒瀧に、霧朦朧待たせ給へや、影向の時節も今幾程に

月雪花名殘文臺　七九

〔解題〕文政三年九月九日から中村座の「一谷嫩軍記」の第二番目大切に出した三世三津五郎の大阪上り名殘の七變化所作事。

浪枕月淺妻…………長唄
玉兎月影勝…………清元
狂亂雪空解…………長唄清元かけ合
猩々雪醉覺…………長唄

寒行雪姿見……長唄
女扇花文箱……富本
戀奴花供待……長唄

この所作事は好評であつたが、長唄では「浪枕月淺妻」（淺妻）と「寒行雪姿見」（まかしよ）の二曲が今日でも行はれてゐる。

浪枕月淺妻（淺妻）

二上リ〽小波や 合八十の湊に吹く風の 合 身に染み初むる比叡颪、千船百船纜を立てて、入るや岸根の御蔭〽この寢ぬる 合淺妻船の淺からぬ 合契の昔靈山宮 合そも羯鼓の始りは 合靺鞨國より傳來て唐の明皇愛で給ひ 伊十郎〽そりや昔はいでも濟うぞえ 合濟まぬ口說の言ひがかり 千太郎〽背中合せの床の山 伊十郎〽此方向せて引寄せて振つて見ても漕ぐ船の 吉四郎〽徒し徒波浮氣面 合〽誰に契を交して色を、替へて日影に朝顔の 千太郎〽花の鬘の寢亂れし、枕恥し辛氣でな



「月雪花名殘文臺」正本表紙

らぬえへ筑摩祭の神様も、何故に男はそれなりに合沖津島山寄る波の寄せては返す袖の上、露散る足の花心　二上り
伊十郎へ月待つとその約束の宵の月合ツレ高くなる迄待せて置いて、一人袂の移り香を、片破月と頼めても合伊十郎へ水の月影流れ行く、末は雲間に三日の月へ戀は曲者合忍ぶ夜の合軒の月影隱れても合餘る思の色見せて秋の蟲の音冴渡り合閨の月さへ枕に通ふ合鈴もりん〳〵振鼓合しをらしやへ弓の影かと驚きし、鳥は地邊の木に宿し魚は月下の波に臥す、その秋の夜も今は早や、鐘も聞えて明方の、入るさの月の影惜しき合月の名殘や惜むらん。

寒行雪姿見（まかしよ）

三下り へまかしよ〳〵撒いてくりよ合まつかしよ方の門々に無用の札も何のその、構ひ馴染の御祈禱坊主合昔氣質は天滿宮、今の浮世は色で持つ合野暮な地口繪偸箱から引出して來る酒の醉伊十郎へ妙見様の七つ梅、不動のお手に劍菱のぴんと白菊花筏ツレへ差すと聞いたら思ふ相手に合あほつ切り婦る手許も足許も雪を凌いで來りける伊十郎へ君を思へば筑紫迄、翼なけれど飛梅の粹が身を食ふこの姿吉四郎へちよいとお門に佇みて合とごまかしてよいとこなり、ちよつとちよぼくる口車ツレへ春の眺はナ吉太郎へ上野飛鳥の花も吉原花の中からツレへ花の道中柳腰合秋は俄にナ吉四郎へ心もうか〳〵浮れ鳥の合九郎助稻荷の隅の長屋の合年増が目に付きずつと上つて合門の戸ぴつしやり千太郎縮りやすぜえ吉四郎へあれあの聲を今の身に、思ひ淺黄の手拭に千太郎へ紅の付いたが腹が立つツレへ其處を流しの神下し吉四郎へ歸命頂禮拗つて申すそれ日本の神々は、伊勢に内外の二柱夫婦妹脊の盃も、濟んで初會の床浦明神、哀愍納受一呪禮拜合屏風の外に新造が、祭も知らずねの權現櫺子の隙間漏る風は、遣手に忍ぶ客部屋の小隅に誰を松尾明神、地色は坂本山王の合廿一二が客取盛り盛り、間夫は人目を關明神、歸命頂禮懺悔〳〵、六根大せう拗ねて口說を四國には、中も丸龜名も高き、象頭山今度來るなら裏茶屋で、哀愍納受と祈りける へその御祈禱に乘せられて、でれれん〳〵口法螺を、吹く風寒き夕暮に、酒ある方を尋ね行く〳〵。

老松　八〇

〔解題〕文政三年、四世杵屋六三郎作曲。謠曲の「老松」を取つて砕いてある。

本調子次第へ實に治まれる四方の國、實に治まれる四方の國、關の扉鎖さで通はんへこれは老木の神松の、千代に八千代に細石の、巖となりて苔のむす迄合松の葉色も時めきて、十返り深き緑の內、眠れる夢の早や覺めて、色香に更けし花も過ぎ、月に嘯き身は繫がるゝ合綠竹の緣に引れてうつら〳〵と、長生の泉を酌める心地せりへ先づ社壇の方を見てあれば、北に峨々たる青山に彩る雲の棚引きて、風にひらり閃き渡る、此方には合翠帳紅閨の粧、昔を忘れず、右に古寺の舊跡あり合晨朝夕梵の響絶ゆる事なき眺さへ、赤間硯の筆すさみ此處に詞を記しけり二上りへ松といふ文字は變れど待つ言の葉の、その甲斐ありて積む年に合壽祝ふ常磐樹の、調ぞ續く高砂の、名たる邊に住吉の、松の老木も若木を語る恥しさ、只驗らじと深緑、嬉しき代々に相生の、幾瀨の思ひ限り知られず、喜も理ぞかし何時迄もへ清き勇めの神神樂、舞樂を備ふるこの家に、聲も滿立つ有難や三下りへ松の太夫の袖襠は、葛の模樣に藤色の、愛し可愛いも皆々男は僞ぢやもの合搦ねて見せてもそのまゝ他所へ、或夜密に付合の、雲の離の掛言葉、ェ、憎らしい木隱れに、晴れて逢ふ日を松の色へ雙に遊ぶ鶴龜の、齡を授くるこの君の、行末守れと我が神託の、昔をしらする松の風へ富貴自在の繁榮も久しき宿こそめでたけれ。

唄浄瑠璃 不動　八一

〔解題〕文政四年三月中村座「伊達襁褓脫絹川」に、七世團十郎が不動明王の尊像として表れる處に用ひられたもの。作者瀨川如皐。作曲者四世杵屋六三郎。

へ實にや因位のその昔、法藏比丘の精進の願、只信行に寄るとかや、御痛はしや祈念沙彌、師の諫諍の身に染々、深き願も下總の、成田の里に日を重ね、捨身の苦行ぞ殊勝なるへ夜は深々と物凄く、見るも他所目に忍ばりよものか、普讃三曼に愛想ぢやないが、共に願の籠り堂へいとも高雄の御山より、降伏四魔の御誓ひ搖がぬ御名に一心不亂、金剛心ぞ頼もしきへ大智の光は火焰に現じ、哀愍護念の御眥へ微妙の梵音を利劍の光、凡心轉じて聖智を增す、大聖不動の神通之力、秘密の眞言繰掛け〳〵現生現世の御利益、仰ぐもおろか末の世に、六道能化の再來とて、祈くる天の加護力や、異域土蕃の果迄も名擧の智德ぞ隱れなきへかの祈念が心の內、有難しともなか〳〵申すばかりはなかりけり。

一奏今樣邯鄲　八二

〔解題〕通稱「今樣邯鄲」又は「義經の邯鄲」。文政四年十一月、河原崎座「妹背山眺望千本」の中で、源義經關三十郎、龜井六郎尾上多見藏の役で出した所作事。作曲者初代杵屋勝五郎。長唄岡安喜三郎・芳村伊久四郎等。

次第へ浮世の戀に迷ひ來て、〳〵、思は何時か思晴らさんへ吉野山 合去年の白雪踏分けて 合入りにし人の舞の袖 出へ緣巫山の 合比翼枕 合今はなか〳〵思の種よ 合馴れし靜が一奏、此處に映して三吉野や、あら面白の景色よのへ富士は麓よ戀の山、雪の素足の外八文字、振ると言ふのは嫌な客 合間夫に逢ふ夜は積らんせへ賤や賤の苧環 合繰返し、昔男の舞扇 合あの山見さい 合この山見さい 合へ雲のまに〳〵雲の 合天津少女の初花衣、實にも妙なる袖の香やへ四季折々も榮華の夢の、飽かぬ眺の君が代や、今樣舞臺ぞ賑はしき。

〔解題〕通稱「外記猿」。文政七年七月、杵屋三郎助（十代目六左衛門）作曲。前の「石橋」と同じやうに外記節の曲調を復活して作曲したものといはれる。猿廻しが或る屋敷へ呼込まれて猿をまはしてその藝を見せるといふ一曲。この中の「これは浪華にその名も高き……繪草紙え」の條が最も聞かせ處であるが、近來文句が卑俗だといふので上品に改作されたが、本來この句はお染久松の歌祭文以來傳統的の名文句だから徒に上品ぶつてかういふ名句を改めるのはよくない。

唄〽罷出でたる某は、ずんど氣輕な風雅者、日がな一日小猿を脊に脊負ひ紮げてナ、妾如法やなん投頭巾〽夜さの泊は合何處が泊ぞ、那波か名越か合室が泊ぞ〳〵〽泊を急ぐ後より唄小猿廻せや猿廻し、オヽイ〳〵と招かれて、立歸りたる半町餘り、立關構へし門の内、女中子供衆とり〴〵に、所望〳〵の言葉の下さるの小舞を始めけり〽ヤうめでたや〳〵ナ、君が齡は長生殿の、不老門の御前を見れば、黄金の花が咲きや亂るゝ〳〵合旦那の御前でお辭儀をせ、ころりと合ころりや〳〵やつころりと、子持寢姿お目にかけやさつても粹な品者め〽これは浪華にその名も高き、瓦橋とや油屋の、一人娘にお染とて、年も二八の戀盛り合内の子飼の久松と、忍び〳〵に寢油を、親達夢にも白絞りサア浮名の立つは繪雙紙え〽松の葉越しの月見れば、暫し曇りて又冴ゆる唄月は片割れ宵の程、船の中には何とお寢るぞ、苫を敷寢の楫枕、飛彈の踊は一踊り二上り〽五月五月雨苗代水に合裾や袂を濡してしよんぼり〳〵と、植ゑい〳〵早乙女〽實に面白や踊が手元、辰巳午や春の小馬が鼻を揃へて參りたり〳〵二上り〽猿に烏帽子を着せ參らせて〳〵、勇む神馬の手綱取らしよ、手綱取らしよのんほのふいよえ本調子〽一の幣立て二の幣立て合〽猿は山王まさるめでたき〳〵合獅子と申すはすみ〳〵すみ〳〵〳〵すみ住吉八幡普賢文殊の召されたる、猿と獅子とは御殊勝のもの、アレ音樂の聲諸法實相と響き申せば、地より泉が相生して、天より寶が降下る、倘千秋や萬歳と、俵を

重ね面々に、樂しうなるこそめでたけれ、樂しうなるこそめでたけれ。

廓三番叟　八四

〔解題〕文政九年正月四代目杵屋六三郎作曲。「翁三番叟」を砕いて地口式に廓の情緒を出したもの。

へとう／＼たらり／＼ら、たらりあがりららりとう二上りへ千早振袖禿まで、その通ふ神昔より、久しかれとぞ願ふぞよやいちやどんどとや名ある末社に愛想の、凡そ千年の鶴は、仕着の刺繍に留めたり、又萬代の池の龜は、床に三盃の高蒔繪皆瀧のみは冷々として、夜の交際鮮に合浮れたり、朝の日の流連に潤す合てんと堪らぬ此處ぞ安心に君を命と痴話やする一差差さう滿座の中へおさへ／＼喜ありや、我がこの盃を外へはやらじと面白やへ向の人に思ひ差し、嬉し顔なる鼠泣き合醉うた振して袖の梅、春を告げ鳥微笑む聲の合笑上戸やそりや華魁と威されて、おゝ恐やつい引過ぎの船漕ぐ内に、後朝告げる鴉飛合あゝら物に心得たるアドの太夫さんにそつと忍んで申さうよへ丁度寢入つてさへもしこのお文へ後と仰せ候程にと讀みかけて、今宵の首尾を待つぞえへ仰の如くこの情を立てるは何より安けれど、先づ太夫さんのあの許へへサア便聞いたら其後座敷へ行くわいなへ否々おいでなうては參るまじへ只一走り拜むぞえへまアあの方えへあゝらやうがましや内所の鈴の鳴る前にへ此方こそ合來るか／＼と待つ辻占に合土手の四つ手の聲ゆかしくも、檻子迄出て呼子鳥たづきも知らぬ憎らしさ、アレ心なの月の冴え、浮いて寢られぬ船底枕、いつそ浮世ぢやないかいな、思ひ草あゝ現なの戯れ事、賑ふ家の四季染に、月雪花の三つ蒲團合廓の豐ぞ祝しける。

歌へすく〲餘波大津繪　八五

〔解題〕文政九年九月、中村座興行の關三十郎大阪上り名殘狂言「けいせい反魂香」の大切に出した五變化の所作事。藤娘（長唄）座頭（清元とのかけ合）天神（長唄）奴（長唄）船頭（清元）。長唄の作曲者は四世杵屋六三郎。清元の同外題の部參照。

藤娘　作者勝井源八

三下り〽津の國の 合 浪華の春は夢なれや、早や二十年の月花を、眺めし筆の彩も 合 描盡くされぬ數々に、山も錦の折を得て、故郷へ飾る袖袴 伊三郎 鼓唄〽若紫に十返りの花を現す松の藤浪 〽人目堰き笠、塗笠しやんと振擡げたる一枝は 合 紫深き水道の水に、染めて嬉しき所縁の色の 合 愛しと書いて藤の花ヱ、合 しよんがいな、裾もほら〱しどけなく 合〽鏡山人のしがよりこの身のしがを 合 顧る目のしほなき海に、娘姿の恥しや 伊三郎〽男心の憎いのは、外の



女子に神かけて、粟津と三井の約束も小四郎へ堅い誓の石山に、身は空蟬の唐崎や、待つ夜を他所に比良の雪 喜代八へ解けて逢瀬のあた妬ましいようもの瀬田に乘せられて 錣五郎へ文も堅田の片便り心矢走のツレへかこち言へ松を植よなら有馬の里へ植ゑさんせ、何時迄も 合 變らぬ契搔取り褄で、よれてもつれつまだ寢が足らぬよい寢枕の、まだ寢が足らぬ藤に卷かれて寢と御座る、ア、何としようどうしようかいナ私が小枕お手枕へ空も霞の夕照に、名殘を惜む歸る雁がね。

座頭（清元とのかけ合）

（關三の座頭、又は、ヒョックリの座頭）

淨るりへひよつくり〳〵、ひよつと寵出でたるやつがれは、色にも酒にも目なし鳥、どつこいさうは虎の皮、まはしの端は取られても、戀の手取のやさ法師、なか〳〵その手ぢや參るまいへわるじやれナ へ梅に鶯垣に朝顏、按摩針まんざらのいた中ぢやない一番角力で參るべい、引すて負ひ投げ内無雙、獅子の洞入り洞返りエ、畜生めと負けばらで、追へどた〻けどくる〳〵と、アアほつとしたエ、ま〻よ、外に廻るはなんであろ 唄へさやを廻ろか桑名を乘ろか、心二見の沖の石、かはく隙なき 合 雨の宮やら風の宮 淨るりへ千早ふる市手拍子揃へ 唄へまはる音頭の一節は 淨るりへ花に置く露 唄へ小笹の霰 淨るりへこぼれやすさよ 唄へ我が涙 淨るりへよんやサ 唄へよんやナ 淨るりへまたしてもしつつこい、杖振上げて打たんとせしがイヤ〳〵〳〵これでは行かぬと氣をかへてコイ〳〵〳〵へこれなんぢやいなぞのやうに、わしをじらすが樂みか、ぬしの毛色のよしあしは、目には見えねど初雪や、その足跡の梅が香の 唄へもれて慕ふも嬉しさの、聲で聞きしるわしぢやものを、あんまりむごいと寄添へば 淨るりへざれて添寢の仇枕 唄へぞめきも通ふ紙砧 合唄へ月に浮る〻拍子どり 淨るりへ舅嫁ふる、よめ下女をふる、下女はナアエ釣瓶の繩をふる、ずいとこきや、いつかな構ふ事はねえ 唄へわしが願ひが叶ふならば 合今の浮世に一人寢せずに寢もせまい 淨るりへずいとこきやいつかな構ふ事はねえ 淨るりへせまい浮世ぢや 唄へな 淨るりへいか 唄へいな淨るりへ我等も浮れ座頭の坊ヲヤ〳〵〳〵またまたわるじやれめが杖と笛、盲さがしの身は四つばひ、跡を慕うて走り行く。

天神

本調子へ秋の田の刈穗の庵の苦を荒みへわが賴む人を空しくなすならば（イホ）合群來る雁の墨色よ、空に數書く合飛礫、文字里の童の愛らしく囃す小唄の一節にへあの山見さい合この山見さい合盛りの花か紅葉の錦霞の衣に引替へて、切の籬に合返咲きへぱつと開くは紅白の、梅に星見る合へ宵の程、色も香もある心より合戀には汝も忍の亂れ合限知られぬ憂き世の中よア、夢か現か合叢雲にへ烈しき風の松に響きてむら〳〵時雨、翳す袖笠肘笠に、行交ふ人も同じなる我が衣手は露に濡れつゝ。

奴　（關三の奴）

二上りへ振つて振込む大鳥毛合足並揃へてまかしよとなん、ありやんりや〳〵こりやんりや〳〵サアサよやまかせエ脇寄れ合宿入り下馬先合點か派手な道中・華魁達の、外八文字に引替へて、裾はしつかと緤ち紮げ、オ、恥しの肌白慢、晩にや女郎衆に投げられな、ひらりと受けて見事にさ、戀にや拔目も何のその合浮れ拍子の伊達な行列へ軒には三輪の杉印、槍の穗先ににこ〳〵者よ　合手許品よくくるりと振つて、花突しやんと合持送り拍子へ酒機嫌伊三郎へ主のさ合主の三階松の枝は千代にツレへヤトサテナ伊三郎へ千代に八千代の舞の袖ツレへサアサつるだんべ伊三郎へこのしよんでこえ伊三郎へ君は三夜の三日月さんまよのツレへ宵にちらりと見たばかりこれ申し〳〵こゝな仇者めと言ふちや何でも此奴は此方からちよいと仕掛けてやりかけべ合エ、ひぞつて抓るかあいたしこ合現なやへ見よなら〳〵それ見よなら常磐の松よ合千歳結びて合操の色も合變らで君に磯馴松とんと塡らば合首尾の松合やつこのこの〳〵この小松さつさ合とても濡れよなら時雨の松よそれさ合それさそれ〳〵そつこで濡れたらどうとも合志賀の松合へ名殘は盡きじ萬代の龜は君達何時迄もへ我も歸つて此處に礎。

月雪花蒔繪の巵　八六

〔解題〕文政十年三月、市村座興行の月雪花三段返しの所作事。作者櫻田左交。作曲者四世杵屋六三郎。長唄では月の卷が殘つてゐる。仕丁（三津五郎・團十郎）と御殿女中（岩井粂三郎）とが月で名高い野路の玉川に踊

る趣向。清元の同外題參照。

月の巻

本調子へ野路の玉川萩越えて、色なる波と詠人の、俊頼卿に引かへて、いざよふ月の品者に、冴えた仕丁の出立榮伊三郎へ水の鏡に影宿る、姿を此處に狩衣のへ主やゆかしと振袖に、包む思のとけしなく、結ぶの神へねぎ事をへ掛け奉る白張に、烏帽子も氣輕きさく者、今日のお出では紺屋の使、とはどうでんす、色の事ぢやと取つてるるオ、さてそんなら明後日か、ハテさうであろさうかいな、忍び詣の歸り路も合隈なき夜半に雁の、薄墨に書く玉章と、誰が夕紅葉織映えて、秋野の錦色々の合色を染めなす龍田姫合姿もさぞな朝顏の、差手引手に小車の、花を廻らす舞扇合返す袂をちよと男郎花、何を紫苑にて、天官髮をしやんと着て合踊る振の仇心合荻の浮氣につい招かれて合薄が見事え、吉野龍田の花よりも、紅葉よりも戀しき君が殿造り、萩の枝折を知に露のこぼれ萩合羨し伊三郎へ千草結びにこちやよい殿と、緣定めて二世掛香の嬉しさに孝三郎へ長柄の蝶の妹脊事、何時か／＼とその蜩を合へ待つに松蟲遣瀨がなうて若しや夢にも君蟋蟀と鐵五郎へ中で螢の焦れて稻子螽蟖へ寢もせで賤の遠砧二上り井手の山吹蛙が鳴る、サツサそつこでどうぢやいな合廻る津の國卯の花香る、月が鳴いたか時鳥、武藏が調布野路の萩、野田に千鳥よそれ高野ぢや合飲めぬ水へ鎌倉見たか江戶見たか、江戶は見たれど鎌倉名所はまだ見ない合派手な振袖それそつこが花ぢやものへエ、其方ら迄悄らしい合てもさつても和御寮は、誰の神の御胤

邊にて、いざやとあるを留むる袖振り、桐原の駒ならで心の手綱一筋に、月の玉鉾跡にとほんと、これやどうぢや、彼奴一人で取持ちを、科戶の風に入船は、しかも常陸の鹿島浦、コレワイナへ今年や世がよい豐年で、米が十分色事も、合ほやれほ穗に穗が咲くといな、オヤモサ／＼、ヤア、對の定紋どうしたへうりの瓢簞で合ヨイ／＼戀を知らざる鐘撞く野暮めは西の海、ヤレコレ其處らでこれわいナへ可愛がられた竹の子も、今は拔かれて剝かれて、桶の箍に掛けられて締められた伊三郎へ締めろやれへやれこれ其處らでこれわいナ合面

白や へその戯れに興まして、又明日も 來ん名所の眺めに飽かぬ風情かや。

拙筆力七以呂波　八七

〔解題〕 文政十一年三月中村座「水滸傳曾我風流」の第二番目大切に出した中村芝翫（後の四世歌右衛門）の七變化所作事。傾城（長唄）、ごみ太夫（常磐津）、供奴（長唄）、乙姫（富本）、浦島（長唄）、瓢簞鯰（長唄常磐津かけ合）石橋（長唄）。長唄の作曲者は杵屋三郎助（後の十代六左衛門）。長唄の出し物で今日も行れるものを次に載せる。

變化所作事。

傾城 （傾城戀、又は、芝翫の傾城）

本調子 へ戀といふ文字の姿を判じもの、解けて思の種となる。鐘は上野か浅草か、その約束を待つ宵の、風も浮氣な仲の町 孝次郎へ根こじて植ゑし 合ツレへ初櫻つい移り氣な色も香も、止めて素足の八文字 合 昨日の夢もそれなりに、袖に幾んで袂に忍ぶ、間夫の名宛を結び文 合 もじと書いて又返すぐも筆に言はするは八重山吹を、投入れ床へ差込む朧月、櫺字迄來て行く雁に、ちよつと恨を言掛り 孝次郎へ言葉縺れて胸づくし 合 鶏の鳴く迄待たせ



「拙筆力七以呂波」正本表紙

て置いて、何處の女郎めとしげりくさつて徒な喜八へエ、手管がじやれか、そんなその野暮な口説は奥二階、禿が目くばせ呑込んで、味な素振の宵の客孝三郎へ傾城の誠と雪に黒いはないものぞいの 孝次郎へまだ言はんか仇口と合ふつつり抓れば振切る腕ツレへ障子襖に訪れて合廊下を滑る上草履 孝次郎へ櫛簪も何處へやら喜八へ戀諍うて互に思の增鏡ツレへわりなき仲の戯れや 三下り孝次郎へ風薫る合袂も輕き夏衣乾すてふ色と疑うた岸の卯の花咲くにつけ、初音待たるる時鳥ツレへよい〳〵よんやさ 孝次郎へよんやさ喜八へアレ閨の戸をほと〳〵と、叩く水鷄に騙されて合枕も取らぬ蚊帳の内、明けて辛氣な鵜飼船ツレへよいよいよんやさ喜八へよい〳〵よんやさツレへ秋の三日月隈もなく合晴れて逢ふ夜の月の顏 合 言ふも恥し廿日の月の殘るのを合曉迄も待明す長月やへ雪の肌の面はゆく、霙か霜の薄化粧、通ひ廓を見送りの、二本柳時雨れ〳〵て。

供奴

二上り へしてこいな合やつちやしてこい今夜のお供合ちつと遲れて出かけたが、足の早いに我が折れ、田圃は近道見逸れまいぞよ、合點だ合振つて消しやるな臺提灯に、御定紋附でつかりと、ふくれた紺のだいなしは、伊達に着成したやつこらさ合武家の氣質や奉公根性、やれさていつかな出しやしない、合髀や皸踵や臑に、富士の雪程あるとても何時限らぬ合お使は缺かさぬ正直合正道者よ脇寄れ合頼むぞ合脇寄れと急ぎ廓へ合一目散、息を切つてぞ駈着けるへ俺が旦那はな廓一番隱



「供奴」正本表紙

れない〳〵、丹前好み花車に召したる腰卷羽織きりゝとしやんと、しやんきりゝ高股立の袴附き、跡に下郎がお草履取つて、それさこれさ合小氣味よい

〈六法振が孝次郎へ浪華師匠のその風俗に似たか孝三郎へ似たぞ似ましたりさて〈なッレへ寛濶華麗な出立へおは文字ながらさる方へ、ほの字とれの字謎かけて、解かせたさの三重の帶、解けて寝た夜は許さんせ、ア、まゝよ浮名がどうなろと、人の噂も七十五日、てんと堪らぬ合小褄取りやつたその姿本調子へ見初め見初めて目が覺めた、覺めた夕の拳酒に合つい〈つい〈差された杯はりうちゑいばまでんすくわいと言つて拂つた合はつた痃癖ちり〈身柱、亥の目灸がくつきりと合捻切りお尻が眞白で、首掌のしつかと握つた石突こりや〈〈合成駒屋つとこよんやさ拍子合方へ浮れ拍子に乘が來て、ひよつくり旦那に捨てられた、狼狽眼で提灯を、點けたり消したり點したり、揚屋が門を行過る。

浦島

添削 杵屋三郎助

三下りへ和田の原合波路遙と夕凪に、龍の都を出汐の合寄するも八十の浦島がへ跡に引る、戀ひ衣合濡るゝも夢と父母に法地の海の船唄や喜八へ沖の洲崎に合蜑の小舟が誰戀風に合一人焦れてよんやさ、ゆたのたゆたのしよんがいな合磯邊離れて木曾路山、寝覺め心に辿來る 二上りへ袖に梢の移り香散つて合花や戀しき俤の合さつと吹來る春風に、霞が生める初櫻、花の色香につい移り氣な、菜種は蝶の露の床喜八へ忘れかねたる比翼の蝶の合情比べん徒櫻孝三郎へ雪か合雲かと峰の花孝次郎へせめて香の便もがなと思ひ暮して喜八へ戀すてふッレへ空定めなき花曇りへうつゝ白波合幾世か戀に合馴れし情も今ではつらや獨り寝のほんに思へばさりとは〈、昔戀しき波枕うたてさよへ實にや七世の波路を越えて、蓬が浦の浦島が、盡ぬ契を語るいへづと。



「瓢簞鯰」錦繪

瓢箪鯰　　作者　瀬川如皐

（常磐津とのかけ合）

浮るり〽筆に戯繪のたはむれや合どつこい締めたぞ合しやんとこい〳〵汝元來合地震の孫ひこやしやごか、きしやごか合こしやくな身ぶるひ合鹿島の神の御夢想相傳受けて抑へる合よもやぬけじの合瓢箪ぼつくりこ唄〽ぼつくり抑へて合ぬらりと抜ける合ぬらりぼつくり合ぼつくりぬらりと抜けたは合おかげの伊勢參り浮るり〽裸で道中雙六の合泊りは沼津わりや鯰髭が看板顔見せの、愛敬入道ぬれ坊主、ぬれはきゝがた池の中、友朋輩の鯉鮒や、すつぽんどん龜踊子の、鯰の合あてぶりうき拍子唄〽うは氣のんき川せゝり、春ながらまだ合ぞつとした合風は鯰のひれしぶき浮るり〽お寒からうと吉田屋の喜左な花色もみくちやな羽織似合はぬ大盞氣取り、鯰にいんでは此胸が唄〽さめぬ心の内にもしばし、のむは由縁の合茶碗酒浮るり〽まだおゝさへのお手許は、しつこい飲手ぢやないかいな、いいや逃がさぬ昔もかゝる例し有り唄〽仙臺の〳〵大川普請のあつた時合鯰一疋とらまへて、行水させて髭抜いて合頭巾かぶせて袖無し羽織、青傘さゝせて飴賣りに合小唄踊りで出したれば合土平と名を附け評判男浮るり〽辻や町々お子さま方が合どちら向いても合土平〳〵と合土平というたとてなぜ腹立ちやる合コノよい〳〵合よいとまかせて小手がらみ唄〽かひなもぢつて摑めばすべる浮るり〽抜ければ押込む後家さやに唄〽合はぬ相撲の浮るり四股ふみならし唄〽瓢箪鯰の根くらべ浮るり〽をかし珍し阿呆らし唄〽笑ふ烏あさとんび浮るり〽かけたか唄〽逃げたか浮るり〽雲かすみ兩方〽外へはやらじと追うて行く。

八重霞賤機帯　　八八

〔解題〕　通稱「賤機」。作曲者杵屋三郎助（後の十代六左衛門）文政十一年六月、山王祭禮の折の踊地として作ら

れたもの。詞章は一中節の一尾上の雲賤機帯」を元としたもの、詳しくは同曲参照。これが劇場で用ひられるやうになつたのは明治に入つてからの事である。

ト調子へ名にし吾妻の隅田川 合其武蔵野と下總の眺隔てぬ春の色、櫻に浮ぶ 合富士の雪 合柳に沈む筑波山、紫匂ふ八重霞 合錦を此處に都鳥、古跡の渡なるらんへ春も來る空も霞の瀧の絲、亂れて名をや流すらん へ笹の小笹の 合風厭ひ 合花と愛でたるうなゐ子が 合人商人に誘はれて 合行方何處と白木綿の神に祈の 合道尋ね 合浮きて漂ふ岸根の舟の 合焦れ〳〵ていざ言問はん我が思ひ子の 合ありやなしやと狂亂の、正體なきこそあやなけれへ船人これを見るよりも、よい慰と戯の 合氣違ひよ〳〵と手を打叩き 合囃すにぞ へ狂女は聞いて振返り、ア、氣違ひとは 合曲もなや へ物に狂ふは我ばかりかは 合鐘に櫻の物狂ひ、嵐に波の物狂ひ、菜種に蝶の 合物狂ひ 合二つの模様を刺繍にして、愛し我が子に着せばやな子を 合綾瀬川名にも似ず、心關屋の里離れ、合緣の橋場の土手傳ひ、行きつ戻りつ 合此處彼處 合尋ぬる我が子は何處ぞや、教へてたべと夕汐に、船長尙も拍子にかゝり へそれその持つたる掬ひ網に 合面白う花を掬ひなば 合戀しと思ふその人の、在處を教へ參らせん へ何面白う花を掬へとか 合いで〳〵花を掬はん へあら心なの川風やな、人の思も白波に 合散浮く花を 合掬集めん心して吹け 合川風 合沖の 合鷗のちりやちり〳〵、むら〳〵ぱつと亂るゝ 合黑髪取上げて結ふ人もなし へ船長今は氣の毒さ、何がなしほにと立上り 二上りへそもさても和御寮は誰人の子なれば 合何程の子なれば 合尋ね彷徨ふその姿、見る目も憂しと疎むれば へ音頭〳〵と戯の、鼓の調引締めて 合鞨鼓を打つて見せうよ へ面白の春の景色や筆にも如何で盡くさん霞の間に樺櫻雲と見えしは三吉野の、吉野の川の瀧津瀬や へ風に亂るゝ 合絲櫻 合愛し可愛の 合稚兒櫻、慕ひ重ねし八重櫻、一重櫻の花の宴、愛しらし へ千里も香る梅若や へ恵を仰ぐ神風は今日ぞ日吉の祭御神樂君が代を 合久しかれとぞ祝ふ氏人。

后の月酒宴島臺

角兵衛
女太夫
仕事師

〔解題〕通稱「角兵衛獅子」。文政十一年九月中村座「繪本合法衢」の第一番目三立目に出した所作事。作者瀬川如皐。作曲者杵屋三郎助。本曲は三番叟引拔にて角兵衛獅子(中村芝翫)千歳引拔にて鳥追(瀬川菊之丞)翁引拔にていさみ橋場の松五郎(松本幸四郎)で、即ち三番叟の引拔が角兵衛になる趣向であつた。初演の時は常磐津とのかけ合であつたが、現今は別々に行はれる。

浄瑠璃へ神樂囃して町々廻る合同じ世渡り合梅咲くや唄へ笠の内さへ覗かれて、人も見惚る愛敬は、てんと合おてんと天から落ちた合天人か浄瑠璃へわつちや嫌やの何馬鹿らしい合とても色にはこんな身で、成駒屋ならそれこそは合へ此方も首だけ濱村屋嬲らしやんすな合世は情合旅ぢやなけれど道連れに、なるとはなしの合後や先浄瑠璃へゑつちり越後の合山坂越えて合來て見りやほんに合江戸の花、何時も黄金の合眞盛り唄へ花に浮れりや咽喉さへ乾く合酒がな欲しやさりとては合まだ〳〵イヤハよいとな〳〵獅子の洞入り合洞返り合すめぢや互の思ふ事浄瑠璃へ岩木ならねば恥しの、森の烏か鷺ならせめて、一つ塒にオヽ嬉し唄へ待ちな町々御贔屓の、若者育てる通り者捌くは年の高麗屋、宵の仲人の合花に酒持せて、奥へ走り行く浄瑠璃へこんなぶさまの眞實は、お前のお氣に入りたさの、蟻の思も天とやら、どうで女房にやなられぬけれど、せめて優しいお詞に、あまえた女子ぢやないかいな唄へ言うてもおくれな月方の、田舍者ぢやとお嬲りか合思比べをせうならば、淺間の煙と煙草の煙やにはに惚れた合正直男浄瑠璃へ又嘘らしい眞顔で人を適も唄へほんにさうなら山の奥浄瑠璃へ千尋の海の離れ島唄へ二人暮さば都も同じ浄瑠璃へ嬉しい世帶であるぞいな唄へあるは嫌なり思ふは奈良の浄瑠璃へ木賃の宿さへまだ取れぬ、遊過して唄へ風引いた合へうつかりのろさのお恥し浄瑠璃へほんにちやかした獅子舞さん、わつちもそんなら地廻りの、傳法肌でひやかしのへ親兄弟に

迄見放され、赤の他人の傾城に、可愛がられう筈はなし 菊之丞へオヤ聞いた様だよ 唄へ雛の清掻 合せつかいで 合へ掻廻したる 合てんてつ飛んだ間夫と客 浮瑠璃へ徒な戀路の色里通ひ、夜は軒端に立盡し、エ、待つわいな 合無理な首尾して逢うたが憎いかえ、さりとては戀には粹も愚痴になる、これはごしきの色の外 唄へ新發田五萬石荒そとまゝよ、新潟通ひが止められよか へ氣作惡性が浮世にや德で、合ねまり地藏へ色の願、跣足參りの 合土ふます 浮瑠璃へ内の 合内儀殿癎癪抑へて 合夜間も晝間も三度栗 唄へさのせ 合さのせのせつせのせせつたら黃粉の 合稗團子ついて欲し 浮瑠璃へ

沖のエ沖の題目波に浮んで 合風に揺られて 唄へ朝日に輝く夕日が棚引く 浮瑠璃へ南無妙法蓮華經 唄へ南無妙法蓮華經 浮瑠璃へあじよだか當世捻りが流行る 合客と女郎衆の機嫌氣褄も逆竹 唄へ幸濱三里を乘るとても 浮瑠璃へ米山三里を乘るものか 唄へ様はナ八つ目のある鰻の性で 浮瑠璃へぬらりくらりと 合氣が多い 兩方へ國の訛の笑ひ草 唄へ身の生業は八百八品 浮瑠璃へ八百八町御贔屓の 唄へお惠み願ふ 浮瑠璃お取立て 兩方へ仰ぐ舞臺ぞ千代の壽。



「六玉川」正本表紙

六玉川琴柱の雁

九〇

〔解題〕 通稱「六玉川」。文政十二年正月、河原崎座「江南魁曾我」第一番目五立目に出したもので、作曲者は四世杵屋六三郎。工藤左衛門（中村歌六）、曾我十郎（澤村源之助）、朝比奈（中山富三郎）、少將（岩井紫若）、曾我五郎（市川團十郎）。

へそれ風雨とゞめて青空の、南に開く梅が香や、かつと朝日の初霞、江戸紫の位山、高光たるこそゆゝしけれ へ見あぐる方は山城に續く津の國花待ち得てぞ近江なる 合 その陸奥の野田近く武藏にきほふ紀の國も、寄せて名のるや花の春 へ幾千代の詠めはいつし變らねど、わきて嬉しき年月や 合 思ひこめたる竹の代々、並ぶ二葉の松にまつたる松の色 合 枝も榮ふる若綠、仰ぐにあかぬ時を得て開く扇の要石 へかくれ渚の潮滿ち來れば 合 松の磯馴に打ちかけの、餘勢も深く見かへりて 合 親の敵祐經と行かんとせしが へ待て暫しわが心 二上り へいとに寄せぢか晒しのや、晒す垣根の朝露に、ぬるゝ袂につや浮きて月も雲間の袖の内 へ消えて跡なき風のつて、衣打つ音や夜な／＼ へま見えそめしは昨日今日、つきぬ縁とてまた近江萩 へいひたい事も山吹の、言はぬ色なる身のつらさ へせめてうらみて陸奥の、鳴いて千鳥のわが思ひ、汲みやしつらん玉川の水。

御歳玉海老手遊　九一

〔解題〕 通稱「とんび奴」。前の「六玉川」と同じ芝居の同じ場に用ひたもの。曾我小奴あかん平（市川ゑび藏）作曲者杵屋六三郎。

へ一聲は彼奴が鳴いたか合初鰹合羽を生じて合飛ぶといふ譬は聞けども目前に見るは始と跡追うてやつこらさつてもこれやどうぢやへ返せ戻せも何のその空吹く風の面憎や合傳へ聞く唐の楊ゆとやら云ふ人は雲井の雁を射て落す合頼政殿は鵺を射る我も武士の橋詰で夜鷹は手のものアノ鳶と言うても弓矢に事を缺き邊塒ねて合釣瓶竿セリフへこれもんのに構へて一つ晝中二つ不屆き三つ見捨てて行かれうものか合いつそ移して手取りに抑へて合さつくれべいへ鳶とろゝや棟上の餅がほんに廿四五足らぬと言うてそれこせ合點ぢやよい／＼よんやな躍りかけてぞ跡を慕ひて走行く。


「とんび奴」正本表紙

吾妻八景　九二

〔解題〕文政十二年四月、四世杵屋六三郎作曲。江戸の名所を、日本橋を始めとして順次に敍したもので、六三郎の作曲中座敷用として代表的の一名曲。

本調子へ實に豐かなる日の本の、橋の袂　霞の富士、雲の袖なる花の波合目許美ひし園の蝶、花の簪を垣間見に、吾嬬の初霞、江戸紫の曙染や合水上白き　し御所櫻、御殿山なす人群の、薫に醉　の小舟樟高輪に　合二上りへ遙か彼方の合

時鳥、初音かけたか羽衣の、松は天女　簪一筋の、道の碑露踏分けて、合の深み、戀の關所も忍が岡の蓮によれ
の戯れを、三保に譬へて駿河の名ある　む矢立の隅田川、目に附く秋の七草に、る絲竹の、調懷しき浮島の　合形なす許
臺の餘勢の彌高く、見下す岸の筏守り、拍子通はす紙砧　合三下りへ忍ぶ文字摺亂　にもりせば　合へ樂の音共に東叡より
日を脊負うたる阿彌陀笠、法の方への　るゝ雁の玉章に　合便を聞かん封じ目　も、風が降らする花紅葉、手に手合せ
宮戸川流れ渡りに色々の、花の錦の淺　を、きりの渡に棹さす舟も、何時越え　て貴賤の誓ひ辨財天の御影もる池の邊
草や、御寺を他所に浮れ男は、何地へ　たやら衣紋坂　合見世清掻に引寄せられ　の尊くも廻りてや見ん八つの名所。
外れし矢大臣、紋日に當る辻占の　合松　て合つい流連の朝の雪、積り積りて情

第二番目九變化　九三

〔解題〕天保元年三月中村座「櫻清水清玄」の第二番目大切に出した中村芝翫の九變化所作事。作曲者杵屋三郎助。葉越月安宅古例（長唄）八島落官女の業（長唄）豊前國布刈の祭（常磐津）乞巧奠牛市の賑（富本）浮世風俗娘揃（長唄）一つ屋長者の倉入（長唄、常磐津かけ合）喜撰が庵の茶呑說、花見酒のうかれ男（二曲、常盤津富本かけ合）淺草に仁王靈驗（長唄）。

この中現存長唄の「八島落官女の業」は一般に「官女」と呼ばれる。平家一門が八島壇の浦に滅びた後に零落した官女が魚賣りあるくといふ趣向。

八島落官女の業（官女）

へ見渡せば柳櫻に錦する、都は何時か　へ此所の在所はナ　合このな〳〵この濱
故郷に、馴れし手業の可愛らし　二上り　越えて合あの濱越えて合ずつとの下の

下の関内裏風俗あだ媚きて合小間買はんか鴨買やれ合鰹買はんや鯛や鱸コレ買うてたもいなう、アヽしよんがいな如何にみすぎぢやよすぎぢやとても、おまな賣る身は蓮葉なものぢやえ徒歩跣足へ其方思へば室と八島で塩焼く煙合立ちし浮名も厭ひはせいで、朝な夕なに胸くゆらする合梓を絶えてやふつつりと、たより渚に捨小舟新内へ心づくしの明暮に合亂れしまゝの黒髪も合取上げていふかねごとの、生田の森の幾度か、思ひ過ごして合恥しく三下りへ涙も赤間が関せかれては、枕に寒き合几帳の風も、今は苫漏る月影に新内へ泣いて明石の蜑の袖ッレへ何時檜扇を松の葉の、磯馴れ小唄の一節に三下りへ友の合ぞめきにそゝのかされて合舫の帆綱をかけぬが無理か合須磨よ〳〵合いとど道には身をやつすへ夜半の合水鶏を砧と聞いて合立てし金戸を閉けぬが無理か合須磨よ〳〵合恨み勝ちなる床の内合憂やつらやへ波の哀れや壇の浦合打合ひ刺違ふ船軍の懸引、浮き沈むとせし程に春の夜の波より明けて敵と見えしは群れゐる鴎、鬨の聲と聞えしは、浦風なりけり高松の〳〵、朝嵐とぞなりにける。



「官女」の正本表紙

〔解題〕　天保二年三月廿五日から中村座に於て中村芝翫が岩井粂三郎の小町を相手に六歌仙の所作事。大薩摩及び長唄の作曲者は十代杵屋六左衛門。六左衛門はこれ迄杵屋三郎助と稱へてゐたが、天保元年十一月六左衛門の名跡を繼いだのである。四世六四郎即ち後の池の端の六翁と共に文政から天保期の長唄隆盛時代の代表的名作者であつた。（安政五年歿、年五十九）なほこの六歌仙の解題については、淸元の同曲の條御參照を乞ふ。

僧正遍昭　小町　　作者松本幸二

（當初大薩摩であつたが、後義太夫に改めた）

へされば にや窈窕たる上臈の大内山に時めきて、左近の櫻色ぞ濃き、歌鶯の囀もげに日の本の譽かやへこゝに僧正遍照は、昔の花の 合良岑と嵯峨の皇居に通ひ路の 地御纓に重き玉の露、その浮雲に障へられてへ比叡のお山に心澄む横川の杉の闇誘ふ、思の床にぞ着き給ふ 地芝翫これは僧正遍照と申す知識にて候ひしが身に纏うたる色衣未來永劫佛罰なた へ受けなば受けよ玉椿、落ちての末は芥とも、是非に小町に對面と、立寄り給ふを局達 皆々へ御對顔なら又重ねて へさなきだに 合車に積る玉章も、括り枕の徒事と、驚かしぬる悲しさを、推量あれと折も折 粂三郎 へ色見えで移らふものは世の中の 芝翫 へヤ、さぞ宣ふ人は我が仇人 粂三郎 へ人の心の花にぞありける 芝翫 へはて心優しの歌人よなら 地へ僧正垢離の數珠の緒に、繋ぎ留めよと手を上げてオトシへこれへ〳〵と招かるゝ 唄へ小町はいともしとやかに 合長掛捌き御所育ち、雲居に名をも オロシへ揚御簾をへ離れて席に歩み出で 粂三郎へ僧正様には今日も亦 唄春咲く木々の花盛り果し渚の眺なく 合夏は青葉の秋來れば 合雁なら知るに散りもすれ 合冬の凩などかせん、さりとては生者必滅會者定離へ三悪道を出でながら、尚も鬼畜に迷ひしが 合志賀の性空上人も 合悟りかねてか戀の道、況してや我に於てをやへ人の常とは言ひながら、悟道知識もその色の 地へ白きを 合赤きと 合言はさりきぞ フシへ善悪邪正は心の現世 合迷へば煩悩 地へ悟れば菩提 合分けて女犯は眼の迷ひ情と云ふを知れぞかし へ佛も假に夜叉と云ひ得道あれや僧正と 地行かんとするを押留め暫し〳〵と宣ふを、側から寄つて局達、あはれ知識の御身にて、戀ひ侘び給ふぞはしたなき、歸らせ給へ 地僧正様衣

の袖を打拂ひ 三重へ花吹くと上遊 地へ小町御簾漏れて、薫もゆかし七重八重九重襲御事やと拂へども 合尚も離れじと引か
前を打見やり フシ御法の場にぞ 三重歸す 合誰が花扇 合待つ身は長き檜扇と焦る〻袖を 合振切る手には 合思の丈心の
らる〻へ小町は跡を見返り〳〵、悲し
と思ふ心根を、衣紋に含むばかりに
て。局引連れ入り給ふ〳〵。

業平　小町

鼓 唄へ梓弓引けば元末 本調子へ我が方へ
合 夜こそ勝れ戀の道、忍の亂れ限りな
き 合野にも山にも春霞 へ立つ名厭はじ
さりとては、靡き給へと木綿垂の 新造へ
神に眞實を明石潟 合幾夜か通ふ浦々千
鳥鳴いて 合濡れなん涙の雨に 喜平次へい
いや曇らじ胸の月 喜三郎へ花の色香の 合
情は仇に移りにけりな 喜三郎へ徒な 新造
へ我は戀慕の闇々と、戀死なん身も惜し
からじ、厭はぬ我が身我ながら 合ならうれ焦る〻思もほんに白扇、胸に疊んで 餘りて言葉なく讀人知らずと歸らる
現なの人ぢやえ 二上りへ今宵扇のその約 合一人氣を 合紅葉 合扇の 合遣瀬もなう る。
束を 合忍ぶ心の細殿に 合月の扇の 合御て閨の扇 本調子へ縮空事 へあらうたての



「六歌仙」正本表紙

喜撰（清元とのかけ合）

作者松本幸二

浄瑠璃へ我が庵は芝居の辰巳常磐町、しかも浮世を離れ里へ世辭で丸めて浮氣でこねて、小町櫻の詠にあかぬ、彼奴にうつかり眉毛をよまれ 唄へ法師〳〵はきつゝきの、素見ぞめきで歸らりよか 合わしは瓢箪 合浮く身ぢやけれど 浄るりへぬしは鯰の取所 合ぬらりくらりと今日も亦、浮かれ〳〵て來りける 唄へもしやと御簾をよそながら 合喜撰の花香 合茶の給仕 浄るりへ浪立つ胸を押撫でて、しまりなけれど鉢卷を、幾度しめて水馴棹 唄へぬれて見たさに手を取つて、小野の夕立えにしの時雨 浄るりへ化粧の窓の手を組んで、どう見直して胴ぶるひ 唄へ今日のご見の初昔 合惡性と聞いてこの胸か、朧の月や 合松の蔭 浄るりへわたしやお前の政所、いつか果報も一森と、ほめられたさの身の願ひ 唄ほれすぎる程愚痴な氣に 浄るりへ心の底の知れかねて 唄へじれつたいでは 浄るりないかいな、なぜ惚れさせたこれ姉え 唄へ己惚すぎた惡じやれな、わつちもそんならへきほひ肌、五十五貫でやらうなら廻りなんしえ、ぐわら〳〵鐵棒に 合路次は締りやす 浄るりへ長屋の姉えが鐵砲絞りの半襟か、花見の煙管ぢやあるめえし、すてきに首にからんだは、廊下鳶が油揚さらひ、お隣の花魁へ知らねえ顔もすさまじい、何だか高い觀音さんの 唄へ鳩は五重や三重の、塔の九輪へとまりやす 浄るりへするると言はれて浮いた同志 唄へヤレ色の世界に出家をとげるヤレ〳〵〳〵こまかにちよぼくれ 浄ろりへ愚僧が住家は京の辰巳の世を宇治山とは人はいふなり、ちや〳〵くちや茶園の話すこい茶の緣の橋姫、夕の口說の袖の移り香、花橘の名小島が崎より、一散走りに走つて戻れば、內のかかあが悋氣の角文字、牛も涎を流るゝ川瀨の、くどけば內へ我からこがるゝ螢を集めて手管の學問 唄へ唐も日本も廓の戀路が山吹流しの水に照り添ふ旭のお山、誰でもかれでも一世の契りは、平等院とや、さりとはこれはうるさいこんだに 浄るりへ歸命頂禮どら如來 唄へ衆生手だての歌念佛 浄るりへ釋迦牟尼佛も床いそぎ、だいて涅槃の長枕、睦言がはりのお經文 唄へなまいだ〳〵 合なぜに屆かぬ我が思ひほんにサ 浄るりへ忍ぶ戀には如來まで、來て見やしやんせ阿彌陀笠、黃金の膚で有難や 唄へなまいだ〳〵〳〵 合なぜに屆かぬ我が思ひ、ほんにサ、こゝに極まる樂しさよ 浄るりへ難波江の片葉の蘆の結ぼれか

かりアレハサ、コレハサ 唄へとけてほぐれて逢ふ事もまつにかひある 合ヤンレ夏の雨 浮るりへヤアとこせ、よいやな 唄へありやりや 浮るりへこれわいな 唄へこのなんでもせ 浮るりへ住吉の岸べの茶屋に腰打ちかけてヨイヤサ、コレハサ 唄へ松でつろやれ蛉を、逢うて嬉しき 合ヤンレ夏の月 浮るりへヤアとこせ、よいや 唄へありやりや 浮るりへこれわいな、このなんでもせ 浮るりへ姉さん音上かえ、島田金谷は川のあひ、旅籠はびたでお定まり 唄へお泊りならば泊らんせ、お風呂もとん／＼わいてある障子も此頃張りかへた 合疊もこの頃かへてある 合お寝間のお伽をまけにして 浮るりへ草鞋の紐のあだどけの、結んだ後の一夜づま 歌へあんまり悋うもあるまいか、ても 浮るりへさうだろ／＼さうである 歌へ住吉様の岸の姫松目出たさよ、いさめの御祈禱清めの御祈禱、天下太平國土安穏目出たさよ 浮るりへ來世は生を黒牡丹、おのが庵へ歸りゆく。

黒主　小町

三下りへ言の葉に 外記へやはらぐ國と神代より 合名に大伴の黒主と 合小町櫻の色はえて、目出たき御代の歌合、詠じて君を仰がんへまかなくに 合何をたねとて浮草の 合生ひ茂るてふ 合水底に、うつろふ月のくもらじ ツヽミ桂男の心まばゆき鏡山、いざ立寄りて御旅の間のへゆかしき人の花の香に 合迷ふもつらき戀風がぞつと身にしむよすがらも、嬉しい縁の歌合せ 合筆のすさみの墨色も、薄いは嫌よあだ事に、解けぬや露の玉襷、掛けても袖はよも濡れじ 浮へ和歌の浦曲の藻鹽草／＼、打ちかけて洗はんへ染めにし筆も浮草の、流れて消ゆる夕霞、花の打衣 合掛烏帽子 合廻らす袖や波返りへ面白や／＼ 合天の川瀬に洗ひしは、秋の七日の衣なり、合穎川に耳洗ひしは 合濁れる世をぞ澄しける 合春の歌を洗うては、霞の袖を解かうよ 合冬の歌を洗へば 合袂も寒き水鳥の、上毛の霜に洗はん、時雨に濡れて洗ひしは、紅葉の錦なりけりへ濯の眞砂や盡きしなく、榮ふる國の風俗を、三十一文字にその言草のいづれ劣らぬ 合歌聖 合六歌仙とて雲居の空に 合高き譽ぞ殘しける。

姿花后雛形　九五

〔解題〕天保三年九月、市村座で澤村訥升の演じた、舞姫(長唄)子守女・女夜番・輕業(三曲常磐津)小鍛冶（長唄）の五變化の所作事。その中「小鍛冶」が名高く、今も行はれる。作者二世劇神仙。作曲者二世杵屋勝五郎。

小鍛冶

〽稲荷山三つの燈火明かに、心を磨く鍛冶の道、小狐丸と末の代に、殘すその名ぞ著るき〽それ唐土に傳へ聞く龍泉太阿はいさ知らず、我が日の本の鍛工、天國天の座神息が、國家鎮護の劍にも、優りはするとも劣らじと、神の力の相槌を、打つや丁々しつていころり、他所に聞くさへ勇ましき〽打つと云ふそれは夜寒の麻衣、遠の砧も音添へて打てや現の宇津の山、鄙も都も秋更けて、降るや時雨の初紅葉こがるゝ色を鐵床に〽火加減湯加減秘密の大事、焼刃渡しは陰陽和合、露にも濡れて薄紅葉、染めて色増す金色は、霜夜の月と澄優る、手柄の程ぞ類なき清光凛々麗しき、若手の業物切物と、四方にその名は響きけり。

初子日　九六

〔解題〕天保四年三月、四世杵屋六三郎作曲。作者二世劇神仙。

本調子〽鶯の初音の今日に袖連れて、曳くや小松の千代の影、心長閑けき春遊び（合）野邊はまだうら若草の妻定め、心の帯は何時の間に、解けて他所目はつれなく見せて、知らぬ振して白雪の、〽ノしら〳〵しい顔わいな、忍び車の

通ひ路も、合登る夕を思へばほんに、粋な月夜でありながら、軒の霞の引く袖に、惜む別れのある事も、知らで惜さの百千鳥、聲に明行く窓の戸の、はしたないのも戀の癖なまめかし咲初めし梅をえにしの始にて、翳す櫻の色も香も、花で濟む世を浮氣に拗ねて、氣儘らしさの枝振も折りてゆかし 二上りへき花活の合水も濁らぬ末かけて、梅と櫻の花心羨しへ東風そよぐ門松に、追羽根の音手毬唄合添へて盡せぬ萬代の聲。

俄獅子　九七

〔解題〕天保五年十月吉原の俄の出し物として作られたので、作曲者杵屋六三郎が馴染の花魁の部屋で廓情調に浸りつゝ作曲したものであるといはれる。詞章は「相生獅子」を碎いて、その辭句をもぢつて遊里の狀致を敍したもので、前の「廓三番」と同じ行き方である。當代の江戸人士の耽溺した吉原の遊里情調の遺憾なく出て居る作であると評される。

二上り唄へ花と見つ五町驚かぬ人もなし、汝も迷ふや樣々に合四季折々の戲は、紋日物日の掛言葉合蝶や胡蝶の禿俄の浮れ獅子合見返れば花の屋臺に見えつ隱れつ色々の姿優しき仲の町へ心盡しのナその玉章も、何時か渡さん袖の内、心一つに思ひ草、よしや世の中合狂ひ亂るゝ牝獅子牡獅子の彼方へひらり、此方へひらり、ひら〳〵〳〵合忍ぶの峰か重ね夜具、枕の岩間瀧津瀬の、酒に亂れて足もたまらず合他所の見る目も白浪やキヤリヤア秋の最中の月は竹村、更けて逢ふのが間夫の客ヨイ〳〵クドキ辻占みごと繰り返し、何故この樣に忘られぬ、恥しい程愚痴になるへと言ふちやア無理酒に何でも此方の待人戀のナ戀の山屋が豆腐に鎹締のないのでぬらくらふはつく嘘ばか

りヨイ／＼ヨイヤナ クドキへ宵から待たせて又行かうとは、エ、餘りなと跺立直しへ締めろヤレたんだ打てや打て、打つは太鼓が取持ち顏か、拗ねて裏向く水道尻に合お神樂蕎麥なら少し伸びたと囃されて、ちん／＼鴨の床の內、たんたん狸の空寢入り、抓つた後の所緣の色に、打つて變つた仲直り、あれはさこれはさよい聲かけや、よいやなや、しどもなや三下りへ人目忍ぶは裏茶屋に、爲になるのを振捨てて、深く沈みし戀の淵、心からなる身の憂さは、いつそつらいぢやないかいな合逢はぬ昔がなつかしやへ獅子に添ひてや戲れ遊ぶ浮立つ色の群りて、夕日花咲く廓景色、目前と貴賤現なりへ暫く待たせ給へ宵の約束今行く程に、夜も更けじ合 獅子團亂旋の舞樂もかくや、勇む末社の花に戲れ酒に伏し、大金散らす君達の、打てや大門全盛の、高金の奇特現れて靡かぬ草木もなき時なれや、千秋萬歲萬々歲と豐に祝す獅子頭。

外記節 傀儡師 九八

〔解題〕外記節の「傀儡師」を元として十代杵屋六左衛門が作曲したもの。詞章は殆んど同じである。(河東節の部所收の外記節傀儡師參照)作曲年代については、文化十二年、まだ三郎助時代に、夙に「外記の石橋」「外記猿」に先だつて出來たもので、その正本の刊行が天保七年七月であるといはれる。

へ浮世の業や西の海、潮の蛭子の里廣く、國々修行の傀儡師、連に離れて雪の下、椿に並ぶ靑柳の、滴も軒き春雨に、樂屋を被り通るにぞへ塀構へなる窓の內、呼掛けられてゆかしくも、立止まれば麗しき女中の聲にて傀儡師、一曲舞せと望まれし、言葉の下より取敢へず、聲惡しけれど箱鼓、拍子とり／＼人形を數多出してそれ／＼と、謠

ひけるこそをかしけれ 二上り へ小倉の野邊の一本薄何時か穗に出て尾花とならば、露が嫉まん繼草の、積り／＼て足引の、山猫の尾の長々と、一人かも寢ん淋しさに 本調子 へ昨夜迎へし花嫁は、鎌もよく切る千草も靡く、心よささな内儀様ぢや、俺が女房を褒めるぢやないが、物もよく縫ひ機も織り候、綾や錦や金襴緞子、折々毎の睦言に、二人持ちし子寶の、總領息子は大様にて、父の前でも懷手、物を言うても返事せず、二番息子は脊高く三番息子は惡戯にて、わるさ盛りの六つ七つ、中で愛しき血の餘り、肩に打乘せて都の名所廻れ／＼風車張子鞨鼓や振鼓手に持ち遊べさ 三下り へ花が見たくば吉野へござれ、今は吉野の花盛りヨイサ／＼花盛り、花笠着連れしやな／＼と 本調子 へこのはしたは吸筒を袂に卷きて唐注や、つい明らけき天津空、櫻盛りに今日の日も／＼へ呉羽綾羽のとり／＼に、呉羽綾羽のとり／＼の貢物備ふる御代こそめでたけれど、箱の内にぞ納めける。

唄浄瑠璃 春野邊櫻袂 九九

〔解題〕 通稱「骨寄せ岩藤」。天保八年三月六日から中村座興行の「櫻花大江戸入船」の第一番目發端に出したもので、作者は鶴屋南北、岩藤の亡魂尾上菊五郎、二代の尾上岩井紫若、作曲者杵屋六左衛門、唄淨るり吉住瓢二、松永鐵五郎。

へ往事渺茫として 合 都て夢に似たり 合 舊友零落して半泉に歸す へ往きては歸る世の中や へ本來假の地水火風 合 空 より出でて又空にへかへる道さ へ迷ひぬる へ爰



「春野邊櫻袂」正本表紙

の合肱骨かしこの股骨おのづと寄つて立上り合歩むともなくよろ／＼合佇むともなくたよ／＼と風のまに／＼うなづくは合〽げに野ざらしのあなめの薄〽をのともいはんなり形合五體揃へば忽に朝の白骨夕の紅顔合皮にぞかはる人形や怪しくも亦不思議なる。

四つの詠　一〇〇

〔解題〕天保八年八月四世杵屋六三郎作曲。清元の「梅の春」の作者として、又梅の門貞門の狂名で狂歌をよくした長府侯毛利元義が、高輪下屋敷の四季の眺を綴つたものだといふ。

〽この殿はむべも富みけりさきぐさの合三つ葉四つ葉や四つの時、その折々の樂しみを、こゝに引出す春霞、子の日の小松千代こめて、風ものどかに富貴自在、笑ふ山々梅の門合見渡せば、野は紫のすり火打、煙る火繩に青柳の、花の乙女もこきまじり、若菜摘み草打連れだちて、風が浮氣をそゝのかす、エ、置かしやんせ、かたへに鳥のほうやら／＼、なぶろと何の園の蝶、狂ひ狂うてひら／＼二上り〽はや夏木立衣更へ、日には青葉の時鳥、てつぺんかけて消え殘る、向うに富士の氷室時、合芝の浦風吹送る、涼しい中にまどゐして、心も揃ふ染浴衣、うたひつ舞ひつ酌みかはす、酒が浮かするざれ歌や恥かしい〽袖に螢の火を見せて合邪魔をするやうで取持顏に合戀の闇路をよく照らす合にくい可愛もエ、じれつたい、氣が知れぬ、面白や三下り〽波路合遙かに夕暮の、漁の影も數そへて〽光れる星と七夕の、ほんに嬉しき逢ふ瀬もあらば、雁の文月屆けてほしや合願ひの糸の貸小袖合紅葉に染めて美しの、幾代ことぶく菊重ね合模様は秋の七草に、君を松蟲合機織蟲の合聲に織らせて月に打つ、麻布の里の紙砧合げにやめでたき豐年の、貢ぎの雪にかまかけて、濃茶の味も酌みて知る、拙き筆の口切や合四つの眺めも盡きぬ高樓。

初時雨　一〇一

〔解題〕天保十年春十世杵屋六左衛門の作曲。英一蝶の畫いた待乳山の繪に一蝶自ら賛をして

　梢松の葉も落ちそめて、夕かげ白き待乳山、しぐれ〳〵に啼く鴫の、聲も凍るや干潟道、
　衣紋坂こえて鐘の音

とあるのを取つて補修したものである。

本調子 へ梢松の葉の落ち初めて 合 夕暮白て通ひ來る 合 阿呆鳥が笑ふとまゝよエぶ夢見草、露の情をいたづらな、誰が
き待乳山時雨 合 時雨に 合 啼く鴫の、聲エ措かしやんせ 合 可愛い〳〵と引締め悋氣に吹き拂ふ へ悋や格子に誘ふ夜
も凍るや干潟道 合 衣紋坂越えて 合 鐘のて、互に肌を暖め鳥 合 鴛鴦の衾に思ひ嵐。
音 二上リ へそれは上野か淺草か 合 堺急ぎ寢の室の初花下紐解けて 合 それから結

巽八景　一〇二

〔解題〕天保十年春、杵屋六左衛門作曲。作者二世立川焉馬。
大江戸の辰巳に當る深川の遊里を中心にして、その附近の八景を叙したもの。その八景といふのは、永代の歸帆、八幡の晩鐘、佃島の落雁、仲町の夜雨、石場の暮雪、新地の晴嵐、洲崎の秋月、櫓下の夕照をいふ。

三下リ へ、大江戸とならぬ昔の武藏野の 合 尾花や招き寄せたりし、戀と情の深川や 合 緣も長き永代の 合 歸帆はいきな

送り船その爪弾きの絃による 合 情に身に、さへ入相のきぬ〴〵ならぬも山鐘も 合 ごんと佃の辻占に、もゆるほむらの篝火や 合 せめて恨みて 合 玉章を薄墨にかく雁の文字へ女子の念も通し矢の、屆いて今は張弱く 合 いつか二人が仲町

しつぽりぬるゝ夜の雨、堅い石場の約束に、話は積る雪の肌、とけて嬉しい胸の雲、吹拂うたる晴嵐は、しんき新地ぢやないかいなへ洲崎の浦の波こさじと誓ひし事もありあけの、月の桂の男氣はへ定めかねたる 合 秋の空 合

だまされたさの眞實に、見おろされたる櫓下 合 疑ひはれし夕化粧、月もとに照らす紅の花、幾世契らん諸白髮へ浮名たつみの八景と、その一節を立川の流を筆に殘しける。

花曆色所八景　一〇二

〔解題〕天保十年三月、中村座、中村歌右衛門・岩井粂三郎八景によそへての所作事。作曲者杵屋六左衛門。

助六（北に當て花に誘ふ 吉原に助六の夜雨）

本調子へ傘さして 合 濡れに廓の夜の雨 合 見世清掻に聲添ふる、鐘は上野か淺草に、その名も伊達な花川戸へこの鉢卷は所緣ぞかゝる藤浪の、洗うて千代の色增る、松の刷毛先透き額、堤八町衣紋坂通ひ馴れたる塗鼻緒一つ印籠一つ前二重廻りの雲の帶、差した尺八鮫鞘は、これ御存じの出立ばえ 三下りへ急くな急きやるな浮世は車さよえ 合 廻る月日が緣となる 合 廻る月日が緣となるへ戀の夜櫻浮氣で通ふ 合 間夫の名取の通り者、喧嘩仕掛けや 合 色仕掛け力づくなら何手管なら流儀〴〵で向ふ面 合 只では通さぬ大門を 合 又潛るとは 合 命がけ 合 土手節止めよ編笠を 合 取つて投げるは曲がない、蹴込んで見せうか、屋形船これや又何のこつた江戸の花へ富士と筑波の山間に、袖形ゆかし君ゆかしへしんぞ命を揚卷の、これ助六が前

渡り、風情なりける次第なり。

景清（巽に當て花に曇る / 深川に丹前の朧月）

作者櫻田治助

（常磐津とのかけ合）

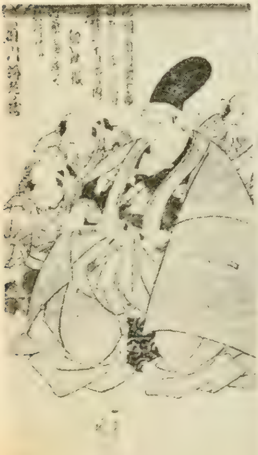
浄るりへ吳道子が筆にあらねど富が岡 合掛けたる額の姿繪を、こゝに都の朧月 唄へつとめの音海棠の、眠り習ひの禿筆、いよし御見やちわ文も、樣に使ひの樣參る 合文箱の封じふつつりと切れてどうやら氣にかゝり 合よすが求めて跡追うて、あの花魁のなかく\を結ぶ心の一筋に、糸に寄り來る風見草 浄るりへこちは色氣も內證の、お世話はなれて細見に、山形二つ附く身とならば、あだな浮名も眞實に 唄へかへていとしい人さんが、あらば手管の淸書を、あげて見たさの心とは 浄るりへちとませものぢやないかいな、可愛らし 浄るりへよしや男と名に立髮の大小さすが六法は 合外に類も中村の、是もお家の一流と振つて振出す花の雨 唄へ土手の相傘一人は濡るゝ 合里の意氣地も世の義理も、道は變らぬ 合五條坂、うかれく\て通ひ來る 浄るりへ然るに平家世を取つて、花も紅葉もおのづから皆紅に時めきしに 唄へ今は忍ぶの目せき笠 浄るりへ木綿く\と落ぶれし、身の果て哀れな物ごしに 唄へ逢はぬが結句ますらをと、すげなう行くを止むるゆかり 浄るりへ引かるゝ袖に引出す、愚痴と話をなひまぜに 唄へ語るも過ぎし壽永なる、盛りときめく御代の春 浄るりへ野山を越えて淸水へ、夜毎日毎に徒步詣 唄へいつ近付きになるとなく 浄るりへ羽織の袖のふくろびや 唄へちよつと時雨の傘に 浄るりへ雪の朝の酒一つ 唄へこつちに思へば 浄るりへあつちも功德は深い觀音經 唄へあぢな戀ぢやと 浄へ引寄せて 唄へ言葉を 浄へ結ぶ 唄へなごやお 浄へヲ、唄へヲ、浄へヲ、唄へヲヲ 兩方へび 浄へをはりなければ始もない飽かぬ口說に氣を通し、ゆかりは立つて走り行く 唄へ一太刀恨みん計略に、白張淨衣に 合立烏帽子 ウタヒへ包むとすれど神はなほ、君を守りの御威光 歌右衞門へあらはれけるか白張の ウタヒへ脇より見ゆる具足の金物、光を放つ打物の 唄へ鞘詰りたる言葉の末、名のれやく\と取卷く諸卒 浄へしや無念なれ是迄と、宮奴姿 合かなぐり捨て聲高く 合そも某は平家の侍惡七兵衞景淸と名のりもあへずあざ丸をするりと拔持ち 合立向へば 唄へさしも固めし 浄るりへ堅固の兵 唄へ花の 浄へ吹雪と 唄へちりやちりく\ 浄へちりく\ぱつと 合逃げにける 唄へ忽ち勝負を見せけるは、ゆゝしかりける次第なり。

鷺娘（坤に當って花に埋る／荻江に鷺娘の暮雪）（通稱、新鷺娘）

三下り ヘ妄執の雲晴れやらぬ雪の夜の 合 このもかのもに花や咲く 合 誰にこがれて松風の ヘ吹けども枝に雪持ちて、積る思は淡雪の 合 消えて濡れにし戀ひ衣 ヘせめて哀れと夕暮に 合 ちら／\雪に濡れ鷺の 合 しよんぼりと可愛らし、迷ふ心の細流れ行方何處と白鷺の、何時か晴れなん胸の月 ヘ須磨の浦邊で鹽汲むよりも、君の心が取りにくい、さりとは實に誠と思はんせ、しやほんにえ ヘ咲いて甲斐なき彌生の櫻 合 花を見捨てゝあれ歸る雁 ヘ文もやらねど訪來る燕 合 去年の契を忘れぬしよんがえ、それが戀路の譯ぢやもの ヘ忍ぶその夜の話を捨てゝ 合 縁を結ぶの神樣も初手は恨みてついひぞり言 合 屆かぬ思葛城の 合 粂の岩橋仲絶えて、枕に塵の積る夜を、數へて泣いて待ち明す 合 磯の千鳥ぢやないかいな 合 あの徒浪の浮名立つ、ほんに涙の氷柱さへ、解けて逢ふせの嬉しさに、餘る色香の恥しや ヘ雛の祭の箱入人形 合 紗綾や縮緬金襴緞子、蒲團重ねて 合 しやんと乗物に打乗せて 合 行列揃へて 合 見事にさ 合 勇んでさ 合 見事に揃うた 合 花の山 合 雲かあらぬか、霞の袖に、色もうつろふ八重山櫻、しづ心なき春風に、散るわの 合 散るわの散來るわ／\ 合 散るは花吹雪 合 靡くは品よき柳腰 合 拍子うき／\五人囃子が囃した 合 可愛らしさの稚遊びえ ヘ花となまめく白妙の、雪の振袖己が羽風にひら／\／\、姿見まがふ柳陰。

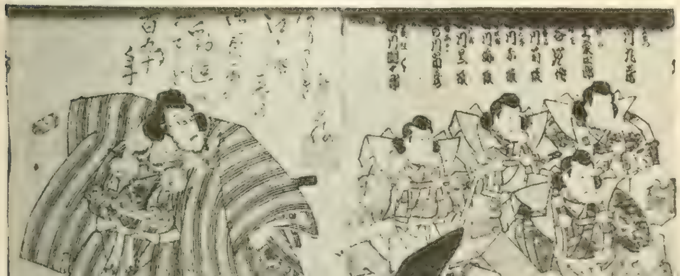
歌舞伎十八番 勸進帳　一〇四

〔解題〕義經記や能の「安宅」から十八番の勸進帳に進展する迄には文献上技藝上相當に長い傳説があるが、今はそれには觸れない事にして、單に本曲だけについていふ。本曲は天保十一年三月五日から、河原崎座に於



て興行されたもので、その番附に載せられた口上書によれば、初めて安宅關の勸進帳を勤めた元祖團十郎才牛の百五十年の壽として演じられたので、辨慶海老藏、富樫市川九藏、判官八世團十郎。作曲者は四世六三郎、特に一世一代としてその天稟の技倆を振ひ、振付は四代目西川扇藏、作者は三世並木五瓶、長唄は芳村伊十郎に岡安岡代八、三絃は六三郎に長次郎、その他囃子迄腕揃ひで大好評。次いで嘉永二年に八代目團十郎の辨慶、更に嘉永五年に海老藏の一世一代の勸進帳といふ次第で、いよ〳〵その聲價を高めて今日に至つたのであるが、要するに海老藏と六三郎との二大天才の協力になる傑作といふべきであらう。

次第へ旅の衣は篠懸の、旅の衣は篠懸の、露けき袖やしぼるらん へ時しも頃は如月の、如月の十日の夜 へ月の都を立出でて へこれやこの、行くも歸るも別れては、知るも知らぬも逢坂の山隱す 合 霞ぞ春はゆかしける 合 波路遙かに行く船の、海津の浦に着きにけり へいざ通らんと旅衣、關の此方に立ちかゝる へそれ山伏といつぱ、役の優婆塞の行義を受け即身即佛の本體を、此處にて討留め給はん



帳」初演當時の錦繪

事、明王の照覧計り難う熊野権現の御罰當らん事立ちどころに於て疑あるべからず、唵阿毘羅吽欠と数珠さら〳〵と押し揉んだりへ元より勧進帳のあらばこそ、笈の内より往来の、巻物一巻取出し勧進帳と名付けつゝ、高らかにこそ讀上げければへ天も響けと讀上げたりへ感心してぞ見えにけるへ士卒が運ぶ廣臺に、白綾袴一かさね、加賀絹数多取揃へ、御前へこそは直しければへこは嬉しやと山伏もへしづ〳〵立つて歩まれけりへすはや我が君怪むるは一期の浮沈此處なりと、各々後へ立歸るへ金剛杖を追取つて散々に打擲すへ通れとこそはのゝしりぬへ方々は何故に、かほど賤しき強力に、太刀刀を抜き給ふは、目垂顔の振舞ひ、臆病のいたりかと、皆山伏は打刀抜きかけて、勇みかゝれる有様は、如何なる天魔鬼神も、恐れつべうぞ見えにけるへ士卒を引連れ關守は、門の内へぞ入りにけるへつひに泣かぬ辨慶も、一期の涙ぞ殊勝なる、判官御手を取り給ひへ鎧に添ひし袖枕、片敷く隙も波の上、或時は舟に遊び、風波に身を任せ、又或時は山脊の馬蹄も見えぬ雪の中に、海少しあり夕波の、立來る音や須磨明石、とかく三年の程もなく〳〵痛はしやと、



海老藏一世一代の時の勸進帳舞臺面

しをれかゝりし鬼薊、霜に露置くばかりなり へ互に袖を引連れて、いざさせ給への折柄に 二上り へ實に〳〵これも心得たり、人の情の盃を、受けて心を止むとかや へ今は昔の語り草 へあら恥しの我が心一度見えし女さへ へ迷の道の關越えて、今又此處に越えかぬる へ人目の關のやるせなや へア、悟られぬこそ浮世なれ へ面白や山水に、面白や山水に、盃を浮べては流に牽かるゝ曲水の、手先づ遮る袖觸れて、いざや舞を舞はうよ 此内舞 へ元より辨慶は三塔の遊僧、舞延年の時のわか へこれなる山水の、落ちて巖に響くこそ、鳴るは瀧の水鳴るは瀧の水 へ鳴るは瀧の水日は照るとも絶えずたうたり、とく〳〵立てや手束弓の、心ゆるすな關守の人々、暇申してさらばよとて、笈をおつ取り肩に打掛け へ虎の尾を踏み毒蛇の口を、逃れたる心地して へ陸奥の國へぞ下りける。

花競十二月所作　一〇五

〔解題〕天保十一年三月市村座で、四世歌右衛門と十二世羽左衛門とで演じた十二ケ月の所作事で、こゝに收めたのは、その中の若菜摘と菖蒲人形である。若菜摘は、正月が官女の若菜摘で、それと二月の公家の春日詣との組合せになつて居て、「花の濃染……」以下が公家の春日詣になる仕組である。作者は二世櫻田左交。作曲者は二世杵屋勝五郎。

正月　松花月松尾の若菜摘
二月　梅見月女蘺の春日詣
　　　作者　櫻田左交

本調子 へ君に若菜を進むる事、寛平延喜の御代に始り、天暦四年如月にも、女御安子の奉る七に數添ふ十二種の色比ぶなる若菜人 へ幾千代も變らぬ例妹と脊の 合 睦み泥みて春日野の、若紫の戀ひ衣、忍の亂れ限りなく、深き思を筒井筒 合歌成 へ移り心と始めから、憂き水薺の筆茅花 吉鬮 へ心根芹に立ち明し 鐵五郎 へ待つに甲斐なき僞の、何時 合 逢ふ人のよすがさへ 合歌成 へ繮恨みて片山雉子、鳴く音にもゆる早蕨の ツレ 露に綻ぶ風情なり 合 へ花の濃染の 合 色分けて 合 紅梅殿や 合 老松の 合 緑の空に誓ひして契り情の一夜松 合 薄雪消えて如月に、立ち渡り舞ふ雲の袖 へ和光の影も

曇なき、春日松尾の二つ神、分身異名
の姿を現はし、供御を供へてそのまゝ
に、神は上らせ給ひけり。

五月　菖蒲人形　作者　櫻田左交

三下り へ傳聞く、古への漢の高祖の臣鍾
馗の靈像今も尚生けるに等しき舟月
の、降魔の慮相すさまじきへ御劒の光忽
ちに松嵐梢を拂ふが如く 合 國土にあら
ゆる妖怪惡鬼、何處に屈む處もなく、
顫ひわなゝくばかりなりへ親に似た子
も 合 やつぱり鬼子 合 まさか馬か牛にも
ならず 合 惡戯盛り 合 鬼渡し 合 人取附き
どうねんぼ 合 子を取ろ〳〵 合 どの子が
目附きに目に附くものは、お山の童子
は俺一人、魔界も同じ遊び事へ子鬼尋ね
て母鬼が 合 つい洗濯の 合 その內に、も
しや迷子 合 したならほんに何と正月 合
節分の 合 豆に育てゝ子を思ふ、燒野の

鬼子母 合 夜の角、折れるばかりに泣きて素肌のまゝの 合 あだ情ッレ恥しやへ三
沈むへ大臣憐れに思召し 合 御衣の袖蔭　途河原の三途河のお婆嫁入りしよとお
より子鬼見すればヤア其處にかと寄らしやる、嫁入りやなるまい前齒が抜け



「花兄弟十二月所作」正本表紙

んとすれど御劒の 歌成 へ隔て心か悋らした、前齒抜けても金齒で物を空也六十
い、何ぞいの 合 鬼も十七ついをか惚れ那智八十、今が盛りぢやないかいなへか
に 合 鐵五郎 言寄る傳も夏の月 合 吉照 へ肩のくては果てじと劒を翳し、惡魔を拂ふ
支を揉下す 合 手許をぢつと 歌成 へ引寄せ　その勢ひ勇ましかりける次第なり。

島臺　一〇六

〔解題〕天保十二年三月、作曲者四世杵屋六三郎。祝言物。

三下りへ色も變らぬ常磐木や、君が齢も目見せたる雲の袖、満る〻色香に露保　やへ春戶のサ春戶の朝顔咲くのもよい幾千代と限らざりけり園の竹合笹の繁　つ、木の葉衣の綾錦、霧の籬は色々が、絞る袖垣別れがつらい、絡む手蔓りの私語、誰が始めけん色に出し、そ　に、迷の道の女郎花、中に引く手の絲　の何時迄も、しよんがいナ戯る〻へ鶴の盃も初日潟、海路平に四海波、靜け　薄あだな尾花に招かれて、此處に流し　の妹脊や龜の妹脊の萬々年も、黃金咲き空ぞ豐かなる　合へ松の調の琴柱に渡　の淺澤や、影を寫して三保の富士、田　く君は萬代、喜びの山を束ねてめでたる雁がねも、一針づつの聲添へて、縫　毎の刈穗打群れて、賤が小唄の面白　さを、眞砂の數に寄する島臺。

八重九重花姿繪　一〇七

〔解題〕天保十一年七月中村座「天竺德兵衛万里入船」の第二番目大切に出した尾上多見藏の九變化所作事。狂亂（長唄・常磐津かけ合）五郎（長唄）若衆（常磐津）町娘（長唄）鷹の者（富本）西王母（長唄）雷（常磐津）漁師（富本）鳥羽繪（長唄）の九種。作曲者十代杵屋六左衛門。

狂亂　（多見藏狂亂）

增補三升屋二三治

（常磐津とのかけ合）

淨るりへ戀ひ慕ふ花の盛りを尋ぬればい　つゞみ唄へありやさゝのはり枕〳〵枕物
さ白雲と答へしはしづ心なき言の葉や　にや狂ふらん合主戀しとくらつゝなや

淨へうつら〳〵と移り香の合眠るも蝶の諸羽がひ、保名も今は亂れ髪、亂れ心のしどもなや唄へ面白のえにしゆかしき松葉蝶合ゆうて見たさの櫛の男櫛合出だちまばゆき蝶々の合爭ふ色も合花ゆゑとまる合露の假寢の羨しうやつらや淨るりへうつし心といつ戀草に、放れがたなきつがひ蝶、放れぬ中ぢやないものを唄へちぎりかはしてしつぽりと、抱締め合うて睦言も、夢の枕にごん〳〵と明の鐘淨へ姿も袖の花の香はやるせないではないかいな唄へ又も迷ふや蝶々の淨へひらく手に合かへす間もなきあひ風や合さし扇唄へ重ね扇の合比翼紋合嬉しい中ぢやないかいな合返す〴〵も合舞扇淨へ鐘の櫻のちり〳〵ぱつと合散り扇唄へ廻る手品も面白や淨へ風に扇のちら〳〵〳〵と散る花は唄へそこよこゝよとかけ廻る合風に吹雪の亂れ髪、狂ひ狂ふぞあやなける。

時致（五郎）

外記唄方カヽリへさる程に曾我の五郎時致は掛不倶戴天の父の仇、討たんずものと弛みなき掛彌猛心も春雨に、濡れて廓の化粧坂、名うてと聞きし少將の出合方へ雨の降る夜も雪の日も、通ひ〳〵て大磯や音藏へ廓の所謂の絆され易く、誰に一筆雁の便吉四郎へ野暮な口說を返す隙へ粹な手管につい乘せられて喜八へ浮氣な酒に宵の月ツレへ晴れてよかろか晴れぬがよいか、とかく霞が春の靄掛へいでオ、それよ我も亦、何時か晴さん父の仇、十八年の天津風、今吹き返す念力に、逃さじやらじと勇猛血氣その有様は、牡丹花に翼閃く胡蝶の如く合へ勇しくも亦健氣なり二上リへ籔の鶯氣まゝに鳴いて、羨しさの合庭の梅合あれそよ〳〵と春風が、浮名立たせに吹送る合堤の嫁菜草は、露の情に合濡れた同士、色と戀との寶競べ、實浮いた仲の町よしやよしへ孝勇無雙の勳は、荒人神と末の代も、恐れ崇めて今年亦、花のお江戸の淺草に、開帳あるぞ賑しき。

西王母（國豐かの西王母 又は多見藏西王母）

木調子へ國豐か、三皇五帝の昔より、今この御代に至る迄、かゝる聖主の例にこそ、あら有難の時代なれ、〳〵へ桃李もの言はず春幾許の年月を合送り迎へて三千年に合生るてふ桃の花の顏音藏へ路に色香も増鏡喜八へうつろふものは世の中の音藏へ人の心の花ならぬツレへさりとてはへ君が惠の深綠合いさや捧げん花も實もある桃の壽へあら不

思議やな水華の合奇特現れ忽ちに、花飛散りて飛鳥の姿、雨を呼ぶとぞ見えにけるへ雲路に移れば王母も作ひ天の羽袖の風に翩り降來る雨を打拂ひ〳〵、光を放つ稲妻の、雲に紛れて失せにけり。

鳥羽繪

増補 三升屋二三治

…ドリへどつこい締めたぞ、締めたぞどつこい、オット其處らは瓢箪で、抑へて見ても合ぬらりくらり合くらりくらり合ぬるりと滑つたとごまかしてよいとな逃しやせぬへ分も何やら繪に書いた合鳥羽繪と云ふもあだ付きの、仇な文句でやつてくれよへ思ふお方のお聲はせいで、上るお客の面憎やへ私は始めてそんな事へ聞いて嬉しき初雁の、文にも釘のにじり書へ見えぬ按摩や合瞽女の坊合巳待ちの晩の合闇がりがへ味

な緣では合ア、合あるまいかへア、て取らんとすれば合鳥はついと飛んでラあや獅子の十六文で九官鳥は見たれ逃げだ、エ、あつたらものを傍に佇合ども、摺子木に羽が生えて鳥羽繪はふ釣瓶竿を狙ひすまして身繕ひへお前ほんに我れながら、オヤ馬鹿らしい餌刺しか合知らねども、私や連木の鳥へいでや捕へてくれんずと合足を伸しぢやもの合御緣御座らば今度〳〵



「八重九重花」

來て刺しねえへをかしらしへそれや來たく〳〵へ行列揃へて合振込めく〳〵合昨夜も二百張込んだ合裸で道中がなるものか合あれはさのサ、これはさのサ、よいく〳〵〳〵〳〵、よやまかせへ面白や戯れ拍子に浮れ來て合瓢簞から駒が出た合へめつそなく〳〵瓢簞で駒に打乗り合しやんぐしやく浮きに浮れて走行く。

源氏雪月花　一〇八

〔解題〕天保十三年三月、杵屋六翁作曲。源氏物語の五十四帖の卷名、即ち源氏名を連綴して雪月花の詞章としたもの。

三下り鼓唄へ松風や枝もたはめる雪重み、の宿り木、須磨明石、餘情をこゝに澪合中を流るゝ竹川や、筏に組みし眞木夢の浮橋幻に、花散る里の花の宴、雪標合へ山も白妙關屋を越えて東屋の柱、吹雪をしのぐ篝火に、殘る野分か



姿繪」正本表紙

吹き總角の榊蓬生、こなたに晴るゝ椎が本合へ月の兎や玉かづら、宵に色そふ紅葉の賀、雲隠れしてまた出づる、けつく景色をみのりの田毎合夕霧深く螢の光合また鈴蟲に横笛の、耳涼しくも東雲やへつらき朝顔夕顔までも思ふ男は空蟬のもぬけの衣したふ文、まだ手習のあとや先、藤の裏葉や藤袴、殿ぶり隠す篝木に、このて柏木二本かけて、願ふもよそに上の空、人の心の薄雲や合へ鶯の初音ゆかしき梅が枝に、色も美し紅梅を、のぞけば高く匂ふ宮、岸の若菜に浮船を、乘合ふ緣の橋姫や、それえ〳〵それ〳〵それよいやナヘ乙女の袖の紛合せに、胡蝶早蕨愛らしく、花を深雪ぢやないかいな、それえ〳〵、それ〳〵それよいやなそれ合へ手活の花の常夏に、末摘花の桐壺や、かげらふたちて檜扇に、うつる葵も若紫の、山緣色てふ式部が袖に五十四帖を運ぶ末廣。

吉野天人　一〇九

〔解題〕天保十四年三月、杵屋六翁作曲。謠曲「吉野天人」によつて作る。

謠ガカリへこれは都の方に住居する者にて候、扨も吾春になり候へば、こゝかしこの花を一見仕り候中にも、此の千本の櫻は三吉野の種取りし花と承り及び候間、此の度和州に赴き候へ此の春は殊に櫻の花心合色香に染むや深綠、糸よりかけて青柳の、露も亂るゝ春雨の、夜降りけるか花色の、朝じめりして氣色だつ、吉野の山に着きにけり合へ花の雲路をしるべにて、奥山深く分入れば、峰も尾上も一面に、たゞ白雲の花盛り合また見申せば、やごとなき御姿、いかなる人にてましますぞへこれは此のあたりに住む者なるが、春立つ山に日を送り、さながら花を友として合へ嬉しや花の友ならば合他生の緣といひながら、我等も同じその心、所も山路の友なれや、見もせぬ人と樹の下に二上り合へ相宿りする嬉しさは、いつしか馴れて花衣の、袖や袂も朝露に、濡れぬ日ぞなき花の下合雪の

膚に打ちとけて、馴れ〳〵そめて詠めん〳〵いざ馴れて詠めん、いかに御身の不思議さは、花に見とれて家路を忘れ、歸らんことを忘るゝは、いよ〳〵不審晴れやらぬ へげに御不審は御理、誠は我は天人の、花に引かれてうか〳〵と、今宵はこゝに旅寢して、月の夜遊を待ち給へ、我が友人を作ひて、五節の舞の小忌衣、乙女の姿顯はさせ、必ずこゝに來らんと合迦陵嚬伽の聲ばかり、雲井に殘りて失せにけり 合へ不思議や虚空に音樂聞え、靈香薫じて花降れり、琵琶琴和琴笙篳篥、鉦鼓羯鼓や糸竹の、聲澄み渡る春風に、天津乙女の羽袖をかへし飛上り合飛廻り、花の袖に合舞遊ぶ合げにも上なき君が代を、撫でし巖も盡きせめや、國民繁昌萬々歳と、治る御代こそ目出たけれ。

對の編笠　一一〇

〔解題〕弘化元年夏、作曲者杵屋勝五郎。通稱「鞘當」。唄淨瑠璃芳村伊千五郎・松永鐵五郎、三絃杵屋勝五郎・杵屋勝三郎。

へ花の雨濡れに廓の曉に、傘貰の風流も、遠つ昔の伊達姿、白茶字袴鼻平太、土手の小室の行合ひに、手綱とりんぼ姿がぐわちで、ぞめきは夜の花に鐘、其處退き給へ長刀へ色に嚴めし銀鐺、野暮は垣根の外構へ、二萬七百六十餘坪の、不夜城に三千樓の色比べ、意氣地比べや張比べ、氣を春霞一本柳、道の街の裝ひは、風情なりける次第なり。

端唄 春の色　一一一

〔解題〕弘化二年二月、作曲杵屋六三郎。長唄の端唄で、廓の情趣をうたつたものである。

本調子へ花を見捨てゝ歸る雁、悟れば元の土に巣も、妹脊の神の教事、子に戲れの燕も、口紅さして謠はるゝ、梅が薫れば柳の髮も、派手に結びてこちや恥しい、浮世なれやこそせう事がないわいな、捨てられた身に義理立てゝ、昔戀しき月の友、浮氣な雲が觸ろとままよ、味な世界の徒櫻、色と酒との二筋道を、先へ狂ふか隅田の蝶 合 二上り へ夢の心地や全盛の、八重山吹の仲の町、日移りしたか花衣、觸らば散らん手に取るな、やはり廣野の蓮華草、浮める露に日の光、拜むわいなに果しがなうて、もう後朝の袖引煙草、憂さを忘れて嬉しさの、殘る言の葉情の淵瀨、皆川々の流の末を、盡きぬ縁の深き睦言。

軒端の松　一一二

〔解題〕弘化二年四月、作曲者杵屋勝三郎。新川から軒端松といふ酒を賣出すについて、その披露として作られたもの。

本調子へ傳へ聞く太白が軒端の松の深緑へこゝにうつして盃に酌むや千歲の竹の露、げに面白き酒宴かなへ盛りなる花に醉ふとは春の空 合 何時とも分かぬ若葉時、山時鳥待つ夜にも、寂しさ知らぬ酒機嫌 合 さゝの一夜を七夕の 合 逢ふ瀨 合 樂しき川浪に 合 へぬれといはれてなぶられてあア恥かしの初紅葉 合 妻戀ふ鹿の鳴かぬ日も、積れば積る 合 雪

見酒、四季折々の樂しみは、離れぬ仲ぢやないかいな、面白や二上りへ一筋な女心を汲みもせで合ほんに浮氣な男山、つい言ふこともつとどなき、言葉に角の劍菱や合愛想もこそも合七つ梅、粋な心についたらされて、嘘と知りても眞實に受けて、末は白菊花筏、よしや世の中花ごころへみきと聞く、神酒と聞く、名もことわりや萬代も、盡きせぬ宿に湧き出づる泉絶えせじ養老の合瀧の流れの濁りなき、例をこゝに引く絲の合調べも共に永く榮えん。

四季の里　一一三

〔解題〕弘化二年九月、作者織月亭。作曲者杵屋勝三郎。飛鳥山の花隅田川の納涼等江戸附近の四季の名所をうたつたもの。

二上りへあだなりと名にこそ立てれ櫻花、散らずば人も浮れまじ、思へば花も一盛りへ彌生の空の朗かに風が誘ひて浮浮と、昨日に今日と飛鳥山、日毎に變る花見連合ふと知る人に王子道合思はず今日も日暮しの、悟り開きし御寺の庭も、人の山なす夕暮も、一入興に入相の本調子へ鐘は上野か淺草か、暮を待乳の山霞へ彈く清搔の夜櫻に、この廓ばかり月夜とは、ほんに其角が口吟、田を三圍りの早苗時、土手から船を竹屋〳〵と呼ぶ聲の更けて身に染む川風に、若しやそれかと氣にかゝりへ戀しゆかしも胸の闇、忍ぶもつらき物思ひ、君は今頃どうして何處に、住吉の菫草やら聞かぬ初音を託付けに、泣いて待つ夜に鳴かぬははて優しさの、合時鳥へ雲間重ねて五月雨に、降られて歸るお客山谷の、堀を乘出す合波の舟合堅い石濱渡しをば、越えて隅田の涼み時へ鼻紙飛す屋形船、風に簾の内ゆかし、彈く三味線の替唱歌二上りへ個々と急いで押せば、汐がそこりて艪が立たぬしよんがえ、謠ふも江戸の花ぢやえ、賑しや三下りへ初雁の文は何處の誰樣に、屆け參らせそろ〳〵と、身に染む秋の小夜風に合尾花招けば萩桔梗、

睦合ひ床羨しげに夜毎妻乞ひ男鹿鳴く音も色々に 合 秋の野もせもしをらしめる國民も、げに豐年の臼杵や、搗く、狭山を照す、月さへも、露の情にやへ君が齢も幾萬代と、限り白雪降積るとも盡きぬ君が代と、謠ひ奏でて祝し影宿す、千草が元に聲添へて、蟲の鳴り、千歳を延ぶる鶴が岡、安らかに住ける。

秋色種　一二四

〔解題〕 弘化二年十世杵屋六左衛門作曲。稽古本の終りに弘化二年十二月吉日とあるから、恐らく同年秋の作であらう。作者は南部の老侯少將利濟で、老侯は六左衛門がどんな文句にでも節が付くといつたので作つて與へたものであるといはれる。この中の「變態繽紛たり……」の箇所には流石の六左衛門も閉口して作曲に苦心したといふ逸話が殘つてゐる。これは朗詠九十首抄管絃の部所載の菅原道眞の作「變態繽紛タリ神也亦神也、新聲嬉轉ス、夢カ夢ニアラザルカ」から來たものである。これを知らなかつた六左衛門は却つてそれに囚はれずに「松虫の音」「變態」「新聲」等に着眼して自由に腕を振ひ得たものであらうか。

へ秋草の東の野邊の忍ぶ草 合 忍ぶ昔や 合 共寝の夜半に荻の葉の 合 風は吹くとめつ 合 移しつ睦言も、何時しかしどま古へ振りに 合 住付く里は夏草引く、庵も露をだに、据ゑじと契る女郎花 合 その豫てより 合 言葉の眞砂敷島の、道の布の山の谷の戸に、朝夕迎ふ 合 月雪のの曉の手枕に、松蟲の音ぞ 合方 へ樂し行手の友車朝ると明くとに通ふらん 合 春告げ鳥の 合 跡分けて へ媚く萩が花さきへ變態繽紛たり神なり亦神なり、新へ峰の松風岩越す波に 合 清掻く琴の爪摺の、衣雁がね聲をほに 合 擧げて下し 聲嬉轉す 二上リ へ夢は巫山の雲の曲 合 雲 調べ 合方 三下リ へうつし心に花の春 合 月しま旅寢、野居の軒の庭籬 合 朮紫葛尾花 の暗雨の夜に、移すや袖の蘭奢待 合 留 の秋風 合 時鳥 合 雪に 合 消えせぬ 合 樂み

は盡きせじ盡きぬ千代八千代へ常磐堅磐の松の色合幾十返りの花に諷はむ。

室の八重咲　一一五

〔解題〕弘化三年正月。作者風の日。作曲者杵屋六之助。

本調子へ實に大極は大民四海の本として、き、さぞ嬉しからうと思はんす、あれ鶯囀み出す、好いた香りぢやないかい生あらば日月に從ひ、生長たる事多聞も眞似をして、塒離れて枝傳ひ、小柴にな、年の内から春めきて合へ今日吉日の喜び限りなしへ雪解もせずに飛ぶ蝶遊ぶその日より合もう下鳴きも鳴き馴と酌む酒の幾代變らぬ松が枝の萬々歲は合流に映る水鏡合見れば見る程潔れて、諒ぬる梅も室咲きの、蕾の中にとめでたかりける。

花見車　一一六

〔解題〕弘化四年二月杵屋六左衛門作曲。正本の出版は安政四年正月。

二上りへ春ごとに、あかで心を花にのみ、櫻、雲井の合春の長閑さに、大宮人の竹や三下り合へ琵琶の祕曲も昭君の、姿つくせる人も自ら合尋ね殘せし木々暇ある合頃も彌生の櫻狩へ外山端山咲やさしく駒とゞめ合桃李の色も及びなの名の、若しもありやと手を折りて數きつゞき合野邊は千本の色深く、知るき、海棠櫻匂く合露に合香ひこびあるふる合花の品々に合分きて上なき御所も知らぬも春風に合醉ひをすゝむる緣花の顏、かさす扇の夕日影、つま紅

にこがれしは 合その細殿のまぎれより いつき櫻と待つ人は 合あまのさかてを 櫻、つひに開くる撫子の手まり櫻や 合入るさの山を辿りつる 合朧月夜の花 打返し、戀路に沈む波の上へ帆かけ櫻 糸ぐくり、絶えせぬ花もさきくさの 合の姿、行末なにとなら櫻へ都の錦たち の嬉しくも、待得し君が玉章の、薄墨 三つ葉四つ葉の殿櫻 合榮ふる春は千代かへて、須磨や明石の 合うらみわび、 櫻 合淺からぬ、いろとは誰も 合しら も經ぬべし。

織殿　一一七

〔解題〕嘉永元年夏、杵屋六翁作曲。作者三學堂。本曲は六翁が熱海へ湯治に行つた時、その宿屋の附近にあつた機屋の機織唄に感興を覺えたのが動機で出來たものであるといふ。

本調子へそれ衣食住を重んじて、世渡る 業(たつき)様々に、四季の眺めも賤機(しづはた)や、紬(つむぎ)の 糸のより〳〵に 合ゆかりを江戸の紫 と、田舍手ぞめもいつしかに、うたは れたさの子持縞(こもちじま)二たりへ戀路とは習ひも えせぬ糸車、幼(いとけ)なきより取習ひ、ゆふ べ〳〵の言葉のあやも、とけて嬉しき 窓の内 合一日(ひとひ)二日(ふたひ)を數へてそして、早 く思ひを着せごろもへ庭の教へのその 玉章に、實(げ)にも聖(ひじり)の筆のあや、オ、よ う知ると思はんせへ常陸帶結び合せし 思ひのたけを、えやは結城の織物と、 人に知らせしわが思ひ、オ、よう知る と思はんせ、糸のくりこと織殿や 合へそのいにしへも今の世も、となりを 選(えら)み機杼(きじよ)を斷ち、勸善なせし言の葉 や、池邊に結ぶ糸竹も、ふかき翁のい さをしは、幾世の末もたのもしき。

常磐庭　一一八

〔解題〕嘉永四年九月、十代杵屋六左衛門作曲。唄本の出版は安政三年十一月。作者は南部侯の女隠居で、その實家たる藝州淺野家の下屋敷から品川の海を眺めて作つたものであらうといはれる。

へそも〳〵嚴島の御社は、人皇七十四代の御宇かとよ、再建ありし宮柱、幾百歳かしら波に合數の燈火照り渡り、その面影を東なる、眺めは盡きじ海原の南は滄海雲に續き合遠山遙かに薄霞合千船百船行き通ふ春の曙富士の合雪、のどかに匂ふ朝日かげ二上りへあだと戀とをうつせ貝、もしやみるめを打寄る波に、粹なすがひのそのお姿を、いつか忘れん忘れ貝合顔は恥かし紅葉貝、なでしこ貝の可愛らしへさし來る潮に漕出づる三下りへゆかしき船の青簾合音締も高き高輪に合馴れて鷗の合二つ合四つ合二つ合六つ睦まし竹芝に合見えつ隱れつ沖洲の蘆に、翼すゞしき夕まぐれ、身にしむ頃は立つ秋のへ苫屋の煙隱どりて、繪島が崎や明石潟合須磨の浦邊で汐汲むあまは、しんきらしいぢやないかいなよい〳〵〳〵〳〵よいやさぞれえへこゝは小濱の月をめで合霜を重ねて打つ砧へ初冬の板屋を叩く玉霰合音も寒けき合閨の戸を、さゝで慰む友千鳥、ちりやちり〳〵合ちり〳〵はつと夜半の漁火合四つ手網、世渡るわざのしな〳〵は、言の葉ぐさの及びなき本調子へたゞこの庭は年ごとに松の緑の生茂り、四季折々の風景は、辨財天女の御惠み、福壽圓滿限りなき合舞の祕曲の面白やへ波の鼓に笛竹の、十二の律を合三筋の糸に、調整ふ一節は、春夏秋冬樂みの、千代に萬代祝し〳〵て。

鶴龜　一一九

〔解題〕嘉永四年十二月、十代杵屋六左衞門作曲。謠曲「鶴龜」によつたもの。長唄の祝儀物中代表的の一名曲。

シテへそれ靑陽の春になれば 合四季の節會の事始め ワキへ不老門にて日月の光を君の叡覽にて シテへ百官卿相袖を連ぬ ワキへその數一億百餘人 シテへ拜を勸むる萬戸の聲一同に拜するその音は ワキへ天に響きて シテへ夥しへ庭の砂は金銀の 合玉を連ねて敷妙の五百重の錦や瑠璃の扉 合硨磲の行桁 合瑪瑙の橋 合池の汀の鶴龜は、蓬萊山も他所ならず君の惠ぞ 合難有き ワキへ如何に奏聞申すべき事の候 シテへ奏聞とは何事ぞ ワキへ毎年の嘉例の如く、鶴龜を舞はせられ、その後月宮殿にて舞樂を奏せられうずるにて候 シテへともかくも計ひ候へへ龜は 合萬年の齡を經 合鶴も千代をや重ぬらん ニ上りへ千代の例の數々に、何を引かまし姫小松 合齡にたぐふ丹頂の、鶴も羽袖をたをやかに、千代を重ねて舞ひ遊ぶ 合みぎりに茂る呉竹の、綠の龜の幾萬代も池水に、住めるも安き君が代を、仰ぎ奏でて鶴と龜へ齡を授け奉れば、君も御感の餘りにや、舞樂を奏じて舞ひ給ふ 本調子へ月宮殿の白衣の袂 合月宮殿の白衣の袂色々妙なる花の袖へ秋は時雨の紅葉の羽袖、冬は冴え行く雪の袂を飜す、衣も薄紫の雲の上人の舞樂の聲々に、霓裳羽衣の舞をなせば へ山河草木國土豐に、千代萬代と舞ひ給へば、宮人駕輿丁御輿を早め、君の齡も長生殿に、君の齡も長生殿に、還御なるこそめでたけれ。

節小袖　一二〇

〔解題〕嘉永五年正月、杵屋勝三郎作曲。

へ春立つと木綿告げ渡す御注連縄、風にそよそよ蘆葉の、裏白妙の雪消えて若水温む筒の井の、解けてゐながら遠山の、他所に浸みて里馴れぬ、鼓鶯と云はれよとまゝよ、云はせて沖の浪の舟 ニ上りへ濡がれ濡がれてその行先は、戀

の湊に纜附けて、繋いで欲しき緣とへさて七種は何々ぞ、數は云はねど年よへ晴渡る〳〵晴れし朝に見渡せば、緣、何時か結ぶの神樣の、鏡に懸けて年に、打てや囃せや七種齊、日本の鳥岸に入來る寶船、七福神の笑ひ顏、七竹衣桁、二つ並べし節小袖、祝ひ事しの聲はなほ勇ましげなる君が春、千町珍萬寶積重ね、帆も豐かなる春風に、て千代八千代重ねん春のたとへ草へそや萬町の鳥追が、參つた、東の方には此處の御倉に運び込む、宿の榮えぞ限れ東方は春の色松の緣も、初容も柳の江戸の町の門の松、色も濃き飾り鍛代りなき。緣もながき日に、摘むや若草芹若菜代續く賑ひお家繁昌の賑ひめでたさ

五色の絲 一二一

〔解題〕嘉永五年秋、杵屋勝三郎作曲。七夕の唄である。

本調子へ結合ふ五色の絲の美しく、鸚紫に嬰へにし合雅の群の打解けて合四季の風情も色々に合筒井筒より思初め幾代か君と深見草、淺きにあらぬ盃の底に情を籠めぬらんへ笹の波風合わたつみのそよ吹く合風もかくこそと合へ桂男と謠はれて、闇こそよけれ雲の隙、願の絲やヤア梶の葉のまれに逢ふ夜は居合の合二人が仲居露濡れて向合うたる蝶さへも、女夫〳〵の合私語合二上りへ長かれやへ秋の一夜をナ焦れて見たる聲は合鈴蟲わしや嬉しさに、東雲告ぐる後朝も合可愛と鳴きし巣の鳥合心のたけを打明し娘心の一筋に合慕ふもゆかしなつかしきへ何時か逢瀨を瀨間なる合絲の色の濃き薄き時も高き酸漿や錦照り添ふ花の原へその源の水清き眺も吉野山風に合起き立つ千草ぞ麗しき〳〵。

今様小鍛冶　一二二

〔解題〕嘉永五年八月、中村座「御伽譚博多新織」の第一番目大詰に出した所作事で、上下に分れ、上がこの小鍛冶、下が道成寺である。作者二世瀨川如皐。作曲者十代杵屋六左衛門。市川小團次が、坂東竹三郎・尾上梅幸を相手の所作故に一に「小團次の小鍛冶」ともいふ。

本調子〽それ漢王三尺のけいの劔、ゐなさきの葛玉椿合八千代の妹脊合今こゝ 日もかなひ時もよし、目出たき御代に
から奏の亂を治むる國の大倭には、天に漏らさぬ水に鍛しつゝ、互の誓ひ鐵 相槌や、力を添へて打たうよ〽太平治
狂々斬村雲もおのづと靡く草薙や、十握も、力を合せ給へや〽謹上再拜〳〵 國の御劔を小狐丸と名づけつゝ、帝へ
柄の劔目の御座へ、代々に傳へし神寶 ふいごは陰陽和合をかたどり合五行五 捧げ奉る、小鍛冶の譽稲荷山、神は宮
三下り小鍛冶が高梅小路へ傳へ傳ふる鍛冶の業 體を固めの槌合丹誠凝らして念じ合ふ 居に入り給ふ、〳〵。
〽四方の注連縄に、壇を設けの 鼓唄〽稲荷女夫三つの燈火明らけく〽鼓
鼓唄〽傳へ合本尊の神威ますかゞみへま 通じて御劔を打つべき時ぞたゞ頼め月

柳絲引御攝　一二三

〔解題〕嘉永六年二月、河原崎座興行。作曲者杵屋彌十郎。通稱「操三番叟」。嵐雛珏が大阪下りの目見えとして踊つた操人形三番叟の所作。

上り へ天照す春の日影も豊にて 合差手
引手の一差は昔を今に式三番ありし姿
を狩衣に竹田が作の出立榮へとう／＼
たらり／＼らたらりあがりらゝりどう
へ千代の始の初芝居相河原崎賑はしう
合人の山なす蓬莱に鶴の羽重ね龜の尾
の長き榮を合三つの朝幸ひ心に任せた
り へ鳴るは瀧の水／＼鳴ると言ふのは
よい辻占よ天津少女の合様が許合絶え
ずとうたり絶えず訪ふのが誠なら日
は照るとも濡るゝ身に合着つゝ馴れに
し羽衣の、松の十返り合百千鳥絶えず

とうたりありうどう 下調子へその戀草は
千早振合神のひこさの昔より盡きぬ渚
の砂路や、落來る瀧の合末かけて結ぶ
妹脊の好い仲同士に、天下太平國土安
穩、今日の御祈禱なり 三下りへおさへ
／＼喜びありや、／＼我がこの所より
外へはやらじとぞ思ふへ天の岩戸を今
日ぞ開けるこの初舞臺、千代萬代も
合へ花のお江戸の合とつば偏に合御取
立、をこがましくも御目見得に、ほん
に鶴の眞似烏飛び合へ難波江の岸の姫
松葉も茂り、爰に幾年住吉の合神の惠

のあるならば、君に扇の御田植、逆ふ
とは嬉し言の葉も、濱の眞砂の數々
に、詠むとも盡きぬ年波や合へなじよの
翁はあだつき者よ、つい袖引いて合際
かんせ添ふも千歳仲人して、水も漏さ
ぬ仲々は、深い縁ぢやないかいな合面
白や へ相生の待つ夜の首尾にあふの松
合ほんに心の武隈も岩代松や曾根の
松、上りし閨の睦言に合濡れて色増す
唐崎の、松の姿の若緑へ千秋萬歳萬々
歳、五風十雨も穩に、惠を願ふ種蒔
と。合謠ひ奏でて祝しける。

めりやす　壽　一二四

〔解題〕 嘉永六年二月、杵屋六翁作曲。

本調子へ月やあらぬ春や昔の春ならぬ、
咲ける櫻も雲とのみ、見捨てて歸る雁

がねも、朧霞める山の端や、心に變りは
なけれども、戀しゆかしは昔の事よ、

とは言ひながら春毎に、梅や櫻の盛り
より、桃と云ふ迄ながらへて、月雪花

の楽みを、三筋の絲の長々と、あだな色音に合の手や 合 世は様々に變れども、我が身一つは元の身にして。

所作事 稚美鳥末廣　一二五

〔解題〕通稱「末廣がり」。安政元年三月、中村座。作曲者十代杵屋六左衛門。役割その他掉書に詳しい。

本調子 へ描く舞臺の松竹も、千代をこめたる彩色の、若緑なるシテとアド へ罷出でしも恥しさうに、聲張上げて 合 太郎冠者あるか 合 御前に 合 ねんなう早かつた 合 頼うだ人は今日も亦戀の奴の 合 お使か、返事待つ戀 合 忍ぶ戀、晴れて扇も名のみにて へほんに心も白扇の、何時か首尾して青骨の、ゆるぐまいとの要の契 合 堅く締緒の緣結び神を頼むの 合 誓ひ事濡れて色増す花の雨 へ笠を差すなら春日山 合 これも花の宴とて人が飮みて差すなら、我も飮みて差さうよ 合 花の盃 合 花笠 合 實にもさう



「稚美鳥末廣」正本表紙

よのやよ實にもさうよの、實に誠へ四　聲澄みて、謠うつ舞うつ君が代は、萬　れ〳〵。
つの海、今ぞ治まる時津風、波の鼓の　萬歲も限りなく末廣がりこそめでたけ

都鳥　一二六

〔解題〕安政二年六月、杵屋勝三郎・吉住瓢二作曲。清玄の狂言の獨吟に用ひられる。

木調子へ便來る船の内こそゆかしけれ、　雨の、晴れて逢ふ夜を待乳山、逢うて　合うたる終夜、早後朝の鐘の聲　合憎や
君なつかしと都鳥、幾夜か此處に隅田　嬉しきあれ見やしやんせ、翼かはして　つれなき明くる夏の夜。
川　合往來の人に名のみ問はれて、　花の　濡るゝ夜は、何時しか更けて水の音
陰、水に浮れて面白や、川上遠く降る　へ思ひ思うて深見草、結びつ解いつ亂れ

鞍馬山　一二七

〔解題〕通稱「くらま」。安政三年十一月七日から市村座興行の「娼女誠長田忠孝」の第一番目五立目に用ひたもので、この前四立目に常磐津の「宗清」があり、これが居所がはりで鞍馬山になると、牛若丸（河原崎權十郎）が夢を見て居る體でせり上げ、「宗清」の場は牛若の夢の仕組である。覺めて述懷になると、木の葉天狗（小團次）があらはれて立廻りとなり、更に僧正坊（菊五郎）が出る。それからだんまりで僧正坊が引拔いて女盜賊お松、木葉天狗が引拔いて盜賊袈裟太郎となるといふ趣向。この場の小團次の木の葉天狗の立廻りの身輕

るが大評判であつた。作者は瀬川如皐。作曲者三世杵屋正次郎。唄浄瑠璃は富士田千蔵・吉住小太郎。

へそれ月も鞍馬の影うとく、木の葉威しの小夜嵐、物騒がしや貴船川、天狗倒しの夥しく、魔界の巷ぞ怖ろしき 合 此處に源家の正統たる牛若丸は 合 父の仇、平家を一太刀恨みんと、夜毎に詣づる多聞天、祈念の疲岩角に、暫し微睡む肱枕 へ思ひ出せば我未だ、三歳の時なりしが、母常磐が懐に抱へられ、伏見の里にて宗清が、情によりて命助かり、出家をせよと當山の 合 東光坊に預けられしも數へて見れば一昔、十餘年の星霜經れば、稚心に忘れずして今日前見たる夢、それにつけても父の仇 合 劍道修行なすと雖も、我一向の生兵法、願へば神の惠にて、本望遂ぐる時節を待たんイデヤ琢磨の修行をなさん へ木太刀構へて身構へなす 合 時しも俄に風起り、天狗礫のばら／＼と、鳴動なしてすさまじし へ遙の杉の梢より又もや怪しの小天狗 合 へ木太刀打振り立向へば へシャこざかしと牛若丸 合 付入る小太刀を拂退け 合 上段下段 合 早速の働き 合 勝負如何にと霧隠れ後に窺ふ 合 僧正坊優り劣らぬ 合 兩人が木太刀の音は反響して目覺しくも亦勇しゝ へさしもの天狗もあしらひかね跡を晦まし失せにけり。

翁　千歳 三番叟　一二八

〔解題〕 安政三年十一月。十代杵屋六左衛門作曲。一に「外記三番」ともいふ。數ある長唄の三番叟中最も荘重な曲。詞章は謡曲の「翁」を取る。

翁 へとう／＼たらりたらりらたらりあがりらゝりどう 地 へちりやたらり／＼らたらりあがりらゝりどう 翁 へ所千代まで御座せ 地 へ我等も千秋候はう 翁 へ鶴と龜との齢にて 地 へ幸ひ心に任せたり 千歳 へ鳴るは瀧の水／＼鳴るは瀧の水日は照るとも 地 へ絶えずたうたりありうどう／＼ 千歳 へ君の千年を經ん事は天津少女の羽衣よ鳴るは瀧の水日は照るとも 地 へ絶

えずたうたりありうどう〱 翁へ總角やとんどや尋ばかりやとんどや へ坐して居たれども 地へ參らうれんげりやとんどや 翁へ千早振神のひこさの昔より久しかれとぞ祝ひ 地へそよやれいちやとんどや翁へ凡そ千年の鶴は合へ萬歳樂と謡うたり又萬代の池の龜は甲に三極を皷いたり 合瀧の水冷々と落ちて夜の月鮮かに浮かんだり 合渚の砂さく〱として朝の日の色を朗す へ天下太平國土安穩の今日の御祈禱なり へ在原やなじよの翁ともそよや何處の翁とも翁へそよや舞へ千秋萬歳の喜の舞なれば一差舞はう萬歳樂 地へ萬歳樂 翁へ萬歳樂。

三番叟

三番へおさへ〱 喜ありや我この所より外へはやらじとぞ思ふ へあら目出度や物に心得たるアドの太夫殿にそと見參申さう アドへ丁度參りて候 三へ誰がお立ちにて候ぞ アドへアドと仰せ候程に御身アドの爲めに罷立ちて候今日の三番叟千秋萬歳と舞うておりそへ色の黒い尉殿 三へこの色の黑い尉が今日の三番叟千秋萬歳所繁昌と舞納めうずる事は何より以て安うさふ先づアドの太夫殿は元の座敷へ重々とお直りそへ アドへ某座敷へ直らうずる事は尉殿の舞よりはいと安うさふ御舞ひなうては直り候まじ 三へあちやうがましや アドへさらば鈴を參らせう 三へアドの太夫殿に申すべき事の候 アドへ何事にて候ぞ 三へ五月の女房が笠の端を刎ね早苗押取つて打上げて謡ふは面白うはなく候か アドへ實に面白き事にて候 三へさらば太夫殿に謡うて聞せ申さうツレへこれのたんな池の汀に寶御船が着くとんの へ鯱[illegible]にはんな恵比壽大黒中は毘沙門吉祥天女 二上りへ四海波風靜き君がへ御代は畏き天照る神の影も曇らず怨敵退散五穀成就民豐かに 合八百萬代も國や榮えん。

しのび車　一二九

〔解題〕 安政五年十月市村座興行の「小春宴三組杯觴」の四立目宇伽の神社前の場に用ひたもので傘をさして現れた桂中納言（權十郎）と、御所車の中から出た薄雲姫（菊五郎）との色模樣の口說から、上手辻堂から出

る赤星太郎（海老蔵）との三人のだんまりの場に使はれたのである。作曲者杵屋勝三郎。唄浄るり吉住小作・松永鐵之助。

大薩摩ガカリへそれ西山高うして、夕日もこはかとなく車の許へ辿附きへ榻の端ばら／＼／＼、散るは木の葉かあらし早く落葉時、梢の風に雲立ちて、運ぶ書殘夜さか忍び車の戀衣、着つゝ情もこがへ打つてかゝるを身を交し、くる時雨の宵闇に、神の御燈ぞ尊けれへ稚子何時しかに、網代車のつれなさは、力りくる／＼くる／＼／＼、彼方此方への魂の御社へ、通ひ車の我からと、胸車の力にも引くに引かれぬ下車や、七飛廻る、風の手に舞ふ紅葉も、果は流に思ぞ淺草の、昔を忍ぶ隱れ里 合へ老の車に積みかねし、思を晴らして給はるゝ谷川に、河鹿の聲も濁れ／＼て、女のけはひ物凄き、雲間を漏るゝ月影れと、恨に濡める村時雨へ濡れに寄る行方何處と立つや白波。を見越ゆ嶺や山里を、君に引かれてそ身の峯に、峰吹下す風の、音も烈しく

箱根の富士笠　一三〇

〔解題〕安政六年二月「小袖曾我薊色縫」の中に出したもので、作曲者杵屋勝三郎。藤山繁之丞澤村訥升、八重垣紋三河原崎權十郎。唄淨るり岡安喜代八・松永兼五郎。

へそれ峥々たる峻山の萬嶽、棚引き渡しづ吹けば谷の戸出づる鶯に、澤邊のちこちに、霞の袖も肌寒く、峰吹きさる雲霧に、苔滑らけき湖の、堤によそ蛙音を添へて、三十一文字もさながらそふ春風に、煎惰まぬ夜半の梅、色香へる小波の、岸打つ音ぞこだませりに、心もうごく九十九折 權十郎內兵衛人へハを包む日せき笠。

へ春の夜の月も朧の山端箱根おろしの チ風情ある眺めぢやナ へ見渡す山路を

菖蒲ゆかた　一二一

〔解題〕安政六年五月、杵屋勝三郎作曲。あやめ浴衣を賣出すための宣傳用の唄として作られたものだといふ。

本調子へ五月雨や傘に附けたる小人形、晉子が吟も目のあたり、己が換名を市中の、四方の諸君へ賣り弘む拙き業を身に重きへ飾り兜の面影映す合皐月の鏡曇りなき合槐の二葉のゆかしさは合今日の晴着に風薫る、菖蒲浴衣の白がさね、表は縹紫に裏紫の朱奪ふ紅も亦重ぬるとかやへそれは端午の辻が花、五つ所紋の影日向合暑さに二上り作る雲の峰散して果は筑波根の合遠山夕暮茂り枝を脱いで着替への染浴衣、古代模様のよしながき、御所染千彌忍ぶ摺合小太夫鹿の子友禪の、朧に船の三下りへ靑簾、川風肌にしみ〴〵と合汗に濡れたる枕紙合鬢のほつれを簪の、屆かぬ愚痴も惚れた同士、合命と腕に堀切の、水に色ある合花菖蒲合彈く三味線の絲柳合へ縺れを結ぶ盃の合行く末廣の菖蒲酒これ百藥の長なれやへ廻る盃數々も、酌めや酌め〴〵盡きしなき、酒の泉の芳村と合榮ふる家こそめでたけれ。

喜三之庭（君の庭）　一二二

〔解題〕安政六年九月、杵屋勝三郎作曲。岡安喜代茂の床開きの際に作つたもので、岡安の家元喜三郎の「喜三」を利かせて外題としたのである。

三下りへ牡鹿鳴くこの山里と詠みたりし、嵯峨野の秋の月の夜に、露の千草を蹈み分けて、合宿直姿の藤袴、駒引留めて休らへば、それと知邊の松風に、通ふ爪音身に染みて、合す音色の笛竹やへ月の前の調は夜寒を告ぐる秋風雲井

を渡る雁も琴柱に落つる聲々に 樂 本調子へ想夫戀の曲は比翼の翼を戀ひ、盤渉調の調は連理の枝に通ふへこれは畏き君が代に、わりなき中の一節を、謠ふも同じ一夜の君が情に引かれて尋ね廓の通ひ路に 合 七百歲も昨日今日、菊の着綿裲襠に、桔梗苅萱女郎花へ見世清搔の音に連れて、色音爭ふ出立榮、萩の錦か含める露の 合 玉揃ひ 合 末は離に塞かれても、格子を覗く月影に、招く尾花の忍び音は、實に面白き仙境なり へ豐年の今年は米八束穗の、苅穂の出づるわたましに、實入りを運ぶ出來秋や、尙も千秋のたのしび、と謠ひ囃して祝しけり、謠ひ囃して祝しけり。

千代の壽　一三三

〔解題〕 文久元年正月、杵屋勝三郎作曲。十代六左衞門の作曲した「千代壽」(一名千代壽—大洗神社へ奉納)に對して「勝三郎千代壽」ともいふ。目出度い獨吟物。

へ抑々丹頂の鶴と云つぱ千代を祝して右大臣、放され給ふ今もなほ、豐に遊ぶ鶴と龜、交す枕の比翼の契、笹の一夜の弱竹に、結ぶの神の惠にや、緣變らぬ松の色、二葉の中に咲く梅の、色香もほんに可愛らし、これぞ誠に蓬萊の、幾萬歲と齡重ねて祝しける。

紀州道成寺　一三四

〔解題〕 文久元年三月、杵屋三郎助(後の根岸の勘五郎)作曲。

本調子へ抑々紀州道成寺と申すは合道成の卿承り始めて伽藍橋の合道成興行の寺なればとて、道成寺とは名附けたり合へ知るべの道は此方ぞと、和光同塵結緣の、共にすゝむる佛法衆生救はせ給ふ法の聲合章願誓志煩惱の、作りし罪も消えぬべし、鐘の供養に參らんと、月は程なく入汐の、煙滿來る小松原、急ぐ心かまだ暮れぬ、日高の寺にぞ參りける合へあれにまします宮人の、烏帽子を暫し假に着て、既に拍子を進めけりへあだし身の、雪にそぼ降る春の雨合花に柳の綾錦、時の調子をとり／＼に、我が妄執の消えめやは、濁りに澄みて月清み、浮いて合變るの世の習合無明の夢も邯鄲の合枕にさとし五十年合翳しの袂飜へし、折そへ紛ふ合その風情、一節奏で面白やへ花の外には松ばかり、／＼、暮初めて鐘や響くらん、山寺のや亂拍子舞へ春の夕暮來て見れば合入相の鐘に花ぞ散りける、／＼合花ぞ散りけるへさる程に寺寺の鐘、月落ち鳥鳴いて、霜雪天に滿潮程なく日高の寺の江村の漁火、愁に對して人々眠れば、よき隙ぞと立舞ふ樣に覗寄つて、撞かんとせしが思へばこの鐘恨めしやとて、龍頭に手を掛け飛ぶよと見えしが、引被いてぞ入りにけるへこの鐘に就いて女禁制のその謂を、語るもなどか哀なりへ昔この里にまなごの庄司と云ふ者一人の息女あり、又合その頃奧より熊野詣の先達のありしが合年々庄司が許を宿として來ぬるに合何時か娘と逢瀬事草の枕の露繁み我が濡衣を身に纏ひ合離れはせじと一筋に女子心は性なけれ合戀に修行の二つ道迷ふは辛し迷はねば神慮恥かし山伏のかへやもなしとねを逃れ足も空なる道遠み合彼の女は山伏を逃すまじと追駈る折しも增る水の面にへ渡りかねたる日高川さすがに思も浦波に、浮きつ沈みつ戀慕ふ、女の一念毒蛇となつて合日高川を安々と泳渡り此寺の外に忍ばん蔭もなし合下りたる鐘を怪しみて、龍頭を銜へ七纏ひ、纏ひ／＼て胸の火に合鐘は湯となり山伏はつひに失せにけりへその時の執心殘つて障碍をなすこそ怖しけれへ水歸つて日高河原の眞砂の數は盡るとも、行者の法力盡くべきかと、皆一同に聲を上げ丹誠凝して念じけるへ東方に降三世明王、南方に軍荼利夜叉明王、西方に大威德明王、北方に金剛夜叉明王、中央に大日大聖不動明王、聽我說者得大智惠、知我身者即身成佛と祈り禱られ、撞かねどこの鐘響き出で合引かねどこの鐘躍るとぞ見えしが、程なく鐘樓に

引上げたり、あれ見よ蛇體は現れたり 祈り段切にへ謹請東方青龍清浄、謹請西方白體白龍、謹請中央黄體黄龍、一大三千大千世界の恒沙の龍王哀愍納受、哀愍頻の砌なれば、何處に大蛇のあるべきぞと、祈り祈られかつぱと轉ぶが、又起上つて忽ちに鐘に向つて突く息は猛火となつてその身を焼く、日高の川波深淵に飛んでぞ合入りにける合望足りぬと験者達は、我が本坊にぞ歸りける。

枕慈童 一三五

〔解題〕 文久元年春、杵屋三郎助作曲。

次第へ山より山の奥迄も、〳〵、道あるや時代なるらんワキ詞へこれは魏の文帝に仕へ奉る臣下なり、さても我が君の宣旨には、酈縣山の麓より、薬の水湧出でたる由、その水源を見て参れとの宣旨を蒙り、唯今酈縣山に着きて候、この邊に徘徊し事の仔細を伺はばやと存じ候本調子へそれ彭祖の枕の夢、樂む事百年合慈童が枕は、古への思ひ寝なれば、目も合はず夢もなし合何時樂みを松が根の、嵐の床に假寝して、枕ばかりを夜の伽合寝ぬ夜は重ね〳〵誰に恨を岩小菅、山路の露や夢の蝶、枕詞ぞ恨なるワキ合へ人ありと知らでかこつを菊の葉の合根に歸るらん禿菊花の姿を聞かまほしシテ合へありし世の昔語るも痴ながら、周の穆王愛で給ひ、千歳を結ぶ曾我菊の、露けて合残る移り香は、袖の雫と滴るゝワキへそれは七百年の歳を經し、若しや化生の者なるかシテへいや疑ふは去りし世の合忘れ形見のこの枕、袂に宿る月の影、幾代の秋か白菊の、その下露の起臥に、結ぶ不老の菊慈童、立寄り枕を御覧ぜよワキ合へ具一切合功徳慈眼視衆生、福壽海無量、是故應頂禮ニ上リシテへこの妙文を菊の葉に合置く滴りや露の身の、分きて老いせぬ薬となりて合七百餘歳を送りぬる合汲む人も汲まざるも、延ぶるや八千代本調子へなるらん合面白の

遊舞やな栄へ即ちこの文菊の葉に合〳〵悉く現はる、さればにや芋も芳しく、滴りも匂ひ淵ともなるや谷蔭の水合處は酈縣の山の滴り、菊水の流れ泉は元より酒なれば、酌みては勸め合掬ひては施し我が身も呑むなり〳〵や合月も宵の間その身も醉に引かれてよろ〳〵合よろ〳〵と合漂ひ寄りて枕を取上げ戴き奉り合實にも難有き君の聖徳と、岩根の菊を手折り伏せ〳〵、敷妙の袖枕花を莚に臥したりけり〽元より藥の酒なれば、醉にも侵されず、その身も變らぬ七百餘歳を保ちぬるも、この御枕の故なれば、如何にも久しき菊の水、汲めや掬べや、飲めども〳〵盡きせじや盡きせじと、菊掻分けて山路の仙家に、そのまゝ慈童は入りにけり。

連獅子　一三六

〔解題〕文久元年五月、杵屋勝三郎作曲。作者河竹其水（後の默阿彌）。花柳芳次郎の名弘め會の時に踊り地として作られたもの。後に出來た正治郎の連獅子（明治五年作）と區別する爲に「勝三郎連獅子」といひ、更に略して「番場連」といふ、これは勝三郎が番場に住んで居たからである。

〽それ牡丹は百花の王にして、獅子は百獸の長とかや、桃李に勝る牡丹花、今を盛りに咲滿ちて、虎豹に劣らぬ連獅子の、戯れ遊ぶ石の橋〽これぞ文殊のおはします、その名も高き清涼山〽峰を仰げば千丈の、漲る瀧は合雲より落ち、谷を臨めば合千尋の底、流れに響く松の風、見渡す橋は夕陽の、雨後に映ずる虹に似て、虚空を渡るが如くなり〽かゝる嶮岨の山頭より、強臆試す親獅子の、恵も深き谷間へ、蹴落す子獅子はころ〳〵〳〵合落つると合見えしが身を飜し、爪を蹴立てゝ駈上る合又突落し突落す合猛き心の荒獅子も二上リ〽牡丹の花に舞ひ遊ぶ胡蝶に心和ぎて、花に現れ葉に隱れ合追ひつ追はれつ餘念なく合風に散行く合花瓣の合ひらりひら〳〵合翼を慕ひ合共に

狂ふぞ面白き 今木獅子へ折から笙篳琴箜 大筋力の獅子頭、打てや囃せや牡丹 ひ、靡かぬ草木もなき時なれや、萬歳の、妙なる調舞の袖 合へ獅子團亂旋 芳、〳〵、黄金の蘂現れて、花に戯れ 千秋と舞納め、〳〵、獅子の座にこその舞樂の砌、牡丹の花房匂滿ち〳〵、 枝に臥し轉び實にも上なき獅子王の勢 直りけれ。

王子みやげ　一三七

〔解題〕 文久三年二月、十一代杵屋六左衛門(後の根岸の勘五郎)作曲。作者曉夢。

へ昔人の春は心も朗かに 合戲れ遊ぶ飛 りて 合扇屋の 合へ風も何時しか秋深み はれて今は涼しき枯野原 へ氷る月影冴鳥山へ花の盛りも束の間に 合青葉涼し 合 紅葉色づく瀧の川 合千入に染めて花 渡り 合木枯寒き冬の夜も 合王子の森のき夏木立、清き流に酌む盃の 合醉や廻 よりも 紅愛づる眺さへ へ峰の嵐に誘 深山杉常磐の色の緑めでたし。

時雨西行　一三八

〔解題〕 明治元年九月、杵屋勝三郎作曲。作者河竹其水。謠曲「江口」によつて作る。

へ行方定めぬ雲水の、〳〵、月諸共に の、月も心のまに〳〵に 合三十一文字 川船行末は、鵜殿の蘆のほの見えし、西へ行く 本調子へ西行法師は家を出で、 の歌修行、廻る旅路も長月の、秋も昨日 松の煙の波寄する へ江口の里の黄昏一所不住の法の身に、吉野の花や更科 と過行きて、都を跡に時雨月 合へ淀の に、迷の色は捨てしかど 合濡るゝ時雨

に忍びかね合賤の軒端に佇みて、一夜の宿請ひければ合へ主と見えし遊女が、情諸の斷りに、波に漂ふ捨小舟、何處へ取付く島もなくへ世の中を厭ふ迄こそ難からめ、假の宿を惜しむ君かなと、くちずさみて行き過ぐるをへなう〱暫しと呼留めへ世を厭ふ人とし聞けば假の宿に、心留むなと思ふばかりにへそれいとはずば此方へと合言ふに嬉しく宿賴む、一樹の蔭の雨宿り合へ一河の流のこの廓にお泊め申すも他生の緣、如何なる人の末なるかとへ問はれて包む由もなくへ我も昔は弓取の合俵藤太が九代の後裔、佐藤右兵衛尉憲清とて合鳥羽の帝の北面たりしが、飛花落葉の世を觀じ合弓矢を捨てゝ合墨染に、身を染めなして法の旅二上りへアラ羨し我が身の上、父母さへも白波の、寄する岸邊の川舟を、留めて逢瀬の波枕、世にも果敢なき流れの身へ春の朝に花咲いて、色なす山の粧ひも、夕の風に誘はれて、秋の夕に紅葉してへ月に寄せ雪に寄せ、問ひ來る人も川竹の、憂き節繁き契故、これも何時しかかれ〲に、人は更なり心なき、草木も哀あるものをへ或る時は色に染み合貪着の思淺からず、又或る時は聲を聞き、愛執の心いと深く合これぞ迷の種なれや 木調子 實に〲これは凡人ならじと合眼を閉ぢて合見れば不思議や合へ今迄ありし遊女の姿、忽ちに合普賢菩薩と、現じ給ひへ實相無漏の大海に、五塵六欲の風は吹かねども、隨緣眞如の波の立たぬ日もなしへ眼を開けば遊女にてへ人は心を留めざれば、つらき浮世も色もなく、人も慕はじ待ちもせじ、又別れ路も嵐吹く、花よ紅葉よ月雪の、古にし事もアラ由もなやへ眼を閉づれば菩薩にて、異香の香絲竹の調合へ六牙の象に打乗りてへ光明四方に輝きて合拝まれ給ふぞ難有き、〲合へ西行法師か正身の、普賢菩薩を拝みたる合江口の里の雨宿り、空に時雨の故事を爰に寫して謡ふ一節。

春の調　一三九

〔解題〕慶應元年三月、杵屋勝三郎作曲。

〽千年見ん野邊の小松に引添へし 合 霞に迷ひ竹や 合 影も緑の草の戸に、何時風に、解けて長閑な 合 雪の山〽實に何の衣手に觸れて、所縁嬉しき菫 合 住しか映ろ鶯の 合 初音を此處にしめゆひ 時迄も限なき、實に何時迄も限なき、む甲斐ありて常磐なる、めでたき御代て、豐かな時も如月の、袖や袂に吹く 松と竹とに契る齢は。

松のみどり　一四〇

〔解題〕安政初年頃に杵屋六翁の女せいが、杵屋六と改名披露の時に作られたもので、作曲者は杵屋六翁である。この開曲の時に謠つた吉住小三郎は小三郎の二代目で、長唄うたひとしては天保時代の三名人の一人（岡安喜代八・富士田音蔵及小三郎）と稱へられた人であつた。（年代が確かでないので、こゝに收める事とした）

本調子〽今年より千たび迎ふる春ごと 老となるまで末廣を、開き初めたる名に、なほも深めに、松のみどりか禿の こそ祝せめ。

名ある、二葉の色に、太夫の風の吹き通ふ、松の位の外八文字、はでを見せたる蹴出し褄、よう似た松の根上りも、一つ囲ひの籬にもるゝ、廓は根引の別世界、世々の誠と裏表、くらべごしなる筒井筒、振分髪もいつしかに、

（長唄終り）

第十編 歌澤節之部

敍文　端歌の權輿

南史（第百三十四卷四十五丁裏云）宋郎中字若溪瑯邪人其弟梅榮字谷博一號如天常好ニ端歌一我朝鹿之武左衛門が鹿の卷筆（文明二年春二月西宮茂右衛門板）と云に端歌の落し話し出たり其後泉州堺顯本寺の住侶僧隆達なるものあり端歌を唄ひ音聲よくして人の耳を感せしむる後還俗して堺の町人藥の問丸何某が聟となるされども其名やんごとなき方にきこへ端歌を催されし時夜更て涼風吹來て翠簾を擧げ寢殿の灯きへぬ漸暫してのち風靜まり月朗にさし昇たる景色を唱歌に作れと有しに隆達さのみ案ずるけしきもせず（本てうし）「吹よ川風あがれよ翠簾なかの女﨟の顔みたや」を唱出したるに叡覽なゝめならず歸後多くの引出ものを給はりぬと聞へしも全く唱歌のいさほしならずや今より百五十年前元祿のころ赤穗の浪人大石良雄が土手馬の自畫讃に君がさんやに草深けれどの唱

歌もありて世にかくれなれけば唱歌は近世の流行ものにはあらざるべし文政十三歳崎陽の瓊浦の客館に清人あまた來舶せる中に孟涵仇なる者日本の風を好みさまも倭様にしたり地口を爲し和歌を詠じまた端歌やうのものを作りたりしを彼土の友人余に送りしは欲見常娥偶出春月濛朧今微雪紛これ則唱歌なり和解「月があるとて偶にいづればさんさしぐれて微雪降」とうたひしも海外の奇談ならずやそを假そめの酒宴に絃絲の調子さへおぼろげにて引かなづろふものにはあらずよくよく心をもちひ一章に眼をつけ喉音舌音齒音の五律を整へて唱ふべきこそ此道の本意なるべし。

右者歌澤の一流を興せる笹丸詞宗の需に應じて

四代目　十返舎一九誌

初編

歌澤節初篇

一

本調子小町おもへば照る日も曇る合四位の少將が涙雨九十九夜さでござんせう仰せにおよばずそりやさうでなうてかいな御所車にみすをかけたかえこちや卒都婆に腰かけたヱ、〳〵ばゝぢやヱ。

二

本調子紫のむすびめかたき縁(えん)の糸合解(と)けぬも色の合ふかみどりまつにこぬ夜は筆の先うらみかさねし命毛も硯のうみへはまるほど合ふかいあさいは客と間夫(まぶ)苦勞するのも合男ゆゑ。

三

本調子身ひとつを合置きどころなき胸の内合一重の心八重にとき合カンゆびきりかみきりやぼなきせうや神々さんへお世話をかけてぬば玉の戀の合闇路ぢや合ないかいな。

四

本調子辻占や合まつま簪(かんざし)疊ざん合戀といふ字にひかされて合ひとり雪の夜合忍んできたに合腹が立つかやわしぢやとてまたす心は合ないわいな。

五

本調子兼てより合くどき合上手としりながら合この手がしめた青繻子の合いつしか解けて合にくらしいかりて髱(たぼ)かくつげの櫛合きつと辻占ひくばかりほんにやるせがないわいな。

六

本調子風ひいて合道もたえなん雪の夜はこぬがましぞとあきらめて合酒の合手にうたゝ寝の積るうらみも宵の内思ひ合やつたがよいわいな。

七

本てうし木曾のたけ山合よいとこなれど笠に合かさに木の葉がぱら〳〵と、

八

本てうし志賀のから崎一つ松合夜毎〳〵の合泊りからすが群れくるをあを〳〵と合嬉し涙のかわく間も曇りがちなる夜(よる)の雨。

九

本てうし待乳しづんで新地のはなよ同じはなれぬ浪枕しんに逢ふ夜は身にしみ〳〵とこゝが苦界ぢやないかいな。

一〇

本てうし此里にもう幾度か鶯の初音をきいてなき明す山郭公我が涙さつきの雨と降りしきる合空わたりくる雁(かり)の聲かなしき思ひ白妙の雪の姿は合身にしみ〳〵と合世を送るとし月日ほんに指折

りかぞへうた。

一一

本てらし 花の雲か 合 遠山の雲か花かは白雪やなかをそよ／＼吹く 合 春風にうきねこそふやさゝ浪の 合 爰は鷗も都鳥扇拍子のさんざめくうちやゆかしき内ぞゆかしき。

一二

本てらし ほんに思へばきのふけふ 合 月日たつのもうはのそら人のそしりも 合 世い義理も思はぬ戀のみつ瀬川あはぬ 合 其日は氣にかゝる逢へば口舌の種と成る憎らしい程かはゆうてエ、わしが心はなんぢややら。

一三

本てらし 竹に雀はしなよくとまれ 合 それとまらぬは色の道わたしばかりが情立てゝ 合 思ふ御方のつら憎くやよい／＼よいさそれへ。

一四

二上り ぞめきにごんせ 合 島原へ小野の道風ぢやなけれどもかはずに 合 柳をみて暮らすエ。

一五

二上り 秋の野に出て七草見ればサアヤレ 合 露とこづまがみな濡れるサアヨよしてもくんな鬼薊。

一六

二上り 逢へば別れと兼てはしれど今朝の後朝いつよりつらい殘る移り香わすられぬ。

一七

二上り 我しがサ國さで見せたいものがむかしや谷風今伊達もやうゆかしなつかし宮城のしのぶ浮かれまいぞへ松島邊しよんがへ。

一八

本てらし いろけないとて苦にせまいもの賤が伏屋も月がさす見やればらにも 合 花が咲く田うゑ戻りに袖つまひかれ今宵逢はうと目遣ひに招くあひづの小むろぶし 合 すゝきに殘る露の 合 ほどと讀んだがむりかいな。

一九

本てらし 雪の朝寢まきのまゝのおさつきはついした事でふかうなり今は互ひにせきせかれひよんな噂を聞くにつけ若しやさうかとあんじてみてもふさいでも只 合 ばうぜんと疊算して袖枕。

二〇

本てらし 華に啼く 合 鶯水にすむ蛙にも 合 みやびはおなじあひたいの 合 くもの籬のいさり船 合 流れ次第は風次第みどりの髮に 合 つながるゝ梶を枕に湊ぞへ。

二一

本てらし 世の中のいきな世かいを今こゝで八幡さまの山開き 合 さゝがかうじて

ついそれなりに 合 さこねの枕かりそめにヲヤすかねえ明の鐘。

二二

二上り 富士や淺間の煙はおろか 合 衛士のたく火は澤邊の螢 合 燒くや藻鹽で身をこがす 合 さうぢやいな 合 あひえんきえんはあぢなもの片時忘るゝひまもなくいつせつからだもやるきになつたわいなエ、おかたじけ。

二三

本てうし 思ひをば 合 白紙にかく筆の先毛程おもはぬ主さんになほます鏡臺らんというたが無理ぢやないかいなア、さんやれ。

二四

本てうし 秋の夜ながに主に逢ふ夜の短かさよ 合 月夜 合 鴉が啼くわいな月ぢやごんせぬしらく\と明の鐘。

二五

二上り 雪は 合 しんく\夜もそのとほりどうせ 合 こまいと眞中へ一人ころりと肱枕なん時ぢやエ、寢いられぬ。

二六

本てうし 逢ふ度にいとし御方のつれなさは金比羅さんもしらぬ顏千里の道もなんのそのいとはで參る虎の門ほんにやるせがないわいな。

二七

本てうし あだし野の露の命の鈴蟲もあきはてられて今更になくになかれぬ物思ひ。

二八

本てうし 空も長閑に 合 花見のつれは船のり出す向島土手にあれちらく\と散るわいな。

二九

本てうし おまへと一生暮すなら深山の奥の侘住居ぬひはり仕事絲車細谷川の布さらし柴かる手業いとやせん。

三〇

二上り 鶯の身はさかさまに初音やの直に本 てうし かごたてさせて青木町こゝがのんどのかわかんと道を急いで梅見草。

三一

二上り さつまく\といそいでおせば 合 いやなさつまのかなやましよんがへ。

三二

二上り 月夜がらすに 合 ふと目を覺し逢ひたさじれつたさに 合 無理なことというてわしや神いじり 合 逢ひたいやまひはかんしやうのせいか酒でしのがせ苦の世界ぢや。

三三

本てうし 羽織かくして袖引きとめてどうでも今日は行かんすかと云ひつゝ立つてれんじまど障子細めに引明けてそれ見やしやんせ此雪に。

三四

本てうし 口舌して 合 思はせぶりな空寢入り 合 奧の座鋪の 合 つめびきがつい中だちでそれなりに亂るゝ髮のつげの櫛 合 八幡鐘の後朝に別れ 合上二 もなやおくり船。

三五

三下り ころはとこなつ短か夜に口舌のままの 合 迎ひかご心が殘るわかれじに 合 毒としりつゝ茶碗酒とめずと呑ませて 合 くださんせ。

三六

本てうし 浮名立てじと口先でわざとけなして 合 ある時は胸でのろけてしらぬ顏うわさするさへならぬとはほんにうるさい人の口。

三七

本てうしノボリダリ 賤が手業の絲くるひまにならふ 合 ことしの盆踊ナアエ田舍のくせか高聲でふりもやさしく手もそろふナアエおどる姿を二階からみればどれが姉やら妹やら。

三八

本てうし 堤になびく青柳の 合 むすんでといた絲の緑引きとめられて見歸りのおもはせぶりな捨言葉さうぢやないかやほんにへ。

三九

本てうし 雪は巴に降りしきる屛風が蔭の中立で 合 蝶と千鳥の三つ蒲團 合 元木に歸るねぐら鳥まだ口あをいぢやないかいな。

四〇

二上り あやめに似たるかきつはあれど主に 合 見かへる花はないほんに浮世はアア 合 まゝならぬ。

四一

二上り 秋の七草むしの音に殘る螢が身をこがす君を松蟲なくねにほそる戀といふ字がたいせつぢや。

四二

二上り 夜の雨もしやくるかと燈算紙で蛙のまじなひも蟲がしらせてともし火の丁字もとんだ今時分氣まぐれざんすエゝぬしの聲。

四三

本てうし 忍ぶ戀路は報はかなさよ 合 今度逢ふのが命がけよごす涙の白粉も 合 その顏かくすむりな酒。

四四

本てうし 風さそふ 合 音とおもへど若しや又おもはせぶりにしのばるゝ心の内の 合 深の闇路立つ程におもふを知らぬふりして寐て見てもどうもねられぬ戀のくせ。

四五

本てうし 短夜に殘る口舌の朝直し迎の猪

牙は捨小舟 合その儘今朝の居つゞけは
互ひにつのる戀の情(じやう) 合はれてそひ寐を
合待つわいな。

四六

三下りわしがおもひは三國一よ 合富士の
みやまの白雪 合つもりやするとも解(と)け
はせぬ 合浮名立つかやたつかや浮名 合
あんなお人といはんすけれど人の心は
合緣氣緣(あひえんきえん)ほんに命もやる氣に 合なつた
わいな。

四七

本てうし 紅梅にこがれて今朝は白たへの
合思ひのたけを降積るぞつとみもよも
あらりようものを雪のはだへに春を
待つ。

四八

本てうし 朝顏の 合露の命のはかなさはほ
んにいるやらいないやら一目見るにも
合 目に見えずなんと此身はせうぞい
な。

四九

本てうし おきてみつ寐てみつ待てど便な
く 合蚊帳の廣さに只一人蚊をやく火よ
り胸の火の燃(もゆ)る思ひをさつさんせ。

五〇

本てうし 身はひとつ心はふたつ三つまた
の流れに淀むうたかたの君に逢ふ夜の
枡枕 合曉がたの雲の帶(おび)なくか 合中洲(す)の
ほとゝぎす。

五一

本てうし 龍田川邊に船とめてまだうら若
き娘氣の 合どういうてよかろやらしん
き枕の空寐入。

五二

本てうし 川風にいとふ簾はね上げて 合思
はず顏を見て我が妻鳥のエ、エ、モし
んきな都鳥。

五三

本調子宇治は茶所さま〳〵な中にうわさ
のヵン大吉山と人の氣にあふ水にあふ
色も 合香も有るぬれたどし粋(すゐ)な浮世に
やぼらしいこちや 合こちやこい茶の中
ぢやいな。

五四

本てうし 梅がぬしなら柳がわたし仲(なか)のよ
いのかじらすのか 合あゑ夜ひそかに山
の月心ないぞへ小夜嵐(さよあらし)。

五五

本てうし 龍田川には紅葉を流す 合わたし
や主ゆゑ浮名を流すよいさ〳〵よいや
らさ。

五六

本てうし 初秋や 合名も文月の戀のなぞ 合
銀河祭(ぎんがまつり)のたわむれにサア 合いつか女夫
の約束はよい〳〵〳〵よいや
サア。

五七

本てらし つれないと思ふほど猶 合身にしみ〴〵と 合寐ぬ目でかいたあすのふみ 合鼻毛らしいと心に問うていつそ長者に 合なる氣になつて逢へばおとこの 合口車。

五八

本てらし 月影にうつる姿のエ、 合憎らしいおぼろかげ鬢かきなでて物思ひからもやつるゝ 合ものかいな。

五九

本てらし 其曉のひとこゑは 合花川戸よりなきそめて土手を八聲や 合時鳥。

六〇

本てらし 綱は上意を蒙りて羅生門にぞ着きに 合けるおりしも雨風はげしきうしろより兜の錣をひつつかみひき戻さんとえいと曳く綱も聞えし兵にてかの曲者に諸手をかけ 直ル 三下リ よしやれはなしやれ錣がきれるしころきれるのはいといはせぬがたつた今いうた鬢の毛がそんじるは〳〵 合七つ過にはゆかねばならぬそこへゆかんすりやこちや氣にかゝるたれぢや〳〵鬼ぢやないもの人ぢやもの兜もしころもなつちもいらねへさつさもつてけしよつてけ。

六一

本てらし 春も長閑に梅屋舗 合吾妻の森のうら〳〵も 合霞にむせる柳島あかぬ詠ぢやないかいな。

六二

本てらし 雪の夜のつめたさにアレ小座舗の二人連れ互にじらす合言葉ほつれかかりし 合洗髪エ、モじれつたいな 合かみようじ。

六三

本てらし 淺くとも 合清き流のかきつばた 合飛んでゆきゝのあみ笠をのぞいてきたか濡れ燕顔が見たうはないかいな。

六四

本てらし 過ぎし夜すがら戀の栅とけかねて 合うつら〳〵と寐ぬわいなわけもない事おもひわび軒の露。

六五

本てらし 枯野ゆかしき隅田堤 合心もさゆる夜半の月 合川おもにうつる人影にはつとたつては 合アレ雁の女夫連。

六六

本てらし あれ見やしやんせ海晏寺まゝよたつたの高雄でもおよびないぞへ紅葉狩。

六七

鳥影に鼠なきしてわらはれる 合これも苦界のうさはらし愚癡が呑ませる 合ひや酒はしんきしんくのア、苦の世界。

六八

三下リ 夜ざくらや 合うかれがらすがまい〳〵ときて花のこかげにたれやら居る

わいなとぼけさんすな芽ふき柳を風が誘うて合ふうわり〳〵とさうかいなさうちやいな。

六九

三下り月あかり見ればおぼろの船の內合あだな二上り爪彈きは忍び逢ふ夜の首尾の松。

七〇

三下り夢の手枕つい夜が明けて合わかれ煙草のおもひのけむり思ふかたへとなびきゆく。

七一

本てうし垣根卯の花時鳥一聲啼いてきかまほし音信ないかごぶじかとどうぢやいなどうぢやいなあのなどうぢやいな。

七二

本てうし葵とは合あふひと書いて嬉しさは合二葉の露にもらさじと合移る合遠寺の鐘の音にもゆる思ひをさつさんせ。

七三

三下りつみやれおつみやれ宇治の里の茶つみ合はたちあまりは蕾の花よ廿人の木とかいて茶といふ文字に讀むわいないよすおろして茶とつみやれ。

七四

本てうし桐壺に落ちた一葉を見るにつけ合わしや氣にかゝる合秋がきたとの辻占か。

七五

三下り竹になりたやしちく竹合本は尺八なかは笛合末はそもじの合筆の軸おもひ合まゐらせ候〳〵それ〳〵さうぢやえ。

歌澤節第二篇

七六

本てうし今朝のナア雨にしつぽりと合又居續けにながい日を合短う暮す床の內合紙をひきさき眉毛をかくし合申しこちの人エわたしが替名は何とせう合アレ合ねなんすか合起きなんし合曙ならで合暮の鐘。

七七

本てうし京の人都詞と自慢がをかし合男のくせになんぢややらさうぢやさかいのいきんかのけたいなやつぢやほたいがの合すこいこぞよとなまのろく合女なりけり合みやこ鳥ありやなしやの角田川合洗うて見たい合江戸の水。

七八

本てうし萩桔梗なかにたまづさしのばせて合月を野末にくさの露合君を松むし夜毎にすだく更行く鐘に雁の聲戀はか

うした合ものかいな。

七九

後朝のわかれに空も雨さそふ合蟬と螢をはかりにかけて合ないて別りようかこがれてのきよかア、むかし思へば見ずしらず。

八〇

本てうし 陽炎の合もゆる柴戸に小蝶の遊びそれとはしらで玉琴の〳〵絲の青柳ひきよせられて合ちよつと東風ふいてぬれかゝる軒に近づく八重梅やすいた二人がきげんせうまだ春若き鶯のはづかし初音を聞きにきた。

八一

二上りハルサメ 小町姫合色深草の少將が戀にたれしもゆきなやむ合しやくといふ字に合わかれても舗居の高きかどの戸を合雨か霰がはら〳〵とわたしのりんきはぬしのわざやがて百夜通うてそふならばサアエ戀しい事ぢやないかいなサツサこがるゝはずぢやいな。

八二

本てうし 宵にまち合夜中はこがれ合明ける頃合せめて合夢にと肱枕合アレ耳やかましい雞の聲ほんにしんきな合ことぢやいな。

八三

本てうし 我がものと合おもへばかろき傘の雪合戀のおもにを肩に掛け合いもがりゆけば冬の夜の川風さむく千鳥なく合まつ身につらき置巨燵實にやるせがないわいな。

八四

本てうし 戀すてふ身は浮舟のやるせなき浪の中カン夜々いさりびのもゆる思ひの苦しさに消る命もさつさんせ合カン世を宇治川の網代木や水もせかれてゐるわいな。

八五

本てうし 名にしおふ富士の筑波の山合に合露のなさけの一夜妻合色もほのめく千草の里へ人目の關を忍びつゝ合木の間隱れにあふよさは水に角田の月もいや。

八六

本てうし 硯ひきよせ書く文の逢ひたいがいろ見たいが病合戀し〳〵がさし込んで押せどさがらぬ癪つかへ。

八七

本てうし むつとして合歸れば角の青柳で曇りし胸を春雨の合又晴れてゆく月の影ならばおぼろにしてほしや。

八八

本てうし うそと誠の二タ瀬川合だまされぬきで合だまされて合末は野となれ山となれ合わしが思ひは君故ならば三つまた川の合船の内合心の合たけを御さ

つし。

八九

本てらし ひと時も 合待つ身はつらき雁の聲 合はな(れ)しやうに書くふみもまだゐんりよある候ト 合さきの心はどうぢややらこちの心はほごぢやない是ほどみれんに筆留めて 合かへすぐも 合まつてゐるわいな。

九〇

本てらし 雨の降る夜は 合只しんくと 合心寂しき閨の内 合カン 儚なき戀のやるせなや 合ほんにうき世はまゝならぬ 合思ひこがれて更けわたるエヽ 合憎らしい女夫雁うつら 合うつらと夜を明す。

九一

二上り 源氏車の 合後へはひかぬ 合意地と 合我慢の江戸かたぎわかつて 合そしてお前はほどがよい。

九二

本てらし 同じ事二度かゝせたわいのほとゝぎすアヽしんき 合からすがおつになくときは 合鼠鳴きして請答

九三

本てらし おもはれぬ 合人に思ひのますかがみ 合曇りがちなる胸の内はるゝまもなき五月やみ月夜は憎しさりとては 合儘にならぬが世のならひ。

九四

本てらし つくろひはなけれどどこか尾花草 合露をふくめるしをらしさ月に光をます 合わいな。

九五

二上り しも 合つまのサアヤレだんじよのお所化がことづてにササアヤレおひさじよはまめなかサマヨウ年々そだつがサアヤレ。

九六

本てらし 葉櫻や 合窓をあくれば山ほとゝぎす 合又もなくかと 合待つうちに 合鰹鰹ヲヤいさみぢやと飛んで出る 合うはき性では 合ないかいな。

九七

本てらし ぐちも出るはず女ぢやものを 合いやな物ならなぜ 合また初手に 合氣づよく云はれりや諦める。

九八

本てらし 一ト言が十ことに向ふ戀しさは忘らりよものか 合わすられぬうそにも惚れたを質にしてエヽくらすエ。

九九

本てらし 書送る文もしどなきかな川で 合だいてねよとのおきこえて 合岩にせかれて散る浪の雪かみぞれかみぞれか雪かとけて浪路の 合二つ文字妻を戀しとしたうて暮すエ。

一〇〇

本てらし わしがさい所は京の田舎の片ほ

とり合八瀬か小原にうし曳いて合柴打ばんにせうきあたまへちよいとのせて合黒木買(か)はんせんかいな合栗かはしやんせんかいなエ、/\エ、/\かはしやんせんかいな。

一〇一

本てうし 戀し/\がつい合癪となる胸にさしこむ窓の月合今やくるかと待つみはしらで待たぬ一聲ほとゝぎす。

一〇二

三下り あれ春雨がふるわいな傘に春雨がはら/\と合降るとぬれたる宵がらすかはい/\も久しいものよハテさうぢやいな合さうぢやいな。

一〇三

本てうし 春風に梅がかほればきみを松心の竹をうれしさに初音のゆめを身にそへてアレにくらしい合明けの鐘。

一〇四

二上り 淀の川瀬のナアけしきをこゝにひいてのぼるやれ三十石船合清き流れをくむ水車めぐるまことは汲みなめざめさいた盃おさへてすけりやようてふしみへくだまきつなよかうしたところが千兩松ヨイヨイ/\/\ヨイ/\/\。

一〇五

三下り 皐月五月雨逢に菖蒲(しやうぶ)合わたしや合お前に職ざほエ、モ惚れりやしよことがないわいな。

一〇六

本てうし 和歌の浦には合名所がござる合一に權現合二に玉津島合三にさがりまつ四に鹽濱よ天の橋立きれとの文珠合文珠さんはよけれどもきれとの文字が氣にかゝるサッサなんとせうかどうせうぞいな。

一〇七

本てうし 色の名もいはぬ/\と山吹の靡(なび)くといふもするゐのなか水に流すかわしや氣にかゝるなにを蛙(かはづ)がぐと合/\とほんに女子といふものはやるせないものでござんすわいの。

一〇八

本てうし 柳/\で世を面白(おもしろ)うふけて暮すが命の藥合梅にしたがひ櫻になびく合其日/\の風次第虚言(うそ)も實(まこと)も義理もなし始はするゐにおもへども合日増に惚れてついぐちになり苦難の床のうき思ひどうしたひよふりの瓢簞かあたはらのたつつきぢやえ。

一〇九

本てうし いく夜さか合ぬしに淡路の島田髷合浪の枕に寢亂れて鳴いて明石の浦千鳥合せめて夢路に合通へ合かし。

一一〇

三下り 秋が來たとて鹿さへ啼くに合なぜ

に紅葉は色づかぬ合ほんにきまゝな浮世ぢやとても合妻に合ひかれて今日もしぐれがするわいなじつ〳〵ほんかいなまんざら嘘かいなわしや人にいふわいな。

一一一

本てうし隅田の流に船とめて土手をみめぐり醉ひざましおもひをいふに五百崎の合戀しき人を待乳山エ、じれつたい竹屋ときくも嬉しき胸の內。

一一二

三下り紫は江戸の花かや水道の水に合あだな合浮名の色染めわけていづれあやめか杜若。

一一三

本てうし粹なうき世を戀ゆゑに合野暮に暮すも合こゝろがら合梅が香添ゆる春風に二枚屏風を合おし合へだて合朧月夜のうすあかり合忍び合しのびて合あ

ひぼれのくぜつの床のなみだ雨合池の蛙も終夜しんになくではエ、ないかいな。

一一四

三下り心で留めて返す夜は合かはい男の爲にもなろとないて別れて又御見もじ合猪牙のふとんも夜露にぬれて跡は物うき合一人ねするも愛が苦界の合眞中かいな。

一一五

本てうしあぢなことからつい合惚れ過ぎて合そこの神さま佛さん叶はぬ戀もかながき合文ことづてにまかせる便り合逢はれぬつらさに合又のむ酒はあたゝめもせであをりつけ合其儘そこへじれふしてふとめを覺めりや火の用心さつしやりませう。

一一六

本調子すだれおろした舟の內合顏は見えねど合羽織の紋はたしか覺の合三つ柏呼んで違はばどうせうと跡と先とに心が迷ふエ、エ、もじれつたい舟の內。

一一七

本てうしぬば玉の闇とおまへにのぼりつめ合二階せかれて合忍び逢ふよるはむねさへ合くるみ寐のまくらことばぢやないかいな。

一一八

本てうしきみをまつちの神かけて待つかひもなく合雜がなく東男のエ、憎らしいほど合好いたエ。

一一九

本てうし沖の大船いかりでとめた合とめてとまらぬコチヤいろの道。

一二〇

本てうし物いはでなかぬ螢をわらうてかしんに心もやみの夜の合草に宿かる露の身をちらす嵐の合戀しらず。

一二一

本てらし 雞の聲鐘の音さへ身にしみて合いとゞ寂しき寐やの内合待つ身はつらき合肱枕思はせぶりな時鳥。

一二二

下り 紺の前垂まつ葉を染めて合まつにこんとはきにかゝる。

一二三

本てらし 紀伊の國は音無川の水上に立たせ給ふは舟玉山ふな玉十二社大明神扨とうごくにいたりては玉姫稲荷がみめぐりへ狐の嫁入お荷物をかつぐは合がふりき合稲荷様合頼めば田町の袖すりが合さしづめ今宵の待女郎合仲人はまつさきまつ黒な黒助稲荷につまゝれて合子までなしたる信田妻。

一二四

本てらし 柳ばしから合小舟でいそがせ三谷堀合土手の夜風を合ぞつと身にしむ衣紋坂きみを合思へば逢はぬ昔がましぞかし合かた〳〵今日はございんせと合さういふ初音をきゝにきた。

一二五

本てらし 逢うた夜の合宵は騒ぎにまぎれてゐたが更けてくる程しん〳〵と合もはや時刻と待つうちにごんとついたる鐘の音にもしへお駕籠が参りましたエエモウしんきな籠やさん合たま〳〵逢ふのに知りもせで。

一二六

本てらし 鍔はさびても名はさびぬ昔ながらの落しざしサヽヨイ〳〵〳〵〳〵ヨイヤサ。

一二七

本てらし 春風に合吹廻されし小蝶さへ番ひ合はなれぬ女夫なか合茶の葉に契る心根を風が邪魔して合袖やたもとのあやとなる。

一二八

三下り ひけすぎや合主をかへして只くよ〳〵と宵の移り香さめやらぬ枕に響く鐘の音に二階を合まはらしやりませう錢ぼう引。

一二九

二上り 君は今頃駒形あたり啼いてあかせし山時鳥月の顔見りやおもひだす。

一三〇

三下り 夕立や田をみめぐりの神ならばかさは太郎が洗ひ鯉合さゝがかうじて狐けんほんにぜんせいな事ぢやエ堀の舟宿竹屋の人と呼子鳥。

一三一

本てらし 玉川の水にさらせし雪の肌合積る口舌の其内に合解けし島田の合もつれ髮合思ひださずに忘れずに又くる春を待つぞえ。

一三二

木てらし 秋の夜はながいものとは 合まん丸に 合月見ぬ 合人の心かも更けてまてどもこぬ人の 合音するものは 合鐘ばかりかぞふる指も寐つおきつわしやてらされてゐるわいな。

一三三

木てらし 念がとゞいてかうなるからは 合春の氷のうすきはいやと寝亂髪も恥かしく 合解けたすがほの夏ふじ秋の扇と聞くもうしこちやしつぽりと夜の雪 合積り〳〵て深うなり人目忍びし冬 合ごもり。

一三四

木てらし 時鳥ねぐら定めぬたどうか〳〵と月にうかるゝ其風情 合はし間に舟の賑はしく小べりに繻子のそら解はしめぬが無理かえ。

一三五

三下り 物思ふ身は鶯のおりちかくかほりゆかしや春のきみ初音一聲手枕に。

一三六

三下り 我戀は 合住よし浦のけしきにてただあを〳〵と松ばかり 合まつは憂いものつらいもの。

一三七

木てらし 露は尾花とねたといふ尾花は露と寐ぬといふアレねたといふねぬといふ尾花がほに出てあらはれた。

一三八

木てらし 鈴虫の 合わが身思ふや忍び音の 合まくらならべてまつ風の 合月もさすがに秋の色恥かしながら忍びあひ肱を 合枕に雁の聲。

一三九

木てらし いせの荒布と今宵の客は 合みればみるほどしをらしや 合しをらしや。

一四〇

木てらし 初卯がへりに梅やしき薫をしたふ鶯や 合枝に宿かるこゝろ根は 合アレ 合しをらしい春の友。

一四一

木てらし のぼり下りのおつゞら馬よさても 合美事なたづなぞめかいな 合馬士衆のくせが高聲で 合鈴をたよりに小室節坂はてる〳〵鈴鹿はくもる相の土山雨がふる。

一四二

二上り 戀といふ字は一字に 合書けど 合義理とせけんにひかされて 合今は互ひの胸のうち 合氣がね苦勞も 合するわいな。

一四三

木てらし 打つ水のひるの暑さを忘れてし雫のやまぬ草のはに 合月もやどりて涼風のそうてさはべに啼く蛙ふけてたよ〳〵飛ぶ螢。

一四四

二上り松は唐崎時雨は外山 合月の名所は須磨明石 合雪は越路かな久方よのあれはよい〳〵よあれはさてなこれはさてな。

一四五

本てうし 竹に雀は品よくとまる 合扨とまらぬは色の道わたしばかりが情たてゝ 合 思ふ男のつら憎くやよい〳〵〳〵やさそれへ。

一四六

本てうし 夕暮に 合眺めみあかぬ角田川 合 月のふぜいを待乳山 合帆かけたふねが見ゆるぞえ 合アレ鳥がなくとりが名の都に名所があるわいな。

一四七

本てうし しぐれふる淺茅が原の夕暮に二聲三聲かりがねの便り待つ身のうやつらや戀の浮はし中たえて遣瀨なみだやもつれ髪いふにいはれぬ胸の內思ひやつたがよいわいな。

一四八

本てうし 辻君のたへぬ流れの思ひ川戀にはほそる柳かげしばしとめたき三日月の櫛のむねさへさよ風にさらりととけし洗ひ髪むすんで淸き水の音。

右歌澤笹丸一流直傳之正本者私ジ方ヨリ外ニ決而無ニ御座一候仍而笹丸自筆ヲ取テ節章句ヲ正シ㊞如此印形ヲ顯シ令ニ開版一者也

江戸南紺屋町
誠善堂
正本版元 伊勢屋卯之助

歌謠音曲集 大尾

昭和四年十一月十五日印刷
昭和四年十一月二十日發行



日本名著全集
第一期出版
江戸文藝之部
第二十八卷
歌謠音曲集
（非賣品）

編輯兼發行者
印刷者
東京市日本橋區馬喰町二丁目一番地
日本名著全集刊行會
代表者 石川寅吉

發行所
東京市日本橋區馬喰町二丁目一番地
日本名著全集刊行會
電話浪花一八四〇番・一八四一番
振替東京一八四四四番

